北海道大学



スキー部100年・山スキー部50年

1912〜2012記念誌

北大山とスキーの会

北海道大学山スキー部

SKI

北海道大学
スキー部100年・山スキー部50年
記念誌



発刊にあたって

北海道大学スキー部は日本で初めての学生スキークラブとして 1912 年に創立されました。その 3 年ほど前、ドイツ語のコーラー先生が故国スイスからスキー板を取り寄せ、学生たちが北大構内で滑ったのが北海道では最初のスキーと言われています。またオーストリア陸軍のレルヒ少佐が本州で組織的なスキー講習を行ったのも同じ頃です。

以来、100 年の歴史を積み重ねて、2012 年 10 月、北大スキー部やスキー部を引き継いいる北大山スキー部の OB、OG、そして現役学生など 350 名を超える多くの関係者が北大クラーク会館に集い、「北海道大学スキー部 100 年・山スキー部 50 年を祝う会」を盛大に開催致しました。

また北大総合博物館では企画展示「日本におけるスキーと北大スキー部の 100 年」、同時期に「北海道スキー術伝来 100 年にあたってスキー文化を考える―山スキー・山小屋を楽しむ―」をテーマにシンポジウムも開催されました。翌年の春には記念事業の一環として、定山渓薄別登山口から無意根尻小屋を通って無意根山頂へのスキーコース指導標の設置事業、そして北大山スキー部現役学生と OB による札幌近郊 110 キロに及ぶヒュッテンケッテスキーツアー等が企画実施されました。

そして記念事業最大の目玉とも言える「北海道大学スキー部 100 年・山スキー部 50 年記念誌」の発刊は、予定より大幅に遅れておりましたが、ここに皆様のもとにお届けする事が出来ました。時間がかかっただけに内容は素晴らしいものになりました。在田編集長の想像を超える執念とご尽力、そして倉持さん、藤永さんはじめ各編集委員の皆様のご努力に心から敬意を表し感謝を申し上げます。この記念誌を作ろうと企画されたのは 2011 年、約 8 年間にわたって編集会議は 30 回を超えたと聞きました。原稿執筆、編集にご協力いただいた多くの皆様に重ねて感謝申し上げます。

この記念誌の発刊をもって予定された「北大スキー部 100 年・山スキー部 50 年」の記念事業はすべて終了いたします。北大山とスキーの会関係者やご賛同いただいた数多くの方々からこの記念事業のために多額の寄付をいただいておりました。

この場をかりてあらためて深く感謝いたします。

本当にありがとうございました。

2019 年 2 月 20 日

北大山とスキーの会

会長　長沼　昭夫

目　次

発刊にあたって　3
目次　4
グラビア　北海道大学 スキー部 100 年・山スキー部 50 年 アルバム　9
北大スキー部編「札幌附近のスキーコース図」(1935 年 1 月 1 日発行)　28

第 1 章　北海道大学 スキー部・山スキー部　通史 …….. 29

1　北海道大学スキー部の誕生　31
1.1　日本におけるスキーの始まり　31
1.2　北大スキー部の誕生　33
1.3　北大スキー部のスキー術
—リリエンフェルト式スキー術からノルウェー式スキー術へ—　35
1.4　スキー部によるスキーの普及とスキー登山　37
コラム：北大スキー部第 9 シーズンの活躍ぶり　39

2　北海道大学スキー部の二つの流れ　40
2.1　山党(山班)と畑党(競技班)　40
2.2　北大スキー部山班の活躍　40
2.3　北大スキー部競技班の黄金時代　42
2.4　北大山岳部の誕生　44
2.5　残った山班の葛藤　45

3　戦後の北海道大学スキー部—山班・競技班の対立と妥協—　49

4　北大スキー部から山スキー部と競技スキー部の誕生　52
4.1　山スキー部誕生の前史—山班の活動の高揚—　52
裏大雪山系縦走　52
ペテガリ岳中の川遭難　53
南日高入山禁止　54
幌尻岳集中登山　55
4.2　山班・競技班の対立からスキー部統一への試み　55
4.3　そして分裂—北大山スキー部の誕生—　57
コラム：あるスキー愛好家のスキー日誌　61

5　北海道大学山スキー部の活動—北大スキー部精神を継承して—　62
5.1　第Ⅰ期(第 51〜62 シーズン) (1963 年 3 月 -1974 年 9 月)　62
5.2.1　第Ⅱ期前半(第 63〜69 シーズン) (1974 年 10 月 -1981 年 9 月)　65
5.2.2　第Ⅱ期後半(第 70〜74 シーズン) (1981 年 10 月 -1986 年 9 月)　67
5.3.1　第Ⅲ期前半(第 75〜80 シーズン) (1986 年 10 月 -1992 年 9 月)　71
5.3.2　第Ⅲ期後半(第 81〜86 シーズン) (1992 年 10 月 -1998 年 9 月)　76
5.4.1　第Ⅳ期前半(第 87〜92 シーズン) (1998 年 10 月 -2004 年 9 月)　79
5.4.2　第Ⅳ期後半(第 93〜100 シーズン) (2004 年 10 月 -2012 年 9 月)　82
コラム：北海道のスキー・冬山登山の揺籃期を支えたスキー・登山用具製作所と運動具店　86

第2章 山スキー部の活動 …… 87

1 山行・スキー行の活動 89

1.1 スキー適地を求めて(大雪・日高・本州ほか) 89
1.1.1 大雪山系での活動 89
1.1.2 日高山系での活動 90
1.1.3 本州の山々 91
1.1.4 その他 92
1.2 海外への展開 93
1.2.1 ピナクルピーク 1984 95
1.2.2 マウントローガンスキー登山隊 1990 97
1.2.3 メラピークスキー登山 100
1.2.4 アラスカランゲル山群遠征から今まで 101

2 遭難と事故の記録―遭難とその対応― 105

コラム:初めての女子部員 121

3 山スキーの普及 122

3.1 ニセコ合宿 122
3.2 一般募集のムイネスキーツアー 125
3.3 雪崩講習会 128
3.4 山スキー部におけるスキー技術論 129
コラム:部費稼ぎのためのアルバイト 134

第3章 語らいの場 …… 135

1 山小屋―僕らの故郷― 137

1.1 ヒュッテンケッテ(Hüttenkette)構想 137
1.2 テイネ パラダイス ヒュッテ(手稲パラダイスヒュッテ) 142
1.3 空沼小屋 146
1.4 無意根小屋(無意根尻小屋) 148
1.5 長門ヒュッテ 154
1.6 冷水小屋(初代) 155
コラム:むいね山頂のほこら 156

2 集いの場―ロッジと部室― 157

2.1 シルバーロッジ 157
2.2 ユートピアロッジ 166
2.3 水谷(大滝)ロッジ 167
2.4 部室の変遷と思い出 170
2.5 涙が出るくらい嬉しい話―語り継ごう現部室・サークル会館入居の背景― 172
コラム:定山渓鉄道 174

3 憩いの場―むいね、歌集など― 175

3.1 『むいね』に関する一考察 175
3.2 『RUSSEL』について 178
3.3 『雑炊』と台所 180
3.4 部報の創られた頃～取り留めもなく～ 181
3.5 山で唄う(歌集) 182
3.6 昭和 20 年～30 年代に唄われた山の歌 184
3.7 北大スキー部部歌のこと 188
コラム:50-60 シーズン頃のスキー・山道具 190

第4章 追想、回想、紀行、随想 …… 191

1 追想 193

1.1 水谷 寛先生のこと 193
1.2 水谷先生とスキーの思い出 198
1.3 吉岡義彦先生の思い出 200
1.4 吉岡先生のこと 202
1.5 故小池宏二君を偲んで 203
1.6 横山雄司君追悼 205
1.7 鷲田 薫さんを偲ぶ 206

2 思い出・回想 208

2.1 ムイネで台風十五号に会って 208
2.2 はるかなるムイネ小屋 209
2.3 山での歌の想い出 211
2.4 36年ぶりの無意根小屋 216
2.5 53年前のニセコ合宿（第48シーズン ニセコ合宿） 218
2.6 岸 英三（1943農林実）先輩を訪ねて 228
コラム：むいね小屋の水 232

3 紀行 233

3.1 ムイネシリ岳登山記録 233
3.2 シャクチセニトの思い出 234
3.3 トレッキングガイド・フォー・ユー 235
3.4 アフリカ赤道直下のサマースキー 239
3.5 8,000m峰からの滑降 241
3.6 日高全山縦走記 1991年2月7日～3月4日 244

4 随想 258

4.1 “山スキー部50年”に考えた 258

第5章 追悼 …… 261

1 小池 威君 263

1.1 小池 威君のこと 263
1.2 スキー仲間の小池先輩を失う 264

2 高倉 稔君 265

2.1 高倉 稔君の死を悼んで―遭難経過報告― 265
2.2 雪溶けの頃 267
コラム：ムイネスキー 269

3 ペテガリ岳中の川の遭難 270

3.1 遭難報告 270
3.2 故山下 広君 山行歴 272
3.3 故山下 広君にあてて 273
3.4 故山室紘二君 山行歴 273
3.5 山室紘二君の思い出 274
コラム：スキー部・山スキー部のモノグラムの由来 275

4 旭岳盤の沢雪崩遭難 276

4.1 手記 276
4.2 弔辞 277
4.3 遭難者山行歴 279

4.4　雪原の放浪者より　282
4.5　30 年の歳月を想い、誓い新たに《追悼集会》　282
4.6　それぞれの 30 年を生きて《追悼の辞》　284
4.7　平成 25 年 3 月のとある日　286

第 6 章　北海道大学
スキー部 100 年・山スキー部 50 年記念行事 …… 287

1　北海道大学総合博物館における記念展示
「日本におけるスキーと北大スキー部の 100 年」　289
2　北大スキー部 100 年・山スキー部 50 年を祝う会　291
コラム：山スキーをより楽しむための相棒：キャンバースキーとロッカースキー　293
3　シンポジウム「北海道スキー術伝来 100 年にあたってスキー文化を考える―山スキー・山小屋を楽しむ―」　294
4　ヒュッテンケッテ（Hüttenkette：山小屋の連鎖）スキーツアー　296
5　無意根山スキーコース道標設置　302

第 7 章　補遺 …… 305

1　食料軽量化についての座談会　306
2　無意根小屋トイレ考　311
3　無意根小屋 60 周年祭　313
コラム：「むいね」の名のついている蜂　315
4　大雪サマースキーコース命名由来　316
5　「有史以前」の山スキー部　318
6　無意根小屋温泉事始め　320
7　山スキー部のスキー基礎指導要領試案とスキー検定会　322
8　山スキー部員数の推移　327

第 8 章　記録・資料編 …… 329

1　北大スキー部山班および山スキー部の活動記録（山行・合宿など）　330
2　1961 年 4 月にスキー部山班員に配布された文書
「スキー部山班員（特に新入部員）に対して」　408
3　1961 年 10 月にスキー部員に配布された文書
「北海道大学スキー部部員へ」　409
4　北海道大学体育会山スキー部規約（1963 年 10 月）　411
5　北大スキー部山班および山スキー部部誌『むいね』
第 1 号（1958）～第 51 号（2013）総目次　414

編集を終えて　425



間宮林蔵／北蝦夷図説（1854）より



中世の北欧では、スキーは戦争・狩猟・生活で使われていた
オラウス・マグヌス著『北方民族文化誌』（1555）より

北海道大学
スキー部 100年・山スキー部 50年

アルバム

グラビア写真撮影者・提供者氏名

11p.：北大附属図書館、木原ゆり子、北大山岳館、北大スキー部部報／　12p.：阿部孝夫、南部敏明／　13p.：在田一則、岡本博之、鳴海俊之／　14p.：在田一則、岡本博之、鳴海俊之／　15p.：阿部幹雄、佐藤鐵郎、倉持寿夫、小河健伸／　16p.：後藤　昭、倉持寿夫、小河健伸／　17p.：倉持寿夫、鳴海俊之、小河健伸、宮崎　歩／　18p.：阿部孝夫、増田裕一、鳴海俊之、後藤　昭／　19p.：斉藤正美、鳴海俊之、小河健伸、中村　宏、秦　正樹、宮崎　歩／　20p.：鳴海俊之、小河健伸、秦　正樹、倉持寿夫、宮崎　歩／　21p.：倉持寿夫、鳴海俊之、小河健伸、秦　正樹、宮崎　歩／　22p.：田村　正、増田裕一、小河健伸、秦　正樹、鳴海俊之／　23p.：鳴海俊之、倉持寿夫、中村宏、小河健伸／　24p.：倉持寿夫、後藤　昭、在田一則、阿部孝夫／　25p.：鳴海俊之、倉持寿夫、阿部幹雄／　26p.：斉藤正美、小河健伸、倉持寿夫、横山昌宏／　27p. 倉持寿夫、奥山和花、中村健彦、梅沢　俊

（以上は写真の現物またはデジタルデータの提供者であり、撮影者とは限りません）

北大スキー部栄光の時代

邂逅模索



ドイツ語の授業でスキーを紹介
～北大スキー物語の始まり
北大附属図書館所蔵



木原 均氏の回転(1916 年頃)
木原ゆり子氏所蔵

飛躍前進



スキーによる羊蹄山初登頂(1920)
北大山岳館所蔵



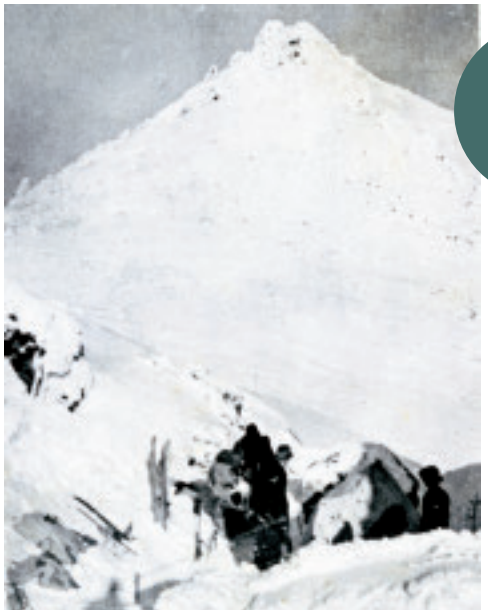
ノルウェー式二本杖スキー術の導入
で山・競技ともに大きく花開く
北大附属図書館所蔵



シルバーシャンツェ
～我が国初の固定式シャンツェ
山とスキー第 58 号



喜茂別岳初登頂(1920)
北大山岳館所蔵



大雪山比布岳でのキャンプ(1938)
北大スキー班班報 1

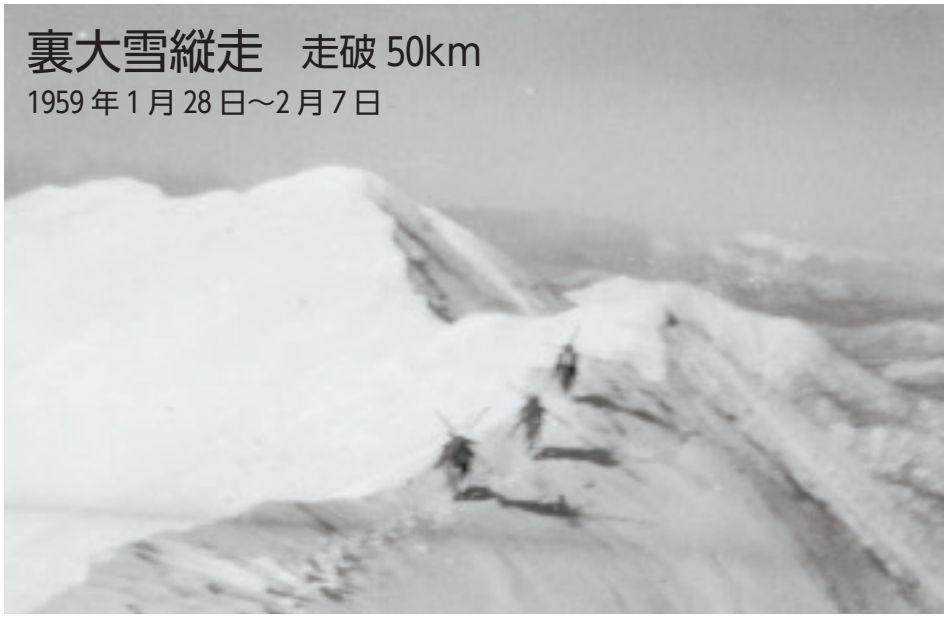
発展栄光



Hütten Kette、スキー技術の研究など
スキー部の使命を提唱・推進
スキー王国北大を築く
北大スキー部部報 3 号(1935)

裏大雪縦走　走破 50km

1959 年 1 月 28 日～2 月 7 日



ウペペサンケの稜線を行く



北海道新聞

初の裏大雪縦走

北大スキー部山班が成功

復活北大スキー部精神
山スキー部への胎動



ニペソツを背に
本隊メンバー　中島巌　斉藤貞　阿部孝夫　小松弘



(1958 年) ニペソツルート　偵察隊



ユニ石狩付近か　ウペペ辺りか　記憶は霧のかなた……



北大スキー部の原点を求め

北大スキー部精神の継承

富良野～ウペペサンケ縦走(1)

1965 年 12 月～1966 年 1 月



富良野岳へ



ここから始まる　富良野岳山頂



十勝岳へ



サポート隊 I と新人合宿班



キャンプの朝



十勝岳山頂の本隊 4 名　在田　岡本　宮崎　岡田



オプタテ間近　旭岳がみえる

走破 100km

富良野岳～ウペペサンケ山縦走(2)



黄金ヶ原偵察　帰途快走



トムラウシ遥か　オプタテを下る



ヒサゴ沼を行く
目的地ウペペサンケが
みえる



サポート隊Ⅱ・Ⅲと本隊



トムラウシ山頂の
本隊とサポート隊Ⅲ
背後にニペソツ山



サポート隊Ⅳ





ここで終る
ウペペサンケ山頂



丸山への登り
サポートⅤ先導ラッセル
受けて

サポート隊Ⅴ

手稲パラダイスヒュッテ



旧パラダイスヒュッテ（1990 年頃）



再建されたヒュッテと再建期成会のメンバー（1995.1.28）

吉岡合宿





三浦雄一郎先輩の講話
（2001 地下研修室）

三浦敬三、雄一郎父子とともに（2001）

琴似シルバーロッジ



当初スキー場であった（1962）



部室であり
自治寮であり
スキー練習基地として
様々な役目を担い
風雪に耐え 50 年
（2016）



語らいの場（1999）



部員総会（2004）

ぼくらの故郷無意根小屋



風雪に耐え 80 年



外壁クレオソート塗布(1998)



無意根小屋 60 年祭

薪割り
飯炊き
ウンコ掘り ♬



(1998.5)





利尻盛りの朝食(2005)

\皆んなで/
\皆んなで/
やったっけー ♬



ローソクの灯のもと夜はふけゆく



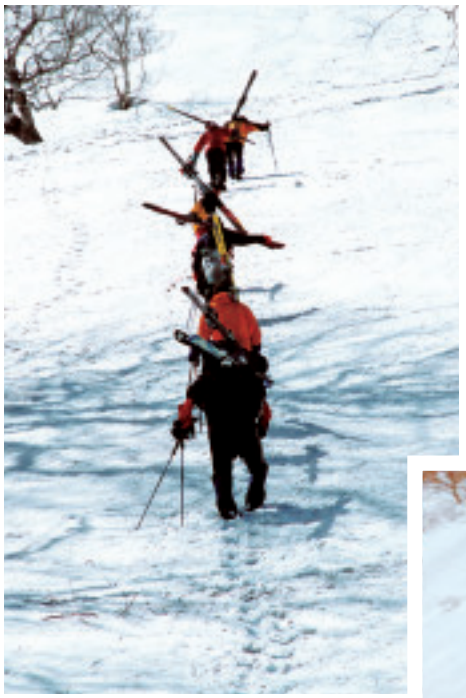
ホームグランド
無意根の雪



SchiHeil (2001 年春)



シャンツェを登る (1966)



登りは直登 (2005)



もう一本！ (1966)　GW 合宿

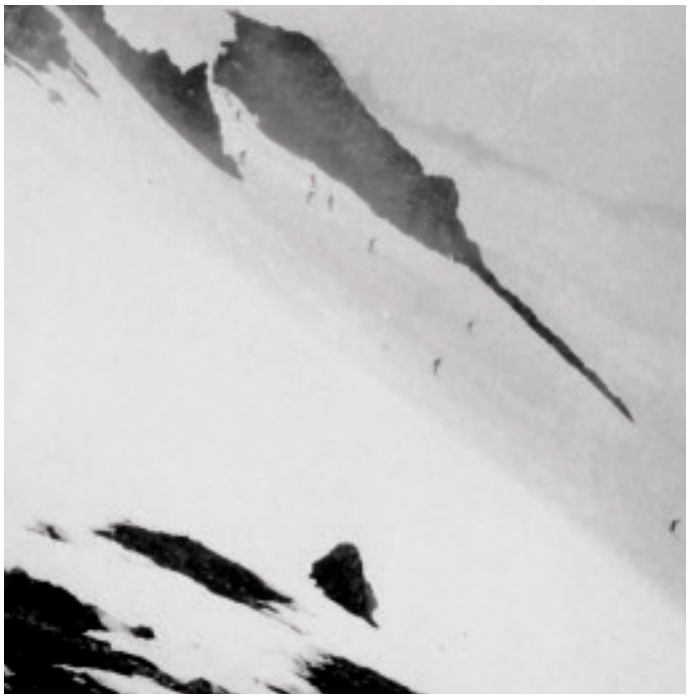


むいね壁下 (2012.5.6)



テラス尾根を行く (1966)

サマースキー



1957 年・旭岳南斜面に大雪渓“北大スロープ”を発見。
以後ここをベースにサマースキーが始まる



北大スロープとベースキャンプ



青春の 1 頁（1962 年頃）



ベースキャンプからの展望
裏大雪の峰々、トムラウシ、十勝連峰が広がる（1965）



1959 年 6 月サマースキー第 2 班（旭山山頂）



朝練出発（1958）



湧駒別（旭岳温泉）行きバス（1962 年頃）



やがて時が過ぎ、
大雪山系の魅力ある雪渓は
隈なく滑降対象となり、
日高へと舞台は広がる



カールを滑る（日高）



陽光浴びて　裏大雪の山々背に（1989）



全 8 班　全員集合（1996）

盤の沢での追悼

恒例となった盤の沢での追悼
毎年この時期に行われる



（1996）



（1975）



旭岳山頂（2010）



姿見の池にて（1989）



重荷を苦とせず
～今夜はジンギスカンか～（1996）

夏だ　命の洗濯だ

青春
満喫



さすらいの青春　高根ヶ原(1962)



カールに憩う
カムイエク 8 の沢カール(1997)



日高(1989)



日高(1997)



遠き想い出　忠別沼(1962)



朝の煙　ペテガリ C カール(1998)

～命の洗濯場～
沢・滝・薮漕ぎ

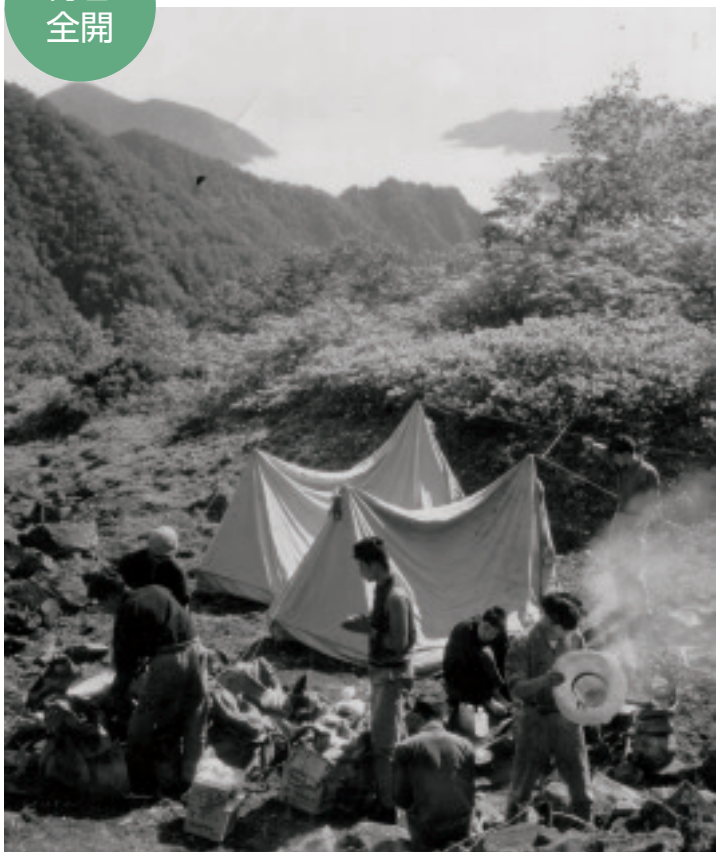


知床の旅(2012)



幌尻岳　(1962) 幌尻集中

青春
全開



カールの朝　(1962) 幌尻集中



朝日に染まる 8 の沢カール (1997)



知床 (1988)



知床岬めざし (1989)



北日高 (1965)



100Season 夏本番　唯一の沢遡行 Party (2012)



札内川 (1962)

山スキー本番
～厳冬期合宿～



厳冬の聖域　ニペソツ山(1964)



重いキスリングザックを背に　裏大雪(1964)

北大スキー部精神
～継承から発展へ～
「山班」から「山スキー部」



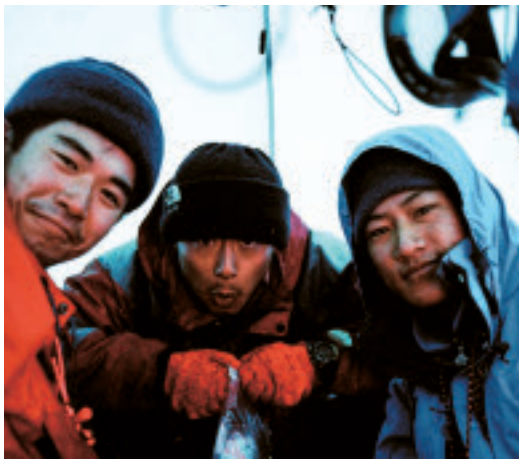
旭岳山頂(1996)　服装は軽やかだ



トムラウシ山頂
時代を感じる防寒服(1967)



テントの朝　ピウケナイ(1966)



天国　天国　―外は吹雪―

夢む杯
打ち砕き



旭岳北崖屏風岩(1996)



地球のふところを行く　旭岳(1966)

人無き
山のいや
高く



ニペソツ南稜(1997)



正月合宿　当麻乗越(1963)



救助訓練(2004)



みんなしあわせ　十勝岳(1975)



さあ！スキーの出番　ニペソツ南稜越えて(1997)



支湧別岳(1966)

伝統のニセコ合宿
―山スキー天国―



ニセコアンヌプリ（2015）



樹林地で一息（1967）



合宿最終日　全員アンヌプリ登頂　出発式（1966）



朝日を浴びラッセル（1966）



合宿メインイベント
各チーム対抗演芸会（1966）



新人班（1966）



女将（後方中央）とともに（1959 年頃）



昆布駅下車（1966）

山スキー賛歌(1)



今日はどこまで　余市岳(1962)



雪原悠々　旭岳(1966)

雪原の放浪



天空の道　無意根(2006)



ヒマラヤ　メラピーク遠征(1993)



ヒマラヤを滑る　メラピーク(1993)

可能性を求め



初滑降　北千島アライト山(1990)

スキー賛歌(2)
～未知なる斜面・雪との融合

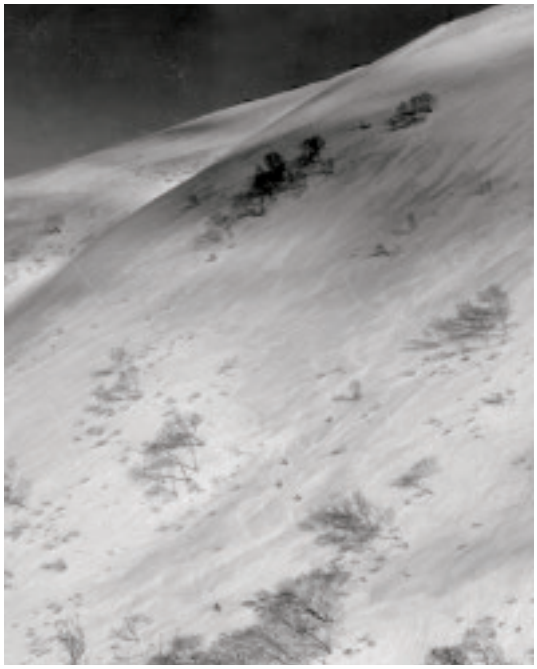


痩せ尾根を越えて　ソエマツ E 峰へ(1990)



南日高にシュプール
(1990)

高く、長く、
深く、速く



ザラメ雪大滑降
暑寒(1963)



カールを滑る
七ツ沼カール(1997)



シュプールを刻む　9 の沢(1997)



春　立山(1989)



深雪爆発　三段山(1997)

北大スキー部100年・山スキー部50年を祝う会

日 時：2012年10月13日（土）14:30～17:30（開場 14:00）
場 所：北海道大学クラーク会館大講堂
※プログラム・時間変更がある場合があります。





記念シンポジウム

楽プロローグ
美紀、　歌：谷川千佳子
伊藤秀輝、米山奈帆
曲目：ベンチル オンブラ・マイ・フ、パッヘルベル カノン、都ぞ弥生、他

総合司会：萬崎由美子

●13:00～
・北大山とスキーの会会長挨拶（長沼昭夫）
・北大山スキー部部長挨拶（片倉　賢）
・北大山スキー部100シーズン主任挨拶（奥山和花）



長靴合唱隊

祝う会



感謝状

●15:15～　感謝状
住友房夫・幸　時朝子様、花野ノブ子様、武田

●15:30～　ス　年記念映写会
・北大山スキ　録（水谷　寛）
・最近10年の　丸谷聖一）

●16:00～　8　壮行講演（三浦雄一郎　昭31獣医）
　を迎えます）



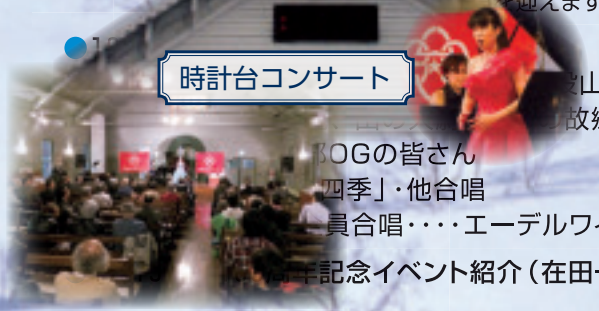
全員で都ぞ弥生

祝う会懇親会

●1
時計台コンサート
山スキー部員&スキー部OB会員）
故郷、北大スキー部部歌
OGの皆さん
四季」・他合唱
員合唱・・・・エーデルワイス
年記念イベント紹介（在田一則）・閉会の辞5



元気印スーパー OB と現役





総合博物館記念展示

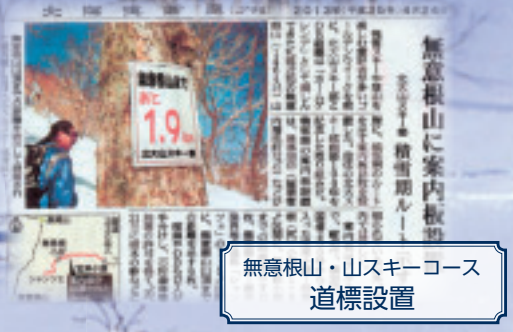
【懇親会】　18:00～20:00　クラーク会館3F大集会室

立食パーティー（参加
但し学生1,000円、こども無料）
祝う会御出席の皆さ
参加をお待ち致します。



山小屋ケッテ
～オートルート札幌～





無意根山・山スキーコース
道標設置

主催：北海道大学山とスキーの会／北海道大学山スキー部



北大スキー部編「札幌附近のスキーコース図」(5 万分の 1、1935 年 1 月 1 日発行)。
裏面には 14 棟の山小屋の紹介とそれらを起点としたスキーコースの所要時間などの説明がある。
その文末には「山は厳父、小屋は慈母」とある。

第１章

北海道大学 スキー部・山スキー部　通史



『むいね』第９号より



北大スキー部スキー大会、手稲山 1918 年 2 月 3 日（加納、1986 より）



日高山脈カムイエクウチカウシを目指して
（1986 年 3 月、中島　隆撮影）



第 4 回冬季オリンピック（1936）で 7 位の伊黒正次 OB
（小川、1956 より）



昭和初期のパラダイスヒュッテ（絵葉書より）

“人の世の　清き国ぞと　あこがれぬ”と津軽海峡を渡ってきた若人たちは、コーラー先生に紹介された厳しい冬の山野を跋渉できる魔法の 2 枚の板に魅せられた。

そこから、我が国で最初の学生スキークラブ（北大スキー部）が誕生し、山党（山班）と畑党（競技班）に発展した。競技班はオリンピック選手を輩出し、全盛期を迎え、一方、アルピニズムを求める人々が北大山岳部として去ったあと、山班は山班の行くべきシュプールを求めて苦悩した。しかし、ともに魔法の板に魅せられつつ、目的の異なる若者たちはそれぞれの道を歩んだ。

それは、我が国におけるスキーの導入と発達、そして北国のスポーツであるスキーの多様化の歴史でもある。

1　北海道大学スキー部の誕生

在田　一則（1965 理 地鉱）

1.1　日本におけるスキーの始まり

スキーが日本にいつ入ってきたかについては諸説がある（中浦 2001）。1895（明治 28）年に松川敏胤大尉が日清戦争凱旋のおり満州から持ち帰ったとか、青森歩兵第五連隊の八甲田山雪中行軍遭難事件がきっかけとなって、1902（明治 35）年に神戸駐在ノルウェー総領事の P. オッテセンがスキーをノルウェーから取り寄せて軍隊に贈ったとか、1906（明治 39）年に来日し、1909（明治 42）年 10 月から 6 か月間月寒歩兵第二十五連隊に隊付で勤務した英国大使館付武官 S. A. デルメラトクリッフが持参したフィットフェルト式スキーを同連隊の将校に寄贈したとかなどが言われている。

北大スキー部第 5 代部長の大野精七先生の著書『北海道のスキーと共に』（1971）によると、“1910（明治 43）年 2 月、オーストリア人エゴン・クラッツァは小坂鉱山（秋田県）で 3 日間のスキー講習会を行い、その後五色温泉（山形県）でもスキーを滑りまくった。クラッツァは翌年にも同国の L. ウィンクラーとともに五色温泉で東京や横浜の外国人や日本人と合宿をし、本格的なスキー講習を行った”とのことである。東京帝国大学医学部学生だった先生は 1911 年に知り合ったウィンクラー氏とともにクラッツァ氏を訪ね、スキーの現物や五色温泉でのスキー講習会の写真を見せてもらったという。『北海道のスキーと共に』には、「1911 年札幌郊外」と説明のある二本杖を持つウィンクラー氏のスキー姿が載っている。

このように、明治期末には本州でも北海道でもスキーはある程度行われていたようだが、スキー術を組織的・系統的に教えたという意味では、日清・日露の戦争に勝った日本の軍事事情視察のために、1910（明治 43）年 11 月に来日したオーストリア＝ハンガリー帝国陸軍参謀レルヒ少佐[注1]（**写真 1-1-1**）が、翌年 1 月に高田の第十三師団の将校 14 名にスキー講習を行ったのが、日本へのスキー導入の嚆矢と言える。レルヒ少佐は、一本杖のアルペン（山岳）スキー術の創始者であるオーストリアのツダルスキー（Mathias Zdarsky：1856–1940、**写真 1-1-2**）の高弟であった。



写真 1-1-1
レルヒ少佐。1911 年 2 月高田にて（小川、1956 より）



写真 1-1-2
スキーの模範演技をする Zdarsky　1905 年
（Wikipedia より）

注 1　テオドル・エドレル・フォン・レルヒ（Theodor Edler von Lerch：1869～1945）：ハンガリー生まれ。20 歳で士官学校へ入学、ウィーン参謀学校を卒業し、軍人となる。34 歳の時、アルパイン（リリエンフェルト）スキー術の創始者ツダルスキーからスキー術を教わる。

一方、札幌では、レルヒ少佐による高田での講習会に先立ち、1909(明治 42)年冬に“スキーイング”が行われている。1908(明治 41)年 7 月に東北帝国大学農科大学(後の北大)の予科ドイツ語教師として赴任したコーラー先生[注2](**写真 1-1-3**)は翌年冬に故国スイスからスキーを取り寄せ、学生たちはそれを履いた。これが札幌(北大)での最初の“スキーイング”であった(中浦 2005)。先生はさらにヘーク(Henry Hoek:1878-1951)のスキー技術書『Der Schi』(**写真 1-1-4**)を取り寄せ、講義で使った。しかし、コーラー先生自身は当初スキーをできなかった。

1910(明治 43)年冬には、後にスキー部を作った予科生たちはそのスキーを借りて学内のサクシュコトニ川の土手(現在のクラーク像付近)を交代で滑り、練習をした(**写真 1-1-5**)。翌年 2 月には予科生たちはそれをモデルに豊平橋付近(南 1 条)の馬橇屋にスキーを作らせ、日曜日ごとに三角山麓の“屋根形の小丘”(なまこ山:現在の西区三角山小学校の北側の丘)で『Der Schi』の写真版にあるスキー姿勢の真似をしながら練習した(稲田 1926)。

中佐に昇進したレルヒは、1912(明治 45)年 2 月旭川に来て第七師団の将校ら 26 名に 3 週間にわたってスキー講習をした。その講習に参加した月寒の歩兵第二十五連隊の三瓶勝美中尉・松倉儀助中尉・中澤治平少尉は翌月札幌郊外の月寒で軍人ほか一般人も対象として 7 日間のスキー講習会を行った。それに、なまこ山で『Der Schi』をお手本に悪戦苦闘していた予科生 6 名(稲田昌植・角倉邦彦・野村龍吉・德岡松雄・荒木忠郎・二木春松)が参加し、アルパインスキー術を学んだ。講習が終わると、三瓶ら将校や予科生たちは 3 月 29 日には藻岩山(531m)にスキー登山を試みた。



写真 1-1-3
札幌郊外でスキーと戯れるコーラー先生(大野、1971 より)



写真 1-1-4
H.Hoek 著『Der Schi』1925 年版
(北大農学部図書室所蔵)



写真 1-1-5
学生たちが“スキーイング”をしたと言われる北大構内のサクシュコトニ川の斜面。左手奥にクラーク像が見える。

注 2　ハンス・コーラー(Hans Koller:1881-1925):1881(明治 14)年 10 月 4 日スイス、チューリヒ生まれ。1901 年キウスナハト県立師範学校を卒業し、ロイトリンゲンの小学校教員となる。1904 年冬チューリヒ大学入学、1908 年卒業。同(明治 41)年 7 月 31 日東北帝国大学農科大学(現在の北大)予科のドイツ語教師となる。1912 年夏ルイーゼ・ヒンデル(後述のマックス・ヒンデルの妹)と結婚。1921 年スキー部のニセコ青山温泉スキー合宿に初参加し、スキーに熱中。1924(大正 13)年 12 月風邪気味をおしてニセコ青山温泉スキー合宿に参加して、体調が悪化し、翌年 1 月 29 日肺炎で死去。「常に忠実に職務に精励し、懇切丁寧に学生を指導教授し、終始一貫熱心にわが国の教育界のために尽瘁して、その成績に見るべきもの少なからずあり、功労は顕著である」ことにより、同日勲 3 等端宝章を叙勲。

1.2　北大スキー部の誕生

これらの予科生たちが中心になって、1912年に北海道大学スキー部(当時は東北帝國大學農科大學文武會スキー部)が創立された。

ところで、北大スキー部の創立時期については、1912(明治45)年6月とする説と1912(大正元)年9月とする説がある。スキー部関係の文献(『北海道帝国大学スキー部創立拾五年記念』(1926)、『北海道大学スキー部七十年史』(1982)など)では前者の説が記録されている。しかし、『北海道帝国大学スキー部創立拾五年記念』に掲載されている小川玄一(第6代スキー部長)による「部の歴史として」には以下の記述がある(同書273頁)。

> 同年(筆者注：明治45年)六月にはこの講習(筆者注：上記の三瓶中尉らによる講習)を受けた野村龍吉、稲田昌植、荒木忠郎、德岡松雄、二木春松、角倉邦彦以上六名が發起人となり三百餘名の贊成者の調印を得て文武會委員長宛スキー部設立に關し文武會々則の變更を願ひ出た。そこで文武會では委員會を開き其決議により會則を改めてここにスキー部の設立を見るに至った。

一方、文武会(会頭：佐藤昌介、副会頭：宮部金吾・南　鷹次郎、委員長：橋本佐五郎)の記録である『文武會會報』第67号(1912(大正元)年12月20日発行)には「文武會庶務報告」として以下の記述がある(同書68～69頁)。

> 大正元年九月二十一日午後一時半より畜産學講堂に於て左の件に關し委員會開會午後三時四十分閉會す。橋本委員長出席委員總數十五名の内出席者九名委任狀三通ありたり。
>
> 一、文武會にスキー部新設の件
>
> 一、野球部に於て固定ネット新築の件
>
> 右二項共委員多數の贊成を以て可決せり。
>
> 同時に文武會々則第二條スケーチング部の次に「スキー部」の四文字を加ふる事を可決す。

また、同書77頁の各部幹事の記載には、スキー部として以下のようにある。

> 部長　大井上義近[注3]
>
> 幹事(當分の内設立發企人其の役に當る)
>
> 角倉邦彦　野村龍吉　荒木忠郎　德岡松雄　二木春松

なお、上記のスキー部関係の文献では、スキー部初代主任幹事は稲田昌植ということになっているが、『文武會會報』には上記のように幹事には同氏の名前は載っていない。ちなみに、同頁の野球部の幹事欄には、稲田昌植が野球部の主任として記載されている。さらに、翌1913(大正2)年3月20日発行の『文武會會報』第68号の「文武會庶務報告」(108頁)には、スキー部主任は角倉邦彦となっている。また、同号の「報告及記事」欄(121-122頁)には筆者名はないが、以下の「スキー部報告」がある。

> 本大學にスキーの始ったのは、やうやく一昨年の春のことだ。其動機は、コラー先生が、スキーを携帯して來任せらるたると、先生のお國自慢とによるのだ。初めてスキーを見た時には、こんなベラ棒に長い物を履いて、どうして歩けやうと云ふ考が起った。其後好奇心からスキーをやって見たくて堪らなくなった。明治四十四年二月、有志數名、コラー先生のスキーを見本として南一條の馬橇屋でスキーを製作して、日曜日毎に三角山(筆者注：藪のなまこ山であろう)へ滑りに行った。當時は山の頂上から眞直に下降すのみで滑走の方法等に到つては自得するより外なかった。尤もコラー先生が書籍について説明して下さったが實地を見たこともないし、又外國の言なので、よく了解することが出來なかった。從て甚だ微々たるもので、一般に普及するに至らなかった。
>
> 昨年三月(筆者注：二月のまちがい)旭川に於てレルヒ中佐の講習會がある事を聞いたが學校があ

注3　大井上義近：1904(明治37)年東京帝国大学理学部地質学教室を卒業し、農商務省地質調査所技師となる。1906年に農商務省札幌鉱山監督署技師として札幌に転任し、来札早々に宮部金吾らが設立した「札幌博物学会」に入会。1921(大正10)年に地質調査所へ戻る。その間、1910(明治43)年4月から東北帝国大学農科大学助教授および予科教授を兼任し、地質学の教育・研究に携わる。1912(大正元)年9月の北大スキー部創立にあたって学生に請われて初代部長となり、1920(大正9)年5月に並河 功予科教授に引き継ぐまで部長を務める。札幌鉱山監督署在職中は、道内の炭鉱や火山の調査に尽力し、1918(大正7)年には、開道50年記念として、それまでの北海道庁・農商務省地質調査所などの調査結果をまとめて、『北海道地質図』(60万分の1、7色刷り)を編集・発行。この地質図は当時の日本の地質学界では出色の地方地質図と評価され、『大井上図』として長く重宝された。1926(大正15)年5月にはスペイン マドリッドで開催された第14回万国地質学会議に日本代表として参加。1932(昭和7)年地質調査所を退職するまで東京地学協会の運営に関与し、1947(昭和22)年～1949年には同協会副会長を務めた。1960(昭和35)年10月13日逝去。

るので、出席する事が出來ず大に殘念に思って居た。四月(筆者注：三月のまちがい)に至りレルヒ中佐より講習を受けし三瓶、中澤、松倉等の將校連が月寒に於て、講習會を開く由の通知があったので、最も好きなもの六名が講習を受けた。九月にその六名發起人となり、文武會にスキー部設置を建議して、可決されスキー部は茲に設立された。幹事會に於て、全會一致大井上先生を部長に推戴する事を決議し、先生の御承諾を得た。

上記の『北海道帝国大学スキー部創立拾五年記念』の小川玄一の記述および『文武會會報』第67号の「文武會庶務報告」、『文武會會報』第68号の「スキー部報告」からは、1912年3月に月寒で行われたスキー講習会に参加した6名の予科生らが中心になって、1912(明治45)年6月にスキー部の創立を決め、苦労して300余名の賛同者の署名を集めて文武会にスキー部設立に関わる文武会会則の変更を申請し、それが新学期9月21日開催の文武会委員会において、スキーは北国独特の有効なスポーツであるということで承認された、という流れが考えられる。したがって、北大スキー部は、部員の立場から見れば1912年の6月創部、大学記録から見れば9月創部ということになる。

6月説と9月説とでは、たった3か月の違いであるが、前者では創立は明治となり、後者では大正ということになる。したがって、考えようによっては、その違いは大きいということにもなる。また、初代スキー部長が予科の大井上義近教授であったことは間違いないが、『文武會會報』の記録にあるように、初代主任が稲田昌植であったのか、あるいは角倉邦彦であったのかという疑問は残る。

このようにして、日本で最古の学生スキークラブが誕生した。この年(明治45年)に作られた寮歌「都ぞ弥生」に“人の世の　清き国ぞとあこがれぬ”と謳われた北の大地に憧れ、津軽の海を渡ってきた若者たちにとって、北国の冬の寒さと吹雪は彼らの日々の生活を威圧し、閉塞感を与えるに充分であったであろう。しかし、彼らはコーラー先生に紹介された“スキー”という雪の上を自由に跋渉できる魔法の履物に冬の厳しさから解放される救世主を予感したに違いない。

前記の「スキー部報告」(『文武會會報』第68号)によると、創立早々のスキー部はその年12月22日に三角山麓において部員50名が参加して第1回講習会を開催し、その後毎日曜日に講習を行っている。翌年2月2日には大井上部長や部員30名が真駒内側から藻岩山に登り、山頂で部員総会を開いて会務報告や幹事改選を行っている。これには北海タイムス(現北海道新聞)の記者も同行した。2月11日には稲田昌植ら8名が手稲山(1,024m)のスキー登山を行った。琴似駅から発寒まで馬橇を使い、午前10時半そこから当時の夏道をスキーで出発した。ルートはほぼ現在の平和の滝コースを取り、標高400mの地点から吹雪かれて苦しんだが、午後2時半頂上に達した。4時間での登頂であった。帰途は登路を1時間弱で下りた。琴似駅から登頂成功の電報を打ったという。これが北海道における1,000m級山岳のスキー登頂の最初である。

上記の「スキー部報告」は、「藻岩山は既に吾人の散歩區域内なり、手稲又所謂遠足場たるに過ず、手稲藻岩は勇壯なるスキー部員の慾望を滿足するにはあまりに低く、あまりに樂過ぎたり、吾人は次にマツカリヌプリ(著者注：羊蹄山)を、或は富士山を或は石狩增毛の連山を、或は日本アルプスを攻撃せざるべからず、一二の企圖はあり」と結んでおり、創部当時の部員の意気軒昂ぶりが窺える。そして、その年の暮れには富士登山を決行している。

1913(大正2)年12月31日、富士山登頂を目指して御殿場口の中畑を出発したスキー部の角倉邦彦・柳澤秀雄・荒木忠郎と人夫の野木國吉(他に同行者2名)は、気温零下9.5度の6合5勺の小屋で渋紙の寝袋に入って一泊、翌日(1914年元旦)の12時10分頂上外輪山の野中至測候所小屋に達した。3人の氏名と登頂の日時を記した板を壁に打ちつけて、12時20分零

下 17 度の頂上を後にした。中畑の宿に帰り着いたのは午後 8 時 30 分であった。直ちに大井上部長ほかに電報にて無事成功を伝えた(柳澤 1934)。この登山の目的はスキー登山の研究にあったが、スキーを使用したのはわずかに 2 合 8 勺の小舎までだけで、ほとんどは金カンジキを使用した。十分な装備のないこの時代に、創立間もないスキー部が厳冬期の富士山登頂を成し遂げたことは快挙であった。



写真 1-1-6
揺籃期のスキー部のスキー大会。1918 年 2 月 3 日、手稲山。1 本杖が多いが、2 本杖も見られる(北大スキー班班報 1、1941 より)



写真 1-1-7
手稲山登行中の遠藤吉三郎先生(右)。中：六鹿一彦、左：福地義二郎。1918 年、木原 均撮影(北海道帝国大学スキー部創立拾五年記念、1926 より)

1.3　北大スキー部のスキー術 ―リリエンフェルト式スキー術から ノルウェー式スキー術へ―

創立早々のスキー部はスキー講習会やスキー合宿(第 1 回：1916 年 12 月小樽緑丘地獄坂付近、部員 26 名参加)を開催してスキー技術の研鑽と普及を図るとともに、積極的に海外のスキー技術書を取り寄せ、スキー術の研究を行った(**写真 1-1-6**)。

北大のスキーは当初、ノルウェー式スキー術も取り入れていたが、ツダルスキーが編み出しその高弟であるレルヒ中佐から伝授された一本杖のリリエンフェルト式スキー術(アルペンスキー術：シュテムボーゲン系回転術)が主体であった。しかし、1914(大正 3)年 3 月に 2 年 3 か月の留学(英・独・ノルウェー)を終えて帰国した遠藤吉三郎教授[注4](**写真 1-1-7**)は、フィットフェルト式締具(フィットフェルトが発明した締具で、金具ではなく革ベルトを使っているため靴幅の調整ができ、踵が自由に動き、金具を使ったリリエンフェルト式締具より歩きやすかった)とともに二本杖(ストック)のノルウェー式スキー術(テレマーク・クリスチャニア系回転術)をスキー部に披露した。当時の部員は北欧のテレマークやクリスチャニアなどのスキー術についても文献で知識があり練習をしていたが、一本杖のアルパインスキーとは違う遠藤先生の本場仕込みの軽快で登行に適した二

注 4　遠藤吉三郎(1874-1921)：1874(明治 7)年新潟県北蒲原郡中条町(現在の胎内市)生まれ。幼少時に函館に転居し、1891 年函館商業学校を卒業。北海道炭礦鉄道会社・第二高等学校中学予科を経て、1898 年東京帝国大学理科大学に入学。1901 年同大学院に入学し、松村任三の指導により海藻学を専攻。1907(明治 40)年札幌農学校水産学科初代教授となる。1911-1914 年イギリス・ドイツ・ノルウェーに留学。日本藻類学の黎明期を牽引した藻類学の開拓者。専門のみならず、文学・文明論・スポーツなどにも一家言を持つ個性豊かな異色の人であった。1919 年 1 月北海タイムス紙に掲載された「僕の家」と題する“僕の家(北大を暗示)の大黒柱(佐藤昌介総長を暗示)は腐りかかっている。あちこちの柱も腐りかかっているが、ことに台所(会計課を暗示)は腐敗して黴菌だらけで増築(学部増設を暗示)には耐えられない”という趣旨の風刺文により休職処分となり、国会でも問題となった(遠藤事件)。その後復職することなく、1921 年 47 歳で療養中の仙台で肺結核のため死去した(北大水産学部七十五年史 1982)。日本藻類学会は会誌『藻類』第 62 巻第 2 号(2014 年 7 月)の扉を「遠藤吉三郎生誕 140 周年」で飾った。

本杖のノルウェースキー術を見習い、部員たちは憧れのテレマーク技術やクリスチャニアを本格的に研究し始めた。遠藤先生は“スキーは同じ斜面を何回も繰り返してすべるのが能ではない。山野を跋渉するのがスキーの醍醐味である”と主張し、自ら発見した小樽の毛無山付近一帯でスキー部員とともに楽しんだ(**写真 1-1-8**)。1917(大正 6)年 3 月には札幌－石狩往復の平地滑走、また翌年 2 月に 5 日間をかけて定山渓から中山峠を越えて倶知安に至る行程約 100km のスキーツアーが行われているが、これも遠藤先生のノルウェーでの経験がもたらしたものであろう。

遠藤先生のもう一つの貢献は、本場ノルウェーのスキージャンプの指導と普及であった。先生はジャンプ台がなければスキージャンプは進歩しないと考え、1920(大正 9)年 2 月部員を指導して小樽の緑ヶ丘で 20m 級の木製ジャンプ台を作るなどして、大矢敏範・木原均・廣田戸七郎・緒方直光ら部員とともにジャンプを研究した。

スキー部は、1918(大正 7)年 1 月に円山南斜面、1920(大正 9)年に西区山の手の躑躅(つつじ)山(現在の標高 140m 点)の南東斜面(一帯はシルバースロープと呼ばれた)にも仮設シャンツェを作ったが、その後、1924(大正 13)年 10 月(1922 年 12 月第 1 期工事)に三角山北北東斜面に日本最初の本格的固定シャンツェ(ジルバーシャンツェ)を完成させた。その流れは、なまこ山のアルファシャンツェ(1923、北海道山岳会が建設、初級用の意味で命名された)や三角山東斜面の札幌シャンツェ(1927、札幌市が建設)、荒井山記念シャンツェ(1929、翌年宮様来道記念大会(現在の宮様大会)が行われた)などの建設をもたらし(**写真 1-1-9**)、さらに 1931(昭和 6)年の大倉シャンツェにつながっている。遠藤先生の指導と大矢敏範・木原　均・廣田戸七郎らの努力はジャンプ王国北大そして北海道の基礎を作ったのである。

1918(大正 7)年、スキー部は遠藤先生がもたらした北欧の平地や丘陵地から生まれたノルウェースキー術にアルプスの山岳地帯から生まれたアルペンスキー術の長所を加味して、スキー部独自の一般スキー術をまとめ、『スキー術教程』(第 1 版：六鹿一彦・福地義二郎)を刊行した。『スキー術教程』はその後 2 年ごとに改訂され、1924 年の第 4 版まで刊行された。第 3 版と 4 版は、スウィング(中野誠一)・ジャンプ(廣田戸七郎)・山岳(加納一郎)・準備用具等(松川五郎)から構成されており、スキー部の競技スキーと山スキーの両面での充実ぶりを示している。

1919(大正 8)年には遠藤吉三郎・木原 均著『最新スキー術』(博文館)が出版され、当時の日本のスキー界に大きな影響を与えた。また、1923(大正 12)年に刊行された廣田戸七郎の『スキージャムピング』(1930 年に改定版)はジャンプの技術やその練習法、審判規定などのほか、ジャンプ台の建設方法や建設適地の条件などに



写真 1-1-8
毛無山より忍路を望む(文武會會報 第 80 号、1917 より)



写真 1-1-9
三角山東麓の札幌シャンツェ(右)となまこ山のアルファシャンツェ(左)。遠景の山を含め、当時は現在よりも樹木がかなり少なかったようだ(大野、1971 より)

ついても解説しており、その後の日本のジャンプ台建設とジャンプ競技の手引書となった。

1.4　スキー部によるスキーの普及とスキー登山

スキー部はスキー普及のために、スキー講習会とともにスキー競技会の開催にも熱心に取り組んだ。創部間もない 1914(大正 3)年に、中等学校距離スキー大会(距離約 2km)を銭函で開催しているが、競技規則を定めた本格的競技会は、1920(大正 9)年 1 月の小樽－札幌(北大グラウンド)間約 30km の札樽中学校スキー駅伝競走であった(**写真 1-1-10**)。駅伝競走から始まったこの札樽中等学校スキー競技会は 1925(大正 14)年 1 月からは東京朝日新聞の後援を得て、全国中等学校スキー大会となり、ジャンプとディスタンスの競技となった。スキー部が主催した中学校スキー大会により、小樽や札幌の中学生のスキーが向上し、北大に入学した優秀な学生たちは北大スキー部の中核となった。

一方、スキーを駆使して雪で被われた山野を跋渉し、登山する活動も盛んになった。1917(大正 6)年 3 月には、大島幸吉・木原 均・岡見聞多・岩崎直砥・高松正信・福地義二郎により、3 回目にして羊蹄山の冬季初登頂(6 合目からはアイゼン使用)に成功した(**写真 1-1-11**)。1920 年 1 月には福地義二郎・六鹿一彦・加納一郎ら 8 名により頂上までスキーで登っている。1918 年 2 月には木原 均ら 5 名が札幌－中山峠－倶知安を踏破する最初の長距離スキーツアー(5 日間、行程約 100km)を行い、スキーの可能性を広げた。

手稲山スキー登山は初登頂後も発寒ルートから行われていたが、1917 年 3 月に初めて千尺高地を経て軽川(後の手稲町)に下り、その途中スキー適地のネオパラダイスが発見された。それ以降はスキー登行が容易な軽川ルートが一般的になり、手稲山スキー登山はますます盛んになった。また、1919(大正 8)年 12 月 22 日～29 日にはニセコ昆布青山温泉不老閣で部員 48 名が参加してスキー合宿が行われた。従来の合宿とは異なり、4 班に分けそれぞれのリーダーのもとで組織的なスキー練習を行った。青山温泉で合宿を行ったのは、同年 2 月に岩尾登鉱山事務所に宿泊してイワオヌプリに登り、さらにニセコアンヌプリも目指したが雪質が硬く登頂を



写真 1-1-10
第 1 回札樽中学校スキー駅伝競走(1920 年)で 1 位となった小樽商業学校チーム(札幌市ウィンタースポーツミュージアム所蔵、高橋次郎アルバムより)



写真 1-1-11
羊蹄山 3 合目付近を行くスキー部メンバー(北海道大学スキー部七十年史、1982 より)



写真 1-1-12
北大スキー部のニセコ青山温泉スキー合宿の第 7 班メンバー。1921(大正 10)年 12 月 22 日～29 日、参加者 60 余名。真ん中の松川五郎以外は 1 本杖である(北大山岳館所蔵)

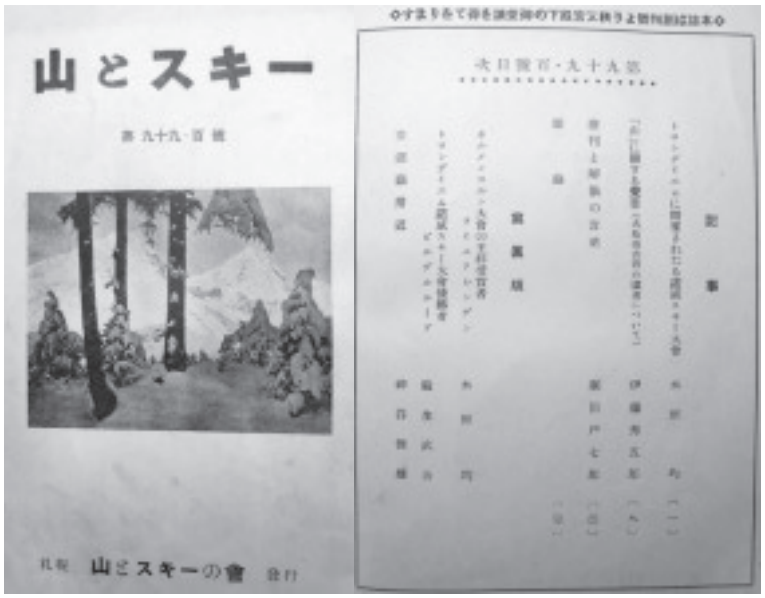


写真 1-1-13
『山とスキー』第 99・100 号(終刊号)(山とスキーの会、1930)の表紙と目次

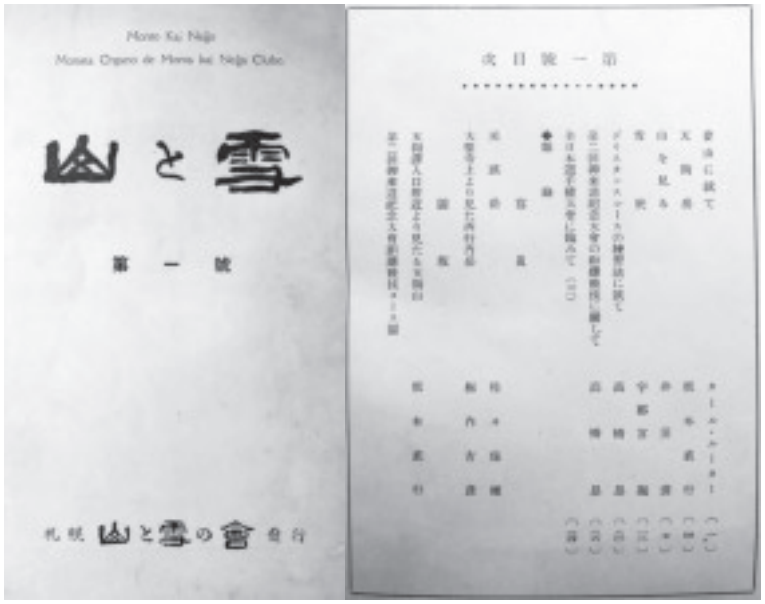


写真 1-1-14
『山と雪』第 1 号(山と雪の会、1931)の表紙と目次

断念し、青山温泉に下ったのが契機であった。このニセコ合宿は、その後部員以外の学生も参加して参加者数は年々増加し、北大スキー部の名物の一つとなった(**写真 1-1-12**)。これが、その後戦時中も含め 1971 年まで続いたニセコ青山温泉スキー合宿である(第 2 章 3.1・第 4 章 2.5 参照)。この北大スキー部の合宿によって、ニセコはスキー地として全国に知られ、東洋のサンモリッツと謳われて現在の国際化につながっている。

1921(大正 10)年 4 月、加納一郎・板橋敬一らスキー部員や OB は「山とスキーの会」を結成し、同年 6 月に日本最初の月刊山岳雑誌『山とスキー』(当時の並河 功スキー部第 2 代部長が命名)を刊行した。『山とスキー』はスキー部員や OB が 1 年ごとに交代で編集責任者となって、1930(昭和 5)年 8 月までに 100 号が発行された(**写真 1-1-13**)。この月刊誌は、スキー技術の理論や山スキー・登山の実践記録に多くのページを割いているが、登山の考察や山に関する随想、登山技術、紀行・翻訳や海外登山事情なども紹介し、日本のアルピニズムに対する貢献もきわめて大きく、大島亮吉・槙 有恒・松方三郎・麻生武治ら当時の山岳界の錚々たるメンバーも常連の寄稿者であった。なお、スキー部内では、『山とスキー』刊行に先立っ

て、その前身とも言える謄写版刷りの機関紙『ALPENZEITUNG』が第9シーズン(1920–1921)の年報として5分冊で加納一郎らによって発行されている。

「山とスキーの会」は雑誌『山とスキー』刊行のほか、1923年と1924年の暮れに、アールベルグ スキー術のハンネス・シュナイダー(Hannes Schneider：1890–1955)の映画「スキーの驚異」の上映を主催した。この映画は大きな反響を呼び、スキーの市民への普及に大きな役割を果たした。

「山とスキーの会」解散後は、大野精七や山崎春雄たちがこれを引き継いで「山と雪の会」を結成し、1931(昭和6)年に『山と雪』を創刊した(**写真1-1-14**)。しかし、これは10号で終刊となった。『山と雪』には、山崎春雄によるスイスの山小屋の紹介・解説記事の連載があり、当時の山小屋作りの熱意が感じられる。『山とスキー』や『山と雪』が刊行されたころは現在北大が所有する5つの山小屋をはじめ多くの山小屋が札幌近郊に次々と建設された時期でもあった。

文献

稲田昌植(1926) スキー部創立当時の回顧．北海道帝国大学スキー部創立拾五年記念，266–271.

大野精七(1971) 北海道のスキーと共に．383p.

小川勝次(1956) 日本スキー発達史．朋文堂，514p.

加納一郎(1986) 北海道の山と雪(加納一郎著作集3)．教育社，379p.

木原 均(1985) 一粒舎主人舎寫眞譜．木原生物研究所，256pp.

東北帝国大学農科大学(1912) 文武會庶務報告．文武會會報，第67号，68–69，77.

東北帝国大学農科大学(1913) 文武會庶務報告．文武會會報，第68号，108–109，121–122.

東北帝国大学農科大学(1917) 文武會會報，第80号.

中浦皓至(2001) 日本スキーの発祥前史についての文献的研究．北海道大学大学院教育学研究科紀要，84，85–106.

中浦皓至(2005) スキー史研究の醍醐味(1)ハンス・コラーと日本のスキー発祥．日本スキー学会誌，15(1)，25–39.

北大水産学部七十五年史出版専門委員会(1982) 北大水産学部七十五年史．北海道大学水産学部，642p.

北大スキー部七十年史編集委員会(1982) 北海道大学スキー部七十年史．327p.

北海道帝国大学文武会スキー部(1926) 北海道帝国大学スキー部創立拾五年記念．401p.

北海道帝国大学報国会全学会鍛錬部スキー班(1941) 北大スキー班班報1．240p.

柳澤秀雄(1914) スキー富士登山記．文武會會報，第72号，105–114.

山とスキーの会(1930) 山とスキー．第99・100号

山と雪の会(1931) 山と雪．第1号

■コラム■
北大スキー部第9シーズンの活動ぶり(ALPENZEITUNG IX JAHREZEIT より)

第九シーズンの計畫　(注：一九二〇年～一九二一年)

スキー研究講讀會
日頃の研究や書物の講讀発表をなし、又は経験や知識の交換をする目的で不定期に開く。

土曜講習會
毎土曜日、丸山(注：円山)方面に於て、初心者の為に開く。

スキー購入取次
價格拾參円五十銭。詳細は掲示によること。

スキー貸出
抽籤による。手数料金貳円。

合同練習
豫科試験終了の翌日より一週間、青山温泉にて。委細掲示。

ジャンプ練習
二期にわたり合同練習をなす。

蝦夷富士登山。参加者を廣く募る。登頂の目的なし。

ムイネシリ岳(注：無意根山)方面。
奥手稲岳方面。新設小屋を根拠として。
(注：資料一の一九二〇年十月の項參照)
以上の三は合宿終了後の休暇中に行ふ。

一月
十六日(日)奥手稲岳。三段山。
二十三日(日)手稲山
三十日(日)第二回駅傳競走。(委細後報)
(注：資料一の一九二〇年一月二十五日の項參照)
二十二日及二十九日の土曜は此が準備に費す。

二月
六日(日)手稲山。(中等學校生を伴う)
十一日、十三日(日)余市岳。毛無山。奥手稲岳の三方面に分れて。
二十日(日)大会。競技を行ふ。
二十七日(日)奥手稲岳。

三月及四月の計畫は未定。三月末又は四月初旬、芦別岳、夕張岳方面にてアルペンクライミングをなす筈なり。
以上の外、臨機に諸種の計畫及會合あるべし。

第九シーズンの幹事とその事務の分擔

平井左門(林二)　主任幹事　松川五郎(豫三)　庶務主任
板倉勝宣(農二)　臨時建設主任　板橋敬一(豫二)　庶務
中野誠一(畜一)　會計主任　内藤克三(豫二)　庶務
網野兼一(豫三)　會計　青柳確郎(豫三)　物品製理主任
廣田戸七郎(豫二)　物品製理　緒方直光(豫二)　物品製理
加納一郎(林一)　記録

2　北海道大学スキー部の二つの流れ

在田　一則（1965 理 地鉱）

2.1　山党（山班）と畑党（競技班）

北大スキー部が創立した頃は、日本にはまだ本格的なスキー競技はなかった。躑躅（つつじ）山のシルバースロープや三角山麓のなまこ山でスキーに熱中した部員たちは、当初はスキーの滑降を享楽していたが、すぐに滑降だけではなく、雪で覆われた札幌近郊の山々を歩き回り自由に滑る楽しみに魅惑され、しだいに更なる純白の高みを目指すようになった。山党（山班）の誕生である。一方では、スキー術を習得するとともに、ジャンプ・ディスタンス・スラロームのような個々の技術向上を追求した部員たちがその能力を競い合う競技スキーを指向して畑党（競技班）が生まれるのも当然であった。スキー滑降だけを楽しむ中間派として“燕麦党”もいたらしい。

2.2　北大スキー部山班の活躍

1914（大正 3）年元旦に厳冬期の富士山、さらに 1917 年 3 月には羊蹄山の登頂に成功したスキー部は、その後、札幌近郊やニセコの山々において次々とスキーによる初登頂を成し遂げた。すなわち、1917 年羊蹄山、1918 年奥手稲山、1919 年イワオヌプリ・チセヌプリ・百松沢山、1920 年喜茂別岳・十勝岳、1921 年昆布岳・無意根山（**写真 1-2-1**、第 4 章 3.1 参照）・余市岳・芦別岳と続いた（**表 1-2-1**）。

スキー部では、北国に特有なスキーという共通の基盤を持ちながらも、目的が異なる山党（山班）と畑党（競技班）が、スキーの究極を求めて互いに切磋琢磨していたわけである。このような山党と畑党（この命名は加納一郎と言われている）の区分は 1920（大正 9）年頃からしだいに明瞭になっていった。競技班は 1920 年 1 月



写真 1-2-1
無意根山頂を望む板倉勝宣。1921 年 1 月の無意根山冬季初登頂の時（北大山岳館所蔵）

に後藤一雄・廣田戸七郎・緒方直光が第 1 回合宿練習（早朝練習、ジャンプ）を 3 週間ほど並河 功第 2 代部長も参加して琴似村で行い、いっぽう、山班は同年 2 月加納一郎・板橋敬一ら 5 名が手稲山雁皮平（旧パラダイスヒュッテ付近）で初めての雪中キャンプを試み、手稲山頂を極めている。3 月 22 日から 1 週間、木原 均・廣田戸七郎・緒方直光・岡見清二・大矢敏範らが小澤（現在は共和村）でジャンプ合宿をしていたときに、六鹿一彦・福地義二郎・西尾 稔・鈴木市五郎・中野誠一・加納一郎・松川五郎は上富良野からザイル・ピッケル・アイゼンを使って十勝岳登頂に成功している（25～27 日）（**写真 1-2-2**）。1922（大正 11）年には、北海道の最高峰旭岳（1 月：板倉勝宣・加納一郎ら 5 名）や黒岳（3 月：板倉勝宣・加納一郎・板橋敬一）の冬季登頂がなされた。このように、スキー部山班の登山活動は日本における冬季登山のパイオニアとしての役割を果たした。ちなみに、板倉らが黒岳に登った 3 月 30 日には、本州では板倉の山仲間である槇 有恒・大島亮吉・松方三郎ら 9 名が槍ヶ岳の冬季初登頂を果たしている。

さらに、1923（大正 12）年からはゾンメルシーを活用した春のスキー登山が縦走形式で盛

表 1-2-1　北大スキー部における初期の冬山登山活動

年月日			山名	メンバーなど	出典
1913	大正 2	2 月 2 日	藻岩山	山頂で第 1 回部員総会	創立拾五年記念
		2 月 11 日	手稲山	稲田昌植・野村龍吉・松本儀一・荒木忠郎・二木春松・吉屋浅雄・柳澤秀雄・角倉邦彦	創立拾五年記念
		12 月 22 日	羊蹄山(第 1 回、6 合目まで)	稲田昌植・松本儀一・荒木忠郎・柳澤秀雄・吉屋浅雄・二木春松・角倉邦彦・秋葉孝平	創立拾五年記念
		12 月 31 日 -1 月 1 日	富士山	荒木忠郎・柳澤秀雄・角倉邦彦・野木国吉(人夫)・小島長次郎(同行者)・伊倉富治郎(同人夫)	創立拾五年記念
1917	大正 6	3 月 25 日 -26 日	羊蹄山(第 3 回、6 合目までスキー、アイゼンで登頂)	大島幸吉・木原　均・岡見聞多・岩崎直砥・高松正信・福地義二郎	創立拾五年記念
1918	大正 7	2 月 10 日	奥手稲山		創立拾五年記念
1919	大正 8	2 月 9 日	イワオヌプリ		創立拾五年記念
		3 月	百松沢山	小林一勝・後藤一男・福地義二郎・西尾　稔	創立拾五年記念
		12 月 30 日	チセヌプリ	福地義二郎・六鹿一彦・西尾　稔・綱野兼一・後藤一雄	創立拾五年記念
1920	大正 9	1 月 3 日	羊蹄山(スキー登頂)	福地義二郎・六鹿一彦・後藤一雄・加納一郎・櫻井芳次郎・西尾　稔・松川五郎・綱野兼一	創立拾五年記念
		1 月 18 日	奥手稲－手稲縦走	小林一勝・木原　均・青柳確郎・廣田戸七郎・並河成資・板倉勝宣・松方三郎	創立拾五年記念
		2 月 10 日	喜茂別岳	福地義二郎・西尾　稔・板倉勝宣・後藤一雄・松川五郎・綱野兼一	創立拾五年記念
		3 月 25-28 日	十勝岳	六鹿一彦・福地義二郎・西尾　稔・鈴木市五郎・中野誠一・加納一郎・松川五郎	創立拾五年記念
		12 月 25 日 -1 月 2 日	ニセコアンヌプリ・チセヌプリ	青山温泉スキー合宿中に登山	創立拾五年記念
1921	大正 10	1 月 3-4 日	昆布岳	板倉勝宣・西尾　稔・加納一郎・中野誠一・松川五郎・綱野兼一・内藤克三・廣田戸七郎・緒方直光・岡部彦庫	創立拾五年記念
		1 月 7-8 日	無意根山	板倉勝宣・西尾　稔・中野誠一・松川五郎・綱野兼一・内藤克三・廣田戸七郎・緒方直光・平井左門	創立拾五年記念
		2 月 12 日	余市岳－朝里岳	平井左門・板倉勝宣・西尾　稔・板橋敬一・青木三郎・南波初太郎	創立拾五年記念
		4 月 3 日	芦別岳	松川五郎ら	創立拾五年記念
1922	大正 11	1 月	喜茂別岳－無意根山	中野誠一・内藤克三・岡村源太郎・相川正義・本田治吉・今田清二(この折、並河岳を命名)	創立拾五年記念
		1 月 8-9 日	旭岳	板倉勝宣・後藤一雄・加納一郎・松川五郎・板橋敬一	創立拾五年記念
		1 月 22 日	佐幌岳	板倉勝宣ほか	北大山岳部部報 1 号
		3 月 30 日	黒岳	板倉勝宣・加納一郎・板橋敬一	創立拾五年記念
1923	大正 12	2 月 12 日	札幌岳	松川五郎・岡村源太郎・綱野兼一・阿部謹吾・小川玄一・内海榮郎・神澤謙三・龍田不二雄・原　泰五郎	創立拾五年記念
		2 月 16 日	烏帽子岳－三段山	松川五郎・岡村源太郎・綱野兼一・阿部謹吾・小川玄一・内海榮郎・神澤謙三・龍田不二雄・原　泰五郎	創立拾五年記念
		2 月 22 日	空沼岳－漁岳	松川五郎・岡村源太郎・阿部謹吾・内海榮郎・田口鎭雄・岩森秀雄	創立拾五年記念
		2 月 23 日	浜益御殿－群別岳－暑寒別岳	佐々木政吉・藤江永次・伊藤秀五郎	創立拾五年記念
		3 月	岩内岳		創立拾五年記念
		3 月	目国内岳		創立拾五年記念
		3 月	空沼岳－狭薄岳	岡村源太郎・森下星一	創立拾五年記念
1924	大正 13	2 月	目国内岳－雷電岳		創立拾五年記念
		5 月	石狩岳	佐々木政吉・藤江永次・伊藤秀五郎・小森五作・田中二郎	創立拾五年記念
1925	大正 14	3 月 26-29 日	北鎭岳・凌雲岳	伊藤秀五郎・佐々木政吉・小森五作・宮澤　精・須藤宣之助・高杉正樹・田中二郎・和辻廣樹	創立拾五年記念
1926	大正 15	2 月	夕張岳		創立拾五年記念



写真 1-2-2
十勝岳冬季初登(1920 年 3 月 27 日)。左より加納一郎、中野誠一、福地義二郎、松川五郎、西尾　稔、鈴木市五郎。六鹿一彦撮影(加納、1986 より)

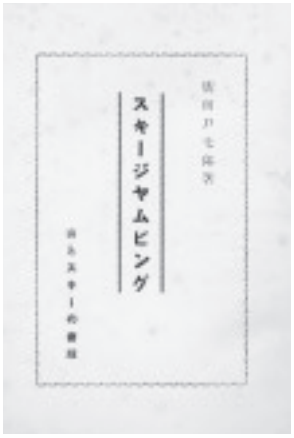


写真 1-2-3
廣田戸七郎著『スキージャムピング』(1923)表紙



写真 1-2-4
『スキー・デイスタンス・レース：岡村源太郎遺稿集』(1928)表紙

んに行われ、定山渓－無意根山－余市岳－小樽、暑寒別山群、層雲峡－忠別岳－石狩岳、吹上温泉－トムラウシ山－松山温泉など、長期の縦走山行がなされた。

2.3　北大スキー部競技班の黄金時代

この頃には日本各地でスキーが盛んに行われるようになり、大日本体育協会は全国的なスキー競技会を計画した。しかし、当時は距離競技もジャンプ競技も統一された競技規則というものがまだなかった。北大スキー部はそれより前からヨーロッパのスキー連盟やスキークラブとの交流があり、各国の競技規則を参考にして、ジャンプ競技は廣田戸七郎(**写真 1-2-3**)らが、また距離競技については岡村源太郎(**写真 1-2-4**)が中心となって競技規則を作成した。

第 1 回の全日本スキー選手権大会は、大日本体育協会の主催により 1923(大正 12)年 2 月 10・11 日に小樽において、樺太(サハリン)・北海道・東北・信越・関東からの選抜選手により 5 地区対抗で開催された。各地区の選手たちのスキー用具はまちまちで、信越・東北・関東はリリエンフェルト式締具、北海道と樺太はフィットフェルト式締具であった。この用具の違いは成績に大きく影響した。また、本州勢はジャンプ台から飛ぶという経験がそれまでほとんどなく、会場の緑ヶ丘に設けられたジャンプ台を見てびっくりするという有様で、北海道と本州勢の差は歴然としていた。ここには、遠藤先生の 2 つの貢献が明確に現れていたと言える。北大スキー部は、1 週間前に行われた北海道予選において、全日本スキー選手権大会を後援した小樽スキー倶楽部が競技ルールについてのスキー部との約束を履行しなかったとして、この第 1 回大会を辞退した。

大日本体育協会主催による全日本スキー選手権大会はその後、高田(新潟県)、大鰐(青森県)と続いた。1925(大正 14)年 2 月の第 3 回大鰐大会のおり、加納一郎・廣田戸七郎らが発起人となって、それまで各地でばらばらに活動していたスキー界の大同団結を目指して、全日本スキー連盟(SAJ)の創設を決めた。各地のスキー倶楽部や高校・大学スキー部の 23 団体がこれに加盟し、連盟本部を東京に置き、事務所を札幌(その後東京)に置くことになった。会長は稲田昌植(北大)、常務理事は小川勝次(早稲田大学)・加納一郎(北大)・廣田戸七郎(北大)であった(**写真 1-2-5**)。規約案は加納一郎が起草した。翌 1926 年、ベルリンに留学していた木原 均(当時京都帝国大学助教授)とフィンランドにいた今泉剛一(後北海道スキー連盟会長)は全日本スキー連盟の依頼によりヘルシンキで行われた国際スキー連盟(FIS：1924 年創立)総会



写真 1-2-5
全日本スキー連盟第 1 回代表者会議(1925 年、東京)。前列中央：稲田昌植、右端：加納一郎、後列右端：廣田戸七郎(小川勝次、1956 より)

に日本代表として出席し、SAJ は FIS に加盟した。当時の FIS 加盟国はヨーロッパ 13 か国とアメリカ・カナダ・日本の 16 か国であった。SAJ は第 4 回豊原(樺太)大会から大日本体育協会に代わって全日本スキー選手権大会を主催した。

1926(大正 15)年には全日本大学専門学校スキー競技連盟(現在の全日本学生スキー連盟)が設立され、1928(昭和 3)年に第 1 回全日本学生スキー選手権大会が大鰐で開催された。北大はジャンプと日本で初めて行われた複合競技で大差をつけて総合優勝し、秩父宮賜杯を獲得した。臨席した秩父宮様はイギリス留学中にスイスで登山やスキーツアーを楽しまれ、特にスキーには強い興味を持たれており、スキー部員に北海道の山やスキーについていろいろ質問された。これが、同年 2 月 21 日の秩父宮様の来道、さらには秩父宮ヒュッテ(空沼小屋)の建設につながった。

日本が初めて参加した 1928(昭和 3)年の第 2 回冬季オリンピック大会(スイス、サンモリッツ)には北大スキー部から廣田戸七郎(監督)と伴　素彦(飛躍)が、1932 年第 3 回冬季オリンピック大会(米国、レークプラシッド)には山田勝巳(複合・飛躍)が出場した。1936 年第 4 回冬季オリンピック大会(ドイツ、ガルミッシュパルテンキルヘン)では廣田戸七郎(団長)と伊黒正次(飛躍)が参加し、伊黒は 74.5m を飛び 7 位となった(**写真 1-2-6**)。この記録は 1956 年第 7 回コルツィナダンペッツォ大会において猪谷千春氏が回転で銀メダルをとるまではスキーでは最高位であった。1933 年にはノルウェーのホルメンコーレン 50 周年記念スキー大会に大野先生と宮村六郎(飛躍)が参加している。



写真 1-2-6
第 4 回冬季オリンピック(ガルミッシュパルテンキルヘン、1936)での伊黒正次のジャンプ(小川勝次、1956 より)

このように競技班の活躍は華々しく、北大スキー部競技班は黄金時代を迎え、国内大会では常に上位を占め、スキー部における競技班の比重は格段に大きくなった。しかし、その後、本州の私立大学スキー部は既成選手の獲得という利を活かして、しだいに北大を凌駕するように

なり、北大スキー部は1941(昭和16)年の第14回全日本学生スキー選手権大会での総合3位を最後に上位入賞はなくなった。

このように、北大スキー部は1920年代から30年代にかけて山班・競技班ともに全盛期であった。

2.4 北大山岳部の誕生

1926年(大正15年)は北大創基50周年であったが、北大のスキーや山関係にとっても重要な年であった。すなわち、北大スキー部は創立15周年であり、北大山岳部が誕生した年でもあった。

山小屋のない時代のスキー登山は主として山麓の造材小屋を根拠地として行われた。しかし、部員たちはヨーロッパのスキー雑誌や案内書に見るようなスキーヒュッテを札幌近郊のスキーツアーの基地として切望していた。1920(大正9)年には奥手稲山に簡易宿泊小屋が作られ、4年ほど付近のツアーに利用されたりした。

部員が渇望していた本格的な山小屋は、1926年スキー部創立15周年記念事業の一つである日本最初のスイス式ヒュッテ(パラダイスヒュッテ)として手稲山に実現した(**写真1-2-7**)。その後、大野先生・山崎先生たちのヒュッテンケッテ構想のもとに1931年までにヘルヴェチアヒュッテ・秩父宮ヒュッテ(空沼小屋)・奥手稲山の家・無意根小屋が次々と建てられた(第3章1.1参照)。

北海道での登山は、山々は半年以上雪に覆われる雪国という特性と北海道には本州に見られるようなアルパイン的山岳がなく、また森林に覆われ登山道がほとんどなかったということもあり、スキーを使った冬山登山から始まったと言える。とは言っても、1923(大正12)年には、登山の奨励と北海道の広大な山岳を広く紹介する目的で、道庁の主導により北海道山岳会が発足し、翌年8月には旭岳と黒岳に石室が建設され、登山道が整備されたりして、夏山登山の機運も高まっていた。

北大では、1920(大正9)年に松川五郎・板橋敬一・加納一郎により恵迪寮旅行部が作られ、1922年には予科桜星会旅行部が発足した。しかし、両者は実質的に一体で、核であった恵迪寮旅行部が北大で初めての夏冬の本格的アルピニズムを志向するグループであった(北海道大学 1980)。恵迪寮旅行部の主力メンバーの多くはスキー部山班にも属していた。

一方、この頃は、前述のように、ジャンプを中心として競技班の活躍が目覚ましく、また山班の中核であった板倉勝宣が1922年に卒業



写真1-2-7
建設中のパラダイスヒュッテ(永野拓也OB所蔵)

し、京都帝国大学に行ったこともあり、スキー部の主流は競技班となっていた。かつてのように一人の部員が競技をやったり登山をやったりということはなくなり、山班と競技班はそれぞれの方向に先鋭的になっていた。さらに、文武会予算の配分問題などもあり、山班と競技班の対立が鮮明になってきていた。

そうした状況のもとで、1926(大正 15)年 3 月には山班・競技班の幹部や OB が協議し、登山と競技の両方面での一層の発展を図るため、山岳部の創部に協力することを決めた。その結果、登山活動は山岳部が行い、スキーは競技班で行うことになり、両者は円満にそれぞれ独立することとなった(大野 1971)。しかし、スキー部創立 15 周年記念事業であった部誌『北海道帝国大学スキー部創立拾五年記念』の刊行(**写真 1-2-8**)や大野先生発案のパラダイスヒュッテの建設などは両部が協力して行うことになった。

このようにして、1926(大正 15)年 11 月に伊藤秀五郎や澤本三郎が中心となり、スキー部山班主力メンバーと恵迪寮旅行部のメンバーによって山岳部が創立された。初代山岳部長は栃内吉彦農学部教授、初代主任幹事は澤本三郎であった。1928(昭和 3)年 2 月には伊藤秀五郎ら 5 名の山岳部員によって、冬季登山としては中央高地の中で最も困難とされていた石狩岳の登頂に成功し、その後北海道におけるアルピニズムの舞台は夏冬ともに中央高地から日高山脈に移った。その主役を担ったのが北大山岳部で、早くも 1929(昭和 4)年 1 月には前年の石狩岳の経験を活かして日高山脈の最高峰幌尻岳(2,053m)と戸蔦別岳(1,959m)に登頂した。



写真 1-2-8
『北海道帝国大学スキー部創立拾五年記念』(1926)表紙

2.5　残った山班の葛藤

スキー部山班をリードしてきた主力メンバーが山岳部に移ったとき、スキー部と山岳部との間には、スキー競技はスキー部が、登山活動は山岳部が行うという了解があった(大野 1971)。しかし、山岳部ができた後にも、全盛時代にあったスキー部には山班は存在した。そこには北国での学生クラブという特殊性があった。

山岳地帯では半年以上雪に覆われスキーを楽しむことができる北国では、先鋭的なアルピニズムとは別に、スキーを最大限に利用したアルピニズムによって山とスキーを楽しむ、あるいは自然と一体となってスキーを楽しむという北国独自の冬のスポーツがあり得るのは必然であり、そこに惹かれてスキー部に入ってくる若者はなくならなかったのである。

残った山班部員の一部には、スラローム技術を生かして回転・滑降・新複合の競技に移るものもいたが、山小屋を管理し、近郊や大雪山系のスキーツアーコースの開拓に取り組むものもいた。その中で、1929(昭和 4)年に宇都宮 嵩らにより、銭函－ヘルヴェチアヒュッテ間、銭函－奥手稲山間、奥手稲山－ヘルヴェチアヒュッテ間、パラダイスヒュッテ－奥手稲山間にスキーツアーのコース指導標が設置され、1932 年には札幌岳や無意根小屋へもコース指導標が設けられた。また、「お誘いの会」が開催され、大学内外のスキー愛好家を近郊の山々へのスキーツアーに誘う試みが行われた。山班部員たちはまた近郊の山小屋を数日かけて回る「小屋巡り」など山班としての新たな道を探った。しかし、全日本学生スキー選手権大会において常に上位を占める競技班全盛のスキー部

(写真 1-2-9)においては、山班への予算配分はほとんどなく、アルピニズムのような明確な目標も描き得ないまま、山班にとっては悩み多い模索の時代となった。アルピニズムを目指す者たちが去ったあと、創部期のスキー部が目指した“スキーの原点”、すなわちスキーという不思議な道具を使って山野を跋渉し、スキーによって高みを目指し、未踏の雪を滑って自然と同化することに憧れる者たちの活動は、競技班の華やかな活躍そして競技優先主義の影となったのである。

そのような状況は、競技班が常勝北大の座を本州の私立大学スキー部に奪われた後も、かつての北大の栄光を取り戻さんと努力する競技優先の考えのもとでは変わらなかった。『北大スキー部部報』(1931)、『北大スキー部部報 2』(1933)、『北大スキー部部報 3』(1935)や『北大スキー班班報 1』(1941)には、山班の活動として、1933(昭和 8)年から数回実施された 3 月の大雪山愛山渓温泉を基地とした山行(写真 1-2-10)のほか、十勝岳・ニセイカウシュッペ山・芦別岳などゾンメルシーによる春山の記録も見られるが、多くはますます盛大となってきたニセコ青山温泉スキー合宿などのスキーツアー(写真 1-2-11)や近郊の山スキー、小屋巡りスキーツアー、お誘いの会などの報告で占められ、かつての本格的なスキー登山の記録は少なくなっている。

以下に掲げる石田太一郎山班部員による『北大スキー班班報 1』(1941)の文章はこのような状況下にある山班部員の悩みが綴られている。少し長いがそのまま引用する。

> 『山班』に對する一考察　　石田太一郎
> 札幌の大學に、北の山へスキーにと、漠然とした憧れを抱いて豫科に入學してから早六年になる。スキーを、又登山を思ふ存分出来るのも或ひは今シーズンが最後かも知れない。六年間のスキー部山班員としての生活、それは限りなく樂しいものではあったが、常に「山班は之で良いのだろうか」と云ふ疑問を胸に祕めつつ送って來た。待ちに待った樂しい青山合宿も終って了へば、あとは三々五々と寄集って手近の山に行く位のもので、そこには山班員或は部員全體としての一つの理想に向って精進する熱と意志とが缺けて居た。此の儘では不可ぬと一人氣をあせりつつも頼る先輩も知らず、又力とする友もなく、今日迄何等為す所なく過して來た。



写真 1-2-9
北大スキー部第 5 回全日本学生スキー選手権大会(1932 年、札幌)優勝祝賀会。32km 継走で早大に敗れたものの、50km 競走、18km 競走、複合、飛躍で 1 位を獲得し圧勝した(大野精七の歩み、1981 より)



写真 1-2-10
愛山渓合宿(1940 年 3 月 17–24 日)にて。ピウケナイ沢を行く、前より佐々木 洋、杉村興作、山口 薫。依田寶男撮影(北大スキー班班報 1、1941 より)



写真 1-2-11
ニセコアンヌプリを目指して。1935 年 1 月(北大スキー部部報 3、1935 より)

三十年の輝かしい歴史を創造し來ったスキー部も、學園新體制に即應して、一先づその幕を閉ぢ、新に報国會鍛練部スキー班なる名の本に、雄々しくその第一歩を踏み出す事となった。之を機會に今年こそはしっかりと纏って、我々の進む可き道を探求し、肩を組みつつ進まうではないか。

かく考へた私は、自らも省みずして、私一個の稚い山スキー觀を諸先輩並びに友の前に發表すべく心を決した。勿論、私としては、之のみが山班の理想であり、唯一の進路であるとは毛頭思って居ない。唯此の拙文がスキーを愛し集うた友の間に「山班の理想とは」「如何にして」等々の疑問を喚起し、之らの問題を相寄って議し、心を合せて進む端緒ともなれば本懐之に過ぐるはない。

最近の山班はその進むべき道を失って戸惑ひして居る様に思はれる。それは第三者としての立場よりの觀方ばかりでなく、殘念乍らその中に一分子である私にも確かにその様な傾向にある事を否定し得ないのだ。どうして現在の様な無氣力な状態に立ち至ったか、或ひはどうすれば之を打開し得られるかを、種々の角度より儉討すべきであると思ふ。

遠く遡って、北大スキー部の誕生した頃には「何を為すべきか」を云う事は、自ら當時の部員の胸の中にはっきりと印象づけられて居たに相違ない。當時眞にスキー界の指導的地位にあった北大スキー部は、スキーとは如何なるものかを知り、その術を究めんと慾し、加へて一般のスキー智識の啓蒙に、その普及に努力したのであった。

文化とは秩序ある復雜化であると云ふ。スキーもその例に洩れず、その技術を競ふべく、競技スキーが行はれ出した。尤も日本に於ては、北欧に於て既に出來上って居たスキー競技を先輩の努力に依って持ち來し得た、と云った方が至當であらう。兎に角、競技となればその目指す所ははっきりして來る。それは戦に勝つ事だ。己に克ち、敵を制する事である。我がスキー部競技班の強固なる團結は今も尚、恐らく將來も益々あの滿々たる闘志を内に貯へつつ全國制覇に向って突進して行くであらう。

飜って山班は？……私は現在の山班に到る迄の道程を次の様に考へて居る。山麓の斜面に於て行はれたスキー術は、競技スキーと分れてから、次第に山へ山へと向って進んで行った。そして劃期的な冬期登山が行はれ、白銀の處女峰は覇氣に燃ゆる先覺者達によって次々に征服されて行ったのだ。此所に於て、山班が次に述べる一つの問題に突き當ったのは寧ろ當然の事と云ひ得るであらう。それは山と云うものの姿があまりに大きくなって、スキーはそれに登る為の一手段に過ぎぬ。一つの道具に過ぎないを思はれるに至った事である。斯く考へた人々は、スキーのみを中心として進むスキー部の行き方には飽き足らず、所謂純粋山黨のみの集りである山岳部を建設して獨立して行き、此所に尚スキー部或ひはスキーそのものに對する愛着を脱し切れず、それを遵奉せんとする人達が殘って從來の山班と云ふものを守り育てて行った。

純粋山黨の去った後の山班、それは何と云ふ淋しいものであったらう。私達は先輩より「同じ山に登るにしても、山岳部はスキーを登山の為の一手段に過ぎぬと見做すに反し、スキー部はスキーを樂しむ為に登山するのである」と教えられた。私は此の言葉に一つの大きな矛盾を感ぜらるを得なかった。勿論、「スキーを樂しむ」と云ふ言葉は非常に廣い意味に解釋すべきであらう。然し乍ら、私達はスキーをはいて山に登る時の氣持をその様に分析して考へ得るものであらうか。此の、強ひて山岳部員の冬山に對する態度と劃然と區別をしようとした事が、却って山スキーと云ふものを狹く規定し、スキー部員の山に對する思慕を束縛して了ったのではないか。スキーを通して山を知ったものに對して、若し「スキーの為の登山に非ざれば意義なし」と云ふ言葉が與へられたならば、それは一つの悲喜劇でなくして何であらう。私達は勿論飽くまでスキーを愛し、それを樂しむ事に對しては、何等疑念を差し挟むものではない。然しそのスキーを通して知ったあの莊厳な山の靈に假令幾分なりとも觸れる事が禁ぜられる理由は毫も存しないと信ずるのである。

私の經驗よりすれば、山班に入り、その中に沒入して來た者は、恐らく以上山當の辿って來た歴史に似た過程を必ず體驗するに違ひない。此の解釋の相違より、其の後も山班の小さい分裂が繰り返されたのであった。

又山岳部と分れた山班には第二の試練を受くべき時が來た。それは全日本學生スキー大會に新に廻轉及び滑降の新複合競技の加へられた事である。當時ジャーナリズムも、又一般の人々も、山班を擁する北大スキー部に大きな期待を持ち、その活躍を注視したのであった。そして又出場選手も大きな抱負と自信とを持って此の試合に望んだに違ひない。然しその結果はどうであったか、山班の考へ且つ行ふ所のスキーと、競技化されたスキーとの差異をまざまざと體驗させられたに止ったのであった。そして此の新しい刺戟に、當時山班の核をなして居た人々、又將來中堅となるべき人々の多くが滑降競技にと馳せ参じ、此所にも山スキー黨は取り殘された形となり、山班を構成するメムバーにはぼつぼつと穴が開いて了った。それのみか山班の今迄獨壇場と考へて居た山地の滑降迄もが、競技化されて來たのであった。之は私一個人のみの考かも知れぬが、若しあの頃山班と云ふものに、山スキーと云ふものに、もう少しの深い基礎があったなら、それ以來現在迄の山班にあの様な無氣力な状態が決して續きはしなかったらうと思ふ。

「その基礎とは」と問われる時、私は之に答えるにはたと行き詰まる。果して現在の山班は基礎として語るべき何物をも持って居ないのであらう

か。山班員各自の胸中には恐らく此の問題が、何等かの形で考へられて居る事であらう。私自身としても後述の如き私見を懐いて居る。然し山班全體として見たときに、その意志がはっきりとして形を以て現れて來ないのだ。故に山班としては、只從來よりの年中行事を習慣的に、半ば本能的に繰り返して居るに過ぎない、と云はれても何等返す言葉と持たないのである。

又山班中にはスキー部員としての自覺のないものが居ると云はれる。之は山班の組織そのものに致命的な缺陷が存じて居るのではないかと考へられる。從來スキー部は青山合宿參加者を全部スキー部員として待遇し、之に部員章を與へ、且つその年度丈部費を取って居た。廣くスキーを愛するものに樂しみを分ち、共に研究して行くと云ふのは、スキー部の一つの重要な使命であるスキー術普及の一手段として尤もな事であらう。然し乍ら、それら大勢のしかも種々雜多な考を持って集って來て居る人々を差別なく部員として待遇する事は聊か理想に走り過ぎて居ると感ぜざると得ないのである。合宿參加者の中には、只ニセコに一度登って見たい、又スキーはやりたいが部員として束縛される事は嫌だと云ふものも少なくない。部員として待遇されるのは良いが、種々の會に出され又仕事をさせられるのは御免だと云ふ蟲のよい不心得者も居ない譯ではなかった。そして次第に部員としての自覺は消え失せ、青山合宿に於て授與される部員章は單なる合宿參加章と見做されるに到ったのであった。然し乍ら此の點に關しては、第二十九シーズンの合宿より、その弊を改め、その意志を確めた上で入部を許可する事になった。

又以上の問題は、スキー部員の先輩名簿に載って居る山班の先輩は、所謂現部員の多數なるに比し、如何に少いかと云う事實を以ても測り知られるであらう。卽ち以前は知らないが、少くも私の知って居る範圍では、モノグラムを有して居ないものは先輩として待遇せられて居ない。所がモノグラムなるものはスキー部の功勞賞とも云ふべきものであるから、實績のないものには與へられない。從っていくら部に對して熱情を持って居たとしても、種々の事情で幹事又は合宿の班長等になって盡力し得なかったものは、卒業と同時にスキー部と全く絶緣狀態となって了ふ様な現狀なのである。私自身としても、モノグラムを授與された時に、やっと憧れて居た北大スキー部員の末席に加はり得た様な氣がした。(中略)

スキー部員の憧れの對稱であるモノグラムを授與されるのは、平均して競技班員は山班員より、一、二年早い。その理由は競技の選手の山班員より苦しい練習もし、實質的にスキー部に對して貢獻する所が大きいからである、と山班の人達も認めて居る。山班員よ、それなら何故競技班員に匹敵し得る研鑽を積まないのだ。何故その様な山班に育て上げ様と努力しないのだ。

之を考へる前にもう一度根本に歸って出發し直す事にしよう。先づ「スキー部とはスキーを愛し、且つ之を樂しまんとする者の集りである。」之が我々部員に與へられた部の定義であった。それが山班にあっては如何なる形で現はれて來るものであらうか。所謂山班と云ふと、非常に極限された意味にとられ勝ちであるが、競技スキー以外のスキーと云ふものについての研究、又はそれらの實行に就いて擔當する部門で、正確に云はんとすれば少々語呂が悪いが、寧ろ一般スキー術とでも稱すべきであらう。從ってその領域は非常に廣い。今極めて疎雜な分け方であるが、各項目に分け、その各々について考へて見る事にしよう。

(後略)

(皇紀二六〇一・九・二四)(著者注：1941 年 9 月 24 日)

文献

石田太一郎(1941)『山班』に對する一考察．北大スキー班班報 1，71-82.

大野精七(1971) 北海道のスキーと共に．383pp.

大野精七伝記編集委員会(1981) 大野精七の歩み．244p.

岡村源太郎(1928) スキー・デイスタンス・レース．岡村源太郎遺稿集．山とスキーの会，329p.

小川勝次(1956) 日本スキー発達史．朋文堂，514p.

加納一郎(1986) 北海道の山と雪．加納一郎著作集 3．教育社，379p.

廣田戸七郎(1923) スキージャムピング．山とスキーの会，175p.

北大スキー部七十年史編集委員会(1982) 北海道大学スキー部七十年史．320p.

北海道大学(1980) 北大百年史　部局史．1426p.

北海道帝国大学報国会全学会鍛錬部スキー班(1941) 北大スキー班班報 1，240p.

北海道帝国大学文武会山岳部(1928) 北大山岳部々報 1．222p.

北海道帝国大学文武会スキー部(1931) 北大スキー部部報(創立貳拾年記念号)．237p.

北海道帝国大学文武会スキー部(1933) 北大スキー部部報 2．225p.

北海道帝国大学文武会スキー部(1935) 北大スキー部部報 3．257p.

3　戦後の北海道大学スキー部 ―山班・競技班の対立と妥協―

在田　一則（1965 理 地鉱）

全日本学生スキー選手権は戦争中の混乱により、1944(昭和 19)年の第 17 回大会は中止となり、その後も第 18 回(1945)大会、19 回(1946)大会は開催されていない。戦後初の第 20 回大会は 1947(昭和 22)年 1 月に 19 校が参加して小樽で開かれた。この大会で北大スキー部は 6 位であった。

戦争中は、スキーなどは白眼視される時代であったが、年末のニセコ青山温泉スキー合宿は山班部員が中心となって、食糧不足などの困難ななかで続けられた。

山班は、パラダイスヒュッテ・空沼小屋・無意根小屋・冷水小屋を管理していたが、部員不足と戦後の荒廃した世情のなかで、山小屋は荒らされ、部員たちは小屋の管理と維持に手一杯であった(**写真 1-3-1**)。その苦労を河合秀雄は『北大 OB スキークラブ會報』第 9 号(1952)の「昭和 26 年度山班報告」で以下のように記している(注：読点を補足)。

> 今シーズンを省みますと、部員が唯でさへ不足であった上に故障者、休部者続出し、加へて経済面の脅威もあり、遺憾ながら活潑な部活動はできませんでしたが、部員一同最善を盡し衰えつつある北大スキー部の復興と光輝ある伝統の維持に努力致しました。
>
> 山小屋も我々部員一同の必死の修繕も甲斐なく、自然の脅威と心なき人々の為に次第に荒らされ、倒壊寸前の小屋も出てくる有様であります。例へば、我々が運んだランプは小屋に 1 週と置いてあったためしはなく、鍋・釜の類はピッケルの尖で無残にも孔をあけられ、小屋の机・椅子・棚の類は何時の間にか焚き附に変化し、天井壁は落書に埋り、ガラスは破れ、誠に山小屋の荒廃は眼を敵うものがあります。平和が回復して既に七年人心も漸く安定して来ました今日巷間に有志を募り、山小屋の再建を考えてもよいのではないでしょうか？
>
> 一方、山班の之からの進み方について、即ち運動部として行くべきか、又単なるリクリエイション的な部として行くべきかが問題で、山班に入部者の少い一原因はこの目的の曖昧な点にあるのではないかとも反省してあります。諸先輩の此の問題に対する御意見が頂けたら幸と思ひます。(後略)



写真 1-3-1
パラダイスヒュッテの修理(1951 年 10 月)。右から鈴木 旭(1952 卒)、遠藤 景(1952 卒)、永野拓也(1953 卒)、出葉浩吉さん(北大営繕)、森本光彦(1952 卒)、仲野(1951 入学、札幌医大へ移行)、河合秀雄(1954 卒)(永野拓也 OB 所蔵)

一方で、戦後の学制改革により、予科は廃止され、北大は旧制(予科 3 年＋本科 3 年)から新制大学(4 年制、1949 年発足)となった。これによりスキー部は選手養成期間が 6 年から 4 年に短縮したこととともに、国立大学への入学の困難さによって高校で活躍した既成選手が北大に入学してこないこともあって、競技班の凋落に拍車がかかり、1948 年(36 シーズン)には 2 部転落の悲哀も味わった。

競技偏重主義や OB 会(北大 OB スキークラブ)からの活動補助金の分配の不均衡などもあり、山班と競技班の対立はしだいに深刻になった。しかし、目的は異なるとは言え、スキーという共通のルーツを持つ山班と競技班には、反目とともに、同志としての相互協力の思いがあり、また全国の大学スキー部の中で唯一の特異

な特徴を有するクラブであるという誇りもあり、複雑な感情が入り混じっていた。

『北大 OB スキークラブ會報』第 6 号(1949)に掲載されている盛合 力主将(競技班)・水澤和久主任(山班)による以下の「38 シーズン計画」にはそのような感情や事情が垣間見られる。

> (前略)前シーズン迄二シーズンの間、互にその協力を欠いてゐた競技・山両班の問題も、本年(1949 年)六月十五日合宿所に於いて之が問題解決を図り、各部の自発的合同論に依り再び此処に往年のスキー部の姿に立ち返り得たことは、其間多々御心配下さいました先輩諸兄の御蔭であり、此の点厚く御礼申し上げます。
>
> 前シーズン二部にて優勝、一部昇格の喜こびを得たとは言へ、スキー部の輝かしき伝統を思ふ時、未だ弱体にして如何にして再建を果たし得るかとの感がするのであります。加ふるに今猶混乱せる経済状態は我々学生々活の上にまで及び之が全員の志気に及ぼす影響ありと雖も山小屋の管理維持と競技制覇を目指して練習に奮斗して居ります。(後略)

このように、競技班・山班の対立も両班の主任の努力と OB の理解、部員たちの協力により克服し、北大スキー部として結束しようとする努力もみられた。そのような中で、スキー部 OB および部員は大野先生を中心に協力し、1949(昭和 24)年 2 月～3 月の高松宮様と三笠宮様の無意根小屋に 2 泊された山行とそれに引き続いたニセコスキーツアー、そして 1950 年 2 月の三笠宮様が空沼小屋に 2 泊された空沼岳と札幌岳のスキー登山の案内をされた。

一方で、山班の中では、山小屋を管理・維持しながら、かつての北大の栄光を取り戻すべく競技班に協力しつつも山班の行き方に苦悶する姿も見られる。43 シーズン(1954.10–1955.9)の山係長(山班責任者)であった佐藤英之は『北大 OB スキークラブ會報』第 10 号(1953・1954)で「山班の希望図」と題して山班の目的、行動方針を以下のように記している(注：読点を補足)。

> 北大に山岳部が出来て目覚しい活躍をする様になってから、スキー部山班の活動はとみに停退している様である。従って山班の性格は曖昧となり、従来まで有難くない名誉会員が相当いたと聞いている。確かにスキー部に於ける競技班と山班の分立には議論の余地があり、山岳部が冬山でも活動している今日、特に山班の存在は云々されざるを得ないが、スキー部に於ける山班の存在は必ずしも無意味なものではないと思う。山岳部では別に又、競技スキーとも別に山岳スキーとしての独自の立場をとり得るからである。しかして、山班の当面の目標は小屋の管理を任されていることからも又現在の実力の点から云っても普通人の極められぬ冬山に挑むことではなくて誰もが行き得る冬山を開拓する事にあるのではなかろうか。つまり自らスキーを楽しむと同時に一般人のスキーツアーに出来得る限りの便宜を与え、引いては若干大げさではあるが、山スキーの普及に努めることである。例えば札幌近郊の冬山の新コースを開拓することが、スキーヒュッテの新設を考えることが、案内役を引受け得る様にコースを熟知すること等、社会関連的意義を有するばかりでなくそれ自体山班にとって有意義なものとなろう。
>
> こうした統一的な目標と行動に於ける計画性組織性がなかったことが山班沈滞の主要原因ではなかったろうか。即ち未開拓の冬山に挑むでもなく、さりとて積極的な目標をもって活動するでもなく全く趣味的、無計画的に冬山を歩くと云った傾向が強過ぎた様に思われる。
>
> 勿論山班とてそのバックボーンは班員の山スキーに対する趣味であるには違いないが、同好者が集まって一つの部を構成している以上、その趣味をより有効に生かすためにも何等かの統一的な目標と計画的組織的行動様式を持たねばならぬと考える。目標と行動なしに独自の立場を確保することは困難であり、従って停滞の域を脱し得ないと同時に曖昧な存在に終始せざるを得ない。このことが競技班にも影響してスキー部全体が沈滞する様な悪循環を恐れる。
>
> 近年の山班沈滞の原因は勿論少い部員にもあったわけであるが、これは山班の主体的な活動が回復されれば或程度解決出来る様に思う。以下僭越ながら主に前シーズンの山班の動きから気のついた点をあげて反省してみよう。
>
> まず第一に、山班はあまりにも合宿に定住し過ぎて札幌近郊の山すら殆ど歩いていないという事である。確かに合宿は競技班にとっては勿論山班にとっても技術向上のために或は山班にとって不可欠なヒュッテンレーベンを培うためにも重要なものである。特に互いに顔も名前も知らぬといった山班では必要欠くべからざるものであった。この点については前シーズンの二回のパラダイス合宿と三月のニセコ合宿、五月の無意根合宿等は非常な効果を収めている事は確かである。しかし合宿の他に二、三のパーティに分れて計画的に近郊の冬山をコンパスと地図で首引きしながらでも歩いてみる必要はなかっただろうか。合宿でのスキー技術の向上も大切ではあるが、少くても山班にとってはそれ以上に実際に種々の冬山を歩いて

コースを覚えること、冬山での教訓を実地の体験から会得することが大切である。前シーズンではこうした面の配慮が足りなかった様に思われる。唯五月に長尾－無意根－中岳－並河－喜茂別を歩いた事はせめてもの収穫と云へるだろう。

次に冬山歩きの装備―云って見れば山班に必要な備品が殆どないという事である。これはスキー部の主体が競技にある関係上止むを得ないとも云えるが、それにしても修理道具一式が唯一の備品ではあまりにもお粗末であり、かかる装備上の制約もファイトある班員の行動を鈍らせる一因ともなっている。スキー、シール等の各人持ちは当然としてもシュラーフ、ザック及びスペアのスキー、シール、ビンディング或はラテルネ、ランタン、コッヘル、ラジウス等は部でそろえたいし、更に欲を云えばきりがないが、雪上テントの一張位は又中級山岳以上に使用する三人パーティ分位のアイゼン、ピッケル、ザイル等も常備したいものだと思う。勿もこうした部としての備品は直接的に財政問題と関連せざるを得ずしかも現在まで何の財政的支へのない山班にとっては殆ど実現不可能と考えられない事もないが、班員の積極的な熱意さえあれば漸時に解決出来よう。例えば部費として各人が僅かのゲルを持ち寄っても一年分が蓄積されれば少しづつでも備品がそろい、あとに残ると云うものである。

冬山では単独行は許されないから特定の個人装備を除いては全て装備はパーティ共有となる。従ってその装備を個人もしくは少数人員だけで用意すると我々学生にはとても望めない経済的負担になると云う事を考えれば相当の人数で少額共同出資して備品をそろへ、適宜使用すると云う事がどれほど経済的であり合理的であるかは説明するまでもなかろう。

又冬山に関する種々の問題―雪崩とか雪中露営とかスキーコース図の作成等―を検討し合う事も山班にとっては必要である。雪中露営と云へば大げさに聞えるかも知れないが、冬山では近郊の山ですら雪中にビバークせねばならぬ事があり、現に奥手稲夕陽沢で吹雪かれ沈没し翌朝晴れたら小屋が目の前にあったと云う笑えぬエピソードすらある。とすれば普段から雪中露営法について研究しておく事は凍死と云う冬山の悲劇を未然に防止する点からも極めて重要な事である。そのために専門図書の購入も必要だがより以上に先輩と話し合う機会を持たねばならない。

更にシーズンオフの山班は人数が少なくて小屋の管理にも手が廻らぬという現状にもよるのだろうが、干上がった河童の如く意気消沈して了うのは無意味この上もない事で冬山に備えて体力を養うために計画的に夏山を歩いたらどうだろうか。夏山歩きはそれ自体として意義あるばかりでなく、夏山で大体の山容とか地形をのみこんで置く事は冬山で大いに役立つ筈である。

以上いささか誇大妄想狂的な希望図に終った嫌いがないでもないが、夢は夢として楽しいものだし、又この希望図も我々の意志一つで実現可能であると思へば益々楽しく、“やろう”というファイトも出て来るから不思議だ。ともあれ新入部員も既に 11 名もいることだから今シーズンからは、統一ある目標と計画的組織的行動によってせめて第一の夢―つまり合宿以外に近郊の冬山を滑り且つ歩き廻ること―位実現したいものだ。

山班はこのような苦悩と試練をへて、43 シーズン(1954.10–1955.9)には 2 月に芦別岳、6 月にはその後恒例となり現在も続く大雪山でのサマースキー合宿を試み、その後は裏大雪のスキー登山や夏の日高山脈などしだいに活動は活発となり、部員数も増えていった。その流れは 47 シーズン(1959 年 1 月)の裏大雪山系縦走につながる。

このような実践の中で、山班は自分たちの自己確立と主体性を求めて、山班の性格や進むべき方向について考え続けた。

文献

水澤和久・盛合 力(1949 年) 37 シーズン・38 シーズン現役報告．北大 OB スキークラブ會報，第 6 号，20–25.
河合秀雄(1952) 昭和 26 年度山班報告．北大 OB スキークラブ會報，第 9 号，12–13.
佐藤英之(1954) 山班の希望．北大 OB スキークラブ會報，第 10 号，18–20



『こなゆき』第 25 号より

4　北大スキー部から山スキー部と競技スキー部の誕生

倉持　寿夫（1965 農 林学）

4.1　山スキー部誕生の前史 ―山班の活動の高揚―

1950 年代、競技班は一時 3 部に転落し低迷する一方、山班は、それまでの競技班の下積みとしてその競技活動を支えるほか、年末のニセコ青山温泉スキー合宿（1952 年～1954 年は中止）や近郊の山小屋巡りスキーツアーに甘んずるという状況から、より高度な山スキーを求めつつあった。しかし、山班と競技班に二分された状態はより深刻化し、それぞれがあたかも異なった部として活動するかのような状況にあった。

この間の様子を、48 シーズン（1959.10–1960.9）主任の大塚正治郎（競技班）は『むいね』4 号で「競技、山の対立時代」と題して次のように記している。

> （前略）対立のきっかけは OB からの寄附金の配分の問題で、春の新入生歓迎会の席上でかなり激論が闘わされました。その後、ゴールデンウィークの無意根合宿では、（中略）同じ小屋の中で競技班と山班が別々の献立で食事をし、練習は完全に別行動をとり、夜は夜で、別々に山の歌を唄うという生活で、ついに共同の楽しいヒュッテンレーベンを送ることが出来ませんでした。（後略）

このような状況のもとで、1960（昭和 35）年夏、一部の山班 OB は山班活動を財政的、精神的に支援するとともに学窓を離れた後もスキーや山を楽しむ団体として「山とスキーの会」を設立した。山班は、競技班とは違いスキー初心者でも受け入れられたこと、特に道外からの学生にとってスキーは魅力であり、部員以外の学生も参加することができたニセコ青山温泉スキー合宿などは北大ならではのユニークな存在であり、当時の自然を好む学生の好みをとらえたことから、しだいに部員数は増え、活動の活発化とともに行動範囲を拡大して、スキー部の「創部の精神」を拠りどころに山スキー活動を強めていった。

かくして、山班は活動の急激な発展期を迎えるのであるが、そこには大きな犠牲が伴った。同好会的性格の残るスキー部山班が山スキー部へと発展する原点として、「裏大雪山系縦走」（1959 年 2 月）、「ペテガリ岳中の川遭難」（1960 年 7 月）、そしてその反省のもとでの再出発ともいえる「幌尻岳集中登山」（1962 年 7 月）と続く一連の流れがあり、それがその後 1963 年 3 月のスキー部分裂、山スキー部と競技スキー部の設立に至る転換期を形成したと言える（伊藤 1991）。

裏大雪山系縦走

（詳細は『むいね』第 2 号、1960 を参照）

この縦走計画は、1956（昭和 31）年 3 月（44 シーズン）に佐藤鐵郎ほか 9 名によって行われた石狩岳・ニペソツ山での卒業山行によって、山班部員たちが裏大雪山系の魅惑的山容に強い印象を受けたことがきっかけとなった。さらに、翌年 6 月（45 シーズン）に山班として 3 回目の 2 班に分かれた大雪山サマースキーにおいて旭岳の南東斜面に現在の“北大スロープ”を発見し、そのベースキャンプから朝夕眺める十勝連峰からトムラウシ山、そして石狩岳・ニペソツ山・ウペペサンケ山と連なる裏大雪の山々に部員たちが魅せられたことや当時の山班の山志向もあり、縦走計画が自然と持ちあがった。1957（昭和 32）年 11 月（46 シーズン）にはウペペサンケ山－ニペソツ山の縦走目的の偵察山行が行われ、その結果、ウペペサンケ山－ユニ石狩岳縦走が計画された。その年の年末から年始にはニペソツ山とユニ石狩岳に入山し、2 月にも

ニペソツ山とウペペサンケ山に入山した。これらの経験を踏まえ、47 シーズンの開始(1958 年 10 月)とともに縦走委員会を立ち上げ、再び縦走計画が練られ、音更山に調査山行を行い、11 月にはニペソツ山の丸山側の偵察も兼ねて大平に食料や燃料の荷揚げを行った。

計画は、縦走本隊(L 小松 弘ほか 3 名)、第 1 サポート隊(L 佐々木利夫ほか 5 名)、第 2 サポート隊(L 田辺顕人ほか 7 名)、第 3 サポート隊(L 高橋 準ほか 5 名)、第 4 サポート隊(L 小島順治ほか 6 名)からなり、期間は 1959(昭和 34)年 1 月 25 日～2 月 7 日であった。三国山への登頂は断念したものの糠平－ウペペサンケ山－ニペソツ山－石狩岳－ユニ石狩岳－三国山手前－十勝三股の約 48km の縦走に成功した(**写真 1-4-1**)。

1 年目部員を含め山班部員のほとんどが参加した縦走が事故もなく無事に成功したことは山スキーの可能性を拡げたという意義とともに、山班に自信を持たせ、競技班の下積み的立場にあり沈滞気味であった山班を蘇らせれるのに十分であった。

ペテガリ岳中の川遭難

(詳細は『むいね』第 3 号、1961 を参照)

山班の総力を挙げた裏大雪山系縦走成功により山班はその活動に自信を持った。幹事会・リーダー会などの運営組織は整備され、急増する山班部員を受け入れるために夏山も含めその行動範囲を広げていった。この活動山域の急激な拡大方針の結果、1954(昭和 29)年から始まった夏の日高の沢への山行は、1959 年(47 シーズン)には 6 パーティが入山し、翌年には南日高に 3 パーティ、北日高に 4 パーティが入山するという計画となった。しかし、山班では過去に大きな遭難の経験がなく、遭難に対する危機意識が欠けていた。その時期は、それよりもより多くの山班部員が山行経験を重ね、より層の厚い山班になることを目指していたと言える。この前のめりの姿勢が 1960(昭和 35)年 7 月(48 シーズン)の「ペテガリ岳中の川遭難」という最悪の結果を招いた。技術的にはそれほど困難ではないと思われる箇所で 2 名の犠牲者を出したこの事故は山班に深刻な反省と影響をもたらした(**写真 1-4-2**)。

同パーティのリーダー塘 忠夫は『むいね』第 3 号で以下のように述べている(塘 1961)。

> 簡単な山行から困難な山へと向って行く傾向は、登山者として当然な行き方だと思う。(中略)登山を志す者ならば、当然たどる道であろう。(中略)先人の跡を追いそれをふみ台にして、更に技術を、又新しい道程を求めるならば、私達の前には常に新しい事の開拓への試みがあるはずだ。
>
> この度の私達のアクシデントによって、私達の同輩、及び後輩達が、ただ単に先輩のたどった道のみを歩き、新しい開拓の精神を失う様なことが



写真 1-4-1
裏大雪山系縦走隊(1959 年 2 月 1 日)。右より小松　弘(3)、阿部孝夫(2)、斉藤　貞(2)、中島　巌(2)。バックはニペソツ山南峰。



写真 1-4-2
山下・山室両君の追悼登山。ペテガリ岳 C カールのコルにケルンを建設。前列右から阿部孝夫(OB1)、中村晃忠(4)、小野堅太郎(2)、大和田榮治(3)、後列右から斉藤 貞(OB1)、塘 忠夫(4)、向井成司(OB3)、水谷 寛先生、裏 悦次(2)、安藤忠男(3)。1961 年 7 月 21 日、谷口尚弘(3)撮影

あるとすれば、大変残念な事だし、いかんな事に思う。(中略)どんな事態が起るか想像もつかない程、ある意味では、山は危険な所だろう。それだけの危険を知った上で、それに対処するあらゆる注意と、あらゆる能力をもって当り、そしてこれを克服して行くことこそ真の登山者としての行動であり、本質ではないかと思う。私達のこの度の遭難は、たしかに敗北であった。山に対する勝利や敗北はないけれど、登山者として登山に破れたのだ。

尊い山友達の死を目前にして、生き残ったと云うことは全く心苦しい。恥しい。彼等に、御家族の方々に、又部員諸兄、先輩の方々に対し何と云って良いのかわからない。

しかし、ただ申訳ありませんでしたでは、故人達も安らかには眠れないだろうし、残された私達も進歩がない。私はあの時の責任者の一人として、遭難の時の模様を記し、今となってはこれのみしか出来なくなってしまった、後へ続く者への戒としたい。

また、当時の山班長阿部孝夫は同誌の中で「登山する態度(反省として)」と題して以下のように述べている(阿部 1961)。

(前略)事故に至る多くの要因を考えて見ると、その責任の過半は、山班の活動にあづかつた我々にあらねばならなかった。

ここ数年来、山班の活動は急激に活発になったが、それに伴い事故も多く、このままではいけないと危倶しながら、特別の手段を取ることができなかった。そこに重大な過失があったのである。(中略)

登山に於ける事故が社会的に、又個人にとって、如何に重大なるものかを考え、そこから再出発しようと思う。(中略)

遭難の意味するものが、単に社会的不名誉に与るとか、自然に対する敗北であると決めつけて済ますことができるであろうか。(中略)

登山するものが自明のこととして、遭難は倫理上許されないこと、しかも、社会に対して一つの罪を犯すことである。登山すること自体に事故を引き起さないと云うことが、予め含まれた義務であることを、はっきり意識すべきである。

実際に全く安全な登山や、スキーをする事がどんなに困難であるか、いや可能なのか、何とかしてこの解決を得なければならない。山班だけに限って見ても、わずか二年前に、高倉君を失いその後も、大事には至らなかったけれども、数々のアクシデントを引き起した。そうして此の度の大きな犠牲が続いた。

(中略)もし、実際に起ったアクシデントが、避け得る余地のないものであったら、登山やスキーは極めて危険なものであって、猶予の余地は無い。どうして、我々が後に続く人達にこれ程までに危険な行為を奨めていくことができよう。山班の発展などあり得ない事だ。

しかし、我々の経験したアクシデントには、多くの点で、しかも安全の為に、僅かな努力が払われていたら、避け得たものと思う。登山する態度を一層真剣に考え、慎重な行動をしていくなら、事故は避け得るのである。

そこで、我々のなすべきことは、自然の中で遭遇する全ゆる困難を克服する能力を養うことだ。(中略)技術的に、緒神的に精進の道は遠く、深いに違いない。

しかし、山に行き、スキーをする為には、必ず身につけていかねばならない。それらはあくまで変化する自然に適合する力である。これらのことに各個人が努力した上に、班員相互の力によって、更に確実なものにしていくことができる様に、責任ある合理的な活動を考えていくのが、団体としての使命であろう。

最後に、しかし重要なこととして、立派に準備ができたら、それで全くアクシデントは避け得るかと云う事だ。(中略)危険そのものは、今後も変りなく存在する。無論、山に行かなければ、その限りで危険は無い。だが単に危険があるからと云って、我々の心はじっとして静安を持することはできないし、意味の無いことである。むしろ、時として自然が波乱に満ちたところであり、あくまでも厳しいから、我々は、そこへ行きたいと思うのである。

以上は、当時4年目(阿部)、3年目(塘)であったスキー部山班のリーダーたちの後輩に伝えたい貴重なメッセージである。

南日高入山禁止

スキー部山班は、1960年7月(48シーズン)のペテガリ岳中の川遭難の後、その遭難が実力過信などによるものとの反省から、また対社会的な反省の意思表示の意味からも、北日高山脈に比べて技術的、精神的にレベルの高い南日高山脈への入山を自粛することを決定した。この決定での過程では、スキー部山班においての夏山とは何かという議論があった。スキー部山班として冬山に行く限りは、山での総合的な技術を習得するために、また山というものを知るためにも、夏山でのレベルアップは必要である。特に日高という未開の山域での山行そのものや沢登りは技術的・精神的な総合的山行技術の習

得には欠かせないという認識はあったが、当時のスキー部山班としての夏山には限界があると一致しての結果であった。

なお、この自粛は1966年に山スキー部リーダー会での議論により解除された。

幌尻岳集中登山

（詳細は『むいね』5号、1963参照）

1962年8月（50シーズン）、5パーティ合計24名が別々のルートから幌尻岳七ツ沼カールに集合するという幌尻岳集中登山が、ペテガリ岳中の川遭難における反省の山行による復習という目的で行われた。この計画は、幸い比較的天候にも恵まれ事故もなく完遂され、7月24日午後には全員が七ツ沼に集合でき、楽しいひと時を過ごすことができた（**写真1-4-3**）。この集中登山の成功は、山班に2年前の中の川遭難事故からの立ち直りの契機を与え、2年半後（53シーズン）の富良野岳－ウペペサンケ山縦走への踏み台ともなった。

4.2　山班・競技班の対立からスキー部統一への試み

49シーズン（1960.10-1961.9）を迎え、山班と競技班は互いにまったく没交渉状態となり、両班が分裂するのは時間の問題という状況であった。毎年シーズン前には先輩と現役との交歓会がもたれ、そこは本来山班・競技班の別なく先輩と交歓できる機会であるはずであるが、その当時は、競技班OBが過去の栄光を語り、不振の競技班を激励するという会となっていた。しかし、49シーズンの交歓会では、山班部員から北大スキー部の現状について、「先輩の懐古談が今のスキー部を正しい方向に向けるのに何ら効果がなく、先輩方の考えが変わらない限り、スキー部の分裂も時間の問題である」と忌憚のない意見が述べられた。

このことを契機として、若手OBと現役両班との間に話し合いの場がもたれるようになり、過去の栄光やインカレ優勝を目指す北大スキー部にこだわらず、新しいスキー部の在り方について意見を出し合い、山班・競技班が分裂か統一かを再考することになった。50シーズン（1961.10-1962.9）2月にスキー部円山合宿所で盛合 力OBを囲んで行われた両班の話し合いは、分裂を決定的にするような意見を主張し合う会であったが、長い間没交渉であった両班が顔を合わせて意見を述べ合ったという意味で有意義なものであった。しかし、その後は進展を見ないまま経過した。

一方、山班ではそれまで数年間の山に偏重し



写真1-4-3
1962年幌尻岳集中登山。1962年7月24日、幌尻岳七ツ沼カールにて。在田一則撮影

た活動から、スキーをより重視した活動方針に改めようとする努力がなされ、山に行くには全日本スキー連盟2級合格が前提とされた。このことは、ペテガリ遭難の経験のほか、芦別岳や大雪山での事故など遭難一歩手前のスキー事故が相次いで発生した前シーズンの反省から生まれたものであった。(第8章 2. 1961年4月に山班員に配布された文書「スキー部山班員(特に新入部員)に対して」を参照)

この頃、竹内恒夫OBから、北大スキー部は一般スキー術の向上をめざし、全日本スキー連盟を支えるような役割を目指すべきという提案があった。また、49シーズン(1961年4月)からスキー部長が小川玄一先生から村井延雄先生に代わり、競技班でも競技偏重から脱却する方向への素地が作られつつあった。この年(1961年)の春休みに、山班・競技班の幹部が大挙して上京し、東京におけるOBとの会合が持たれた。この会合においても、現役両班の主張やOBの懐古談的意見などが多く、新たな方向が纏まりがたい状況であったが、当時全日本スキー連盟理事長の伊黒正次OBは「北大スキー部の目的はスキー術の上達こそ最重要事であり、インカレや冬山などは第二番目である」と強調され、このことを北大スキー部のあるべき姿として、スキー部統一への努力を重ねることになった。

村井部長や奈良岡健三・水谷 寛両副部長の協力を得て、幾多の交渉の結果、1961年6月に北大スキー部は統一されることとなり、山班・競技班は形の上では解散し、部の組織を一本化して、主任の主宰する幹部会を部の運営・企画・議案作成などを行う最高執行機関とし、議決機関である部員総会を設置した。部活動の基本として、部員はまず基礎スキー術向上を目指して全日本スキー連盟2級に合格し、これを基礎としてそれぞれの山・競技活動に取り組む方針が定められた。

こうして、北大スキー部は、村井延雄部長および奈良岡健三・水谷 寛両副部長の指導のもと、主任谷口尚弘、主将元谷靖宏ほか8名からなる幹部会および幹事会、リーダー会、トレーナー会の体制で50シーズン(1961.10–1962.9)のスタートを切った。(第8章 3. 1961年10月にスキー部員に配布された文書「北海道大学スキー部部員へ」を参照)

1962年2月スキー部に縁の深い三角山麓の寺口山中腹にシルバーロッジが完成し、また6月には大野精七先生をお迎えして大勢のOB・現役部員で北大スキー部創立50周年記念祝賀会を盛大に行った(**写真1-4-4**)。

なお、山班と競技班の対立と統一の経緯につ



写真1-4-4 北大スキー部創立50周年記念祝賀会。1962年6月23日。
前列左から6番目：大野精七先生、その左：村井延雄スキー部部長、3列目右端：当時のスキー部主任谷口尚弘

いては、第 49 シーズン(1960.10–1961.9)主任であった塘忠夫による「新生スキー部の誕生」(北大スキー部 OB クラブ会報第 17 号、1961)も参照されたい。

4.3　そして分裂―北大山スキー部の誕生―

スキーという共通の基盤を持つが、目標を異にする山班・競技班という 2 つの組織からなるため、多くの先人たちが葛藤・協力・抗争・妥協を積み重ねてきた北大スキー部は、50 シーズン(1961.10–1962.9)から一体となって新生北大スキー部として新たな出発をしたが、わずか 1 年を経ずして破綻してしまうことになる。

以下では、既述と重複するところもあるが、当時渦中にあり、部運営に悩み苦労した 50 シーズンスキー部主任谷口尚弘と 51 シーズン山班主任永野正幸の文章を掲げ、統一とそれに続く分裂の経緯をたどる。

山スキー部～生まれ出る悩み～

谷口尚弘(スキー部 50 シーズン主任)

今から 50 年程前、私は 50 シーズン主任として、本来ならば北大スキー部創立半世紀を経た記念すべき年を大々的に祝う立場にあった。しかし、現実には極めて苦渋に満ちた年となってしまった。そのことを以下に記しておきたい。

【新生スキー部の誕生】

北大スキー部は競技を行う一方、札幌近郊の冬山の新コースを開拓して山スキーの普及に努めることを目標にしていた。少なくとも昭和 20 年代まではこの伝統が続いていたようだ。しかし、この頃、山班は部員数も少なくヒュッテの管理にも支障をきたしていたが、競技班も当然のように山小屋管理に参加していたということである。さらに、体力増強と経験を積むために夏山登山を推奨さえしていた(『北大 OB スキークラブ会報』第 10 号)。つまり、競技班が山班を応援する立場にあり、合宿も一緒に行うなど、協同で部を運営していたのである。

ところが昭和 30 年代に入ると少しずつ様変わりしてきた。私立大学の台頭により相対的に競技班が弱体化し、一方山班はスキー人口の伸びに比例するかのようにその活動が活発化していった。スキー部の財源は OB からの寄付が大きな割合を占め、それは専ら競技班の活動に使われていた。一方、山班の活動も活発になればなるほど活動資金が必要になってくる。そこで、OB 会費の分配や両班の活動のアンバランスなどから、部内で意見が対立するようになっていった。



写真 1-4-5
西野睦夫 OB ほかの指導で行われた JAS スキー技術講習・検定会。多くの山班部員が 1 級・2 級に合格した。1962 年 1 月 3～5 日、寺口山シルバーロッジスロープにて

しかしながら、分裂は避けたいとの意思のもと、部長、OB、現役による数回の話し合いが続けられ、その結果、1961 年 6 月(49 シーズン)に以下の基本方針の下に新生スキー部が誕生した。(第 8 章 3. 1961 年 10 月にスキー部員に配布された文書「北海道大学スキー部部員へ」を参照)

目的：スキーを通じて人間形成をはかることであり、基礎スキーをマスターし、更にスキーに対するオール・ラウンダーになることである。

方針：第 1 段階として基礎スキーの充実のため、全日本スキー連盟の 2 級テストに全員合格すること。次に先輩のたどった栄光あるインカレの成績に近づけ、山スキーの開拓に当たること。

【新生スキー部の実態】

かくして新しく誕生したスキー部は秋季トレーニングも一部ではあったが両班一緒に行ったり、OB 会費集めのための OB 訪問もそれぞれ手分けして行った。年が明けた 1962 年 1 月 3 日～5 日には西野睦夫 OB の指導の下に初めてスキー講習会と検定会を寺口山(シルバーロッジ)で開催した(**写真 1-4-5**)。多くの山班部員は全日本スキー連盟 1 級・2 級に合格し、冬山に望んだ(**写真 1-4-6**)。しかし、競技班はインカレ直前であったことから、大会終了後に講習を受けることになった。

大鰐で開催されたインカレには主任となった私も選手応援や兼松秀吉マネージャーをサポートすべく参加した。しかし、結果は入賞なし、無得点という無残なものであり、選手たちの落胆は大きかった。同年 1 月 26 日～28 日、北大の提唱で初めて道内インカレが開催された。これには山班からも大野、鳴海君等が選手として出場し、また、競技の裏方として多くの山班部員が参加・協力した(**写真 1-4-7**)。

これらの定例行事が終了し、競技班も基礎スキーの講習を受ける段になったとき、今シーズン



写真 1-4-6
正月十勝合宿。1962 年 1 月 10 日、富良野岳にて。前列右から永野正幸(2)、斎藤 貞(OB1)、谷口尚弘(SL、3)、裏 悦次(2)、後列右から小野堅太郎(2)、在田一則(1)、徳田昌生(2)、桜間雄蔵(L、3)、大野陸郎(2)撮影



写真 1-4-7
北大の主唱で開催された第 1 回全道学生スキー選手権大会。1962 年 1 月 26-28 日、札幌市円山総合グラウンドにて。前列左から 3 人目から谷口尚弘主任、村井延雄部長、嵯峨井一弘、一人おいて元谷靖宏主将。

の成績不良から競技班の危機感が高まったのであろう、突然 2 級受講をキャンセルしたい旨申し入れがなされた。これには、さすがの山班部員が怒ったのも当然であろう。

幹部会を招集し、対応について話し合いを行った。幹部会の競技班メンバーは顔をこわばらせて理解を求めた。山班メンバーも話し合い継続と両班は分離・独立すべきとの強硬意見に分かれた。主任としての私はとりあえず 4 年目幹部部員の意見を聞いてみた。当然に競技班の申し入れには憤慨しつつも、「新方針の下に受け継いだ体制を半年もたたずに簡単に壊してよいのか」、「半年間一緒に行ってきた活動が無に帰する。何のための努力だったのか」といった意見が多数を占めた。結局、さらに話し合い、競技班への説得を継続することとした。

ところがこの年の初夏、思いもかけなかった事態が発生した。北大スキー部の活動を紹介するとしてテレビ会社に取材された大雪山サマースキーのフィルムが無断でテレビコマーシャルに使用されるという“テレビコマーシャル事件”が発生したのである。これは当時のアマチュア規定に違反し、今度は競技班が硬化した。私はこの後始末のために上京し、OB の方々に謝罪する一方、今後のスキー部のあり方についても意見を聞いた。多くの先輩方は「とにかく両班仲良くやれ！」ということであった。我々としては、何とか話し合いを続けたかったが、山班 OB や現役部員の中から冷めた目で見られていることを肌で感じてもいた。

上述したように、競技班の部員と接触する機会が多かった幹部会メンバーとそうでない部員の間に温度差が生じるのは致し方ないことである。であるからこそ、時間をかけて融和を図りたかったのであるが、様々な要因からそれも出来ずじまいになってしまった。我々を常にバックアップしてくださっていた村井延雄部長は事件の責任を一人で背負う形で退任された。村井部長には様々な面で心痛をお掛けしてしまったが、後ろ盾を失ったことは本当に大きな痛手であった。

この年、山班は従来単独パーティで行っていた夏の日高山行を、部全体の結束強化と遭難反省の復習を目的に「幌尻岳集中登山」として実施した。(桜間雄蔵「幌尻岳集中登山」:『むいね』第 5 号 1962 参照)これは成功裏に終了し、スキー部内の不協和音に左右されることなく、山班の山に対するレベルを一段と高めることが出来たことは大変うれしいことであった。

かくしてスキー部は 51 シーズンへと引き継がれていった。その後のことは山スキー部創立の記録に譲りたい。

【評価】

歴史にはある流れがある。49 シーズンはその流れを見直し、新しい流れを模索した年であった。50 シーズンは新たな方向の流れを実現しようともがきつつ、流れに竿をさす作業を試みた年であったのかとも思えるのである。現在の目で振り返ってみると、既に大きな流れが出来ていたにも拘わらず、それを無理して方向を変えようとした。競技班にとっては、基礎スキーから出発するという考えは目の前に明確に表れる成績という非情ともいえる現実から、所詮受け入れられなかったのではないかということである。つまり、実態は変えようとしても変えられないほどに流れの力は強くなっていたのではないだろうか。

51 シーズンはもはや流れを変えることはそもそも無理なことに気づき、大きな流れを現実として受けとめ、それを実行した年と位置づけられよう。

しかし、それぞれの時にそれぞれの人が考え、行動した結果が現在につながっている。歴史には栄光だけでなく、苦難のときもある。苦難を乗り越えてこそ、山スキー部の発展があったと評価したい。ただ、現在の姿になるまでに「生まれ出る悩み」があったことを皆で共有したい、それが本稿の目的である。

(2014 年 10 月 1 日記)

以下は、51 シーズン山班主任永野正幸が『山スキー部部報』(1967)に記したスキー部分裂・山スキー部誕生の経過である。

第 50 シーズンにおけるスキー部統一の基盤は、基礎スキーをマスターし、スキーのオールラウンダーになることを目標として出発し、競技や山スキーは基礎スキーをマスターした者、即ち、その目安として全日本スキー連盟の二級合格をもって各人の能力に応じ競技スキー、山スキーへ前進する事であった。これが最低の基本条件であったが、過去のいきさつからしても、これを忠実に実行し運営していくには両班のイデオロギーは確固たる地盤を築いていた為に非常に困難であった。即ち、競技班にしてみれば今更検定の為の練習をやるよりはインカレで一点でも多くとれる様な練習をやりたかっただろうし、山班にしてみれば山に入ってあらゆる雪質で操作でき、しかも冬山を安全に歩ける様な技術の鍛練に力を注ぎたいところであった。ところが競技においてはインカレを目前に控え、芦別の合宿に入り検定を受ける暇もなく、又、一部の受験して落ちた者もインカレに出場した。一方山班においては冬山合宿という貴重な時間を犠牲にしてスキー検定へ多大な時間をさき、その結果として冬山技術の低下という致命的な打撃をこうむった。こういったなかにあって互いの交流がなかった訳でもない。第 50 シーズン(昭和 36 年)が始まってまもなく、山班多年の念願であったロッジ建設が始まり、それには競技の人も少なからず応援に来てくれた。しかし建設に対する熱意と情熱は、山班のそれとは比較にならないものがあったのはいうまでもない。又我々山班も競技の合宿所の石炭運びとか、学内スキー大会等においてたびたび合宿所を訪れ交流は続けられた。特に、同シーズンに北大が中心となって北海道インカレが結成され、その第一回の企画準備に当ったおり、山班からも応援するとともに選手として数名が参加した。

このように統一の努力を重ねたが、部全体としては少しも盛上らず、OB 等の大局的な観点から決定された統一スキー部の根本方針、即ち、基礎スキーのマスターすら批判するものが出始めた。

同シーズンも終ろうとしたころ、東京のあるテレビ局より、大学の有名なクラブの活動状態を放送したいというふれこみでスキー部に依頼があり、全く深くも考えずサマースキーに同行し撮影させたが、それがテレビの画面に表われた時は、ある製薬会社のコマーシャルに使われるという事件となった。この事件がアマチュア規定に問われ、スキー部が半年間の活動停止を強いられたのである。提起された問題は外面的には大きく取上げられ、当時の新聞紙上を賑わし、多くの OB に多大の迷惑をおかけした。内面的には山班から持上った問題で競技班には何の相談もなく行なった事が、競技班に対し大きな打撃を与えた。

こういった状勢のなかで第 51 シーズン(昭和 37 年)を迎え、当然の様に分裂の話しが持ち上った。我々山班としても過去 2 シーズンにわたり統一の為の努力をしてきたが、すべて徒労に終った感じを受け、これから又統一の努力をしていくという事に非常な負担を感じるとともに、競技班も同様な感じをもっていたとみて次の様な分裂の基本方針が決定されたのである。

○北大スキー部の在り方を考慮して統一の方針を打ち出し、事を進めたが、種々の点で衝突し結局失敗に帰した。
○一つの名称のもとに二つの確立された機構が存在する事は不自然であり、サークル活動として非常に不都合な事が多い。
○山と競技の間に共通した場がなくて、しかもお互いに専門化し、同じスキー部でも全然交流がない。
○財政的に問題がある。
○分裂する事に依り、お互いに各々の目的に向って前進できる。

以上の点を確認し、第 51 シーズン(昭和 38 年)3 月北大スキー部は、山スキー部とスキー競技部とに分離独立したのである。

かくして次の様な事を部の趣旨として山スキー部は誕生したのである。即ち「スキーが我国に根をおろしてから 50 有余年、北海道大学スキー部はその支柱として、その進歩に多大の働きをなしてきた。半世紀にわたる北大スキー部の進歩、経験は我々にスキーの発展すべき二つの方向を教え、輝かしい過去をもつ北大スキー部を二分し、それぞれに異なった未来を持たせる事とした。その一方は、同部山班の目標とする山スキーであり、他方は、同部競技班の目的とする競技スキーである。山班はスキー部が初期に目指し、又その全てであった真のスキー、即ちスキーによる山野の跋渉、スキー登山等に依る処女雪との同化、自然への憧れを切望するのである。そして一層山スキーの技術向上、普及、発展に努めるべきであり、自然に親しみ、自然に対する謙虚な態度を養い、自然と人との美しい協調が生み出す恵沢を享受すべくはげむのである。

以上のような、北大スキー部の山班と競技班が分裂し、それぞれ「山スキー部」と「競技スキー部」として新たな部として生まれ変わったことについては、『北大スキー部 OB クラブ会報』第 19 号(1963 年)においても、新生競技スキー部の部長となられた奈良岡健三先生が「巻頭言」のなかで、また最後のスキー部部長村井延雄先生による田口啓作学生部長宛の「部長辞

任報告」のなかで、さらには競技班の大友勘十郎 OB が「現役の近況について」のなかで明記されているので以下に引用する。

巻頭言

奈良岡　健三

過去半世紀にわたり、日本スキー界に輝かしいシュプールを印しつつ綿々と続いてきた“北大スキー部”の名称はなくなって、北大スキー競技部と山スキー部の 2 部が新たに誕生した。そして私は今回はからずも『スキー競技部』長という重責を担うことと相成った。

それは私が希望した訳ではなく、適任であると思われたからでもあるまい。私にその意思があるかないかと問われた訳でもなく、全く“はからずも”そうなってしまったのである。

北大に私が来てから 23 年、その間側面からジッとスキー部を眺め、また純真ひたむきな努力にも拘わらず報われない部員の活動ぶりを見て私は敢えて部長を「引き受けた」のである。30 数年前私も一師範学校生徒としてスキー競技に夢中であった時代北大スキー部と言えば、学生スキー界ばかりでなく、国際檜舞台でも華々しく活躍、幾多の優秀選手を輩出した名門校として憧憬の的であった。（後略）

（北大スキー部 OB クラブ会報第 19 号（1963）より）

学生部長　田口　啓作　殿

体育会スキー部顧問教官
村井　延雄

体育会スキー部顧問教官辞退について

昭和 37 年 7 月 6 日海大学第 479 号にて設立の認可通知がありました頭書団体について同年 8 月 21 日、9 月 12 日の経過報告のように「スキー部合宿訓練撮影問題」がおこり、指導上の責任を痛感しておりました。この問題に対する全日本スキー連盟との間の交渉は一応 11 月 11 日をもって解消し北大スキー部として昭和 37 年度全日本学生スキー競技大会（長野県野沢）及び北海道学生スキー競技大会（札幌）にも出場することができました。

しかしながら、北大スキー部として日本のスキー導入とその後の発展普及に努力した 51 年にわたる歴史的功績にもかかわらず、近年のスキー競技と一般スキー技術の高度な分派的発展に由来する北大スキー部内のスキー訓練に対する異質的感情の対立は、昭和 15 年以来数度の大紛争と反目を続けてきて現在では北大スキー部として統一部のもとに行動することができないとの結論に教官と学生部員の話し合いのもとで到達しました。

前スキー部顧問教官（医学部）小川玄一教授は昭和 36 年度で辞任され、村井教授はその直接の後輩 OB でもありました第 19 期シーズン（昭和 6 年度）主任幹事でもあったので、昭和 36 年度・37 年のスキー部顧問教官を受諾しましたが、その当時の副部長（顧問教官）である教育学部奈良岡健三助教授と理学部水谷寛助教授との話合いの結果統一部として対立紛争のないスキー訓練による人間形成の道を進むことを前提条件として村井教授はスキー部長に就任しました。

しかるに前記「合宿訓練撮影問題」に端を発して多年の対立抗争は再度激化するのみであり、昨冬以来数度の教官と学生幹部の話し合いも和解統一部を形成する結論をえられず、したがって前記問題とスキー部解体（競技スキーと山スキーの新部をつくる）の責任をとり顧問教官を辞退することに副部長と学生たちの了解をえましたので、スキー部長を辞退することを報告します。　（以上）

（北大スキー部 OB クラブ会報第 19 号（1963）より）

現役の近況について

本年 4 月、50 年の歴史をかざった北大スキー部は村井スキー部長立会いのもと、現役部員で協議の結果、新たに、北大スキー競技部、北大山スキー部の二部が体育会の中に誕生することになりました。

なお、詳細については、現役から 4 月に各 O・B 会員宛ご通知したと思いますが、新たなスキー競技部長には奈良岡健三氏、山スキー部長には水谷寛氏がそれぞれ就任しました。

外部に対しては、競技スキー部がインカレなどに参加する際は、他大学との関係もあり、北大スキー部となりますが、学内には実質、従来の北大スキー部の名はなくなった訳です。（後略）

（文責　大友勘十郎）

（北大スキー部 OB クラブ会報第 19 号（1963）より）

このように、北大スキー部は解散し、新しい「山スキー部」と「競技スキー部」が誕生したわけであるが、二つの部はともに北大スキー部の創部の精神と歴史・伝統を引き継ぎ、それぞれの目標に向かって現在も精一杯活動している。

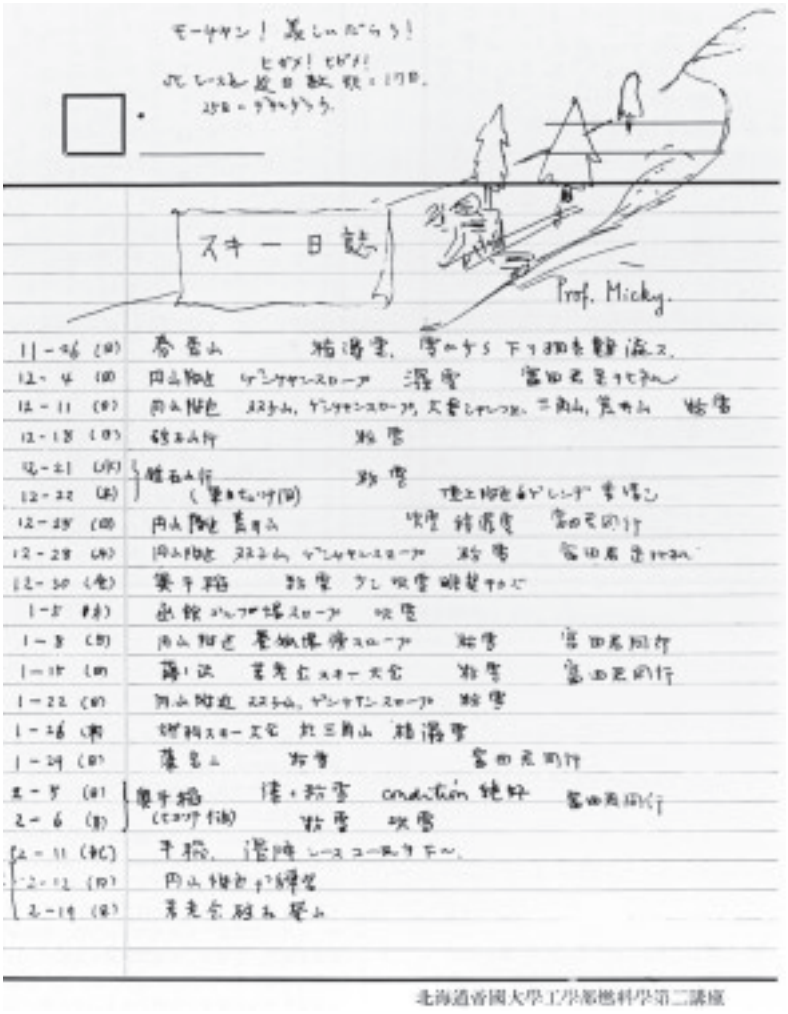
文献

阿部孝夫(1961) 登山する態度(反省として). むいね, 第3号, 7–9.
伊藤健次(1991) 30年代の山行. 北大山とスキーの会会報, 第15号, 9–10.
大塚正治郎(1962) 競技、山の対立時代. むいね, 第4号, 4–6.
大友勘十郎(1963) 現役の近況について. 北大スキー部OBクラブ会報, 第19号, 4.
桜間雄蔵・谷口尚弘(1963) 幌尻岳集中登山. むいね, 第5号, 1–8.
塘 忠夫(1961) 遭難報告. むいね, 第3号, 1–3.
塘 忠夫(1961) 新生スキー部の誕生. 北大スキー部OBクラブ会報, 第17号, 15–17.
永野正幸(1967) 北大山スキー部誕生. 北大山スキー部部報, 35–36.
奈良岡健三(1963) 巻頭言. 北大スキー部OBクラブ会報, 第19号, 1–2.
北大スキー部山班(1960) 裏大雪山系縦走報告. むいね, 第2号, 1–17.
北大スキー部山班(1961) ペテガリ岳遭難報告. むいね, 第3号, 1–26.
北大スキー部山班(1963) 幌尻岳集中登山. むいね, 第5号, 1–8.
村井延雄(1963) 部長辞任報告. 北大スキー部OBクラブ会報, 第19号, 3–4.

■コラム■
あるスキー愛好家のスキー日誌

故大塚　博北大名誉教授(元工学部長)が東京の友人に送った1939年1月前後のスキー記録。文中にある「若老会」は大野精七先生の発案で作られた北大教職員のスキークラブ。スキー部山班員もリーダーを務めた。

『博道　大塚　博先生追悼誌』(1985)より



北海道帝國大學工學部應用學第二講座

5　北海道大学山スキー部の活動 ―北大スキー部精神を継承して―

本節では、北大スキー部の山班と競技班がそれぞれ山スキー部および競技スキー部として分離・独立した51シーズン(1962.10–1963.9)から山スキー部として50周年を迎えた100シーズン(2011.10–2012.9)までの山スキー部の活動を、主に山スキー部部誌『むいね』などの記録をもとに述べる。

その期間を便宜上、第Ⅰ期(51～62シーズン)、第Ⅱ期(63～74シーズン)、第Ⅲ期(75～86シーズン)、第Ⅳ期(87～100シーズン)に分けて記述する。具体的な山行記録などは、第8章 1. を参考されたい。

なお、記述の体裁は筆者により異なることをお断りしておく。

5.1　第Ⅰ期(第51～62シーズン)(1963年3月–1974年9月)

岩瀬　隆則（1976 理 地鉱）

新生山スキー部は51シーズン半ば(1963年3月)に発足した。山スキー部初代部長は水谷寛先生であった。新たに部則を制定し、部の運営に当たる幹事会と山行の審議を行うリーダー会との体制となった(第8章 4. 北海道大学体育会山スキー部規約を参照)。54シーズンからは、幹事会とリーダー会を一体とし、新たなリーダー会が両者の機能を有して部の運営をすることになった。

53シーズンの富良野岳－ウペペサンケ山縦走成功の後、スキー部山班・山スキー部の部報作成の機運が高まり、1965年12月に部報委員会が発足し、『北大山スキー部部報』が1967年に発行された。

積雪期の記録

47シーズンの裏大雪山系縦走(1959年1月25日～2月11日)の後、スキー部山班では、次は表大雪－裏大雪縦走という暗黙の共通認識があった。49シーズンのリーダー会記録には、「表大雪より裏大雪への縦走を最終的目標とする」とある。その後、スキー部内部での山班と競技班の融和およびその後の分裂があり、部全体は大きく揺さぶられたが、縦走への思いは揺るがなかった。しかし、縦走コースは山スキー部発足とともに十勝連峰～裏大雪に移った。

52シーズン(1963.10–1964.9)の新幹事会は新生山スキー部誕生の高揚のなかで、「過去の成果を集大成して、新しい山スキー部の出発の礎を築く」ことをテーマとして、次シーズンにおける「富良野岳－ウペペサンケ山縦走」を決定した。この計画に沿って、11月には6パーティが富良野岳からウペペサンケ山までの縦走コースの予察山行を行い、正月合宿では、縦走コース偵察を目的に、8パーティが十勝三股岩間温泉を中心に石狩岳・ニペソツ山への放射状登山を実施した。また、2月にも裏大雪やトムラウシ山周辺に入山し、準備を進めた。

縦走準備の合間には、2月に戸蔦別岳－幌尻岳へスキー登山がおこなわれた(**写真 1-5-1**)。

53シーズン開始(1964年10月)とともに、部運営とは別に縦走委員会が設置され、縦走隊(4名)およびサポート隊(5隊)の構成を決定する



写真 1-5-1
幌尻岳を目指して（1964 年 2 月 29 日～3 月 5 日）
在田一則撮影

など具体的準備が進んだ。その間、東京で OB への説明と協力要請をおこない、種々意見をいただいた。さらに、山行中になしうる科学的研究をサブテーマとし、大雪山塊の冬山気象、唾液による疲労度測定が企画された。縦走隊とサポート隊 I は 1964 年 12 月 19 日に出発した。縦走隊はその後 4 隊のサポートを受けて予定コースを無事に走破して翌年 1 月 13 日に糠平温泉に下山し、部を挙げての縦走は成功をおさめた。詳細な記録は『むいね』7 号（1966）にまとめられている。

54 シーズン（1965.10–1966.9）の正月山行は 4 パーティが大雪山ピウケナイ沢にベースキャンプを置いて旭岳・比布岳・黒岳へ放射状登山をおこなった。2～3 月にはニセイチャロマップ岳・知床・利尻岳で山行がおこなわれた。

55 シーズン（1966.10–1967.9）の正月は、「真の冬山を知り、部の一層の飛躍を図る」ことを目的に、トムラウシ山集中登山が企画され、成功した。4 パーティの計画は、白雲岳からのルート、オプタテシケ山からのルート、ヌタプヤンベツ川からのルート、カウンナイ沢からのルートであった。その後、ピウケナイ沢・美瑛岳・暑寒別岳・羅臼岳などに入山した。4 月には北アルプスの薬師岳に向かったパーティもあった。

56 シーズン（1967.10–1968.9）は 1 年目と 2 年目に分けて正月合宿が計画された。1 年目は 23 人が 4 班編成で十勝岳に入山した。2 年目は 3 パーティがニペソツ山－ウペペサンケ山、石狩岳－音更山、富良野岳－十勝岳にむかった。1～3 月にはいくつかの山行が中央高地や近郊でおこなわれた。1 月末に西尾根からペテガリ岳に登頂した隊があった。

57 シーズン（1968.10–1969.9）は部員の構成人数がいちじるしくアンバランスで、4 年目 6 人、3 年目 6 人、2 年目 15 人、1 年目 20 人という状況だった。そこで、旭岳に 2 年目 2 パーティ、白雲岳に 1 年目 2 パーティ、近郊（余市岳・無意根山）に 1 年目 2 パーティ、十勝岳と裏大雪にそれぞれ単独パーティとして入山した。

58～60 シーズンの正月は、1 年目は十勝岳あるいは無意根山で合宿、2 年目は大雪山方面に個人山行形態での入山というパターンであった。59 シーズンは南アルプスに入山したパーティがあったが、スキーには適さないという結論だった。

1961 年 6 月に青山温泉不老閣が焼失したため、50 シーズンからは年末の「ニセコ合宿」は急造のプレハブ宿舎で始めたが、合宿途中で近くの昆布温泉富士屋旅館に移った。この「ニセコ合宿」は 53 シーズンには縦走計画のため中止となったが、翌年には再開された。しかし、57 シーズンの極端な雪不足による中止のあと、おこなわれなくなった。これには、ニセコ全体のスキー場化という状況もあった。しかし、3 月の 2 年目を対象としたアンヌプリから新見温泉へスキーツアー「ニセコ強化合宿」が 6 パーティでおこなわれ、その後も継続している。

54 シーズン 11 月には「旭岳初滑り」が 30 名でおこなわれ、その後規模には変化があるものの毎年継続されている。3 月におこなわれる「春山」は、卒業山行という性格を持つようになり、各シーズンそれぞれに個性的な山行が企画

された。日高の山々に入山したパーティもいくつかある。

ゴールデンウィークの連休には、各年、多くの山行が計画され、狩場山・暑寒別岳・積丹岳などのスキー適地にシュプールが残されている。

スキー部山班では 1955 年 7 月に大雪山で初めてサマースキーをおこなったようであるが、6 月北大祭の休暇を利用した旭岳南斜面の “北大スロープ” 周辺でのサマースキーは、44 シーズンからである(**写真 1-5-2**)。

札幌近郊のスキーツアーコースには、毎年 1～3 月の時期に多くの山行が計画された。

無積雪期の記録

日高山脈については、南日高の山行は 1960 年 8 月のペテガリ岳中の川上二股での遭難事故のあと自粛ということで禁止されていたが、52 シーズンの 5 月に水谷部長・在札 OB・現役幹部による話し合いがおこなわれ、南日高入山禁止規制は解除となった。それ以降、南日高を含め、日高山脈の多くの頂に登頂記録が残された(**写真 1-5-3**)。57 シーズンには 7～10 月にかけて 10 パーティが日高に入山した。夏山から秋山のシーズンには、日高のほかに、大雪山・芦別岳・夕張岳・札幌近郊など多くの記録が残されている。

旭岳雪崩事故とその後(第 61～64 シーズン)

61 シーズン(1972.10-1973.9)早々の 1972 年 11 月 21 日、初滑りという目的で旭岳に入山した後藤パーティが旭岳盤の沢で雪崩に遭遇し、6 人パーティのうち 5 人が亡くなった。事故の衝撃はあまりにも大きく、61 シーズンの冬は一切の活動が停止された。シーズン後期になり、ゴールデンウィークに無意根小屋を拠点に合宿がおこなわれた。その後、サマースキー・夏山と部活動は進み、徐々に状況が回復していくように思われた。しかし、8 月に札内岳記念沢で転落事故があり、ヘリコプターに救助されるという事態が生じた。幸い転落者は軽傷ですんだが、1 年以内に 2 度の事故があった影響は部内にとどまらず、体育会からも警告される状況となった。



写真 1-5-2
サマースキー“北大スロープ”のキャンプにて(1961 年 6 月 14 日～19 日)。各自ただ 1 本の缶ビールを飲むタイミングが問題だった。左より水谷　寛先生、若林隆三(4)、阿部孝夫(5)、小野堅太郎(2)、高橋俊二(1)、中村晃忠(4)、塘　忠夫(4)、横山英正(4)、裏　悦次(2)、在田一則(1)。倉持寿夫(2)撮影



写真 1-5-3
南日高 1839 峰頂上にて(1965 年 7 月 24 日)。左：宮崎　敏(3)、右：山崎雅昭(2)。在田一則(OB1)撮影

62 シーズン(1973.10-1974.9)の冬は、正月に全員参加のニセコ合宿をおこなった。1 月、2 月は札幌近郊のスキーツアーに限って活動し、3 月の山行も個人山行をとりやめ、十勝岳で全員合宿をおこなった。62 シーズン後期になると、ゴールデンウィークに狩場山・美瑛岳・夕張岳など意欲的な個人山行がとりくまれるようになった。6 月のサマースキーは例年のようにおこなわれた。近郊の沢登りをへて夏山をむかえ、大雪・日高などに多くの山行がおこなわれた。

5.2.1　第Ⅱ期前半（第 63〜69 シーズン）（1974 年 10 月 −1981 年 9 月）

関　英郎（1982 経 経済）

この期間 7 年間を対象とする『むいね』は 15 号から 20 号の 5 冊である（15 号は 62・62 シーズンの、また 20 号は 68・69 シーズンの合併号）。

1. 回復から安定へ

61 シーズンの旭岳盤の沢雪崩遭難（1972 年 11 月）および札内岳記念沢転落事故（1973 年 8 月）の反省としての活動縮小から、回復、安定、発展ということが繰り返し言われた時期である。これは『むいね』各号に載った各代の主任の活動報告や展望に必ずこのように言及された。

具体的には事故直後の山行停止、山域限定、合宿形態の限定などの時期をへて、それらの制限を撤廃し、広い山域に単独パーティでの入山をおこなったのである。若者の復元力を示すものであり、4 年でメンバーが入れ替わる学生部活動の自然な現象でもあろう。64 シーズン半ば（1976 年 3 月）には旭岳盤の沢雪崩遭難時に現役であった部員はすべて卒部し、翌 65 シーズンには記念沢事故の当事者たちも卒部していったのである。

山域としては、夏の日高などの沢、積雪期のカール滑り、中央高地の長期あるいは長距離を駆けるものなどであり、また知床や利尻などの道内各地から、八甲田・北アルプス、さらには白山にまで及ぶものであった。これらは遭難以前の先輩部員たちの志向を踏襲するものでもあったが、新しい部員たちの個々の夢を実現するものでもあった。

遭難直後に減少した部員数もすぐに回復している。一時は 25 名まで減った数がすぐに 35 名ほどに戻り維持されたのである。本州の大学では若者の山岳部離れが言われ、部員集めに苦労していた時代であったが、アウトドア志向の強い北大にあっては、山やスキー関係のサークルが数多くあるにもかかわらず、どこも新入部員は多かったのである。65 シーズン（1977 年 4 月）には新人歓迎に 18 名もの新入生が集まり、水谷部長が「数が質を生むこともある」と述べられたなどということもあった。

女性部員は期間を通じてゼロであった。希望者は幾人かいたようであるが、やんわりと断っていたのが実情と思われる。

部の活動運営は、主任（任期：3 年目 10 月から 4 年目 9 月まで）のもとに週 1 回の上級生会議（3 年目、4 年目部員全員参加）、例会（全部員参加）によって審議・決定されるという形態を継承し、山行審議は上級生会議とリーダー会の 2 回審議とし、最終審議はリーダー会議長（任期は主任と同じ）の主導で行われた。なお、リーダー会は 65 シーズンに上級生部員全員参加から 3、4 年目それぞれ 3、4 名のリーダー会員による審議に変更されている。

部員の年間活動

この頃の部員の 4 年間の平均的活動の概要は下記のようなものである。

1 年目：

4 月　新人歓迎　無意根小屋 1 泊
　　GW　無意根合宿　1 週間
5 月　春の小屋祭り　無意根小屋 1 泊
6 月　初旬（北大祭時）　サマースキー　旭岳北大スロープテント泊 1 週間
6 月　白水川　沢登り訓練 1 泊
7・8 月　夏山　尾根、沢それぞれ 1 週間程度（沢登りは足慣らしの 1・2 泊のプレ山行あり）
10 月 秋山　上級生リーダーの個人山行参加
11 月 初旬　初滑り合宿　旭岳
12 月 初旬　新人合宿　無意根小屋 1 週間
1 月　大雪山などパーティごとの 1 週間程度
2 月　ロッジ祭り　シルバーロッジ 1 泊

3月　初旬　ニセコ強化合宿2泊　上級生オブザーバーのもと初めての計画、地図読み
3月　春山　大雪、日高など4年目の卒業山行1週間程度

2年目：
1年目との違いはGW、日高、大雪などパーティごとの山行1週間程度
12月初旬　新人合宿　十勝　テント1週間
場合によってはサブリーダー(山行内容によってはリーダー)をつとめる。

3年目・4年目：
上記合宿、個人山行のリーダーやサブリーダーとして立案、現場指揮を執る。

サマースキーは3年目がリーダーを務め、4年目は希望者が別途パーティを出していた。

なお、サマースキーのベースキャンプは当初は従来どおり旭岳南斜面(北大スロープ)の下のハイマツ群生地面にテントを張っていたが、環境保護のため雪上にサイトが変更された。

その他、無意根小屋の週末や夏休みの完全小屋管理の小屋番、小樽赤岩での岩登り訓練、個人発案の山行への参加などがあり、部員は忙しい日々をおくっていた。

学業の方は比較的寛容であった時代であったが、それでも部員の留年率は非常に高かった。大学当局が学部進級必要単位を増やしたり、留年を1回に制限したりと管理強化を図り出したのがこの頃である。部室の移転などもその一環である。

旭岳盤の沢遭難事故からの回復期といえども、事故がなかったわけではない。沢での滑落(1976年8月、2件)、無意根山での雪崩(1977年11月)、日高の沢での落石(1979年8月)など、少なくない事例が記録されている。死者こそ出なかったものの、北アルプスでの高山病(1981年8月)、無意根山での立ち木激突事故(1979年5月)などでは部員やOB子息が重症・重傷を負っている。事故のたびに総括・反省や報告書作成などの対応がなされているものの再発を完全に防ぐには至っていない。

2. イベントおよび行事

山スキー部創設にご尽力いただき、初代部長としてお世話いただいた水谷 寛先生が1977年3月に北大教授退官にともない山スキー部部長も退任された。記念ニセコスキー行(1977年4月)や退官記念パーティ(同5月)には現役部員およびOBが多数参集し、感謝の意を表した。

後任には中島 巖OBが就任した。山スキー部創部前史時代に現役部員として活躍し、当時の一大イベントである1959年の裏大雪山系縦走山行のメンバーでもあった中島OBが北大の教官として部長に就任したことは、いよいよ部の伝統が積み重ねられていることを実感させるものであった。

1977年10月にはその建設にOBとともに現役部員も大いに協力した大滝村の水谷ロッジが完成し、人々の語らいの場となり、現役もしばしば利用した。

1976年6月には長年の懸案であったシルバーロッジの改修がおこなわれた。壁内の断熱材をおがくずからグラスウールへ入れ替え・ドアの交換・窓の増設・キッチンの床の張り替えなどが行われ、住む部員の居住性も大幅に改善された。

スキー部山班がかつておこなった「お誘いの会」にならって、北大生や一般市民を冬の無意根小屋にお誘いし、山スキーとヒュッテンレーベンをともに楽しむという「ムイネツアー」は1976年1月に第1回が行われ、1978年以降毎年催された。その様子はNHKや朝日新聞などのメディアにも紹介された。

スキーの日本伝来当時の一本杖スキーの姿を再現しようという北海道新聞の企画で部員が明治時代の服装でスキーをして見せるということもあった。部員たちはシルバーロッジ横のスロープ(現在はマンションが建っている)でスキー練習ができた。ロッジの裏山(スキー部創成期の部員たちが練習した“ツツジ山”辺り)には小さな(が、新入生には恐ろしい)ジャンプ台の跡があり、ロッジ祭りではそこでジャンプ競

技をおこない、尾根を滑り降る滑降競技もおこなった。

また、雪崩学の権威である若林隆三 OB を講師に雪崩遭難救助訓練を手稲山や無意根小屋などで 1973 年 12 月を最初に（第 2 章 3.3 参照）何回かおこなっている。当時はまだゾンデ棒は小屋などにあるのみで、各自が携行するような折り畳み式ゾンデ棒やスコップはまだ普及しておらず、ビーコンもなく、雪崩ヒモを、その実効性を疑いつつも携行するのみであった。

3. 時代背景

日本経済は 1950 年代から続いた高度成長時代を終え、1971 年のいわゆるニクソン・ショック、1973 年の第 1 次オイルショックをへて、低成長時代に入っていく。

山スキー部第Ⅰ期（1963–1974 年）の部員たちが学生時代をまさに高度成長期のなかで過ごしたの対し、第Ⅱ期に入部した者たちは、高度成長期に生まれ育ちながら大学進学時にはそれが終わっていた。さらには 1979 年にはイラン革命、第 2 次オイルショックと続き、今日のエネルギー問題やイスラム・西欧対立問題などが鮮明になってくるのだが、もちろん当時の学生の多くはそんなことを深刻に考えてはいなかった。

すでに豊かになっていた日本において、OB はもとより学生も気軽に海外旅行に行ったり、車を所有するようになっており、まだこれからも年々豊かになり、平和は永遠に続くと誰もが無意識に思っていた時代ではないだろうか。もっとも、北海道という土地柄かあるいは山スキー部の風土か、部員には質実純朴な人物が多く、一冬同じ下着を着ていたなどという者がまだごく普通にいたのも事実である。

しかし、世の中が寛容さを失い始めていたのもこの頃である。前述の北大当局による学生管理の強化や国立大学授業料の値上げなどがこの頃から始まっている。ちなみに 1975 年まで 36,000 円だった年間授業料が 1976 年に 96,000 円へ、さらに 1978 年には 144,000 円に高騰している（1972 年には 12,000 円であった）。

1960 年代のレジャーブームから 1972 年の札幌冬季オリンピックをへてスキーブームは続いており、各地にスキー場が新設されていた頃でもある。札幌近郊の山スキーエリアであった朝里岳に札幌国際スキー場ができたのは 1978 年である。（このスキーブームのピークはまだまだ先であり、1993 年にはスキー人口 1,600 万人という驚くべき数字が記録されている）。

自然回帰ということが説かれた頃でもあり、前記のムイネツアーもその傾向にあと押しされたものである。もっとも、一般市民の間で流行ったのはいわゆるノルディックスキー板での歩くスキーであり、アルペンスキー板を使用したバックカントリースキーが流行するのは 2000 年代に入り、スノーボーダーが新雪を求めてスキー場を飛び出したのと並行していると思われる。

5.2.2　第Ⅱ期後半（第 70〜74 シーズン）（1981 年 10 月 –1986 年 9 月）

川端　康弘（1984 文 行動）
青黄　靖（1985 工 資源）

70 シーズン後期（1982.6）に、部長は中島巌 OB から吉岡義雄助教授（文学部ドイツ語、東京大学スキー山岳部 OB）に変わった。

この間の年間スケジュールは各シーズンほぼ同じであり、主な行事をシーズンの最初から並べてみると、10〜11 月の秋山、11 月後半の初滑り（旭岳）、12 月前半の新人合宿（1 年目は無意根、2 年目は十勝）、冬休み期の正月山行（プ

レ山行を含む）の冬山へと続く。その後の1～3月には小山行、無意根での雪崩救助訓練、ニセコ合宿、一般参加のスキーツアー（無意根小屋）、ロッジ祭、追コンがあり、春山（春休み期）へ。4月の新入生歓迎コンパ後はGW山行（1年目は無意根小屋）があり、その後無意根小屋祭り、サマースキー（北大祭前後、旭岳）と続く。夏に入り、白水川沢登り集中、赤岩登攀講習会、夏山プレ山行、夏山（夏休み期、尾根と沢）があった。

以下ではスケジュールごとに『むいね』に記載されている各代主任（小塚 毅・吉田美樹・松本貴之・田川 丹・上野勝利）の活動報告を中心にまとめる。

1. 秋山

70シーズン（1981.10–1982.9、主任：小塚）の秋山は、着実な実力向上を目標とし、具体的な課題として、おもに冬期の活動地域拡大と夏期の中・南日高山行の復活をあげた。また無意根小屋50周年記念事業に積極的に取り組むこととした。秋山は札幌岳・芦別岳・南日高・知床・利尻岳であった。

71シーズン（1982.10–1983.9、主任：吉田）はニセコ・空沼岳・芦別岳・カウンナイ沢・中部日高縦走・定山渓天狗岳東尾根が行われた。

72シーズン（1983.10–1984.9、主任：松本）10月中旬に無意根小屋の改修を行った。これは以前からの学生部への働きかけによって実現したものだが、小屋の外装・床と天井の補修・テーブル、その他部分的な補修など大がかりに実施され、部員は3日間にわたって角材やジャッキなどの荷上げをした。

73シーズン（1984.10–1985.9、主任：田川）は上級生不足に直面し、少数のスタッフでいかにして従来の山行形態を維持し、実力の低下を防ぐかなど苦しいクラブ運営であった。山行の根幹をなす安全性については、凡ミスやもしかしたらというような事故が目立ち、現在の山スキー部の実力などというものは、微妙なバランスの上で成り立っているということを痛感させられた。秋山は滝沢・ニセコ・暑寒・芦別であった。

74シーズン（1985.10–1986.9、主任：上野）秋山はニセコ・羊蹄山・暑寒別岳・恵庭岳・駒ヶ岳などの山行がおこなわれた。

2. 冬山（初滑り・新人合宿・正月山行）

初滑り（旭岳）と新人合宿（1年目無意根・2年目十勝）については各年とも全員参加で行われた。ここでは重複する記述を割愛する。

70シーズンの正月山行1年目班は原始ヶ原周辺・十勝岳－美瑛岳・天塩山塊に行き、初めて1年目が正月の天塩山塊に入った。2年目班は、ユニ石狩岳－ニペソツ山・ニセイカウシュッペ山－武華岳・十勝連峰縦走と3パーティが個性的な山行を出した。ここ数年の正月山行を見ると、このような「新しい山」へ向う姿勢は自然なことと言えた。

71シーズンは、正月山行においてリーダーの趣向をどこまで尊重するかという議論がなされたが、仕上げの合宿という意味で、総合的訓練の要素を含んだうえで個人山行的要素を認めるとした。正月山行はリーダー不足のためOBの協力を仰いだ。1年目はトムラウシ山周辺・美瑛岳－オプタテシケ山周辺・原始ヶ原周辺、2年目は日高の中の岳－神威岳・カムイエクウチカウシ山・北日高、そしてニペソツ山－トムラウシ山の4パーティであった。また、正月プレ山行として凌雲岳北尾根やニセイカウシュッペ山南稜を行った。

72シーズン1年目新人合宿は、美しくなった無意根小屋と好天に恵まれ、行動量も十分にこなせたが、日程の都合でパーティの再編成をし、学校との兼ね合いなど今後の合宿のやり方を再考させられた。2年目は3パーティで例年どおり十勝で行われたが、行動範囲の拡大や新しいルート開拓など次への布石となる山行であった。正月山行は、1年目が天塩山塊・原始ヶ原周辺・ペンケヌーシ山－芽室岳、2年目

は凌雲岳北尾根－トムラウシ山・ニペソツ山－オプタテシケ山であった。

73シーズンでは、無意根新人合宿は1年目9人に対し、常時参加できる上級生が2人という状況であった。また家庭の事情や怪我のため参加できない1年目もおり、正月に不安を残すことになった。2年目は十勝岳で全装による稜線乗っ越しをメインとし、ザイルワークの実戦としてOP尾根アタックを加えた。正月山行1年目は、トムラウシ山周辺・ペンケヌーシ岳－芽室岳・美瑛富士－オプタテシケ山、2年目は雪不足のため期間を大幅に遅らせてたが、神威岳－ペテガリ岳・北西稜からのニペソツ山－ウペペサンケ山に入山した。

74シーズン正月山行は、1年目が原始ヶ原・美瑛岳－オプタテシケ山・芦別岳－夕張岳へ、2年目はニペソツ山－石狩岳・幌尻岳－ピパイロ岳・カムイエクウチカウシ山へ向かった。

3. 冬山(正月～春山)

70シーズンは、札幌近郊・凌雲岳・積丹岳・芦別岳北尾根の山行が出された。71シーズンは、春香山・余市岳・余別岳－積丹岳・八剣山・層雲峡銀河ノ滝があった。74シーズンの正月後には、春香山・余市岳・札幌岳・ニセコアンヌプリの近郊山行があった。

4. 春山

春の日高に関しては、1年目山行であるため氷雪技術面での問題がリーダー会で指摘された。ただ厳冬の日高でも適切なルートを選び、かつ十分に訓練を積むことで可能と判断された。本州の山行に関しては、白馬岳山行に見られるように、スキーの持つ威力が十二分に発揮される山行がここ数年来精力的に出されるようになった。北海道の山々のみにとらわれることなく、本州にも進出して未知のスロープに飛び込み、スキー登山の可能性を切り開いていくことは自然の流れかもしれない。

70シーズンの春山には旭岳－トムラウシ山・知床・北日高スキー縦走・ソエマツ岳－トヨニ岳・白山の5パーティが出た。

71シーズン春山の2年目はコイカクシュサツナイ岳－札内岳・薬師岳－槍ヶ岳・大日岳－立山・南アルプス赤石岳－茶臼岳の4パーティ、1年目は美瑛岳－オプタテシケ山周辺・芽室岳－ピパイロ岳・北アルプスの3パーティであった。

72シーズン春山は、白山・日勝峠－ピパイロ岳・八甲田山・日高、また2年目は八方尾根－鹿島槍ヶ岳・富士山スキー滑降を目指した。

73シーズン春山1年目はD尾根－富良野岳・ピウケナイ沢周辺の2パーティであった。2年目はコイカクシュサツナイ岳－ペテガリ岳・トヨニ岳－ピリカヌプリ・コイカクシュサツナイ岳－1839峰－ニセヤオロマップ南面を計画した。

74シーズンの春山1年目は白馬岳・幌尻岳－札内岳・大雪山3パーティ、2年目は立山連峰・ニセイカウシュッペ山・カムイエクウチカウシ山3パーティであった。

5. ゴールデンウィークとサマースキー

70シーズン後期での新入部員は少なく、説明会を再度おこなってなんとか例年通りの数になった。ゴールデンウィークの2年目は無意根小屋50周年祭の荷上のため山行日数を短縮し、狩場山・暑寒別山群・利尻山へと散った。

71シーズンの1年目無意根合宿は天候に恵まれ、大斜面を舞う喜びを味わった。2年目は幌尻岳周辺・カムイエクウチカウシ山・狩場山の3パーティであった。それぞれ大滑降を楽しんだが、滑落・渡渉中に流されるといったアクシデントがあり、リーダー層を中心に安全面を考える上での警鐘となった。

72シーズンは1年目無意根合宿のほかコイカクシュサツナイ岳－ヤオロマップ岳・利尻岳・暑寒別山群が出たが、雨にたたられ、今一つのGWであった。

73シーズンは好天にめぐまれ、2年目パー

ティは八甲田山・利尻岳・カムイエクウチカウシ山八の沢を楽しんだ。

74シーズンは10人の新1年生を無意根に迎え、2年目は幌尻岳周辺・コイカクシュサツナイ岳－カムイエクウチカウシ山・八甲田山の3パーティであった。

サマースキーは各シーズンとも例年通りに行われた。1年目は重いザックと慣れないテント生活に喘ぎつつも、大雪山の雄大な山容と数々の大斜面を満喫した。

6. 夏山への準備期

各シーズンとも白水川での沢登り訓練山行や赤岩登攀講習会などをこない、夏山シーズンへの準備をした。赤岩に関しては、沢の山域に応じて上会L会の時点でメンバーのノルマを各リーダーに指示し、極力ノルマをこなすように努力させた。

7. 夏山とシーズンの総括

70シーズンの尾根歩きなどには、ニセイカウシュッペ山－トムラウシ山スキー縦走・十勝岳－トムラウシ山スキー縦走・知床・南アルプス4パーティが出た。1年目の沢は北日高・大雪(石狩岳)の2パーティの計3パーティ、2年目の沢はコイボクシュシビチャリ川、札内川七の沢を含む北・中部日高・北日高・1839峰－中の川・ヌピナイ川－中の川の計4パーティであった。ここ2シーズンは中・南日高の沢山行がなかったため、経験者が少なく心細い状態ではあったが、その魅力はすてがたく中の川での追悼のこともあり、3つの山行を計画された。「…プレは十分すぎる程やったのであるが、それでも中部南日高の沢と我々がプレとして行くような沢との差は歴然としており、経験不足という点は解消され得なかった。(中略)しかし経験がなければ、行くなという事ではない。(中略)言いたいのは、山に入る前に十分な準備をして、自らの実力を過信せずその山域に対してある種の恐怖感をいだいて入れということにすぎない。」との山行報告が見られた。

71シーズンでは、沢1年目は4パーティが北日高に集中した。2年目はペテガリABC沢－カムイエクウチカウシ沢右股・1839峰とペテガリ西沢－中の川・南日高楽古岳周辺の3パーティであった。尾根歩きは知床・南アルプス・北アルプスの3パーティ。十勝・大雪のスキー縦走の計画は試験や沢の日程との折り合いがつかず、中止された。

72シーズンでは、夏尾根は十勝－旭岳スキー縦走・知床・南アルプス・化雲内－石狩の4パーティ。沢の1年目は4パーティすべてが北日高に入った。2年目は1839峰とペテガリ岳・ヌピナイ岳－トヨニ岳・須築川遡行であった。このシーズンは、以前のようにシーズンに厳しい山行が1つ2つあるのではなく、全山行がある程度の難易度を持っていた。山行に対する安全性や山行に臨む心構えを確認しているつもりではあるが、まだつもりの段落であり確立されているわけではない。72シーズンは大きな事故はなかったが、細かく見れば小さな事故は多分にあった。これらをすべてなくすのは至難の技であるが、その中でいかに安全性を追求するか、今後の課題であり義務であるとの反省があった。

73シーズンでは、夏山尾根歩きはスキー縦走・十勝岳－ニペソツ山・北アルプス・南アルプス・知床があった。沢1年目は3パーティが北日高へ、2年目は3パーティがともに南日高ピリカヌプリ周辺に出された。また秋の沢ではニセイノシキオマップ沢を満喫した。このシーズンは上級生が少なく余裕のある山行作りができず、とくに1年目教育へそのシワ寄せがきた。

74シーズンの夏沢は、1年目が北日高へ3パーティと知床へ、2年目は南日高と中部日高であった。中部日高のペテガリ沢での滑落事故のため1年目の北日高への1パーティは中止となった。ペテガリ沢事故は旭岳盤の沢事故以来確立されてきた部のシステムが現状にうまくマッチしなくなってきたことと、これまでの部

の体質の問題点とを露呈した結果となった。8月5日のペテガリ沢事故以降活動を停止し、それ以後計画されていた夏山は中止となった。この期間、現役は今までの活動を洗い直し、OBと検討会を行って山スキー部の現状に対する反省を重ねた。その中で、今の山スキー部は基本的な技術、知識が十分でないこと、小さなミスや滑落などの事故に対する意識が低いことなどが挙げられた。シーズンは1か月延長され、10月末に74シーズンは終わった。

8. 海外遠征

ヒマラヤで自分たちのスタイルのスキーを駆使した山登りをやってみたいという希望が高まり、山とスキーの会・山スキー部が組織した初の海外遠征登山(インドヒマラヤ　ヌン・クン山群ピナクルピーク、6,930m)が72シーズン(1984年5~8月)に行われた(第2章1.2.1参照)。

5.3.1　第Ⅲ期前半(第75~80シーズン)(1986年10月-1992年9月)

徳田　昌生(1964工 合成)

75~80シーズン(部長：徳田昌生)における山スキー部の山行活動や現状・問題点などを振り返る。この期間の大きな出来事であった海外遠征と無意根小屋改修については第2章1.2、第3章1.4も参照していただきたい。

1. 年間における山行活動

10月にシーズンが始まり、前期では秋山・初滑り・新人合宿・正月山行・春山が続き、新学期からの後期にはゴールデンウィーク・サマースキー・夏山・沢山行や尾根歩きなどが行われているので、この順序にしたがって年間の活動を『むいね』の山行記録からたどってみる。

秋山

一般には中央高地(大雪山・二ペソツ山・石狩岳・十勝連峰など)、日高山脈(幌尻岳・トッタベツ岳・ピパイロ岳・コイカクシュサツナイ岳・ヤオロマップ岳・神威岳・アポイ岳など)、道東(雌阿寒岳など)および近郊(羊蹄山・ニセコ山塊・駒ヶ岳・暑寒別山群・芦別岳・恵庭岳・札幌岳・空沼岳・定山渓天狗岳・徳舜瞥山など)を中心として山歩きが行われた。シーズンによっては秋のカウンナイ沢・ペテガリ岳・ルベツネ山・コイカクシュサツナイ岳・札内岳・エサオマントッタベツ岳・知床などで沢登りも行われた。また、75~77シーズンには表大雪において秋スキーも行われた。

初滑り

雪不足で無意根に替わった79シーズン以外、毎年旭岳で初滑りが行われた。

新人合宿

1年目は無意根(17~32名参加)、2年目は十勝(1~3パーティ)で行われた。77~78シーズンは十勝岳が噴火のため中止あるいは別の山に変更して行われた。

正月山行

中央高地(旭岳・愛別岳・北鎮岳・美瑛岳・富良野岳・石狩岳・オプタテシケ山・トムラウシ山・ニペソツ山・ニセイカウシュッペ山など)、北日高(チロロ岳・ペンケヌーシ岳・芽室岳・ルベシベ山・ピパイロ岳・幌尻岳など)および利尻などに3~8パーティが入り、厳しい冬山山行が行われた。

その他、2月下旬に1年目を対象としたニセコ強化合宿が行われ、近郊の山々(春香山・奥手稲山・余市岳・白井岳・札幌岳・徳舜瞥山・漁岳・ピンネシリ山・芦別岳・百松沢山・八剣山・定山渓天狗岳・ニセコ・積丹など)でも山

スキーが行われた。76～78シーズンには一般参加者を募って無意根スキーツアーが行われ、山スキーの普及活動が行われた。

春山

春休みを利用して比較的長いスキー山行や縦走などが北日高(幌尻岳・札内岳・ピパイロ岳・戸蔦別岳・エサオマントッタベツ岳・芽室岳・ペンケヌーシ岳・チロロ岳・ルベシベ山など)、中部日高(ペテガリ岳・コイカクシュサツナイ岳など)、南日高(神威岳・楽古岳・ピリカヌプリなど)・中央高地(旭岳・忠別岳・石狩岳・天塩岳・チトカニウシ山・十勝岳・ニペソツ山・ウペペサンケ山など)・利尻岳・斜里岳および知床などにおいて行われた。近郊(ニセコ・羊蹄山・余市岳・白井岳・樽前山・芦別岳・暑寒別岳・郡別岳・樺戸山・八剣山など)での春山スキーも頻繁に行われた。また、毎年1～3パーティが本州の北アルプス(乗鞍岳・薬師岳・双六岳・立山・白馬岳など)・富士山・八甲田山あるいは朝日連峰などに出かけ、山スキーを楽しんだ。

ゴールデンウィーク

新入部員の無意根合宿は部の主要活動としておこわれているが、2年目以上は2～4パーティが中央高地(石狩岳－音更岳・美瑛岳－オプタテシケ山・化雲岳－トムラウシ山・ウペペサンケ山－ニペソツ山・黒岳－トムラウシ山など)、日高(幌尻岳・戸蔦別岳・北戸蔦別岳・コイカクシュサツナイ岳・ヤオロマップ岳・エサオマントッタベツ岳・札内岳など)・利尻山・羅臼岳・硫黄山・狩場山などで山行が行なわれた。本州の八甲田山に出かけた年もあった。また、5月中～下旬には近郊の余市岳・芦別岳・暑寒別岳・浜益岳・羊蹄山などで春スキーが行われた。

サマースキー

毎シーズン旭岳北大スロープを中心に恒例のサマースキーが行われた。

夏尾根

大雪山・トムラウシ山・富良野岳・中部日高・暑寒別岳・利尻山・知床などのほかに、毎年本州の北アルプス(剣岳・薬師岳・燕岳・槍ヶ岳・穂高・乗鞍岳など)・南アルプス北部(駒ヶ岳・北岳など)・四国(赤石・笹が峰・伊予富士など)において尾根歩きが行われた。

なお、78および80シーズンを除き、毎年1～4パーティが旭岳・トムラウシ山・化雲岳・美瑛岳・オプタテシケ山・トムラウシ山あるいは十勝岳などでスキー縦走を行った。

沢登り

6～7月には訓練として白水川(6～10パーティ)・発寒川(1～4パーティ)・漁川・恵庭岳滝沢・白井川・余別川・札的沢などで沢登りが行われた。随時、赤岩での訓練も行われた。

本番の沢登りはカウンナイ沢・ポンカウンナイ沢・余別川・北日高(幌尻岳・札内岳・チロロ岳・北戸蔦別岳・戸蔦別岳・エサオマントッタベツ岳・神威岳直登沢など)・中部日高(ペテガリ岳・ルベツネ山・ヤオロマップ岳・カムイエクウチカウシ山・コイカクシュサツナイ岳・札内川八の沢および九の沢・ペテガリA沢・中の岳直登沢・中の川など)・南日高(ソエマツ沢・神威沢・ニシュオマナイ沢・楽古川・ニオベツ川など)・知床岳・硫黄山などで行われた。近郊での沢登りも随時行われた。

2つの全山縦走

79シーズンには現役部員による知床全山縦走とOBによる日高単独縦走が行われた。

知床全山縦走は1991年3月13日～3月30日の18日間にわたり、鳥羽山 聡ほか3名によって宇登呂－海別岳－ラサ－遠音別－天頂山－羅臼－知円別－ルシャ－知床岳－知床岬－相泊の縦走が行われた。一方、日高単独縦走は1991年2月7日～3月4日の厳冬期、OB2年目伊藤健次の単独によって日勝峠から襟裳岬までの日高全山の縦走が厳しい条件の中で無事に行われた。

2. 山スキー部の現状と問題点について

前項で述べたように山スキー部では非常に活

発な活動が行われていたが、一方では問題点もあるように感じられた。ここで、75～80シーズン当時の部員数を振り返り、次いでカリキュラムや女子部員入部および山行審議などの問題点について考えてみる。

部員数について

75～80シーズンの部員数は29～36名で安定していた。約50名の部員を擁し各学年とも10名以上の部員が揃っていた山スキー部発足時に比べると十分とはいえないが、まずまずの部員数が揃っていたといえる。76シーズンの山系3クラブの部員数を比較すると、山スキー部では1年目(12名)、2年目(9名)、3年目(5名)、4年目(6名)であるのに対し、山岳部は1年目(13名)、2年目(7名)、3年目(4名)、4年目(4名)、ワンダーフォーゲル部は1年目(13名)、2年目(13名)、3年目(9名)、4年目(5名)であった(「山系3クラブ座談会」むいね、26号)。3クラブ共通しての悩みはスタッフとなる上級生部員が少ないことであった。

カリキュラムについて

当時の山スキー部では山行におけるカリキュラムというものがあって、部員は各学年で必要とされるレベルの山行を忠実にこなし、4年目で厳冬期のリーダーとなることが求められていた。

カリキュラムを課して部活動を行っていた背景には、1986年8月のペテガリ沢事故と1987年5月に起きた北大非公認同好会の「コロポックル山の会」による利尻岳遭難事故があったように思われる。前者については、事故に対する現役部員の甘さや意識の低さに危機感をもったOBから強い批判が続出し、1986年8月～10月には山行を停止して部員による真剣な検討が行われた。また、後者に関しては、「コロッポクル山の会」自身が遭難救助をおこなえなかったため山スキー部が中心となって捜索活動をおこなったが、残念ながら2名を救うことができなかった。これらの事故を通して山の厳しさや恐ろしさを改めて知り、部員は安全性を確保するためにカリキュラム重視と慎重審議を行うようになったものと思われる。

1987年10月25日にシルバーロッジにおいて行われた「山系3クラブ座談会」(前出)で山スキー部員がカリキュラムについて次のように述べている。「山スキー部の2年目の冬山では、アイゼンつけて稜線の全装乗っ越しというのを合宿の義務として行っていて…(以下省略)」、「山スキー部では2年目に要求されるものというのが明確にあって、冬だと3ステップ(初滑り、十勝合宿、正月山行)というものです」と話している。山岳部員からは「山スキーとWV(注：ワンダーフォーゲル部)の話しを聞いていると、ある程度強制的に部のレベル維持のために、嗜好が違っても行くという感じがする」との感想を述べていた。

カリキュラムを考え直そうとする声もあり、76シーズン主任の杉山裕之(1989)は活動報告で「カリキュラムに引きずられることなく、各人が目的意識を持って山行にいどむことを心がけたつもりである」と述べ、77シーズン主任の粟崎 健(1989)も抱負として「カリキュラムやノルマという言葉からではなく、本当にやりたいという意志から2年目正月山行の再開を考えた」と述べている。

女子部員の入部について

75シーズンには、女子部員を入部させるかどうかで議論が重ねられた。多数かつ多様な部員がいたころを経験したOBにとってこのような議論が起こること自体に違和感を感じていたが、背景にはレベル維持とカリキュラムの問題があったように思う。

当時の状況について、前述の「山系3クラブ座談会」で山スキー部員が「今年の春に3人の女の子が入りたいと言ってやって来た。普通なら美辞麗句を並べてクラブをPRするんですが、女の子ということで実際のシビアな活動を説明して考え直させたところ、ひとりの子がそれでも…と。受け入れ体制のないこちらは賛否両論あったんですが、冬を迎えるにあたりあやふや

な立場は危険だということで、部員として認め、できるだけのことはやってもらおうということになったわけです。正直言って戸惑っています」と述べている。結果的に、杉山は活動報告のなかで「十数年振りに女子部員を含めた1年目無意根合宿は好天に恵まれ十分に行動できた」と述べている。

女子部員やカリキュラムの問題は、山スキー部の目的、さらには大学におけるクラブ活動のあり方等にも関わってくる。山スキー部長に就任した時の挨拶の中で徳田(1988)は「大学におけるクラブ活動には、部本来の目的を遂行するほかに人間性を陶冶するという別の役割も期待されています。様々な地方から集まり、様々な考え方を持つ人間が共同生活を通して自己の人間性を磨く場として重要な意味をもっています。(中略)私は山スキー部が包容力のある、より大きな部に育っていただきたいと思っております」と述べ、女子部員も含め様々な人間が集う部であることを願っていた。女子部員が主任やリーダーとして活躍している最近の状況を見ると感慨深いものがある。

山行審議について

山スキー部の週間スケジュールは、火曜日が「例会」、水曜日が「上級生会議」と「リーダー会」、金曜日が「審議」となっていた。山岳部やワンダーフォーゲル部が週2回であるのに対し、山スキー部では多くの審議時間を費やしていた。山行の審議は上級生会議とリーダー会議の2段階で行い、上級生会議で計画の概要を聞いてルートやメンバーに突出した問題がなさそうであれば計画が通り、リーダー会議では細かいルート上の問題や対応の仕方などを審議した。メイン山行の前にはOB検討会でより多方面からの意見も聞いていた。遭難事故を経験して慎重審議に徹していたことは十分理解できるが、審議に時間をかけ過ぎてトレーニングや本来の学業に支障を来していたのではないかと思っている。

3. 無意根小屋大改修

無意根小屋の改修については、1983年に土台丸太数本の交換、防腐剤塗布、床張付けと断熱材利用などを行ったが、それ以降大きな改修はおこわれてこなかった。1988年に抜本的な改修が必要であることが判明し、現役部員の献身的努力とOBの阿部幹雄・丸谷聖一・皿田滋山とスキーの会運営委員長などの多大なる尽力、OB諸兄の温かい支援と寄附、および学生部の理解もあって大改修を行うことができた。改修の詳細については『むいね28号』(1990)にまとめられているが、以下に概要を述べる。

改修に至る経緯

1988年頃から小屋の傾きが目立つようになり、小屋係の吉川友二が小屋の傾きや土台柱の腐食などを調査した。土台に関しては33本の土台柱の半数近くが腐っており、素手で5寸釘が簡単に刺さる状態であった。抜本的な修理が早急に必要との結論に至り、1988年9月に調査報告書を学生部に提出した。一方、山とスキーの会では1988年11月の運営委員会において抜本的改修の実施を決定し、恒久的な改修案として土台地盤部分をコンクリート化した土台柱にすることとしてOBの丸谷聖一(建築設計士)に計画書と見積書の作成を依頼した。1988年12月に改修工事設計図と見積書を学生部に提出し、翌年1月に徳田部長、在田副部長、皿田運営委員長、運営委員および部員が学生部と第1回目の交渉をおこなった。その後、壁・天井・窓の交換も改修工事に加えた改訂見積書を1989年2月に学生部に提出し、1989年3月の学生部との第2回交渉において改修工事が正式に認められた。

改修工事

工事の元請けは丸谷OBの勤務する㈱アーキビジョン21、土台交換を後藤曳屋、内装工事を大江サイディングとした。改修のための資材荷上げは1989年4月に一部ブルドーザーを使っておこなった。

土台交換工事は6月17日～20日に後藤曳屋

3~4名、現役部員8~30名、OB数名の手によって行われた。資材・工具類・食料の荷上げ、土台上げ、穴堀り位置の隅出し、柱束加工、基礎根掘り、やり方出し、コンクリート管充填用石集め、コンクリート管据え付け、生コン打ち、土台柱据え付け、クレオソート塗り、束立木工事、根がらみ打ち、腐食大引の交換、土台収め、便所土台修理等々の数多くの作業を部員が献身的におこなった。土台について丸谷(1990)は「土との接触部分が非常に腐食しやすいため既製の鉄筋コンクリート管の中を砕石及び現場打コンクリートで充填し、一階床大引との接合部分を150mm角の木柱を使用する工法を採用した」と述べている。

内装工事は6月24日~30日の期間、大江サイディング4名と部員6~13名の手によっておこなわれた。1階壁羽目板張り、天井シナベニヤ張り、玄関扉、壁、天井張り替え、2階影張り、天井・壁シナベニヤ張り、階段壁張り替え、食器棚作成、入り口扉補強、床ワックスがけ、内部塗装、1、2階壁天井チークオイル塗装、窓枠コーキングなどの工事が行われた。

土台工事と内装工事が無事終了し、7月1日~2日に部員19名、OB14名、学生部4名、招待者3名、その他4名が参加して、記念式典と記念登山が行われた。改修なった小屋を見て驚くOBの顔、汗水流して働いた部員の誇らしい顔などが印象的であった。

4. 海外遠征

新たな活動フィールドの開拓を目的として78シーズンに二つの海外遠征が計画され、いずれも大成功を収めた。ひとつはカナダ・ローガン峰スキー登山隊の遠征である。海外遠征の経験がない吉川友二ほか5人の部員によって行われ、6人の隊員全員が同時にローガン峰に立つことができ、高所におけるスキー登山や滑降にも成功した。もうひとつは、阿部幹雄(OB)ほか現役部員3名によって行われた北千島スキー登山隊の遠征である。渡航する上での数多くの困難を乗り越え、戦後日本人が踏み入ることのできなかった北千島の山々(アライド山：2,339m・後鏃岳：1,772m・千倉岳：1,815m)に登頂しシュプールを刻んだ行動は、まさしく北大伝統のパイオニア精神の現れでもあった。これら二つの海外遠征については本記念誌の別稿(第2章1.2.2)や根岸・成瀬・鳥羽山(1991)のローガン報告書、石塚・斉藤(1991)の北千島遠征報告書および山とスキーの会会報第15号(1990)の海外遠征報告などに詳しく報告されている。

なお、主任および遠征参加部員からOBに対して90万円を目標額とする募金のお願いが行われ、85人から総額1,027,000円+1＄の寄附が集まった。OB諸氏の温かい理解があって二つの海外遠征は成功したのである。

文献

粟崎 健(1988) 77シーズンに向けて．むいね，第27号，2–3.

石塚吉治・斉藤正美(編)(1991) 北千島(阿頼度島・幌筵島)の遠征報告．86p.

杉山裕之(1988) 76シーズン活動報告．むいね，第27号，3–6.

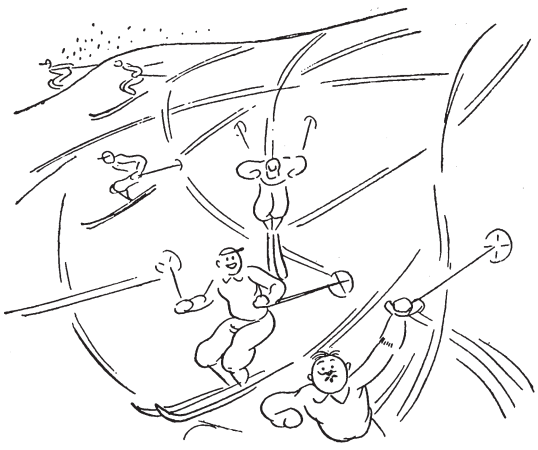
徳田昌生(1987) ご挨拶．むいね，第26号，1.

根岸邦典・成瀬 健・鳥羽山 聡(編)(1991) 北海道大学山スキー部・山とスキーの会　マウントローガンスキー登山隊1990報告書．113p.

丸谷聖一(1989) 設計者の弁明．むいね，第28号，20–22.

むいね　第28号(1989) 無意根小屋改修特集．10–29.

山系3クラブ座談会(1987) 山系3クラブ座談会．むいね，第26号，19–27.



札幌鉄道管理局パンフレット(1936)より

5.3.2　第Ⅲ期後半（第 81～86 シーズン）（1992 年 10 月 -1998 年 9 月）

在田　一則（1965 理 地鉱）

81 シーズン（1992.10-1993.9）から 86 シーズン（1997.10-1998.9）までの山スキー部の活動の概略を述べる。

81 シーズンの半ばの 1993 年 4 月、部長（顧問教員）はそれまで 6 年間にわたって部のお世話をしてきた徳田昌生（1964 年卒）から在田一則（1965 年卒）に変わった。在田は 86 シーズンまで部長を務めた。

この間、主任は赤木憲二（81 シーズン）・吉田　寛（82 シーズン）・中村　平（83 シーズン）・入村貴行（84 シーズン）・小河健伸（85 シーズン）・伴　現太（86 シーズン）であった。

全国的に大学の山岳関係クラブでは部員減少が深刻な問題となっているなかで、山スキー部の部員数は、この期間も 30 名～36 名でそれまで 20 年ほどと同じレベルで推移した。新入部員数は 11～8 名と過去のレベルを維持していたが、4 年目は 5～4 名と少ない年があり、山行活動に支障が出ることもあった。その中で、86 シーズンは 10 名と多かったが、その大量の卒部生が結果的にはその後 10 年以上続いた部員数減少（20～10 名）の始まりとなった。

部運営の基本としては、海外志向や日高山脈でのスキー地開拓といった目的を設定するというより、「各自のやりたいことをやる」といった傾向があり、こだわりのあるオリジナリティのある山行を志向した。このような傾向は、活発な山行活動とともに、1990 年代前半にピークとなったスキーブームやその後の “スノーボード” や “バックカントリースキー” の普及に刺激された未知の斜面でのスキーや “イクストリームスキー” への志向を強めたと思われる。この傾向はその後も続いている。このようなスキーによるピーク登頂よりも未知の斜面でのスキーを求めるという傾向は、部員数の減少ともあいまって、山行の実力の低下をもたらすようにもみえる。しかし、これは今後の部員による山スキー部の行き方の選択の問題である。

一方では、部誌『むいね』の刊行が不規則になり、33 号～35 号が 1998 年 4 月に合併号として発行された。

以下では、各シーズンの活動概略を述べるが、具体的な山行活動などは巻末の資料を参照されたい。

81 シーズン（1992.10-1993.9）

81 シーズンの活動は、前シーズン 7 月の夏沢準備の白水川訓練山行において、大事には至らなかったが、小さな事故が多発したことによる夏の山行一時停止を受けて、「事故体質からの脱皮」を目指し、クラブ全体が “事故” に非常に敏感になりつつも、“自由” をテーマとしてのスタートであった。

海外遠征の影響もあり、上級生が少ない部員構成のなかで、パーティ作りに苦労したが、旭岳初滑りや冬山・春山は学内 OB の協力により例年のように遂行することができた。2 月には山スキー部としては初めて函岳（美深町）にシュプールを残し、その後の道北スキー地開拓の発端となった。2 月にパラダイスヒュッテにおいて、1991 年冬から部として導入した雪崩ビーコンの実践的使用を目的とした雪崩講習会をおこなった。雪崩講習会は 1973 に無意根小屋で初めて行われたが、ビーコンを本格的に取り入れた講習会は初めてであった。夏の日高 2 年目パーティはスタッフ不足から 1 パーティのみとなった。また、この年カウンナイ沢（国土地理院地図によるとクワウンナイ川）が入山禁止となった。山スキー 4 回目の海外遠征（東ネパール　メラピーク：6,473m）がおこなわれ、全員ピークに立ち、約 6,300m からスキー滑降をおこなった（第 2 章 1.2.3 参照）。この遠征は

北海道大学学生部が正規の課外活動として認めた最初の海外遠征であった。

少ない上級生によるスタッフ不足があったが、部内の話し合いやOBの協力により部の実力を落とすことなく、また新たな活動フィールドを広げることができた。

前シーズンでのシルバーロッジ大改修をへて、部員は改めて「シルバーロッジが山スキー部に必要なものであり、存続していかなければならないものである」と認識し、将来の改修に備えて「シルバーロッジ基金」を部員全体のものとした。

82シーズン（1993.10–1994.9）

このシーズンは、山スキー部初代部長水谷寛先生夫妻の逝去、手稲パラダイスヒュッテの再建という、現役部員にとってもまたOBにとっても悲しみと喜びの大きな出来事があった。

スタッフ（4・3年目）不足は解消されたが、3・2年目層にスタッフ不足時の名残で経験の足りない部分があった。部運営の機構としては、前シーズンを引き継ぎ、例会は毎週火曜日に全員参加とし、週3回の上級生全員による上会（上級生会議）では部運営や山行の部における妥当性やパーティの実力などを審議し、上会と同じメンバーによるL会（リーダー会議）では山行計画の立て方や個々の技術的問題を審議した。

冬山では、1年目は例年通り3ステップ方式（旭岳初すべり・無意根新人合宿・正月個人山行）であったが、2年目は合宿により足並みを揃えるか、個人山行で山行の厳しさ楽しさを経験するかの議論があり、後者の選択となった。この悩みはいつの世代にもある。正月山行では、3年目リーダーや女性部員の評価の難しさが顕在化した。新人合宿では、部のカリキュラム消化と学校のカリキュラム消化との齟齬が顕著になった。2年目正月山行は近年にない大きな縦走山行が組まれ、充実したものとなった。

1994年5月連休には日高山脈カムイエクウチカウシ山への意欲的山行が組まれた。

一方では、恒例のロッジ祭りのジャンプ大会で1年目部員が負傷して入院したり、追い出しコンパで悪酔いした部員が病院に運ばれたり、3パーティの入山が遅れるなど、社会的モラルやリーダーの自覚が問われる事態も発生した。しかし、春山では部としては未開の道北を含む広い山域が舞台となった。また、ルンゼ（定山渓天狗岳・芦別岳）やカール（カムイエクウチカウシ山）などスキーフィールドの拡大を狙ったものもあった。2シーズンほど不振であった夏沢の強化を意図し、日高のほか積丹・増毛山塊・遊楽部川・屋久島など部として未遡行だった沢を経験した。

積極的に休部するものや女性部員も増え、個々の山行の目的や部への関わり方など部員の多様化がみられた。

83シーズン（1994.10–1995.9）

部の実力は拡大期に来ているとの現状認識と山スキーの楽しさを「共有」するをテーマに、より高いレベルでの「スキーのオールラウンダー」を目指し、近年にないボリュームのある山行を志向した。冬山の2年目パーティは天候不順のため十分な成果は得られなかったが、1年目パーティでは13日間の長期山行もあった。3月の卒業山行では最長18日間の十勝～大雪縦走のほか、中部日高のスキー縦走が試みられた。一方では、大事には至らなかったが雪崩遭遇が頻発し、雪崩に対する警戒心の甘さ、スタッフの経験力、事後対処などの問題点が指摘された。また、部として経験の浅い山域に対する心構えや審議のあり方も議論となった。それらの反省を踏まえ、4月にOBを招いて報告会をおこなった。5月には学内の山岳館において、山スキー部・山岳部・ワンダーフォーゲル部による「山系会議」を開催し、各部の抱える問題点などが話され、相互の連帯・連携が図られた。無意根小屋の屋根のペンキ塗りが春の小屋祭りから夏にかけておこなわれた。7パーティ

が参加したサマースキーでは 30cm の降雪があり、スキーはほとんどできなかった。表層雪崩を誘起するというおまけもあった。夏山では不本意なアクシデントが続発し、計画を完遂できたパーティはなかった。

1994 年 12 月のワンダーフォーゲル部の十勝連峰における遭難事故で現地の救助活動に協力した。

手稲パラダイスヒュッテの再建が 1994 年 12 月竣功し、翌年 4 月再建期成会から北大に寄贈された。多くの部員を育てたテイネパラダイスヒュッテは 1994 年 3 月その年の大雪のために倒壊した。

84 シーズン(1995.10–1996.9)

部員各人が自由な、独創性に富んだスキー山行を積極的に行い、山スキー部の幅を広げ、新たな可能性を見出すという思いのもと、1986 年のペテガリ沢滑落事故以来 10 年目であるということを感じつつ、4 年目 5 名、3 年目 7 名、下級生 21 名というスタッフ不足の現実でシーズンが始まった。シーズン初めの秋山では山岳部部員も含む女性部員のみによる山行があり、前シリーズにもみられた山系 3 クラブの交流の一端であった。スタッフ不足のなか OB の協力により、それぞれの山行をこなしたが、10 月の 1 年目全員参加の恵庭岳山行や春山における 1 年目部員の行動において、山行に対する心構えや事前準備、実際の行動など、山行における基本をまったくわかっていないことが露呈した。さらに、そのような事態をもたらした上級生の教育のやり方も問題となった。加えて、夏沢の前の白水川でメンバーがスリップして流され、あわやとなる事故が発生し、その反省と対応の検討に夏の計画を中断して 3 週間ほどを費やした。そのため、夏沢計画は大幅に縮小された。

大学クラブの特徴(宿命)とも言える 4 年サイクルにおける教育や技術・経験の継承という困難さに直面し、その対応に追われた 1 年であったと言える。その点で、ここ数年の部の活動に比べると、今シーズンの山行レベルや経験は、とくに夏沢のレベルについては低下したことは否めない。

2、3 年前から出されてきた夏のスキー縦走においては、本州(剣岳)での夏のスキー縦走という新たな可能性が示された。

85 シーズン(1996.10–1997.9)

4 年間で人が入れ替わるという大学の山岳団体の宿命のなかで、先人の経験・記録や伝統など受け継ぐべきところは受け継ぎ、さらに新しい視点から時代の流れに合わせて新しいことを取り入れ、クラブの主体となって自分たちのやりたいことを伸ばしていく。このようなこだわりのあるオリジナリティのある山行を作っていることをモットーとし、個人山行重視の方針とした。

本シーズンの 1997 年 1 月 26 日に前々部長であった吉岡義彦さんが急性心筋梗塞により享年 53 歳で急逝されたことは、1987 年 3 月に徳田昌生 OB に部長職を引き継いだ後も、吉岡さんに手稲ハイランドなどでスキーを熱心に指導してしていただいていた現役部員や OB には大きな衝撃であった。

シーズン初めの秋の無意根小屋祭りは古い OB を交え総数 40 名を超え、故水谷先生の銅板をケルンに設置した。4 年目は少なかったが、比較的経験豊富な 3 年目が多かったため、また好天も幸いし、冬山、春山ともに充実した山行をおこなうことができた。山スキー部初トレースの縦走路や山域もあった。残雪期には定山渓天狗岳やニセコなどで急斜面やルンゼでのスキーが行われた。夏のスキー縦走に 3 パーティが出た。夏沢では日高へは 1 パーティのみで、次シーズンに不安を残した。

山スキー部では初めての川下り(千歳川・天塩川)が行われ、議論を呼んだが、結果として、次シーズンでは行わない方針となった。そのほか、山スキー部としては初めての「ボード

山行」が出るなど、このシーズンは新しいことを試みるという姿勢が見られた。

86 シーズン（1997.10–1998.9）

多種多様な考えを持ち、山行に対する趣向もさまざまな集団において、それぞれの考えを生かした山行を行い、皆が満足する活動を目指した。前シーズンの活動により充実したスタッフ層のもと、部員 30 名中女子部員は 4 名（1 年目 3 名）というシーズンであった。秋山では 1 年目リーダーの女子部員のみの山行が出された。11 月～1 月の冬山前半は天候不順のため十分な成果は得られなかったが、後半の春山（2 月～3 月）では 1 年目、2 年目ともに大雪・利尻・南日高・北日高で充実した山行をおこなった。センター試験休みの山行ではサブリーダーがスノーボードとスノーシューを部の積雪期登山として初めて試みた。ゴールデンウィーク山行でも十勝（オプタテシケ山－美瑛富士岳）においてリーダーとしてボードをフルに用いた。4、5 月は例年にない残雪の少なさにどのパーティも悩まされた。

シーズン後期の新学期からは、スタッフ層が 10 名と手薄になり、また沢経験のある上級生が少なく沢の力量が憂慮されたスタートとなり、夏沢スタートの白水川沢訓練山行の審議は OB の力を借りておこなった。そのような状況のもとで 2 年目の沢山行としてどのように山行を出し、どのように審議するかという問題も生じた。検討の末、中部日高に 1 パーティを出した。1 年目は OB の協力を得て 3 パーティを出したが、計画は例年より小さく、それぞれ完遂したものの、サブリーダー養成という面では不十分であった。これらはこのところ続いてきた部員の沢山行を望まない傾向の結果と思われる。

5.4.1　第Ⅳ期前半（第 87～92 シーズン）（1998 年 10 月 –2004 年 9 月）

藤永　徹（1968 獣医）

1. 活動概要

・この間、部長は藤永 徹であった。
・引き続く部員数の右肩下がりの減少に加えて、個人の考えの尊重や女子部員などの構成をふまえた山行レベルの維持に苦悩するクラブ運営が続いた。一方、山では必要最低限の経験は不可欠なこととして、山行におけるいわゆる「カリキュラム」制が踏襲された。
・90 シーズン頃から、スノーボードでの積雪期の山行やデイアミール、テレマークスキーでの山行など、今までにはなかった形での山行が出てきた。
・91 シーズンに部員数減少対策として新入生勧誘用のプロモーションビデオを作成するために山とスキーの会から提供されたビデオカメラの効果もあってか、92 シーズン頃から新入部員数に若干の増加傾向がみられ始めた。
・92 シーズン頃から試験的にパーティの下山連絡に携帯メールを利用しはじめたが、パーティの所在がある程度特定できることから、有用な方法と考えられた。

2. 年間における山行活動

部員数の減少が、山域の狭まりや難レベル山行数の減少として、みえる形で現れてきた。サマースキーへの参加パーティ数も減少し、南日高の沢登り山行がみられなくなった。しかし、それが故に個々の部員の工夫と努力がみられる山行が記録されている。

・秋山

山行回数は少なく、空沼岳・札幌岳・樽前山・恵庭岳・芦別岳・夕張岳などに 1 シーズン

に1～2パーティを出す程度になり、88シーズンはなかった。

・初冬－むいね新人合宿

十勝岳グランドコース・旭岳2年目新人・旭岳(1年目)初滑り・無意根新人合宿などは例年通り行われた。

・冬季休暇(正月)山行

中央高地(旭岳・富良野岳・石狩岳・オプタテシケ山・トムラウシ山・ニペソツ山・ニセイカウシュッペ山・武利岳－武華山縦走など)・北日高(チロロ岳・ルベシベ山・ピパイロ岳・幌尻岳など)・樺戸山塊・ピンネシリ・天塩山塊などであったが、冬期休暇中にもプレ山行と称して短期日の山行が増えた。

・センター試験休み・その他山行

前富良野岳・十勝岳・凌雲岳・函岳・日勝峠・ニセコアンヌプリ・チトカニウシ山・春香山・徳舜瞥山・ホロホロ山などへ2～5日間の山行が組まれた。その他に、春香山・奥手稲山・新見岳・積丹岳・喜茂別岳・ニセコ山塊・羊蹄山・樽前山・オプタテシケ山・芦別岳・北日高ペケレベツ岳などへの春期休暇の長期山行のためのプレ山行を含短期間の山行が出た。

・無意根スキーツアー

87シーズンはスタッフ不足のため小人数で実施された。88～91シーズンは例年通り実施された。スキーツアーは相変わらず人気があり、90シーズンには40名の希望者に対して、スタッフ不足のため抽選で20名の選抜となった。92シーズンはスタッフ不足のため中止されたが、問い合わせは多く、常連から惜しまれた。

・春季休暇山行

芦別岳・北日高(幌尻岳・戸蔦別岳・ペケレベツ岳・芽室岳)・中部日高(カムイエクウチカウシ山・札内岳・神威岳)・南日高(ソエマツ岳・トヨニ岳・ピリカヌプリ)・中央高地(旭岳・ピウケナイ沢・五色岳・十勝三段山・忠別岳・トムラウシ山・富良野岳・ニセイカウシュペ山など)・近郊縦走・定山渓天狗山・樽前岳・羊蹄山・ニセコ連山・増毛山塊・八甲田山などの山行が組まれた。

・ゴールデンウィーク・残雪期

新入部員の無意根合宿は主要活動の一つとして行われているが、88シーズンの合宿のチーフは初めて女性部員(藪内かおり)であった。

2年目以上は2～4パーティが十勝連峰・旭岳・幌尻岳・増毛山塊・北日高(幌尻岳・戸蔦別岳)・狭薄山・オプタテシケ山・利尻岳・暑寒別岳・北アルプス立山、5月中～下旬には余市岳・目国内岳・羊蹄山・下ホロカメットク山・暑寒別岳などで残雪スキーが行われた。

・サマースキー

毎シーズン旭岳周辺で恒例のサマースキーが行われたが、88シーズンは3パーティで1年生は1人のみの参加、91シーズンは2パーティのみであった。

・夏山(縦走)

積丹の海岸歩き・知床の海岸歩きと羅臼岳・屋久島・黒岳－旭岳スキー縦走・暑寒別山塊・十勝スキー縦走・中部日高縦走(カムイエクウチカウシ山－コイカクシュ札内岳)・知床連山・十勝岳－大雪山縦走・ニセコ縦走・芦別岳・屋久島・美瑛岳・黒岳－トムラウシ山縦走・斜里岳－雄阿寒岳－雌阿寒岳・イドンナップ岳・ウペペサンケ山・ニペソツ山・南日高神威岳などの山行が組まれた。

・沢登り

近郊の沢登りはプレ山行としても多くの沢登りが行われたが、日高山脈の沢登りは少なくなってきた。発寒川・白井川・白水川・漁川－漁入沢・豊平川－オコタンペ湖・札的沢・古平川下二股川・遊楽部岳・伊佐内川・余別川・珊内川－余別川51点沢・暑寒別川・トムラウシ川・カウンナイ沢・十勝三峰沢・層雲峡荒井川(電気の沢)・石狩沢－石狩岳・北日高(エサオマントッタベツ川)・中日高(ポンヤオロマップ岳－ペテガリ岳－ルベツネ岳－ヤオロマップ岳・コイカクシュサツナイ岳・ヌピナイ右股－中の川)などであった。

3. 特記事項

1)部員数の減少―価値観の多様化、学業への厳格化、そして景気後退―就職難

『むいね』36 号(1997)の巻頭言に「最近、価値観の多様化のためか、あるいは規制されることを好まない傾向のためか、学生の中では部活動が敬遠されているようです。」とある。88 シーズン頃には、技術的な問題から残念ながら現役だけでは夏の南日高の沢には入山できくなり、冬山においても若手 OB の同行がなければ下級生全体の技術レベルの維持も難しい状況に陥った。

87・88 シーズンの部員数は 20 名ほどであったが、91・92 シーズンには 15～16 名にまで減少した。山とスキーの会はこの減少に憂慮して、宣伝用のビデオ作成のためのカメラを購入し、積極的なプロパガンダを展開し始めた。

このような部員数の減少には、下記の二つの事象とも密接な関係があると考えられる。

日本経済は、1991 年 2 月頃にバブル景気がはじけ、一時持ち直したものの 2008 年にはリーマンショックで再びどん底に落ちてしまった。1991 年に始まったいわゆる「失われた 20 年」である。この間、学生たちにとっては苦しい就職難が続いた。一方、この頃社会から大学教育に厳しい目が注がれ始め、大学からは学生に対して学業に対する厳しい姿勢が取られ始めた。夏期休暇時期の変更や冬期休暇の短縮化などの学期時期の変更、そして講義・実習の出席率の管理もその一環であった。

部員数はその後も低迷し、95～97 シーズンには 10～12 名まで減少した。部員数が 25 名を切っていた時期は 1998 年(87 シーズン)から 2010 年(98 シーズン)の 12 年間に及んだ。

2)飲酒問題

山スキー部では、1985 年夏の日高ペテガリ A 沢での滑落事故以来、山行中での禁酒宣言がなされた。その後、時の経過とともに、数年おきに禁酒解除の論議が繰り返されていたという。そして、89 シーズンには、主任が就任時の活動方針の一つとして「山行時の飲酒の可否について」論議を始めることを挙げた。その頃現役は、山行中あるいは無意根小屋においても、小屋祭り以外は、合宿中は禁酒を堅持していた。主任の提案の少し前、北大の体育会系クラブの新人歓迎会で、20 歳未満の 1 年目学生の飲酒死亡事故が発生した。それ以外にも、例えば大学祭や恵迪寮で未成年者の飲酒事故によりたびたび救急車が大学構内に入り、学生部は未成年者の飲酒事故に大変神経をとがらしていた。

顧問教員からは、そのような時期に、体育会公認の団体で、「禁酒宣言」をしていた山スキー部が、大学生の飲酒に対する批判が社会的に強い今頃になって「禁酒解除宣言」をしたうえで、山行や合宿で酒を飲み始めるなどは前代未聞で社会常識上許されることではないとの意見があった。しかし現役の間では、「飲酒を解禁する」雰囲気で論議を再開し、OB を巻き込んだ様々な論議の末、次の結論に達した。

過去の禁酒宣言をした経緯を部員間で厳粛に受け止めると同時に、その経緯と理由を末永く語り継ぐとともに正規の活動である合宿や山行中に酒を「飲むものではない」ということを、山スキー部員一人ひとりが心に留めることで、この論議に終止符が打たれた。

なお、山行や合宿(無意根の小屋祭り以外)などでの禁酒は現在も続いている。

3)海外遠征

OB4 年目の青山尚広をリーダーに山スキー部現役 4 名の計 5 名の隊員からなる北海道大学山スキー部と北大山とスキーの会によるアラスカ・ランゲル山群スキー登山隊(HUSV Wrangell Mountains Ski Expedition 2000)は、2000 年 5 月 22 日千歳を発ち、5 月 30 日にアラスカ Chitina に入山、6 月 10 日に登頂し、7 月 2 日に無事下山して、成功裏に終わった(第 2 章 1.2.4 参照)。

4)留学生部員

92 シーズン後期(2003 年 4 月)に「南国」のベ

トナムからの留学生が入部した。ベトナム初の冬季オリンピックのスキー選手に育てると、張り切っていたが、残念ながら秋に退部した。その後タイからの留学生も一時席を置いた。

5.4.2　第Ⅳ期後半（第 93〜100 シーズン）（2004 年 10 月 −2012 年 9 月）

片倉　賢（1977 獣医）

1. 活動概要

この期（部長：片倉 賢）の部活動の目標は「自然の厳しさ、危険性を十分認識した上で仲間と山でのスキー、登山を楽しむ」、「山行の安全を最優先に考える」、「自分の求めるものに妥協せずに全力で取り組み達成する」におおむね集約される。93〜100 シーズンの最大の問題は部員数の減少であった。これは、87 シーズンから続いた傾向であったが、93 シーズンから 100 シーズンまでの 4 年生の人数は 3、3、2、1、4、0（中途退部）、1、4 名であり、96 シーズンには部員数が史上最小の 10 人にまで減少した。しかし、少ない人数でも粘り強く頑張った上級生の献身的努力、若手 OB の山行援助、山とスキーの会支援による新人勧誘プロジェクトの立ち上げなどによって、危機を脱することができた。この期では女子部員の活躍が目立ち、93 シーズン（吉開友羽子）と 100 シーズン（奥山和花）の 2 のシーズンに女子部員の主任が誕生した。また、97〜100 シーズンにはスノーボーダーのみの在籍も認め、山域を選んだうえで、スキーとスノーシューによる混合山行が実施された。

無意根小屋関係では、80 周年祭の開催、夏道の整備と迂回路の開削、スキーコース道標の設置が OB らとの共同作業として実施された。また、スキー部創部 100 年・山スキー部創部 50 年の記念行事が実施された。その記念山行として、札幌岳から手稲山までのさっぽろオートルート山行が現役隊と OB 隊のリレーによって達成された。

一方、自力下山ができず部内から救援隊が出動した事故として、冬の岩登り訓練中の八剣山での滑落骨折と夏の白水川での滑落骨折の 2 件が発生した。また、部としての活動中ではないが、福島県のスキー場でコース外に踏み込んだ現役部員が雪崩に巻き込まれ、2 人が重傷を負い、スキー場のパトロールや消防・警察のレスキュー隊に救助されるという事故があった。このことをきっかけに、スキー場コース外の行動についての取り決めがなされた。

2. 年間における山行活動

シーズンが始まって前期では秋山（10 月）・2 年目強化山行（11 月）・初滑り旭岳（12 月）・無意根新人合宿（12 月）・厳冬期（正月山行：冬本番、1〜2 月）・春山（春本番、3 月）が続き、後期にはゴールデンウィーク合宿・サマースキー・沢登り・尾根歩きなどが行われた。この順序にしたがって年間の活動を『むいね』山行記録から辿ってみる。

・秋山（10 月）

1 年生のみでパーティを組む山行（通称：1 年目山行）では、風不死岳・樽前山・恵庭岳・定山渓天狗岳・札幌岳・雄鉾岳・暑寒別岳・徳舜瞥山・ホロホロ山・駒ヶ岳などが出された。2 年目以上の山域は狩場山・日高の神威岳・夕張岳・雌阿寒岳などであった。

・2 年目強化山行（11 月）

アイゼン歩行強化山行として、十勝岳グランドコースおよび旭岳の北尾根から夏尾根経由ルート（通称：北崖乗っ越し）が合宿形式で行われ、それぞれ 1〜3 パーティが出された。旭岳北崖乗っ越しは氷雪岩登り経験として部員が共

有し、部員相互の技術確認の場所として定着しているが、天候によっては達成できない年度もあり、再度トライすることもあった。1年生には無意根小屋番でシール訓練が実施された。

・初滑り(12月)

旭岳のスキーコースで行われたが、雪不足や日程の都合で4つのシーズンでは実施できなかった。

・無意根新人合宿(12月)

合宿の日数はおおむね4~5日間で、最長で7日間というのが1シーズンあった。

・厳冬期(1月~2月)

旭岳・石狩岳・富良野岳北尾根・ニセイカウシュッペ山・愛別岳北尾根・トムラウシ山・原始が原－富良野岳－前富良野岳・十勝岳・三段山・日勝峠・ペケレベツ岳・芽室岳・チロロ岳・伏美岳・トヨニ岳・野塚岳・天塩岳・前天塩岳・チセヌプリ・ニトヌプリ、チトカニウシ山・函岳・目国内岳・白樺岳・暑寒別岳・朝里岳・春香山・積丹岳・札幌岳・徳舜瞥山・樽前山・奥手稲山・白井岳・神威岳・烏帽子岳・百松沢山・喜茂別岳・羊蹄山・尻別岳・社満射岳・たけのこ山などで活動した。95シーズンは八剣山でリーダーの滑落骨折事故(2006年12月8日)のため、正月山行は部員全員で無意根小屋での合宿に振りかえた。

・春山(3月)

札内岳・ピパイロ岳・妙敷山・芽室岳－1967峰、1967峰－ルベシベ岳、沙流岳－ペンケヌーシ岳・上富良野岳－オプタテシケ山縦走・富良野岳・前富良野岳・富良野岳北尾根・上ホロカメットク山・旭岳－トムラウシ山・旭岳・美瑛岳・オプタテシケ山・忠別岳・緑岳・ニペソツ山・ニセイカウシュッペ山・暑寒別岳・芦別岳・斜里岳・知床(ポロモイ)・羊蹄山・ニセコアンヌプリ－ニトヌプリ・白樺岳・チセヌプリ・ニトヌプリ・余別岳・積丹岳・余市岳－無意根山－喜茂別岳・札幌岳・春香山－奥手稲山、漁岳－空沼岳－札幌岳などに入山した。

・ゴールデンウィーク(4~5月)

新入部員の無意根合宿期間は4~7日間であったが、5日間が4回ともっとも多かった。93~97シーズンまでは総勢で6~8名の小合宿であり、96シーズンは新入部員がいなかったためとり止めとなった。98~100シーズンは総勢18~25名と以前の賑わいを取り戻した。2年目以上の山行では、利尻(隊員の脱臼により緊急下山)・幌尻岳－戸蔦別岳・愛別岳・羊蹄山・浜益岳－暑寒別岳・余市岳・暑寒別岳・芦別岳・オプタテシケ山・前富良野岳・ニセコアンヌプリ－イワオヌプリ・愛山渓サマースキー下見・積丹岳などに入山した。

・サマースキー

毎シーズン旭岳周辺で恒例のサマースキーが行われたが、期間は4~5日間で1~4パーティが入山した。100シーズンは愛山渓温泉に3パーティが下見に行ったが、本番は雪不足のため入山した2パーティが1日のみの行動で下山した。

・夏尾根

知床岬・知円別－羅臼岳・羅臼岳・斜里岳・雌阿寒岳・雄阿寒岳・摩周岳・斜里岳・利尻山・十勝岳・トムラウシ山・富良野岳－トムラウシ山－白雲岳－旭岳・旭岳－白雲岳－化雲岳・石狩岳・トムラウシ山－十勝岳・北鎮岳－黒岳、ペテガリ岳・カムイエクウチカウシ山・エサオマントッタベツ岳－カムイエクウチカウシ山・エサオマントッタベツ岳－札内岳・カムイエクウチカウシ山－コイカクシュサツナイ岳、コイカクシュサツナイ岳－ヤオロマップ岳・幌尻岳－北戸蔦別岳・芽室岳・剣山、楽古岳－十勝岳・平山－天狗岳・ニセコアンヌプリ－雷電山・空沼岳－札幌岳・樽前山などに入山した。また、道外では燕岳・大天井岳・槍ヶ岳・飯豊連峰・屋久島に山行が出された。

・沢登り

スタッフ層の経験不足のため96シーズンと99シーズンはとり止めた。その他のシーズンには、近郊の沢に行ったが、全員が沢経験を積むには至っていない。入門として発寒川と白水

川、その他漁川・千早川・臼別川・豊平川本流・早稲田沢・札的沢・見市川・平田内川・新井川・カウンナイ川・知床ルサ川・ルシャ川・ペンケモユーパロ川・夕黄金沢などに出かけた。随時、赤岩での訓練は行われた。

3. 山スキー部の問題点と改善点について

山行活動は、学業優先による合宿日数1～2日の短縮と上級生部員の減少による山行日数の減少、技術習得ポイントの不足、経験の不足が浮き彫りとなった。沢登りに関しては、若手OBの協力や上級生の繰り返し山行によって継続が行われた一方で、沢登りをまったく実施しないシーズンもあった。部員個人の問題としては、怪我や体調不良により山行キャンセル、夏山に参加しない部員、例会への遅刻・欠席、装備・医薬品の管理の甘さや未更新、引き継ぎの不徹底、連絡の不徹底など反省があげられている。

白水川(2010年7月10日)での滑落事故後の取り組みとして、山岳事故の情報収集や講習会への参加が促された。研究講座で過去の事故から学ぶとともに、例会でその内容に関する小テストを行い、その成績表を作り、審議における資料として用いることもあった。また、外部における講習会への参加を奨励した。北海道山岳レスキュー研究会、雪崩事故防止研究会・セミナーなどへの参加であり、普段から社会人山岳団体や山岳救助関係団体と交流し、それらの活動を知ってもらうとともに、最新の救助知識と技術を身につけるように指導がなされた。手稲パラダイスヒュッテで行われている雪崩講習会(雪崩事故防止研究会主催)には、おもに2・3年目が参加し、結果的に部員全員が参加する仕組みをつくった。

99シーズン(2011年6月)の旭岳周辺でのサマースキーでは、生ゴミや排泄物の放置などをパークレンジャーに指摘された。後日、清掃活動を行ったが、上級生部員のモラルと自然保護意識の低さが露見する結果となった。対策として、1)自然への配慮の意識をさらに高めるとともに、自然公園の法と制度について調べ、部員全員で情報を共有し、それを遵守して活動していく。2)自然公園の法と制度や自然保護、登山時のマナーについて、毎年一回以上は部内において、または北大の山岳団体を集めて勉強会を行い、新入部員にも教育を行う、という取り組みを行うことにした。

広報活動としては、ホームページが更新され、部外者にも見やすくなるように配慮された。『むいね』の編集については、46～48号が合併号となり、47号の巻末に山行記録が掲載されていないなど引き継ぎのまずさも見られた。

装備・無線については、共同装備にGPSを導入し、無線免許取得者数も増えた。それまで部として備えていた遭難対策用の携帯電話を解約し、連絡には個人の携帯電話を使用した。下山連絡先の変更などが徹底されていない事例があったため、変更があった場合には入山中のパーティ全員、下界にいる部員全員、およびOBへの連絡徹底を確認した。また、雪洞以外のビバーク方法として、雪の少ない場所でも簡単に作ることができるスノーマウント法が導入された。

4. 北大スキー部100年・山スキー部50年記念事業(第6章参照)

記念事業の準備は100シーズンから行われた。記念行事は101シーズンになってから実施された。まず、北海道大学総合博物館において「日本におけるスキーと北大スキー部の100年」の企画展示が2012年10月10日～12月16日に開催され、現役は資料作成、会場係などを担当した。「祝う会」が10月13日に北大クラーク会館で行われ、現役は受付、会場設営、チェンバロ演奏、合唱などに貢献した。翌日の10月14日は北大人文・社会科学総合研究棟でシンポジウム「スキー術北海道伝来100年にあたってスキー文化を考える―山スキー・山小屋を楽しむ―」が開催された。

現役隊とOB隊によるフラッグリレー縦走(ヒュッテンケッテスキーツアー)が実施された。100シーズン主任である奥山和花(リーダー、4年目)・上田祐太郎(サブリーダー、3年目)・大庭 健(2年目)・今原亮介(1年目)の4名からなる現役隊は2013年3月5日に冷水小屋登山口から出発し、札幌岳・空沼岳・漁岳を経由して中山峠に出て無意根山を目指した。しかし、天候に恵まれず、やむなく喜茂別岳手前から中山峠に引き返し、翌15日に、薄別経由で無意根小屋まで登り、フラッグをOB隊に手渡した。14日から無意根小屋に入っていた在田一則(リーダー、1965年卒)・香取民生(サブリーダー、1972年卒)・佐々木尚三(1979年卒：途中から倉持寿夫(1965年卒)と交代)によるOB隊はフラッグを引き継ぎ、長尾山・美比内山・余市岳・朝里岳・ヘルベチアヒュッテ・朝里峠・春香山銀嶺荘・奥手稲山・奥手稲山の家・手稲山・手稲パラダイスヒュッテをへて、ネオパラコースから3月21日に下山した。こうして、山スキー部パーティと山とスキーの会パーティは無事に定山渓を囲むヒュッテンケッテルートをスキーリレー縦走で完遂した。新聞や山岳雑誌にも報道されてスキー文化の魅力を多くの人に知ってもらう役割を果した。

5. OBとの交流

Ⅲ期に引き続いて、山とスキーの会による新人獲得支援、7月の「かんばの会」における新人部員歓迎会、「山とスキーの会の総会」と「忘年会」への現役部員の招待など、OBと現役との交流が活発に行われた。1月中旬の船木OB・丸谷OBが主催した“ニセコバフバフ”に現役部員が湯元温泉雪秩父に合流し、ニセコのパウダーを共に楽しむこともあった。1月下旬のパラダイスヒュッテ宿泊の吉岡記念手稲パラダイスヒュッテスキー合宿は若手OBが幹事となり実施されているが、全国から集合したOBによって、部活動の意義の説法や現役へのスキー指導がなされている。倉持OBが主催する2月の無意根山行には多くの現役諸君が参加・協力した。4月中旬の新人歓迎合宿については、パラダイスヒュッテ利用が定着したが、OBは付き添いあるいはスキー指導役として参加した。この合宿に参加した新入生が入部する確率が高いため、ますますその重要性が増している。

無意根登山道迂回路開通記念登山が2010年10月16日に北大山とスキーの会員・現役部員・石狩森林管理署員・支笏湖自然保護官事務所員などの参加で執り行われた。また、小屋までの夏道の木道敷設、案内板設置、大蛇が原の橋架けなどが現役とOBのボランティア作業によって実施された。小屋から山頂にかけてはハシゴ設置やササ刈りが適宜おこなわれ夏道が整備された。98シーズンのゴールデンウィークには無意根小屋80周年祭が実施され、現役部員20名とOB他44名が小屋まで一緒に登り(2011年4月29日)、無意根小屋での式典に参加した。また、冬のスキーコース道標設置が北大スキー部100年・山スキー部50年記念事業の一環として行われ、2013年4月の道標設置作業に現役が参加した。

2012年7月15・16日には旭岳盤の沢雪崩遭難40周年追悼登山が実施され、夏の旭岳に45名が集まった。現役部員が5名参加し、2度と事故を繰り返さないことを誓いあった。

シルバーロッジの住居整備については、2012年に山とスキーの会会員住友房夫氏の指導のもとに現役部員によって階段が補修され、その後ストーブと台所シンクの交換が行われた。翌年には二階の畳交換、外壁防腐剤塗装が実施され、居住性が著しく向上した。

■コラム■

北海道のスキー・冬山登山の揺籃期をささえたスキー・登山用具製作所と運動具店（記念展示『日本におけるスキーと北大スキー部の 100 年』の展示パネルより）

第 2 章

山スキー部の活動



『むいね』第 15 号より



雪煙をあげて滑る(『むいね』第 10 号より、梅沢　俊撮影)



無意根小屋(山は厳父、小屋は慈母)(『むいね』第 13 号より)

山スキー部の活動は単に山でスキーをすることだけではない。それは山スキーという行為そのものが単なる体を動かすだけのスポーツではないからであろう。競技などで代表されるスポーツは他の戦うべき相手がいて、その相手と同等の条件で技術の優劣を得点などで決するものである。実際、スキーにおいても、ジャンプに代表されるように整備されたジャンプ台で如何に飛距離を伸ばし、如何に美しく飛翔するかの飛型点で高得点を上げるかを他の選手との比較で競うスポーツがある。

しかし、スキーの原型はそのような整備されたスキー場などがまだ存在しないころから始まっていて、北大スキー部の草創期には競技どころか、スポーツという概念すら明確ではなかったのである。そこに山があり、冬とともに白い雪に覆われた山野から、さらに岩山を形成する山岳にスキー行を敢行し、最後の結論として、その頂きから滑降するという、まるで修行僧の修行のような精神的な活動をも含んだ行為であったからである。

当然その行為の相手は自然であり、その自然をまずはよく観察し、適時を判断し、大胆に挑戦し、最後の結論として深く、粗い雪氷に躍りいる行為である。自然は人間に対して妥協することなどはまったくなく、厳父の如く、われわれに試練だけを与えるのである。しかし、われわれはその試練を克服すべく思考を重ね、技術を高め、またあるときは失敗を深く反省するが、それは外の吹雪が吹き荒れる厳しい気象からわれわれを母の如く抱きかかえてくれる、薪ストーブが燃え、ローソクが点る山小屋で行われるのである。さらにはそのすばらしい活動を共有しようと広く社会に仲間をもとめるのである。

ここではそうした幅の広い山スキー部の活動全般について、歴史をひもとこうとしている。

1　山行・スキー行の活動

黒澤　努（1972 獣医）

山スキー部の活動が極めて精神的なものであり文化的なものであると言ったところで、実際に山野に立ち入り、雪山にいかなければ結論は得られない。ここでは、記録に残る山行、スキー行の歴史をまず振り返る。そこには、当初は北海道の大雪山系、日高山系など道内高所を目指していたが、やがて国内のあらゆる場所に活動の場を広げ、さらには海外にまで拡大していった歴史が刻まれている。

1.1　スキー適地を求めて（大雪・日高・本州ほか）

北大スキー部、スキー部山班そして山スキー部へと発展してきたクラブの活動の歴史は、山行・スキー行の適地開拓の歴史であるといっても差し支えない。年表をたぐれば、我が国の冬山登山の歴史の中に燦然と輝く、北大スキー部の冬期山岳スキー初登頂の歴史が明らかとなる。これらの成果はスキーを使ってこそのものであり、北大スキー部の名を高からしめたことは間違いない。しかし、その初期の活動の多くは挑戦者としての登山であり、北大スキー部から独立していった山岳部の活動の範疇の原点ともいうべきものであろう。

山スキー部の原点となる、スキーで登るところまではまさにこれらの活動が基盤であるが、その後スキー部はスキーを使って下る方向へと大きく舵を切ったように思われる。すなわち現在の北大山スキー部の主たる活動であるスキーで登り、スキーで下る、下ると言うよりスキーをすることの適地探索の歴史を考察することがのぞまれる。『むいね』29 号（1990）に現在の山スキー部の礎となった活動に関する記事が見いだされる。これに沿ってスキー適地を求めての活動を振り返る。

1.1.1　大雪山系での活動

山スキー部創設の原動力となった厳冬期東大雪縦走などもあり、それまでの僕らのふるさとムイネ等の札幌近郊の山々、ニセコ合宿に象徴される、自分たちの庭ともいえる山々から大雪山系にスキー適地を求めた活動が活発化した。とくにどの山ということだけでなく、どの斜面、どの地域にスキー適地を見いだすかの努力が重ねられてきた。

1970 年代前半にはすでに大雪山系の多くの有望な斜面にはシュプールが刻まれていった。さらにシール技術の向上、山道具の軽量化と高性能化、食料の開発などにより、冬山での行動半径が拡大していった。これらの山スキー技術の向上により、裏大雪山系の中心部に入り込み、ベースを築いて、十勝連峰東斜面、裏大雪山系西斜面、さらにはトムラウシ山南斜面などを縦横に滑ろうとする者も現れた。すなわち、大雪山系では樹林限界内の山奥深くに入り込み、周囲の好適な斜面を次々と滑降することも行われるようになった。これらは裏大雪山系縦走で尾根の上に長大なトレースを刻んだ事実をさらに山スキー技術を駆使した、これまで誰もが成し遂げられなかった、大雪山系の良い斜面であればどこへでも行って楽しく滑ろうとする意識の発露であったろう。

さらに豪雪地帯の大雪山系ならではの夏スキーの挑戦も行われた。それまでも大雪山系、とりわけ旭岳周辺では恒例行事としてサマースキーは行われてきたが、皆川・佐々木(1976)はこれらのスキー適地についてまとめた報告をしている。さらに吉田(1982)はこれらスキー適地の解説の中に山スキー部で通称される特定の場



写真 2-1-1
戸蔦別川ピリカペタン 10 の沢源頭を滑る片倉 賢。1976 年 3 月
（阿部幹雄撮影、むいね 第 16 号、2001 より）



写真 2-1-2
カムイエクウチカウシ山南西稜を行く。1986 年 1 月（むいね 第 25 号、1987 より）

所の命名由来を記載している。たとえば“ハタコロスロープ”（比布岳南西沢形：昔、ハタさんという人がここで転んだそうだ）など山スキー部内でしか通用しないと思われる名称が登場する。

1.1.2 日高山系での活動

大雪山系を縦横に経巡る活動の後は難敵の日高山系での山スキーであった。日高山系はこれまでアプローチが長かったこともあり、スキー適地とは見られていなかった。日高山系は登山の対象であり、そこに登るツールとしてスキーは使われていたが、はじめから滑る楽しみを求めて日高山系に分け入ったのも 1960 年代のことである。それまで日高山系での山スキーは北北日高と呼ばれる、芽室岳以北が対象であった。実際芽室岳での山スキーを楽しんだ記録、そしてけが人を出しても安全に下山した記録などが残されている。

北日高、南日高で山スキーを楽しむためにはまず山自体を知らなければならないが、南日高では山スキー部創立前のスキー部山班時代にペテガリ岳中の川において 2 名の犠牲者を出すという負の遺産を克服する必要があった。中の川の遭難事故後、南日高の沢は原則入山禁止として、追悼名目の 1 パーティだけが 2 年に一度、中の川を通るルートで沢歩きが行われていただけである。

まずスキー適地探索の常套手段として夏山に足を運び、適地を求めた。実際 1960 年代前半には中部日高は数パーティが沢を登り、カールの底でテントを張り、ピークを目指し、さら縦走するという山行形態は常態化していた。その後南日高にももはや追悼目的だけでなく、毎年複数パーティが入るようになっていった。

当時樹林限界を超えて使えるテントはウインパーテントといわれる、雪氷が付着すると 25kg 以上となる代物しかなかった。これではいかな強靱な体力をもってしても山スキーを楽しむなどというものではなかったが、雪洞と夏テンの組み合せによる軽量化により十分に日高でも山スキーを楽しむことができるようになった。かくして、北日高、中部日高で山スキーを楽しむ技術が確立し、山スキー部にとって初め



写真 2-1-3
幌尻岳にシュプールをしるす。1999 年 12 月(むいね 第 39 号、2001 より)

ての経験となる日高山系での山スキー適地の探索と、発見したスキー適地での山スキーを楽しむという新しい時代が出現したのである(**写真 2-1-1〜3**)。

日高のスキーの可能性については 1970 年代に多数のパーティが出たことから『むいね』17 号に片倉(1977)が当時の山行をまとめている。

日高山系は急峻でとくに中部、南日高では稜線直下は切り立った岩であり、雪崩も常に発生する地形でスキー適地は見いだしがたい。しかし、日高にはカールがあり、これに着目すると格好のスキー適地となる。すなわち稜線直下ではやや急斜面となるが、やがて斜面は緩やかとなり、カールの底は平坦なことから、万が一当初の急斜面で転倒しても、カールの底で停止できるので安全面でも有利である。ただし、いずれのカールも主稜線付近に存在するため、そこに到達するアプローチが長く、また樹林限界を超えていて、気象環境も厳しいことから相当な登山技術も必要となる。しかし、これらの厳しい条件を克服し、日高のカールにシュプールが描かれていった。山スキー部ではカールでの初滑降者名をそのカールにつける習わしが一時存在し、その痕跡も未だ残るが、今後もこの風習が続くことが期待される。

日高のカールの山スキーに関しては 1980 年代終わりに、それまでの山行記録を丹念に渉猟して石塚(1988)がまとめている。北日高のカールだけでなく南日高の未だトレースがついていないルートについても考察している。

1.1.3　本州の山々

北大スキー部山班の先輩方が北海道の山々を厳冬期にスキー登頂を重ね、ついで本州の山々に足を伸ばしたように、山スキー部でも、北海道で培ったスキー技術を本州の山々に持ち込みスキー適地を滑降しようとする動きもあった。山スキーの適地を探し、そこで山スキーを楽しむという活動である。そもそも本州出身の部員にとってはお里帰りのついでに本州の山々でスキーを楽しもうとしただけかもしれない。また本州ではロープウエー、リフトが発達し、相当な高山まで一気に上ることが可能であり、多少の悪雪を覚悟すれば十分に粉雪を楽しむことが可能であった。もっとも本州のスキー場では管理が厳重でコース外の立ち入りは原則禁止となっていて、山スキーの醍醐味の粉雪を蹴散らして山スキーを楽しむためには、スキー場が作ったルールを蹴散らさねばならないという負の側面もあったかもしれない。それでも本州の著名スキー場を中心に山スキーのフィールドが徐々にではあるが開拓されていった。(**写真 2-1-4**)

『むいね』19 号には本州の 3 大雪渓(剱岳大雪渓、針ノ木大雪渓、白馬大雪渓)を滑るという三宅(1979)の記事がある。構想はすばらしいが、すべての雪渓が適地であったとは記載されていない。

1.1.4　その他

スキーの適地は国内だけであろうか？ およそ雪の積もるところであればその適地を求めてどこへでも出かけてゆくのが北大山スキー部の活動ではなかろうか？ その意味で北大山スキー部の海外遠征にも着目すべきである。山行記録にはすでにいくつかのトレースが記録されているが、現在までのところスキーは登山の道具として使用されたことは間違いないが、はじめからスキーの適地を求めて遠征している気配は希少である。

現役の活動として山スキー部が初めて海外遠征をしたのは加藤峰夫パーティのピナクルピーク遠征である。1984 年に加藤峰夫、小塚 毅、川端康弘、青黄 靖、秋山幸久、滝龍一郎の 6 名がインド北部の 6,930m を目指した。この遠征では 6,300m 付近で下山したことからピークに到達する事はできなかったが、これをきっかけに 1990 年アラスカのローガン峰、さらに 1993 年にはヒマラヤのメラピーク遠征隊が組織された（次節参照）。

さすがに山スキー部が海外にまでスキー適地を常に求めることは困難かもしれないが、京都大学学士山岳会のように OB と現役が協力して活動を行うことでこれを達成できる可能性がある。すでに北大山とスキーの会で北米支部（仮称）が形成されつつあり、OB の間では海外でのスキー適地の探索はすでに始まっているのだから。さらに寺山 元 OB のように、1990 年に 8,201m のチョオユーに滑降目的で山スキーを持ち込みトレースを刻んだ者がいるのだから。



むいね 第 10 号より

文献

石塚吉浩（1988）日高山脈スキー案内．むいね，27 号，18–24.

片倉 賢（1977）春の北日高での歩み．むいね，17 号，31–38.

皆川幸治・佐々木尚三（1976）ゲレンデ紹介：サマースキー特集．むいね，16 号，29–32.

三宅信一郎（1979）日本三大雪渓大滑降．むいね，19 号，42–45.

吉田美樹（1982）暑中 SKIING 申し上げます．むいね，21 号，15–20.

座談会（1991）特集「山スキー部を考える」：第 1 部「山スキー部活動を振り返る」．むいね，29 号，15–19.



写真 2-1-4
立山を滑る、1989 年 3 月（横山昌宏撮影、むいね 第 28 号、1989 より）



写真 2-1-5
定山渓天狗岳中央ルンゼを滑る阪谷 聡。1989 年 2 月（伊藤健次撮影、むいね 第 28 号、1989 より）

1.2　海外への展開

秦　正樹（1992 薬学）

山スキー部の現役部員が主体となって行われた海外遠征は今まで５つある。その概要をここに紹介する。計画立案から実行に至るまでの経緯や実際の山での行動については各遠征隊が発行した報告書をぜひご一読いただき、当時の熱気を感じていただきたい。

インドヒマラヤ　ピナクルピーク（6,930m）



写真 2-1-6　インドヒマラヤ　ピナクルピーク

(1)　隊の名称：北海道大学山とスキーの会・
　　山スキー部 ピナクルピーク遠征隊
(2)　期間：1984 年 6 月～8 月
(3)　隊員構成：
　　L　加藤　峰夫（26）渉外
　　SL　小塚　　毅（23）医療・会計
　　M　青黄　　靖（22）記録
　　川端　康弘（23）装備・気象
　　秋山　幸久（23）梱包
　　滝　龍一郎（22）食料
(4)　概要：

ビザの発給が 1 か月ほど遅れ、全員が日本を出国したのは 6/16 であった。このため、当初予定していた高所順応登山をカットした。6/30 に BC へ入ったが、隊員の高所性肺水腫、クレバス転落事故などが重なった。C1（5,200m）→ C2（5,600m）→ C3（6,200m）と駒を進めたが登頂には至らず、7/24 に 3 名が 6,300m に到達した。

北千島（阿頼度島・幌筵島）



写真 2-1-7　北千島

(1)　隊の名称：北海道大学山とスキーの会・
　　山スキー部　北千島スキー登山隊
(2)　期間：1990 年 5 月～7 月
(3)　隊員構成：
　　L　阿部　幹雄（37）渉外
　　SL　石塚　吉浩（21）医療・記録
　　M　加藤　哲朗（23）食料
　　斎藤　正美（20）装備・会計・気象
(4)　概要：

5/12 小樽港よりシビリレス号にて出帆。5/13 サハリン ホルムスク港に接岸。5/19 ダラスン号にて出帆。5/21 幌筵島到着。5/25 漁船にて出港、阿頼度島到着。5/26 国境警備隊の廃屋に BC 設置。5/27 火山灰地（c350m）に AC を置く。上部の斜面を初スキー滑降。5/28 東岳ピーク登頂、c30m ほど下りスキー滑降開始。6/7 未明ポジトロン号にて出帆、セベロクリリスク港着。6/10 渡し船にて占守島に渡る。6/12 ホタテ漁船ネーベル号にて千倉着。6/13 後鍬岳登頂スキー滑降。6/14 猫山 c470m 尾根上に AC を置く。6/15 千倉岳頂上、猫山着。6/18 冠岳西尾根 c520m に AC 建設。6/19 熊のため引き返し、AC 撤収。6/20 釈迦岳登頂。冠岳アタックは熊のため引き返し。6/21 ネーベル号で出帆。6/22 セベロクリリスク港着。6/23 セベロリリスクをトボール号にて出帆。6/25 コルサコフ港着。7/1

コルサコフをエフゲーニーチャプラーノ号にて出帆。7/3 小樽港着。

カナダ　マウントローガン(5,956m)



写真 2-1-8　ローガン

(1)　隊の名称：北海道大学　山スキー部・山とスキーの会 マウントローガンスキー登山隊 1990
(2)　期間：1990 年 5 月～7 月
(3)　隊員構成：
L　吉川　友二(25) 渉外
SL　鳥羽山　聡(21) 装備
M　伊藤　健二(22) 記録・技術
成瀬　健(23) 遭対・気象
竹川　徹(21) 会計・高所順応
根岸　邦典(23) 食料・医療
(4)　概要：

6/10 にランディングポイント(2,800m)にセスナで入った。BC(3,400m) → C1(4,100m) → C2(4,850m) → C3(5,300m) と順調に高所順応を行い、6/30 に全員が登頂した。荷揚げでそりを活用し、高所スキーを行った。下山では、ランディングポイントからアラスカハイウエィまで約 190km の氷河歩きを 2 週間かけて行った。

ネパールヒマラヤ　メラピーク西峰(6,473m)

(1)　隊の名称：北海道大学山スキー部・山とスキーの会 メラピークスキー登山隊 1993
(2)　期間：1993 年 3 月～5 月
(3)　隊員構成：
L　竹川　徹(24)タクティクス･渉外

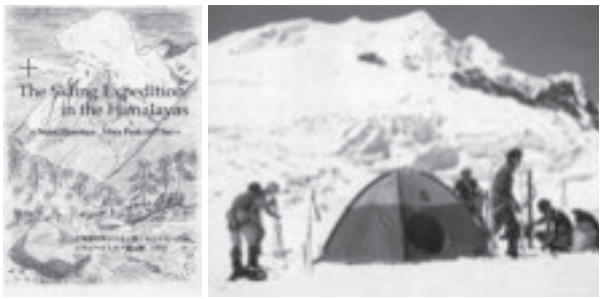


写真 2-1-9　ネパールヒマラヤ　メラピーク

SL　田村　整(23) 技術・気象・記録
M　堀川信一郎(23) 保険・遭対・雇用・会計
北川　徹(22) 高所順応・雪崩
松岡　健一(21) 装備・輸送・梱包
秦　正樹(23) 医療・食料
(4)　概要：

バスと 6 日間のキャラバン(3/28～4/2)で登山起点の街ルクラ(2,800m)に到着し、高所順応活動(4/4～4/9)を行った。サーダーやポーターらとともに峠(4,600m)を越えて 4/21 に BC(4,900m)へ入った。BC より上部の活動は 6 名で行い、C1(5,400m) → AC(5,800m) を経て 5/4 に全員が登頂した。エベレスト等を眺めつつ高所スキーを行った。

アラスカ　ランゲル山群(Mt. Wrangell 4,318m、Mt. Jarvis　4,090m)



写真 2-1-10　ランゲル山群

(1)　隊の名称：北海道大学山スキー部・山とスキーの会 ランゲル山群スキー登山隊 2000
(2)　期間：2000 年 5 月～7 月
(3)　隊員構成：
L　青山　尚広(25) 渉外・遭対

SL　金森　晶作(21)　高所順応・会計・保険
M　清水　宏益(21)　食料
宍倉　優二(22)　技術・装備
大杉　　友(21)　医療・気象

(4)　概要：

5/30 に軽飛行機でランディングポイント(2,600m)に入山し、C0 を設営した。C1～3 を経て 6/10 に Mt. Wrangell(4,318m)へ全員が登頂した。さらに C4～6、AC を経て 6/20 に Mt. Jarvis(4,090m)へ全員が登頂した。その後は氷河を歩き 6/27 に Orange Hill(900m)へ。7/2 に軽飛行機で下山した。

文献

北海道大学山とスキーの会・山スキー部 ピナクルピーク遠征隊(1986) インドヒマラヤ登山報告 1984. 70p.
北海道大学山スキー部・山とスキーの会 マウントローガンスキー登山隊(1991) LOGAN ―カナダ最高峰の登頂スキーそして氷河の旅の記録―. 113p.
北海道大学山とスキーの会・山スキー部 北千島スキー登山隊(1991) 北千島―北千島(阿頼度島・幌筵島)の遠征報告―. 86p.
北海道大学山スキー部・山とスキーの会 メラピーク登山隊(1994) The Skiing Expedition in the Himalayas ― Nepal Himalaya Mera Peak (6473m) ―. 122p.
北海道大学山スキー部・山とスキーの会 ランゲル山群スキー登山隊(2001) アラスカランゲル山群スキーの旅 ―ランゲル山群スキー登山隊 2000 報告書. 90p.

1.2.1　ピナクルピーク 1984

加藤　峰夫（1980 法）

1984 年の初夏、小塚、川端、青黄、秋山、滝、そして私の 6 人は、インド北部、中国とパキスタンとの国境に近いカシミールヒマラヤに位置するヌン・クン山群のピナクルピーク(6930m)に向けて、札幌駅を出発した。あらためて数えてみるともう 32 年も前のことなのに、今でもつい先日の山行だったかのように思い出すことも多い。それらは、以前の報告書には記さなかった些事や、行動時のちょっとした風景の記憶であったり、事実や状況は報告書に書いたものの、その時にその場にいた私自身の心の動きだったりする。そこで今回は、それが『スキー部 100 年山スキー部 50 年記念誌』に相応しい内容かどうかはともかく、今も鮮やかに浮かんでくる風景を中心に、ピナクルピーク遠征の思い出を記してみたい。

きっかけ

ヒマラヤ登山を考えたのには、「どうしてもあの山に行きたい」という、何か強い、それこそ「燃えるような想い」があったわけではない。ただ、外国の、少し大きな山には行ってみたかった。当然、スキーが利用できそうな山を前提に考えた。ヨーロッパアルプスのように一般化されたところは端から対象外なので、ヒマラヤ、アラスカ、パタゴニア等を調べ始めた。インターネットもまだ普及していないなかで、もっとも情報が豊富で入手し易かったのがヒマラヤ地域だった。6000～7000m 程度の山々の写真を集め、できるだけ頂上近くまでスキーが利用できそうに見える山を探した。目についたのがピナクルピークだった。

80 年代になると、ヒマラヤ登山といってもそれまでの「大組織・大部隊の登山」ではなく、少人数で、ちょっと長めの休日で対応できる海外山行という雰囲気も出てきていた。もちろん今のような登山・アウトドアブームは始まっていなかったし、インターネットもまだ普及していなかったが、ヒマラヤの情報はかなり入手しやすくなっていた。何より、周りを見ても、山岳部(AACH)は盛んにヒマラヤに出かけ、ダウラギリでは初の厳冬期登頂(1982 年)を成し

遂げていたし、ワンダーフォーゲル部(HUWV)もカシミールヒマラヤのZ1峰に初登頂(1980)していた。私たちでも、行って行けないことはないだろう、という気持ちがあった。

通過儀礼

時間的にも手間暇の面でも、ヒマラヤ遠征のかなりの部分を占めるのがBCに至るまでの入下山だ。ニューデリーでの買い出しは比較的スムーズに行った。メンバーの皆が、この山行を自分自身の計画として、何をどうすれば良いかをよく理解していたからだろう。しかしニューデリー到着からBCに入るまで、皆、程度の差はあれお腹を壊した。ヒマラヤ遠征の通過儀礼のようなものだ。カシミールに向かう途中のホテルの食堂で出されたコップのなかで、細かな砂粒がキラキラと光っていた。窓から見える川の水も同じような色だった。

道路終点のグルマトンガで、バスからロバに荷物を移し、まずちょっとした川を渡る。橋はない。鞍はなく手綱だけを付けたロバに跨っての渡渉となるが、おとなしいロバばかりではない。走り出したロバから一人が転げ落ちた。

BCに入る手前の大きなU字渓谷の入り口で、トランジットキャンプを設営し終えた入山初日の夕方、さすがに日本の山では見られない風景を惚けたように眺めていると、遠くの斜面で岩雪崩が起きた。見ているうちに崩れ落ちる岩や土砂の量はどんどんと増え、これは危ないのかなと思っているうちに、キャンプの周囲も砂塵に覆われた。それで済んでよかったが、山々の高度感や距離感も含め、スケールの違いに気付かされた。

クレバスの中の蒼

私の後ろを歩いていた小塚が急に消えた気がして振り向いた。雪面に穴が開いていて、小塚がいなくなっていた。BCを設営してすぐ、小塚と私がBC上部にルートの状況を見に出かけた時だ。サマースキーの際に見るような緩い雪の丘に見えたため、ザイルを付けずに歩いていたのは、雪に覆われた氷河だった。

恐る恐る穴に近づき覗き込むと、長く、そして深く切れ落ちたクレバスの途中、15mほど下に引っかかった小机程度の大きさの不安定な雪の塊の上に小塚が蹲っていた。大声で呼びかけると小さな声だが返答があった。

たまたま同時期にヌンを目指すアメリカのパーティが入山していて、そしてこれも大変幸運なことに、近くでルートの状況を見ていた。すぐに彼らに確保の手伝いを依頼し、小塚のところまで、垂直に近いか、時々ハングしているクレバスの壁面を懸垂下降した。小塚の体に別のザイルを結びつけた後、まず私が上からの補助を借りて這い上がり、次に全員で小塚を引き上げた。温度が高く雪も氷も緩んでいるため、クレバスの縁に確保支点として設置したピッケルは、この作業後にはぐらぐらになっていた。

クレバスの中に降りていく時と、小塚とともにクレバスの途中にぶら下がっている時にいやでも目に入った深く暗い蒼色と、そしてクレバスの縁から這い上がった際の、雪に照り返す眩しく暑い陽の光は、多分忘れない。

敗　退

結局6300m近辺で引き返した。C1、C2を経て、ヌン・クンやピナクルピークがそびえるプラトー(台地)にC3を設けたが、そこからテラテラと光るピナクルピークの氷化した斜面を見て、川端、青黄そして私の誰が言い出したのでもなく、そして特に相談したわけでもなく、これはダメだと思った。試しに近くの小ピークの斜面を登ってみたが、やはりカチカチだった。

この年は雪が少なかったということもあるのかもしれない。残雪量が多ければ、あるいは途中でそれなりの降雪があれば、ラッセルに多少は苦労しても、雪の斜面を中心に行動できたかもしれない。小塚の救助を手伝ってくれたアメリカ隊を含め、同時期にヌンやクンを目指した他のパーティも敗退していたようだ。

スキーの使用はもっと早くからあきらめていた。ラッセルがあるわけではなく、登りにスキーを使う必然性がなかったことと、行動序盤のクレバス転落事故のため、スキーでの滑降に、やはり慎重になっていたためだ。

しかし、登頂できなかった、そしてスキーもほとんど使わなかった一番の原因は、今考えるならば、やはり対象の山の選び方にあったのだろう。本当にスキーが十分に使えるか？ 天候（積雪量等）が与える影響はどうか？ そして予想される種々の状況に、私たちの知識や技術で十分に対処・対応できるか？ こういった調査や事前の検討が不十分だったのではないかと言われれば、頷く他はない。

次に続く踏み台として活かすために

それでも面白かった。いろいろな経験ができた。仲間や先輩方、そして数多くの方々から種々のありがたい支援をいただいた。登頂もスキー滑降もうまくはいかなかったが、しかし自分たちで長期の海外登山の計画立てから準備そして実践までを、何とかではあるがこなすことができた。数多くの反省点は、それらを改善すれば、次は登り、そして滑れるのではないか、と前向きに捉えることができる。しかしそういった経験や反省を活かすためには、やはり遠征（海外登山）という行為にも継続性が必要なのだろう。

ピナクルピークの後、山スキー部としてはアラスカのローガン峰（1990 年）とネパールヒマラヤのメラピーク（1993 年）に現役と若手 OB で組織されたグループが向かい、そして登頂しスキーを楽しんできた。ピナクルピーク遠征の経験が、たとえ反省点としてばかりであっても、これらの活動に少しでも意味あるものとなっていたのならば嬉しい限りだ。

しかしここしばらく、現役や若手 OB 主体の海外遠征の話が聞こえてこないのは少し寂しい。もちろん、山とスキーの会員の多くは、個人あるいは会員同士で、北米（ロッキー山脈等）やヨーロッパアルプス、南米（アンデス山脈）等々で登山やスキーを実践している。それはそれで楽しいが、現役の時に仲間と壱から作っていく海外登山は、また別の経験と楽しさとなる。

ピナクルピーク遠征の仲間の一人だった川端は、今も北海道大学で山スキー部の現役諸君を見守る立場にいる。彼や、そしてローガン峰やメラピークに参加した会員を通じて、これから新たな海外登山の話が出てきたときに、海外登山を計画し実践することの楽しさが、多くの経験や種々の反省点を含めて、現役諸君に伝わることを期待、いや、確信している。

（本稿では、同期や後輩の仲間の氏名の敬称は略しました。「山スキー部」の部員および「山とスキーの会」の仲間や関係者が主たる読者となる『100 年史』という性質上、御理解・御寛容いただきたく存じます。）

1.2.2　マウントローガンスキー登山隊 1990

吉川　友二（1990 水 増殖）

山旅はいつから始まっていつ終わるのだろうか？

1986 年の日高山脈ペテガリ沢での滑落事故がなかったら、この海外遠征はなかっただろう。入部して間もなくの夏の初めにその事故が起こった。

事故の日、私はユートピア牧場で働いていた。事故の連絡が入った日は徹夜で電話番をすることを命じられた。翌日は牧場から現場の沢に行った。多くの人が救助活動に集まってい

た。そこへ肩を固定した先輩が自力で姿を現した。

夏休みに予定されていた山行はすべて中止された。現役のみ、またはOBを含めて何度も話し合いがもたれた。山での事故はこれだけの大事件になることを知った。遭難の経験が風化されて、山に向かう態度が甘くなってきていることが問題にされた。その夏、北大山岳部の現役部員が日高の沢の雪渓の崩壊の下敷きになって亡くなられた。その葬儀に山スキー部員も参列した。

入部してすぐ無意根GW合宿の洗礼を受けた。合宿を終えて無意根から降りてくると、山での生があまりにも充実していたので、下界の生が物足りなく感じられた。サマースキー、週末の山行と山にのめりこんだ。そんなときに起きたペテガリ沢の事故であった。OBの方々にかつての遭難のお話をお聞きし、山へ行くことは死と隣り合わせなのだと知った。純粋無垢な気持ちで楽しんだ山との関係は終わった。初めての北海道の冬を迎えた。盤の沢の追悼登山の前には、寒いルームに亡くなられた先輩のお母さんと妹さんが見えられた。

2年半にわたる札幌の教養部(山スキー部)の生活を終えて、函館の水産学部に移行した。函館では、一人で道南の山々を登り始めた。一人で山に登るのは大学の部活動では認められない。それでもどうしても一人で山に登りたかった。他の人はなんで山に登るのかを知りたくて、山の本を開いた。戦前、戦中の北大山岳部の部報にお国づくりのために命をささげられる人をつくるために山に登るのだ、という文を読んだ。山に登るのに理由を無理につけない方が健全だ。登りたいという熱い思いがあるから、その思いに従おうと思った。

一人で山へ行っている時にラインホルト・メスナーの本を全部読んだ。8000メートル峰14座を完攀した人だ。彼の本はすべて読んだはずなのに、何が書いてあったのかを見事に忘れている。一つだけ忘れないでいるのが、何かを達成したときに、その情熱が正しかったのなら、心のエネルギーが増して次の行動へと進んでいけるのだという意味の彼の言葉だ。14座を完登するのに16年かかって、その16年間で8000メートル峰への遠征を30回近くしている。自分は日本海から太平洋を歩くアイデアに夢中になって、遊楽部山塊と狩場山塊の山を歩いていた。

テントの中で読んでいたメスナーの本に「カナダ最高峰、マウントローガン、スキー初登頂(メスナーではない部隊)」という記事を見つけた。スキーで登頂できる山なら、自分でも登れるに違いない。5000円のテレフォンカードを買って、水産学部の北晨寮の公衆電話からカナダの国立公園に電話をする。単独山行は認められない。山スキー部に声をかけると、メンバーが集まってくれる。最終的に同期の4年目の伊藤、成瀬、3年目の鳥羽山、2年目の竹川、根岸のパーティになる。

この海外遠征の目的は、けた違いに大きな海外のフィールドで山スキー部の普段着の山行をしようというものだ。できるだけ長期の山行をして山の生活にどっぷりと浸かりたいという夢をかなえるために、マウントローガン登頂をした後に、氷河の生まれる頂上から氷河の終わるアラスカハイウェイまで氷河の一生をたどる旅も計画に入れる。

函館に住んでいた私は、準備や審議の度に深夜バスで札幌と函館とを往復した。審議が開かれる朝、早朝に大通りに着いて地下鉄を乗り継いで琴似駅へ、駅からロッジに向かって歩いている。審議の準備も完ぺきではなく、足取りも重い。狭い路地を大型のバンが私を抜かしていく。バンの中にはソフトボールのユニホームを着た女の子がすし詰めになっている。バンの後ろに、後ろ向きに女の子が3人座っている。中学だろうか。これから試合へ行くのだろう。私と目が合った一人が、笑顔で大きく手を振ってくれる。その笑顔にパッと心が明るくなる。私も手を振り返す。今でもその笑顔を思い出すと

励まされる。

実際の山旅については何とか山行報告書を見つけて読んでください。メンバーたちの当時の思いが伝わってきます。日程は1990年5月28日に札幌を出発、バンクーバーからバスでホワイトホースまで。クルアニ湖から6月10日にセスナ機で入山。6月30日に登頂し、氷河を歩いて7月17日にアラスカハイウェイに下山した。初めての海外旅行と世界で3番目に大きい氷床地帯を思う存分に楽しんだ。

山行を振り返ると、成功のカギは高所順応にあった。リーダーの私が一番高度障害があった。それは山旅が終わった後に、自分のむくんだ顔の写真を見て、初めて認めることができた。山の中では自分が高度障害であることを認めたくない心理が働いていた。

自分の心の状態が異常(焦っている、イライラしているなど)であるか、正常(穏やかな心、平常心)であるかを感知するアンテナを立てて、常に平静な心に修正する努力が必要だ。日常の意識よりも少し敏感な心の状態。それを瞑想状態というのか、スポーツでいうフローの状態というのか？ 全存在をかけて、謙虚に夢の力までも借りてまでも安全を判断しなければならない。人生には必要のないことは起こらないのだから、今の自分には事故は必要がないという確信を持って行動できたら良い。日常にそんな訓練をしていれば、高度障害があっても、正しい心の状態を保てると思う。

1ヶ月以上カナダの山や氷河を歩いてから日本に帰ってくると、時間がとてもゆっくりと流れていて、1日がとても長くなんでもできるような気持ちになった。しかしそれは数日でいつもの慌ただしい毎日の生活に戻ってしまった。山の中での時間の流れと、下界での時間の流れは違っているのだ。

バブルの最中にはバブルという言葉はなかったのだろうか？ 就職活動もしないで山に行っていた私はバブルとは縁がなかった。ローガンへ行ったときは大学5年目4年生で、大学院へ行くのか、それとも自給自足の農業をするのか、迷っていた。大学生最後の春休み、函館の友人二人と共に1839峰へと向かった。ピーク直下の核心部もザイルを出して無事に通過し、下山をする。主稜線も終わり、灌木が見え始めて緊張も解けて前の人が歩いた踏み跡どおりに歩いていた。すると目の前の尾根が突然なくなった。雪庇の雪のブロックと共に枝稜線を落ちた。気が付いた時にはアイゼンの前の歯が斜面に刺さって、斜面に向き合う形で立っていた。

人生やりたいことをやらなければ短いことを悟る。下山して帯広で山仲間と別れ、斜里町で農業を始めている山スキー部の先輩の田村さんを訪ねることにする。山スキー部で身につけた最良のことの一つがザック一つさえあればどこでも生きていける、という自信である。釧路で野宿をして、斜里駅から、斜里岳の山麓にある田村さんの農場へと登って行く。海から吹いてくる春一番が背中を押してくれる。海を見下ろしながら、なんともすがすがしくせいせいとした気分で歩いていく。

“アラスカの風を日本へ送ってくれ　欲することを善というなら”

下山をしてアラスカで別れ別れになる仲間たちに送ったうたである。

農業へと一歩踏み出してからは、山への情熱はどこかへ行ってしまった。進む道はそれぞれ異なっても、一緒に山を歩いた仲間の心に今でもアラスカの風が吹いているに違いない。



こなゆき 第23号より

1.2.3　メラピークスキー登山

秦　正樹（1992 薬）

竹川(L、OB1)、田村(SL、HUSV3)、堀川(OB1)、北川(HUSV3)、松岡(HUSV3)、秦(OB1)の6名がネパールヒマラヤのメラピーク(6,473m)に登頂したのは、1993年5月4日のことであった。報告書を読み返しながら、当時の様子を振り返ってみよう。

メラピークの概要

メラピークは、ネパールヒマラヤ東部のクーンブ山群に聳える、標高6,473mの独立峰である。ネパールヒマラヤには世界最高峰のエベレストをはじめ8,000m峰が8座も聳え立ち、「神々の白い峰」が世界の岳人を魅了している。ネパールヒマラヤの登山は、観光法や登山規則により解禁峰・許可取得手続き・登山料・登山期間・ポーターの日当・保険・支給装備などが細部まで規定されている。許可峰はエクスペディション・ピークとトレッキング・ピークに大別される。メラピークはトレッキング・ピークに属し、ノーマルルートには登攀要素がなく、比較的容易な山として紹介されることが多い。ただし、ベースキャンプまでのアプローチに4,600mの峠があるため、順応に失敗するパーティもある。頂上付近からはエベレスト等の名峰を眺めながらのスキー滑降が楽しめる。

先発隊(秦・松岡)

3/17：先発隊2名が出国。ソウルとバンコクを経由して3/18にカトマンズへ。空港ではサーダーのダワが出迎えてくれた。翌日から諸許可の取得、食料・装備の買い出し、ネパールスタッフの雇用などを行った。

後発隊(竹川、田村、堀川、北川)

3/24：後発隊4名が出国。3/25：カトマンズで全員が揃う。3/26：食料の買い出しとエージェントとの打ち合わせで忙しく過ごした。

キャラバンⅠ

3/27：カトマンズ→(バス)→ジリ

7：45カトマンズをバスで出発する。出発後まもなく雇用条件の交渉が決裂し、ポーターに逃げられ40人乗りのバスが寂しくなる。エンジントラブル等のアクシデントも続発し、バス終点のジリに到着したのは20時45分であった。ロッジの小汚いベッドに吸い込まれるようにして寝入った。

3/28～4/2：ジリ→バンダル→セテ→ジユンベシ→マニデインマ→カルカテン→ルクラ

ジリから先に車は行けない。ここからルクラまで6日間のキャラバンⅠで体を慣らす。山間の農村をつなぎながら標高2,000～3,000mを東へ向かう6日間の山旅は、トレッカーも比較的少なく、シェルパ族の暮しやヒマラヤの風土に接することができてとても楽しかった。また、デオラリ峠(2,720m)、ラムジュ峠(3,530m)、タクシンドー峠(3,070m)を超えることで徐々に高度に慣れ、非常に良いウォーミングアップとなった。

キャラバンⅠのゴール地点ルクラ(2,800m)には、セスナ機が発着できる未舗装飛行場がある。エベレスト方面へのトレッカーや遠征隊の出発地点であるルクラを拠点にこれからしばらく高所順応活動を行うのだ。ルクラでコーヒーショップを経営するアン・パサン・シェルパには本当に色々とお世話になった。

高所順応活動

4/4～4/9：今回の遠征の最大の難所ともいえるのがザトルワラ峠(4,600m)である。登りの急斜面は雪崩の危険があるし、峠を越えてから高山病等が発生すればエスケープは非常に困難

となる。そのため、我々はルクラやチュタンガ(3,400m)をベースにカルカテン(4,000m)やザトルワラ(4,600m)を往復し、峠の手前で十分な高所順応活動を行った。

降雪による停滞とキャラバンⅡ

4/10～4/16：降雪でザトルワラ峠は雪崩の巣と化した。弱層テストをしてみると、発砲スチロールのようなサラサラの層が25cmもあった。雪が落ち着くまでカルカテン(4,000m)での停滞を強いられた。

4/17～4/22：カルカテン→ザトルワラ峠→タクトゥ→ターナ→BC(4,900m)

ようやく雪が落ち着きキャラバン再開。早朝、ステップを切りながら急斜面を登り、無事ザトルワラ峠を通過した。3点支持が必要なところもあり緊張した。ヒンクーコーラ沿いのシャクナゲが咲き乱れる森の中を通過し、標高4,000m程からは樹林がなくなる。ターナで休養とBC往復による高所順応活動を行ってからBC入りした。

登山活動

4/23～5/5：BCからメラ氷河末端(5,200m)までの往復やメララ(5,400m)までの往復と休養を5日間で行い、4/28にメララにキャンプを作った。メララからAC(5,800m)までの往復や標高6,000mまでの往復を行い、4/30にBCへ戻った。翌5/1はBCで休養し、5/2にメララ入りし、5/3にACへキャンプを移した。5/4はいよいよピークアタック。2：00に起床しラテルネをつけて4：30に出発。固い斜面やクレバスに注意しながら登る。東峰基部にスキーをデポしアイゼンで登る。12：00についに全員で西峰頂上に立った。皆でがっちりと握手を交わし大漁旗を広げて記念撮影。西峰頂上から東峰基部まで戻り、いよいよピーク直下からのスキー滑降。ヒドゥンクレバスに注意しつつ、薄い空気に息をきらしながら楽しむ。眼前にエベレスト、チョーオユー、アマダムラムを見ながらの最高のスキー。ヒラヒラになりながらもACへ。12時間の長い行動であったが、全員無事にピークに立ち大満足。5/5はゆっくりとACを撤収し、ザラメの全装スキーを楽しみながらBCへ。BCではサーダーのダワをはじめとするスタッフ達に温かく出迎えられた。コックのサルキーが作ってくれたケーキで大成功を祝った。

帰途キャラバン・解散

5/6～5/8：BCを撤収し、5/8にルクラへとたどり着いた。翌日、当初の予定どおりパーティは解散した。北川はネパールスタッフとジリまで歩いて戻った。竹川、松岡、秦は飛行機でカトマンズへ戻った。堀川と田村はナムチェ方面のトレッキングに出発した。

1.2.4　アラスカランゲル山群遠征から今まで

青山　尚広（1996 理 物理）

あれから16年が経った。

当時は海外の山で、北海道でやっていた北大山スキー部の活動ができたらいいな、と考え、あとは猪突猛進という勢いで実行まで突き進んだ。考えるよりもまずは行動すべしだろう、というノリではあった。しかしながら、某先輩に言わせると、「青山は行動よりも頭で先に考えてしまう傾向が強いからなぁ」、という感じで、随分、恐る恐るやっているように見えたようである。

そもそも、北大山スキー部の現役時代4年間で私が得たものは、山を通じて自然と一体感を

得ることが少しばかり感じられた気がした、というものであった。言い訳がましいが、学生の本分である学業そっちのけで山に籠った生活は生きた学業である、とある種の開き直りが混じった自分への説得を心の中で試み、そして開眼した結果の行為だ、と今は解釈する。そうは言っても、当時の山行計画に対する議論や、山という現場における判断力や忍耐力、そして、スキーや山に登るという行為の至福感は、大学構内では決して学ぶことができなかった内容だ。今のご時世、大学教育も相当、手取り足取りで大変だと聞く。しかし、日本古来(？)からの一子相伝、免許皆伝的な、自ずから察し学びとれ的な側面を、現北大山スキー部は今でも保持していると信ずる。

さて、現役を終わり、やっと学生の本分である学業に本腰を入れ始め、いざ科学の世界に入り始めた頃、紙と鉛筆だけで進めている自然現象へのアプローチが、未熟な自分にはまだ釈然としないものとして横たわっていたのであろう。そんな時、目の前にいた山スキー現役部員や若手 OB、そして、当時出始めた山スキー ML における先輩諸兄の山談義、特に、三浦雄一郎エベレストスキー滑降遠征に関わるこぼれ話などの影響で、私は外国という舞台で山スキー活動ができたら何か見えてくると感じたのだと思う。思い立ったら突き進む性分なので、即、頭にあがったのが、当時石塚さんらが計画してボツになった内容だ。これを拝借したら比較的楽に計画でき、すぐ行けるんじゃないだろか、と妄想した。そして、近くにいた者をなんだかんだと丸め込み、あの 5 人で事を進めることになった。過去に山スキー部で遠征にいった方々に相談にのっていただいたり、現役に山行審議をしてもらったり、寄付を募ったりと様々に事前準備は大変であった。会社内で例えるなら、何か一つの大掛かりな企画をする、というものであった。もう時効なので、今明かすと、現役に山行審議をしてもらってからの数日後、後頭部に 10 円ハゲならず、500 円玉大のハゲができた。若手 OB が勝手に立ち上げた計画のおかげで、現役活動に支障をきたすという無言の視線を感じつつ、まずい点を指摘され、それでも走り出したらやらねばならぬという、我ながらの若気の至りによる自業自得の結果であった。四苦八苦したが、現地に行ってしまえばこっちのもの。あとは北海道でやってきたことの繰り返しで、ランゲル山群は対応できた。金がなかったので、衣類なんかもずいぶん貧弱であった。ダイエーで購入した 900 円ジャージのズボンでも十分対応できた。しかし、時間不足や技術不足のため、のっぺりした山を舐めるように登り歩きスキーをしたに過ぎず、氷河から雲の上まで突き出たブラックバーン山を登られない計画にガッカリしたのは、私も含め隊員も感じていたようだ。1 ヶ月におよぶ山の中での生活は、体が汚くなるのはもちろんであったが、感覚がじわじわと野生化するような気にさせられる。それが、山をやっている人間のある種の醍醐味なのかもしれない。言わば、山感覚が身につく錯覚に陥る。少なくともあの遠征ではそれが感ぜられた気はする。

その後、学業と研究に励み、細々と山には行っていたが、遠征から 3、4 年後に、山感覚は研究をする上での直感にも何となく必要なものなのではないか、という錯覚に陥り、より強くかつコンパクトに感じられる活動はないかと考えた。現役の頃の夏沢がそれを具現化していたような気がしていた。冬の尾根歩きよりも、むしろ日高のような急峻な沢登りにおける危険との隣り合わせのような状況では、人間が本来持っていた第六感的なものが働き始める気がしていた。この山感覚をより強く感じてみたいと思い、水平的な山よりも、垂直的な山をやってみようと考え、社会人山団体の札幌登攀倶楽部の扉を叩いた。すでに博士課程を修了し、研究生として食いつないでいた時期であった。壁に張り付く技術を少しずつ身につけていった。ところが、研究生として半年後に渡仏することとなりこの活動はしばし休止となる。それでも、

フランスでポスドクとして1年を過ごしていた時は数回、本場アルプスにて山スキーを行った。アラスカとアルプスでのスキーを経験して、北海道の雪質は現在謳われているがごとく、やはり世界一なのではないか、と感じた。が、目の前に本場アルプスの壁があるにも拘らず、垂直の世界になかなか近づけない状況に歯がゆさを感じたフランスであった。その後、日本に戻り、千葉の物性研究所で2年半を過ごした。東京の社会人山団体である東京YCCに入会し、泥臭いジャパニーズアルパインをしていた方としばし山に行き、何かしらの山感覚を共有できた気がした。それは、山スキー部にはない用語で象徴される、「山屋」という臭いだ。

研究方面は自分の未熟さと、日本の最高学府における研究体質との折り合いの悪さ、流行を追いがちな雰囲気、そして、自身の自然現象に対する直感がイマイチなのが強く感ぜられて、アカデミックからは足を洗った。

自然科学を追求するつもりが、随分と肌で自然を感じることから遠のいたと感じていた。そして、将来の幸福と自然をよりダイレクトに感じる職業に就こうと、これまた発作的に考え、農業に目が向いた。幸い、ローガン遠征隊長の吉川さんが就農していたこともあり、藁をもつかむ思いでこんな自分でも農業に携わることができるか、と一筆伺い、上士幌の酪農家に転がり込んだ。無論、そんな時に山スキー部のユートピア牧場が存在したら、逃げ込むようにそこに転がり込んだかもしれない。水谷先生の遺稿集にあったユートピア牧場に対する理想は、私の思い描くものにいまでも合致している気がする。私のような若輩で、当時のことも全く知らない者がこの場を借りてそれに触れるのは、その当事者たる諸先輩たちには極めて失礼なことかもしれないが、あの思想はすばらしく、そして、羨ましい理想郷だと思う。山スキー部にはあのような思想が陰に陽に後輩にも伝えられている気がする。山の歌唱もその端末の一つだと感じる。今でも私の中にある、生きていく理想の姿は、あのようなものだと感じている。しかし、上士幌では農業の現実を見せつけられた。「経営」という避けられない経済との関係性。そのもとにおける労働。2年半の労働を通じて私の中では自然をよりダイレクトに感じる、というよりも、日々、効率性というものが頭の中を支配していた。追い打ちをかけるように、私の中の幸せも蒸発していった。

そのような最中でも、休日には垂直の世界にせっせと足を運び、山感覚を得ようと必死に岩場や十勝のカミホロ、氷瀑群と格闘した。当時、日本では数名の若者が日本の泥臭い冬壁に繋がるスピリットを海外の山壁にも積極的に応用し、そして、成功させ始めた時期であった。私はその若者たちよりもひと回りも遠回りをし、やっと垂直の世界に慣れ親しみ始めたばかりであった。若者たちは自由に狙った山のラインを攻めに行っていた。それは、16年前のランゲルで、山スキー部が北海道での山行と同じ感覚で海外山域に行ければいいな、と夢想した状況の理想化に近い。

ランゲルの後、現役からは遠征は出てないようだ。若いOB連中の様子を風の噂で色々と耳にしたところによると、あの後の流れは、むしろ、卒部しても山をやりたい者が、山スキー部という組織のしがらみから抜けた領域、すなわち、学生登山団体という責任から全く独立した形で、個人で遠征するという形が流行ったように見える。私自身も、社会人山岳団体という組織内での遠征に行ったが、学生という様々なしがらみを抱えた団体とは異なる、ドライな責任に包まれた中での遠征であり、しがらみは少なかったと感じた。そして、山好きな者同士が意気投合して、先鋭的な事をやる、という風潮がここ何年かのちょっとした流れになっていると思われる。自分も少しはそういう潮流に乗った気はする。それは、自由に山を楽しむのはいいじゃないか、自由は素晴らしい、だから、俺も私もあの山のラインを登りたいから一緒にやろうぜ、というノリで始まるやつだ。しかし、

そこには非常に危険な一面が潜んでいる。無茶をすると、山の中での、あうん、がわからず、究極の場面で死に直面することにある。山岳部の若手 OB である白石とはパートナーとしてよく冬壁に通った。そして、そろそろ垂直の世界における行為も油に乗ろうとしていた矢先に、彼はアラスカの地に逝ってしまった。彼も私も、そして当時北海道の冬壁をやっていた連中は皆、海外の山のラインを目指して、懸命に山に行っていたと思う。自己の目標を到達するために、技術、時間、センスが似たような者を探しあて、安易にパートナーを組む。それが、危険との隣り合わせであった。

私自身は、その後、北稜クラブの渡邊大三とニュージーランドの Mt.Cook 東稜を 36 時間ノンストップでやったり、フリークライミングを 12 台後半まで登ったり、6 級の氷瀑を登ったり、冬の利尻を数回やったり、富良野岳～旭岳まで 23 時間で歩いたり、厳冬期に一人で室蘭岳から中山峠まで歩くなどしたり、労働者の限られた時間内で集中力の要する行為をある程度やった。どれもこれもトレーニングが重要となるものばかりだ。ストイックな努力やある程度のタクティクスで自己能力を開発し、山に挑戦する事には様々な楽しさが存在する。しかし、山感覚が覆されるほどのものが毎度あるか、というと、そうでもない。吹雪におけるカミホロのクライミングや、初めて落とした初段のボルダーなんかは、その行為の刹那にギラッとしたり、集中力の異空間へトリップしたりするような場面があったとも思える。23 時間縦走では、真夜中の旭岳温泉への下山途中、教え子の悪ガキがずっとそばにいてくれたような感覚もあった。そういったことは、野生の鹿が雪崩れる斜面を事前に判断することに近いものだろうか、まさか最近流行りの量子生物学的効果が効いているのだろうか、その辺はまだわからない。

そんな垂直の世界に邁進していた時期に、自然を感じることから随分とかけ離れた牧場従業員からも足を洗い、極めて消極的な理由で高校教師に転じた。自然というより、今は若者と対峙する日々を送っている、というと、半分は正しいが、半分は嘘である。その半分は半官僚主義的世界に埋没している、と言ったほうが当たっている。これまた、日本の悪しき不文律にムッとしながらも若者の良さを伸ばすことと、そこに介入してくる様々な責任転化的対応に葛藤する日々で辟易している。ただ、俗っぽく言うと教育は計りえない行為であることから、想定以上の成長がしばしば子供の中に生じる。それが、この仕事の醍醐味だと感じてはいる。そして、その行為の中に未熟だった頃の自分を重ねたりすることもある。

さて、このように好き勝手なことばかり行ってきた自分にも、年貢の納め時が到来し、今更ながらもう一度原点回帰すべき時期ではないか、という気もしている。科学を若者に教える身になって、身近な現象に面白いことが沢山隠れている、ということがここ数年随分と身にしみて感じる。コマの運動などのおもちゃの数理をしている、時枝 正さんという天才的な学者が述べていたことが今の自分には教訓的だ。彼曰く、「巨大科学における探究心も、身近な自然現象における探究心も変わらない。そして、遊び心が探究心の始まりである。小さい子供の行為がそれを如実にあらわしている」。何も肩肘を張る必要はないのだ。更にそれは山にも通じるであろう。すなわち、大きな山に登るのも、小さな山に登るのも変わりがない。山が好きであるならば、どちらも同じであろう。このような考えが、今の私の身の丈に合っている。だから、あの頃のランゲルは、今の自分にはムイネ山とも同等となりうるのだ。

2　遭難と事故の記録―遭難とその対応―

片倉　賢（1977 獣医）

はじめに

本稿では、北大スキー部山班および山スキー部の 1949 年から 2011 年までの約 60 年間の遭難、事故ならびにヒヤリ・ハットの事例について、『北大 OB スキークラブ会報』、『むいね』、『山スキー部部報』および部室にあるオリジナルの山行記録（北大山とスキーの会の HP、http://www.husv.net/ から PDF 版の一部がダウンロード可能）をもとにまとめた（表 2-2-1）。

発生件数は 41 件で、遭難者は 74 名、そのうち死亡は 9 名であった（表 2-2-2）。遭難人数がもっとも多い遭難原因としては雪崩であり、その数は 24 名であった（表 2-2-3）。各事故の詳細については、それぞれの報告書や『むいね』誌上の報告や記録（表 2-2-4）を参考にしていただきたい。

事故後の反省や対応策に関する記載を、当時の部長、主任、リーダー会、当事者あるいは上級生の文章から下記に抜き出してみた。ここでは、その中から死亡に至った遭難例や捜索隊が出動した重要事例についてのみ転載した。当事者の苦悩のみならず部員の相互信頼をもとにした未来への取り組みが読み取れるであろう。

実際には何倍ものヒヤリ・ハットがあったはずであるが、50 年以上にもおよび当時の記録を忠実にふりかえり、整理することで、命の大切さを再確認し、尊い命を失わないための参考資料となれば幸いである。

◆　ペテガリ岳中の川遭難（表 2-2-1 事例 6）（スキー部山班 リーダー会、むいね 第 3 号）

反省

当時の状況より判断すると、このたびの遭難事故には、その特色として次の点が挙げられる。

一、事故は一見危険の感ぜられない地点で起きたこと。
二、事故はその日の行動開始の直後に起きたこと。
三、パーティ中のオーダーに誤った点は無かったか。

以上の点をもとにして、この度の事故の原因を究明すると共に、我々が日頃の山行に際して守らねばならぬ注意事項や、山行以前にも心がけておかねばならない日常の心構えなどを学びとろうと思う。

一、まず一見危険とも思われない地点で、この様な事故が起きたということより判断されることは、地形に対する判断の甘さ、即ち危険な所を安全と見誤ったことか又は技術的不備の為、どんな場所にも存在し得る僅かな危険が重なりあって、クローズアップされる結果となったものかとも考えられる。何れにしても、山行中の各人は常に周到な注意力を各方面に配っていることの如何に必要であるかを痛感する次第である。

二、事故がその日の行動開始の直後に起きたと云う事は、危険箇所を通過する為の周到な心の準備なしに、行動が起された事を意味しよう。このことは、行動時に於ける隊員各自の気持の持ち方の問題であるばかりでなく、リーダーの心構えの問題でもある。リーダーの役目は隊を整えて、これを導く事にあるが、これには外面的な事ばかりでなく、内面的には隊員の心を常に把握していて、山行目的に合致する様に、これを導き、ある場合は危険に対処しても、これを安全に切り抜けられる様な準備を、隊員に整えさせる事か、又は隊員相互間の心の調和をはかるという事も含まれているはずである。この様な事はリーダーは勿論、隊員も良く

表 2-2-1　遭難、事故、ヒヤリ・ハット一覧

事例	山域､山岳名、沢名	発生年月日	構成人数	遭難者数役割[a]	態様	原因	概要	出典
1	無意根山	1949/1/4	8	1 M	死亡	スキー転倒 立木に激突	無意根合宿(1 月 2-4 日、22 名参加)後 8 名が残留。山班員小池が無意根小屋前の斜面でスキー滑降中雪下の木株に引っかかり樹木に激突した。頭蓋底骨折のため死亡した。	北大 OB スキークラブ会報第 6 号
2	無意根山	1958/5/17	1	1	死亡	沢に転落 後頭部強打？	新入部員の高倉が、無意根小屋番のため登山中、宝来沢・電光坂付近で遭難した。(クマに襲われ、逃げる途中に沢に落ち、300m 程流されたと推測されている。)	むいね 1 号 山スキー部部報
3	音更山	1959/3/16	9	1 M	負傷	雪崩	十勝三股御殿経由で音更山を登頂後、音更山の第 3 尾根を下山中、1,300m 地点で二番目滑走者の M 塘が表層雪崩に巻き込まれ 100m 流された。左脚打撲、顔面骨折で歩行困難となり、また、スキーも消失し、スキー板でそりを作り下山した。	山スキー部部報
4	ニセコ 目国内岳	1959/12/23	6	6	無事 6	道迷い	青山温泉(昆布温泉郷)を合宿所として約 60 名のニセコ合宿中、斉藤をリーダーとするパーティーが目国内岳から新見温泉へ戻る途中、道に迷い雪穴を掘ってビバークした。スキー部から 2 パーティー、自衛隊から 1 パーティーの捜索隊が出動したが、翌日、自力下山して温泉に到着した。メンバーに怪我はなかった。	山スキー部部報
5	芦別岳	1960/5/5	9	1 M	負傷	スキー転倒	芦別岳新道をスキーで下山中、M 谷沢が立木の周りの穴に落ちて腹部を強打した。痛みを訴えたのでスキーをはずし、徒歩で下山した。右腎臓破裂で入院した。	山スキー部部報
6	ペテガリ岳 中の川 上二股付近	1960/8/2	4	2 SL、M	死亡 2 水死	滑落	前日はペテガリ岳下降尾根を降りて中の川上二股でキャンプした。当日朝、出発後まもなく、高さ 3m、傾斜 30 度位のナメ滝の上部を先頭で下っていた M 山室が視界から消えた。あやまって落ちたと思われる滝の淵の中で、キスリングを背負ったまま泳いでいたが、思うように前に進んでいなかった。泳ぎのうまい SL 山下に救助をたのみ、補助ザイルを渡した。山下はそれを受取るとすぐ滝の上を滑る様にして函の中へ入っていった。3、4 かきで山室の所に達したが、山下は山室を救助することなく、水の中にひきこまれていった。浮いていた山室を引き上げて人工呼吸を続けたが、蘇生しなかった。山下は水底に沈んでいたが、あとになって流れ出てきた。遺体を収容し、後日、現場で荼毘に付した。	むいね 3 号
7	ニペソツ 南側尾根	1965/1/8	4	2 L、M	無事 2	滑落	ニペソツ登頂後、南尾根を三番目に歩いていた M 岡田がキスリングの上に固定してあったスキーの片先を斜面にひっかけ、その反動でスリップし滑落した。その時、2m 下で腰を下ろして、キスリングをはずそうとしていた L 在田のキスリングを引掛け、更にそのキスリングは在田を押して、三つ共に滑落、岡田はキスリングをつけていたため、約 20m で停止、在田は約 50m 滑落したが、アイゼンが雪面に引掛って上体が起き、立つことができた。キスリングは丁度在田の真上に滑り落ちて来て無事収容することができた。	むいね 7 号
8	旭岳	1965/6/17	12	1 M	無事	病気 盲腸炎	サマースキー中、北大スロープベースキャンプで M 野原が急性盲腸炎となり、旭岳石室からヘリコプターで病院に搬送した。	むいね 8 号
9	ペテガリ岳 中の川	1968/8/2	4	1 M	負傷	滑落	ペテガリ下降尾根を降りて中の川二股で追悼をした翌日、中の川の下りで M 田村が 4m 程滑落し、あごを強打した。傷がひどかったのでその場でテントを張り、翌日、下山した。	むいね 10 号
10	十勝岳 山頂付近西側の尾根	1968/11/25	6	6	無事 6	道迷い	十勝岳本峰登頂後、夏道尾根を見失ったことに気づいたが、現在地不明のため横山、藤永の 2 名は位置確認のため四方を偵察し、上ホロカメットク山への尾根上にいることを確認した。これ以上の行動は危険と考え、その尾根の小雪庇に雪洞を掘り、明朝までビバークした。翌日に自力下山した。	むいね 10 号
11	札内岳 札内川 七の沢附近	1969/8/4	5	1 SL	負傷 打撲	徒渉失敗	札内川七の沢手前を渡渉するとき、手をつないで渡ろうとしたが、危険と思い引返した。その途中で最下流にいた SL 飯田が約 300m 流された。	むいね 11 号
12	チロロ岳 千呂露川二股沢 三の沢出合附近	1969/8/9	4	3 SL、M2	負傷 3	落石	チロロ川二股沢三の沢出会い附近の滝を登っている最中に落石が起り、それにより M 岡野、M 岩井が顔面に、SL 武田は足にケガをした。同日下山した。	むいね 11 号 私信
13	芽室岳	1970/3/29	5	1 M	負傷 骨折	スキー転倒	芽室岳の標高尾根をスキー下山中、M 松井が転倒し骨折した。翌日、下山したのち入院した。	むいね 12 号

事例	山域、山岳名、沢名	発生年月日	構成人数	遭難者数 役割[a]	態様	原因	概要	出典
14	白井岳	1970/4/13	3	1 M	無事	道迷い	余市岳からの下山中、風雪強く道を失う。また、M須川が雪崩に遭い、シール、バッケンと故障が続き、時間をロスしたため1,290mと589mとのコルでビバークし、翌日下山した。	むいね12号
15	赤岩	1971/6/5	4	1 L	意識消失	転落	中チムニーの下をトラバース中に軟土に足を取られてL原が転落した。しばらく意識を失ったが、気がついて道まではい出した。通行人がいたので、救急車を呼んでもらった。	むいね13号
16	旭岳 盤の沢	1972/11/21	6	6 L、SL、M4	死亡5 窒息死 無事1	雪崩	天候悪化のため、予定されたベースキャンプ地手前の盤の沢にて幕営した。同夜11時頃、除雪作業中に雪崩に襲われた。除雪のため外に出ていたM岩瀬は流されたが、助かった。L後藤と及川、瓜生、川上はテント内で死亡し、除雪のため外に出ていたSL星野は雪崩に巻き込まれて死亡した。	報告書 むいね14号 むいね15号
17	無意根山 白水川	1973/8/1	5	1 M	無事	疲労	白水川遡行後のブッシュ漕ぎにおいて、M等々力が疲労を訴え、ついで歩行不能になる。容態は急変し、寒気を訴え、顔面蒼白ついには呼吸困難に陥った。Mの一人が無意根山経由で薄別に下り、救援隊派遣を要請したが、当人は自力下山した。	むいね14号
18	札内岳 札内川 キネンベツ沢 札内岳直下	1973/8/11	4	1 L	負傷	転落	SLは滝の左岸の足場が悪く落石が多い急なガレ場を登りつめてブッシュ帯をトラバースして滝の上に出た。L和田は、隊員には無理なコースと判断し、右岸の岩場を登り始めたが、岩場の途中でホールド、スタンスの確保にゆきづまり、ホールドにつかんだ浮き石と共に転落した。バウンドしながら下のガレ場まで25〜30m落下し、自力行動が不可能となった。Mの一人が和田に付き添い、他の2名は下山し、救助隊を要請した。救助隊は翌日に現場に到着し、翌々日に和田を札内岳山頂まで担ぎ上げた。和田はヘリコプターで救出された。	むいね14号 むいね15号
19	中の岳 ペテガリ沢川 中の岳直登沢	1976/8/8	4	1 SL	負傷	滑落	ペテガリ沢川の中の岳直登沢経由で中の岳に登頂後、帰路において、大滝の上のF9でSL椿谷が7〜8m滑落した。落ち方がうまく、かすり傷ですんだので山行を継続した。	むいね16号
20	神威岳 中の川 奥二股	1976/8/9	4	1 M	負傷	滑落	神威岳から中の川奥二股に向かって下っている途中、標高1,000mの滝でM中村が12mほど滑落し、3回、4回とバウンドして滝下の岩床にたたきつけられた。意識ははっきりしており、骨折の心配はなかったので山行を継続した。	むいね16号
21	トヨニ岳 トヨニ川左股沢	1979/8/9	5	1 M	無事	落石	トヨニ岳の稜線手前のガレ場でSLのつかんだ岩のとなりの岩が落下してM村のヘルメットを直撃した。一時記憶をなくしたが、大事をとって、翌日、下山した。	むいね19号 部内記録
22	本州 槍ヶ岳	1980/8/31	3	1 L	意識障害	高山病	L山本が北アルプスを縦走中、槍ヶ岳付近で高山病（肺水腫）により倒れ、意識不明のまま信州大学附属病院に運ばれた。その後約3週間にわたり意識不明の状態が続いたが、無事に回復した。	報告書
23	ユニ石狩岳	1981/1/3	5	5	無事5	雪崩	ユニ石狩岳の主尾根に取り付く小尾根上Cont1050で幕営中、夜中の2:30頃に小規模な新雪表層雪崩にあい、テント（ウィンパー）が半分ほど押しつぶされた。3人はすぐにテントから出ることができたが、2名は移動不可能な状態となったため、テントを切り裂いて脱出し、付近でビバークした。降雪のため雪崩の規模は不明であった。ポール一本が折れ、一本は見つからず、テント修理も不可能のため、翌日に下山した。	むいね20号
24	樺戸山 札的沢	1982/7/10	3	1 M	負傷 肋骨骨折と捻挫	滑落	大滝の右岸側の岩場を登っていたSL秋山が上部で行き詰まってしまった。2番手のM寺内が途中からバンド上をトラバースしてブッシュ帯に出ようとしたところ、浮き石をつかんで空中を5〜7m落下したあと、さらに3〜5m転落した。SLが救助要請のため下山した。2時間後には救助隊（消防）が到着し、補助をうけながら自力下山した。	むいね21号
25	コイカクシュサツナイ岳 夏尾根	1985/3/29	4	1 L	無事	雪崩	コイカクシュサツナイ岳夏道尾根を下山中、ブッシュが濃いためにL松村が尾根の右側面に入り込み、表層雪崩を誘発した。Lは巻き込まれて身動きがとれなくなったため、Mにスキーをはずしてもらったが、その際転倒してメガネを紛失した。ザックを置いて体制を整えたとき、再び雪崩がおきてLのザックが流された。ザックは見つからずあきらめて下山した。	むいね24号 部内記録

事例	山域、山岳名、沢名	発生年月日	構成人数	遭難者数役割[a]	態様	原因	概要	出典
26	旭岳 ピウケナイ沢	1985/4/2	11	11	無事 11	雪崩	ピウケナイ沢の通称二段雪庇で 2 つの雪洞作業中に雪崩(幅 20〜30m、長さ 40〜50m)に襲われ 3 人が流された。ザック、スキー、ストック等が流されて埋められたが、翌日までに、ストック 2 本を除いた荷物を発見した。旭岳石室へ避難した。	むいね 24 号 部内記録
27	八剣山	1986/3/6	5	1 M	負傷	転落	八剣山 5 ピッチ目上で、M 南家がアイゼンを引っかけて北側へ 15m 程転落した。大事には至らなかったが、医師の診断は、「腎内出血の怖れあり」とのことであった。	むいね 25 号
28	トムラウシ山 ワセダ沢	1986/7/29	5	1 M	負傷 仙骨骨折	スキー滑落	ワセダ沢の残雪をスキー滑降中に M 粟崎が約 100m 滑落し、沢に突っ込んだ。腰部を強く打ったが、翌日に自力下山した。	むいね 25 号
29	ペテガリ岳 ペテガリ沢川	1986/8/5	4	1 L	負傷 左肩脱臼	滑落	ペテガリ沢川を遡行中に L 出口が 4m 程の滝で滑落し、左肩を脱臼した。M の一人が出口に付き添い、SL と他の M が救助要請のため下山した。出口は救助隊の人海戦術によって沢から運び出され、事故発生から約 53 時間後に医師の手当をうけることができた。	報告書 むいね 25 号
30	芽室岳 雪盛山手前	1989/3/7	5	1 M	負傷	スキー転倒	雪盛山手前 1,620m のポコの北東斜面をスキー滑降中、M 吉田が転倒して膝の靱帯を痛めた。エスケープルートを使って下山した。	むいね 28 号
31	芽室岳 ピパイロ川 奥の沢川南尾根	1992/4/3	4	1 M	負傷	スキー転倒	事例 30 と同じ斜面をスキー滑降中に M 中島が転倒し、右足首を骨折した。翌日、エスケープルートを使って這うように下山した。	むいね 31 号
32	利尻岳	1993/5/3	5	1 M	負傷	スキー滑落	長官山から北西側の沢を滑降中、M 北森が転倒し、両スキーとも外れて標高差 300m あまりも滑落した。大事には至らず、翌日に自力下山した。	むいね 32 号
33	発寒川	1994/7/2	4	1 SL	負傷 肩の脱臼	転倒	SL 宮川は、流木のある滝の 1 つ上流の滝の左岸で足が滑り、右腕をひねるように転倒して右肩を脱臼した。	むいね 35 号
34	赤岩	1995/6/29	2	1	負傷	転落	2 年目の深田が峠から巻道を使って奥チムニーの上に着き、アップザイレンするところへ行こうとチムニールートの上を歩いていると、掴んだ木が折れて転倒し、チムニールートの終点まで転落し、かろうじて止まった。指と足と肩にかすり傷を負った。	部内記録
35	赤岩	1995/7/1	5	1 SL	負傷	転落	奥チムニー上からアップザイレンで 1 番目に降りた 2 年目の SL 西山はテラス状の巻道で待機していた。次に降りてきた 1 年生が振られて背中を打ったので、西山が指示を出そうと動いたところ、浮き石に足を取られて数 m 転落し、打撲と軽傷を負った。	部内記録
36	赤岩	1996/7/2	3	1	無事	転落	猫岩への巻道のうち、いったん降りきって 3m ほど登り返す巻道を使ったが、2 年目の奥井がその登り返しのところで浮き石をつかんで転落した。巻道が平らであったので止まった。	部内記録
37	イドンナップ岳	2002/9/28	5	1 L	無事	ハチ刺され	イドンナップ岳登頂後の下山中に L 山口が蜂に刺されて動けなくなった。救急車で病院へ搬送されたが、大事には至らなかった。	むいね 41 号
38	赤岩	2005/7/1	3	1	無事	落下	東の小岩塔群トリコニー岩のダイレクトルート 1 をトップでリードしていた 4 年目の野村がルート上部で落下した。ランニングが効いていたので無傷で停止した。実際には 5 級のルートであったが、曖昧な記憶を頼りに 3 級であると思い込んで登ってしまった。	部内記録
39	八剣山	2006/12/9	5	1 L	負傷 右足首骨折	滑落	八剣山稜線行動を終え、6、7 コルから L 八木が懸垂終了後、バックステップで斜面を下降中に 7〜8m 滑落した。滑落途中にアイゼンが斜面に引っ掛かり、その衝撃で右足首を骨折した。意識ははっきりとしており、骨折の症状も比較的軽度であったため、山スキー部に救援を要請したものの自力下山した。	むいね 45 号
40	無意根山 白水川	2010/7/10	5	1 M	負傷 仙骨骨折	転落	大滝を過ぎた後の 5m 程の段差右岸を登り終えた地点で M 宮崎が崖から 7m 滑落し、腰を強打して歩行不能となった。意識ははっきりしており、事故現場はエスケープルートである林道出会いに近い地点であったので、宮崎を背負って林道終点の宝来小屋まで運び、その後車で病院に搬送した。	むいね 49 号
41	雄鉾岳	2011/7/2	5	1 M	無事	疲労 熱中症	日帰り山行中、夏山経験がなく、また、熱中症体質という M 本宮がめまいを訴え、疲労(熱中症)で倒れ込んだ。休憩と栄養補給後に回復し、自力下山した。	部内記録

[a] L：リーダー、SL：サブリーダー、M：メンバー

表 2-2-2　遭難発生件数と遭難者状況区分

発生件数	遭難者の状況と数				
	死亡	負傷	無事	意識消失 意識不明	合計
41	9	25	38	2	74

表 2-2-3　遭難原因の区分と人数

雪崩	滑落			転落(落下)・転倒			スキー転倒	落石	疲労病気	道迷い	その他	合計
	スキー	アイゼン	沢登り	アイゼン	沢登り	岩登り						
24	2	3	7	1	3	5	5	4	4	13	3	74

表 2-2-4　遭難・事故報告書

	報告書表題	出典	発行年月日	事故発生日
1	ペテガリ岳遭難報告	むいね第 3 号、1960、p1-23	1961/1/20	1960/8/2
2	昭和 47 年 11 月 21 日 旭岳盤の沢雪崩遭難報告書	報告書別冊(53 頁)	1973/8/20	1972/11/21
3	日高キネンベツ沢転落事故報告書	別冊報告書(14 頁)	1973/12/1	1973/8/11
4	槍ヶ岳における高山病事故報告書	別冊報告書(10 頁)	1980/11/26	1980/8/31
6	ペテガリ沢川滑落事故報告書	別冊報告書(19 頁)	1986/12/23	1986/8/5
7	八剣滑落事故報告書	むいね第 45 号、2007、p9-19	2008/2	2006/12/9
8	白水川事故報告	むいね第 49 号、2011、p4-10	2011/6	2010/7/10

わきまえていなくてはいけない事である。事故発生の当時、リーダーと隊員との間にかような精神的な結びつきに、欠けるものがあったのではなかろうか。

三について考えられる事は、行動中の隊の編成が誤ってはいなかったか、という疑問である。危険な場所を行動する時の隊の編成は、経験の深いものが、浅いものを常に見守り、これを補佐し得る位置にある様にすべきである。これはリーダーがその様にすべきである事は勿論であるが、隊員各自もそうあるべき事を、常に心がけねばならない問題である。事故の起きた時は、この様な隊列が作られていなかった事については反省の要がある。

以上はこの度の事故の原因を究明した結果得られた一つの結論であるが、それは単に事故に関する検討として、意味があるばかりでなく、我々の日常の山行に於いて、常に心せねばならない幾多の教訓を含んでいる。特にこれまでの山行が、全て危げなく行なわれてきたかというと、必ずしもそうではなかった事を思うと、この感を深くするものである。しかも上に述べた批判の大方は部員の日常の訓練によって克服されるものである事を考えると、我々はこれまでこの様な基礎的訓練の積み重ねの不十分であった事を、卒直に認めねばならない。

次に部の今後の健全な発展に資する為に、この度の遭難上で得られる教訓の内、我々の日常の訓練に生かすべき諸点、並にもっと一般的な山行に於ける必要な基本的事項を併せて列記しておこう。

一、基礎的技術の向上、これは身体的な訓練ばかりでなく、山行に付随したあらゆる事項(気象並びに氷雪に対する意識、装備の問題等)の研鑽に務める事。

二、精神的訓練の必要性、山に対する登山者の心構えの問題。

三、隊員の技術水準に応じた山、コースの選定の問題。山行計画が先行する場合は、それに応じたパーティ編成の問題等を慎重に考慮する事。

四、リーダーは如何にあるべきかの問題、リーダーと隊員の相互間の心構えの問題も、日常よく考えておかなければならない。

五、山行中のパーティ相互間、パーティと本部との連絡の問題等。

我々は、これらの諸点を強く自覚し、事故を再び繰り返さない様に、又ひいてはスキー部山班の発展の為に、たゆまない努力をする事を誓うものである。

◆　十勝岳遭難事故（表 2-2-1 事例 10）（山行記録、むいね 第 10 号）

反省

パーティの行動について

○十勝本峰往復を甘く見ていた。この事が以下の事項につながっている。

○本峰下りの際の地図・磁石の見方の甘さ。本峰直下は、尾根と斜面の区別が難しく、注意せねばならぬ所であるが、藤永 P はガスの中、一度方向を定め 20 分程駆け下ったとの事。

○デポ旗を使用しなかった事。

○スキーデポ地の発見の努力が十分でなかった事。

○行動時間について。12：55 新噴を出て、頂上 14：00 着。冬山においては、テント設営の時間である。以後、12 時以後新たな行動を起さぬ方がよいだろう。

○学生課及び警察への山行届が、ずさんであった。（学生課へは提出、警察へは未届。）

全般的なことについて

○十勝ぐらいと思わない事。冬山での悪天候の恐威は常に心がけて、万全な装備、心がまえが必要である。

○往復の際、個人装備が不確実である。ラテルネは個人 1 個、非常食の即効性のもの、時間をまぎらわすもの各々が必要である。又、エアーマット、小ナベ、ローソクなどもあった方がいい。

○リーダー会の山行審議が甘かった。今山行において、B.C 付近にて基礎スキー訓練を行ない、晴天の時に往復という事で、審議が中途半端であり、又、横山が審議の後パーティに参加したのも全員に徹底していなかった。リーダー会員が交代して日が浅く、不慣れであった。

○山行前後の届け報告は、余裕をもって行なうこと。

○部員名簿、団体装備は常に完備し、いざという時にあわてぬ事。

◆　山スキー部再建の道（表 2-2-1 事例 16-18）（水谷　寛、むいね 第 14 号）

1972（昭和 47）年 11 月 21 日山スキー部は大雪山系で部員 5 名の尊い命を失なうという大きな事故を起こしてしまった。その後山スキー部では、この遭難事故の原因の究明、事故対策の確立までは部の山行活動は行うべきではないという方針を立てて、部の現役も OB も検討を続けた。我々はこの検討において終局的には今回の雪崩事故だけでなく、もっと一般の事故全体に対する対策を立てることを願っていた。

一般の遭難事故をあらゆる場合に考えて、その各々について事故の原因を予想したり対策を立てたりすることは極めて困難なことである。しかし事故がおこらないようにするための方策も一般論としては考えられないことではない。それは大まかにいって二つに分けられるだろう。精神的な面での方策と技術的な面での方策である。

i　精神的な面での方策

事故がおきたとき、よくある例として、注意力が散漫であったとか、慎重さに欠けていたとか、あるいは思い上った心のために軽卒な行為をしてしまったという場合がかなりある。たしかに、真剣な態度で精神を集中して対処していさえすれば事故にあわずに済んだはずなのに、そうでなかったために重大な事故をおこすという場合は多い。

人間の悲しさとして四六時中精神を緊張させて油断なく構えていることは不可能であろうが、重要なのは、緊張すべきときに十分に緊張

し、注意を集中すべきところへは十分に集中することであろう。そうするために何が大切かというと、大事なときにはその大事さを十分わきまえて行動できるような心構えを日頃からもっていることであろう。これは要するに常に真摯で敬虔な心をもってことに当たること、すなわち今の場合は山に対する畏敬の念が何よりも大切であろう。山に対して畏敬の念をもち、祈る心をもって山に向ってゆくときは、山で遭遇するすべての事柄に対し軽はずみの気持ちでの対応などあるはずはなく、事故のおこることは著しく減少するはずである。

この山に対する畏敬の念は自然を愛する心から芽生えるものであり、さらにそれは人の力などの全くおよびもつかないような偉大な自然の厳しい姿を知るにつれて大きく育ってゆくものであろう。山スキー部の伝統の精神にはこの山に対する畏敬の念を育てる基盤は十分に存在すると信じられよう。そのことは山スキー部の前身である北大スキー部の歴史をみるとわかる。その歴史は今より、60 数年前に、自然をこよなく愛した先人たちが、当時初めてわが国に渡来したスキーを冬の山野に自由に入ってゆくための道具として受け入れ、そのスキーに習熟し、さらにそれを世に広めるためにスキー部を作ったときに始まったのであり、その後山スキー部が自然を愛する人々によってうけつがれることによって、その創設の人たちの心は北大スキー部の伝統の精神として山スキー部の中に脈々と流れ続けているからである。

だから山スキー部の伝統の精神は十分に山への畏敬の念を育てる基盤となりうるわけである。したがって山スキー部再建の道を切り拓こうと模索しつつある山スキー部員にとって、いま望まれていることは、部員各人の心の中にある自然を愛する心をいかにして山への畏敬の念にまで高揚するかということであろう。しかもこれを可能にする道は、おそらく、このことを切実に求める心の強さによって開かれるであろう。

ii　技術的な面での方策

技術的な面で未熟であるとか、知識不足のため思わぬ事故をおこすことがあるので、山で必要な技術や知識を身につけることは極めて大切である。とはいっても山で必要な技術の数は極めて多いし、必要な知識もまた多いので、それらの全てを適確に自分の技術として、または自分の知識として身につけるまでは山には行けない、とすればいつまで経っても山へは行けないことになる。ではどうしたらよいか。

山登りには高度のものからそれほどでもない易しいものまである。それぞれに応じて必要な技術や必要な知識の程度はちがう。だからそれぞれの山登りの程度に応じた十分な技術や知識さえあれば安全な登山は可能である。要するに技術や知識を余り多くもたない人は安全登山のためには、程度の高すぎない登山を選ぶことが大切だということ、また程度の高い登山を望むものは程度の高い技術と知識を身につけることが必要だということであり、その点さえ間違えなければそれぞれの場合に安全な登山は可能だということになる。

山スキー部にも過去 12 年間無事故であった経験がある。それもよく分析してみると上に述べたような関係が成り立っていることがわかる。12 年前の遭難事故はペテガリの沢での滝壺への滑落事故だった。これなどは沢歩きの準備に欠陥があったことが原因だったといえる。沢歩きで大切なのは滑り易い濡れた石の上を如何に安定に歩くかという技術で、極度のバランスが要求される。当時のわれわれはバランスの訓練に欠けていたのである。北海道には沢を使わなくては登れない山が多い。特に日高山系では殆んどの場合に沢歩きが要求される。沢歩きを拒んでは北海道の目ぼしい山の大半は登れないといっても過言ではない。だから北海道の山に安全に登るためには何よりもバランスの訓練が大切だということにもなる。また沢歩きだけに限らず、斜面での行動では常に体のバランスが要求される。スキーも斜面での運動という意

味での体のバランスは極端に要求される。だから山スキー部のすべての行動の基礎としてバランスの訓練は極めて大切なものだといえることになる。そのようなわけでわれわれが、この事故の後、まず開始したのはバランスの訓練のための岩登りの練習だった。

ペテガリ遭難以後12年間無事故だったことの理由が単に岩登り訓練による効果だけによるものだとはいえないかもしれないが、これがかなり重要な理由の一つになっていることは確かであろう。このように、山での事故を少なくするためには、登山において決定的に重要な要素の一つ一つを完全にマスターし、準備を確実なものにすることが何より大切なことであることは間違いない。だからわれわれがこれから為すべきことは、“われわれが為すべき準備”は何かを適確に把握し準備をより完全にすることに心がけることであろう。

なお技術や知識をどんなに多く身につけることが出来たとしても、それを使うときに有効に生かすことができなくてはいけない。いつでも即座に使えるようにしておかねばならない。そのためには日頃の訓練や講習会で練習して、いつも新鮮な形で身につけておくばかりでなく、それらの使い方の練習をしておかねばならない。また講習会は新しい技術や知識の習得にも欠かせないことである。

最近は部では各シーズンに合せて、定期的に講習会や学習会をもつようになっているが、今後もこの習慣は絶対にやめてはいけないことであろう。

◆　1973年の2つの事故
（水谷　寛、むいね 第14号）

i　白水川遡行中の事故（表2-2-1 事例17）

(1)　事故経過

1973.8.1　事故は和田パーティに起きた。札幌近郊定山渓奥の白水川を1日で遡行する計画で出発したこのパーティには、この年の5月3日にムイネで骨折、6月半ばにギブスが外して一応動けるようになっていた等々力君が参加していた。等々力君は8月14日～22日の期間に裏大雪に入山する予定になっていたが骨折以後、あまり体を動かしていないので体調を整えるための予備山行として参加していたのだった。

前夜白水川の入口付近でキャンプし、当日は朝5時過ぎに出発、約4時間で白水川の遡行は終わり、ついでブッシュ漕ぎ。それまでかなり元気だった等々力君が急に疲労を訴え、ついで歩行不能になる。容態は急変し、寒気を訴え、顔面蒼白、ついに呼吸困難におちいる。和田リーダーは札幌への連絡のため、阿部隊員を薄別に下し、医師を含む救援隊派遣を要請。

以上が事故発生の前後のおおよその経過である。札幌では部員に出動準備を指示。道警にはヘリコプター出動を要請。一方派遣できる医師をさがす。道警のヘリコプターは早速偵察に飛び立ってくれたが、雲が厚く現場には近づけず途中より引き返す。以後、ヘリコプターによる救援活動は断念し、地上ルートよりの救援にきりかえ、その準備をすすめる。

その頃現地ではテントを張り発病の等々力君の体温低下を防ぎ、安静、休養につとめ、温かい飲物などによる体力の回復につとめる。その効果は次第に現われ、2時間後に第2報を発するときまでには病状は大方快方に向っていた。だからその第2報を受けて直後に出発した札幌からの救援隊は獣医の藤瀬君を隊長とする小人数のものとなった。現地では等々力君は3時間余りの休養の後、はじめ和田リーダーに背負われて帰途につき、のち自力で下山することが出来た。

(2)　反省

1. 事故発生まで

隊員が行動不能におち入っただけでなく呼吸困難にまでなったのに、それ以前に予知できなかったのはリーダーの注意が欠けていたのではなかったか。リーダーは隊員の体調にまで気を配る必要があった筈ではないか。発病した等々力君自身ももっと早くに体の不調を訴えるべき

だったであろう。しかしこれらのことを当人たちの落度だとして当人たちを責めるだけで終わってはいけない。このような場面におかれると誰でもが同一結果になり易いケースである。われわれはみんなこの事故を他山の石として今後の戒めとしなくてはいけないだろう。

2. 事故発生後

病人に対して機を失せずテントを張り、風をさけ体温の低下を防ぐとともに安静を保って自力回復を計ったのは良かった。これは昨年の旭岳周辺のナダレ遭難事故以後、部が学習会の年間スケジュールをもつことになっているが、その効果が現われたものと考えてよいだろう。その学習会の一環として夏山山行の前に救急法(人工呼吸、心臓マッサージ、応急手当…)の研修会を行っていた。日頃の学習、研修がいかに大切であるかしみじみと感ずる次第である。

ii　キネンベツ沢の事故(表 2-2-1 事例 18)

(1)　事故経過

1973.8.11　日高山系、札内川上流のキネンベツ沢を遡行中の山スキー部パーティ(リーダー和田以下 3 名)のリーダーの和田君が標高 1400m 付近の滝場で迂回路探索中に浮き石をつかみ、約 30m の岩壁を転落、全身打撲、肋骨骨折、歩行不能におちいるという事故がおきた。

救助隊要請の第 1 報は隊員の保坂君によって中札内駐在所より発せられた。札幌本部では早速救援活動を開始。救援隊の構成は札幌からの山スキー部、ワンゲル(編者注：ワンダーフォーゲル部)、山岳部、酪農大(編者注：酪農学園大学)山岳部および帯広の十勝遭対協、警察、自衛隊関係の方々であり、部外の方々に大変お世話になった。

こんどの救援活動の特色は何といってもヘリコプターの活躍が大変有効であったことで、その威力は遺憾なく発揮された。8 月 12 日に保坂君から救助要請をうけた中札内駐在所よりの連絡が地元の帯広警察署に伝わると、早速帯広飛行場より自衛隊のヘリコプターの 1 番機が偵察に飛び立ってくれた。その後道警のヘリコプター二番機は保坂君を含む救援隊の第 1 陣を札内岳の頂上に運んでくれた。無事早期救出が達せられたのも、これらのヘリコプターの遭難発生の初期における活躍のおかげと感謝している。今回の救援活動では、円滑な救出作業のお膳立てに役立って下さった道警外勤課の皆さん、道警航空隊および自衛隊航空隊の皆さん、十勝支庁遭対協の皆さん、帯広警察署関係の皆さん、警察医の方、帯広協会病院の方々、友情出動をして下さった北海道酪農大(編者注：酪農学園大学)山岳部の方々、北大ワンゲル(編者注：ワンダーフォーゲル部)山岳部関係の方々、体育会、学生部の皆さんには心から深く感謝する次第である。

その後の救援活動は順調にすすめられ、和田君は重傷ながら生命にも精神状態にも異常なく無事救出されることが出来たのは大変嬉しいことであった。

(2)　反省

1. 浮き石をつかみ滑落する事故は山においてはしばしば有りがちな事故である。この事故がしばしばありがちな種類のものであり、生命に別条はなく、また不具になるようなこともなかったとはいえ、決して軽い事故と考えてはいけない。やはりこの事故は気のゆるみと技術未熟のため起ったものであることを深く反省せねばならない。

2. この事故は一方においては登山技術の未熟さを深く反省せねばならないが、他方、30m もの高さを転落したのに生命にも精神状態にも別条なく、負傷だけで済んだという事実には十分注目する必要があろう。

生命と精神状態が異常なく守られたことの最大の理由は和田君の頭部が岩から守られたことであろう。和田君は当時ヘルメットを着用していた。ヘルメットの着用は、山スキー部では岩登りおよび沢登りに対して常に義務付けられていることであるが、今回の転落事故で和田君の

生命などの守られた理由としてのヘルメットの偉力を高く評価してもよいだろう。

このヘルメットの着用は、今から3年前に小樽の赤岩付近の登山道を通行中の一部員が転倒し、頭部負傷、一時意識不明におちいるという事故があったが、頭部の傷は決して大きなものでなく、その他の身体部分のけがの程度もきわめて軽微だったのに、かなりの時間を意識不明状態で経過せざるを得なかったことの反省から、山スキー部ではその後の岩登りおよび沢登りにはヘルメット着用を義務づけることになり、その後ずっと続けられている習慣である。

このヘルメット着用の習慣は今後の部の山行活動において絶対に忘れてはいけないであろう。

3. 前回の白水川の事故においても今回のキネンベツ沢事故においてもいえることだが、事故が起こったとき一番重要な問題はいかに早く現場での救援活動が開始されるか、ということである。これは負傷者が出たとき、その生命を守るために特に大切なことである。最もよい方法はパーティの中に自己処理能力をもつことであろう。小人数の負傷者の場合には残りの隊員がこれを救出することになるが、そう出来るにはパーティをある程度大型化する必要があろう。このような事故対策を考えるときパーティの最小親模をどの程度にすべきか、この問題の検討は今後の重要な課題となるであろう。

◆ 第62シーズン報告(表2-2-1 事例16、18)(岩瀬隆則、むいね 第15号)

2つの遭難に共通する問題

反省の詳細は各報告書に記載されているのでここには解決が長期的展望にゆだねられる課題を挙げる。

a)リーダー性の判断について

山行が提出された時、リーダーのリーダーとしての適性をどのように判断するか。リーダー会組織がその判定を下してきたわけだが、リーダー会員が相互の実力を冷静に判断し得るか。そのためにどのようなリーダー会を構成すれば良いか。他人の計画した山行は努力しないと内容を真剣に吟味しにくいものだ。これは、部の山行企画の問題にも関わってくる。つまり、個人の意欲が結果として部を形成するのか、部全体の統一見解に沿った山行を形作るのかである。この問題はさらに部の性格の決定のしかたに発展させて考えねばならない。登山には絶対安全というのは決してなく、予想される危険と、入山パーティの実力を、その山行の意義の安全性の限界内で止揚することが必要なのだ。だから部員同士の山行計画の話しあいがされなければ、リーダー会組織は意味をなさないと思われる。

b)部の記録を盲信してはならない

部の実力ということがよく言われるが、4年のサイクルで人間が交代する大学サークルでは過去の実績がそのまま現在の実力にはならない。また、安全なルート、幕営地として過去に使われたことがあっても、現在の視点で安全性を確認しなければならない。旭岳で雪崩の起きた場所を、その2年程前、ベースキャンプに使用した記録があった。古いOBの事故後の話では、昔は天人ヶ原にベースを張ることに決められていたという。いつしかゴマ沢までベースを上げるようになったのは、ロープウェイの建設などによって、部の危険に対する姿勢にすき間が生じた結果ではないだろうか。

c)これまでの文章中にも安全性という言葉を使ったが、雪崩、転落、落石など、入山中に想定される危険にいかに対処すれば良いか。

日高の転落事故は、トレーニングの不足であるに違いないが、山の実力は下級生のうちから養なわれるものであるから、下級生教育を重点に考える必要があるのではないか。特に雪崩を避けるには本からの知識だけではどうしようもない。常に雪崩の危険を意識するうちに、少しずつ勘がよくなってくるのではないか。

d)遭難対策と事故発生後のすみやかな処理方法の検討

日高の転落事故のあと、遭難パーティと在札

部員両方の行動の不備が指摘された。遭難対策資金は旭岳遭難後確立されたが、山行計画の際、事故を想定して対策を立てておかないと実際の救助態勢は整わないのではないか。例えば同一地域で連絡をとりあいつつ合宿を行なえば、事故の際対処が容易と思われる。しかし、全山行をすべて合宿でやるわけではないので、暫定的対策ではあるが。

以上が反省と話しあった内容の概略である。実際の運営の中で解決されるべき問題が多いことがわかるだろう。

◆　槍ヶ岳における高山病事故（表 2-2-1 事例 22）（山スキー部、事故報告書）

反省

今回の北アルプスにおける事故は、高地肺水腫という、日本国内の登山において殆んど考慮されない高山病であった。しかしながら、如何に確率が低いとはいえ、もたらす結果は重大である。ここに今回の事故を通じて現われた問題点を指摘し、今後の活動における対策を考察する。

原因および問題点

(1)　入山前の体調の不備

山本は入山する一週間前に札幌を出発し、パーティのメンバーが集合する松本にて、他のメンバーと合流し、山行を開始した。その間、彼は、福島にてブロックゼミ大会に参加するなど、旅行と不規則な生活による疲労の蓄積から体調をくずしていたと見られ、その事が報告されている。

肺水腫の発病原因は未だ、不明であるが、疲労の蓄積、体調の不備は、直接の原因とはならなくても、今回の発病の大きな背景となっていると考えられる。

山本は、クラブ内においても、体力の点ではけっして劣ってはおらず、むしろ体力はある方であった。加えて彼は昨年 3 月、同じ北アルプスの剣岳において、3000m の高地は体験しており、普通ならば十分こなせる山行であった。

(2)　クラブ内における、高山病に対する認識不足

山スキー部において、高山病に対し、全く無知であった訳ではない。ヒマラヤ登山からの報告や、実際にヒマラヤでトレッキングを行った、OB の体験談から、ある程度の、症状や、発病する高度に対する知識はあった。

しかしながら、如何に、3000m 級の本州の山とはいえども、日本国内の登山で、高山病になるとは考えてはいなかった。けれども、事故後の高山病に対する調査から、年 4、5 件とはいえ、日本国内において、現に高山病の患者が出ている事が判明した。

もしも、クラブ内において、もっと高山病に対する確かな認識があり、2700m を越えるものであれば、高山病にかかりうるという事が判っていれば、発病が決定的となる以前の山本の症状に対して、単なる風邪と考えるだけでなく、高山病の可能性も考えられただろうし、山本自身も、自分の体調に対し、もっと深い考慮がなされたであろう。また、山本を下山させる時の処置においても、槍沢ロッヂで泊めることなく、その日の内に下山させる努力がなされたであろう。しかしながら、事故発生以前のクラブの知識から見れば、処置は妥当なものと見なければならない。

対策

結論から言えば、別項に述べた様に高地肺水腫の発病の機構が医学的に解明されていない現状では、この疾病に対する直接的、効果的な対応策は立てられないと言うのが正直な所である。

しかし、反省で述べた様な、入山前の体調の調整という基本的な事項を再度点検、是正する事は当然必要である。したがって具体的には今後の山行審議の段階で一つ一つの事項を、今回の教訓を十分に生かして話し合っていく事が肝要である。

またそれと同時に、今回の事故を機に高山病並びに高所登山についての長期的研究会をクラブ内に発足させ、今後の山行に役立てていく事

とする。山行において実力を出し切った上での事故はある意味では仕方がないとも言えるが、知識がなかった、認識不足であったというのでは話しにならない。後に悔いを残すのは必至である。

高山病に限らず各分野（気象、雪崩、装備等）に対する知識を増強し、認識を深くすることが登山の安全性を高め、それがクラブの実力の向上とも言えるのであろう。

◆　ペテガリ沢滑落事故（事例 29）（山スキー部、事故報告書）

問題点および反省

1　出口パーティの問題点

i）日程的、時間的余裕に対する配慮に欠けた

出口パーティは本番山行（中部日高）に向けて、7 月上旬から滝沢へ 3 度、また大平山冷水沢、ペテガリ B 沢へプレにいくことを計画した。両プレ山行は山域レベルの高い山行だけに、心身共に万全な状態で臨めるような充分な休養が必要だった。しかし、大平山冷水沢の日程が出口の都合で後ろへずれこみ、結果的に各プレ山行と本番の間にはそれぞれ 2～3 日程度の休養しかとれなくなった。そのためメンバー全員にプレ疲れがあったということは否定できない。また、リーダー出口自身、学業のため今山行を出来るだけ早い時期に終わらせたいという焦りがあった。このことが今山行に与えた影響は大きい。プレ、冷水沢で「山行を早く消化したい」という焦りから、明確な情報がなかったにも関わらず、審議段階で指定していない天場を使用した事にも表れている。

ii）技術、知識面での未熟

事故の直接の原因は、なんでもない場所での単なるスリップであった。赤岩、滝沢では出口は特にミスを犯すこともなく無難にこなしていた。それだけに、レベルの高いトレーニングをしてきたことからくる慢心、油断があり、今回のスリップ事故を招いたといえる。

また事故後の対応や、ビバーク地の設定で、充分な配慮がなされていなかった。南家と川崎の下山を決定するまでの間に充分な考察がなされておらず、ビバーク地の設定についても“増水”に対しての警戒が甘いものであった。

iii）山行に対する姿勢

事故後、パーティには自力下山しようという考えは頭になかった。ヘリコプターによる救助のみに頼りすぎていた面があった。また、南家が滝沢に行く前夜に深酒と睡眠不足のままで入山するということがあった。リーダーに関することでは、まずペテガリ山荘で天気図をとらなかった事が挙げられる。どんな天気でも Cl までは行ける、Cl からなら C 沢ルートからエスケープ出来るのではないかという考えは、ペテガリ沢川に対する甘い認識によるものだが、台風が接近していたことを知っていただけに“無謀”な行為であったといえる。また行動 1 日目に寒かったこともあるが、4 時間あまり休憩をとらずに行動し続けたことも、安全面の配慮に欠けていたといえる。更に行動とは別に入林手続を怠たったり、ペテガリ山荘の使用料を払わないなど、基本的モラルが欠如していた点も見られた。

iv）パーティシップの問題

出口パーティの本番山行はかなり高度な力を要求される山域で、クラブの誰もがそう簡単に行ける所ではなかった。にもかかわらず、山行全体の計画はリーダー個人の考えが大きく反映し、パーティ全員が納得した形で計画されたものとは言い難いものであった。また、ペテガリ沢入山に関し、リーダーがサブリーダーの意見を聞きいれなかったり、大滝の巻きで出口、南家が別行動をとるなど、バーティシップの基本的なミスもあった。

2　救助活動の反省

救助活動に於いて大切なのは、救助活動が安全迅速であり、かつ統制のとれたものであることである。しかし今回の救助活動を考えてみると、統制のとれた安全迅速なものであったとは

言い難い。在札現役、OB への連絡の手違い、それによる勝手な行動等、初期段階で混乱を生じ遭対本部の設置が遅れた。

遭対本部の設置が遅れたのは、吉岡、在田の正副部長の所在を把握していなかったこと。また、両先生が不在の場合の指揮系統が準備されていたにもかかわらず、それが全体に浸透していなかったこと等により、初期段階の指揮系統が混乱したことによるものである。しかし根本的な原因は、現役、学内 OB 等に遭対組織、救助活動の概念―事故発生時における連絡系統、指揮系統、具体的な活動等―が徹底されていなかったことによるものである。これは救助隊用の装備、食糧等の準備が迅速に行なわれなかったことにも表れた。これとは逆に遭対本部が設置されてからは、比較的円滑に救助活動が行なわれた。特に今回、救助現場における連絡手段としてアマチュア無線を用いたが、これはスムーズで正確な情報伝達に効果があった。

3　部の問題点

今回我々は山の知識と実力のなさを痛感させられた。明らかに山に対しての“甘え”があった事は否定できない。個々の部員にノルマを与え、それをこなせば実力がつくといった考え方は改めていかねばならない。

出口パーティの審議に於いて滝沢、冷水、ペテガリ沢に行けば無名沢に行けると考え、プレ山行後の審議も行なわず、その判断を完全にリーダーの出口一人に任せてしまったことは、その顕著なあらわれといえるだろう。

この様な考え方は審議の形骸化を招き、「山における力」というのはいったいなにを指すのかを考える力を失ってしまう。そして部員の自主性、主体性をも剥ぎとってしまう結果となった。

我々は危険な事をやっているという事を常に自覚する必要がある。山における「絶対」は存在し得ない事も事実であるが、必要のない危険要素を自ら生み出し、それを深刻に考えず安易に見過ごして来た部の体質は、根本から改めるべきである。

山に行く事は現実からの逃避であってはならない。部員各自が「山行を成功させよう」という気概があれば、つまらないミスはなくなるはずであり、今回の様に責任感の欠如が問題になるはずがない。いま我々に望まれる事は山行に対してのシビアな態度であり、謙虚な姿勢である。この様な基本的な考えが希薄となっていたことは、非常に残念である。

山のモラルを再確認するとともに、社会的責任を自覚することが我々に課せられた急務である。この実践なしにクラブの存続はあり得ないであろう。

◆　八剣山滑落事故（表 2-2-1 事例 39）（八木寛陽、むいね 第 45 号）

八木パーティの問題点

i）技術、経験面での未熟

技術面では EP ワークの技術が未熟であったことが大きな問題である。滑落した八木、JOM 両名ともに滑落時にわずかな時間であるがピッケルから手を離している。このため瞬時に滑落停止の姿勢をとることができなかった。また、ザイル操作に関しても、沢の活動が少なくなった影響から、部内でザイル操作を行う機会が少なくなっていた。このため、ザイル操作が円滑に行われず、それが行動面での遅れへと繋がった。その他に、佐々木、森嶋はバックアップを取らずに肩がらみで急斜面を下っており、森嶋に関してはその肩がらみの操作自体も誤った方法であった。

経験面では、八木のリーダー経験が少ないことが大きな問題である。八木が計画した山行は中止となることが多く、合宿以外の山行においてのリーダー経験は夏沢のみであった。今回八木は危険な急斜面中でザイルを外し、ザイルで確保されることなくその急斜面を登り返し、下っている。このよう行動は下山時間に対する焦りと危険認識の甘さからくるものである。ま

た、懸垂2回を1時間で行えるという判断など、明らかな時間読みの甘さが見られる。

ii)山行に対する姿勢

八剣山は例年冬のⅡ年目山行の本番前にいかれており、今回で八木は4回目、佐々木は3回目であった。そのため、2人には慣れているという油断のあまり、八剣山の危険性を適切にとらえきれていなかった。これはスタッフ2人の一度経験した山域を甘くとらえやすい性格が影響を与えている。

さらに、八木は八剣山を山行というよりは、EP技術に関するトレーニングの一環と考えていた。そのため、通常の山行であれば、必ず行われる出発直前のミーティングや装備チェックを、今回は行わなかった。これは明らかに入山準備不足であった。加えて、山行に対するイメージも十分とは言えない。それは、懸垂下降をする可能性が高いにも関わらず、確保器を人数分用意せずに入山していることや、前日の睡眠時間が3、4時間と短く、睡眠不足であったことからも明らかである。

メンバーに関しても、自分の行く山域の様子や必要な装備を直前まで確認しないなど、山行に対して受動的な面がみられた。

iii)パーティシップの欠如

全体としてスタッフ間(リーダー、サブリーダー間)のコンタクトやメンバーへの指示が不足している。山行中では、スタッフの八剣山に対する認識が過度に甘く、お互いが不相応に信頼し、要所々々で細かな確認を取ることなしに進めてしまっている場面が多く見られる。これは山行審議において事前に指摘されていた、スタッフ間でのコンタクトを頻繁に取り合う必要性を十分に意識できていなかったということである。八木の滑落に関してもその直後に十分なコンタクトを取っていない。その結果、佐々木が八木の怪我の状態を理解する前に、メンバーを八木が滑落した斜面に降ろしてしまい、JOMが滑落している。また、森嶋が1ピッチ目の懸垂後、佐々木の偵察について行ってしまったり、田村、JOMに危険な急斜面を下らせたりと、メンバーへの指示が十分であったとは言い難い。今回は懸垂後やテラスにおいて、パーティが集合するべきであったし、少なくともそうした意識を持って行動すべきであった。

山行以外でも、ミーティング以外での接点が少なく、出発直前のミーティングを行わなかった。このためメンバーは八剣山に何を持っていくかもわかっておらず、入山前のイメージがバラバラのまま入山している。さらに、今回事故の状況をパーティ全体で確認する前に下山連絡先の伊藤と連絡をとってしまっている。

以上のことから、パーティとして山に行ったとは到底言うことが出来ない。パーティで行動するということは、そのパーティが一つとなって動くということである。これが出来なかったのは、このパーティにパーティシップが欠如していたからである。

iv)日程的、時間的余裕の欠如

八木は研究室でかなりの時間を拘束されており、部活動を行ううえでの時間的制約がかなり大きかった。このため、装備チェックを行わないなど、準備不足な面が大きく出てしまった。また、八木は例会にもほとんど参加することができず、ミーティング以外でパーティとの連絡を取りにくい状況にあり、必要な連絡が十分に行き届かなかった。

冬山本番山行、プレ山行にも日程的な余裕はなく、各山行に必要と思われる停滞日も十分に確保することができない状態であった。このため、今回八剣山で成果を得ることができなければ、冬本番に進める可能性がかなり低くなってしまう。こうした中で成果を得ることを焦って、危険な判断を行ってしまっている。

部の問題点

i)八剣山の位置づけ

従来から山スキー部では、八剣山を冬季岩稜行動のトレーニングの場所として位置付けていた。八剣山は、通常の山行では必ず行われる山行審議を通すことなく行かれていた。これは、

部内に八剣山を山行としてとらえない雰囲気が存在したことを示している。

また、入山前ミーティングを行うこともリーダー任せとなっており、部員間の八剣山に対する認識がかなり曖昧な状況にあった。今回八木は、入山前のミーティングの必要性を感じてはおらず、実際行わなかった。山行のイメージを統一し、通常通りの山行審議を行っていれば、今回のように焦ったまま行動し、その結果生じた単純なミスは排除できたと思われる。

ii)技術の継承

近年における上級生(Ⅲ、Ⅳ年目)の指導力または指導方法に問題があった。例えば、EP 技術に関しては、歩き方や滑落停止姿勢などの項目は、部全体で共有していたが、3 点支持におけるピッケルワークなど、細かな EP 技術の伝達は、各リーダー任せであった。これは、大人数下での技術の継承方法が、そのまま少人数になった後も継続されてきたためである。従って部員の中には、基本技術は身に付いているものの、より高度な細かな一部の EP 技術を習得する機会のないまま活動することが存在した。また、近年では滑落停止の知識や方法は理解していても、斜面等の状態により実際の訓練は不十分であった。

知識の継承では、今年は新しい知識を入れようという意思があり、各自下級生(I、Ⅱ年目)に細かなことも詳しく教えていく姿勢で臨んでいた。しかし、全体として言う事は言ってはいたが、しっかりと伝わっているかどうかを確認するような姿勢に欠けていた。指導力の話に伴って、今年の研究講座がしっかりと行われていたのかを検討したが、内容としては例年の知識を下敷きとして、今年なりの新しい話を入れようとするなどの改良も見られた。しかし、先程の話と同様、全体として言いっぱなしになっていたことは否めない。

iii)Ⅱ年目山行の認識

今回のような日程に余裕のないパーティが強引にⅡ年目山行を出していることは昨年もみられた。現在の部内には知らず知らずのうちに安全面よりも山行によって得られる成果を急ぐ傾向が存在した。また、Ⅱ年目山行はミーティングや審議の多さなど、山行以外でかかる時間は 1 年目山行より多い。その結果、時間のないリーダーをさらに圧迫し、このような事態を招いた。

今回の件を受けて昨年度の冬の活動を考え直した結果、そのプレでの進め方も含め、事後にしっかりとした検討が行われていないことが指摘された。山行の進め方など、センスを共有している少人数の団体において、個人の間違った判断が見られた場合、そのセンスは団体全体に浸透している可能性は拭い去れない。事実、強引な進め方をする山行は複数のリーダーに見られた。今年では、秋沢の進め方にも、慎重を期すつもりではあったが、成果を焦った面があった。Ⅱ年目山行の場合、その成果を取れないことで来期への支障をきたす事態は多々存在する。このため、成果を焦る雰囲気はルーム全体にも存在した。これらはⅡ年目山行の危険性の認識が甘かったことを示すものである。

遭難対策組織の問題点

今回の遭対活動は下山連絡先の伊藤が中心となって行い、OB 遭対チーフを中心とした遭対活動が行われていない。事故の状態が比較的軽く、パーティが自力下山できる可能性が高かったためにこのような形をとった。しかし、このような形をとるにしても、OB 遭対チーフには細かな状況を逐一知らせるべきであった。

また、全体的に連絡内容のメモが確実に取られなかった。さらに、上級生が札幌にいなかったため、現役遭対チーフが予定通りに機能しないといった、緊急時の遭対活動に対する不慣れさが見られた。

◆　白水川事故(表 2-2-1　事例 40)
(西　達也、むいね　第 49 号)

事故における問題点

・人員について話し合いが不十分であった

メンバー３人が沢登り初心者であり面倒見が大変なパーティであるのに、隊列を決めておくなどの、それに見合った対策がとられていなかった。審議もそのまま通ってしまっている。これは宮崎がII年目でありI年目よりも危険意識が高く自己管理はできるものと過信したこと、白水は沢慣れとして毎年行っている山行で、上級生の中に「よく知っている」というおごり・油断が生じ、通常の慎重さを失い危険認識が低かったことによると考えられる。

また、これまでの山行に関してもミーティングや審議ではメンバーが反省を出したときにはその都度原因究明は行っていたものの、「気をつけるように」などにとどまり、具体的な対策を講じずに次の山行に臨んでしまっていた。特に同じような反省を出すメンバーに関しては対処が甘かったように思う。同じような反省を繰り返すということは、本人が反省していない、もしくは性格などの問題から意識するだけでは修正が難しいということであるので、徹底的な対策が必要であるが、今まではそれがなかった。今回に関しても、宮崎は今までに準備不足や行動中の不注意が原因で何度も反省を出していたにもかかわらずその対策を曖昧にしていた。

・過去の事故における反省が部の活動に生かされていなかった

今回の事故は毎年恒例化した山行で気が緩んでしまったことや人員についての話し合いが不十分であったということが問題であった。恒例化した山行で気が緩むという問題は、2006年の八剣山での事故でも問題としてあげられていた。さらに、人員についてより細かく議論を行うべきということも、八剣山の事故後の話し合いで今後行うべきものとしてあげられていた。にもかかわらず、今回その反省が生かしきれずに事故を起こしてしまったのは、八剣山の事故後には問題点や対策について話し合われていたものの、事故当事者でない者たちがその後それらについての確認や話し合いを行っておらず、その内容を理解していなかったことが原因である。

今後の対策

・人員に重点を置いて計画を立てる

計画を立てるときには各人員の反省・能力・性格などを細かく分析し、それぞれの問題点に対する対策を具体的にしっかり立てていく。このとき、「この人員は○年目だからここまではできるはず」という各年目の能力に対して先入観を持っていてはいけない。何年目であろうと各人員一人一人をしっかり分析し、対策を立てる必要がある。また、同じような反省を出している者には、厳しく言いつけるだけでなく、その人員をパーティから除外することや、その人員に見合った山域・計画に変更することもいとわずに行う。審議ではその人員に対する対策がしっかり成されていると感じない限りはその計画を認めるべきではない。

・毎年恒例化した山行への意識を改める

近年、八剣山や白水川という毎年恒例化した山行で事故が起きてしまっている。毎年行っているという意識が「おごり」を生み、その気の緩みが部全体に広がり、その緩みが事故につながる。そもそも毎年恒例化している山行は、経験が少なく通常の山行に連れて行くにはプレッシャーの高いメンバーを、部として毎年行っていて記録も豊富で行動のイメージをつけやすい山に連れて行って訓練する山行である。スタッフは時間読み・進め方・地図読みなどの負担が軽い分、山行中はもちろんミーティング段階からメンバーの面倒見に細心の注意を払うべきである。また、山行に臨むにあたっては睡眠時間をしっかり考慮すべきである。睡眠時間が少ないと体力・思考力ともに低下してしまう。これは恒例化した山行に限らずどのような山行においてもいえることだが、山行には最善のコンディションで臨むべきであり、睡眠時間も充分にとらなければならない。もし日程などの都合上で充分にとれない場合には翌日の行動を制限することなどを考えながら山行を進めていくべきである。

・事故の反省を未来に生かす

今回の事故に関して、2006(平成18)年の八剣山での事故による反省を生かしきれていなかったのは、過去の事故であがった問題点と、その対策を後の世代がしっかり理解できていなかったことが原因である。このことを防ぐため、今後は研究講座で部員全員に事故の報告書を読ませて部を運営していく上での安全への意識を高め、またその意識を保つため毎年必修で行うこととする。

おわりに

以上、北大スキー部山班および山スキー部の遭難、事故ならびにヒヤリ・ハットの概要ならびに反省と対策についてまとめた。結論的には、時代が変わっても、50年経っても、大学生のクラブ活動としての山登り、山スキーの在り方の根本は変わっていないことが分かった。

すなわち、中の川の遭難後の反省にあるように、1)基礎的技術の向上、これは身体的な訓練ばかりでなく、山行に付随したあらゆる事項(気象、氷雪、装備等)の研鑽に努めること、2)山に対する登山者の心構えを身につけること、3)隊員の技術水準に応じた山やコースを選定し、それに応じたパーティ編成を慎重に考慮すること、4)リーダーは如何にあるべきか、リーダーの心構えの問題を日常からよく考えておくこと、そして、5)山行中のリーダーと隊員とのパーティシップの在り方ならびにパーティと本部との連絡体制を十分考慮しておくこと、に集約されるように思われる。

これらの事例を教訓として、今後、事故を再び繰り返すことなく、山スキー部がさらに発展することを願いたい。

■コラム■
初めての女子部員

スキー部山班の女子部員卒業第1号：加藤幸子さん。1959年農学部農学卒。
札幌市生まれ、中国北京・東京育ち。北大卒後、農業技術研究所、日本自然保護協会を経て、同人誌にて創作をはじめる。『夢の壁』にて第88回芥川賞(1982年)受賞。

山スキー部の女子部員卒業第1号：田中夕美子さん。1964年理学部地物卒。北大苫小牧演習林において長年森林気象学の研究に取り組む。

山スキー部の初代女性主任第1号：吉開友羽子さん。2004年工学部環境卒。93シーズン主任に就任した山スキー部3年目の吉開さんは実は工学部4年生であった。4月からの後期も主任を務め、しかも「スキー部」と「山スキー部」を通じての初めての女性主任であり、これは大変画期的なことである。北大体育会の男女別のチームを組む競技系クラブでは当然のことかもしれないが、山に関連したクラブの女性主任は全国的にみても希であろうと思われる。ただ、北大全体では学生の男女比は年々接近しつつあるし、昭和前期生まれと違って、全くの男女同権時代に成長してきた年代であり、これも時代の流れあろうか。
吉開さんは1年遅れで北大卒業後、さらに神戸大学医学部を経て現在医師として活躍中。

シルバーロッジ女子住人第1号：石川(旧姓末安)紀子さん。1998年文学部露文卒。ロッジで3年間ほどあづましい山スキー部生活を過ごしたようだ。その想いを『むいね』第36号に残している。

藤永　徹(1968獣医)

3　山スキーの普及

3.1　ニセコ合宿

中村　晃忠（1962 医 薬）

スキー部山班や山スキー部の部員たちによって歌い継がれている愛唱歌「スキーの寵児」に歌われている“丘を滑りて谷間へ　木立くぐりて温泉（いでゆ）へ”の歌詞そのままの、年末 1 週間のニセコ合宿（青山合宿）は北大スキー部山班そして山スキー部にとって最大の行事の一つであった。

現在では海外のスキーヤーにも知られるバフバフの深雪を滑りまくりニセコアンヌプリ・チセヌプリ・ニトヌプリに描くさまざまなシュプール、青山温泉不老閣（のちには昆布温泉富士屋旅館）の疲れた体を癒す温泉、大広間での食事、クリスマスの大きなケーキ、スキー愛好の先生方や OB たちとの語らい、そしてパーティごとに芸を披露する演芸会、どれもこれも楽しい思い出であった（第 4 章 2.5 参照）。

山岳部初代部長である栃内吉彦先生は、1914（大正 3）年の春に山仲間二人とアルパイン式スキーを担ぎ、太い逞しい単杖を小脇に抱えて青山温泉不老閣に乗り込み、1 週間ほどスキー合宿をしたという（栃内 1926）。

しかし、北大スキー部の行事としては、1919（大正 8）年 12 月 22 日～29 日に部員 48 名が参加してスキー合宿を行ったのが最初で、その時は部員を 4 班に分け、それぞれのリーダーのもとで組織的なスキー練習を行った。このスキー合宿はその後、本州からの大学生も含め部員以外の学生も募集し、参加者数は年々増加して 100 名をはるかに超え、北大スキー部の名物となった。当時は、青山温泉スキー合宿に参加するだけの部員もかなりいたようである。



写真 2-3-1
ニセコ合宿（1967 年 12 月 23～28 日、昆布温泉富士屋旅館）における OB たちの合唱

青山合宿は戦中戦後も、旭川方面までコメの買い出しに行ったり、購入した馬を屠殺解体したりなど、食料調達の困難ななか山班部員たちの努力により続けられた（古谷暢博 1955）。しかし、1952（昭和 27）年（41 シーズン）には、学制の旧制から新制の移行という状況から実質的に活動する部員は 1、2 年目数名となり、また炭労ストの影響により汽車の切符が手に入らないということも重なり、青山合宿は中止のやむなきに至った（永野拓也 1955）。

1955（昭和 30）年（44 シーズン）、伝統の合宿を復活せんとする部員の必死の努力により、青山合宿は 4 年ぶりに復活した。参加者は 29 名（全員部員）だった。45 シーズン（1956 年）も部員のみの合宿であったが、行動範囲はシャクナゲ－チセヌプリ－ニトヌプリ－国鉄山の家周回へと広がった。学内一般参加の募集を再開したのは 46 シーズン（1957 年）からで、5 班構成 39 名参加（うち、一般参加は 9 名）であった。

1961 年 6 月青山温泉不老閣は火災に遭ったため、その年末のニセコ合宿は急造のプレハブ宿舎で始めたが、合宿途中で近くの昆布温泉富士屋旅館に移り、次の年からはそこをベースと

した(**写真 2-3-1**)。

一般参加の「ニセコ合宿」は 56 シーズン(1967 年 12 月 23 日～28 日、56 名、うち一般参加は 12 名)まで行われたが、翌年の極端な雪不足による中止が契機となって、いわゆる「ニセコ合宿」は行われなくなった。それには、当時の部運営体制の問題とともに、ニセコのあちこちにスキーリフトが建設され、ニセコ全体がスキー場化したという現実もあった。

『北大山スキー部部報』(1968)に関矢信一郎さんの「部外者の合宿感」という文章がある。「ニセコ合宿」が“山スキーの普及”に果たした役割がよく表れているので、ここに再掲載しようと思う。なお、参考までに、48 シーズン合宿(第 4 章 2.5 参照)の班構成とコース(A～J)を示しておこう。

(班と行動日程)

第 1 班(部員 2，一般 4)　B－C－D－G－A
第 2 班(部員 3，一般 4)　C－H－G－D－A
第 3 班(部員 4，一般 3)　H－A－C－E－A
第 4 班(部員 3，一般 4)　C－D－H－G－A
第 5 班(部員 3，一般 3)　D－H－C－E－A
第 6 班(部員 3，一般 3)　B－C－H－E－A
第 7 班(部員 3，一般 3)　A－C－G－D－A
第 8 班(部員 6)　B － H － D － A
第 9 班(部員 6)　H－D－I－I－A
第 10 班(部員 6)　I－I－H－F－A
第 11 班(部員 2，一般 4)　A－B－C－H－A
第 12 班(初年班：部員 12) J－J－J－J－A
第 13 班(部員 2，教官 4)　D－B－G－F－A

(コース)

A：♨→テラス→アンヌプリ→テラス→♨
B：♨→テラス→アンヌプリ→北壁→(振子沢⇔イワオヌプリ)→山の家→見返り→♨
C：♨→見返り→山の家→イワオヌプリ→山の家→モイワ→プソイド→♨
D：♨→山の家→ニトヌプリ→イワオヌプリ→振子沢→山の家→♨
E：♨→山の家→ニトヌプリ→山の家→モイワ→プソイド→♨
F：♨→山の家→ニトヌプリ→名無し→チセハウス→♨
G：♨→チセハウス→シャクナゲ→チセヌプリ→チセハウス→♨
H：♨→チセハウス→チセヌプリ→ニトヌプリ→山の家→見返り→♨
I：♨→チセハウス→シャクナゲ→岩内峠→目国内岳→新見♨(泊)→奥名無し→シャクナゲ→チセハウス→♨
J：♨→モイワ・高商ゲレンデ→♨

文献

関矢信一郎(1968) 部外者の合宿感．北大山スキー部部報，75-76.
栃内吉彦(1926) 青山溫泉の憶ひ出．北海道帝国大学スキー部創立拾五年記念，304-307.
永野拓也(1955) 第四十一シーズン回顧．北大 OB スキークラブ会報，第 11 号，49-50.
古谷暢博(1955) 冬山の思い出．北大 OB スキークラブ会報，第 11 号，36-38.

部外者の合宿感

関矢信一郎

私はこの七年ばかりニセコ合宿に一般参加として入れていただき年末の一週間をすごすことにしている。この功が認められ、この稿を書くことになったらしい。幸い、前に四十八シーズン(1959 年 12 月)の合宿のしおりと山日記があるので、これと最近の合宿とを比べながら、二、三気のついた点を述べて責を果したい。

スキーについて

まずスキーの技術、これが最も大きく変ったものであろう。当時スキーの巧いのは一般、下手なのが部員と相場が決まっていた。自衛隊ス

ロープでは、これが特に目立ったものだった。もっとも阿部君、三浦君などは例外であったが……。部員はそれでもめったにころばず、山に入ると何とかごまかしながらころばずに降りてくるのは部員、うまくともしょっちゅうころぶのは一般参加者だった様だ。そのころのトレーニングは、習うより慣れろ、といった調子で上級生のコーチも適切とは云えず、新人の上達も早くなかった。その後指導法が変ったらしく部員の技術の上昇はめざましくなった。二年目ともなればもはや一般参加との差は歴然としている。ただ深雪での技術はこれと必ずしも平行して上達してはいない様だが。

山行について

四十八シーズンの行動表には、ワイスホルン、新見をはじめ、チセヌプリーニトヌプリ、ニトヌプリーイワオヌプリーモイワ山、チセヌプリーシャクナゲなどが多く、又どのパーティも予定通りか、許せばもう一山と競ったものだった。最近だんだん行動の範囲がせまくなり、単発がほとんどといった有様になった。それも早く温泉に帰り、ケレンデで一すべりといった傾向が強くなっている。これは全体にラッセル力が弱くなり、一般参加者がブレーキとなるケースが多いか、労を惜しむ向きも散見されるのは残念である。又行動中の心得、たとえば出発前にスキーを冷所に出しておくとか、リーダーの許可なくヤッケを着てはいけないとか、うるさい位に注意を受けた記憶がある。これはきびしくはあったが、その後ずい分参考になった。こんな点も年々少なくなっている。部員間には周知のことであろうが、一般参加者にはもっと知られてよいことである。この七年間新見温泉行きのパーティが行方不明になったのをはじめ、一年おき位に遭難さわぎが起きている。この対策は年々充実してきており、心強い。

合宿の構成、雰囲気について

四十八シーズンの名簿にはOBの名は見えない。五十三シーズンあたりから急に増えだした。OBは年々二十名になるだろう。こうなると主任はじめ各係、リーダーも多少やりにくい面が出てこよう。OBに気をつかうあまり、一般参加者と気まずくなることも懸念される。この点、四十八シーズンの阿部君、五十三シーズンの塘君あたりまでは、主任の意のままに合宿をリードしていた様に思う。この頃は研究発表会、講習会などが夕食の後にもたれ、一般参加者には得ることが多かった。色々な点で現役の諸君は年々スマートになってきている。反省会での発言や、演芸会でもその点が伺えて興味深い。ただ全体に厳しさが薄れてゆく様に思われるのだが、合宿としては一考の余地はあろう。青山不老閣では大広間に全員がシュラーフでざこ寝をした。これは正に合宿の雰囲気で、数々の不便な点にも増して思い出深く、あの食事の鐘の音と共に今はなつかしい。

そのころ

そのころ、スキーをやるといえば、山に出掛けることを意味していた。荒井山あたりですべるのも山へ行くためと考えられていた。だからスキー部山班の行き方は、一般スキーヤーの一つの目標でもあった。パラダイスへのお誘いの会が毎年あった様に思う。ニセコ合宿に加わるのはスキーをやる上でのステップの一つだったし、あこがれでもあった。当時はニセコ合宿に参加すると体育の時間に数えられたし、又一般参加者がそのまま部員になるケースも多かった。当時山班は裏大雪を縦走して意気盛んな時でもあった。

それから七年が経っている。スキーをとりまく情勢が変り、学生気質が推移し、スキー部山班が山スキー部となって、ニセコ合宿に対する部の態度も変遷している。これらの変化にうとい私にはただニセコ合宿が変っているとしか見えない。そして当然ながら懐旧の情も出てくる。以上の稿は私のこの視点から書いたものであることを御諒解いただきたい。

3.2　一般募集のムイネスキーツアー

秦　正樹（1992 薬学）

前項「ニセコ合宿」のように、スキー部では部員のスキー訓練とスキーの普及を目的として学内参加者を募集した年末の青山合宿を古くから行っていたが、さらにスキー愛好家に近郊のスキーツアーの楽しさを知っていただくことを目的に、1930（昭和 5）年頃から、山班の宇都宮嵩や鈴木重雄らが中心になって、「お誘いの会」を行っていた。例えば、1935 年の 1 月～2 月には 5 回開催し、無意根山・春香山・札幌岳・奥手稲山などへのスキーツアーを小屋宿泊も含めて行っている（北大スキー部部報 3、1935）。しかし、これはその後行われなくなったようである。「ニセコ合宿」も前記のように、諸般の事情から 56 シーズン（1967 年）を最後に行われなくなった。

しかし、部員たちは山スキー部の目的の一つである「山スキーの普及」を実践するために、学内学生および一般市民も対象として無意根小屋を利用した 2 泊 3 日の「ムイネスキーツアー」を企画した。第 1 回は 1976（昭和 51）年 1 月下旬に行われた。翌年は行われなかったが、1978（昭和 53）年 3 月に第 2 回が行われ、以後 2003（平成 15）年の第 27 回まで毎年 3 月に行われた（**写真 2-3-2**）。2000 年頃からは部員数が減少し、その存続が議論されたが、「山スキーの普及」の使命感から継続されたが、2003 年が最後となった。

以下では、その成立と消滅について、部誌『むいね』から辿ってみる。

むいね 16 号（1976、p.9）より

その後 2 月の試験週間が始まるまで、2 年目のリーダー経験山行を中心に近郊に 6P が出た。この中でユニークな山行は堀内、中村らを中心とした“むいねツァー”山行である。これは冬のむいねを多くの人に知ってもらおうとの主旨に一般学生を迎えて 1 月下旬に実施された。



写真 2-3-2　一般募集ムイネスキーツアー、1983 年 3 月（むいね第 22 号、1983 より）

むいね 18 号（1978、p.7、p.51-52）より

ムイネツアーは部外の人を集めて、共に山スキーを楽しみ、我々の部を知ってもらおうと 1 昨年始めたものである。今年は佐々木（右）・椿谷を中心に 8 人のスタッフで計画を進めて 13 人の年の幅の広い、男女含めたお客さんを招くことができた。現在の山スキーを一般の人に紹介できる我々がムイネツアーを計画し、いろいろな人と語り合うのはおもしろく、これからも続けたいものである。

ムイネツアー報告（中村健彦）

夏が来れば思い出す…という歌があるが、我々には、冬が来れば思い出す無意根の深雪といったものがある。タンネの樹間を縫う様に残された一本のトレースや斜面を滑り降りる時の、身を包む程に舞い上がる粉雪や、それに吹雪の夜でも我々を暖かく抱き込んでくれる小屋とストーブ、そういった物の事を考えてみれば他の人達にも是非この楽しさを分けてあげよう、というのは極く自然な発想のように思われる。そんな訳で第一回ムイネスキーツアーが行なわれたのが 51 年 1 月の事であったが、52 年は行なわれず年の瀬も迫まってから、来春は、

という話になって来た。

第一回のツアーは、参加者のほとんどが部員と個人的付き合いのある人々であったのに対し、今回は、学内はもとより、社会人にも呼び掛けて広い範囲の人々に参加してもらう事にした。ただ、実際の参加者は学生が多数を占めるだろうという予想のもとに、期日を3月3日から5日に決定した。実際に活動し始めたのは年が明けてからで、以下に日程を示すと、

1月22日 初会合各係等を決定する
1月末 ポスター、パンフ作成、各場所に掲示
2月16日 説明会 参加者11名
2月28日 買出・荷分け

こうして3月3日に予定通り入山の運びとなった。行動記録(佐々木右治氏記)を追ってみる。

3月3日 曇 札幌駅北口8時45分集合、9時発、バスにて10時薄別着、薄別発11時 15時ムイネ小屋着

小屋到着後、小屋前の斜面でスキー、班分け。登山、スキー、体力、その他を参考にA～Dの4班に分け、各班毎に山スキー部員2名が、リーダー、サブリーダーとしてつく。今後の小屋外の行動は全て班行動とする。

3月4日 雪 7時朝食、9時小屋発、シャンツェでスキー、15時30分小屋帰着

悪天の為ピークへは行けず、ポールで引き返えす。その後シャンツェでスキー。昼食は雪洞、イグルーを作り各班ごとにとる。

3月5日 曇 7時朝食、9時小屋発、シャンツェでスキー、A班はピークアタック、11時30分小屋帰着、昼食後14時小屋発16時薄別着17時札幌解散

テラスから上は濃いガスの為A班のみピークアタック。BCD班はシャンツェでスキー。

以上のように、北大学生部、体育会、札幌市教育委員会、NHK、山の店ダケカンバ、秀岳荘など各方面の方々の協力を得て、天気には恵まれなかったものの、第2回ムイネツアーは成功裡に終わった。参加した方々の評判も上々で、お客さん同士、また部員との親睦も充分に深められた様子である。山スキー部の山スキー部らしい対外活動として今後も発展させて行きたいものである。

むいね19号(1979、p.6、p.38-39)より

ムイネスキーツアーは今年も計画され、不破をチーフとして昨年同様、部外の老若男女と楽しい語いの場をムイネで持てたことはうれしいことである。

無意根スキーツアー報告(新谷一郎)

無意根でラッセルをして粉雪を滑れる日は3月に入るともう数えるほどしかない。その最後の粉雪を求めるかのように無意根に今年も集まった。山スキー部の山行としては希な、部外者を対象としたスキーツアーである。今年で3回めであり、人員募集から説明会等、クラブ内の山行と違うところの要領もわかってきて大成功に終わったこのスキーツアーの報告をイッパツ。

入山前:(計画と人員募集、そして説明会)

山行計画は前回に準じ、予算も前回と同じ一人四千円でおさえる事。及び保険については少し検討する事。人員は部員を入れて多くても20人くらいという線で話は煮つまったというより、割とあっさり計画が立った。入山前において大変なのはやはり人員募集であった。今回の宣伝方法は主にポスターをつかい、各自の工夫を凝らしたポスターで説明会の日時をお知らせした。ポスターは学内と山の店に貼り、このポスターを見てやって来た人は思いのほか少なく3名程であった。残る6人というのは、前回参加者2名とコネによって集めた4名ということであり、もっと広い層にアピールしたかった。

説明会に来られた人は、ほとんど全員参加されたので、説明会というよりは山スキー部におけるミーテイングという感じで、装備の説明から、コースの説明等をパンフレットにして配っ

て説明し、又スライドを30分ばかり上映した。無意根スキーツアーの本質的説明はパンフレットにポイントをついて説明したので、それをそのまま抜粋してみよう。

「札幌は歩くスキーの盛んな所ですが、北大山スキー部もゲレンデを出て、スキーを楽しもうと思われる方の手助けをしたく、今回の計画を立てました。スキーは滑るためだけの道具ではありません。それはスキーなしでは身動きのとれない山の中に入ってもらえばわかります。スキーは一時も離す事のできない足同様のものとなり、その見方も変ってくると思います。スキーとシールさえあればケレンデの他にも、目につくいろいろな斜面を滑る事ができます。我々はそんな野性味のあるスキーをムイネ山の大きなスロープで皆様と一諸にやりたいと思っています。又、人里離れた山小屋の生活できっと楽しい時を過していただけると思います」という内容のものであり、我々の無意根スキーツアーの精神的支柱であったといえる。

実際の行動：

3月2日 曇　薄別を10時半に出発、4時間少しで楽々と小屋に到着した人もいれば、6時間以上かかった人もいたのは当然といえば当然の結果であろう。小屋到着後は小屋前でスキー。夜のミーティングで班分けをした。班はスキーのうまさより登行のスピードを重視して四班に分けた。

3月3日 晴　まずは各班ピークを目指し、なんと全パーティームイネのピークを踏む。羊蹄山がバッチシ見えて、我々はなぜか鼻高々。「素晴しいでしょう、ムイネは」という感じ。あとは各班さまざまにスキーを楽しむ。粉雪にお客さんたちは苦戦しているが、顔はにこにこ本当に楽しそうだ。この夜は小屋でお酒も飲んで……。

3月4日 晴　昼過ぎには小屋を出発しないといけないので、それまで班ごとにスキー。降りは早くて3時には全員薄別に集合し、札幌にて、余った予算で打ち上げ、思ったよりけっこう飲めたのでした。

下山後：

反省会はスタッフで行なったが、トラブルのなかったことを確かめた後、無意根で写した写真は参加者に郵送する事を決定。きっと喜んでもらえたと思う。

天気にめぐまれ、スタッフも参加者も楽しい三日間であった。今回で三回目であったが、来年も是非続けて、山スキー部と部外者とのつながりを広げていってほしいと思う。

今回の成功は、山で数学の単位をくれとたのむために数学の先生をつれてきたスタッフや、シルバーロッジのパーティーで会ったかわいい娘を電話でさそったスタッフ等の陰の努力もあった事を伝えて報告を終わりたい。

むいね42号(2004、p.6)より

今年も山スキーの楽しさを広く知ってもらおうと一般の参加者を募って、無意根山でスキーツアーを行った。天候に恵まれ、スキーツアーでは久しく踏まれていなかったピークを踏むことができた。

むいね43号(2005、p.5)より

当初の方針通り、無意根スキーツアーを中止した。この時期に冬のフォローや、春山行に向けてのステップアップを予定していたが出来ず、結果的に春本番山行のプレが組まれた。常連のお客様には中止の旨を手紙で連絡したが、その後も様々な場面で問い合わせや、残念がる声を聞いた。来シーズンは復活するようなので、ノウハウをしっかり伝えていく必要がある。

文献

北大スキー部(1935) 北大スキー部部報 3. 257p.
中村健彦(1978) ムイネツアー報告. むいね, 第18号, 51–52.
新谷一郎(1979) 無意根ツアー報告. むいね, 第19号, 38–39.

3.3　雪崩講習会

黒澤　努（1972 獣医）

北大スキー部山班・北大山スキー部を通じての遭難史上最悪であった 1972（昭和 47）年 11 月の旭岳盤の沢の雪崩で 5 名の現役を失った反省から、北大山スキー部は雪崩に対する知識、そして雪崩事故を回避する技術の向上に努めてきた。旭岳盤の沢雪崩事故の翌シーズン 1973（昭和 48）年 12 月に若林（新田）隆三 OB（当時北大農学部助手）を講師に「雪崩講習会」を手稲山で開催し（若林 1974）、その後も毎年講習会受講者が講師となって後輩を指導する形で講習会を継続してきた（**写真 2-3-3**）。

当初の講習会は雪崩の発生のメカニズムなどの講義が主たるものであった。やがて実際に雪崩に遭遇したときの遭難者発見のための技術講習会も含まれることとなった。また遭難者発見にゾンデ（棒）が有効であることは旭岳の雪崩事故時に埋まったテントの探索で経験され、そのテント内から 4 名の遺体が発見されたことなどからゾンデの改良もすすんできた。当然遭難者発見時の掘り出しのための携帯用スコップの改良も進み、やがて外国でつかわれていた雪崩ビーコンが我が国でも使われるようになり、雪崩ひもにとってかわった。こうして現在のスコップ、ゾンデ、雪崩ビーコンの 3 種の神器の原型が形成された。

雪崩ビーコンが我が国で使われるようになった経緯は文献等では必ずしも明確ではないが、伝聞によれば 1980 年代初頭にニセコの新谷暁生氏が雑誌でビーコンの存在を知り、オルトボックスを東京の輸入代理店を通じて数台入手したことが最も早い時期のもののようである。さらに新谷氏は株式会社アルパインガイド　ノマドの宮下岳夫氏にその存在をつたえ、1987 年には宮下氏が欧州遠征時に数台購入して帰国したことなどから徐々に普及したものと思われる。



写真 2-3-3
山スキー部最初の雪崩救助講習会。1973 年 12 月 24 日、手稲山にて（むいね 第 13 号、1972 より）



写真 2-3-4
山スキー部・北大低温科学研究所共催の雪崩講習会。左は講師の若林隆三 OB。1991 年 1 月 27 日、手稲パラダイスヒュッテにて（北大山とスキーの会会報 第 16 号、1992 より）

北大山スキー部 OB 阿部幹雄（1977 年卒）は 1991（平成 3）年 1 月、北大低温科学研究所との共催で 2 日間の「雪崩講習会」を企画し、低温科学研究所と手稲パラダイスヒュッテ周辺で講習会を開催した（**写真 2-3-4**）。学内山関係団体はもちろん一般の山・スキー関係者、警察関係者にも呼びかけた。この席で米国で実践的に活動しているチャーリー・ジスキン氏により雪崩ビーコンが紹介された（阿部 1992）。これを契機に阿部幹雄らは北海道雪崩事故防止研究会を設立した。山スキー部もセルフレスキューの考え方、その重要性を認識していたことから雪崩

講習会開催の主体として同研究会に協力した。同年、北大山とスキーの会(山スキー部)は山岳部・ワンダーフォーゲル部とビーコン(独オルトボックス社製 F-1、1 台 3.9 万円)70 台(うち山スキー部は 40 台)を共同購入し、現役部員や OB が雪山に入る場合は貸与を受けて必ず携帯することとした(**写真 2-3-5**)。

2007 年には北大山とスキーの会がデジタル式になったビーコン(ピープス DSP)を 5 台購入し、高度なビーコンを会員だけでなく山スキー部員も使用できることとなった。

とくにこうした雪崩講習会の継続的な実施には雪崩事故防止を科学的に検討する必要があったことから、阿部幹雄らが発足させた北海道雪崩事故防止研究会は雪崩事故防止の系統だった研究だけでなく、雪崩講習会も定期的かつ各地で拡大して行われるようになり、山スキー部とともに雪崩事故防止の啓蒙普及に貢献した。この研究会は 2003 年に雪崩事故防止研究会と改称したが、現在も北大山スキー部とともに講演会、セミナーの開催を継続している。スコップ、ゾンデそして雪崩ビーコンの 3 種の神器がそろったことから、雪崩講習会はこれらの機器の使用、とりわけビーコンの使用法の実習を中心として、手稲パラダイスヒュッテをベースに行われている。またこれらの雪崩講習会には低体温症対策の権威である山スキー部 OB 船木上総(1980 年卒)も講師として参加し、山スキー部員の知識、技術向上に貢献している。



写真 2-3-5
山スキー部が初めて導入した雪崩ビーコン(ORTOVOX F1 plus)

なお雪崩遭遇時の対策として古く(1960 年代にはすでに使われていた)から“なだれひも”が用いられてきた。良く用いられたのは赤い毛糸などであり、雪崩偶発可能性の高い個所では、10m ほどの毛糸を引きずって行き、万が一雪崩に埋没しても目印の糸をたどって埋没者を発見するというものである。ビーコンにより生存者を救出できた例は極めて希であるとする意見(新谷暁生氏談)もあることから、なだれひもの有効性を再度検証する必要があるかもしれない。

文献

阿部幹雄(1976) 無意根雪崩遭難救助訓練．むいね，第 16 号，45-52.
阿部幹雄(1992) 雪崩ビーコンについて．北海道大学山とスキーの会会報，第 16 号，56-61.
若林隆三(1974) 雪崩救助学事始．むいね，第 14 号，36-39.
渡邊祐輔(2001) 雪崩遭難救助訓練．むいね，第 39 号，15-17.

3.4　山スキー部におけるスキー技術論

丸谷　聖一（1979 農 農土）

部誌『むいね』には、当時の現役が「考え、行動し、悩んだ」足跡が飾ることなく文章表現されており、山スキー部としての紆余曲折を探る貴重な資料となっている。

北大スキー部、スキー部山班、山スキー部と変遷を経た我が部にあって、「スキー技術」も時代とともに変遷をたどっているが、ここでは、『むいね』の記事からスキー部山班と山スキー部における「スキー技術論」を紹介する。

表 2-3-1 は『むいね』1 号(46 シーズン)～51 号(100 シーズン)に見られる「スキー技術論」に類する文章である。

表 2-3-1 『むいね』に見られるスキー技術論

号数(年)	タイトル	執筆者
1 号(1958)	スキーへの誘い	松橋　茂
3 号(1960)	スキーの物理学	水谷　寛
4 号(1961)	スキーの物理学Ⅱ―無減速回転―	水谷　寛
同上	スキー技術のとらえ方	山崎久雄
5 号(1962)	スキーの物理学Ⅲ―スキーのテスト―	水谷　寛
8 号(1967)	スキーの物理学Ⅳ―悪雪に強いスキー術―	水谷　寛
9 号(1968)	スキー芸術論	倉持寿夫
10 号(1969)	スキーの物理学Ⅴ―姿勢の力学―	水谷　寛
12 号(1971)	スキーの物理学Ⅵ	水谷　寛
16 号(1976)	真の山スキーヤーとは	丸谷聖一
18 号(1978)	スキーの物理学Ⅶ―加速ターン―	水谷　寛
同上	独断と偏見の山スキー論	丸谷聖一
19 号(1979)	スキー靴による山スキー	船木上総
21 号(1982)	プラスチック兼用靴と 世界の山スキー部特性シール	宝多卓男
26 号(1987)	山スキー部はスキーがじょうず	横山昌宏
27 号(1988)	究極のスキーの奥深さ 新たなスキーの幅広さ	阪谷　聡
31 号(1992)	山でのスキーと ゲレンデでのスキー	吉田　寛
36 号(1997)	山スキーの可能性について	大島次郎

51 号のうち 16 号でスキー技術論に類する文章が見受けられる。全体の 3 割で、36 号(1997)「山スキーの可能性について」以降、技術論の類は見つけられなかった。少し淋しい気もする。

『むいね』1 号には「スキーへの誘い」(松橋 茂)というタイトルで、当時の回転系重視のオーストリー派とスピード重視のフランス派の対立について各派の代表選手の滑り(オ派：トニー・ザイラー、フ派：アンリ・オレイエ)から(以下引用)“対立しているはずの両派の第一人者が全く同じ滑り方をしていることがわかる”、“従って両派の終局目的はパラレルスキーという同一物で、それに至る過程が両派の対立の原因である”と喝破している。シュテムクリスチャニア、パラレルクリスチャニアなどの懐かしいスキー用語の他、テンポターン(スピードを落とさない大半径ターン)、クラゲ(テンポターンの連続系)など耳慣れない言葉も散見されておもしろい。

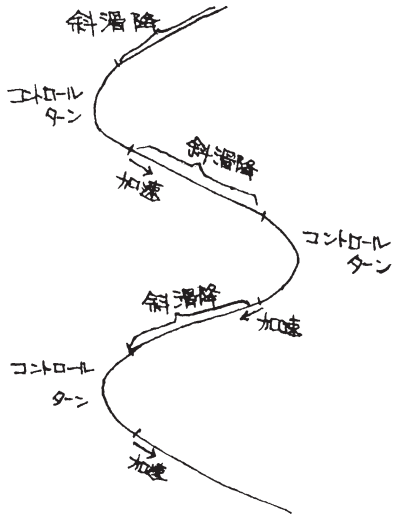
“まあ、以上でスリル満点のスラローム(回転)の準備ができたわけです。スラロームは御承知のように本物の木立の代わりに斜面に旗を配置して、その間をうまく滑り抜けることなのです。そこで代用品でなく本物の林間を縦横無尽に滑りまくる山スキーこそが、スキー本来の姿といえましょう。”と結論付けている。

『むいね』3 号に水谷 寛先生の「スキーの物理学」が初めて登場する。その後、4 号、5 号、8 号、10 号、12 号、18 号と計 7 回にわたり、スキー・人間系の動作(滑る、曲がる、止まる)を徹底的に力学的に捉えたスキー技術論が展開される。今でこそ、エッジに乗ったズレのないカービングターンが主流となって、道具もその方向性に進化を遂げたが、水谷スキー理論はすでに昭和 30 年代後半に「無減速回転」という名称で今日のカービングターンを指向していたことになる。

「スキーの物理学」は、無減速回転は可能であるという前提に立っている。スキーヤーはそれを具現化するために、足首、膝、腰、上体をどのように使うべきか、きっかけの回転力をどのように与えるのが良いか、外足を伸ばすことによる荷重から遠心力を利用した継続的な荷重への移行を意識しながら、ターン切り替え時のスキー後半部の撓みが弾性により解放されるときに発生するスキーへの加速を利用すべきことや、スキーに求められる物性(捩れ、撓み、弾性、粘性など)はどうあるべきかなど、スキー・人間系に関する真摯な分析が各号にわたり展開されている(図 2-3-6)。これらを読んで思うことは、

「スキーに対するこころざし」が圧倒的に高いことだ。北大山スキー部は北大スキー部を前身とするクラブなのだから、これは当たり前のことなのかも知れない。しかし、あまた有る山系のクラブにおいて、これ程までにスキーへの志が高い団体はほかにはなく、特筆すべきことだと思う。

水谷スキー理論は山スキー部創設以来、ずっと理想とすべきスキーヤー像を我々に与えてくれたバイブルであり、スキーとは如何なるもの



第　6　図

写真 2-3-6
“図 6 のように、斜滑降からコントロールターンでのターンの切り上げるとき加速ターンを行って次の斜滑降に移る”水谷 寛：スキーの物理学 VII(むいね 第 18 号、1978)より

かという若い山スキー部員の疑問に対して真摯に向き合った解説書である。

ちなみに、『むいね』18 号に掲載されたスキーの物理学Ⅶはその年(1978)の 8 月に発行された全国誌スキージャーナル 8 月号の「存在しなかった加速のターンテクニック」に反論すべく書かれた文章であり、これはスキージャーナル 10 月号に掲載された。反響は「加速ターン」は理解できるとか、さらに詳しい説明を希望するなど、反論よりもむしろ支持する意見の方が多かったようであり、興味深い。

『むいね』9 号の「スキー芸術論」(倉持寿夫)を読むと、現役 4 年間ではなかなか掴みきれなかった“スキーに乗れてる感じ”を OB3 年目でようやく感じることができるようになった喜びが“北海道へ渡って、早や、7 年目を迎えるのだが、昨シーズンあたりからようやく、スキーというものが判りかけて来たようである。勿論、スキーの真髄を見極めた。という程の事ではないのだが、今迄自分が行ってきたスキーから脱皮する機運が生じた様なのである。一つの大きな転機のようだ。何か新しい道が待っている予感がする。”と云う文章で表現されている。雪とスキーと人間の技術的融合・調和を「滑ること」によって高い次元で表現することがスキー芸術と言えるのではないかと論じている。スキー技術論というよりは山スキー哲学論に近いような気がする。

同様に、『むいね』16 号の「真の山スキーヤーとは」(丸谷聖一)では、スキーは登る手段なのか、スキーをするために登るのかという不毛な議論はもうやめようと呼びかける。スキーは体の一部なのだから、“足の役割を登りと下りとに分けるのはいかにもばかげた話しではないか”と説く。これも山スキー哲学論の部類である。

『むいね』18 号の「独断と偏見の山スキー論」(丸谷聖一)では、筆者の 4 年間の山行経験から、山で遭遇するいろいろな雪質についてのベストと思われる滑り方(意識と動作)について独断と偏見を承知で紹介している。“深雪は自分の足の裏で滑る”、“アイスバーンはスキーの前半部で滑る”、“クラストは相手をよく見てから滑る”という表題とともに具体的な滑りや滑りの意識に言及している。

昭和 50 年代に入ると、靴とビンディングに新たな動きが現れる。プラスチック兼用靴とジルブレッタの登場である。それまでは山スキー部では、皮製兼用靴に前革カンダハーが主流で、登行の際はワイヤーをサイドフックからはずして、なるべく踵が上がって登り易いようにし、下るときにはサイドフックにワイヤーをかけて踵を固定するというものだった。山において水谷スキー理論を実践するには、この足回りでは非常に心許ないのが実態であった。しかし、プラスチック兼用靴とジルブレッタの登場はその後の山スキーシーンを大いに変えるポテンシャルを秘めていた。

『むいね』19 号の「スキー靴による山スキー」(船木上総)や『むいね』21 号の「プラスチック兼用靴と世界の山スキー部特性シール」(宝田卓男)では、皮製兼用靴からプラスチック兼用靴へ、前革からジルブレッタへの過渡期にあたる時期で、スキー(スキー靴)道具論というべきも

のである。当時の現役が新たな有効で魅力的な道具の出現に対して、単に飛びつくのではなく、プラブーツ(兼用靴、ゲレンデ靴)の厳冬期における使用の可能性を模索し、長所・短所を実践試行によって洗い出している。より滑降に有利な硬さやホールド感を有するブーツやセーフティー機能付きのビンディングをクラブとして導入していくきっかけや根拠となっていく。

『むいね』26 号の「山スキー部はスキーがじょうず」(横山昌宏)では、クラブ全体のスキーレベルの底上げを提案している。

“さて、そこで提案したいのが、シルバーロッヂを使ってのスキー合宿である。冬休み期間中において 5 日間くらいでいいから、2 年目(加えて 3 年目有志)が中心となって、1 年目に 1 日中つきっきりで教育する。つまり GW の無意根合宿のゲレンデ版である。場所は近くで手頃なバンケイスキー場、もしくは手稲ハイランドあたりがいいだろう。” という提案だ。これは今も続く『吉岡記念手稲パラダイスヒュッテスキー合宿』という形で実現化していると言っていい。山スキー部でのスキー練習実態に批判を加えながら、「スキーがうまくなりたい」という切なる希望と、進歩がみられない自分のスキーレベルとのギャップをなんとか埋めたいという切実な思いが伝わってくる。

『むいね』27 号の「究極のスキーの奥深さ　新たなスキーの幅広さ」(阪谷 聡)では、“格闘技としてのスキー” を提唱している。曰く、“その格闘技スキーの相手はいったい誰であろう。もちろん雪、斜面のことだ。これと闘う。そしてもう一つの相手、自らの臆病な心。これに打ち勝って体を前に突っ込ませて行く” と説く。また、転びそうになる外力を “効果のあるパンチ” と表現し、その衝撃をいなす反射力やリカバリー時の強靭な筋力が必要だと言う。かなり精神論寄りの論調で、難しい雪や斜面に対する戦略をより具体的に表現して欲しいところだが、技術論と捉えてよいのではないか。

山スキー部 80 シーズン(1991～1992)前後には、当時の現役有志による山に関する種々の研究講座が立ち上がっており「研究講座スキー」もその一つであった。

『むいね』31 号の「山でのスキーとゲレンデでのスキー」(吉田 寛)には、研究講座スキーの基本的な考え方が以下のように紹介されている。“「山でもゲレンデでも通用する基本技術というものがあって、山でのスキーはそういった基本技術に加えて、山の特殊な諸条件に対応した技術・知識が必要である」と考えた。山とゲレンデのスキーは基本技術は共通であるが、応用技術については異なるという考えである。”

実際に経験豊富な部員から、「山の特殊な諸条件に対応した技術・知識」を発表してもらい、各部員が聞いて納得できるものを個人の裁量において採用し、各々のスキー技術として取り込み、消化していったようである。スキー技術を体系的に教えるというよりも「個性」の発揮を良しとしている。

『むいね』36 号の「山スキーの可能性について」(大島次郎)では、山スキーフィールドの開拓の可能性を大いに求めたいが、現役 4 年間という時間的制限による閉塞感が部内に漂っていると指摘する。以下引用すると、“たしかに日高のカールでのスキーは魅力的で、それを実現する為にはかなりの実力が必要である。そのため現在の山スキー部ではそのレベルを維持するのがせいいっぱいで、それ以上のことをするには 4 年では無理だといったムードがある。だが、部のレベルを上げなくてもまだまだスキーの可能性が残されているのではないだろうか。” と投げかける。

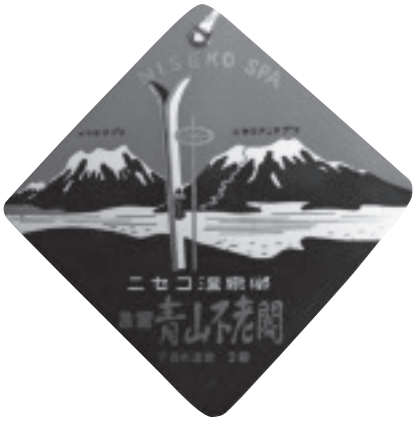
より滑りに特化した道具を使用して、山のピークから麓までを質の高い滑りで完結させるのも山スキーの可能性を広げる一つの実践ではないかと説く。“私はこの冬、山にゲレンデ板を持っていくつもりである。そして、ピークからいっきに下まで滑るのだ。山板では滑る気のしないクラスト、アイスバーンと戦い、徐々に雪も柔らかくなるにつれて、前も見づらくなる

ようなパウダースノーへと、そして樹林内に入り木と木の間をぬって滑る障害物スキー、それらをいっきに味わう”というのも山スキーの可能性追求の一つだと訴えている。

以上、むいね 1 号～51 号に掲載されているスキー技術論に分類した文章 18 編について、その要旨を簡潔に記した。水谷先生の「スキーの物理学Ⅰ～Ⅶ」は、正にスキー技術解説書として別格であり、今回改めて読んでも全く古さを感じないのは、私だけではないと思う。是非、現役山スキー部員にも一読を強くお勧めしたい。

『夢、愛、そして語らい―水谷 寛文集―』(北大山とスキーの会 1999)の第 4 章には、スキー術と題し、「スキーの物理学全編」のほか、「考えるスキーシリーズ」や「スキー人生をのばすために」など 27 編の、スキー技術に関し示唆に富む文章が綴られている。常に身近に置いておきたい文集である。

『むいね』は、この冒頭でも述べたように、その当時の現役が「考え、行動し、悩んだ」足跡が飾ることなく文章表現されたものであった。今回抽出したスキー技術論にも、各年代の現役当時のさまざまな時代背景やクラブとしての悩みが色濃く反映されていることが判った。1998(平成 10)年以降、スキー技術論的な文章が見受けられないのは残念だが、これからも現役諸君が「スキーに対するこころざし」を高く持って、山スキーを楽しまれんことを期待する。



青山温泉不老閣ステッカー


所宿合期冬部ーキス大北
泉温山青
園老不
せ稱とツツリモンサの洋東
地ーキスの的想理いるら

『北大スキー部部報』第 3 号より

■コラム■
部費稼ぎのためのアルバイト

映画会開催

昭和 35 年以前から部費稼ぎのための映画会が開催さされていた。当時は、フランス映画、イタリア映画が人気だった。リラの門、鉄道員、道、慕情等記憶あり、アメリカ映画はジェームス・ディーン主演のエデンの東が圧倒的人気。若い女性にターゲットを当てた題材選びが肝要。チケットは女子高校の校門前、大通公園のアベックの女性が OK すれば必ず 2 枚売れた。チケット代は 100 円、会場は狸小路 2 丁目付近にあった大谷会館。定員 800 名くらい。2 本立て、入れ替え 2 回。昭和 30 年代末からは当時まだ一般に観られなかったスキー関連の映画会を道新ホールなどで開催し、入場料を大雪縦走資金や装備購入費に充てた。上映映画の選定や会場借り入れ交渉、さらに入場税のことで税務署との交渉などの準備作業があった。道外からの新入生は札幌に知人がいないため、入場券の販売にかけずり回った。当時できたてのクラーク会館生協のカレーが 45 円だった。

ダンスパーティー(ダンパ)

スキー映画の観客が減ってきたため、昭和 40 年代初め頃、当時はやり出したダンパを数年間開催し、やはり部費に当てた。しかし、ダンスを踊れる部員が少なく、旧理学部前の部室でたびたびダンス講習会が開かれた。

土木会社の作業員

昭和 30 年代前半、日高の電源開発関係の調査測量で新冠川、糠平川などの測量人夫として入山した。これが山班が日高の山に関心を持ったきっかけとなったと聞いている。昭和 36 年ロッジ建設の資金稼ぎで、測量の手伝い、ビル現場の資材運搬など。昼は現場責任者からチケットが渡され、近くの食堂に行き 1 食なんでも好きなものが食えた。いつも一番高いカツ丼を頼んだ。建てたビルには完成後トルコなどが入る寄合風俗ビルになったのもあった。昭和 40 年頃には藤永(1968)の家庭教師先に依頼されて土木工事会社の作業員を計画的に数名ずつ派遣した。何回分かをノルマとして部費に当て、それ以上は確か個人の収入にできた。下水管の穴掘りや、今になればグランドホテル旧館の建築現場の穴あけ作業などの雑用を請け負った。

大通りのトウキビ剥き・配送

既に札幌の夏の風物詩として有名になって久しい大通公園のトウキビ売りは昭和 42 年から始まった。焼・ゆでとうきびには皮を剥く結構な力仕事があり、ワゴンの配車やとうきびの配送も担当するバイトが昭和 43 年のゴールデンウィーク頃から始まった。昼 2 夜 2 名の派遣をクラブで請け負い、当初昼 500 円、夜 1,000 円であった。この頃には部費への強制充当にはならず、バイトとして個人の収入となった。当初は大変勤務状態が優良で、観光協会長から表彰を受けた。

昭和 50 年頃の最盛期のとうきびバイトの勤務状況は次のとおり(1975 吉田守男):大通り 6 丁目(今の医師会館のあるブロック)のトウキビセンターに朝 8 時(頃だった)に 2〜3 人(少なくとも 2 人)集まり、観光協会嘱託員の緑川爺さんの指示の下、コンロの炭火熾しをはじめ、トウキビ屋台の準備をして、9 時すぎ頃大通り 3〜5 丁目へ屋台 8〜10 台程をごろごろ押して運ぶ、9 時過ぎか 10 時前ころ売り子さんらが屋台に就くと同時くらいにコンロを運ぶ、トウキビを缶(アルミの 4 斗程もある缶、ガンガンと呼んでた)に入れて運ぶ(春先は前年の冷凍物をゆでて、夏先から採れたてを皮むきして)、昼間は時々屋台を廻り、その日の売れ行きを売り子さんと打ち合わせしつつとうきびの追加分を運ぶ。確か 17 時に夜担当と交代、夜担当は 21 時過ぎ屋台をトウキビセンターに回収して火の始末をして 22 時ころその日が終わり。バイト代は日給でせいぜい昼班確か 1800 円、夜班 1200 円くらいだったと思う。これが春さきから秋の半ばまでシーズン中毎日のことなので、アルバイト係(手配師と呼んでいた)は、人数確保と、急な欠勤がある場合の補填作業に大変だった。これで生計を立てていたという部員もいるようだった。

しかし、徐々に勤務状態が悪くなり、昭和 56 年 9 月にはとうとう除籍となってしまい、バイト係の松村君は「むいね」に詫び状を入れた。

藤永　徹(1968 獣医)

第 3 章

語らいの場



『むいね』第 10 号より





無意根小屋（三宅信一郎画）



パダイスヒュッテ（三宅信一郎画）



『山スキー部歌集』第６版より



シルバーロッジ

スキーと山がわれわれの活動の場ではあったが、われわれを育み活きづかせたのはそれ以外にも僕らの故郷である山小屋やヒュッテ、集いの場であったロッジ、クラブ運営の中心であった部室、そして語らいの場であった「むいね」などの出版物や歌集がある。本章では、北大の課外活動として他に類を見ない山スキー部における語らいの場を見てみよう。

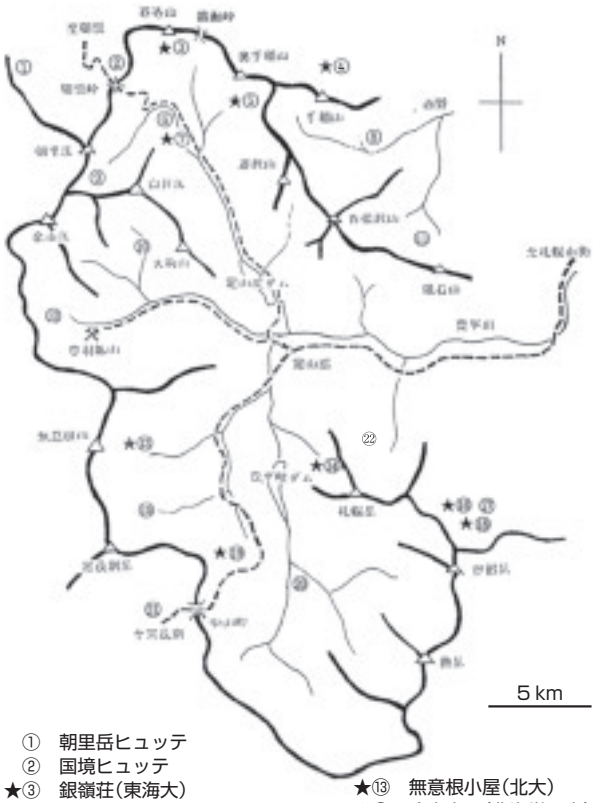
1　山小屋―僕らの故郷―

1.1　ヒュッテンケッテ(Hüttenkette)構想

在田　一則（1965 理 地鉱）

札幌西部の山々では、昭和初期から万計山荘が建設された1965(昭和40)年まで、萬計小屋や二股小屋のように一般に開放されていた帝室林野局の造林小屋のような小屋や再建された小屋も含めると、延べ約25棟の山小屋が建設されている(図3-1-1、表3-1-1)。これはたいへんな数である。それらの多くは現在では倒壊したり焼失したりしてしまったが、それでも9棟の山小屋が健在である。北大はそのうちの5棟を所有している。札幌のような市民200万人近い大都市のすぐ近くにこのように多くの山小屋があるところは世界的にも稀であろう。また、山小屋を5つも持っている大学は日本には他にはない。世界の大学でもないのではなかろうか。これらの山小屋は北大の特異な貴重な財産でもある。

北大の5つの山小屋は、古い順にテイネ パラダイス ヒュッテ(1926(大正15)年建設、1994年手稲パラダイスヒュッテとして再建、山スキー部管理)、ヘルヴェチア ヒュッテ(1927(昭和2)年建設、山岳部管理)、空沼小屋(1928(昭和3)年建設、山岳部管理)、奥手稲山の家(1930(昭和5)年鉄道省札幌鉄道局建設、1971年北大に譲渡、ワンダーフォーゲル部管理)、無意根小屋(1931(昭和6)年建設、山スキー部管理)である。これらは1926年から数年のうちに建設されている。1920年代後半から1930年代にかけては、これらのほかに中山ヒュッテ(1928)・朝里岳ヒュッテ(1928)・二股小屋(1928)・萬計小屋(1929)・白樺小屋(1930)・長門ヒュッテ(1931)・奥無意根小屋(1931)・右股小屋(1932)・冷水小屋(1933、1950年焼失)・東日ヒュッテ(1933)・峠ノ小舎(1934)・春香山銀嶺荘(1934)・湯の澤小屋(1937)が団体・個人によりあいついで建設されている(表3-1-1)。北大の5棟以外で現存する山小屋は、冷水小屋(再建、1952、北海学園大学管理)・中山小屋(1952、北海学園大学管



①　朝里岳ヒュッテ
②　国境ヒュッテ
★③　銀嶺荘(東海大)
★④　パラダイス　ヒュッテ(北大)
★⑤　奥手稲山の家(北大)
⑥　白樺小屋
★⑦　ヘルヴェチア　ヒュッテ(北大)
⑧　右股小屋
⑨　朝白寮
⑩　白井小屋
⑪　東日ヒュッテ
⑫　長門ヒュッテ
★⑬　無意根小屋(北大)
★⑭　冷水小屋(北海学園大)
⑮　奥無意根小屋
★⑯　万計山荘(営林署)
⑰　萬計小屋
★⑱　空沼小屋(北大)
★⑲　中山小屋(北海学園大)
⑳　二股小屋
㉑　中山ヒュッテ
㉒　湯の澤小屋

注　★は現存しているもの　(　)は現在の所属を示す。

図3-1-1
札幌近郊の山小屋配置図(北海道大学の山小屋展実行委員会2006より、山崎英雄氏原図)

表 3.1.1　札幌西部山地の山小屋一覧（建設年代順、太字は現存）

小屋名	建設年	現所有者	連絡先	設計者	施工者	出資	建設者 / 管理者	宿泊人数	備考
手稲パラダイスヒュッテ	**1926（大正 15）年**	**北海道大学**	**北大学務部学生支援課**	**マックス・ヒンデル**	**藤川万吉→留目熊吉**	**北大、大野精七、北大有志**	**北大スキー部**	**30**	**1994 年に移転復元**
ヘルヴェチアヒュッテ	**1927（昭和 2）年**	**北海道大学**	**北大学務部学生支援課**	**マックス・ヒンデル**	**水本小判治 大工田頭**	**ヒンデル、グブラー、山崎春雄**	**北大山岳部**	**16**	**1934 年建設者から北大（山岳部）へ寄贈 1986 年大改修**
空沼小屋（秩父宮ヒュッテ）	**1928（昭和 3）年**	**北海道大学**	**北大学務部学生支援課**	**マックス・ヒンデル**	**伊藤組（伊藤豊次）**	**秩父宮**	**大野精七 / 北大山岳部**	**30**	**1957 年スキー部から山岳部へ管理替え 2017 年大改修**
中山ヒュッテ	1928（昭和 3）年					北海道山岳会	北海道庁山岳会	30	中山峠付近。約 10 年で廃屋。
朝里岳ヒュッテ	1928（昭和 3）年						小樽スキー倶楽部	20	朝里川上流右股源流付近
二股造林小屋	1928（昭和 3）年				伊藤組	帝室林野局札幌林野支局	札幌林野支局	15	豊平川上流　空沼入の沢出合
萬計造林小屋	1929（昭和 4）年					帝室林野局札幌林野支局	札幌林野支局	20	空沼岳万計沼ほとり
白樺小屋	1930（昭和 5）年					樽定バス㈱	樽定バス㈱	80	ヘルヴェチア・ヒュッテの 500m 上流
奥手稲山の家	**1930（昭和 5）年**	**北海道大学**	**北大学務部学生支援課**	**近藤　皎（札幌鉄道局）**		**鉄道省札幌鉄道局**	**鉄道省札幌鉄道局**	**38**	**1971 年国鉄から北大（ワンダーフォーゲル部）へ移管、1990-91 年大改修。**
無意根小屋	**1931（昭和 6）年**	**北海道大学**	**北大学務部学生支援課**	**太田延雄（北大営繕課）**	**沖津組（沖津熊次郎）**	**武藤山治・大野精七**	**大野精七 / 鈴木重雄**	**20**	**1957 年大改修、1990 年大改修**
長門ヒュッテ	1931（昭和 6）年			北大スキー部	大工・北大スキー部員	無意根小屋建設の残金	北大スキー部	7	既存廃屋利用
奥無意根小屋	1931（昭和 6）年					芳賀スキー店	芳賀スキー / 有原豊平	20	薄別川上流、中岳東方約 6km
右股小屋	1932（昭和 7）年					北海道庁頂望会	北海道庁頂望会	20	手稲山永峰沢
冷水小屋（旧）	1933（昭和 8）年			宇都宮　嵩		定山渓鉄道	定山渓鉄道	30	1943 年 10 月定鉄から北大に譲与。北大スキー部管理。1950 年 9 月焼失
東日ヒュッテ	1933（昭和 8）年					東京日々新聞	札幌スキー連盟	30	砥石山山麓
国境ヒュッテ（峠ノ小屋）	1934（昭和 9）年					樽定バス㈱	樽定バス㈱		
銀嶺荘（旧）	1934（昭和 9）年					北海タイムス社（現北海道新聞社）	北海タイムス社（現北海道新聞社）	50	社会部長・事業部長河合裸石氏が尽力。戦時中に焼失
湯の澤小屋	1937（昭和 12）年								定山渓滝ノ沢
朝白寮									
冷水小屋（新）	**1952（昭和 27）年**	**北海学園大学**	**北海学園大学学生部学生課**			**北海道電力**		**30**	**北電により再建され豊平町へ寄贈。 1960 年北海学園大学へ譲与。**
白井小屋	1952（昭和 27）年			山崎春雄		北海道林務部		13	白井川右股。札幌医科大学が管理。 2011 年 10 月焼失
中山小屋（新）	**1952（昭和 27）年**	**北海学園大学**	**北海学園大学学生部学生課**	**栄　米治（北海道電力）**		**北海道電力**		**30**	**豊平町を経て北海学園大学に譲与**
銀嶺荘（新）	**1960（昭和 35）年**	**北海道東海大学**	**北海道東海大学札幌事務課**			**北海道新聞社**		**50**	**1974 年北海道東海大学に移管 管理人が常駐**
万計山荘	**1965（昭和 40）年**	**石狩森林管理署 / 万計山荘友の会**	**万計山荘友の会**			**定山渓営林署**		**20**	**1995 年から友の会が管理**

理）・銀嶺荘（再建、1960、東海大学管理）・万計山荘（1965）の 4 棟で、すべて戦後に建てられたものである。もっとも古い北大の 5 棟がいまも健在であるのは、それらの小屋で育った各部の現役部員や OB が小屋を大切に守ってきたからにほかならない（北海道大学の山小屋展実行委員会編 2006）。

このように、定山渓を中心とした札幌西部の山々に多くの山小屋が建設された背景には、これらの山々に点々と山小屋を建設し、小屋を巡ってスキーツアーを楽しもうという“山小屋の鎖（Hüttenkette）”構想があった。

スキー部第 5 代部長の大野精七先生（1885–1982：**写真 3-1-1**）は、1921（大正 10）年 5 月に新設された北大医学部の教授候補となり、同年 10 月からのドイツ留学が決まった。先生は“寒くて雪の多い新任地札幌で暮らすためには、寒さを恐れず、むしろ雪に親しむべきであろうと思い、それにはスキーをやるのが一番いいだろうと考えた。欧州がスキーの本場であると聞いていたが、それにはまず日本で手習いしよう”と、留学前に新潟県赤倉温泉の東大スキー部合宿所で友人にスキーを習った（大野 1971）。フライブルグ大学留学中はドイツスキークラブに入会するとともに、郊外のシュワルツヴァルト周辺の山々で Hüttenleben（山小屋生活）やスキーツアーを楽しんだ。休日ごとに人々が家族連れでスキーを楽しむ光景を目の当たりにし、新任地の札幌でもこうありたいと思った。先生は、「私は医者ですが、医者というものは病気を治すばかりが能じゃない。病気にかからぬ身体作り、これにはスキーがうってつけだ。フライブルグで学んだ一番の収穫はスキーでした」と述べている（大野 1971）。先生はまた、赴任先の北大のスキー部がスキー教程書を作り、スキー講習会や競技会などを行い、活発に活動していることを知り、ヒュッテからまだ見ぬスキー部学生たちに絵葉書を送ったりもした。1924（大正 13）年に帰国し、4 月に医学部産婦人科学教授に着任した先生は、先生の帰国を心待ちにしていたスキー部関係者からスキー部長就任を懇請された。それより 3 年前にスイスのチューリヒ大学留学から帰国し、医学部の初代解剖学教授となっていた親友の山崎春雄先生（1886–1961：**写真 3-1-2**）の奨めもあり、同年 11 月に第 5 代部長に就任した。



写真 3-1-1
大野精七先生（1941 年頃）。背景の絵は無意根小屋（北大スキー班班報、1941 より）



写真 3-1-2
山崎春雄先生（北海道大学の山小屋展実行委員会編、2006 より）

その頃札幌には、1908（明治 41）年に北大に赴任し、1925（大正 14）年まで予科ドイツ語教師として教鞭をとったチューリヒ大学出身のコーラー先生（Hans Koller, 1881–1925）やコーラー先生夫人の兄のやはりチューリヒ出身で 1924 年 3 月から札幌で建築事務所を開いていたヒンデル氏（Max R. Hinder, 1887–1963：**写真 3-1-3**）がいた。ヒンデル氏は 3 年半の札幌滞在中に北大教授たちの自宅や札幌藤女学校・北星女学校・函館トラピスチヌス修道院などの



写真 3-1-3
M. ヒンデル氏。藤学園本館上棟式(1924 年)のおり(角、1995 より)



写真 3-1-4
A. グブラー先生と予科生たち。北大植物園(？)にて(北大附属図書館北方資料室所蔵)



写真 3-1-5
武居哲太郎氏(武居哲太郎遺稿集刊行会、1941 より)

ほか、北大の 3 棟の山小屋を設計した。コーラー先生は 1924 年 12 月にスキー部のニセコ青山温泉スキー合宿に体調不良をおして参加したのがもとで翌年 1 月に亡くなった。コーラー先生の後任として 1925 年 8 月に着任した人がチューリヒ大学出身のグブラー先生(Arnold Gubler, 1897–1983)であった(**写真 3-1-4**)。先生はスイス山岳会員でもあり、帰国する 1932(昭和 7)年までスキー部や山岳部の部員たちと札幌近郊や道内の山行をともにした。

このようにして、1925 年頃に札幌で会遇した大野・山崎・コーラー・ヒンデル・グブラーという山やスキーを愛する日本やスイスの人たちが北大を接点として交流を深め、スキー談義やドイツやスイスでの山行や山小屋の楽しさを語らうなかで、定山渓を中心とする山々に山小屋を建設し、スキーツアーを楽しもう、それを市民に広めようという“山小屋の鎖”構想が生まれたと想像するに難くない。

1926(大正 15)年に、北大スキー部創立 15 周年記念として大野先生の提唱により部員たちや OB の協力で建設されたテイネ パラダイス ヒュッテは“山小屋の鎖”(Hüttenkette)構想の第一歩であった。翌年にはヒンデル氏・グブラー先生・山崎先生を中心にヘルヴェチア ヒュッテが建てられ、さらに、1928(昭和 3)年 12 月には 3 番目の秩父宮ヒュッテ(空沼小屋)が空沼岳の万計沼のほとりに完成した。これには、1928(昭和 3)年に視察のため来道された秩父宮様が、大野先生ほかスキー部・山岳部の OB や部員らの案内によりパラダイス ヒュッテやヘルヴェチア ヒュッテに泊まられてスキー登山をされ、Hüttenleben を大変お気に入られた宮様が大野先生の“山小屋の鎖”構想に共鳴されて、ご自身の山小屋建設を提案されたという経緯があった。

1930(昭和 5)年 12 月には奥手稲山ユートピアに鉄道省札幌鉄道局が営業山小屋として奥手稲山の家を建設した。これは当時、鉄道省が旅客誘致の一環としてスキー客のための施設を整備した企画であったが、当時札幌鉄道局長であった武居哲太郎氏(1883–1940：**写真 3-1-5**)は独逸語学協会中学－第一高等学校－東京帝国大学と大野・山崎両先生とは同窓生であったという縁もあった。場所は“山小屋の鎖”構想から大野先生の助言によりパラダイス ヒュッテ

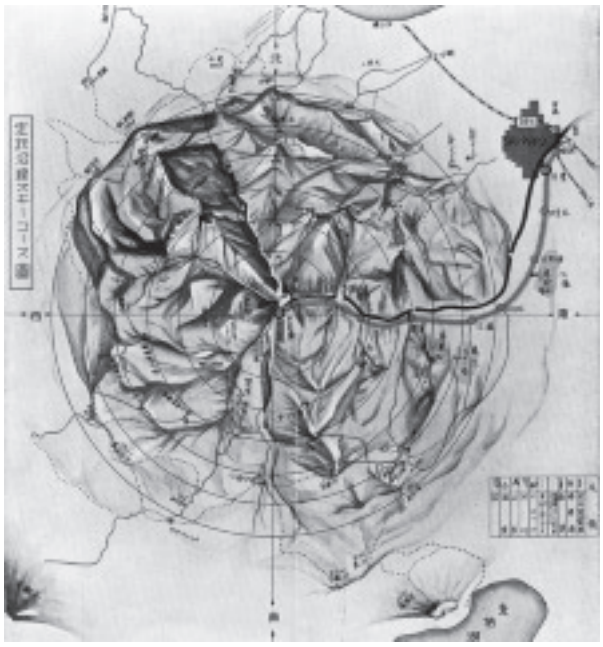


図 3-1-2
定山渓を中心とした“山小屋の鎖”(定山渓鉄道パンフレットより、高澤光雄氏所蔵)



図 3-1-3　北海タイムス(1929 年 1 月 1 日)の記事

とヘルヴェチア ヒュッテの中間ということになった。さらに、1931(昭和 6)年にはスキー部創立 20 周年記念して無意根山の麓に無意根小屋が作られた。

その後、“ヒュッテの鎖”は急速に進展し、1932 年に定山渓鉄道株式会社(現在の株式会社じょうてつ)によって発行された「定山渓及札幌附近のスキーコース図」には 11 棟のヒュッテが紹介されている。その 3 年後に発行された北大スキー部編「札幌附近スキーコース図(改訂版)」には 14 のヒュッテが載っており、それらのヒュッテを結ぶ縦横のスキーツアーコースが示されている。1930(昭和 5)年には北大スキー部



写真 3-1-6
スキーツアーに出かける人々。1933 年頃定山渓駅にて(札幌生活文化史 大正昭和前期編、札幌市教育委員会編、1986 より)

員により、銭函～ヘルヴェチア間、奥手稲～ヘルヴェチア間、パラダイス～奥手稲間に指導標が設置され、スキーツアー愛好家は年々増加した(図 3-1-2)。

大正末年から昭和初期の 10 年ほどの間に札幌近郊の山々にスキーツアーを目的とした山小屋が 18 棟(帝室林野局の小屋も含む)も建設されたことは驚くべきことである(図 3-1-3)。当時のスキーの急速な普及とスキーツアーの人気ぶりが彷彿と思い浮かぶ。1930(昭和 5)年 2 月 11 日から 1 年間の空沼小屋の利用者延べ人数は 2,086 名であったという記録がある。また、札幌スキー連盟や北海タイムス社(現在の北海道新聞社)などが主催するスキー登山会もしばしば行われ、時には 100 名近い参加者が、近くは円山・春香山・砥石山・手稲山、遠くは札幌岳・空沼岳・無意根山などでのスキーを楽しんでいる(写真 3-1-6)。1929 年 2 月 19 日の北海タイムス紙は、2 月 17 日の軽川駅(現在の手稲駅)の降客 481 名中スキー客は 331 名、銭函駅では 237 名中 169 名であり、20 日の軽川駅では同じく 540 名中 407 名であった、と伝えており、その人気ぶりが窺える。

北大でも大野先生の肝いりで教職員による「若老会」が作られ、スキー部部員や OB がリーダーとなって「お誘いの会」を設けてしばしば近郊の山々へスキーツアーや登山を行った。このように、1930 年代には、“ヒュッテの鎖”

は完成され、スキーを一般市民に広め、スキーを通じて冬を克服し、冬を楽しむという大野先生や山崎先生の夢はほぼ実現したのである。

パラダイス ヒュッテ・ヘルヴェチアヒュッテ・空沼小屋のようなヒンデル氏の設計によるスイス式の本格的ヒュッテの建設は本州の登山やスキーの関係者にも大きな影響を与えた。本州から多くの人たちがこれらのヒュッテを視察に訪れ、その結果、同様のヒュッテがあちこちで大学ヒュッテあるいはクラブヒュッテとして建てられた。

引用文献

大野精七(1971) 北海道のスキーと共に．383p.
角 幸博(1995) 北の地に新風をおくったスイス人建築家 マックス・ヒンデル．住宅建築，1995 年 1 月.
武居哲太郎遺稿集刊行会(1941) 武居哲太郎遺稿集.
北海道大学の山小屋展実行委員会編(2006) 北海道大学の山小屋．北海道大学総合博物館，83p.

1.2 テイネ パラダイス ヒュッテ(手稲パラダイスヒュッテ)

在田 一則（1965 理 地鉱）

コーラー先生によりスキーが北大に紹介された 4 年後の 1913(大正 2)年 2 月 11 日、稲田昌植ら 8 名はスキーによる手稲山初登頂を果たした。彼らは、琴似駅から現在の西野二股まで馬橇を使い、そこから永峰沢をつめて頂上に達した。その後(1917 年頃)、軽川へ下る北斜面に後にパラダイスと呼ばれるようになる快適な滑降スロープがあることがわかり、軽川駅(現在の JR 手稲駅)からの登山が一般的となった。しかし、当時は、手稲山といえども冬の日帰り登山は困難であった。

山小屋のない時代のスキー登山は主として山麓の造材小屋を根拠地として行われた。しかし、部員たちにとっては外国のスキー指導書や絵はがきなどにある丸太造りのスキーヒュッテは憧れであり、夢であった。そのような部員たちの思いの一端は、加納一郎 OB らが編集したスキー部年報第 1 号とも言うべき Alpenzeitung(第 9 シーズン：1920–1921)に見られる奥手稲山中の樵小屋の一部を借りて奥手稲の根拠地としたという中野誠一 OB(1921)の文章にも表れている。

スキー部第 5 代部長の大野精七先生は“ヒュッテの鎖”構想実現の手始めに、スキー部創立 15 周年記念事業として、記念部報の発刊とともに、手稲山の中腹にヒュッテを建設することを計画し、大野委員長をはじめ 8 名の部員からなる建設委員会が発足した。設計は当初、素人の集まりのため議論百出していたが、ヒンデル氏が協力してくれることになった(佐々木 1926)。ヒンデル氏の設計(図 3-1-4)は、5 間×3 間の二階建丸木小屋で、1 階には

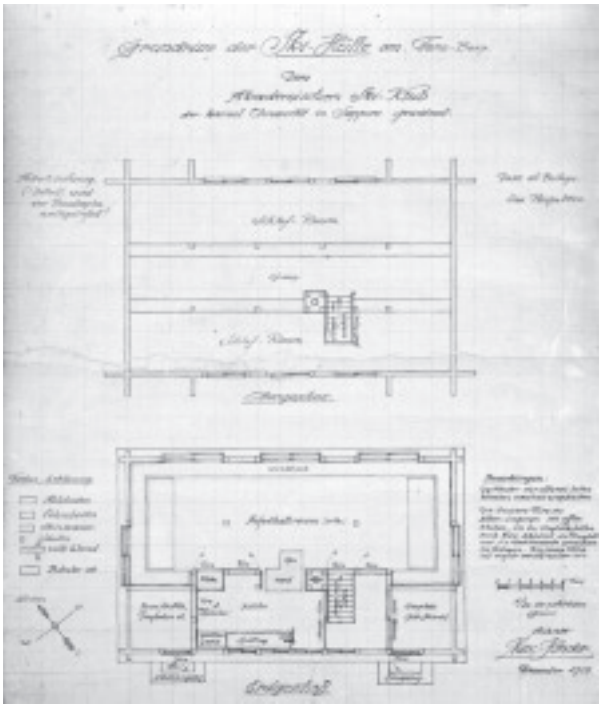


図 3-1-4
ヒンデル氏自筆のパラダイス ヒュッテ設計図(札幌ウィンタースポーツミュージアム所蔵)

食堂兼居間、炊事場、物置、スキー置場、2階には寝室(寝具には藁布団)があり、工費の概算は1,500円であった。場所はグブラー先生の助言もあり、当時雁皮平とよばれていた白樺に囲まれた清流のほとりに決まった。土地は北海道造林会社(現在の王子緑化株式会社)から貸与された。建設用材のとど松191本(66石)も北海道造林会社から譲渡された。翌年の7月から、ヒンデル氏の紹介による大工藤川万吉氏の手により工事が始まった。資材は当初、スキー部員たちにより軽川から約6kmの炎天下の道を運ばれた。熊に遭遇することもあったという。しかし、すべては運搬できず、最後は馬で運ばれた。寸法の間違いによる丸太の不足や大工が留目熊吉氏へ交代するなどのトラブルもあったが、1926年11月2日に我が国で最初の本格的スキーヒュッテは竣工した(**写真3-1-7**)。

ヒュッテは大野先生により附近の通称パラダイスに由来して、テイネ パラダイス ヒュッテと命名された。総工費はいろいろな予想外の出費のため、当初見積りを大幅に上回り、2946円94銭であった。大野先生が佐藤昌介総長を説得し、北大が設備費として1,260円95銭を支出し、残りは大野先生、スキー部OB、北大教員および学生有志の醵金によった。建具はヒンデル氏が寄付した。当時宿泊料金は北大関係者が10銭、一般使用者は15銭であった。

1928(昭和3)年2月21日、秩父宮様は冬の北海道視察のため来道され、24日～26日は大野先生や木原 均らのOB、スキー部や山岳部の学生たちの案内で、新築まもないパラダイスヒュッテとヘルヴェチア ヒュッテに宿泊され、手稲山や朝里岳、春香山でスキーを堪能された(**写真3-1-8**、**図3-1-5**)。

自分たちの小屋を手に入れた北大スキー部で



写真3-1-7
完成前のパラダイス ヒュッテ。坂本彌直撮影(佐々木、1926より)



写真3-1-8
パラダイス ヒュッテから手稲山頂に向かう秩父宮様、1928年(大野精七、1971より)

此の度は諸君の貴い学問の時間を犠牲にして、僕のスキーの為にご面倒を見て下すった事は感謝に堪えない次第です。

私は永い間憧れていた冬の北海道に来て、益々この自然に対する愛着と親しみを深めました。特殊な環境に在る諸君が、学問の余暇をこの男性的スポーツに心身を鍛錬される事は、必要な事であり、且つ当然の事であります。

短い間ではありましたが、スキーを通じて諸君が凡ゆる機会に、凡ゆる形式で示して下された厚意は忘れることの出来ないことであります。北海道に恵まれた諸君が将来国家の為に大いに尽力あられん事を祈るものであります。此の度はどうも有難うございました。

図3-1-5　秩父宮様から北大スキー部員・山岳部員への感謝の言葉



写真 3-1-9
賑わっていた戦前のパラダイス ヒュッテ(絵はがきより)



写真 3-1-11
北大ワンダーフォーゲル部新人歓迎会。1959 年 5 月(千葉誠哉氏撮影)



写真 3-1-10 冬に備えて薪積み(永野拓也 OB 撮影)



写真 3-1-12
閉鎖されたパラダイス ヒュッテの雪下ろし作業。1990 年 1 月(伊藤健次撮影)

は年末の“ニセコ青山温泉スキー合宿”とともに、パラダイス ヒュッテでの春の合宿が恒例となり、“畑党”ではジャンプ班、距離班に分かれての猛練習が行われた。

当時の Hüttenbuch(1928)には
〈合宿や　ジャンプばかりで　日が暮れる〉
〈私しゃ手稲山　谷間の娘　ジャンプ恐がる子はもたぬ〉とある。

パラダイス ヒュッテが一般スキーヤーで賑わったのは、冬のスポーツが他になく、またスキー場にはリフトがなく、山スキーが一般的だった戦前で、日曜日ともなると、軽川駅はスキーヤーでごったかえし、ヒュッテまで人の列が絶えないほどのにぎわいであった。ヒュッテでは管理人夫婦により豚汁や甘酒などが提供されたが、小屋の中は身動きもできないくらいの人混みで、外で立って食べる人も多かったという(西野 1982)。前記のように、1929 年頃の日曜日には軽川駅での降客 540 名中スキー客は 407 名という盛況であった(**写真 3-1-9**)。

戦争中および戦後しばらくは、スキー部山班はパラダイス ヒュッテ・無意根小屋・空沼小屋・冷水小屋の 4 つの山小屋を管理していたこともあり、十分な管理は出来なかった。また、戦中・戦後の社会の荒廃により、スキーヤーや登山者のモラルも低下し、どこの山小屋も荒れ果てた。パラダイス ヒュッテでも窓ガラスが盗まれたり、壁板が燃やされたりしたことがあった。しかし、スキー部員たちの努力によりしばしば修理され、維持された(**写真 3-1-10**)。しかし、戦後間もない、物資が乏しく娯楽もあまりない時代、ヒュッテは北大生たちにとっては憩いの場であった。

1963 年 4 月、ヒュッテの管理はスキー部山班からワンダーフォーゲル部に移され、管理・維持された(**写真 3-1-11**)。いっぽう、手稲山の



写真 3-1-13
再建された手稲パラダイス ヒュッテ（小河健伸撮影）



写真 3-1-14　パラダイスでの雪崩救助講習会、2004 年

自動車道路の完成と山頂のテレビ塔の設置（1956 年）やテイネオリンピアスキー場の開設（1965 年）、さらに第 11 回冬季オリンピック札幌大会開催（1972 年）などにより、まわりの環境は大きく変わり、部員以外の人にはほとんど利用されなくなった。年月とともにヒュッテの老朽化がすすみ、1978 年には使用が危険となったため、ついに閉鎖されるにいたった。しかし、倒壊を防ぐため、ワンダーフォーゲル部や山スキー部の部員によって、ときどき雪下ろしが行なわれ、小屋は維持された（**写真 3-1-12**）。

ヒュッテ閉鎖のあと、スキー部 OB やワンダーフォーゲル部 OB など関係者によって、歴史的意義のあるテイネ パラダイス ヒュッテの再建あるいは移転保存などが検討されたが、種々の事情により実現できなかった。1989 年 2 月には山スキー部の OB と現役部員からなるパラダイスヒュッテ問題研究会が設置され、ヒュッテの維持方法を研究するとともに、冬季の倒壊を防ぐため雪下ろしを続けた（パラダイス問題研究会 1989）。

1990 年春には、北大工学部建築工学科の越野 武氏と角 幸博氏の協力によりヒュッテの状況調査が行われた。その結果、倒壊の恐れもあることがわかり、由緒あるテイネ パラダイス ヒュッテを惜しむ声が再び大きくなった。それを契機に改築復元への気運が急速に盛り上がり、1992 年春には、山とスキーの会に手稲パラダイスヒュッテ再建準備委員会が設置された。さらに、1994 年 2 月にはワンダーフォーゲル部 OB 会やヒュッテに思い出をもつ市民も加わって手稲パラダイスヒュッテ再建期成会（会長 故 有江幹男元北大学長）が発足し、再建のための募金活動が開始された。

テイネ パラダイス ヒュッテは、奇しくも同年 3 月、その冬の大雪に耐えきれず倒壊し、68 年の使命を終えた。

かつてのヒュッテを愛した 1,100 件を越える法人・個人から寄せられた 6,400 万円の浄財により、1994 年 12 月 8 日新たなヒュッテが完成し、手稲パラダイスヒュッテと命名された（**写真 3-1-13**）。場所は周囲の環境を考慮して、土地提供者王子緑化株式会社の協力により旧位置から西へ約 400m 移動した。新ヒュッテはヒンデル氏の原設計図による復元を基本としつつ、山本幹雄 OB の設計により新たに地下室を設け、研修室や男女の洗面所と水洗トイレを備えた。さらに、これからの山小屋のモデルとしてソーラー発電施設と汚水の土壌浄化槽が設置された。

蘇ったヒュッテは、一般市民のほか、小学生など子供たちのクラブの活動や社会人の雪崩遭難救助訓練の場としても利用されている（**写真 3-1-14**）。また、地下室の研修室には各種視聴覚装置があり、大学生のゼミなどにも使われている。

文献

佐々木政吉（1926）新設記念ヒュッテに就て．北大スキー部創立 15 周年記念号，255–265.

中野誠一(1921) 奥手稲の小屋．Alpenzeitung 第 9 シーズン(1920–1921)，50–56.
西野一彦(1982) 戦中・戦後の山班．北海道大学スキー部七十年史，234–239.
パラダイス問題研究会(1989) パラダイスヒュッテ再建問題について．北大山とスキーの会会報，第 14 号，112–120.

1.3 空沼小屋

在田　一則（1965 理 地鉱）

空沼小屋はスキー部が直接建設したものではない。1928(昭和 3)年 2 月、秩父宮様は北海道各地を視察され、その間 1 週間札幌近辺とニセコでスキー登山をされ、新築の木香が残るパラダイス ヒュッテとヘルヴェチア ヒュッテに宿泊された。宮様はパラダイス ヒュッテをたいへん気に入られ、大野部長らの定山渓を中心とする“小屋の連鎖”構想に賛同され、自分も一つ作りたいと提案された。これが同年 12 月の宮様ヒュッテ(空沼小屋)建設の契機となった。

大野先生と山崎先生は次のヒュッテは空沼岳か中山峠付近のどちらかにと考えていたので、空沼岳の中腹万計沼付近を建設地に選び、設計はヒンデル氏が行った(図 3-1-6)。8 月上旬、大野先生は上京し、ヒンデル氏の設計プランを宮家に報告した。同月 25 日には宮家から電報にて、プランどおり万計沼のほとりに直ちにヒュッテを建設するように、また工事一切の管理は北大が行うようにと伝えられた(小川 1929)。

9 月 10 日、ヒンデル氏の来札に合わせて最後の建設地検分が行われた。これには山崎春雄・大野精七両先生が同行したが、このときの情景を山崎先生は、親友でスキー部 OB の松川五郎宛の手紙で次のように述べている(中村 2006)。

> ヒュッテの件は着々進行しています。急転直滑降とはいきませんが、ボーゲンぐらいで進んでゆきます。九月八日にヒンデルさんが札幌に来て、早速、大学の営繕課長、伊藤組の男それから大野、私、学生では小栗をはじめ二、三人、御料の仲野君、こうゆう同勢で山にゆきました。雨勝ちの九月初旬にしては、珍しく晴れた一日でした。その前八月末に大野君と行った時は朝からのドシャブリの中を沢を漕いで上るので徹底的にぬれましたが、今度はとても楽でした。空沼の「本流」に上って右横に万計沼の落ち口に出る道を真駒内御料の青年団の手で立派につけました。但し下の方で丸木橋を十三ばかり渡らねばなりません。私等の一行が新道の最初の使用をしたのですが、新しい路のまん中に湯気の立ちそうな熊のウンコがしてあったのは愉快でした。ちょうど歓迎のあいさつの様でした。沼のへりでゆっくりと休んで小栗君らはイハナを釣って、ほぼ場所を決定し、水の都合で小屋プランの左右を引くら返しとすることなぞもここできまり、ヒンデルさんは大元気で山を下り、夕方五時いくらの石山発で札幌へ帰りました(前晩は農家に泊まったのです)。伊藤組は冬までに仕上げると言っています。今度のヒュッテは三十人以上とゆっくり宿れます。

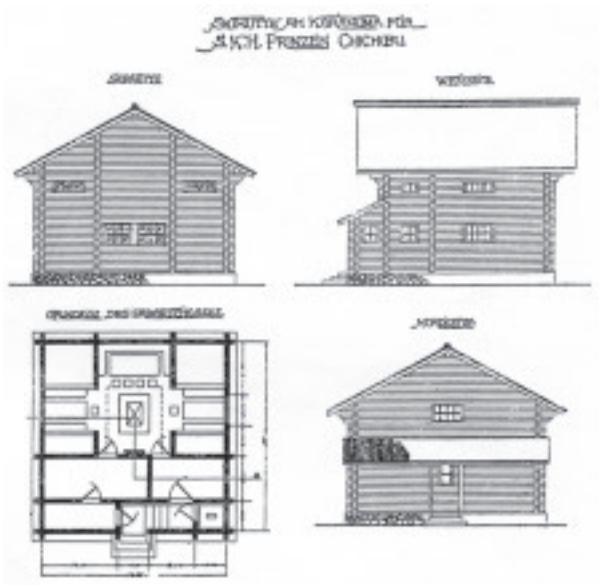


図 3-1-6
ヒンデル氏による秩父宮ヒュッテ(空沼小屋)設計図(山とスキー第 89 号、1929 より)。実際の設計図は、この図をもとに北海道帝国大学営繕課課長萩原惇正らが製図した(角、2002)。なお、当時は「空沼(そらぬま)」は「からぬま」と呼ばれていた。



写真 3-1-15
完成した空沼小屋。1929 年 1 月。右から 2 人目高松宮、その左大野先生(札幌ウィンタースポーツミュージアム所蔵 大野精七アルバムより)

手紙はさらに空沼建設後の次の山小屋について、中山峠のヒュッテは道庁が作ることになったこと、そのため北大はムイネシリの方に寄って別に建てる事になるだろうと、“ヒュッテの鎖” 構想にしたがって次の山小屋建設への意欲を述べている(中村 2006)。

工事は伊藤豊次氏(現伊藤組土建株式会社)が請け負い、10 月 17 日地鎮祭、11 月 26 日上棟式と進み、12 月 10 日に竣工した(角 2002)。ヒュッテは、4 間と 4 間 1 尺、32 坪の 2 階建て丸木小屋で、階下は大体においてヘルヴェチア ヒュッテの構造を大きく、そして精巧にしたもので、中央部は吹き抜けになっている。経費を充分かけ、設計・施工も入念で、作りはパラダイス ヒュッテやヘルヴェチア ヒュッテをはるかにしのぐものがあった。総工費は当初見積もりの 5,500 円を超過して 6,947 円となり、伊藤組は持ち出したと言われている(角 2002)。

建築木材は帝室林野局から無償供与された。

このヒュッテを最初に利用したのは、1929(昭和 4)年 1 月に来道された高松宮様であった

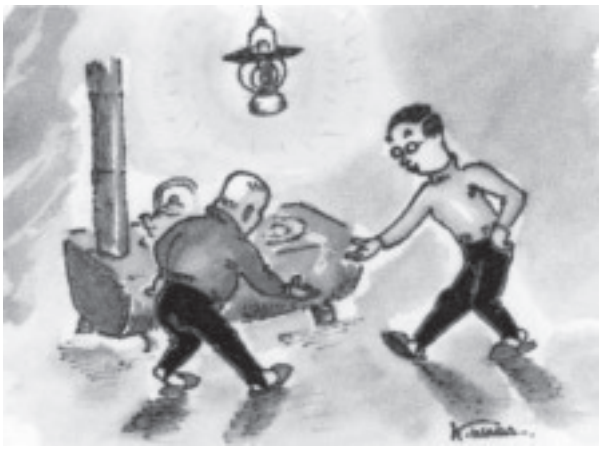


図 3-1-7
空沼小屋で大野先生とダンスに興じる三笠宮様。1950 年 2 月(画：和田 晴 OB)

(**写真 3-1-15**)。22 日～25 日にヒュッテに泊まられ、大野先生らのご案内で空沼岳・狭薄山・札幌岳に登られた。

『高松宮日記』(1996)によると、東京出立前の 1 月 16 日の項には「ヒュッテの名は、空沼ヒュッテがよいとのお兄さまの仰せだった。」とあるが、24 日の項には「夜、宿帖の第一頁に「空沼小屋」とかき名を署す。」とある。

小屋は、翌 1930 年 2 月 11 日から一般開放されることになり、当日大野部長・鈴木重雄医学部教授・宇都宮 嵩 OB ほか 7 名が万計沼湖上に整列してヒュッテ開きを行った。小屋の管理者として宮家から北大スキー部長と帝室林野局札幌支局長が指名された。小屋の使用料は、7 月 1 日～10 月 31 日　は 10 銭、11 月 1 日～6 月 30 日は 25 銭であった。『山と雪』第 6 号(1931)の記録によると、1930 年 2 月 21 日から翌年 2 月 21 日までの 1 年間の使用者数は 920 人(延べ使用者数 2,086 人)と記録されており、多くの登山者がこの小屋を利用して近辺の山々を訪れたことがわかる(中村 2006)。

戦後 1947(昭和 22)年 2 月に、小屋は秩父宮家から北大に寄贈され、スキー部が管理した。1950(昭和 25)年 2 月には三笠宮様が大野先生らのご案内で宿泊され、スキー部員達とともに Hüttenleben を楽しまれ、“ランプの灯明かりと、ストーブから漏れる火影の中で、学生諸君

の山とスキーの合唱が始まると、宮様は昨年のニセコの温泉の中で覚えられたツンツン節を、声を合わせて歌われるなど、和やかな雰囲気が山小屋に満ちあふれた。大野先生もよほど嬉しかったのでしょう、狭い小屋のストーブの脇で、宮様と覚えたてのスクエアダンスを、身振り手振り面白く踊り始められるとムードは最高に盛り上がった。”（和田 2000：図 3-1-7）。

当時、スキー部はパラダイス ヒュッテ・空沼小屋・無意根小屋・冷水小屋の 4 棟を管理しており、人手不足から 1957（昭和 32）年 6 月空沼小屋は北大山岳部が管理することになった。

空沼小屋は、比較的アプローチが短いことや静かな万計沼のほとりに建つ凝った造りの小屋ということもあり、近郊ではもっとも賑わう小屋であった。小屋は山岳部現役部員や OB により管理され、適時修理・補修が行われてきたが、老朽化が進行し、また万計沼湖畔の軟弱な地盤のためか、小屋全体が沼側へ傾斜してきた。そのため、2006 年 11 月に閉鎖されるに至った。

しかし、ヒュッテの歴史的かつ建築学的価値から、またこの小屋で楽しい Hüttenleben を味わった多くの人々の思いもあり、北大山の会（山岳部 OB 会）が 2009 年に「空沼小屋の保存を考える会」（会長：安間 荘氏）を立ち上げ、再建向けて募金活動を開始した。その結果、土台交換などの大規模な補修工事を行い（写真 3-1-16）、2017 年 7 月 1 日に彬子女王様（三笠宮様のお孫さん）・駐日スイス大使を迎えて空沼小屋の再開を祝った。



写真 3-1-16　甦った空沼小屋（在田一則撮影、2017 年 7 月 1 日）。

文献

小川玄一（1929）秩父宮殿下ヒュッテの竣工に當って．山とスキー，第 89 号，177–183

角 幸博（2002）M. ヒンデル原案の秩父宮ヒュッテ（空沼小屋）の建設経緯と建築概要について．日本建築学会技術報告集，第 15 号，339–342

高松宮（1996）高松宮日記　第 1 巻．中央公論社，490p.

中村晴彦（2006）空沼小屋．北海道大学の山小屋展実行委員会編，北海道大学の山小屋，35–38.

和田 晴（2000）雪山讃歌　山とスキーに魅せられて（3）．こなゆき（北大山とスキーの会会報），第 24 号，38–49.

1.4　無意根小屋（無意根尻小屋）

倉持　寿夫（1965 農 林学）

定山渓の西南西約 9km に位置する無意根山（標高 1,460.5m）は札幌近郊では余市岳（1,488.1m）に次いで高い山であり、その名（アイヌ語ではムイネ・シリ、ムイネ：箕、シリ：山）が示すように雄大なスロープをもち、良質な深雪に恵まれた山スキーには絶好の地である。無意根小屋を基地に 12 月から 5 月まで半年間スキーを楽しむことができる（写真 3-1-17）。

無意根小屋建設の経緯

北大スキー部の板倉勝宣ら 10 名が豊羽鉱山元山の廃屋を利用して、初めて冬に無意根山に登ったのは 1921（大正 10）年 1 月 7 日であった（第 4 章 3.3 参照）。その後、定山渓の先に薄別温泉ができてからは、無意根山へは薄別から登るようになった。しかし、山頂へのアプローチが長く、頂上附近の深雪を楽しめる登山者はご

く限られていた。部員の間でも、小屋があると、登頂ばかりでなく、大斜面での豪快な深雪スキーを楽しむことができるとの気持ちが強かった。

1931(昭和6)年、スキー部創立20周年記念事業として薄別川支流(小川)の上流か、頂上手前の通称シャンツェの下あたりに小屋を造ることが企画された。しかし、当初は資金の当てがなく、スキー部有志により株式組織を作って建てる案も出されたが、具体的には進まなかった(鈴木 1931)。

1931年4月、京都での学会から戻られた大野先生から、部員たちは、「無意根山に小屋が出来るようになったよ。そのお金も或る篤志な無名氏から貰うことになったよ」と告げられた。ただちに、スキー部OBの宇都宮 嵩氏と部員によりまだ雪の残るなかを候補地探しが行われた。4月29日には大野部長と部員が、冬でも雪がわれて水の出ている「スキー旅行者に充分な休息と心よい夢を結ばせるであろう場所」である候補地を確認した。建設費用は先生の義理の伯父にあたる鐘紡創始者武藤山治氏(2,500円)と大野部長(500円)がおもに出資した。当初、設計は山崎春雄先生にお願いする予定であったが、ちょうど先生は外遊をひかえて多忙なときであったので、北大営繕課の太田氏に依頼することになった(鈴木 1931)。

3間に4間の2階建で、柾葺きの総坪数26坪、宿泊定員30名であった。内部の構造は空沼小屋に近いものであった(**図3-1-8**)。施工には札幌の沖津組(沖津熊次郎氏)があたった。

当時、小川の上流二股(小屋から数km手前)までは、帝室林野局の道があったが、そのうえにはまったく道がなかったが、帝室林野局との再三の交渉の結果、林野局が小屋候補地までの道を造成してくれることになり、建設資材はすべてその道を使ってスキー部員により荷揚げされた。小屋の建設は9月に始まり、11月3日に竣工した。同月13日には大野先生、栃内吉彦先生(山岳部長)、太田延雄氏ほかが参加して、小屋開きの式が行われた。



写真3-1-17
"壁"を背にした無意根小屋(阿部幹雄撮影、1989年)

賑わった無意根小屋

小屋の完成により、近郊随一といわれる無意根山の大斜面の深雪スキーや1928年に完成した中山峠の中山ヒュッテへのスキーツアーを楽しむ人が増えた(**写真3-1-18**)。

当初、小屋は建設の経緯から大野先生の小屋として、北大医学部産婦人科学教室が管理していた。宿泊費は夏期が30銭、冬期は50銭で

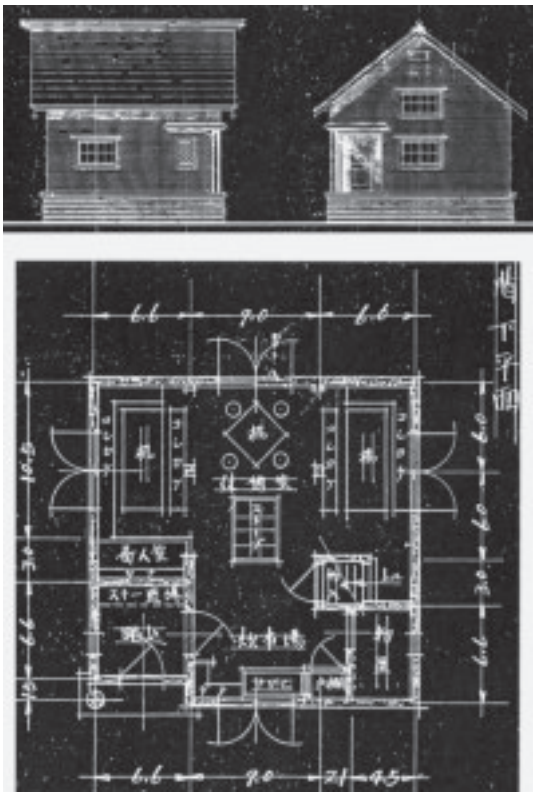


図3-1-8　無意根小屋設計図(北大山とスキーの会所蔵)



写真 3-1-18
建設まもない無意根小屋(絵はがきより)



写真 3-1-19
荒廃した無意根小屋。(1952 年 1 月 4 日、永野拓也 OB 撮影)

あった。1939(昭和 14)年に先生はスキー部長就任 15 周年を記念して、小屋をスキー部に寄付され、さらに先生が退官された 1948(昭和 23)年には北大に寄贈された。戦争のため、小屋管理は充分でなくなり、戦後の荒廃した時代には、備品が盗まれるなどして小屋はいっそう荒れた(**写真 3-1-19**)。

しかし、戦後の復興とともに山やスキーを愛好する人々が再び無意根に戻ってきた。1949(昭和 24)年 2 月には、高松宮殿下と三笠宮殿下がスキー部 OB・部員の案内により、小屋に泊まられ、無意根の深雪を楽しまれた。両殿下はその後ニセコでもスキー登山をされた。

部員の心のふるさと無意根小屋

北大スキー部山班時代から山スキー部へと無意根小屋の管理は部員たちの手で営々と引き継がれてきた。部員たちにとって無意根小屋は心のふるさとともいうべき特別な精神的拠り所であり、卒業後もこの小屋に寄せる想いは消えることはない。

1982(昭和 57)年に無意根小屋建設 50 周年の記念祭が行われたが(**写真 3-1-20**)、その後 60 周年祭(第 7 章 3 参照)、70 周年祭、そして 2011 年 4 月 29 日~5 月 1 日には 80 周年祭が盛大に執り行われた。

各記念祭には全国各地から OB・OG およびその家族が集まり、現役部員と合わせ定員 30 名の倍を超える参加者で小屋は溢れかえる。

夜は、天気が良ければ盛大な焚火を囲み、満点の星空の下、飲むほどに 80 代から 10 代まで青春一体となり、歌声が湧き上がる。

翌日、全員で山頂をめざし、ケルンにお参り、献歌。テラス尾根や壁で豪快なスキーを楽しみ午後小屋を後にする。「僕らの故郷」無意根小屋がこれからも迎えてくれることを願って……。

各時代の部員たちの無意根小屋に寄せる想いは、小屋日誌(Hüttenbuch)に綴られ、その一部は毎年部誌『むいね』に紹介されている。

特に夏の完全管理と称する、夏休みの始めから終わりまで 1 週間交代での小屋管理は、初年生部員にとって貴重な体験で、小屋への愛着を強いものにした。しかし、近年部員数の減少などあって、いつの間にか行われなくなってしまった。

小屋の大改修

厳しい自然環境のもと、まさしく風雪に耐えながら、この小屋が 80 年を越える歴史を刻むことができたのは、それぞれの時代の部員たちの小屋を慈しむ心と適切な維持・修繕によるものである。戦後の荒廃期から復興し、蘇った小屋は、その後二度大きな危機を経験した。それ

は、1954(昭和 29)年 9 月、北海道に未曾有の被害をもたらした「洞爺丸台風」の洗礼と、さらに 35 年を経て、基礎土台の老化腐朽により倒壊寸前に至った事である。いずれの危機も部員たちの手および OB の支援で乗り越えてきた。

洞爺丸台風の時は、たまたま屋根のトタンや腐った土台を修理するために小屋に来ていた大工や部員が、二日目の夜に遭遇した。強風により屋根の一部は飛び、倒れた大木により便所や小屋の一部が損壊するという恐怖を味わった(山岸 1954)。(第 4 章 2.1 を参照)。

この時の被害の応急修理の後、1957(昭和 32)年に大修理が行なわれた。土台交換、床張替、壁一部張替、トイレ新築、ストーブ台交換など荷揚げ総重量は約 4 トンに及び、大工 5 名と部員延 150 名によって達成された。費用は大学が 32 万円負担した。この時玄関扉を上下 2 段式に変更された(富山 1957)。

1983 年秋、学生部と山とスキーの会の援助と部員たちの労働により大きな改修を行った(上野 1984)。当時は、車が入れる登山道は電光坂の下までだったので、資材の運搬にはかなりの時間と労力を要した。土台の丸太を数本取り替えて、防腐剤を塗布し、1 階の床には新たな床板を張り、その間に断熱材を入れて、保温性を高めた。入り口階段を造り変え、外壁の下部は床下へ雪が入らないようにトタンで囲った。台所と薪部屋の窓を作り変え、新しいトイレも作った。翌年の春にはストーブも取り替えた。

その後、1989(平成元)年夏に、山とスキーの会と大学により、274 万円の予算で大改修が行われた。このことは『むいね』28 号(1989)と『北大山とスキーの会会報』14 号(1989)に詳細にまとめられているが、ここでは概要を述べる。

この大改修の発端は当時の小屋係吉川友二(2 年目)の小屋の危険な状況を観察した実に説得力のある「土台柱の現状報告書」(1988 年 9 月)が学生部と山とスキーの会(OB 会)に提出されたことがきっかけとなった。

> 小屋の傾きが顕著になり、肉眼で見ても入り口周辺が山側に傾いている。土台柱の腐食も激しいため調査を行なった。ほとんどの土台柱の根元部分の表面は手でこするとぼろぼろにはがれてしまう状況で、釘を手で簡単に差込めるほど腐っていた。土台柱 30 本(本来は 25 本であるが補強用に 5 本使用)のうち、完全に腐っている柱は 6 本、ほぼ腐っている柱 5 本。特に流し台周辺の土台柱がひどく、腐って原型をとどめない物もあった。他の柱も程度の差は在るが一様に腐っていた。柱



写真 3-1-20
無意根小屋 50 周年を祝う　1981 年 5 月

の傾きは入口に近いほど激しい。床下の湿気が土台柱腐食の原因と考えられ、抜本的な修理を早急に行なう必要がある。

これを受けて山とスキーの会運営委員会は現地調査(同年 10 月)を行い、根本的な改修を実施しなければ小屋は数年のうちに駄目になると判断した。

根本的な改修を学生部に要請するに当たって、運営委員会は直ちに恒久的な改修案を検討した(同年 11 月)。丸谷聖一 OB が作成した改修設計図・見積書を 12 月末に学生部に提出、翌年 1 月に徳田、在田、皿田、阿部、丸谷の OB、主任粟崎、小屋係吉村、岡野によって学生部との交渉が行われた。

学生部としては、小屋の現状は理解し、改修工事の必要性を認識するとともに、土台のコンクリート化についても理解をするが、「大学としては、山小屋は財産台帳に載らない仮設物の取扱。従って、仮設物への改修工事の予算化は困難。物品購入費としてなら支出可能。つまり、改修に必要な資材を学生部で買う事はできる。100 万円程度なら平成元(1989)年度支出が可能。」との回答を得た。

以上の回答をもとに、山とスキーの会で改修工事の労務費を負担することで改修工事を実施することになった。

雪の残る 4 月に資材 6 トンがブルドーザー 2 台によって荷上げされ、6 月 17 日～30 日の間にすべての柱と土台の交換、床張替、天井張替、窓枠交換などが行われた。工事の前半は曳家業者による土台交換工事であった。16 基のジャッキを使い小屋全体を持ち上げ、丸太の柱に変えてコンクリート管の柱を据え付ける(**写真 3-1-21**、**3-1-22**)。その後 3 名の大工が入り基礎上部構造、床張替など内部構造の主要な部分を施工し、後半は天井板の張り替えなど連日 10 名ほどの山スキーの部員と OB たちの手により行なわれた。

この間、現役学生たちは、建設資材、発電機、ジャッキなど建設機器の運搬、小屋に寝泊まりする技術者・作業員の食糧の荷揚げと食事作り、作業の助手など、一日最大 30 名弱、延べ人数 185 人が参加している。7 月 1 日、学生課長以下 4 名の学生課一行を迎え、改修完工祝賀会を行い、伴 義雄学長に揮毫していただいた新しい看板が掲げられた。



写真 3-1-21
小屋を支えた柱たち。一部はボロボロに腐食していた。



写真 3-1-22
小屋をジャッキアップして柱と土台を交換。

改修工事の現役チーフであった吉村昌浩は『むいね』28 号に次のように記している(吉村 1989)。

> (前略)この時僕は 2 年目、繰り返される OB 運営委員会や学生部との交渉などにも度々出席したが、その荷の重さに「どうして僕が」のような被害妄想にかられることもあった。しかしこの計画が進み、本当に数多くの人々が無意根小屋を『心の故郷』と思っていることがわかってくるにしたがって「どうしてもこの小屋の改修は僕がやりたい」という気持ちになっていった。その気持ちが強くなったのは OB 運営委員会などで OB の方々と接する機会が多くなってきた頃からだろう。どなたも自分の仕事を終えてから集まられ、時には仕事の時間を割いてまでも、この計画に真剣に取り組んでいた。その姿を見るたびに、現役

のぼくらがもっとがんばらなくてはと思わされた。そして僕らができる最大限の仕事をしようと決意した。

計画は春山が終わるころにほぼ完成していた。阿部さんや丸谷さんが綿密に立てたこの計画は僕の目から見ても完璧だった。そしてここでももっと現役が、この小屋を一番使っている現役ががんばらねば、と考えた。

（前略）四月には上げきれなかった多くの資材、作業中も食糧、発電機、工具。電光坂前に集められたそれらの物資はなかなかすごい量だった。部員のほとんどが集合し、次々とザックにつめこんでいく。40kg 以上の発電機を強引に背負子につける、10 数 kg ものジャッキを 3 つ、4 つとザックに入れる。材木をシートラ風にザックにとりつける。あっという間に荷物が消えていく。ここでようやく僕等の力が役に立った。これからの工事に気合いも入った。

―土台工事―　この過程でのポイントは新しい土台柱をうめこむための土掘作業だった。この作業が進まない限り、全ての計画は停滞する。しかし、ここでも現役部員の力が発揮され、途中、巨岩にぶちあたっても、みんなで力を合わせて何とかのりきった。腰をかがめた姿勢での作業はとてもつらいものであったが、後藤曳家さんのプロのテクニックと僕らの若さが見事にシンクロし、工事は順調に進む。最初の一本の土台柱が完成したときの喜びは本当に涙の出るほどのものだった。

―内装改修―　土台工事が思わぬスピードで終わり、少々僕らは油断していたような気がする。しかし工事の内容はやさしくなかった。また工事中、小屋内が全く使えないので食事の準備も外でしなければならず、いろいろ大変だった。特に、ベニヤ板が足りなくなり大江サイディングの大工さん達も下山され、残りの作業を現役の僕らだけでやらなければならなくなったときは途方にくれた。ベニヤを今から注文して、果たして間に合うのか、間に合ったとしても、それを上げる人数が確保できるのか。六月といえば我が部では、沢の準備で最も忙しい時期であり、授業だってある。改修記念登山もせまっており、現場も大工さんはいないし、電動工具もない。しかし、小屋からルームに直接電話を入れ、翌日の午後には、30 枚ものベニヤ板が小屋に届いた。10 人は絶対必要と考えた量を、たった 3 人でかつぎ上げてくれた。この時は本当に胸の熱くなる想いだった。

それからは 7 月 1 日、2 日の記念登山に間に合わせようと朝は 8 時から夜 9 時過ぎまでの作業が続いた。慣れない大工作業に小人数で必死に働いた。体中塗料まみれになり、夜は飯を食べたら寝るだけ。しかし、このころになると小屋が新しく生まれ変わっていく姿を目の当たりにし、仕上げの作業はとても楽しいものだった。一つ一つ造っていくものが全て思い出とともに形になって残っていく。今までの苦労が報われる気がした（後略）。

管理の現状

現在の小屋管理は部員数の減少によりかつてのように毎週末毎に実施される状況でない。4 月から 6 月までは、GW の合宿や小屋祭りを除くと、この間は殆ど行われていない。7 月は 2 回程度、8 月、9 月は毎週末、それ以降 12 月までは秋の小屋祭り、シール訓練、冬合宿だけで、小屋管理としては実施されていない。1 月から 3 月まで 5 回程度で、1 カ月以上実施されないこともある。

無意根小屋の長い歴史の中で、小屋の管理のあり方も変化している。過去には小屋周辺の樹木を薪としてきたが、現在では伐採は禁止の保護区域とされているので、下界で購入し、宝来小屋付近まで運搬されたものを部員が小屋まで担ぎ上げている。1 年間に持って上がる薪の量は 3 トンほどになる。

小屋の現状としては、最後の大改修から 30 年近く経っており小屋の傾きが認められるようになってきた。扉が開きづらいことなどから小屋の傾きを実感できる。抜本的改修について検討する時期となっている。

また、トイレについては、春と秋の小屋祭りの際に汲み取り、周辺に埋め立て、散布等によって処理している。冬は小屋番回数の減少で除雪体制が整わず、埋没して利用できなくなり裏山で用を足さざるを得ない状況になっている。

文献

上野勝利（1984）無意根小屋の改修．むいね，第 23 号，24–25.
鈴木重雄（1931）無意根小屋．北大スキー部部報，創立貳拾年記念号，83–89.
富山　暢（1957）無意根ヒュッテ改造報告．北大スキー部 OB スキークラブ，第 13 号，12–13.
北大山とスキーの会（1989）無意根小屋改修工事報告．北大山とスキーの会会報，第 14 号，61–107.
北大山スキー部（1989）無意根小屋改修特集．むいね，第 28 号，10–31.
山岸　弘（1954）ムイネで台風十五号に会って．北大 OB スキークラブ会報，第 10 号，31–33.
吉村昌浩（1989）無意根小屋工事を終えて．むいね，第 28 号，18–19.

1.5　長門ヒュッテ

在田　一則（1965 理 地鉱）

この小屋は 1931（昭和 6）年 10 月 18 日に北大スキー部創立 20 周年記念として、無意根小屋とともに建てられた。場所は白井川の元豊羽鉱山上流の標高 610m の二股であるが、現在はない。「長門」は豊羽鉱山の長門樋（鉱脈の名称で、この付近に坑口があった）に由来する。

以下の記述内容は『北海道帝国大学スキー部部報』（1931）掲載の「長門ヒュッテに就て」（三浦義明）による。

三浦たち当時の部員は、豊平川上流の白井川奥の余市岳・美比内山・長尾山に囲まれた辺りにヒュッテがあれば、この付近の美しいゲレンデを享楽できる、またその存在は“山小屋の鎖”構想からも有意義なことであると、かねてから考えていた。1931 年三浦ら部員 4 名は 3 学期の試験が終わると、豊羽鉱山奥あたりに使われていない廃屋があるかもしれないという淡い期待をもって付近を探しまわった。その結果、“長門の橋印のある左岸に、雪にうずもれて軒下 1 尺許りを現した、頑丈な大きな建物を捜し當てた”（三浦 1931）。

その後 4 月、東京での学会から帰札された大野部長から、東京の某篤志家からムイネシリのスキー小屋建設費として多額の寄附をいただいたので、その一部を使って長門にも小屋を作ってよかろうと知らされた。大野部長は所有者の日本鉱業株式会社や帝室林野局と交渉して許可承諾を得、建設は無意根小屋の請負人にしてもらうことになり、5 月 8 日のスキー部懇親会の席上、大野部長からこの計画が発表された。

当初は、無意根小屋の建設が終ってから、すぐに大工に長門に回ってもらう予定であったが、無意根小屋の工事日程が遅れたので、それとは別に取りかかることになった。9 月に大工らと 4 名ほどで実地調査をしたところ、建物はほとんど破壊し、腐朽もしていたが、その古材は利用できることがわかった。大工の見積りによると、予想以上に大きい金額になったが、不足分は先輩と現役に寄附を募って補充することとした。設計は部員、先輩、請負人で相談して決めた（図 3-1-9）。

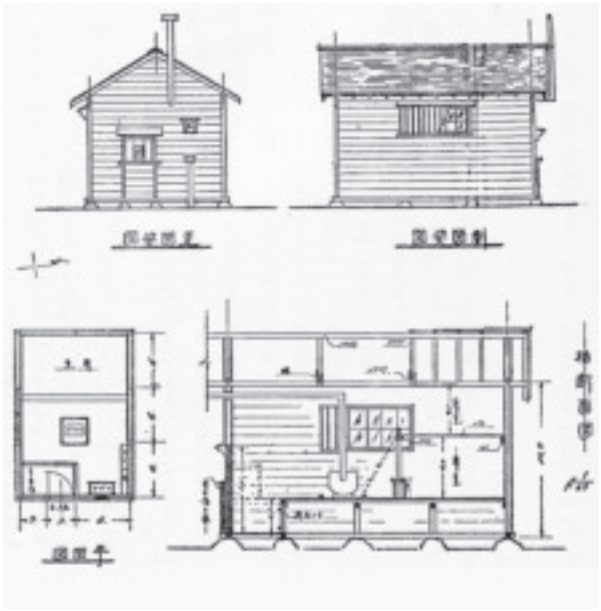


図 3-1-9　長門ヒュッテ設計図（三浦、1931 より）

10 月 16～18 日の日曜と新嘗祭の休みを使用して、大工 5 人、柾工 1 人、監督 1 人、それに部員 5 人の合計 12 人が工事に当たった。しかし、行き帰りがあるので、実働は中 2 日であった。大工や柾工の仕事は別として、現場の地ならしから、切り込んだ材木の運搬、豊羽鉱山まで上げた柾 10 数把・建具・トタン・ガラス・食糧などの運搬や雑役はほとんど部員が行った。豊羽鉱山から沢沿いの細い刈り分け道 8km あまりを担ぎ上げるのは相当のアルバイトだった。大工さんたちもラテルネの光のもと夜まで仕事をしてくれたので、3 日がかりで 2 間×3 間の小屋が出来上がった。

11 月 1～3 日には部員 5 名により煙突ストーブの取り付け、机椅子の製作、ベッド用藁布団の搬入を行った。同月 21～23 日には部員 5 名

が心ばかりのご馳走でヒュッテ開きをした(写真 3-1-23)。

当初は、ほんの 1 泊に役立つ程度の掘建て小屋というつもりだったが、出来上がってみると、予想外に立派なものとなり、部の創立 20 周年記念事業の一つとして、そのシーズンを飾ったのである。

鍵は部員が管理し、使用料(薪代)は学内 20 銭、一般 30 銭であった。



写真 3-1-23　長門ヒュッテ(三浦、1931 より)

文献

三浦義明(1931) 長門ヒュッテに就いて．北大スキー部部報，創立貳拾年記念号，139–142.

1.6　冷水小屋(初代)

在田　一則（1965 理 地鉱）

冷水小屋は冷水沢に沿う札幌岳登山道の標高 860m 地点にある。小屋は、1933(昭和 8)年 7 月に定山渓鉄道株式会社(現株式会社じょうてつ)によって建設されたが(写真 3-1-24)、1950 年 9 月に焼失した。原因は登山者の不始末と言われているが、不明である。北大スキー部も戦前、戦後の一時期管理していた。1952(昭和 27)年 8 月に北海道電力株式会社により同じ場所にほぼ同じ形で再建され(写真 3-1-25)、豊平町(現在は札幌市豊平区)に寄贈された。1953 年 9 月に北海学園大学に管理が委託され、1960 年に同大学に譲渡された。ここでは、初代の冷水小屋について述べる。



写真 3-1-24
冷水小屋(初代)。定山渓鉄道パンフレット、1937 より



写真 3-1-25　冷水小屋(二代)。在田一則撮影、2012 年 1 月

1930 年代初頭、日本は世界大恐慌と金解禁の緊縮政策のもとで深刻な不況にあり、鉄道省は収入増加のために旅客誘致に努め、スキー客誘致のため、各地にロッジを建設した。札幌鉄道局が作った奥手稲山の家(1930 年建設)や少し遅れてできたニセコ国鉄山の家(1937 年建設)もその一環であった。そのような流れの中で、定山渓鉄道株式会社もスキー客の誘致のため、ヒュッテンケッテ構想のもと札幌岳周辺に山小屋を建設することを計画した。設計と建設は無意根小屋の建設にもたずさわったスキー部

OB の宇都宮嵩氏に依頼した。

宇都宮氏の手稿『私と雪滑り』(1993 年 8 月)には、“よく定山渓鉄道に乗り、札幌岳に雪滑りに行くので、定山渓鉄道の幹部岩井さんと何時のまにか知己の間がらとなり、或る日、突然定山渓鉄道としても札幌岳の何所かに山小舎を建てたいが、その場所並びに建設を君にやってもらいたいとの話しがあったので、一寸まごついたが、あす電話でイエス、ノーを返事すると約束してしまったのである。”とある。

建設地は、当初、当時札幌岳への一般ルートであった定山渓鉄道沿線の豊滝からの盤の沢コースの標高 1,000m 付近が考えられたが、水確保が困難だということで、年間を通じて湧水がある冷水沢の現在の地が選ばれた。完成は 1933 年 7 月で、冷水沢から冷水小屋と命名された。当時の使用料は、夏は休憩 15 銭、宿泊 30 銭、冬は休憩 25 銭、宿泊 50 銭であった。小屋の使用券は定山渓鉄道の豊平駅、滝の沢駅、定山渓駅で発売された。小屋の建設により、札幌岳の登山ルートは、夏冬ともに、それまでの盤の沢コースから冷水沢コースが一般的になった。

文献

宇都宮 嵩(1993) 私と雪滑り. 私家版. 47p.

■コラム■
むいね山頂のほこら

無意根山の長い稜線をたどると頂上手前のダケカンバの根元に石(札幌軟石)づくりの小さな祠(ほこら)がある。

裏面には「奉献　昭和 7 年 9 月 28 日北大スキー部長」と刻まれている。無意根小屋建設の翌年設置されたことになる。

倉持寿夫 (1965 農 林学)





『北大スキー部部報』2 より



『北大スキー部部報』2 より

2　集いの場―ロッジと部室―

2.1　シルバーロッジ

倉持　寿夫（1965 農 林学）

JR バスのバス停「山の手 4 条 11 丁目」で降り、4 車線の広い道路（北 1 条宮の沢通）を西に少し歩くと、左手に、かつてのツツジ山に続く尾根の斜面に階段状にマンションが建っている。その脇の樹林に囲まれた急なコンクリートの階段を登る。すぐに土と枕木の階段に変わる。やがて日頃の運動不足で太ももの筋肉が悲鳴を上げ、呼吸が苦しくなる。立ち止まって、ややしばらく呼吸を整えてから、住友家の脇を抜け数段登り詰める。やっとのことでロッジの玄関にたどり着けた。ロッジがこんな高みに建てられていたとは信じ難い気がする。

およそ 50 年前スコップとツルハシと人力だけで斜面を切り崩し、整地してロッジの平場を造成した。今の 4 車線の道路は札幌オリンピック（1972 年）の時つくられたもので、当時、斜面の下は奥の牧場に続く砂利道だった。砂利道を挟んで東側にはブドウ畑が広がっていた（**写真 3-2-1**）。

ロッジ建設に必要な諸資材はこの砂利道までトラックが使えたが、これから上は、すべて人力で運び上げた。基礎のコンクリートを練るための水は遠くの民家からのバケツリレーだった。

玄関の前に立ち、見上げるロッジの姿、なんとなく雄々しく感じるが、この全てを今登ってきた急斜面を人力で持ち上げたのだ。今更ながら遠き若き日が胸をよぎる。

玄関を入ると左側はスキー置場。右側靴脱ぎ場から居間に続くドアを開ける。二階に上がる階段脇の厚板に「ロッジ憲章」として以下の文が記されている。



写真 3-2-1
1960 年夏の寺口山。このポプラの林の中にロッジは建った。近隣の人たちがスキー場としていた寺口山は右の奥。このあたりがスキー部創部当時のシルバースロープである（阿部孝夫撮影）

> 当ロッジは若くして山に逝いた、かつての北大スキー部員、高倉稔君、山下広君及び山室紘二君を記念して建てられたものである。その建設に当っては、北大山とスキーの会々員はいうまでもなく、亡き三君の山友達であった当時のスキー部々員たちの並々ならぬ労苦が払われた。このロッジにおいて、今日も、明日も、若者達の間に永遠に切れることのない堅い友情の絆が結ばれてゆくことは、建設者一同の最大の喜びであるばかりでなく、亡き三君の願いでもあろう。ロッジを使用する人々はその建設の精神を重んじ、十分な注意を払われるよう切望します。

ロッジが建設されたのは 1961（昭和 36）年である。今思うと信じられないような取組が当時のスキー部山班の部員によってなされたのであるが、そもそもこの「シルバーロッジ」なるものがどのような目的で、経緯で建てられるようになったのか、改めて述べてみたい。

ロッジの建設

ロッジ憲章にあるように、若くして山に逝った高倉、山下、山室三君を記念としてとあるが、この三君の死は、建設の大きなばねとなっ

たことは確かだが、建設構想は1956年ごろから水谷 寛先生の胸中にあった。先生は、当時スキー部副部長であり、実質的な山班の顧問教官であった。

ロッジが建てられた土地一帯は寺口山と呼ばれ、夏は畑で冬はスキー場として近隣住民にシルバースロープと呼ばれ親しまれていた。ここは創部当時のスキー部員たちが練習に励んだ「シルバースロープ」であり、当時の山班員もスキー練習に通っていた。

先生の夢は“玄関先からスキーをつけて出かけられるような家、スキーに飽きたら、赤々と燃える暖炉がいつでも迎えてくれるような家、春には、一歩、屋外に出れば、緑の自然を満喫できるような家、秋には、紅葉に囲まれ、近郊の山へ散歩道が家の前から続いているような家”を持ちたいことだった(水谷1968)。先生も熱心にシルバースロープにスキー練習に通われていた。スキーを滑りながら思い描いていたのであろう。

1958(昭和33)年5月無意根山で山班部員高倉 稔君が遭難し、ご尊父高倉奉朔氏からの山班への20万円の寄贈をうけ、これを有意義に活用したいという当時のスキー部主任向井成司(1959卒)と、水谷先生の夢が重なり、ロッジ建設への具体化が進められていく。

『北大山とスキーの会会報』18号で、向井は次のように記している(向井1994)。

> 私は先生に部室を持たない我々が、部室代りになるたまり場をかねがねから欲しかったと伝えた所、「向井君もそう思いますか。実は私も同感だ。私も20万円出しますから、是非このお金を生かしましょう」との遠大な構想に発展して行ったのである。

この頃、スキー部山班は部室がなく部員数が増えるなか、部員同士の交流や、部の連絡・伝達は体育館の事務室脇の控室のようなところを利用していた。

しかし、具体化に至るまでは大きな課題があった。場所の選定、土地の確保、建設資金の調達、建設後の所有名義などすべて難問であった。

1960(昭和35)年に入り、OBとなった向井がインターン研修のため、大学に戻ってきた。札幌付近の若手OBの集まりで、ロッジ建設について検討がなされ、高橋邦臣(1957卒)、山本幹雄(1957卒、ロッジ設計者)の全面的な協力の下に基本的な青写真が描かれていく。

資金確保が一番重要ではあるが、まずは土地の確保がなければ前に進まない。条件はスキーができ、学生が常時宿泊し通学できること、これを満たす場所はシルバースロープのある寺口山周辺しかない。当時4年目の斉藤 貞、中島 巖、阿部孝夫が中心に土地探しが始められた。シルバーロッジ周辺の地主との交渉、不在地主を遠方へ探り当てて出かける。水谷先生も有望そうな地主との交渉にあたったが、土地問題は難航した。

しかし、鷲田 薫氏との出会いにより100坪の土地を氏から無償で譲渡していただくことになった。このいきさつや鷲田氏のお人柄については第4章1.7で中村晃忠(1962卒)が「鷲田 薫さんを偲ぶ」で詳述しているので省略するが、いずれにしても鷲田氏のロッジ建設の意図に対する温かい理解と支援の賜物であった。

建設用地が確保され、早速、測量が行われ、具体的な設計をゆだねられた山本幹雄は現地を視察して、以下のように述べている(山本1961)。

> (前略)斜面は多少急勾配ながら、建設には支障はない。少し切り取って建てれば、その切り取りで、北西面からの冬季間の常風は防げるのではないだろうか。給水には不便な点はあるかも知れないけれど、山小屋住いよりは、快適な生活となることは間違いない。と大体の判断をつけた。これを見に来る以前から、一応の計画案を案出してあったので、そのイメージを具体化するにも充分、恰好な所と思われた。
>
> 敷地の周囲は木立があった。大きなポプラが、西側に並んでそびえ、栗、かしわ、かえで、いちい等がとりまいている、出来る限り、木を痛めないでいきましょうと願って置いた。(後略)
>
> (前略)先ずシーズン中は、絶えず誰かが、スキーを滑るのだという状況下にあるものと、考え

なければならないから、管理人は必ず、火を焚き用意する。恐らくは、集会のない時でも、一階の居室部分の各室を温める為にドアを開けて熱風が中央のストーブ廻りから流れ込む様にするだろう。この居室はなるべく日光が入る様に南側にとった。これで、日の光を入れて、若干でも採暖に役立てよう。窓は大きすぎると、夜分は逆にヒートロスが大きくなるから、大き過ぎなく、又小さ過ぎなくした。矢張り、内部はカーテンを張ってもらう。玄関廻りから、ストーブのある辺りは土間だから土足のままで団欒の場に入って一通り身体を温め、衣服を乾したら、又、斜面にスキーだ。入口近くのスキー掛けだからそんなに邪魔もないと思う。

合宿や、部の集合があると、総勢、五十名から八十名集るのだ、そんな連中と来た日にや、どこにでも寝てくれる手合いだから、どこでも、シュラーフを敷いてくれると思うけれども、この頃は、部員の中に女子学生も入り、又、ある時には、女の友人も来ることがあるだろうし、又、先輩諸氏がおいでの折もあろう、そのためにも何となく具合の悪くない部屋というのが必要となる。これはコンパートメントにして置こう。(後略)

(前略)平面計画の道程は厳しかった、漸く第三案で殆んど大勢の意見の動かない支持を受けることが出来た(後略)(図 3-2-1、3-2-2)

こうした設計の下に建築費用が明らかになり、140 万円と見積もられた。この額は木造家屋として最低限の居住環境が確保できる程度とされた。

前記高倉奉朔氏からの 20 万円に加えて同氏からの増援、山下六郎氏(故山下 広君ご尊父)、大津 勇氏(当時現役 2 年目の大津有史ご尊父)から多額の寄付、水谷先生をはじめ、山とスキーの会の特別会員や会員からと、多くの部員の父兄からの寄附や借用によって、また現役部員のアルバイトで得たものを合わせることによって、優に目標額に達することができた。

また、並行して夏休みには部員による資金稼ぎのアルバイトが行われ、これは無意根山の白水川源頭部における、某鉱山会社の褐鉄鉱の鉱脈探査で、毎日大鎌を振るう熊笹との戦い、大量のバッテリーを担ぎ上げ、地面に電流を流し、鉱脈をさぐるという調査で、かなり厳しい作業であった。この状況は中村晃忠が『北大山スキー部部報』で詳しく記している(中村 1968)。



図 3-2-1　シルバーロッジデッサン図(山本 1961 より)

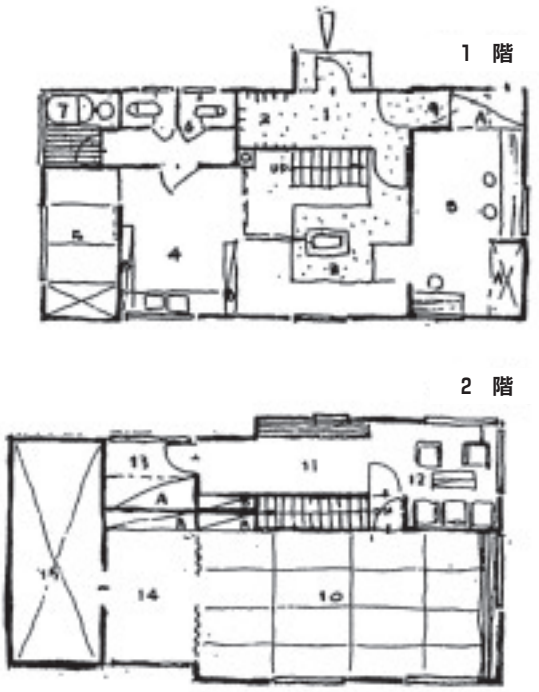


図 3-2-2　シルバーロッジの間取り。
1. 玄関、2. スキー置場、3. ストーブ、4. 厨房、5. 管理人室、6. 便所、7. 浴室、8. 宿泊室 A、9. 石炭庫、10. 集会室、11. ホール、12. ロビー、13. 宿泊室 B、14. 宿泊室 C、15. 物置、A. ベッド、B. 棚 (山本、1961 より)

そして夏休みが終わると、いよいよ急斜面を削りロッジを載せる地面造りという作業が始まる。この状況はやはり部報で小野堅太郎(当時 2 年目)が「ロッジ建設作業」で過酷な作業を伝えている(小野 1968)。

ポプラに囲まれた建設予定地はかなりの急傾斜で、以前なにかの神様がまつられていたとかで、ひどいブッシュのなかに石段らしいものもみえる。“こんな高い急斜面にどうして家一軒建てることを思いついたのだろう。当世風の機械もこんな処では使えないだろうに。” これが最初の感想だった。この日以来四ケ月間は私にとっても部員の大多数にとってもきびしい土方の日々だった。だが一部の人達にとってはずっと以前からの大問

題であり、実際に人夫が働き出すときはほとんど完成していたのかも知れない。一切の山行も一切のトレーニングもやめ、鶴嘴（つるはし）を振い、あるいは角材や砂を運び上げたりした。計画は何年も前より多くの先輩達によって詳細に練り上げられていたらしい。私としては、ただ労働力を提供すればよかった。私は丁度その頃、部室と下宿の往復のような毎日であり、学生課にもよく出入りしていた関係で、工事用具の調達やら、人夫集めみたいな役割になってしまった。また、少ない文科系のひまな部員ということでほぼ毎日現場通いをした。（中略）

まず急斜面のブッシュを払い、表土をけずりとる。御神木の立派なオンコも掘り起され、ポプラの邪魔な枝も切り払われた。元気な、多数の若者ではあるが、なれぬせいではかどらない。時おりポプラを横切る風が気持ち良い。二、三日で岩盤にぶちあたる。堅いがもろい岩と、粘土でぬりかためた様なやっかいな代物、力一杯振う鶴嘴が一寸入れば上出来だ。大きい石でも掘り起せば大部広くなった様な錯覚をおぼえる。少しずつはがし起した岩の破片や土を、スコップやくわで下に落す。一週間もこんな作業が続くと、大部皆んなつかれ、生活にも支障をきたしてくる。そこで出労予定なるものを作って、なるべく無理のないように一日七、八名の出席とする。

この整地作業（**写真 3-2-2**）に続きいよいよ建設に着手。当初は資金確保に見通しがつかない時は基礎コンクリートだけでも造っておきたいとしていたが、資金の目途が付き、建設業者との契約も済み、棟梁の指示の下資材の運び上げが始まる（**写真 3-2-3**）。

基礎のコンクリート打ちが始まる。いつのまにか砂とセメントがふもとの牧場にはこび込まれる。岩盤に溝を切り、掘り起した石をならべて大工さんを待つ。（中略）キスリングに砂を入れ、二十貫近い荷物をフラフラしながら上げる。二回目からはたくさん背負う競走となる。セメントを一度に四袋背負う記録を作る馬鹿も出る始末。水もバケツリレーで近所の家から上げる（**写真 3-2-4**）。全くの人海戦術。皆よく頑張る。鉄板を花野さんより拝借し、なれぬ手付でコンクリート打ち（**写真 3-2-5**）。疲れるとすぐ交代。ついでに下水用の穴と便所の穴を掘る。この頃より井戸掘りが始まる（**写真 3-2-6**）。（小野 1968 より）

建築工事は、琴似町の佐藤寒地建設会社にお願いすることにした。ここのご主人の佐藤清水氏は私たちのこの事業の内容をよく理解してくださって、利害を度外視して引き受けてくださった。40坪のうち、どこまで作るかは佐藤氏におまかせして工事を進めることにしたがとうとう、この予算で、40 坪全部ができてしまった。このことは建設敷地の不利な地理的条件を考えると、全く予想外のことで、佐藤氏に負うところは、ずい分大きかったわけである。

同じころ、井戸掘りも始まった。これは、なかなかの難工事だった。最初に掘りはじめた場所は、運悪く、硬い岩盤のため中止。2 度目は、慎重に検討ののちはじめた。これは成功したが、約 15 米掘り下げるのに、20 数日かかる大工事になった。この工事をお願いしたのは、琴似町の笠井芳雄氏であったが、なかなかの難工事だったのに、この人も大変よくやってくださった。（水谷 1968 より）

そして、柱や板材、金具類などが運び上げられ、秋も深まった中、上棟式を迎える。

寒い日が幾日か続き、やっと上棟式の日が来た、皆の肩でつぎつぎ上げられた木材は、職人の手で次から次へと組みたてられ、目の前に設計図で頭にえがいたものが出現しはじめたのだった。我々はただ夢中でそれを見上げた。見あげた空はもう輝くような青空ではなく、弱々しい光に透明にひろがるあの初雪を待つ晩秋の空であった。そこに一線を画して持ちあげられた太い梁に、我々は、「なにか」が結晶していくのを感じとっていた。その晩、職人達を囲み、小さな火で暖をとりながら、歌をうたい、酒を飲み、札幌の灯を見た皆の目には確固たる自信があふれた。（中村 1968 より）

このような経過を経て雪景色に覆われた 12 月中旬ロッジは完成した。冬枯れのポプラの樹々に囲まれ眼下に札幌市街と石狩平野の広がりを見降ろす我々の城は「シルバーロッジ」と命名される。完成の祝賀会に駆け付けた来賓の方々が雪の急斜面に刻まれた階段を上ってくる。祝賀会の二階大広間は溢れるばかりに埋まる。高倉奉朔氏、鷲田 薫氏の姿もあった。

以上、計画から建設までのあらましであるが、当時の 140 万円の価値は、現在では 10 倍以上と考えられるが、ちなみに当時学生食堂のカレーライスが 33 円、現在 350 円。市電が 13 円、今 150 円である。

計画では坪（3.3m^2）当たり 4 万円で建築費が見積もられた。設計者の山本の考えでは、木造



写真 3-2-2
建築予定地の整地。当時、斜面の下には家はほとんどなかった（阿部孝夫撮影）



写真 3-2-3
砂・砂利・セメントの荷上げ。1年目の新品の秀岳荘キスリングもグチャグチャになった（阿部孝夫撮影）



写真 3-2-4
コンクリート用水のバケツリレー。水は近所の家からいただいた（阿部孝夫撮影）

家屋として最低限の規格であった。これも、資材の運搬など部員の労働奉仕や資材の安価な入手を前提としたものであった。この点、部員数が70名を超える勢力に発展していたこと、木材はスキー部部長村井延雄教授（林学）の斡旋で演習林より直接入手できたこと、セメントは高倉氏から無償で提供いただいたこと、さらに建



写真 3-2-5
基礎のコンクリート打ち。大工さんの指導によりセメントを練るが、結構辛い作業だった。（阿部孝夫撮影）



写真 3-2-6
材木の荷揚げと井戸掘り。骨組みできると急に木材が必要になる。飲料水の井戸掘りも始まり、掘った土砂を滑車で引き上げる。深くなると、これも消耗な作業だった（阿部孝夫撮影）

設にあたった棟梁の佐藤清水氏の損得を無視した協力などにより、予定以上の質的向上が得られたと考える。

普通、木造家屋の寿命は20年から30年といわれている。現在すでに50年を経過して、途中、修繕・改修の手入れがあったが、健在な姿を保たれていることから、良質な建築であったことが伺える。

その後のシルバーロッジ

～利用と管理～

かくして、北大スキー部山班員は念願であった集いの場、部室であり語らいの空間であり、寮としての生活の場を確保したのである（**写真3-2-7**）。

竣工直後ロッジ委員会は、「シルバーロッジ使用に関して」として、ロッジ建設の意義が時を経るにつれて薄れていくことを懸念して以下



写真 3-2-7
完成したシルバーロッジ下でのスキー練習。1962 年 1 月(倉持寿夫撮影)

を訴えている(ロッジ委員会 1962)。

> ・・・・・ロッジが建っているという既成事実だけを受取る様な空気になりはしまいかという事が、我々の最も心配する所である。ここに敢えて叫びたい。「ロッジは建ったのでなく、我々が建てたのだ」と。当時の部員たちの心意気が、亡き三君を思う友情が、発展しようとする熱情が、すべての人を動かし、このりっぱなロッジ開設となったのだ。ここでは借金と寄金をして下さった人々に改めて感謝の念を表わすため、名前を記させていただきたい。
>
> 【寄金者名】出葉浩吉氏、徳田繁義氏、高倉奉朔氏、花野晴治氏、大津 勇氏
>
> 【借金者名】若林光夫氏、中村晃蔵氏、小野竜郎氏、大和田栄氏、占部一夫氏
> 大津 勇氏、谷口 清氏
>
> これらの方々が、計八十二万六千円、お寄せ下さった。その内、借金は、五十一万円である。これは一日でも早く返済し、又、ロッジ建設に当って絶大なる有形無形の援助をして下さった人々に常に感謝の念をもってロッジを使用されんことを切望します。

最初にロッジの住人となったのは、卒業を 3 か月後に控えていた、4 年生の清水忠司、塘 忠夫、中村晃忠の 3 人であった。その後住人は絶えることなく、2012 年までに 160 人を数える部員が生活し、卒部している(表 3-2-1)。

歴代これだけの部員が生活したことは、ロッジの建設の意義が十分果たされてきたと考えてよいと思われる。

しかし、ロッジの利用においては初期の目的どおりであったかというと、建設当時から 10 年、20 年と時が経るにつれて、部員、住人の意識は変わっていった。時代そのものが大きく変動し、ロッジを取り巻く自然・社会環境は建設当時想像できないほど変化した。ロッジの存在意義も時代を反映したものとなっていく。

札幌オリンピック(1972 年)を契機に周辺の急速な市街化はスキー練習場としての機能を奪い、また、整備されたテイネハイランドなどのスキー場が、部員たちのスキー練習の中心となっていく。

また厳しい授業方針等、大学の制度も大きく変革し、学生を拘束する時間が増大するにしたがって部員も通学に便利な大学周辺に生活場所を求めざるを得なくなる。彼らにとってロッジは次第に遠く感じられ、「語らいの場」や「寮」としての立地条件が失われていく。

「部室もサークル会館に移り、時間規制も厳しくなって、皆が一同に集まれる場所がないのだから、もっとロッジを利用して欲しい。しかし、現実問題としてロッジは遠いし、ついついススキノで語り合うということになってしまうのは仕方ないとも思う。これは強制する訳にもいかないし、皆のロッジに対する関心に期待するしかない。」(松村 1983)とあるように部員の語らいの場、集団の生活の場として、誰にも制約を受けない自由な生活の空間として、すでに北大にはなくなってしまった自治寮的役割も、住人にはその価値が認識されても、部員全体としては関心が薄れていったようだ。

ちょうどこの頃(建設後 20 年経った 1981 年)、『北大山とスキーの会会報』では無意根小屋とシルバーロッジの存在意義についてアンケート結果が掲載された。背景としては現役(住人)の管理においてかなり問題があった。一般家庭のように毎日掃除することは期待できないが、杜撰な利用形態を嘆く OB の声があった。中にはすでに当初の役割は失っているので売却して、無意根小屋の改修費に当てたらどうかという意見もでたように、現役の利用・管理の状況は落胆されるものがあった。日常的な管

表 3-2-1　歴代のロッジ住人たち　(160 名　1961 (昭和 36) 年から 2011 (平成 23) 年 12 月まで)

氏名および OB 番号		後藤　次郎	遭難死	八塚　晴彦	229	中島　幸徳	350
清水　忠司	074	皿田　滋	176	小林　伸一	234	北森　康之	359
塘　忠夫	076	樋口　俊夫	177	関戸　徹	235	国司　和浩	退部
中村　晃忠	077	緑川　芳行	178	松本　隆文	245	竹内　大作	退部
小野堅太郎	096	梶井　直文	179	高山　浩史	251	青山　尚広	362
竹内　政夫	099	菅野　健身	180	日野　輝明	255	河野　純	退部
永野　正幸	103	松居　望	181	青黄　靖	257	入村　貴行	364
裏　悦次	106	矢島　啓司	182	安藤　透	258	三代　隆博	365
大田　正豁	107	和田　寛	183	梶本　淳	259	大島　次郎	368
川上　正宏	108	吉田　守男	185	河合　博司	260	石井　紀子 (旧姓　末安)	371
倉持　寿夫	109	保阪　豊	186	川端　康弘	261		
高橋　俊二	112	岩瀬　隆則	187	吉田　美樹	262	高岸　徹	372
江幡　文彦	119	及川　俊一	遭難死	秋山　幸久	263	深田　直之	374
大谷　隆昶	120	森　康	188	松村　敏和	270	真下　昌久	375
岡田　信	121	星野　一郎	191	田川　丹	274	奥井　武道	退部
岡本　博之	122	星野　信男	遭難死	中村　幸一	276	伴　現太	382
奥野　洋明	129	武藤　清秀	192	永井　貴志	277	後藤　弘毅	退部
宮崎　敏	132	瓜生　純	遭難死	三谷　修司	278	杉江　紀彦	386
飯豊　利秋	133	桜井　公一	194	伊藤　剛	282	清水　宏益	391
上ヶ島　裕	134	堀内　洋	196	上野　勝利	283	奈良　靖	392
藤永　徹	136	森田　明	197	出口　雅文	285	大杉　友	397
山崎　雅昭	139	阿部　幹雄	198	黒岡　秀樹	288	今　春如	399
上野　将司	141	大口　真樹	199	西沢　孝史	291	斎藤　悠	退部
大田　霙三	143	小瀬川　修	201	杉山　裕之	297	宍倉　優二	400
川中　正中	144	福安　憲次	203	寺山　元	298	杉田　想土	401
神田　宏	145	大南　和也	204	鍛冶　邦博	303	近藤　武史	403
椛島　和夫	150	佐藤　元	205	加藤　哲郎	304	山口　達	405
熊川　嗣雄	151	佐々木尚三	206	高村　賢一	306	松田　博行	409
市原　成典	154	佐々木右治	207	吉川　友二	309	馬場明日希	414
香取　民生	155	竹内　隆一	208	長尾　一史	310	吉友　郁哉	418
近藤　博	156	椿谷　茂	209	鳥羽山　聡	316	伊藤　毅	419
田村　和久	157	丸谷　聖一	210	竹川　徹	327	関　将一	424
津田　誠	158	皆川　幸治	211	根岸　邦典	328	松舟　由祐	退部
藤瀬　浩	159	伊藤　浩	213	秦　正樹	329	田村　涼	425
池田　精寿	161	中村　健彦	214	堀川信一郎	330	井出　康太	428
岩井　利夫	162	長島　義人	215	赤木　憲二	335	勝頼　一樹	429
国本　用哲	164	不破　秀実	216	伊藤　太裕	336	小倉　守彦	退部
小林　博和	166	橋村正悟郎	217	田村　整	341	上田祐太朗	447
坂本　武英	167	須川　和明	219	渡辺　一弘	344	中村須弥子	449
油田　厚生	174	新谷　一郎	224	北沢　大輔	346		
柿木　真	175	関　英郎	225	真田　和彦	348		

理においては多々問題があった。

特に清掃の問題は利用初期から宿命的なもので、無意根の小屋番は明確に管理(掃除も含む)という目的意識があり、しかも短期間で終わる。ロッジの場合、住人の日常生活の大半はそれぞれ行動範囲・時間を異にし、日常生活＝私的生活の構図となり、共同生活の場が無意識のうち私物化され、ロッジの管理面が犠牲になってしまう。無意根小屋と同じ管理意識は日常的に継続的に維持することは難しいことなのであ

ろう。

あまりにも住み心地の悪さに、たまりかねて大掃除をしたところ、歴代の住人が残した諸々が山となって出てきたという記録もある。またさらに、こんな逸話？も……

万年床の周りには、空き缶やら、本やら、脱いだ下着や靴下、カセットラジオ、なんやらカンヤラが足の踏み場ない状態。たまりかねた住友夫人の優しい忠告や心の籠った苦言にも「この方が便利です」と馬耳東風。それを伝え聞いたOB某氏「清掃十字軍」と名乗って東京からはるばるロッジに乗り込んできたが、全く手出しできずに呆然として帰っていった。しかし、この馬耳東風の本人は、今は社会人として立派に活躍しているとのこと。

通常、住居は同一の住人が長年住み続けることによって不具合を感知し、適切な維持管理ができるのであって1～2年程度で交代する住人、しかも学生に維持管理を期待することも無理なことであったのだが、ロッジに幸いしたのが住友ご夫妻の存在である。ご夫妻には1968(昭和43)年以来ロッジの隣人として50年にわたりロッジとその住人を見守っていただいた。ご夫妻の存在なしでは現在の状態にロッジを維持できなかった。このことはロッジ関係者すべての認識である。

住友ご夫妻については、『こなゆき』29号(2004)の「すばらしい人たちとの出会い、それは私たちのたから」(住友幸子さんへのインタビュー：佐々木尚三)から以下を引用したい。

> ―ロッジのこと
> 天気の良い日などには、山の手の町内の人たちや西病院から退院した人たちが散歩に来る。それでその人たちからはロッジの管理人と思われている。実際、郵便や宅配便の人はロッジ宛の荷物を住友さんのお宅に配達してくるし、住人は、下水配管が詰ったとか、水道が出ないとか、なにか問題が生じてどうにもならないことになってくると、助けてって言ってくる。住友さんは、いろいろな意味で世間知らずの学生がロッジという独立家屋で社会生活を営むため、まちがいなく「管理人」の役割を果してくれている。ロッジがいままでこの地で問題なくいられたのは、住友さんのおかげだ。
> 一時はロッジとの関係が希薄になりかけた時期があったそうだ。それがロッジの管理にも悪い影響を与えているみたいで心配に思った。せっかくの親しい関係お互いに助け合う関係は続けなくてはならないと思う。最近はまた現役たちにいろいろ話してあげるようにしている。「住人に協力してあげることも私の生活の一部。いやだとか面倒だとか思ったことはない。ロッジからは煙たがられることもあるかもしれないが、ロッジを大切にすることを伝えてあげたい」、その点「いまの子たちは結構手伝ってくれる」って、楽しそうに話してくれる。
> 幸子さんは言う。「こんないい条件のところに素敵な小屋があるのだから、すばらしい財産を持っていることを自覚して、それをいかに後輩に伝えて行くかを考えてほしい。無意根小屋をあれだけちゃんと管理できているみんなに、ロッジの管理ができないはずはない。このロッジに住めることに感謝の気持をもって、毎日楽しく暮してほしい。去年の台風被害の修理では多くのOB・現役が集った。いざとなればあのように結集できるパワーをあなたたちは持っているのだから。」
> 最後に「山スキー部のそれぞれに個性的ですばらしい人たちとの出会いは私の宝だと思っている」って締めていただきました。

この様な状況ではあったが、ロッジはやはり山スキー部の根城であり、札幌における精神的な拠り所であったようで、前述のとおり2012年まで途切れることなく住み継がれ、またロッジの存在価値を部の問題として認識・共有する努力が、改修工事への取り組みやロッジ祭の熱狂に見ることが出来る。

『北大山とスキーの会会報』や『こなゆき』には、ほとんどの号に「シルバーロッジからのお便り」等として住人からの報告が掲載されている。『むいね』には意外とロッジについての記述が少ないのは、前者は編集者OBからの要請であり、『むいね』は部活動中心の機関紙であり、ロッジは部活動のアフターファイヴ的な存在なのであろう。いずれにしてもそれぞれの時代においてロッジを取り巻く環境を含めて住民たちの生活状況が読み取れる。

また、ロッジには「ロッジノート」があり、歴

代の住人、訪れた部員のさまざまな思いや青春の生態が残されている。

さまざまなロッジ生活の中で、一つだけ紹介したい。ロッジを建ててよかったと思う一文である。

ロッジに想うこと

末安紀子（当時 3 年目）

冬の朝 8 時位になると、めざまし時計のベルがあちこちで、リンリン・ブーブー鳴りだす。うす暗い寝室からもぞもぞと 1 人ずつ起き出してロッジの朝が始まる。深田君が、ストーブの前で新聞を広げ、ホットケーキを食べながらお茶をすする。

夜になって審議を終えて帰ると、「おかえりなさーい」の声が嬉しい。伴はその後、ロッジではやっているサッカーゲームをして、ウギャオとかいいながらとびあがっている。

こうして一週間は過ぎていく。私が特に好きな時間は、皆がポッカリあいた休日に、1 階でコーヒーを飲んだり、誰かのギターをききながらすごし、夜になれば暇な部員が遊びにきてお酒をのみつつ、たわいもない話や、時には真剣な話をして過ごす時間だ。

ロッジは札幌の小高い山の中にひっそりとたたずんでいる。「ロッジの時間は悠々だ」といった人がいる。周りを木々で覆われたロッジにいると、ロッジの時間の流れにとけこんでしまう。

私がロッジに住んで 2 年半がたった。いまでもしみじみと「幸せやな」と思う時がたくさんある。ロッジもだいぶ年を取ってきた。

ちゃんと手入れをしないともたないかもしれない。OG になっても、おばさんになっても、ロッジが大丈夫か時々みにこよう。

いつまでも、このままでいてほしい。

（末安 1997 より）

修繕・改修工事の記録

以下の工事が、OB の支援のもと、現役主体で実施されている。

- 1976 年（建築後 15 年） 外壁のおが屑断熱材をグラスウールに交換などの改修（椿谷 1976、北大山とスキーの会 1978）
- 1979 年 都市下水道化、トイレ水洗化
- 1988 年 外壁の防腐剤塗装、アプローチの階段補修
- 1989 年 枕木 50 本で階段改修工事（阿部 1989）
- 1991 年 外壁断熱材の補充、天井・床の断熱工、内玄関扉位置の変更、1 階叩き部のフロアー化、窓のアルミサッシ化、2 階間取り変更等大規模改修（堀川 1991）
- 2000 年 水道修理、308,700 円（内 150,000 円は住人負担）
- 2002 年 外壁クレオソート塗装
- 2005 年 前年の台風 18 号被害の修復（破損部修復と屋根板金工事）と断熱工事（グラスウール取り替えとスタイロフォーム外断熱工）（奈良 2006）

以上の改修工事などは 1999 年以降は「無意根小屋・シルバーロッジ基金（1989 年創設）をもとに実施した。

第 1 回募金（1989～1990 年）約 500 万円（無意根小屋改修約 180 万円、ロッジ改修約 320 万円支出）

第 2 回募金（2004～2005 年）約 300 万円（災害復旧と外断熱工事 3,264,000 円支出）

文献

阿部孝夫・中村晃忠（1961） ロッジ建設―その事の起りと経過 1．むいね，第 4 号，13–16.
阿部幹雄（1989） シルバーロッジ階段改修工事．北大山とスキーの会会報，第 14 号，135.
小野堅太郎（1968） ロッジ建設作業．北大山スキー部部報，105–107.
倉持寿夫（1968） ロッジ生活を振り返って．北大山スキー部部報，108–110.
佐々木尚三（2004） すばらしい人たちとの出会い、それは私のたから．こなゆき（北大山とスキーの会会報），第 29 号，6–7.
末安紀子（1997） ロッジに想うこと．むいね，第 36 号，38.
椿谷 茂（1976） Lodge 改修報告．むいね，第 16 号，22–24.

中村晃忠(1961) ロッジ建設―その事の起りと経過 2. むいね，第 4 号，16–17.
中村晃忠(1968) シルバーロッジへの道程．北大山スキー部部報，99–104.
奈良　靖(2006) シルバーロッジ災害復旧工事及び外壁面断熱改修工事報告．こなゆき(北大山とスキーの会会報)，第 29 号，59–60.
北大山とスキーの会(1978) ロッジの変貌．北大山とスキーの会会報，1977 年度，5.
堀川信一郎(1991) シルバーロッジ改修工事報告．北大山とスキーの会会報，第 16 号，42–55.
松村俊和(1983) シルバーロッジ．むいね，第 22 号，21–22.
水谷　寛(1968) シルバーロッジの生い立ち．北大山スキー部部報，93–98.
向井成司(1994) 水谷先生との出会い(その 1)．北大山とスキーの会会報，第 18 号，8–9.
山本幹雄(1961) ロッジ建設―設計．むいね，第 4 号，18–21.
ロッジ委員会(1962) シルバーロッジ使用に関して．むいね，第 5 号，45–46.

2.2　ユートピアロッジ

長沼　昭夫（1972 水 漁）

「ユートピアロッジ」の事を記すには、まず新冠ユートピア牧場について触れなくてはいけない。新冠ユートピア牧場は「北大山スキー部」やその OB 組織である「北大山とスキーの会」の生みの親ともいえる向井成司(1959 卒)さんが 1967 年に新冠町大狩部で創設した。当時北大山スキー部部長(顧問教官)であった水谷 寛先生が「理想の社会を作ろう」「若者たちに語らいの場を」などと提唱された理念を具現化しようとしたものであった。

私は 1972 年春水産学部卒業と同時にユートピア牧場に就職し、向井成司さんや同じ北大スキー部山班出身の田邊顕人(1960 卒)さんらと共に「日本の新しい農業像を作り上げる」という高邁な理想を掲げ、牧場運営に人生をかけていた。

この頃、新冠ユートピア牧場は新栄地区に 100ヘクタールを超える農地を取得し、肉牛の育成を柱にした総合畜産業へと急速に拡大し、養鶏業中心の小規模な経営から大きく変化していた。

牧場では毎年植樹祭や収穫祭などが開催され、北大山スキー部の学生達も多く訪れ、労働奉仕と共に人生を語り、未来への夢を育む格好の人生道場になっていた。

1972 年から 74 年にかけてこの新栄地区に「ユートピアロッジ」は建てられたのである(**写真 3-2-8**)。新冠町市街地から日高山脈の方に 20 キロほど入った丘陵地の素晴らしい場所であった。新冠ユートピア牧場を訪れる人達のために「語らいの場」や宿泊施設の提供が主な目的



写真 3-2-8
ユートピアロッジ。緑川芳行撮影

であったが、幌尻岳などを目指す山スキー部の学生たちは必ず立寄るベースキャンプでもあった。また山スキー部 OB の倉持(1965 年卒)さんや岡本(1966 年卒)さんがこの牧場で結婚式を挙げるなど多くの若者が触れ合う理想郷でもあった。

このユートピアロッジの建設資金は北大山とスキー会の会員とその友人知人など多くの関係者の「ユートピアの夢を買おう」という善意のお金であった。そして 1973 年 7 月には「ユートピアクラブ」という組織もつくられ、その輪はさらに大きく広がっていった。

しかしその後、わずか数年のうちに石油危機など時代の荒波を受け、牧場経営そのものが厳しさを増していった。何とか「ユートピアロッジ」や「ユートピアクラブ」を守り通そうと多くの人が必死の努力を重ねたが、その甲斐なく 1989 年には「ユートピアロッジ」は人手に渡り解体される運命になった。

水谷先生の提唱する「語らいの場」は大滝村での「水谷ロッジ」に引き継がれた。一方、向井さんはユートピアの火を消すわけにはいかないと、1990 年に創設の地「大狩部」に戻って「新生ユートピア牧場」を作り、自然卵養鶏に挑戦し現在に至っている。

2.3　水谷(大滝)ロッジ

小林　暁正（1965 経済）

1977(昭和 52)年の竣工から水谷先生のご逝去(1994 年)まで、約 15 年間、水谷ロッジは先生の構想通りに、幾多の人々の語らいの場として、機能した(**写真 3-2-9**)。

その建設趣旨、場所選定、建設過程から、完成後の集会の様子まで、水谷先生ご自身が、山スキー部部誌『むいね』17 号～25 号や先生の発案による『水谷ロッジだより』に正確無比な記録を残しておられて(**写真 3-2-10**)、間断するところがない(『水谷 寛文集 夢、愛、そして語らい』に再録)。

ここに先生のロッジに対する思いを記しておきたい。

水谷ロッジ建設の趣旨　水谷　寛

「人生いかに生くべきか」　その道すじ(生き方の哲学)を頭の中に、ハッキリ描きながら、生きてゆくことは大切なことである。われわれは、生きていればかならず種々な問題と出合う。それに対し、適切に対処出来るためには、日頃、生き方の哲学をもっていることが大切である。その哲学を、いつもきちんと、頭の中に持っているならば、それをより所として、それぞれの人生の問題は解けるばかりでなく、一貫した問題の対処の仕方が出来るはずである。その意味で、「人生はいかに生くべきか」という問題について、常日頃から、自分の頭で考えたり、あるいは、議論を重ねることによって、各自が自分の意見をもっていることは大切なことである。このような問題を考えたり、あるいは、論じ合ったりするためには、そのために適した場が必要である。そんな場として、よい雰囲気を備えたロッジを建てようと考えたのである。

以上が、ロッジの建設を計画した趣旨である。

以下にロッジに関わる思い出を記す。

仲間

水谷ロッジの集いに集まってくれた仲間の方々の内、手稲養護学校の福井さんと数名の先



写真 3-2-9
水谷ロッジ。大滝村優徳(現 伊達市大滝区)、1977 年 10 月(むいね　第 17 号、1977 より)

生方、職員の山田さんのグループは忘れられない。身体の弱い子供達の自立への教育に携わっている方々で、種々課題の多い職場であろうと想像出来たが、皆さん気さくで、活気に溢れ、それぞれに個性的であった。(数年後、絵を教えておられた佐伯先生の個展が札幌市内のギャラリーであり、一点絵を買わせて頂いたのを、思い出した。そんな先生もいらした。)

水谷先生の持論「無償の行為の尊さ」を充分理解して、律義に集いに参加され、作業に積極的に協力して下さった。特に、山田さんは、草刈り機持参でロッジ周辺の雑草刈りに、陽気な大声で先頭に立ち、汗を流した。夜の宴会のしめに出る、彼がこしらえるジンギスカンたれで味付けの焼きうどんは誠に美味だった。この活力の塊のような山田さんが、若くして、突然亡くなられたのには、呆然とするだけであった。

山関係のクラブと養護学校、全く接点のない者同士が、共同作業をし、食べ、酒を酌み交わして、福祉だ何だと時間を忘れて語り合う。人生の一齣、貴重な思い出になっている。「語らいの場」で新たな「化学反応」が起こる、それこそ、先生が希求されたものであったろう。



写真 3-2-10
水谷ロッジにて(水谷ロッジだより No.2、1988 より)

共生農業

水谷ロッジの集会で、当時、先生が力説された事の一つに、農業との共生がある。先生は次女のご家族が脱サラし、大滝で農業を始められたこともあり、国の根幹をなす農業に深い関心と憂慮を持っておられた。

現況、農業者は様々な要因から、経済的に立ちゆかないが、少し余裕のある都市部の人々が、援助をする。それにより、農業者は生活の安定が得られ、健全、安全な農産物が都市部に提供される。この持ちつ持たれつの関係をシステム化すべきだ。現在では、生産者と消費者とのこのような関係は、多様な仕組みで一般化している。しかし、当時は、高度経済成長路線

まっしぐら、農産物は安い輸入で対応、農業度外視が国の方針だった。今、世の中が先生に追いついて来た。先見の明と言うべき事柄だ。TPP で騒がしい最中だが、「農業に知恵を出す」は今後も時代との相関の中で、重要性を増すと思う。

水谷先生の居間

第 2 期工事として、先生の自宅と奥様の診療所が完成して間もなく（1978 年）、妻とお訪ねした事があった。真新しい、玄関を入って、居間へ。目を見張った。

そこは、発寒のお宅がそうであったように、様々な物が満ち溢れており、わずかに、先生の椅子と来客用ソファの場所が確保されているだけ。つい先ごろ新築したばかりなのに既に物の氾濫が現出していた。（妻は吃驚仰天だったそうだ。）

真っ先に、スキー理論のための模型が目に付く。車のラジエーターを据え付け、それに温泉の湯を通し、暖房としている。その傍には、濡れ手拭いを掛け、水分を蒸発させ、湿気の確保も怠りないと先生のご説明である。

世の森羅万象、その本質へ迫る事を第一義とするのが先生の生き方の基本であり、見てくれなど、考慮外だと、あらためて認識する。（本質を求め、シンプル　イズ　ベストの先生は、そばはかけそば、コーヒーはブラックだった。）

莫大なデータ、資料をもとに熟慮、考察を経て生み出される事柄。先生のお話は、簡潔で、分かりやすく、重い。しかし、それは、このようなカオスの居間・空間からこそ生まれるのだ。

先生自ら淹れて下さったブルーマウンテンコーヒーを頂きながら、あれこれのお話を伺っていると、次第に、心落ち着き、至福の時間が経過するのだった。

ある夏休み

子供達 3 人がまだ小学生だった、ある夏休み、家族でロッジへ出かけた事がある（1980 年前後）当時まだ JR 胆振線が運行しており、倶知安経由、誠にのんびり、汽車で行ったのだった。（我が家にまだ車がなかった。）ガラガラの列車で子供達が珍しがって走り回り、デッキに出たりしながら、無人駅「優徳」で下車。

近所の子供達と言葉を交わし、ロッジ周辺の草原で遊び、長流川の流れを見に行ったりして、ゆったり時間を過ごす。ゲーム機などない昭和はこうして暮れていく。先生に温泉に連れて行って頂き、汗を流して、すっきりする。

夕食はお約束のバーベキュー、先生のご家族にもご一緒していただく。

翌日、どうしたことか、私が毒虫に刺されて、顔がパンパンに腫れるハプニングが発生する。水谷診療所の救急患者になり、テツ夫人にカルシュウム注射を打って頂く。

夏休み絵日記の 1 ページを埋める、行事となった。

水谷ロッジは長女の木村 真理子さんに引き継がれている。

文献

水谷 寛文集編集委員会（1999）夢、愛、そして語らい―水谷 寛文集―．345p.



『むいね』第 9 号より

2.4　部室の変遷と思い出

藤永　徹（1968 獣医）

クラブ活動にとって最も重要で不可欠な「場」は部室であろう。スキー部山班から山スキー部へ移行し、山行が活発になってくると、学内に存在する部室は必須の場なる。日常のダベリングの場として、山行の相談・計画の場として、装備の保管場所として、山行審議の場として、下山後の後始末のための場として、トレーニングの準備室として、部室はクラブ活動の運営と安らぎの中心である。

山スキー部創部直前に設立された琴似のシルバーロッジは、炊事や寄宿、そして多人数の宿泊も可能であり、「語らいの場」としては勝れた施設には違いない。しかし、なにせ大学から 1 時間ちかく離れているし、交通経費もかかる。大学内にある部室は、クラブの運営に関連する活動をほとんどまかなうことができる要となる施設である。

その部室のこの 50 年間の変遷とエピソードをみてみよう。

初代部室：旧武道場（当時の名称）、～1965 年 3 月（雨天体操場・銃器室として 1924 年 10 月築）

現在の地球環境科学研究院の車庫の東側の道路を挟んで位置していた。さらにその東側下の段丘面には現在もテニスコートがある。戦前からの雨天体操場すなわち体育館で、当時は柔道部および剣道部の道場でもあり、その南端の体育会事務室の隣りの部屋をボート部やアイスホッケー部などと共同で使用していた。

1964 年にはシルバーロッジが既に活用されており、当時の富良野岳－ウペペサンケ山縦走などの重要な会議は夜な夜なシルバーロッジで開催されていた。装備もすべてロッジに保管されており、この部室は昼間の連絡や冬前のトレーニング時の着替えに使っていたような気がする。（藤永 徹）

第 2 代部室：理学部前教室、1965 年 4 月～1969 年 3 月（木材強弱試験室として 1916 年 1 月築）

現北大総合博物館の道路を挟んでやや南側、古川講堂の北側にあった細長い教室で、部室の入り口は北側にあり、南隣は空手部であった。古いがしっかりした建物で、部屋も比較的広く、わき部屋には装備が保管され始めた。空手部側に石炭置き場があり、部室に設置されている達磨ストーブで自由に暖を取ることができるため、授業や実験をエスケープして物思いにふけることも多かった。（**写真 3-2-11**）

1960 年代後半からダンスパーティーがはやっており、部活動経費捻出のためにダンパを企画した先輩たちがいて、一年生の私たちに、切符を女学生にうりつけたら、踊ってやらねばならんのでいまからダンスを教えてやるといわれて、にわかにワルツなどを教え込まれたものでした。いちにっさん、いちにっさんとまるでトレーニングの一環のようなダンスでしたが、本番もそうしてならったダンスをやったんですから、こりゃ大変なものでした。

（黒澤 努談 1972 獣医）



写真 3-2-11
山スキー部第 2 代部室

第 2 代から第 3 代部室への転居前に、理学部前付近のプレハブに一時的に移転したようであるが、短期間でありまた当時の部員にも“装備置き場のような気がした”というように記憶が曖昧なため、ここでは部室としては取り上げない。

第 3 代部室：第 3 サークル会館、1969 年 4 月～1975 年 3 月

現情報基盤研究センター付近にあった木造 2 階建ての旧教育学部校舎の 2 階で、確か下にはオーケストラが入っていた。この場所は、教養部からはやや遠いものの電車や札幌駅に近く、重いザックとスキーを背負って山行に出かけるには極めてアクセスの良い部室であった。

「部室の思い出」　竹内隆一（1980 工 合化）

1974（昭和 49）年入部で、4 年目の先輩が旭岳盤の沢遭難世代でした。僕の代は入部当時、理学部前のオーケストラの部室があったその 2 階だった記憶です。角からボロが出ている薄灰色のソファーがありましたね。フラッシュバックするのは、現役 1 年目の冬の正月を終えた頃、やがて試験期間というのに僕はまるでそんな気はなかった。ただ次に進級できそうにないことは明白であったが、ただ山の日々が過ぎ、結果的に年間百数十日という完全なる山生活に浸っていた一年が誇りであった。

そんな時、試験に行くわけでもなく、やはり教養部に行くのは止め、部室に歩いた。部室に入ると、達磨ストーブにコークスか石炭か褐炭なんかだったかもしれない炭素系の何か暖かな香りが部屋の片隅にしていた。当時 3 年目だった先輩が既にストーブの前で椅子に座っておられた。朴訥としたひげ面の先輩であった。「いやー実は単位は取れそうにありませんし…」僕自身もその頃はせっかく合格した大学に親元から離れ、わかっていながらも、ふと親の顔が浮かび、心配であった。聞いてもらいたかったのか、本音を語った。その先輩はおもむろに、髭のニヒルな笑いとともに、「実はな、俺はもう教養 3 年目だ。教養は 4 年目までできるからそんなに心配せんでいいよ」「2 年ドッペッてる、みんな留年してるし、当然さ。」と、全然明るく、どこにも心配などないといった風貌だった。更に、山男の変な自信のようなものが漂っていた。

その落着いた、泰然たるものになぜか共感した。「そうか、山があるもんな」とひどく安心したのをよく覚えている。そして、そうなんだ、次にまた同じ気持ちを引き継いだのかもしれない。そこに部室が自分の居場所として存在していたのは間違いない。

十条の麻雀屋、青猫の喫茶店、当時、スパゲッティというのをあまり食ったことがなく、タバスコがトマトケチャップと思って思い切りかけて、青猫のママさんに笑われました。私と同世代の椿君が女性を部室に当時初めて連れ込んだとして、ひどく顰蹙を買ってリーダー会に掛けられたことがあった。実は、自分にはまったくできないことだったし、「いやーすごいやつだ」と感激していた。実に田舎者だったなーと思います。

第 4 代部室：体育館横プレハブ 2 階、1975 年 4 月～1983 年 3 月

現第 2 体育館の敷地であったテニスコートに建てられたプレハブの 2 階にあった。当時、古い木造校舎が徐々に建て替えられつつあり、各クラブの部室は大学内をうろうろしていて落ち着かなかった。

私の入部した 1981 年の部室は体育館横のプレハブ 2 階でした。ずいぶん薄暗く、部屋に同化して真っ黒な小塚さんが常にいてタバコの煙を燻らせていた記憶です。

（松本貴之　1985 文 行動）

第 5 代部室：現部室、1983 年 4 月～至現在

現在の部室は、陸上競技場の西に面したサークル会館（本館）の南側に建てられた平屋の建物で、中には、山スキー部の他に、山岳部、ワン

ダーフォーゲル部と野球部が入っている。

この部室は次に掲載されている三宅信一郎(1982 経)らが大学全体のクラブの譲り合いの精神から苦難の末、獲得したものである。(写真 3-2-12、3-2-13)



写真 3-2-12 山スキー部第 5 代部室(現部室)



写真 3-2-13 現部室での例会

2.5 涙が出るくらい嬉しい話―語り継ごう現部室・サークル会館入居の背景―

三宅 信一郎(1982 経済)

私の現役時代の部室は、体育館横プレハブ 2 階でした。

入部したのも、教養部近くの生協の 2 階食堂で勧誘を受け、体育館横のプレハブ 2 階に連れて行かれて、その場でカンダハーのスキーを渡され、ムイネの新人歓迎会に来るようにと言われたのが運の尽き(笑)でした。

それから OB となって山行審議などの活動で部室に出入りした、まさに山スキー部活動全てを含むこと 5 年間を、そのプレハブで過ごしたことを懐かしく思い出します。

我々が札幌を去るまさに 1983 年から、今のサークル会館に移行しましたので、私の代はサークル会館での部活を経験することなく、ずっとプレハブでの部活でした。

この現サークル会館への移行に関しては、今はもう誰も覚えていないかと思いますが、私には特別の思い出があります。

当時、この現サークル会館は、「新サークル会館」略して「新サ館」と呼ばれており、この「新サ館」建設構想は、学生の間で悪名高い事で評判でした。

この年代では、筑波大学が創立されるかした、かの時期で、当時の文部省は、大学の学生運動根絶や、クラブ活動に没頭して何年も留年を繰り返すような不良学生根絶を目指して、筑波大学をモデル大学にすべく、全国の国立大学の寮生活やクラブ活動に規制を掛けようとしていたようでした。特に、旧制高等学校の流れを汲む旧帝大系の国立大学の寮や部活は目の敵にされていたようで、寮生活や部活に没頭するあまり、過度な学生運動に傾倒したり、過度に部活に没頭し何年も留年を繰り返し、挙げ句の果てはまともに卒業できない学生を生むような部活を取り締まり、きちんと 4 年で学業を終えてまともな大学生活をまっとう(何をもってまっとうか分かりませんが?)して社会に出て行ける、いわゆる当時の文部省が好む優等生像を生むという当時の内閣の方針が出ていた時代でした。

それに合わせて当時の北大の学生部にも、その趣旨を実行する組織が出来ており、その組織のリーダーに、あろう事か当時私が所属しており、ろくに参加もしていなかった経済学部のゼミの教授が任命されておりました。

当時の学生部の言い分は以下でした。

1. 恵迪寮は廃止。
　八人部屋などの共同生活は禁止。全て個室とする。理由は共同部屋だと、学生運動の温床となる可能性あり。
2. 文科系、体育会系サークルが今まで自由に、常時好きなときに部室を使用しているなどの運営は禁止とし、全て共用施設とし、使用する毎に事前に学生部の許可を得ることとする。
3. 以上の運営を新しく建設する寮とサークル会館で適用する。

この宣言を一方的に学生部は行い、当時の恵迪寮の寮長などの運営責任者や文科系・体育会系のキャプテン・主将クラスを集めて説明会を開催したのでした。説明会というより、一方的な通告会であったように記憶しています。

恵迪寮生や北大に来てサークル活動をする連中からすれば、学生部の言うようなまともな学生生活を送るならわざわざこんな蝦夷地の大学にまでこなくともそれぞれの生まれ育った、ある意味まっとうな地域の大学に行けばいい訳であります。はるばる北大まで来たのは、それなりに自由奔放な校風にあこがれたからであります。さすがに、この説明会を聞いたあとは、参加したサークル幹部連中の学生は唖然とし、声も出なかったように意気消沈していたことを記憶しています。

山スキー部でもこの大学側の一方的な通知は大問題でした。プレハブといっても愛着のある部室。ただ愛着があるだけでなく、ご存知のように、毎年多く出る全ての山行審議や、リーダー会審議、山行後に開かれていたOB検討会などの開催、それと遭難対策本部などの設置など、部室が常時使用出来なくなるという現実を目の当たりにすると、いかに自分たちがいつでも好きなときに使える部室があることが大事なことであったことに気付きました。

スキーやテントなどの山の道具の置き場がなくなるという以上に、常設の審議の場がなくなるということが一番の問題でした。それは、あと幾日かで空気が無くなると宣言されるに等しいくらいにショッキングなことだと気づきました。

途方に暮れて、北12条辺りにアパートの一室を借りて部室にするか、ただそんな金などない、全国のOBに資金提供のお願いをするか？など連日真剣に議論するも、結論がでないまま時間が過ぎて行きました。

その後ほどなくして、他の文系・体育会系のサークルもことの重大さに気づき、これではいけないということになり、主将だけで集まって学生部に抵抗していこうという趣旨の組織が誰とも言わず自然発生的に立ち上がりました。最初の会合の際、各々のサークルの主将クラスから、如何に自分たちのクラブ活動において、独自の部室を持つ事が重要であるかの説明があり、皆、その通りだと盛り上がりました。もちろん、私も山スキー部のクラブ活動の特殊性を強く訴え、山岳部もワンダーフォーゲル部も同様に特殊性を訴えておりました。ただ、日本政府の意思を受けた学生部の強硬姿勢を目の当りにしているので、部室常設の必要性は誰もが認識するも、現実的にどう、ある意味、国の決定に対抗していくかという議論となりますと、所詮学生の集まり、意気消沈していました。そんな中で、私は今でも決してわすれることができない嬉しい出来事が起こりました。

確か、野球部と空手部の主将だったかと思いますが、複数のいわゆる体育会系の幹部連中が皆の前でこう言ってくれました。“普段あまり何をやっているのかよくわからない山スキー部などの山系サークルが、何をやっているのかよくわかった。山スキー部と山岳部とワンダーフォーゲル部のこの三つの山系サークルにとっての常設部室の必要性は命に関わる問題だ”

“我々は、常設の部室がなくても、グラウンドで死ぬ事はないが、山系は部室がないと重要な事前事後審議が出来なくなり、あるいはおろそかになり、結果、山で遭難者が出る可能性がある”

“もちろん、我々野球や空手、ラグビーなどの部活にも、コミュニケーションの場や常設道具置き場など考えると、自分たちだけの部室は必要と考えるので、サークル系全体で学生部に反対していく事に変わりはない。ただ、学生部が最後まで強硬姿勢を貫いた場合の最終的な落としどころは、学生全体の意見として、せめて山スキー部と山岳部、ワンダーフォーゲル部のこの3部だけには常設の部室を与えてやって欲しい、その代わりに野球部や空手部などその他の体育会系サークルは常設の部室は放棄するとしようではないか”

そう言ってくれたのでした。

さらに私を驚かせたのは、普段、何やってんだか・・・とある意味馬鹿にしていた軽音楽部の幹部も“我々軽音なんかは、どこだって演奏できる。大通公園でも。山スキー部がそんなに部室が必要なら我々文科系サークルも、部室は放棄してもいい”とまで言ってくれ、学生みんなの意思統一がなされました。涙が出るくらい嬉しい出来事でした。

その後、この組織のリーダーとなった私に、学生部組織のリーダーであるゼミの教授が“三宅はゼミにはほとんどこないくせに、こういう活動だけは熱心に参加するな！”と笑われました。

こういう陰の他の部の暖かい協力があった御陰で、今の山スキー部の部室があることを決してわすれてはいけないと思います。

シー・ハイル。　　（2016年12月記）

■コラム■
定山渓鉄道

♪夜の札幌プラットホーム♪で始まる無意根小唄。この歌は最後♪たどる電車の窓の夢♪で終わる。いまでも現役たちに歌い継がれているらしいが、はたしてこの歌詞の意味することは理解されているのだろうか。

この歌が作られたのは昭和38、9年と聞いている。ピウケナイ沢でのテントの中で生まれたという。

当時、無意根小屋の小屋番は、札幌から定山渓まで定山渓鉄道というのがあり、往復電車を利用した。定鉄と愛称され、いまでもじょうてつバスとしてその名が残っている。定鉄の本社に行き、無意根小屋の小屋番です、と言えば無料の乗車券を発行してくれた。定山渓駅までは1時間ちょっと、そこからは徒歩。冬期、中山峠は交通止め。薄別までの国道は行きも帰りもスケーティングの競争コースであった。

いずれにしても、小屋番に行くのに「夜の札幌プラットホーム」はいささか変ですね。ちなみに旧札幌駅での定鉄のプラットホームは0(ゼロ)番線でした。

倉持寿夫(1965 農 林学)





3　憩いの場―むいね、歌集など―

3.1　「むいね」に関する一考察

中村　晃忠（1962 医 薬）

1. はじめに

「山スキー部 50 年史」を編むとき『むいね』は重要な一次資料であるが、本稿の目的は一次資料『むいね』に依拠して“歴史を語る”ことではない。“『むいね』とは何か”を考えることである。

2. 『むいね』の生い立ちと変遷

従来から『北大スキー部 OB 会報』が毎年刊行されており、その中に「現役の活動報告」として山班の活動が簡単に記録されていた。

『むいね』1 号は、山班の独立気運が起こりつつあった 1958 年、その 5 月にムイネで遭難死した高倉 稔君の追悼文集として生まれた（**写真 3-3-1**）。発行者は北大スキー部山班、顧問教官や OB からの寄稿は全くない。“はじめに”は山班チーフリーダー・小松 弘が書いている。追悼文に加えて、様々な味のある文章、山行記録、ムイネ小屋日誌があって、このスタイルは後の『むいね』の原型となった。表紙の“むいね”の字は当時のスキー部長・小川玄一医学部教授の示唆で、編集委員であった 2 年目・中島 巖が札幌医科大学教授であった大野精七先生に揮毫をお願いした。この時に大野先生は「秩父宮殿下のお言葉」を載せるよう求められたとのことである（小松 弘談）。また、この号の表紙にはスキー部のモノグラムが掲げてある。これも小川部長の示唆による。なんとか山班をスキー部の中に留めておきたいという意思を感じる。しかし、無意根山頂にある高倉君のケルンには、“北海道大学山岳スキー部員・高倉 稔君”とある。これは向井成司さんの意思によるものであった。



写真 3-3-1
『むいね』第 1 号（1959 年 1 月発行）の表紙

第 2 号（1959 年）は裏大雪縦走の報告号で、意気盛んである。巻頭言はない。まだ副部長ではなかった水谷先生の“山は楽しい”という文が学生の文と並んで掲載されている。また、向井 OB の“思い出ずるままに”が始まる。

第 3 号（1960 年）はペテガリ岳中の川の遭難の報告と追悼である。巻頭言はない。水谷先生の“スキーの物理学”が始まる。巻末に“山とスキーの会発会に寄す（向井 OB）”と山とスキーの会会員名簿がある。特別会員 7 名、会員 37 名であった。山班の後援者として OB を組織しようとする意図が明らかである。また、この号から山班現役の役員・部員名簿がつくようになった。これは偶然ではないだろう。

総頁 69 ページ、OB 執筆 7.5 ページ、教官執筆 11.5 ページであった。

第 4 号（1961 年）の発行者は山班ではなく北大スキー部である。無署名の巻頭言があり、そ

の後に、村井延雄スキー部長の挨拶がある。特集は二つ、「新しいスキー部の出発」と「ロッジ建設」である。競技班からの執筆もある。

新生スキー部特集において向井 OB は“山班はスキー登山あるいは山岳スキーの実践に幾多のシュプールを残してきた”とし、**「山とスキーと人間と」の三位一体**の相互関係(**イデオロギー**)という言葉をはじめて使った。なお、巻末には“山班の後援団体として発足した旧山とスキーの会は一応解消することになりましたのでご報告いたします。なおその後の話し合いで新しく性格を変え同名称で再発足する予定であります。”とある。

ロッジ建設の特集には建設の経緯が記述されているが、土地、設計、費用、資材、工事のすべてにおいて、今では考えられないような援助(無返済の借金も含む)があった。なお、1962年9月発行の『北大山とスキーの会報告』にも水谷先生のロッジに関する報告文があり、そこに寄付と借金の詳細(額と名前)が明記されているので参照されたい。私は当時の「ロッジ委員会」の責任者であったのだが、このような僥倖が本当に良かったのか、未だに釈然としない。

総頁 79 ページ、OB 執筆 8.5 ページ、教官執筆 5 ページであった。

第 5 号(1962 年)の発行者は再び北大スキー部山班になった。巻頭言はなく、二つの特集が組まれている:1. 日高幌尻集中登山(執筆者:4 年目の桜間、谷口);2. 北大スキー部のあり方(執筆者:水谷先生、3 年目の永野)である。1. では、新生「統一スキー部」の中において山班のレベルを維持するための具体的実践が、2. では理念が模索されている。2. には、その後に長く引き継がれたキーワードが登場する:

水谷先生は“*大学におけるクラブ活動の目的は「共同生活の場を通して、学生がその人格を磨くことにある」といっても言いすぎではない。*”とした上で、北大スキー部の創設の歴史にさかのぼり、**「山野の跋渉」「スキーによる未知の分野の開拓」**を提唱し、競技班と山班の対等が受け入れられないのなら、分裂やむなしとした。永野は、“*綱領の成文化が必要である。幸いにして山スキーという分野は未開拓のままで埋もれている*”と指摘している。

総頁 59 ページ、OB 執筆 4.5 ページ、教官執筆 5 ページであった。

第 6 号(1964)は独立した山スキー部としての最初の『むいね』である。巻頭は「山スキー部規約・趣旨」という短いが美しい文章で飾られている:“*我々は一層山スキーの技術向上、普及、発展に努めるべきであり、自然に親しみ、自然に対する謙虚な態度を養い、自然と人との美しい協調が生み出す恵沢を享受すべくはげもう。*”正式に山スキー部部長となった水谷先生は、「新生山スキー部に期待して」の中で次の二点、1)北大スキー部の基本精神を銘記すること;2)クラブ活動の意義:集団生活によって豊かな人間性を培うこと、を強調した。

総頁 56 ページ、OB 執筆 2 ページ、教官執筆 4 ページであった。

この号には、別に 18 ページの北大山とスキーの会の報告と名簿が付いており、その部分の発行所は北大山とスキーの会となっている。

7 号以降にはこのような特別ページは見られないが、水谷先生が毎号の巻頭に OB を意識した“ご挨拶”を書いている。また、OB からの寄稿もある。

1970 年からは、北大山とスキーの会の『会報』が『むいね』とは別に発行されることになった。それと共に、『むいね』10 号は A4・横書のスタイルとなり、現在に至っている。水谷先生(山スキー部部長、山とスキーの会会長)は、『むいね』と『会報』の両方で“挨拶”と“お便り”等を書くことになった。

3. 『むいね』は部活動のポテンシャルの指標

図 3-3-1 を見ていただきたい。各号の頁数と部員数の推移である。しかし、年毎のページ数を比較して何かを考察しようとする場合、次の二点に注意を払う必要がある:1)『むいね』の初

期、特に5号以前では、その役割は号毎に異なっており、4号は統一スキー部の出版物であるし、その後、9号までは「山とスキーの会」の会報の役も果たしていた；2)10号から31号の間には、水谷先生の「北海道からのお便り」という文章が連載されていた。水谷先生による「ご挨拶」と「お便り」の内容にはユートピア牧場に関する記述も多く、それは現役部員の活動から乖離した感が否めない。例えば、第31号(1992年：先生が亡くなる2年前)の「北海道からのお便り」中にはこうある。

“ユートピア牧場を作るとき―特殊な活動分野を持つ人には、特殊な分野で協力して貰うことにしております。たとえば、金のある人には金でもって、協力して貰うことにしています。知恵のある人には、知恵でもって、協力して貰うことにしています。若者は勤労が出来ますから、勤労に依って汗を流して、若者らしい貢献の仕方で協力して貰うことにしています。結局、ユートピア牧場は建設できないことになってしまいましたが、その原因はどうやら若者のせいではなく、金のある人達の非協力のおかげではないかと思っています。その責任は金に余裕のある人を仲間にしなかったことのせいだと考えられます。”

そこで、第10号以降について、水谷論文を除いた純粋に部員による執筆分を比較してみた。その結果が図3-3-2である。

水谷論文(黒色)を除いた論文(部員の論文：ねずみ色)の頁数の経年変化の傾きは部員数(白色)の経年変化の傾きとほぼ同じに見える。「2014年(52号)」はヒュッテンケッテ特別号なので例外とみるべきだろう。『むいね』の様々な記事は山スキー部部員の活動の反映だから、こうなるのは当然と思われる。この緩い漸減傾向をどう理解するかは、今後を考えるにあたっての一つの命題であろう。

図の頁数の推移には幾つかピークがあるのが見て取れる。図3-3-1の1960年あたりのピークは、草創期、特に、山スキー部誕生前後に該

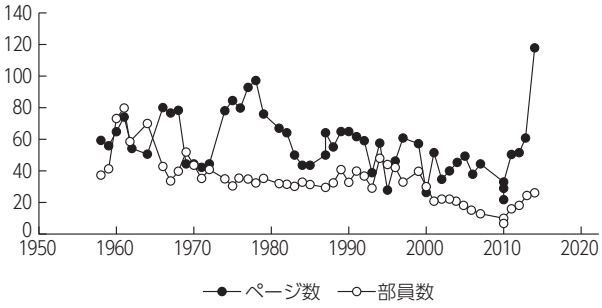


図3-3-1　『むいね』の頁数および部員数の経年変化

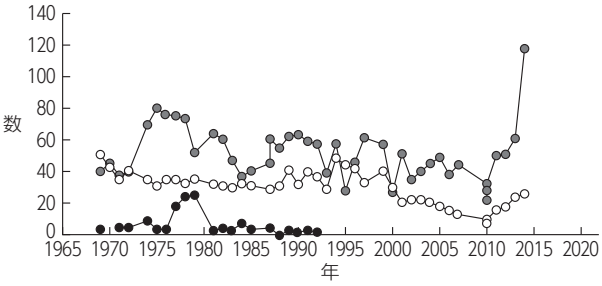


図3-3-2
水谷論文を除いた『むいね』の頁数および部員数の経年変化
黒丸：水谷論文の数、ねずみ色丸：水谷論文を除いた論文数、白丸：部員数

当する。次のピーク(1966年からの数年)は、富良野岳－ウペペサンケ山縦走など精力的に冬の大雪を目指した時期である。1970年から1980年初頭にかけてのピークは、飛躍的なスキー技術の向上、冬の日高への進出、盤の沢雪崩遭難の時期に当たる。1986年にはペテガリ沢での転落事故が、1989年にはムイネ小屋の大改修があった。90年代初頭までには、冬の日高(伊藤健次)、知床の全山縦走(渡部哲哉)、海外遠征があった。

4.『むいね』は山スキー部年報(Journal of HUSV)であり、文芸誌でもある

これまで見てきたように、『むいね』には色々な顔があり、それは時代と共に変わってきた。第1号と第2号には部員の間で人気のあった串田孫一主宰の文芸誌『アルプ』のような雰囲気がある。ローカルな山岳雑誌『北海道の山』の書評欄では小屋日誌の評判がよかった。一方、『むいね』は山班民族主義の機関誌的な役割も果たした。イデオローグである向井さんと水谷先生の主張が色濃く出ている。

そういった面はあっても、紙面の大半は現役部員の山行報告・記録、紀行、随筆、詩などで占められており、その時代の山とスキーと青春の貴重な“記録”となっている。

私はこの論を書くにあたって、何度も『むいね』の pdf ファイルを読み直した。そこには常に(現在でも)、部員たちの格闘する姿があった。それは、ある場合には遭難や事故との格闘であり、“山スキー(山スキー部)とは何か”との格闘であり、青春との格闘であった。そう、『むいね』は青春の記録でもあるのだ。

結論:『むいね』は北大山スキー部年報(Journal of HUSV)であり、文芸誌でもある。編集・発行するのは北大山スキー部部員である。

現役諸君、何でも書こう。なるべく沢山、詳しく書こう。活動したら書く、想いも書く、それは後世への君らの責務だ。

5. 蛇足 “語らい”とは何だろうか。阿部孝夫さんはこう云っている:

“語らいとは何か、それは個人の主張であり、個性の発揮である。そして何物にも囚われない自由であり、遺伝子の主張する利己主義である。”(山とスキーの会会報, 第 18 号, 1994, p11)

(編者注:『むいね』の総目次を第 8 章 5 に示す)

3.2 『RUSSEL』について

小林 暁正(1965 経済)

『ラッセル』は北大山スキー部の年刊部誌『むいね』に対し、臨時的・機動的に、かつ気軽に文章を載せる事を目指した部内誌である(**写真 3-3-2**)。

筆者はその創刊号刊行に携わった。最早、忘却のかなたの事柄ではあるが、発刊の経緯など、思い出せる事を記述しておきたい。

1963(昭和 38)年 3 月(51 シーズン)、北大スキー部の山班と競技班は発展的に解消し、それぞれ分離独立する事に合意。

ここに、山スキー部が誕生した。新学期、新生の高揚感も作用し、従前からあった「富良野岳―ウペペサンケ山縦走」計画の議論に拍車が掛った。過去の山行実績の集大成と新生山スキー部の基礎構築を大目標とし、52 シーズン正式決定、53 シーズン決行が現実味を帯びてくる。

そうなると、必要なのは、目標に向かって部員が一丸となり、総力を結集する、そんな集団への一段のレベルアップである。そのために



写真 3-3-2
RUSSEL、第 3 号

は、何をなすべきか。永野正幸主任を中心に頻繁に話し合いが持たれた。その中で筆者は雑誌発行を思い付く。とにかく、部員間の意思の疎通が肝要。40 名を超す人員を擁する今、もっと、お互いを知り合う必要がある。ヒントは無意根小屋日誌。小屋番が様々なスタイルで様々な事を書き連ねている。そこには、書いた人の

人柄がにじみ出ている。そして、実に面白い。部誌『むいね』は年報でシーズンの振り返りにならざるを得ない。活動している現在の姿を気楽に、雑記帳に書くような雑誌があれば、相互の理解は進むはずだ。文は人なりと言うではないか。

“そんなに言うなら、お前が編集長をやれ。水谷部長には俺から説明する。”と永野主任が了承。かくして、部内手続きを経て、1963年6月1日『ラッセル』第1号発刊に至った。雑誌名は「タンネ」と「ラッセル」が最終候補であったが、フロンティア・スピリット体現そのものの『ラッセル』に落ち着く。

この雑誌が出るのに、2つの事が幸いした。1つはロッジの存在である。発刊までの議論、編集・制作作業、すべてロッジで誰にも邪魔されずに専念出来た。創刊号編集後記で大田正豁・岡田 信・江幡文彦の各氏が、この編集作業を3日間缶詰めになって強行した、と証言している。2つには印刷方法である。当時、現在の如きコピー、印刷の技術はまだ無い。通常なら、謄写版印刷(ガリ版)である。鉄筆でヤスリ盤上の原紙に書く(ガリ切り)のだが、字が上手な事や技術を要した。印刷も汚れ易く、面倒なものだった。ここでは非常に簡便な方法が採用出来た。原紙に鉛筆(又はボールペン？)で書いたものを、そのまま印刷出来るのである。当時、学内に居られた阿部孝夫先輩の処でお世話になる。難点は誌面が黒でなく紫色である事。この方法なら誰でも丁寧に書きさえすれば、即印刷にかかれ、短時日での発行が可能となった。

以下に発行されたラッセル1号～8号の概要を紹介する。

第1号　1963年6月発行　B5版　左綴　横書　40頁(編集長　小林暁正)

〈山　行〉「北日高山行」(永野正幸)など3本

〈随　想〉「五月○○日」(田中夕美子)など8本

〈技術論〉「山岳スキーについて」(倉持寿夫)など3本

食糧軽量化についての座談会が6ページに亘って掲載されている。当時の課題であったのだろう。「上級生すべてサディスト論」(藪中卓郎)、「しせい論」(岡田信)(自然が呼んでいる―大の話である)の如き文章も載せている。

第2号　1963年12月発行　B5版　左綴　横書　72頁　(編集長　増田裕一)

この号で水谷先生が「ラッセルに期待して」と題し、苦言を呈しておられる。第1号の刷り上がりが悪く、文字も下手なのが多く、見難らかった事、気楽を強調した事で謹厳な先生はご不満をもたれたようだ。編集者は気楽であってはいけない、意図を持て、計画性を持て、慎重に書くのもいい、討論の材料になるように、魅力的であれ。いずれも正に正論、謹聴あるのみであった。最大の記事は27ページに及ぶ2、3、4年生の他己紹介(他人が紹介する)や1年生の自己紹介である。互いを知り合う趣旨にピッタリの企画であった。クイズやミュージックのページがあるのが、ご愛敬。第1号を送っていた若手OBのお便りが嬉しい。この号は大島聡範先輩の処で印刷した。

第3号　1964年8月発行　B5(少し小型)　右綴　縦書　31頁(編集長　豊田八宏)

この号から第6号まで、北大生協プリント部に外注。オフセット印刷に変わる。印刷・製本作業までやるのは、過重負担になっていた。プロの仕事なので、格段に見やすくなる。「富良野岳－ウペペサンケ山縦走計画」概要を説明、水谷先生「大雪山厳冬期縦走におもう」、谷口尚弘OB「縦走にあたり現役に望むこと」が併載されている。新入生紹介(今年の新兵さん)が始まる。この号までが筆者らの学年が関与したもので、以後後輩へ引き継いでいる。

第4号　1964年12月発行　B5版(少し小型)　右綴　縦書　28頁(編集長　野原悠久)

縦走直前号で、縦走委員会「縦走を目前にして部員の皆へ」の呼びかけ。「新しい部室によせて」(大谷隆昶)が載っていて、このころ部室を確保した。先輩寄稿、「上高地に集う」(斉藤 貞)、「ラッセル誌へ」(中村晃忠)がある。ロッジ便りが始まる。

第5号 1966年6月発行 B5版(少し小型) 右綴 縦書 73頁(編集長 北村育夫)

部報の発刊を目指し部報編集委員会が発足し、その意義、スケジュール等を発表している。随想等23本の記事を掲載、内容充実である。

第6号 1967年7月発行 B5版(少し小型) 右綴 縦書 70頁(編集長 藤永 徹)

表紙が変わる。「山とスキーの会 赤倉スキー集会に出席して」(水谷 寛)8ページの力作。他己紹介・自己紹介が24ページと力が入っている。

第7号 1968年11月発行 B5版 左綴 横書 16頁(編集長 梅沢 俊)

編集委員会自らガリ切りをし、印刷している。新兵紹介が11ページで大半を占める。

第8号 1969年8月発行 B5版(少し小型) 左綴 横書 37頁(編集長不明 編集者に岡野史郎、油田厚生両氏の名あり)

1968年夏のトムラウシ山集中登山についての総括が6ページに亘り載る。新兵紹介が12ページ。

ラッセルには、児戯に類する文章も多いが、学園紛争以前、まだ牧歌的な時代の大学クラブ活動の一端が活写されていると思う。

3.3 『雑炊』と台所

椿谷 茂(1979 農 林産)

「“雑炊”おぼえていますか?」丸谷氏からメールが届いた。その発行の経緯について「100周年記念誌」に書いてほしいという原稿の依頼だ。実は『雑炊』のことは覚えているが、その発行の経緯についてはまったく覚えていない。何回ぐらい発行したのかも覚えていない。まだ私が下級生だったころで、私が発行の言いだしっぺだったのかも知れない。ワラ半紙にガリ版刷りでそれを半分に折り、色のついた紙の表紙がついていたような気がする。その表紙に『雑炊』と書かれていた(**写真3-3-3**)。手元にその現物もなく、どんなことが書いてあったのか、まったく心もとない。しかし雑炊(食べ物として)は我々の山行の日々の糧であり、それを名前にしたところを見ると、人生の糧となるような刊行物を出したいという思いがあったのかも知れない。その当時私は自分が何をやりたいのかが良くわかっていなかったし、自分の将来は疑問だらけで、見つからない答えを捜し求めていた。だから『雑炊』に書いてあったことは大方想像がつく。その人生対する漠然とした不安や、うまく整理がつかない自分の気持ちを誰かに聞いて欲しかったのだと思う。そのころ私はシルバーロッジに住んでいた。シルバーロッジにも一冊



写真3-3-3
雑炊、創刊号

の日誌が置いてあり、その日誌にも住人たちの人生への不安、葛藤、憧れなどの書き込みが多くあったからだ。

ロッジの日誌には人生の意義について何ページにもわたって青臭い論議をしたり、自分が好きになった女性へのあたりをはばからぬ賛美の記述もあった。宇宙が無限であることに感覚的な違和感を持ち、必ず終わりの来る人生にどう向き合っていけばよいのか、その答えを捜し求めていた。その当時、人生を語るのに忙しいロッジの住人はロッジの衛生状態を省みない。掃除はしないし、台所は汚れ放題だった。汚れた食器と残飯であふれかえった台所は数週間に渡り放置され、残飯はしだいに腐敗し、悪臭を放ち始めていた。残飯はドロドロに解けてついにヘドロのようになり、シンクの底を覆いつくした。そうなると、もうだれも近寄れない。汚くて怖くて近寄れない。そんなある日、小瀬川氏のお母様がロッジにいらした。私はお会いする栄誉に浴することができなったが、日誌にはこう一言書き記してあった。“ごちゃごちゃ人生を語る前に台所を掃除しなさい。” 台所があんなに汚くては人生を語る資格がないというわけである。台所を見ると、あんなに汚くて誰も近づけなかった台所がピカピカだった。私はそれを見て、こん棒で頭をガツンと殴られたような気がした。自分の臆病さが恥ずかしかった。汚いものへの生理的な恐れである。何が大切かわかっていない自分が恥ずかしかった。

颯爽と現れて、青二才どもに投げつけたこの小瀬川氏のお母様の言葉は、クラーク先生が別れ際に馬上から札幌農学校生に投げつけた“Boys, be ambitious!” に勝るとも劣らぬ名言で、私は今でも日々自宅の台所でその実践に励んでいる。

3.4　部報の創られた頃〜取り留めもなく〜

柳生　修（1968 農 林学）

私が入学し、入部したのは 1964（昭和 39）年春である。北大スキー部としては第 52 シーズンの後半と言うことで、山スキー部の創部 3 年目であったようだ。今、既に各々 100 年、50 年を超えている。当然、私の歳は「古来稀」を過ぎたと言うことになる。

昭和 39–40 年の厳冬期に、富良野岳－ウペペサンケ山縦走が成功裏に終わり、創部の意気盛んななかで、部報を創ろうと言うことになった。それから、約 3 年、山スキー部としては、現在のところ唯一の『部報』が刊行された（**写真 3–3–4**）。その編集に、関わった一人として、主な三人として良いのか、大いに迷うが、そうして置きましょう。そして、その三人は、卒業後、年を経ず夭折した（わたしの個人的な感情かも）横山くん、今、どこの空の下にいるのか



写真 3–3–4
北大山スキー部部報、1968

飯豊くん、と私で、したがって、手近な人間の回想と言うことになります。

まず、改めて、実物を眺めると、全体の印象は、如何にも素人っぽいなと思う。

表紙に書名として「部報」だけで下段に「北大山スキー部」、背表紙には一切の印字がない。これは、多分私が、粋がって“これが、スッキリして格好良いのだ”と主張して、そうなった様に記憶している。本体は、冒頭水谷先生の「部報刊行にあたって」と編集長横山雄司くんの「発刊にあたって」を除く章立ては、部史、スキー部回想、ニセコ合宿、山小屋、シルバーロッジ、紀行、追悼、年報、山行記録、OB 名簿となっており、総ページ数 243 と言うことで、その後ろに数ページの編集後記などが配置されている。さらに、懐かしいことには、巻末に“秀岳荘”から“富士観光ホテル”まで、計 9 社の広告が掲載されている。今はもう無い会社や、定山渓鉄道株式会社などは、ちょうどこの頃事業が廃止された電車で、‘渓谷美を走る’と言う様なフレーズが使われている。この広告取りも、きっと生真面目な横山くんが先輩などを頼りながら、集めたのだろうと思う。

さて、本としては、山系のものでは、内容が常識的に網羅されているし、ボリュウムは十分だったと思う。仕上げるまでは、数年の期間大変なエネルギーを要したであろう、と思う。先程記した様な変梃なことぐらいしか関わっていない私は、正真正銘、人ごとのように感じている。横山・飯豊両くんを始め、関わられた諸先輩、そして当時の後輩諸子に心から感謝するばかりです。良く考えれば、それこそが、私の様な掴みどころの無いぐうたら人間を大きく飲み込んだ、北大山スキー部の総合力なのでしょうかね。

実は、このホンの雑文を書き上げるまで、長い時間を要していました。依頼された森くんに迷惑をかけていましたが、私には書くべき動機がない、内容もない、何よりも気力(そんな大仰なことでもないが)がない。恐縮ですが、これが本文です。時に、当時ヒットしていた「ウエストサイドストーリー」は、映画の最後にタイトルが出てきて、バックタイトルとか言われて、評判になっていませんでしたかね。

春ははな　夏ほととぎす　秋は月
冬雪さえて　すずしかりけり　　道元

3.5　山で唄う(歌集)

森　康(1977 工 金属)

山を愛する者ほど、唄うことの素晴らしさを実感してきたのではなかろうか。ここでは北大スキー部・山スキー部において歌集を通してその歴史を辿ってみる。

北大スキー部が創設された当初(大正～昭和初期にかけて)は、歌集といったものは無く、おそらく故郷の民謡や海外から輸入された曲に和訳された今でいう唱歌が中心だったのでないかと思われる。そんな中で北大スキー部部歌が昭和の初期に作られたことは、恵迪寮歌の流れを汲んだ画期的なことだった。(部歌作詞者であられる相川正義 OB(昭和 2 年医学部卒)の作曲当時の回想記を後に再録する。)

また北大山岳部が分離独立したのち、彼らによってドイツ学生リート等が積極的に取り入れられてきたと聞く。山の歌が全盛を迎えたのは戦後の歌声喫茶ブームからで、ロシア民謡や昭和歌謡などジャンルを問わず多くの曲が山で唄われるようになってきた。

このころスキー部山班では茗渓堂の『山で唄う歌 1、2』(1954、1596)を歌集として採用し、ポケットサイズのこの歌集が山の友となった。

1963 年に山スキー部として発足した後、

1964年12月1日に山スキー部歌集第1版が裏悦次(1965卒)、大谷隆昶(1967卒)が編集委員となり発行された。内容は茗渓堂の『山で唄う歌』を踏襲しつつも当時流行っていた歌手ハリー・ベラフォンテが歌う「シェナンドー」などアメリカの香りが盛り込まれた。

第2版は飯豊利秋(1968卒)が編集委員でサイズを一回り小さくした形で1966年12月に発行された。

第3版は1974年11月に保坂 豊(1975卒)、皆川幸治(1978卒)、佐々木右治(1978卒)が編集委員となり、第2版をベースに当時流行った歌謡曲も盛り込まれた。

第4版は松本貴之(1985卒)が編集委員となり1983年に発行された。新しいジャンルを追加しようと試みたが、結局これまでの上書きになったと聞く。

第1版から第4版までは全て手作りのガリ版タイプのもので各編集委員の相当な熱意と努力がうかがえる(**写真 3-3-5**)。

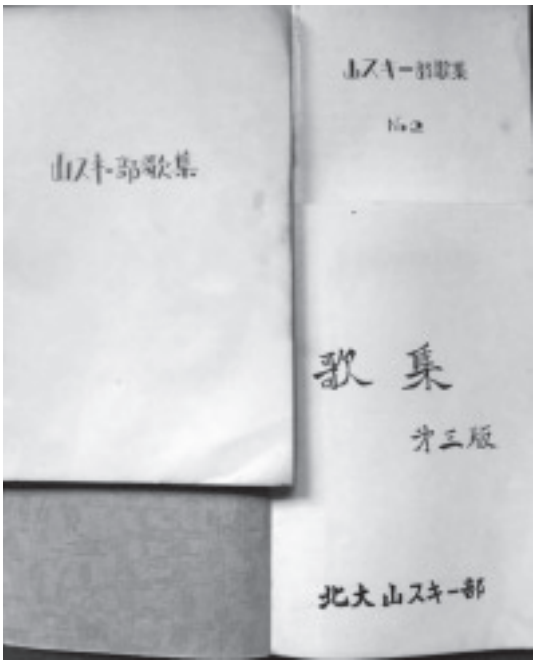


写真 3-3-5　北大山スキー部歌集1版～3版の表紙



写真 3-3-6
北大山スキー部歌集5版(表紙)と6版の見開き

1980年代に入るとSONYウォークマンに象徴されるように、野外でも簡単に音楽が楽しめる時代となり、それとともに歌集で唄う文化が廃れ始めてきたように思う。

山スキー部では第4版が発行された以後26年間新たな歌集制作はなされておらず、合宿や山行では代表的な歌のみを印刷して歌い継がれてきた。現役の歌を聴いてみると、時代と共に唄い方が違ってくるのは理解出来るが、あまりにも限度を超えた唄い方が多くなってきたことに落胆する。これではいけないと思い、諸先輩が残してきた山で唄う文化を後世に残すべく、しっかりした歌集を残そうと第5版制作に動き出した(森 2010)。

第5版は過去の歌集を踏襲しつつも、更に「世界の愛唱歌」を取り入れ、2009年12月に発行された(**写真 3-3-6**)。プロの音楽家である、今村直子さん、吉良真弓さんを音楽監修スタッフとしてご協力戴き、全ての歌に楽譜を付け、それをミュージックプレイヤーなる楽譜ソフトでメロディーラインを聞くことが出来るCDを同時に制作した。これにより時代は変われどベースになる音階(歌い方)は大きく変わらないことが期待出来るのでは、と思っている。

最新の第6版はスキー部創部100周年の2012年10月に発行された。特徴は第5版にオリジナル曲として5曲を追加していることである(**写真 3-3-6**)。

スキー部100周年記念歌として関 英郎作詞・吉田守男作曲「雪は降り積む」、下岡健蔵作詞・黒澤 努作曲「北前船の」の2曲。

蔵王スキー学校の歌である岸 英三(1947卒)

作詞・寺内タケシ作曲「幸せはいつも思い出の中に」、関英郎(1980 卒)作詞・今村直子作曲「ノジリ二万年の別れ」、菅原千菊作詞・作曲「ナムチェの丘の上に」の 3 曲を追加した。

以上が北大スキー部・山スキー部の歌集に係わる流れである。

文献

森　康(2010) 長靴合唱隊．こなゆき(北大山とスキーの会会報)，第 33 号，18–20.

3.6　昭和 20 年〜30 年代に唄われた山の歌

川村　康司（1957 水 製造）

入部当時はスキー部山班の時代であった。1953(昭和 28)年入学であったが、2 年目の 1954 年に入部した。先輩部員が少なく、1 年目 2 名、2 年目 10 名、3 年目 2 名(佐藤鐵郎、大沢昭義)、4 年目 2 名(砂山真範、佐藤英之)、計 16 名であった。経験者は少なかったが、なんとか繋がった。その後、新入部員は 1954 年は 2 名、1955 年 は 5 名、1956 年 は 8 名、1957 年は 6 名と順調に維持された。

当時どんな唄が歌われていたか

まず当時現役 3 年目の佐藤鐵郎 OB(1952 年入学、1953 年入部、1956 年卒)に尋ねたところ、ニセコ、手稲、ムイネの合宿などでは日本語の山の歌、音頭、小唄系統、寮歌などが主だったようで、ドイツ語や英語、外国語の歌は聴かなかったとのこと。

音頭・小唄系統、山の歌：

ニセコ小唄(雪が降るふる一夜で積もるよ…)
シーハイルの唄(テイネおろしが吹くなら吹けと…)
僕のスキー(僕のスキーはウイスキー　街の酒場をスラローム…)
山の四季(北大山岳部歌)
雪山賛歌(米国　Clementine の替え歌)
麗しのメッチェン
むかしむかし(昔むかしあるところに登山者とゆう…)
など

寮歌：

北大恵迪寮歌　都ぞ弥生、ストームの歌、瓔珞みがく、その他寮歌の数々
旧制高校寮歌　ああ玉杯に(一高)、紅萌ゆる丘の花(三高)
琵琶湖周航の歌(三高逍遥歌)、北帰行ほか

今回、当時の状況を調べるために、佐藤鐵郎 OB 以外にも昭和 28〜29 年入部の同期の OB にもたずねてみたが、川村も含めておおむね佐藤 OB の云われた通りであった。同 OB によれば山班でドイツ民謡やドイツ学生歌ほかイタリア・スイス系のアルプスの唄が歌われだしたのは、1955(昭和 30)年頃で、同 OB が 4 年目、大量入部組が 3 年であった。

うたごえ運動と歌集「山で唄う歌」の発刊

山班にドイツ語、英語やアルプスの歌、民謡がはいってきた。

この時期の時代背景として 1954〜1960 年にかけて、歌声運動が盛んになり全国に拡がった。歌で世界を平和にと世界中の民謡が紹介され、とくにロシア、東ヨーッロッパ、アルプス、イギリス、アメリカ、その他各国の民謡が歌われた。

一方、茗渓堂から歌集『山で唄う歌 1』が1954年に刊行された。

1954年、佐藤鐵郎OBが「僕らの故郷」を山班に広める。同OBが同期(1956年 農 林産卒)で山岳部員であった渡邊定元氏(後 北大教授演習林長、東大教授)から「僕らの故郷」を教わり山班に広げる。

このことは、今回の聞き取りでわかったことである。前記の歌集『山で唄う歌 1』に載譜されており、合唱となって代々歌い継がれることになった。

同歌集は山愛好家にとって、待ち望んでいたものであった。2年後の1956年に続編『山で唄う歌 2』が発行され、いっそう内容の充実したものになった。この時期1954～1956年(昭和29～31)にかけて茗渓堂歌集の影響か、たくさんの山の歌が復活しだした。山班でも「ぼくらの故郷」に続き、「大尉の遺言」がよく歌われた。ともに二部合唱で。

他に「別れ(Muss i denn)」、「O Vreneli」、「Loch Lomond」、「谷間の灯火」、「樅の木」、「静かな湖畔の」、「Der gute Kamerad」、「Lore lore」、「アルト　ハイデルベルグ」、「むかし　むかし」、「うるわし春よ」、「おお牧場は緑」、「しゃれこうべと大砲」、「森へ行きましょう」など。

ロシア民謡では、「ともしび」、「カチューシャ」、「黒いひとみの」、「バイカル湖のほとり」、「トロイカ」、「小さなぐみの木」、「ジグリー」など。

Wandervogelslied「渡り鳥の歌」の思い出

(以下歌名はWVLと省略する)

茗渓堂から「山で唄う歌 2」が1956年に刊行され、巻末にWVLが掲載された。この唄はドイツ民謡10曲をメドレーにしたもので、ドイツの若者の放浪歌として、人気があったらしく、日本でも山の歌の愛好家のなかでも、歌われていたらしいが、曲が長いのと、詩が方言や訛りがおおく、日本語訳がなかったので、あまり普及はしなかったようである。ただ機会があれば、聞いてみたかったし、覚えてみたいとは思っていた。

偶然にその機会がおとずれた。四年目の冬であった。

HBCラジオが1957年元日に初日の出を手稲山山頂から実況することになった。これはHBCのプロデユーサーであった佐藤英之OB(山班)の企画であった。

前夜(大晦日)から佐藤OB、HBC関係者、在札の山班部員数名が待機し、夜半に小屋を出発し頂上で日の出を待った。

日の出はややうす曇りであったが、予定通り佐藤OBの司会で部員のインタビューを終え完了した。

WVLの話は前夜大晦日からはじまる。

HBCの元旦企画にあわせ、近くにお住まいの西野一彦OB(1946卒)が前夜だけ宿泊合流された。

現役時代に過ごした同年輩の諸氏 古谷暢博OB(1946 農畜)、和田 晴OB(1947 農畜)との合宿や縦走の貴重な体験談をきかせてもらった。

話の間にふと、WVLの唄のことを思い出して、覚えておられるか、又はなにか知る手立てはないものかと伺ったところ、その唄ならレコード(SP盤)をもっているから、それで覚えなさいと気持ちよく了解を頂いた。まったく晴天の霹靂の機会であった。

正午頃に下山し、途中西野先輩宅に伺い(お宅は旧国鉄軽川駅、現JR手稲駅の近く)、レコードを受け取り急いで帰宅した。

4年目であり、1月の2週目からムイネ合宿が一週間、終わったら学部のある函館に戻らなければならない、窮屈な日程のなかでともかく覚えることにした。

家にはたまたま手動式の蓄音機(ヴィクター)があったので、歌集を手元に繰り返し、繰り返し数え切れないほどの練習で、何とか空で歌えるまでになった。歌詞の抄訳を頭にいれながら唄うと、若者の放浪歌にピッタリであった。こ

れでなんとかムイネの合宿に間にあった。

合宿では参加者十数名が就寝まえの時間を練習にあて、なんとかものにした。合宿のあとレコードは当時2年目であった向井成司OB(1959 獣医)らに引き継がれて練習が続けられた。

レコード本体は練習の末、最後はばらばらに砕けてしてしまったようだ。しかし唄はしっかりと部員に歌い継がれたのである。

WVLについて

この唄の復刻について茗渓堂(1956年6月25日)発行『山で唄う歌 2』の編者 朝倉 宏氏が巻末に次のような解説をのせている。

> (前略) 私が東大山岳部に入った時、教わった歌に、ドイツ語の長い、一つ一つの異なった面白い歌があり、一つ一つ良い歌であるばかりでなく、巧みに10曲がつなぎ合わされ、全体としても面白い歌でありました。この歌に興味を持った為、以上の事を調べるとともに、種種の本にばらばらに載っている譜を集め、譜の無いものは採譜して一つの譜に書き、歌詩をしらべ今度の本に収録した訳です。云い遅れましたが、このメドレーは、昔あったワンダーフォーゲルの唄と云う、レコードによるものとの事ですが、現在レコードがないため口伝で教えられたものを元に、上の様にして譜を作りました。(後略)

朝倉氏が採譜した1956年頃には、レコードは無かったようなので、西野先輩が所有されていたのは、まことに貴重な存在であり、まさに幻のように現れ、中身を残して幻のように消えたわけである。あの時のSP盤のラベルには、ベルリン・ヒットラーユウゲント(少年)合唱団とあった。ただし日本語かドイツ語の表示だったか記憶は定かではない。第二次世界大戦前か大戦中の輸入か日本で再録したものか、どちらかであったろう。

レコードからの聞き取りで感じたことは、朝倉氏の採譜した音階・詩文がレコードからながれる唄とは殆どが一致していたことである。むろん民謡などに共通して言えることは、同じ歌でも時代、場所などにより音階や詩が少しづつ変化するのはよくあることで、気の付かないところはあったかもしれない。朝倉氏の説明では10曲中の、2、3、4、5、7番が氏自身の採譜によるとのことである。

ただ一箇所、当初から気になっていた所があった。1番目の歌、8小節目が茗渓堂では歌詩が“Da-rum mein Mä-del、Mä-del、wink、wink、wink!”とあるが、レコードでは少し違う感じがしていた。

後年1993(平成5)年に北大山の会関西支部から発行された『歌集 山の四季』と、2009(平成21)年に北大山とスキーの会から発行された『歌集 山の歌』では“Ei、da-rum wink、mein Ma-del、wink、wink、wink!”となっており、このほうが当時聞いたメロデーと詩が合っている気がする。したがってレコードを主に考えると、音階は茗渓堂、詩は『歌集 山の四季』になるだろうか。

戦中の1941(昭和16)年～戦後1949(昭和24)年頃の山班と唄の関連について、この間の状況については、当時現役と卒業直後であった和田 晴OB(1942予科入学、1947卒)が山とスキーの会会報『こなゆき』の22号(1998)、23号(1999)、24号(2000)にエッセイ「雪山賛歌1・2・3」を執筆されており、当時の山班活動や概要を知ることができる。

戦中・戦後の物資の欠乏、とくに食料の不足は深刻であった。敗戦による打撃は殆ど経済活動を一からの出直しを迫られた。かような厳しい状況のなかで、スキー部の伝統であったニセコ青山合宿、無意根合宿、空沼合宿を一度も絶やすことなく続けられたのは、和田 晴OBをはじめ、西野一彦・古谷暢博両OB(ともに1946卒)の3OBを中心とした部員の活動によって支えられたものである。

上記エッセイ「雪山賛歌3」によれば、1949(昭和24)年3月10日に高松宮・三笠宮両殿下のご希望で、無意根とニセコをご案内することになった。大野精七先生(部長)を筆頭に、OB

として田村誠一、古谷暢博、西野一彦、和田 晴が、学生として水沢和久、高田勝利、森本光彦、田村鉄也、矢野 恒、須藤清二、永野拓也、近藤忠夫、(故)小池 威。計 14 名が同行した。

無意根を踏破し、次いでニセコを滑り終えて青山温泉に戻り、両殿下とともに湯船に浸かっているうちに、三笠宮様から予科の唄　ツンツン節のご所望があった。

僕は予科生一年目　ツンツン
胸に五つの星ボタン　ツンツン

延々と続く楽しい歌声に宮様も唱和されて、浴室にコーラスとなって、響きわたっていった。

また通常の青山合宿・手稲合宿・無意根合宿でも、先輩から歌い継がれてきた唄の数々が、ドイツ語あり、英語あり、日本語あり、知る限りの唄のコーラスとなって、若者たちの口から湧き出てきたものであった。

上記の記述のなかで、山の唄がおりにふれ、頻繁に歌われていたようである。残念ながらどんな唄が歌われていたか知る由もない。

ドイツ語や外国語系の唄が中断したのは、戦中・戦後の激動期にあったこと、昭和二十年代後半に学制改革があり、旧制の中学・予科・大学が新制の中学・高校・大学に変わり、予科が無くなったことなどで部員数が減ったのも、影響したかもしれない。日本語の唄はべつとして、ドイツ語・英語系ではその間も歌われていたようなので、推測するに下記のようではなかったか。

日本語の唄：寮歌系、小唄・音頭系の山唄、など
ドイツ語系：学生歌　「Mussi denn」、「Der gute Kamerad」など
英語系：「峠の我が家」、「谷間の灯火」、「クレメンタイン」、「Loch Lomond」など

前述したように、私が入部した当時は寮歌系、小唄・音頭系の山唄が主だったので、日本語以外の唄は途切れていたのである。

山班に外国の山の唄(ドイツ語、イタリア系、アルプス系など)が復活しはじめた。

これらの唄は、旧制七帝大や旧制高校・旧制私立大学の山岳部で歌い継がれてきた唄である。山班に中断期があったにしても、つぎの事例は、ドイツ語との縁は続いていたと考えられる。

西野一彦 OB が「ワンダーフォーゲルスリート」のレコードを持っておられたこと。

佐藤鐵郎 OB が「僕らの故郷」を、同期同学科で山岳部員の友人から教わったことなど。

また、スキー部から山岳部が派生独立した歴史からみて、山班と山岳部は札幌近郊の山小屋の管理・運営で(手稲・空沼・無意根は山班、ヘルベチャは山岳部)協力関係にあり、ヒュッテンレーベンを通して唄も歌いあったことであろう。

山岳部は早くから山の唄の普及に力をいれ、日本語・ドイツ語・その他　外国語の歌集の編集・発行を行っている。したがい山班の戦前・戦中・戦後の時代に、山岳部から多くの唄が山班に入ってきたことは否定できないであろう。



『北大スキー部部報』2 より

3.7　北大スキー部部歌のこと

相川　正義（1927 医）

北大スキー部歌の由来についてお訊ねがあってから、何はともあれ、作詞に年次でも解ったなら少しは思い出すことも多かろうと、2～3心当りに問い合わせたが、結局判然としない。私は大正 8 年 9 月に北大予科に入学し、昭和 2 年 4 月に北大医学部を卒業したものである。

当時北大には農学部、医学部（大正 10 年新設）、工学部（大正 13 年新設）の 3 学部があった。

私達スキーに熱中したもののありようは、北大文武会スキー部に入学したようなもので、事実我等は北大スキー部卒業生だと豪語していたのである。スキー部卒業生であり、部歌の作詞者でありながら、当時のことどもを正確には想起できぬことに忸怩たるものがあるが、御質問について断片的にお答えして責をふさごうと思う。

作詞の日時と動機について―

大正 15 年は北大創基 50 周年にあたり、同年 4 月には盛大な記念式が挙行されたのだったが、わがスキー部にあっても、同年 6 月頃、北大 50 周年記念事業として

1. テイネパラダイス・ヒュッテ建設
2. スキー部創立 15 周年記念号発刊

を決定し部員の総力を挙げてこの遂行に努力した。

前者パラダイス・ヒュッテは同年 7 月 4 日起工、11 月 2 日に竣工した。

後者の著作は 12 月 10 日刊行された。編集委員は相川正義、伴 素彦、廣田戸七郎、本田治吉、村本金弥、中野誠一、小川玄一、岡村源太郎、山口健児の諸君で、この著作に始めて問題のスキー部歌が掲載されたのである。しかし、部歌製作の過程の記録はない。恐らく、前年の大正 14 年暮の青山スキー合宿、或は大正 15 年の春の合宿のあたりに、スキー部歌の募集があったのだろう。中野誠一先輩か、廣田、岡村源太郎主任から作歌を依頼されたように思う。（図 3-3-3）



図 3-3-3
北大スキー部部歌（北海道帝国大学スキー部創立拾五年記念、1926 より）

また、私は大正 15 年の春休みはスキー部の合宿には参加せず、同級医学生の斉藤昌三君、小野 修君の 3 人で十勝泥流の鉱山小屋に 1 週間泊り込んで、スキーを楽しんだが、当時のスキー部歌の歌詞をしきりに推敲したような記憶がおぼろげながらある。この鉱山小屋はその 1 ヵ月後、気の毒にも、世話してくれた番人、番犬諸共十勝岳爆発の犠牲となったが……。

歌詞の構成について―

その頃、スキーで山登りや山林徘徊をする輩を「山党」と云い、スロープで競技スキー（ジャンプ、滑降・廻転技術、距離競技）を練る輩を「畠党」、或はゲレンデ党と称した。道庁に「破岳会（ハタケ会）」なるスキークラブができたのもこれに由る。

わがスキー部歌にも、こうしたスキーの諸々の分野の醍醐味を盛り込もうと苦心した。

歌詞の解説 1～2～

「巨人（チタン）」？ギリシャ神話中のタイタンのつもりが、句調が悪いのでチタンとした。

「征矢（そや）」「雪崩（ゆきなだれ）」にしても、用法はあやしい。汗顔ものである。

「その頂の樹氷かみ」その頃、雪山歩きで雪をたべるのは禁物と「教程」で教えていたと思う。頂上の樹氷を口でかみしめて、登頂の満足感と渇をいやしたものである。

「シルバー・シャンツェ」札幌の三角山麓、琴似側のシルバー・スロープに作られた本邦初の固定シャンツェで、廣田戸七郎氏の設計。丘の上にやぐら小屋を作り、その屋根から飛び台に、滑り降りる落下式で、私達スキー猛者連の心胆を寒むからしめたもの。大正 13 年の中学ジャンプ大会、第 2 回全道選手権大会から使われ、以後数々の名ジャンパーを生んだ。

スキー部歌その後―

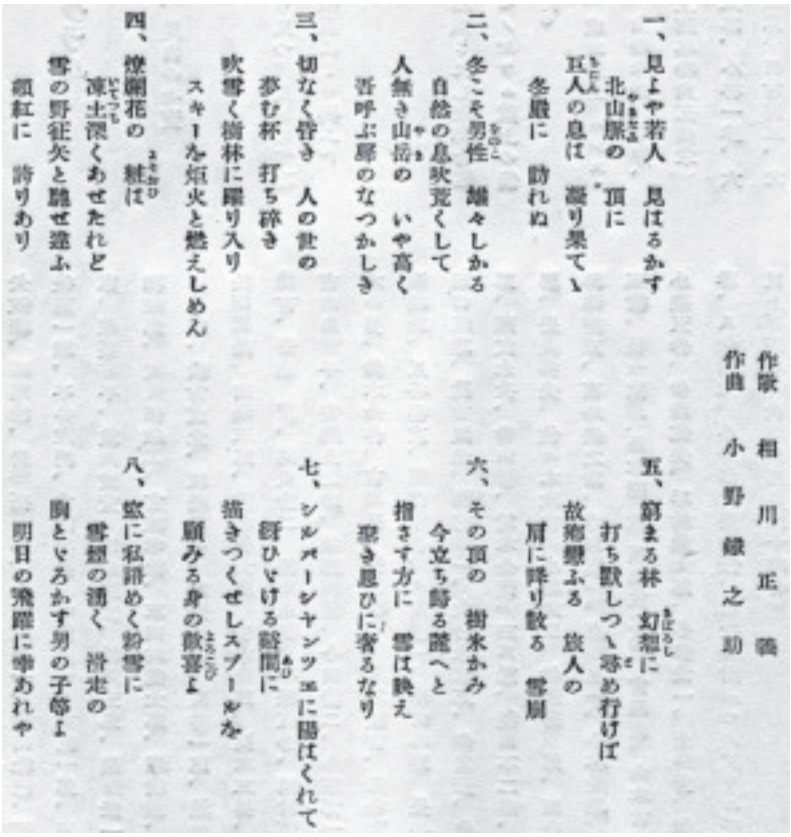
このようにスキー部歌は誰の手に渡したかも解らぬうちに、何時の間にか採用され、作曲されて日の目を見たことになるが、私のひとり合点の苦吟、原文のまま故作曲者も随分お困りだったと思う。何とか、その道の添削を得られたら、もう少しましなものになったろう。

作曲者の小野鉄之助さんは、北大オーケストラの団員であることは当時仄聞したが、私の後輩で岡山に御健在なことは、このたび始めて知ったので面識はない。

部歌採用の賞品に、中野ツバメスキー店から、好きなスキー 1 台持って行け、と当時のスキー部主任に云われてありがたく頂戴した。

絶対音痴の私は、かってこの部歌を歌えたためしはないし、また、歌っておるところを聞いたこともないのである。所詮、この追懐記はオールドブラックジョーの嘆き節にも等しいのである。

（北大 OB スキークラブ会報 第 34 号（1978）より転載）


作歌　相川正義
作曲　小野鉄之助

一、見よや若人　見はるかす
北山脈の　頂に
巨人の息は　凍り果てゝ
冬嶺に　詰れぬ

二、冬こそ男性　雄々しかる
自然の息吹荒くして
人無き山岳の　いや高く
吾呼ぶ扉のなつかしき

三、切なく昏き　人の世の
夢む杯　打ち砕き
吹雪く樹林に躍り入り
スキーを炬火と燃えしめん

四、燦爛花の　紐は
凍土深くあせたれど
雪の野征矢と馳せ遊ぶ
頬紅に　詩りあり

五、募まる林　幻想に
打ち獃しつゝ辿め行けば
故郷懐ふる　旅人の
肩に降り散る　雪扉

六、その頂の　樹氷かみ
今立ち飾る麓へと
指さす方に　雪は映え
聖き息ひに奢るなり

七、シルバーシャンツェに陽はくれて
餅ひらける談間に
描きつくせしスプールを
顧みる身の歓喜よ

八、窓に私語めく粉雪に
雪煙の通く　滑走の
胸とゝろかす男の子等よ
明日の飛躍に帯あれや

図 3-3-4　北大スキー部部歌（北海道帝国大学スキー部創立拾五年記念、1926 より）

■コラム■
50-60 シーズン頃のスキー・山道具

スキー板

細く長く寸胴のクラシックな板だけである。(トップとテールの幅を広げたカービングスキーが普及するのはずっとあとの 2000 年代に入ってからである。ファットスキーなどはさらにそのあと)。冬には 190 センチ(身長+30cm)くらいのものを使用していた。登山の道具としてだけではなく滑降を重視する山スキー部は、いわゆる山用スキーやショートスキーではなくアルペン用のスキー板を使用するのが伝統であった。

シールは貼り付け式は使わず、テールのバンドだけで止めるものを使用していた。サイドのバンドはつけないように特注していた。スキーを外さずに着脱ができる利点を評価していたのである。

昭和 30 年代までは堅い木で作った単板の板であったが良く折れた。昭和 40 年初期には折れにくい合板の板が主流になった。昭和 41 年にヒッコリー合板のスキー板が藤井運動具店で 1 万円した。当時 2 食付きの下宿代が 7~8 千円くらいであった。

登山靴とビンディング

靴は三浦靴店の注文品等から海外製の足首の深く硬いものに移っていった。とはいえ革製のヒモ締めである。プラスチック製登山靴が散見され始めていたが、柔らかくヒモ締めであった。バックル式プラスチック素材の兼用靴はまだ見当たらず、プラスチック製のゲレンデ用スキー靴を流用する試みが部内で行われていた。

ビンディングはカンダハーからジルブレッタへの移行が急速に進んだ。歩行時にかかとがつま先を支点にスムーズに 90 度まで上がるというのは画期的であった。とはいえワイヤー式であることはカンダハーと変わりなかったが、まもなく金属棒によってトゥとヒールをつなぎ、登行時の横ずれや滑降時のぶれのない新型ジルブレッタが登場して部でも採用が始まっている。

ザック

下級生は旧態依然たる特大キスリングを先輩から譲り受けて使い、上級生になると秀岳荘製などの(これも特大サイズの)アタックザックを使用することが多かった。日帰り行動用にはこれも秀岳荘製の、ナイロン袋に背負いひもが付いただけのナップザックを使用しているものが大勢であった。

当時札幌には秀岳荘のほかにはダケカンバという小さな手作り山道具屋しかなく選択肢は限られていた。

テント

帆布、木製ポールのかまぼこ型のもの(「ウィンパー」)がまだ使用されていた。グラスファイバーポールのドーム型のものは 1 組導入されたばかりであった(カモシカ店製「エスパース」)。もっとも多く使われていたのは屋根型ナイロンテントである。いわゆる「夏テン」で底もついていないものも多かったが、積雪期にも使用されていた。樹林限界上では雪洞である。

火器

灯油使用の「スベア」。なべは家庭用の特大アルマイト製鍋を酷使で凸凹にゆがめながらも使用していた。その鍋で作る定番は雑炊である。行動日でも一人当たり朝夕各 140 グラム程度、水で膨らまして満腹感を得るという作戦である。肉は入ったとしてもごくわずか、乾燥野菜はメンバーの自宅のストーブ利用の自作である。典型的昼食はトースト(食パンにマーガリン、ジャム)と魚肉ソーセージ、ピーナツチョコ。

シュラフ(寝袋)と下着

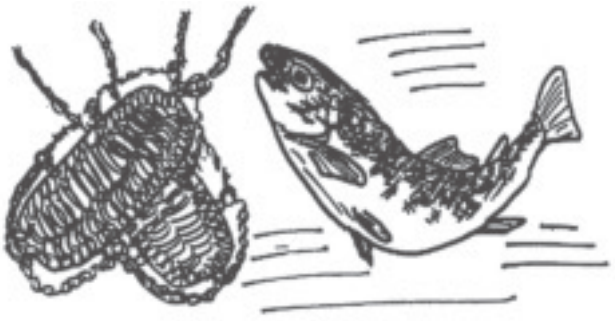
羽毛シュラフは、すでに部内でも普及していたが、ゴアテックスは登場したものの、そのジャンパーを着ているものはまだ稀であった。古くは、朝鮮戦争で使用した米軍払い下げのゴワゴワの羽毛を使っていた。朝起きると羽毛だらけになり、ニワトリ小屋と云われていた。

下着は、自衛隊の払い下げの羊毛製の上下である。または、親父のラクダの下着を拝借している者もいた。

関　英郎(1982 経)

第 4 章

追想、回想、紀行、随想



『むいね』第 14 号より

1　追想

1.1　水谷　寛先生のこと

倉持　寿夫（1965 農 林学）

水谷 寛先生は1958(昭和33)年に北大山スキー部の前身である北大スキー部の副部長として迎えられ、当時のスキー部山班の実質的な顧問教官を務め、山スキー部誕生とともに初代部長に就任された。1977(昭和52)年4月の定年退官まで山スキー部の誕生前を含め18年間の長きにわたってお世話していただいた(**写真4-1-1**)。また並行してそのOB会である北大山とスキーの会初代会長を務められた。

退官後は引き続き山とスキーの会会長を務める傍ら、大滝村(現伊達市大滝)に居住し、ここでは若者の人間形成の場づくりを目指して水谷ロッジを建設、さらにはスキー技術の研究に取り組み、これらを通して大滝村地域の文化を育てるなど、幅広い人脈を持ち精力的にご活躍されていました。しかし、健康を害し残念ながら1994年6月享年80歳で逝去されました。

先生はまさしく北大山スキー部の育ての親～父であり母でありました。その功績を偲び、追悼文「水谷先生との出会い」「水谷先生の思い出」「水谷先生とスキー」をそれぞれ向井成司(1959年 獣医)、阿部孝夫(1962年 理 物理)、在田一則(1965年 理 地鉱)が『北大山とスキーの会会報』第18号(1994)に先生とのかかわりやお人柄を記している。

先生のご逝去の後、間もなくテツ夫人も先生の後を追うようにご逝去された。このことについては会報18号に阿部幹雄(1979工 鉱山)が「水谷　寛・テツ夫妻逝去」として報告している。

先生は、山スキー部の部誌『むいね』や『山とスキーの会会報』(後に『こなゆき』に改名)などを通して多くの著述を遺され、それらは没後有志により『夢、愛、そして語らい　水谷　寛文集』として340ページを超える大冊にまとめられている。そのまえがきで編集委員長阿部孝夫(前出)は“先生の人となりは骨太、頑固、変節なしである。何に対して頑固かというと、「夢」、「愛」、そして「語らい」の三つの言葉にく



写真4-1-1
水谷 寛先生とテツ夫人(1977年5月28日先生の退官記念パーティ、札幌グランドホテルにて)



写真4-1-2
無意根山の“壁”を滑る水谷先生(1975年5月、伊藤健次撮影)

くられると思います。” と記している。

先生は 1977 年 4 月定年退官を迎え、同時に山スキー部部長退任となったが、18 年間の山スキー部誕生と山スキー部の発展を見守ってきた想い、人間教育の理想、スキーに寄せる情熱などを『むいね』『会報』へ寄せられている。以下その一部を紹介する。まさしく「夢」、「愛」、「語らい」についての先生の思いが込められている。

『北大山とスキーの会会報』1976 年度「北大スキー部と私」より

私が北大教官となったのは戦争が終わった直後の昭和二十一年ですから、昭和三十三年に北大山スキー部の前身である北大スキー部のお世話をするようになるまでにはほぼ十二年経っていたわけで、その間に大学の本質について私は私なりに観察して来ました。大学は学問的知識を教えたり、学問を研究するところではあるが、人間を作るところでは無いと思いました。これが十二年間に私が感じて来たことです。それで良いのだろうか、決して良いはずはありません。それを改善するにはどうすれば良いかを考えました。教師と学生とが協力して真剣にそのために努力するより仕方ないと思いました。そして考えたことは、人間作りにふさわしい「場」を作ること。それが最も大切なことであろうということでした。そしてサークル活動の正しい運用こそがその「場」づくりの近道であろうと思いました。(中略)

そんなことを考えているときに私に誘いかけて来たのが向井君だったのです。向井君は私にスキー部の世話をして欲しいと要請して来ました。(中略)

スキー部というサークル活動の場を積極的に人間形成の場として役立てたいという私の願いがその要請を快く受け入れたのかもしれません。

このようにして、私の生涯において最も貴重な歴史の第一ページが記され始めたのでした。私はスキー部を立派なサークル活動をする部として育てるためには何をすべきかを模索し始めました。向井君ら部員ともその方法論を検討しました。私と向井君ら部員との協力関係が形となって現われた最初のものはシルバーロッヂの建設でした。

として、建設後のシルバーロッヂの利用状況について

部員達の人生を語り、社会を論ずる場として役立っているばかりでなく、この北大における学生の手によって運営される唯一の完全自治寮としての誇りをも保持し続けております。(中略)

北大スキー部より北大山スキー部が分離独立したことも私にとっては大きな事件で、当時の北大スキー部には競技班と山班という「主」と「従」の関係を持つ二つの部分があり、「従」である山班の活動には不健全な弊害となっていた。大学における人間形成の必要性とそれを実現する場は健全なサークル活動にありとする考えから、分離独立を喜んで支持し、

その後の躍進する姿を見て

今山スキー部が立派な部として自分の意志でサークル活動を推進し、その成果を上げつつあるのもこの分離独立があったからだ

としてさらに

山スキー部は、山スキーを追求するという点で特殊な活動をする部ではある(中略)サークル活動の場に心のふれ合いを大切にする精神風土があり、出身者の多くはこの精神風土の中で得られた収穫を心の糧として社会に巣立ち充実感を持って社会に羽ばたいている人が多く見られることから我々の敷いた路線は、正しかった。

と確信され、このことから

互いに心のふれ合いを重んずることを、そして人生を語ったり、社会を論じたりする機会をもつことは、どんな若者にとっても大切なことです。そんな機会をもてる人が山スキー部の部員という少数者だけではなく、もっと広い範囲の将来ある若者にも広げられるなら、どんなにか素晴らしいだろうと思います。そしてそれの実現を夢見ました。

それを現実に具体化したものが日高のユートピア牧場の建設だったのです。

しかし、この牧場建設は社会経済の大きな波に見舞われ、先生の意図しない方向に向かってしまいます。このことについては、『むいね』16 号「ユートピア牧場に思うこと」で以下のように述べています。

かつて新冠のユートピア牧場の建設に手を貸したことがありました。ここに若者のための精神運動の原点を作りたかったためです。そこに集まる若者たちに、人間らしい生き方とは何か、を索るための語らいの場を提供したかったのです。牧場は出来るには出来ましたが、建設費が余りにも高額になり過ぎたため金のない若者を受け入れることは不可能になっています。(中略)質素なものでもよいから真の意味での語らいの場を作りたいものです。金はないが豊富な将来をもつ若者たちが自由に集って来て語らいがもてる場こそが真の意味で

の語らいの場でしょう。どんなに小さい場所でもよいからそのような場の創設に努力したいものです。

この思いがやがて大滝村の水谷ロッジ建設へとつながっていく。このロッジについては第3章2.3「水谷(大滝)ロッジの事」を参照下さい。

定年退職にあたって、18年間における部員とのふれあいはもとより、遭難事件、ロッジ建設などを通して山スキー部を外から支えてくれた人々のことを語っています。

『むいね』16号「私の定年」より

私と北大スキー部との関係が生れたのは昭和33年9月からです。この年は故高倉稔君の遭難の年でもあります。それから1年おいた昭和35年8月には山下、山室両君の遭難事件があり、スキー部山班(山スキー部の前身)は相い次ぐ遭難事件にがたがたになりかけました。部員が自分たちの行動に自信を持てなくなってはおしまいです。そのときほど心のより所をそれぞれが強く求めたことは他にはなかったと思います。そんな時代を経て部員たちは生長して行ったわけですが、そのような時期を含んで18年間、ずい分と長いつき合いが、私とスキー部(後には山スキー部となったが)との間に続いたことになります。(中略)この18年間に部員たちと共に味わった哀歓の気持ちは決して忘れ得るものではありません。なおこの間において、人の心の交流を通して味わった歓びは単に部員たちとの間のものだけではありません。

として部員の故高倉稔君の御尊父の高倉奉朔氏、さらに大津有史君の御尊父大津勇氏、ペテガリ中の川で遭難した故山下広君の御尊父の山下六郎氏について、

山スキー部は人間を作るところ、部員たちの心の交流がいかに人間形成に大切であるかを理解され、その交流の場とするシルバーロッジの建設に物心両面で支持・支援を受けた

ことを感謝している(第3章2.1「シルバーロッジ」参照)。さらに、

もう一つ書き誌しておかねばならないのは花野晴治氏御夫妻のことでしょう。同家では一家をあげて部員たちを家族同様に面倒を見て下さいました。そして同家を部員たちの心の交流の場として提供して下さいました。ここで育った友情が部員たちの心の糧となっていま実を結びつつあるのを見るのは嬉しいことです。

さらに以下続けられる。

思い出はその他にも数かぎりなくありますが、山スキー部との関係を一つの生き甲斐とすら考えて過して来た私にとって、その思い出はどれも貴重であって、それを思い浮べるとき感無量です。

として、山スキー部の成長を見守ってきた18年以上という年月を「いろいろなことがあり」「いくつもの遭難事件」「人知れず泣いた」「部の将来」「胸を痛めたことの連続」「部員とともに乗り切ってゆく」「部員それぞれ秀れた才能」「困難を乗り越え」「立派に生長」という言葉の中に「感無量」の気持ちが滲んできます。

退官記念パーティ(1977年5月28日札幌グランドホテル)において、先生の胸中に飛来した思いはやはり遭難のことであったようです。遭難した部員一人ひとりとのかかわりやエピソードを語っています(『むいね』17号「記念パーティ」)。

何よりもご遺族とのつながりを大事にされておられ、このことは、この記念パーティにご遺族から寄せられた多くのねぎらいのメッセージが語っています。

先生の退官に当たっては、現役・OBによって、記念スキー山行が挙行され、『むいね』17号「記念スキー山行」に先生の山スキーへの想いやスキーを通しての幅広い交流がつづられていますが、ここにも先生らしさが偲ばれます。

以下、記します。

昭和52.4.30〜5.3　ニセコ　五色温泉

ニセコ系の山々は、私にとって、北海道のスキーを語るとき、また山スキーを語るとき、忘れることの出来ない山である。

もともと、私がスキーを駆使する本格的な山スキーを始めたのは北海道であるが、それがニセコだったからである。

当時(昭和15年の頃)ニセコでは、何所へ行っても、一日中新雪を滑ることができた。札幌の近くでは、春香山とか手稲山、奥手稲山など新雪を滑れる山はあった。しかし一日中新雪だけを滑れ

るというわけにはゆかないし、防寒装備などもほどほどで、気軽に出かけられたので、山スキーといった感覚が薄かった。しかしニセコはちがった。ニセコへは最も厳重な防寒装備で出かけたものだ。

ニセコに行くときは、昆布温泉か山田温泉に泊るか国鉄山の家に泊ることが多かった。寒い朝など、ツァーに出かけるとき、宿の主人が防寒具は十分かとか、靴は大丈夫かと注意を与えたり、または顔などへ熊の油を塗ってくれたりしたものだった。

そんな厳しさが、新雪を滑ることの外に付け加わっていることが、ニセコでのスキーを本格的な山スキーと思わせたのかもしれない。

私は、そんな山スキーが好きで、太平洋戦争中、北海道を離れた数年を除いては、毎年何回かニセコを訪れたものだった。

ニセコを訪れるようになって、何人かの友を得た。ニセコそのもので知り得た友もいれば、ニセコで顔を合わせたことはないが、ニセコが共通の話題となるような友もいた。そんな友の中には、何か一ツのものを見つめるような心をもっている人が何人かいた。そんな友は心が純粋だった。(中略)

そんな友を見ていると、一度しかない人生はこのように真剣に生きるべきだという、貴重な人生の生き方の見本を見る思いがして、爽やかだった。

山スキーの良さというものは、これは登山でも同じことだが、人里を離れて、人の心が生れたままの純粋さをとり戻すことであろう。そんな心でものを見つめたり、語り合って得られる結論は、利害に汚されなく、清らかに澄んでいて、人生を歩むための、貴重な心の糧にもなり得るのだろう。このような精神的な収穫の得られる山スキーを、私に意識させてくれた一つの山がニセコだったといえよう。

そんな思い出のあるニセコで、私のための記念スキー山行を行おう、という現役の言葉に、私としては否応のあるはずもなく、スケジュールは推進役の部員に任せることにした。

ここで先生は合宿に参加するOBについて裏 悦次(1965 農 畜産)、大野陸郎(1964 農 農学)、井上利昭(1966 工 機)、岡田卓也(1960 理 物理)、高橋邦臣(1957 教 教)の名を挙げて再会の喜びを期待し、高橋とともに参加したその友人の白井氏について「高橋君と私の共通の、山好きな友で、特別参加の1人である。」と交流の広さが伺われ、さらに

この他に毛色の変った特別参加者が1人いる。石油コンビナートで技術を担当している、曽我君という私の友人である。昭和44年4月に始まった北大の学園粉争の当時、全共闘とかなり共通した思想をもって、われわれ教官に対し辛らつな論陣を張る学生がいた。(中略)逃げもかくれもしないで対応しているうち、お互いに、何か妙なところで認め合ったとでもいうのか私の前に折りにふれて姿を見せ、それが大学を卒業して社会人になってからも続いている(中略)曽我君も1人で今回(中略)鹿嶋(鹿嶋臨海工業地帯)からフォルクスワーゲンで馳せ参じてくれた。

曽我君は私がスキーの手ほどきをした人である。私がかつて「スキーは楽しいものだ」

というと、彼は「楽しさと面白さとはちがう。楽しいだけではやる価値はない。何が面白くてやるのか」と逆に質問されてしまった。

「スキーは完成されていない。現に近代スキーはオーストリアスキー術で幕開けとなったが、その後フランススキー術で修正され、アバルマン技法が入って来た。それがこの頃では、ウムシュタイグ(踏みかえ)加速の技術とか、ステンマルク流の加速回転の技法などで大変革をうけている。滑り方の論理を究明し、さらにより進んだターン技法を求める余地がスキー術にはある。それこそスキーの最大の興味でなくて何だろう』というと、曽我君は、それなら自分もやろう、ということになった。(中略)

もう1人変ったのがいる。東京から参加した、山とスキーの会の岡田卓也君である。この人は何事も研究熱心で有名な人である。この人ほど、スキーの上達の速かった人は珍しい。今は上手だが学生の頃は不思議なほど下手だった。

小樽の天狗山に一緒に出かけたことが数回あった。始めて一緒に滑ったときはほんとうに下手だった。そのとき

「スキーは片足づつで滑るものだ。ターンは片足だけで処理しなくてはいけない」

と一言注意した。1週間くらいして、また一緒に滑ってみると、もう片足ターンが出来ていた。そこでまた

「ターンはエッジを立てて、そのエッジに乗って行わねばいけない」

といった。当時はオーストリアスキー術の華やかだった頃で、ターンはスキーの横滑りで行ない、シュープールは巾広いのが普通だとされていた頃だったが、私はあえてエッジを使った横滑りの少ないシヤープなターンをすすめたわけだ。それは上手い選手たちの滑りを見ているとエッジに乗った横滑りの少ないターンがよく見られるし、さらにターンの終了時にはエッジが効いているのが理想的だから、速やかにターンを終えるためには、ターンの始めからエッジに乗っている方が有利だと考えたわけである。

岡田君はこれも1週間くらいでマスターしてしまった。そんなわけで、1シーズンのうちに、私より下手な状態から私よりも上手な状態に変身し

てしまったのだ。

当時はまだマイカー時代でなく、天狗山へは鉄道やバスで出かけたはずで、スキー技術の研究と実践、スキーを通しての人づくりの熱心な姿が彷彿されます。

> このスキー山行には50名以上の参加者があった。天気は余り良くはなかったが、大変楽しかった。(中略)こんなうれしい思い出をみんなで作って下さったことは、私にとっては何ものにも勝る貴重なプレゼントだと涙の出るほどの大感激であった。

と記されている。

『むいね』17号で、佐々木右治(4年目)が、「水谷先生退官記念山行　ニセコツァーより」を報告しているが、特に最終日2日目の晩、宴たけなわとなった時先生が「それでは歌を用意してきたので一曲歌いたいと思います」と立ち上がり、宴を締めくくった様子を伝えている。

最後に前記遺稿集『夢、愛、そして語らい』に、ご長女木村真理子さんが寄せられた「父の思い出」では、家庭での父としてのお姿が、山スキー部部長・大学教授として我々が接していた姿とクロスして、意外ではあるが何か納得できる先生を楽しく拝見することができる。

水谷8ミリ映画について

先生は、山スキー部の諸合宿や山行はもとより、OB会のスキーや山行に積極的に参加され、必ず愛機の8mmカメラ携えて映画を撮影されていました(**写真4-1-3**)。編集されたフィルムは“水谷プロ”と称され、総会時等での映写会は大きな楽しみであった。これらは先生がスキー部山班と関わった1958年から水谷ロッジ建設の1977年まで20年に及ぶ山スキー部の歴史をとらえた貴重な映像であり、“水谷先生8ミリフィルムを保存する会”(2005年発足)の有志によって、また全国のOBから100万円を超える支援を得てDVD11枚に収録して関係者に配布されている。この“水谷プロ”とは如何なるものかはDVDをじっくり観ていただきたい。パラダイスヒュッテにDVDと再生設備があります。また、別稿の「水谷先生とスキーの思い出」中井 強(1969工 金属)では撮影現場の様子が彷彿とします。

水谷　寛先生　略歴

1913年　広島県広島市にて出生
1931年　長野県立松本中学校卒業
1940年　東京物理学校卒業、北海道帝国大学理学部入学
1942年　理化学研究所勤務
1945年　テツ夫人と結婚
1949年　北大理学部助教授
1957年　理学博士
1958年　スキー部副部長就任
1960年　ペテガリ岳中の川遭難
1961年　ペテガリ追悼登山、シルバーロッジ竣工
1964年　北大スキー部が山スキー部と競技スキー部として分離独立、初代山スキー部部長就任、理学部教授
1967年　ペテガリ追悼登山
1968年　ユートピア牧場開設
1972年　旭岳盤の沢雪崩遭難
1973年　ユートピアロッジ竣工
1975年　全日本スキー連盟名誉指導員
1977年　北海道大学を退官し、同大学名誉教授となる。山スキー部長退任
1977年　大滝村水谷ロッジ竣工
1986年　叙勲(勲三等瑞宝章)
1991年　山とスキーの会会長退任(名誉会長)
1994年　逝去(享年80歳)



写真4-1-3
愛用の8mmカメラを廻す水谷先生

1.2　水谷先生とスキーの思い出

中井　強（1972 工 金属）

大滑降

1969 年 3 月　L 梅 沢　俊(4)　SL 油 田 厚 生(2)　水谷先生　飯田 修(2)　嶋津 隆(1)　青木康明(1)　池田精寿(1)　岩井利夫(1)　中井 強(1)　以上 9 名は 4 日朝湧駒別を出発し、ピウケナイ沢に入る。鋸岳下に雪洞を掘り中に夏天を張り BC とした。

翌日快晴。鋸岳と比布のコルから撮影をしながらリクマンベツ沢を滑る。広い沢の下から比布岳を見上げると直下から素晴らしい斜面が広がっていた。あの斜面を滑りたいと梅沢さんに申し出ると許可が下りた。水谷先生は真下で 8 ミリを構え、皆はまずコルに向かった。梅沢さんはコルでカメラを構え、他の者は比布岳を目指した。

比布岳頂上直下から下を見ると、先生が豆粒のように見える。滑り出す。ガレ場を抜け大斜面に入る。ぐんぐんスピードが増し、大きくターンする。ヒッコリー合板スキーの先端が大きくしなる。スピードに耐えながら数回ターンをしてようやく斜度が緩くなった。標高差 300m 余りを 5~6 ターンで滑る大滑降だった。

この時の一巻は水谷先生の傑作の一つとなり、その後シルバーロッジで集会がある度に上映された。（水谷 8 ミリフィルム選集 7-2　輝く太陽と雪、大雪山）

翌年 3 月、再度リクマンのような映像を撮ろうということで、水谷先生、梅沢 俊さん、下岡健蔵さん、中井らは積丹岳を目指した。

頂上直下にテントを張り、翌日撮影をしながら積丹の斜面を何度も滑った。上部は海風のせいか締まった重い雪で曲げるのに苦労し直線的な滑りになる。下の方は深雪で、急な雪質の変化に対応できず何度も転倒した。それでも水谷先生のカメラワークと巧みな編集によって、なかなか迫力のある一巻が出来上がった。（水谷 8 ミリフィルム選集 8-1　積丹岳冬、海の見える山スキー）

スキー技術

私の入部当時主任の下岡健蔵さんは、山スキー部独自のスキー技術を確立することに取り組んでいた。水谷先生の「スキーの物理学」(『むいね』3 号)にある『無減速回転論』を実際の滑りに応用しようとしていた。必然的に私もそれに取り組むようになった。

無減速回転は、回転の時スキーに強い力を加え、テールのズレ無くスキーのたわみとサイドカーブの弧に沿って滑ることで成される。実際の滑りは、深く膝を曲げた状態から強く膝を伸ばして回転する、いわゆる「抱え込み蹴り出し」だった。何度も繰り返し練習したが、強く蹴り出すことでテールのズレの方が大きくなり理想には程遠い状態だった。

そんな時、元三浦雄一郎スノードルフィンチームにいた佐々木卓氏と出会った。一緒に滑るようになり、彼の卓越したスキー技術から貴重な学びを得ることが出来た。ターンの時横に蹴り出すだけではなく、同時に前方にエッジを雪面に切り込む動作がポイントだった。そしてこの滑りはスピードが必要な高速ターン技術であり、また今では普通にあるハイバックのスキー靴が必要であることも分かった。（水谷 8 ミリフィルム選集 8-8　サマースキー、大雪高原温泉）

その頃、オーストリアスキー学校では、伸身抜重・屈伸荷重とは逆のコブの頂点で膝を深く抱え込み凹部で伸ばす滑り、ベーレン(波)テクニックを発表した。今のモーグルの原型だ。

またフランス、グルノーブル大学のジョルジュ・ジュベールは、ジャン・クロード・キリーやパトリュック・リュッセルらトップレー

サーの滑りを解析し、アバルマンテクニックを提唱した。アバルマンは抱え込みから切り込み動作でターンをする技術で、水谷理論の実践版ともいうべきものだった。著書『革新フランススキーテクニック』は当時私のスキー技術のバイブルだった。

世界の動向を知り、我々の進むべき方向性は間違っていないと確信し、むしろ最先端を行っていると意を強くした。

両足のスキーを自由に使えるようにワイドスタンスで立つ。ターンの最後に谷足で蹴るようにして抱え込み、エッジを切替え山足内エッジから雪面に切り込むように入る。ズレの少ない細いシュプールで鋭く曲がる。ステップターンの感覚だ。

深雪ではスキーを引き上げるように抱え込み、雪面近くに浮いてきたところで切り替え蹴りこむ。スキーは沈みながらターンし、曲がり終え再び浮き上がろうとするところで抱え込む。上体は固定し、下半身が振り子のように左右に振れる感じで滑走する。

圧雪された斜面での左右 2 次元方向の動き。さらに上下 3 次元方向の動きを加えた深雪の滑り。いずれも基本的な技術は同じだ。いろいろな斜面・雪質に対応可能な水谷スキー術、山スキー部独自のスキー技術の完成形だった。

最近では、カービングスキーやファットスキーの出現で、これらのことが容易に出来るようになってきている。時代は変わった。

無意根の壁

リクマンに始まり、水谷先生とはその後無意根や大雪に何度もご一緒し、多くの映像を残した。その中でも OB になってからのゴールデンウイークの無意根山は特に印象深い。

薄別から先生の荷物とスキーを背負い、現役が合宿をしている無意根小屋へ二人で登った。そして翌日は全員でピークに行き、そのあとは撮影会だ。

今のビデオカメラは、天候や光の方向に関係なく美しい色彩の映像が撮れる。しかし当時の 8 ミリは、ベタ光（順光）で撮るとモノトーンの迫力のない映像になってしまう。そのため先生はスキーの滑降シーンを撮る時は、必ず逆光で撮影した。

銀盤のように輝く斜面。スキーヤーはシルエットになり黒いシュプールを残す。雪煙は太陽の光を反射してダイヤモンドの如くきらめく。そんな絶好の撮影ポイントがゴールデンウイークの無意根の壁だった。

壁の上に立つ。太陽を背に、自分の影が真っ直ぐにカメラを構える先生を指す位置をスタート地点にする。先生の合図で滑り出す。雪庇を軽く飛び斜面に入る。同じリズムでシュプールを刻み、真っ直ぐカメラに向って滑る。最後に先生を巻いて下で止まる。そしてスキーを脱ぎ、担いで登り出す。

何本か滑って立ち止まっていると、先生から声がかかる。「中井君、もう一本」あるいは、先生も遠慮したのか斜面を見上げながら「こっちの光線具合がいいなあ」と、つぶやく。いずれにしてもすぐさま登り出す。撮影は、斜面に射す日が陰るまで続けられた。

太陽を背負って滑る。滑った本数だけ登った。

「スターはつらいよ」などと冗談を言いながら、目いっぱいスキーを楽しんだあの頃を振り返ると、それは正に若さの為せる業だったと思う。（水谷 8 ミリフィルム選集 9-4　斜面に描く曲線の詩、9-6 ムイネ GW 合宿）

物理学に根ざした確固たるスキー理論と技術、そして映像。素晴らしい宝物を残してくれた水谷先生に感謝し、筆を置く。

（2016 年 5 月）

1.3　吉岡義彦先生の思い出

吉田　美樹（1984 理 地鉱）

吉岡先生のことを回想すると、GW の無意根やサマースキーの旭岳に御一緒していただき、ザラメ雪の斜面を共に飛ばしたこと、先生の真似をして参加したフルマラソンで42.195km を競いあったこと、新雪の手稲ハイランドに行くたびに北壁を舞い降りる先生に出会ったことなど、私が現役から若手 OB の時代に先生と共に過ごしたエキサイティングな思い出の数々が脳裏によみがえってくる。



写真 4-1-4　吉岡義彦先生

1982 年 6 月、吉岡先生は山スキー部部長に就任された。当時私は 3 年目で幹部になったばかりであり、はじめて先生が例会に来られるというので緊張した面持ちで先生を部室に迎えた。先生は穏やかで物腰の柔らかい紳士でありながらも、その内側には若者と同じ種類の情熱が燃えていたのであろうか、妙に親近感を覚えながらお話をうかがったことを記憶している。

先生の部長就任と前後して、山スキー部はプレハブの部室から現在の新サークル会館への引っ越しをし、また、木造の旧恵迪寮が鉄筋コンクリート 5 階建の現恵迪寮に変わるというようなことが続き、学生の自主性を重んじるという教育から管理する教育への変化を実感させられる時代であった。私が入部した頃の山スキー部員は長髪に山ジャンに長靴といったスタイルの者が多く、キャンパスを歩く一般の学生の中にも似たり寄ったりの出で立ちの者が結構おり、精神面においてもバンカラといった気風がまだ少し残っていたが、それも見る見るうちに色あせていくように感じた。日本経済はバブル景気の前の安定成長期で、学生も少しずつ豊かになってきた時代であった。学内に学生の所有する自動車が増えだしたのはその頃で、山スキー部にも多分に漏れずモータリゼーションの波が押し寄せ、それまでは専らバスや列車を利用して山行に臨んでいたのが、パーティごとに自動車で出かけることが多くなった。部員の服装も少しずつこざっぱりしたものに変わっていった。

山スキー部は、活動地域の拡大や底力からのレベルアップなどの活動目標を掲げ、年間 100 日に及ぶ山行スケジュールをこなしていた。学業を犠牲（？）にしてまで山スキーに打ち込む者も多く、レベルの高い活動を模索していた。とくに厳冬期の中部日高や中部・南日高の沢において積極的に新たな山域に挑戦し、そこそこの成果をおさめていた。

また、スキー技術の向上という課題が掲げられ、手稲ハイランドや藻岩山のスキーシーズン券を購入し、ゲレンデに何十回も通ってスキー練習をすることが盛んになった。このことが、部長に就任する以前からゲレンデに通われていた先生と現役が交流の機会を頻繁に持つことにつながっていった。

一方、小屋祭りやサマースキーにおける山での宴会も大いに盛り上がっていた時期であった。たとえば、4 月の無意根山における新人歓迎の山行や小屋祭りでは、6：00 p.m. の開宴とともにドンブリに並々とつがれた焼酎を飲み干してから自己紹介と芸を披露する儀式が行われた。0：00 a.m. のエッセン解放まで生き残っている者のみに夕食のカレーライスを食することが許され、“カレーを食った”というの

はひとつのステイタスであった。当時はこれが山スキー部創設以来の伝統であると思っていたが、OBになってから色々聞いた話を総合してみると、こういう形式は私の入部前の10年以内に慣例化したものらしいことが判明した。

ドンチャン騒ぎもやっていたが、普段は厳粛な気持ちで山に臨んでいたためか、それともたまたま運が良かったのか、先生の部長就任から私の卒部までの時期に大きな事故は起こらなかった。しかし、部員同士の車が衝突したとか、酔っぱらって大通公園の噴水で泳いだとか、街での失敗談には事欠かず、先生には相当精神的負担をおかけしていたのではと後悔はしているものの、今となっては若気のいたりということで許していただくしかない。

先生との思い出でもっとも印象深いのは、私がOB1年目(1984年)のときに先生と共に参加した第1回豊頃サーモンマラソンのことだ。多分この大会はもうなくなっていると思う。参加人数は300人くらいだったろうか。わたしはその2カ月前に参加した千歳マラソンでまあまあの好タイムを出し、吉岡先生より順位が良かったことに気をよくし、この大会にも出場してみることにした。レースでは、2回目のフルマラソンということで少し自分の実力を過信したのか前半に飛ばし過ぎ、30km付近で腹痛を起こしてしまい、とぼとぼと歩く羽目に陥った。そこに後ろから来られた先生が軽快な走りで通りかかり、あまり無理をしないようにと2、3アドバイスを残されると、秋の十勝平野を1直線に横切る道の彼方に消えていった。その後、少し腹痛の回復した私は、沿道で声援を送る農家のおばちゃん達にひきつった微笑みを返しながら、なんとかゴールまでたどり着いた。先生は25位ぐらい、私は49位だった。タイムは先生が3時間10分前後、私が3時間25分位だったか。50位以内の者にあたる賞品の生鮭1本をかかえての帰路、札幌に向かう特急列車の中でお互いの健闘を讃えながら飲んだ缶ビールと、レースに備えてやめていたのを、先生にもらって一服したハイライトの味は忘れられない。

それから10年、1994(平成6)年の山とスキーの会忘年会に向かう地下鉄車両のなかでバッタリ先生にお会いした。私は仕事の関係で2年ほど東京におり、札幌に戻ってきたのと入れ違いに、先生はドイツに留学されたので、数年振りの再会だった。先生は開口一番こう言われた。「吉田君、久しぶり。マラソンのほうの調子はどうだい。僕はコンスタントに3時間を切るタイムが出るようになったよ」。私のほうはたった1年、先生と一緒に参加した2回のフルマラソン以来、パッタリと走るのはやめており、せいぜい気分転換に週末のスキーを楽しむ程度だったので、その旨告げたところ先生は少し残念そうな表情をしておられた。その冬も何度か手稲ハイランドでお目にかかったが、継続的にトレーニングを積んでおられた先生の滑りは以前にも増してパワフルであり、また円熟味を加えておられたように思う。そして、先生は亡くなる直前まで、トライアスロン、マラソン、スキー等、部長時代にも増して挑戦を続けておられた。また、自らを鍛えるだけではなく、手稲ハイランドにおける現役の指導にも情熱を注ぎ続けられた。

自分が走らなくなり、滑らなくなったことは、理由はどうあれ堕落したということなのだろうか、一方、先生は走り続け、滑り続けることで何を探しておられたのだろうか、と考えてみたりもするが答えは見つからない。ただひとつ確かなのは、先生が部長として、ランナーとして、山スキーヤーとして私達に示された、つねに穏やかに、柔らかく、そして雄々しく自己に立ち向かうという姿を、いつまでも胸に深く刻みこんでおきたいということだ。

(『北大山とスキーの会会報』
第21号(1997)より転載)

1.4　吉岡先生のこと

石川　正敬（1988 工 合成）

とにかく行動的でパワフル、それでいてそれを誇示する事は決して無く常に紳士だった。部員を並べてお説教をするという事はなかったので、改まって何かを教わったという記憶は無いが、一緒になって活動される姿を見て色々と学べた事は当時の部員の大きな財産になっているのではないだろうか。

印象的な事が 2 つある。一つ目は何でも勇気をもって元気よく、そして楽しくやるということだ。無意根や手稲ハイランドでご一緒するたび、新人だった我々にいつもアドバイスくださるのは“パワー”という言葉だ。調子の良い時は“パワーが入ってるねー”と自分の事の様に喜んでくださり、スランプに陥ると“○○君、パワーだよ”と激励された。そもそも水谷先生の「スキーの物理学」を信奉する理論派であり、自らがそのパワースキーの実践者なのだから、もう少し具体的に指導する事は容易だったと思う。“パワー”という一言で代弁されていた理由は、細かな技術に固執し過ぎる事なくそれよりも「もっと勇気と自信をもって楽しく滑れ」という事だったんだと僕なりに解釈している。実際、先生の言葉にはそういうあたたかい響きが感じられた。うまく滑れずに悩んでいる部員を見つけては“パワーだよ”と声をかけてくださる。先生の楽しく滑っている姿を見ると、自分が悩んだり落ち込んだりすることはつくづくつまらない事だと実感させられた。

先生と初めてお会いしたのは僕が入学した日、クラスの担任教官としてだった。といっても担任教官として直接指導いただいた事はその日以降はなかった。二度目は GW 合宿初日の小屋のストーブ前だ。僕の伯父、石川信義が同じ東大スキー山岳部出身だという事をこの時知った。札幌を離れ何年もたってから突然先生から“頼みがある”と電話をいただいたのはそんなご縁があったからだ。東大スキー山岳部の親睦会に先生と伯父の代理で出席してほしいということだった。人見知りの激しい性格上僕に代理が務まる自信もなかったが、恩師の昔の山仲間を見てみたい気持ちもあってその会合に出席させていただいた。

出席者は 10 人にも満たず、年配の人ばかり目立ったが山とスキーへの情熱を熱心に語る姿は迫力満点で、圧倒された。この機会は僕にとって非常に刺激となったし、先生の現役時代の様子が何となく解った様な気がした。

そういえば伯父に札幌までスキーに行った話を聞いた事がある。数人で東京から鈍行列車に乗り込み、まず青森の OB に名簿を頼りに打電し、面識もないその先輩から握り飯を差し入れてもらい、とにかく苦労して恵迪寮に転がり込んだそうだ。先生と伯父では多少は年代に差があるが、当時の環境でスキーに行くのは東京の学生にとって時間的・経済的に大変だった事は先生も変わらなかったと思う。当然、北大スキー部員との技術の差はあったろうが、精神面ではむしろ充実していたのではないかと考えさせられた。

電話一本で“頼みがある”という言葉だったが逆に“がんばれよ”と言われた気がしてならない。残念乍ら、これが最後にお話した機会となってしまった。

吉岡先生は、本当にスキーを始めたのは四十を過ぎてからだと言っていた。四十を過ぎて水谷理論に巡り合えたということだ。先生から学んだもう一つの事は、人何かを始めるのに遅いということは無いということだ。

（『北大山とスキーの会会報』
第 21 号（1997）より転載）

吉岡　義彦先生　略歴

1943年8月　北アルプスの西の登山口である岐阜県吉城郡上宝村（現在の高山市上宝町）に生まれる。
1950年4月　上宝村立第一小学校入学。入学後バイオリンの稽古を始める。
1956年4月　上宝村立第一中学校入学。3年生から岐阜市立長良中学校へ転校。
1959年4月　県立岐阜高校入学。山岳部に入部し、本格的な登山を開始。
1962年3月　県立岐阜高校卒業。京都大学学士山岳会に憧れ、京大を受験するも敗退。
1964年4月　東京大学文科Ⅲ類に入学、同時に東京大学スキー山岳部に入部。
1969年3月　駒場2年、本郷3年を経て、独文科を卒業し、大学院へ進学。
1971年3月～5月　東大山の会のチューレンヒマール（7371m、ネパール）遠征に参加。先発隊長としてカトマンズで、物資と隊員の輸送確保に奔走。
1973年2月　大内静江さんと結婚。
1975年4月　北海道大学教養部ドイツ語学科に助教授として赴任。他大学の道もあったが、スキーができる北大を選択。北海道で登山以外のスポーツの世界に目覚め、スキー・マラソン・トライアスロンを始める。
1982年6月　北大山スキー部部長に就任。独自の山スキー理論と指導法で手稲山で部員を指導。
1986年8月　ペテガリ岳ペテガリ沢で滑落事故。
1987年4月　同部長退任
1993年9月～1994年8月　文部省在外研究員としてドイツ　ミュンヘン大学に滞在。
いったん帰国後1995年秋まで同大学で日本語および日本文化の講座を担当。
1997年1月26日　急性心筋梗塞で逝去（享年53）

（吉岡義彦君追悼文集『遠き国よりはるばると』TUSAC有志、1998年1月を参考に作成）

1.5　故小池宏二君を偲んで

野原　悠久（1966 農 林産）

我々昭和41年卒部グループの中心にいた「小池」が亡くなって早くも1年が過ぎてしまった。先日、鳴海さんと江幡と三人で小池宅を訪ね一周忌のお参りをさせていただき、奥様ともお話したが、こんなに早く、こんな結果になるとは予想も出来ず、本当に早すぎた逝去で残念で残念で何と言って良いかのか言葉も出てこない。心からご冥福をお祈り申し上げる。

思い返せば、スキー部山班に入部、最初はパラダイスの歓迎合宿、続いてゴールデンウイークのムイネ合宿と一緒だったと思うが、彼についての印象はあまりはっきりとはしていない。



写真4-1-5　小池宏二君

個人的には、パラダイスで「ヤンカラ」なるものを初めて飲まされたこと、ムイネ西壁で転倒骨

折したこと、谷口合宿主任の「起きろ！」の号令のことなどは覚えているが・・・・

彼のことをはっきりと認識したのは12月のニセコ合宿の時だ。

佐藤亮一リーダーのもと、小池、射場本、野原と4人のパーティでチセ、ニト、イワオ、アンヌプリ等を滑った。私は春に骨折したこともあり、また夏山は嫌いだとかウルシにかぶれるとか我が儘なことばかり口走り、トレーニングもロクにしない怠慢部員だったので、リーダーについて行くのが精一杯だったが彼の滑りは最初から悪雪に強く確実で華麗なものだった。その後の大野陸郎リーダー(故人)と共に三月の暑寒別、また初めての雪洞を経験した砥石山等彼と共にした山行のことを思い出す。

2年目のゴールデンウイークには、ピウケナイ沢で小野堅太郎リーダーと在田さん、江幡、小池、落合、野原のメンバーで北鎮、比布、熊岳、旭岳等を楽しんで滑った。この時、テントでムイネ小唄が出来上がったと思う。確か「チベトン沢」の命名もこの時ではなかったかと・・・

3年目の冬には表から裏(今は東大雪というらしいが)への縦走があり、彼は最も重要なサポートⅢで大活躍であった。また、ムイネ小屋での何かの合宿の時、彼が「雪の降る町を」を唱い、以降この歌が山スキー部愛唱歌に加わった。

彼が山スキー部第53シーズン主任に選ばれた時のこともはっきり思い出す。珍しく少し得意そうな顔で「実は今度、主任に決まった。野原は記録とムイネ編集で協力してくれ」と言われた。

その後の経緯を思えば、彼が最適任者であり、彼しかいなかったということになるのだが、当時は有力な部員も沢山いたので、上級生は誰を選ぶかで苦労したのかもしれない。彼も選ばれて嬉しかったのだと思う。

彼は主任として部の運営、1、2年目の指導、更には私のようなあまり活動に熱心とはいえない同期の一部の者への指導、また、私としては最も大変と思っていたOBとの折衝等大活躍で大忙し、たぶん本分である薬学の授業にはあまり出席出来なかったのではないかとさえ思っている。学生の期間は「山スキー部」中心だった彼も卒業と同時に「塩野義製薬」に入社、札幌で勤務を始めることとなった。

彼は北海道支店長まで昇りつめたが、勤務地を北海道に限定しなければ、本社等でもっと高い地位を得られた筈だと思う。山とスキーの会のため、パラダイスの再建のため道内勤務にこだわっていたのかも・・・と推測している。

私事になるが、私が無職となり、ぶらぶらしている頃、彼の自宅(苗穂の実家)を訪ねて愚痴をこぼしたところ、「そんなことでどうする、早く仕事を見つけろ！」と一喝され、思い直して就職を決めた。私にとって、その職場がその後39年余勤めることとなった「電子開発学園」であった。

彼が釧路勤務の頃にも大変お世話になった。私が高校廻り(学生募集のため)で出張の折何度もごちそうになった。その上時にはカニ、サンマ等を「おみやげ」としていただいたことまで。

忘れてならないのは、私の結婚祝賀会の発起人代表を務めていただいたことである。彼の配慮により、山とスキーの会の方々にも大変お世話になり、盛大に身に余る祝賀会を催していただいた。このように「小池」は、私にとって同期とはいえ全く頼れる「兄貴」そのものであった。

パラダイス再建の時期、高校廻りの出張に明け暮れ、会合にも顔を出さずに何の協力もできなかった私を「かんばの会」に誘ってくれたのも彼だった。卒業30？年の同期の会をパラダイスで開くことを計画し、実行したのも彼、札幌に誰かが来て集まりがあるとき声をかけてくれるのもいつも彼、場所を選び段取りをしてくれる彼がいなくなったことをつくづく感じさせられたこの一年であった。

一昨年2月、彼からの誘いの電話でパラダイスに2泊し、ニセコ合宿帰りの皆さんとハイランドで一緒に滑ったのが、彼とのスキーの最後

となってしまった。

スキー用具一式も揃え、私の知るところ三度目の新築も終え、仕事にも区切りをつけ遅まきながら、渓流釣り、山とスキー等々、趣味三昧の生活を期待していた時期だったと思うのに、まもなく「実は健康診断で引っかかってしまって」との言葉を聞いたのは、6月の終りであった。悪性のものでなければ良いが・・・と思っていたのだが、8月の終りに手術することになったと聞き、手術で回復するものと信じきっていたが、病状よろしくないとの話を正月過ぎて聞くこととなり、2月28日、奥様からご逝去のお電話を頂くこととなってしまった。

本当にこれから少なくとも10年ぐらいは楽しんでもらいたかった、一緒に楽しみたかったと思うと痛恨のあまり言葉もない。いつも世話になりっぱなしだったのに、先に逝かれてしまいどうしたら良いのか途方にくれているところである。人間逝かぬ人はなく私を含め仲間たちも皆いずれは「小池」のところに集まるのだから、少し早過ぎたけど、もう少し待っていてくれ、と思っている此の頃である。

最後にもう一度謹んで哀悼の意を表し、心からご冥福をお祈り申し上げます。

（『こなゆき』第36号（2013）より転載）

1.6　横山雄司君追悼

田上　省一（1968 農 林学）

君との最初の出会は秋の小屋祭だった。俺達の学年は最初から入部した者は少なく、半分ぐらいは秋の入部者で、君もそのうちの一人だった。控え目な性格だったし十一月の旭岳初滑りで足を折り、肝心のシーズンに活動が出来なかったという事もあり1年目の時の思い出といっても殆んど記憶にない。

一諸に山らしい山へ行ったのは2年目の日高が初めてだと思えその後も何度か色々な季節の山へ行っているが、山での印象といってもよく働き下級生の面倒をよく見る奴だという事ぐらい。他には三年目頃になって単独行をやりたいなんて言ってたけれど結局それらしい事はやれなかったようだったな。

飲みに行く様になってからはお前と一緒の時が一番楽しく飲めた。それは俺だけでなく他の連中も多分同じだったんじゃないかと思う。シラフの時もそうだけれど、酔っても他人と喧嘩するとかカラムという事もなく、俺なんかとは口論をした事もないだろう。大体俺達の同期の連中には、悪い奴はいないけれど、どちらかというと顔を会わせれば喧嘩になるという感じの奴等が多かったから一層そんな気がするのかもしれない。



写真4-1-6　横山雄司君　シルバーロッジ下の“ももや食堂”前にて

お前と一緒に飲みに行き始めた頃は確か青江三奈がデビューした頃で飲み屋へ行くとよく彼女の歌がかかっていたっけ。二人で飲みに行って金が足りなくて、学生証を置いて来て、翌日の奨学金が全部バーの借金に回ってしまった事もあったっけ。顔のきかない様な処で金がたりなくなるまで飲んだなんていうのは後にも先にもあの時一度だけだし、奨学金が全部飲み屋の

借金で消えてしまったなんていうのも、そうなかった事だと思う。

そんな様な事をよくやっていたので、所属の学科が厳し過ぎたのか、頭が悪いのか、一年ドッペリでもその一年間、卒論をやりながら部報を完成させる為に中心になってよくやっていた。俺なんかは札幌にはいたけれど、卒業してしまったし、どうせ学校に残っていても大して働きはしなかったとは思うけれど、何にも手伝えなかった。そんなお前も翌春は卒業し、日立製作所へ行ってしまった。

日立へ行ってから一枚の葉書をもらったけれど結局はそれがお前からの最初で最後の手紙となり、「共に一杯やれるのを楽しみにしています」なんて結びだったけれど、卒業後は顔を会わせる事もなく永遠に逝ってしまった。山とスキーの会会報の原稿になるんだけれどこんな事しか書けなくて誠に申し訳ない。

冥福を祈ります。さようなら。省一

（『北大山とスキーの会会報』(1970)より転載）

1.7　鷲田　薫さんを偲ぶ

中村　晃忠（1962 医 薬）

シルバーロッジ建設から 43 年が過ぎた。ロッジ建設に関わった私達の世代は、水谷 寛先生、鷲田 薫さん、高倉奉朔さん、大津 勇さんの恩を決して忘れない。そのお一人である鷲田 薫さんが 2004 年 4 月 15 日に亡くなられた。享年 95 歳であった。

ここで、鷲田さんとロッジの関係を記録や記憶から掘り起こして、鷲田さんの遺徳を偲び、あらためて感謝の意を表したい。



写真 4-1-7　鷲田 薫氏

ロッジ建設の経過は、『むいね』第 4 号(1961 年)および『山スキー部部報』(1967 年)に記録されている。以下に、それらから鷲田さんとの関係を示す箇所を再録する。

“土地という大問題が解決しない限り、計画は、足が地につかない感じがする。そうした憂鬱な日が続いていたある日、学生達と一緒に、シルバースロープの上に立ち、ため息まじりに付近を見渡したとき、目についたのが現在のロッジが建っている土地である。付近はリンゴ園や牧草地として、比較的よく、手入れが行き届いているのに、その部分、200 坪ぐらいの範囲だけが、手入れもされず、一面の熊笹とポプラとマツなどの林におおわれていて、妙にぽつんと、取り残された感じに見えた。――われわれ一同は、期せずして、この土地を万難を排しても獲得しようと、決意する。(水谷先生)”

“現在地に所有者のいないことが分かり、法務局や札幌市の財務課に調べに行った。そこは戦後、農地法によって国に買収されたままである。(阿部孝夫)”

“その土地(注：現在のロッジと住友さん宅の土地をあわせたもの)は国有財産になっていることが分かった。農地解放の結果、(不在地主の農地は)国有財産になったものだが、旧地主が使用目的をはっきりさせて申請すれば、優先的に地主の手に戻ることになっていることもわ

かった。(水谷先生)”

“この土地の旧地主は、豊平に住む鷲田車輌製作所の所長の鷲田氏であることがわかった。だから、この土地を手に入れるには、鷲田氏にお願いして、国に対して、旧地主として土地の返還を申請していただき、土地が戻ってきたら、私たちが使わせていただくのが、もっともよい方法だと思われた。早速、中島君と阿部君にお願いして行ってもらう。こんどは大丈夫らしい、との報告に私がお願いに行くことにする。初対面のときの話が、戦前わが国にボブスレーが入ってきたころ、北大工学部の学生の依頼でボブスレーのそりを作り上げたという苦心談だった。もちろん、損得を度外視しての作業だったという。そして、まだ一度も見たことのないそりをどんなに苦心して作ったかという話をしてくださった。その話かたがいかにも楽しそうだった。そんな話を伺っているうちに、この人なら私達の話がわかってくださるにちがいないと思った。――その後の話は、全く、順調に進んだ。結局土地 100 坪を無償で提供していただくことになった。(水谷先生)”

(中村注：鷲田さんは「あなた方が農林省へ手続きをして、宅地への転用許可を貰ってくれるなら、半分を無料で提供する。」といわれたと記憶している。そこで、私が転用申請の手続きの役目を仰せつかった。札幌市を通じて転用申請を提出した。紆余曲折はあったものの首尾良く転用が認められ、宅地としての登記の際に、半分が分割され水谷先生の所有となった。)

“鷲田 薫氏について：いうまでもなくロッジの基礎を築いてくれた人である。我々の趣旨をよく理解して下さり、無償で土地を提供されたばかりでなく、以後もなにかと相談に乗って下さり、知らないうちに、周囲の人々にあいさつまでしてくれた人である。ある日にはわざわざ土地まで出向いて下さり、井戸掘りの手伝いをしていた我々にリンゴの差し入れまでして下さった。(中村)”

“あたりがまばゆいばかりの白雪におおわれたある日、北風をしっかりと受け止めて立つ我々の城が完成した。その朝、土間のストーブが燃え、大広間には額がかけられ、レコードプレーヤからはヨーデルが流れ、明るい陽光がいっぱいに真新しいたたみにふりそそいだ。そして、亡き高倉、山下、山室三君の写真がかかげられ、ロッジのために働く部員達の記録写真が展示された。――そうしているうちにも、設計者の山本幹雄先輩や高橋邦臣先輩がもう顔を見せる。村井部長が現れる。鷲田さんが見えた。何度も工事中に陣中見舞いにこられた氏は、すでになじみの者が多い。「おはようございます。本当にありがとうございました。」にこにこしながら頭をさげてロッジのドアをくぐっていった。そして、この建設に携わったすべての人々が一同に会した。(中村)”

“「なにか」を頭に描き、それがはっきりした形で目の前に出現するということは稀なことである。今、ここに起こっていることは、まさにそれであった。と同時に、このロッジが次の世代の「なにか」を求める基礎となることを疑う余地はなかった。(中村)”

鷲田さん、本当にありがとうございました。ロッジは 40 年以上たった今も、若者達が「なにか」を求めて活動する場であり続けています。また、そうあり続けることでしょう。そのことを現在の住人および山スキー部現役諸君も含めて、しっかり確認したいと思います。ご冥福をお祈りいたします。(2004.04.21)

(『むいね』第 42 号(2004)より転載)



『むいね』第 11 号より

2　思い出・回想

2.1　ムイネで台風十五号に会って

山岸　弘（1958 工 冶金）

我々は無意根小屋修理のため昭和 29 年 9 月 25 日(土)に、砂山主任、佐藤山班リーダー、三浦主将を始め山班、競技班、及び大工の出羽さん、柾屋、更に出羽さんの令嬢、熊木嬢の紅二点を加え、華々しく修理の材料上げを行なった。総勢二十五名の大パーテーがそれぞれ大きな荷をかつぎ遠々と続く様はいかにも頼もしくスキー部健在なりの感を強くするものであった。午後二時頃何んらの事故もなく三時間程かゝって全員小屋につき五時頃小屋の外で熊木、出羽両嬢の腕を振ったライスカレーにしたつづみを打った(この日は女性が加わったせいか例のキタネエーテーブルスピーチも出ず、なごやかな雰囲気で快適なガーデンパーティであった)。食後はストーブを囲み歌を歌い、話し合い楽しくくつろいだ。この日の修理は屋根の柾を少しふいた程度で終った。

翌二十六日(日)は皆頂上へ行こうとはりきって居たにもかゝわらず朝から雨で小屋の修理もはかどらず部員も小屋の中に閉込められ、つれづれに白樺のまきで腰掛などつくり始めた。所が退屈しのぎに始めたこの仕事が案外に面白く大勢が色々な物を作り出し二、三人で合作するもの一人でこつこつやるもの等結局晝まで野趣に富んだ腰掛けが四つ、燭台が一つ、大きなコケシ人形(高さ六十センチ位)1 ヶが出来上がった。そこで作品のコンクールを開いた結果腰掛の中では出羽さんの作ったものが一等で又山班の二年目前田君の燭台はゲージツ作品であると認められた。又時間を計ってまきを小屋の下につめた。これは相当のアルバイトであったがなにしろ人数が物を云ひ割と早く片づいた。

午後一時、修理のために月曜まで居る大工さん、柾屋さん、及び競技の谷藤、山班の川村、村上、前田と小生の七名を残して、全員は帰へる事となり、シーハイルを叫びつつ、まだ降り続いて居る雨の中を下って行った。大勢が帰って小屋の中が急に静かになってしまい外はドンヨリとした雲から冷たい雨が降って居るし、何んとなく淋しくなったので早めに夕食をすましてしまって、明るい内に後かたずけも終りストーブの周りに落つくと人数が減ったと云っても二年目ばかり元気の良いのが五人も残ったのだから相当ににぎやかに歌などを歌ったりして居た。しかしこの頃になっても雨は降り続くばかりか増々はげしくなって行き風さえ少し加はってきた。大体今度の山行には荷物かつぎと云う仕事に気を奪はれてあまり天気の事に気をくばらなかった。とにかく小屋まで荷物を上げればよいので別に天候にわざわいされる事も無いので無理もないが残った我々五人の中には月曜日の天気予報を知って居る者もなかった。このためこの雨は一体いつ頃晴れるのかけんとうもつかなかった。ましてこれが本州を通り猛スピードで北海道へ向かって来る台風十五号の前ぶれであろうなどとは夢にも思わなかった。又この台風には気象台でも面くらった程でラジオの天気予報もこれについてあまり告げて居なかった様に思う。

九時を過ぎ大工さん、柾屋さんが寝た後、我々は雨も上がりそうもないしと明日の天気にも見きりをつけ、明日は仕事も出来ないしただ山を下るだけだから今夜はおそくまで語りふかそうと云う事になり、まずは女性観から恋愛論

へと自己の体験談など入れて活発に議論が闘はされいつ果てるとも知れなく思えたが、かれこれ一時頃その前から風が非常に強くなり時々話がとぎれる程小屋がゆれて居たが突然一陣の風と共にガラスが割れる音がして二階からガラスの破片と窓わくがばらばらになって我々の頭の上に落ちて来た。とたんに吹き込む猛烈な風で今までの恋愛論はおろかローソクの火まで吹き消されてしまいあげくの果は小屋の屋根も今にも吹飛ばされそうな勢いに先づはこわれた窓をふさがねばと飛び起きて来た出羽さんに机を窓に打ちつけてもらった。

この時窓の外を見て驚いた事にはすぐ目の前に二かかえもある様なタンネが横になって居るのである。窓もこの枝がぶつかってこはれたのであろうと上を見ると煙突も根元からなくなって居る。更に下を見ると小屋の便所がタンネの下敷になって無惨につぶれている。

それからはいつ次のやつが小屋の上に倒れて来るか知れず寝るわけにも行かないので煙突がこわれてあまり燃せないストーブにふるえながら夜明けを待ったが、夜明け近く風の度にドシンドシンと聞えて居た樹木の音も聞えなくなり次第に嵐もおさまったので皆一寝入りした。

翌朝二十七日(月)腹ごしらへの後外へ出ると、小屋の周りのタンネはほとんど倒れていやに見晴しがよくなってしまった。大工さんが小屋の破損状態をしらべた。屋根の桁がほとんど飛んでしまい、北側の二階のまどと煙突等又全くつぶれてしまった便所を前にして最後に使用したのが自分であるのに気がつき何か感慨無量のものがあって、後かたづけののちまで降り続く冷い雨の中を早々に下り始めたが、倒木がはげしく枝をかき分け幹を乗り越えてようよう薄別についたが、この間道の上やその附近に数えられた倒木は百三十本以上、全道の山林の被害に心を暗くしつつ、薄別から乗せてもらった営林署のトラックの上で我々は洞爺丸の惨事を聞き、あまりにひどい自然のいたづらを恨みながら倒木が白い葉裏を見せている山間の道をゆられながら定山渓へ向った。

(『北大 OB スキークラブ会報』
第 10 号(昭和 28・9 年度)より転載)

2.2　はるかなるムイネ小屋

大和田　榮治（1963 医 薬）

私は 1963(昭和 38)年卒で今年満 69 才、古希を迎えました。銭函にある小さな薬科大学でまだ学長を務めています。山とスキーの会の比較的年齢の近い会員が元気に山だスキーだと退職後の生活をエンジョイしているのを見るにつけ、うらやましく思っています。というのは、私が長いこと培って来た糖尿病がこの数年みごとに花開き、併発した末梢神経障害のため余り歩けなくなってきたのです。こうした症状に加え、加齢と運動不足と“美食三昧”の生活で体中の筋肉が消失し、とても山登りやスキーどころではありません。こんな私ですから「ムイネ小屋」がいかにはるかな存在であるか理解してもらえると思います。

こんな私にとってもムイネ小屋はとても懐かしく思い出の多い小屋です。「懐かしあの山、ファリァファリァ・・・」に代表されるムイネ小屋でのヒュッテンレーベンは私の青春時代を彩る一ページです。私はスキー部山班の中では異端者で、山やスキーにはそれほど関心がなく仲間との人間関係をエンジョイすることを目的として活動してきました。北大入学後、どのように大学生活を送り将来それをどう生かすかなどといった自分の立ち位置がまったく見えない状

態で、困惑の極みにありました。その時、ひょんなことから入部したスキー部山班の中で出会った人々は、これといった思想も人生観もあるようには見えず、しかし、さほど重要でもないことに一生懸命打ち込めるタイプであり、これらの人々との共同生活の中で、私は人生をいいかげんに生きることを体得しました。まさに当時のスキー部山班は、私の癒しの世界であり、その象徴がムイネ小屋の日々であったのです。

そうそう、ムイネ小屋には忘れられない思い出もあります。これまで人には話しませんでしたがムイネ小屋では死ぬような思いをしたことがあります。私が 2 年生の秋に小屋番でムイネ小屋に登った時のことです。その年の夏にはスキー部山班は日高の沢登りに多くのパーティを出しました。私も初めての日高の沢登りを、ソエマツ岳を中心とする南日高で行いました。私達のパーティはなんとか無事に下山しましたが、隣のペテガリ岳を中心に入山したパーティは事故に遭遇し、山下さん、山室君の 2 名を失うことになりました。私としても先輩・同期を失ったショックは大きく、その夏は葬儀や反省会などの後始末であわただしく過ぎ、ムイネ小屋番はそれらが一段落した後の私の最初の山行でした。小屋番は一年先輩の高畑さんと一緒の予定でしたが、直前になり高畑さんから都合が悪く一日遅れると連絡がありました。何となくさびしい気分でとぼとぼと定山渓から歩いて、何とか夕刻にはムイネ小屋に着きました。当日は土曜日にもかかわらずお客は誰もおらず、体調の不調を感じつつもそのまま倒れるように寝込んでしまいました。夜の 9 時頃になるとひどい高熱を発し、体がだるく起き上がることも出来ず意識も朦朧とした状態になりました。もう



写真 4-2-1　無意根山の“壁”上から望む無意根小屋

このまま一人で死ぬのかと思ったところが、夜中に突然ドタドタと音がして、高畑さんが小屋に入って来ました。私のことが心配で夕方から出発して来たそうです。その後、彼が夜通し、水で冷やすなどつききりで看病してくれました。おかげで翌朝、目をさました時にはうそのように熱は引き、朝食に高畑さんが作ってくれたイモでだしをとっただけのみそ汁がとても旨かったのを覚えています。今でも、あれはいったい何だったのか？もしかしたら小屋に浸みついた山下さんと山室君の思いが私を連れに来たのかも知れないと思うことがあります。

最近、円山のマンションに越してから、生きている内にもう一度ムイネ小屋に行きたいと、毎朝、新聞をとるついでに 11 階まで階段を昇っています。しかし、何度くり返しても足が慣れることもなく、だんだん辛くなってくるたびに、見果てぬ夢としてムイネ小屋に思いを馳せています。

（『こなゆき』第 34 号（2011）より転載）

2.3　山での歌の想い出

在田　一則（1965 理 地鉱）

自分では天性の音痴だと思っている。小・中学校時代は出席簿順が 1 番か 2 番だったので、なにをやるにも最初だったことが多い。音楽（唱歌）の試験でも最初に歌わされたことが多く、前の人の見本がないので、うまく歌えなかった。それがいまだにトラウマになっている。したがって、私の音痴は、天性ではなく配慮のない教師のせいかもしれない。

というわけで、北大スキー部山班に入るまで、歌うことはそれほど好きというほどでもなかった。しかし、山班（山スキー部）のおかげでみんなで歌うことの楽しさを知った。ここではスキー部山班そして山スキー部での歌にまつわる想い出を思い出すままに記してみたい。

「歌は世につれ、世は歌につれ」と云われるが、私にとってもそれぞれの歌はそれぞれの時代やシーンを思い出させてくれる。

新入生歓迎会と初めての無意根合宿

1961（昭和 36）年 4 月にスキー部山班に入部したあと、新入生歓迎合宿ということで手稲山のパラダイスヒュッテで一泊した。合宿費は 100 円だった。荒縄を 2～3m 持って来いと云われ、それでタワシを作り、小屋に投げ入れた残雪でヒュッテのささくれ立った床を磨いた。夜は焼酎を飲まされ、自己紹介をやらされた。出身校くらいしか云えない新人のなかで、大田正豁君は酔った体を柱で支えながら、「北上夜曲」を歌った。当時はまだ歌声運動の余波があり、歌声喫茶などではやっていた歌なのだろうが、歌声喫茶には縁のなかった私には初めて聞いた歌だった。臆せず歌っていたのには感心した。

その 5 月の連休には無意根小屋で新人合宿があった。合宿費は 700 円だった。リーダーは 4 年目の古川善雄さんだった。同期の新人は 10 数名くらいいた（**写真 4-2-2**）。毎日夕食後は歌だった。“僕らの故郷（Lustig ist das Zigeunerleben）”、“スキーの寵児”、“山の大尉”、“山の四季”、“手稲おろし”、“放浪の歌”、“はるかな友に”、“いつかある日” など初歩の歌を教わった。“山の大尉” はハモり易い曲だったのか、音痴の私などはまわりに付和雷同して高音と低音を行ったり来たりしつつもうまくハモることもあった。昼食後にも、小屋前に積まれたカンバの薪の上にシュラーフを持ち出し、春の陽を浴びながら繰り返し練習した。本州からの連中は、誰に出すのか手紙を書くと云ってカンバの皮を薄く剥がしていた。5 日間ほどの合宿であったが、帰りの定山渓鉄道の車窓から見る山はすっかり新緑に変わっていて、その中に点在する桜が目に染みた。この合宿でお互いにどんな人間なのか少しはわかり、スキー部山班員となったような気になった。



写真 4-2-2
ゴールデンウィーク 1 年目無意根合宿、1961 年。1 年目は 15 名。前列右：古川善雄（L. 4）

山班は、我々が卒業する頃までは部の活動資金を稼ぐために、11 月頃に映画会をやっていた。「禁じられた遊び」や「シェーン」の記憶がある。その昔はダンスパーティーもやったらしい。部員には 80 円くらいの入場券の販売が課

せられ、1年目も20枚くらいがノルマだった。地元出身のものはまだ良いが、本州出身者は売りさばきに苦労したようだ。多少自腹を切った部員もいたかもしれない。その映画会では休憩時間に部員がステージで合唱するという噂があった。かつては、山班合唱団ドンシーコーラスがヨイドレビッチ・コロビスキー氏の指揮でロシア民謡などを披露して喝采をあびた(?)とも聞かされた。音痴の私としては昔の音楽試験を思い出し、心中穏やかではなかったが、幸い映画のみであった。あるいは私が逃亡したのか、とにかくステージで歌った記憶はない。

無意根小屋と歌

5月連休後の無意根追悼登山の前日、荷分けがあるというので木造の旧体育館の端にあった部室に行くと、焼酎の一升ビンが何本も並んでいた。山に慣れない新人には結構な重さだった。ザラメ雪も歩きにくかった。小屋に着くと、定山渓営林署が北壁の下で伐採し、そこに残してあったカンバの薪や枝を小屋まで運び下ろし、小屋の前に積み上げた。作業は翌朝もあり、朝飯前の仕事はたいへんだったが、これも体力をつけることになると思い、真面目にやった(**写真 4-2-3**)。朝食後は、ザラメ雪の北壁をツボ足で登り、ケルン前で何曲か歌った(**写真 4-2-4**)。秋の無意根小屋祭では薪入れだった。小屋前に積み乾燥させた薪を床下の薪置き場に入れ、小屋のまわりを掃除した。

追悼登山も小屋祭も、夜はラテルネのスポットライトをあびての生協のメラニンドンブリの焼酎と自己紹介だった。新人から始まり、上級生が終わると歌となった。今思うと、未成年者の飲酒ではあるが、酒を強要するものはいなく、最後はたいてい“はるかな友に”でおやすみとなった。

しかし、何人かは残った酒でさらに何曲か歌っていた。当時の歌のリーダーは若林隆三さん(1962卒)、それを引き継いだのは裏悦次さん(1965卒)、我々の後世代は大谷隆昶君(1966卒)だった。いつもの歌が終わると、何人かの上級生が初めて聞く歌を歌いはじめた。♪*パリのエッフェル塔で小便すーれば、すーれば　バイソラキンキラキン　ゴビの砂漠に虹がたつそれもそうかいな(爽快な?)*キンキラキン♪などというユーモアのある愛すべき歌もあったが、“ジーベン　ブンダ　ダス　ペニス”など、ここに歌詞を書いたら、本誌の品格を貶めるような猥歌も出てきた。今思えば、なんで皆さんあんなに熱心に歌ったんだろうかと思うが、我々の代になってからは、まったく歌わなくなった。しかし、三上仁志さん(1964卒)が歌った“鯨取りの歌(?)”だったか、♪おーい



写真 4-2-3　朝飯前の薪運び



写真 4-2-4
陽光の無意根で唄う。1961年5月追悼登山。指揮は若林隆三(4)

クジラっこ見えたぞー　舟を出せー・・・一番銛っこ打てー・・・銛は海にチャッポン・・・♪ はもう一度聞いてみたい歌である。当時のNHK子どもの歌にあった“おお　牧場は緑”はよく歌った。“おお　ブレネリ”も繰り返し歌われた。寮歌も歌った。残雪の上で焚き火を囲んで繰り返したストームも、壊してしまったメガネとともに思い出す。

無意根の小屋では、“Lore Lore”、“Muss i denn”、“Abendlied”、“Wandervogelslied”などのドイツ語の歌を初めて聞いた。メロディーがはっきりしていて私でも歌える感じがしたが、なにぶん言葉をどこで切るのか繋げるかが要領を得ない。

“Wandervogelslied”の中では、*♪die Gedanken sind frei!♪*　とか*♪Schön ist die Jugend, sie kommt nicht mehr!♪*（これは他の歌だったかな）などはドイツ語可でもわかるお気に入りのフレーズもあったが、おおかたは適当に歌っていた。今でもそうである。

“Der gute Kamerad”にはとくに想い出がある。Himalaya-Karakoram-Tibet Workshopというヒマラヤ・チベット地域の地球科学に関する国際集会が毎年開かれており、1999年はミュンヘン南のオーストリア近くのKloster Ettarという小さな町で開催された。その時は下の娘を連れて行ったが、古い修道院を改装した会場兼宿舎に着いたあと、夕食まで時間があるので、近くを散歩した。教会の庭に入ると墓地らしい一画があり、一回りして教会前の広場に出てくると、在郷軍人風の服装をした年配の人たちが10名ほど、バイエルン地方のエンブレムらしきを刺繍した大きな紋章を掲げ、大太鼓・小太鼓・トランペット・ホルンなどの楽器を持った一団がいた。何か演奏するのかとしばらく待ったが、何も始まらないので宿舎のほうに向かった。しばらくすると、後ろの方から、*♪Ich hatte einen Kameraden・・・♪*　のメロディーが流れてきた。思わず、遠くからの伴奏に合わせて歌った。その時だけだっただろうが、親父が見直されたのは言うまでもない。集会後、近くのGarmisch-Partenkirchenのスキー場でフランスからの参加者や娘と4時間ほどスキーをやった。ここは1936年に第4回冬季オリンピックが行われ、大先輩の伊黒正次さんがジャンプ7位となったところであるが、意外に小規模なスキー場だった。

1965年3月の北大山岳部札内川九の沢雪崩遭難のおり、我々のパーティが沢田パーティと遭難現場付近ですれ違ったこともあり、捜索隊といっしょに現地に向かった。1週間ほど彼らの雪洞付近や雪崩デブリを捜索したが、発見には至らなかった。撤収前夜、みんなで歌った“Der gute Kamerad”の歌声が札内川の谷間にこだまして焚き火の煙とともに消えていったのも忘れ難い。

茗渓堂版『山で唄う歌』

春の追悼登山や秋の小屋祭では、上級生たちの何人かは茶色の布表紙の歌集を持っていたので、私もさっそく学生書房で買った。それは茗渓堂発行の、『山で唄う歌1』（戸野　昭・朝倉宏編、103p. 1958年）と『山で唄う歌2』（戸野昭・朝倉　宏編、160p. 1959年）である（**写真4-2-5**）。定価はそれぞれ130円、160円である。当時、生協食堂の最高のビフテキ定食が120円だったと記憶する。A6判の布張りで、山に持っていくには手頃な大きさと丈夫さであった。山スキー部歌集が作られるまではこれが我々の歌集であった。ともに巻末には五線紙の余白があった。今手元にあるものを見ると、



写真4-2-5　愛唱歌集『山で唄う歌』1、2（茗渓堂）

そこに 26 曲の歌詞が書かれている。その中には、“山のロザリア”とともに“僕のスキーはウィスキー”、“しゃれこうべと大砲”などがある。♪ *Du du liegst mir in herzen* ♪　で始まる私が歌える数少ない Deutschenlied もある。山に行く時にはいつもキスリングのザイテンに入れていたが、なくならず、今でもあるのはそれだけ大切にしていたのであろう。

農学部 N1 教室と「涸沢の朝夕」

私が入部した 1961 年頃には、部員は山班だけでも数 10 名近くいたように思う。競技班も含めた部会は農学部 N1 教室で行われたが、あの大きな部屋がいっぱいになり、日頃見かけない人もいた。北大スキー部は国内ではまだスキー競技のない時代に誕生し、スキー部が日本におけるスキー競技のやり方を考え、山岳部がスキー部から分離・独立した経緯がある。山指向の人たちが山岳部を作ったあとも、スキー部には競技をめざすグループ(競技班)と山やスキーに憧れるグループ(山班)がいた。スキーをどのように使うかについて考えが異なる人たちが、スキーで結びついて一つの部を作っていたわけだが、実際の運営にはいろいろ困難があったことは想像に難くない。いろいろ紆余曲折はあったのであろうが、当時はスキーを共通基盤としていっしょにやろうということになっており、部会も山班・競技班全員の集まりであった。部会が終わると歌の練習となり、“ジグリー”や“Donna nobis pacene”などを歌った。あるとき、中村晃忠さん(1962 卒)がこんな歌を仕入れてきたといって、黒板に書いてくれたのが、“涸沢の朝夕”だった。長くのばすところをどこまでのばしたらよいかわからないので困った。しかし、慣れてくると、私でも少しはハモって唄えた。

この歌にも想い出がある。1967 年初めてのネパールにいっしょに行った山岳部 OB の F 君と高田馬場あたりの居酒屋で飲んだことがあった。彼の知り合いの女性もいっしょだった。話題は歌に及び、山岳部も歌っているという“涸沢の朝夕”を彼と歌うはめになった。幸い、彼には歌の天分があり、私の適当な音程にあわせてくれたおかげで我ながらうまくハモった。その女性はその歌に感激したのか、その後彼といっしょになった。彼女は日本女子大学山岳部 OG で、現役の頃、そこのコーチをしていた吉岡義雄さんとよく山に行っていたとは後で知ったことだ。中島 巖さん(1961 卒)が山スキー部部長を辞めたあと、後任がいなくて困っていた時、東大スキー山岳部 OB の人が教養でドイツ語を教えているよ、と吉岡さんを紹介してくれた一人も F 君であった。

ピウケナイと“無意根小唄”

1963 年の 5 月連休には小野怪童さん(1964 卒)をリーダーに大雪山のピウケナイ沢に行った。私がサブリーダーで、2 年目の江幡文彦・落合道夫・小池宏二・野原悠久の諸君がメンバーであった。雨で停滞のときだったと思う。停滞食のホットケーキも終わり、いくつか歌った。やることがなくなり、持参した何かの歌集をみていたら、ズンドコ節の替え歌が載っていた。出だしは♪*夜の新宿プラットフォーム・・・*♪　だった。そこで無意根を種にさらなる替え歌を作ろうと思い考えたのが、♪*夜の札幌プラットフォーム*♪　で始まる“無意根小唄”であった。定山渓へ行くのに、夜の札幌プラットフォームもないであろうと思った。また、♪スキーさばきの腰にぶる♪　とか♪曲げりゃおいらの心がすたる♪　も躊躇したが、適当な言葉も思いつかず、そこは歌の世界ということにした。途中からは皆で歌詞を考えたと思う。その年の秋の小屋祭のおりに、パーティ全員で披露したところ好評を博した。山スキー部歌集第 2 版、第 3 版をみると、4 番に♪*今日の戦果に足どり軽く*♪　とあるが、オリジナルは♪*今日の成果に足どり軽く*♪　である。歌詞の一部はおかしいところもあるが、最後の 5 番はなかなかよいと思っている。ただし、これも、

1969年に定山渓鉄道は廃止されたので、今は昔である。

山スキー部歌集第1版

裏さんは若林さんが卒業したあと歌のリーダーとなり、シルバーロッジでの例会の後などで我々を厳しく指導した。『山スキー部歌集』第1版の編集責任者は裏さんとなっている。発行日は1964年12月1日で、この月の19日には富良野岳－ウペペサンケ山縦走隊が札幌を出発している(1月13日下山)。したがって、縦走直前のドタバタの中で歌集も作っていたわけである。その他『Russel』という不定期のガリ版刷りの部内誌もシルバーロッジでの徹夜作業で出していた。当時の山スキー部のエネルギーと意気込みを感じる。あるいは今の学生たちとは違って、我々はそれだけヒマだったのかもしれない。そういえば、その頃縦走へのモティベーションを高めようと思って、Arnold Runn著『On the top of hills』の読書会のようなこともシルバーロッジで2、3回行った。

残念ながら、私の記憶からは、歌集作りがいつ、どのような契機で始まったのかはほとんど消えている。大谷隆昶君(1965年卒)が縁の下で尽くしたことは記憶があるが、細部についてはよく覚えていない。もっぱら縦走にかかりっきりであったからであろうか。ガリ版刷りの歌集の字は大谷君の筆跡と思う。五線譜も彼がガリを切ったのだろう。ひとつ思い出すのは、歌集の最初にある部歌のことである。縦走計画が本格的になってきたよりも前の2、3年目頃に、山班・競技班の一体化やその後の分裂を巡ってスキー部山班の目的や存在意義について悩み(これは皆さんそうだった思う)、スキー部の先人の考えや足跡を辿り、スキーや山をどのように捉えていたのかを知りたくて、スキー部の古い部報や班報を繙いていた。その中で、スキー部部歌“見よや　若人”があることを知った。作詞者の相川正義氏の名前が北大山岳部報にあることも知っていた。山岳部部歌の“山の四季”や法政大学山岳部部歌“エーデルヴァイスの歌”はいつも歌っていたので、つねづね山スキー部も部歌があったらいいなあと思っていた。“見よや　若人”の歌詞は山岳部や法政大学のものとは違い、寮歌風でなかなか勇ましいものであった。しかし、オタマジャクシはまったくだめなので、小野鉄之助氏作曲のメロディーがわからない。それで当時裏さんを引きついで歌のリーダーになりつつあった大谷君にそのコピーを渡して、今度それを皆に教えてくれと頼んでいた。その歌が歌集の冒頭に載っていたのは意外であった。それは、その勇壮な歌詞やメロディーに少し違和感があったためであったが、今ではだいぶ慣れてきたようだ。とにかく自分たちの部歌があるということはいいことだ。

裏さんが歌のリーダーになってから、歌の傾向が一転した。それまでのDeutschenliedから英米の歌となった。もちろん、それまでにも“Loch Lomond”とか“When it's spring in the Rockies”、“Down in the valley”、“Oh my darling Clamentine”などは歌われていたが、裏さんお得意のHarry Belafonteの“Oh Shenandoah”、“Jamaica Farewell”などが新たに加わった。その他にも、“My bonny”、“Cowboy's dream”が歌われた。

吉岡義彦さんと歌

1997年1月に吉岡さんが亡くなったあと、札幌で追悼会があった。東大スキー山岳部OBの同世代の人たちも10名ほど参列されたように記憶している。追悼会の最後は彼に捧げる歌となった。沢山の歌が歌われた。多くは我々も歌っているものだった。その中には私も好きな“山の一日”、“彷浪の歌”、“涸沢の朝夕”、“スキーの寵児”もあった。Deutschenliedも「Alt Heidelberg」など我々は歌っていないものもあったが、多くは馴染みの歌だった。どこでも山で唄う歌は同じなのだなあと思うとともに、吉岡さんの育った東大スキー山岳部への共感を

感じ、改めて吉岡さんの山スキー部に対する情熱と献身に感謝の念で心がいっぱいになった。

吉岡さんがミュンヘン留学から戻られたとき、我々が歌っているDeutschenliedには、調べたらいくつか歌詞が間違っているところがあるから、そのうち纏めておくよというお話だったが、1997年1月の吉岡さんの急逝でかなわぬことになってしまった。

おわりに

歌集第1版の「あとがき」で裏さんは「音痴ほど歌が好きだ」と看破している。音痴の私としてはまさに我が意を得た気持ちである。ハモると下手は下手なりに楽しいものである。第一、歌うと仲間意識が強くなる。茗渓堂版『山で唄う歌』から、『山スキー部歌集』第1版(1964年、編集責任者：裏　悦次)、第2版(1966年、編集責任者：飯豊利秋)、第3版(1974年、編集責任者：保坂　豊・皆川幸治・佐々木右治)、第4版(1984年、編集責任者：松本貴之)、第5版(2009年、編集責任者：森　康)、そして最新の第6版(2012年、編集責任者：森康)と、歌集はその時代時代を反映して、内容が少しずつ変わってきているようである。正直言うと、かつて自分たちが歌っていた歌が少なくなるのは寂しい気がする。いっぽう、知らない歌には少し躊躇がある。しかし、我々が歌っていたどの曲も最初は知らない歌なのであるから、これはおかしいことだ。歌を教えてくれる歌のオジさんが身近にいなくなり、また、みんなで歌うという機会が少なくなったせいかもしれない。あるいは年とともに歌に対する順応性がなくなるのかもしれない。そういえば、山岳部の歌集『山の四季』も第1版(1979年)と第2版(1993年)は歌の内容がずいぶん変わっている。やはり、「歌は世につれ、世は歌につれ」なのであろう。

(『こなゆき』第32号(2009)より転載、一部修正)

2.4　36年ぶりの無意根小屋

油田　厚生（1972文 哲学）

同期でもう一人札幌在住の香取氏から、何度か山行に誘ってもらったが、鍛錬不足で体力に自信がなく、申し訳ない気持ちでお断りしてきた。ところが、10月7日に東京の津田氏も来て、無意根でジンギスカンをやるという。にわかに小屋が懐かしくなり、今度ばかりは覚悟を決めて、歩くことにした。卒業後、残雪期に2度ほど小屋を訪ねたこともあるはずだが、記憶が定かでない。実質的に36年ぶりの無意根である。

3人で定山渓の古川先輩にあいさつ。車で薄別へ。ゲート前に「NHK登山教室」なる小型バスが駐車している。走り始めると、林道の様子はあまり変わっていないようだが、傾斜が急なことに驚く。夏も冬の林道ラッセルも、そんなに登りがきつかった記憶がないのは、若かったせいか。電光のかなり上まで林道が延びていることは、隔世の感である。宝来小屋の前は、我々1台だけ。準備をしていると、年配者のグループが次々に下山してきたので、あいさつ。大蛇ヶ原まで往復の、件の登山教室のメンバーと分かる。これが噂に聞く中高年登山ブームか。

いよいよ出発。山をかなり歩いている香取氏の足取りは軽そうだし、津田氏も速い。こちらは道南の千軒岳と横津岳程度しか使っていないほぼ新品の軽登山靴が、重く感じられる。膝を心配して初めて購入した夏山用ストックを使ってみると、おお、これは楽だ。見返りはこんなに急坂だったか、先は水路みたいにえぐれていたかなと、首をひねりながら大蛇へ。端の方が

コースとなり、木道が設置されている。変わった。約1時間で無意根小屋に着く。やはり早い。

外観も、2階も、変わっていない。しばし、感慨にふける。今日はここで終わりのはずだったが、二人は「ここまでは楽勝だね。山頂まで行こう」と元気である。やれやれ、自分の脚はもつのか。いざ、シャンツェ経由の新道へ。小屋前の壁を上がり左へ巻くあたりまではよいが、すれ違った下山パーティーが「この先はひどいよ」と言う。行ってみると、テラスに上がる直登ルートが、泥の壁である。細いロープと木の枝を頼りに這い上ると、その先は刈り払いで残った笹の根が下に向かってやたらに残り、靴がひっかかることおびただしい。疲れる。何とかならぬものか。崖崩れで通行禁止となった旧夏道との合流点で夕方が近くなり、小生はリタイア。

小屋は、床が張り替えられ、丁寧に維持管理されていることが分かり、気持ちがよい。歴代の部員の皆さんに感謝。プロパンガスのコンロでご飯を炊くのも、昔はなかったことだ。3人でストーブを囲み、食べ飲むほどに、昔話に花が咲く。1967(昭和42)年の4月中旬、新人歓迎で初めて小屋に泊まった日の夕暮れ時、窓から眺めた壁の白い稜線を、今でも思い出す。翌朝登ったテラスは春の吹雪模様で、つぼ足で前を歩く先輩達の姿が雪煙の中に斜めに浮かんでいた。考えてみれば、2日酔いも含めろくにスキーもできない新1年目をいきなり山頂から滑らせるのだから、すごい部だったと思う。その故か、津田氏はゴールデンウィーク合宿で捻挫し、サマースキーには行けなかったという。そうだったか。

たしか1年目の5月の小屋番だったか、夕方、壁の方から鮮やかに滑り下りて来る人がいて感心して見ていたら、それが噂に聞くスキーの名手・在田先輩で、朝中山峠を出発し喜茂別岳ルートで来たと聞き、驚いた。厳冬期の小屋番で雪が深く、吹き降りの中、電光坂のラッセルが腰くらいまであってキックターンにも苦労し、えらく時間がかかったこと。春の夕方、小屋から薄別まで競争のように飛ばしたら、見返りのザラメの斜面に、先行組のほとんど直滑降のようなシュプールが残っていて仰天したこと(梅沢さんか下岡さんでしたか)。合宿の夜だったか、燃えるストーブの前に故・藤瀬さんがパンツ1枚で仁王立ちとなり、「野郎ども、用意はいいか！」のかけ声で一斉にジンギスカンが始まった光景。小屋にあった我々が1年目の時の「むいね」を読んでいたら、その藤瀬さんの小屋日誌が載っていて、当時1週間交代の「この夏の小屋番で2大馬鹿が出た。エッセンを買うのを忘れて上がってきた馬鹿(清水徹さん)と、(札幌から)エッセンボッカを2回やった馬鹿(香取氏らしい)」との記述があったのには、笑った。そんなこともあったっけ。

思い出は尽きない。部員は、夏も冬も小屋の生活で山に慣れ、親しみ、山行の力を育んだのだと、改めて思う。山スキー部にいた者にとって、無意根はやはり、僕らの故郷、なのか。単身赴任先の函館から札幌の我が家への行き帰り、国道の中山峠から、いつも無意根を眺めていた。多忙に紛れ、遠くから眺めるだけの暮らしをしてきたが、今度は残雪期にスキーで歩きたいな、とも思う。

(『こなゆき』第34号(2011)より転載)



『むいね』第9号より

2.5　53 年前のニセコ合宿（第 48 シーズン　ニセコ合宿）

南部　敏明（1960 農 生）

『こなゆき』（北大山とスキーの会 / 会報）第 35 号（2010.10–2011.9）が送られてきた。ぱらぱら捲っていると、「復活　ニセコ合宿」という記事が目についた。そこに中村晃忠氏（1962 医薬学）が保管していたという、「第 48 シーズン ニセコ合宿の栞」が載っていた。どこかで見た字だなと思ったら、53 年前に私がガリ版で切ったものだった。その 1 週間ほど前に、探し物で家中をひっくり返し、その時に昔のスキー部時代の印刷物が一包み出てきたのを思い出し、調べてみたらこの「栞」も真っ黄色になって何冊か混ざっていた。一緒に、その時の手書きの記録が出てきた。これは印刷物にはならなかったから、誰の目にも触れなかったと思われる。昔のニセコ合宿の雰囲気が出ているので、当時一緒に合宿した仲間に配ってやろうかと考えた。その場にいた人ならば、少しは懐かしがってくれるかもしれない。水谷先生に読んでもらえないのは残念だが、名前の出てくる人も大勢いる。

以下は、その記録である。今読むといろいろ問題になるところもあるが、字の間違い以外は殆ど訂正しなかった。記録というのはやはりその時書いたものが重要だと思うからである。

記録というものは昔を思い出しながら書いたのでは、やはりどこか時の作用が入り込んでいるものである。これは、合宿の直後東京のお袋へ出した報告である。今までのニセコ合宿の記録は単なる記録といったものが多く、一人の目から眺めたニセコ合宿全般の記録はないように思われる。だから昔のニセコ合宿の雰囲気は先輩の話に聴くしかない。これが 48 シーズン合宿の雰囲気をうまく出していると言うつもりはないし、また何も知らないお袋に対する報告であるから書くまでもないようなことも説明してあったりする。しかし時の作用を除くために今書き直すことはしたくない。この合宿は僕にとって 3 回のニセコ合宿（注：卒業した年も入れると 4 回）のうちで一番楽しかったものなのである。

前日まで

ニセコ合宿も今年で終りだ。この合宿に参加するのは今度で 3 回目とはいえ、去年は 1 日登っただけで、病気で帰ってしまったので、じっさいには 2 回目というに等しい。大学 1 年からスキー部に入っていれば、もう 1 回多く行けたのにと悔やまれる。

実際に歩いたのは 2 年生の時、それもリーダーの後をくっ付いて行くだけが精いっぱいだった。吹雪の日もあって、頂上に登ったと言われても、地形は全くわからなかった。だから今度の合宿でリーダーになれるはずはなかったし、なるべきではなかった。しかし参加者が多くて、リーダー不足なのはわかっていた。本来ならば勿論辞退すべきだった。しかしどうせリーダーをやるなら、やらされたというような生半可なものではなく、自分からぶつかって行った方がいいじゃないかという気持ちで、メンバー構成の時何も言わずに、リーダーとなることに組み込まれた。実際部員はピラミッド型の構成で、4 年生が一番少なく、リーダー不足が目立っていた。

不安はあった。しかし同時に同じコースを 2 パーテイ以上が歩くのだし、地図と磁石、それとコースを歩いた者にいろいろ聞くことによって大丈夫歩けるだけの自信はあった。それにアシスタント（サブリーダー）の横山君は見渡したところどの班の奴よりも頼りになれそうだった。江端君は入ったばかりでシールにも慣れていないし、他の人は部員外からの参加者だか

ら、ラッセルをどの程度やれるかは不明だった。しかしアシスタントの横山君は1人でラッセルを引き受けかねないファイトの持ち主だから何とかなるだろう。

メンバー構成、コース選定などの幹事会に顔を出しただけで、雑用はすべて3年生以下の仕事だったから楽だった。毎日教室に出ていたが、身体を慣らすためになるべく暇を作って藻岩山で滑った。2年前も去年も雪が少なくて前日まで苦労したものだ。明日降らなかったら延期というところまでいって、そんな相談から深夜喫茶に3時までいて、自転車を盗品だと言われたのも思い出の一つだ。今年はその点雪の方は心配はないので合宿に入る日が待ち遠しかった。

ガリ切りの仕事が最後の打ち合わせ会の前日に持ち込まれた。3時までかかって、9頁を切って、さて翌日不覚にも目を覚ますと、11時少し前。会合は1時から。学校へ駆けつけて部員を動員して、やっと間に合わせた。他人の刷ったところはムラがあったが、しかたがない。

12月21日

出発の前日、荷物を取りに行った。食糧を持って行くので、分配して持っていかなければならない。4年生は軽いもののはずだったが、Xmas用のケーキ4個を持たされて、横にはできないし、ぶら下げて行かねばならず、ごねたけれど食料係の奴、「南部さんは適任だ」なんてにやにやしている。あと4個は太田が持った。去年と今年の記録係だ。「『記録係とXmasケーキとの関係について』という論文を書いてやるぞ。」と言いながら、ケーキの箱をぶら下げて楡影寮をでる。22日は朝早くて市電がないので教室で泊ることにし、一旦下宿に帰って、弁当を頼んだり装備をそろえてから、家教に行く。こんな時自分の時間というものがまったく尊く思える。また下宿へ帰り、晩飯を食べ、用意をして9時に出る。教室では時々泊っている者があるのでベッドもあり、他人の目覚まし2個をかけてシュラフにもぐった。

12月22日

堅い雪をきしませて、薄明るくなった校門を出る。途中で参加する者、先の駅から乗る者などのため、札幌では60人くらいだったが大きい荷物とスキーを担いだ60人というのはちょっとした壮観である。特別車輛を1つくっつけてもらい、どうやら全部収まったようだ。

6：55札幌駅を出る。写真機を持ち出したり、地図とコースの検討、先輩から伝わっている話などが出るうちに、11：05昆布駅着。

ニセコで大回転競技の大会があったためか、除雪してバスが青山温泉まで行っている。荷物とスキーをバスに乗せることにした。1台には乗りきらないので、一旦温泉まで行って引き返してくることになる。駅前の待合所で弁当を食べ、ぼつぼつとかたまって温泉へ向かう。あまり登りのない4kmの道だ。荷物の残っている者、タイマンな奴が残っていて、荷物と一緒にバスに乗り込んだ。15～6人。温泉のバスで無料のように思っていた者もいたようだが、「除雪費を含んでいるので、120円いただきます」と言われた時には、皆しばし開いた口がふさがらなかったようだ。途中で止めて乗ろうとした奴に、「乗るな！　乗るな！　金取られるぞ」と言ったところ、信用しなかったらしい。車掌に請求された時の顔は見物だった。しかしこれでけちがついたと、皆面白くない顔をしているうちにどうやら温泉に着く。

去年と同じ100畳の大広間に全員押し込まれることになったが、去年と変わったことは、まん中を仕切って2部屋に分けてあることで、一方を食堂にするという。床の間の大虎もそのままかかっている。去年寒かったので、暖房をもっと何とかしろと言って置いたのに変わっていない。文句を言ってこいと庶務係をけしかける。

小休止の後、風呂に入る者、何かをぱくつく者、スキーにでかける者と、4時まで自由行動

となる。僕も通称自衛隊スロープに滑りに出掛ける。着いた時にはまだ2人しかいなかった。雪が深いのでまず1本チョッカル。どうやら曲がりそうなので2本目は強引に曲げて見る。やっぱりうまく曲がらない。しかし去年からみたらずい分進歩している。だんだん人間が増えてくる。登るとき外側を通ってゲレンデを広げても多過ぎる。荒井山級だなと話しながら数えてみたら40人そこそこだった。27日の80人合同ツアーはさぞかし壮観だろう。

晩飯前にリーダー会。リーダーのために個室を1つとってあるので、ここで寝ることにした。他に個室は女子用1つ、先生方用1つとってある。リーダー会でメンバーの入れ替えなど決める。

晩飯後、一般注意、各班リーダーの紹介の後、班に分かれて細かい打ち合わせを行う。初めて自分の班の人の顔を憶える。アシスタント以外は1人も知らなかったんだからひどい。もっとも大部分の班がそうだ。Ⅷ・Ⅸ・Ⅹの3パーテイだけ部員の強いのでかため、戦前やっていた目國内岳、新見温泉コースを再開することになっている。

その後、翌日の昼食、おやつの分配、スキー具の点検を行う。昼食は小形のブドウ入りコッペパン1個、むすび2個(1個は赤飯)で、蜜柑2個と10円のキャラメル1個が各自に配給される。その他パーテイとして持って行くものに、修理用具一式、シール・ワイヤーのスペア、非常食料がある。誰が強いかわからないので、少しずつ持たせることにする。

我がⅣ班は、アシスタントの横山(通称タレサマダ)の他、小幡君は参加取り消し、菊地さんは1日遅れるので、23日は江端・木野・河原の5人となった。少ない方が行動は楽だ。コースはC。一段落ついて1年ぶりの温泉につかる。ここの温泉はちょっとぬるいのが玉に傷だ。しかしだべったり、合唱したりするにはそれもいい。明日から5日間の山歩きを思いながら、のんびりとつかった。

消灯9：00。リーダー室はスチームがなく、ストーブだけなので寒かった。

12月23日

起床6：00、朝食6：30。コースにより出発は8：00と8：00、1パーテイは新見に行くのだけ6：00に出ている。鐘が聞こえなくて、リーダー達が最後に席について、あまり恰好よくない。今年から戦前のように体育教官が参加した。昨夜もそうだったが、N先生の話が、朝食後「ちょっと食べながら聞いてください」なんて始められたのは、顔には出さないが、皆ちょっと水をさされた感じ。朝は終った者から出ていっていいからだ。そう長くなかったのでほっとする。

朝風呂は禁止。スキーにシールを着け、戸外に出しておくことは、乾燥室から急に出して履くと雪が溶けてくっつき、時には凍りつくのを防ぐためだ。ぜひ実行しなければならない。リーダーは一般参加者にこういった小さいことを注意する義務もある。

8：00、上の広場に集合。今日は田辺のパーテイと一緒だ。天候は曇り。山は見えない。ニセコアンヌプリに行く4パーテイと共に出発する。ラッセルは最初の班がやることになる。テラスの下で別れ、田辺班と見返りへ。夏道を登る。北大ワンダーフォーゲル部が山の家に行ったという跡らしいラッセルが残っている。見返りの上に出た時、雲が切れアンヌプリが完全な形を現した。見返りから見たアンヌプリがもっともすばらしいようだ。のしかかってくるような雄大さ、東尾根の鋭さ、カメラを置いてきたのが悔やまれる。合宿中完全に見えたのはこの時だけだった。山の家手前でワンゲルがゲレンデをしている。山の家で合宿中という。

山の家で昼食、赤飯の握り飯がうまい。甘納豆の入った北海道の赤飯だ。小休止の後イワオヌプリに向かう。左手の小さい尾根を登り、登り切ってからニトヌプリへ向かう連中と別れて右手に切る。風がだいぶあり、視界はよくな

い。岩の塊のようなコイワオの右手コルからイワオヌプリの登りにかかる。大きい岩がゴツゴツと露出している。その間を兎が軽快に跳んでゆく。今日は3匹目だ。その急斜面を登り切ると、イワオヌプリの大きなお釜のヘリに出る。ひどい風だ。全員ヤッケをつける。ちょっとコースを誤ったが、田辺の指示により無事頂上に立つ。頂上附近は風で飛ばされて雪が少なく岩が出ている。雪も氷のようにアイスバーンになっている。田辺達は振り子沢を下るという。僕たちは明日またここに来て、帰りに振り子沢を下ることになっているので、やめて登った斜面の少し左手を下る。強風にかたい雪が吹き付けて目が開けられない。やはりゴーグルは必要だったかもしれない。サブの横山にトップを下ってもらう。少し下ると雪が深くなった。重たい雪だ。相当な斜面なのに途中で止まってしまう。止まると雪は腰ちかくまであって、身動きもできない。滑っていると前に溜まった雪が盛り上がってきて、腰までくる。こんな雪は初めてだ。来た時のラッセルに出、それに入って下る。後は山の家まで直滑降。全然スピードが出ない。山の家に着いてシールを外していると、反対側から田辺パーテイがやってきた。同様にひどい雪だったとのこと。

登りにはトップをサブリーダー、ラストをリーダー、ラッセルのある時は隊員が交代でにやり、一般にリーダーはやらない。下りはリーダーがトップ、隊員はリーダーを抜いてはならない。サブリーダーはラストを隊員の遅いのをマークしながら隊員が離れないように下る。これらがスキー部の伝統的な方法で、一般のスキーツアーでも最良の方法だろう。

隊員は山スキーに慣れていないらしく、下りにはだいぶ転んだが、この分ならどうやら大丈夫のようだ。サブの横山はやはり一番上手い。もちろん僕よりも。場合によってはトップを下らせられるから心強い。

見返り上でモイワに向かう。途中初年班に追いついた。「ワンゲルですか」と聞かれたのは笑い話。神谷さん、わざと言ったのかな。水谷先生が滑降コースがいいと言うので、プソイドを下るのを止めて滑降コースを下ることにする。初年班は頂上に登らず、下を巻いて行ってしまった。下りにかかってすぐ追いつく。あっちこっちに埋まってもがいている。パーテイを混ぜるのはよくないが、抜くことにして真中をチョッカル。下の平らなところで待っていると、我が隊員もなかなかやってこない。幅の狭い急斜面なので、新雪の中をチョカッタほうがずっといい。いよいよ滑降コース。滑降競技のためずっと木が切ってある。新雪なのでチョッカッてもあまりスピードは出ないが、アイスバーンになっていたら怖いだろう。1回皆の見ている前で派手にまくれた以外は、快適に滑った。まくれるというのは転ぶことだが、スピードが付いているから何メートルかふっとばされて雪煙りを上げる。要するに“まくれる”という言葉が一番ぴったりする。

温泉に着いたのは3時だった。すぐ温泉に飛込んで汗を流す。飯前に例によりリーダー会。各コースの報告やら、苦情など。ときどきトッピなことを言って笑わす奴がいて、リーダー会の空気はなかなかよかった。

晩飯後、リーダー室でとぐろを巻いていると、新見温泉へ電話をかけたが、まだ着いていないという報告が入ってきた。暗くなったから行動はしていないだろうが、斎藤達のことだから穴を掘ったろうと、楽観的な空気が強く、心配する者はなかった。8時過ぎ、まだ着いていないという報告が入るに及び、何か手を打つべきかということが話題に上がってきた。9時過ぎにリーダー、先生方が集まり、斎藤パーテイがチセハウスに着いた時間、シャクナゲへのコルを通ったことの確認の後、彼等に会ってコースを教えたというチセハウスのご主人O さんが観光ホテルに来ているので話を聞きに行くと電話しているうちに、来られることになったが、また変わって先生方と阿部が出掛けて行った。遭難と仮定した場合、明日行動を起こした

のでは遅すぎる、捜索隊を出すべきだ、という意見が強くなり、2パーテイ、10人が選抜されたのは9時少し過ぎ、皆が寝てからであった。寝入ったところを起こされた塘、中村、渡辺、横山等を入れて細かい計画が検討された。自衛隊のウイーゼル(雪上車)が近くに来ているのを知り、チセハウスまで運んでくれるように交渉しているうちに、自衛隊でも捜索隊を1パーテイ出す、10時に雪上車が迎えに行くということであわてて支度にかかる。翌日の赤飯だけは炊いてあったので、それでむすびをつくってもらい、非常食、装備と協力してすばやく用意をととのえた。佐々木・田辺班、小松・小島班の計10名。ウイーゼルに乗り切れないので、6名がザイルに引かれて行くこととなる。やがて頭にラテルネをつけ、ウイーゼルに引かれて、彼等は闇の中へ消えていった。

確かにそれは何かしんとした光景だった。後に永井先生の言われたような男の友情といったはっきりしたものではなかったが、山の男というものを感じさせた。

リーダー室に戻ると、急に広くなった室で、中心となるために残った合宿主任の阿部、高橋OB、神谷さん、南部、三崎、仲俣等で明日の行動が計画された。全員山の家からせいぜいイワオまでとし、臨時のパーテイが編成された。7パーテイ、8名平均。阿部、清水、山室が連絡のため残ることになる。パーテイの名前を書いて大部屋の入り口に貼り、こうしていてもしかたがないからとシュラフに入ったのは12時を過ぎていた。阿部は2時近くまで用事があったらしい。

齋藤パーテイはどこで穴にもぐっているんだろう。誰か怪我をしたのでなければいいが。

12月24日

朝食の前に張り紙で行動の変わったことは知ったが、全員がその理由を説明されたのは食卓についてからだった。「情勢は楽観を許さない」というN先生の話に、一同少しシュンとなる。全員上の広場に集まり、出発した。僕のパーテイが広場を出かかった時、下の道から山室が息を切らせてとんで来る。高橋OB、南部、古川は残ってくれということだ。また3人リーダーが抜けて、これではどうにもならないので、一応班はそのままにし、リーダーの抜けたところはサブがリーダーになり、全体を1つの合同ツアーという形にし、全体のチーフリーダーを岡田にすることにした。コースは山の家附近まで。何か悪い知らせかとドキッとしたが、帰ってみると変化はないが、あと1パーテイ出せるように残っていてもらいたいということだった。

大部屋でお茶を飲んでいると、すぐ8:30に新見から「全員無事で着いた」という知らせが入った。張りつめていた気がくずれるような安ど感に襲われる。迷って穴を掘ったが、全員至極元気ということで、急に元気が出たような気分だ。まだ皆は見返り下くらいだから、追いかけようと思ったが、阿部より、何かあるかもしれないから残るように言われ、しかたなくなまることにする。

先に残った3人と後の3人、捻挫で休んでいる1人で大部屋にとぐろを巻いていたが、しだいに退屈でたまらなくなり、布団を積み重ねて跳び箱をしたり、逆立ちをしたり、天井に手を届かせようとしたり、大いにあばれた。

昼からは何事もなさそうだし、退屈には勝てず、自衛隊スロープへ滑りに出掛ける。足が疲れていないので、回転も快調。皆には悪いが、大いに楽しんだ。3時前に皆も帰り、自衛隊スロープも賑やかになった。皆は山の家で無事という報告をすぐ聞いたという。

晩飯前、全員チセハウスに着きこれから帰る、と言う電話が入る。だいぶ弱っている者もいるので、途中まで温かい甘酒を持って出迎えに行ってもらいたいので、リーダーとして行ってくれと言われる。外の寒気が厳しくなっているので大変だとは思ったが、すぐ用意にかかった。出るという時になり、チセハウスに泊るか

もしれないからちょっと待てと言ってくる。リーダー室に帰り、3分も経たない時、電話が鳴り、全員今玄関に着いたという。皆の足音はそのためだったのか、と玄関に飛び出した。斎藤パーテイの6名、捜索隊の10名が次々とラテルネを光らせながら滑ってくる。疲労の色はまったくない。甘酒を飲みながらさすがに少してれくさそう。2、3名がなかなか着かない。河太郎のいわく、「あいつら、途中で非常食を食っているんだろう。」これはこの場合、たしかにどっとくる言葉だった。それだけの余裕があれば何も言うことはない。

晩飯後、斎藤より報告あり。予定通り目國内岳まで登り、新見温泉へ行くのに岩内峠へ出ず、トラバースしたが、沢が非常に込み入っていて、自動車道路を行き過ぎてしまい、温泉を発見できず穴を掘ったとのこと。気温が高かったので交代で寝て、だいぶ余裕があったらしい。ニタリがイビキをかいたこと、誰か寝たら非常食を食い始めると全員がガバッと目をさましたこと、には笑った。捜索班は殆ど眠っていないが大丈夫ということで、明日の行動は計画通りとなる。

Ⅳ班に菊地さん(女子)が入り、6名になった。

12月25日

今日はチセヌプリまわりのコース、途中まで一緒のパーテイ3つ。同じコースを歩くのは三崎パーテイだ。7時玄関前集合。ところが1人いつまで待っても来ない。間違えて上の広場へ行ってしまっていた。出発は一番遅く、7：45。自衛隊スロープを横切って単調な自動車道をチセハウスに向かう。約6km。全くこの道は長くて嫌になる。もちろん冬は自動車は通らない。スキーがないと膝まで埋まる。途中開拓農家が3軒ほど点在するのみ。此の辺の子供は学校へ行くのも命がけだ。

チセハウスで前のパーテイに追いついた。少し休んで、その間に彼等にラッセルをさせておく。ここからは登りが続く。沢の左手から入り、右手に移って登るうちに沢は込み入ってくる。今日も吹雪。視界は悪い。方向感覚があやしくなる。記憶と感でと思って磁石を見ると90°も狂っている。磁石通りに行くと、別な方向に行くような気持ちがする。しかしやはり磁石とおりに行くうちに、チセヌプリの大斜面が目の前に現れる。少し前に、シャクナゲに行く連中とは別れた。この部分はテラスになっていて、平らなところが拡がっている。その前にチセヌプリが急激に登れそうもなくそそり立っている。吹雪の時下から見る斜面はいつもそうだ。登り始めの風の割合当たらないところで昼食。しかし風はひどく、にぎりめしは齧るそばから凍って不透明になってゆく。これからは登るほどに強い風当たりになる。三崎パーテイのラッセルのおかげで、頂上に楽に着いた。頂上近くの雪はクラストしていて、エッジをきかせて登る。

頂上はひどい風。すぐシールをはずして下りにかかる。吹雪でほとんど2mくらいしか見えない。この頂上は鉄鉱があり、磁石が効かない。感じで下るよりしかたがない。感で下りようとすると、雪庇がある。1mくらい近づかないとわからない。雪面を飛ばされる雪が雪庇を撫でて飛び出しているので、雪面がずっと続いているような錯覚にとらわれる。あまり近づきすぎて雪庇の一部を落っことし、足元まで割れ目が入った。恐れをなして、ずっと左側をまいて下りることにする。少し下ると、三崎パーテイのものらしいシュプールがある。少し深い雪でも、風で5分も経てば消えてしまうので、シュプールも当てにはならない。記憶にある大斜面の上に出たときガスが切れて、ニトヌプリとの鞍部(コル)が見える。その少し左側に三崎パーテイらしいのがいる。コルを目指して真っすぐ下る。ずいぶん急に見えるのにさっぱりスピードが出ない。コルは風がなく静かだった。三崎たちは左手から上がってくる。やはり少し下り過ぎていた。ニトヌプリの登りはラッセルを引き受ける。このところも下の方だけははっ

きり記憶しているが、上に行くに従って薄れている。一昨年も吹雪いていた。地図と磁石で方向を定める。小さなコブがいくつもある。遠くから見ると、甘食のように整った山なんだが。頂上直下で名無しと頂上を迷っているうちに三崎たちに先を越された。地図が少し間違っている上、下から見ると名無しの方がずっと立派だ。

頂上は相変わらずひどい吹雪、視界0に近い。下りはわりに簡単だ。1つの斜面を下って集合したとき、風が弱まり視界が開ける。次の斜面は上から見ると直角のように見える。雪が深く、斜滑降して止めると腰くらいまで埋まる。しかし軟らかく面白い。もう少し技術のある者にはここは一番面白い斜面だ。しかし山スキーに慣れていない者は見ただけで怖気づくらしい。2回くらいまくれて、下まで来て上を見ると、まだ上でもたもたやっている。へたに突っ込むと、体が埋まってどうにもおきられなくなる。チョッカッて派手にまくれている奴もいる。

途中からイワオヌプリのコースと一緒になり、山の家の上に出る。高商スロープでワンゲルがゲレンデをしている。コースはそれを通るので、両側にずらっと並んでいる真中を悠悠と曲げて滑ってやった。今まで深雪だったせいか、踏んであるところは我ながらきれいに曲った。止まって皆を待っていると、それぞれ真中をきれいに曲げて下りてきた。山の家で残り物を食べ、見返りの夏道から電柱を通って温泉へ帰る。

本当は昨夜やるはずだった、Xmas余興大会が今夜7時から行われることになった。各班ごとに何かやらなければならない。食事の後集まって方々で相談が始まった。どうも名案がない。タレサマダ(これも去年のこの余興大会で付いた)が言い出して、僕等はファッションショーをやることになった。いろいろな小道具を借り集めて始まるのを待った。籤で順番が最後から2番目になった。蜜柑、ネコフン、江戸あげ、ココアを前にして、いよいよ齋藤パーテイから始まった。採点者は先生方、基準は例年通りアイデアと笑いの量で測られる。

最初の「裁判」は面白かった。被告に別の班の部員を引っ張り出しただけでもう爆笑。2人目の被告はたった1人の女性部員中川さん。罪は“美しきがゆえに部員を惑わすこと”。証人は食事の時前に座りたがるのは、残った飯が目的であると証言。美しくないとは言えず、弁護人と検事が反対になったみたいだ。

その他、無言劇あり、サンタクロースが来てノミを置いていくのや、サイレントの相撲、部員のあだ名をそのままに仕組んだ足柄山の劇、金太郎・熊・キツネ・ハイエナ・カッパが揃っていた。

あるパーテイの劇、ヤッケにラテルネで武装して、山で道に迷ったと言って出て来る。灯が見える。そこで戸を叩くと1人の女が出て来る。一夜の宿をと言うと、「野中の女の一人住まい・・・」ここで「快調！」と叫んだのには全く爆笑した。「おとめするのはよけれども・・・」から始まって、「夜中に襖を開けて入ってくるのはよけれども・・」とだんだんきわどいことになってくる。「この辺で止めるベエ」と引っ込んでしまったが、・・・よけれども・・・は以来部でだいぶ流行している。

さて我が班は、菊地さんに説明をしてもらって、各々日本娘、シナ人、南洋の土人、パリジェンヌをやった。1人ずつちょっと動作をして、何かその国の言葉で言って引込んだ。僕のパリジェンヌの恰好はといえば、頭に赤いスカーフ、菊池さんに赤い七分袖の服を借り、胸に新聞の団子を入れ、宿で借りたスカートをはき、先生の短いコートのようなジャンパーのような服を着て、薄い手袋をした上に、手に持ったのは週刊漫画。こんなことなら姉貴に習っとくんだったと思いながらポーズをとって、コートを脱ぎ、回転したり歩いたりしてやった。どんな恰好だったか自分でも見たいくらいだ。

さて、採点の結果、裁判が一位、僕達が二位になった。6人で意外だ、って言いながら賞品

の Xmas ケーキ 1/4 をむしゃむしゃ食った。風呂に飛込んで、寝たのは 11 時頃。

12 月 26 日

今日も昨日と同じようなコース。同じコースを歩くのが 4 パーテイで気が楽だ。チセハウスまでの長い道をまたテクテク歩く。シールを付けたスキーを滑らせる歩き方だから、テクテクはよくない。何と言ったらいいか言葉がない。昨日チセヌプリへ行ったところを左へ切って、シャクナゲに向かう。時々ガスが切れ、チセヌプリ、シャクナゲが姿を見せる。コルに風の当たらない窪みがある。北大スキー部、これを名付けてムスメノマタと言う。大正以来現在でも健在である。

シャクナゲは本当にお椀を伏せたような整ったピークである。頂上に近づくにつれ急になる。素晴らしい斜面だったが、傾斜が強すぎて恐怖心が出たかさっぱり曲がらない。まくれているうちにゆるやかなところに来た。あとは真っすぐチョッカル。今までラストに来たのでチセヌプリの登りのラッセルは我が班が引き受ける。殆ど横山 1 人でやってしまった。昨日登ったところとは違うが、似たような斜面である。頂上の風は昨日以上でひどかった。下りは深雪でよくまくれたが、快適だった。あっという間にチセハウスまでおりる。今日は江端が風邪で残ったので 5 人。昨日の余興大会の残りのネコフン・江戸あげをごっそり集めてきたので大いに食った。来た道を帰る。傾斜が無いのでほとんど滑るところはなく、消耗。自衛隊スロープを通るので少し遊んだ。

夜は歌の練習。ドイツ語の歌を参加していたドイツ語の望月先生に訳してもらったり、楽しかった。

12 月 27 日

全員合同ツアーでニセコアンヌプリへ。初年班、先生方を各班に分配、Ⅳ班には神谷さん、小泉さんが入り、8 人。



写真 4-2-6　ニセコ合宿にて（1966 年 12 月、在田一則撮影）

80 数名が 1 列の長蛇をつくったのはちょっとした見物だ。田辺班が最初に出発してラッセルしている。ファイトがある。5 番目くらいに出発。テラスの尾根を登る。去年あんなに出ていたブッシュも、今年は殆ど埋まっている。テラスを登り切ると、風が急に強くなる。休むに良い場所のないままに、どんどん登る。横山にセーブしろと言っておいたのに、一般参加者にはだいぶ早いピッチだったようだ。毎年ゲレンデをやる斜面の 200m くらい下の雪庇の陰で昼飯。風が吹くと渦になって吹き付け、良い休み場所とは言えない。また登り出していくらも行かないうちに、木野がシールが緩んだと言ってスキーをはずして悠悠と締め直している。全員吹きさらしの中で待たされるので、部員なら怒鳴りつけたいところなんだが。頂上直下、斎藤パーテイがすごいスピードで下りて来る。斎藤の次に谷口が同じスピードで過ぎる。あとはさっぱり来ない。捻挫した初年生を 2 人預けられているので、ゆっくり来るんだろう。

頂上はわりに風がない。ちょっと様子が変なので気をつけて見ると、本当の頂上ではないらしい。一つ手前のピークだ。一瞬晴れて、少し離れて頂上が見えた。標高差はたいしてないし、シールを外してしまったし、行く班はなさそうなので、行くのは止めて下ることにする。斎藤パーテイともあろうものが、ひどいラッセルをしたものだ。もっと右へ巻くべきで、あまり早く登り過ぎたから、ピークを間違えたんだ。雪はクラストしていてよくない。さっぱり

回転しない。新雪へ突っ込むとクラストしているので前に突っ込む。長い斜滑降を終って、尾根の上で集合の後、菊地さんが今日の汽車で帰ることと、風がひどいのでゲレンデは止め真っすぐ帰ることにする。山スキーというのは長い滑降が一つの魅力だ。あまりスピードは出なくても長い斜面をノンストップで下ると、本当にスキーに乗ったという感じがする。転んだり、止めたりして、途中ちょくちょく区切ると同じところでも全然乗ったという気がしない。サブリーダというのは最後から全員を見張らなければならないので、誰かが転んだら止まって待たなければならず損な役割だ。今日は足が疲れているのかあまり快調に滑れず、またコースもかんたんなので、横山にトップを行かせ、神谷さんと2人でのこのこと最後から行った。横山は嬉しがってふっ飛ばしたので皆ついていけなかったと後でこぼしていた。スキーなんて相当な部分まで精神の問題だ。同じ斜面でも日によって傾斜がひどく見えたり何でもなく見えたりする。怖いと思ったらもうおしまいだ。尻が引かれて前傾ができず、姿勢が悪ければ曲がらないし、ちょっとしたことでも転ぶ。足が疲れている時、そう自分で感じなくとも、斜面が急に見えるのは不思議だが面白い。こんな時は無理をしないに限る。人がきれいに曲げていくのを見ると癪にさわるが、強引にやるとひっくり返るので安全運転でいく。テラスの下へ来て写真を撮ったり飯を食ったりして、温泉に帰ったのが1時、一応班を解いて、3人で自衛隊スロープに行く。アンヌプリから下る途中、合宿主任から、帰ったら自衛隊スロープで練習のことと伝言がまわってきたが、疲れていそうなので帰りたい者は帰してしまった。登りに1回しか休まなかったのは、確かに少し強行軍だった。

自衛隊スロープもしだいに賑やかになったが、面白くないことにスキーを忘れてしまったようにさっぱり曲がらない。覚悟をきめて、のんびりと残り物を食ったりして十分休み、下の平らな斜面からやり直した。それでどうやら調子を取り戻した。ゲレンデもなかなか楽しい。人に欠点を見てもらうと、自分ではわからないだけに参考になる。とは言っても一度ついた癖はなかなか抜けるものではない。僕のスキーの特徴は、人に言わせると何のきっかけで曲がっているのかさっぱり分からないと言う。テールの押し出しとか、抜重とか、少しスキーを開くシュテムなど回転を与えるきっかけはいろいろある。自分ではテールの押し出しをやっているつもりだが、そういえば自分にもよくわからない。それから両方のスキーがぴったりくっついていて離れないのはいい点なんだろう。ストックを後につき過ぎることと、ストックを軸にしてその力で曲げている感じがあるという。そう言われて見るとなるほどと思う。しかし意識して直そうとしてもうまくいかない。

薄暗くなって温泉に戻ると、温かいミルクが用意してあった。ミルクは2回目、甘酒が1回あった。うまい。今日で終りだから、風呂には2回入ってやろうとすぐ飛び込んだ。

夕食後、例年の通り反省会。毎日担いで歩いていた非常食の英字ビスケットを食いながら、全員何かしゃべった。Ⅱ班はリーダーがサブを、サブと隊員がリーダー、サブリーダーを大いに褒めて「あいつらサクラなんじゃないんか」と大笑いする。その後リーダーを褒めるのが流行った。隊員のことをシールの付け方が遅いと言っておいて、隊員に俺をうんと褒めろ、何て言うリーダーも居てまた大笑い。食事についての文句は今年は出なかった。ただ昼飯の赤飯の握り飯が毎日小さくなっていったことについてだいぶ抗議が出た。宿と食糧係の間に手違いがあったらしい。宿に対する苦情も出ず。リーダーの間ではサービスが悪いというので、来年は宿を替えちゃえという話も出るくらい文句があったんだが。

三浦が言い出した初心者とスピードの問題がだいぶ議論される。初めからスピードを出してスキーの感覚に慣れた方がいいか、上手になれば自然にスピードが出せるのだから、安全、確

実を第一とすべきであるのか、先生方の中にも両方の意見がある。途中の休息の問題など、先生方の話にはだいぶためになるものがあった。一般参加のドイツ語や英語の先生、体育教官などいずれも合宿に参加して良かった、来年も参加したいと口をそろえて言っておられる。ドイツ語の永井先生の「・・・毎日教室でリーダーと多人数の学生を相手にしていると、学生はドイツ語をやるために生きているかのような錯覚に陥ってしまうが、学生にもこんな面があるのだということを知り、人間性に触れることができ実に嬉しかった。」ということを聞き、皆我が意を得たりという顔をしている。

消灯 10：30。この温泉もこれで最後だ。また入る時があるだろうか。

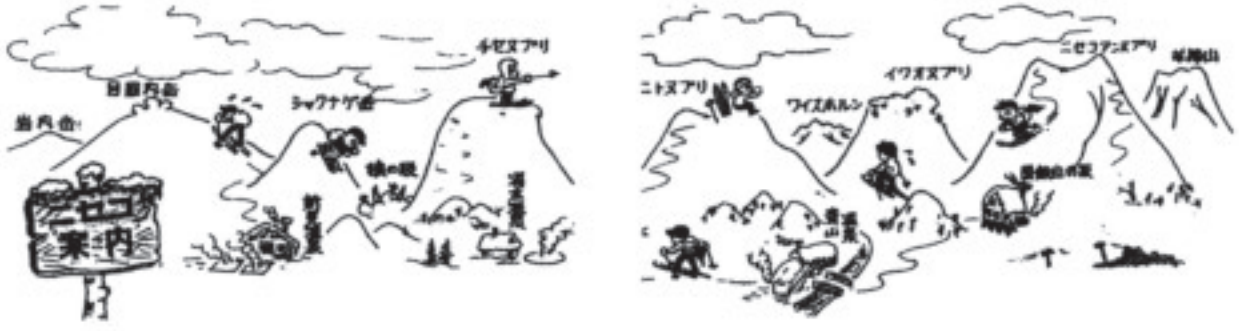
12 月 28 日

帰るという日になって初めて少し青空が出る。ニセコアンヌプリも時々雲が切れる。支度をし、荷物はバスに預けて、出発前の一滑りと自衛隊スロープへ。水谷先生等 7 人ほどがチセハウスにあと 2 日ほど泊られる由。大きい荷物を背負って出掛けるのを見送る。人の滑るのを写真に収めたり、しばらく遊ぶ。昆布駅まで 4km をスキーで下る。さようなら昆布温泉。

汽車の中では部員達は正月の山行の食糧その他の計画に忙しかった。車窓から見た小樽の街の雪の何と真っ黒にうす汚れてきたなかったことよ。山は毎日あんなに降っていたのに、こっちは全然降ってないらしい。

4：06 札幌着。部員 20 人くらいで、山小屋で例によってビールを 1 杯飲む。解散。そして師走の雑踏の中へと別れていった。　（完）

この合宿は 1959 年だったが、卒業した 1960 年も年休を取ってニセコ合宿に参加している。しかし、その時のことは全く記憶にない。計画を立てたり、記録をとったりしないと、こうも完全に忘れてしまうものかとびっくりする。このような記録を残しておけば、忘れてしまったと思っても、読むと記憶が甦ってくる。また 1959 年の時の写真がアルバムに 9 頁分貼ってある。これを見るとバスはボンネットバス、若くして亡くなった人、長いストック、いろいろなことを思い出す。一度完全に消えてしまった思い出を蘇らす術はない。60 年の時の写真がどういうわけか 1 枚もない。今は写真を全く整理していないが、残しておくべきだとあらためて思う。



和田晴 OB 画

2.6　岸　英三（1943 農林実）先輩を訪ねて

吉田　守男（1975 農 林学）

北大スキー部 1943（昭和 18）年卒の岸 英三大先輩を山形県最上郡金山町のご自宅に訪ねて参りました。予め訪問の電話を差し上げておりはしましたが、唐突な要件且つ初対面での訪問にも拘らず、昼過ぎにお邪魔すると「お昼食べたかい？まだなら一緒に食べようと思って食べないで待ってたよ。」と優しくおっしゃり、玄関で靴を脱ぎつつはるか昔現役の頃、山行の帰りに先輩 OB の家に立ち寄った時のような気持ちに還ったのでした（**写真 4-2-7**）。



写真 4-2-7
岸　英三ご夫妻（2008 年 8 月、吉田守男撮影）

岸先輩は山形県新庄市からほぼ真北に 10km ほどの最上郡金山町の山林主 6 代目岸三郎兵衛氏の三男二女の末っ子として 1922（大正 11）年 6 月 28 日生れの現在 86 歳。耳が少し遠いということで補聴器をお使いの他は矍鑠とされ、「昔のことは大分忘れたよ。」とおっしゃりながら、話題に関連する写真や絵、雑誌や本などあちこち探し出してはテーブルに広げお話し下さいました。（以下お伺いしました話を基に下記資料なども参考にし小生の想像も多少混じえつつ作文しましたこと、また文字数削減の為「ですます」の丁寧語を使わずまた体言止めを多用しますことをお断り致します。）

岸先輩は幼い頃よりスキーで遊び（近隣の山に山荘と私設のゲレンデがあったとも）、旧制新庄中学のスキー部時代は山形県大会や東北大会でジャンプ、スラローム、クロスカントリーなどの各種大会に出場し、時には他人から借りた板で優勝をさらったり、抜群のスキーの上手さとやんちゃさを発揮していた。

スキーが好きで北海道が好き、家が山林経営ということもあってか？、昭和 16 年 9 月北大農学部林学実科に入学、スキー部に入部する。（故三浦敬三先輩も林学実科であった。）

当時のスキー部部長（当時は班長）は医学部の大野精七先生であった。三角山の麓にスキー部の合宿所があり、「時間を守れ、早く飯を食え！等々何かとうるさいけどとっても好いおばちゃん（名前忘れた）がいたな。」僕らの時代も同様の？おばちゃんが居り、どうも三角山の麓は「うるさいおばちゃん」が住むところらしい！「ゲレンデは盤渓や幌見もあったけど主には三角山だった。北大は強くて悪くても 3 位には着けたな。明治は星野 昇、早稲田は奈良 勉などが居てこの 3 校は競ってたよ。」岸先輩はクロスカントリーの選手であったとの事。スキーを教えてくれたのは長距離で有名な札鉄の関戸勇、コンバインドの若本松太郎、「若本サーカスって言ってね、転んでもポールを見てたな。同期（林学実）の笹谷俊一はジャンプ（札幌五輪の事務局長）、実家が鮭のふ化場やってる手稲の西野一彦は大の友達だったな。宮様大会やインカレがあった。インカレでは米沢に行ったが布団をチッキで送ってね、泊まるのは民家だったよ。」

当時のやんちゃなエピソード①「夏になると毎週のように札幌から定山渓まで約 7 里を走らされるんだが 3 時間だったか 3 時間半だったかを超えると帰りも歩かされる訳よ。走るのが嫌いでねえ。五十銭札をこよりに丸めてパンツの紐の中に隠し、途中のトマト畑に隠れては先輩

に見つからないよう一駅二駅電車に身をかがめて乗ったりしてたよ。今みたいに水なんかない時代だよ、まだ青いトマトを食べたけど結構美味かったな。お陰でそれまで嫌いだったトマトを食べられるようになったよ。北海道駅伝にも北大からは陸上競技部じゃなくスキー部が出たな。銭函から小樽までは下ってて下りがきついってのが分かったよ。」　エピソード②「戦争中だったから、鉄砲担いで行進する学内教練があったんだが、ある時足駄を履いてったら、ひどく怒られてな。罰に学校の周りを2周しろってゆうんだよ。馬鹿馬鹿しくて1周してそのまま帰ってしっまったんだけど何も無かったな。」

岸先輩は昭和18年9月、2年で林学実科を卒業の後山形の実家に帰ることなく即海軍に入隊、土浦航空隊に配属になりあのゼロ戦に載ることになる。「徴兵検査では陸軍騎兵に決まってたんだが騎兵は嫌だなと思って海軍の予備兵募集試験を受けたら受かったんだ。」海軍ではゼロ戦パイロットとして中国海南島や釜山の航空隊に勤務、20年8月7日ソ連の参戦により北朝鮮の元山飛行場に転属するも15日の終戦を知らず8月17日に小松に帰国、初めて終戦を知った。戦時中は目の前で同僚が撃墜死されるなど壮烈な実戦体験をしている。その戦死した戦友の弟さんが戦後30余年を経てわざわざ福岡から山形の岸先輩を訪ねて来られ、兄の従軍の様子や戦死のおりの状況などを訊かれて、一冊の本を出されている(「鎮魂『雲流れて40年』」福岡県中村学園大学　井上馨著)。

岸先輩が幾度もの空中戦を無事に凌ぐことが出来たのは、小さい頃からスキーで鍛えられた運動神経の賜物だったかも知れない。

岸先輩は終戦後もまた山形には帰らず札幌で2年ほど過ごす。本人曰く「学校に行ってると言って親父に金送らせてたんだ。」親父さんからは「折角生きて帰って来たんだから何もしなくていい、遊んでろ！」と言われてその通りにしてたらしい。また24～5歳の頃、新庄での事業が上手くいかなかった折も「お前は社長になるなって言われ、だから(スキー学校の)校長になったんだ。」と。その前後頃、東京でも7年程木材関連の会社に在籍し過ごしている。昭和26年頃、中学時代に何度も通った蔵王の上の台に蔵王ヒュッテを建てる。当時はヒュッテの周りには何も無く蔵王温泉のはるか上方にポツンと離れていた。(蔵王での、そしてこのヒュッテでの様々な人々とのスキーを通した時間が後年起こすスキー学校への礎になったのでは無いだろうか？)翌27年に9歳年下の東京の女性、裕(ひろ)さんと結婚。裕夫人曰く「私ね、騙されて来たのよ。」どうやら3年ほど経ったら東京にもどるって話ではあったらしい。ご夫婦は28年生れの長男宏さん(現蔵王ハイム・スキースクール校長)を頭に2男1女に恵まれている。

一方この頃世界では1951年に第1回国際スキー教育会議(略称インタースキー)というスキーの技術指導に関する研究会議が開催されたり、フランスやオーストリアのスキー技法が凌ぎを削っており、1955年、後に日本でもスキーのバイブルと持て囃された、「オーストリアスキー教程」が発行されるなどスキーの技術論争が沸騰していた。

日本に於いても1956年冬季五輪コルチナ・ダンペッツオで猪谷千春がスラローム2位に輝いたのをはじめ、同五輪のアルペン三冠王トニー・ザイラーが毎年来日したり彼のスキー映画が製作されたり(「白銀の王者」1960年)、またNHKのスキー講習番組(岸先輩が講習指導する「母と子のスキー教室？」蔵王版が一回だけ放映されたと)が人気を得るなど一般にもスキー熱が急上昇、1962年にはSAJがヨーロッパにスキー視察団を派遣するなどスキー技術の吸収・向上に精力的であった。ちなみにこの年北大スキー部は創立50周年を迎えシルバーロッジの完成そして山スキー部独立の引き金的要因となったサマースキーテレビ放映事件が起こっている。

そんな1963年、前述の「オーストリア・ス



写真 4-2-8
クルッケンハウザー夫妻と滑る(中央が教授、右端が岸先輩)



写真 4-2-9
岸さんのスケッチ「サン・クリストフ」

キー教程」の著者であり、オーストリア国立スキー学校長で国際スキー教育会議の議長でもあるシュテファン・クルッケンハウザー教授が来日した。教授は札幌や蔵王、白馬などでスキーの実地指導を行うのに岸先輩に 20 人ほどの日本人アシスタントを集めてくれるよう要請。この折岸先輩はチーフアシスタントとしてクルッケンハウザー教授と一緒に来日した「オーストリア・スキー教程」のモデルであるフランツ・フルトナー他、バルトル・ノイマイヤー、シュワルツェン・バッハと一緒に滑っている(**写真 4-2-8**)。「スキー学校をやろう！」岸先輩のそれまでの模糊としていた気持ちが硬く固まったのはこの折か？

クルッケンハウザー教授から「岸君、指導者になるなら、サン・クリストフに来なさい！」かくして岸先輩は 1964 年、41 歳にして渡墺、アールベルグ・スキーの本場オーストリアのサン・クリストフでスキー指導の学校、国立スキー学校(ブンデス・スポルト・ハイム)に学ぶのである(**写真 4-2-9**)。

岸先輩は言う。「SAJ はスキー(板)と技術しか輸入しなかった。スキーヤーの扱い方は輸入しなかった。外国の本読んで理屈ばかり捏ねてもスキーは上手くならない、世界に置いていかれるだけ。如何にたくさん滑るか、1 本滑るより 10 本滑る方が上手くなるのは当たり前。その為に如何にやる気にさせるか、彼をどうやって危険から守ってやるか、如何に良い状態(コンディション)にしてやるかが重要なんだ。朝起きた時、よく寝れたか？飯食ったか？便所へ行ったか？家族的なのが大事なんだね。だから自分が作った学校の名前にはハイムって言葉を入れた。ハイムって言葉には家庭、家族って意味があるんだ。

帰路イギリス南部のボーンマスのアングロ・コンチネンタル・イングリッシュスクールに 2 ヶ月ほど英語の勉強に寄った。ドイツ語はドイツ、スイス、オーストリアの 3 カ国しか通じないが、岸が今後スキーを教えるであろう生徒は日本語は勿論だけど英語話す人が多いだろうから英語を学べって云われたんだ。その後もサン・クリストフには何度も行って Kishi ！、Eizo ！って呼ばれるくらいになったよ。」

「スキーは哲学だよ。クルッケンハウザー教授もウイーン大学の哲学の先生でもあった。教授も言ってたがスポーツとは、日本の囲碁も、西洋のチェスもそうだけど、すべてを忘れて集中させるもの、ゲームみたいなものだな。だから命を賭けられる。仕事には命は賭けられないな。スキーはまたロマンだな。正直だし、誤魔化しがきかない。北大の中谷宇吉郎先生が言った『雪は天からの贈られた手紙である！』俺はあの真っ白にきれいな雪に戯れて美しいスキーをしたかったんだ。スキーは大自然との対話なんだよ。悪雪なんて言う奴がいるけど色んな雪(質)があるが雪に悪い雪はないな。それからク

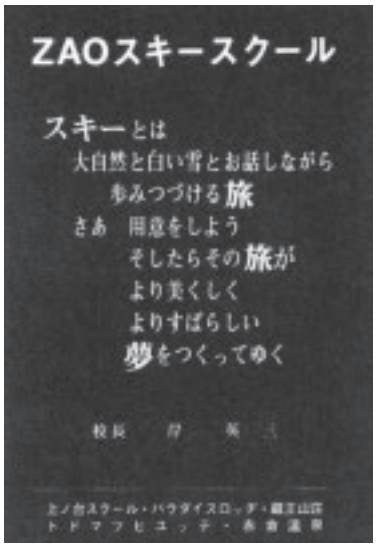


写真 4-2-10
ロッヂZAOスキースクールのパンフレット

ルッケンハウザーも言ってたよ、スキーは下手な奴ほど早い。上手な奴ほどゆっくり行く、回りながら行くからさ。それが難しいんだ。そう云えば北大はスラロームの選手は山班から出てたな。山班の方が上手かったよ。」

1964年6月スキー指導の留学を終え帰国した岸先輩は翌1965年蔵王パラダイスロッジ内にZaoスキースクール(**写真4-2-10**)を開設し、1967年には蔵王ハイム・スキースクールへと発展させる。岸先輩は日本におけるスキーのパイオニアーの一人でもあったが、スキー指導の面においてはパイオニアー中のパイオニアーではなかったか。当時単にスキー技術の指導者であれば既に多数居たであろうし岸先輩と同じオースリアのブンデス・ハイム公認指導者となった日本人も既に居たが、雪とこんな風に語り戯れスキーを旅だと思った指導者は居ただろうか？

1979年インタースキーがアジアに初めて、それも岸先輩のホームグランド蔵王にやってきた(第11回蔵王大会)。北大スキー部は三浦雄一郎先輩が余りに有名で、その他の先輩の名前が出ることが少ないようだが、この折は大会組織委員会長に当時SAJ会長の北大スキー部1929(昭和4)年卒の伴素彦氏(ジャンプで1928年の第2回冬季五輪サンモリッツ大会に出場)、実行委員に第4回冬季五輪ガルミッシュ・パルテンキルヘン大会でジャンプ7位の初入賞を果たした北大スキー部1934(昭和9)年卒の伊黒正次氏、そして岸先輩の3人がこの世界的大会役員に名を連ねた。岸先輩は地元の責任者兼役員として、またこの蔵王大会招請のキーマンとしてホスト役に徹したようだ。インタースキー大会はもう一度1995年野沢温泉にやってくるが(第15回野沢大会、神津善行が企画設計、中村メイ子が司会だった。)、この折は夜の閉会式において岸先輩は晴れがましく赤とクリーム色のスキーセーター姿で1956年コルチナ五輪に猪谷千春と一緒に出場した杉山進氏と万座スキー学校の黒岩達介氏とともにライトアップされた夜のゲレンデをデモ滑降をしている。

岸先輩は1997年1月13日夕刻、バブル後の不景気もありスキー客が減ってきている中、気持ちが沈みがちな蔵王スキー学校の若いスタッフに元気になってもらおうとご馳走の準備をしていたところ、突然の猛烈な背中の痛みに襲われ救急車で山形市内の病院に担がれる。かい離性胸部動脈瘤だった。「あの時、金を儲けようとか仕事がどうだとか考えていたらきっと助からなかったろな。若い者に美味いもの食べさせよう思ってたから助かったんだ！」しかしこの入院以降岸先輩はスキーをはいていない。「カービングスキーが出始めた頃でもある。」と言われる。

岸先輩は現在、SAJスキー学校協議会、蔵王ハイム・スキースクール、山形県ライフル射撃協会、金山町観光協会などの各種会長をされている。

「スキーはもう飽きたよ。飽きる程やったからね。病人は病人らしく(相応しく)生きてりゃいいんだ。相応しく生きている時が一番幸せなんだよ。何時死んでも善いように生きろ！ 79歳頃から絵を書き始めたんだ。もう600枚も書いたかな。」裕夫人も言う、「主人は絵心があるのよ、啄木の詩、藤村、牧水、詩のイメージで(絵を)書けるようね。」お家の居間や廊下の壁に

軍隊時代の写真やスキーの写真に加えこれらの絵がいっぱい貼られている。「鉄砲も好きだし歌も好きだよ。これは国後にトド撃ちに行った時を思い出して書いた絵だ、記念に持って帰りな。手稲の絵もあるよ、このあたりが北大の牧場だったな。」と知床旅情の歌詞を書いた知床半島の絵と都ぞ弥生の歌詞と北大の背景に手稲山が横たわっている絵を頂戴した。かれこれ3時間余りもお話伺った御礼と原稿を持っての再訪とお暇を告げると「北大はいいね、このあたりは秋になると茸が美味いぞ、またおいで！」とおっしゃった。

岸先輩の「旅」のほんの一部分をここにご紹介させて頂きましたが、画集『岸英三のゆっくり人生』2006.5.20(http://www.ozsons.com/ZaoHeim.htm)というのがあります。(**写真 4-2-11**)



写真 4-2-11
画集『岸 英三のゆっくり人生』の表紙

その画集の表紙の、故郷金山町の絵と「振り返る度(たんび)に増える“ありがとう”」83才岸英三　という短い句に岸先輩の歩んでこられた「旅」がいっぱいにじんでるように思います。

(『こなゆき』第32号(2009)より転載、一部修正)

■コラム■
むいね小屋の水

無意根小屋を思う時、台所の水の音が蘇る。

小屋に到着した時、先ずはこの清らかな冷たい水で一息つく。夏の日の小屋番はもとより、真冬でも。

この水は登山客を労う自慢の水。

寝静まった小屋に響くあの水音が懐かしい

小屋の南に面した斜面中腹から湧き出た水を堰き止め、パイプで小屋まで導く。歴代、部員の手で80年以上維持されてきた

倉持寿夫(1965 農 林学)



水源



流しと台所

3　紀行

3.1　ムイネシリ岳登山記録

板倉　勝宣（1922 農）

豊平川の河畔に立って流れ行く水を眺めると、一様に見える水ではあるけれど其の一滴一滴が意外に多くの山から湧き出て来たのだと、ふと気がついた時には何だか馬鹿になつかしくなって其の山々の姿が順々と頭の中にえがかれて行く。札幌岳・漁岳・喜茂別岳・無意根岳・余市岳と数えると其れ等の山々を連ねる尾根の優しさ、美しさ、谷の深さが一年中吾等を楽しませてくれる。此の冬も又、ムイネシリ岳に引きつけられた。これから書く記録は五万分の一地形図「定山渓」によって貰ふ。

1月7日。豊平を午前8時10分の汽車でたった。定山渓から白井川を溯って其の夜は豊羽鉱山の元山に一泊した。

8日は幸にも好天気であった。靴を凍らして出発は八時になった。これは一つの失敗であった。地図に記のある小學校の上を直ちに登って胡桃沢を左手に見て、まだらな針葉樹を縫って行った。等高線660の小山の左から、長尾山の頂上の下のデッパリが頂上の様になって、木が茂って見える。其の他の所からは針葉樹にさまたげられて見通せない。この辺は、沢がいやに細かく入りこんで居て、おまけに、押出しの脊が細いからジグザグが切れないので右山にとって胡桃沢を左手にして登る外なかった。雪はあまり良くない上に浅くない。時々日が眞白な薄雲に蓋れて雪が降りしきる。皆の胸が晴れよ晴れよと、願ふのが、お互いの胸に響いて来る。等高線840の小山を越えると大分広くなってジグザグが切れる。木も大変まばらに、樺の大木が生えて左手の上に地図にある岩と急な谷とを眺める。この辺で天気は確に定まった。皆安心の色が見える。ふりかえれば北東の天に、天狗岳が薄雲の間に、岩が銀色に光って見えた。人を跪かせる景色である。見上げる目の喜び、心の喜びは思はず感嘆の声となった。此れから登りは可なり急で雪が深いが、気持ちのよい景色につられて、進んで行く。地図の△1111.6の北の小高い所は大きな雪庇をなして、其の下に白樺が一本恐ろしそうに生えて居るのが見える。乗越に十時二十五分に出た。稍左正面にムイネシリの屋根形の大きな姿が一寸かすんで表れた。思ったより距離が遠く見えた。左手に白樺のアーチをくぐり乍ら長尾山の腹を歩くと頂上は一寸上に眞白になって肩のあたり、小さな針葉樹が全く雪の衣を被って立って居た。長尾山からムイネシリへ續く尾根が奇麗に見える。ムイネシリは時々霞んで居る。尾根に出ると少し雪が浅くなった。1200の等高線の西の谷へ面した所で辨当を食った。何と云ふ好天気であろふ。風が全くない。この辺の雪の様子では風が強く吹く事が多いらしい。吾等は幸であった。温度は零下8度、バロ（注：バロメータ）663で着したのが11時5分であった。谷には沼らしくくぼみが見えて、周りを白樺が囲んで居る。北西遥かに、余市が急な白井川の谷を見せながら見える。山と山とが互に解け合って、何だか交響楽に似たものを胸の中に響かせて呉れる。静かだ、而も美しいが、それは唯の沈黙ではなく、何か抑揚がある言葉が話されて居る。雪は段々に浅くなって、やがて地図に1300、1220と書いてある押出しが眞白に直滑降を誘惑する。1280の小高い所の先は、馬の

脊の如く細い、やっと右にさけて登った。雪は漸く波形となって、恐ろしく平な頂上へ 12 時 25 分に着いた。温度零下 17 度、バロ 659。キモベツを眺め様としたが、雲にかくれて僅かに中の岳の裾が見えた。雪は硬い。定山渓の方面は晴れて、地図の一番通、二番通の平が白く見える。時間も一寸遅れたので定山渓に下ることにした。1300 と書いてある所を恐ろしくいい斜面だと思ひながら下った。下の平に降りて見ると、ムイネシリの雪庇が恐ろしく見える。中山の平もキモベツも見えて来た。小さい白樺によりかかり乍ら日を浴びて、大きな斜面のスプールを見乍らパンをかじった。時に 1 時 5 分であった。1500 の山の腹を左山として可成急な斜面を下った。下の方に行って少しブッシュがあったが大した事もなく、谷に降りた。地図にある河岸の崖の一寸上流を左に越して、崖の終り頃に来た時に樏(注：かんじき)の跡を見付け、續いて馬橇道を見付けた。崖の下には小舎があって、薄別まで 40 分と教えられた。ここが 2 時半であった。馬橇道は恐ろしく愉快に滑った。小一里を殆んど滑って薄別へ出た。四時五分には定山渓の停車場の所へ来た。この夜は定山渓ホテルで、天人は再び俗界へ来てしまった事を思い乍ら寝た。

（原文の漢数字は算用数字に変更）
（北大スキー部 Alpenzeitung 9 シーズン 1920–1921 より転載）

3.2 シャクチセニトの思い出

大沼 晃浩（2016 理 物理）

[期間]
2013/1.12～1.14 行動 3 停滞 0 予備 0 計 3

[人員]
L 上田祐太郎 HUSV Ⅲ
SL 河村和洋 HUSV Ⅱ
M 大沼晃浩 HUSV Ⅰ
M 田中健太郎 HUSV Ⅰ
M 近藤 武 HUSV Ⅰ

[概要]
① 札幌＝湯本温泉―沼上 C1 ⇔シャクナゲ周辺
② C1 ―チセ・ニトコル C2 ⇔チセ周辺＆ニト西スキー
③ C2 ―ニト西スキー―湯本温泉下山

この山行は自分にとって合宿を除けば初冬山でした。初めての冬のテント生活に、初めてのシーアイゼン、不安もありましたが、冬山って楽しいと本当に思えた山行の一つです。原稿を書いている現在から一年ほど前のことですが、楽しかった記憶と記録を頼りに書いていこうと思います。

① 湯本温泉に着くと、早速パッキング。エッセンの自分はせっせと食材をザックにねじ込む。せっせと入れたはずだが、みんなは既にパッキング終わっていた。早速待たせてイマイチ。そして短期とはいえエッセンが重い。なぜ自分は個スペにあんこを 2kg も持ってきたのだろうか。歩き始めると、暑さや重さでバテる。これから登るというのにフリースを中に着ていました。上田さんに脱がされザックにフリースを突っ込み、いざ仕切り直し。道路で地図読みしたりして、最初のテン場へ。着いたらデポしてシャクナゲ東壁へ！白く抜けた東壁はオーバーヘッドで、最高でした。二本滑ってシャクナゲ北部に向かうも、北部は段差のせいでダメでした。近藤の個スペのあんまんを食べて翌日へ。

②　この日はとりあえずチセ・ニトコルへテン場移動。途中のスロープ名「first riding」でまさしく今日の初スキー。今日も雪が素晴らしい！でも上田さんいわく弱層があったらしい。これはこけられないな、と思いつつチセ北西へ。斜面の上りはジグを切らない直登を命じられました。小規模なスロープを汚さないためという理由だったのですが、自分はそこを聞き逃し、この直登は一年目を鍛えようとする上級生からの試練、メッセージだと思っていました。無意味なことに全力を尽くす、ああ、山スキー部っぽいなあと勝手に解釈し、登り切る。そしてスロープ名「直登」を楽しむ。結構滑ったと思ったのですが、本山行の目的「滑る！」ということなので、さらにニト西へ。滑ろうと思ったスロープをほかの団体に滑られたりと、人が多い弊害が…チセ南東を楽しそうに滑ってる団体もいるし。ニト西はブッシュも少なく斜度もいい感じで、気持ちよく滑れました。最後は一番少ないコケ回数で滑れました。低レベルだけど少しうれしかった。今日も満足して近くのテン場へ。テント内では自分の個スペのあんこ（2kg）を開放しました。チューブ型の練あんは皆で（おもに近藤が）ちゅーちゅー吸い、粒あんは鍋で煮て食べました。個スペ出したとき皆うわあって感じだった。あんこおいしいと思うんだけどなあ…

③　チセ南東はコケまくった一年目には無理だということで、ニト南西へ向かいました。木の多さに圧倒されましたが、C850の平らなところで一休み。地図読みをすると、苦手な自分でもすぐわかる。凄い平だ。少し登りシーアイゼンを履く。ウインドクラストで、シーアイゼンがサクサク刺さる。初めてのシーアイゼンに興奮。ここに来て元気になる。登り切ると、晴れてて温泉が見える！斜面も見返すと壮大！見晴らしがいいので一度に沢山滑れる！と意気込んでいるかと思いきや、上のカリカリの雪は結構怖かった。でも滑り始めるとウオオ！という感じで、結局最高に楽しかった。上はカリカリ、下はフワフワ、カリフワですね！と上田さんに言ったら、カリフラワーと聞き間違えられて、このスロープ名は「カリフラワー」に。最後に下りながら滑り、ビデオ撮影等しながら下山しました。下山日もとても天気がよく、景色が良かった。終始冬山って凄いという山行でした！早くスキーや山に慣れて、こういう山行行きたいです。ニセコ最高！Lの上田さん、SLの河村さん、ありがとうございました！

（『むいね』第52号（2014）より転載）

3.3　トレッキングガイド・フォー・ユー

一迫　公利（1985 工 資源）

初めに

ヒマラヤ周辺の旅をするようになって既に3年以上たちました。皆様当然山好きの方が多いと思いますので、ひとつ自分の経験に基づいてトレッキングガイドでも書いてみようかと思います。細かいルート上の事を書く余地は無いので、各国毎の雰囲気みたいなものを書こうと思います。

パキスタン

今の状況でパキスタンにトレッキングに行こうという脳天気な人は殆どいないだろう。また今後も今までのようにトレッキングできるのかも分からないが、アフガニスタンとカシミールに平和が訪れる事を願いつつ以下に進もう。

トレッキングエリアは、①北西辺境州（アフガニスタン国境近く）のヒンドゥークシュ山脈、②K2を含むインドとの停戦ライン付近の

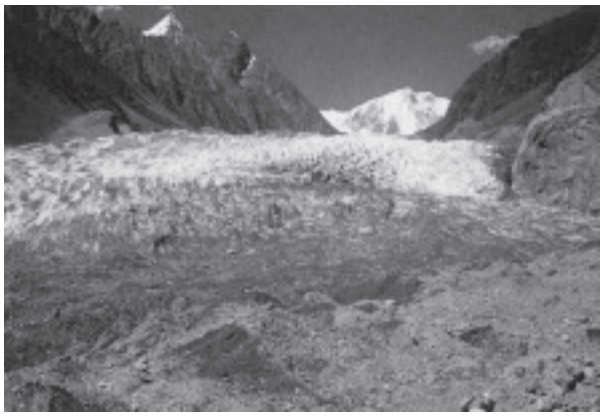


写真 4-3-1
パスー氷河の末端、ここまで日帰りトレッキングできる(パキスタン)

地域、③その中間のナンガパルバットを含むギルギット～フンザにかけての地域、の 3 つの地域に大別していいだろう。

①は近年治安が悪化していると言われ(今はもっとやばい)、かつカラコルム程の高い山もないので、私はまだ行ったことがない。

②の地域のもろに停戦ライン付近は外国人立入禁止だが、スカルドゥーやハプルー等の町では危険を感じたことはない(少なくとも 98 年 9 月時点では)。この 2 つの町が K2 のバルトロ氷河やフーシェ谷などのトレッキングの基地となる。

やはり何と言っても③の地域が最もポピュラーで手軽なトレッキングができる地域だろう。この辺は両国境から離れているせいか、或いはもともとそういう人達が多いのか、とてものどかな所だ。子どもたちはとても人懐こく、女の子も活発だ。イスラムの戒律も比較的緩いらしく、うら若き乙女が顔を隠さずに農作業に励んでいたり、私を誘惑してボールペンをプレゼントさせたりする。また非合法の飲酒をしている人もいるようだ。ちなみに私は、地域は違うがハプルーで日本人経営のホテル K7 という宿に泊まり、経営者の友人で、イギリス統治時代のこの地方のかつての領主の子孫と 3 人で酒を飲み、勧められるままに飲み過ぎて吐いてしまった。さて肝心のトレッキングだが、ロングルートとしてはナンガパルバット、ラカポシ、バトゥーラ等があるが、②の地域同様、ルート沿いに集落はなく、ろくな地図も手に入らないためガイド、ポーターを雇ってテント泊まりが必要となる。しかし 1 泊 2 日や日帰りのルートもあり、それなりの登山経験者であれば 1 人で行けるルートもある。ただネパールなどに比べると道も整備されていないし、途中店や宿もないためそれなりの覚悟と体力、登山経験が必要な事は言うまでもない(じゃあ言うな！)。

パキスタンのトレッキングは、気候が乾燥していて植生が薄いため常に直射日光を浴びる事、道の状態が良くない事、途中集落がなく食糧の補給ができず宿泊施設もない事、よい地図が手に入らない事から、ネパールに比べるとかなり困難なものとなる。

しかしネパール並みの高峰を多く抱え、また気候の違いから一味違った景観が得られる所でもある。トレッキングしなくてもカラコルムハイウェー沿いにバスで旅をすれば、すばらしい景観が目の前に広がり、歩かなくても、パスーなどの氷河を見ることができる。またフンジェラーブ峠を越えてウイグルまで行けば、インド亜大陸とユーラシア大陸が衝突した事を必ずや信じるようになるだろう。

パキスタンでは確かに治安の悪化や、イスラムの宗派同士の争いがあるのは事実らしいが、私は多くの礼儀正しく親切な人懐こく陽気な人達に会った。イスラムに対する無用な偏見が広がらないように。

ネパール

思い起こせば初めての海外旅行は 93 年のネパール旅行だった。当時から日本人のツアー客はウジャウジャいたが、今はもっとすごい。かつてはアブナイ感じの旅行者もたむろしていたが、今はごく普通の観光客ばかりになった。ネパール当局としても、不良外国人にうろつかれるよりもリッチなトレッカーを歓迎するという事だろう。

さて本題のトレッキングについてだが、情報は日本で沢山手に入るので今更私が書く程のこ



写真 4-3-2
ヌプツェとローツェ、この背後にエヴェレストがある（ネパール）

とでもない事に気づいてしまった。それじゃあいったい何を言けばいいのだろう……？　そうだ！トレッキングを安くあげる方法について書こう！

という事で、まずカトマンドゥトリブヴァン空港に着いたらタクシーでタメルに行こう。正規料金は 200 ルピー、夜間なら 300 ルピー（2001 年 4 月調べ）。それ以上はびた一文払ってはいけない。宿は決めていないと言えば、タクシーの運チャンは彼のなじみの宿に必ずや貴方を連れて行く事であろう。多分その宿は一泊＄10 位のはずだ。そこには泊まらず別の安い宿を探しなさい。ガイドブックで探さずに、町の人に聞きなさい。タメルには一泊 150～200 ルピーで泊まれる宿が必ずある。宿が決まってしばらくタメルでうろついていると、必ずや旅行業者につかまる事と思うが、そこで言いなりになってはいけない。メジャーなトレッキングルートには宿もたくさんあり、いざとなったら現地でガイドやポーターを雇うことも可能だ。初めから諦めてはいけない。タメルの書店では少々高いが外国製のよい地形図（1/5 万図もある）が手に入るので、それと『地球の歩き方』ではなく『Lonely Planet』を頼りに歩きなさい。次はトレッキングの起点までの移動だが、アンナプルナに行くなら 23 番の市バスにのって郊外のナヤバスパークまで行き、そこでポカラ行きのバスに乗りなさい。バスチケットは必ずバスパークの窓口で購入しなさい（旅行業者から買うと高くつく）。ランタンに行くなら同様ナヤバスパークからドゥンチェ行きのバスに乗りなさい。エヴェレストに行くなら飛行機でルクラに行くような愚行は避け、市内のバスパークまで歩いて行ってジリ行きのバスに乗りなさい。往復 12 日ほど日程が増えるが飛行機を使うより安くつく事は疑いの余地がない。しかも高所順応もできるので、いきなり飛行機で来た連中に対し、貴方は確実に優位に立つことができる。トレッキングがスタートしたら後はどの宿も似たり寄ったりなので、節約するとすれば食費位だろう。ダル・バート・タルカリ（豆のカレーと炊いた米に野菜のおかず）は一般にお代わり自由なので、これを主食とすることで結構節約できると思うが、健康上の問題もあるので食事位は存分に。トレッキングが終われば後は同じやり方でカトマンドゥに帰ればいい。とても簡単だ。

以上の方法により、日本でツアーを申し込むよりも圧倒的に安上がりで、かつ自由度の高いトレッキングが可能となる事について、一切の疑義を差し挟む余地はない。さあ明日から中学英語を復習し（ネパール人だって高級な英語はそうそう喋れない）、幾つかのネパール語単語を覚えて準備しよう。蛇足ながら、ネパールでも最近物騒な事件が起きて観光客が減っているようだが、近所の国で核兵器でも使用されない限りそれ程恐ろしい国ではないだろう。

インド

インドは広い。ヒマラヤの主要部分がネパールの独占状態にあるとはいえ、インドヒマラヤも当然広い。故にトレッキングエリアも広く、地域によりその様相も多様だ。ここではラダックとウッタラカンドを紹介しよう。

ラダックは、かつてラダック王国のあったチベット系仏教徒の住む、現在はジャンムーカシミール州の一地域。一説によればチベットよりもチベットらしい所と言われているらしい。旧王宮のあるレーの町には外国人向けのゲストハ



写真 4-3-3　ガンジス川はここから始まる(インド)

ウスやレストランがある(概してチベット系の人達は外国人観光客に対応するのが上手だ)。またイスラム教徒も多く、モスクもあって一種独特の趣がある。私が行った 99 年 7 月は、ちょうどパキスタン側からの越境攻撃が隣接地域で起こっていた時期だが、軍人の姿が目立ち、戦意高揚の垂れ幕があった事を除けばとてものどかな雰囲気で、外国人旅行者もかなりいた。

さてここでのトレッキングだが、1 週間から 10 日位のルートが幾つかあり、その内で最も簡単そうなルートに私は行った。しかし結果から言えば、かなりハードなトレッキングとなった。途中に宿が殆どないため、テントと灯油コンロ、レーで調達した灯油、米、小麦粉、野菜等、25kg 以上のザックを担ぐ事になった。ルート自体は簡単だが川にはまともな橋がないため、濁流の川を時には膝上の水流に抗して渡渉しなければならなかった。これは日高での沢登り経験が無かったら不可能であっただろう。またパキスタン同様まともな地図は無く、新宿紀伊国屋で購入した点と線だけの概念図のような地図を頼りに、迷ったら現地の人に聞きながら行かねばならない(集落はある)。標高 5,000m 近い場所での悪天による停滞はかなりつらかったが、遊牧民の訪問を受けてヨーグルトドリンクを貰ったりして結構楽しい思いもした。とはいうもののここでのトレッキングは一人では行かずガイドとロバを雇うのが得策だろう。

ウッタラカンド(ウッタールプラデーシュ州の山岳部)は聖なるガンガーやヤムナーの源流部で、それ故ヒンドゥー教徒やシーク教徒の巡礼が多く、いわゆるトレッカーは僅かしかいない。人が多くて捨てられたゴミも多く、またネパールトレック程の景観は望むべくもないため、ここでの一番の見所は巡礼者の姿にあるだろう。基本的に彼らは暑い平地に住む人達なので、山を歩く姿はぎこちなく、とても寒がりで、申し訳ないが見ていて滑稽なところがある。裕福な老人等はダンディーといわれるかごに乗って巡礼している。もちろん一般庶民には手のでない料金が必要だ。ちなみにこれを担いでいるのはネパール人の出稼ぎが多いらしい。しかしその一方で腰がほぼ 90 度曲がった老婆が裸足で巡礼している姿を見ると、とても感動的だがなんとなく複雑な気分になってしまう。ウッタラカンドは、完全に国内にある山としては最高峰のナンダデヴィ等の 7,000m 後半の高峰が多くある地域で、それなりのトレッキングルートもある。ただし隣の中国との間には国境紛争があり、あまり奥地までは行けないようだ。ここから先は撮影禁止だと国境警察に言われたりする。しかしルート上にはかつてチベットとの交易で栄えた集落跡があったり、ヨーロッパ系とモンゴロイド系の顔立ちの人達が混在していたりして何となくシルクロードといった風情がある。

やはりインドでのトレッキングはネパールに比べるとかなり不便で、景観的にも劣ることは認めねばならない。しかしここでは人々の造る風景がおもしろく、また人の少ない所に行けば野生動物を見れるチャンスもあり、行く価値は十分にあるだろう。

終わりに

私は「ノーガイド・ノーポーター、一人で歩く」をルールにトレッキングしてきました。旅

行会社やガイドブックは、「現地のガイドを雇った方が現地の生活や文化により接することができる」と主張します。確かにそうかもしれません。しかし私は一人だからこそ体験できた事も多くあるだろうと思っています。勿論登山経験のないドシロウトがやっちゃいけない事であるのは言うまでもありませんが、我々はドシロウトではないという事をまず強調したいと思います。私のような人当たりの良くない人間でもそれなりにおもしろい体験ができるのです。まして人付き合いの上手な皆さんであればもっとおもしろい経験ができるに違いありません。

来年の春はパキスタンに行きたいと思っていますが、現在の状況を考えると行ける見込みは少ないかもしれません。「自由、民主主義、文明」と言われているものから自己中心的発想と暴力が排除され、世界に相互理解と平和が訪れん事を切に願って止みません。

（『こなゆき』第 25 号（2001）より転載）

3.4　アフリカ赤道直下のサマースキー

小瀬川　修（1977 農 農学）

三年間のアフリカでの任期を終え、今、私は帰国途中スイスに立ち寄っている。ここツェルマットの一民宿から見える雄々しい鋭峰マッターホルンの眺めは素晴らしい。午前中のテオドゥール氷河でのスキーも満足のいくものであった。そして、スイス・ワインが美味い。

しかし、私は何故か寂しい。今度アフリカへ戻れるのは何時の日のことだろうか。

三年前、南部アフリカの内陸国ザンビア行きが決まった時、キリマンジャロ山、ケニア山のことが私の脳裏をかすめた。滞在中、もしかしたら登れるかもしれない、滑れるかもしれない。一度封をしたアナカンを開き、私は登山具とスキーを荷物に加えた。

実際、広大で野性的なこの二つの山は感動的でさえあった。その山行を思い出すだけで私は満足の気持ちで胸が一杯になる。そして、酔う程に私はまどろみ始め、いつしか正面に見えるマッターホルン北面の氷河がキリマンジャロ山、ケニア山のそれと二重になって見えてくるのである。

キリマンジャロ山（1985 年 11 月 17 日〜21 日）

アフリカの山と云えばキリマンジャロ山と云う程に有名で、誰もが知っている山である（**写真 4-3-4**）。12 月から 1 月にかけて、休暇を利用した日本からの団体登山客で賑わう。高度順応さえうまくいけば、山スキー部員なら誰でも問題なく登ることができよう。詳しい行程についてはガイドブックが沢山出ているので省く。しかし、入山してから頂上に立つまでの四日間毎日千 m ずつ稼がなくてはならない。大抵の人は最後のキボ・ハット（4700m）で高山病に悩まされる。私もここで軽い頭痛におそわれた。その夜は眠れない程の痛みではなかったが、実際に私の眠りを妨げたのは同宿したアメリカ人数組であった。高山病に呻き苦しむ彼女、自分



写真 4-3-4　キリマンジャロ山（5,895m、タンザニア、筆者撮影）

も苦しいながらそれを介抱する彼氏、そして愛の言葉。それが数組。

「エエイッ！山に来てまでイチャツクナ！帰れ帰れ！」単独の私は何度大声を張り上げようと思ったことか。

夜中十二時。眠りを妨害されて苛立つ私はガイドのいれてくれた茶をすすり、固いビスケットをかじって小屋を出た。しめた。一番の出発である。外は小雪が降っていた。

ガイドのクンダ氏は三浦雄一郎一家がキリマンジャロ山大滑降した時お手伝いしたとかで、その時支給された立派な羽毛服で上下を固めている。私はと云えば、ワイシャツの上に秀岳荘ジャンパー、下はパッチなしのジャージィーだけである。しかし、北海道で鍛えた身にとって大した寒さではない。歩く程に汗ばみ始め、いつしか頭痛も消えていた。

雪が止んだ。下を見ると、私より後に出発したパーティの灯りが暗闇の中によく見える。登る程にその差は段々広がっていった。なかには脱落して途中から下に向う灯りもあった。

快調に登り続け四時にはギルマンズ・ポイント着(5690m)。そこから新雪の積もるクレーターの内側を巻くようにして登り、5時50分ウルフ・ピーク着(5895m)。日の出を拝んだ。見ればクンダ氏はヒィーヒィー言って雪の上に倒れ込んでいる。無理もない。ペースが早過ぎたのだ。この日のために私は三ヶ月前から毎日5kmのジョギングを続けてきた。一週間前からは酒も断った。最高の体調で臨んだのだ。だからギルマンズ・ポイントから上は私が先頭に立ち、雪にステップを切ることができたのである。

クンダ氏の名誉のために一言付け加えよう。通常キリマンジャロ山に登ったと言っている人の十名に九名はギルマンズ・ポイント止まりだと思って間違いない。読んで字のごとく、ギルマンズ・ポイントはクレーターの縁の一点にすぎず、頂上ではない。キリマンジャロ山の頂上はウルフ・ピークなのである。断固として頂上は一つしかないのである。その日頂上を目指した二十三名のうち、ウルフ・ピーク到着者は私を含めて二名であった。

ケニア山(1986年6月28日〜7月1日)

残念ながらキリマンジャロ山行きの時はスキーを持参しなかった。家内の猛反対にあったためと、クレーター内部の雪の状態、斜度について詳しい情報が得られなかったためである。しかし、実際に見て、これは滑れると確信した。時期を選び、テント持参で自由な日程を組み、ギルマンズ・ポイントの岩陰に最終キャンプを張るなら、私のスキー技術でも大丈夫である。アフリカ再訪のチャンスが与えられたら、次回は絶対「シーハイル！」なのだ。

その分、ケニア山では思う存分滑ろうと思った。例年6月、ケニア山レナナ峰(4985m)直下から最終オーストリアン・ハットにかけては雪がびっしり付いているとの情報を得たし、約十年前に同峰に登った悪友大口も、いい斜面だと以前私に教えてくれたことがある。あとはトレーニングと如何に家内を説き伏せるかである。

キリマンジャロから帰ると、私は又走り始めた。毎日7km、週末には20km。86年3月にはザンビアの首都ルサカでフル・マラソンがあり、良い機会なので参加した。恥ずかしながら記録は四時間三十六分。目標の四時間は切れなかったが、完走したことに自信をつけた。余談だが、ザンビア人ランナーの中にはまだまだ裸足の者が沢山おり、また皮靴で完走した人がいたのには驚いた。

マラソンの翌日、いつものように私は走った。これを見た家内は、私の決心が尋常でないことを悟った様であった。6月、10kg減量達成。家内は終に諦めた。ケニア山でスキーをするなら今しかない！ 私は帰国途上ケニアに寄ることにした。かくして、ルサカ空港で沢山の協力隊員の見送りを受けた際、私の出立ちは登山靴を履き、ザックを背負い、片手にスキー、片手に雑袋を持つという、アフリカでは極めて

風変わりなものであった。

さて前置きが長くなった。6月30日午後1時30分、私はスキーを担いでレナナ峰に立った。キリマンジャロ山の時の高度順応が残っていたのか、高山病の症候は全く出ず、快調そのものだった。空は快晴で雪の状態も良く、頂上直下から滑れそうである。真横にはネリオン・ピーク(5100m)が聳え立っている。私は慎重に金具を止め、衣服をチェックし、深呼吸を三回した。これから滑り降りようとするレウィス氷河を前にして、不思議と私に恐怖心はなかった。あるのは唯歓喜のみだった。それは真にアフリカ赤道直下の大サマースキーの始まりだった(**写真 4-3-5**)。



写真 4-3-5　ケニア山レナナ峰(4,985m)からの大滑降

(『北大山とスキーの会会報』1983～1986年より転載)

3.5　8,000m 峰からの滑降

寺山　元（1990 工 土木）

2000年5月16日未明

背中に5キロの酸素ボンベと99cmのスキーを背負っているのもさほど気にならないほど、毎分1.5Lの酸素の効果は絶大で、標高8000mでも思いのほか体が動く。

ロックバンドを越えたころ夜があけた。6000mより下は雲海の中。雲の上に頭を出したヒマラヤの巨峰に朝日が当たる。微風。あと3、4時間、午前中は天気がもつだろう。それまでに山頂へ、そして最終キャンプに戻らなければ……。急登が終わり、緩やかな頂稜へ出る。山頂まではもう一息。大丈夫だ、調子はいい、意外と楽勝じゃん、今までの思い入れが走馬燈のようにはさっぱり巡らず、クールな冷めた感覚で最後の歩を進めた。

風にはためくタルチョーが見える。やれやれあれがピークか……やっと片づいたか。とその先に忽然と黒くエベレストが現れた。

その瞬間、叫んでいた。爆発的な感動が不意にやってきた。その極限の世界で生きて帰るために、実は必死に自分をコントロールしていたのが、一気にはじけ飛んでいた。深い氷河を挟んで30km彼方に、見上げるわけでなく肩を並べるように世界最高峰が見える、それがチヨーオユー山頂8201mに着いた証拠であった。

ヒマラヤから帰ってふと気づくと半年がすぎていた。

思えば3月末から6月はじめまで2ケ月間の体験。それ以前に準備に1年かけたものの、濃密であったが短い非日常の日々。そこから生きて帰った時からまた日常が始まり、自分が本来はこの静かな日本の生活の中に生きているということを思い知らされたような気がする。間違いなく自分の人生を生きているのだが、ともすればそれを実感せずに流されてしまうのが人の常なのか。

ただ、今後も続くこの普通の暮らしの中で、流される自分を立ち止まらせ、「生」の実感へ回帰させる一つのシーンをつかんだ。

山頂からのスキー滑降はきわめて情けない滑りで、日本人初なんて威張れたしろものではないが、この一点において自分の人生に大きな意味をもつ。

あたりまえだが 8,000m 付近の雪は硬く、スキーにとっては単なるアイスバーン。クラストではなくアイスバーンなら、シヨートスキーでジヤンプターンを細かく決めていけば行けるのでは……。Cl まで担ぎ上げたのはお馴染ジルブレッタ 300 のついた 180cm の山板と、ジヤスコで買った 9980 円のバッタモノのファンスキーの 2 本。頂上アタックに持ち上げたのは、何より“軽い”ファンスキーであった。いよいよ頂上から滑り出す。正直、ぎりぎりまで迷った。行けるのか、本当に行くのか？ 意識も身体もしっかりしている、しっかりしているような気がする……。細胞の一つ一つ自分の意志の通り動くのか…。山頂の薄い空気を最後に一つ大きく吸い込む。声には出さず、心の中でウンとうなずく。

行こう。

酸素の流量を毎分 3L に上げ、マスクを付ける。そして、緩やかな頂稜を滑り出した。緩い斜面を割と快適に滑りながら確認する。よし、まだ身体は動く。登りはフィックスロープで通過したロックバンドを避け、雪のついた斜面をつなぐためにはノーマルルートを外れなければならない。追いついてきた他の隊員達と別れ際に写真を 1 枚とってもらう。そして 1 人、急斜面へ(**写真 4-3-6**)。

極限の集中。エッジが外れ滑落したら 50cm 以内に止めなければあの世行き。一つの動作ごと呼吸が乱れ、それを整えるためにはしばらくかかり、再度、意識、体、感覚をチェックして動き出す。

実際、ここら辺は滑ったなんて言えたもんじゃない。そろりそろりと歩くように斜滑降。急斜面のため、山足の外エッジと山側ストックのピックで斜面に引っ掛かって居る状態で休憩し、呼吸を整える。意を決してジャンプターン。そして、止める。また呼吸を整える。滑る、というよりとにかく下りていった。しかし、次第に状況は厳しくなる。下から偵察したときは、結構雪がついていると思ったあたりも、岩が島状にでており、雪の層が薄く、ターンのショックでところにより板状にはげるやばい状態。BC から無線で雪の付ぐあいを見てもらうが、悲観的な情報ばかり。斜度は 50 度ちかくなり、標高差 500m はあるはずの C3 横のカール状雪面がすぐそこのよう……。行けそうな気もする、どうする？息を整えようと、周りを見回す。すると、10m 程離れた斜面から突き出た“もの”に気づく。岩かと思って眺めていたが、どうも色合いが違う。

死体であった。

顔のあたりは雪に埋まり目が合わなかったのは幸いだったが、アイゼンを付けた足が急斜面に投げ出されていた。後に聞いた話から考えると、10 日ほど前にアタックにでて帰らなかったフィンランド人の男性であろう。

死体を見ても結構クールであったように思う。それどころではない程、集中していたということだったのだろうか？ 死体発見を BC に連絡し、さて、行くか、戻るか再び考える。美しく白いヒマラヤのど真ん中。集中力と酸素のおかげで、自分が今生きていることを強烈に感じていた。そして、ここが俺の生きるところなのか？



写真 4-3-6 標高 8,000m、ロックバンドの上部。他のメンバーと別れ、急斜面に入る

ふと自分の人生を俯瞰するような感覚を持ったような気がする。今やヒマラヤは、シェルパ達の職場（スーパーでない登山家をサポートし、彼らの夢、ヒマラヤへの登頂を実現させるための）とさえ言える。一方、現代の冒険家と呼ばれる人たちの登攀は、すさまじいレベルにあるわけで、そんな冒険家やシェルパたちこそが、自分の全存在をかけて、このヒマラヤに生きているといえる。彼らには遠く及ばず、自分が本当に勝負をかけるべき世界がここなのか？

その時はそんな悠長に考えていたわけでなく、感覚的に「うん、帰る」と引き返しを決意した。上記の葛藤は後日、冷静になって振り返るとそういうことであったように思う、という後づけの説明かもしれない。しかし、この「引き返せたこと」が間違いなくこの遠征で自分にとって最大の収穫、自らの意志と判断で「生」をつかんだ体験であった。

アイゼンでノーマルルートに戻り、フィックスロープでC3に戻る。同日中にC3を撤収し、酸素ボンベをはずしてC2まで下山。チョーオユーの中でこの部分だけは極めて快適な斜面。のはずが、人生最大にしんどいスキーであった。深夜1時起床でピークまで往復したのだから疲れているのはもちろんだが、やはり7,000m台の「無酸素スキー」はきつい。

雪もクラストで最悪。2ターン以上は続かない。この時は短いスキーを呪った。その日はC2に泊まり、翌日にかけてClの6,300mまで約2,000m弱〔途中3,400mは未滑降〕滑ったわけだが、「滑った」と実感するようなスキーはC2手前の100mとC2～Cl間の半分くらい。さっぱり楽しいものではなかった（念のため）。

今はとにかく、生きて帰り、家族と過ごし、元の慌ただしい仕事に追われ、地味な幸せの中にある。「せっかく生きて帰ってきたのだから、今後の人生も面白くしよう」と、たくらんでる自分も相変わらず。でも、少し焦りは無くなったような気がする。自分の生命力、集中力、やりたいこと実現能力、みたいなものも試すことができたことだし。「日本に帰って頑張ろう、この時と同じ集中力で」。あの急斜面から引き返したとき、ひとつけじめをつけ、リアルな生活への戦闘準備を整えた、といったところだろうか。



写真4-3-7　標高7,000m、C2を出て滑りだす。空気が徐々に濃くなり、やっとスキーを楽しめる



写真4-3-8　順応のため登ったヤラピーク（4,800m）の山頂直下を滑る



写真4-3-9　Cl（標高6,300m）を撤収。担ぎ上げた2台のスキーも下山

以上、全ては生きて帰ったから言えるたわ言でした。山とスキーの会のみなさま、ヒマラヤは今や自己表現の舞台です。適当に、真剣に、遊びがいのある世界に是非！

（『こなゆき』第 24 号（2000）より転載）

3.6　日高全山縦走記　1991 年 2 月 7 日～3 月 4 日

伊藤　健次（1991 経 経営）

深い沢をつめ急峻な尾根を登ってようやく辿り着けば、日高の稜線は波打ち見え隠れしながら遙か彼方へと続く。魅惑的なアイヌ名を持つその頂に立った者は誰しも、さらに続くあの白い稜線を自分の足で辿ってみたいという想いに駆られるのではないだろうか。苦労して辿り着いた稜線は冬ならば一層厳しく、せっかく登ったところで容易に泊まれるところは少ない。今なお、なかなか辿れぬ沢や頂の残る広大な山脈は、静寂な自然の領域である。

凍てつく寒さの中、谷の陰影を一層濃くしながら朝日に山脈が浮かび上がるのを驚き、稜線をラッセルしながら風の心地よさを覚え、夜半、手が届きそうにちりばめられた星に空の広さを感じたら、もうすっかり日高の稜線に魅せられてしまうだろう。

「脈々と果てしなく続くあの稜線を、とにかく歩き通してみたい。」日高への山行を幾度か繰り返すうちに、いよいよそんな思いが胸の中で膨らんで、何時の間にか、街に居てもそのことばかり考えるようになっていた。

縦走への準備

北海道の大学へ来たのは漠然とした北への憧れからだった。そこで山スキー部という独特なクラブに巡り会い、北の山通いが始まった。雪のある所ならどんな所でも滑ってやろうというのをモットーに、道内の全域にトレースを広げていた当時の山スキー部の活動は盛んで、未踏破で残る日高の稜線も少なくなってきていた。1 年目の頃はどこへ行っても新鮮だったけれど、札幌へ向かう飛行機の窓から見た白い日高山脈の美しさが頭に焼き付いていて離れず、いつか日高へ行きたいと思っていた。しかし、皮肉にも遭難の救助にペテガリの山麓に行ったきり、クラブの活動は暫く停止。活動を再開してから間もなくスキーでの怪我で入院生活を送るはめになり、1 年半ほど山へは行けなくなってしまった。

憧れの日高に初めて行ったのは、クラブに入ってから 2 年半が経った秋、エサオマントッタベツ川から札内岳への山行だった。それからというもの暫く動けなかった苛立ちと兼ねてからの憧れに引っ張られて、再び山に通いだした。ほとんど夢中で登った。なかでも、積雪期、日高の稜線の解放感に強く惹かれて、それが忘れられなかった。稜線に吹く風と空の広さに心が洗われる想いがして、もっと長く稜線にとどまってみたいと感じ始めた。

そして 1990 年 8 月。カナダ・ローガン峰への遠征を終えて札幌に戻ると、それまで暖めていた考えに決心がついた。冬の日高を縦走しよう！行くなら一人に限る。登山というよりとにかくシンプルな旅がしたい。だから出発は馴染みのある日勝峠、それから海に向かって、目的地は襟裳岬と決めた。

その秋から荷上げを 4 回。最終的な準備山行としての意味も含めて、北の神威岳、コイカクシュサツナイ岳、南の神威岳、更に楽古岳に行った。

クラブにいる間は単独行は禁止だったので、ひとつひとつの山行が数少ない単独行のトレー

ニングだ。始めは緊張して、何だか地面に足がついていないんじゃないか？という感じだったけれど、「一人だからといって何も特別なことができるわけでもないし、これまでパーティーで行っていた時と同じようにやるだけさ」と思えば気が楽になった。何より、一人の山は静寂で、複数では決して得られない解放感があった。いままで何気なく見ていた物が、驚くほど新鮮だった。自分のペースに合わせての行動は、決して危険ではないと確信した。

「自分の生活も一人で出来ずに何が単独行だ」という事も頭を離れず、大学５年目の学生だったけれど、その頃から生活費も、勿論山の準備も自分で稼ぎ始めた。そのため短い期間いろいろな所で仕事をさせてもらったが、なかでも養鶏をしている先輩の所での“鶏のフン出し”は傑作だった。まず、何千羽という鶏のいる鶏舎に牧草用のフォークを持って入り込み、大騒ぎする鶏を追っ掛けて隣の空部屋に追込む。鶏の出た部屋に残るは、こんもりとした“フンの山脈”だ。それをフォークで突き刺し、むしりとって、開いておいた窓から外の運搬車めがけて投げ出すのだが、フンは時間をかけて積み重なったおかげで、とても重く、金属のフォークが折れるほど粘りがある。何時間もかけ、へとへとになって地面が出るまで平らにする頃には、もうすっかりフンの匂いが体にしみ込み、時にはフンに足を滑らせフンまみれになったりで、もうフンだりけったりという感じなのだ。所謂 3K の代表選手のような仕事だからこれも“単独行”が殆ど。お陰で体力は勿論、精神力も鍛えられてよかった…。そうこうしているうちに、全てデポが完了し、札幌にも本格的な冬将軍がやってきた。行動中は、帯広の河西さんが無線の定時交信を請け負ってくださることになり、すっかり準備が整った。じたばたしながらいろいろな人に会っていると、教えられることが多く楽しかった。何よりも、自分の好きなことに向かっているのが嬉しかった。

出発

1990 年 2 月 7 日　日勝峠で最後の電話を掛け、車を運転してきてくれた後輩の見送りを後に雪の斜面を登り始める。いよいよ旅が始まったのだ。出発にふさわしいもったいないくらいの天気。稜線の白さが眩しい。少し緊張しているせいか、ザックの重さも気にならない。体が暖まった頃にはもう国道がずーと下に見えた。手作りの弁当が嬉しかった。とにかく稜線に上がったときの気持ちは素晴らしかった。この何ともいえない解放感！それでいて皆の励ましを強く感じている。山の中に一人とり残されてもまだ不安感は無い。スキーを走らせペケレベツにつくと、程よい西風が曇っていたサングラス

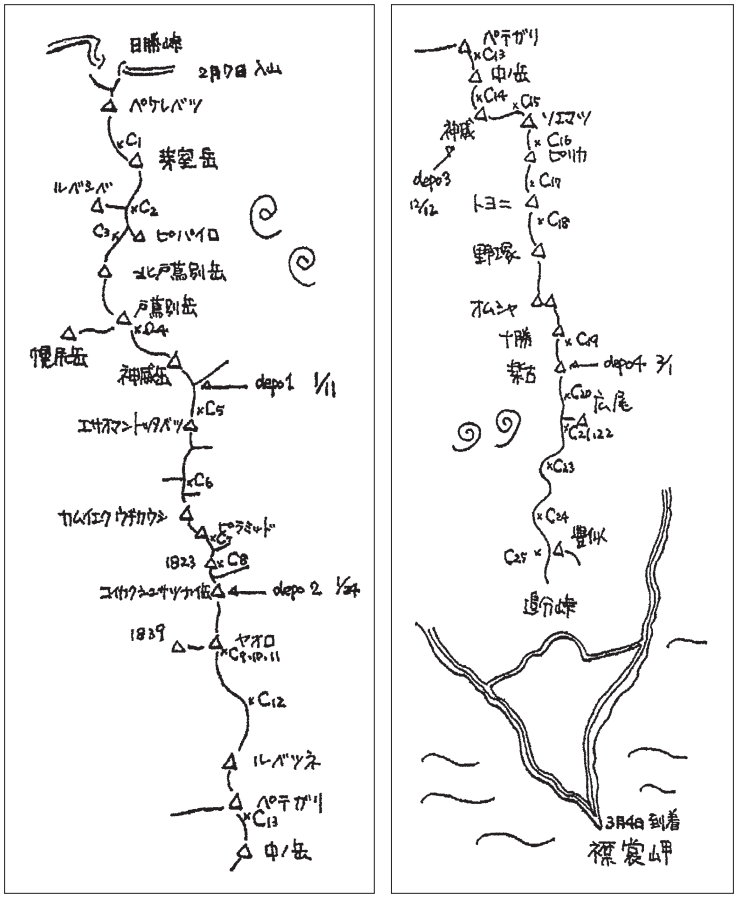


図 4-3-1　日高全山縦走ルートとキャンプ地。左図から右図につづく

を洗ってくれた。もくもくとした雲のもと芽室岳が遠くに見えた。シールも良く効いている。後半寝不足のせいかペースが落ちたが、最後は樹林内を快適に滑って西芽室岳手前のコルに降りた。前半は荷物が重い分どれだけ歩けるか心配だったけれど、スキーの威力は絶大。予定の2倍位の距離が稼げた。タンネの傍にテントを張って、30分で記念すべき初日の宿の出来上がりだ。

今日は札幌を3時半発。まだ真っ暗な中、沢山の人が見送りに来てくれたのには感激してしまった。歩いている時もいろいろな人のことを思っていた。「とにかく稜線に上がるまでが勝負」そう信じて準備を進めてきた計画がついに動きだしたのだ。大勢の人に影響を受け、支えられて、今日僕はここにいる。ここからは先は自分の体一つが頼りだ。まだまだ行き着く海のことなど実感出来ない。でも、どの一歩も間違いなく海につながっていると思うと、なんだか安心できる。

2月8日　朝からちょんぼした。お茶を飲もうと思ったら、水筒をシュラフの中に入れて寝るのを忘れていたおかげで、水がカチンコチンに凍ってしまったのだ。流石に氷の塊を持って寒い稜線を歩く気はしないので、まずは氷を溶かして朝飯の準備にとりかかった。

天気は曇り。歩いているうちにいい青空が広がった。西芽室辺りから見る尾根のカンバが霧氷を纏って綺麗だ。気温が低いのだろう。ダイヤモンドダストが舞っている。何時見ても心が明るくなる透明な光。北海道の冬山の魅力はあの不思議な輝きに一層磨きをかけられる。芽室につくとガスが出てきたけれど、暫くザックに座って休むうちに下っていく尾根がガスの切れ目にうっすらと見えた。わかりやすい日高の稜線といっても、ひとりだと自分の判断を客観的に見てくれる人間がいないわけだから、出来るかぎり確実に動かないとまずい事になる。この「客観的」というのが難しいのだ。雪盛山もなんとかスキーで越えさらに足をのばす。風の通り道でもある稜線には、風の残した足跡が所かまわず刻まれている。ウインドグラストした深い風紋にスキーを取られてつんのめり、一人で雪の上に転がってしまうと何だか情けないし、誰も声をかけてくれる訳でもない。でもこういう時思わず空を仰いだまましばらくぼーつとしているのもなかなか愉快なものなのだ。天場に着いて夕食を食べ終わると早速湿り始めたシュラフをストーブで暖める。さんざん暖めて寝る前にテントの外にでると、静かな山の夜に音が響きそうなくらい、空には星が散らばっていた。

出会い

2月9日　夜半風が出てテントを揺らした。天気が悪いとつい寝坊してしまうのは僕の甘いところ。しかし、ごそごそとシュラフを出ると斜面が深い赤紫色。晴れである。すぐにラーメンを食べてパッキングした。歩きだすと曇ってきたのでルベシベ山をアタックするか迷ったが、ザックを置いて主稜線から少し離れた白いピークを目指した。帰りはシールを外してのスキー。ちょっとの距離でも軽い雪を飛ばしながらのスキーはやめられない。

ピパイロ岳も主稜線から外れたピーク。この辺りから稜線が険しくなってくる。こういう山を登りに行くのは、道草を食べながら行くようで楽しい。けれど、幾つかギャップを越えた後、雪の着いた岩稜がいやらしく雪崩そうなのでピークまで30mくらいだったが、おとなしく引き返した。ひとりだと行動の判断が早い。

ピパイロから少しいくと稜線上にテントを見つけた。風に揺られ雪が吹きだまっている。「ああ、人がいる！」と思って近づいてコールすると、もごもごと黒い顔が出てきた。「どこからですか？」入山はどこからかという意味で聞いた返事は「東京からです」でびっくり。しかも彼も単独で「出来れば襟裳岬まで行きたい」ということだった…。人に会うことなど滅多にない冬の稜線でこんな出会いをするなんて。2月2日に芽室岳から入ったというから

ゆっくりしたペースだ。おそらくこれから僕の方が先に行くだろうからデポ品を使っても結構ですよと言おうかと思ったが、何かお節介な気がしてやめてしまった。僕は北海道に住んでいて何度か日高にも足を運んでようやく計画ができたけれど、もし東京にいたらここまでわざわざ来ることが出来ただろうか？ それぞれ方法は違っても気持ちは通じるものがある。天気が悪くてあまり立ち話もできなかったので、取り敢えずこちらの定時交信のことを伝え「お互い気をつけて行きましょう。」といって別れたが、その人の名前も聞かなかったことに気付いた。何か自分の姿を見ているような気がして不思議だった。

これからまだまだ道程は長いからお互い先のことはわからない。でもそれぞれ一人でやりたいと思って（きっとそうだと思うのだが）山に入っているのだから、あまり気を使わずマイペースでいこう。1967峰を越えた岩峰の所で視界が無くなったので、少し引き返して稜線を切りテントを張った。どうやらあさって低気圧が通って天気が崩れるらしいから明日は戸蔦別を越えて雪洞でも掘ろうか。幌尻岳はゆっくり攻めよう。時折テントを揺らした風ももうおさまったようだ。ラジオの声がよく響いている。

2月10日　今日は運が良かった。ガスっていたので幌尻は駄目かと思っていたが、戸蔦別で雪洞を掘ろうとしたところで強い季節風がガスを吹き飛ばしてくれたのだ。早速、非常食と目玉帽をジャンバーのポケットに押し込んで走るように七つ沼上の細い稜線を辿った。スキーのついた大きなザックを外すと嘘のように足が軽い。幌尻のピークが見える程天気は回復しているが、予報では午後から崩れるとのこと。時間はかけられない。それにしても幌尻の頂上稜線はだらだらと長くて、晴れていなかったらきっと迷ってしまうほど幾つもポコを越えて本物が現れた。写真を撮ってデポ地に引き返すともうへとへと。案の定ガスがでて、そこから戸蔦別への登り返しがひどく長く感じてしんどかつた。天気が悪くなるというから警戒して雪洞を掘ろうとあちこち探したが、雪が無い。なんとか見つけて掘り始めるとかなりいけそうなので、今度は欲が出てテントを中に入れたくなり穴を広げると、いくら掘ってもテントが入らない。最後は意地になって完成させたらもう五時半になっていた。疲れ果てて聴いたラジオは曰く「明日はあまり崩れない」とのこと・・・。

2月11日　天場からカムイ岳に続く稜線は全てスキーを使った。細めで小さな雪庇が出ているところも良く見ながら上を行った。とにかくスキーの威力は抜群。こんな魔法のほうきみたいな素晴らしいものを背中にしょったまま使わない手は無い。カムイ岳に着いてシールを外すころになると、南風に雲が流されて時折晴れ間がのぞいていた。デポ地に近づいたので目を凝らすと「あった！」間違いなく僕が1月に立てたデポ旗だ。無事一つ目のデポを回収すると思わずほっとした（**写真4-3-10**）。これが見つからなかったらえらいことになる。途中エサオマンのいいところを撮りたいと、ザックに座ってぼーっと雲がとれるのを待つことしばし。いい加減寒くなって最後にはセーターまで着込んで眺めていたが、ピークも綺麗な北東カールも現れてくれなかった。明日は向こうに行ってしまうというのに…。今日は無線が良く通った。まるで帯広の河西さんがすぐ傍にいるみたいだった。はじめから一人でやろうと思いこんでいたからだろうか、まだ日数を経ていないせい



写真4-3-10
コイカクシュサツナイ岳山頂にて無事にデポ品を回収

だろうか、それほど淋しさは感じない。冬にひとりで稜線なんかにいたら淋しくて淋しくてたまらないんじゃないかと思っていたのに大丈夫なのが不思議なくらいだ。出発前にもっと速く行ってこいよとはっぱをかけられたけれど、速く歩こうと思ってもそううまくいくものではない。先は長いし、全てはお天気次第。TAKE IT EASY！ 写真を撮りながら、空と雲を眺めながら気楽に行くまでだ。止まったり落っこちたりしない限り、道はつながっているのだから。今夜は随分増えたエッセンを減らそうと食べまくった。肉団子、サラミ、ソーセージ。乾燥野菜をたっぷり入れた雑炊にビーフシチューの素で味付ける。米も沢山あるから鍋が小さくてちゃんとした雑炊にもならない。こんなもの下界では間違っても食べないのに、ここだと出来上がるのが待ちどうしくて仕方が無いくらいに“格”が上がってしまうのだから人間なんてたいしたことないよなぁ…。あぁ、差し入れのビーフジャーキーが旨い！

お守りの威力

2月12日　エサオマンを越え、カムエク手前で沈没。今日は今までで一番シビアな日だった。エサオマンの登りから既に風がつよく、目出帽を着けっぱなしの行動だった。特にナメワッカ分岐をすぎた辺りから岩が露出していてしかも細い。巻きの連続で全然はかどらなかった。1917峰の登りはもうひらひらだった。遠くから見るとほとんど垂直に見えた岩稜をピッケルにすがって何度も立ち止まりながら登った。これがピークかと思って上がってみるとまだ先がある…。ニセピークに幾度となく騙され、がっくりした。そして、1917峰からの下りが更に悪かった。どうしても上をいけそうにない大きな岩峰を巻こうと急斜面を下った時だ。「あっ、やばい！」思った瞬間、雪が不安定でずぼっと岩沿いに2mほど落っこちた。ザックが重くてのけぞってしまい、今にも後向きで頭から落ちそうだったが、幸い下の雪が柔らかく足が腿までうまって抜けなくなっていた。微妙なバランスでゆっくりとザックを外し、どきどきしながら体勢を整えた。そのままのけぞって落ちていたら確実に雪と一緒に谷底だった。ふと、見送りで「これは雪に効くんだ」といわれて貰ったお守りのことが頭に浮かんだ。お守りに助けられたと思った。また歩きだして見たカムエクの切り立った山肌が西日に照らされて妙に綺麗に見えた。まだまだこんな所で姿を消す訳にはいかない。予定の9の沢の上まであと一息だったけれど、またやっかいなスノーリッジと岩峰が現れたので、急斜面を切ってへばりつくようにてんぱった。ふうーっ。

2月13日　昨日と同様の天気で北西風が強く、雲が全然切れてくれない。お陰でカムエク、ピラミッドもガスの中に沈み、写真が撮れないのが残念。カムエクの登りは吹き上げがひとく、何回もピッケルにしがみついては「はーはー」いった。ピラミッドも雪が少なかったせいかそれほどいやらしくもない。むしろそこからの稜線が細いナイフリッジになっていた。所々見事に細く「えっ」と一人で声を上げてしまったが、ピッケルで崩したり、ずかずかと思い切って歩いてしまったり、行ってみれば案外どうにでもなった。昨日の方がよほど嫌だった。今夜1807ポコを越えて2回目の雪洞泊り。ちょっと壁が薄くて明かりがこぼれてくるけれど快適な穴に仕上がった。雪洞も2回目にもなると感を取り戻し掘るのも楽しくて速い。穴の中は雪の反射で蝋燭一つでもかなり明るく、どんな音も優しく吸収してくれる。相当“浮世離れした”この空間が僕は大好きだ。旅はまだ始まったばかりだが、次々にいろいろなことがあってとても飽きることなどない。前々からの思い込みのせいか、一人でこんなことをやっているのが不思議と苦にならない。身の回りのことを全て自分でやることが自然だ。どうか、最後までこのリズムでいけますように。明日、調子が良ければコイカクまで。駒の進め方が中部のポイントだ。

HAPPY　BIRTHDAY　ALONE

2月14日　本日は僕の23才の誕生日。朝は天気予報にしたがってしばらく天気の回復待ち。雪洞の中、シュラフにもぐってラジオを聴きながらゆっくりとした朝を楽しむ。ラジオはどこもかしこもSt. Valentine's Day一色だ。こちらはいたって静かなもの。形の無い音だけが風に乗ってやってくる。シュラフに入ってごろごろと寝転がっている時間は、実を言えば、僕にとって山で一番楽しい時なのだ。これほど贅沢な時間の過ごし方はないだろう。8時15分。穴の窓を開けると斜面の輝きが目に飛び込んできて、見つめられないくらい眩しい。長い間冬眠していたヒグマが春になって地上に飛び出す時はこんな気持ちなんだろうなぁと雪洞から出る時いつも思う。雪洞から1823峰手前までが悪評通りひどい消耗だった。天気はいいものの、ときどき腰まで埋まるラッセル。雪庇が発達しており、細いダケカンバが稜線近くまできているので質が悪い。大して歩いていないのに振り返ってばかりいた。カムエクが白かった。1823峰まで来ると中部から南日高までの展望が一気にひらける。一番遠くに楽古岳がはっきり見えた。ああ、あそこまで歩いていくんだと思っても、あまりに遠すぎて距離感に現実味が無い。だからかえって山が遠くてもそれ程暗い気持ちにならなかった。ローガンでいくら歩いても景色が変わらない氷河を2週間も歩いたのが相当効いている。時間的にはまだ動けたけれど1823峰からの朝夕の景色が見たくて今日は歩くのをやめた。23才を祝して一休みしよう。天場は雪が少なく斜面を切るとすぐ、にハイ松が顔を出した。雪の中でも青々としているハイ松は見習いたい程タフだ。ピークにへばりついた僕のテントには風で飛ばされた雪がさらさらとあたっている。(**写真4-3-11**)

“一人でやること”…見送りにきてくれた小池に「なんで一人なのか」と聞かれて上手く答えられず歩きながら自分でも考えているが、これは僕の19才の約束だ。いつか日高を一人で歩き通したい。クラブに入った頃からの憧れは1年目の入院生活でいつのまにか膨らんで、退院した頃には強い思い込みになっていた。膝の靭帯を2本切って、手術した時はもう駄目だと思った。それを思うと、日高への思いは怪我を治す支えにも、しばらく離れたクラブをまたやり直す力にもなっていた気がする。単独でやることについては自分の中でもいくつか考えがあったし、変化していった。植村さんへの憧れ、リハビリ期間中に読んだ加藤文太郎さんの本。怪我といういたって“個人的な体験”が一人で何かをやるということにどこかでつながっていた。膝の調子が悪かった頃はもう皆とは行けないと思った。パーティーを組むときも個人の責任が大事だと人一倍思っていたからだ。しかし、皆と一緒にいけない人間がどうして一人で山に入ることが出来るのだろう？ この矛盾はなかなか重くて、考えると暗い気持ちになった。けれど4年目になってほとんど膝の方が気にならなくなってきた頃になると、逆に怪我のことは口にしたくなくなった。それ以上に実際山に行くのに必死だった。そんなことを考えているうちは絶対一人で何も出来ないし、普通の一人として今までやってきたことを試してみたくなった。カナダ・ローガンの遠征に行ってからは、一人ということの“単純さ”に強く惹かれ始めた。ローガンは6人で行ったのだが、よく耳にする遠征をつまらなくしてしまう人間関係のトラブルがあったからではない。むしろそ



写真4-3-11　1823m峰でのキャンプ

の逆で、今後の山旅であの時以上のパーティーを組むことが出来るだろうか自信がないくらい、素晴らしい仲間に恵まれた。ただ、氷河彷徨のシンプルさが魅力的に体に食い込んできたのである。方法がシンプルであればあるほど、自然に入りこんだ時、肌に伝わる感覚は純粋さと強さを増すと思う。これは一人で荷上げしたときも強く感じた。足元の自然ひとつひとつの新鮮さに驚いた。一人で冬山に入ることにはやはりいろいろな抵抗があって、思い悩みもした。でも、それで計画を中止にしようとは思わなかった。とにかく自分の足で歩き、自分の目で見る。体ひとつでどれだけやれるか一番基本的なところで自分を試してみたかったのだ。そして、卒業を前に将来の方針がはっきりしていない不安定な立場で、19才の約束だけは守ろうと思った。

今日初めて海を見た。まだまだ遠かったけれど、オレンジ色の乱反射が目に焼き付いた。

2月15日　今日は悪いことが2つあった。一つ目は雪庇を落としたこと。ピラトミのジャンクションピークを越えて少し行った所だった。「どんっ」という大きな音が聞こえたかと思うと、左足から80cmくらいのところで亀裂が入って幅50cm長さ3mほどの雪庇がど一っと急斜面へと崩れていった。まだ小さいものだったし、それ程端を歩いていたわけではなかったから強烈に危険を感じるということはなかったが、丁度、一人歩きも気ままなものなんて考えていたときだったので、暗い気持ちになって反省した。2つ目は忘れ物。コイカク夏尾根の頭でデポを回収する時に使ったナイフをそのまま雪面に刺して忘れてしまったのだ。次のポコに着いたとき忽然と思い出したが後の祭りで、とても引き返す気にはなれなかった。ナイフが無くてもそれ程困らないが、気にいっていただけに何とも口惜しい。それよりも、いつも持っていたものが無くなるのはなんだか身内がいなくなったみたいで気分が良くない。ああ、そういえばまだあった。シュラフがストーブの火で穴だらけになってきたのも、蝋燭が倒れてテントに穴があいたのも決していいこととは言えない。あんなに装備には気をつけようと思っていたのに。なんだか耐久レースのようになってきた。天気も低気圧が3つ。北海道に向かって発達中だ。これはかなり手強そうだ。ここヤオロマップのピークも徐々に風が強くなってきた気がする。そういえばおととしの夏にきたときもひどい天気だったなぁ。ヤオロにはいつも風が住んでいるみたいだ。今宵も河西さんの声が暖かい。

袋叩き

2月16日　こういうのをまさに袋叩きというのだろう。昨夜からの風は一層力を増して四方八方から無茶苦茶に吹き荒れ、テント越しにシュラフでうずくまっている僕を叩いている。この風が明日いっぱい続くと思うとうんざりだ。テントのポールは大丈夫だろうか？こんな時に限って雪洞を掘れなかったのが情けない。ストーブもまともにつけられずお茶を飲むのが精一杯だ。でも、たとえテントが壊れてもさしてできることはない。逃げても無駄だから寝てるしかない。しばらくして起きてみると、なんと、のこぎりが鞘からはみでており、ぱたぱたするテントに触れてテントがきれていた…。更に入り口のシッパーが開かなくなったのでテントの中でビニール袋に小便する始末だ。明日はどんな天気やら…。運を天に任せてもう寝よう。―シュラフの中で―

2月17日　思ったより早く夜が明けた。朝からシュラフに入ったままビスケットをポリポリとかじり、昼を迎えた。ストーブもつけられそうなので雑炊を作って食べた。テントの中が雪だらけなのでコッヘルで取って投げると、飯を何杯か炊くのに十分なくらいたまっていた。入り口も開き、何時間ぶりだろう！外でシャーチング。1839峰も見える。北寄りの風はまだ強く曇っているが、どうやら峠は越えたようだ。テントの張り綱を直していると足元に茶色

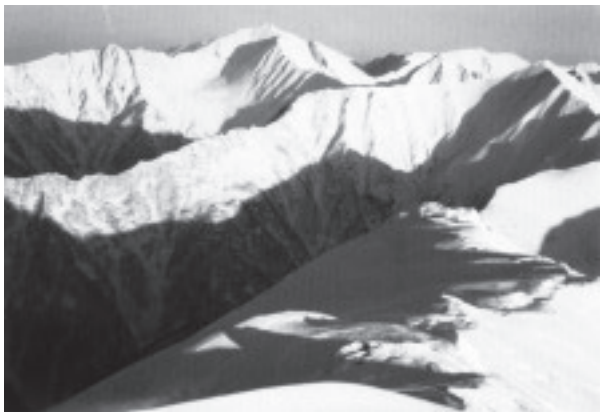


写真 4-3-12　ヤオロマップ岳から北を望む。この情景が我々を魅了してやまない

の粉が入った袋がひとつ。何だろうと思って拾い上げた時正体に気付いて思わず苦笑した。ともあれ、これでようやく普通の停滞に戻ったようだ。なんたって、台風並みに低気圧が発達して北海道を直撃。札樽自動車道では雪崩。十勝辺りの家の屋根がはがされたのだから信じられない(**写真 4-3-12**)。

2月18日　今日の朝はとてもしばれた。嵐が去ってきっと晴れているだろうと期待して起きてみると案の定ほぼ快晴。朝のうちはまだ風が強くシャッターを押すのが辛かったけれど、1839峰に近付く頃には見事無風になってくれた(**写真 4-3-13**)。両面雪庇が恐いと言われる稜線も雪庇はあまり発達していない。アイゼンがギュッギュッ気持ちよく効いてくれる。ペースよくぐんぐん1839峰に近づき、壁のような最後の急登も一気に登り切った。主稜線から離れているだけに頂上からの眺めは素晴らしく、感慨ひとしおだった。

稜線上はやっぱり危険が潜んでいる。1600峰の天場につく手前、1回雪崩を起こした。途中からスキーを使い調子が良かったのだが、あと少しでアイゼンに替えようというところにちょっとした岩峰があり、上は行けそうになかった。日高側を巻けるだろうと2mくらい行くと、「どん」という鈍い音がしてスキーの先端から3m位亀裂が走り、厚さ20cm程の堅雪の層がずずず一と雪煙を上げて崩れて谷底へ落ちた。「まずいっ！」と思い慌てて後戻り。雪崩を



写真 4-3-13　天気の回復を待って快晴の中、1839m峰に向かう

あんなに間近で見たのは初めてだった。雪が締まっているから大丈夫だと判断したが、まだまだ甘かったようだ。油断禁物である。もう、かなりシュラフが参ってきた。どうりで寒いと思ったら、ダウンがすっかり凍って固まっているじゃないか！　ザックに入れてある時も融けないので、袋から出すと氷の塊のようだ。またこれで一夜を明かすのか…。

ルイベ

2月19日　昨日からしばれが続いている。テントの中でシュラフとシュラフカバーで体を覆ってマナスルをガンガンたき、あつあつの雑炊をかきこんでもまだ寒い。昨夜は寒くてほとんど眠れず、じっとしているのが我慢できずに朝4時から飯を食べてしまった。ルベツネまでは腰まで埋まるひどいラッセルで時間を食ってしまったが、ペテガリ周辺が快調で東尾根の分岐までこれた。最後、なんだか遊び疲れた子供の時のように投げやりな歩き方でペテガリを下ったのが気ままで楽しかった。振り返ると、先日の強風で飛ばされてしまったのか雪が少なく、ペテガリが黒い岩山のようだった。ラジオ曰く「異常低温注意報」どうりで寒いと思った。明朝の帯広は今朝より寒くマイナス22度。ちょっと考えても1500mの稜線ならマイナス

30 度はいくだろう！ 無線で「寒いから“ルイベ”にならぬよう」といわれたけれど、これでは本当にルイベになってしまいそうだ！ 札幌の友達は今頃フグでも食べていると言うのに…。

2 月 20 日　流石に昨夜は寒くてたまらず、1 時頃ストーブをつけてスープを飲んで暖まり、2 回戦に分けて寒くて長い夜を越えた。街ではあんなに短かった夜がここでは嘘のように長い。今日の稜線はそこらじゅうが細かった。中の岳を越えての岩峰は勿論、1493 峰に上がる所が思いの外細かつた。一歩間違えればあっという間に谷底というのは、一人だと何とも言えぬ気持ちだ。休んでいるときサングラスで顔を見ると、右の頬に赤いかさぶたが出来ていて、どうやら凍傷らしい。天気の悪い中カムエクを越えたときだろう。手足の指先もここ数日冷え込んだせいでジンジンしている。今日は地図を見て先のことを考えた。予想外にいいペースで来ているので、南の豊似岳を越え追分峠から襟裳岬を目指したい。その方が道路が少なく、一番すっきりした行程になるからだ。そのためにも、楽古岳に着いた時点で予備が 3 日は欲しい。このままの調子でいったらあと 10 日くらいか？

思えば遠くに来たものだ。ピリカヌプリを見てつくづく思った。

2 月 21 日　朝東寄りの強風を受けつつ出発。神威岳近くに行ってもデポの旗が見えず心配したが、風で竹が折れていたのだ。ピークで命のデポ缶を見付けてやれやれだ。さて、ここからが難所。通称“靴幅リッジ”を通過しなければならない。稜線が切り立っていて、靴の幅しか歩くところがないのでそう呼ばれるナイフリッジだ。エッセンは残さず全て持ち、スキーとカメラを担ぐと 30kg・これまでで一番重く感じた。近づくまでガスで全然見えないが、いよいよ手前まで来ると、案の定細い！ゆっくりゆっくりと足場を確かめながら神経を集中して通過（**写真 4-3-14**）。抜けたとたん一気に疲れが出てザックを放り出し、その上に寝転んだ。



写真 4-3-14
神威岳からソエマツ岳に向かう“靴幅リッジ”を振り返る

体中にアドレナリンが充満する気がした。

1468 ポコでテントを張り落ち着くと、なんとラジオが聞こえなくなっている！電池を替えても、叩いてみても、暖めても駄目だ。「うん」とはいうが、残念ながら「すん」とまでいかない…。しかし、おかげで山が素晴らしく静かだ。風も収まったので、辺りに音が何も無い。山に行くようになってから、耳がかなり敏感になった。街にいても小さな音が耳に響いてくるし、かえって耳障りな程色々な音をキャッチするようになって少し悲しくもなった。この静けさと、音は聞こえないけれど、とにかくにぎやかな星の競演が山の楽しみなのだ。ただ、これが嵐の前の静けさでなければいいが…。

2 月 22 日　昨夜、ザッザッザッとテントのまわりを何かが動くような音。何だか同じような音が繰り返し聞えるし、人だったらもっと大きな音だし・・とうたたねの中でぼーっと考えていたら、謎が解けた。朝寝坊して目をさますとテントが半分くらい雪に埋まっていた。夜からしんしんと降ってテントを流れ落ちる時の音が、夜中の行進の正体だった。しかし雪はやんで、外は快晴。ソエマツからピリカの山の端が



写真 4-3-15　ピリカヌプリに向かいながら見返す神威岳(左)。いよいよ南日高に入った

やや黄色くなりだした東の空のもとに、真っ黒いシルエットになっている。ラーメンも途中で置いて、カメラを持って外に出た。今日の稜線は昨夜の雪でどこもかしこもひどいラッセル。ピリカを越えたかったが、とても無理だった(写真 4-3-15)。それにしても、ソエマツ、ピリカの周辺は沢からの吹き上げが異常に強い。目に見えぬ風が何か生きもののような勢いで稜線をかけ昇っては雪を舞い上げている。砂時計の砂みたいにさらさらと流れる雪煙の向こうは、海がオレンジ色だった。何時か見たより随分近くなっていた。今日は稜線上で兎に会った。雪面に残った足跡を辿るように歩くことはよくあったけれど、その主には会ったことがなく、はっとするほど新鮮だった。誰もいない冬の稜線では、動物の足跡さえ優しい。蝋燭の柔らかい灯りでこうしてペンを動かしていると、とても落ち着いた気持ちになる。

地図

2月23日　朝から風が強く、テントの中でも動き始めても、停滞しようかどうしようかとかなり迷った。相変わらずヌピナイ側からの吹き上げが強烈だ。ピリカのピークがなんとか見えていたので思い切って登ったが、稜線上は吹き飛ばされんばかりの風。体が煽られてふらふらした。頂上から下ると疲れてしまって、ガスの中歩くのがもう嫌になった。やっぱり視界が良くないと気が滅入ってしまう。敢えなく半日で沈没。

昨日あたりからついつい先の地図ばかり広げている。焦っているわけではないけれど、襟裳岬が気になってきた証拠だ。途中までは、地図の折り目が変わり次の地図に移るのがただただ楽しみだったのに、あと3枚くらいで新しい地図が無くなるのだと思うと、うれしい半分今度は旅の終わりが近づいてきたことが強く感じられて切なくなってくる。終わりのない旅はないのだからこれは旅人の宿命だ。もしも終わりのない旅があったらそれは魅力的だがきっと苦しいに違いない。ラジオも相変わらずなので、遠くの風の音を聞きながら書いている。シュラフに入ってハンガロー手袋を履いているのに、寒くてどうも字が上手く書けない。腰まで埋まってザックにのしかかられて全然動けなくなったり、寒くてシュラフで凍えていたりするときも案外色々なことが頭の中でぐるぐる回っている。友人のこと身の回りの細かいこと…。今頃皆は何をやっているのだろう？ なかでも出発前にお世話になった人のことが強く思い出される。歩いていてもそういった人の力に支えられてばかりいる。とてもでないが、偉そうに単独…とかいう感じではない。改めて自分がどんな人間で、どういう立場なのかよくわかる気がする。しかし、自分の将来のこと、一体これからどんなふうに生きていくのかということはやっぱりわからない。じたばたと動いているけれど答えは出ていない。…というより、人の人生なんて答えなどありはしないのではないか？ このじたばたやっているのが自分の生で、死ぬまではっきりした地図などないし、それでいいのではないか？ 勿論、実際ことにあたっているときは…いまもそうだけれど、どうしよう、どうしようと、懸命に小さな頭を熱くして悩んでいるのだけれど。旅もまだ終わっていないのに、たいそうなことを書いているなあと何だか一人で可笑しい。でも魅力的な人達と伴に、憧れをもって僕は生きたい。

2月24日　とにかく風の強い日だった。ほ

とんど一日中雪煙の中を歩いていたようなものだ。テントに入って考えてみても、よく歩いたなぁと思う。朝、出発してからの登りのきつかったこと。丁度日陰だし、強烈な風は止むことがないし、足が冷たくて凍傷になるのではないかとひやひやした。一体この風は何時止むのだろうと思ってきてみれば、結局最後までパワーを落とすことなく稜線をかけ登ってきた。しばらく踏張って歩いては雪庇の無い所に飛込んで風を避け、また足を進める。その繰り返しでようやくピリカの手前まで辿りついた。今も稜線には雪煙。テントにも舞い上げられた細かい雪の粒が飛び降りてきている。これだけ風が強かったらもう少し雪が締まってくれてもいいのに…。よく歩けた原因はトヨニ岳からの南望。楽古までの南日高の山々が綺麗に折り重なって見えたのだ。そして、明日はいよいよ5万図“楽古岳”の登場である。雪飛沫を浴びてまつげが凍ったので、目の辺りがひりひりしている。無線で湾岸戦争が地上戦へ突入したとのこと。悲しいかぎり。

2月25日　野塚、オムシャと越えるごとに白いトヨニ、神威が小さくなる。南にきて稜線も徐々に広くなり、スキーが使えるのでいいペースで進んだ。十勝岳は手前でにわかに北西風が強まり、あっという間にガスの中。ピークに着くと案の定真っ白で下る尾根がわからない。登ってきた尾根もわからなくなりそうだった。仕方なく、何度も何度もコンパスと地図を合わせてゆっくり下った。

かなり下らなければ尾根がはっきりしないはずだとはわかっていても、とても長く感じる。斜面に入りこんだようでトラバルのも辛く、コンタは下がるばかり。だんだん斜面が急になり始めても全然尾根形にならず、視界もないので不安になってラッセルしながら登り返してみるとようやく地形がはっきりした。時間はすでに4時、雪庇の無くなったところを探してすぐにテントを張った。さすがにホワイトアウトの中一人でコンパスを切って歩くのは気持ちが悪かった。あまりやるものではない。これで明日は楽古に着けるだろう。しかし、20万図で見ると、楽古から襟裳岬までの距離の長いこと！最後のピッチも歩きがいがありそうだ。ここまできても無線がつながるのが心強い。食物の話などするものだから、急に下界の食物が頭の中でいっぱいになってしまった。でもそれより今は、凍っていない暖かい布団でぐっすり眠りたい。この山行で何が一番嫌だろうといったら、じっと冷たいシュラフの中で朝を待ち草臥れることだ。真夜中にストーブをつけてお茶を飲む習慣もすっかりついてしまった。そんなこと5年間も山をやってて一度もなかったのに。ああ、また夜がやってきた…。

2月26日　遂に楽古越え。朝テントを開けると楽古の肩ごしにずいぶん赤い太陽が昇ってきた。1日中ほぼ晴れ。雲の動きが速かった。楽古の頭の上を形を自由に変えながら雲が流れていった(**写真4-3-16**)。ぽつぽつとダケカンバのはえる白い斜面に影が走った。ザックに寝転びながら雲を眺める楽しさ！ 雲ぐらい自由だったらなあ。大きなザックは寝転ぶときだけ嬉しい。楽古で無事最後のデポを回収し、来た道をバックに記念撮影。自分がどんな顔をしているのか後で見るのが楽しみだ(**写真4-3-17**)。楽古からの稜線は何とも快適だ。スキーですたこら歩けるのが心地いい。稜線をスキーで歩ける楽しさといったら！ 東にアポイ岳。その後に海が大きくなった。いよいよ岬に続く



写真4-3-16　楽古岳への稜線。右奥は野塚岳とオムシャヌプリ



写真 4-3-17　楽古岳にて

海岸線が近づいてきたのだ。天気が崩れず、最後の稜線も普通に歩けるようだったら、あと4日位で岬に辿り着けるだろう。そう考えると山の泊りももう4日。早いものだなあ。

2月27日　今日はどうも出発から調子が上がらず、ガスと北西風の中けだるく足を進めた。もう広尾分岐の辺りで何だか草臥れてしまい、気力がすっかり萎えてしまった。情けないことに足の指が痛くて、早々に沈没。ガスの中歩くのは精神的に良くない。ところが、タイミングのいいことにテントを張り終える頃から雲が流れだして、広尾のピークが見え始めた。これはアタックできるかもしれないと、靴を脱がずにストーブを焚いて昼飯を食べていると、見事に天気が回復した。さっそく、スキーを履いて出発。荷物がないと足も痛まず、すいすいだ。こんなに誰もいない広いところで、一人、スキーで歩いていると、せいせいして気持ちよく、自分がトムソーヤになったみたいだ。ピークにどっかりと腰をおろし海を見下ろす。広尾の街、十勝港、そして黒い海。人里が近づいてきた。ここから先の稜線は高度が下がるので地図と照らし合わせてもすぐにわからなくなってしまった。天場についてからは焚火大会。もうラジオが聞えないので使わなくなった天気図で火を起こそうとするも駄目。全部無くなってしまった。こうなると意地になって今度はカンパの皮をむしってチャレンジすると見事着火。やっぱり、自然は偉大だ。濡れた手袋が見る見るうちに乾いた。

夜の格闘

2月28日　停滞。夕方の6時半、今も風が続いている。今日は3回目の停滞だ。しかし、ここまで来る間に完全停滞がたったの3日とは出発前は想像もしなかった。思い返してみると結構悪い天気でも動いていたものなぁ。大体1週間に1日休みのペースだ。今日はテントがずいぶん吹きだまって足の方は半分近く雪が積もっている。風が止んだら除雪でもするか。今夜のうちに低気圧が抜けてくれたら有り難いのだけれど。明日から遂に3月。そろそろ春の季節がやってくる。シュラフの中でも、食物のこと風呂のこと、街のことばかり考えている…。これを里心がついたというのだろうか。

真夜中1時10分。夜半ふとシュラフから顔をのぞかせると、テントの左側の上部20cm弱が薄明るいのみで他の面は真っ黒。「おかしいな？」と思ってシュラフのままテントを蹴ってみると一番上まで雪がある…なんと、すっぽりテントが雪に埋まっているじゃないか！　思わず「うーん」と唸ってしばらく考えてから除雪の準備にかかった。どうりで足が重いと思った。8時に一度テントの周りをさっぱりさせたのにもう埋まってしまったとは。入り口を開けばどうせ雪が入りこんでくるから、シュラフやら、食糧やら皆足元によせ、マットを敷いてジッパーを開けると、どどーつと雪が入り込んでくる。それでもまだまだ体が外に出せないので仕方なく体ごと雪の壁に突っ込んだ。やっと外に出てみると本当にテントが埋まっていた。辺りの地形がすっかり変わって、テントを含めて新しい稜線が出来ていた。天気も良くなっておらず、どちらから風が吹いているのかわからない。まず、深く埋まったスコップを掘りかきだし、それから雪との格闘。一回りして、最後に足元の面を除雪する頃には、もう最初にやった入り口の面に雪が積もっている…。これまた「うーん」と唸って、しまいにはテントを引っ

張って稜線から離した。風は少々あって斜めだが、朝までには埋まらないだろう。テントに入り、ぐちゃぐちゃになった中を整理し、お茶を飲むとほっとする。まだざーざーいってるが、なんとか朝までもって欲しい。しかし、テントなんて案外簡単に埋まってしまうものだなぁ。問題は、地形と風だ。除雪中、時折あざけるように月が顔を見せたのが悔しかった。なんと、もう3時50分。朝近し。

3月1日　昨夜はなかなかの体験だった。今朝もまだ風が続いていて、足元の面が天井近くまで埋まっており、暗い気持ちになる。しかし、低気圧はおそらく通過したようだし、除雪するくらいなら歩いたほうがましだと、悪夢の天場を離れた。稜線上西風がひどく、スキーで歩いていると飛ばされそうになるので普通の倍くらい力がかかって疲れる。体を風上にいくら倒しても倒れないのが可笑しい。途中から視界がひらけたおかげで、迷う事無く正しい稜線を辿れた。ここから先もスキーを使えたらいいのだが。食糧はあと5日分。なんとか大丈夫だろう。海が近くなってきたせいか風の力が凄い。今日は一度、アイゼンを着けていたのにふっ飛ばされてしまった。

死に損ない

3月2日　今日の僕は死に損ないの僕だ。名も無いポコから下り、“もうお手上げ”という滑落をしてしまったのだ。連続するギャップをスキーで越え、次もスキーで行こうとした時だった。結構細いギャップで斜面もきつかったので、ここは慎重に行かないと危ないぞ！と思った矢先、エッジがはずれて滑落、あっという間にもうどうなっているのかわからなくなってしまった。ザックは重いし、スキーとストックではどうにもならず、ただ「あーっ、木にぶつかる！」と思った瞬間、がつーんとダケカンバにぶつかって止まった。左足のスキーが直径10cm程のカンバの幹に絡んで引っ掛かったのだ。頭は下。スキーは今にも折れそうにたわんでいた。怪我をしたかと思ったが、幸い、頭を打つことも、足を折ることもなく左足の腿を強打しただけだった。引っ掛かった木が丁度いい太さだったおかげだ。すぐ脇の30cm近い太さの木にぶつかっても、引っ掛からずに落ちても駄目だった。下にはさらに斜度がきつくほとんど木の無い斜面が続いていた。あのダケカンバにぶつからなかったらと思うと、ショックでしばらくぼーっとしてしまった。地図で見ると、辺りで一番斜度のあるところだった…。ほんの一瞬の判断ミス。あれは、逆の斜面を下るか、アイゼンに替えるべきだった。そしてもうひとつ、あと1ピッチで今日は終わりだろうと1本入れ、また歩きだした時だ。すーっと何歩か足を進めたとたん、いきなり「どーん」という音と伴に幅4m、厚さ1m近くの雪庇が崩れ、細いカンバをなぎ倒していった。平坦な所で全く警戒していなかっただけにびっくりしてしまった。どうしてあんなところですーっと端に寄ってしまったのか？ きっと集中力が無くなってきたのだろう。山ではどこでも死ねる。怪我もせず変わらぬ姿で山を下りるのが、山に入ったら最優先だということが、体の底の方で納得できた。“無事下山”これが一番偉いのだ。明日はおそらく最後のピーク、南の豊似岳につけるだろう。そして、翌日は岬。とにかく無事に、すっからかんになって下りたい。

3月3日　遂に豊似岳についた！もう疲れ果てたけれど、ここまで歩いてきたんだ。予定通りピーク直下で最後の夜だ。途中のギャップを登り切った時、広がった海の綺麗だったこと！最後の登りの長かったこと！一杯目のココアに心がとろけてしまう。もう、登りもない。後は、海をめがけて下るだけだ。無線がつながったら一体何と言おう？ 日勝峠からもう25日も経っているのに、見送ってくれた小池と別れたのがつい昨日のようだ。いろんなことが頭の中でぐるぐる回ってなかなか整理できない。靴下はもう半分位しか面積が無くなってしまった。軍手の指ももう無い。オーバー手袋も何時の間

にかぼろぼろだ。残りの地図は、岬の末端だけ。岬だけの地図なんて2度と使うことはないだろう。明日はとびきりの朝焼けを拝んで、一気に岬目指して歩きたい。今日は風の音が波の音に聞えた。

襟裳の春

3月4日　夜半風が強かったけれど、めずらしく朝まで眠れた。少し早く起きてゆっくりと時間をかけて出発の準備をした。天気はいまひとつで、申し訳程度東の海が鈍く光っていた。出発早々は足が温まっておらずスキーで歩くのも苦痛だったが、尾根の途中から襟裳岬と白い牧草地が点々とするのを見たら、痛さも吹き飛んでしまった。百人浜からきゅーっとくびれて岬に続く海岸線が何とも言えない(**写真4-3-18**)。北海道の形が実感として伝わってくる。しばらくザックに寝そべってぼーっと空を眺め続けた。柔らかくなった斜面をスキーで抜けると、牧場はまるで春のような陽気。稜線とは違う暖かい空気が嬉しかった。振り返ると、豊似岳が白かった。

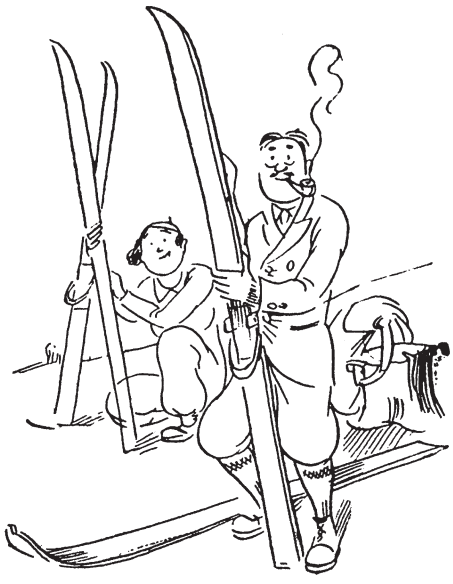
追分峠から岬まで道は、靴のインナーだけで歩いた。地面は堅くて、とにかく身軽になりたかった。時折向かってくる車の運転手さんが、スキーのくっついた大きなザックに、匂いが届きそうな位汚れた僕の姿を不思議そうな目で見ていった。車のスピードが、ひどく速かった。途中から百人浜にどうしても出たくなって道をはみ出し、ずぼずぼと雪に埋まりながら深緑の海に向かった。一度はすぐ川が出てきて渡れず引き返し、またラッセル。「なんでこんなことをやっているのだろう？」ここまで来ても、靴下を濡らしながらまだもがいている自分が何だか可笑しくなってしまった。寒々として雄大な海を見ながら一人で砂浜を歩くと、とてもさっぱりとしたいい気持ちになった。お土産に浜の貝を拾ってポケットに入れた。何という名前かわからない、白い綺麗な三角錐の貝で、今まで歩いてきた山のように見えた。閑散とした岬に



写真4-3-18
稜線がなくなり、ついに百人浜、そして襟裳岬が見えた

ついてザックを降ろした時、“ふわり”とした感覚が忘れられぬ程鮮やかに焼きついた。

(『むいね』第30号(1991)より転載)



札幌鉄道管理局パンフレット(1936)より

4　随想

4.1　“山スキー部 50 年” に考えた

中村　晃忠（1962 医 薬）

私は山スキー部が誕生する直前の昭和 33 年～37 年の間、スキー部山班の部員として活動した。そのおかげで、75 才の今になっても山スキーを楽しんでいる。ありがたいことだ。山スキー部 50 年に際して、いろいろと感じることがある。迷惑を顧みずに御託を並べてみようと思う。年寄りのたわごととお許し願いたい。

あかね書房「日本山岳名著全集」No.5 には、大島亮吉／山―随想、板倉勝宣／山と雪の日記、伊藤秀五郎／北の山、が収録されている。板倉さんと伊藤さんは北大スキー部の大先輩であり、伊藤さんは山岳部の創立者の一人である。この本に添付されている「日本山岳名著全集月報」No.5（昭和 37 年 9 月 20 日）には、伊藤さんによる “「北の山」の精神的系譜” という文章がある。引用する。

“松方三郎、板倉勝宣、伊集院虎一という学習院のトリオは、大学はそれぞれ京大、北大、東大と分散したが、夏になると古巣の涸沢あたりに集まって、トカゲをやったり、穂高の岩場をほっつき歩いていたらしい。――その板倉さんが北大を選んだのは、たぶん札幌農学校の伝統と北海道の山岳スキーに引かれたからであろう。あるいはスキーが主目的だったかもしれない。在札三年のスキー登山の経歴をみると、北大スキー部の山岳スキー黄金時代を作りだした主役のひとりだった。――大正 8、9 から 11 年ごろの時代で、板倉さんをリーダー格とした余市岳、旭岳、黒岳などのスキー初登山は、北海道のスキー登山史にエポックを作った記録的なものであった。そのころはまたスキーの飛躍（ジャンプ）や長距離競技の本格的研究がはじまった時代で、大正 12 年ごろから昭和 4、5 年にかけて名選手が輩出し、スキー競技の黄金時代が出現した。スキー競技の発展と平行して、板倉さんや板橋君のエスプリを継承した僕たち山のグループも、スキー登山の技術を一段と飛躍させた。それまで北大には山岳部はなく、僕たち山仲間は予科旅行部と文武会スキー部の二枚看板だった。それはスキー部が実質的には山岳スキー部としてはじまったからである。しかしスキー競技が長足に進歩して、スキー部の重心が競技に傾いたので、僕たち山の仲間は、昭和 2 年に北大山岳部を創立したのである。”

しかし、スキー部には山班が残っていた。

昭和 38 年になって、北大スキー部は山スキー部と競技スキー部に分裂するにいたった。詳しいことは通史に譲るが、それは単純にいえば、学生競技スキー界における北大の凋落と、ほぼ並行して山班の活動が隆盛になった、その結果であったと思う。私がそうであったように、内地から北大をめざしたものは、北海道へいったら山とスキーだと考えるものが多かった。その受け皿としてスキー部山班はうってつけだったのだ。

今になってみれば、ただ山へ行きたいという思いだけで十分だったと思うが、分裂に際しては山班としての大義が必要であった。当時のスキー部 OB 達からはずっと “山岳部と何が違うのか” とか、“山班はヒュッテンレーベンだけやっていればよい” とかいわれてきたし、我々自身もその説明に苦しんでいた。正直にいえば、山岳部に多少の劣等感を抱いてもいたが、

とにかくスキー部山班的存在を否定されたくなかった。そこへ向井成司さんや水谷先生からキーワード(スローガン)が提示された：曰く、“山とスキーと人との三位一体”、“山野の跋渉”、“スキーによる未知の分野の開拓”、“北大スキー部の基本精神”、“スキーのオールラウンダーたれ”、等である。これらは極めて曖昧なものであったが、それに寄りかかることで山スキー部創部へと走ることができたのかもしれない。

ここで、北大スキー部、山岳部および山スキー部が北海道の山の開拓に残した実績について振り返ってみたい。冒頭にふれたように、北海道の冬山登山は北大スキー部員に始まった。その後、主に山岳部員によって主だった山々の初登が行われ、日高山脈はずっと山岳部の主たる目標であった。そしてペテガリを最後に初登の時代は終わり、昭和31年の日高山脈の冬季全山縦走をもって、北海道の山の開拓時代はほぼ終わった。スキー部山班による裏大雪全山縦走(昭和34年)、山スキー部による富良野岳・ウペペサンケ山縦走(昭和39年)は、開拓時代の名残りだったと思える。

戦前から戦後しばらくの日本の山岳界は、ヒマラヤ登山も含めて、大学山岳部とそのOB会(AACKやAACHなど)や日本山岳会が中心であった。“遊びで山へ登る”ことができるのはごく限られた階層だったからだ。最初にふれた松方、板倉、伊集院や、大島亮吉、マナスル隊長の槇有恒などの出自は、ヨーロッパアルプスの登山の初期と同じく、有閑特権階級であった。時間と金がかかる冬山縦走などは大学山岳部にしかできなかった。ヒマラヤ登山や極地遠征を夢みることができたのも、ある意味で特権階級であった大学山岳部とそのOBだけであった。他方、遅れて社会人山岳会が現れた。彼らは大島亮吉が“近くて良い山”といった谷川岳に夜行日帰りで岩登りに通った。その後、彼らは日本のアルパイン・クライミング、尖鋭登山をになう集団となった。最近、小熊英二著「生きて帰ってきた男―ある日本兵の戦争と戦後」(岩波新書)を読んだ。英二の父親・謙二は、昭和23年にシベリア抑留から帰国後ずっと食うや食わずの生活だったが、昭和33年(私が北大に入った年)になって初めて、ある小さな会社のスポーツ部門担当社員として雇われた。“時代は高度成長期の初期で、まず登山が、次にスキーが流行し始めていた。それ以前には、スポーツなどというものは、中産階級以上のものだった。専用のスポーツ用品もまた、大衆には無縁だった。”と書かれている。北海道の山岳スキーおよび登山の開拓時代に北大スキー部や山岳部などが主役を果たせたのは、こういうことだったのだ。北大スキー部が初期のスキー競技(特に、ジャンプや距離)において輝かしい実績を残せたのも同じことである。

私が卒業した昭和37年頃、八方尾根の週末のゴンドラは2時間待ちという状態だったが、リフトの終点から上へむかって歩き出す人はほとんどいなかった。“山スキー”は特殊な人間がやることだった。今、春の八方尾根は列をなしている。そして、彼ら(彼女ら)はガラガラ沢、八方沢、不帰3峰ルンゼなどを滑る。ガイドツアーも盛んで[1)]、そこに参加する人たちの腕前もなかなかである。また、金沢の早川ドクターや五竜岳武田菱ルンゼで死んだ新井さん(東大スキー山岳部OB)のような先鋭的な山スキー界の名士がいるし、利尻岳大滑降の佐々木大輔さんのようなプロもいる。北大山スキー部OBですといって威張れる時代ではない。

では、北大山スキー部はもはや“斜陽”なのだろうか。意味がないのだろうか。はっきり云えることは、この50年間に北大山スキー部を卒業した人は400人を超え、これからも増え続けるだろうということである。山スキーを標榜するいろいろな集団があるが、一定以上の実力をもつ山スキーヤーを“輩出しつづける”集団は他にはない。北大の山岳部や山スキー部が“先進的な記録”を残せるような時代はとうの昔に過ぎ去ったが、北海道には若い学生の一人

ひとりがチャレンジする場と課題には事欠かない。その課題は、ある時は「日高を滑る」[2]であり、或る人には「室蘭・札幌ひとり旅」[3]であり、またある人には「無意根小屋番年間70日」[4]であったりもする。私にとっては、1年目の裏大雪全山縦走のサポート隊の経験、吹雪のニセコ合宿、無意根山頂直下の滑降、1、2年目だけで行った夏の日高、リーダーとして行った夏の日高、正月の大雪登山の吹雪敗退、などが力になった。400人超のOBにはそれぞれの現役時代があって、それが糧になっていることだろう。

その結果として、多彩で人間性豊かなOB達がいて面白い。南極観測隊隊員、アラスカ・ヒマラヤ・北千島・カムチャツカでのスキー行、氷河や火山地質研究者、写真家、ジャーナリスト、雪崩屋さん、海外に居ついてしまった人、フリースクールの校長、斜里の養豚農家、ケーキ屋、等々、そういった人たちと交流できることで私の人生は豊かである。今年の4月中旬、佐藤タネイモさんと二人で栂池から天狗原を経て蓮華温泉へ行った。快晴の残雪期のクラシックルートは楽しかった。蓮華温泉の食堂で出会った40代の夫妻(なかなかの実力とみた)は、私たちが75才であることを聞いて、「羨ましいです。私達もそうなりたい。」と云ってくれた。素直に嬉しかった。

しかし、勿論、山スキー部現役の活動は老後を豊かにするためのものではない。結果として豊かな人生があるのだ。水谷先生は「むいね」第6号において、クラブ活動の意義を「集団生活によって“豊かな人間性”を培うこと」とされたが、それは活動の結果であって目的ではない、と私は考える。雪深く寒くて広い北海道にある北大山スキー部という、恵まれた場所と条件を最大限に生かして、自由で個性的な活動を追求すれば、結果として、面白い「生涯山スキー」、豊かな人間性と人生がある。活動がより豊かであれば(そのためには知識、経験、体力、技術が必要だが)、より豊かな人生があるのだと私は思う。その追求の仕方には、山スキー部の存在理由そのものを否定しうる立場もあってよい。

もう一つ付け加えたい。このような流れの背景には、経済成長に伴う、大学の大衆化・平準化、スポーツの大衆化・商業化・プロ化・国際化、道具や技術の発展があるが、(私の時代の感覚で現在を語ることはできないが)、教育の平等主義、効率主義の影響なのか、部活動にも画一化、マニュアル化がみられるような気がする。

そもそも冬山へ自分の足で登るという行為自体が効率に背を向けることであり、かえってそれが魅力なのだから、私は、北海道の山スキーはこれからも、非効率で自由であってほしい、と思っている。

最近、歌の作曲にはまっている。最近作「ロートル倶楽部部歌」の歌詞を紹介する：

1. 若いときに山へ行った
　　夏の日高へとでかけた
　沢をのぼり藪をこいで
　　疲れ切ってカールに着いた
　俺たちは　俺たちは
　　俺たちは　今ヘロヘロで
　俺たちは　俺たちは
　　俺たちは　今山にいる
　山はいつもここにあって
　　ここにはいつも自由がある
2. 年をとって足は弱り
　　膝が痛み息はきれる
　それは俺もきみと同じ
　　高い山は遠くなった
　俺たちは　俺たちは
　　俺たちは　でも気は若い
　俺たちは　俺たちは
　　俺たちは　まだ山へ行く
　山はいつもそこにあって
　　そこにはいつも自由がある

文献

1) http://backcountry.sports.coocan.jp/safety.html
2) むいね，第11，12，13号
3) 深田直之(2001) 室蘭・札幌ひとり旅．こなゆき，第25号，18–24.
4) 田村英士(2011) 田村君からの手紙．こなゆき，第34号，26.

第5章

追　悼



『むいね』第4号より



友たちが眠るむいねのケルン（田村　正撮影）

我々はこれまで（戦後）山での 4 件の遭難事故で 9 名の仲間を失った。小池 威君（1947 年入学、予科 2 年次）および高倉 稔君（1958 年入学、1 年次）は無意根山で、山下 広君（1958 年入学、3 年次）と山室紘二君（1959 年入学、2 年次）はペテガリ岳中の川で、そして 1972（昭和 47）年 11 月 21 日の旭岳盤の沢での雪崩では後藤次郎君（1969 年入学、4 年次）、及川俊一君（1971 年入学、2 年次）、星野信男君（1971 年入学、2 年次）、瓜生 純君（1972 年入学、1 年次）、川上 真君（1972 年入学、1 年次）の 5 名の命を一度に失った。

故人を偲ぶとともに、遭難事故は決して起こさないための戒めとしなければならない。なお遭難事故記録については、第 2 章山スキー部の活動「遭難と事故の記録」を参照していただきたい。

1　小池　威君（1947 年入学、予科理類 2 年次）

1949(昭和 24)年 1 月 2~5 日、無意根合宿(22 名参加)に参加した。4 日昼 14 名は下山し、残った 8 名は午後の薪運びの後、小屋向いの斜面でスキー練習開始。同君は初めの滑降開始直後に雪下の木株にはね飛ばされて樹木に激突し、人工呼吸などの懸命な救命処置にもかかわらず、そのまま不帰の人となった。1 月 7-9 日、葬儀は部葬として執り行われた。



写真 5-1-1　故 小池 威君

1.1　小池　威君のこと

木村　卓也（1950 工 土木）

北海道の冬と別れて早いものでもう 10 年、はるかになつかしい学生時代を思い出すことも雑用に追われて時たまと云う年になってしまいました。たまたま過日元気のよい現役の方 2 名が職場に来られて何か書けとのお話。突然(ではなかったのですが)のため、色々と話し合っている中に小池君の事に及び、すでに長い才月が流れているせいもあってでしょうが、当時我々の手で積んだケルンも、又汗と共に運び上げ立てた墓標も全く忘れられ独りさびしくムイネの山の中でねむっている由を承り、これでは余りと云う気持ちから、彼の霊に捧げるべく、拙文をも省みず筆をとった次第です。従って小生が追悼文をかく事の適否もよく考えておりません。お許し下さい。

あれは確か、小川先生が大野先生からスキー部長のバトンタッチを受けられて間もなくの、昭和 24 年の正月、ムイネ合宿もそろそろ終ろうとしている時でした。私が土木の二年で、君がやっと待望の化学を専攻し始めたばかりの一年の事ですから、もう 17 年の年月が流れてしまったことになります。当時の食糧事情を思いおこすと誠に深刻を極め、今のようにコンパ等と云っている余裕はなく、合宿中の心のよりどころは専ら皆でダベること。そして心から歌うことで終始しましたが、それでいて結構楽しく若さを発散させることの出来る毎日でした。今でも忘れられないのは、亡くなられる前の晩、君は仲々の美声(？)で一人静かにショパンのノクターンを吟んでおられましたね。たまたまそれを聞きつけたのが小生で、歌詞を教えてくれとたのんだ処、どういう理由か明日の晩、と云うことで床について了ったのですが、とうとう小生のその願いも叶わず、翌日の夕刻には帰らぬ人となってしまったのです。その冷い君の顔には何の苦痛の色もなく本当に何時もの寝顔そのままにしか私には感じられませんでした。

今も同じと思いますが、当時の合宿は小屋の薪運びも兼ねておりスキーの練習はその間をぬって行なわれていました。その日も一日のノルマを終え、夕食までのわずかの間、沢すべりを楽しもうと、君と二人で登りを務めて雑談を交えながら先の連中を追って登って行きましたね。ふと途中で小屋の方を眺めると仲々恰好のスロープがあるではありませんか。先の連中このような所を見落すとは些かだらしないぞと云う気持ちから、そこから降りようと話し合ったわけです。ところがどうしたものか先におりるつもりの私のバツケンの具合が悪く締め直している間に山のマナーから君は「お先に」の一言を残して滑り降りましたね。その年はまれに見る

雪の少ない年でしたから上から見ると全く判らないブッシュがすぐ下にあり、ここではねられ、よけた君を待っていたのが一本の大きいダケカンバでした。これに激突、一たん上半身を起したものの頭蓋底骨折でそのまま息をひきとったわけです。その時の私の気持は只々夢中でしたが、時がたつにつれ何故先に降りなかったのかと自責の念にかられ、何とも申し訳ないと心の中で手を合わせ君におわびしたい気持で一杯です。君と私とは、君の令兄が私と中学同期と云う関係もあり君の家に下宿していた中学の先生を仲にして、よく一緒に遊んだ云わば竹馬の友でもあったのですが予科に入学してからの君はスキー技術は申すに及ばず、学業の方もずば抜けて優秀で理類のクラスでは十番以内の成積だったと記憶しております。そうした色々のいわば外的な条件よりもそれ以上に私をひきつけたのは先程もふれたように音楽が好きでどちらかと云えばおとなしい性格でしたがそれでいて内に秘められた猛烈なファイトをはじめ、人柄と申しますか人間小池の1コマ1コマが今でも脳裏に焼きつき、本当に惜しい人物を失ったものと悔まれてなりません。

才月は流れても君を忘れない人間はスキーの仲間にも数多いと思います。どうか小池君の霊よ安らかに眠ってください。

追記

この小文が御遺族のどなたかの目にとまることがあるでしょうが、もしもとまれば小生の平生の御無沙汰を深くおわび申し上げます。御両親は如何お過ごしでしょうか。遙かに東京の空から御案じ申し上げると共に御連絡下されば望外の喜びに存じます。

（『北大山スキー部部報』(1972)より転載）

1.2　スキー仲間の小池先輩を失う

進藤　忠夫（1952 工土木）

私の1年先輩、予科理類の小池威さんが、無意根小屋のすぐ近くで亡くなるというアクシデントがあった(1949.1.4)。この時は私は一緒ではなかった。話を聞くと、数人のパーティで山頂から小屋に戻る途中、下方に小屋がはっきりと見える最後の急斜面で、彼が雪煙を巻き上げながら直滑降で降りた時に、不運にも雪に埋もれていた木の切り株に足を取られて大きく転倒、立木に頭をぶつけたそうだ。仲間が駆け寄って意識を失った彼を小屋の中まで運び入れたが、二度と息を吹き返さなかった。頭蓋骨の骨折による即死であった。

小池さんのにこやかな顔が写っている写真が残っている。永野拓也君の写した悲壮な写真もある。急造のソリに小池さんの遺骸を納めた寝袋をくくりつけて深い雪の中を降ろすところのもの、遺骸の後ろには西野、水沢、矢崎、木村、須藤、寺田の諸氏が鎮痛な面持ちで空を見つめている。

この事故の2週間ほど前、年末の恒例のスキー部のニセコ合宿で、私は小池さんと同じ班で行動をともにした。奥名無山の東斜面での彼の直滑降は素晴らしかった。合宿最終日の夜のコンパの余興には彼も私も体に墨を塗って土人となり、矢崎君の演ずるターザンを交えて一大活劇をやった。この日から10日も経たずに彼は無意根に逝った。

後日、彼の遺品として、予科の帽子と山の歌が書かれている手帳(バイエル地方の民謡がドイツ語で書かれている貴重な手帳)をいただいた。彼と2部合唱をしたことも懐かしい思い出だ。

(『北大スキー部 OB 会会報』第 34 号(1978)「山班の伝統を享受して」より抜粋)

2　高倉　稔君（1958 年入学、1 年次）

1958(昭和 33)年 5 月 18 日、無意根小屋番のために単独で登山中に無意根山電光坂付近の沢で流される。



写真 5-2-1　故 高倉 稔君

2.1　高倉 稔君の死を悼んで―遭難経過報告―

佐々木　利夫（1960 理 化学）

去る五月十八日、午前十一時頃新入部員高倉稔君が無意根山登山口より約十分の、夏道より左に五十米入った沢の中で、豊羽鉱山の渋谷広義氏、大熊和夫氏に遺体となって流されているのを発見され、地元民及び定山渓警察等の手によって遺体は定山渓のお寺に収容され、学生課に連絡があり、学生課の力によって高倉君の御親戚の大屋氏宅に安置されました。我々が遭難事実を知ったのは、十九日の北海道新聞朝刊で知り十一時頃一同十四、五人で大屋氏宅を訪れ納棺された亡き友と対面したのです。高倉君の御両親、お兄さんも東京から来られ、その夜お通夜が行われ、二十日、遺族と部員だけの仮葬が行われ、午後遺品捜索隊の手で電光坂下飯場から発見した遺品を遺族にお渡ししました。二十一日、お父さん、お兄さん、大屋氏と共に向井以下部員四名が遺体発見個所にて供養し、さらに二十二日、お父さん、お兄さんの御希望で電光坂下の飯場迄御案内いたしたのでした。その後二十六日東京で本葬が行われました。

以上が高倉君遭難の状況ですが、我々としては大屋氏宅にて遺体に対面する迄何も知らず、何らの事もせず、定山渓地元民や学校当局によって遺体が発見され、運ばれて遺族にお渡ししたのでした。この遭難に対して、我々はその原因を究明し、今後二度と同じ事をくり返さない事が、我々のなすべき事と思いまして、報告をいたしたいと思います。

五月十七日、四年目部員沢田克彦、二年目部員中島 巖及び新入部員高倉 稔の三君が無意根小屋管理の為、無意根山登山に向ったのです。高倉及び中島の両君は、朝八時二十分発の定山渓鉄道のバスで出発し、沢田は講義の都合上午後の同電車で出発の予定を立てゝおりました。

当日、高倉君は前日より眼の充血を考慮して、朝バス停留所まで来て、中島と会い眼科医の診断を得てから、医師判断によって行動するとの約束で中島は先発しました。一方高倉君は医師の診断では何等の異状無しとの事で下宿に帰り十時前後の定山渓鉄道で出発したのでした。当日の天候は朝のうちは曇りで、正午頃より雨が降り出し、午後三時頃からかなりの雨量を伴う雨となりました。高倉君は豊平発十時頃の電車で出発したと仮定して、十一時に定山渓に到着し、正午頃には薄別登山口に到着しているものと思われる。当時無意根山の残雪状態は、登山口より通称水呑迄は完全に夏道が現われており、水呑の上から残雪の間に夏道が現われているという状態でしたから、非常に夏道を

見失い易い状態にはなっていたが、冬期間中に行われた造材作業で雪上に馬ソリの引いたあとが残り、馬糞で黒くもり上って一目瞭然としており、この馬ソリ道は、ほとんど夏道と同じでした。これが通称電光坂と云う第二渡渉点の手前の登り道から左に切れ、三、四百米程で川を渡渉して五、六十米で飯場に至っている。当日迄はスノーブリッヂがあり、これを渡る事が出来ました。このような状態だからこの飯場迄は少々迷ったとしても、昼食時間を見ても三時頃迄に飯場に到着したと思われます。山での天候は山小屋附近で三時頃から吹雪となり飯場附近ではみぞれとなっていたので、高倉君は相当に濡れて飯場で休憩しようと思ったのでしょうか、飯場へ向いました。この飯場は三月迄使用していたが、当時は使用されておらず無人小屋となっていたので、高倉君は川を渡渉して五十米程で飯場事務所があるが、ここには入る事が出来ず、隣の棟に入りました。この棟は馬小屋として使用していました。

高倉君の遺品は五月二十日、五名で遺品捜索を行った際、この馬小屋で発見されたが、その時の状態は入口にムシロが二、三枚程重ねて置かれ、その上にキスリングが口を開いたまゝで置かれ、ヤッケ帽子等濡れたものが拡げてあり、長靴が横にあり、地図、ハンゴウ等キスリングの中のものを出して附近にあり、フォークが入口から二米程外に投げ出され、スキー、ストックは壁に立て掛けてあった。それは丁度ムシロの上に腰掛けて、濡れたものを着更え休憩中何かの理由で外に出て行ったと思われる程、極く自然に遺品が置かれていたとの事でした。後続者の沢田を待つ為に入口のひさしで雨やどりをしていた事実は十分想像されます。遺体は飯場より四キロ下流にて発見されたのですが、当時溶雪期でもあり、更に降雨の際であるから当然相当量の水量があったことは想像されます。当時の水量は飯場附近で一米、遺体発見地点で一米五十近くに達していたと思われ、相当の急流となっていた。遺品捜索隊が遺体発見地点より上流に向って沢沿いに捜索して行ったのであるが、この捜索結果流木等によって流出物がくい止められる個所が十数個所ある事が確認された。遺体発見状況は豊羽鉱山の渋谷氏、大熊氏によって発見されたが、約十米程の川幅でかなりの急流となっている地点で沢の真中に三、四米の流木が二本Ｖ字型になっている部分にせき止められていた状態で発見された。遺体には外傷は非常に少なく、後頭部に致命傷となったと思われるものがある程度で、定山渓警察の話では、二、三百米の距離を流されたに過ぎないと思われるとの事でした。遺体発見個所より上流三百米の地点に流木十数本が沢幅全体に堆積され、遺体程度の大きさのものなら完全に流出を阻止されるような個所があり、流されたのは三百米以内であろうと、五月二十二日に高倉君のお父さんも確認しておられました。結局遺体発見個所より上流二、三百米の地点迄来てから急流に流された事は明白のようです。

高倉君がみぞれまじりの雨中を身一つで飯場より出て行った原因を考察するならば、第一に帽子も被らない軽装で出た事と、第二に遺品発見の際、飯場小屋の中に、高倉君が、ムシロの上に腰を掛けて居ても何ら不思議と思われない程、あまりにも自然に遺品が置かれていた事と、更に高倉君が過去高校時代に高校山岳部のリーダーをつとめた経験を持っている事実からも、高倉君がキスリングの中のものを出したまゝ、個人意志により下山を試みて途中道を見失い沢に入ったとは考えられず、何か偶発的、他動的な要因による行動と考えざるを得ないと思われる。

ここに考察される要因として、(1)幻聴、幻覚、②他人の脅迫等人的要因、(3)獣類に対する恐怖感。

以上の要因につき分析するならば、(1)では極度に疲労した場合には充分考えられるが、前記したごとく飯場迄は比較的容易に行く事が出来たと思われるし、又高倉君の経験、体力からすれば二時間程度の行動では、幻聴、幻覚に至

る迄の疲労度に落ち入ったとは考えられない。

(2)の人的要因を考えるならば、高倉君が現金、時計等は身につけており、又残した遺品も全て残されていた事からも人的要因とは考えられない。

(3)獣類に対する恐怖感、特に熊出没のため恐怖のあまり取るものも取りあえず、沢沿いに下山しようと試みた事は十分想像されます。このことは前記したごとく、フォークを投げ出し、又ハンゴウ等が出されていたことからも事実と思われます。無意根山は元来熊が居ないと思われているほどで、熊に出会った話を聞くのはわずかに猟師達に過ぎず、一般登山者は全て出会う事がないほどです。しかし定山渓警察の話では豊羽鉱山附近で発見された熊を、五月十八日に無意根の沢の中に追い込む計画があったとの事でしたから、高倉君が飯場附近で飯場の中からか、外へ出た時に熊が現われたのを見て、一途に下山しようとして飯場附近では沢の右岸は広くなっているから、徒渉せずに沢を下って、遺体発見個所の上流附近にて左岸に渡渉する際沢に落ち、後頭部を強打して死亡したのではないかと想像されます。

以上高倉君が遭難状況とも考察され得る事を述べましたが、高倉君遭難の理由は、小屋管理の為単独行をあえて行わしめた山班指導部にあったことです。とかく山班内に、無意根小屋ぐらい一人で行けないようでは部員の資格がない、と云う気持が流れていたのは否定出来ない事実であり、単独行に含んでいる危険性を無視した安易な気持を無意根山登山等、小屋管理の際に抱かせていた部の指導力の欠陥が、新入部員の高倉君を一度だけの経験で、単独行を行わしめた結果となったのです。高倉君はわずか一ヵ月あまりの部員生活にもかゝわらず非常に熱心な部員として活動し、又立派なアルピニストとしての素質を持っていながら、短い生涯を無意根山にて閉じたのでした。

北海道にあこがれ、北海道の山々を求めて、北大に入って来た亡き友が、あのムイネ山を心から愛し、強く求めて、無意根山に永遠の訪問者として迎えられたのです。でも稔君はただ一度だけの無意根しか知らず、四季を通じて織りなす無意根山の美しさ、無意根山の良さを知りません。せめて亡き友に一月の無意根が、羽毛ぶとんよりやわらかく我々を受けとめてくれ、全身を白いベールで包んでくれるあのパウダースノーを味わってもらいたかったのです。

亡き友に対してせめてものなぐさめに、永遠に無意根山に生きてくれるよう、我々の手で四季の無意根を一望のうちに見渡されるあの無意根山頂にケルンを積みました。我々は折り折りにケルンを訪ね、亡き友と語り合いの一時を過す事が、我々に出来る唯一の道で、そうして始めて亡き友は無意根山に永遠に生き続け、我々をやさしく待ち受けてくれる事でしょう。

(『むいね』第1号(1958)より転載)

2.2　雪溶けの頃

中島　巖（1961 工 鉱）

この文は一九五八年五月一九日の晩に書いたメモから取ったのである。高倉君の御両親のことを考えると自分の無責任な行動をどうわびていいかわからない。

以下自分の行動の至らなさを反省しながら書いていくことにする。

五月十六日

昼休みに体育会控室で無意根の小屋番のことについて話し合う。スキーとキスリングが無いと云うので、スキーは石塚氏、キスリングは塘

氏のを借りることにする。食料は豚汁と象の肉の料理をすることになる。この象の肉は前日獣医学部で処理したもので、沢田氏が持って来ることになる。しばらく雑談して、明日の八時二〇分発の薄別行バスに乗ることを約束して別れる。

五月十七日

八時五分頃第一生命ビル前に来ると、間もなく高倉君は制服・帽子を着けてやって来たので少々がっかりする。豚肉・ソーセイジ・ミリン干を渡すので「どうした」と聞くと、「俺、目がこんなになっているから病院にいって、後からの電車でやって行ます」といって左の眼を見せた。眼には白い部分に血液の斑点の様なものが見えた。

「そりゃ悪いな。時間はかかるけど学校の病院に行った方がいいだろう」

「いや普通の眼科の病院で急いで見せて来ます。多分十時頃の電車で行かれると思います。それに学校の病院は十時頃からでしょう」

「でも一人で来れるかい。慣れてないと地形がちょっとむづかしいけどどうかな」

「この前行きましたから大丈夫です」

「ゴールデン・ウィークの時にかい」

「えゝ」

「だったら来るなら何時頃迄来るかい」

「遅くても四時頃迄には行きます」

「じゃ医者に相談して差支えなかったら出来る丈早く来んない」と云うと彼は俺の方言にとまどっていた。

高倉君の遭難事故があって以来自分が一番無責任なことをしたと思うことは「医者に相談して差支えなかったら、云々」ということを言ったことである。この言葉程あいまいで無責任な言葉はないと後悔の念で一ぱいである。というのは、高倉君と別れた直後からこの言葉にまどわされたのである。この言葉のため俺は高倉君を札幌で待つことも薄別で待つこともしなかったのである。高倉君のことを思う時「すまないことをした」という気持に陥いる丈では済せない様に思う。

「じゃバスが出るから」と言葉を交して駅前の方へ去っていった。

「責任感の強い奴だなあ」と思いながら、ちょっとの間後姿を見てバスに乗る。これが最後になろうとは全くあきらめきれぬ気持である。バスの窓から空を眺めると天気は大丈夫だろうと思う。

バスから降りて、午頃迄高倉を待つことも考えるが、待つのも面倒くさくなって、つい登り始める。水飲あたりには雪溶けの水の中から水バショウの芽が出はじめている。水飲から電光坂の間は未だかなり雪が残っている。見返り辺あたりから空模様が悪くなってくる。十二時半、小屋の前のところに来ると煙突から煙が出ているので人がいるんだなあと思いながら、小屋に入ると二人連の人達が帰ろうとしているところであった。この人達も道に迷ったと聞いて、高倉は大丈夫かなあと空を見上げながら考える。小屋に入って昼食をして、スキーで小池先輩のケルンのところ迄行く。パラパラとあられが降って来て、妙に高倉のことが気になる。この頃彼は丁度水飲から電光坂に向って急いでいたと思われる。三時頃二階で一人でうつらうつらしていると顔に冷いものがかかるので、目を覚ましてみると、外はいつの間にか吹雪になっている。どうも荒れそうである。もう彼が来る時間だと思って、オロチガ原迄降りてみる。大きなボタン雪である。四時過ぎても高倉は来ない。吹雪はかなりひどくなって来たので、又オロチガ原迄降りてみる。沢の所迄来て、ヤホーをかけてみるも応答なし、又かける。つづけざまに叫んでも聞えるのは雪の音だけである。一人で吹雪の中で叫んでいるのも心細くなり、も少し降って、引き返してくる。医者に止められて断念したのであろうと思って小屋に帰ってくる。五時近く、豊羽鉱山の山口氏一行が来る。暗くなってから沢田さん達着く。高倉のことを聞くも会わなかったとのことである。七時頃岡田さん着く。

五月十八日

朝起きてみると、ものすごく湿っぽい雪が一尺位積もっている。七時に豊羽鉱山の人達下山す。この人達が宝来沢にて高倉君の遺体を見つけたのである。俺達は雪の状態が悪いので、午前中小屋でなまる。午後北壁でスキーをする。

五月十九日

朝四時に起きて下山す。朝焼けでタンネの木が真赤である。薄別にて営林署の人から北大生の遭難死のことを聞く。定山渓駅にて遭難者は高倉であることを認む。

以上は僕の当時の日記である。

この頃は高倉君のところに遊びに行くような気持で無意根に出かける。大雪のサマースキーや日高の沢歩きや新雪の山に行く時には、必ず高倉君もキスリングのかげについて来てるような気がするのである。

（『むいね』第 1 号（1958）より転載）

〔編者注：『むいね』第 1 号（1958 年）には、さらに下記の方々から高倉 稔君への追悼文が掲載されているが、紙面の関係で割愛した。
「高倉 稔君へ、小松 弘」、「故高倉君を思う、若林隆三」、「高倉君を想う、塘 忠夫」、「無意根合宿と高倉君の死、中村晃忠」、「ケルンに祈る（詩）、向井成司」〕

■コラム■
ムイネスキー

今ではスキーの板はもちろん、ビンディング（金具）、ストック（ポール）、靴等、輸入品が主流となってしまったが、1970 年代くらいまでは、輸入品は高根の花。国内にも道内にもスキーメーカーがひしめいていた。札幌では芳賀スキー、小樽には野村スキーがブランド的存在であったし、秀岳荘もオリジナルの山専用のスキーを制作販売していた。スワロースキー、コニースキーなどというのもあった。

その中で、「ムイネスキー」に記憶があるだろうか。図は昭和 34 年発行の S・A・J スキーテキストの広告欄からのコピーである。小樽の小川スキー工業の広告で、札幌の芳賀スキー、東京の美津濃、富山のハタスキーとともに掲載されていた。

「ニセコスキー」というものがあってもよさそうだが、無意根山は当時のスキーヤーにとってはあこがれの聖地であったのかもしれない。昭和 9 年発行の「山岳スキーの旅」（竹節作太著）では無意根小屋から薄別までの林間滑降コースを “あたかもノルウェーのオスロ―近郊ノルマルケンの丘陵を走っているような感じ” と評価している。

倉持寿夫（1965 農 林学）



3　ペテガリ岳中の川の遭難

1960(昭和 35)年 8 月 2 日ペテガリ岳中の川において、山下 広君(1958 年入学、3 年次)および山室紘二君(1959 年入学、2 年次)の 2 名がなくなった。



写真 5-3-1
遭難直前に登頂したペテガリ岳山頂での山下君(左)と山室君(右)

3.1　遭難報告

塘　忠夫（1962 医 薬）

簡単な山行から困難な山へと向って行く傾向は、登山者として当然な行き方だと思う。このことは、夏山冬山を問わず、登山を志す者ならば、当然たどる道であろう。もし私達が先人の跡をたどることのみで満足しているならば、そして自分で新しい道を求めることをせずに満足していられるならば、それはそれでも良い。

しかし、先人の跡を追いそれをふみ台にして、更に技術を、又新しい道程を求めるならば、私達の前には常に新しい事の開拓への試みがあるはずだ。

この度の私達のアクシデントによって、私達の同輩、及び後輩達が、ただ単に先輩のたどった道のみを歩き、新しい開拓の精神を失う様なことがあるとすれば、大変残念な事だし、いかんな事に思う。勿論、簡単なハイキング・コースの様な所でさえ、どんな事態が起るか想像もつかない程、ある意味では、山は危険な所だろう。それだけの危険を知った上で、それに対しよするあらゆる注意と、あらゆる能力を持って当り、そしてこれを克服して行くことこそ真の登山者としての行動であり、本質ではないかと思う。

私達のこの度の遭難は、たしかに敗北であった。山に対する勝利や敗北はないけれど、登山者として登山に破れたのだ。

尊い山友達の死を目前にして、生き残ったと云うことは全く心苦しい。恥しい。彼等に、御家族の方々に、又部員諸兄、先輩の方々に対し何と云って良いのかわからない。

しかし、ただ申訳ありませんでしたでは、故人達も安らかには眠れないだろうし、残された私達も進歩がない。私はあの時の責任者の一人として、遭難の時の模様を記し、今となってはこれのみしか出来なくなってしまった、後へ続く者への戒としたい。

先ず私達一行のメンバー及び予定コースを記しておくと、

・メンバー

塘　忠夫―日高登山経験夏三回、冬一回

山下　広―日高は初めて、大雪、知床その他春の立山を経験

谷口尚弘―日高登山は二回目、内地の登山経験多数あり

山室紘二―日高登山は二回目

・予定コース

静内―銅山小屋―西尾根―ペテガリ―中ノ川三股―神威岳往復―大樹―帯広。行動十日、停滞

四日の予定。

七月二十四日夜行で札幌を発ち向井先輩の所で、池田画伯と共にジンギス汗に舌鼓を打った。二十五日朝、向井先輩、池田画伯に送られて出発してから天気にはあまり恵まれなかったが、無事三十日ペテガリＣカールに着いた。Ｃカールは、いままでの苦労を一気に忘れさせてくれるだけの美しさと暖かさを持って、我々を迎えてくれた。三十一日は雨で休養し、八月一日、あこがれのペテガリの頂にシー・ハイルを叫び、記念撮影。この夜、中ノ川上二股のキャンプでは、皆驚く程の食欲を見せ、一升近いチャーハンを四人でたいらげてしまった。

静かに夜が明けた。二日の日は、昨日の快晴はどこえやら、ガスが国境線からふきおりてくる。皆、ペテガリに登った喜びと、これからの難コースを思い、心ははやるが心を落ちつけて、ゆっくりめしを喰い、天候を待って、気象通報を聞いてから行動を決めることにした。ラジオは深い沢の中で、かすかに聞こえる程度だが、今日一日天気の持つことを告げている。

九時半、テントを撤収し終りテラスから沢へと下りていった。山室、塘、山下、谷口の順で沢に入ったが、山室は昨日岩魚釣りに下った経験からか、一人先へ行ってしまう。私も昨日偵察したところではこれから二、三〇〇メートルさして危険な所はないとは思ったが、このコース中、一番慎重を要する所故、すぐに追いかけた。

この場所は、初め左岸を行き、次に右岸に渡って滝の上で再び左岸に渡り、滝と函を捲くべく左岸の柵上を行き、函の下に出るのが、ノルマルのコースだろう。滝とは、高さ三メートル位、傾斜三十度位の滑るナメ滝で函も径五、六メートル、深さは一番深い所で三メートルもあろうか。函の右岸寄りは水流で白く見えるが、左岸は青くよどんでいる。滝の上を左岸に渡る所は、くるぶしを没する程度の水量で、一枚岩がそのまま滝につながっている。ただ、この岩はコケでもあるのか、少し滑りやすかつた。

又、左岸に渡ってから柵の上にあがる所は、一寸スタンスがとぼしく、わずかな距離とは云え、大型キスリングを背負って、不用意にかかれば、多少危険であったと思われる。

しかし、この様な場所は、ペテガリまでのコースで、サッシビチャリの遡行中も、何度となく出てきたし、泳いだり捲いたりして、無事通過してきている。

トップを行った山室は、私達より五メートル程前を先ず右岸に渡り歩いていった。右岸へ渡るとすぐ岩で姿が見えなくなるので、山下と共にすぐあとを追ったが、次に山室の姿を見つけたのは、彼が函の中で、キスリングを背負ったまま、泳いでいるところだった。キスリングが頭の上にかぶさっているところから見て、自らとびこんだのではなく、あやまって落ちたものと思う。流れのある右岸側でないので、思う様に前へ進まないらしい。すぐに私と山下はリュックを降し、泳ぎのうまい山下に救助をたのんだ。下へ廻って函の下流から山室の所へ泳ぎ至り、安全な場所へ誘導させようと、補助ザイルを渡したが、彼はそれを受取るとすぐ滝の上を滑る様にして函の中へ入っていった。三、四かきで山室の所に達したが、どうしたのか、山下は山室を救助する暇もなく、水の中にひきこまれてしまった。私はこれを見てすぐ下に廻り先ずキスリングの為浮いていた山室を救け、谷口に人工呼吸をたのみ、山下を救助に向ったが、その時すでに山下の体は、水面にはなかった。柵上より見下すと、函の左岸寄りの、青くよどんだその水底にあおむけに沈んでいる。

何度か下流よりもぐろうとしたが水流におし流され、ついに体にさわることさえ出来ず、むなしく手を合わせることしか出来なかった。山室の方は、救けた時、呼吸は止っていたか、心臓は動いていたので、谷口と共に口対口の人工呼吸を続けた。ぬれた衣物を脱がせ、セーター等を着せ、二時間半続けたが、ついに蘇生してくれなかった。時に十二時十分すぎ。

遺体を収容すべく左岸にかろうじてテントを張る。この時、もう烈なる雨が降ってきたので、先ず山室の遺体にポンチョをかぶせ、残った二人は、テントの中に逃げ込んだ。雨の上ったのは、五時すぎだったろうか。水量は意外に増加し、先刻まで簡単に渡れたところが、ものすごい急流と化している。先ず山室の遺体をテントを張った左岸に移し、シュラフで包んでポンチョにくるみ岩柵上に安置した。山下の遺体も、偶然流出してきたのを見つけ、同様収容し、手を合わせて泣くのみだった。

もう夕やみもせまっており、これから救援を頼みに行くことも出来ず、寝られぬ一夜をテントの中で送った。

三日、六時半、水量の増えた中ノ川を下ることは許されず、谷口と二人、ツェルトと三日分の食糧を持って、ただ無我夢中で下降尾根をよじ登った。非情な雨にたたかれながら、やっとあの二日前に登ったペテガリの頂上に達したのは午後五時をすぎていた。

どうしてこんな深い山中に入ってしまったのかと思いながら、再びしゃにむに足を動かして西尾根に下り、次の日やっと銅山小屋に達した。ここから大和鉱業の好意で、最奥の連絡所、奥高見営林署事業所まで自動車をとばした。

奥高見事業所から札幌へ電報を打って、張りつめていた気がゆるむと同時に、悲しみがこみ上げてきてどうすることも出来なかった。

（『むいね』3号（1961）より転載）

3.2　故 山下　広君　山行歴

昭和 33.4　北海道大学入学
33.12.22-28　47 シーズンニセコ合宿（一般として参加）
34.4　北大スキー部山班入部。
34.5.1-5　無意根ゴールデンウィーク合宿。
34.6.8-14.　大雪山サマースキー。
34.10.30-11.1 ニセイカウシュペ山。
35.1.7-12　無意根正月合宿。
35.2.5-8　無意根山―余市岳縦走。
35.3.15-20　十勝岳送別合宿。
35.3.26-4.1　立山三山及び浄土山にて春山スキー。
35.4.8-13　後立山五竜岳及び八方尾根。
35.4.29-5.4　暑寒別岳（増毛―暑寒別岳―群別岳―増毛）
35.5.14　無意根新入生歓迎及び高倉氏追悼。
35.6.11-20　大雪山サマースキー（旭岳―北鎮岳―愛別岳往復）
35.6　池田画伯を案内して一週間無意根へ行き、熊笹を分けて中岳へ至る。
35.7.24-8.2　南日高（静内―銅山小屋―西尾根―ペテガリ岳―中ノ川上二股。上二股にて遭難）
（『むいね』第3号（1961）より転載）



写真 5-3-2
故 山下 広君

3.3　故 山下　広君にあてて

太田　一（1962 農 林学）

山下、今日も札幌の街は雪だよ。

いよいよ僕達のシーズンだ。君があれほど待ちわびていたシーズンだ。許してくれ。この喜びを君とともに分ちあえない事を。

僕と君が最初に顔を合せたのはたしか一昨年のニセコ合宿の時だったね。君は「曲りは全部転びよ」なんて例の口調で頭から真白になって滑って行く姿を僕はコンチキショウと思いながら見送っていたのを想い出すよ。あの時面白いヤツがこの合宿に来ているなと思っていたら翌日は我々の初年兵部隊に入って来て翌日又出て行ってしまったのをおぼえているよ。スキーはあまり上手い方ではなかったが、リーダーについてどんどん滑って行く君の姿を僕は今でもはっきり見ることが出来るんだ。合宿が終って君が入部してきてから約二年間、僕も君とはずいぶん一緒に山に行ったね。或は学校で顔を合せるよりも多かったかもしれないね。おぼえているかい無意根正月合宿の原始林の滑降、大雪でのあの雄大な斜面でのサマースキー、念願の後立山に登った時のことを。小屋やテントの中では君はいつも主導権を握っていたものだった。合宿を一層楽しくしてくれたのも君だった。無意根の小屋で夜ローソクをともしながら文学や経済など議論したことがあったっけ。楽しかったね。君の大望を聞いたのもたしか小屋でだったと思うよ。君は現在の農村の在り方に非常に批判的で「オレは農村の水準をあげてみせる」と農経科に入る目的で北海道にやって来たと聞いて我等の北大ここに在りと微笑えんだものだったよ。僕は北大、いや日本の農村の為にも君を失ったことが残念で仕方がないんだ。君はオレに続けとばかりなんでも卒先してやってくれたし、いやなことでも苦情一つ言わずにやってくれた。

僕は何日だったか君からスキーの挑戦を申し込まれたことがあったね。サマースキーでは残念ながら君に一歩先んじられたが、今シーズンは僕も大いに奮起して追い越してやろうと思っていたのに……

僕は君の死がスキー部にとって掛替のない損失であることは言うまでもないが、君の残してくれた教訓を深く反省して再びあの様な事故を起さぬ様にすることを誓う。そしていつも日高の山から僕達を見守っていてくれ。

山下、日高の山は寒いだろう、

札幌の街も今日は雪だよ。

（『むいね』3 号（1961）より転載）

3.4　故 山室紘二君　山行歴

昭和 34.4	北海道大学入学、北大スキー部山班入部。
34.5.1-5	無意根コールデンウィーク合宿（生れて初めてスキーをはく。）
34.5.16	無意根新入生歓迎及び高倉氏追悼。
34.6.8-14	大雪山サマースキー。
34.7.11-15	無意根夏期小屋番として滞在。
34.7.17-27	北日高（戸蔦別川―戸蔦別岳―幌尻岳―新冠川―エサオマン戸蔦別岳―カムイエクウチカウシ山―札内川―上札内）
34.12.4-8	手稲パラダイス新人スキー合宿。
34.12.22-28	第 48 シーズンニセコ合宿。

35.2.5-8　芦別岳(山部―半面山―雲峰山―本峰―山部)
35.3.26-4.1　立山三山及び浄土山。
35.5.1-5　無意根コールデンウィーク合宿。
35.5.14　無意根新入生歓迎及び高倉氏追悼。
35.6.3-9　大雪山サマースキー。
35.7.24-8.2　南日高(静内―銅山小屋―西尾根―ペテガリ岳―中ノ川上二股。上二股にて遭難)
(『むいね』第3号(1961)より転載)

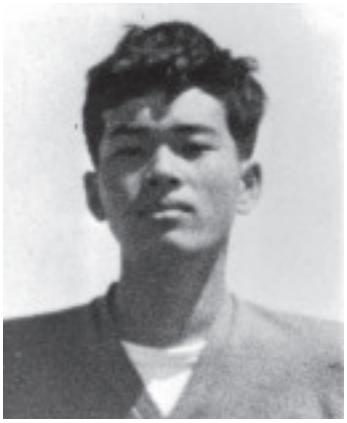


写真 5-3-3
故 山室紘二君

3.5　山室紘二君の思い出

谷口　尚弘（1963 工 衛生）

夏休みに京都から保津川の清流に沿って行く事二時間半、稲がそろそろ黄色くなり始めた山室の故郷を訪ねた時、僕は思った。

何と美しい、静かな所なのだろうと。彼と昨年の夏休みに、小屋番のトップバッターとして、二人で無意根に行った時に、最も多く話題になったのが、自分の家と故郷の事だったので、僕は僕なりのイメージを持っていた。しかしこのイメージはものの見事に外れていた。現実はもっともっと素晴らしい所だった。彼が自慢したのも尤もだと思う。そして駅から、彼の家まで歩いて行き乍ら、僕は田圃の方ばかり見ていた。この中には、彼が刈り取る事になっていた稲があるからである。その日の夜、僕等は彼の家で山室の回想に耽った。

今考えて見ると、僕はよく彼のダベリのお相手をさせられた。或はその逆かもしれぬ。ムイネで、或いは下宿に泊りに来ては、夜中まで電灯を消した暗やみの中で、日頃めったに話さない事まで議論したものだった。家の事、山の事、酒、恋愛から宗教論に至るまで。

宗教については彼とかなりの意見の一致をみた。即ち彼は山班の中でも宗教の必要性を認め、神の存在を信じたいと考えている数少い者の一人であった。もっとも彼のは多分に仏教的であるから、仏の存在と云うべきかもしれない。

酒については一方的に語られてしまった。“酒は静かに味って飲むべし。バー等で女が側に居ては、真の味が判らん”との説を押しつけて来たが、残念乍らこちらは何とも返事出来ず、ただただ“そうかそうか”と聞いていた。だが恋愛論となると俄然対立した。彼の主張“恋愛感情抜きでは、絶対に異性と交際出来ぬ”をめぐって、ついに結論を出すに到らなかった。又、川シャンのリーベについても、到々歩み寄りは見られなかった。しかし、次には家の事に話が移ると、又しても二人共仲良く、総領の甚六である事を口悔しがったりした。

これらの事は、詰らぬ話の一部であろうが、恐らく部員の多くには知られていない山室の姿の一片であると思う。だが良友でもあり悪友でもあった彼は、もう二度と帰らぬ所へ行ってしまった。

今これを書いている最中に、一つの事を思い出した。四、五年前に釧沢で亡くなられた石井逸太郎博士(富山大、地質学教授)の遭難が、非

常に今度と似ているケースだったと云う事である。僕は彼以外にも、この様な遭難があったと云う事をうかつにもすっかり忘れていた。今こうして思い出してみると、やはり彼の事故も“考えられないアクシデント”ではない事が痛切に感ぜられる。石井博士に対しては、同行した詩人の前田哲之助氏が非常に美しい詩を贈っている。だが勿論僕にはそんな才能はない。だから僕は山室の想い出はしっかりと胸に刻みつけておきたい。今回は余りにその犠牲は大きかったが、この事故を今後の戒めとして、二度とこの様な不幸を繰り返さない為に、とかく背伸びしがちな山行態度を慎しみ、着実に部を発展させて行く事が、僕に課せられた責任でもあり、山下さんや、山室君に対するせめてもの贈り物となると考えている。

（『むいね』第 3 号（1961）より転載）



写真 5-3-4　山下・山室両君のケルンの碑文

■コラム■
スキー部・山スキー部のモノグラムの由来

北大スキー部モノグラム（左・中）

1918（大正 7）年 12 月制作、デザインは沖野丈夫氏。沖野氏は黒百合会の常連で、野球部のモノグラムも手がけた。中に星を入れたのは、当時“星好き”で通った大宅農夫太郎氏である。このモノグラムには「技術優秀にして北大スキー部に対し功労あり、かつ部員として恥ずかしからず、なお熱心なるものに対し幹事会の推薦により与う。」という規定がある。色調については地銀の銀は雪、字の赤は情熱、星の白は強き白を自然のうちに表していると思われる。

由来はいろいろ調べたがわからない。1926（大正 15）年発行のスキー部創立 15 周年記念誌の表紙には既にこのマークが使われており、同誌の編集後記によると、スキー部卒業者に与えられる銀メダルである。

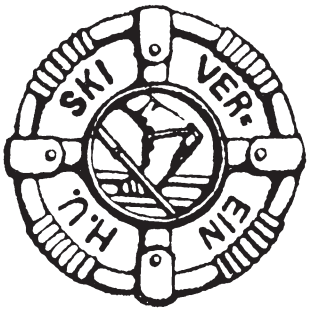
山スキー部モノグラム（右）

水谷　寛先生が 1967（昭和 42）年頃考案。デザインは北大山スキー部の呼び名 Hokkaido Universität Schi Verein für Alpinismus の頭文字を組み合わせたもの。現在『山とスキーの会会報』の表紙に使われている。

杉山　裕之（1989 経 経営）

（『山とスキーの会会報』第 15 号より）







4　旭岳盤の沢雪崩遭難

1972(昭和 47)年 11 月 21 日、北大山スキー部の後藤パーティーは冬山訓練として旭岳に向け湧駒別を出発した。翌年春の「雪原の放浪」山行をめざす彼らは、この山行を準備山行の一角として各自思い思いの考えをもって出かけたのだろう。その日、天候悪化のため、予定されたベースキャンプ地手前の盤の沢にて幕営、同夜 11 時、交代で除雪作業中に雪崩に襲われた。

幸いにも、除雪のため外に出ていた岩瀬隆則は助かったが、リーダーの後藤次郎はじめ星野信男、及川俊一、瓜生 純、川上 真の 5 名が死亡するという事故となった。

その後、生存者岩瀬の供述と、各方面からの多大な協力により捜索活動ははかどり、数日間のうちに 5 名全員を発見、仲間との悲しい再会となった。

本稿では、まず自ら事故に遭遇し初動捜索の要をになった岩瀬隆則の当時の手記を掲載し、ついで山スキー部葬時の水谷部長の弔辞、個人の山行歴を紹介し、事故後 30 年目に行われた追悼式などを紹介する。

4.1　手　記

岩瀬　隆則（1976 理 地鉱）

除雪を始めてから 1 時間たっても、まったくはかどらないので私は午後 11 時頃外に出てきた星野と 2 人で除雪をすることにした。星野はテント近くの雪をとり除き、私は除雪した雪をさらに谷側へやろうと、山側をむいて犬かきのような動作をしていた。

突然顔面に強い衝撃を受けた。星野が投げたブロックがあたったのかと思ったが後へ流されたときすぐ雪崩とわかった。風のせいか雪崩の音などはまったく聞こえなかった。どんな体勢で流されたのかわからない。泳ぐようにして流れの外に出ると良いと何かに書いてあったように思って必死でもがいた。しかし全然流れから抜けられず立木に激突しないかと思ったし、多少息苦しかった。圧迫感はそれほどなかった。十の沢の沢田パーティーのことなどが頭をかすめたが、次の瞬間にはデブリの上に押し出されていて、もう流れは止まっていた。

オーバー手袋がなくなっていた。ラテルネは点灯したままだった。ジャンパー、オーバーズボン、靴をつけていたので手だけ寒かった。濡れた軍手から指をぬいて握りこぶしを作った。風はすごい唸りをあげ、視界も悪い。どこまで流されたのか見当がつかなかったが、硬いデブリの上を登っていった。星野が近くにいるはずだと思ってコールをかけたが応答はない。やがてテントがあったと思われる場所に着き、何もないのを見て愕然とする。みんなうまったことはその時明白なはずだったが恐怖感はそれほどなく自分はどうするべきかと考えていた。上のテントに知らせに行こうとしたが時々腰くらいまでうずまるし、吹雪で地形がよく見えない。体力の消耗を懸念して引き返し、テントの位置から夏道の方へ少し登ったところの木の下に座りこんだ。11 時 50 分頃だった。

凍死することはあるまいと思ったが風をさけることはできず非常に寒かった。帽子を深くかぶり、握りこぶしを作った手をわきの下にはさんだ。眠ってしまおうと半ばあきらめた意識になったが寒くてずっとふるえていた。約 20 分

ごとに時計を見る。吹雪は依然としておさまらず、さらに50cm程積って足の方が雪にうずまり雪穴みたいになった。2時頃、風がかなり弱まり雪もほとんどやんだ。足の感覚がなくなって凍傷が心配だった。

5時30分頃、明かるくなってくる。視界もかなりよくなった。6時30分、行動をおこす。足が少し変だったが歩けた。地図を見るのもじゃまくさく適当に登ったらゴマ沢の見覚えある地形を見つけ、やがてテントの外に出ていた松居Pの岡田に出合ってほっとした。

（『旭岳盤の沢雪崩遭難報告』(1972年)より転載）

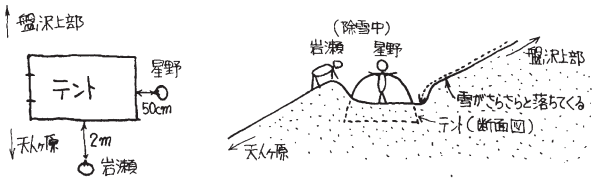


図5-4-1　雪崩発生時における星野・岩瀬の位置

4.2　弔　辞

北海道大学体育会山スキー部部長
水谷　寛

後藤君、及川君、星野君、瓜生君、川上君、ついに悲しい片道山行となってしまった君たちの今回の山行が始まった日から、もう20日が過ぎようとしています。遭難の最初の報を受けた直後の数日間は、考えがまとまるのを待ついとまもなく、あわただしく当面の業務に忙殺されてきました。その後次第に考えるゆとりがとり戻されるにしたがって、身近にいた親しい人たちの死を正視し、その意味を深く考えねばならない時だと思うようになりました。

それとともに、これまではあまり深く考えてもみなかった運命という言葉の意味を真剣に考えさせられています。

後藤君

君は山スキー部では最上級生の4年目部員だったので、君と私とは何かと語り合う機会に恵まれました。あるときは部室で、またあるときはシルバーロッジで、または山でも何回となく語り合いました。

君との最初の山行は旭岳のサマースキーだったと思います。そのとき君は、私が重そうに持っていたリュックをスキーもろともに軽々と背負ってくれました。そのときの自信に満ちた後姿が忘れられません。君は上級部員になるにつれて下級部員のめんどうをよくみるようになりました。そんなときの君の厳しさとともにおもいやりを含んだあのまなざしが私のまぶたから離れません。

その後、合うたびに立派に成長してゆく君を全く頼もしく感じていました。だから時間が経つにつれて私は、君に絶大の信頼感を寄せるようになりました。他の部員たちもおそらく同じように感じていたことでしょう。……その君が、このようなことになろうとは。

及川君

目を閉じると君のおだやかな顔が、私のまぶたにはっきりと写し出されます。それは、私の物理学の講義に出席しているときの君の顔であったり、あるいは、ユートピア牧場で干草を積み替えているときの君の顔であったり、走馬燈の絵のようです。

君はユートピア牧場の熱心な支援者でした。住みよい社会は助け合いの精神なしには作られないという認識の下に、そのような意識をもつ

仲間を増やす広場として役立てるために作られたこの牧場の建設に君は熱心でした。

そして君の将来の人生計画の中にも、このユートピア事業が大きな座を占めていたようです。その君の意志がここで中断されようとは……ほんとうに残念なことです。

星野君

芯は強かったとは思いますが、あまり表面に立ちたがらない性格の君と私との対話は、ほんとうに僅かなものだったと思います。最後に話をしたのは今年の 8 月の終り頃でした。

君はシルバーロッジに住んでいる仲間と一緒に私の自宅をたずねてくれました。突然の来訪のため、インスタントラーメンくらいしか出ませんでしたが、食べものの粗末なことに反比例して楽しい語らいでした。スキー術に関することが話題になりました。そのとき君は、今年の冬はシルバーロッジに住み込むからスキーは十分に出来ると楽しみにしていました。私も君と一緒に滑れるのを楽しみにしていました。……それももう出来なくなってしまいました……。

瓜生君・川上君

山スキー部への入部後間もない 1 年目の君たちと私との間には知り合わないことの余りにも多かったのが残念です。しかし直接には知らなかったにしても君たちにかけた期待には大きなものがありました。

瓜生君は中々の論客だと聞きました。山スキー部の中には、そのあるべき姿を追求せねばならない問題が沢山あります。それらは時代とともに常に新しい問題としてわれわれの前に立ちはだかって来ます。

君がそのような問題を論ずるときの有力な一員となる日をどんなに期待していたことでしょうか。

川上君は山スキー部では数少ない北海道育ちの部員でした。しかも希にみるスキーの名手だという評判でした。

山スキー部には、スキー技術の追求という大きな目標があります。君の素晴らしいスキー術と明晰な頭脳による分析とに、われわれは大きな期待をかけていたのですが、いまはそれがかなえられなくなりました。残念なことです……

君たち五人の部員のおもかげは、今もなお鮮明に私の脳裡に焼き付いて離れません。その君たちとこのような形でしか対面できないのがほんとうに残念です。君たちの目は私に何か話しかけようとしているかのようですが、その口は声を出してはくれません。

……悲しいことです……

しかしこれが運命というものかもしれません。昭和 47 年 11 月 20 日の 22 時発の列車で札幌をあとにした後藤パーティーの行動にはその後いくつかの可能性はあった筈です。それにもかかわらず、運命の糸にたぐり寄せられるように、11 月 21 日の 23 時に起きたあの大雪崩の、その真只中に入って行ったのです。これを運命のなせる業と思ってはいけないでしょうか。

……ほんとうに悲しいことです……

君たちは常日頃仲間とともに山スキー部の将来について語り合っていました。それとともに自分たちの人生はどう歩むべきかについても語り合っていました。そしてその第一歩はすでにふみ出されていました。

今回の事故によって、幽明境を異にする身となった君たちは、その歩みを続けることが出来なくなりました。しかし君たちがしるした足跡は永遠に消えることなく残り続けるでしょう。われわれはそれを消してはいけないと思います。そればかりでなく、その歩みを自分たちの歩みとして、歩み続けようと誓い合っているのです。

どうか後に続くものたちを見守りながら、安らかに永遠のねむりについて下さい。

（1972 年 12 月 11 日）

（『むいね』第 14 号（1974）より転載）

4.3　遭難者山行歴

後藤次郎君



写真 5-4-1
故 後藤次郎君

1969(昭和 44)年
- 4 月　北海道大学入学、同体育会山スキー部入部
- 5 月　大雪山旭岳にてサマースキー
- 6 月　大雪山旭岳にてサマースキー
- 7 月　白水沢沢登り
  ニペソツ山―石狩岳―五色岳―トムラウシ山、
  新冠川―エサオマントッタベツ岳―カムイエクウチカウシ山―札内川―十勝幌尻岳―オピリネップ川
- 8 月　知床岳、羅臼岳、無意根小屋完全管理
- 10 月　無意根小屋秋の小屋祭り
- 11 月　大雪山旭岳にて初すべり
- 12 月　無意根山新人合宿

1970(昭和 45)年
- 1 月　正月合宿(十勝岳)、恵庭岳
- 2 月　空沼岳、漁岳
- 3 月　春山山行(ペテガリ岳)
- 5 月　ゴールデンウィーク合宿(幌尻岳―美生岳)、無意根山追悼登山
- 6 月　大雪山旭岳にてサマースキー
- 7 月　石狩岳、積丹我呂沢沢登り、発寒川沢登り、ペテガリ川―Ａ沢―ペテガリ岳―中の川
- 8 月　鳥海山、無意根小屋完全管理
- 10 月　無意小屋秋の小屋祭り、富良野岳―十勝岳―美瑛岳、芦別岳
- 11 月　大雪山旭岳にて初すべり
- 12 月　新人合宿(十勝岳、富良野岳)

1971(昭和 46)年
- 1 月　正月合宿(白雲岳―忠別岳―トムラウシ山―オプタテシケ山―十勝岳)、手稲山スキー合宿
- 3 月　春山山行(札内岳)
- 5 月　ゴールデンウィーク合宿(暑寒別岳)、無意根山追悼登山、芦別岳
- 6 月　赤岩(岩登り訓練)、大雪山旭岳にてサマースキー、白水沢沢登り
- 7 月　余別川沢登り、ペテガリ川―中の岳直登沢―中の岳―Ａ沢―ペテガリ岳―中の川
- 8 月　赤岩(岩登り訓練)、発寒川沢登り
- 9 月　チロロ川―戸蔦別岳―新冠川―エサオマントッタベツ岳―札内岳―ピリカペタン沢
- 10 月　漁川沢登り、芦別岳、
- 11 月　大雪山旭岳にて初すべり
- 12 月　無意根山新人合宿指導

1972(昭和 47)年
- 1 月　正月合宿(ニペソツ山、ウペペサンケ山)
- 2 月　ニセイカウシュペ山
- 3 月　ニセコ強化合宿、定山渓天狗岳、春山山行(幌尻岳、神威岳)
- 4 月　鳥海山
- 5 月　ゴールデンウィーク合宿(芽室岳―ルベシベ岳)、無意根山追悼登山
- 6 月　ニセイカウシュペ山、大雪山旭岳にてサマースキー、発寒川沢登り
- 7 月　余別川沢登り、ペテガリ川―Ａ沢―ペテガリ岳―西尾根―サシビチャリ沢―西沢―ペテガリ岳―中の川―ソエマツ岳―中の川

8月　芦別岳
10月　無意根小屋秋の小屋祭り、利尻岳
11月　大雪山旭岳にて遭難
無意根小屋　小屋番88回

及川俊一君



写真5-4-2
故 及川俊一君

1971(昭和46)年
4月　北海道大学入学、同体育会山スキー部入部、無意根山新人歓迎登山
5月　無意根山追悼登山
7月　白水沢沢登り、無意根小屋完全管理
10月　美瑛岳―十勝岳
11月　大雪山旭岳にて初すべり
12月　無意根山新人合宿
1972(昭和47)年
1月　正月合宿(白井岳―余市岳―無意根山)
3月　ニセコ強化合宿、春山山行(斜里岳、海別岳)
5月　ゴールデンウィーク合宿(オプタテシケ山)、無意根山、無意根山追悼登山
6月　大雪山旭岳にてサマースキー、赤岩(岩登り訓練)
7月　白水沢沢登り、無意根小屋完全管理
8月　石狩岳―五色岳―トムラウシ山、余別川沢登り、トッタベツ川―トッタベツ岳―幌尻岳―新冠川―エサオマントッタベツ岳―札内川―キネンベツ沢―札内岳―札内川―カムイエクウチカウシ山
10月　無意根小屋秋の小屋祭り、コイカクシュ札内岳―ヤオロマップ岳―1828峰―カムイエクウチカウシ山―コイカクシュ札内岳
11月　大雪山旭岳にて遭難
無意根小屋　小屋番12回

星野信男君



写真5-4-3
故 星野信男君

1971(昭和46)年
4月　北海道大学入学、同体育会山スキー部入部、無意根山新人歓迎登山
5月　無意根山ゴールデンウィーク合宿、無意根山追悼登山
6月　大雪山旭岳にてサマースキー
7月　発寒川沢登り、白水沢沢登り、化雲内沢沢登り
8月　ニペソツ山―石狩岳―トムラウシ山、無意根小屋完全管理
10月　美瑛岳―十勝岳、無意根小屋秋の小屋祭り
11月　大雪山旭岳にて初すべり
12月　無意根山新人合宿
1972(昭和47)年
1月　正月合宿(白井岳―余市岳―無意根山)
3月　ニセコ強化合宿、春山山行(斜里岳)
5月　ゴールデンウィーク合宿(雄冬岳―浜益岳―暑寒別岳)、無意根山追悼登山
6月　大雪山旭岳にてサマースキー
7月　白水沢沢登り、新冠川―上二股―七ツ沼カール―幌尻岳、無意根小屋完全管理
8月　富良野岳―オプタテシケ山―トムラウシ山―石狩岳、大雪山旭岳にてスキー

9月　白水沢沢登り
10月　無意根小屋秋の小屋祭り、ニセイカウシュペ山、コイカクシュ札内岳―ヤオロマップ岳―1823峰―カムイエクウチカウシ山―コイカクシュ札内岳
11月　大雪山旭岳にて遭難
無意根小屋　小屋番15回

瓜生　純君



写真5-4-4
故 瓜生 純君

1972(昭和47)年
4月　北海道大学入学、同体育会山スキー部入部
5月　無意根山ゴールデンウィーク合宿、無意根山追悼登山
6月　大雪山旭岳にてサマースキー、赤岩(岩登り訓練)
7月　赤岩(岩登り訓練)
8月　無意根小屋完全管理、富良野岳―オプタテシケ山―トムラウシ山―石狩岳、無意根小屋完全管理
10月　無意根小屋秋の小屋祭り、芦別岳、石狩岳、
11月　大雪山旭岳にて遭難
無意根小屋　小屋番5回

川上　真君



写真5-4-5
故 川上 真君

昭和47年(1972年)
4月　北海道大学入学、同体育会山スキー部入部
5月　無意根山ゴールデンウィーク合宿、無意根山追悼登山
6月　大雪山旭岳にてサマースキー、木挽沢沢登り、白井川沢登り
7月　赤岩(岩登り訓練)、立山にてサマースキー、発寒川沢登り、無意根小屋完全管理
8月　富良野岳―トムラウシ山―石狩岳―ニペソツ山、化雲内沢沢登り
10月　無意根小屋秋の小屋祭り、ニセイカウシュッペ山、利尻岳
11月　大雪山旭岳にて遭難
無意根小屋　小屋番5回



『むいね』第4号より

4.4　雪原の放浪者より

故 後藤　次郎（4 年目）

1973 年 4 月から 5 月にかけて我々放浪者達は旅立つことに決った。計画その他もまだ確としたものを持つにいたらない我々は、一つの試案として次の計画を HUSV の人々、OB 諸兄に提出してみたい。

我々にとってスキーとはパイオニアワークを展開する手段であると思う。未知なるものへ挑む時、手段を鋭くとぎすますことは不可欠である。それなくしては無謀の域を脱しない仕事になってしまう。我々にとって未知なるものとはスロープでありそこにいたるアプローチである。我々の旅は一つの段階としての未知なるスロープをもとめての旅であり、HUSV の一方向性を求めての旅である。計画はポーラメソッドめいたものを採用した。ベースキャンプを忠別石室に設け、テントを二つ出してオプタテにシュプールを残した後、帰ってくる約半月の計画である。その後 5 日位の旭岳への山行、計画進行をみての石狩岳への旅行を計画している。

計　画

1～4	層雲峡～ヌタップヤンベツ経由で石室にベース建設。後 2P に分ける	
	Ⅰ P	Ⅱ P
5	BC ―トムラ北沼 C1	BC 付近スキー
6	トムラ周辺スキー	BC ― C1
7	C1 ―双子沼　C2	トムラ周辺スキー
8	オプタテ東面	C1 ― C2
9	西側よりオプタテ	C2 オプタテ東面
10	Ⅰ＋Ⅱ P C2 ― C1	
11	C1 ― BC	
12～16	停滞、行動予備日	
17～19	BC より忠別川に下り、旭岳南面のスロープ下に C1 を設けそこより旭岳へ。	
20～21	停滞	
22～23	下山	

（『北大山とスキーの会、運営委員会便り』1972.10.15. より転載。故人が遭難前の秋に次年度卒業後に計画していた春山山行である。）

4.5　30 年の歳月を想い、誓い新たに《追悼集会》

旭岳雪崩遭難 30 周年追悼集会実行委員長
森　康（1975 工 金属）

それは 2001 年 11 月、例年行っている高尾山追悼登山と瓜生君の墓参りの際に「来年は旭岳遭難事故から丸 30 年になるなあ、何か記念行事をやらないか」との意見を出したのがきっかけであり、瓜生君のお母さんから是非ともやってほしいとの依頼もあり今回の追悼行事（2002 年 7 月 27 日～28 日）が行われた。

今年に入り当時の現役で一番人数的に多い私の世代が中心となり旭岳 30 周年追悼実行委員会を組み、遺族への呼びかけ、運営委員会でのイベント承認活動、寄付金募集活動を進めてきた。我われにとってこの 30 年の月日の流れは本当にあっという間に過ぎ去った感が強いが、既に当時お元気であった故人の御両親も半分の方が他界され、今回参加をお願いしても、もうとても北海道まで動ける状況ではないとのご返事を戴き 30 年という月日の大きさを実感する。私はご両親が参加出来ない状況であれば何

とかご兄弟に参加していただけるようお願いをし、結果的に瓜生君のお母さんとお姉さん、星野信男君の弟夫妻、及川君の弟夫妻と妹さんの合計7名のご遺族の参加が叶えられた。

現地の宿泊場所の手配は札幌在住の岩瀬君に依頼していたが7月に入り参加人数が50名を超えやり繰りが大変であった。久能君の紹介で貸り切らせて頂いた教育大の六稜山荘(定員30名)に押し込めば何とか大丈夫だろうとの山スキー部的判断で、遺族は白樺荘、その他は六稜山荘の2ヶ所に絞り込んだ。六稜山荘の食事は今年ドリームチームでカムチャッカに遠征した鳴海シェフに本場仕込みのボルシチをお願いした。

27日夕方続々と全国各地からの参加者が到着する。いたる所で「いよー」とか「おおー」とか再会を喜ぶ声があがる。そうなると一気に30年前の現役時代にタイムスリップ、「オマエなあー……」といきなり先輩後輩の間柄になり50歳前後の男が「はい、はい」と下級生状態になるのが実に楽しい。夕食の時間となり鳴海シェフと今回参加された奥さんたちの豪華な料理がテーブル一杯に並び一気に盛り上がる。一息ついたところで、例によって自己紹介、近況報告が始まる。久しぶりの仲間との再会や、故人への思い出が交差して感極まり涙する者が多く、皆歳とともに涙もろくなっている。

20：00にご遺族との顔合わせを行い、その後深夜まで明日の追悼式典で歌う歌の練習も兼ねて大合唱が続いた。

翌日(28日)は雲一つないドピリカ。朝7時中村(宏)、桜井(公)が旭岳山頂に向けて出発。後発組は8時45分のロープウェイで姿見駅へ。新装なったロープウェイは101人乗りでかなり大きくなったが、途中の天女が原駅は無くなっていた。



写真5-4-6
旭岳雪崩遭難30周年追悼(2002年7月28日、旭岳にて)

姿見駅で記念写真を撮った後、盤の沢の遭難現場へ下る。10：20現場到着の後、追悼集会を始める。

全員で黙祷を行なった後、吉田守男君が亡き5君へ追悼文を読み上げ、現役代表の三浦康君が盤の沢の教訓を活かし二度とこのような遭難事故を起さないことを誓う。全員で山の歌、寮歌を歌い故人を偲ぶ。最後に遺族代表の星野さん、瓜生さんからご挨拶をいただいたが、瓜生君のお母さんが「もし息子が生きていたら、このようなすばらしい仲間と一緒に過ごすことが出来たことを思うと、それが残念でならない。」との言葉が大変印象的であった。

13：30に全員ロープウェイ駅に到着後解散。皆それぞれの生活の場に帰っていったが、今回の追悼集会の呼びかけに対して、このように多くの仲間が集まってくれたことに感謝すると共に、次回またいつか遺族、そして仲間と集える機会が持てることを祈念しつつ今回の追悼報告を終わります。

亡き5君がいつまでもこの地で安らかに眠らんことを祈り、シーハイル！

(『こなゆき』26号(2002)より転載)

4.6　それぞれの 30 年を生きて《追悼の辞》

吉田守男（1975 農 林）

次郎さん、及川君、信男君、瓜生君、川上君、暫くでした。

今年はあの遭難事故から丁度 30 年です。今日は、瓜生君のお母さんとお姉さん、及川君の弟さんご夫妻と妹さん、信男君の弟さんご夫妻のご遺族の方々を始め、昔懐かしい山スキー部の先輩や後輩、また当時現役の仲間達と今の現役、それに住友のおじさんにおばさん、林学の先輩の春木さんや「ももや」のおばちゃんも来てくれて、みんなで 30 周年の追悼を致します。

昭和 47 年は札幌オリンピックの年でした。そして春、山スキー部には前年入部の及川君や信男君たち、すなわち僕らの代と同じく 10 人ほどの新入部員がはいってきました。その中に瓜生君や川上君がいました。ムイネでの GW 合宿や日高や大雪、暑寒などそれぞれの春山を終えて、この旭岳でのサマースキーをさんざん楽しんだ僕らは更に、夏の大雪や日高の沢を歩きまくりました。紅葉の秋山を軽くこなし、いよいよ春に入部した新人達を連れてその年最初の新雪の旭岳へ初滑りに来たのでした。

11 月 21 日、少し生暖かい曇り空の朝だったと覚えています。湧駒別のロープウェイの駅を少し登った所で、一緒に出発したのになかなか登ってこない僕達和田パーティーを迎えに下りてきてくれた次郎パーティーを「1 年目がシールをつけるのに時間がかかりました。大丈夫ですから先に行ってて下さい」と見送った光景が今でも瞼の奥に残っております。恐らく関係者の誰もがそうだろうと思うのですが、おぼろげな昔のあまたな記憶の中で、あの事故の前後のどこかの光景が脳裏のどこかでストップモーションになっているのです。

辛く悲しい事故でした。そして何より、衝撃的でした。部室やロッジで、そしてアルバイト先で、普段から始終一緒で、ワイワイ言って飲んで食べて、山へ行って、スキーしてたのに。前日の夜札幌駅を出発して、旭川駅で仮眠して、朝一番のバスで湧駒別にやってきて、ついその日の朝まで一緒だったのに。正直、人間は簡単に死んでしまうんだなと思いました。



写真 5-4-7
遭難現場近くの岩にある 5 君の銘板に花を添えた



写真 5-4-8　追悼の辞を捧げる吉田守男君

山スキー部は事故の後、実践面でまず基本に戻ろうとしました。またそれまでにもよく話題になっていましたが、山スキー部はどうあるべきだとか、そのためにどう活動すべきだとかという精神面の議論を、事故をきっかけにそれまで以上に熱心に、北大スキー部創設の歴史やその後時代を経て山岳部の分離独立や山スキー部としての分離の経緯にまで遡り議論するようになりました。

遭難の後も事故はありましたが、遭難後の反省を踏まえた基礎技術を主体とした部活動から年々歳々力を貯えていきました。山とスキーにたいする熱い気持ちや伝統の精神も変わることなく遭難を経験していない世代にも順次引き継がれていったものと思います。

そしてこの30年の間には山とスキーのフィールドも90年代にはアラスカやカムチャツカに広がり、今では、まだ部レベルとは言えませんが、ヒマラヤの山々にもその足跡とシュプールを刻んでいます。そしてそういった事故後の山スキーの沈滞から再生までのみちのりを、いつの時も慈愛に満ち、部員たちと一緒に山に行き、一緒にスキーをし、共に会話をしつづけてご指導してくれましたのが水谷先生でした。その水谷先生も1994年6月亡くなってしまいました。

今回の30周年の追悼のご案内を関係方面に出させて頂きましたが、琉球大学農学部の中須賀先生からは「あの事故からもう30年経ちましたか。それぞれの30年ですね。」ってお言葉を頂戴しております。また事故当時、救援活動に駆けつけて下さった北大山岳部OBで現北大教授の松田先生からも「事故当時のことは今でも鮮明に覚えています。今回は参加できませんが宜しくお伝え下さい。」とのご伝言を頂いております。

当時青春真っ盛りだった僕らももう50歳を超えました。僕達の顔にしわが刻まれたのと同じく、ここ盤の沢の現場付近もあの当時と比べて沢がかなり深く掘れこんでだいぶ侵食が進んだ様子です。また周辺の樹木も大きくなりました。下の天女が原の様子もだいぶ変わりました。遠くから見れば何も変わらないこの大雪山も30年の年輪が確実に刻まれたのですね。

この追悼文を作成する折に古い「むいね」を何冊かめくってみました。その中に次郎さんはじめ、及川も信男も瓜生も川上もきっと好きだろうと思う後輩の誰かが書いた日高の沢旅の詩を発見しましたので、ここで読ませてもらいます。

「旅の終わりに」

旅の終わりは寂しいものだ。
もう二度と来ることができないかもしれないし、
同じ感動は得られないとわかっているから。
だからこそ、沢旅が始まると同時に、函があれば捲かずに中をいってみたし、滝が出てくれば逃げずにシャワークライムしたんだ。
沢筋に可愛い花が咲いていれば心を寄せ、
そして友と山で覚えた山の歌なんかを歌ってみたりした。
でも、旅は終わる。あっというまに終わる。
僕にとっての未知の沢で初めて登った滝の気持ちよさは、
心の中にしか存在しないのである。
まだまだこの中の川にいたいという願いが、寂しくさせているのだろうか。
今夜は少し、センチになりすぎてしまった。
それに雨までふってきたじゃないか。

次郎さん達は、無念の旅の終わりではありました。でもそれはこの詩の心のように全くの若く純粋なままの永遠の旅立ちだったんだと思います。

次郎さん、及川君、信男君、瓜生君、川上君、どうかいつまでもこの大雪の山懐で山スキー部現役たちの山行の無事を見守ってて下さい。そしてあまねく山とスキーを愛する人達の活動をも見守って下さい。

最後に、亡き水谷先生が遭難報告書の中で、次郎さんたち5人に捧げられた詠を読ませて頂きお別れしたいと思います。

美しき　大雪の地に　いまは亡き
友やすかれと　われら祈らん。

2006(平成14)年7月28日
(『こなゆき』26号(2002)より転載)

4.7　平成 25 年 3 月のとある日

ロッジ通信主幹
岩瀬　隆則（1976 理 地鉱）

シルバーロッジのガランとした 2 階を掃除していると、窓側の写真の 5 人(1972 年、旭岳雪崩事故で遭難)が何か語りかけているような気がします。唯物論者を自認する自分が言うのは妙な話ですが、もし魂というものが存在するなら、彼らの霊はいま何を語りかけてくるのでしょう。「お前はそこで何しているのだ」45 年前、一緒に流された星野信男くんと私の運命を分けたものは何だったのか。

私の生存条件を探してみると、「雪の遺書」という本の存在が考えられます。1965 年 3 月、北大山岳部の沢田パーティーは十の沢で未曽有の雪崩に襲われ亡くなりました。4 日間生存した沢田リーダーは地図の裏に記述を残します。私はこの本を高校時代に手に入れ、浪人が終わるまで毎日読んでいました。遺書の部分ではなく、日記や手紙が魅力的だったのです。記述の最後は「母さん残念だ。背広も作ったのにもうだめだ」という文章で終わります。北大に合格したとき、それを知っていた姉が、こう言いました。「あんた、気いつけんと、母さん残念だ、になるで」

雪崩に跳ね飛ばされたとき、星野くんが投げた雪のブロックがあたったのかと思いました。でも次の瞬間、雪崩だとわかりました。流された数十秒、あの本のことがよぎりました。泳げばよいとかは考えなかったけれど、意識はしっかりしていました。止まりそうになったとき、第 2 波がやってきて、さらに流され、息苦しくなったとき、谷向きにデブリの末端に押し出されたのです。せき込み、口から雪が飛び出しました。

川上真くんのお母さんが「まこと、どうしたの！！」と叫ぶ映像は消えることがありません。お母さんは数か月で髪が真っ白になりました。

雪山は魅力的です。しかし、このような事態は二度とあってはならない。彼らもその決意については私の存在を容認するのではないか。

現役は秋に部員総会をロッジでおこないます。そこに出向いて、自分の経験を語ろう思います。実はこの経験を語るのは私にとってたいへん苦痛です。あまりにも不公平な偶然に耐えきれないからです。5 年目になったとき、当時 2 年目だった佐々木右治くんが喫茶店で私に雪崩の体験を語ってくれと言いに来たことがありました。なぜか私は拒み、彼は怪訝な顔をしていました。ちゃんと喋ればよかった。右治くんごめんなさい。

「雪の遺書」の記述に「山スキー部のパーティーにあったけれど、そのまま行ってしまった。声をかければよかった」とあります。このパーティーのリーダーが在田さんで、3 人の一年目隊員のひとりが田上さんです。運命かな。

(2017(平成 25)年 4 月 11 日発行の
「ロッジ通信 13 号」より)

時事：2017(平成 25)年 3 月 27 日、栃木県那須町のスキー場周辺で行われていた県高校体育連盟主催の登山講習会でラッセル訓練中の高校生 48 名が雪崩に襲われ、8 名が亡くなる大惨事が発生した。（編者記）

第 6 章

北海道大学
スキー部 100 年・山スキー部 50 年
記念行事



『むいね』第 4 号より



記念ヒュッテンケッテ
（2013 年 3 月 15 日、無意根小屋にて）



100 年・50 年記念フラッグ



北大総合博物館での記念展示会場

1912（大正元）年 9 月に日本で最初の大学スキークラブとして創立された北海道大学スキー部（それを引き継いだ山スキー部および競技スキー部）は 2012 年 9 月に創立 100 年を迎えた。また 2013 年は北大山スキー部誕生 50 年であった。

この 100 周年・50 周年を祝うべく、5 つの記念事業が企画され、実行された。

1. 記念展示「日本におけるスキーと北大スキー部の 100 年」（2012 年 10 月 10 日～12 月 16 日）
2. 祝賀会「北大スキー部 100 年・山スキー部 50 年を祝う会」（2012 年 10 月 13 日）
3. シンポジウム「北海道スキー術伝来 100 年にあたってスキー文化を考える―山スキー・山小屋を楽しむ―」（2012 年 10 月 14 日）
4. ヒュッテンケッテ（Hüttenkette：山小屋の連鎖）スキーツアー（2013 年 3 月 5 日～21 日）
5. 本誌「北海道大学 スキー部 100 年・山スキー部 50 年記念誌」の発刊

本章はそれらの記念事業の報告である。

1　北海道大学総合博物館における記念展示「日本におけるスキーと北大スキー部の 100 年」

在田　一則（1965 理 地鉱）

北海道大学スキー部創立 100 周年を記念して、北海道大学総合博物館において記念展示を下記のとおり行なった。来館くださった多くの市民の皆さんに我が国におけるスキーの誕生と発展において北大スキー部が果たした指導的役割をお知らせすることができた。

展示タイトル：日本におけるスキーと北大スキー部の 100 年

開催趣旨：北海道大学スキー部は、1912(大正元)年に創立された日本でもっとも古い学生スキークラブであるとともに、北大においてもっとも伝統のある学生クラブの一つである。スキー部を継承した山スキー部とスキー競技部は 2012 年にはともに創部 100 年を迎えた。北大スキー部 100 年の歩みは日本におけるスキーの誕生とその後の発展の歴史でもある。記念展示では、我が国におけるスキー発祥地の一つである札幌(北大)においてスキーが誕生した経緯、北海道でのスキー登山、および日本におけるスキー競技の始まりと発展において北大スキー部が果たした役割などを紹介した。また、北大スキー部を中心とした人びとによって、北国のスポーツとしてのスキーを普及させることを目的として我が国で最初のスイス式山小屋など多くの山小屋(ヒュッテ)が札幌近郊に建てられた歴史を紹介した。よって、健全なる冬のスポーツとしてのスキーツアー・スキー登山や競技スキー、および一般スキーの面白さを改めて市民の皆さんに知っていただくとともに、山小屋のルネッサンスを図った。

開催期間：2012年10月10日(水)～12月16日(日)

開催場所：北海道大学総合博物館 1 階

主催：北大山とスキーの会、
　　北海道大学スキー部 OB 会

共催：北海道大学総合博物館

協賛：株式会社秀岳荘

協力：札幌ウィンタースポーツミュージアム、公益財団法人札幌スキー連盟、株式会社ミウラドルフィンズ、藻岩レルヒ会

後援：札幌市教育委員会

展示内容：表 6-1-1 のテーマについて展示ポスター(A1 判)や写真、映像などで紹介するとともに、地形模型やスキー、スキー靴、装備なども展示した。

表 6-1-1　記念展示「日本におけるスキーと北大スキー部の 100 年」の展示ポスターなどの一覧

テーマ	パネル No.	タイトル
テーマ 1	日本・北海道へのスキー伝来	
	1.1	スキーの始まり
	1.2	日本へのスキー術伝来―レルヒ少佐によるスキー講習―
	1.3	コラー先生と北大のスキー事始め
	1.4	三瓶勝美中尉によるスキー講習
テーマ 2	北大スキー部の誕生とスキー技術の研究	
	2.1	東北帝国大学農科大学文武会スキー部の誕生
	2.2	富士山冬季登山と羊蹄山冬季登山―本格的冬山スキー登山―
	2.3	一本杖スキー(リリエンフェルト・スキー)から二本ストックスキー(ノルウェー・スキー)へ
	2.4	北大スキー部のスキー術研究と普及活動
テーマ 3	北大スキー部の黄金時代	
	3.1	北大スキー部によるスキー競技規則の研究と作成
	3.2	全日本スキー選手権大会と全日本スキー連盟の発足
	3.3	北大スキー部の活躍
テーマ 4	北海道における登山の始まりとスキー(山党の活躍と北大山岳部の誕生)	
	4.1	畑党と山党
	4.2	北大山岳部の誕生と活躍
	4.3	我が国で最初のスキー・山岳専門誌「山とスキー」の発行
テーマ 5	我が国最初の本格的スイス式山小屋(ヒュッテ)群の誕生	
	5.1	“山小屋の鎖(Hüttenkette)”構想の誕生
	5.2	山小屋の建設
	5.3	“山小屋の鎖(Hüttenkette)”の完成
	5.4	秩父宮とパラダイスヒュッテ、空沼小屋
	5.5	パラダイスヒュッテ 1
	5.6	パラダイスヒュッテ 2
	5.7	パラダイスヒュッテ 3
	5.8	ヘルヴェチアヒュッテ 1

テーマ	パネル No.	タイトル
テーマ 5	5.9	ヘルヴェチアヒュッテ 2
	5.10	ヘルヴェチアヒュッテ 3
	5.11	ヘルヴェチアヒュッテ 4
	5.12	空沼小屋 1
	5.13	空沼小屋 2
	5.14	空沼小屋 3
	5.15	空沼小屋 4
	5.16	奥手稲山の家 1
	5.17	奥手稲山の家 2
	5.18	奥手稲山の家 3
	5.19	奥手稲山の家 4
	5.20	無意根小屋 1
	5.21	無意根小屋 2
	5.22	無意根小屋 3
	5.23	無意根小屋 4
	5.24	その他の山小屋
テーマ 6	札幌とスキー：スキーツアーコース、札幌のスキー場、ジャンプ台	
	6.1	札幌のかつてあったスキー場とシャンツェ（ジャンプ台）
	6.2	北大スキー部が関わった多くのシャンツェ
	6.3	かつてのスキーツアーコース
テーマ 7	スキーの限界を求めて：三浦雄一郎のスキー	
	7.1	写真 1
	7.2	写真 2
テーマ 8	スキーの喜び：競技スキー・山スキーの醍醐味	
	8.1	競技スキー部・山スキー部
テーマ 9	北海道におけるスキーの発展を支えたスキー製作所および運動具店	
	9.1	パネル 1
	9.2	パネル 2
	9.3	パネル 3

その他の展示

スキーコーナー（一本杖のスキーから最近のカービングスキーまで、スキーの変遷を展示）
山の写真コーナー（永野拓也 OB 撮影の写真を展示）
三瓶勝美中尉コーナー（藻岩レルヒ会提供の三瓶中尉のスキー人形を展示）
中浦皓至氏遺作コーナー（故中浦氏の北大スキー部に関する著作を展示）
DVD 上映コーナー ＊水谷フィルム（水谷先生撮影の山スキー部部員の山行・スキーの様子） ＊丸谷フィルム（丸谷聖一 OB 撮影の OB たちの林間スキー）

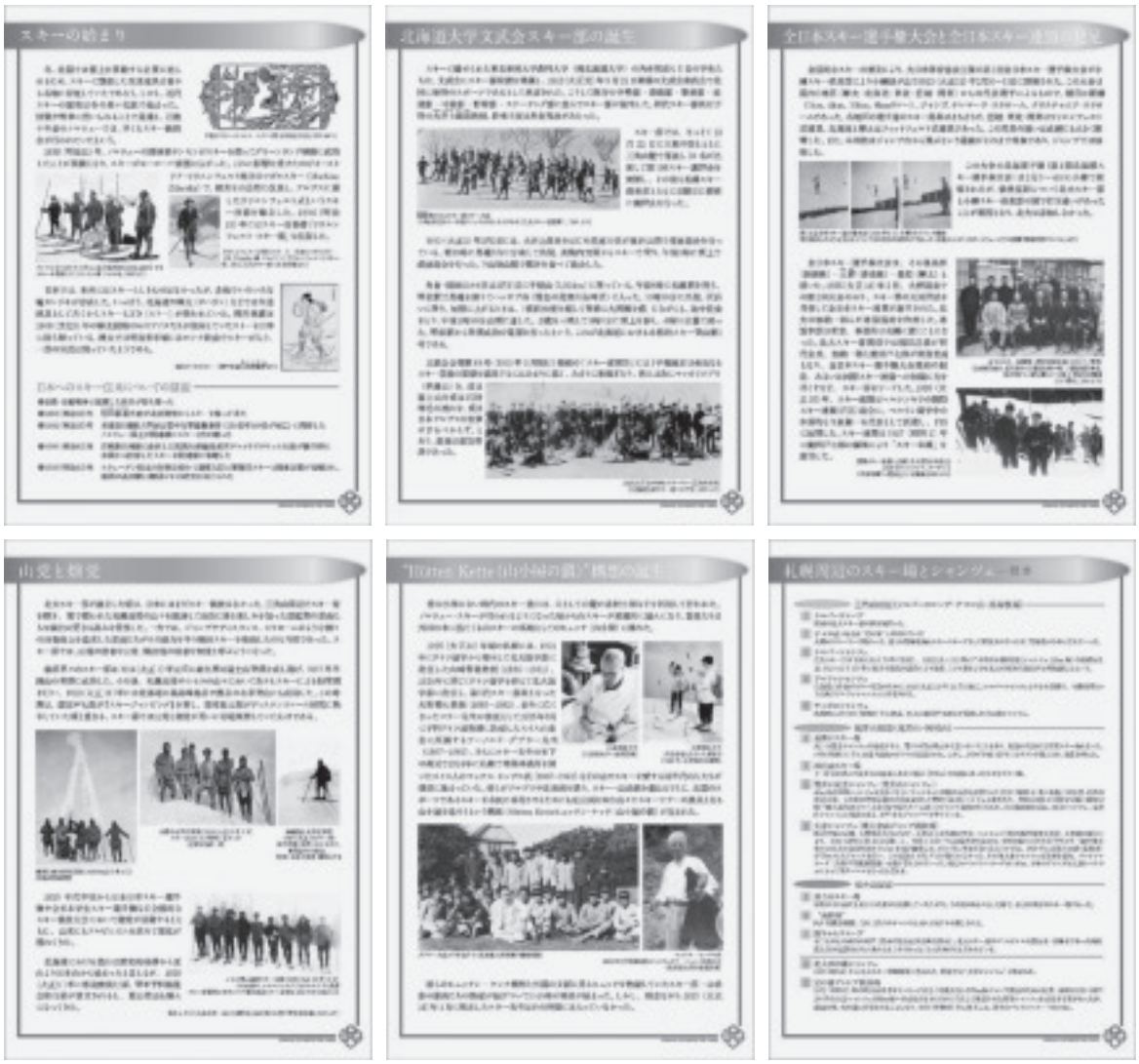


写真 6-1-1　記念展示の展示ポスターの例（A1 判サイズ）

2　北大スキー部 100 年・山スキー部 50 年を祝う会

森　康（1977 工 金属）

2012 年は北海道大学スキー部創立 100 年、そして 2013 年は山スキー部誕生 50 年の年であり、その記念事業の一つとして 10 月 13 日午後に北大クラーク会館大講堂で「北大スキー部 100 年・山スキー部 50 年を祝う会」が行われた。記念イベントがいろいろ計画されるなか、私は記念式典を担当する係となった。先ずはどんな企画で行うか、日にちは、場所は、規模はなどいろいろ思い浮かべてみた。

先行して北大スキー部 OB 会（現競技スキー部 OB 会）が 6 月 2 日に札幌グランドホテルにて 100 周年記念式典・祝賀会を盛大に行い、私も参加させていただいた。記念式典には北大合唱団 OB 会並びに北大応援団が招待され、部歌・寮歌・校歌を披露してくれたが、会場の参加者は全員聞く立場であり、皆で歌うことはなかった。北大スキー部が 100 年前に創立され、当時は山野をスキーで跋渉し、山小屋に泊まり、皆で歌うことが当たり前だったことを考えると少し寂しい気がした。

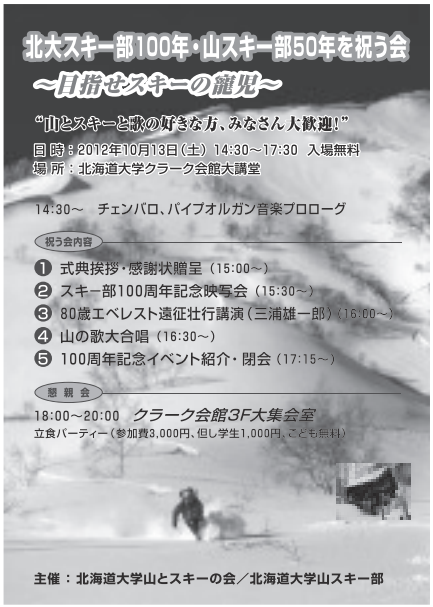


写真 6-2-1
北大スキー部 100 年・山スキー部 50 年を祝う会のポスター

それではということで、山とスキーの会・山スキー部主催の式典（祝う会）では、ステージでみんなで歌うことを全面的に出そう、「北大スキー部の伝統的文化である歌を歌うことをぜひ次の 100 年に繋いで行きたい」を主眼に置いた。下界で式典を行うならやはり青春を謳歌した北大構内が最適であり、築 52 年を迎えたクラーク会館大講堂に決めた。はたして定員 510 名の大講堂にどれだけの人が参加してくれるだろうかとの不安がなかったわけではない。山とスキーの会関東支部では数年前に長靴合唱隊なるものを結成し、都内のステージで 2 度ほど歌った経験から、100 名以上の合唱が出来たらどんなに素晴らしいことかを夢見ていた。合唱は上手さではなく如何に連帯感が生むかが最大の魅力である。100 年に一度の機会であることから、山とスキーの会会員だけではなく山と歌を愛する仲間にも声を掛け、藤女子短期大学山岳部 OG の皆さん、北大チェンバロボランティアの皆さん、東京のコーラスグループの有志にも参加をお願いしたところ皆さん快く参加を引き受けてくれた。

早速会場の下見を行い、イメージ作りを行うも、PR ポスターの作成、横断幕作成、大フラッグ作成、プログラム作成、進行役の選定などやらなければならないことは山ほどあった。幸いなことに、記念事業実行委員長である在田一則さん（1965）の研究室を自由に使わせていただくことが出来たため、連絡事項等は支障なく進んだ。当初参加希望人数はあまり芳しくなかったが、日を追うにつれどんどん増え、最終的には現役・OB で 160 名の数が見えてきた。よし、行ける！と内心ホッとしたところである。

クラーク会館大講堂は連日使用頻度が高く余裕をもった準備がなかなか出来なかった。祝う

会前日の夜から会場作りを行い、当日の朝に最終確認、午前中に合唱練習を行うという非常にタイトなものであったが、そこは連係プレーに慣れた現役・OB 諸氏である、難なくやるべきことをこなして行き、これが 100 年の歴史の重みかと正直嬉しくなった。そして 2 時 30 分パイプオルガンの響きで開演。パイプオルガン奏者の一人は 100 シーズン 1 年目の米山奈帆君であったことも付け加えておく。

3 時総合司会の萬崎由美子さん(HBC アナウンサー)の進行で式典がスタートした。長沼昭夫北大山とスキーの会会長(1972)、片倉 賢山スキー部部長(1977)、奥山和花 100 シーズン主任(4 年目)の順で挨拶が行われ、皆さん持ち時間を超えた弁舌であった。続いて感謝状贈呈に移る。対象者は住友房夫・幸子御夫妻、花野ノブ子様、目時朝子様、武田弘樹様であったが、諸般の事情で出席されたのは住友御夫妻のみであった。改めて皆さまに感謝の気持ちを捧げたいと思います。

100 周年記念映写会では、関英郎さん(1982)が編集した水谷寛先生の 8mm フィルムビデオがマーラーの交響曲(巨人)最終楽章に乗って高らかに流され、丸谷聖一さん(1979)の 10 年間のバフバフ映像がプロ顔負けの編集方式で会場の皆さんに披露された。

前日満 80 歳の誕生日を迎えられた三浦雄一郎さん(1956)がエベレスト遠征壮行記念講演を行い、「夢を実現するため」を力説され、向井成司さん(1959)が山とスキーの会を代表してエールを贈った。

そしていよいよ大合唱のコーナーがやってきた。ステージには長靴に腰手ぬぐいスタイルのメンバーが続々上がる。長靴合唱隊の指揮者は倉持寿夫前会長(1965)で「スキーの寵児」「山の大尉」「僕らの故郷」「スキー部部歌」の 4 曲を高らかに合唱した。合唱部ではない我々が 100 名以上の編成を組んでステー上で歌うことは最初で最後かもしれないが、老いも若きも皆実にいい表情をしていた。続いて、藤短期大学山岳部



写真 6-2-2 現役部員の合唱



写真 6-2-3 OB の合唱

OG の皆さんの合唱と菅原千菊・美幸姉妹(旧姓)のデュエット 4 曲が披露されたが、その澄んだ歌声は涙腺が緩んでしまうほどの感動を与えてくれた。また、今回 100 年記念歌「雪は降り積む」(作詞 関 英郎(1982)、作曲 吉田守男(1975))と「関西支部歌」(作詞 下岡健藏(1970)、作曲 黒澤 努(1972))、がそれぞれ関東支部有志と関西支部有志で披露されたことも付け加えておく。最後に会場全員で「山の四季」と「エーデルワイス」を合唱し、祝う会を終了した。

懇親会はクラーク会館大集会室(立食)を用意していたが、定員 90 名のところに 170 名が参加するという、超すし詰め状態となった。マイクの準備が出来ていないなか、各テーブルでどんどんシーハイルが始まり収拾つかない状態に。やっとマイクの準備が出来たあと、古川善雄元会長(1962)の挨拶の「私は本当に幸せ！」が印象的でした。佐藤鐵郎さん(1956)と三浦雄一郎さんの同期による「ニセコツンツン節」もサプライズだった。これだけの人数が動きまわるなか、全員に名札を付けてもらったことは大正解



写真 6-2-4
三浦雄一郎先輩を囲む山スキー部主任奥山和花（左、3年）と宮崎 歩（右、3年）

で、世代を超えた先輩後輩のなかで自分の位置関係が一目瞭然であった。そして圧巻は柳生 修さん（1968）の前口上による「都ぞ弥生」の大合唱でした。普通100名以上の大合唱では音程がズレルものだが、この日の大合唱は最初から一糸乱れぬ音程で響き渡った。これには参加した音楽の専門家も身震いするほどの迫力であったとのこと。

こうして祝う会は大成功のうちに終わりました。次は山スキー部100周年で！

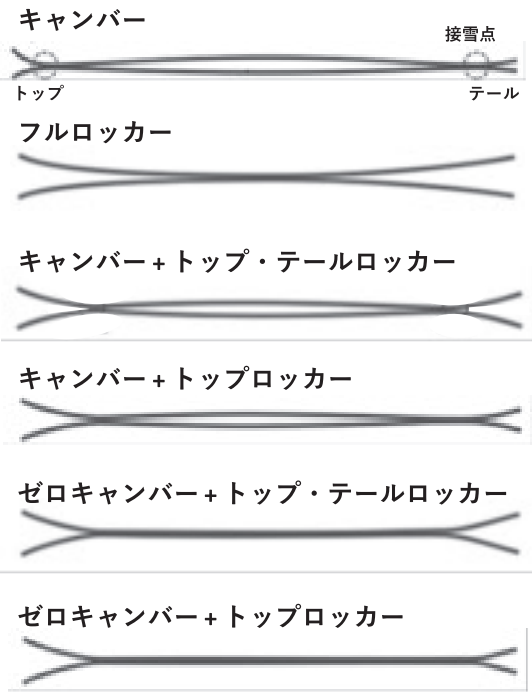
（『こなゆき』第36号（2013）を一部改編）

■コラム■

山スキーをより楽しむための相棒：キャンバースキーとロッカースキー

様々な雪質の斜面を縦横無尽に滑ることは山スキーの最大の楽しみであります。相棒はスキーです。従来のスキーは、ベンド（bend、反り）のあるキャンバー（camber、アーチ状の反り）スキーでした。スキーのトップからテールまでしっかりと圧をかけやすい形状になっていて、エッジングも良くなるので硬い雪面にも有効です。しかし、柔らかい雪面状況ではトップが雪の中に埋まってしまうことがあります。これに対し、ロッカースキーはセンター部分にベンドがなく、トップとテールが持ち上がった形状（rocking chair の脚のような構造）をしています。接雪面が短いため操作性が良く、深雪では浮力を感じます。安定性はキャンバースキーよりは劣りますが、バックカントリーの普及により、最近の主流となっています。しかし、ロッカースキーでは、3次元的に雪面から飛び出す感覚が少ないとの評価も耳にします。この両者の良いとこ取りをしたハイブリッドスキーも開発されてきました（図）。相棒のスキーを見つけて、新雪、こしまり雪、しまり雪、ざらめ雪、こしもざらめ雪、しもざらめ雪、氷板、表面霜、クラスト（日本氷雪学会が分類した9つの雪質）をより積極的に楽しみませんか。

片倉　賢（1977 獣医）



3　シンポジウム「北海道スキー術伝来 100 年にあたってスキー文化を考える―山スキー・山小屋を楽しむ―」

在田　一則（1965 理 地鉱）

北海道大学スキー部 100 年・山スキー部 50 年を記念して、山スキーや山小屋のルネサンスを呼びかける標記のシンポジウムを下記の要領で開催した。参加者は 73 名であった。

シンポジウムの趣旨：2012 年は、レルヒ中佐が北海道にスキー術を伝えてから、また北海道大学スキー部創立から 100 周年にあたる。北大スキー部は、我が国におけるスキーの揺籃期において、スキー技術の研究・向上と普及、およびスキー競技の発展に重要な役割を果たすとともに、札幌周辺におけるスキーツアーコースの開拓、スキー登山による道内山岳の冬季初登頂を行い、また山小屋の建設をつうじて、健全なる冬のスポーツとしてのスキーとスキー文化の普及に尽力してきた。

スキーは本来北国において雪の山野を跋渉する道具として誕生した。しかし、その後冬のスポーツとして人々に楽しまれ、今日では、競技スキー・ゲレンデスキー・山スキー・歩くスキーとそれぞれの好みに応じて多様化している。しかし、大自然を舞台とするスキーは単なるスポーツとしては捉えきれず、自然と人が織りなす北国の文化のひとつと言える。

スキーリフトなどの施設を備えた大規模スキー場の発達とともに、近年では市民のあいだでは、山野を跋渉し、深雪にシュプールを残すという行動の中にスキー本来の楽しさや醍醐味を見出すスキーの原点であるスキーツアーを顧みる機会は少なくなった。しかし、一方では、冬山の自然と同化する山スキーやスキーツアーの面白さが見直され、山スキーの愛好家が増えつつある。

このシンポジウムでは、スキー術北海道伝来 100 年を契機に、スキーの原点である大自然での山スキーやスキーツアー、歩くスキーの面白さを再認識するとともに、今日におけるそれらのあり方を考え、あわせて山小屋のルネッサンスを図り、北国におけるスキー文化を改めて考えたい。

日時：2012 年 10 月 14 日（日）13 時～17 時
会場：北海道大学　人文・社会科学総合研究棟 1 階　W103
主催：北海道大学山とスキーの会・北海道大学山スキー部
協賛：株式会社秀岳荘
司会：在田一則、北大山スキー部 OB）
演題：

1. 芳賀孝郎氏（元芳賀スキー製作所社長、元日本山岳会副会長）
   「スキーの原点と文化について」
2. 谷口雅春氏（フリーライター）
   「文化史の中のスキーと観光」
3. 渡辺興亜氏（元国立極地研究所長、北海道大学山岳部 OB）
   「北海道におけるスキー登山からアルピニズムへ」
4. 大内倫文氏（居酒屋つる主人、北海道大学ワンダーフォーゲル部 OB）
   「北大ワンゲルと奥手稲山の家」
5. 石川裕司氏（山岳ガイド、北海学園大学山岳部 OB）
   「山は学校、山小屋は教室―冷水小屋のこと」
6. 宮下岳夫（株式会社アルパインガイド ノマ

ド、北海学園大学山岳部 OB）
「北海道の山岳スキーの現状」
7. 新谷暁生氏（ロッジ ウッドペッカー、酪農学園大学山岳部 OB）
「札幌近郊の冬山登山の思い出」
8. 大西人史氏（三段山クラブ代表）

「ネットを通じたスキーツアーの可能性」講演後、講演者および会場参加者と意見交換を行なった。
終了後（18 時～20 時）、北大百年記念会館「きゃら亭」で懇親会を行なった。



写真 6-3-1　シンポジウムのポスター



写真 6-3-2　シンポジウムのチラシ



写真 6-3-3　シンポジウム会場風景

4　ヒュッテンケッテ（Hüttenkette：山小屋の連鎖）スキーツアー

在田　一則（1965 理 地鉱）、奥山　和花（4 年目）
香取　民生（1972 農 林産）、倉持　寿夫（1965 農 林学）

北海道大学スキー部創立 100 年・山スキー部誕生 50 年を祝う記念行事の一環として、2013 年 3 月 5 日～21 日に親子以上に年の離れた山スキー部の現役部員と OB がリレー方式で札幌近郊の山小屋を巡る山行を行った。これはかつて定山渓を中心に作られた一連の“山小屋の連鎖”（Hüttenkette：ヒュッテンケッテ）を巡るスキーツアーであった（**図 6-4-1**）。

札幌西方には 1,000～1,500m ほどの山々が定山渓温泉を中心に連なっている。そこにかつて 23 棟もの山小屋がスキーツアーを目的に建設され、現在も 9 棟が健在である。このように多くの山小屋が建てられたのは、北海道大学（当時は東北帝国大学農科大学）にスキーを紹介したハンス・コラー先生、先生の義兄の建築家マックス・ヒンデル氏、先生の後任であるアーノルド・グブラー先生の 3 人のスイス人、そして第 5 代スキー部長の大野精七先生、先生の友人山崎春雄先生、秩父宮様、武居哲太郎氏（鉄道省札幌鉄道局長）の 4 人の日本人、さらに彼らを助けた北大スキー部や創立まもない北大山岳部の部員たちの協力と努力の賜物（ヒュッテンケッテの実現）であった。



図 6-4-1　ヒュッテンケッテスキーツアーのコース
（岳人 2013 年 12 月号、東京新聞から）

大都市近郊にこれほど多くの山小屋があるのは珍しい。最近はスキーツアーを楽しむ市民は少なく、山小屋の利用者も少ないが、ザックを背に深雪をラッセルし、斜面にシュプールを描き、山小屋を泊まり巡る楽しさは今も昔も変わらない。この楽しさを多くの市民に知っていただきたいという思いは強い。

メンバー

現役パーティ（ヒュッテンケッテツアー前半）
　L 奥山和花（4 年目）、SL 上田祐太郎（3 年目）、M 大庭 健（2 年目）、今原亮介（1 年目）
OB パーティ（ヒュッテンケッテツアー後半）
　L 在田一則（1965）、SL 香取民生（1972）、M 佐々木尚三（1979）前半、倉持寿夫（1965）後半
（在田一則記）

現役パーティによるヒュッテンケッテ（前半）

山小屋を巡るのが記念ヒュッテンケッテスキーツアーの目的だが、前半ルートは小屋が縦走路から外れていることなどから、テントで 10 連泊して OB パーティに引き継いだ。

3 月 5 日　C_1

午前 7 時、在田 OB と長沼昭夫山とスキーの会会長（1972）に見送られて札幌岳登山口を出発（**写真 6-4-1**）。小雪の降る中、重い荷物を背負い 2 時間弱で冷水小屋に到着。ここまで同行



写真 6-4-1
札幌岳登山口での現役パーティの出発。手前左：奥山和花(L 4年)、手前右：上田祐太郎(SL 3年)、奥左：大庭 健(2年)、奥右：今原亮介(1年)



写真 6-4-2
漁岳頂上にて。羊蹄山と最終目的地の無意根山(右)を遠望

してくれた在田 OB と、引き継ぎ地点の無意根小屋での再会を誓い、握手を交わして別れる。札幌岳まで順調に進み、11 時に頂上着。南面直下の雪壁と言われる斜面は不安定な弱層もなく、ツボ足で無事通過。標高 1,036m のコルで C_1。

6日　C_2

悪天強風の中、樹林を縫うように雪庇の張った稜線を進み、空沼岳頂上に到着。その後も強風と固い雪面のため、ツボ足で越えていく。漁岳手前の樹林内、標高 1,060m のコルで C_2。

7日　C_3

シーアイゼンを使い、強風の中、漁岳頂上に到着(**写真 6-4-2**)。風が強まる一方なので、早々に頂上を後にし、小漁岳に難なく到着。支笏湖やオコタンペ湖をはじめ、恵庭岳などの支笏湖を囲む山々が見える。小漁岳から尾根をスキーで下り、標高 800m 付近で右入沢川を徒渉。コルで C_3。

8日　C_4

この日がある意味で最も過酷な日だった。キャンプ予定の標高 917m コルまで約 12km、出発地 C_3 からの標高差はわずか 60m、ひたすら緩い低山を歩く。標高 873m 付近からは、札幌岳から無意根山や余市岳まで、ヒュッテンケッテで歩くすべての山々を見ることができる。

9日　C_5

中山峠を目指して進む。埋めておいた食料や燃料を無事発見。中山峠名物“あげいも”でお腹を満たし、無意根山に向けて出発する。林道をたどり、ハイペースで尾根上に到着し、標高 940m に C_5。

10日　$C_{5=6}$

低気圧の影響で雪に風、夜中には雷。のんびり低気圧が過ぎ去るのを待つ($C_{5=6}$)。

11日　C_7

強風と雪は相変わらず。無意根山乗越しを狙うためにテントを樹林限界ぎりぎりまで上げ、喜茂別岳頂上手前の標高 1,080m で C_7。

12日　$C_{7=8}$

雪と風。願掛けをするも、喜茂別岳の方向は真っ白なので、諦めて $C_{7=8}$。お手製のトランプを作り、カードゲームで盛り上がる。

13日　$C_{7=8=9}$

連日、雪が 30cm ほど積もっている。外は真っ白なので停滞する($C_{7=8=9}$)。

14日　C_{10}

無意根山乗越しへのラストチャンス。雪の降る中、標高 1,150m まで行き、粘る。時折青空が見えるものの、雪と風が強く、諦める。中山峠にいったん下山し、仲間を通じて明日、無意根小屋へ行くことを OB へ伝える。無意根山登山口まで車で移動し C_{10}。

15日

6 時に出発。登山口は天気が良かったが、しだいに風が強まり悪天に。2 時間で無意根小屋まで駆け上がり、OB パーティの歓迎を受ける。温かい小屋に入り、無意根小屋のありがたさを実感。記念フラッグを引き継ぎ(**写真 6-4-**

3)、OB パーティが運んできた田村牧場の美味しい肉に満足し、その後 OB と一緒にテラス下まで登って、シャンツェでのスキーを楽しむ。午後、OB サポート隊の倉持・森 OB とともに下る。途中仕事の都合で遅れて登ってきた佐々木 OB と出会う。薄別登山口で古川善雄 OB(1962)の出迎えを受け、「ぬくもりの宿」で長旅の垢を落とす。ねぎらいの昼食会では前半 60km の走破を終えた安堵感を味わう。

この 11 日間は、札幌近郊の山の良さ、仲間の素晴らしさをあらためて感じた日々だった。

(奥山和花記)



写真 6-4-3
記念フラッグは無意根小屋で現役パーティから OB パーティに引き継がれた。前列(座っている)左から奥山和花、上田祐太郎、大庭 健、今原亮介、後列左から倉持寿夫、香取民生、在田一則、森 康。

OB パーティによるヒュッテンケッテ(後半)

3 月 14 日　C_1

11 時、OB パーティは長沼会長の見送りを受けて薄別登山口を出発。一行は、本隊の在田、香取とサポート隊の倉持、森 康(1977)である。小雪だが風はあまりない。ラッセルも 20cm 程度で宝来沼 11 時 30 分、宝来小屋 13 時 30 分と順調に林道を辿る。例年にない大雪で、宝来小屋は完全に埋没。この頃になると風が出てきて吹雪模様となる。はたして今日中に現役隊は無意根を越えることができるかと気になる。現役隊は 9 日に中山峠を越えたが、それ以降悪天に阻まれ、喜茂別岳手前で足止めされている様子で、停滞予備日はすでに明日 1 日しか残っていない。

小屋着 14 時 50 分(C_1)。屋根に大きな雪の塊を乗せた無意根小屋は人気なく、若しやとの期待が外れる。この日、現役隊を迎えることなく、静かなさびしい夜となった。

15 日　$C_{1=2}$

朝食を終え、現役パーティを迎えにシャンツェあたりまで行こうと準備していたところ、突然玄関の戸が開き現役パーティの奥山リーダーが顔を出す。一瞬信じがたいという OB を尻目に身体の雪を払って 4 人が小屋の中に入ってくる。早速、彼らが 5 日から 11 日間携えてきた記念フラグの引き継ぎ式を行う。奥山現役パーティリーダーから在田 OB パーティリーダーにフラグが手渡され、OB パーティの決意が表明される。全員で強風のシャンツェへ上り、深雪スキーの交歓会となる。午後遅くに上がっていた佐々木も加わり、本隊 3 名(在田、香取、佐々木)で田村牧場の肉などで英気を養い、香取のリードで歌う($C_{1=2}$)。

16 日　C_3

4 時起床。6 時、天気のせいもありまだ薄暗いなかを出発、北に向かう。小雪混じりのガスで視界 200m ほど、1 月 12 日～14 日の在田、船木上総(1983)、三代隆博(1996)による下見山行でのルートをとり、雪庇のない斜面をから長尾山手前のコル稜線に上がる(7 時 20 分)。稜線は風が強いが、さすが 3 月のせいか 1 月の寒さはない。8 時千尺高地らしきを通過。北西方向の小ピークの連なる尾根の南側のダケカンバの疎林を行く。美比内山へは沼を横切り直接西方コルへ。行動が 5 時間を過ぎ、疲労を感じる。このあたりから尾根方向は北になり、尾根沿いに登り降りを繰り返えす。1 月の時よりもだいぶ行程をかせぎ、晴れていれば、白井川源頭を挟んで余市岳が間近に見えそうな、1,172m 地点の雪庇状の下でテントとする(14 時 45 分：C_3)。香取曰く「40 年ぶりの雪上テントは足が冷たくて参ったが、大先輩と後輩と一緒で幸せな気分」。19 時就寝。夜間は降雪な

し、尾根からの地吹雪がテントに積もる。

17日　C_4

6時半出発。視界が徐々に良くなり、積丹の山々が見える。コブを数回乗り越え、8時30分に余市岳西直下コル着(**写真6-4-4**)。頂上への雪面は硬そうなので、シーアイゼンを装着し、地吹雪の中を一気に頂上へ。9時40分余市岳頂上。強風のため下降尾根まで移動して、国際スキー場からのサポート隊を待つ。11時下降開始。サポート隊のOB6名と合流。朝里岳の長い平たんな“飛行場”を思い思いに歩き、朝里岳沢川右岸の斜面を降りる。14時スキー場到着。15時、車でヘルヴェチアヒュッテ着(C_4)。45年ぶりのヒュッテの屋根は積雪が2mもあり、入り口付近は雪で埋もれている。薪は十分にあり、屋根の雪を溶かして夕食を準備。こじんまりした居心地のよい小屋は昔と変わりがない。飲み、食べ、歌う。

(香取民生記)



写真6-4-4　余市岳を目指すOBパーティ



写真6-4-5　OBパーティとサポート隊。朝里岳“飛行場”にて

17日(余市岳へのサポート隊の記録)

L 片倉 賢(1977)、M 中村晃忠(1962)、倉持寿夫、長沼昭夫、森 康、三代隆博

余市岳越えの本隊を迎えに、札幌国際スキー場を朝一番のゴンドラに乗り、頂上駅からシールを付け朝里岳への斜面を上る。青空に新雪がまぶしいなか、ラッセル軽やかにダケカンバの木立を縫う。30分ほどで斜面が緩やかになり、“飛行場”の広大な雪原となりモンスター群が迎える。この頃から天気一変し地吹雪となる。

10時頃地吹雪の合間に余市岳の下降尾根が現れる。10時50分稜線上に10数人のスキーヤーの姿が見える。稜線上部で休んでいる3人がOBパーティと認められた。やがて彼らが滑降を始める。慎重にゆっくりと大きな弧を描きながら下りてくる。

11時本隊と固い握手を交わす。遥かに無意根が見える。北大山スキー部の特大フラグを囲み全員の記念写真(**写真6-4-5**)。来たコースをもどり、12時40分朝里岳沢の源頭。遠く春香山や手稲山がかすかに見える。ここからの滑降はおおむね深雪が楽しめ、沢沿いを思い思いに国際スキー場へと下る。スキー場からは車で移動。15時ヘルヴェチアヒュッテ着。

(倉持寿夫記)

18日　C_5

5時30分起床。窓外は既に明るい。ヒュッテ前のドロノキの大木の梢でアカゲラがドラミングを高らかに歌う。これに呼応するように遠く森のあちこちからドラミングが応える。このヒュッテには50年ぶりに泊まったが、当時、飲み水は沢から汲み上げた。今は上流に大きなスキー場ができ、沢水は飲用不適と思われ、炊事は雪を溶かす水づくりから始める。8時、北大山岳部の3人が屋根の雪降ろしに来る。今年は異常な大雪。高床式小屋も軒下まで埋まって

いる。外のトイレ小屋はつぶれて倒壊している。

今日からは、仕事の都合で下山する佐々木に代り倉持が加わる。屋根の雪降ろしに精をだす若者たちに見送られ、小樽内川を渡り、右岸に沿って国際スキー場へ。ラッセルは20cm程度。曇り空。気温が高く、すぐに上着を脱ぐ。スキー場まで約1時間。ゴンドラに乗り、10時40分頂上出発。みぞれ状の吹雪になる。

朝里峠まではゆるい下りで直線距離2km程度。普通なら1時間未満の行程だが、湿雪20cmほどのラッセルで思うように滑らず、縦横に走るスノーモービルの走跡に驚きつつ樹林帯を進む。右股沢に入り込み一時ルートを見失うが、小樽市と札幌市の境界(西は朝里川水系、東側は小樽内川水系)をたどり、朝里峠着13時となってしまう。峠からは複数並行して走るスノーモービルの走跡をたどる。右手に送電線を見ながら樹林帯を北東に進み、13時40分送電線鉄塔の下に出る。樹林帯は東側が開け、石狩湾へと続く山並が眼下に広がり、西側は樹林に覆われた平原状のなだらかな起伏が広がる。天気が良ければ、石狩湾や遠く暑寒別山塊を見ながらのんびりと歩きたいコース。ほぼ行政界に沿う林道は春香山の中腹付近まで利用できる。視界は1km以上あるが、天気は小雨と風。銀嶺荘までの道のりは遠い。モービルの走跡は気分よしとしないが、ラッセルがなくスピードが上がり、遅れを取り戻すにはつごうよい。

標高差数10mの登降を繰り返すコースは、貼りつけシールは着脱ごとに粘着力が低下、取りつけシールの方が絶対有利だ。15時に751mのピーク着。前方の777mの緩やかな山容ははっきり見えるが、その南奥の春香山は南から押し寄せるガスの中。春香山登頂は明日にし、山頂に向うモービルの走跡と別れて林道を進む。16時25分和宇尻山と春香山の鞍部に出る。銀嶺荘まで沢筋を滑降。16時35分銀嶺荘到着(C_5)。3階建ての建物は真下に立って見上げると壮大だ。管理人が週休2日以外は常駐していて、台所にはおいしい水が引かれている。この小屋は1934(昭和9)年に北海タイムス社(現在の北海道新聞社)がスキーヤー用に建設し、その後建て替えられ、今は東海大学が管理し、一般登山客、スキーヤーに開放している。

19日　C_6

5時50分レトルトのご飯とカレーそしてインスタントみそ汁の朝食。7時10分、空身のスキーで春香山往復に出発。南南西の風、ガスで視界50～100m。30分で山頂。重い湿雪を一気に滑り降り、小屋に戻る。8時25分奥手稲山の家に向け出発。銭函峠を通過し、銭函川源頭部の急斜面を見下ろしながら、なだらかな稜線を進む。10時、三角点838.7mから北に延びる尾根に取り付く。風向きが西南西に変わり、時々体がよろけるほどの強さに。10時50分、三角点ピークからシールを外し、726mの鞍部までスキーで滑降。

13時10分奥手稲山頂上。ここから奥手稲山の家まで、スキー滑降でせいぜい30分と考えていたが、気温が下って湿雪の表層が凍り、ブレーカブルクラフトのためスキーに苦労する。樹林の中を斜滑降キックターンの慎重なスキー操作で、1時間半もかかって15時小屋着(C_6)。

小屋では北大ワンダーフォーゲル部員4人が除雪作業しており、扱いづらそうな石炭ストーブも部員たちが燃やしてくれる。石炭は夏の間に彼らが担ぎあげたもの。木造3階建の小屋は鉄道省札幌鉄道局が1930(昭和5)年に旅客誘致を目的に建てたスキーロッジ。1971年に北大に移管され、ワンダーフォーゲル部が管理する。沢水をホースで引き込み、ソーラー発電とバッテリーで電灯がともされる。黒光りした柱や壁には無数の記念落書きが彫られている。

20日　C_7

ソーラー発電の電灯の下、ワンダーフォーゲル部員の慣れた手つきで燃やすストーブで朝食を作り、7時30分小屋を出発。時々小雪が舞う高曇り。氷結した雪面の上に5cmほどの新雪。太い樹木がまばらに混じる針広混交林を等

高線 850m に沿って北東に進む。30 分で 871m の広い鞍部に着く。星置川源頭の急斜面を見下ろす地点からほぼ真西にコースをとり、右側になだらかに広がった緩斜面を登る。かすかにスキー場の音声が聞こえる。961m のピーク手前、滝の沢源頭部で、ガスの切れ目から手稲山頂が見える。アンテナ群も確認できる。右足下には痩せ尾根が手稲山頂へのびる。961m のピークに 9 時到着。シールを外し、細尾根まで下る。再びシールを付けて痩せ尾根を 300m ほどたどり、さらに 991m の岩峰は北側を巻くが、氷結した急斜面は新雪が薄く覆い、スキーのエッジがききにくい。かなり緊張してトラバース。この間わずか 600m ほどを 2 時間費やす。

12 時 15 分再び尾根上に出る。15 分ほど尾根を伝い、手稲山頂直下の崖下に出る。北側の凍結した急斜面に再び苦労して、オリンピック男子大回転コース跡上部に出る。

13 時ロープウエー駅の手前から手稲山頂に続く尾根に出る。山頂付近はテレビの送信アンテナがひしめく。50 年前はテレビのアンテナ 1 基しかなかった。手稲山は 1913(大正 2)年 2 月スキー部創設者たちが北海道における初めてのスキー登山のシュプールを残したところであるが、今日その面影はない。手稲山頂に 13 時 10 分着(**写真 6-4-6**)。テイネハイランドスキー場を下って 13 時 55 分パラダイスヒュッテ着(C_7)。

パラダイスヒュッテは、1926(大正 15)年、北大スキー部創立 15 周年を記念して日本で最初に建てられたスイス式スキーヒュッテで、Hüttenkette 構想の第 1 号ヒュッテである。ヒュッテでは温かいストーブと現役パーティのメンバー(上田)や田上省一(1968)に迎えられ、ビールでシーハイル！！

21 日

7 時 30 分発。南東方向へ樹林帯を抜け、ハイランドスキー場に向う。昨夜からの寒気で 30cm ほどの降雪があり、吹雪が断続的に続く。圧雪車が早朝作業しているスキー場を抜け、838m のネオパラの山頂に 8 時 30 分。西野浄水場への山スキーコースを下る。フィナーレは上質の深雪スキーで飾る。9 時 40 分西野市民の森入口に到着し、田上、柿木真(1974)の出迎えを受ける。



写真 6-4-6
OB パーティの最終ピーク手稲山。林立するテレビアンテナで昔日の面影はない

これで 3 月 5 日からの現役と OB による Hüttenkette ツアー計画は無事完了となる。

(倉持寿夫記)



和田晴 OB 画

5　無意根山スキーコース道標設置

倉持　寿夫（1965 農 林学）

1. 道標設置の経緯

北大スキー部が創立 15 年を迎えた 1926（大正 15）年刊行された『創立 15 周年記念』の巻頭で、部長の大野精七先生は、我が国スキー界の将来に向け三つの「希望」を述べている。その一つが「道標の敷設並びに山小屋の普及を望む」であった。

その後、札幌近郊に多くの山小屋が造られ、そして多くのスキーコースが整備され、1935 年 2 月にはパラダイスヒュッテ・ヘルヴェチアヒュッテ周辺の山々で初めて道標が設置された。無意根山にもかつて「フルヤのウインターキャラメル」とか「池田バンビのキャラメル」などの商品名が入った道標があり、現在もその一部がボロボロに錆びついたり、幹に食い込んだりして若干残っている（写真 6-5-1、6-5-2）。このようなことから、道標の復活は山スキーの一般市民への普及につながり、北大スキー部 100 年・山スキー部 50 年記念にふさわしい事業と考えた。

2012 年末に月発足のスキーコース標識設置部会でコースの選定を検討した。まずはホームグランドの無意根山を対象とすることになった。設置コースは、林道終点の宝来小屋から無



写真 6-5-1
錆びついたスキーコース道標。昭和初めにスキー部の先輩たちが設置したものか



写真 6-5-2　ダケカンバに幹に抱き込まれた道標

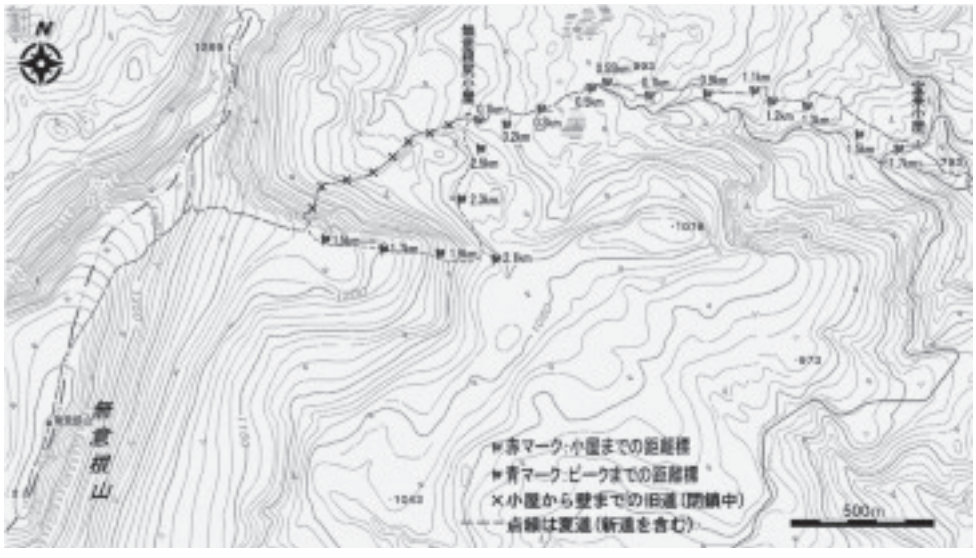


図 6-5-1
道標設置ポイント。宝来小屋から無意根小屋までは 12 か所、無意根小屋から上は 6 か所である。作成：佐々木尚三（1978）・片倉 賢（1977）

意根小屋を経由してシャンツェ上部（樹林限界）に至る区間とした（図 6-5-1）。

道標のデザインは住友房夫氏（山とスキーの会特別会員）にお願いした。当初は制作費用を負担してくれる協賛企業を募り、道標の下部にスポンサー名を入れる予定であった。最近は企業 CSR（社会貢献活動）が盛んで、この事業を契機として多くの企業が関心を持ち、道内各地で道標設置の機運が高まることを期待した。しかし、国有林管理者である石狩森林管理署からは、特定の企業名は入れて欲しくないということで断念した。

3 月に最終デザインが決定され、製作は住友氏から株式会社札幌標版製作所に依頼した。アルミ板に表示を道路標識と同じ塗装方法で行い、風雨など厳しい自然環境の下での耐久性を考慮した。また、樹木に取り付けるワイヤーはスプリングと組み合わせ、樹木の肥大成長に合わせ伸びるように考慮した。

2013 年 2 月に設置個所選定の山行を行い、予定コース上に大まかに仮標識を設置し、その位置を後藤 昭（1966）が GPS で測定して地形図上にプロットし、この地形図を基に道標の位置と表示距離を検討した。設置間隔は 200m を目安とし、必要なところには設置点を追加した。2013 年 4 月に OB と現役で道標設置の作業山行を行った。

2. 設置の概要

〈宝来小屋～無意根小屋〉

①　宝来小屋から無意根小屋まで冬コースを地形図上で測定して 1.7km とする。

②　スタート地点は宝来小屋より約 50m 西の太さ 30cm 程のアカエゾマツとして、幹に道標「無意根小屋まで 1.7km（以下道標名を「無意根小屋まで」を省略して、「○ . ○ km」とする）を取り付ける。

③　ここから北西方向に宝来沢（1/25,000 地形図では小川と表示）を左手にした、なだらかな尾根を進み、200m 間隔で道標「1.5km」と「1.3km」を設置して見返り坂の上り口のアカエゾマツに道標「1.2km」を、登り終わった平坦部のダケカンバの幹に道標「1.1km」を取り付ける。

④　ここからは、ほとんど真西の方向にところどころ宝来沢を左に見下ろしながら進み、ニセ見返りの手前に道標「0.9km」、さらに西に約 200m 進み道標「0.7km」を（写真 6-5-3）、大蛇の沢下り口のアカエゾマツに道標「0.55km」を取り付ける。この「0.55km」は冬コースの重要な目印となる。

⑤　大蛇の沢（宝来沢上流）のスノーブリッジを渡り、登り切ったところを道標「0.5km」として、ここから西南西の方向に進んだ大蛇が原の中間地点に道標「0.3km」、さらに 100m 進み、この辺が小屋への上がり口として迷いやすい地点であるため、目印として右手のトドマツの幹に道標「0.2km」を取り付けた。斜面に取り付き、左にトラバースしながら登り約 100m 進んだアカエゾマツの幹に最後の道標「0.1km」を付



写真 6-5-3　道標「無意根小屋まであと約 0.7km」



写真 6-5-4　道標「無意根小屋まであと約 0.1km」

けた(**写真 6-5-4**)。この道標を過ぎると、すぐに右手に小屋の姿が目に入るはずである。

〈無意根小屋～無意根頂上〉

① 無意根小屋から無意根頂上までのコースは、雪崩の危険性の少ないと考えられるシャンツェ尾根の東端に取り付くコースとし、頂上までの距離を 2.6km とした。

② スタートは小屋の南約 100m のなだらかな尾根の上として、アカエゾマツの幹に道標「無意根山まで 2.5km」(以下「無意根山まで」を省略し、「○.○ km」とする)

③ 冬コースに沿って 200m で道標「2.3km」、シャンツェ尾根の裾を回り込み、シャンツェ尾根の東端に上がったところが「2.1km」、ここからほぼ真西にシャンツェ尾根北寄り

④ を直登する方向に道標「1.9km」と「1.7km」を 200m 間隔でダケカンバの大木に取り付け、最後に樹林限界の細いダケカンバに道標「1.5km」を取り付けた(**写真 6-5-5、6-5-6**)。



写真 6-5-5 道標「無意根山であと約 1.9km」



写真 6-5-6
道標「無意根山であと約 1.5km」。北壁を上がったところ

3. 追記

道標設置の作業を終え、ストーブで暖まった無意根小屋。ビールとワインで「今日の戦果」を語りあう和やかで幸せのひと時、今後、年に 1 回、道標の点検整備を行うため、初代道標管理者に岩瀬隆則(1976)が立候補して、参加者全員の賛成で承認された。

また、2 月の設置位置選定山行では、ストーブを囲み吉田守男(1975)のギター伴奏で歌ったスキー部 100 年記念歌「雪は降り積む」(関英郎(1982)作詞・吉田守男作曲)と「無意根の小屋に雪が降る」(作詞・作曲中村晃忠(1962))は無意根小屋への思いがしみじみと伝わり、お酒が一層美味しく感じた。

4 月の道標設置作業にはたまたま香取民生(1972)の同期の市原成典(1971)、津田 誠(1972)、油田厚生(1972)、高橋修平(1971)、小山 滋(1971)、池田浩明(1971)の集まりがあり、小屋からシャンツェまでの作業を手伝ってもらった。

4. 参加者

設置個所選定山行(2013 年 2 月 16～17 日)

住友房夫、塘 忠夫(1962)、在田一則(1965)、倉持寿夫(1965)、後藤 昭(1966)、吉田守男、森 康(1977)、岩瀬隆則

道標設置作業山行(4 月 20～21 日)

住友房夫、倉持寿夫、田上省一(1968)、長沼昭夫(1972)、岩瀬隆則、佐々木尚三(1979)、石川 宏(4 年目)、上田祐太郎(4 年目)、今原亮介(2 年目)、近藤 武(2 年目)

第7章

補遺



雑誌カット―スキーファッション

1　食料軽量化についての座談会

出席者
裏 悦次(農 4 年)・小野堅太郎(法 4 年)・倉持寿夫(農 4 年)・永野正幸(農 4 年)・中尾圭一(工 3 年)・増田裕一(工 3 年)・大田正豁(農 3 年)・落合道夫(教養 2 年)・後藤 昭(教養 2 年)・薮中卓郎(教養 1 年、書記)・八木貞一(教養 1 年、書記)・小林暁正(経 3 年、司会)

小林：新しい雑誌“ラッセル”にのせる食料についての討論会を開きたいと思います。まず、軽量化に弊害があるんじゃあないかということ。山登りは苦労して登るべき訓練の場だ。軽量化ということで山登りを楽にやろうという安易な風潮が出て来はしないかということが問題になったのです。

裏　：精神の問題として、安易に流れるということだな。

永野：軽い荷物で行くのもいいけども、重たい荷物で苦労するのも意義があると思うんだな。重たい荷物をしょってさ、行ける自信だな。重たい荷物から軽いのに移るのはいいと思うんだ。最初から軽いので新兵をきたえると将来はどうなるか、体力的にもな。急に重たい荷物をしょって、それだけ体力出せるか、かなり疑問だと思うんだな。

裏　：軽量化っていうのはね、行動範囲が広まるし、特にキケン性がなくなるっていうことだね。軽量化で精神面で悪くなるのは、だれるということだね。それを他のもののトレーニングでもっていけばいいんじゃないかと思うんだけどな。

小野：使い方ひとつでどうにでもなるよ。

永野：軽量化が叫ばれた時は徹底してなかったわけさ。軽量化、即ち軽いに荷物、楽しく行けるという風潮があったんじゃあなかったか。

（一同、そうだの、そうでなかっただのと論争）

裏　：だから、この際そういうことを認めて指導を重視すれば、だれることはなくなると思うんだけどな。

小林：結局、軽量化の利用の仕方があるということ。そういう風潮をなくすためには、特に 1、2 年には訓練して重い荷物をしょわせることも必要であると。

永野：それには上級生もしょわなきゃあならないな。そういう点、軽量化万能じゃあない。

（一同、同意）

裏　：軽量化はただ楽をしようとするためだけじゃあないってことを強調すべきだな。

小林：次に軽量化そのものに果たして成果があるか。例えば、エッセンよりは装備を軽量化する方が効果があるんじゃないか、という意見もあるんですが。

小野：ウン、それを言ってるんだ。前から誰かいねぇかって言っているんだ。アイゼン一つ比べたっていいものと悪い物では 400g もちがうんだ。とてもじゃがないが、かなわんよ。装備の研究は冬には特に大切なんだよ。

永野：それから、それと共に医療の研究を誰かやらねぇかなあ。

小林：結論としては、エッセン、装備、医療の研究をやってほしいということ。

小林：これからの建設的な意見出してください。軽量化をね、実際の段階でどういう風にやって行くかいうこと。

永野：下界で練習する方法だけど、何か一つの

大きな合宿だな。例えば10月にロッジでやるような時にな、軽量化の本当の姿を示すようなものを食わせて1週間やると。またあらゆる合宿に出来るかぎり応用してゆくと。

中尾：しかし、それだけの訓練できるかな。

永野：出来るか、出来ないけどやってみるべきだと思う。

小林：訓練しなくちゃあいけない。

裏　：そして、軽量化に対する覚悟も必要じゃないかと思う。

小野：そうまでして軽くしていく必要はねぇ。おら疑うよ、そういうのは。

倉持：これから具体的にどういう山行で軽量化するかということを決めるのも大切だと思うな。普通の山行じゃあ必要ねぇよ。

裏　：やっぱり、縦走形態では必要でないかな。

小野：しかし、いっぺんには出来ねぇだろう。やはりふだんの訓練も必要じゃないかな。

裏　：だから、ずっとやらなきゃダメだということよ。

大田：でも、たまには腹いっぱい食う山行というのもないとね。目の前が真っ暗になりますよ。(一同、爆笑)

倉持：だからな、十分食ってさ。それでかつ重さを減らそうってのが一番いいんじゃないかな。

(そうだ、そうだ)

小野：要するに、無駄なものを持って行かないってことよ。

裏　：そして、軽量化というものがな、決して量を減らすということじゃなくて、他の物をそれに代わって栄養品として取り入れるっていうことよ。

小林：それから、もっと現実的な問題で、実際に今の軽量化はビスケットとかマカロニとかインスタントなものが多いわけですが、そういう点について。

裏　：それはもう研究の余地っていうことしかないな。

小林：インスタント的なものが多いため、経費が非常に高くなるってことが問題になっているんですが、そういう問題をね、例えば自分たちで研究して作るというような。

小野：何か、山岳部では自分でビスケットだか作ってるそうだね。何か当然そういうことをしていいんじゃないかと思うんだけど。より皆に合ったものものを食えるし、カロリーも高いものを食えるし。

裏　：それが皆好きなようだったらさ、もっと大量生産とか大量購入って形でやれば安くなると思うな。

倉持：それに研究費ってものも少し必要だと思うな。

裏　：オマエ、肉買って来て食うんだろう。(笑)

永野：ああ、失敗だなんて言ってな。今日は、まあ失敗だから食うべ。ちょっと酒買って来いなんてな。(笑)

後藤：インスタントでも全製品より半製品の方が好みの料理が出来ていいですね。

中尾：それから、モチも高すぎないかい。

永野：ウン、高いなあ、あれは。

裏　：あれは水買ってるようなもんだもんな。

永野：しかし、うまいんだけどなあ。

大田：腹いっぱいになっていいよ。

小野：ビーフンはどうだ。水にポチャンとつけて、少しやわかくなったところでな、ラードでキイキイっていためるわけよ。料理も楽だしな、簡単だしな。湯気が立たないっていうのがいいんだ。

小林：夕食についてですけどね、朝食に比べて量が少なくていいっていうのは誤りじゃないか。夕食で貯えられたカロリーがあすの原動力になるという意見があるのですが。

小野：どうせ山に行ったら、かロリーは足りっこねえんだ。要するに、痩せてけえって

くるよりほかねぇってことさ。100g 体重減りゃ千カロリー出るんだからさ、1kg 減れば 1 万カロリー出るんだよ。

裏　：特に朝と比べたら、夜をある程度小さくするっていうのはしかたないよ。

小野：夜にたくさん食うんなら、朝食へと。

小林：それから、カロリーの問題ですけどね。カロリーだけじゃ歩けねえとか、脂肪でカロリーを補っているようだけど、脂肪が吸収できるかと。

小野：いや、それは吸収できるよ。80g くらいは吸収できるって、おれ聞いてきたもん、ちゃんと。

裏　：おれは出来ないと思う。

（しばらく、対立。意見が闘わされる）

大田：結局、脂肪をラードだけに求めてるっていうものがおかしいよ。

小野：とにかく、ラードは一番カロリーが高けぇんだ。

落合：料理の仕方によっても違いますね。

大田：ギラギラ、あん中に浮かすなんて最低だよね。(笑)

落合：ラード湯なんてな。(笑)

小野：安直にやりすぎているよ、ちょっとな。

裏　：結局、カロリーだけでは歩けないってこと。みんないいな。(一同同意)　例えば、その極端な例としてな、酒なんかカロリーあるだろう(笑)、あれで歩けるかってな(笑)

小野：横山大観。だけどあれ食ってたっていうもん。めしなんか全然食わなくて。それも一番な、上澄みの一番いいのを酒屋から送ってくるんだって。それをキューって。(笑)

裏　：それでも冷かんかやっぱり。

小野：冷やでも何でもうまいんだって。

裏　：特級酒。やっぱり冷やの方がいいな。(笑)

倉持：やっぱりなスシと食ったらうまいな。(笑)

（ここで紅茶がはいる）

小林：それからね、毎日同じ食料でバラエティーに富まなすぎるということについて。

小野：それは、エッセン係の能がねぇの一語につきるよ。

倉持：あまり贅沢言うなってな。しかし。エッセン係ももっと研究心ほしいな。

永野：エッセン係だけの責任にするというのは非常に疑問だと思うんだ。エッセン表ができたら、リーダーも検閲しなくちゃならないんだよ。

大田：隊員からももっと資料を提供すべきなんだよ。

落合：それからうまく出来たエッセンは記録に残すべきだね。

小林：今度のゴールデンウィークの合宿ではね、食料に関する不平が非常に多かった。先ず、ビタミンＣが欠乏してたってこと、野菜、果物をどうとるか。

大田：やっぱり、乾燥野菜だな。

永野：愛山渓にしても乾燥野菜だな。あれは本当に素晴しいと思ったな。玉ネギとホウレン草、あれはもうすぐれものですよ。あれの水分ないっていうやつ。青いものが毎日食えたっていうの初めてだもん。あれはもっと組織的に研究すべきだと思うな。

裏　：乾燥野菜はだめだね。あれは繊維だけよ。

大田：あれは、要するに繊維素を求めるのよ。便通をよくする。

小野：ビタミンは無理なんだ。ビタミン剤でも飲まなきゃだめなんだ。

倉持：そういうことは気にしない方がいいんだ(笑)。知らなきゃ気がつかないんだから(笑)

裏　：いや、ビタミンていうのは一番重要だと思うな。特に必要なのは B1 なんだ。

（ここで、裏さんのビタミン B1 に関する講

義。皆、わかった様な顔する）
小林：結局、乾燥野菜は便通を良くするし、バラエティに富むし、是非利用すると。次は、スペシャルの問題なんですけどね。スペシャルをどの程度取るかということ。
裏　：イラネエ。
小野：おれもイラネエ、と思うな。
裏　：寝りゃあいいんだと。メシ喰らったあとは。
永野：いやねえ、山行ってものはある程度楽しみがあってしかるべきだと思うんだよ。
大田：ただね、山行っていうものはピークだけを求めているんじゃないんだよ。一つのパーティのパーティシップの養成というのもあるんだよ。
裏　：うん、そりゃいいことだよ。それでなんだ
大田：それでテントの中での生活はものすごく大切だと思うんだ。何かポリポリ食べながらいろんな話をするとかね。そういうことが重要視されるべきだと思うんだ。
裏　：そうだ。（と手をたたく）
永野：持って行くことによってな、山行が有意義なものになれば、持って行くべきだと思うよ。だからね、オレはスペシャル全廃なんていうことは絶対反対だね。
裏　：やっぱり必要だな。
大田：心にもないことを言うんじゃないですよ。（爆笑）
小野：いや、持って行ければ、持っていったってもかまわんけどな。だけどそれにかける目方と金があったら、オレは主食にまわす。
永野：余計に買いすぎるってこともあるな。
小林：スペシャルについてももっと研究するっていうことですね。
大田：行く山行によっても違いますね。
永野：こんどのサマースキーなんかは持てるだけ持ってさ。
裏　：いや、全廃は引っ込めるから、全廃はやめろな。（笑、みんな賛成）ああ、これで安心した。実はこれ通ったらどうしょうかと思っていたんだ。（笑）
小林：それじゃあ、次に買い出しについて。まとめて買えとか、コネをつけるとか、そういうものがあるのですが。
永野：今までにも、丸井だの二条市場だのに行って安くしてもらった。
小林：そういうのを積極的にやることです。
永野：むしろ、小売りに行くよりも、坂ビスケットっていうのがある。ああいうところへ行ってな、クズでもいいからゆずってもらうということも必要だな。
裏　：買えるもんはさ、1年間にいっぺんにまとめて買っとくんだな。
倉持：だいたい、1年にオレ等がどのぐらい食うかさ、統計取ってさ、記録もな、ただ集めるだけじゃなくてさ。
薮中：整理して、検討しなけりゃ発展がないよな。
小林：食料の詳しい記録も必ず残しとくべきだね。形式を決めといてさ。
大田：例えば、行動予定表の裏にエッセン費表も記入するとか。
小林：料理学校に行け、なんて。（笑）
倉持：ガスボンベ担いで。（笑）
永野：ステンレスの流し、担いで、水道ひいて（笑）
小林：食料係だけが一生懸命やっても出来ない。それで、部全体として纏まってほしい、という意見もありました。
小林：最後によりよいエッセンを作るため、どうしたらよいかを。
裏　：全員にPRするってことな。栄養学的な考えを導入してく。
永野：今までの話を全部総合すれば、よりよいエッセンが出来るんじゃないか。
小野：いやあ、本当にこの話の半分でもエッセン係が実行してくれたらさー。ずいぶんいいわ。

小野：ずいぶん真面目な討論会でよかったよ。
小林：それでは、このくらい建設的な意見も出ましたので、この辺で一層の発展を祈って終りたいと思います。どうもありがとうございました。（拍手）

テープで録音したものを速記しました。
省略した所の多かったことを付け加えておきます。（薮中、八木）
（『ラッセル』第 1 号（1963 年 6 月）より転載）

表 7-1-1　1961 年 6 月大雪山サマースキー第 4 班の Essen 計画表

日	行動予定	朝 当番	朝	昼 当番	昼	晩 当番	晩	Special
14 日（水）	札幌―旭川―勇駒別温泉―旭岳石室			各自持参		若林・小野	米　1.8 升 天丼：天ぷら　20／マン味 キュウリ漬物	緑茶 ウサフン チョコレート
15 日（木）	石室― C.S.（北大スロープ）	塘・高橋	米　1.5 升 ズッペ：味噌　500g／油揚げ　2 枚／タイ菜　7／花ガツオ フリカケ	在田	パン　10 個 バター　1 箱 ジャム リンゴ　10 個	塘・在田	米 1.8 升 ウンチング：カレールー　1 箱／肉　700g／ジャガイモ　4 個／タマネギ　2 個／ラード　1/2／小麦粉 福神漬け	紅茶 ネコフン
16 日（金）	C.S.（北大スロープ）周辺でスキー	横山・裏	米　1.5 升 ズッペ：味噌　500g／タマネギ　2 個／タイ菜　7／花ガツオ キュウリ漬物	阿部・小野	ラーメン　10 個 タレ　1 タマネギ　2 個 エトバス　2 本 ラード　1/2 コショウ	中村・在田	米　1.8 升 豚汁：肉　700g／ジャガイモ　4 個／タマネギ　2 個／味噌　500g サヤ豆　200g	紅茶 キャラメル
17 日（土）	C.S.（北大スロープ）周辺でスキー	若林・小野	米　1.5 升 ズッペ：味噌　500g／白菜　1/2／花ガツオ 納豆　5 個	高橋	パン　10 個 バター　1 箱 マッシュポテトの素　2 個 Milch	中村・裏	米　1.8 升 ポタージュ：ポタージュの素　2 箱／エトバス　2 本／タマネギ　2 個／ホーレン草　300g／ラード　1/2／小麦粉	紅茶 夏みかん 5 個
18 日（日）	C.S.（北大スロープ）周辺でスキー―石室	阿部・在田	米　1.5 升 ズッペ：味噌　500g／白菜　1/2／花ガツオ サンマのひらき　10 枚	塘	炊き込みご飯：米　1.5 升／缶詰　3 個 サラダ：エトバス　1 本／キュウリ　5 本	裏・高橋	米　1.8 升 豚汁：肉　700g／ジャガイモ　4 個／タマネギ　2 個／サヤ豆　200g／味噌　500g	Trinken ココア
19 日（月）	C.S. ―石室―勇駒別温泉―旭川―札幌	横山・高橋	米　1.5 升 ポタージュ：ポタージュの素　2 箱／エトバス　2 本／ホーレン草　300g／キャベツ	各自	乾パン バター　1 箱 レーズン　10 袋			カルピス

メンバー（10 名）
塘　忠夫（4 年、L）、中村晃忠（4 年）、横山英正（4 年）、若林隆三（4 年）、裏　悦次（2 年）、小野堅太郎（2 年）、在田一則（1 年）、高橋俊二（1 年）、阿部孝夫（4 年）、水谷　寛先生
用語解説／ウンチング：カレーライス、ズッペ：味噌汁、エトバス（Etwas）：魚肉ソーセージ、ウサフン（ウサギの糞）：マコロン、ネコフン（猫の糞）：かりんとう、Trinken：酒（この時は缶ビール各人 1 個）

2　無意根小屋トイレ考

倉持　寿夫（1965 農 林学）

無意根小屋のトイレは汲み取り式である。これは北海道の山小屋トイレの標準タイプである。溜まった屎尿はいずれ汲み取って処分する必要がある。ポロシリ山荘では毎年ボランティアを募集して一斗缶に入れて山麓まで搬出しているが、作業後にカレーライスを賞味するというイベントのおまけが好評？だという。

無意根小屋では2年に一回くらいで汲み取り、周辺に埋め立てたり、沢に放流したりしている(**写真 7-2-1**)。この回数をできるだけ少なくしたいので、トイレは一般登山客専用として、部員は基本的には使用してはいけないことになっている。部員は野外自由方式。即ち、個々自由に周辺のやぶの中、木の根方などでひっそりと用を足す。夏はやぶ漕ぎが大変であるが、冬はスキーを履けばどこでも自由自在、藪蚊やブヨの襲来もなく快適である。雪を使えばペーパー不要との壮語もある。

近年、北海道では百名山ブームなどがあって大雪山など登山人口が急激に増加している。これに伴って従来型汲み取りトイレの屎尿の搬出処理問題や野外自由方式による環境汚染問題などが深刻化している。一部では携帯トイレ方式を取り入れたり、汲み取り搬出や野外散乱ペーパーの清掃や新たな処理方式の提案などボランティア活動に取り組んでいる団体(山のトイレを考える会)がある。



写真 7-2-1
春の無意根小屋祭でトイレに溜まった屎尿を汲み出す船木上総(1983 医卒)

無意根小屋は利用者の増大などによるトイレ問題は今のところ生じていないが、2000年すこし前から行われていた比較的高齢OBによる厳冬期無意根スキーツアーにおいて、薄別から4~5時間かかつて小屋に到着するとまずは小屋のストーブを炊くことと、トイレの掘り起しであった。一昔前までは毎週小屋番が入り、トイレは掘り起されていたが、近年は、小屋番が長期間入らないことが多く、完全に埋れたトイレの掘り起しには6~7人で1時間以上かかるようなこともしばしばであった。したがって冬期は、少数のパーティでは掘り起し困難のため小屋の周辺で済ませるが、春先の雪解けとともに小屋の入り口あたりに汚物が散乱するという怪しからん事も発生していた。

また、参加したOBの中には高齢者特有の夜中の用足しという悩みがあった。夜中に防寒対策して戸外に出る辛さは深刻で、パラダイスヒュッテのように内部にトイレを望む声があった。

そこで、2009年、これら年寄OBの要請を受けて、環境への負荷に配慮して衛生的で快適(ハエ・臭気対策)な方式、戸外に出ることなく利用できるトイレについて、OBの田村 正、市原成典、伊藤 剛が検討して、2010年4月に「無意根尻小屋のトイレの提案」として近年本州方面で実用化されだした山岳トイレの実績調査などをもとに、当初はバイオトイレについて検討したが、電力(水力・太陽・風)確保や維持管理などに種々課題があることから土壌処理方式採用が最適と提案された。

このことは運営委員会でも取り上げられた

が、設置費用がおおよそ2千万円(パラダイスヒュッテの土壌浄化法設備を施工した業者により現地確認のもとに作成された見積もり)という壁の前で、従来の野外自由方式でよいとする声もあり、議論が進めないまま今日に至っている。一方、HUSVのメーリングリストでも真剣な意見が交わされ、環境に対する時代認識から従来方式を懸念する意見、北米国立公園での事例、国の補助制度の活用など提案されたが、具体的な検討までには進まなかった。

しかし、現在のトイレはいずれ改築などの時期が来る。その時には周辺の環境保全を考慮した方式が求められることと考える。

いずれにしても、無意根小屋の管理は現役主体であり、どのような管理体制、適正な管理能力が確保できるのか、また、山とスキーの会がどの程度バックアップ(設置費用およびメンテナンス費さらには管理参加)が可能かなど、しっかりとした議論をする必要がある。

このためにも、前記「無意根尻小屋のトイレの提案」は貴重な検討資料として生かす必要があり資料編に残すこととする。

参考文献

田村 正・市原成典・伊藤 剛(2010年4月) 無意根尻小屋のトイレの提案.



図 7-2-1
処理槽・トイレの配置検討図(無意根尻小屋のトイレの提案より)



『山とスキー』第4号より

3　無意根小屋 60 周年祭

脇田　政嘉（1987 工 高分子）

無意根小屋 60 周年祭が、昨年(1991 年)5 月 3 日～5 日(3 日～4 日：無意根記念登山、4 日～5 日：定山渓パークホテルにおいて親睦会)に盛大にかつたいへん楽しく行われました。あいにく、体調の関係で水谷先生が不参加で残念でしたが、下記のようにたいへん多くの方が参加されました。ここでは思い出すがままにその楽しさと盛大さを織り混ぜて書きたいと思います。しかし、何分半年以上の前の事で記憶違いがあるかもしれませんのでその点何卒ご承知願います(注：グラビア写真参照)。

5/3　曇りのち雪

千歳空港(11：30)―JR 札幌駅(12：40)―薄別(14：30)―小屋(18：30)―消灯(22：30)

上記の時間は、貸切りバスの時間を用いた。バスを利用しなかった人は、12：00 ぐらいから登り始める。雪は薄別の林道入口からあるが、幸いしまっており登り易く、2～3 時間で小屋に着く。しかし、登っている最中吹雪模様となり寒い思いをする。

小屋祭りは、悪天のため外でのキャンプファイヤーを断念し、小屋の中での大宴会となった。山の唄の大合唱や昔懐かしい思い出話に花が咲き、老若問わず大変楽しい時間を過ごした。

＊ここでは夜の大宴会について少々詳しく書きたい。約 10 万円分の酒と直径約 80cm の中華鍋二杯分の豚汁、現役が一日がかりでむすんだ 200 個余りのおにぎり、100kg 近い食料(肉各種、ソーセージ等)のバーベキュウをつまみにしてのヘビー級の宴会である。なんといってもここで活躍されたのは塘 忠夫(1962)と永野正幸(1964)両 OB である。わいのわいのの大騒ぎであったが、この二人の大声によって一瞬静かになった(すぐにうるさくなるのだが…)。

つまらぬ憶測ではあるが、両 OB ともご令嬢を連れてこられた手前、普段のダメパパぶりを返上されようと頑張られたのではないでしょうか？

次に特筆に挙げられるのは、スキー部分裂で揺れた時代から約 10 年の間に卒業された方々の山の唄の大合唱である。次から次へと出てくる唄のレパートリーの多さにはビックリさせられました。特に親子二代山スキー部員である三崎 勝 OB(1961)の歌声に酔いしれた方々も多いと思います。

数々の出来事があったこの大宴会で最も驚いたのは、約 100 人の人間全員を収容した小屋に対してである。勿論、1、2 階とも足の踏み場も無いぐらいであったが、とにかく約 100 人を収容したという事実は、計画段階において考えられなかった事であった。

5/4　快晴

起床(5：00)―小屋発(7：20)―peak―小屋(12：00-13：00)―薄別(14：30)―Park Hotel(15：30)―親睦会(18：00)―就寝(23：00)

朝目覚めると、雲一つない真っ青の空が目に飛び込んできた。小屋前で記念写真を撮ったあと Peak に向け出発する。5 月の暖かい陽差しを受けながら快適に登る。

Peak で追悼を行った後、各自思い思いのシュプールを描き十分スキーを楽しむ。中には、テラスや壁を何回も登り返す御人もいた。

小屋集合後あとかたずけ等を行い、下山開始。傷人もなく無事薄別に到着する。Park Hotel で行われた親睦会では、豪華絢爛なご馳走を楽しみながら昨年行われた二つの海外遠征の報告、参加者全員の自己紹介を行った。また

山の唄のオンパレードで昨夜の無意根小屋とは違った雰囲気で大変楽しい時間を過ごした。

＊朝早くから元気(！？)であったのが佐藤鐵郎OB(1956)である。後日、本人よりその経緯を聞いたので簡単に記したい。“目覚めて、ストーブに薪入れをしているうちに喉が渇き、ふと横を見るとウイスキーの瓶が転がっていた。ついつい手が伸び、ちびりちびりとやっているうちにピークに行けられない体調になってしまった。”ということであった。猛者ここに健在なりである。

この日は大変天気が良く、絶好なスキー日和りとなった。ピークからは羊蹄山がくっきり見え、“日頃の行いの良さを実証したぞ”と思った方もたくさんいらしたのではないだろうか。雪質はまずまずで、小生が把握している限りでは、テラス７本を滑った御人が最高である。唯、全員揃ってピークで追悼できなかったことが残念である。

Park Hotelでの親睦会では、食べきれない程のご馳走(圧巻は、鯛の酒蒸し)に舌鼓を打ち、飲み放題の酒を楽しむ。古川善雄OB(1962)の出血大サービスである。好運にも花野ご夫妻と住友夫人の臨席を得、それぞれの家でご馳走になったものに挙手を求めたところ、その多さにはビックリした。合わせたら、参加者のほぼ全員ちかくが手を挙げたからだ。

この宴で活躍された方と言えば、佐藤鐵郎OB夫人の名を挙げて異論はなかろう。亭主が朝活躍されれば、夜はご夫人である。何とも素適な夫婦である。佐藤夫人の指名で向井成司OB(1959)が舞台に立たれtwo-shotであったが、日頃の向井OBのパワーもマイクを握りしめた佐藤夫人の前ではタジタジであったように小生には思えた。

5/5　快晴

起床(7：00)―解散(10：00)

別れを惜しみつつ、かつ再会を誓って解散を行った。全体を通して思いを巡らせますと、無意根と無意根小屋は、我々スキー部山班あるいは山スキー部OBのこころのふるさとであり、訪れた我々を暖かく迎えてくれるこの上ない貴重な存在だと改めてつくづく感じられます。2日目(5/4)が快晴になったのも偶然ではなく、無意根と小屋が我々に与えてくれたのではないかと思いさえもします。少々、感傷的になり過ぎたのかもしれませんが、このような気持ちにさせるのも無意根と小屋の魅力ではないでしょうか。また、一介の学生の小生が、このような大きな催しの幹事役を無事にできたことは、遠くは九州熊本から来られた松坂理夫OB(1959)を初めとする多くの参加者、無理を聞いて下さった古川善雄、国本用哲(1973)、緑川芳行(1974)の各OB、荷上げ・準備等をしてくれた若手OBと現役諸君をはじめとする山とスキーの会および山スキー部における人と人とのつながりの素晴らしさに起因するものと強く感じられました。

最後に、いつまでも無意根の自然が静寂であり、小屋が健在であらんこと、山とスキーの会及び山スキー部の素晴らしさが朽ちぬことを願いつつ

【60周年祭記念登山参加者名簿】

1)山スキーの会員(会員Noおよび氏名)

15 花野晴治、26 砂山真範、28 佐藤鐵郎、
30 川村康司、53 小島順治、69 三崎 勝、
71 阿部孝夫、76 塘 忠夫、77 中村晃忠、
78 古川善雄、79 松坂理夫、83 大和田榮治、
94 大津有史、101 田村 正、102 徳田昌生、
103 永野正幸、105 在田一則、109 倉持寿夫、
115 鳴海俊之、116 増田裕一、124 小池宏二、
127 野原悠久、135 田上省一、137 柳生 修、
141 上野將司、152 下岡健蔵、156 近藤 博、
167 坂本武英、168 高木知敬、169 中井 強、
171 西森信弘、176 皿田 滋、179 梶井直文、
185 吉田守男、187 岩瀬隆則、188 森 康、
192 武藤清秀、193 吉田真一、195 中村 宏、

210 丸谷聖一、211 皆川幸治、217 橋村正悟郎、226 藤田誠一、227 船木上総、230 米山裕司、248 山本恵司、249 一迫公利、252 宝多卓男、257 青黄　靖、259 梶本　淳、260 河合博司、261 川端康弘、265 久能弘道、266 滝　龍一郎、282 伊藤　剛、299 脇田政嘉、300 渡辺幸子、301 粟崎　健、306 高村賢一、307 成瀬　健、308 横山昌宏、315 烏羽山　聡、316 福島裕之、317 宮内太郎　（小計 64 人）

2）家族および友人

大橋弥太郎、阿部明子、塘　艶、塘　由美子、古川善浩、大貫明子、田村やよい、田村堅太郎、永野靖子、在田佳織、在田冬佳、皿田洋子、塚原智恵美、安達幸代、刈谷純一、梅沢由佳、吉田裕幸　（小計 17 人）

3）現役部員

4 年目：海老雅仁、斎藤正美、竹川　徹、根岸邦典、秦　正樹、堀川信一郎

3 年目：三崎　裕、渡辺　聡

2 年目：赤木憲二、伊藤太裕、神田直洋、高見雄二、根岸真紀子

1 年目：北澤大輔、真田和彦、佐野映司、千葉由純、中島幸徳、中村琢朗、芳賀　一、松岡健一、渡辺一弘　（小計 22 人）

（『北大山とスキーの会会報』第 16 号より転載）

■コラム■
「むいね」の名のついている蜂

ムイネキマダラハナバチという蜂がいる。1986 年に記載されたコシブトハナバチ科の蜂で、学名を Nomada muinensis Tsuneki, 1986 という。

私が在学中に無意根山で採集した 1 ♀によって、常木勝次博士が記載したものである。♂は未知で、♀もその後採集されていないようである。青森県で採集されたコトマリキマダラハナバチに近い種で、恐らく北方系の種だろうと思う。学生時代、小屋番によく無意根小屋に通ったものだった。いつも捕虫網を手にしていた。小屋番をしながら小屋のまわりを見てまわったり、頂上までの往復にも常に蜂の姿を追い求めていた。私の標本箱には、Mt.Muine というラベルの付いた蜂の標本が多く残っている。その目録を作ろうと思いながらまだ果たせずにいる。

それはともかく、私は在学中小屋番・小屋祭り・薪積み・スキー合宿など計 30 回は登っている。私にとって 4 年間の札幌生活で最も思い出深い無意根が、私のライフワークである蜂の名前に残っていることは嬉しいことである。春の、夏の、秋の、冬の無意根に、また行ってみたい。それは二度とかなわぬ夢だろうか。

キマダラハナバチ（Nomada）は、その後三田井克志氏によって再検討が行われた。本種は 1802 年に Kirby 氏が記載した種のシノニムとされ（2007 年）ムイネキマダラハナバチの和名と共に消えてしまった。現在の学名は Nomada leucophthalma (Kirby, 1802)（クロキマダラハナバチ）である。無意根の名のついた蜂が無くなるのは残念ではあるが、これが学問の進歩ということである。私としてはクロというありふれた名前より、ムイネという山の名を残して欲しかった。なお、コシブトハナバチ科としたのは、現在ミツバチ科として扱われている。

南部　敏明（1960 農 生物）



4　大雪サマースキーコース命名由来

皆川　幸治（1978 理 物理）
佐々木　尚三（1979 農 農工）

サマースキーは我々にとって、シーズンを通じて一番楽しい山行である。1 週間にわたって存分に大雪のスロープを満喫し、温泉沢で一風呂浴びることもできるし、なおかつ普段の山では考えられないようなうまい飯を食い（雑炊を食べない山行といえばこのサマースキーだけなのだから）、中央高地を眼前にしての BC（ベースキャンプ）暮しは夏への夢を与えてくれる。6 月という時期にまだまだスキーをやるんだということは、スキーをかつぎ札幌の街を歩いている僕たちにある種の自負心さえ与えてくれる。

そのサマースキーが始まって満 20 年が経った。それで、今号には現在のサマースキーがどんなに行なわれているかなどを OB 諸兄の郷愁を誘うべく、「サマースキーゲレンデ紹介」の一文を載せることにした。まずは、サマースキーの昔話しなどを……

昭和 30 年代初頭の頃にスキー場と言えば荒井山にしかなかったのだそうである。しかもリフトはあの短いものでしかなかった。従って当時の人がスキーを買うとはシールもいっしょに買うことを意味していたらしい。シーズンの終りを迎えると、滑れるのは無意根くらいなものであったが、当時の人達はもっともっと滑りたいと当然ながら思った。それで大雪に行けば 6 月に滑られるスロープがいくらでもあるのではなかろうかと、佐藤鐵郎 OB 達が黒岳から旭岳へと物色して歩いたのだった。それは 1955 年のことだった。その時に現在の北大スロープもみつけ、雄大なスロープの数々に、きっと驚きかつ満足したのではなかろうかと思うのである。従ってその翌年からさっそく、6 月初旬から下旬にかけての BC 形式のサマースキーが始まることとなった。

現在は湧駒別（現旭岳温泉）までバスで行き、それから金庫岩まで上り BC へと到着とあいなるが、当時は天人峡温泉への入口までしかバスはなかったということだ。また、ロープウェーもあるはずもなく、他にスキーヤーの姿もなく、若き男達の一人舞台だった。今は大学をまとめて 1 週間サボルことは至難の技に近づきつつあるので、旭岳盤の沢遭難後は、全員そろって 6 月初旬の大学祭の休みを利用して入山しているが、以前には、山を降りないで 2 週間もサマースキーに入りっぱなしという猛者もいた。つまり初旬から下旬にかけて、暇な 1 週間をみつけて入山するというパターンだったので、暇な人（もしくはスキーに情熱を傾ける人というべきか）は一つのパーティーに参加して他の連中が下山すると次に上ってくるパーティーに再び合流してまた楽しむということが可能だったのである。

さらに 20 年前となると、今とは装備も格段の差があって当然なのであるが、飯は焚火と飯合で作っていたという話を聞くと、その頃の優雅さを思ってしまう。今なら BC 付近の自然を傷めず大切にしようという意識が強いのでゴミさえも残さないのだから、人が多くなり開けてしまった大雪をしみじみと思う。

今、どのようなスロープを滑っているかは、ケレンデ紹介に詳しいのでそれを読んで欲しいのだが、いつ頃からこのように連日遠征に明け暮れるようになったのだろう。始まった当初はせいぜい 1 日北鎮や安足間へと出かけるくらいで、あとは BC 周辺が主であった。ハタコロは在田 OB が正月山行に行った時に畠 啓視（1968 理 化学）さんがあの上から滑り落ちたので、ハタコロと命名されたし、チベトンはチ

ベット人とあだ名された川原田義彦さん(1966農 林学)が落ちたからチベトンなのである。アパッチはその岩の上で雄叫を上げた柳生さんの姿がアパッチのようだったからアパッチであり、オングル島はちょうど南極観測に日本隊が行った年だったので、オングル島なのである。そんな意味のあるスロープをあの素晴しい6月の陽差しの中で渡り歩く時の楽しさはいいものだ。「今日の予定は北斜面からピウケナイ、ハタコロ、リクマン、白鳥千鳥、ムシの沢と行ってチベトン経由で帰って来て、最後はメダカを滑ってBCで。」とリーダーが言うと自然にワクワクとしてくるものである。

サマースキーは何も大雪だけでなく日高のカールでのサマースキーも面白いだろうし、旭岳周辺以外の中央高地のサマースキーもあって不思議はない。だから遭難後、落ちついてくるにしたがって再びそんなサマースキーが出てくるかもしれないけど、現在のサマースキーの形式は当分変らないだろう。

20年も前に、6月にスキーをするということは気違いあつかいされたと言うけれど、今だって、7月になっても8月になってもスキーを楽しみたいと思う人がいて、真夏の街をスキーをかついで歩く時に彼らは内心優越感と自己満足にひたっていることだろうし、沢を遡行してからスキーをやろうとする人にはスキーへの意地を感ずるのである。本当に幸なことだと思ってしまう。

(『むいね』第16号、特集「サマースキー」に加筆)

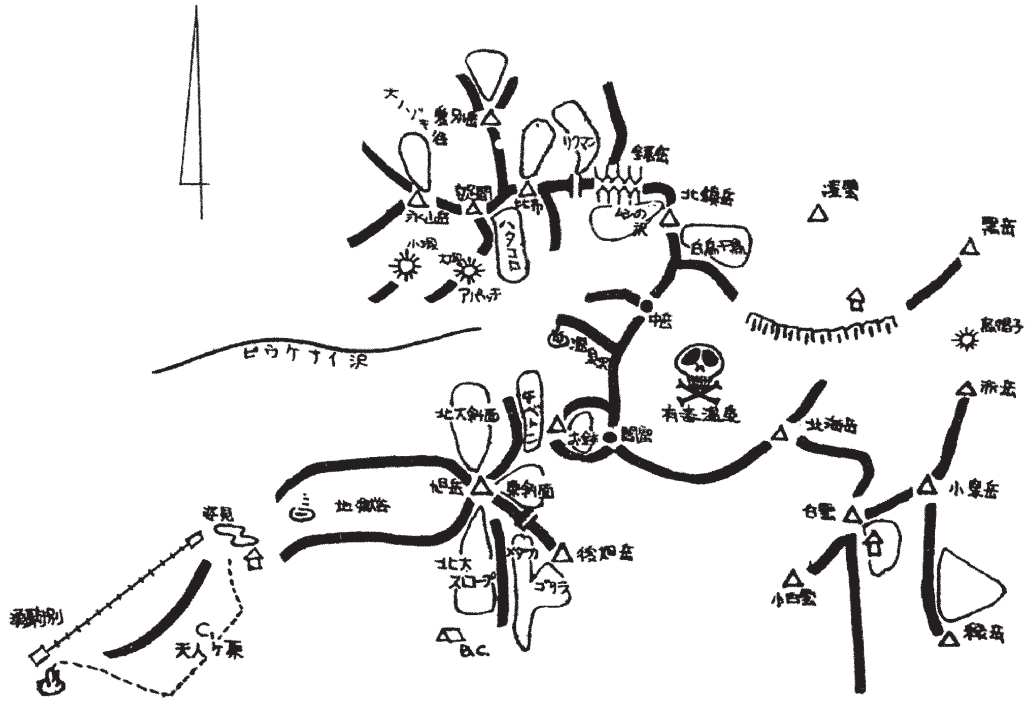


図 7-4-1　サマースキーのゲレンデ概念図

5 「有史以前」の山スキー部

刈谷　純一（1961 文 社会）

年史編集委員会に参加してみると、年表の開始時期が「水谷先生が部長になった時期から」となっている。つまり山スキー部創立以降だ。1957（昭和 32）年、青山温泉不老閣でのニセコ合宿で、向井Ｌ率いる第１班メンバーには、まだ部長でなかった水谷先生と私も含まれていた。昆布で列車を降りて宿舎まではバスだったが、「昨年までは馬橇だったんだぞ」と先輩に言われた。その「有史以前」つまり山スキー部創立以前、北大スキー部山班時代の部員活動は如何なるものだったかを年史の末端に残したい。

当時、無意根には、よく登った。小屋番のほかに流し台を交代で背負って運んだりした。ボロ体育館で荷分けし、北大を出ると、当時、JR はガードでなく「岡橋」と呼ばれるアーチ型の橋を人間の方が登って渡った。アーチの頂上に達すると、欄干にキスリングを載せて休んだ。それでも「定山渓鉄道」があって、豊平駅始発だったのが札幌駅まで乗り入れたので、われわれの時代から楽になった。私は小屋までしか登っていないのを含め在学中に 20 回登り、その 20 回目の下山中、恵迪寮の仲間が骨折し、雪洞一泊のはめに。翌朝、私一人で定山渓営林署まで下り救助を依頼。当時は救急車など少なく署員二人がソリを引いて一緒に登ってくれた。下界まで下ろし、手配してくれたオート三輪の荷台に載せて北大病院へ。本人は荷台での寒風など意に介さなかったが、清潔なパンツがなかったので赤い紐のふんどし姿で、看護婦に脱がされたのが最大の恥ずかしさだったと語っていた。退院しても寮の和式トイレにしゃがめないので私がリンゴ箱に穴を空けて洋式にしてやった。

恵迪寮は一部「開拓の村」に保存されているが、名物トイレは保存されていない。壁一面に高尚な？落書きが施され、ベンテツ（便所哲学）と呼ばれていた。例えば「ニュートンはクソの落下に気づかず」とあり、後に別人が「あれは落下ではなく発射である」と記入するといった按配だった。

無意根めざして定山渓に着くと、荷物を背負って薄別までが大変だった。現在の道路より



写真 7-5-1
無意根山の大斜面を登る（1958 年 5 月ゴールデンウィーク無意根合宿）



写真 7-5-2
無意根山頂にて（1958 年 5 月ゴールデンウィーク無意根合宿）
前列右から、桜庭慎吾（3、競技班）、三崎　勝（2）、轟　明（2）、小松　弘（3）、阿部孝夫（2）、渡辺節夫（2）。後列右から、刈谷純一（3）、若林隆三（1）、菅田　稔（1）、塘　忠夫（1）、南部敏明（3）、高倉　稔（1）、中村晃忠（1）、下戸米啓介（2）、戸沼平八（3）

山腹を曲がりくねっており、砂利道を歩くと薄別に着いたときには登山が半分終わったような気がした。ちなみに中山峠までずっと未舗装だった。

当時の登山道路は2年前(1954年)の洞爺丸台風の傷跡生々しく、道を跨いで倒れた大木を潜ったり跨いだりだった。登山道わきに土壁かと思うものが立っており、裏に回って見ると倒れた大木の巨大な根だった。

いま蓬莱小屋というバス停風のものが立っており冬は雪に埋もれて見えなくなることもあるところは、当時は小学校の教室二つ分ほどの大きな木材小屋だった。入り口から覗くと中は暗く、入るのは気持ち悪かった。当時、高倉君の遺体が白水沢で発見され、小松氏に連れられ荷物探しに行ったところ、蓬莱小屋の入口にスキーが立掛けられキスリングの上には地図が広げられていた。今でも呆然と立ち尽くすだけの心境だ。

無意根の冬季登山は当時、カンダハーにアザラシのシールだった。しかし5月の連休だけは、なぜかゴム長靴でスキーを担いで登るのが常識だった。小屋の70年祭に招かれたときには、あわててビニ長靴を買った。

小屋での食事は「ゲチョライス」が多く、大なべの湯に各自持参の米、ひじき、野菜などを放り込んだ。固形スープの元は発売されていた。汚い話をしながら食事をとるのが普通で、不足気味の食料を自分だけたくさん食べる冗談だった。小屋前の川にはザリガニがいて、各自採ってきたのを大型ストーブに乗せ、一番遠くまで行って死ぬのを競い、最も手前で死んだ者は定山渓まで酒を買いに行くというのも本当にあった。

酒を飲みながらの先輩の話には怪しいものが多く、例えば「空沼の小屋もわれわれが管理していたが、小屋番をしていると前の沼から火の玉がゆらゆら飛んで入ってくる。そんなバカなと大勢で泊まりに行ったが、火の玉が出た。気持ち悪いので山岳部にやった」とか「無意根で一人小屋番をしていた夜、自殺未遂の女が戸を開けて倒れこんで来た」などだ。

ニセコ合宿は競技班も一緒だったので、彼らの滑りを見ながら水谷先生がわれわれに解説してくれた。また後にスキー部長になる奈良岡先生は教養の体育の先生で、私がバイトで出席日数が足りなくなったとき「スキー部山班です」と言うと「そんなら単位を与える」と言ってくれた。

ちなみにバイトは寮に直接募集が来た。夜になると、玄関の守衛室から募集の放送が流れる。私の最初のバイトは測量助手で、寮の近く、北18条の電停から北東地域。遥かかなたまで畑と原野だった。日当は封筒書きなど事務系が400円、肉体労働が500円程度で、寮費は3食付月額4800円。寮の売店で牛乳10円、コッペパン10円、タバコのばら売りをしていた。



『むいね』第15号より

6　無意根小屋温泉事始め

倉持　寿夫（1965 農 林学）

シルバーロッジ建設の始まった年（1961 年）の夏、ムイネで探鉱調査のアルバイトがあった。ロッジの建設資金のため、部員全員が十名程づつ交替で鉱山会社の技師の手伝いをした。詳細は『北大山スキー部部報』（1968）の中村晃忠（1962 薬）先輩の報告文に譲るが、あの時の第一陣として参加した。

薄別からの荷揚げで驚いた。米袋数袋、味噌醤油の類はもちろんのこと、丸ごとの塩鮭、缶詰多数、漬物類と、これからの我々の三食が十分保証されている模様なのである。さすがは大鉱山会社の調査と思った。もちろん測量器具や、あの我々をしごいてくれた大鎌もあった。

特筆すべきは、風呂桶用のドラムカンとその底に沈める丸い板。これを担いだのは一年目。背負子もなしにゴロリと背中にくくり付けられ、見返り付近で難渋しているところ、いきなり夕立と至近距離の落雷。背中のものを放り出し、あわてふためいて小屋に駆け込んできた。

すでに到着していた我々一同は大笑い。雨も上がり、二往復程で荷揚げも終わり、ドラムカンも無事回収。小屋下の沢岸で風呂場の造成。薪の中から岳樺の太いのを選び、二本並べ、間で火を燃やせるようにして、その上にドラムカンを据え付ける。バケツリレーで水をはり、早速風呂炊き。一番風呂は雇主の鉱山技師、そして助手、そのあと我々二年目、小屋の中からフルチンタオルで長靴つっかけ、ワッと飛び出ししていく。藪蚊とブヨの襲撃をかわし、ドラムカンの中に浮いている板と共に首まで沈む。ドラムカンをすっぽり包むように下から煙がたちこめて、やけにけむたい。洗い場は蚊とブヨの格好の餌食とされるので、洗ってなどいられない。煙の風呂を退却！頃合を見て再びワッと掛け声を発し、またまたフルチンタオルで小屋の中に逃げ込む始末、ムイネ温泉事始めである（**写真 7-6-1**）。翌日からあのしごきの熊笹刈りが始まった。

（『北大山とスキーの会会報』第 14 号（1989）「思い出すままに」より一部転載）

桜間雄蔵（1963 工 土）の写真アルバムに下図

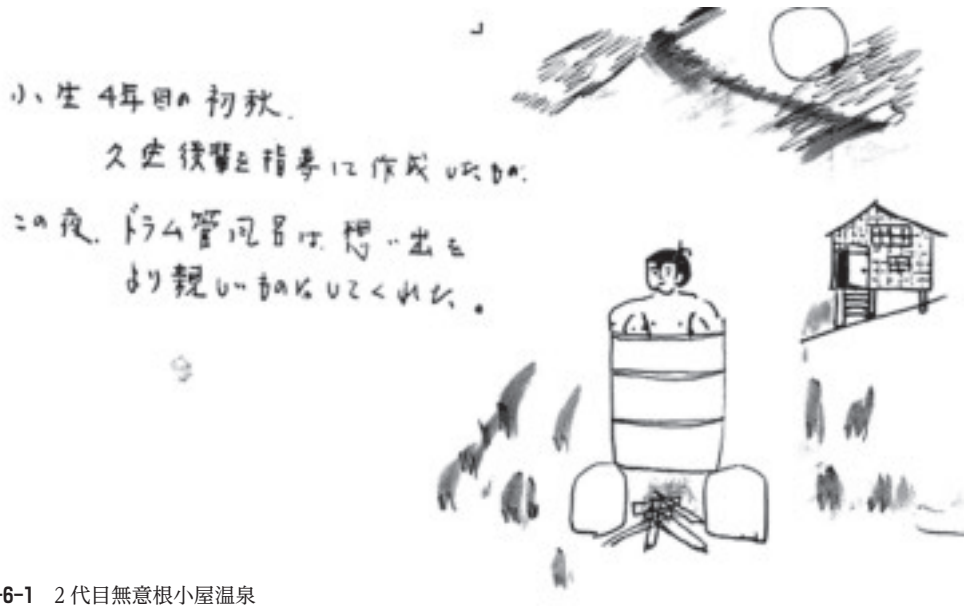


図 7-6-1　2 代目無意根小屋温泉

の書き込みがある。これが二代目の無意根小屋温泉であろう(図 7-6-1)。

それからずーっと下がって、小河健伸(1997 農　農工)のアルバムの写真。2001 年 10 月の小屋祭りとある。これがおそらく三代目の無意根小屋温泉と思われる。二代目と三代目の間が 37 年。もしかしたらこの間に何代か挟まれるのかもしれないが、今のところ確かな資料はこれだけである。今後何方かの記憶を呼び覚まして、無意根小屋温泉の歴史をさらに充実されるきっかけとなれば幸いである。

いずれにしても、風呂好き日本人。ここまでやるか。そのうちボーリング機械を運び上げ、本物の温泉掘り当てよう、などと考える輩が現れかねないと思うのだが・・・・・果たして。

2001(H13)年秋の小屋祭りでドラム缶五右衛門風呂

2001 年秋の小屋祭りで、ドラム缶を小屋まで上げ、お風呂に入るという愉快な企画が久方ぶりに行なわれた。月も見え、湯加減も最高で、とても気持ち良かったとのことである(写真 7-6-2、3、4)。

(『むいね』第 40 号(2002)より)



写真 7-6-1　無意根小屋のドラム缶温泉。写真はボケている



写真 7-6-2　ドラム缶が小屋に到着



写真 7-6-3　ドラム缶風呂のセッティング



写真 7-6-4　至福のひととき

7　山スキー部のスキー基礎指導要領試案とスキー検定会

在田　一則（1965 理 地鉱）

1961 年 6 月、それまで疎遠であったスキー部の山班と競技班は話し合いにより、心機一転、再出発しようということで、新生スキー部が誕生した。そして、部員には、基礎スキーをマスターするとともにスキーのオール・ラウンダーになることが課せられた。そのため、全日本スキー連盟(JSA)のスキー検定 2 級に合格することが求められ、それに合格しないと、山班では山行に行けず、競技班はスキー大会に出場できないことになった。

それを受けて、山班では、1962 年 1 月 3～5 日にほぼ全員が完成したばかりのシルバーロッジの寺口山(この辺りはかつての北大スキー部のシルバースロープ)で西野睦夫 OB ほか 2 名の全日本スキー連盟指導員の指導を受け、最終日にはスキー検定を受けた(写真 1-4-5)。結果は、全員無事に 1 級(3 名)と 2 級にパスした。その時受講できなかった何人かは、各自で検定を受けたように記憶する。

スキー部はその後、第 1 章 4.3 にあるように、1963 年 3 月に山スキー部と競技スキー部とに分離・独立した。山スキー部発足後は、懸案の富良野岳 - ウペペサンケ山縦走計画が具体的に動き出し、スキーのオール・ラウンダーたれということは言われていたが、JSA スキー検定 2 級合格は問題にされなくなった。

しかし、北大入学前にはスキー経験がほとんどないものが多い山スキー部にあっては、とくに新人部員にとっては、スキー山行に適したスキー技術の基礎を早急に習得するために JSA スキー講習のような機会が必要なことは明らかであった。そこで、54 シーズン(1965 年 10 月～)に入ってから山に強い山スキー部独自のスキー技術の講習を目指して下記のような指導要領試案を作成した。試案は部員には配布したが、それに基づいた講習会が実際にどの程度行われたかははっきりしない。

山スキー部独自のスキー検定会は、1966 年 1 月 23 日に手稲山において行った。種目は、直滑降・斜滑降および横滑り・シュテムクリスチャニアのほか、山スキー部らしくステップターン・ジャンプ・深雪回転滑降を加えた。

結果は表 7-7-1 のとおりである。点数は 10 点満点であるが、深雪回転滑降は 20 点とした。採点者(OB)が何人だったかは記憶にないが、点数が端数になっているところをみると、複数だったのだろう。平均点はどの種目も 50～60％程度である。平均総点数は上級生の方がよく、その学年間の差も上級生ほど大きくなっており、採点の妥当性がうかがわれる。また、各種目とも、各学年内における点数のバラツキが高学年ほど小さくなる傾向がある。これは、本州からのスキーの初心者がそれを自覚して練習に努力した結果と思われる。

残念ながら、この山スキー部のスキー講習会や検定会はこの 1 回で終わってしまった。

概要

Stage I　基礎　(バランスの取り方、スピード感に慣れる)
- Step 1　スキー着脱
- Step 2　平地滑走、登行(二段滑走、三段滑走、パスカング、階段登行、開脚登行、ジグザクターン登行)
- Step 3　直滑降、ステップターン、スケーティング(とくに凹凸地、小さいジャンプでの)

Stage II　基礎(回転、谷足荷重、体重移動、踵の押出し(大腿筋の捻りおよび上体の逆捻り)、立ち上がり、遠心力)

表 7-7-1　山スキー部第 1 回スキー検定会(1966 年 1 月 23 日、手稲山)の成績表

1966 年 1 月 23 日、手稲山

学年	氏名	直滑降	斜滑降・横滑り	ステップターン	シュテムクリスチャニア	ジャンプ	深雪回転滑降	総点数	級
1 年目	伊藤	6.3	5.7	4.3	5.7	5.7	10.0	37.7	3
	上野	4.7	4.7	4.0	5.3	4.0	10.0	32.7	4
	梅沢	7.3	6.7	5.3	7.7	6.0	13.7	46.7	2
	大田	7.0	5.7	6.0	6.7	6.0	14.7	46.1	2
	川口	4.7	6.7	4.3	5.3	4.3	7.7	33.0	4
	神田	5.0	5.0	3.7	4.3	4.0	9.7	31.7	4
	篠田	4.0	4.3	3.0	3.3	3.0	5.7	23.3	4
	先名	7.0	6.3	6.0	5.7	6.7	10.0	41.7	3
	津曲	5.0	4.0	4.3	4.3	4.3	8.0	30.0	4
	平均	5.6	5.5	4.4	5.4	4.9	9.9	35.7	
2 年目	飯豊	6.0	7.0	5.3	6.7	4.3	7.7	37.0	3
	上ヶ島	6.3	6.7	5.3	6.3	5.0	12.0	41.6	3
	田上	6.3	6.0	5.7	6.7	4.7	14.7	44.1	3
	藤永	5.3	4.7	5.7	5.0	5.7	9.3	35.7	3
	畠	4.3	3.7	4.3	4.0	4.7	7.0	28.0	4
	柳生	4.7	6.3	5.0	4.7	5.0	10.3	36.0	3
	横山	6.7	5.0	6.0	6.0	5.7	15.0	44.4	3
	平均	5.7	5.6	5.3	5.6	5.0	10.8	38.0	
3 年目	北村	6.0	5.7	4.3	5.3	3.7	13.0	38.0	3
	宮崎	6.7	6.7	6.0	7.0	6.3	13.0	45.7	2
	平均	6.4	6.2	5.2	6.2	5.0	13.0	42.0	
4 年目	大谷	7.0	8.0	7.0	7.0	7.3	11.7	48.0	2
	岡田	6.7	7.3	7.7	7.0	8.0	11.7	48.4	2
	岡本	7.3	7.7	7.3	7.7	7.3	15.7	53.0	1
	川原田	7.0	7.0	6.0	5.0	7.0	11.3	43.3	3
	佐藤	7.7	7.0	5.3	7.7	5.7	16.0	49.4	2
	野原	7.7	6.7	8.3	7.7	8.3	15.7	54.4	1
	平均	7.2	7.3	6.9	7.0	7.3	13.7	49.4	
平均		6.1	6.0	5.3	5.9	5.5	11.4	40.2	

山スキー部　スキー基礎指導要領試案

(1965 年 11 月 17 日)

Step 4　斜滑降、山回り christiania、横滑り
Step 5　Pflug fahren, Pflug wogen
Step 6　Stemm wogen → Stemm christiania

Stage III　応用(Parallel、遠心力の利用、リズム)
Step 7　Parallel Christiania
Step 8　Wedeln

(補足)
1)Stage II に大きいジャンプを加える。
2)各 Step 毎に踏み固められた斜面で一応マスターしたら、深雪にて行う。
3)1 年目の 1 月中に Stage II まで習得することを目標とする。
4)1 月 15 日に Sage II までの検定を行う。
5)Stage III は一応 3、4 年目を対象としたものである。しかし、出来るものは、1、2 年目であっても Stage II をマスターしたものは、その限りにあらず。

詳細

Stage I　基礎　(バランスの取り方、スピード感に慣れる)

Step 1　スキー着脱、シールの着脱

(1)傾斜面でスキーを履くときは、まず足場を作り、片方のスキーをながれないようにしてから、必ず谷スキーから履く。脱ぐとき

は山スキーから。
(2)シールは切れ易いものであるから常に点検する。スキーを履いたまま早く着脱できるように心掛ける。

Step 2　平地滑走、登行、ターン

(a)平地滑走(通常の歩行、推進滑走、二段(三段)滑走、パスカング)
(b)登行(直登行、階段登行、斜階段登行、開脚登行、シールをつけた直登行、シールをつけたジグザグ登行、シールをつけた traverse)
(c)ターン　各種

(補足)転倒の仕方
(1)力まずに体全体で倒れる。膝は絶対についてはいけない。
(2)膝や腕には力をいれず、軽く伸ばすようにする。
(3)スキーは雪面にひっかからないようにする。
(4)停止するまで不用意に体を動かしたり、捻ったりしてはいけない。
(5)真ん前、真後ろに転ばないように。斜後方、横やや後方が望ましい。
(6)起き上がった後には、身体や所持品等を充分に点検する(スキーが折れたのを知らずに滑ったり、ピッケルを落としたまま滑るものがいる。)

Step 3　直滑降(小さい jump を含む)スケーティング

(a)直滑降

基本姿勢

(1)両靴、両膝を軽く合わせ、楽な姿勢でまっすぐに立つ。体重は両足に均等にかける。
(2)そのまま両足首を曲げて、両膝を前に押し出す。体重は指の付け根あたりにかかるようにする。
(3)腕、肘は力を抜いて自然にかまえる。

注意

(1)深雪では、足を前後にずらし、体重を後ろ足に多くかけてルックラーゲ気味になるとよい。
(2)重荷の時には、安定のために足を開くのもやむを得ない。
(3)腰を後に引いてはいけない(いわゆるへっぴり腰)。
(4)ストックを前へ出してはいけない。
(5)初心者や急斜面での滑降では、体が遅れがちなので、やや前傾したほうがよい。
(6)凹凸の斜面では、図のように、膝でショックを吸収する。すなわち、凸では膝を曲げ、凹では伸ばして、斜面を踏みつけるようにする。膝を足首はやわらかく、スキーは斜面をなめるが如く。
(7)膝を曲げ過ぎてはいけない。(腰を落してはいけない)。

(b)スケーティング・ステップターン

(1)体重の移動を完全に行い、初めのうちは片スキーにできるだけ長い間乗るように注意する。
(2)足の蹴る方向はスキーに直角に。
(3)滑り出すスキーは、初め外エッジ気味にしたほうがうまくいく。

Stage II　基礎(回転、谷足荷重、体重移動、踵の押出し、立ち上がり、遠心力)

Step 4　斜滑降、横滑り、山回り christiania

(a)斜滑降

基本姿勢

(1)山足を半歩前に出し、直滑降と同じ姿勢を取る。
(2)そのまま、上体を谷側へ向け、谷足の膝は山足膝の内側後より山側前方押し付ける。(これにより谷スキーの内エッジが有効に働く)。
(3)体重は、通常、谷足が 7~8 に対し、山足 3~2 の割合で両足の指の付け根にかかる。

注意

(1)体重の分配は、急斜面あるいは硬雪であるほど谷足に十分にかけ、緩斜面あるいは軟雪であるほど、両者の差は少なくて

よい。実際には、その状態(疲れた時など)により、山足荷重になりがちである。
(2)練習中は極端なほど谷側の肩を引いたほうがよい。
(3)spur は常に目標に向って一直線を描くように。
(4)その他は、直滑降の場合と同じ。
(5)谷肩は山肩よりさがる。
(6)外向、谷足荷重が基本である。

練習

(1)片足スキー。(谷足荷重の練習)
(2)ストックを両脇から背中に通しての滑降(外向姿勢の練習)

(b)横滑り

基本姿勢

(1)斜滑降と同じで、外向を強調する。
(2)谷膝の押しつけを緩めて、エッジをはずす。
(3)上体の捻り加減により、スキーが常に最大傾斜線に直角であるように調節する。
(4)体重はほとんど谷スキーにかける。

注意

(1)初心者は緩斜面でストックを使ってやるとよい。
(2)両スキーは常に平行にピタリとつける。

練習

(1)エッヂングの加減によりスピードを変化させる横滑り。
(2)斜滑降と横滑りの combination。
(3)斜前方への横滑り(エッヂを緩めると同時に膝を曲げて、体を沈み込み、大腿筋を使って踵を押し出す。

(c)山回り christiania

(1)大腿筋の捻りと立ち上がりによる踵の押出しによって回転する。
(2)立ち上がりと同時に上体を回転と逆方向に捻って踵の押出しを助ける。
(3)踵の押出しの方向はスキーに直角でなければならない。
(4)初心者は踵の押出しのキッカケとして立ち上がりによる抜重を利用してもよい。しかし、できるだけ立ち上がりは使わないほうがよい。慣れるにしたがい、大腿筋の捻りによるのが望ましい。
(5)体重は谷スキーに多くかけ、谷足踵の押出しを主体として回転する。
(6)谷足荷重をさけるため、より外向前傾を強調する。
(7)外向前傾の姿勢は停止の後までそのままに保つ。
(8)練習には地形の利用を考える。

Step 5　Pflug fahren, Pflug wogen

(a)Pflug fahren

基本姿勢

(1)スキー先がぶつからない程度に、両スキーの先を近づけ、テールを開く。
(2)足首と膝は直滑降程度と同程度に前に押出し、常に柔軟に保つ。
(3)体重は両足全体に均等にかけ、スキーは斜面にフラットにおく。

注意

(1)上体を前のめりにしたり、腰を落したり、あるいは後に出したりしてはいけない。
(2)外エッヂは絶対に効かしてはいかない。
(3)足を突っ張ったり、開き過ぎてはいけない。

練習

(1)Pflug fahren 中にテールの開きを大きくしたり、小さくしたりする。この場合、腰の位置を常に斜面と平行に保つよう、膝を足首で調節する。
(2)直滑降と Pflug fahren の combination。

(b)Pflug wogen

基本姿勢(左回りの場合)

(1)Pflug fahren の姿勢から、右肩を後に引きと同時に、腰もやや右へ捻る。腰から下は変わらない。
(2)(1)の姿勢から、右膝を内側へ折り曲げるようにして、踵を押し出し、体重を右ス

キーに移動する。(ここで回転が始る)。
(3)(2)の踵の押し出しの際に、右スキーの内エッヂを軽く効かして、スキーがずれないようにきれいにクルリと回る。
(4)回転中は、上体を腕はそのまま保つ。
(5)回りきってから、上体と腕を大きく反対に回して、(1)と逆の姿勢になる。以下同じ。

注意

(1)上記(2)の踵の押し出しの際に、右足を突っ張って押し出すのではなく、体重の移動によって押し出すこと。そのためにも初心者は上体のくの字形をはっきり表現したほうがよい。
(2)また、荷重のほとんどなくなった左足を突っ張らず、膝を柔軟に保ち、右スキーの回転を妨げてはならない。また、左スキーが外エッヂにならないように注意する。

Step 6　Stem wogen, Stem christiania

(a) Stem wogen

基本姿勢(左回りの場合)

(1)斜滑降の姿勢
(2)(1)の姿勢から、Pflug fahren の時のように、右腕と右肩を後に引いて上体を捻り、同時に山スキーのテールを開く。この時、腰もやや捻る。
(3)(1)の姿勢のまま、右スキー(谷スキー)のエッヂをゆるめて、両スキーを逆Ｖ字形のまま、最大傾斜線方向に滑らす。この時まで谷足荷重である。
(4)引いている右肩をグッと下げて(すなわち、体重を左スキーから右スキーに移して)右踵(右スキーテール)を押し出す。この時、右膝の前屈ご右足首の曲げを充分にして、右スキーのエッヂをよく効かす。
(5)外向と谷足荷重のまま、山スキー(左スキー)をゆっくりと谷スキーに引きつけて閉じ、斜滑降に移る。

注意

(1)上記(1)での山スキー(右スキー)の開き出しは、体重が充分に谷スキー(左スキー)に乗っていないとうまくいかない。
(2)上記(2)において、左スキーのエッヂをゆるめ、両スキーが最大傾斜線方向に向くまで、体重は左スキーに載っていること。体重移動はリズミカルにはっきりと行う。
(3)Pflug fahren 同様、抜重後の左足は柔軟に保ち、突っ張ってはいけない。
(4)体重移動の時に示した、腰の捻り、右肩、右腕の後への引き、右肩の下げは回転完了後の斜滑降にそのまま引き継ぐ。
(5)回転後の山スキーの引き付けの時、外エッヂ気味にした方がスムースにいく。これは谷スキー荷重のままゆっくりとおこなうのがよい。

練習

山スキー開き出しのため、斜滑降と開き出しの combination を行う。

Stage III　応用(Parallel、遠心力の利用、リズム)　《以下、略》

Step 7　Parallel christiania

Step 8　Wedeln



『こなゆき』第 26 号より

8　山スキー部員数の推移

田上省一（1968 農 林学）、片倉　賢（1977 獣医）

第 50 シーズン(1961 年 10 月開始)から第 100 シーズン(2012 年 9 月終了)までの山スキー部員数について、『むいね』各号に記載されている部員名簿をもとに、その推移を表 7-8-1 と図 7-8-1 に示した。創部の第 50 シーズンは総勢 77 名で始まった。翌年は 58 名、その翌年は 69 名と大所帯であったが、その後第 63 シーズンまでは 30~40 人の間を推移した。旭岳盤の沢遭難後の第 64 シーズンは 25 名であり、初めて 30 名を下回った。第 65 シーズンからは再び 30 名をほぼキープしたが、第 87 シーズンから部員数が減少し、10~20 名を推移した。学年があがるにつれて部員数が減るため、一定の部員数の維持には 1 年生の入部者数が重要であることがわかる。第 86~97 シーズンの 12 年間は 1 年目の数が連続して 10 名未満であった。上級生が少なくなると、下級生も少なくなるという悪循環が続き、第 96 シーズンについに 10 人にまで減ってしまった。部の存続が心配されたため(体育会認定団体には 10 名の部員数が必要)、現役と OB とが共同して新人勧誘プロジェクトを立ち上げた結果、部員数は回復し、現在に至っている。なお、第 98 と 99 シーズンは上級生が極端に少なかったため、1 年生の入部者数を 10 名までに限定した。この間の女子部員 15 名であり、第 93 と 99 シーズンは女子部員が主任を務めた。(人数はシーズン開始時における部員数であり、卒部員数とは必ずしも一致していない。)

表 7-8-1　山スキー部部員数の変遷

シーズン	年	部長	主任	4年目	3年目	2年目	1年目	総数
50	1961.10-1962.9	水谷　寛	谷口　尚弘	14	19	22	22	77
51	1962.10-1963.9		永野　正幸	11	16	12	19	58
52	1963.10-1964.9		小林　暁正	16	10	20	23	69
53	1964.10-1965.9		小池　宏二	9	12	11	10	42
54	1965.10-1966.9		宮崎　敏	12	6	8	8	34
55	1966.10-1967.9		飯豊　利秋	4	8	8	16	36
56	1967.10-1968.9		梅沢　俊	7	8	8	17	40
57	1968.10-1969.9		下岡　健蔵	6	6	16	20	48
58	1969.10-1970.9		飯田　修	5	9	16	13	43
59	1970.10-1981.9		中井　強	7	15	7	6	35
60	1971.10-1972.9		後藤　次郎	12	6	6	17	41
61	1972.10-1973.9		菅野　健身	5	6	13	12	36
62	1973.10-1974.9		岩瀬　隆則	6	11	8	10	35
63	1974.10-1975.9		森田　明	9	5	6	11	31
64	1975.10-1976.9		片倉　賢	4	6	9	6	25
65	1976.10-1977.9	中島　巌	椿谷　茂	6	9	6	14	35
66	1977.10-1978.9		不破　秀実	9	6	11	7	33
67	1978.10-1979.9		三國　俊亮	5	11	7	12	35
68	1979.10-1980.9		小林　伸一	7	10	8	9	34
69	1980.10-1981.9		三宅信一郎	7	10	8	7	32
70	1981.10-1982.9	吉岡　義彦	小塚　毅	9	7	6	9	31
71	1982.10-1983.9		吉田　美樹	7	6	8	9	30
72	1983.10-1984.9		松本　貴之	6	9	6	7	28
73	1984.10-1985.9		田川　丹	9	6	6	10	31
74	1985.10-1986.9		上野　勝利	6	6	10	7	29
75	1986.10-1987.9	徳田　昌生	秋本　恒志	5	9	6	9	29
76	1987.10-1988.9		杉山　裕之	9	5	9	12	35
77	1988.10-1989.9		粟崎　健	5	9	12	10	36
78	1989.10-1900.9		吉村　昌浩	9	9	8	7	33
79	1900.10-1982.9		斉藤　正美	7	8	5	10	30
80	1991.10-1992.9		渡部　哲哉	8	4	10	13	35
81	1992.10-1993.9	在田　一則	赤木　憲二	4	9	12	9	34
82	1993.10-1994.9		吉田　寛	8	12	8	8	36
83	1994.10-1995.9		中村　平	9	6	8	11	34
84	1995.10-1996.9		入村　貴行	5	7	12	10	34
85	1996.10-1997.9		小河　健伸	4	10	10	10	34
86	1997.10-1998.9		伴　現太	10	6	5	9	30
87	1998.10-1999.9	藤永　徹	佐田　悠輔	5	4	5	7	21
88	1999.10-2000.9		奈良　靖	4	5	6	5	20
89	2000.10-1992.9		今　春如	4	6	4	1	15
90	2001.10-2002.9		山口　達	6	3	2	6	17
91	2002.10-2003.9		松田　博行	3	2	6	5	16
92	2003.10-2004.9		伊藤　紀貴	2	3	5	5	15
93	2004.10-2005.9	片倉　賢	吉開友羽子	3	3	6	4	16
94	2005.10-2006.9		八木　寛陽	3	3	4	5	15
95	2006.10-2007.9		関　将一	2	3	4	3	12
96	2007.10-2008.9		森嶋　大地	1	4	3	2	10
97	2008.10-2009.9		早川　航	4	1	2	5	12
98	2009.10-2010.9		小倉　守彦(早川、西)	1	1	6	10	18
99	2010.10-2011.9		西　達也	1	4	10	10	25
100	2011.10-2012.9		奥山　和花	4	7	8	13	32

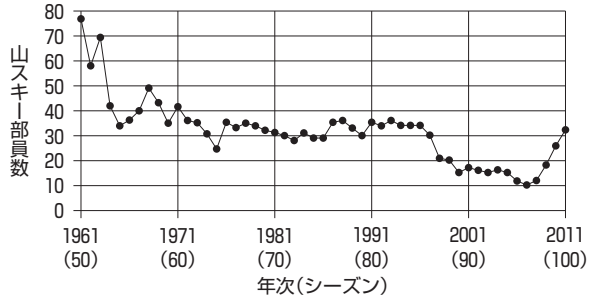


図 7-8-1　山スキー部部員数の変化(第 50 シーズン~第 100 シーズン)

第 8 章

記録・資料編



北大 OB スキークラブ会報第 13 号より

1　北大スキー部山班および山スキー部の活動記録（山行・合宿など）

北海道大学スキー部の活動記録は、1912（明治45）年～1926年は北海道帝国大学文部会スキー部創立拾五年記念（1926）、1927年～1931年は北大スキー部部報（1931）、1932年～1933年は北大スキー部部報2（1933）、1934年～1935年は北大スキー部部報3（1935）、1936年～1941年は北大スキー班班報（1941）に、それぞれ年報として記載されている。しかし、戦争中の記録はない。一方北大スキー部のOB会である北大OBスキークラブ（1931年設立）は1937年度から会報を刊行しており、競技班の各種競技会での記録とともに山班の活動記録も完全とは言えないが記載されている。

ここでは、戦中戦後の混乱を経て、部活動が正常化してきた1948年（第37シーズン）からのスキー部山班の活動記録（山行・合宿記録）、また51シーズン中途（1963年4月）から始まる北大山スキー部の活動記録を示す。

なお、各シーズンの開始は第43シーズンまでは4月であるが、第44シーズンからは10月である。

37 season　1948（昭和23）年4月～1949（昭和24）年3月

部長：小川玄一／副部長：前野正久
主任：盛合力（法2）／山係長：水沢和久（工2）

4/9-10	無意根スキー	
4/23-24	芦別岳	
5/21-23	冷水小屋薪運び	
5/28-29	無意根小屋薪運び	
6/15	山班競技班合同会議（宮の森合宿所）	
6/25	無意根（小池君のケルンを建立）	
10/15-16	パラダイス小屋修理	
10/29-30	無意根小屋薪運び	
11/20-21	無意根初滑り	学部部員のみ参加
12/20-25	ニセコ合宿（青山温泉不老閣）	新部長小川先生ほか36名、3年目は新見温泉行
1/2-5	無意根合宿	22名、4日昼大半が下山、残った8名がスキー練習中、小池が雪下の木株にとばされ、樹木に激突し人事不省となる。人工呼吸せるも不帰の人となる。
1/13	奥手稲山	
1/30-31	奥手稲山	
2/1-2	無意根小屋（修理の下調査）	
2/14-18	無意根小屋修理（宮様宿泊に備える）	班員12名、大工1名
2/28-3/2	高松宮、三笠宮無意根登山	大野先生、田村OB、木田OB、西野OB、和田OB、水沢（工2）、田村（法2）、須藤（医1）、森本（予3）、高田（予2）、矢崎（予2）、永野（予2）、近藤、小川勝次氏、小島三郎氏、清瀬三郎氏
3/8-11	高松宮、三笠宮ニセコ登山	

38 season　1949（昭和24）年4月～1950（昭和25）年3月

部長：小川玄一／副部長：前野正久
主任：水沢和久（工3）／山係長：田村鉄彌（法3）／主将：盛合力（法3）／会計：石川彰（理2）／記録：安味貞昭（理2）・森本光彦（工1）／マネージャー：菊地哲（農1）

4/9-10	無意根スキー	
4/23-24	芦別岳	
5/21-23	冷水小屋薪運び	
5/28-29	無意根小屋薪運び	
6/15	山班競技班合同会議（宮の森合宿所）	
6/25	無意根（小池君のケルンを建立）	
10/15-16	パラダイス小屋修理	
10/29-30	無意根小屋薪運び	
11/25-26	無意根初滑り	
12/23-27	ニセコ合宿（青山温泉不老閣）	
1/3-10	小池氏追悼無意根合宿	
2/20-21	三笠宮空沼岳スキーツアー	大野先生、南波初太郎OB、宮村六郎OB、田村誠一OB、古谷暢博OB、西野一彦OB、和田晴OB、水沢ほか現役
3/20-30	パラダイス合宿	

39 season　1950（昭和25）年4月～1951（昭和26）年3月

部長：小川玄一／副部長：前野正久
主任：菊地哲（農2）／山係長：須藤清二（医3）／主将：安味貞昭（理3）／会計：安味貞昭（理3）・森本光彦（工2）／記録：佐々木禎一（理3）・吉江秀夫（工1）／マネージャー：中島通雄（農2）／パラダイス：進藤忠夫（工2）・矢崎恒（1）・寺田昌一（工1）／無意根：永野拓也（農1）・中村俊彦（新2）・千廣俊幸（農2）／空沼：南一光（工2）・吉江秀夫（工1）／冷水：未定

6/10-11	新入部員歓迎空沼登山	新入部員3名
7/23-27	松山温泉－旭岳－北海岳－白雲岳－烏帽子岳－北鎮岳－比布岳－永山岳－愛別岳－黒岳－層雲峡	9名参加
8/4-6	忍路合宿	
8/28-31	パラダイス小屋修理（屋根）および手稲登山路笹刈り	
10/21-22	パラダイス小屋薪運び	
10/21-22	空沼小屋閉鎖作業	
12/22-27	ニセコ合宿（青山温泉不老閣）	105名参加、大野先生、田村誠一OB、西野一彦OB、和田晴OB、体育の宮崎、山崎両先生
1/4-	小池氏追悼無意根合宿	壁（振り子沢）で雪崩（1名スキーを折る）
1/15	無意根山北壁（振り子沢）で雪崩（約400m、幅100m）	前野副部長ほか15名中14名が埋没、数名が重軽傷
3/20-28	パラダイス合宿（競技班山班合同）	現役15名、西野OB、和田OB、水澤OB

40 season　1951（昭和26）年4月～1952（昭和27）年3月

部長：小川玄一／副部長：前野正久
主任：菊池哲（農3）／山係長：森本光彦（工3）／主将：川島監（2）／会計：中島通雄（農3）・永野拓也（農2）／記録：中島通雄（農3）・高田勝利（工2）／庶務：中島通雄（農3）／パラダイス：放寺爾一（農2）・矢崎恒（工2）／無意根：中村俊彦（工3）／空沼：高田勝利（工2）

6/9-10	新入部員歓迎空沼小屋登山	菊池主任以下参加
7/22-28	襟裳岬黄金道路探勝	永野、河合、中村
8/1-5	忍路合宿	
9/29-30	無意根小屋修理、薪積み	
10/13-14	パラダイス小屋修理、薪積み（ガラス30枚、床板20枚運搬）	大工さんほか6名
12/1-2	無意根初滑り	遠藤、川島、永野、中村、放寺、河合、和田晴OB
12/22-27	ニセコ合宿（青山温泉不老閣）	永野、矢崎、河合、中村、国藤、砂山、中野、北大生8名、一般5名、宮崎教官、田村OB、古谷OB、西野OB、和田OB、大野先生
1/4-7	小池氏追悼OB現役合同無意根合宿	6名
3/17-23	卒業生送別パラダイス合宿	山班、競技班、西野OB、和田OB

41 season　1952（昭和27）年4月～1953（昭和28）年3月

部長：小川玄一／副部長：前野正久
主任：永野拓也（農3）／山係長：矢崎恒（工3）／主将：川島監（農3）／会計：河合秀雄（医3）／記録：中野郁佑（新2）／庶務：砂山尚保（新2）／体育会：織田光二（新2）・中野郁佑（新2）／パラダイス：

4/5-6	無意根スキー納め	森本、遠藤、永野、矢崎、河合
6/7-8	新入部員歓迎空沼小屋登山	永野、矢崎、川島、河合、中野、杉本、石川
8/1-4	忍路合宿	
10/11-12	パラダイス小屋薪積み	
11/1-2	無意根小屋薪積み	
11/1-2	空沼小屋閉鎖作業	
11/22-23	無意根初滑り	永野、松宮、砂山、大友、遠藤、杉本、ほか1名
12/22-26	競技班山班合同円山合宿（ニセコ合宿が中止になった代替え措置）	
1/4-5	小池氏追悼OB現役合同無意根山行	永野、矢崎、中村、和田OB
1/14-15	無意根小屋修繕材料を運搬（ガラス、窓枠、窓板、その他）	部員4名、大工さん
1/24-25	パラダイス薪調査および材料運搬	
3/17-23	パラダイス合宿	21日からは、永野、川島、矢崎、、高田、高輪の卒業生も参加
3/26-31	パラダイス合宿	2年目が主体

42 season　1953（昭和28）年4月～1954（昭和29）年3月

部長：小川玄一／副部長：奈良岡健三
主任：河合秀雄（医4）

4/15-18	パラダイス合宿（競技班山班合同）	
4/26	山小屋管理の相談（3つの山小屋を管理するのは困難。体育会に空沼小屋の管理を依頼することに決定）	
6/13-14	空沼小屋修繕材料を運搬	部員8名と山岳部員との合同でセメント、砂、煙筒、板などを運搬
8/15-17	忍路合宿	現役5名、先輩4名
10/10-11	無意根小屋薪運び	5名
11/1	パラダイス小屋パラダイス小屋薪積み	6名
11/22-23	無意根初滑り	13名、水沢OB、中村OB
12/20-25	パラダイス合宿	6名、OB1名
3/3-5	夕張岳	下岡清昭ほか2名
3/15-18	ニセコ合宿（五色温泉）	河合、砂山、斎藤（英）、川村、渡辺、山岸、櫛田、中村OB、ほか3名

43 season　1954（昭和29）年4月～1955（昭和30）年9月

部長：小川玄一／副部長：奈良岡健三
主任：砂山眞範（4）／山係長：佐藤英之（4）／主将：三浦雄一郎（3）／会計：佐藤鐵郎（3）／記録：佐藤有秀（2）・山岸弘（2）／パラダイス：丹保睦敬（3）／無意根：下岡清昭（3）／空沼：山岸弘（3）／マネージャー：中條憲也（3）／トレーナー：松宮弘幸

4月	パラダイス合宿（山班・競技班合同）	

5/1-3	無意根合宿(山班・競技班合同)、3日に道標設置	
5/3-18	合宿終了後、無意根山－中岳－並河岳－喜茂別岳－長尾山－小屋を縦走	佐藤(英)、三浦、本庄、佐藤(有)、川村
9/25-26	無意根小屋修理(山班・競技班合同)洞爺丸台風に遭遇	砂山、佐藤、三浦ほか現役、出羽さん、部員外など25名
11/23-24	無意根初滑り(山班・競技班合同)	
12/26-30	無意根合宿(山班・競技班合同)	
1月初旬	パラダイス小屋から春香山へ	
2月中旬	芦別岳	
3月中旬	無意根山、ニセコ、八甲田	
4月	パラダイス合宿(山班・競技班合同)	
5月	無意根合宿(山班・競技班合同)	
7月	大雪山サマースキー	丸山、山岸、西森、藤森
8月	ペテガリ岳	三浦ほか
8月	札内岳	山岸ほか
8月	利尻岳	丸山ほか
9/17-28	パラダイスヒュッテ大改修(土台柱交換、1階床板交換、窓(1階一部、2階全部)交換、外便所増築、2階ベッドなど)、修理費20万円	

44 season　1955(昭和30)年10月～1956(昭和31)年9月

部長：小川玄一／副部長：奈良岡健三
主任：三浦雄一郎(4)／山係長：佐藤鐵郎(4)／主将：佐藤有秀(3)／会計：丸山恭一(4)・本間宏(3)／パラダイス：丹保睦敬(3)／無意根：下岡清昭(3)／空沼：山岸弘(3)／マネージャー：丸山恭一(4)／トレーナー：落合力(OB)

12/2-4	無意根初滑り(山班・競技班合同)	18名参加
12/10-18	基礎スキー合宿(宮の森合宿所)	主に新入部員対象
12/23-28	ニセコ合宿(青山温泉不老閣)	現役30名、永野OB、砂山OB参加(4年ぶりに復活)
1/6-12	小池氏追悼無意根合宿	8名参加
1/29	学内お誘いの会(手稲山)	一般参加者25名
2/8-12	ヘルベチア小屋－朝理岳－余市岳－美比内山－無意根山－無意根小屋	6名参加
2/11	現役OB合同手稲山スキーツアー	OB現役17名、OB7名
3/17-21	十勝三股から石狩岳・音更山・ニペソツ山	L佐藤(鉄)、SL丸山　他8名
3/22-23	十勝岳	3名
4/14-22	無意根合宿	10名参加
5/3-7	増毛－暑寒別岳	第1班：L下岡、SL山本ほか6名、第2班：L川村、SL西森ほか7名
5月、6月	空沼岳道標取り付け予備調査(中央バスの依頼)、パラダイス・空沼小屋の修理に通い詰める	
6/24-29	大雪山サマースキー(層雲峡－黒岳－北鎮岳－旭岳南面大雪渓－姿見の池－勇駒別温泉)	10名参加
7月、8月	日高、利尻、羅臼へ	
9/29-30	パラダイス小屋薪積み	15名

45 season　1956(昭和31)年10月～1957(昭和32)年9月

部長：小川玄一／副部長：奈良岡健三
主任：山岸弘(4)／山係長：下岡清昭(4)／主将：佐藤有秀(4)／会計：本間宏(4)／パラダイス：向井成司(3)／無意根：落合健(3)／空沼：岩田健宏(3)／マネージャー：西森信弘(4)／トレーナー：落合力(OB)

10/6-7	無意根小屋薪積み	24名
10/13-14	空沼小屋薪積み	4名
12/1-2	無意根初滑り	35名参加
12/10-17	新人合宿(宮の森合宿所)	主に新人
12/22-27	ニセコ青山合宿	29名
1/4-10	小池氏追悼OB現役無意根合宿	18名
2/2-6	無意根小屋－長尾山－美比内山－余市岳－朝里岳－ヘルベチアー国鉄山の家－奥手稲山－銭函	L下岡、SL岩田、田辺、高橋ほか(12名)
2/14-19	武利岳	5名
2/23-24	羊蹄山	6名
3/17-22	十勝岳	28名(卒業生追い出し合宿)
4/8-14	無意根合宿	4名
4/15-21	立山	3名
4/26-5/2	八甲田合宿(酸ヶ湯、赤倉岳、大岳、井戸岳、硫黄岳、駒岳など春スキー)	松橋(3)、高橋(4)、溝口(3)、松崎(3)、乾(2)、半田(2)、猪俣(1)、小松(1)、大谷(1)、久保(1)ほか4名
5/2-3	芦別岳	2名
5/28-30	夕張岳	4名
6/12-19	大雪山サマースキー第1班	12名
6/26-7/1	大雪山サマースキー第2班	12名
7/18-28	幌尻岳・トッタベツ岳	7名
8/1-10	無意根小屋修理	延人員150名、資材総重量2トン、修理費33万円
8/14-18	羅臼岳	7名
8/25-31	槍・穂高岳	5名
9/29-30	パラダイス小屋薪積み	15名

46 season　1957（昭和32）年10月～1958（昭和33）年9月

部長：小川玄一／副部長：奈良岡健三
主任：大沢明義（4）／山係長：落合健（4）／主将：沢泰宏（3）／庶務：向井成司（4）／記録：佐々木利夫（3）／会計：溝口裕（4）・小島順治（2）／パラダイス：高橋準（2）／無意根：小松弘（2）／装備：加藤幸子（3）・吉田英一（2）／体育会：岩田健宏（4）・小松弘（2）／マネージャー：渡辺貢一（3）／トレーナー：三浦雄一郎（OB）

11/20-25	糠平－ウペペサンケ山－丸山－幌加川－糠平（縦走目的の偵察山行）	L溝口（4）、小松（2）ほか4名
12/22-27	ニセコ合宿　青山温泉不老閣 主任：落合（4）、装備係：小松（2）、医療係：加藤（3）、会計係：石塚（2）、食糧係：田辺（2）、高橋（2）、記録係：小島（2）	部員30名、（一般）9名 初年班：平野（1）、小林（1）、仲俣（1）、小出（1）、（林）、（轟）、（丸野）、（三崎）、（玉津） 第1班：L落合（4）、田辺（2）、松崎（3）、川原田（3）、南部（2）、堀内（1）、中山（1）、竹田（1） 第2班：L向井（4）、神谷（3）、高橋（2）、石塚（3）、吉田（2）、大久保（1）、（岩部） 第3班：L溝口（4）、小松（2）、松橋（3）、木皿（2）、加藤（3）、阿部（1）、（中西） 第4班：L佐々木（2）、小島（2）、青木（3）、戸沼（2）、斉藤（1）、（高橋）、（田中）、（田下）
12/29-1/6	十勝三股－音更川－天狗－ニペソツ山－十勝三股（縦走目的の偵察山行）	L落合（4）SL溝口（4）ほか4名
12/29-1/6	十勝三股－ユニ石狩岳－十勝三股（縦走目的の偵察山行）	L向井（4）、SL佐々木（2）、青木（3）高橋（2）、阿部（1）、斉藤（1）、本間（OB2）
2/5-11	十勝三股－音更川－天狗－ニペソツ山手前、石狩岳（縦走目的の偵察山行）	L小松（2）、SL小島（2）ほか5名
2/5-11	糠平－ウペペサンケ山－丸山－糠平（縦走目的の偵察山行）	L向井（4）、SL佐々木（2）ほか4名
2/6-10	裏大雪（ウペペサンケ山－石狩岳縦走を試みるも失敗）	L落合（3）、溝口（4）
3/28-4/2	清里－斜里岳往復－宇登呂－岩宇別－羅臼平上で引き返す－峰浜－海別岳？	L富山（4）、SL中島（1）
3/28-4/1	白馬岳	4名
4/27-5/1	八甲田酸ヶ湯にて合宿　大岳・井戸岳・赤倉岳等諸峰を登頂・滑降	14名
5/1-5/5	増毛－雄冬山－浜益山－群別山－暑寒別岳－増毛	L松橋（4）、SL吉田（3）、斉藤（1）
5/2-5/5	無意根合宿・余市岳山行	【小屋】L小松（3）、SL阿部（2）、刈谷（2）、若林（1）、菅田（1）、塘（1）、轟（1）、高倉（1）、中村（1）、永井Ⅰ（1）、滋野（1）、永井Ⅱ（1）
		【余市】L南部（3）、SL戸沼（3）、下斗米（2）、三崎（2）、渡辺（2）
		【競技】沢（4）、猪俣（3）、桜庭（3）、岡部（2）、大塚（2）、高野（2）、菅原（1）
6/14-19	サマースキー第1班　湧駒別－旭岳－北鎮－黒岳－層雲峡	L小松（3）、SL小島（3）、沢田（4）、高橋（3）、木皿（3）、岡田（3）、仲俣（2）、三崎（2）、塘（1）、中村（1）、菅原（1）、小島弟
6/19-24	サマースキー第2班　旭岳－北鎮岳－比布岳－愛別岳－永山岳－黒岳－北海岳－旭岳 旭岳－北鎮岳－比布岳－愛別岳－永山岳－黒岳－北海岳－旭岳	L中島（2）、若林（1）
6/21-26	サマースキー第3班　旭岳大雪渓でスキー	L佐々木（4）、SL田辺（3）、滋野（1）、轟（1）、竹田（1）、本間（OB）
7/19-29	中札内－札内川－九の沢－千九百峰カール－エサオマンカール－エサオマントッタベツ川－戸蔦別川	L向井（4）、SL大沢（OB）、若林（1）、中村（1）、部外2
7/21-8/3	上札内－コイカクシュサツナイ川－コイカクシュサツナイ岳－ヤオロマップ岳－ルベツネ－ペテガリ岳－コイカクシュシビチャリ川－静内	L中島（2）、SL南部（3）、塘（1）、落合（OB）
7/27-8/5	中札内－札内川－九の沢－春別岳－札内岳分岐－エサオマントッタベツ川－トッタベツ川	L佐々木（4）、SL田辺（3）、阿部（2）、斉藤（2）
8/5-10	十勝三股－音更川十六の沢－小天狗－天狗岳－ニペソツ山－幌加川－糠平温泉	L佐々木（4）、SL田辺（3）、阿部（2）、斉藤（2）
8/11-14	信濃大町－七倉－烏帽子岳－野口五郎岳－鷲羽岳－三俣蓮華岳－槍ヶ岳－上高地	L塘（1）、部外1
8/13-17	層雲峡－黒岳石室－北海岳－白雲石室－忠別岳－化雲岳（熊遭遇）－天人峡	L佐々木（4）、SL田辺（3）、中俣（2）、部外5
9/19-22	天人峡－化雲岳－トムラウシ山（熊遭遇）－天人峡	L塘（1）、SL若林（1）、長坂（1）、部外2

47 season　1958（昭和33）年10月～1959（昭和34）年9月

部長：小川玄一／副部長：奈良岡健三・水谷寛
主任：向井成司（4）／山班長：佐々木利夫（4）／チーフリーダ：小松弘（3）／主将：猪俣通（3）／庶務：田辺顕人（3）／会計：小島順治（3）／記録：南部敏明（3）／パラダイス：下戸米啓介（2）／無意根：阿部孝夫（2）／装備：中島巌（2）／体育会：斉藤貞（2）／マネージャー：渡辺貢一（4）

11/22-26	十勝三股－十六の沢－天狗岳－ニペソツ山－天狗岳－十勝三股	L小松（3）、小島（3）、中島（2）、岡田旭（3）、塘（1）、若林（1）、渡辺（1）、高橋（OB）
12/6-7	無意根初滑り	33名
12/11-15	パラダイス新人合宿	15名
12/23-29	ニセコ合宿　青山温泉不老閣 合宿主任：小松（3）、主務係：田辺（3）、木皿（3）、会計係：三崎（2）、記録係：南部（3）、装備係：中島（2）、医療係：竹田（3）、食糧係：阿部（2）、高橋（2）	初年班：松橋（3）、松坂（1）、荒川（1）、長坂（1）、青田（1）、太田1）、坂東（1）、橘田（1） 第1班：L向井（4）、竹田（3）、刈谷（2）、板谷（1）、高畑（1）、（蔵）、（川原）、水谷先生 第2班：L佐々木（3）、仲俣（2）、岡本（3）、横山（2）、（丸野）、（豊田） 第3班：L小島（3）、阿部（2）、塘（1）、安藤（1）、山下（1）、中山 第4班：L小松（3）、中島（2）、安野（1）、中村（1）、戸沼（3）、（森）、（大沼） 第5班：L田辺（3）、SL斉藤（2）、南原（2）、森松（2）、永井（2）、眞谷（2）、若林（1） 第6班：L沢田（4）、SL青木（4）、神谷（2）、成島（2）、岩田（2）、前川（2） 第7班：L前多（4）、SL三崎（2）、大島（3）、三浦（1）、（嶺）、（橋本） 第8班：L高橋（3）、SL南部（3）、木皿（3）、岡田（3）、轟（2）、渡辺（2）
1/1-5	無意根正月合宿	18名
1/26-30	裏大雪山系縦走　サポート隊第1班（ウペペサンケ山）糠平－群界尾根－ウペペサンケ山－糠平	L佐々木（4）、SL南部（3）、岡田（2）、久保（2）、竹田（2）、塘（1）
1/28-2/7	裏大雪山系縦走　本隊	L小松（3）、SL中島（2）、斉藤（2）、阿部（2）
1/29-2/2	裏大雪山系縦走　サポート隊第2天狗直下にシーデポ－第三尾根国境稜線740m地点シーデポ－岩間温泉	L田辺（3）、SL三崎（2）、加藤（4）、戸沼（2）、大島（3）、渡辺（1）、松坂（1）、菅田（1）
2/1-6	裏大雪山系縦走　サポート隊第3班（ユニ石狩岳）	L高橋（3）、SL木皿（3）、仲俣（2）、横山（2）、中村（1）、若林（1）

2/6-9	裏大雪山系縦走　サポート隊第4班(石狩岳)十勝三股－岩間温泉－群界尾根－1700m地点シーデポ。縦走隊の残したスキー撤収－岩間温泉－国境尾根－石狩岳－岩間温泉	L小島(3)、SL松橋(4)、仲俣(2)、横山(2)、古川(1)、板谷(1)、塘(1)
3/14-20	十勝三股－岩間温泉－国境稜線から音更山往復、天狗岳往復	L佐々木(4)、SL高橋(3)、阿部(2)、仲俣(2)、竹田(2)、塘(1)、若林(1)、清水(1)、水谷先生、ほか同志社大生2
4/3-6	八方尾根	L阿部(3)SL仲俣(2)、田辺(2)、水谷先生、部外1
5/1-5	無意根合宿	31名
5/16-17	無意根新人歓迎会、高倉部員追悼	18名
5/23-24	比羅夫より羊蹄山往復	L塘(2)、SL中村(2)、部外1
6/4-8	サマースキー第1班	L小島(4)、SL小松(4)、南部(4)、斉藤(3)、太田(2)、古川(2)、清水(2)、三浦(1)、安藤(1)、桜間(1)
6/8-14	サマースキー第2班	L阿部(3)、SL中島(3)、田辺(4)、大島(4)、山田(競技)、塘(2)、中村(2)、若林(2)、松坂(2)、山下(2)、坂東(1)、中沢(1)、山室(1)、谷口(1)、久野(1)、小林(1)
6/29-30	上杵臼－楽古岳－上臼杵	L斉藤(3)部外2
7/17-23	トッタベツ川－幌尻岳－美生岳－チロロ川	L斉藤(3)、SL渡辺(2)、橘田(2)、谷口(1)、桜間(1)
7/18-26	トッタベツ川－幌尻岳－新冠川－エサオマントッタベツ岳－カムイエクウチカウシ山－札内川	L塘(2)、SL中村(2)、古川(2)、安藤(1)、松坂(2)、山下(2)、山室(1)
7/21-27	新冠川－幌尻西側カール－幌尻岳－七つ沼－トッタベツ岳－美生岳－美生川	L阿部(3)、SL若林(2)、松坂(2)、太田(2)、鈴木(1)
7/28	阿寒湖畔キャンプ場より雌阿寒岳往復	L塘(2)、SL古川(2)
7/30-8/4	羅臼－里美台－羅臼岳－羅臼平－硫黄山－羅臼平－岩宇別	L阿部(3)、SL古川(2)、若林(2)、塘(2)、部外1
8/7-8	鷲泊より利尻山往復	L阿部(3)、SL古川(2)、若林(2)、塘(2)
8/25-31	新冠川－イドンナップ岳－新冠川	L向井(OB1)、SL中島(3)、横山(3)、轟(3)
9/23-28	十勝三股－ユニ石狩岳－岩間温泉－十六の沢－天狗岳－ニペソツ山－十勝三股	L阿部(3)、SL中村(2)、若林(2)、太田(2)、谷口(1)、久野(1)水谷先生
9/24-29	豊似－南日高に入るが台風のため豊似川上流部より退却	L斉藤(3)、SL塘(2)

48 season　1959(昭和34)年10月～1960(昭和35)年9月

部長：小川玄一／副部長：奈良岡健三・水谷寛

主任：大塚正次郎(3)／山班長：阿部孝夫(3)／主将：竹内泰夫(3)／庶務：斉藤貞(3)／会計：中島巌(3)・古川善雄(2)／記録：太田一(2)／パラダイス：中村晃忠(2)／無意根：塘忠夫(2)／装備：若林隆三(2)

10/3-4	無意根小屋祭り	参加者35名
10/9-11	清川－ニセイカウシュッペ山－清川	L中島(3)、部外2
10/30-11/1	清川－ニセイカウシュッペ山往復、層雲峡－黒岳往復	L斉藤(3)、SL塘(2)中村(2)、若林(2))、山下(2)、桜間(1)
11/14-15	パラダイスヒュッテ屋根修理	
11/28-29	無意根初滑り	参加者38名
12/5-8	手稲新人合宿	
12/22-28	ニセコ合宿　昆布温泉青山不老閣 合宿主任：阿部孝夫(3)、庶務係：斉藤貞(3)、会計係：中島巌(3)、古川善雄(2)、記録係：太田一(2)、装備係：若林隆三(2)、松坂理夫(2)、食糧係：塘忠夫(2)、清水忠司(2)、医療係：中村晃忠(2)、中川由起子(2)	第1班　L小松(4)、高畑(2)、(小島)、(児玉)、(竜造寺)、(高倉) 第2班　L田辺(4)、SL中山、(戸部)、(西前)、(高田)、佐藤 第3班　L小島(4)、SL占部(2)、中川(2)、(野畑)、(田中)、(本間) 第4班　L南部(4)、SL横山(3)、(木野)、(河原)、(江端) 第5班　L岡田(4)、SL轟(3)、高橋(OB)、(前田)、(藤巻)、(小野)、(大島) 第6班　L三崎(3)、SL竹田(3)、坪谷(2)、吉田(4)、照井(1)、(嶺) 第7班　L仲俣(3)、SL下斗米(3)、(関矢)、(山田)、(根本)、(秋山)、奈良岡先生 第8班　L中島(3)、SL塘(2)、古川(2)、菅田(2)、清水(2)、中沢(1) 第9班　L阿部(3)、SL中村(2)、桜間(1)、大和田(1)、松田(1) 第10班　L斉藤(3)、SL若林(2)、太田(2)、三浦(　)、松坂(2)、谷口(1) 第11班(初年班)　L神谷(4)、SL安藤(2)、谷沢(1)、石田(1)、山室(1)、大島(1)、中川(2)、(島田)、(富永)、(城原)、(小泉) 第12班　L佐々木(4)、SL渡辺(2)、水谷、丹保、大宮、永井、望月、山崎、安藤、佐渡各先生
12/29-1/8	天人峡－滝見台－ポン化雲岳－化雲岳－天人峡、勇駒別温泉－天女が原－勇駒別	L斉藤(3)、SL佐々木(4)、若林(2)、谷口(1)、下岡(OB4)、高橋邦(OB4)
12/30-1/4	中越駅－ニセイカウシュッペ往復、上越駅－チトカニウシ往復、上白滝－北見天狗岳往復	L阿部(3)、SL中村(2)、太田(2)
12/30-1/4	新冠－銅山小屋－西尾根－ペテガリ岳－銅山小屋－新冠	L中島(3)、SL田辺(4)、横山(3)、塘(2)
2/5-8	山部－うぐいす谷－半面山－雲峰－芦別岳－山部	L阿部(3)、SL塘(2)、古川(2)、山室(1)、安藤(1)、久野(1)、水谷先生、向井(OB2)、大沢(OB3)
2/6-14	層雲峡－ニセイチャロマップ川－武華岳－武利岳－屏風岳－層雲峡	L斉藤(3)、SL横山(3)、谷口(1)
2/10-15	十勝三股－岩間温泉－川上岳－石狩岳－岩間温泉－十勝三股	L小松(4)、SL南部(4)、岡田(4)、若林(2)、石橋先生(鉱山)
3/15-20	十勝岳周辺(送別合宿)白銀荘ベースに三段山、前十勝、富良野岳、十勝岳	L佐々木(4)、SL田辺(4)、小島(4)、南部(4)、神谷(4)、吉田(4)、高橋(4)、阿部(3)横山(3)、轟(3)、三崎(3)、占部(2)、若林(2)、山下(2)、小野(2)、太田(2)、古川(2)、久野(1)、太田(2)、古川(2)、久野(1)、安藤(1)、桜間(1)、大和田(1)、中沢(1)、小沢(1)、谷口(1)、谷沢(1)水谷先生、向井(OB2)、高橋邦(OB4)部外2
3/22-25	ニセコ強化合宿　ニセコ温泉－ニトヌプリ－チセヌプリ－シャクナゲ－岩内峠－目国内岳－ニセコ温泉－ニトヌプリーワイスホルン－イワオ－振子沢－西壁－アンヌプリ－北壁－山の家－アンヌプリ－山田温泉	L阿部(3)、SL上西(4)、塘(2)、古川(2)、若林(2)、太田(2)、管田(2)、小野(2)、印部(2)、占部(2)、松坂(2)、三浦(2)、清水(2)
3/22-25	ニセコ温泉－イワオ、ニセコ温泉－ニト－イワオ、ニセコ温泉－ニト－シャクナゲ－チセ－ニト、ニセコ温泉－西壁－アンヌプリ－山田温泉	L谷口(1)、SL牧野(1)、部外一名
3/26-4/1	富山－美女平－弥陀ヶ原－剱御前－雷鳥沢－一ノ越－雄山－大海山－室堂－天狗小屋－美女平－富山	L阿部(4)、塘(3)、山下(3)、桜間(2)、山室(2)
4/1-5	富山－千寿ヶ原－美女平－室堂－雷鳥荘－別山－一ノ越－雄山－大海山－大汝山－浄土山－奥大日岳－美女平－富山	L斎藤(4)、SL横山(4)、久野(2)、谷口(2)
4/8-12	神城－遠見小屋(小遠見・五竜岳)－神城－黒菱小屋(－第一、三ケルン)－神城	L阿部(4)、塘(3)、中村(3)、太田(3)、山下(3)、水谷寛先生
4/29-5/？	無意根ゴールデンウイーク合宿(記録不明)	L阿部(4)ほか

4/29-5/4	増毛－暑寒別岳、群別岳周辺でスキー	L中島(4)、SL塘(3)、小野(3)、山下(3)、古川(3)、大和田(2)、桜間(2)、安藤(2)、谷口(2)
4/30-5/5	山部－熊ヶ池BCとして芦別岳登頂・スキー練習	L横山(4)、SL斎藤(4)、轟(4)、中村(3)、印部(3)、松坂(3)、占部(3)、佐藤(2)、谷沢(2)
6/3-8	大雪山サマースキー第1班	L中村晃忠(3)、SL古川善雄(3)、三浦寛(3)、坪谷浜三(3)、占部久(3)、山室紘二(2)、中沢修(2)、安藤忠雄(2)、川瀬昌万(2)、藤井忠広(1)、鈴木明久(1)
6/6-11	大雪山サマースキー第2班	L若林(3)、SL清水(3)、小野(3)、中川(3)、牧野(2)、松田(2)、吉田(2)、永野(1)、大野(1)、倉持(1)、裏(1)
6/11-16	大雪山サマースキー第3班	L印部(3)、SL山下(3)、中島(4)、仲俣(4)、高畑(3)、桜間(2)、谷口(2)、黒田(1)、北(1)、藤本(1)、益田(1)、宮本(1)
6/15-20	大雪山サマースキー第4班	L塘(3)、SL太田(3)、山下(3)、石田(2)、佐藤(2)、大和田(2)、谷口(2)、小野(1)、大津(1)、徳田(1)、丹保先生
7/25-8/4	帯広－八千代－ピリカペタン－八の沢－十勝幌尻岳－八の沢－札内岳－エサオマントッタベツ岳－北面カール－新冠川－七つ沼－トッタベツ岳－ピリカペタン－帯広	L中村(3)、桜間(2)、牧野(2)、永野(1)、裏(1)
7/25-8/5	新冠－銅山小屋－西尾根－サッシビチャリ沢－ルベツネ南峰－Cカール－ペテガリ岳－中ノ川上二股(事故)－ペテガリ岳－銅山小屋－新冠	L塘(3)、SL山下(3)、山室(2)、谷口(2)
7/25-31	羅臼村－里見平－羅臼平－羅臼岳－硫黄岳－岩尾別－清里－斜里岳往復	L石田(2)、SL大和田(2)、部外一名
8/3-13	野深－ニシュオマナイ沢－カムイ岳－ソエマツ岳－中ノ川三股－帯広	L阿部(4)、SL石田(2)、佐藤(2)、大和田(2)
8/6-12	新冠－銅山小屋－ペテガリ川－早大尾根－中ノ川上二股－広尾	スキー部：L中島(4)、横山(4)、谷口(2)、向井(OB2)、山岳部：西村豪、山口隆、中村晴彦、木村恒美、検死官：服部氏
8/31-9/1	尾白利加ダム－国領登山口－雨竜沼湿原－南暑寒別岳－暑寒別岳－増毛	L若林(3)、倉持(1)、部外一名

49 season　1960(昭和35)年10月～1961(昭和36)年9月

部長：小川玄一／副部長：奈良岡健三・水谷寛
山班長：塘忠夫(3)／主将：嵯峨井一弘(3)／マネージャー：兼松秀吉(2)／リーダー会班長：塘忠夫(3)／庶務：太田一(3)／会計：古川善雄(3)・中村晃忠(3)／無任：阿部孝夫(4)・若林隆三(3)・斉藤貞(4)・中島巌(4)・横山洋(4)／記録：谷口尚弘(2)／装備：中沢修(2)／無意根：桜間雄蔵(2)／パラダイス：佐藤亮一(2)／体育会：大和田榮治(2)・松坂理夫(3)／会計補：石田信博(2)／無任：清水忠司(3)・印部正義(3)
●新生スキー部誕生に伴う運営体制(1961年6月30日)
主任：阿部孝夫(　)／主将：嵯峨井一弘(4)／チーフリーダー：塘忠夫(4)／庶務：兼松秀吉(3)／会計：古川善雄(4)

10/5	天狗峠－イーストコル－定山渓天狗岳	L谷口(2)、SL石田(2)、牧野(2)
10/13-15	白銀温泉－十勝岳－上ホロカメットク山－富良野岳－原始ヶ原－布礼別	L若林隆三(3)
10/30-11/7	層雲峡－ヌタックヤンベツ－国境稜線－石狩岳を目指すが悪天で断念	L斎藤(4)、SL太田(3)、石田(2)、牧野(2)
12/9-13	パラダイス新人合宿	
12/22-27	ニセコ合宿　昆布温泉青山不老閣 合宿顧問：水谷寛助教授、合宿主任：塘忠夫(3)、庶務係：太田一(3)、会計係：古川善雄(3)、石田信博(2)、記録係：谷口尚弘(2)、装備係：中沢修(2)、松坂理夫(2)、食糧係：桜間雄蔵(2)、牧野志雄(2)、医療係：中村晃忠(3)、谷沢和隆(2)	第1班L阿部(4)、本間(2)、小沢(2)、(原)、(鈴木)、(石田) 第2班L斉藤(4)、SL占部(3)、田中(2)、(道端)、(戸田)、(間中) 第3班L中島(4)、SL吉田、(山田)、(森国)、(大西) 第4班L三崎(4)、SL照井(2)、(戸部)、(山下宣)、(間宮)、(関矢) 第5班L仲俣(4)、SL谷沢(2)、永井先生、(嶺)、(山下)、(野村) 第6班L松坂(3)、SL佐藤(3)、中川(3)、(上条)、(矢田部) 第7班L高畑(3)、SL仁科(3)、沢田(OB)、(前堀)、(大谷) 第8班L小野(3)、SL坪谷(2)、丹保先生、(薮田)、(塩沢)、(矢幡) 第9班L清水(3)、SL松田(2)、南部(OB)、(実吉)、(堀川)、(志水) 第10班L塘(3)、SL大和田(2)、牧野(2)、大野(1)、北(1) 第11班L中村(3)、SL谷口(2)、佐藤(2)、吉岡(1)、久住(1) 第12班L古川(3)、SL丸田(3)、石田(2)、安藤(2)、永野(1)、若林(1) 第13班L若林(3)、SL桜間(2)、中沢(2)、久野(2)、宮本(1)、水谷先生 第14班(初年班)L横山(3)、石田(1)、藤本(1)、黒田(1)、小野(1)、大津(1)、竹内(1)、徳田(1)、裏(1)、三上(1)、豊島(1)、(山下)、(間瀬)、(春野)、(神吉)、(堀内)
12/31-1/5	無意根正月合宿第1班	L若林(3)、SL松坂(3)、占部(3)、大島(OB)、小野(1)、南部(OB)、部外一名、途中参加者阿部(4)、塘(3)、高畑(3)、印部(3)、谷口(2)、大野(1)、黒田(1)、本間(OB)、高橋邦(OB)
1/4-11	愛山渓温泉－当麻乗越下のBCで旭岳、比布岳を目指すが荒天で断念	L中島(4)、SL中村(3)、清水(3)、大和田(2)、佐藤(2)、永野(1)
1/6-12	上志比内－勇駒別温泉－旭岳石室－旭岳－勇駒別温泉－上志比内	L塘(3)、SL高畑(3)、桜間(2)、谷口(2)
1/9-13	白金温泉－白銀荘－三段山－シュナイダーハウス－白金温泉	L占部(3)、SL印部(3)、部外者一名
1/9-15	層雲峡－黒岳－北海岳－小泉岳－銀泉台－層雲峡	L横山(4)、SL古川(3)、若林(3)、中沢(2)
1/10-15	無意根正月合宿第2班	L三崎(4)、佐藤信(3)、安藤(2)、徳田(1)
1/28-2/2	俵真布－辺別川最上流カブト岩－トムラウシ山－辺別川	L塘(3)、SL松坂(3)、大和田(2)、黒田(1)、小野(1)
1/29-31	無意根小屋－余市岳－白井岳－ヘルベチア－国鉄山の家－銭函	L阿部(4)、SL坪谷(3)、中川(3)、北(1)、竹内(1)、吉岡(1)
1/29-2/2	白金温泉－カブト岩－銀杏ヶ原－トムラウシ山－カブト岩－辺別川	L中島(4)、SL古川(3)、桜間(2)、大野(1)
1/29-2/5	上川－シビナイ川合流－ヌタップャンベシ川合流－五色ヶ原－トムラウシ山－忠別岳－シビナイ－上川	L斎藤(4)、SL占部(3)、石田(2)、裏(1)
2/5-9	無意根小屋－余市岳－白井岳－ヘルベチア－奥手稲－十万坪	L三崎(4)、谷口(2)、小沢(2)、徳田(1)、石田(1)、久住(1)
2/6-10	白金温泉－白銀荘－三段山周辺スキー－白金温泉	L若林(3)、SL安藤(2)、松田(2)
2/10-14	十万坪－ヘルベチア－朝里岳－余市岳－長尾山－無意根小屋	L太田(3)、高畑(3)、牧野(2)、藤本(1)、三上(1)、倉持(1)
2/11	手稲鉱山－奥手稲山－手稲山－パラダイスヒュッテ	L永野(1)、黒田(1)、大野(1)
2/26	源八沢をつめ百松沢山	L谷口(2)、SL牧野(2)
3/16-19	(送別合宿)白金温泉－仰岳荘ベースに十勝岳、カミホロカメットク山、美瑛岳など	L横山(4)、三崎(4)、阿部(4)、太田(3)、若林(3)、占部(3)、清水(3)、小野(3)、久野(2)、松田(2)、小沢(2)、佐藤(2)、水谷先生、部外一名
3/20-4/5	(本州スキー場巡り)八甲田－蔵王－赤倉－志賀高原－八方尾根	l古川(4)、占部(4)、坪谷(4)
3/21-24	(ニセコ強化合宿)新見温泉－岩内峠－目国内岳－白樺岳－シャクナゲ－チセヌプリ－ニトヌプリ－ニセコ温泉－ニトヌプリ－ワイスホルン－イワオ－ニセコ温泉－北壁－アンヌプリ－比羅夫	L若林(3)、SL中村(3)、松坂(3)、佐藤(3)、安藤(2)、本間(2)、石田(2)、大和田(2)、小沢(2)、久野(2)、桜間(2)、佐藤(2)、田中(2)、谷口(2)、谷沢(2)、照井(2)、西(2)、本間(2)、牧野(2)、松田(2)

3/30-4/5	清里－斜里岳往復、羅臼温泉－羅臼岳往復	L斎藤(OB)、SL谷口(3)、桜間(3)牧野(3)
4/9-12	信濃大町－黒菱小屋－八方尾根	L中村(4)、SL三上(2)、部外一名
4/28-5/2	清川－ニセイカウシュッペ山－清川	L中村(4)、SL大和田(3)、安藤(3)、小沢(3)、永野(2)
4/28-5/7	十勝三股－岩間温泉－天狗岳－ニペソツ山－石狩岳－五色ヶ原－忠別岳－白雲石室－北海岳－ピウケナイ沢－当麻乗越－愛山渓温泉	L斎藤(OB)、谷口(3)、石田(3)、佐藤(3)、小野(2)
4/29-30	空沼二股－空沼小屋－空沼岳－札幌岳－豊橋	L塘(4)、SL大野(2)、倉持(2)
4/29-5/2	増毛－想岳荘－暑寒別岳－群別岳－増毛	L若林(4)、SL清水(4)、横山(3)、本間(3)、裏(2)
4/29-5/3	無意根ゴールデンウイーク合宿	L古川(4)、SL印部(4)、嵯峨井(4)、占部(4)、桜間(3)、川瀬(3)、西(3)、諏訪木(2)、藤本(2)、三上(2)、元谷(2)、吉田(2)、竹内(2)、在田(1)、青木(1)、宇貫(1)、大田(1)、香西(1)、川上(1)、小林(1)、芝原(1)、高橋(1)、豊田(1)、仲村(1)、鳴海(1)、難波(1)、星野(1)、増田(1)、山下(1)、阿部(4)、松坂(4)、大野(2)、倉持(2)、酒井(2)、田中(2)、沢田(OB)、水谷先生
5/2-7	山部－半面山－芦別岳－山部	L太田(4)、SL牧野(3)、大津(2)、徳田(2)、若林(2)、北(2)
5/21	常次沢をつめ百松沢山	L松坂(4)、SL小野(2)
5/26	発寒川右股をつめ手稲山	L裏(2)、SL小野(2)、大野(2)、倉持(2)
6/2-7	大雪山サマースキー　第1班	L桜間(3)、SL大和田(3)、川瀬(3)、若林(2)、大津(2)、北(2)、田村(2)、諏訪木(2)、山下(1)、鳴海(1)
6/5-6	札幌－空沼岳－札幌岳－札幌	L小野(2)、部外9名
6/6-11	大雪山サマースキー　第2班	L佐藤(3)、SL牧野(3､)照井(3)、徳田(2)、永野(2)、大野(2)、豊島(1)、大田(1)、仲村(1)
6/10-15	大雪山サマースキー　第3班	L谷口(3)、SL谷沢(3)、佐藤(3)、田中(2)、小野(2)、倉持(2)、久住(2)、竹内(2)、吉岡(2)、裏(2)、永野(2)、増田(1)、豊田(1)、川上(1)
6/14-19	大雪山サマースキー　第4班	L塘(4)、SL阿部(4)、中村(4)、若林(4)、横山(4)、裏(2)、倉持(2)、小野(2)、在田(1)、高橋(1)、水谷先生
6/18-23	大雪山サマースキー　第5班	L安藤(3)、SL石田(3)、松田(3)、黒田(2)、三上(2)、宮本(2)、裏(2)、酒井(2)、伊佐田(1)
7/2	源八沢をつめシルバーザッテル(百松沢山)	L谷口(3)、SL大和田(3)、大田(1)
7/9-11	札幌岳登山口－二股小屋－漁小屋－漁岳－オコタンペ湖－支笏湖畔	L高橋(1)、SL鳴海(1)、在田(1)
7/14-23	(ペテガリ追悼登山)静内－サッシビチャリ川－ルベツネ山－Cカール－ペテガリ岳－中の川上二股－三股－尾田村	L塘(4)、SL阿部(4)、中村(4)、谷口(3)、安藤(3)、大和田(3)、小野(2)、裏(2)、向井(OB)、斉藤(OB)、水谷先生
7/19-29	札内川－八の沢－エクウチカウシ岳南東面カール－カムイエクウチカウシ岳－九の沢カール－春別岳－エサオマントッタベツ岳－新冠川－七つ沼－トッタベツ川－ピリカペタン沢－戸蔦別川	L清水(4)、SL石田(3)、徳田(2)、在田(1)
7/31-8/5	十勝三股－ユニ石狩－音更山－五色ヶ原－トムラウシ山－旭岳－石室－愛山渓	L裏(2)、SL酒井(2)
8/4-11	札内川－八の沢－カムイエクウチカウシ山往復－札内岳直下にて熊出没のため撤退－札内川	L松坂(4)、SL佐藤(3)、大野(2)、大田(1)
8/15-20	白金温泉－美瑛小屋－オプタテシケ山－スマヌプリ－トムラウシ山－五色岳－忠別岳－白雲岳－北海岳－黒岳－層雲峡	L太田(4)、SL竹内(2)、田中(2)、川上(1)
8/19-26	十勝三股－ブヨ沼－音更山－五色ヶ原－トムラウシ山－双子沼－オプタテシケ山－白金温泉	L古川(4)、SL大津(2)、石田(2)、仲村(1)
8/25-30	十勝三股－ブヨ沼－音更山－五色ヶ原－トムラウシ山－双子沼－オプタテシケ山－辺別岳－美瑛富士小屋－白金温泉	L若林(4)、SL三上(2)、鳴海(1)、豊田(1)
8/27-29	鴛泊－利尻岳往復	L諏訪木(2)、SL山下(1)、増田(1)、難波(1)
9/8-10	層雲峡－銀泉台－赤岳分岐－白雲石室－忠別岳－化雲岳－天人峡	L若林(4)、SL小野(2)、鳴海(1)、大田(1)、水谷先生

50 season　1961(昭和36)年10月～1962(昭和37)年9月

部長：村井延雄／副部長：奈良岡健三・水谷寛
幹部会主任：谷口尚弘(3)／主将：元谷靖宏(3)／CL：桜間雄蔵(3)／会計：牧野志雄(3)／無任：阿部孝夫(4)・嵯峨井一弘(4)・古川善雄(4)・塘忠夫(4)・兼松秀吉(3)／無意根：永野正幸(2)／パラダイス：裏悦次(2)／装備：大野陸郎(2)・大津有史(2)／会計補：三上仁志(2)／記録：徳田昌生(2)／図書：竹内政夫(2)・田中タ美子(2)／研究会：倉持寿夫(2)／体育会：小野堅太郎(2)／マネージャー：依田和之(2)／ロッジ管理委員長：石田信博(3)／部報編集委員長：兼松秀吉(3)／むいね編集委員長：佐藤亮一(3)

10/7-8	パラダイス小屋祭り	
12/8-12	二年目強化合宿(シルバーロッジ)	L塘(4)、SL中村(4)、秋元(2)、裏(2)、大津(2)、小野(2)、倉持(2)、黒田(2)、酒井(2)、竹内(2)、田中(2)、田村(2)、徳田(2)、藤井(2)、三上(2)、諏訪木(2)
12/8-12	パラダイス新人合宿	ニセコ合宿に備え1年目全員に3・4年目数名付き、シールスキーの練習
12/24-30	第50シーズンニセコ合宿 合宿顧問：水谷寛先生、合宿主任：桜間雄蔵(3)、庶務係：大和田栄治(3)、会計係：牧野志雄(3)、三上仁志(2)、装備係：大野陸郎(2)、大津有史(2)、食料係：裏悦次(2)、記録係：徳田昌生(2)、医療係：谷沢和男(3)、田中タ美子(2)	第1班　L安藤(3)、SL永野(2)、北(2)、田村(2)、鳴海(1) 第2班　L石田(3)、SL大野(2)、宮本(2)、山下(2)、若林(2) 第3班　L佐藤(3)、SL本間(3)、酒井(2)、大田(1)、小林(1) 第4班　L桜間(3)、SL久住(2)、諏訪木(2)、在田(1) 第5班　L中村(4)、裏(2)、藤井(2)、大津(2)、徳田(2)、竹内(2) 第6班　L塘(4)、SL小野(2)、倉持(2)、田中(2)、黒田(2)、三上(2) 第7班　L谷口(3)、SL小沢(3)、(佐藤) 第8班　L大和田(3)、SL西(3)、(石黒)、(下国)、(伊藤) 第9班　L牧野(3)、SL田中(3)、宇貫(1)、(増山)(本間) 第10班　L占部(4)、SL久野(3)、増田(1) 第11班　L松坂(4)、SL谷沢(3)、藤森(2)、(八条)(富樫) 第12班　L高畑(4)、SL中沢(3)、(小幡)、(平岡)、(関) 第13班　L小野(4)、SL松田(3)、(嶺)(岩橋)(山下) 第14班　L清水(4)、SL照井(3)、(大西)(関西)(鍋田) 第15班　L古川(4)、SL高橋(1)、豊田(1)、川上(1)、秋元(2)、香西(1) 第16班　L若林(4)、SL伊佐田(1)、難波(1)、林(1)、青木(1)、(山下透) 第17班　L阿部(4)、SL太田(4)、水谷先生、永井先生、(小川・松川)
1/7-11	無意根正月合宿　第1班	中村(4)、若林(4)、清水(4)、阿部(4)、塘(4)、田中(2)、川上(1)、小林(1)、鳴海(1)、難波、大田(1)、藤森(1)、小島(OB)
1/8-13	白金温泉－吹上温泉－富良野岳往復、上ホロカメットク山往復－白銀荘－シュナダーハウス－白銀温泉	桜間(3)、谷口(3)、裏(2)、大野(2)、小野(2)、徳田(2)、永野(2)、在田(1)、斉藤(OB)
1/11-15	無意根正月合宿　第2班	L大和田(3)、SL太田(4)、松坂(4)、中沢(3)、西(3)、倉持(2)、諏訪木(2)、酒井(2)、伊佐田(1)、豊田(1)、(松田淳子、小川明子)

2/2-4	定山渓－白井小屋－余市岳－白井岳－朝里岳－ヘルベチア－奥手稲山－銭函	L安藤(3)、SL大野(2)、藤井(2)、大津(2)、徳田(2)、在田(1)
2/9-13	手稲鉱山－ヘルベチア－朝里岳－余市岳－千尺高地－無意根小屋－定山渓	L松坂(4)、SL永野(2)、伊佐田(1)、鳴海(1)、豊田(1)
2/10-13	豊羽－千尺－無意根小屋－荒天のため余市行断念、雪洞訓練－中岳	L清水(4)、SL黒田(2)、宮本(2)、川上(1)、小林(1)、(花野晴治)
2/11-13	豊羽－千尺－無意根小屋－荒天のため余市行断念、雪洞訓練－中岳	L牧野(3)、裏(2)、山下(1)、増田(1)
2/11-15	白銀温泉－オプタテシケ山を目指すが荒天で断念	L桜間(3)、大野(2)、三上(2)、久住(2)
2/11-15	白銀温泉－オプタテシケ山を目指すが荒天で美瑛富士に変更	L石田(3)、SL大和田(3)、竹内(2)、酒井(2)、倉持(2)
3/11-16	白銀温泉－オプタテシケ山	L斉藤(OB)、佐藤(3)、小野(2)、諏訪木(2)
3/20-23	薄別－無意根小屋－豊羽鉱山－白井小屋－朝里岳－ヘルベチア－奥手稲山	L松坂(4)、SL在田(1)、伊佐田(1)、高橋(1)、鳴海(1)
3/20-23	(ニセコ強化合宿)新見温泉－目国内岳－白樺－天候悪化でチセヘウス－山の家－ニセコアンヌプリ－比羅夫	L桜間(3)、SL石田(3)、塘(4)、秋元(2)、裏(2)、大津(2)、大野(2)、倉持(2)、小野(2)、北(2)、黒田(2)、酒井(2)、田村(2)、田中(2)、竹内(2)、諏訪木(2)、徳田(2)、永野(2)、三上(2)、宮本(2)、若林(2)、久住(2)
3/24-26	蔵王温泉－地蔵観測所－セントルロッジ－能ヶ岳－蔵王温泉	L永野(2)、高橋(1)、豊田(1)
3/28-30	冷水小屋－狭薄岳－空沼岳－漁岳－オコタンペ湖	L在田(1)、SL伊佐田(1)、小林(1)、鳴海(1)
4/4-8	鴛泊－長官山－利尻岳－南峰往復－鴛泊	L谷口(4)、SL裏(3)、田村(3)、在田(2)、高橋(2)、鳴海(2)
4/13-16	増毛－小屋－暑寒別岳－登山口	L裏(2)、SL酒井(2)、竹内(2)、諏訪木(2)
4/30-5/5	山部－半面山－芦別岳(夕張岳スキー縦走は不能と判断)－山部	L桜間(4)、SL倉持(3)、伊佐田(2)、高橋(2)
5/2-6	山部－半面山－芦別岳(アイゼン・ピッケルワーク)－山部	L牧野(4)、SL裏(3)、小野(3)、酒井(3)、諏訪木(3)、竹内(3)、難波((2)、山下(2)
5/2-6	無意根ゴールデンウイーク合宿 西壁、北壁、テラス、シャンツェで連日スキー練習	L谷口(4)、SL佐藤(4)、中沢(4)、西(4)、裏(3)、秋元(3)、北(3)、宮本(3)、三上(3)、田中(3)、青木(2)、宇貫(2)、大田(2)、井上(1)、射場本(1)、岩永(1)、江幡(1)、大谷(1)、岡田(1)、岡本(1)、大表(1)、落合(1)、川原田(1)、小池(1)、後藤(1)、渋谷(1)、鈴木(1)、栃内(1)、野原(1)、門口(1)、八幡(1)、森吉(1)、阿部(OB)、松坂(OB)、水谷先生、丹保先生 水谷寛先生、丹保先生、阿部(OB1)、松坂(OB1)
5/2-6	雨竜－雨竜沼避難小屋－群別岳－雨竜沼－暑寒別岳－増毛登山口	L石田(4)永野(3)、久住(3)、徳田(3)、黒田(3)、在田(2)、川上(2)、小林(2)、鳴海(2)、増田(2)
6/1-6	大雪サマースキー　第1班	L大野(3)、倉持(3)、北(3)、青木(2)、在田(2)、小林(2)、高橋(2)、豊田(2)、鳴海(2)、射場本(1)、部外(TBS)4名
6/5-10	大雪サマースキー　第2班	L永野(3)、SL竹内(3)、秋元(3)、田中(3)、大田(2)、川上(2)、大表(1)、岡田(1)、大谷(1)、井上(1)、後藤(1)、鈴木(1)
6/9-14	大雪サマースキー　第3班	L桜間(4)、SL谷口(4)、石田(4)、山下(2)、佐藤(2)、増田(2)、香西(2)、小池(1)、川原田(1)
6/13-18	大雪サマースキー　第4班	L裏(2)、SL徳田(3)、久住(3)、田村(3)、難波(2)、伊佐田(2)、宇貫(2)、岡本(1)
6/16-17	白井二股－余市岳－白井川－長門小屋跡－豊羽鉱山	L倉持(3)、SL在田(2)、小林(2)、鳴海(2)、豊田(2)
6/17-22	大雪サマースキー　第5班	L小野(3)、SL酒井(3)、黒田(3)、諏訪木(3)、三上(3)、宮本(3)、岩永(1)、江幡(1)、落合(1)、渋谷(1)、栃内(1)、門口(1)、八幡(1)
7/2-9	戸蔦別川－十の沢－札内岳－七つ沼－幌尻岳－トッタベツ岳－北トッタベツ岳－戸蔦別川	L佐藤(4)、SL小野(3)、黒田(2)、竹内(3)、江幡(1)
7/14	薄別－白水川－林道－無意根小屋(幌尻岳集中に備え沢訓練)	L桜間(4)、SL久住(3)、田村(3)、豊田(2)、増田(2)
7/15-27	(幌尻岳集中登山)　第1班　ピリカペタン－八の沢－十勝幌尻岳－札内岳－エサオマントッタベツ岳－北カール－春別岳－カムイエクウチカウシ－北カール－新冠川奥二股－七つ沼－幌尻岳－トッタベツ岳－美生岳－チロロ岳－千栄	L谷口(4)、SL諏訪木(3)、小野(3)、高橋(2)、伊佐田(2)
7/19-28	(幌尻岳集中登山)　第2班　上美生－美生岳－トッタベツ岳－七つ沼－幌尻岳往復－上二股－北カール－エサオマントッタベツ岳－春別岳－カムイエクウチカウシ岳－八の沢－中札内	L牧野(4)、SL久住(3)、田村(3)、豊田(2)、増田(2)
7/18-29	(幌尻岳集中登山)　第3班　新冠－ヌカンライ沢－ヌカンライ岳－ブイラル川－幌尻北カール－幌尻岳－七つ沼－新冠川－エサオマン北カール－春別岳－カムイエクウチカウシ岳－八の沢－上札内	L裏(3)、SL在田(2)、鳴海(2)、川上(2)、岡本(1)
7/19-26	(幌尻岳集中登山)　第4班　千栄－チロロ岳－ポンチロロ川－ピパイロ岳－トッタベツ岳－七つ沼－幌尻往復－トッタベツ川－八千代	L石田(4)、SL酒井(3)、秋元(3)、宇貫(2)、川原田(1)
7/19-28	(幌尻岳集中登山)　第5班　第2班とほぼ同じコース・タイムのため省略	L永野(3)、倉持(3)、大田(2)
7/31-8/7	振内－額平川－幌尻北カール(台風9号迎える)－幌尻岳－七つ沼－新冠川	L大和田(4)、SL大野(3)、竹内(3)、小林(2)
8/19-23	姿見池石室－旭岳－北海岳－白雲岳－忠別岳－五色岳－化雲岳－天人峡	L大田(2)、SL豊田(2)、小川明子(北星短大)、立岡幸子(北星短大)
8/22-27	銀泉台－赤岳－白雲石室－忠別岳－トムラウシ山－石狩岳－音更山－十勝三股	L谷口(4)、SL鳴海(2)、田中(3)、射場本(2)
8/22-29	十勝三股－ニペソツ山－岩間温泉－石狩岳－音更山－ユニ石狩岳－層雲峡	L大野(3)、SL倉持(2)
8/23-26	天人峡－トムラウシ山－天人峡	L石田(4)、SL伊佐田(2)、部外2
8/28-9/1	層雲峡－白雲小屋－忠別岳－沼ノ原－石狩岳－音更山－十勝三股	L徳田(3)、SL増田(2)
9/1	無意根小屋－薄別－白水川－鞍部－ケルン	L在田(1)、SL小林(1)、伊佐田(1)、豊田(1)
9/30-10/1	無意根小屋祭り	36名

51 season　1962(昭和37)年10月～1963(昭和38)年9月

部長：村井延雄／副部長：奈良岡健三・水谷寛

リーダー会主任：永野正幸(3)／庶務：小野堅太郎(3)／会計：大野陸郎(3)／ロッジ：裏悦次(3)／無任：谷口尚弘(4)・大和田榮治(4)・牧野志雄(4)・桜間雄蔵(4)・佐藤亮一(4)・石田信博(4)／無意根：在田一則(2)／パラダイス：小林暁正(2)／装備係：竹内政夫(3)・豊田八宏(2)／会計補：増田裕一(2)／記録：山下文彦(2)／体育会：大田正韶(2)／むいね編集：倉持寿夫(3)／競技班主将：吉田一男(3)／マネージャー：兼松秀吉(4)・依田和之(3)・広井捷夫(3)

10月	山班・競技班第一回会合	T.V.問題を発端に開催、両者が平等の立場にあることを確認する。
10/7	盤渓峠－東日ヒュッテ跡－砥石山－西野二股	L諏訪木(3)、SL小林(2)、豊田(2)
10/23-28	ロッジ合宿	山技術の指導と当面の諸問題の討議

12/7-12	無意根新人合宿	L永野(3)、小沢(4)、秋元(3)、大野(3)、竹内(3)、田村(3)、徳田(3)、鳴海(2)、在田(2)、大田(2)、香西(2)、川上(2)、高橋(2)、豊田(2)、中尾(2)、山下(2)、井上利(1)井上興(1)、射場本(1)、江幡(1)、大谷(1)、岡田(1)、岡本(1)、川原田(1)、小池(1)、鈴木(1)、栃内(1)、野原(1)、門口(1)
12/22-28	第51シーズンニセコ合宿　昆布温泉富士屋旅館 合宿主任：永野正幸(3)、庶務係：小野堅太郎(3)、会計係：大野陸郎(3)、増田裕一(2)、装備係：竹内政夫(3)、豊田八宏(2)、食糧係：川上正広(2)、岡本博之(1)、記録係：山下文彦(2)、岡田信(1)、川原田義彦(1)、医療係：諏訪木義之(3)、田中夕美子(3)	第1班　L裏(3)、SL小林(2)、鳴海(2)、大田(2)、増田(2) 第2班　L大野(3)、SL在田(2)、川上(2)、山下(2)、高橋(2) 第3班　L永野(3)、SL田村(3)、(立岡)、(小川)(増山) 第4班　L小野(3)、SL豊田(2)、(高野)、(本間)、(小幡)、(戸塚) 第5班　L竹内(3)、SL倉持(3)、(今田)、(矢幡)、(飛沢)、(佐藤) 第6班　L久住(3)、SL香西(2)、(鍋田)、(富岡)、(原田) 第7班　L徳田(3)、SL大津(3)、(中西)、(佐藤)、(大西) 第8班　L酒井(3)、SL宮本(3)、(春野)、(高橋)、(鈴木)、(上村) 第9班　L石田(4)、SL三上(3)、(浅野)、(渡会)、(道下)、(木村) 第10班　L桜間(4)、SL照井(4)、田中(3)、(平岡)、(新森)、(関矢) 第11班　L諏訪木(3)、SL秋元(3)、(藤本)、(井上)、(青山) 第12班　L佐藤(4)、SL野原(1)、射場本(1)、小池(1) 第13班　L牧野(4)、後藤(1)、鈴木(1)、大谷(1)、岡田(1)、岡本(1)、川原田(1)、八幡(1)、中尾(2) 第14班　L大和田(4)、井上(1)、落合(1)、栃内(1)、江幡(1)、門口(1) 第15班　先輩、水谷先生、永井先生
12/30-1/6	(愛山渓正月合宿)　第1班　安足間－愛山渓温泉－当麻乗越付近(BC)比布岳、北鎮岳、旭岳、永山岳	A：L桜間(4)、SL大野(3)、久住(3)、諏訪木(3)、川上(2)、斉藤(OB1) B：L石田(4)、SL永野(3)、酒井(3)、鳴海(2)、豊田(2)
1/6-13	(愛山渓正月合宿)　第2班　安足間－愛山渓温泉－当麻乗越(BC)安足間岳－愛別岳－北鎮岳、旭岳、ピウケナイ沢－北鎮岳、花の台－永山岳	A：L谷口(4)、SL裏(3)、徳田(3)、倉持(3)、小林(2)、大田(2) B：L佐藤(4)、SL小野(3)、竹内(3)、在田(2)、増田(2)
2/1-4	(無意根余市縦走)　第1班　豊羽－千尺高地(デポ)－無意根小屋(泊)－美比内－余市岳－白井岳－ヘルベチアー春香－和宇尻－札幌	L桜間(4)、SL秋元(3)、中尾(2)、後藤(1)、田中(3)
2/1-7	糠平－ウペペサンケ山－丸山－幌加	L永野(3)、SL諏訪木(3)、鳴海(2)、増田(2)、川原田(1)
2/8-11	(無意根余市縦走)　第2・3班　桂岡－銭函峠－春香山－ヘルベチア－白井岳－余市岳－無意根小屋－無意根山－薄別	L酒井(3)、SL豊田(2)、岡田(1) L徳田(3)、SL大田(2)、大谷(1)、渋谷(1)、八幡(1)、井上(1)
2/8-12	空沼二股－空沼小屋－空沼岳－中山峠－喜茂別岳－無意根山－無意根小屋	L倉持(3)、SL在田(2)、鈴木(1)、佐藤(1)、門口(1)、栃内(1)
2/28-3/1	北ノ沢－砥石山－西野二股	L大野(3)、SL大田(2)、小池(1)、野原(1)
3/3-5	右股橋－百松山－迷沢山－奥手稲山－春香山－朝里川温泉	L大野(3)、川原田(1)
3/20-24	無意根小屋－無意根山－中山峠－漁岳－オコタンペ湖－オコタン荘	L竹内(3)、SL岡田(1)、大谷(1)、江幡(1)
3/21-24	(ニセコ強化合宿)新見温泉－目国内岳－雷電－シャクナゲ－チセ－チセハウス－ニトーワイス－ニセコ温泉－イワオーアンヌプリ－山田温泉	L小野(3)、SL大野(3)、SL裏(3)、在田(2)、小林(2)、増田(2)、川上(2)、大田(2)、豊田(2)、中尾(2)、香西(2)、高橋(2)
3/22-24	新見温泉－白樺岳－シャクナゲ－チセヌプリ－ニトヌプリ－ニセコ温泉－アンヌプリ－狩太	L岡本(1)、SL川原田(1)、佐藤(1)、門口(1)
3/26-28	大別苅－雄冬山－浜益御殿－浜益岳－群別岳－暑寒別岳－山の神	L大野(3)、SL大田(2)、野原(1)、小池(1)
3/27-4/2	羅臼－ケンネベツ－カモイウンペ川－知床岳－合泊－ルシャ川小屋	L小野(3)、SL諏訪木(3)、岡本(1)、江幡(1)
4/3-8	白金温泉－オプタテシケ山－黄金ヶ原－(悪天でトムラ断念)カブト岩－ベベツ川－俵真布	L倉持(4)、SL大谷(2)、阿部(OB2)、部外1
4/17-20	白金温泉－美瑛富士－美瑛岳－オプタテシケ山－白金温泉	L大野(4)、SL大田(3)、高橋(3)、岡田(2)
4/26-5/3	勇駒別－ピウケナイ沢(BC)、北鎮岳、比布岳、旭岳、熊岳でスキー	L小野(4)、SL在田(3)、江幡(2)、小池(2)、落合(2)、野原(2)
4/27-5/4	層雲峡－黒岳－北鎮岳－旭岳－勇駒別	L諏訪木(4)、SL豊田(3)、岡本(2)、大谷(2)、鈴木(2)、岡田(2)
4/28-5/3	俵真布－辺別川－黄金ヶ原－トムラウシ山－化雲岳－五色岳－忠別岳－天人峡	L久住(4)、SL大田(3)、川上(3)、高橋(3)
4/28-5/3	無意根ゴールデンウイーク合宿	CL裏(4)、L田村(4)L三上(4)、L宮本(4)、中尾(3)、八幡(3)、川合(2)、西川(2)、井上興(2)、佐藤(1)、本谷(1)、山崎輔(1)、永山(1)、若松(1)、松本(1)、奥野(1)、松浦(1)、八重樫(1)、中山(1)、川原(1)、薮中(1)、磯部(1)、村田(1)、宮崎(1)、高橋(1)、松本(1)、北村(1)、八木(1)、鉄(1)、真本(1)、渡辺(1)
4/28-5/3	千栄－ダム－ポンチロロ岳(雪少なくチロロ・ピパイロ断念)－千栄	L永野(4)、SL鳴海(3)、増田(3)、川原田(2)
5/23-25	増毛－山の神－暑寒別岳－山の神－増毛	L岡田(2)、SL川原田(2)、栃内(2)、諏訪木(4)
5/23-27	十勝三股－杉沢出合－天狗岳－ニペソツ山－川上岳－石狩岳－シュナイダーコース－岩間温泉	L高橋(3)、SL豊田(3)、岡本(2)、江幡(2)、大谷(2)、野原(2)
5/26-27	比羅夫コース登山口－羊蹄山頂お鉢回り－半月湖－倶知安	L徳田(4)、SL増田(3)、中尾(3)
5/31-6/22	サマースキー	6班に分かれ各6日間旭岳周辺でサマースキーを楽しむ
6/22-23	白井二股－余市岳直下泊、悪天で引き返す。	L川原田(2)、SL岡本(2)、野原(2)、後藤(2)
7/7	白水川出合－夏道出合－無意根ケルン－薄別	L増田(3)、池田(1)、松坂(OB2)
7/10-14	大函－ニセイチャロマップ川－武利岳－武華岳－イトムカ鉱山－層雲峡－ニセイカウシュッペ山－層雲峡	L田村(4)、SL増田(3)、池田(1)、八重樫(1)
7/20-29	千栄－チロロ川－チロロ岳－ポンチロロ沢－ピパイロ岳－トッタベツ岳－幌尻岳－七つ沼－トッタベツ川－帯広	L在田(3)、SL小林(3)、増田(3)、江幡(2)
7/21-29	ペテガリ追悼　中札内－コイカクシュサツナイ川－コイカクシュサツナイ岳－ヤオロマップ岳－1839峰－1599峰－ルベツネ岳－Cカール－下降尾根－中ノ川二股－大樹	CL裏(4)、SL田村(4)、岡本(2)、川原田(2)、小池(2)、谷口(OB1)、石田(OB1)
7/24-8/1	八千代－戸蔦別川－八の沢－札内岳－十勝幌尻岳－戸蔦別川－トッタベツ岳－七つ沼－幌尻岳－ピパイロ岳－千露呂川－チロロ岳－千栄	L大野(4)、SL川上(3)、三上(4)、西川(2)、後藤(2)
8/1-8/10	トッタベツ川－(ピリカペタンヌ沢－八の沢(－札内岳・十勝幌尻岳))－トッタベツ岳－七つ沼－幌尻岳－北カール－トッタベツ岳－ピパイロ岳－チロロ岳－日高	L徳田(4)、SL倉持(4)、岡田(3)、鈴木(2)、村田(2)
8/4-8/8	八千代－ピリカペタンヌ沢－札内岳・十勝幌尻岳－八千代	L諏訪木(4)、SL鳴海(3)、田中(4)、大谷(2)、本谷(2)
8/22-25	上高地－前穂高岳－奥穂高岳－北穂高岳－涸沢－上高地	L江幡(2)、大谷(2)
8/28-9/4	白金温泉－美瑛小屋－オプタテシケ山－トムラウシ山－沼の原－石狩岳－シュナイダーコース－十勝三股	L諏訪木(4)、後藤(2)、川原田(2)、井上(利)(2)、井上(興)(2)、西川(2)、北村(2)、池田(2)、中島(2)

52 season　1963（昭和38）年10月～1964（昭和39）年9月

部長：水谷寛

主任：小林暁正（3）／庶務：高橋俊二（3）／会計：増田裕一（3）／無任：永野正幸（4）／リーダー会議長：裏悦次（4）／リーダー会：大野陸郎（4）・小野堅太郎（4）・諏訪木義之（4）・倉持寿夫（4）・大田正韲（3）・豊田八宏（3）・在田一則（3）・川上正宏（3）／無意根小屋：大谷隆昶（2）／会計補：岡本博之（2）／装備係：川原田義彦（2）／庶務補：小池宏二（2）・佐藤岱生（2）／食糧：中尾圭一（3）／記録：井上利昭（2）／図書：岡田信（2）・後藤昭（2）／むいね編集：小林暁正（3）／気象：香西義雄（3）／医療：門口文彦（2）／体育会：大田正韲（3）／ロッジ：川上正宏（3）

10/2-7	トムラウシ温泉－トムラウシ山－オプタテシケ山－美瑛富士－十勝岳－上ホロカメットク山－白金温泉	L在田（3）、SL高橋（3）、中尾（3）、川原田（2）
10/5-8	十勝三股－十六の沢－ニペソツ山－大平－丸山－南丸山－ウペペ五峰－糠平	L大谷（3）、宮崎（2）、藪中（2）、池田（2）、山崎（2）
10/30-11/3	天人峡－化雲岳－トムラウシ山－沼ノ原分岐－クチャンベツ川－層雲峡	L在田（3）、SL岡田（2）、佐藤（2）、山崎（2）、倉持（4）
10/31-11/3	十勝三股－十七の沢－ユニ石狩登山口－ユニ石狩岳－ブヨ沢－音更山－石狩岳－沼ノ原－クチャンベツ川－層雲峡	L増田（3）、SL川原田（2）、井上（2）、本谷（1）、永野（4）
10/30-11/3	白金温泉－硫黄沼－カブト岩－スマヌプリ－トムラウシ山－化雲岳－天人峡	L高橋（3）、SL鳴海（3）、門口（2）、西川（2）、池田（1）
11/22-24	比羅夫－半月湖－羊蹄山－半月湖－比羅夫	L増田（3）、SL佐藤（2）、礒部（1）、天野（1）、渡辺（1）
12月	無意根新人合宿（記録未提出）	
12/23-29	第52シーズンニセコ合宿　昆布温泉富士屋旅館 合宿主任：小林暁正（3）、CL：在田一則（3）、庶務係：高橋俊二（3）、会計係：増田裕一（3）、岡田信（2）、食糧係：岡本博之（2）、山崎輔久（1）、橋詰寅三（1）、装備係：川原田義彦（2）、佐藤岱生（2）、医療係：門口文彦（3）、井上興治（2）、記録係：井上利昭（2）、野原悠久（2）	第1班　L裏（4）、SL鈴木（2）、落合（2）、八幡（2） 第2班　L倉持（4）、SL門口（2）、西川（2）、射場本（1） 第3班　L在田（3）、SL井上（2）、（茅野）、（関矢） 第4班　L大田（3）、SL後藤（2）、（吉武）、（八木） 第5班　L香西（3）、SL岡本（2）、（森吉）、（松尾） 第6班　L川上（3）、SL大谷（2）、（原田）、（津田） 第7班　L小林（3）、SL岡田（2）、（野瀬）、（倉沢） 第8班　L豊田（3）、SL野原（2）、（今井）、（福元） 第9班　L増田（3）、SL中尾（3）、（安村）、（水野） 第10班　L鳴海（3）、SL佐藤（2）、（本間）、（佐藤） 第11班　L高橋（3）、SL川原田（2）、（堀内）、（永山） 第12班　L徳田（4）、SL宮本（4）、（高橋）、（加藤） 第13班　L小野（4）、SL久住（4）、大津（4）、三上（4） 第14班　L諏訪木（4）、酒井（4）、秋元（4）、田中（4） 第15班　L竹内（4）、SL八重樫（1）、宮崎（1）、八木（1）、真木（1）、村田（1）、井上（2） 第16班　L永野（4）、SL渡辺（1）、高橋（1）、鉄（1）、奥野（1）、松本（1）、藪中（1） 第17班　L田村（4）、SL北村（1）、山崎（1）、若松（1）、池田（1）、川原（1） 第18班　L大野（4）SL佐々木（1）、天野（1）、黒瀬（1）、中山（1）、磯部（1）、橋詰（1） 第19班　L谷口（OB1）、SL照井（OB2）、中島（OB3）、古川（OB2）、水谷先生、丹保先生、宮崎先生、八木先生
1/7-13	（正月合宿）　第1班　十勝三股－岩間温泉－二股－1200m付近C（－天狗岳－ニペソツ山）－第1現業所－第三尾根下（－石狩岳－音更岳）－十勝三股	L田村（4）、SL豊田（3）、鳴海（3）、後藤（2）
1/7-13	（正月合宿）　第2班　十勝三股－御殿（－第三尾根－石狩岳－音更山）－二股－稜線（－ニペソツ山）－御殿－N尾根南川沢偵察－十勝三股	L倉持（4）、SL大田（3）、中尾（3）、鈴木（2）
1/7-13	（正月合宿）　第3班　十勝三股－御殿（－岩間温泉－二股－1478峰－天狗岳－ニペソツ山）－二股（－石狩岳－音更山）－御殿－十勝三股	L裏（4）、SL高橋（3）、門口（2）、佐藤（1）
1/18-22	千走温泉－東狩場山－フモンナイとの稜線－568峰鞍部－千走元町	L諏訪木（4）、SL佐藤（2）、宮崎（1）
1/19	銭函－奥手稲山－迷沢山－平和の滝－西野二股	L在田（3）、SL川原田（2）田中（4）
1/26	手稲鉱山－星置川－奥手稲山－銭函	L大野（4）、SL諏訪木（4）、大谷（2）
1/26	西野二股－ジルバーザッテル－源八沢－西野二股	L高橋（3）、SL岡田（2）、岡本（2）、藪中（1）、礒部（1）、田中（4）
1/31-2/6	幌加－幌加川－太平－ニペソツ山－東丸山－ウペペサンケ三峰－東丸山－幌加川－幌加	L在田（3）、SL増田（3）、岡本（2）、岡田（2）、宮崎（1）
2/2	西野二股－ジルバーザッテル－百松沢山－西野二股	L豊田（3）、SL田中（4）、井上（2）、松浦（1）
2/2-12	層雲峡－ペンケ－ユニ石狩分岐－ヌタップヤンベツ川－石狩岳－沼ノ原－五色ヶ原（地吹雪凄まじくトムラ断念）－クチャンベツ川－層雲峡	L小野（4）、SL鳴海俊之（3）、高橋（3）、大谷（2）、野原（2）、藪中（1）
2/7-10	銭函－銭函峠－朝里岳－余市岳－長尾山－無意根山－無意根小屋－薄別	L裏（4）、SL佐藤（2）、奥野（1）
2/29-3/5	千栄－チロロ川－標高尾根－トッタベツ岳－幌尻岳－ポロシリ沢－新冠川－プイラル合流変電所－新冠	L諏訪木（4）、SL在田（3）佐藤（1）、池田（1）
3月	ニセコ強化合宿（記録未提出）	
4/29-5/5	無意根ゴールデンウイーク合宿	L小林（4）、SL大田（4）、野原（3）、小池（3）、佐藤（3）、岡本（3）、大谷（3）、川原田（3）、真木（2）、柳生（1）、藤永（1）、田上（1）、関谷（1）、日南（1）、水野（1）
6月	サマースキー（記録未提出）	
6/25-7/2	日高町－二股沢2の沢分岐点－1807峰－北トッタベツ岳－トッタベツ岳－七つ沼カール（－幌尻岳）－新冠川上二股－カムイ岳－エサオマントッタベツ岳－札内岳－ピリカペタンヌ八の沢－トッタベツ川	L鳴海（OB1）、SL奥野（3）、山崎（3）、上ヶ島（2）、畠（2）、飯豊（2）
7/7-15	日高町－チロロ川－チロロ岳－本流－北トッタベツ岳－トッタベツ岳－七ツ沼（－幌尻岳）－新冠川上二股－エサオマン北カール－エサオマントッタベツ岳（－カムイエクウチカウシ）－札内岳－ピリカペタン沢－トッタベツ川－八千代	L佐藤（4）、SL宮崎（3）、北村（3）、川口（1）、梅沢（1）
7/15-16	薄別－白水川－無意根山－無意根小屋－薄別	L増田（4）、田上（1）
7/17-24	札内川－八の沢－カムイエクウチカウシ山－春別岳－エサオマン分岐－札内岳－トッタベツ川－八千代	L山崎輔（3）、SL磯部（3）、津曲（1）、篠田（1）、先名（1）、上野（1）、中島（OB5）
7/20-29	新冠－ポンベツ沢出合－下の二股－上二股－イドンナップ岳往復－新冠川－幌尻岳－七ツ沼－トッタベツ岳－北トッタベツ岳－1916M峰－ガタニペ峰－分岐点峰－ピパイロ岳－チロロ川－ダム	L大谷（4）、SL奥野（3）、北村（3）、上ヶ島（2）、柳生（2）、塩野（2）
7/21-30	静内－コイボク・コイカク合流－無名沢－二股－奥二股－1839峰－サツシビチヤリ沢－稜線－ルベツネ岳－Cカール－ペテガリ岳－下降尾根－中の川上二股－三股－尾田村	L在田（OB1）、SL宮崎（3）、山崎雅（2）

7/22-29	上札内－札内川八の沢－カムイエクウチカウシ山－九の沢カール－春別岳－エサオマントッタベツ岳－エサオマン北カール－新冠川－二股－幌尻岳－七ツ沼カール－トッタベツ川	L小池(4)、SL田上(2)、横山(2)、畠(2)、神田(1)、大田(1)
7/23-26	千走－千走川－狩場山－千走	L鳴海(4)、橋詰(2)、諏訪木(OB1)
8/10-17	望岳台－十勝岳－美瑛岳－オプタテシケ山－双子沼－トムラウシ－化雲岳－沼ノ原－ヌタップヤンベツ川－層雲峡	L高橋(2)、SL橋詰(2)、奥野(2)
8/17-24	望岳台－富良野岳－上ホロ－十勝岳－美瑛岳－オプタテシケ山－トムラウシ山－化雲岳－沼ノ原－JP－ニペソツ山－丸山－ウペペサンケ山－糠平	L裏(OB1)、小林(4)、大田(4)、増田(4)、岡田(3)、佐藤(2)

53 season　1964(昭和39)年10月～1965(昭和40)年9月

部長：水谷寛

主任：小池宏二(3)／庶務：大谷隆昶(3)／会計：鈴木誠(3)／無任：小林暁正(4)／リーダー会議長：岡本博之(3)／リーダー会：小池宏二(3)・岡田信(3)・川原田義彦(3)・裏悦次(4)／無意根小屋：北村育夫(2)／装備係：佐藤岱生(3)／記録：野原悠久(3)／ロッジ：岡田信(3)／むいね編集：奥野洋明(3)／体育会：宮崎敏(2)／食糧：鈴木誠(3)／図書：岡田信(3)／気象：岡本博之(3)

10/6-8	十勝三股－十六の沢－ニペソツ山－大平－丸山－南丸山－ウペペ五峰－糠平	L大谷(3)、宮崎(2)、藪中(2)、池田(2)、山崎輔(2)
12/19-1/12	富良野岳－ウペペサンケ山縦走本隊	L在田(4)、SL岡本(3)、岡田(3)、宮崎(2)
12/19-27	サポート隊Ⅰ	L大田(4)、SL香西(4)、倉持(OB1)、野原(3)、畠(1)、上ヶ島(1)、安保(1)、飯豊(1)、柳生(1)
12/20-27	サポート隊Ⅱ	L川上(4)、SL高橋(4)、鈴木(3)、磯部(2)、藤永(1)、竹内(OB1)
12/20-1/8	サポート隊Ⅲ	L裏(4)、SL小池(3)、大谷(3)、奥野(2)
12/27-1/8	サポート隊Ⅳ	L小林(4)、SL豊田(4)、江幡(3)、西川(3)、山崎輔(2)、北村(2)、山崎(1)、塩野(1)
1/7-13	サポート隊Ⅴ	L増田(4)、SL鳴海(4)、川原田(3)、佐藤(3)、藪中(2)、田上(1)
1/31-2/4	無意根小屋－中岳－喜茂別岳－中山小屋－中山峠	L岡本(3)、SL川原田(3)、山崎雅(1)
2/10-13	清川－清川源頭尾根－ニセイカウシュッペ山－清川	L倉持(4)、SL大田(4)、藤永(1)
2/26-3/2	札幌－銭函峠－朝里岳－深雪で全員のバッケン壊れ余市岳手前豊羽に下山	L小池(3)、SL山崎輔(2)、藤永(1)、飯豊(1)
2/28-3/2	札幌－百松山－迷沢山－山の家－奥手稲山－春香山－春香町	L川原田(3)、SL奥野(2)、畠(1)、上ヶ島(1)、香西(4)
3/6-16	八千代－ピリカペタン沢－札内岳－札内川本流－10の沢合流点－8の沢カール往復等－札内川－上札内	L在田(4)、SL山崎雅(1)、田上(1)、塩野(1)
3/9-12	比羅夫－羊蹄山1843m三角点－比羅夫	L高橋(4)、SL飯豊(1)、上ヶ島(1)
3/17-21	(ニセコ強化合宿)新見温泉－目国内岳－白樺岳－チセヌプリ－チセハウス－ニトヌプリ－山の家－ニトヌプリ－アンヌプリ往復－狩太	L野原(3)、SL鈴木(3)、北村(2)、宮崎(2)、山崎輔(2)
3/18-21	(ニセコ追出し合宿)山の家ベースにニセコアンヌプリ、イワオヌプリ、ニトヌプリ、チセヌプリ、白樺山でスキー	16名
3/23-28	羅臼－知円別－合泊－カモイウンペ川－700m地点から悪天で撤退－羅臼	L岡本(3)、SL宮崎(2)、北村(2)、飯豊(1)
4/28-5/3	酸ヶ湯－仙人ヒュッテ－硫黄岳ゲレンデにBC、大岳、井戸、赤倉、高田大岳、櫛が嶺、駒ヶ嶺で連日春スキー)－酸ヶ湯	L鳴海(OB1)、SL山崎輔(3)、山崎雅(2)、永野(OB2)、塘(OB4)
4/29-5/3	増毛－天狗岳－雄冬山－浜益御殿－南暑寒岳－暑寒岳－山神	L岡田(4)、SL北村(3)、藤永(2)、田上(2)
4/29-5/3	勇駒別－石室－ピウケナイ沢周辺でスキー(安足間岳、北鎮岳、熊岳、旭岳)－勇駒別	L川原田(4)、SL奥野(2)、畠(2)、柳生(2)、横山(2)、井上(4)
4/29-5/4	白金温泉－美瑛富士避難小屋付近C(－美瑛岳・美瑛富士)－白金温泉	L岡本(4)、川口(1)、伊藤(1)、池田(1)
4/29-5/4	天人峡－トムラウシ山－1667峰－辺別川－下俵真布	L大谷(4)、SL宮崎(3)、磯部(3)、上ヶ島(2)
4/29-5/5	新得－トノカリウシュッペ川合流飯場－美瑛岳鞍部に雪洞ベースにスキー(美瑛岳、十勝岳)－白金温泉	L佐藤(4)、SL野原(4)、飯豊(2)、塩野(2)
5/21-23	比羅夫－羊蹄山－比羅夫	L鳴海(OB1)、SL藤永(2)、横山(2)、大田(1)
5/29-6/6	大雪サマースキー　第1班	L奥野(3)、SL田上(2)、柳生(2)、小野(1)、伊藤(1)、砂原(1)、大田(1)、大谷(4)、鳴海(OB1)
	大雪サマースキー　第2班(記録なし)	
	大雪サマースキー　第3班(記録なし)	
6/5-7	山部－半面山－雲峰山－芦別岳－山部	L北村(3)、SL飯豊(2)、上ヶ島(2)、藤永(2)
6/10-16	大雪サマースキー　第4班	L山崎輔(3)、SL藤永(2)、梅沢(1)、佐藤(4)、鈴木(4)
6/13-19	大雪サマースキー　第5班	L北村(3)、SL上ヶ島(2)、飯豊(2)、横山(2)、津曲(1)、神田(1)、上野(1)、岡本(4)、野原(4)、水谷先生、若林(OB4)、高畑(OB4)
7/18-19	滝沢	L岡本(4)、SL鳴海(OB1)、飯豊(2)、田上(2)、藤永(2)
7/21-28	静内－コイボク・コイカク合流－サッシピチャリ沢－ペテガリ西沢の合流点－1399峰－ルベツネ－C　カール－ペテガリ岳－下降尾根分岐点－中の川上二股(ケルンにて追悼)－三股－尾田村	L岡本(4)、SL鳴海(OB1)、飯豊(2)、藤永(2)
8/1-6	十勝三股－登山口－1396M峰－ユニ石狩岳－ブヨ沢－音更山－石狩岳－1478M峰－ニペソツ山－糠平－帯広	L藤永(2)、SL飯豊(2)、柳生(2)、川口(1)、津曲(1)
8/12-20	宇奈月－祖母谷温泉－清水岳－白馬岳－唐松岳－五竜岳－鹿島槍－鳴沢岳－針の木岳－蓮華岳－船窪岳－烏帽子岳－野口五郎岳－槍ヶ岳－横尾－上高地	L飯豊(2)、SL藤永(2)、津曲(1)

54 season　1965(昭和40)年10月～1966(昭和41)年9月

部長：水谷寛

主任：宮崎敏(3)／庶務：奥野洋明(3)／会計：北村育夫(3)／リーダー会議長：岡本博之(4)／リーダー会：宮崎敏(3)・奥野洋明(3)・山崎輔久(3)・佐藤岱生(3)・小池宏二(4)・岡田信(4)／記録：横山雄司(2)／装備：藤永徹(2)／無意根：飯豊利秋(2)・上ヶ島裕(2)／ロッジ：山崎輔久(3)・山崎雅昭(2)／むいね：奥野洋明(3)

10/30-11/4	十勝三股－十六の沢杉沢出合－天狗・小天狗鞍部－ニペソツ山－御殿－石狩岳シュナイダーコース途中で引き返す－十勝三股	L北村(3)、SL田上(2)、横山(2)、大田(1)、梅沢(1)、鳴海(OB1)
10/30-11/5	天人峡－化雲岳－トムラウシ山往復－忠別岳－平ヶ岳－白雲石室－北海岳－姿見石室－勇駒別	L山崎輔(3)、SL山崎雅(2)、奥野(3)、畠(2)、津曲(1)

11/3-6	層雲峡－黒岳－石室（悪天旭岳乗越断念）－黒岳－層雲峡	L岡田（4）、SL飯豊（2）
11/6	朔湖－羊蹄山往復	L宮崎（3）、SL藤永（2）、川口（1）
11/19-23	勇駒別－天女が原付近をBCにスキー練習	L小池（4）、SL田上（2）、柳生（2）、飯豊（2）、藤永（2）、大田（1）、先名（1）、伊藤（1）、川口（1）、神田（1）、篠田（1）、砂原（1）、津曲（1）、上野（1）
1/3-7	銭函峠－ヘルベチア－朝里岳－余市岳－豊羽	L大谷（4）、SL井上（4）、川口（1）、津曲（1）、神田（1）、上野（1）
1/3-10	（冬山訓練合宿）Aパーティ　勇駒別－ピウケナイ沢源頭BCから旭岳、北鎮岳、比布等	L岡本（4）、SL奥野（3）、田上（2）、畠（2）、在田（OB1）
1/3-10	（冬山訓練合宿）Bパーティ　行動はAパーティと同じ	L川原田（4）、SL野原（4）、藤永（2）、柳生（2）、鳴海（OB1）
1/3-10	（冬山訓練合宿）Cパーティ　行動はAパーティと同じ	L岡田（4）、SL山崎（3）、上ヶ島（2）、飯豊（2）
1/3-10	（冬山訓練合宿）Dパーティ　行動はAパーティと同じ	L佐藤（4）、SL宮崎（3）、北村（3）、横山（2）
1/30-2/3	豊羽－千尺－無意根山－美比内山－余市岳－朝里岳－ヘルベチア－春香山－朝里	L北村（3）、SL上ヶ島（2）、田上（2）、先名（1）、篠田（1）、砂原（1）
2/2-7	十勝三股－幌加川－ニペ鞍部－大平吹雪でニペソツ山登頂断念－十勝三股	L佐藤（4）、SL宮崎（3）、飯豊（2）、柳生（2）、大田（1）
2/3-10	白滝－支湧別岳－ニセイチャロマップ岳－支湧別岳－上支湧別	L鳴海（OB1）、SL山崎輔（3）、横山（2）、梅沢（1）
2/20	一の沢－烏帽子－百松	L飯豊（2）、SL田上（2）、横山（2）、上ヶ島（2）、在田（OB1）、田中夕美子（OB2）
3/1-4	白金温泉－望岳台－十勝岳－美瑛岳－美瑛富士－望岳台－白金温泉	L小池（4）、SL飯豊（2）、柳生（2）、上ヶ島（2）
3/2-7	鴛泊－長官山－利尻山－鴛泊	L川原田（4）、SL野原（4）、田上（2）、藤永（2）、川口（1）
3/3-4	空沼二股－空沼小屋－空沼岳－札幌岳－登山口	L梅沢（1）、SL大田（1）、篠田（1）
3/13-16	美瑛登山口－美瑛小屋－美瑛岳－白金温泉	L岡田（4）、SL藤永（2）、山崎雅（2）、大田（1）、津曲（1）
3/20-23	（ニセコ強化合宿）第1班　新見温泉－目国内岳－白樺岳－チセヌプリ－ニトヌプリ－山の家－イワオヌプリ－ニトヌプリ－ワイスホルン－山の家－ニセコアンヌプリ－山田	L山崎輔（3）、山崎雅（2）、畠（2）、田上（2）、柳生（2）
3/22-25	（ニセコ強化合宿2）第2班　新見温泉－岩内峠－目国内岳－白樺岳－チセヌプリ－ニトヌプリ－山の家－イワオヌプリ－ニトヌプリ－山の家－豪快スロープ－山の家－狩太	L奥野（3）、SL佐藤（4）、津曲（1）、川口（1）、大田（1）、篠田（1）、上野（1）
4/2-4	富山－千寿ヶ原－美女平－雷鳥荘より－一ノ越・立山、別山乗越、剣沢小屋往復など－美女平経由下山	L宮崎（4）、SL飯豊（3）、大田（2）
4/29-5/4	増毛－山神－1075mにBC、暑寒岳、群別岳、南暑寒岳各斜面で春スキー堪能－増毛	L山崎輔（4）、SL柳生（3）、畠（3）、大田（2）、篠田（2）
4/29-5/4	層雲峡－黒岳－北海岳－比布岳－ピウケナイ沢－旭岳－姿見石室－勇駒別	L佐藤（OB1）、SL横山（3）、砂原（2）
4/29-5/5	白金温泉－美瑛岳－十勝岳－美瑛富士－オプタテシケ山－白金温泉	L奥野（4）、SL山崎雅（3）、先名（2）、梅沢（2）
4/29-5/5	ゴールデンウィーク無意根合宿	L宮崎（4）上ヶ島（3）、藤永（3）、飯豊（3）、奥谷（1）、樺島（1）、刈山（1）、熊川（1）、清水（1）、下岡（1）、内藤（1）、室田（1）、早田（1）、原田（1）、東新家（1）、柳原（1）、山口（1）、吉田（1）、OB：永野、三上、倉持、徳田、大田、在田、増田、中尾、中沢、若林、田中、高橋、丹保先生、水谷先生
4/29-5/5	千走－フモンナイ岳－狩場山－東の沢－東狩場山－千走	L北村（4）、SL田上（3）、津曲（2）
5/28-29	ユーフレ小屋－地獄谷経由芦別岳－熊の沢経由－ユーフレ小屋	L在田（OB2）、SL松坂（OB5）、倉持（OB3）、小林（OB2）、鳴海（OB2）、宮崎（4）、川口（2）
5/29-6/4	大雪サマースキー（第1班）清川－ニセイカウシュッペ山－層雲峡－黒岳－北海岳－旭岳－北大スロープ－愛別岳－勇駒別	L藤永（3）、SL大田（2）、津曲（2）、椛島（1）、上岡（1）
6/3-9	大雪サマースキー（第2班）勇駒別－北大スロープ（熊岳・北海岳・間宮岳）－勇駒別	L横山（3）、SL篠田（2）、伊藤（2）、熊川（1）、柳原（1）、早田（1）、東新家（1）
6/3-10	北日高サマースキー（新冠川－幌尻岳・トッタベツ岳・北トッタベツ岳でスキー－チロロ川－日高町）	L山崎雅（3）、SL畠（3）、川口（2）、先名（2）、鳴海（OB2）
6/11-17	大雪サマースキー（第3班）勇駒別－北大スロープ（熊岳・間宮岳）－勇駒別	L田上（3）、SL上野（2）、室田（1）、小祝（1）、清水（1）、富田（1）
6/12-19	大雪サマースキー（第4班）勇駒別－北大スロープ（熊岳・間宮岳）－勇駒別	L上ヶ島（3）、SL梅沢（2）、下岡（1）、貝谷（1）、間谷（1）、福島（1）、途中参加OBなど（田村夫妻、水谷先生、鳴海、増田、岡本、野原）
6/17-23	大雪サマースキー（第5班））勇駒別－北大スロープ（ピウケナイ沢・安足間岳・比布岳・熊岳・間宮岳）－勇駒別	L柳生（3）、SL砂原（2）、山口（1）、原田（1）、郡（1）、田辺（1）、山崎（4）、岡本（OB1）、野原（OB1）
7/2-3	薄別－白水川－二股－無意根小屋	L田上（3）、SL上ヶ島（3）、柳生（3）、横山（3）、梅沢（2）、先名（2）、室田（1）、小祝（1）、椛島（1）、奥谷（1）、山口（1）、清水（1）、福島（1）
7/12-16	天人峡－ポンカウンナイ川－トムラウシ山－ヒサゴ沼－忠別岳－高原温泉	L北村（4）、SL横山（3）、山口（1）、佐竹（1）
7/15-24	上札内－コイクシュサッナイ川出合（－コイカクシュ札内岳）－札内川七の沢出合（－ピラトミ山）－八の沢出合（－八の沢カール－カムイエクウチカウシ山）－十の沢－札内岳－トッタベツ川－帯広	L田上（3）、SL上ヶ島（3）、東新家（1）、熊川（1）
7/20-29	八千代－ピリカペタンヌ沢－（八の沢出合－十勝幌尻岳）－札内岳－十の沢－札内川－中札内	L奥野（4）、SL横山（3）、伊藤（2）、福島（1）、原田（1）、椛島（1）、藤瀬（1）
7/28	発寒川沢登り	L上野（2）、篠田（2）、下岡（1）、富田（1）
8/1-8	奥新冠発電所－プイラル上流ダム－幌尻岳肩－北カール－幌尻岳－七つ沼カール－トッタベツ岳－チロロ川－日高町	L宮崎（4）、SL上野（2）、篠田（2）、富田（1）、下岡（1）
8/27-31	トムラウシ温泉－トムラウシ山－ヒサゴ沼小屋－JP－川上岳－十勝三股	L大田（2）、SL先名（2）、下岡（1）、郡（1）
8/30-31	ユーフレ小屋－地獄谷経由芦別岳－見晴らし台－登山口	L藤永（3）、SL横山（3）、篠田（2）
9/23-25	層雲峡－ヤンベタップ出合－沼ノ原登山口－沼ノ原－五色岳－忠別岳－白雲・高原温泉分岐－高原温泉	L飯豊（3）、SL篠田（2）、松坂（OB5）、高畑（OB5）

55 season　1966（昭和41）年10月～1967（昭和42）年9月

部長：水谷寛

主任：飯豊利秋（3）／庶務：上ヶ島裕（3）・先名征司（2）／会計：田上省一（3）・篠田泰機（2）／リーダー会議長：飯豊利秋（3）／リーダー会：上ヶ島裕（3）・田上省一（3）・藤永徹（3）・横山雄司（3）・山崎雅昭（3）・山崎輔久（4）・宮崎敏（4）／体育会：大田霙三（2）／記録：先名征司（2）・上野将司（2）／装備：篠田泰機（2）・藤瀬浩（1）／無意根：津曲兼晴（2）・梅沢俊（1）／ロッジ：山崎輔久（4）・飯豊利秋（3）／むいね：柳生修（3）

10/5-8	浦河－上杵臼－楽古岳－十勝岳－上杵臼	L飯豊（3）、SL柳生（3）、上ヶ島（3）、田辺（1）、富田（1）
10/6-11	大樹－ポンヤオロマップ川出合（登山口）－ポンヤオロマップ岳－1519m峰－ペテガリ岳－Cカール（－ケルン－ルベツネ岳）－ペテガリ岳－1519m峰－ポンヤオロマップ岳－登山口－中札内	L横山（3）、SL先名（2）、篠田（2）、伊藤（2）、清水（1）、椛島（1）、福島（1）、田上（3）

10/8-12	振内－額平川－幌尻山荘－幌尻岳－七つ沼カール(－トッタベツ岳－ピパイロ岳)－幌尻山荘－振内	L川口(2)、SL梅沢(2)、津曲(2)、上野(2)、大田(2)、早田(1)、内藤(1)
11/21-26	白金温泉－美瑛川－美瑛富士小屋(悪天停滞)－白金温泉	L山崎輔(4)、SL横山(3)、大田(2)、上野(2)
11/22-27	勇駒別－天女が原をBCとし、各パーティに分かれて、スキーおよびアイゼン練習	L飯豊(3)、SL上ヶ島(3)、田上(3)、藤永(3)、柳生(3)、岡本(OB1)、神田(2)、梅沢(2)、川口(2)、篠田(2)、先名(2)、津曲(2)、奥谷(1)、椛島(1)、熊川(1)、郡(1)、佐竹(1)、清水(1)、下岡(1)、田辺(1)、早田(1)、富田(1)、東新家(1)、福島(1)、原田(1)、内藤(1)、柳原(1)、山口(1)、上岡(2)、藤瀬(1)
12/23-28	【第五十五シーズンニセコ合宿】於昆布温泉富士屋旅館 合宿顧問：水谷寛先生、合宿主任：飯豊利秋(3)、庶務係：上ヶ島裕(3)、会計係：柳生修(3)、食糧係：梅沢俊(2)、装備係：先名征司(2)、医療係：大田黌三(2)、記録係：川口正中(3)、芸能：上野将司(2)、津曲兼晴(2)	第1班　L北村(4)、SL梅沢(2)、荒瀬、射場本、円、山崎 第2班　L鳴海(OB2)、SL岡本(OB1)、大久保、島崎、中村 第3班　L山崎(3)、SL大田(2)、久保、山内、目 第4班　L上ヶ島(3)、SL柳生(3)、野村、石光、佐藤、蓮尾 第5班　L飯豊(3)、SL田上(3)、小林、金井、青山 第6班　L佐藤(OB1)、SL川口(2)、高橋、小西、中島 第7班　L山崎(4)、SL横山(3)、藍、池田、伊丹、飯塚、柴崎 第8班　L奥野(4)、SL先名(2)、津曲(2)、上野(2)、神田(2) 第9班　L宮崎(4)、SL柳生(3)、福島(1)、熊川(1)、椛島(1) 第10班　L在田(OB2)、SL藤瀬(1)、早田(1)、清水(1)、郡(1)山口(1) 第OB班　L若林、SL倉持、高畑、井上、中尾、三上、大田、小原、水谷先生
12/28-30	昆布温泉－チセハウス－シャクナゲ山－白樺岳－目国内岳－岩内岳－札幌	L飯豊(3)、SL山崎輔(4)、椛島(1)、郡(1)、山崎雅(3)、奥野(4)、山口(1)、福島(1)、川口(2)、熊川(1)、横山(3)、神田(2)、清水(1)、藤瀬(1)
12/30-1/5	(正月合宿)層雲峡－ヌタップヤンベツ川－五色分岐－ヒサゴ沼－トムラウシ山－ユウトムラウシ沢－トムラウシ温泉	L北村(4)、SL藤永(3)、柳生(3)、川口(2)、津曲(2)
12/31-1/9	(正月合宿)高原温泉－白雲岳－高根が原－忠別岳－五色岳－ヒサゴ沼－トムラウシ山－カブト岩－ベベツ川－上俵真布	L宮崎(4)、SL田上(3)、大田(2)、上野(2)、鳴海(OB2)
1/3-9	(正月合宿)天人峡－カウンナイ沢－トムラウシ山－トムラウシ温泉	L飯豊(3)、SL山崎雅(3)、横山(3)、梅沢(2)、先名(2)、郡(1)
1/3-11	(正月合宿)白金温泉－美瑛川－双子沼－オプタテシケ山－黄金ヶ原－トムラウシ山－カブト岩－ベベツ川－上俵真布	L山崎輔(4)、SL奥野(4)、上ヶ島(3)、神田(1)
1/15	春香山	L田上(3)、藤瀬(1)
1/26	百松橋－神威岳－烏帽子岳－西野二股	L梅沢(2)、SL大田(2)、下岡(1)
1/29	琴似発寒川－永峰沢－手稲山－奥手稲山－銭函	L上野(2)、SL大田(2)、福島(1)、柳原(1)、宮崎(4)
2/9-11	豊羽元山－千尺高地－無意根山－美比内岳－余市岳－朝里岳－ヘルベチアヒュッテ－春香山－銭函	L柳生(3)、SL上野(3)、下岡(1)
2/9-13	増毛－登山口－箸別川源頭－滝見岩－暑寒別岳－登山口	L横山(3)、SL川口(2)、藤瀬(1)、熊川(1)
2/10-12	豊滝－札幌岳－空沼岳－漁岳－オコタンペ湖－オコタン荘	L田上(3)、SL大田(2)、梅沢(2)、宮崎(4)、岡本(OB1)
3/1-4	(ニセコ強化合宿)第1班　新見温泉(－目国内岳)－白樺－シャクナゲ－チセヌプリ－ニトヌプリ－ワイスホルン－ニセコ温泉－イワオヌプリ－モイワ山－ゲレンデ	L藤永(3)、SL郡(1)、福島(1)、富田(1)、下岡(1)
3/9-17	羅臼－建根別－カモイウンペ－知床岳－羅臼－ラウス温泉－羅臼岳－岩尾別－宇登呂	L北村(4)、SL山崎雅(3)、神田(1)、清水(1)
3/16-21	勇駒別－ピウケナイ沢－北鎮岳－旭岳－間宮岳－北海岳－白雲岳－高原温泉	L上ヶ島(3)、SL梅沢(2)、先名(2)、川口(2)、山口(1)、富田(1)、藤瀬(1)、郡(1)
3/22-24	(ニセコ強化合宿)第2班　新見温泉－岩内峠－白樺－シャクナゲ－チセヌプリ－ニトヌプリ－イワオヌプリ－山の家－ワイスホルン－ニセコアンヌプリ－山田温泉	L山崎雅(3)、SL篠田(2)、大田(1)、神田(1)
4/3-13	小見駅－－和田川沿い車道－有峰ダム－中部電力有峰寮－折立ヒュッテ－太郎小屋－肩の小屋(－薬師岳・上ノ岳)－折立ヒュッテ－有峰寮－小見駅	L飯豊(4)、SL横山(4)、神田(2)、椛島(2)、藤瀬(2)
4/29-5/4	白金温泉－美瑛岳－美瑛富士－十勝岳－望岳台－白金温泉	L大田(3)、SL上野(3)、川口(3)、清水(2)、富田(2)
4/29-5/4	勇駒別－ピウケナイ沢にBC(北鎮岳、旭岳、安足間岳、比布岳、愛別岳)－勇駒別	L柳生(4)、SL藤永(4)、神田(3)、下岡(2)
4/29-5/5	増毛－雄冬山－浜益御殿－浜益岳－群別岳－南暑寒別岳－暑寒別岳－増毛	L上ヶ島(4)、SL先名(3)、梅沢(3)、山口(2)、椛島(2)
4/29-5/5	寿都－元町－フモンナイ岳－狩場山－千走川－東狩場山－元町	L上野(3)、SL篠田(3)、熊川(2)、藤瀬(2)
5/31-6/6	サマースキー　第1班	L神田(3)、SL椛島(2)、本間(1)、田中(1)、田村(1)
6/2-7	サマースキー　第2班	L先名(3)、SL藤瀬(2)、油田(1)、高橋(1)、飯田(1)、宗村(1)
6/2-10	北日高サマースキー(新冠川－幌尻岳・トッタベツ岳・北トッタベツ岳でスキー－チロロ川－日高町)	L山崎雅(4)、SL畠(4)、川口(3)、先名(3)、鳴海(OB3)
6/2-11	サマースキー　第3班	L大田(3)、SL山口(2)、津曲(3)、河野(1)、木村(1)、小山(1)
6/7-13	サマースキー　第4班	L川口(3)、SL下岡(2)、白波瀬(1)、近藤(1)、武田(1)
6/13-19	サマースキー　第5班	L上野(3)、SL富田(2)、池田(1)、市原(1)、川上(1)(16日より水谷先生、花野氏、岡本(OB2)、梅沢(3)合流)
6/16-21	サマースキー　第6班	L篠田(3)、SL熊川(2)、安藤(1)、香取(1)、西川(1)、梅沢(3)
6/24-26	(ペテガリ追悼荷揚げ)大樹－登山口－ポンヤオロマップ岳－1519m峰(デポ地)－ポンヤオロマップ岳－登山口	L飯豊(4)、SL津曲(3)、下岡(2)、室田(1)、本間(1)、田村(1)
6/25	シルバーロッジ－左股川－百松沢山	L上野(3)、SL篠田(3)、山口(2)、川上(1)、近藤(1)、田中(1)、西川(1)
6/26-27	白井二股－余市岳－白井二股	L藤永(4)、SL川口(3)、藤瀬(2)、椛島(2)、池田(1)、市原(1)、安藤(1)
6/26-27	新道－芦別岳－ユーフレ川二股－旧道登山口	L大田(3)、清水(2)
7/6-11	カウンナイ沢出合－ポンカウンナイ沢－トムラウシ山－忠別岳－高原温泉	L上野(3)、SL津曲(2)、池田(1)、市原(1)
7/9-11	豊平峡入口－空沼入沢－漁岳－オコタンペ湖－オコタン荘	L梅沢(3)、SL篠田(3)、近藤(1)、田村(1)、丸山(1)、油田(1)、鈴木(1)
7/17-25	八千代－－エサオマン沢－エサオマン東カール－JP－エサオマントッタベツ岳－北カール－新冠川二股－七つ沼カール(－幌尻岳)－トッタベツ岳－美生岳－チロロ川(－チロロ岳)－日高町	L上ヶ島(4)、SL篠田(3)、山口(1)、油田(1)、川上(1)
7/18-25	八千代発電所－ピリカペタンヌ沢－エサオマン沢－エサオマン東カール－JP－エサオマントッタベツ岳－北カール－新冠川二股－七つ沼カール(－幌尻岳)－トッタベツ岳－美生岳－チロロ川(－チロロ岳)－日高町	L飯豊(4)、SL津曲(3)、田中(1)
7/18-25	静内－銅山小屋跡－ペテガリ川－ペテガリ岳－新道との分岐で荷物回収－下降尾根－中ノ川(ケルン)－三股－ソエマツ岳直登沢－ソエマツ岳－ヌピナイ川－尾田村	L藤永(4)、SL川口(3)、藤瀬(2)
7/18-26	上札内－札内川－八の沢－カムイエクウチカウシ岳－1880m峰－1852m峰－エサオマントッタベツ岳－新冠川二股－七つ沼カール(－幌尻岳)－トッタベツ岳－ピパイロ岳－チロロ川	L横山(4)、SL富田(2)、篠田(2)、清水(2)、安藤(1)、田村(1)

7/20-26	ペテガリ追悼本隊(ペテガリ新道を経て、ペテガリCカール往復)	本隊A：L向井OB、SL豊田、南部OB、山下ご夫妻、水谷先生、本隊B：L大田(3)、SL神田(3)、下岡(2)、小山(1)塘OB、若林OB
7/22-27	ペテガリ追悼サッシビチャリ隊　静内－サッシビチャリ沢－1599峰のヤオロマップ側の稜線－ルベツネ(本体の出迎え受ける)－銅版にて追悼式－Cカール－ペテガリ岳－下降尾根－中ノ川(ケルン追悼)－三股－大樹	L田上(4)、SL先名(3)、熊川(2)、椛島(2)、岡本(OB2)《永野、在田、山下宣のOB班もほぼ同行動》
7/28-8/3	八千代－ピリカペタンヌ沢－札内岳－JP－エサオマンカール－新冠川上二股－七つ沼－北トッタベツ岳－ピパイロ岳－チロロ川－千栄	L大田(3)、SL神田(3)、下岡(2)、小山(1)
7/31-8/7	新冠－新冠川－上二股(－エサオマントッタベツ岳)－七つ沼(－幌尻岳・トッタベツ岳)－北戸蔦別岳－千呂露川－日高町	L山崎雅(4)、SL柳生(4)、市原(1)、近藤(1)、本間(1)、池田(1)
8/1-6	杉沢出合－天狗岳－ニペソツ山－(JP－石狩岳)－沼ノ原－(五色ヶ原－トムラウシ山)－白雲岳－赤岳－銀泉台	L椛島(2)、SL藤瀬(2)、川上(1)
8/4-7	天人峡－カウンナイ沢－トムラウシ山－化雲平－忠別岳－白雲石室－白雲岳－北海岳－北鎮岳－比布岳－愛山渓	L梅沢(3)、SL山崎輔(OB1)、西川(1)、宗村(1)
8/23-26	瓜幕－ユウヤンベツ川－ウペペサンケ山－糠平	L川口(3)、SL神田(3)
8/24-28	振内－幌尻山荘－七つ沼(－幌尻岳)－戸蔦別岳－北戸蔦別岳－千呂露川－千栄	L飯豊(4)、SL津曲(3)、田中(1)
8/27-9/3	樺沢小屋－三伏峠－烏帽子岳－大河内避難小屋－前岳－悪沢岳－荒川小屋－赤石岳－百閒洞小屋－兎岳小屋－聖岳－聖小屋－横窪－畑薙尻橋	L藤瀬(2)、SL椛島(2)、室田(1)
8/29-9/2	白金温泉－十勝岳－美瑛岳－美瑛富士－オプタテシケ山－銀杏ヶ原－トムラウシ山－化雲岳－五色岳－白雲石室－北海岳－層雲峡	L下岡(2)、SL安藤(1)、武田(1)、香取(1)

56 season　1967(昭和42)年10月～1968(昭和43)年9月

部長：水谷寛
主任：梅沢俊(3)／庶務：先名征司(3)／リーダー会：飯豊利秋(4)・梅沢俊(3)・川口正中(3)・先名征司(3)・大田興三(3)・藤永徹(4)／体育会：津曲兼晴(3)／無意根小屋：下岡健三(2)／記録：熊川嗣雄(2)／ロッジ：飯豊利秋(4)／装備：藤瀬浩(2)／むいね編集：大田興三(3)・神田宏(3)

10/4-5	白金温泉－吹上温泉跡－富良野岳－十勝岳－美瑛岳－ポンピ沢出合－白金温泉	L先名(3)、SL清水(1)、西川(1)、梅沢(3)、上ヶ島(4)
10/8-10	トムラウシ温泉－トムラウシ山－忠別岳－白雲避難小屋－間宮岳－愛山渓	L飯豊(4)、SL熊川(2)、池田(1)、在田(OB3)
10/14-17	十勝三股－杉沢16の沢出合－天狗－ニペソツ山－岩間温泉－十勝三股	L大田(2)、SL神田(2)、安藤(1)、近藤(1)、市原(1)、香取(1)
11/3-5	白金温泉－望岳台上でスキー練習－白金温泉	L飯豊(4)、SL下岡(2)、武田(1)
11/3-5	金山駅－熊の峰－1234m峰－タ張岳－ロッジ－明石駅	L神田(3)、SL藤瀬(2)、小山(1)、香取(1)、田中(1)
11/22-25	山部－登山口－半面山－雲峰－芦別岳－見晴台－登山口	L神田(3)、SL山口(2)、安藤(1)、油田(1)、香取(1)、田上(4)
11/23-27	白金温泉－望岳台－標高1250m付近BCとしてスキー練習および十勝岳登頂を計画するが、第1パーティが十勝岳登頂下山時天候悪化で道を失いビバーク。	第1パーティ　L藤永(4)、SL椛島(2)、郡(2)、津田(1)、田村(1)、横山(4) 第2パーティ　L川口(3)、SL津曲(3)、清水(2)、市原(1)、本間(1)
12/3-10	無意根新人合宿	記録なし
12/23-28	第56シーズンニセコ合宿　昆布温泉富士屋旅館 合宿顧問：水谷寛先生、合宿主任：梅沢俊、庶務係：先名征司、会計係：上野将司第2パーティ、食糧係：椛島和夫、本間一郎、装備係：藤瀬浩、医療係：山口弘二、記録係：下岡健三、芸能：熊川嗣雄、清水徹	第1班　L三上(OB4)、SL山崎(4)、(田口)、(鳴海)、(大坪) 第2班　L川口(3)、SL先名(3)、(丹)、(島崎)、(杉田)、(藤川) 第3班　L神田(2)、SL大田(2)、(小倉)、(降旗)、(紺谷) 第4班　L梅沢(3)、SL上野(3)、(小林)、(臼田) 第5班　L上ヶ島(4)、SL熊川(2)、藤瀬(2)、山口(2)、椛島(2) 第6班　L柳生(4)、SL下岡(2)、清水(2)、郡(2) 第7班　L藤永(4)、SL西川(1)、香取(1)、武田(1)、木村(1)、宗村(1) 第8班　L在田(OB3)、SL油田(1)、河野(1)、飯田(1)、市原(1)、油田(1) 第9班　L飯豊(4)、SL池田(1)、川上(1)、高橋(1)、近藤(1)、津田(1)、本間(1) 第10班(OB)　L鳴海、SL倉持、高畑、佐藤、清水、関矢、水谷先生
12/29-1/2	(正月合宿：ニペソツ山・ウペペサンケ山)十勝三股－杉沢出合－ラジウス不調で活動断念し下山	L川口(3)、SL先名(3)、藤永(4)、下岡(2)、熊川(2)
12/30-1/8	(正月合宿十勝岳)吹上温泉をBCに三段山、十勝岳およびスキー練習	Aパーティ　L横山(4)、SL大田(3)、梅沢(3)、清水(2)、山口(2)、郡(2) Bパーティ　L上ヶ島(4)、SL本間(1)、近藤(1)、津田(1)、宗村(1) Cパーティ　L飯豊(4)、SL池田(1)、飯田(1)、市原(1)、油田(1) Dパーティ　L柳生(4)、SL田上(4)、安藤(1)、河野(1)、武田(1)、香取(1)、川上(1)
12/30-1/9	(正月合宿裏大雪：音更岳・石狩岳・ニペソツ山】層雲峡－石狩川－音更沢出合－音更山－石狩岳－JP－小天狗(－ニペソツ)－杉沢出合－十勝三股	L山崎雅(4)、SL神田(3)、椛島(2)、藤瀬(2)
1/6	西野－百松沢山往復	L大田(3)、SL武田(1)
1/13-15	札幌－国鉄山の家－ヘルベチアヒュッテ－春香山－和宇尻山－札幌	L神田(3)、SL藤瀬(2)、河野(1)、池田浩(1)
1/27-2/3	荻伏－峠－ペツピリガイ沢－ペテガリ沢－銅山小屋跡(－ペテガリ岳)－コイカクシュ札内川－メナシュベツ川－静内	L神田(3)、SL熊川(2)、郡(2)、安藤(1)
2/2-5	余別－余別川－三角点－余別岳コル－余別岳－積丹岳－美国川－美国	L上野(3)、SL清水(2)、飯田(1)、近藤(1)
2/3-4	上川－登山口－ニセイカウシュッペ山－登山口	L飯豊(4)、SL先名(3)、池田浩(1)、高橋(1)
2/5-7	山部－登山口－半面山－雲峰－芦別岳－登山口	L梅沢(3)、SL下岡(2)、本間(1)
2/17-19	晩生内沢－隈根尻山(－チセネミリ)－晩生内	L梅沢(3)、SL上野(3)、川口(3)、椛島(2)
2/29-3/2	空沼二股－空沼岳－漁岳－オコタンペ湖－オコタン荘	L熊川(2)、SL郡(2)、飯田(1)、油田(1)、木村(1)
3/2	手稲オリンピア－手稲山－奥手稲山－銭函	L下岡(2)、SL椛島(2)、安藤(1)、宗村(1)
3/3-4	空沼二股－空沼岳－札幌岳－冷水小屋－冷水沢出合	L藤瀬(2)、SL清水(2)、池田浩(1)
3/21-25	勇駒別－ピウケナイ沢源頭(－熊岳・比布岳・チベトン沢)－勇駒別	L梅沢(3)、SL椛島(2)、武田(1)、市原(1)、池田(1)、小山(1)
3/22-27	幌加－3の沢出合－6の沢出合－鞍部(－ニペソツ山)－丸山－ウペペサンケ山(Ⅰ～Ⅴ)－糠平川	L田上(4)、SL下岡(2)、飯豊(4)、清水(2)、油田(1)、香取(1)
3/28-31	信濃四谷－細野－アルペンリフト終点－標高2000m付近(－唐松岳)－スキー練習－信濃四谷	L神田(3)、SL熊川(2)、岡本(OB2)、上野(3)、市原(1)、池田(1)、川上(1)、小山(1)、宗村(1)
4/3-5	寿都－賀老川－BC(－東狩場山)(－東狩場山－狩場山)－千走川－千走温泉	L椛島(3)、SL山口(3)、下岡(3)、油田(2)、香取(2)

4/27-5/2	振内－幌尻山荘－幌尻岳(－七つ沼)－幌尻山荘－振内	L椛島(3)、SL下岡(3)、藤瀬(3)、本間(2)、油田(2)
4/28-5/2	元町－賀老川出合－千走川－東狩場山－狩場山－フモンナイ岳－フモンナイ川－元町	L先名(4)、SL郡(3)、田村(2)、高橋(2)、津田(2)
4/28-5/2	幌－浜益御殿－浜益岳－暑寒別岳－山の神	L熊川(3)、SL清水(3)、市原(2)、近藤(2)
4/28-5/3	登山口－積丹岳－BC(－余別岳)－余別岳－ポンネアンチン山－余別岳－積丹岳－余別	L上野(4)、SL池田(2)、小山(2)、武田(2)
4/28-5/3	白金温泉(－美瑛富士)－美瑛岳－十勝岳－上ホロカメットク山－富良野岳－望岳台	L神田(4)、SL安藤(2)、飯田(2)、香取(2)
4/28-5/5	無意根ゴールデンウイーク合宿(毎日テラスでスキー練習)	川口(4)、梅沢(4)、大田(3)、西川(2)、宗村(2)、川上(2)、木村(2)、池田精(1)、輪島(1)、青木(1)、高木(1)、坂本(1)、国本(1)、山中(1)、中井(1)、嶋津(1)、岡野(1)、石川(1)、長沼(1)、小林(1)、原(1)、丸山(1)、大沢(1)、仙北谷(1)、内田(1)、西原(1)、斉藤(1)、石丸(1)、菊池(1)、片岡(1)、小池(OB3)、江幡OB(3)、飯豊(OB1)、柳生(OB1)
5/11-12	山部－登山口－半面山－雲峰－芦別岳－登山口	L郡(3)、SL津田(2)、川上(2)、香取(2)
5/31-6/5	白金温泉－美瑛富士小屋(－美瑛富士・オプタテシケ山)－望岳台－白金	L郡(3)、SL池田(2)、長沼(1)
6/4-6	南暑寒荘－雨竜沼－南暑寒岳－暑寒岳－山の神	L大田(4)、SL下岡(3)、輪島(1)、高木(1)、池田(1)
6/4-9	(サマースキー)勇駒別－石室(－旭岳)(－旭岳・愛別岳・比布岳)(－熊岳・北鎮岳)－勇駒別	L椛島(3)、SL田村(2)、小山(2)、岡野(1)、国本(1)、石丸(1)、嶋津(1)
6/5-10	(サマースキー)勇駒別－石室(－旭岳)(－旭岳・安足間岳)(－熊岳・後旭岳)－勇駒別	L山口(3)、SL本間(2)、宗村(2)、高橋(2)、小林(1)、坂本(1)、内田(1)
6/8-12	(サマースキー)勇駒別－石室(－旭岳)(－熊岳・後旭岳)－勇駒別	L清水(3)、SL河野(2)、池田精(1)、大沢(1)、片岡(1)、原(1)
6/12-17	(サマースキー)高原温泉－白雲石室(－白雲岳・北海岳)(－熊岳・旭岳)(－後旭岳)－旭岳－勇駒別	L藤瀬(3)、SL飯田(2)、川上(2)、木村(2)、青木(1)、高木(1)、長沼(1)
6/13-14	ラルマナイ沢－空沼岳－定山渓	L椛島(3)、SL小山(2)、香取(2)、石丸(1)
6/16-23	(サマースキー)勇駒別－石室－旭岳(－旭岳・熊岳・間宮岳)(－旭岳・後旭岳)－勇駒別	L下岡(3)、SL市原(2)、津田(2)、池田(1)、石川(1)、仙北谷(1)、中井(1)途中から水谷先生・豊田昭・近藤(2)参加
6/19-26	(サマースキー)勇駒別－石室－旭岳(－北鎮岳・比布岳・間宮岳)(－旭岳・ピウケナイ沢)(－旭岳・熊岳・安足間岳)－勇駒別	L郡(3)、SL安藤(2)、武田(2)、西川(2)、西原(1)、山中(1)、輪島(1)
6/19-23	(サマースキー)勇駒別－石室(－旭岳・北鎮岳・熊岳・)(－旭岳・ピウケナイ沢・愛別岳・比布岳)－勇駒別	L大田(4)、SL油田(2)、香取(2)、国本(1)、丸山(2)、黒沢(1)
6/22-23	平和の滝－発寒川－尾根－星置川－手稲鉱山	L椛島(3)、SL池田(2)、川上(2)、岡野(1)、嶋津(1)
6/22-23	豊羽元山－余市岳往復	L清水(3)、SL田村(2)、片岡(1)、高木(1)、梅沢(4)
6/29	白水沢－鞍部－無意根ケルン－無意根小屋－薄別	L小山(2)、SL油田(2)、藤瀬(3)、安藤(2)、飯田(2)、市原(2)、武田(2)、高橋(2)、津田(2)、西川(2)
7/4-5	オコタン－恵庭岳頂上直下－オコタンペ川－美笛	L上野(4)、SL郡(3)、青木(1)
7/6	定山渓－イワナ沢－定山渓天狗岳－天狗橋	L神田(4)、SL藤瀬(3)、田村(2)、市原(2)
7/12-18	千栄－千呂露川－1950m峰－北戸蔦別岳－戸蔦別岳－七つ沼(－幌尻岳)－新冠川上二股－エサオマン北カール－エサオマントッタベツ岳－九の沢カール上(－カムイエクウチカウシ山)－九の沢カール－札内川－上札内	L梅沢(4)、SL椛島(3)、池田(1)、国本(1)
7/13-18	十勝三股－杉沢出合－天狗下コル(－ニペソツ山)－岩間温泉－ブヨ沢(－ユニ石狩)－音更岳－石狩岳－五色岳－トムラウシ山－化雲岳－天人峡	L香取(2)、SL大沢(1)、坂本(1)
7/13-19	中札内－札内川九の沢－カムイエクウチカウシ山－エサオマントッタベツ岳－北カール－札内岳－ピリカペタン八の沢－十勝幌尻岳－戸蔦別川－八千代	L上野(4)、SL郡(3)、安藤(2)、津田(2)、青木(1)、長沼(1)
7/23-26	天人峡－カウンナイ川－ヒサゴ沼－高原温泉	L清水(3)、SL津田(2)
7/26-8/2	中札内－コイカクシュ札内川－コイカクシュサツナイ岳－九の沢－九の沢カール(－カムイエクウチカウシ山)－1852m峰－エサオマントッタベツ岳－北カール－新冠川上二股－七つ沼－幌尻岳－幌尻山荘－振内	L下岡(3)、SL山口(3)、飯田(2)、嶋津(1)、輪島(1)
7/26-8/4	静内－サッシビチャリ沢－ヤオロマップ岳(－1839峰)－ルベツネ岳－Cカール－ペテガリ岳－中の川上二股－(山下・山室先輩慰霊)－三股(田村負傷)－大樹	L神田(4)、SL藤瀬(3)、田村(2)、市原(2)
7/30-8/6	芽室－上美生－美生川－ピパイロ岳－北戸蔦別岳－七つ沼(－幌尻岳)－新冠川上二股－エサオマントッタベツ岳北カール－エサオマントッタベツ岳－カムイエクウチカウシ山－八の沢－札内川	L先名(4)、SL近藤(2)、武田(2)、高橋(2)、岡野(1)
7/30-8/6	羅臼－セセキ浜－ウナキベツ川－知床池－知床岳－昆布岳－羅臼温泉－羅臼平(－羅臼岳)－硫黄山－岩尾別温泉	L津田(2)、SL油田(2)、小林(1)
8/4-8/11	上札内－札内川－八の沢－下降尾根－カムイエクウチカウシ山－十の沢－十の沢カール－エサオマントッタベツ岳－北カール－新冠川上二股－七つ沼－幌尻岳－ポロシリ山荘－振内	L横山(OB1)、SL清水(3)、池田(2)、高木(1)、片岡(1)、中井(1)
8/8-12	ウナキベツ川河口(－無名湖－頂上直下)－羅臼温泉－里見台－羅臼岳－サシルイ岳－オッカバケ岳－二つ池－知円別岳－硫黄山－新噴火口－林道	L近藤(2)、黒沢(1)
8/10-17	静内－コイボクシュシビチャリ川－ピラミッド峰－カムイエクウチカウシ山－春別岳－エサオマントッタベツ岳－北カール－新冠川上二股－七つ沼－幌尻岳－幌尻山荘－振内	L川口(4)、SL熊川(3)、小山(2)、油田(2)
8/22-27	天人峡－カウンナイ沢－二股(雨で停滞引き返す)	L川口(4)、SL大田(3)、椛島(3)、下岡(3)、石川(1)、大沢(1)、坂本(1)
8/22-31	(トムラウシ集中)天人峡－ポンカウンナイ川－二股－化雲岳－ヒサゴ沼分岐(－トムラウシ山)－ヒサゴ沼－五色岳－石狩岳－音更山－ユニ石狩岳－十勝三股	L小山(2)、SL武田(2)、嶋津(1)、高木(1)
8/23-28	(トムラウシ集中)十勝三股－ブヨ沢－音更岳－石狩岳－五色岳－ヒサゴ沼－化雲岳－天人峡	L津田(2)、SL高橋(2)、中井(1)
8/23-29	十勝岳温泉－富良野岳－上ホロカメットク山－十勝岳－美瑛岳－美瑛小屋－オプタテシケ山－トムラウシ山－北沼－トムラウシ温泉	L田村(2)、SL西川(2)、香取(2)、輪島(1)、仙北谷(1)
8/24-28	(トムラウシ集中)愛山渓(26日まで悪天停滞)－永山岳－安足間岳－比布岳－北鎮岳－黒岳石室(悪天トムラ行断念)－層雲峡	L近藤(2)、SL本間(2)、安藤(2)
8/24-29	(トムラウシ集中)層雲峡－黒岳－北海岳－白雲石室－忠別岳－五色岳－ヒサゴ沼(－トムラウシ山)－化雲岳－天人峡	L飯田(2)、SL池田(2)

9/22-28	大樹－ペテガリ新道登山口－ポンヤオロマップ岳－ペテガリ岳－Cカール－ルベツネ山－ヤオロマップ岳－コイカクシュサツナイ岳－コイカクシュ札内川－札内川－上札内	L近藤(2)、SL田村(2)、池田浩(2)
9/30-10/2	漁入小屋－二股－漁岳－オコタンペ湖－支笏湖	L香取(2)、SL飯田(2)、岡野(1)、嶋津(1)

57 season　1968(昭和43)年10月～1969(昭和44)年9月

部長：水谷寛
主任：下岡健藏(3)／庶務：清水徹(3)／会計：郡庸郎(3)／リーダー会：神田宏(4)・川口正中(4)・椛島和夫(3)・下岡健藏(3)・熊川嗣雄(3)・藤瀬浩(3)／無意根小屋：油田厚生(2)／記録：武田康夫(2)／装備：小山滋(2)／体育会：田村和久(2)／ロッジ：川口正中(4)／むいね編集：椛島和夫(3)・藤瀬浩(3)

10/1-6	中札内－札内川八の沢－カムイエクウチカウシ山－下降尾根－札内川十の沢－札内岳分岐峰－札内岳－ピリカペタン沢－トッタベツ川－八千代	L下岡(3)、SL椛島(3)、国本(1)、黒澤(1)
10/4-5	層雲峡－白水沢出合－飯場－林道終末－大滝－上二股－黒岳石室－熊おはち－旭岳－石室－勇駒別	L藤瀬(3)、本間(2)、高木(1)
10/5-6	清川－ニセイカウシュッペ山－清川	L神田(4)、SL香取(2)、川上(2)、仙北谷(1)、山中(1)、小林(1)、長沼(1)、岡野(1)
10/5-8	静内－サッシビチャリ出合－ペテガリ西沢出合－ヤオロマップ沢出合－稜線・コイカクシュ札内岳－コイカク沢－中札内	L大田(4)、SL清水(3)、飯田(2)、津田(2)
10/6-9	幌加温泉－ニペソツ頂上－小天狗分岐－岩間温泉－シュナイダーコース－石狩岳頂上－音更山－十石峠－ユニ石狩岳－十勝三股－糠平－ウペペサンケ－糠平	L熊川(3)、池田(1)、中井(1)、丸山(1)、輪島(1)
10/7-8	天塩ヒュッテ－天塩岳－天塩ヒュッテ	L香取(2)、SL川上(2)、岡野(1)、小林(1)、仙北谷(1)、長沼(1)、山中(1)
10/8-9	登山口－武利岳－武華岳－イトムカ鉱山	L郡(3)、SL宗村(2)、石丸(1)、大沢(1)、内田(1)、原(1)
10/9-12	金山－登山口－タ張直下稜線－(腰までのラッセルで夕張岳は断念)－大夕張営林署小屋－赤石	L市原(2)、SL武田(2)、近藤(2)、高橋(2)、国本(1)
10/10-11	美国－登山口－夏道－積丹岳－美国	L黒澤(1)、SL高木(1)、石川(1)
11/2-6	幌加温泉－ニペソツ山－幌加温泉－御影－二股登山口－芽室岳－国道39号	L梅沢(4)、SL津田(2)、片岡(1)
11/21-24	登山口－うぐいす峠－芦別岳－登山口	L郡(3)、SL市原(2)、高橋(2)、木村(2)、丸山(1)、坂本(1)
11/21-25	勇駒別－天女ヶ原－石室付近でスキー練習－旭岳－天女ヶ原－勇駒別	L川口(4)、SL飯田(2)、津田(2)、片岡(1)、長沼(1)、輪島(1)
11/22-25	白金温泉－望岳台－十勝岳頂上直下－スキー練習－白金温泉	L太田(4)、SL熊川(3)、国本(1)、石川(1)、嶋津(1)、高木(1)、山中(1)、神田(4)
11/25-28	登山口－半面山－雲峰山－芦別岳頂上手前－雲峰岳－登山口	L清水(3)、SL小山(2)、大沢(1)、原(1)、青木(1)
12/26-1/3	(正月合宿)愛山渓温泉－ピウケナイ沢当麻乗越－ピウケナイ本流－熊ヶ岳北面－旭岳往復－間宮岳－北海岳－白雲岳－石室－緑岳－高原温泉－ヤンベタップ出合い－層雲峡	CL太田(4)、SL椛島(3)、池田(2)、香取(2)、小山(2)、油田(2)、L上野(4)、SL藤瀬(3)、安藤(2)、高橋(2)、武田(2)、津田(2)
12/28-1/4	(正月合宿)幌加－七の沢出合－大平－ニペソツ山－大平－丸山－東丸山－ウペペサンケ第五峰－糠平	L川口(4)、SL下岡(3)、飯田(2)、近藤(2)
12/28-1/7	(正月合宿)凌雲閣－三峰山－富良野岳－上ホロカメット山－－十勝岳－美瑛岳－美瑛富士コル－オプタテシケ山－－白金温泉	L梅沢(4)、SL熊川(3)、市原(2)、田村(2)
12/30-1/4	(正月合宿)層雲峡－ペンケチャロマップ－シビナイ川出合－忠別岳－忠別沼－高原温泉－白雲岳－石室－ヤンベ出合－ペンケ	CL先名(4)、SL柳生(OB1)、黒澤(1)、中井(1)、嶋津(1)、片岡(1)、L清水(3)、SL郡(3)、長沼(1)、高木(1)、輪島(1)、岡野(1)
1/9-11	坊平－熊野岳－地蔵岳－地蔵岳避難小屋－ユートピアゲレンデ－温泉	L武田(2)、SL高橋(2)、大沢(1)、池田(1)
1/9-14	八千代－エサオマントツタベツ川出合－カムイ冬尾根－ル－エサオマントッタベツ岳－エサオマントツタベツ川出合－八千代	L神田(4)、SL椛島(3)、津田(2)、油田(2)
1/10-12	チセハウス－シャクナゲ頂上－チセハウス－山の家－イワオヌプリ－ニセコアンヌプリ－山田温泉	L飯田(2)、SL池田(2)、大田(4)、下岡(3)、近藤(2)、岩井(1)、片岡(1)、高木(1)、長沼(1)
1/11-13	ロッジ－パラダイス－手稲山－奥手稲山－ヘルベチヤヒュッテ－春香山－銭函	L安藤(2)、SL香取(2)、輪島(1)、関(1)
1/24-26	パラダイス－手稲山－奥手稲山－ヘルベチヤ小屋－高原橋－銀嶺荘－春香山－ゲレンデ	L飯田(2)、SL小山(2)、嶋津(1)、高木(1)
1/25	百松沢橋－神威下－烏帽子岳－百松南峰－福井堰堤	L油田(2)、SL高橋(2)、宮永(1)、池田(1)、岩井(1)
1/25-28	登山口－札幌岳－空沼岳－漁岳－オコタンペ湖－オコタン荘	L田村(2)、SL香取(2)、岡野(1)、坂本(1)
1/26	百松橋－神威岳真下－烏帽子岳－百松沢山－林道－福井堰堤	L武田(2)、SL市原(2)、丸山(1)、輪島(1)
2/8-11	雲谷スキー場－岩木山展望台－萱野茶屋－田茂摘沢－寒水沢－酸ヶ湯温泉－八甲田大岳－萱野茶屋－雲谷スキー場	L安藤(2)、SL富田(3)、西川(2)
2/8-13	上川－陸万－北鎮岳－鋸岳の西－陸万	L上野(4)、SL梅沢(4)、津田(2)、坂本(1)
2/11	百松橋－神威岳－烏帽子岳－林道－西野二股	L小山(2)、SL飯田(2)、香取(2)、神田(4)
2/26-28	豊羽－千尺高地－無意根小屋－スキー練習－薄別	L中井(1)、SL高木(1)、片岡(1)、池田(1)
3/3-8	勇駒別－石室－鋸岳下－北鎮岳－リクマンベツ沢上流－比布岳－石室下－勇駒別	L梅沢(4)、SL油田(2)、飯田(2)、中井(1)、嶋津(1)、青木(1)、池田(1)、岩井(1)、水谷先生
3/5	ロッジ－平和第二の滝－手稲山－パラダイスヒュッテ－ゲレンデ	L上野(4)、SL大田(4)、石川(1)、長沼(1)
3/5-7	豊羽－無意根小屋－シャンツェでスキー練習－小屋－薄別	L小林(1)、SL坂本(1)、宮永(1)、藤短大2名
3/7-9	(ニセコ強化])新見温泉－目国内だけ－シャクナゲ岳－チセヌプリ－ニトヌプリ－山の家－イワオヌプリ－ワイスホルン－ニセコアンヌプリ－比羅夫	藤瀬(3)P、田村(2)、小山(2)、近藤(2)、高橋(2)、津田(2)
3/8-9	(ニセコ強化)新見温泉－シャクナゲ岳－チセヌプリ－ニトヌプリ－イワオヌプリ－山の家－モイワ山－狩太	大田(4)P、片岡(1)、黒澤(1)、高木(1)、輪島(1)
3/12-16	増毛－1075m峰下－暑寒別岳－1075m峰－山の神	L先名(4)、SL香取(2)、坂本(1)、小林(1)、宮永(1)
3/13-15	空沼登山口－万計沼－空沼岳－漁岳－オコタンペ湖－オコタン荘	L近藤(2)、SL清水(3)、石川(1)、国本(1)、原(1)
3/13-15	空沼登山口－万計沼－空沼岳－漁岳－オコタンペ湖－オコタン荘	L高橋(2)、SL油田(2)、中井(1)、池田(1)、岩井(1)
3/13-20	日勝峠－1576m峰－芽室岳－1604m手前－ルベシベ山－芽室岳－標高尾根－御影	L神田(4)、SL上野(4)、飯田(2)、小山(2)、嶋津(2)、長沼(1)
3/15-25	八千代－トッタベツ川－八の沢出合－札内岳－JP－エサオマントッタベツ岳－JP－十の沢－八の沢－カムイエクウチカウシ山－札内川－上札内	L大田(4)、SL梅沢(4)、津田(2)、黒澤(1)
3/21-23	(ニセコ強化)新見温泉(－目国内岳)－チセヌプリ－チセハウス－チセヌプリ－ニトヌプリ－山の家－狩太	椛島(3)P、石川(1)、池田(1)、原(1)

3/21-23	(ニセコ強化)新見温泉－シャクナゲ岳－チセヌプリ－ニトヌプリ－山の家－イワオヌプリ－山の家－モイワ山－倶知安	郡(3)P、宮永(1)、国本(1)、坂本(1)
3/22-24	(ニセコ強化)新見温泉－シャクナゲ岳－チセヌプリ－ニトヌプリ－山の家－イワオヌプリ－ワイスホルン－ニセコアンヌプリ－比羅夫	下岡(3)P、中井(1)、青木(1)、岡野(1)、小林(1)、岩井(1)
3/24-26	(ニセコ強化)新見温泉－シャクナゲ岳－チセヌプリ－ニトヌプリ－イワオヌプリ－山の家－ワイスホルン－ニセコアンヌプリ－比羅夫	神田(4)P、飯田(2)、長沼(1)、嶋津(1)
3/25-29	勇駒別－姿見－－ピウケナイ－安足間－熊が岳－姿見石室付近を滑る－天女が原－勇駒別	L飯豊(OB1)、SL武田(2)、高橋(1)、坂本(1)、石川(1)、高木(1)
3/25-4/4	松本－坂巻温泉－中の湯－釜トン－木村小屋－西穂山荘－西穂高－木村小屋－徳沢－長堀山－蝶ケ岳小屋－常念岳－長堀山－徳沢－白沢出合－徳本峠－梓川出合－島々駅	L藤瀬(3)、SL清水(3)、田村(2)、油田(2)、輪島(1)
3/27-28	百松橋－神威岳－烏帽子岳－百松沢山－宮城の沢上二股－平和の滝	L黒澤(1)、SL岡野(1)、坂本(1)、小林(1)
4/1-4	山形－月山沢－姥沢小屋－姥が岳－月山－志津－月山沢－山形	L武田(2)、SL高橋(2)、高木(1)、石川(1)
4/26-5/2	千栄－千呂露川二の沢出合－糠平岳－トッタベツ岳－七つ沼－幌尻岳－北カール－幌尻山荘－振内	L津田(3)、SL油田(3)、片岡(2)、中井(2)
4/28-5/2	山部－半面山－芦別岳－鉢盛山－タ張岳－タ張岳ヒュッテ	L太田(OB1)、SL武田(3)、長沼(2)、宮永(2)
4/28-5/5	トムラウシ温泉－クジラの背下－双子沼－オプタテシケ山－美瑛小屋－美瑛富士－白金温泉	L市原(3)、SL近藤(3)、嶋津(2)、青木(2)
4/29-5/4	登山口－クエドスベツ沢源頭－積丹岳－余別岳－ポンネアンチン山－柵内山－余別岳－積丹岳－登山口	L藤瀬(4)、SL香取(3)、石川(2)、岩井(2)、原(2)
4/29-5/4	勇駒別－石室－ピウケナイ温泉－旭岳－リクマンベツ源頭－安足間岳－北鎮岳－旭岳－熊岳－リクマンベツ－黒岳－層雲峡	L熊川(4)、SL高橋(3)、岡野(2)、黒澤(2)、小林(2)
5/31-6/7	(サマースキー)勇駒別－ピウケナイ温泉－北鎮東斜面をスキー－旭岳－北大スロープ－石室－勇駒別	L香取(3)、SL黒澤(2)、宮永(2)、柿木(1)、後藤(1)
6/4-9	(サマースキー)勇駒別－石室－旭岳－熊が岳－お鉢－石室－勇駒別	L武田(3)、SL小林(2)、岡野(2)、中井(2)、渡辺(1)、台(1)
6/5-11	(サマースキー)勇駒別－石室－北大スロープ－旭岳－熊岳－勇駒別	L近藤(3)、SL片岡(2)、石川(2)、酒谷(1)、水谷(1)
6/12-17	(サマースキー)勇駒別－姿見－北大スロープ－旭岳－後旭岳－ピウケナイ温泉－熊ヶ岳－北大スロープ－姿見－勇駒別	L小山(3)、SL嶋津(2)、原(2)、皿田(1)、須川(1)、緑川(1)、神田(OB1)
6/14	薄別－白水沢－中岳－無意根山－無意根小屋－薄別	L香取(2)、SL岡野(1)、宮永(1)
6/14-21	(サマースキー)勇駒別－石室－北大スロープ－旭岳－安足間岳－比布岳－北鎮岳－石室－勇駒別	L田村(3)、SL坂本(2)、池田(2)、松岡(1)、樋口(1)、伊藤(1)
6/15	木挽沢出合－神威岳－林道	L市原(3)、SL小林(2)、石川(2)、藤瀬(4)
6/17-19	鬼脇－ヤムナイ沢出合－利尻岳－夏道分岐点標高650m－鬼脇	L津田(3)、SL近藤(3)、青木(2)、高木(2)、長沼(2)
6/17-24	(サマースキー)勇駒別－石室北大スロープ－旭岳－ピウケナイ沢－旭岳－間宮岳－北鎮岳－石室－勇駒別	L油田(3)、SL中井(2)、岩井(2)、柿木(1)、後藤(1)、田井中(1)
6/19	福井堰堤－常次本流－百松沢山－宮城の沢－林道－平和の滝	L香取(3)、SL小林(2)、石川(2)、酒谷(1)
6/21-22	白水沢出合－二股－夏道－ケルン－無意根小屋－薄別	L椛島(4)、SL嶋津(2)、水谷(1)、須川(1)、部外者2名
6/21-22	美国－伊佐内川－積丹岳－夏道－美国	L武田(3)、SL片岡(2)、原(2)、小林(2)
6/21-24	(サマースキー)勇駒別－石室－旭岳－北大スロープ－地獄谷－勇駒別	L市原(3)、SL長沼(2)、青木(2)、高木(2)
6/25-26	手稲鉱山－滝の沢－稜線－発寒川－平和の滝	L香取(3)、SL坂本(2)、酒谷(1)、樋口(1)
6/27-29	登山口－空沼入沢出合－二股－漁岳－オコタンペ湖－オコタン荘	L飯田(3)、SL岡野(2)、青木(2)、石川(2)、長沼(2)、松井(1)
6/28-29	西野ターミナル－発寒川－稜線－星置川－林道－札樽国道	L近藤(3)、SL油田(3)、池田(2)、宮永(2)
6/29	木挽沢出合－神威岳－札幌	L小山(3)、SL郡(4)、原(2)、坂本(2)、岩井(2)、酒谷(1)
6/29	百松橋－神威岳手前－木挽沢－小樽内川出合－札幌	L津田(3)、片岡(2)、黒澤(2)、椛島(4)
7/2-6	天人峡－ポンカウンナイ出合－夏道出合－トムラウシ山－化雲岳－五色岳－沼ノ原－ヤンベタップ出合－層雲峡	L小山(3)、SL香取(3)、岡野(2)、坂本(2)
7/2-6	新得－二股－鉱山小屋跡－松葉の滝－トムラウシ川－温泉小屋－源頭－沼ノ原－シビナイ川出合－五色沢－クチャンベツ川－国道	L津田(3)、SL黒澤(2)、嶋津(2)
7/3	薄別－白水沢－無意根山－無意根小屋	L長沼(2)、SL中井(2)、後藤(1)、田井中(1)
7/4	薄別－白水沢－源頭－無意根山－無意根小屋－薄別	L油田(3)、SL高木(2)、安田(1)、皿田(1)
7/5	薄別－白水沢－最初の二股を右へ引きかえす－二股－薄別	L片岡(2)、SL岩井(2)
7/5-6	薄別－白水沢－二股－夏道－無意根小屋－薄別	L市原(3)、SL小林(2)、台(1)、樋口(1)、大沢(1)
7/6	薄別－白水沢－稜線コル－ケルン－無意根小屋－薄別	L在田(OB5)、SL近藤(3)、石川(2)、緑川(1)
7/10	木挽沢沢登り	L高木(2)、SL中井(2)、嶋津(2)、池田(2)
7/10-11	薄別－白水沢－源頭－無意根山－無意根小屋－薄別	L岡野(2)、SL原(2)、松井(1)
7/11-15	萩伏－ニシュオマナイ沢二股－中の岳－二股－神威岳－二股－夏道－荻伏	L椛島(4)、SL津田(3)、片岡(2)、黒澤(2)
7/12-13	薄別－白水沢－稜線コル－ケルン－無意根小屋－薄別	L池田(2)、SL岩井(2)、坂本(2)、柿木(1)
7/15-20	高原温泉－高根ヶ原－忠別岳－化雲岳－ヒサゴ沼－沼の原分岐－JP(－石狩岳)－天狗岳(－ニペソツ岳)－杉沢－十勝三股	L小林(2)、SL青木(2)、台(1)、樋口(1)
7/17-19	金山－登山口－小タ張岳－タ張岳－－ガマ岩－登山口－タ張	L岩井(2)、伊藤(1)
7/19-25	奥新冠ダム－カムイ二股－エサオマントッタベツ岳－カムイエクウチカウシ山－札内川八の沢－六の沢－十勝幌尻岳－オピリネップ沢－戸蔦別川－八千代	L熊川(4)、SL油田(3)、池田(2)、原(2)、後藤(1)、松井(1)
7/21-27	大町－七倉沢出合－濁小屋－烏帽子岳－三ツ岳－野口五郎岳－ワリモ乗越－鷲羽岳－三俣蓮華岳－ワリモ乗越－祖父岳－雲の平テント場－薬師沢出合－太郎小屋－薬師山荘－薬師岳－折立－小見	L近藤(3)、皿田(1)
7/21-30	静内－コイボクシュシビチャリ川－1823直登沢出合－コイカク出合－1839m峰－コイボク乗越沢出合－コイボク出合－カムイエクウチカウシ南カール－カムイエクウチカウシ山－札内川八の沢－上札内	L藤瀬(4)、中井(2)、嶋津(2)
7/22	岩魚沢－定山渓天狗岳－熊の沢コース下山	L小山(3)、SL飯田(3)、高木(2)、長沼(2)、渡辺(1)
7/24-31	シベチャリ橋－大滝－稜線－ペテガリC カ－ル－ペテガリ岳－下降尾根分岐－本流出合－中ノ川－上二股ケルン－三股－ソエマツ沢－ソエマツ岳－ヌピナイ上二股－ピリカヌプリ－ヌピナイ沢下二股－車道	L椛島(4)、SL津田(3)、黒澤(2)、片岡(2)
7/27	蝦蟇沢入口－940m二股－稜線－札幌岳－定山渓	L田村(3)、酒谷(1)
7/27-30	天人峡－カウンナイ沢－化雲岳－クチャンベツ－ヤンベタップ出合－層雲峡	L武田(3)、SL小林(2)、岡野(2)、岩井(2)、水谷(1)、藤永(OB2)

7/28-8/5	上美生－林道終点－北トッタベツ岳－トッタベツ岳－七ツ沼－新冠上二股－北カール－エサオマントッタベツ岳－札内岳－札内川－札内ヒュッテ	L小山(3)、SL飯田(3)、高木(2)、長沼(2)、渡辺(1)
7/30-8/4	白金温泉－美瑛小屋－オプタテシケ山－銀杏が原－トムラウシ山－化雲岳－忠別沼－高原温泉	L池田(2)、下岡(4)、伊藤(1)
8/3-7	白金温泉－美瑛小屋(－美瑛岳)－オプタテシケ山－銀杏が原－トムラウシ山－化雲岳－忠別岳－高原温泉	L坂本(2)、SL中井(2)、田井中(1)、酒谷(1)、松岡(1)
8/4-7	天人峡－カウンナイ沢－夏道出合－ヒサゴ沼－五色岳－チャンベツ－層雲峡	L油田(3)、SL原(2)、松坂(OB8)
8/7-12	川入登山口－御沢小屋－地蔵－三国－飯豊本山－御西小屋－かいらぎ小屋－湯の平温泉－東赤谷駅	L西川(3)、SL香取(3)、安藤(3)、部外(高3)
8/7-13	羅臼－セセキ－観音岩－ワナキベツ川－知床池－沼の平－知床岳－ウナキベツ河口－昆布浜－羅臼－羅臼岳－三つ峰－サシルイ山－オツカバケ山－硫黄山－カムイワッカ河口－斜里	L宮永(2)、SL池田(2)、柿木(1)、須川(1)
8/7-13	羅臼－屏風岩－羅臼平－羅臼岳－サシルイ山－オツカバケ山－二つ池－南岳肩－三本槍－硫黄山－二つ池－羅臼平－岩尾別温泉	L高木(2)、SL嶋津(2)、松井(1)
8/8-10	千栄－チロロ川－林道終点－三の沢出合－大滝直下(事故発生)－林道	L郡(4)、SL武田(3)、岡野(2)、岩井(2)
8/10-17	羅臼－合泊－観音岩－知床池－知床岳－観音岩－合泊－トッカリムイ－羅臼温泉－羅臼平－羅臼岳－岩尾別温泉	L中井(2)、SL黒澤(2)、後藤(1)、大沢(1)、水谷(1)
8/11	薄別－白水沢－－稜線コル－無意根山－無意根小屋－薄別	L田村(3)、小林(2)、坂本(2)
8/15-23	静内－イドンナップ川－イドンナップ岳－ポンイドンナップ川下二股－カムイエクウチカウシ沢出合－春別岳－十の沢カール－カムイエクウチカウシ岳－エサオマントッタベツ岳－新冠川上二股－奥新冠ダム－新冠	L在田(OB5)、SL近藤(3)、石川(2)、緑川(1)、皿田(1)、柳生(OB2)
9/7-10	白馬－黒菱平－第二ケルン付近－唐松岳－不帰Ⅱ峰北峰－天狗山荘前のキャンプ地－鑓岳－白馬岳－雪倉岳－朝日岳－朝日小屋－イブリ山－北又谷北又小屋－小川温泉	L油田(3)、SL池田(2)、安田(1)、松井(1)
9/22-25	ペテガリ山荘－ペテガリ岳－ルベツネ山－1599m峰－ヤオロマップ岳－1839m峰－コイカクシュ札内岳－コイカクシュ札内沢－札内川－札内ヒュッテ	L中井(2)、SL嶋津(2)、坂本(2)、小林(2)
9/90-10/4	旭川－カウンナイ沢－860m－天人峡	L飯田(3)、SL津田(3)、松岡(1)、渡辺(1)

58 season　1969(昭和44)年10月～1970(昭和45)年9月

部長：水谷寛

主任：飯田修(3)／庶務：岡野史郎(2)／会計：香取民生(3)／リーダー会議長：田村和久(3)／会員：市原成典(3)・飯田修(3)・近藤博(3)・椛島和夫(4)・下岡健藏(4)／体育会：国本用哲(2)・原修三(2)／無意根小屋：黒澤努(2)／奥手稲小屋：坂本武英(2)／記録：嶋津隆(2)／気象：津田誠(3)・香取民生(3)・黒澤努(2)／装備：油田厚生(3)・青木康明(2)・中井強(2)／医療：高木知敬(2)／食料：市原成典(3)・小林博和(2)・長沼昭夫(2)／図書：石川由紀子(2)・岩井利夫(2)／トレーニング：中井強(2)／むいね編集：津田誠(3)・油田厚生(3)・岡野史郎(2)・宮永博(2)・池田精寿(2)

10/2-6	新冠発電所－エサオマン北カール－JP－札内川九の沢カール－カムイエクウチカウシ山－ピラミッド－1780峰－1823峰－コイカクシュサツナイ岳－札内川－札内ヒュッテ	L田村(3)、SL市原(3)、小林(2)、坂本(2)、宮永(2)
10/4-8	千栄－チ呂露川二股沢－2の沢夏道－国境稜線－北戸蔦別岳－七つ沼－幌尻岳－額平川－幌尻山荘	L油田(3)、SL嶋津(2)、池田(2)、皿田(1)、大沢(1)、郡(4)
10/15-16	山部－ユーフレ小屋－覚太郎コース偵察－芦別岳－半面山－ユーフレ小屋－山部	L油田(3)、SL国本(2)、樋口(1)、皿田(1)
10/30-11/3	金山－登山口－タ張岳－ガマ岩－登山口－明石	L香取(3)、SL高木(2)、後藤(1)、柿木(1)
10/31-11/4	勇駒別－登山口－壁下－石室付近でスキー－旭岳－勇駒別	L油田(3)、SL黒澤(2)、坂本(2)、大沢(1)、皿田(1)
10/31-11/4	勇駒別－登山口－壁下－石室付近でスキー－旭岳－勇駒別	L下岡(4)、SL中井(2)、国本(2)、原(2)、水谷(1)、大田(OB1)
11/2-4	山部－ユーフレ小屋－雲峰－本峰－小屋－下山	L市原(3)、SL岡野(2)、椛島(4)、石川(2)
11/11-15	勇駒別－壁下－BC－旭岳－BC付近にてスキー－勇駒別	L津田(3)、SL嶋津(2)、長沼(2)、岩井(2)、石川(2)、松井(1)
11/12-16	勇駒別－天女ヶ原－石室付近にてスキー－旭岳－勇駒別	L飯田(3)、SL片岡(2)、青木(2)、安田(1)、松岡(1)
11/20-24	勇駒別－石室－BC付近にてスキー－勇駒別	L香取(3)、SL岡野(2)、池田(2)、樋口(1)、酒谷(1)
11/21-26	勇駒別－石室付近にてスキー練習－旭岳－石室－勇駒別	L田村(3)、SL宮永(2)、高木(2)、後藤(1)、渡辺(1)
11/21-26	勇駒別－ゴマ沢上部－石室付近にてスキー練習－旭岳－壁下－勇駒別	L市原(3)、SL小林(2)、水谷(1)、須川(1)
12/27-1/4	幌加－五の沢出合－K沢出合－ニペソツ山－ウペペサンケV峰－五の沢本流出合－三の沢林道－幌加	L椛島(4)、SL田村(3)、中井(2)、嶋津(2)、坂本(2)
12/27-1/6	十勝三股－十六の沢出合－小天狗－ニペソツ山－音更川－岩間温泉－シュナイダー尾根－石狩岳－音更山－音更沢出合－石狩川本流－大雪国道	L近藤(3)、SL飯田(3)、青木(2)、岡野(2)
12/28-1/4	白金温泉－前十勝下－避難小屋－十勝岳－上ホロカメットク山手前－シイ十勝川(－トウヤウスベ)－布礼別	L梅沢(OB1)、SL菅原(部外者)、香取(3)、岩井(2)、長沼(2)、池田(2)
12/28-1/6	十勝三股－杉沢出合－小天狗－ニペソツ山－シュナイダーコース尾根の末端－石狩岳－音更岳－十勝三股	L太田(OB1)、SL油田(3)、国本(2)、黒澤(2)、原(2)
1/15-18	白井小屋－余市岳北東コル－余市岳往復－下山	L油田(3)、皿田(1)、柿木(1)
1/28-30	清川－夏尾根－ニセイカウシュッペ山－清川	L香取(3)、SL田村(3)、須川(1)
1/30-2/1	恵庭岳滑降コース下－ロープウエイ終点－滑降コースを下る	L嶋津(2)、SL宮永(2)、後藤(1)、松井(1)
2/19-24	空沼岳登山口－空沼小屋－空沼岳－漁岳－オコタンペ湖－恵庭岳下－オコタン荘	L中井(2)、SL岩井(2)、後藤(1)、皿田(1)、緑川(1)
3/1-7	静内－ペテガリ山荘－西尾根－ペテガリ岳－ペテガリ山荘－静内	L津田(3)、SL香取(3)、岡野(2)、後藤(1)
3/4	定山渓天狗岳　夏道沿いにⅡ峰往復	L小林(2)、SL高木(2)
3/13-20	栂池高原スキー場－成城小屋－小蓮華岳－蓮華温泉－兵馬平－蓮華温泉－ヤホ平－カクゴヤ峠－ワサビ沢尻－白池－杉沢源頭の平－平岩駅下山	L油田(3)、SL近藤(3)、原(2)、国本(2)
3/20-22	モーラップ－登山口－樽前山往復	L高木(2)、SL石川(2)、樋口(1)、田中(OB6)
3/22-27	布礼別－前富良野岳－富良野岳－新十勝岳温泉	L熊川(4)、SL香取(3)、池田(2)、岩井(2)、坂本(2)
3/24-30	御影－林道終点－芽室岳への標高尾根－雪盛山－ルベシベ山－ピパイロ岳－芽室岳(下りで松井骨折)－上羽帯小学校	L飯田(3)、SL市原(3)、小林(2)、宮永(2)、松井(1)
4/11-14	白井小屋－白井岳往復－余市岳－下山	L皿田(1)、SL樋口(1)、須川(1)

4/26-5/2	千栄－千呂露川二股沢－稜線(－北戸蔦別岳－戸蔦別岳－幌尻岳)－ピパイロ岳－下山	L黒澤(3)、SL青木(3)、坂本(3)、後藤(2)
4/28-5/2	八千代－ピリカペタン八の沢－札内岳－エサオマントッタベツ岳－北カールでスキー－戸蔦別川－八千代	L中井(3)、SL高木(3)、国本(3)、緑川(2)
4/28-5/2	幌－浜益御殿－浜益岳－群別岳－南暑寒別岳－暑寒別岳－暑寒別荘－山の神	L田村(4)、SL岡野(3)、須川(2)、柿木(2)、石川(3)
4/28-5/3	布礼別－前富良野岳下－原始ヶ原－上ホロカメットク山手前－シイ十勝川－上ホロカメットク山－十勝岳－避難小屋－白金温泉	L香取(4)、SL原(3)、酒谷(2)、樋口(2)
4/29-5/3	美瑛川林道終点－双子沼－オプタテシケ山－黄金ヶ原－トムラウシ山－トムラウシ温泉	L近藤(4)、SL小林(3)、池田(3)、皿田(2)
5/1-4	積丹岳登山口－積丹岳－ポンネアンチシ山－余別岳－登山口	L津田(4)、SL岩井(3)、安田(2)、松岡(2)、水谷(2)
6/2-8	勇駒別－石室－北大スロープ－スキー練習－安足間岳－北鎮岳－石室－勇駒別	L岡野(3)、SL国本(3)、梶井(1)、菅野(1)
6/4-5	ペテガリ山荘－西尾根－Cカールのケルンへセメントを運ぶ－ペテガリ山荘	L津田(4)、SL後藤(2)、須川(2)、内田(1)、矢島(1)
6/5-6	薄別－白水沢－二股－無意根小屋－札幌	L原(3)、SL皿田(2)、黒澤(3)
6/13-14	薄別－白水沢－無意根小屋－札幌	L小林(3)、池田(3)、内田(1)、菅野(1)
6/27-7/3	勇駒別－ピウケナイ沢－安足間岳－比布岳－北鎮岳－北大スロープ－石室－勇駒別	L原(3)、SL樋口(2)、水谷(2)、矢島(1)
6/27-7/4	勇駒別－北大スロープ－スキー練習－比布岳－間宮岳－北大スロープ－スキー練習－勇駒別	L池田(3)、SL須川(2)、柿木(2)、渡辺(2、酒匂(1))
6/28-7/4	銀泉台－赤岳－白雲石室－北大スロープ－スキー練習－旭岳東斜面－熊岳－スキー練習－勇駒別	L青木(3)、SL緑川(2)、松井(2)、高橋(1)
6/30-7/6	勇駒別－北大スロープ－スキー練習－ピウケナイ沢－安足間岳－熊岳－間宮岳－勇駒別	L小林(3)、SL後藤(2)、皿田(2)、内田(1)、和田(1)
7/1-4	天人峡－カウンナイ沢－二股－化雲岳－天人峡	L津田(4)、SL岡野(3)、国本(3)、菅野(1)
7/11-12	薄別－白水沢－無意根小屋－札幌	L中井(3)、SL坂本(3)、矢島(1)、梶井(1)、酒匂(2)
7/12-15	十勝三股－杉沢出合－ニペソツ山－JP－石狩岳－シュナイダーコース－十勝三股	L後藤(2)、SL渡辺(2)、内田(1)
7/15-16	薄別－白水沢－無意根小屋－札幌	L原(3)、樋口(2)
7/16-20	ユニ石狩コース入口－音更岳－石狩岳－JP－ヒサゴ沼－忠別岳－高原温泉	L須川(2)、SL柿木(2)、梶井(1)、菅野(1)
7/18-19	山部－小屋－芦別本谷(沢登り)－ゴルジュ－インゼル－稜線800m－山部	L田村(4)、SL小林(3)
7/22	積丹我呂沢－積丹岳往復	L黒澤(3)、SL緑川(2)、後藤(2)
7/23	狭薄沢	L田村(4)、SL小林(3)、須川(2)、菅野(1)
7/25	発寒川	L津田(4)、SL黒澤(3)、後藤(2)
7/27	定山渓天狗岳イワナ沢	L中井(3)、SL樋口(2)、矢島(1)
7/27-30	(ペテガリ追悼登山)静内－ペテガリ川－A沢－ペテガリ岳－下降尾根－中の川上二股－三股－中の川－林道	L津田(4)、SL黒澤(3)、後藤(2)、緑川(2)
7/30-31	薄別－白水沢－無意根小屋－札幌	L坂本(3)、SL岩井(3)、梶井(1)、内田(1)
8/3-7	天人峡－カウンナイ沢－ヒサゴ沼－高原温泉	L飯田(4)、SL中井(3)、樋口(2)、矢島(1)
8/7-10	珊内－スサノ沢－珊内岳－余別川本流－下二股	L市原(4)、SL青木(3)、国本(3)、坂本(3)、松井(2)
8/7-11	伊奈北－丹渓山荘－北沢峠－双児山－駒津岳－甲斐駒ヶ岳－仙丈小屋－仙丈－横川－両俣－北岳－北岳小屋－間岳－農鳥小屋－西農鳥－農鳥－下山	L近藤(4)、SL皿田(2)
8/10-11	酒田－鳥海山荘(湯の台)－滝の小屋－鳥海山－大平口－酒田	L後藤(2)、部外者2名
8/19-22	シュナイダー入口－石狩岳－沼の原－ヒサゴ沼－トムラウシ山－トムラウシ温泉	L岡野(3)、SL酒匂(1)、高橋(1)
9/6-10	白馬－細野－八方尾根－唐松－白馬－雪倉－朝日－朝日小屋－北又谷－北又小屋－小川温泉	L油田(4)、SL池田(2)、松井(1)、安田(1)
9/12-13	漁入沢二股－漁岳－オコタンペ湖	L松井(2)、SL後藤(2)、高橋(1)
9/22-25	ペテガリ山荘－西尾根－ペテガリ岳－Cカール－ルベツネ山－ヤオロマップ岳(－1839峰)－コイカクシュサツナイ岳－札内川	L中井(3)、SL嶋津(3)、坂本(3)、小林(3)

59 season　1970(昭和45)年10月～1971(昭和46)年9月

部長：水谷寛

主任：中井強(3)／庶務：坂本武英(3)／会計：小林博和(3)／リーダー会：黒澤努(3)・小林博和(3)・津田誠(4)・市原成典(4)／体育会：矢島啓司(1)／小屋：皿田滋(2)・緑川芳行(2)／記録：樋口俊夫(2)／気象：田村和久(4)／装備：後藤次郎(2)・菅野建身(1)／医療：梶井直文(1)／食料：飯田修(4)／図書：内田隆裕(1)／トレーニング：緑川芳行(2)／むいね編集：岡野史郎(3)・池田精寿(3)・皿田滋(2)

10/3-4	無意根小屋祭り	多数参加し、紅葉を愛でる
10/6-9	布礼別－原始が原－富良野岳－上ホロカメットク山－十勝岳－ポンピの沢－ポンピの沢源頭－白金温泉	L皿田(2)、SL後藤(2)、須川(2)、菅野(1)
10/9-13	赤岳展望台－赤岳－白雲石室(－白雲岳)－忠別岳－化雲岳－トムラウシ山－ヒサゴ沼石室－トムラウシ山－トムラウシ温泉－新得	L田村(4)、SL和田(1)、松居(1)
10/25-27	シルバーロッジ合宿	寒風のなか手稲山の初雪のもとで、トレーニングの総仕上げ
11/2-4	清川－ニセイカウシュッペ山手前(1560m付近)－清川	L坂本(3)、SL小林(3)、梶井(1)
11/18-23	(旭岳初滑り)旭岳石室付近にBC、頂上アタック及びスキー練習	L青木(3)、SL原(3)、梶井(1)、矢島(1)
11/20-25	(旭岳初滑り)旭岳石室付近にBC、頂上アタック及びスキー練習	L坂本(3)、SL皿田(2)、内田(1)、松居(1)
11/20-25	(旭岳初滑り)旭岳石室付近にBC、頂上アタック及びスキー練習	L岡野(3)、SL後藤(2)、松井(2)、柿木(2)
11/27-12/1	(旭岳初滑り)旭岳石室付近にBC、頂上アタック及びスキー練習	L池田(3)、SL樋口(2)、須川(2)、和田(1)
12/6-13	1年目無意根新人合宿	メンバー記載なし
12/6-13	(十勝合宿)十勝岳温泉－D尾根－富良野岳－上ホロカメットク山－スキー練習－三段山－十勝岳温泉	L黒澤(3)、SL小林(3)、松井(2)、緑川(2)、須川(2)、国本(3)
12/6-13	(十勝合宿)十勝岳温泉－富良野岳北尾根－ホコ岩－スキー練習－三段山－フリコ沢－OP尾根－十勝岳－十勝岳温泉	L坂本(3)、SL岡野(3)、梶口(2)、皿田(2)、原(3)
12/6-13	(十勝合宿)十勝岳温泉－D尾根－上ホロ－富良野岳－スキー練習－三段山－十勝岳温泉	L青木(3)、SL池田(3)、後藤(2)、柿木(2)、近藤(4)

12/27-1/3	(正月合宿)Aパーティ　新十勝岳温泉－泥流スロープ－三段山－十勝岳－三段山でスキー－望岳台－白金温泉	L津田(4)、SL長沼(3)、菅野(1)、和田(1)
12/27-1/3	(正月合宿)Bパーティ　新十勝岳温泉－泥流スロープ－三段山－十勝岳－三段山でスキー－望岳台－白金温泉	L市原(4)、SL柿木(2)、矢島(1)、松居(1)
12/27-1/3	(正月合宿)C　パーティ　新十勝岳温泉－泥流スロープ－三段山－十勝岳－三段山でスキー－望岳台－白金温泉	L中井(3)、SL岩井(3)、梶井(1)、内田(1)
12/28-1/3	(正月合宿)白金温泉－美瑛岳－白金温泉	L香取(4)、SL黒澤(3)、池田(3)、樋口(2)
12/29-1/2	戸台－丹渓－北沢峠－ヤブ沢分岐－仙丈岳－仙丈小屋－東カール－仙水峠－駒津岳－駒ヶ岳－戸台	L近藤(4)、SL小林(3)、原(3)、国本(3)、皿田(2)
12/29-1/7	(正月合宿)白金温泉－美瑛川－双子沼(－オプタテシケ山)－コスマヌプリ－トムラウシ山－カムイ天上－トムラウシ温泉	L田村(4)、SL岡野(3)、坂本(3)、須川(2)
12/31-1/7	(正月合宿)層雲峡－シビナイ沢－忠別岳－五色岳－ヒサゴ沼－トムラウシ山－銀杏ヶ原－オプタテシケ山－白金温泉	L飯田(4)、SL青木(3)、後藤(2)、緑川(2)
1/19	百松橋－烏帽子岳頂上下－百松沢山－宮城の沢－平和の滝	L石川(3)、部外者一名
1/21-24	パラダイスヒュッテにてスキー合宿	
1/29-2/1	白井二股－白井小屋－余市岳－朝里岳－ヘルベチアヒュッテ－タ日の沢－奥手稲山の家－手稲オリンピア	L坂本(3)、SL石川(3)、内田(1)
1/30-2/5	幌加－6の沢－ニペソツ山1800m付近－6の沢出合－幌加	L香取(4)、SL岡野(3)、樋口(2)、菅野(1)
2/5-7	白水沢－無意根小屋－定山渓	L後藤(2)、SL柿木(2)、和田(1)
2/11	熊の沢登山口－定山渓天狗岳－登山口	L須川(2)、樋口(2)
2/21	ロッジ祭り　スキー大会	ジャンプ・滑降に競う
2/26-28	中山峠－喜茂別岳－中岳－無意根山－無意根小屋－豊羽	L石川(3)、SL緑川(2)、樋口(2)、梶井(1)
3/3-5	(ニセコ強化合宿)新見温泉－前目国内山手前－白樺岳－チセヌプリ－ニトヌプリ－五色温泉－藻岩スキー場－五色温泉	L中井(3)、後藤(2)、柿木(2)
3/3-5	(ニセコ強化合宿)新見温泉－白樺岳－シャクナゲ岳－チセヌプリ－ニトヌプリ－五色温泉	L岩井(3)、内田(1)、松居(1)、和田(1)
3/3-5	(ニセコ強化合宿)新見温泉－前目国内岳－白樺岳－シャクナゲ岳－チセヌプリ－ニトヌプリ－五色温泉	L黒澤(3)、SL長沼(3)、菅野(1)、梶井(1)
3/6-8	(ニセコ強化合宿)五色温泉－ニトヌプリ－チセヌプリ－シャクナゲ岳－白樺岳－新見温泉－前目国内岳－目国内岳－岩内岳－岩内	L青木(3)、緑川(2)、皿田(2)、須川(2)、樋口(2)
3/14	熊の沢－定山渓天狗岳－熊の沢	L市原(4)、SL黒澤(3)、緑川(2)、柿木(2)、梶井(1)
3/13-19	勇駒別温泉－姿見の池石室－アパッチのそばBC－スキー－勇駒別温泉	L中井(3)、SL青木(3)、皿田(2)、和田(1)、松居(1)、梅沢(OB2)、佐々木卓(部外者)
3/18-28	八千代－戸蔦別川－八の沢出合－札内岳－エサオマントッタベツ岳－春別岳－札内川十の沢出合－八の沢－札内ヒュッテ－上札内	L津田(4)、SL小林(3)、後藤(2)、菅野(1)
3/21-27	鴛泊－BC400m付近－700m付近でアイゼン、ピッケル練習、沢の中でスキー－長官山小屋－利尻山－長官山－BC－鴛泊	L市原(4)、SL黒澤(3)、緑川(2)、柿木(2)、梶井(1)
3/26-4/4	羅臼－建根別－カモイウンペ川出合－1185m峰－建根別－羅臼温泉－900m峰－稜線－羅臼岳－岩尾別－宇登呂	L香取(4)、SL坂本(3)、岩井(3)、松居(1)
4/1-4	手稲オリンピア－手稲山－ヘルベチアヒュッテ(－白井岳)－朝里岳－余市岳－南尾根－豊羽	L油田(4)、SL池田(3)、緑川(2)、樋口(2)
4/8-11	美国－登山口－積丹岳－登山口	L青木(3)、和田(1)、内田(1)
4/24-25	新人歓迎無意根合宿	
4/29-5/2	美国－登山口－積丹岳－余別岳－ポンネアンチシ山－登山口	L原(4)、SL緑川(3)、須川(3)、樋口(3)
4/29-5/3	寿都－賀老川－東狩場山－狩場山－上二股－フモンナイ岳－フモンナイ川－夏道－賀老	L坂本(4)、SL柿木(3)、内田(2)、菅野(2)
4/29-5/5	無意根山ゴールデンウィーク合宿　テラス・シャンツェでスキー練習	L岩井(4)、北村(1)、岡田(1)、吉田守(1)
		L黒澤(4)、岩瀬(1)、星野信(1)、武藤(1)
		L青木(4)、星野一(1)、野沢(1)
		L高木(4)、信谷(1)、吉田真(1)
		L国本(4)、仲村(1)、西平(1)
		L長沼(4)、桜井(1)、青木(1)、岩瀬(1)
		L中井(4)、岡野(4)
4/30-5/4	国領－山荘－南暑寒岳－暑寒岳－山の神－増毛	L後藤(3)、SL皿田(3)、梶井(2)、和田(2)
5/1-5	登山口－暑寒荘－暑寒岳－南暑寒岳－暑寒荘	L小林(4)、SL池田(4)、松居(2)、矢島(2)
5/15-16	無意根追悼登山	多数参加
5/22-23	中山峠－喜茂別岳－中岳－無意根山－無意根小屋－薄別	L菅野(2)、SL松居(2)、和田(2)
5/22-24	山部－ユーフレ小屋－芦別山－小屋－山部	L後藤(3)、SL緑川(3)、内田(2)、信谷(1)
6/1-7	(サマースキー)北大スロープ旭岳付近にてスキー	L皿田(3)、SL梶井(2)、仲村(2)、青木(1)、高井(1)
6/2-8	(サマースキー)北大スロープ旭岳付近にてスキー	L緑川(3)、SL和田(2)、柴田(1)、谷村(1)、信谷(1)
6/2-9	(サマースキー)北大スロープ旭岳付近にてスキー	L柿木(3)、SL菅野(2)、野沢(1)、桜井(1)
6/3-9	(サマースキー)北大スロープ旭岳付近にてスキー	L樋口(3)、SL矢島(2)、吉田(1)、岩瀬(1)、保坂(1)
6/8-13	(サマースキー)北大スロープ旭岳付近にてスキー	L国本(4)、SL坂本(4)、須川(3)、北村(1)、吉田(1)、岡田(1)
6/13-17	ロッジ合宿	
6/19-20	白水沢・沢登り	L皿田(3)、SL樋口(3)、信谷(1)
6/19-20	白水沢・沢登り	L黒澤(4)、SL高木(4)、菅野(2)、吉田(1)、岡田(1)
6/19-24	(サマースキー)北大スロープ旭岳付近にてスキー	L後藤(3)、SL松居(2)、星野一(1)、星野信(1)、武藤(1)
6/25-27	白水沢沢登り	L須川(3)、SL内田(2)、後藤(3)、柴田(1)、高井(1)
7/1	発寒川沢登り	L中井(4)、SL緑川(3)、樋口(3)、内田(2)
7/10-11	白水沢沢登り	L中井(4)、SL内田(2)、星野一(1)、吉田真(1)、桜井(2)
7/15-16	発寒川沢登り	L小林(4)、SL和田(2)、谷村(1)
7/15-17	余別－余別川－珊内岳標高尾根直下－珊内岳入沢－左股二段滝上－大滝下－本流出合－林道終点－余別	L高木(4)、SL後藤(3)、菅野(2)、黒澤(4)
7/17-18	美国－美国川－上滝の沢出合－美国	L青木(4)、SL国本(4)、皿田(3)
7/17-24	上札内－札内川八の沢－カムイエクウチカウシ山－九の沢カール－春別岳－エサオマン東カール－戸蔦別川－八千代	L津田(OB1)、SL国本(4)、松居(2)、梶井(2)、北村(1)、保坂(1)
7/19	発寒川沢登り	L岩井(4)、SL香取(OB1)、吉田(1)、星野信(1)
7/19-20	発寒川沢登り	L岡野(4)、SL坂本(4)、岩瀬(1)、野沢(1)、吉田守(1)

7/21-26	天人峡温泉－カウンナイ沢－トムラウシ山－化雲岳－白雲石室－白雲岳－北海岳－当麻乗越－愛山渓温泉	L岩井(4)、SL香取(OB1)、星野一(1)、吉田真(1)
7/22-31	ユートピア牧場－ペテガリ山荘－中の岳直登沢出合－中の岳－ペテガリ岳－下降尾根－ケルン－三股－中の川－大樹	L黒澤(4)、SL高木(4)、後藤(3)
7/23-26	静内－コイボクシュシビチャリ川－シカシナイ沢出合－三股－コイボクカール－カムイエクウチカウシ山－札内川八の沢－札内ヒュッテ－上札内	L中井(4)、SL緑川(3)、樋口(3)、内田(2)
7/24-31	八千代－戸蔦別川－札内岳－東カール－JP－エサオマントッタベツ岳－十の沢カール－札内川八の沢(－カムイエクウチカウシ山)－上札内	L小林(4)、SL須川(3)、和田(2)、吉田守(1)、岡田(1)
7/30-31	美国－我呂の沢－大滝－余別岳－余別川本流－余別	L青木(4)、SL国本(4)、皿田(3)
8/4-9	十勝三股－杉沢出合－ニペソツ山－JP－トムラウシ山－ヒサゴ沼－天人峡温泉	L内田(2)、SL松居(2)、星野(1)
8/5-10	室堂－別山乗越－別山平－真砂平－長次郎谷二股－池の谷乗越－剣岳－三の窓－ハシゴ谷乗越－クラノ助平－黒四ダム	L須川(3)、樋口(3)
8/9-16	振内－額平川－ポロシリ山荘－幌尻岳－七つ沼－新冠川－エサオマントッタベツ北カール－札内岳－戸蔦別川－トッタベツヒュッテ－八千代	L黒澤(4)、SL坂本(4)、原(4)、青木(1)、野沢(1)、吉田真(1)
8/10-18	静内－サッシビチャリ出合－西沢出合－ペテガリ岳－下降尾根－上二股－ケルン－三股－中の川－林道終点－尾田村	L青木(4)、SL国本(4)、皿田(3)
8/10-16	十勝岳温泉－富良野岳－上ホロカメットク山－十勝岳－美瑛岳－オプタテシケ山－双子沼－トムラウシ山－沼の原－クチャンベツ川－層雲峡	L高木(4)、高井(1)、北村(1)
8/11-15	十勝三股－杉沢出合－ニペソツ山－シュナイダーコース－石狩岳－JP－沼の原－五色岳－化雲岳－ヒサゴ沼－トムラウシ山－忠別岳－高原温泉	L梶井(2)、SL和田(2)、岡田(1)、谷村(1)、杉本(1)
8/27-9/2	新穂高温泉－槍ヶ岳－天狗平－槍沢－上高地－岳沢－前穂高－奥穂高－涸沢小屋－上高地	L国本(4)、SL池田(4)、長沼(4)、桜井(1)
8/31	発寒川沢登り	L後藤(3)、SL緑川(3)、高井(1)、岩瀬(1)
8/31-9/3	天人峡温泉－カウンナイさわ－トムラウシ山－ヒサゴ沼－高原温泉	L中井(4)、SL松居(2)、保坂(1)、谷村(1)
9/1-7	千栄－千呂露川－二の沢－北戸蔦別岳－戸蔦別岳－七つ沼－新冠川上二股－エサオマン北カール－エサオマントッタベツ岳－札内岳－戸蔦別川－八千代	L後藤(3)、SL緑川(3)、高井(1)、岩瀬(1)
9/8	発寒川沢登り	L岡野(4)、SL柿木(3)、野沢(1)、吉田守(1)
9/10-15	天人峡温泉－カウンナイ沢－ヒサゴ沼－五色岳－高原温泉	L岡野(4)、SL柿木(3)、吉田守(1)、野沢(1)
9/12-13	漁入沢上二股－漁岳－オコタンペ湖	L松井(2)、SL後藤(2)、高橋(1)
9/23-24	山部－ユーフレ小屋－芦別岳－山部	L和田(2)、SL内田(2)、菅野(2)、松居(2)
9/26	部員総会(シルバーロッジ)	
9/28-10/2	布礼別－原始ヶ原－富良野岳－上ホロカメットク山－十勝岳－望岳台－白金温泉	L松居(2)、SL菅野(2)、梶井(2)、星野一(1)
9/30-10/3	白金温泉－ポンピ沢－美瑛小屋－オプタテシケ山－美瑛富士－ポンピ沢－十勝岳－白金温泉	L皿田(3)、青木(1)、吉田真(1)

60 season　1971(昭和46)年10月～1972(昭和47)年9月

部長：水谷寛

主任：後藤次郎(3)／庶務：皿田滋(3)／会計：柿木真(3)／リーダー会：緑川芳行(3)・樋口俊夫(3)・後藤次郎(3)・皿田滋(3)・須川和明(3)・坂本武英(4)・中井強(4)／小屋：菅野健身(2)／記録：松居望(2)／気象：後藤次郎(3)／装備：和田寛(2)・矢島啓司(2)／医療：梶井直文(2)／体育会：星野信男(1)・吉田守男(1)／図書：松居望(2)／トレーニング：緑川芳行(3)／むいね編集：皿田滋(3)・菅野健身(2)・和田寛(2)

10/4-7	白金温泉－美瑛富士避難小屋－美瑛岳－ポンピ沢－望岳台－白金温泉	L坂本(4)、SL星野(1)、及川(1)
10/10-11	清川－ニセイカウシュッペ山－清川	L高木(4)、SL池田(4)、信谷(1)、吉田(1)
10/16-17	無意根小山祭り	多数参加
10/18-23	シルバーロッジ合宿	多数参加
10/22-24	山部－ユーフレ小屋－新道分岐－山部	L岩井(4)、SL梶井(2)、野沢(1)、岩瀬(1)
10/23-25	清川－ニセイカウシュッペ山手前1740m－清川	L中井(4)、SL和田(2)、星野(1)、仲村(2)
10/31-11/2	山部－ユーフレ小屋－芦別岳－山部	L後藤(3)、SL津田(OB1)、桜井(1)、保坂(1)、吉田守(1)
11/17-22	旭岳初滑り　旭岳石室付近にBC、頂上アタック及びスキー練習	L後藤(3)、SL和田(2)、岩瀬(1)、仲村(1)、星野(1)
11/19-23	旭岳初滑り　旭岳石室付近にBC、頂上アタック及びスキー練習	L高木(4)、SL国本(4)、桜井(1)、野沢(1)、保坂(1)
11/19-24	旭岳初滑り　旭岳石室付近にBC、頂上アタック及びスキー練習	L皿田(3)、SL松居(2)、岡田(1)、高井(1)、谷村(1)
11/21-25	旭岳初滑り　旭岳石室付近にBC、頂上アタック及びスキー練習	L樋口(3)、SL矢島(2)、信谷(1)、丸岡(1)
11/21-25	旭岳初滑り　旭岳石室付近にBC、頂上アタック及びスキー練習	L岡野(4)、SL岩井(4)、青木(1)、吉田(1)、武藤(1)
日付なし	新人無意根合宿	CL後藤(3)、一年目
日付なし	十勝合宿(三段山下にBC、十勝岳・富良野アタックおよび冬山訓練)	L皿田(3)、SL須川(3)、和田(2)、松居(2)、坂本(4)
日付なし	十勝合宿(三段山下にBC、十勝岳・富良野アタックおよび冬山訓練)	L緑川(3)、SL樋口(3)、菅野(2)、矢島(2)、池田(4)
12/16-17	定山渓天狗山	L後藤(3)、SL中須賀(部外者)、岩瀬(1)
12/28-1/5	正月合宿　幌加－六の沢－丸山偵察－ニペソツ山－ウペペサンケ山－幌加	L小林(4)、SL後藤(3)、樋口(3)
日付なし	正月合宿(石狩岳)	L黒澤(4)、SL皿田(3)、菅野(2)、松居(2)
日付なし	正月合宿(十勝岳)	L中井(4)、SL緑川(3)、柿木(3)、和田(3)
日付なし	奥手稲山	L和田(3)、SL松居(2)、谷村(1)、丸岡(1)
日付なし	朝里岳	L黒澤(4)、桜井(1)、信谷(1)
日付なし	余市岳	L池田(4)、保坂(1)、桜井(1)、仲村(1)
2/4-6	清川－ニセイカウシュッペ山－清川	L後藤(3)SL樋口(3)、岩瀬(1)、保坂(1)
3/1-4	ニセコ強化合宿(ニセコで下級生強化合宿)	L樋口(3)、吉田真(1)、武藤(1)、桜井(1)
3/2-4	ニセコ強化合宿(ニセコで下級生強化合宿)	L皿田(3)、松居(2)、矢島(2)
3/2-4	ニセコ強化合宿(ニセコで下級生強化合宿)	L緑川(3)、星野(1)、保坂(1)、谷村(1)

3/3-4	ニセコ強化合宿(ニセコで下級生強化合宿)	L後藤(3)、及川(1)、信谷(1)、丸岡(1)、野沢(1)
3/7-9	ニセコ強化合宿(ニセコで下級生強化合宿)	L中井(4)、吉田(1)、岩瀬(1)、岡田(1)、星野(1)
3/8-16	清岳荘－斜里岳－斜里－峰浜スキー場－海別岳－オシンコシンの滝－チャラセナイ川－遠音別岳1200m－春日川橋－根室標津	L津田(OB1)、SL松居(2)、及川(1)、信谷(1)、近藤(OB1)
3/13-19	斜里－斜里岳直下－斜里岳－峰浜－海別岳－峰浜	L池田(4)、SL樋口(3)、矢島(2)、星野信(1)
3/14-17	清川－ニセイカウシュッペ山－清川	L中井(4)、SL和田(2)、星野(1)、桜井(1)、吉田真(1)
3/14-17	勇駒別－ピウケナイ沢－リクマン－北鎮岳－勇駒別	L皿田(3)、SL柿木(3)、岡田(1)、谷村(1)、保坂(1)
3/16-24	八千代－戸蔦別川－カムイ北東尾根－カムイ岳－戸蔦別岳－幌尻岳－エサオマントッタベツ岳－戸蔦別川－八千代	L黒澤(4)、SL後藤(3)、菅野(2)、岩瀬(1)
4/27-5/3	御影－芽室岳－スキー練習－ルベシベ岳－御影	L後藤(3)、SL和田(3)、保坂(2)、武藤(2)
4/29-5/1	白金温泉－美瑛避難小屋－白金温泉	L小林(OB1)、SL松居(3)、岩瀬(2)、吉田真(2)、信谷(2)
4/29-5/4	登山口－積丹岳－余別岳－余別岳－登山口	L柿木(4)、岡田(2)、仲村(2)
4/30-5/6	雄冬－暑寒別連山－増毛	L樋口(4)、SL高木(OB1)、星野一(2)、野沢(2)、星野信(2)
日付なし	ゴールデンウイーク無意根合宿	L緑川(4)、SL菅野(3)、内田(3)、川上(1)、中村(1)、森田(1)、瓜生(1)、高田(1)、日比野(1)、坂口(1)、山下(1)
5/1-4	白金温泉－オプタテ中央鞍部下で丸岡骨折－白金温泉	L皿田(4)、SL矢島(3)、丸岡(2)、吉田守(2)、及川(2)
5/20-21	無意根追悼登山　新人歓迎会	L和田(3)、SL星野(2)、谷村(2)、森田(1)、日比野(1)
5/29-6/4	サマースキー	L和田(3)、SL星野一(2)、谷村(2)、森田(1)、日比野(1)
5/31-6/4	層雲峡－朝陽山－ニセイカウシュペ山－層雲峡－黒岳－旭岳－勇駒別	L後藤(4)、SL松居(3)、野沢(2)、緑川(4)
6/1-6	サマースキー	L内田(3)、SL星野信(2)、桜井(2)、吉田真(2)、川上(1)、端山(1)
6/12-18	サマースキー	L菅野(3)、SL武藤(2)、岩瀬(2)、中村(1)、坂口(1)国本(OB1)
6/12-18	サマースキー	L松居(3)、SL保坂(2)、野沢(2)、木口(1)、瓜生(1)
6/20-26	サマースキー	L矢島(3)、SL岡田(2)、及川(2)、信谷(2)、高田(1)、前原(1)
6/21-24	シルバーロッジ合宿	
7/23-30	ユートピア牧場－ペテガリ山荘(－ペテガリ岳)－サッシビチャリ西沢出合－ペテガリ岳－中の川－ソエマツ岳－民田村	L後藤(4)、SL菅野(3)、岡田(2)、岩瀬(2)、信谷(2)、黒澤(OB1)
7/25-31	中札内－札内川－カムイエクウチカウシ山－9の沢カール－エサオマントッタベツ岳－エサオマン北カール－新冠川－七つ沼－幌尻岳－戸蔦別岳－戸蔦別川－八千代	L高木(OB1)、SL和田(3)、桜井(2)、吉田真(2)、武藤(2)、森田(1)
7/27-8/1	布礼別－原始ケ原－富良野岳－上ホロカメトック山－十勝岳－美瑛避難小屋－オプタテシケ山－二子沼－黄金ケ原－トムラウシ山－トムラウシ温泉	L谷村(2)、SL保坂(2)、端山(1)、木口(1)、坂口(1)、吉田守(2)
7/29-8/6	布礼別－原始ケ原－十勝岳－美瑛岳－オプタテシケ山－トムラウシ山－JPコルークチャンベツ川林道－層雲峡	L星野信(2)、SL野沢(2)、木村(1)、瓜生(1)
8/6-9	十勝三股－音更山－石狩岳－沼の原－五色岳－化雲岳－トムラウシ山－五色岳－忠別岳－高原温泉－層雲峡	L星野一(2)、SL及川(2)、吉田真(2)
8/8-13	上札内－札内川－カムイエクウチカウシ山－9の沢出合－9の沢カール－札内岳－戸蔦別川－八千代	L樋口(4)、SL矢島(3)、木口(1)、谷村(2)、端山(1)
8/9-14	十勝岳温泉－富良野岳－上ホロカメットク山－十勝岳－オプタテシケ山－黄金ケ原－トムラウシ山－化雲岳－沼の原－石狩岳－ブヨ沢－十石峠－岩間温泉－前糞供山－ニペソツ山－幌加	L岩瀬(2)、SL岡田(2)、桜井(2)、武藤(2)、川上(1)
8/9-15	ユートピア牧場－サッシビチャリ沢出合－ペテガリ西沢出合－1839m峰－南西下降尾根－ペテガリ岳－ルベツネ直登沢出合－ヤオロマップ川－帯広	L藤瀬(OB3)、SL国本(OB1)、松居(3)
8/14-20	身延－二転小屋－荒川小屋－百間洞－聖－畑なぎダム	L信谷(2)、SL吉田真(2)、前原(1)、日比野(1)
8/16-24	八千代－戸蔦別川－戸蔦別岳－エサオマン北カール－札内川十の沢出合－記念別沢－札内岳－札内川八の沢－カムイエクウチカウシ山－札内川－上札内	L緑川(4)、SL菅野(3)、星野一(2)、及川(2)
8/17-24	八千代－トッタベツヒュッテ－カムイ－トッタベツ岳－幌尻岳－エサオマントッタベツ岳手前－トッタベツヒュッテ－八千代	L黒澤(OB1)、SL後藤(3)、菅野(2)、岩瀬(1)
8/21-24	勇駒別温泉－石室－金庫岩－スキー練習－石室－勇駒別	L吉田守(2)、、SL星野信(2)、保坂(2)
8/22-27	天人峡－カウンナイ沢－トムラウシ山－ヒサゴ沼－五色沢－幻の渓谷－ヒサゴ沢－ヒサゴ沼－沼の原－ヤンベタップ出合	L矢島(3)、SL和田(3)、川上(1)、野沢(2)
9/17	部員総会(シルバーロッジ)	

61 season　1972(昭和47)年10月～1973(昭和48)年9月

部長：水谷寛

主任：菅野健身(3)／庶務：岩瀬隆則(2)／会計：保坂豊(2)／リーダー会議長：後藤次郎(4)／書記：樋口俊夫(4)・矢島啓司(3)・菅野健身(3)／上級生会議議長：菅野健身(3)／小屋：岡田稔(2)／記録：吉田守男(2)・桜井康(2)／装備：星野信男(2)・武藤清秀(2)／医療：信谷卓造(2)／図書：吉田真一(2)／トレーニング：及川俊一(3)／むいね編集：和田寛(3)・星野一郎(2)

10/2-5	十勝三股－杉沢出合－ニペソツ山－十勝三股	L保坂(2)、SL吉田真(2)、浜田(1)、木口(1)
10/3-4	清川－ニセイカウシュッペ山－清川	L岡田(2)、SL岩瀬(2)、武藤(2)、星野信(2)、川上(1)
10/3-5	山部－ユーフレ小屋－(旧道)－芦別岳－(新道)－山部	L桜井(2)、SL星野一(2)、前原(1)、瓜生(1)、森田(1)
10/16-17	無意根小屋祭り	多数参加
10/18-23	シルバーロッジ合宿	
10/19-21	旭岳初滑り	L菅野(3)、SL武藤(2)、吉田(1)、山形(1)
10/19-21	旭岳初滑り	L矢島(3)、SL桜井(2)、星野一(2)、日比野(1)、坂口(1)
10/19-21	旭岳初滑り	L松居(3)、SL岡田(2)、前原(1)、森田(1)
10/20-21	旭岳初滑り	L和田(3)、SL保坂(2)、吉田守(2)、浜田(1)、木口(1)
10/20-21	旭岳初滑り	L後藤(4)、SL星野信(2)、岩瀬(2)、及川(2)、瓜生(1)、川上(1)
この合宿中、11月21日旭岳盤の沢で雪崩が発生し、後藤パーティが遭難した。以後クラブの山行は一旦中止することになった。		
1/19-21	旭岳盤の沢遭難パーティの無意根追悼登山	
山行中止を解除し、春山山行を開始		
3/3-7	中山峠－無意根山	L和田(3)、SL武藤(2)、桜井(1)、木口(1)、前原(1)
3/3-7	中山峠－無意根山	L菅野(3)、SL岩瀬(2)、森田(1)、坂口(1)、堀内(1)、日比野(1)
3/14-17	桂岡－銭函峠－ヘルベチアヒュッテ－白井岳－余市岳－朝里岳－ヘルベチア付近－銀嶺荘－春香山－春香町	L緑川(4)、SL星野一(2)、岡田(2)、保坂(2)、信谷(2)

3/14-17	桂岡－銭函峠－ヘルベチアヒュッテ－白井岳－余市岳－朝里岳－ヘルベチア付近－銀嶺荘－春香山－春香町	L松居(3)、SL吉田真(2)、桜井(2)、吉田守(2)
4/29-5/5	無意根ゴールデンウィーク合宿	L和田(4)、SL保坂(3)、阿部(1)、糸賀(1)、大口(1)、川勝(1)、片倉(1)、福安(1)、等々力(1)、内田(4)、梶井(4)、野沢(3)
4/29-5/5	ゴールデンウイーク合宿(暑寒別山群)	L菅野(4)、SL星野一(3)、桜井(3)、堀内(2)、坂口(2)
		L松居(4)、SL武藤(3)、信谷(3)、前原(2)、日比野(2)
		L矢島(4)、SL岡田(3)、吉田真(3)、中村(2)、森田(2)
6/3-9	サマースキー(旭岳　北大スロープ周辺)	L岡田(3)、SL岩瀬(3)、木口(2)、日比野(2)、片倉(1)、小瀬川(1)
		L星野一(3)、SL桜井(3)、中村(2)、大口(1)、白石(1)、内田(1)
		L武藤(3)、SL信谷(3)、堀内(2)、森田(2)、川勝(1)、福安(1)
		L保坂(3)、SL吉田真(3)、前原(2)、坂口(2)、阿部(1)、糸賀(1)
		L和田(4)、SL菅野(4)、梶井(4)、松居(4)、矢島(4)、谷村(3)、野沢(3)
6/23-24	豊羽元山－白井川本流－余市岳－白井左股川	L和田(4)、SL武藤(3)、坂口(2)、大口(2)
6/23-25	薄別－白水沢－無意根山－無意根小屋－薄別	L菅野(4)、SL吉田守(3)、日比野(2)、内田(1)、白石(1)、片倉(1)
6/24	錦橋－木挽沢－神威直登沢－神威岳－百松沢－百松橋	L信谷(3)、SL星野一(3)、梶井(4)、吉田真(3)、岡田(3)
6/24	錦橋－木挽沢－神威直登沢－神威岳－百松沢－百松橋	L松居(4)、SL保坂(3)、前原(2)、森田(2)
6/30	平和の滝　最後の二股	L武藤(3)、SL坂口(2)、大口(1)
7/2-4	シルバーロッジ合宿	
7/7-8	望岳台－漁入沢－漁岳－オコタンペ湖	L保坂(3)、SL岡田(3)、堀内(2)、前原(2)、森田(2)、日比野(2)
7/15	平和の滝－発寒川－平和の滝	L信谷(3)、SL星野一(3)、片倉(1)、阿部(1)
7/15-20	清里－斜里岳－岩尾別温泉－ラウス平－羅臼岳－三川峰－サシルイ岳－オツカパケ山－二ツ池－知円別岳－硫黄山－ウプシノッタ河口－知床岳－ウナキベツ河口	L武藤(3)、SL岡田(3)、坂口(2)、大口(1)
7/17-19	余別－49点沢出合－122点沢－エコー沢－余別	L和田(4)、SL松居(4)、信谷(3)
7/17-24	布礼別－原始ケ原－富良野岳－十勝岳－美瑛富士避難小屋－オプタテシケ山－黄金ケ原－トムラウシ山－化雲岳－沼の原－石狩岳－岩間温泉－十勝三股	L岩瀬(3)、SL前原(2)、片倉(1)、阿部(1)
7/17-24	相泊－ウナキベツ川－知床沼－知床岳－ウナキベツ川－相泊－羅臼－羅臼岳－サシルイ－オッカパケ－二ツ池－知円別岳－硫黄山－カムイワッカ－斜里	L梶井(4)、SL吉田真(3)、川勝(1)、福安(1)
7/21	薄別－白水沢－無意根山－薄別	L星野一(3)、SL森田(2)、木口(2)
7/21-23	天人峡－カウンナイ沢－ヒサゴ沼－化雲岳－天人峡	L高木(OB2)、SL桜井(3)、中村(2)
7/21-27	層雲峡－赤岳展望台－赤岳－白雲石室－小泉岳－赤岳－北海岳－間宮岳－北鎮岳－白鳥千鳥雪渓－－北大スロープ－旭岳東斜面－勇駒別(夏スキー)	L保坂(3)、SL日比野(2)、内田(1)、糸賀(1)
7/22-30	十勝岳温泉－富良野岳－上ホロカメットク山－十勝岳－美瑛岳－美瑛富士－オプタテ山－黄金ケ原－トムラウシ山－ヒサゴ沼小屋－化雲岳－五色岳－沼の原－JP－石狩岳－音更山－岩間温泉－ニペソツ山－幌加温泉－ウペペサンケ山－糠平	L信谷(3)、SL堀内(2)
7/25	薄別－白水沢－無意根山－薄別	L星野一(3)、SL森田(2)、木口(2)、小瀬川(1)、白石(1)、岡田(3)
7/27-8/2	天人峡－カウンナイ沢－化雲岳－沼の原－トムラウシ山－オプタテシケ山－美瑛岳－十勝岳－上ホロカメットク山－富良野岳－原始ケ原－布部川－布礼別	L岡田(3)、SL星野一(3)、森田(2)、木口(2)、小瀬川(1)
7/29-8/1	余別－余別川珊内入沢－本流－余別	L菅野(4)、SL岩瀬(3)、桜井(3)、中村(2)
7/31-8/1	薄別－白水川－無意根山－薄別	L和田(4)、SL保坂(3)、糸賀(1)、阿部(1)、等々力(1)
8/4-7	望岳台－ポンピ沢－美瑛富士避難小屋－オプタテシケ山－美瑛岳－十勝岳－上ホロカメットク山－富良野岳－原始ケ原－布礼別	L日比野(2)、SL坂口(2)
8/4-8	天人峡－カウンナイ沢－トムラウシ山－ヒサゴ沼－白雲岳－北鎮岳－愛山渓	L吉田真(3)、SL新谷(3)、大口(1)、川勝(1)
8/5-11	ユートピア牧場－－ペテガリ沢－A沢－ペテガリ岳－Cカール－下降尾根－中の川上二股－三股－神威岳直登沢出合－神威岳－三股－中の川－尾田村	L菅野(4)、SL岩瀬(3)、桜井(3)、中村(2)
8/6-13	振内－額平川－幌尻山荘－幌尻岳－七つ沼－新冠上二股－エサオマントッタベツ岳－札内川九の沢出合－キネンベツ沢－事故発生(和田転落)－救助活動－和田救助－戸蔦別川－八千代	L和田(4)、SL保坂(3)、糸賀(1)、阿部(1)
8/8	薄別－白水沢－無意根山－薄別	L松居(4)、SL矢島(4)、前原(2)、白石(1)、片倉(1)
8/22-23	旭岳追悼登山	
9/30	部員総会	

62 season　1973(昭和48)年10月～1974(昭和49)年9月

部長：水谷寛

主任：岩瀬隆則(3)／庶務：桜井康(3)／会計：森田明(2)／リーダー会議長：武藤清秀(3)／書記：吉田真一(3)／上級生会議議長：岩瀬隆則(3)／体育会・岳連：吉田守男(3)／小屋：前原達也(2)／記録：堀内洋(2)・内田達郎(1)／装備：阿部幹雄(1)・大口真樹(13)／医療：木口正人(2)／図書：福安憲次(1)／トレーニング：武藤清秀(3)・片倉賢(1)／むいね編集：星野一郎(3)・森田明(2)

10/6-7	無意根小屋祭り	
10/20-21	桂岡－銭函峠－ヘルベチアヒュッテ－奥手稲山の家－国道	L岩瀬(3)、SL坂口(2)、小瀬川(1)
10/20-21	空沼二股－空沼小屋－空沼岳－札幌岳－札幌岳登山口	L梶井(4)、SL日比野(2)、内田(1)、白石(1)
10/20-21	樽前山ヒュッテ－風不死岳－樽前山－ヒュッテ	L武藤(3)、SL堀内(2)、福安(1)
10/20-21	比羅夫－半月湖付近－羊蹄山－比羅夫	L星野(3)、SL和田(4)
10/20-21	真狩登山口－羊蹄山－真狩登山口	L菅野(4)、SL保坂(3)、大口(1)
10/21	恵庭岳登山口－恵庭岳－登山口	L矢島(4)、SL岡田(3)、木口(2)、森田(2)
10/27-28	百松橋－神威岳登山口－神威岳－百松橋	L武藤(3)、SL坂口(2)、大口(1)、白石(1)
10/27-28	美国－積丹岳登山口－積丹岳－美国	L矢島(4)、SL木口(2)、日比野(2)、小瀬川(1)、等々力(1)、中町(1)
10/27-28	真狩登山口－羊蹄山1800m－真狩登山口	L吉田守(3)、SL吉田真(3)、中村(2)、片倉(1)、内田(1)
10/28	登山口－定山渓天狗岳(熊ノ沢コース)－札幌	L星野一(3)、SL岡田(3)、阿部(1)
10/28	空沼二股－空沼岳－空沼二股	L信谷(3)、SL森田(2)、川勝(1)
11/2-4	倶知安－五色温泉－イワオヌプリ－大沼－長沼－チセヌプリ－ニセコアンヌプリ－山田温泉	L岩瀬(3)、SL森田(2)、内田(1)、福安(1)、白石(1)

11/2-4	倶知安－五色温泉－イワオヌプリ－大沼－長沼－チセヌプリ－ニセコアンヌプリ－山田温泉	L武藤(3)、SL堀内(2)、中町(1)、大口(1)、等々力(1)
11/3	恵庭岳登山口－恵庭岳－樽前山ヒュッテ－風不死岳－樽前山－ヒュッテ－札幌	L松居(4)、SL吉田(3)、前原(2)
11/3-5	倶知安－五色温泉－ニトヌプリ－チセヌプリ－白樺岳－目国内岳－岩内岳－岩内	L信谷(3)、SL保坂(3)、阿部(1)、小瀬川(1)、川勝(1)
11/21-23	(追悼・冬山への第一歩)第1班　無意根小屋合宿	CL武藤(3)、坂口(2)、中村(2)、堀内(2)
		L岩瀬(3)、信谷(3)、森田(2)、木口(2)、前原(2)
		L菅野(4)、和田(4)、梶井(4)、片倉(1)、小瀬川(1)、川勝(1)
		L保坂(3)、桜井(3)、内田(1)、等々力(1)
		L星野一(3)、吉田真(3)、大口(1、福安(1)
		L矢島(4)、松居(4)、中町(1)、阿部(1)
12/9-16	(無意根合宿)第1班　薄別－無意根小屋－無意根山－薄別	CL武藤(3)、SL星野(3)、坂口(2)、中村(2)、堀内(2)
12/9-16	(無意根合宿)第2班　薄別－無意根小屋－無意根山－薄別	L岩瀬(3)、SL信谷(3)、森田(2)、木口(2)、前原(2)
12/9-16	(無意根合宿)第3班　薄別－無意根小屋－無意根山－薄別	L菅野(4)、SL和田(4)、片倉(1)、小瀬川(1)、川勝(1)
12/9-16	(無意根合宿)第4班　薄別－無意根小屋－無意根山－薄別	L保坂(3)、SL吉田守(3)、大口(1)、福安(1)、等々力(1)
12/9-16	(無意根合宿)第5班　薄別－無意根小屋－無意根山－薄別	L松居(4)、SL矢島(4)、桜井(3)、内田(1)、阿部(1)
12/27-1/4	(正月ニセコ合宿)A班　新見温泉－目国内－岩内岳－チセヌプリ下にBC	L武藤(3)、SL新谷(3)、堀内(2)、坂口(2)、前原(2)
12/27-1/4	(正月ニセコ合宿)B班　新見温泉－目国内－岩内岳－チセヌプリ下にBC	L菅野(4)、SL保坂(3)、梶井(4)、森田(2)、木口(2)、中村(2)
12/27-1/4	[正月ニセコ合宿] C班　湯本温泉－チセヌプリ下にBC	CL岩瀬(3)、SL和田(4)、片倉(1)、大口(1)、内田(1)
12/27-1/4	[正月ニセコ合宿] D班　湯本温泉－チセヌプリ下にBC	L松居(4)、SL星野一(3)、桜井(3)、小瀬川(1)、福安(1)、中町(1)
12/27-1/4	[正月ニセコ合宿]　E班　湯本温泉－チセヌプリ下にBC	L矢島(4)、SL吉田(3)、川勝(1)、等々力(1)、阿部(1)
1/26-27	銭函中学校－銭函天狗山－奥手稲山－山の家－迷沢山への稜線－発寒川－西野	L岩瀬(3)、SL保坂(3)、福安(1)、片倉(1)、大口(1)
1/27	桂岡－春香山－スキー場	L吉田真(3)、SL森田(2)、小瀬川(1)、内田(1)、中町(1)
1/27	平和の滝－百松沢山－源八沢－福井えん堤	L松居(4)、SL和田(4)、梶井(4)、阿部(1)
2/3-4	桂岡－銭函峠－ヘルベチアヒュッテ－朝里岳－春香山－スキー場	L岩瀬(3)、SL和田(4)、堀内(2)、小瀬川(1)、内田(1)
2/8-10	空沼二股－空沼岳－漁岳－小漁山－豊平川源頭－フレ岳よりの尾根－蓬来山－中山峠	L武藤(3)、SL星野(3)、阿部(1)、中町(1)、大口(1)
2/9-10	百松橋－神威岳－烏帽子岳－百松沢山－源八沢－札幌	L保坂(3)、SL堀内(2)、片倉(1)、福安(1)
2/24	ロッジ祭り	
3/3-5	中山峠－喜茂別岳－中岳－無意根山－無意根小屋－薄別	L大口(1)、SL阿部(1)、片倉(1)、小瀬川(1)、和田(4)
3/5-6	中山峠－喜茂別岳－無意根山－薄別	L武藤(3)、SL梶井(4)、木口(2)、内田(1)、片倉(1)
3/7-10	豊羽元山－美比内山－余市岳－千尺高地－無意根山－無意根小屋－薄別	L星野(3)、SL堀内(2)、前原(2)
3/8-10	空沼二股－空沼岳－漁岳－小漁岳－豊平川－フレ岳尾根－フレ岳－オコタン－札幌	L保坂(3)、SL吉田真(3)、小瀬川(1)、片倉(1)、内田(1)
3/19-23	(十勝春山合宿)十勝岳温泉－三段山－十勝岳温泉	L岩瀬(3)、SL星野一(3)、福安(1)、阿部(1)
		L矢島(4)、SL桜井(3)、前原(2)、大口(1)
3/19-26	(十勝春山合宿)十勝岳温泉－三段山－D尾根－－富良野岳－白金温泉	L和田(4)、SL吉田真(3)、堀内(2)、中町(1)
		L松居(4)、SL保坂(3)、森田(2)、小瀬川(1)
		L武藤(3)、SL梶井(4)、木口(2)、内田(1)、片倉(1)
4/20-21	無意根新人歓迎会	
4/27-5/4	夕張岳登山口－ガマ岩－夕張岳－鉢盛山－ポントナシベツ岳－芦別岳－雲峰－冬尾根－山部	L武藤(4)、SL堀内(3)、大口(2)、小瀬川(2)、中町(2)
4/28-5/3	賀老通－フモンナイ岳－東狩場山－北東尾根－千走川－賀老通	L星野一(4)、SL前原(3)、福安(2)
4/28-5/3	白金温泉－美瑛岳標高尾根－美瑛岳－美瑛岳避難小屋－白金温泉	L保坂(4)、SL森田(3)、内田(2)、阿部(2)
4/30-5/5	無意根ゴールデンウィーク合宿	L岩瀬(4)、SL吉田真(4)、桜井(4)、吉田(4)、新谷(4)、桜井(3)、和田(OB1)、新人多数
5/18-19	無意根追悼登山	
5/24-26	増毛－山の神－暑寒荘－暑寒別岳－山の神	L武藤(4)、SL堀内(3)、内田(2)、大口(2)、丸谷(1)
5/24-27	十勝三股－杉沢出合－前天狗－ニペソツ山－岩間温泉－十勝三股	L菅野(OB1)、SL桜井(3)、阿部(2)
5/25-26	山部－ユーフレ小屋－旧道－芦別岳－覚太郎コース－ユーフレ小屋－山部	L保坂(4)、SL松居(OB1)、前原(3)
5/25-26	清川－ニセイカウシュペ山－清川	L森田(3)、SL片倉(2)、福安(2)
6/3-9	(サマースキー)A班　勇駒別－天女ヶ原－北大スロープ(－旭岳－北鎮岳－比布岳)－勇駒別	L堀内(3)、SL福安(3)、佐藤(1)、皆川(1)、丸谷(1)
6/3-9	(サマースキー)B班　勇駒別－天女ヶ原－北大スロープ(－旭岳－北鎮岳－比布岳)－勇駒別	L森田(3)、SL片倉(2)、大口(2)、細川(1)、高木(1)
6/3-9	(サマースキー)C班　勇駒別－天女ヶ原－北大スロープ(－旭岳－北鎮岳－比布岳)－勇駒別	L前原(3)、SL小瀬川(2)、内田(2)、椿谷(1)、本吉(1)
6/3-9	(サマースキー)D班　勇駒別－天女ヶ原－北大スロープ(－旭岳－北鎮岳－比布岳)－勇駒別	L吉田守(4)、SL桜井(3)、大南(1)、竹内(1)、佐々木尚(1)
6/3-9	(サマースキー)E班　勇駒別－天女ヶ原－北大スロープ(－旭岳－北鎮岳－比布岳)－勇駒別	L信谷(3)、SL阿部(2)、中町(2)、山本(1)、佐々木右(1)
6/5-9	(サマースキー)高原温泉－ヤンベタップ沢出合－白雲石室－白雲岳－北海岳－旭岳－北大スロープ－姿見の池－勇駒別	L星野一(4)、SL武藤(4)、岩瀬(4)
6/6-9	(サマースキー)勇駒別－姿見の池－北大スロープ－旭岳周辺－姿見の池－勇駒別	L吉田真(4)、SL桜井(4)、中井(OB3)、皿田(OB2)、松居(OB1)、和田(OB1)、水谷先生
6/15-16	白水沢	L武藤(4)、SL星野一(4)、堀内(3)、内田(2)
6/16	木挽沢	L信谷(4)、SL小瀬川(2)
6/20	定山渓天狗岳	L桜井(3)、部外者1名
6/20	発寒川	L信谷(4)、SL前原(3)、福安(2)
6/21	発寒川	L星野一(4)、SL菅野(OB1)、桜井(3)、大南(1)、佐藤(1)
6/22	発寒川	L武藤(4)、SL堀内(3)、細川(1)、竹内(1)
6/22	発寒川	L吉田(4)、SL保坂(4)、皆川(1)、中町(2)、佐々木尚(1)
6/22-23	白水川	L森田(3)、SL前原(3)、片倉(2)、福安(2)、椿谷(1)、丸谷(1)

6/25-28	シルバーロッジ合宿	
6/29-30	白水川	L吉田真(4)、SL阿部(2)、本吉(1)、竹内(1)、佐々木尚(1)
6/29-30	白水川	L岩瀬(4)、SL大口(2)、桜井(3)、山本(1)、皆川(1)、細川(1)
6/29-30	白水川	L桜井(4)、SL堀内(3)、中町(2)、佐藤(1)、佐々木右(1)、大南(1)
7/4	発寒川	L前原(3)、福安(2)
7/6-7	白水沢	L星野一(4)、SL新谷(4)、部外者5名
7/6-7	白水沢	L大口(2)、SL内田(2)、片倉(2)、小瀬川(2)
7/7	木挽沢	L前原(3)、SL福安(3)、森田(3)
7/10	木挽沢	L福安(2)、中町(2)
7/11	発寒川	L吉田守(4)、SL中井(OB3)、山本(1)、丸谷(1)
7/14-15	白水川	L吉田守(4)、SL中井(OB3)、山本(1)、丸谷(1)
7/14-21	相泊－ウナキベツ－知床沼－知床岳－大崩－相泊－羅臼温泉－泊場－羅臼岳－二つ池－硫黄山－カムイワッカ－斜里	L小瀬川(2)、SL内田(2)、本吉(1)
7/16-23	布礼別－原始ケ原－富良野岳－十勝岳－美瑛岳－避難小屋－オプタテシケ山－黄金ケ原－トムラウシ山－カウンナイ源頭－五色岳－沼の原－石狩岳－前天狗－ニペソツ山－十勝三股	L桜井(3)、SL大口(2)、皆川(1)、佐々木右(1)、佐々木尚(1)
7/17-21	天人峡－カウンナイ沢－ヒサゴ沼－五色岳－忠別岳－高原温泉	L吉田守(4)、SL中井(OB3)、丸谷(1)、山本(1)
7/20-21	白水川	L保坂(4)、吉田真(4)、堀内(3)、福安(2)、椿谷(1)
7/24-30	八千代－戸蔦別川－三股－戸蔦別岳－ポンチロロ川上二股－三股－チロロ岳－6の沢－ペンケヌシ岳－ペンケヌシ川－日高町	L和田(OB1)、SL新谷(4)、片倉(2)、竹内(1)、細川(1)
7/25-8/2	日高町－千呂露川三股－チロロ岳－ピパイロ岳－戸蔦別岳Bカール－戸蔦別川－エサオマントッタベツ川－札内岳－ピリカペタン沢－トッタベツヒュッテ－八千代	L保坂(4)、SL吉田真(4)、堀内(3)、福安(2)、椿谷(1)
8/4-11	ユートピア牧場－ペテガリ山荘－中の岳直登沢－A沢－ペテガリ岳－下降尾根－中の川上二股－ケルン－林道－尾田村	L岩瀬(4)、SL星野一(4)、小瀬川(3)
8/5	発寒川	L桜井(4)、SL堀内(3)、本吉(1)、皆川(1)
8/7-10	天人峡－カウンナイ沢－ヒサゴ沼－五色岳－忠別岳－高原温泉	L桜井(4)、SL堀内(3)、皆川(1)、本吉(1)
8/7-12	尾田村－ヌピナイ川－ピリカヌプリ－ソエマツ岳－中の川三股－神威岳－中の川－尾田村	L菅野(OB1)、SL武藤(4)、前原(3)、大口(2)、阿部(2)
8/9-14	糠平－ウペペ林道入口－ウペペサンケ山南峰－糠平－十勝三股－前天狗－ニペソツ山－JP－沼の原－五色岳－ヒサゴ沼－天人峡	L福安(2)、SL片倉(2)、佐藤(1)、細川(1)、山本(1)
8/18-19	白水川	L星野一(4)、SL阿部(2)、小瀬川(2)、佐々木右(1)
8/21-29	八千代－戸蔦別川－ピリカペタン八の沢－十勝幌尻岳－札内岳－記念別－札内川－上札内	L星野一(4)、SL堀内(3)、小瀬川(2)、阿部(2)、佐々木右(1)
8/22-29	日高幌別－ソガベツ沢－野塚岳－ニオベツ川－十勝岳－楽古岳－上杵臼	L武藤(4)、SL片倉(3)、佐藤(1)、佐々木尚(1)
8/24-31	中札内－札内川(－コイカクシュ札内岳)－札内川八の沢－カムイエクウチカウシ山－下降尾根－札内ヒュッテ－上札内	L信谷(4)、SL保坂(4)、森田(3)、大南(1)
8/31-9/7	布礼別－原始ヶ原－富良野岳－十勝岳－美瑛岳－オプタテシケ山－黄金ヶ原－トムラウシ山－ヒサゴ沼－天人峡	L前原(3)、SL竹内(1)、丸谷(1)
9/5-7	沓形－利尻岳－鴛泊	L桜井(3)、SL福安(2)、椿谷(1)、大南(1)
9/25-27	沓形－利尻岳－鴛泊	L小瀬川(2)、SL中町(2)、佐々木尚(1)、佐々木右(1)
9/29-10/3	中札内－コイカクシュサツナイ川－コイカクシュ札内岳－ヤオロマップ岳－1839峰－ヤオロマップ岳－コイカクシュ札内岳－コイカクシュサツナイ川－札内ヒュッテ	L阿部(2)、SL大口(2)、椿谷(2)、菅野(OB1)
9/29	部員総会(シルバーロッジ)	
9/30	白水川	L保坂(4)、SL中町(2)、佐々木右(1)、佐々木尚(1)

63 season　1974(昭和49)年10月～1975(昭和50)年9月

部長：水谷寛

主任：森田明(3)／庶務：片倉賢(2)／記録：阿部幹雄(2)／会計：福安憲司(2)／リーダー会議長：桜井公一(3)／上級生会議議長：森田明(3)／装備(医療)：椿谷茂(1)・中町昌三(2)／小屋：竹内隆一(1)／トレーニング：大口真樹(2)・丸谷聖一(1)／保険：佐藤元(1)／体育会：佐々木尚三(1)／バイト：佐々木右治(1)／部室管理：大南和也(1)／プリント：皆川幸治(1)／歌唱指導：堀内洋(3)／むいね編集：中村宏(3)

10/5-6	無意根小屋祭り	
10/8-9	山部－ユーフレ小屋－北尾根－芦別岳－新道－山部	L吉田守(4)、SL桜井(3)、大南(1)、丸谷(1)
10/8-13	大樹－ペテガリ岳東尾根－ポンヤオロマップ岳－1519峰－ペテガリ岳－ルベツネ岳－1599峰－ヤオロマップ岳－1839峰－コイカクシュ札内岳－コイカクシュサツナイ川－札内ヒュッテ	L保坂(4)SL森田(3)、中町(2)、佐々木右(1)、佐々木尚(1)
10/12-13	山部－ユーフレ小屋－北尾根－芦別岳－新道－山部	L武藤(4)、SL堀内(3)、本吉(1)
10/19-20	山部－ユーフレ小屋－北尾根－芦別岳－新道－山部	L片倉(3)、SL阿部(3)、佐々木右(1)、皆川(1)
10/25	徳舜瞥登山口－徳舜瞥山－ホロホロ山－登山口	L堀内(3)、佐々木右(1)、佐藤(1)
11/2-4	定山渓天狗岳登山口－東尾根－ローソク岩－豊羽－無意根山－無意根小屋－薄別	L岩瀬(4)、SL星野(4)、大口(2)、福安(2)、竹内(1)、武藤(4)
11/3	札幌－恵庭岳－札幌	L吉田(4)、SL堀内(3)、本吉(1)、大南(1)、佐々木右(1)
11/3-4	湯本温泉－シャクナゲ岳－白樺山－前目国内岳－目国内岳－新見温泉	L前原(3)、SL桜井(3)、佐藤(1)、山本(1)、皆川(1)、細川(1)
11/21-24	旭岳2年目合宿	L桜井(4)、SL吉田守(4)、阿部(2)、福安(2)、小瀬川(2)
11/21-24	旭岳2年目合宿	L岩瀬(4)、SL桜井(3)、片倉(2)、大口(2)、中町(2)、星野(4)
11/21-24	無意根1年目合宿	L森田(3)、SL前原(3)、武藤(4)、保坂(4)、吉田真(4)、信谷(4)、ほか一年目
12/1-7	2年目十勝合宿　三段山下にBC、十勝・富良野岳および冬山訓練	L保坂(4)、SL森田(3)、阿部(2)、大口(2)
12/1-7	十勝岳三段山下にBC、十勝・富良野岳アタック及び冬山訓練	L武藤(4)、SL前原(3)、福安(2)、中町(2)
12/1-7	十勝岳三段山下にBC、十勝・富良野岳アタック及び冬山訓練	L星野(4)、SL新谷(4)、小瀬川(2)、片倉(2)
12/2-8	無意根山にて冬山訓練	CL桜井公一(3)、SL桜井(4)、吉田守(4)、吉田真(4)、岩瀬(4)、ほか一年目
12/21-22	空沼二股－空沼小屋－空沼二股	L星野(4)、SL吉田守(4)、佐々木右(1)、皆川(1)、大南(1)
12/22-23	桂岡－銭函峠－ヘルベチアヒュッテ－春香山－春香スキー場	L信谷(4)、SL森田(3)、丸谷(1)、細川(1)、佐々木尚(1)
12/22-23	豊羽－美比内－余市岳－豊羽	L保坂(4)、SL岩瀬(4)、片倉(2)、中町(2)、阿部(2)、前原(3)
12/22-24	豊羽－美比内－余市岳－千尺高地－豊羽	L武藤(4)、SL吉田真(4)、小瀬川(2)、大口(2)、福安(2)、桜井(3)

12/26-1/2	豊羽－美比内－余市岳－無意根山－中岳－喜茂別岳－中山峠－小漁－漁岳－オコタンペ湖－美笛	L信谷(4)、SL森田(3)、丸谷(1)、細川(1)、佐々木尚三(1)
12/26-1/2	桂岡－薄別	L星野一(4)、SL吉田守(4)、佐々木右(1)、皆川(1)、大南(1)
12/26-1/2	桂岡－薄別	L桜井(4)、SL菅野(OB1)、椿谷(1)、佐藤(1)、竹内(1)
12/27-1/2	布礼別－トウヤウスベ山－原始ケ原－富良野岳－上ホロカメットク山－十勝岳－上ホロカメットク山－新十勝岳温泉	L保坂(4)、SL岩瀬(4)、片倉(2)、中町(2)、阿部(2)、前原(3)
12/27-1/2	布礼別－トウヤウスベ山－原始ケ原－富良野岳－上ホロカメットク山－十勝岳－上ホロカメットク山－新十勝岳温泉	L武藤(4)、SL吉田真(4)、小瀬川(2)、大口(2)、福安(2)、桜井(3)
1/24-29	十勝三股－杉沢出合－天狗岳－前天狗(－ニペソツ山)－杉沢出合－十勝三股	L菅野(OB1)、SL森田(3)、阿部(2)、椿谷(1)
1/25-26	空沼岳	L桜井(3)、SL福安(2)、本吉(1)
1/26-27	山部－冬尾根－半面山－雲峰－芦別岳－雲峰－冬尾根－山部	L武藤(4)、SL岩瀬(4)、丸谷(1)、竹内(1)
2/8-9	清川－ニセイカウシュペ山－清川	L信谷(4)、SL森田(3)、細川(1)、大南(1)、佐々木右治(1)
2/9-10	清川－ニセイカウシュペ山－清川	L岩瀬(4)、SL大口(2)、佐藤(1)、佐々木尚三(1)
2/9-11	美国－登山口－積丹岳－登山口	L片倉(2)、SL小瀬川(2)、竹内(1)
2/10-11	ヘルベチア・平和の滝	L阿部(2)、福安(2)、本吉(1)
2/24	ロッジ祭り	
3/2-4	ニセコ強化合宿	L武藤(4)、椿谷(1)、細川(1)、佐々木尚三(1)
3/2-4	ニセコ強化合宿	L岩瀬(4)、大南(1)、丸谷(1)、佐々木右治(1)
3/2-5	元町賀老通－フモンナイ岳標高尾根1200m－狩場－元町賀老通	L桜井(3)、SL前原(3)、中町(2)、大口(2)、片倉(2)
3/3-5	ニセコ強化合宿	L星野(4)、竹内(1)、本吉(1)
3/3-5	ニセコ強化合宿	L保坂(4)、皆川(1)、佐藤(1)
3/4-5	幌内府川－余別岳－積丹岳－積丹岳登山口	L森田(3)、SL小瀬川(2)、福安(2)
3/14-15	奥手稲・春香山	L星野(4)、SL桜井(3)、椿谷(1)
3/15-16	真狩登山口－羊蹄山－登山口	L吉田(4)、SL中井(OB3)、和田(OB1)、菅野(OB1)
3/16-26	根室標津－天狗岩－知丹別－硫黄－羅臼－岩尾別温泉－ウトロ－峰浜－海別－斜里－登山口－斜里岳－斜里	L信谷(4)、SL中町(2)、大南(1)
3/17-24	新得－二股－トムラウシ温泉－トムラウシ山－化雲岳－忠別岳－シビナイ出会い－造林事務所－国道	L武藤(4)、SL小瀬川(2)、佐藤(1)、佐々木右(1)
3/17-22	清川－ニセイカウシュペ山－比布良山付近－天狗岳－ヒュッテ小天狗－奥白滝	L星野(4)、SL桜井(3)、椿谷(1)
3/17-25	層雲峡－シビナイ出合－忠別石室－五色岳－トムラウシ山－ヒサゴ沼－五色岳－シビナイ出合－造林事業所－国道	L岩瀬(4)、SL大口(2)、片倉(2)、皆川(1)
3/18	春香山	L吉田(4)、SL前原(3)、本吉(1)
3/18-24	新得－トムラウシ温泉－トムラウシ山－化雲岳－忠別小屋－忠別岳－シビナイ出合－造林事業所－国道	L中井(3)、SL坂本(3)、矢島(1)、梶井(1)、酒匂(2)
4/29-5/2	十勝三股－ブヨ沢登山口－十石峠－音更手前－石狩岳－川上岳－石狩岳－音更山－音更沢－シビナイ出合－造林事務所－層雲峡	L阿部(3)、SL菅野(OB2)、福安(3)、佐藤(2)
4/29-5/3	鴛泊－長官山－利尻岳－長官山－鴛泊	L桜井(4)、SL片倉(3)、丸谷(2)、椿谷(2)、皆川(2)
4/29-5/4	別刈－天狗岳－雄冬山－浜益御殿－浜益岳－群別岳－暑寒別岳－南暑寒別岳－暑寒別岳－暑寒山荘－山の神	L大口(3)、SL小瀬川(3)、佐々木右治(1)、竹内(1)、大南(1)
4/29-5/4	無意根山	CL森田(4)、中村(4)、堀内(4)、中町(3)、吉田(OB1)、一年目8名
5/17-18	無意根追悼登山、新人歓迎会	
5/24-25	美瑛－白金温泉－双子沼手前－オプタテシケ山－白金温泉	L森田(4)、SL大口(3)、佐々木右治(2)、大南(2)、丸谷(2)
6/2-8	サマースキー(旭岳周辺)	L小瀬川(3)、SL竹内(2)、長嶋(1)、橋村(1)、佐々木尚三(2)
		L福安(3)、SL佐々木右(2)、後藤(1)、不破(1)、阿部(3)
		L片倉(3)、SL丸谷(2)、椿谷(2)、佐藤(1)、宮崎(1)
		L中町(3)、SL大南(2)、伊藤(1)、中村(1)、大口(3)、皆川(2)
6/3-8	サマースキー(旭岳周辺)	L森田(4)、SL和田(OB2)、中村(4)、堀内(4)、桜井(4)、矢島(OB2)
6/17-19	シルバーロッジ合宿	
6/21-22	白水川	L小瀬川(3)、SL竹内(2)、佐々木尚三(2)
6/22	沢登り　発寒	L福安(3)、SL桜井(4)、橋村(1)、中村(4)
6/22	沢登り　発寒	L堀内(4)、SL大口(3)、宮崎(1)、不破(1)
6/28-29	白水川	L堀内(4)、SL中村(4)、大南(2)、宮崎(1)、佐々木右治(2)
6/28-29	白水川	L片倉(3)、SL中町(3)、不破(1)、伊藤(1)
6/28-29	白水川	L森田(4)、SL福安(3)、佐藤(2)、中村(1)
6/28-29	白水川	L大口(3)、SL椿谷(2)、後藤(1)、長嶋(1)
6/29	木挽沢	L佐々木(2)、SL竹内(2)
7/5-6	白水川	L阿部(3)、SL皆川(2)、丸谷(2)、橋村(1)、桜井(4)
7/5-6	漁岳	L堀内(4)、SL中村宏(4)、中村健彦(1)、佐々木右治(2)
7/12-13	漁岳	L片倉(3)、森田(4)、中町(3)、竹内(2)
7/12-19	布礼別－原始ケ原－富良野岳－三峰－上ホロカメトック山下－十勝岳－美瑛岳－美瑛富士－石垣山－辺別岳－オプタテシケ山－双子沼－黄金ケ原－トムラウシ山－化雲岳－五色ケ原－沼の原－JP－石狩岳－音更山－ユニ石狩岳－旧道－十勝三股	L大南(2)、SL佐々木尚(2)、伊藤(1)、宮崎(1)
7/14-20	八千代－トッタベツヒュッテ－ピリカペタン沢－札内岳－札内川10の沢－春別岳－JP－エサオマントッタベツ岳－北カール－新冠川－カムイの沢－新冠川－上二股－新冠川	L堀内(4)、SL中村宏(4)、中村健彦(1)、佐々木右(2)
7/16-22	志比内－辺別川中尾沢出合－辺別川－トムラウシ山－ワセダ沢－温泉沢－ヒサゴ沢－ヒサゴ沼－化雲内沢－化雲ノ沢偵察－天人峡	L片倉(3)、SL森田(4)、中町(3)、竹内(2)
7/20-28	十勝岳温泉－十勝岳－美瑛－美瑛富士－オプタテシケ山－双子沼－スマヌプリ－コスマヌプリ－トムラウシ山－ヒサゴ沼－ヒサゴ沢－温泉沢－ヒサゴ沢－ヒサゴ沼－天人峡	L大口(3)、SL福安(3)、不破(1)、長嶋(1)
7/22-28	新冠ダム－奥新冠ダム－ポンベツ出合－奥新冠ダム－新冠発電所	L阿部(3)、SL小瀬川(3)、佐藤(2)、皆川(2)、橋村(1)
8/2-3	風不死岳大沢	L武藤(OB1)、SL大口(3)、宮崎(1)、不破(1)、丸谷(2)
8/3-6	余別－余別川－本流－二股右股－51点沢－余別	L菅野(OB2)、SL阿部(3)、小瀬川(3)、佐々木尚(2)、椿谷(2)
8/6-11	奥新冠ダム－幌尻沢出合－幌尻岳－七つ沼カール－新冠川－上二股－エサオマントッタベツ岳－札内岳－十勝幌尻岳－トッタベツヒュッテ	L武藤(OB1)、SL大口(3)、宮崎(1)、不破(1)

8/6-14	糠平－ウペペサンケ山－南丸山－丸山－ニペソツ山－前天狗岳－JP－石狩岳－JP－沼の原－五色ケ原－ヒサゴ沼－トムラウシ山－化雲岳－天人峡	L佐々木右(2)、SL竹内(2)
8/12-19	サッシビチャリ橋－西沢出合－1839峰－下降尾根－西沢－ペテガリ岳－西尾根－ペテガリ山荘－静内	L菅野(OB2)、SL阿部(3)、小瀬川(3)、椿谷(2)、佐々木尚(2)
8/16	沢登り　発寒	L森田(4)、SL福安(3)、長嶋(1)、伊藤(1)、大南(2)
8/21-23	勇駒別温泉－旭岳－北大スロープにてスキー－旭岳－勇駒別	L丸谷(2)、SL佐藤(2)、佐々木(2)
8/20-29	上美生－美生川－ピパイロ岳－トッタベツ川九の沢－三股－中の沢－戸蔦別岳－七つ沼カール－新冠川－上二股－エサオマントッタベツ岳－JP－エサオマントッタベツ川－札内岳－ピリカペタン沢－トッタベツヒュッテ	L森田(4)、SL福安(3)、長嶋(1)、伊藤(1)、大南(2)
8/22-26	蓮華温泉－朝日岳－雪倉岳－三国境－白馬岳－ケ岳－唐松岳－五龍小屋－五龍岳－鹿島ケ岳－爺ケ岳－種池小屋－扇沢－信濃大町	L桜井(4)、SL武藤(OB1)
9/28	部員総会(シルバーロッジ)	
8/29-31	イトムカ元山－武華岳－武利岳－1632峰手前コル－武利岳－イトムカ元山	L椿谷(2)、SL皆川(2)、中村(1)、橋村(1)

64 season　1975(昭和50)年10月～1976(昭和51)年9月

部長：水谷寛

主任：片倉賢(3)／庶務：福安憲司(3)／記録：皆川幸治(2)／会計：佐々木尚三(2)／リーダー会議長：大口真樹(3)／上級生会議議長：片倉賢(3)／体育会：山本義男(2)／小屋：大南和也(2)／装備(医療)：椿谷茂(2)・宮崎隆之(1)／保険：佐藤元(2)／トレーニング：丸谷聖一(2)・長嶋義人(1)／部室管理：竹内隆一(2)／ロッジ管理：森田明(4)／むいね編集：中村宏(4)／バイト：佐々木右治(2)／プリント：不破秀実(1)／歌唱指導：小瀬川修(3)

9/29-10/6	ペテガリ山荘－ペテガリ岳－下降尾根頭－ルベツネ－コイカク－上二股－札内ヒュッテペテガリ山荘－ペテガリ岳－下降尾根頭－ルベツネ－コイカク－上二股－札内ヒュッテ(標高1700m以上は積雪多くピパイロ往復断念)	L椿谷(2)、SL佐々木尚三(2)、山本(2)、長島(1)
10/1-3	天人峡－化雲内沢源頭－トムラ北沼－トムラ－トムラウシ温泉	L堀内(4)、SL大南(2)、橋村((1)、伊藤(1)、佐藤(2)、長沼(OB4)
10/4-5	望岳台－漁岳－オコタンペ湖－車道	L中村宏(4)、SL佐々木右治(2)、中村健彦(1)、不破(1)
10/9-10	(羊蹄山)半月湖－旧小屋跡－半月湖	L佐々木尚三(2)、SL佐々木右治(2)、伊藤(1)、中村(1)、丸谷(2)
10/15-18	パンケ出合－幌尻山荘－幌尻岳－七つ沼－トッタベツ岳－北トッタベツ岳－1916峰－幌尻岳－幌尻山荘	L小瀬川(3)、SL佐々木右治(2)、伊藤(1)
10/18-19	幌加駅－Canta1300m－ニペソツ－登山口	L桜井(4)、SL竹内(2)
10/19	(定天東尾根)登山口－定天ピーク－熊の沢－登山口	L阿部(3)、SL菅野(OB2)
10/19	(定天東尾根)登山口－定天ピーク－熊の沢－登山口	L大口(3)、SL椿谷(3)
10/19	銚子口駅－登山口－駒ヶ岳－銚子口駅	L佐藤(2)、SL大南(2)、宮崎(1)、不破(1)、丸谷(2)
10/26	登山口－恵庭岳－登山口	L桜井(4)、SL竹内(2)、丸谷(2)、片倉(3)
11/1-3	白金温泉－美瑛富士避難小屋－オプタテシケ山－美瑛－ポンピの沢－望岳台	L片倉(3)、SL大口(3)、桜井(4)、中村(4)、阿部(3)
11/1-3	湯本－チセ－ニト－イワオ－五色－アンヌプリ－山田	L佐藤(2)、SL佐々木尚三(2)、橋村(1)、不破(1)、宮崎(1)
11/15-16	無意根　ビバーク訓練	L大口(3)、SL佐々木右治(2)
11/21-24	(入門合宿　旭岳)勇駒別－天女ケ原－盤の沢周辺、姿見の池近くでスキー練習－勇駒別	一年目班(1)　L森田(4)、SL阿部(3)、山本(2)、中村(1)、長島(1)、伊藤(1)
11/21-24	(入門合宿　旭岳)勇駒別－天女ケ原－盤の沢周辺、姿見の池近くでスキー練習－勇駒別	一年目班(2)　L大口(3)、SL小瀬川(3)、不破(1)、宮崎(1)、橋村(1)
11/21-24	(入門合宿　旭岳)勇駒別－旭岳－石室周辺で雪上訓練、スキー練習－勇駒別	二年目班(1)　L桜井(4)、SL中村(4)、竹内(2)、椿谷(2)
11/21-24	(入門合宿　旭岳)勇駒別－旭岳－石室周辺で雪上訓練、スキー練習－勇駒別	二年目班(2)　L堀内(4)、SL中町(3)、佐藤(2)、丸谷(2)、大南(2)
11/21-24	(入門合宿　旭岳)勇駒別－旭岳－石室周辺で雪上訓練、スキー練習－勇駒別	二年目班(3)　L片倉(3)、SL福安(3)、佐々木右治(2)、佐々木尚三(2)、皆川(2)
12/5-11	(一年目無意根新人合宿)無意根を中心にして、中岳、長尾にてスキー、アイゼン、雪洞訓練	CL片倉(3)、阿部(3)、桜井(4)、星野(OB1)、吉田(OB1)、中村(1)、橋村(1)、伊藤(1)、長島(1)、宮崎(1)、山本(1)
12/6-11	(二年目十勝新人合宿)十勝岳温泉－三段山－富良野岳－十勝岳温泉	L大口(3)、SL中町(3)、丸谷(2)、椿谷(2)
12/6-11	(二年目十勝新人合宿)十勝岳温泉－D尾根－十勝岳温泉	L小瀬川(3)、SL福安(3)、佐々木右治(2)、佐藤(2)
12/6-11	(二年目十勝新人合宿)十勝岳温泉－富良野岳－白金温泉	L和田(OB2)、SL中村(4)、大南(2)、佐々木右治(2)
12/6-11	(二年目十勝新人合宿)十勝岳温泉－D尾根－白金温泉	L森田(4)、SL堀内(4)、竹内(2)、皆川(2)
12/21-22	(正月山行)無意根　薄別－小屋－シャンツェ－小屋－Peak－元山	1年目班(1)　L堀内(4)、SL中村宏(4)、宮崎(1)、中村健彦(1)、不破(1)、山本(2)
12/21-22	星野－銭天下－奥手－山の家－平和の滝	1年目班(2)　L福安(3)、SL中町(3)、長島(1)、伊藤(1)、橋村(1)、吉田(OB1)
12/21-22	登山口－積丹岳－登山口	2年目班(2)　L森田(4)、SL大口(3)、丸谷(2)、竹内(2)、佐々木尚三(2)
12/21-23	空沼二股－小屋－空沼岳－札幌岳－冷水小屋－国道230号線	2年目班(3)　L小瀬川(3)、SL阿部(3)、皆川(2)、大南(2)、椿谷(2)
12/23-24	春香スキー場－春香山－銭函峠－奥手稲－手稲山－ロープウェイ駅	2年目班(1)　L桜井(4)、SL片倉(3)、佐藤(2)、佐々木右治(2)
12/28-31	青年の家－美瑛岳－避難小屋－オプタテ－三股－殿狩橋－二股－裏OB宅	2年目班(3)　L小瀬川(3)、SL阿部(3)、皆川(2)、大南(2)、椿谷(2)
12/28-1/1	裏OB宅－トノカリ沢出合－オプタテ－白金温泉	2年目班(1)　L桜井(4)、SL片倉(3)、佐藤(2)、佐々木右治(2)
12/28-1/1	白金温泉－美瑛岳－避難小屋－辺別岳－オプタテ三股－二股－上富村中学校	2年目班(2)　L森田(4)、SL大口(3)、丸谷(2)、竹内(2)、佐々木尚三(2)
12/28-1/3	望岳台－白銀荘－三段山－十勝岳温泉－上ホロ－白銀荘－白銀温泉	1年目班(1)　L堀内(4)、SL中村宏(4)、宮崎(1)、中村健彦(1)、不破(1)、山本(2)
12/28-1/3	望岳台－白銀荘－三段山－十勝岳温泉－上ホロ－白銀荘－白銀温泉	1年目班(2)　L福安(3)、SL中町(3)、長島(1)、伊藤(1)、橋村(2)、吉田(OB1)
1/22-25	豊羽－美比内－余市岳－美比内－無意根－小屋－下山	L竹内(2)、SL大南(2)、中村(1)
1/23-25	ロッヂ－小林峠－砥石山－源八沢出合－百松－福井えん堤－ロッヂ	L佐々木右治(2)、SL山本(2)、不破(1)、伊藤(1)
1/24-26	空沼二股－小屋－空沼岳－漁岳－オコタンペ－恵庭岳滑降コース下－女子滑降コースでスキー－オコタン－美笛	L丸谷(2)、SL佐々木尚三(2)、長島(1)
1/31-2/1	桂岡－銭函峠－ヘルベチア－山の家－手稲山－ネオパラを下り－バス停	L皆川(2)、SL佐々木尚三(2)、不破(1)、長島(1)
1/31-2/1	定天登山口－天狗平－ろうそく岩－ろうそく岩上－下山	L阿部(3)、SL片倉(3)、椿谷(2)
3/3-4	(一年目強化ニセコ)新見温泉－チセ－イワオ－五色温泉－ニセコアンヌプリ－山田温泉	L小瀬川(3)、長島(1)、不破(1)、中村(1)

3/6-8	(一年目強化ニセコ)モイワスキー場－五色温泉－ニト－チセ－白樺－新見温泉－目国内－岩内－岩内駅	L森田(4)、橋村(1)、伊藤(1)
3/8-9	定天東尾根　雨の為東尾根をあきらめて帰る	L阿部(3)、SL片倉(3)、佐々木(2)、山本(2)
3/9-10	(芦別北尾根)登山口－槇柏山御茶々岳コル－本峰－半面山－登山口	L大口(3)、大南(2)、丸谷(2)
3/19-23	八千代－戸蔦別ヒュッテ－砂防ダム－10の沢－札内岳－JP－エサオマン－札内岳－8の沢－ヒュッテ－広野	L阿部(3)、SL片倉(3)、山本(2)
3/20-29	相泊－カモイウンペ－二股－知床台地－知床岳－知床台地はずれ岩峰下－952m峰－岬先端－赤岩まきおわり－ペンギンの鼻－モレイウシ川原－化石の浜－相泊	L中村(4)、SL中町(3)、佐々木右治(2)、不破(1)、長島(1)
3/21-26	戸蔦別ヒュッテ－札内岳－JP－エサオマン－JP－札内岳－1709峰－勝幌－8の沢－戸蔦別ヒュッテ－八千代小学校	L森田(4)、SL大口(3)、丸谷(2)、椿谷(2)、伊藤(1)
3/22-29	親の原スキー場最終リフト－天狗原－白馬岳－蓮華温泉－雪倉岳－木地屋－平岩	L桜井(4)、SL竹内(2)、中村(1)、橋村(1)、皆川(2)
4/7-9	十勝三股－杉沢出合－前天－ニペ－杉沢出合－国道	L片倉(4)、SL大南(3)、丸谷(3)、竹内(3)、伊藤(2)
4/29-5/2	白金温泉－美瑛富士避難小屋－オプタテ－双子沼－黄金ケ原－トムラウシ－トムラウシ温泉	L椿谷(3)、SL佐々木尚三(3)、長島(2)、皆川(3)
4/29-5/4	登山口－芽室岳－雪盛山－ピパイロ分岐手前－雪盛山－ルベシベ岳－芽室岳－登山口	L片倉(4)、SL佐々木尚三(2)、不破(2)、中村(2)
4/29-5/4	糠平営林署小屋－糠平川二股－幌尻山荘－幌尻岳－七つ沼－戸蔦別岳－幌尻岳－山荘－二股－最終人家	L大口(4)、SL丸谷(3)、山本(3)、橋村(2)
5/1-8	無意根ゴールデンウイーク合宿	CL阿部(4)、小瀬川(4)、中町(4)、佐藤(3)、森田(OB1)、関、岩瀬、三国、伊藤、米山、加藤、新谷、塩崎、森川、田中、山崎、八塚、藤田、船木、笹川、青野　以上一年目
5/2-8	原始ケ原登山口－原始ケ原－下ホロ－シイ十勝上流にてスキー十勝岳温泉	L大南(3)、SL竹内(3)、伊藤(2)
5/22-23	積丹登山口－積丹岳－余別岳－積丹岳－登山口	L丸谷(3)、SL大南(3)、中村(2)、関(1)
5/22-24	暑寒荘－暑寒別岳－暑寒荘	L不破(2)、SL長島(2)、伊藤(2)
5/30-6/6	サマースキー(旭岳周辺)勇駒別－天女ケ原－石室－金庫岩－チベトン－ハタコロ－愛別北斜面－アパッチ－旭岳－温泉沢－間宮－ムシの沢－リクマン－石室－勇駒別	(1)L丸谷(3)、SL不破(2)、三国(1)、森川(1)、船木(1)、宮崎(2)
6/1-5	サマースキー(旭岳周辺)勇駒別－旭岳－ゴリラ沢－北海岳－白雲石室－白雲岳－チベトン－温泉沢－白鳥千鳥－ムシの沢－リクマン－安足間－石室－勇駒別	(2)L佐々木尚三(3)、SL中村(2)、加藤(1)、笹川(1)、塩崎(1)
6/1-6	サマースキー(旭岳周辺)勇駒別－北大スロープ－チベトン－比布－愛別－温泉沢－北鎮－旭岳－ムシの沢－アパッチ－メダカ沢－石室－勇駒別	(3)L大南(3)、SL長島(2)、伊藤(1)、岩瀬(1)、青野(1)
6/1-6	サマースキー(旭岳周辺)勇駒別－北大スロープ－旭岳－チベトン－温泉沢－白鳥千鳥－比布平－リクマン－メダカ沢－石室－勇駒別	(4)L皆川(3)、SL橋村(2)、米山(1)、山崎(1)、竹内(3)
6/1-6	サマースキー(旭岳周辺)勇駒別－北大スロープ－チベトン－温泉沢－比布－愛別－ゴリラ沢－石室－勇駒別	(5)L椿谷(3)、SL山本(3)、藤田(1)、八塚(1)、山田(1)
6/1-6	サマースキー(旭岳周辺)勇駒別－旭岳－温泉沢－間宮岳－比布－愛別－リクマン－チベトン－熊－白鳥千鳥－メダカ沢－石室－勇駒別	(6)L佐藤(3)、SL伊藤(2)、関(1)、新谷(1)、佐々木(3)
6/3-5	サマースキー(旭岳周辺)勇駒別－石室－温泉沢－リクマン－ハタコロ－旭岳－勇駒別	(7)L福安(4)、SL阿部(4)、中村(OB1)、堀内(OB1)
6/12-13	白水川集中	L佐々木尚三(3)、SL丸谷(3)、伊藤(2)、長島(2)
6/19-20	白水川集中	(1)L大口(4)、SL長島(2)、笹川(1)、関(1)
		(2)L小瀬川(4)、SL不破(2)、加藤(1)、伊藤(1)
		(3)L竹内(3)、SL中村(2)、青野(1)、岩瀬(1)
		(4)L福安(4)、SL伊藤(2)、塩崎(1)、八塚(1)
6/26-27	白水川集中	(1)L中町(4)、SL橋村(2)、山崎(1)、藤田(1)
		(2)L皆川(3)、SL宮崎(2)、新谷(1)
		(3)L椿谷(3)、SL佐藤(3)、三国(1)
		(4)L佐々木右治(3)、SL大南(3)、米山(1)
6/26-27	望岳台－空沼入りの沢出合－漁岳－オコタンペ湖	L佐々木尚三(3)、SL山本(3)、塩崎(1)、加藤(1)
6/27	木挽沢	L小瀬川(4)、SL不破(2)
7/4	発寒川	L丸谷(3)、SL椿谷(3)、米山(1)、加藤(1)、竹内(3)
7/4	木挽沢	L長島(2)、SL中村(2)、宮崎(2)
7/10-11	余別川	L阿部(4)、SL佐々木尚三(3)、中村(2)、伊藤(2)、不破(2)
7/10-11	積丹橋－二股引返し－帰札	L片倉(4)、SL大南(3)、橋村(2)、加藤(1)、長島(2)
7/16-21	天人峡－化雲－ヒサゴ沼－ワセダ沢－トムラ北沼－五色沼－忠別岳－ヤンベ－平ケ岳－下山(ヒサゴ沼周辺、ワセダ沢、化雲岳、平ヶ岳でスキー)	L皆川(3)、SL伊藤(2)、新谷(1)、青野(1)、関(1)
7/17-21	十勝三股－御殿－石狩岳－大沼－五色ケ原－五色岳－化雲－ヒサゴ沼－トムラウシ－南沼－双子沼－オプタテ－美瑛富士－美瑛岳－十勝岳－上ホロ－富良野岳－原始ケ原林道終点－布礼別	L中村(2)、SL宮崎(2)、笹川(1)、塩崎(1)、岩瀬(1)
7/17-24	勇駒別－石室－金庫岩－白鳥千鳥－ハタコロ－北大スロープ－白雲－忠別－五色岳－ヒサゴ沼－トムラ－ワセダ沢－黄金ケ原－双子沼－オプタテ－美瑛富士避難小屋－美瑛岳－十勝岳－白金(白鳥千鳥、北大スロープ、ハタコロ、化雲東面、ワセダ沢、美瑛富士でスキー)	L丸谷(3)、SL橋村(2)、山崎(1)、米山(1)、八塚(1)
7/18-21	天人峡－化雲の沢出合－1300m引き返し－化雲内沢－ポンカウンナイ出合－小化雲－天人峡	L森田(OB1)、SL佐藤(3)、森川(1)、藤田(1)、伊藤(1)
7/29-31	林道途中－余別川－51点沢左股往復－56点沢往復の後下山	L阿部(4)、SL椿谷(3)、竹内(3)、不破(2)
8/1-3	余別－本道終点－49点沢出合－56点沢－122点沢－余別	L小瀬川(4)、SL佐々木尚三(3)、伊藤(2)、中村(2)
8/4-9	布礼別－原始ケ原－富良野－上ホロ－十勝－美瑛－オプタテ－双子沼－黄金ケ原手前－トムラ－北沼－忠別小屋－間宮岳－忠別小屋－天人峡	L大口(4)、SL佐々木右治(3)
8/6-15	ユートピア－コイボク出合－ペテガリ山荘－中の岳直登沢出合－中の岳－BC沢出合－二股－ペテガリ岳－下降尾根頭－上二股－ケルン－三股－奥二股－ソエマツ岳－神威直登沢660m引き返し－林道終点－尾田村	L阿部(4)、SL椿谷(3)、竹内(3)、不破(2)

8/7-14	上野深－ソエマツ沢出合－ニシュオマナイ二股－中の岳－神威岳－中の川奥二股－ソエマツ岳－ヌピナイ上二股－ピリカ－林道終点－尾田村	L小瀬川(4)、SL佐々木(3)、伊藤(2)、中村(2)
8/8-11	十勝三股－シュナイダー尾根－音更山－石狩岳－沼の原－五色岳－北沼－化雲岳－天人峡	L佐藤(3)、SL山本(3)、伊藤(1)、森川(1)
8/9-18	二岐沢2の沢出合－額平岳－トッタベツ岳－七つ沼－幌尻岳－新冠川二股－カムイ直登沢出合－エサオマン－JP－エサオマントッタベツ川－札内岳－トッタベツ出合－トッタベツヒュッテ－八千代	L片倉(4)、SL大南(3)、橋村(2)、加藤(1)、長島(2)
8/17-18	望岳台－漁岳－オコタンペ湖	L福安(4)、SL丸谷(3)、米山(1)、三国(1)、岩瀬(1)
8/18	発寒川	L皆川(3)、新谷(1)、塩崎(1)
8/19-20	望岳台－上二股－オコタンペ湖	L中町(4)、SL竹内(3)、八塚(1)、関(1)
8/20	白水沢	L椿谷(3)、SL皆川(3)、新谷(1)、塩崎(1)、山本(2)
8/20-21	余別－林道終点－本流往復	L佐々木尚三(3)、SL佐々木右治(3)、青野(1)、山崎(1)
8/21-26	中札内－8の沢出合－カムイエクー－エサオマン－新冠川カムイ出合－七つ沼－北トッタ－ピパイロ－チロロ出合－二岐沢出合－帰札	L福安(4)、SL丸谷(3)、米山(1)、三国(1)、岩瀬(1)
8/25-30	十勝三股－杉沢出合－前天－ニペ－JP－石狩－音更－沼の原コル－五色岳－トムラ－忠別小屋－忠別－白雲－北鎮－永山－愛山渓	L長島(2)、SL伊藤(2)、加藤(1)、笹川(1)
8/25-30	八千代－大正沢出合－エサオマン出合－札内岳－キネンベツ出合－10の沢－春別岳－8の沢出合－三股－稜線上－下降尾根下二股	L椿谷(3)、SL皆川(3)、新谷(1)、塩崎(1)、山本(2)
8/26-30	相泊－ウナキベツ河口－知床沼－知床岳－知床沼－相泊	L橋村(2)、SL不破(2)、藤田(1)、船木(1)
9/30-10/4	天人峡－化雲の沢出合－北沼－トムラウシ－南沼－辺別分岐－硫黄沼－美瑛川本流－林道－白金温泉	L大南(3)SL伊藤(2)、笹川(1)、岩瀬(1)、福安(4)

65 season　1976(昭和51)年10月～1977(昭和52)年9月

部長：水谷先生

〔前期〕主任：椿谷茂(3)／庶務：佐々木尚三(3)／会計(保険)：中村健彦(2)／リーダー会議長：丸谷聖一(3)／リーダー会：大口真樹(4)・阿部幹雄(4)・小瀬川修(4)・椿谷茂(3)・佐々木尚三(3)・皆川幸治(3)・竹内隆一(3)／記録：長島義人(2)／装備：宮崎隆之(2)・塩崎征男(1)・加藤峰夫(1)／小屋：佐々木右治(3)・新谷一郎(1)・米山祐司(1)／部室管理：伊藤浩(2)・青野敬一(1)／図書：岩瀬勇次(1)／体育会：橋村正悟郎(2)／トレーニング：丸谷聖一(3)・笹川宏之(1)／歌唱指導：皆川幸治(3)／ロッジ管理：大口真樹(4)／バイト：中村健彦(2)

10/1-3	山部－登山口－ユーフレ小屋－北尾根－芦別岳－新道登山口	L宮崎(2)、SL中村(2)、三国(1)、新谷(1)、藤田(1)
10/1-6	高原温泉－忠別小屋－五色岳－五色沢源頭－温泉小屋－化雲岳－天人峡温泉	L大口(4)、SL不破(2)、長島(2)
10/2-7	八千代農協－エサオマントッタベツ川出合－札内岳－エサオマントッタベツ岳－1740m峰－春別岳－カムイエクー－コイカクー－コイカクシュサツナイ川二股－札内川出合	L小瀬川(4)、SL佐々木尚三(3)、青野(1)、船木(1)、山崎(1)
10/3-8	天人峡－ポン化雲内沢出合－ポン化雲内沢源頭－化雲岳－トムラウシ－化雲内沢源頭－化雲内沢上二股－天人峡	L中町(4)、SL竹内(3)、八塚(1)、関(1)、桜井(OB1)
10/16-17	(後方羊蹄山)比羅夫駐車場－Peak－国道5号線	L伊藤(2)、SL不破(2)、森川(1)、米山(1)
10/17-18	幌加駅－天狗岳－ニペソツ－幌加温泉	L竹内(3)、SL宮崎(2)、岩瀬(1)、船木(1)、橋村(2)
10/22-24	金山駅－登山口－タ張岳－ガマ岩－小屋	L丸谷(3)、SL中村(2)、青野(1)
10/23-24	登山口－ユーフレ小屋－北尾根－芦別岳－鴛谷－登山口	L阿部(4)、SL長島(2)、伊藤(2)
10/23-24	登山口－積丹岳－登山口	L三国(1)、SL塩崎(1)、森川(1)、藤田(1)、新谷(1)
10/23-24	(後方羊蹄山)半月湖駐車場－Peak－国道5号線	L皆川(3)、SL宮崎(2)、加藤(1)
10/24	登山口－東尾根コル－天狗岳－登山口　熊ノ沢コースより下山	L不破(2)、SL橋村(2)
10/31-11/3	十勝三股－石狩岳－十勝三股	L阿部(4)、SL椿谷(3)、中村(2)
11/2-6	白金温泉－望岳台－避難小屋－前十勝－十勝岳－望岳台－ポンピの沢コースより下山	L大口(4)、SL中町(4)、長島(2)、宮崎(2)
11/5-7	糠平駅－夏道尾根－ウペペサンケ－糠平駅	L小瀬川(4)、SL大南(3)、不破(2)、橋村(2)、山本(3)
11/20-23	初滑り旭岳　勇駒別より入山－天女原にBC－盤の沢周辺でスキー練習、アイゼン、ピッケル初歩的技術訓練(盤の沢で追悼)－下山	一年目班(1)L阿部(4)、SL佐藤(3)、三国(1)、塩崎(1)、青野(1)
		(2)L片倉(4)、SL佐々木尚三(3)、船木(1)、岩瀬(1)、山崎(1)
		(3)L小瀬川(4)、SL佐々木右治(3)、笹川(1)、森川(1)、八塚(1)
		(4)L中町(4)、SL丸谷(3)、新谷(1)、藤田(1)
		(5)L竹内(3)、SL大南(3)、加藤(1)、関(1)
11/20-23	初滑り旭岳　勇駒別より入山－天女原にBC－盤の沢でスキー練習・追悼、旭岳スキー登頂・下山はアイゼン・ピッケル氷雪訓練	二年目班(1)L福安(4)、SL椿谷(3)、長島(2)、中村(2)、橋村(2)
		二年目班(2)L大口(4)、SL皆川(3)、不破(2)、伊藤(2)、宮崎(2)、山本(3)
12/10-16	[二年目十勝新人合宿]望岳台－上ホロ－中ホロカメトク山－十勝岳－避難小屋－なまこ尾根－ビバーク訓練－白金温泉	(1)L中町(4)、SL佐々木尚三(3)、長島(2)、伊藤(2)、大南(3)
12/10-16	[二年目十勝新人合宿]望岳台－十勝岳－避難小屋－富良野岳手前－三段山周辺にてスキー、ビバーク訓練－白金温泉	(2)L大口(4)、SL竹内(3)、中村(2)、不破(2)
12/10-16	[二年目十勝新人合宿]望岳台－三峰－三段山－OP尾根にてアイゼン・ピッケル・シール登行・雪洞ビバーク訓練－白金温泉	(3)L阿部(4)、丸谷(3)、宮崎(2)、山本(3)
12/10-17	[一年目無意根新人合宿]薄別－無意根小屋－スキー練習、美比内アタック隊－無意根山－薄別	CL椿谷(3)、佐藤(3)、小瀬川(4)、皆川(3)、佐々木右治(3)、片倉(4)、福安(4)、岩瀬(1)、加藤(1)、笹川(1)、関(1)、塩崎(1)、新谷(1)、藤田(1)、米山(1)、八塚(1)、三国(1)、青野(1)、森川(1)、船木(1)、山崎(1)
12/27-1/2	裏OB宅－トノカリ橋－下ホロカメトク山－シーソラプチ出合－富良野岳－トウヤウスベ山－布礼別	L福安(4)、SL佐々木尚三(3)、森川(1)、関(1)、山崎(1)
12/28-1/3	白金温泉－美瑛富士－オプタテシケ－東ピークーオプタテ沢林道－トノカリ橋飯場－裏OB宅	L大口(4)、SL佐藤(3)、新谷(1)、青野(1)、在田(OB11)
12/28-1/3	白金温泉－西尾根－オプタテシケ山－双子沼コルーオプタテシケ山－オプタテシケ沢林道－トノカリ橋－裏OB宅	L片倉(4)、SL皆川(3)、三国(1)、八塚(1)、藤田(1)
12/28-1/3	糠平駅－ウペペサンケ－南丸山－丸山－ニペソツ－幌加駅	L小瀬川(4)、SL大南(3)、不破(2)、中村(2)
12/28-1/4	布礼別－トウヤウスベ山－原始ケ原－富良野岳－シーソラプチ川二股－下ホロカメトック山－シー十勝川林道－トノカリ橋－裏OB宅	L椿谷(3)、SL丸谷(3)、岩瀬(1)、米山(1)
12/30-1/7	十勝三股駅－岩間温泉－ニペソツ－JP－沼の原－チトセピ温泉－地獄谷温泉小屋－トムラウシ－林道－トムラウシ温泉－トノカリ二股－裏OB宅	L阿部(4)、SL竹内(3)、宮崎(2)、長島(2)、伊藤(2)
1/4-8	布礼別－トウヤウスベ山－原始ケ原－富良野岳－下ホロカメトック山－シー十勝川林道－トノカリ橋－裏OB宅	L中町(4)、SL佐々木右治(3)、加藤(1)、塩崎(1)
1/22-24	薄別－白水橋－白水源頭－無意根山－無意根小屋－薄別	L竹内(3)、SL佐々木尚三(3)、伊藤(2)、不破(2)

1/27-30	天幕駅－天塩岳－林道終点	L大南(3)、SL宮崎(2)、船木(1)
1/29-30	百松沢林道終点－神威岳－烏帽子岳－百松沢山－福井えん堤	L佐々木右治(3)、SL丸谷(3)、藤田(1)、米山(1)、加藤(1)
1/30-2/1	豊羽元山－美比内山－余市岳－千尺高地－元山	L不破(2)、SL伊藤(2)、塩崎(1)、新谷(1)
2/11-12	山部－登山口－冬尾根－芦別岳－登山口	L丸谷(3)、SL不破(2)、橋村(2)、森川(1)
2/11-12	(ニセイカウシュペ)清川－夏道尾根1250m－清川	L佐々木尚三(3)、SL伊藤(2)、船木(1)、三国(1)
2/11-13	南登山口－羊蹄山－登山口	L大口(4)、SL佐々木右治(3)、加藤(1)、中村宏(OB1)
2/11-13	倶知安－ワイススキー場－ワイスホルン－ニト－山の家－アンヌプリ－山田温泉	L山本(3)、SL大南(3)、関(1)、藤田(1)
2/25-28	京極－ベーベナイ川林道－無意根山－小屋－豊羽	L長島(2)、SL宮崎(2)、岩瀬(1)
3/2-4	榮の沢出合－武利岳－武華岳－イトムカ鉱山跡	L大南(3)、SL橋村(2)、不破(2)
3/3-4	優徳－西尾根－トクシュンベツ山－ホロホロ山－優徳円山	L椿谷(3)、SL宮崎(2)、伊藤(2)、皆川(3)
3/3-5	一年目ニセコ強化　湯本温泉－山田温泉	(1)ob福安(4)、米山(1)、加藤(1)、新谷(1)
3/3-5	一年目ニセコ強化　新見温泉－五色－山田温泉	(2)ob大口(4)、船木(1)、塩崎(1)、藤田(1)
3/3-5	一年目ニセコ強化　五色温泉－新見－岩内	(3)ob竹内(3)、岩瀬(1)、森川(1)、三国(1)
3/3-5	一年目ニセコ強化　湯本温泉－五色－山田温泉	(4)ob佐々木右治(3)、関(1)、八塚(1)青野(1)
3/3-6	元町賀老通－東狩場－狩場山－元町	L丸谷(3)、SL長島(2)、佐々木尚三(3)
3/10-12	(羊蹄山)南登山口－1000m迄登って引き返す	L小瀬川(4)、SL大南(3)、橋村(2)、加藤(1)
3/11-14	西河－幌内府川二股－余別岳直下引き返し－幌内府川二股－西河	L竹内(3)、SL皆川(3)、岩瀬(1)、新谷(1)、山本(1)
3/13	春香山(プレ)	L大口(4)、SL佐々木右治(3)、不破(2)、長島(2)、青野(1)
3/14-15	定天東尾根　登山口－ろうそく岩基部引き返し	L阿部(4)、SL佐々木尚三(3)、塩崎(1)、三国(1)
3/15-17	半面山－芦別岳－1579m峰－夫婦沢出合－18線沢	L片倉(4)、SL椿谷(3)、米山(1)、伊藤(2)
3/16-23	御影－芽室岳－ルベシベ岳－ピパイロ岳－エサオマントッタベツ川出合－東の小沢を下りる－最終人家	L小瀬川(4)、SL大南(3)、橋村(2)、加藤(1)
3/17-18	美国－登山口－積丹岳－余別岳－登山口	L中町(4)、SL丸谷(3)、森川(1)、関(1)、船木(1)
3/17-4/6	勇駒別－天女ケ原－ピウケナイ源頭－比布－ハタコロ－白雲石室－忠別小屋－トムラウシ沢源頭小屋－トムラウシ－五色岳－忠別小屋－沼の原－ヒシナイ造林事務所－国道	L大口(4)、SL佐々木右治(3)、不破(2)、長島(2)、青野(1)
3/20-30	幌－浜益御殿直下－雄冬岳－浜益岳－群別岳－尾白利加岳－暑寒別岳－暑寒荘－増毛駅	L竹内(3)、SL皆川(3)、岩瀬(1)、新谷(1)、山本(1)
3/22-29	札内ヒュッテ－8の沢出合－キネンベツ出合－札内南尾根－札内岳－JP－エサオマン－カムイ北東尾根－カムイ岳－エサオマントッタベツ出合－最終人家	L片倉(4)、SL椿谷(3)、米山(1)、伊藤(2)
3/22-29	トッタベツヒュッテ－エサオマントッタベツ川出合－北東尾根－JP－エサオマン－戸蔦別岳－出合－最終人家	L阿部(4)、SL佐々木尚三(3)、塩崎(1)、三国(1)
3/24-4/1	裏OB宅－トムラウシ温泉－地獄谷温泉小屋－トムラウシ－五色岳－忠別小屋－白雲小屋－白雲岳－小屋－ヤンベタップ二股の林道－国道	L中町(4)、SL丸谷(3)、森川(1)、関(1)、船木(1)
4/7-13	リクマンバス停－リクマン沢林道－天幕山下－比布平－北鎮－黒岳－ロープウェイ駅	L福安(4)、SL佐藤(3)、八塚(1)、藤田(1)、宮崎(2)
4/29-5/5	無意根合宿　行動範囲は長尾山、無意根山、中岳、スキー練習中心	CL丸谷(4)、佐藤(4)、皆川(4)、大南(4)、長島(3)、中村(3)、百瀬(1)、小林(1)、関戸(1)、名村(1)、樋口(1)、纐纈(1)、玉村(1)
5/5-8	山部－ユーフレ小屋－夫婦沢－小屋－山部	L山本(4)、SL橋村(3)、新谷(2)、三国(2)、岩瀬(2)
5/6-10	八千代－戸蔦別ヒュッテ－ピリカペタヌ－6の沢－10の沢－札内岳－ヒュッテ－帯広	L竹内(4)、SL宮崎(3)、八塚(2)、船木(2)、青野(2)
5/6-10	鴛泊－長官山－利尻山－鴛泊	L佐々木右治(4)、SL不破(3)、米山(2)、加藤(2)
5/7-12	ユートピア牧場－奥新冠ダム－幌尻岳－七つ沼カール－戸蔦別岳－北戸蔦別岳－チロロ川出合－千栄	L佐々木尚三(4)、SL伊藤(3)、藤田(2)、塩崎(2)、関(2)
5/14-15	(後方羊蹄山)比羅夫駐車場－1050m引き返し	L橋村(3)、SL加藤(2)、岩瀬(2)、小林(1)
5/17-19	登山口－積丹岳－登山口	L福井(AACH)、SL長島(3)、志賀(AACH)、米山(2)
5/29-6/5	サマースキー旭岳周辺　別動隊	(1)L佐々木右治(4)、SL丸谷(4)、大南(4)
5/30-6/5	サマースキー旭岳周辺　盤の沢追悼－天女ケ原－北大スロープ－ピウケナイ－白鳥、リクマンなどでスキー	(1)L長島(3)、SL船木(2)、昆(1)、名村(1)、八塚(2)
		(2)L宮崎(3)、SL米山(2)、小林(1)、関戸(1)、関(2)
		(3)L伊藤(3)、SL三国(2)、小田切(1)、青野(2)、新谷(2)
		(4)L橋村(3)、SL塩崎(2)、不破(3)、樋口(1)
		(5)L中村(3)、SL加藤(2)、藤田(2)、岩瀬(2)、纐纈(1)
6/2-5	サマースキー旭岳周辺　別動隊	(2)L佐藤(4)、SL椿谷(4)、山本(4)、竹内(4)
6/3-5	サマースキー旭岳周辺　別動隊	(3)L皆川(4)、SL佐々木尚三(4)、中村宏(OB2)、吉田真一(OB3)
6/18-19	白水沢	L伊藤(3)、SL中村(3)、橋村(3)、長島(3)、宮崎(3)、不破(3)
6/25-26	白水沢集中	L竹内(4)、SL米山(2)、樋口(1)、塩崎(2)、片倉(OB1)
6/25-26	白水沢集中	L佐々木右治(4)、SL青野(2)、岩瀬(2)、関戸(1)
6/25-26	白水沢集中	L伊藤(3)、SL三国(2)、小林(1)
6/25-26	白水沢集中	L佐々木尚三(4)、SL船木(2)、関(2)、小田切(1)
6/26	発寒川	L丸谷(4)、SL八塚(2)、加藤(2)
6/26	木挽沢	L不破(3)、SL橋村(3)、名村(1)
7/2-3	白水沢集中	L丸谷(4)、SL藤田(2)、纐纈(1)
7/8-10	余別川	L佐々木尚三(4)、SL不破(3)、丸谷(4)、関(2)
7/8-10	白井川	L大南(4)、SL佐藤(4)、小林(1)、名村(1)、船木(2)
7/9-10	白水沢	L山本(4)、SL佐々木右治(4)、纐纈(1)、小田切(1)
7/9-10	白水沢	L皆川(4)、SL桜井公一(OB2)、樋口(1)、関戸(1)
7/10	発寒川	L青野(2)、SL三国(2)、椿谷(4)
7/15-23	天人峡－ポンカウン出合－ヒサゴ沼－トムラウシ－ワセダ沢、化雲にてスキー－南沼－トムラウシ温泉－新得	L皆川(4)、SL桜井(OB2)、樋口(1)、関戸(1)
7/16	発寒川	L山本(4)、SL佐々木右治(4)、纐纈(1)、小田切(1)
7/19-24	八千代－10の沢出合－戸蔦別岳－幌尻岳－新冠上二股－エサオマントッタベツ岳－ナメワッカ分岐－春別岳－10の沢出合－8の沢出合－林道	L山本(4)、SL佐々木右治(4)、纐纈(1)、小田切(1)
7/24-8/1	ユートピア牧場－イドンナップ沢－イドンナップ岳－ナメワッカ沢支流源頭－春別岳－10の沢出合－札内川－札内岳－トツタベツ川出合－ヒュッテ	L大南(4)、SL佐藤(4)、小林(1)、名村(1)、船木(2)

7/27-31	勇駒別－石室－旭岳－北鎮岳－(白鳥スロープ－熊のお鉢雪渓－北大スロープでスキー)－黒岳－層雲峡	L関(2)、SL八塚(2)、藤田(2)、新谷(2)
7/28-30	余別川51点沢・本流	L佐々木尚三(4)、SL伊藤(3)、米山(2)、岩瀬(2)、片倉(OB1)
7/28-31	余別川51点沢・本流	L椿谷(4)、SL竹内(4)、不破(3)、青野(2)
8/4-12	ペテガリ山荘－ペテガリ沢－中の岳直登沢出合－ペテガリ岳－Cカール－ペテガリ岳－下降尾根－上二股(ケルン追悼)－中の川－林道－尾田村	L佐々木尚三(4)、SL伊藤(3)、米山(2)、岩瀬(3)、片倉(OB1)
8/6	木挽沢	L佐々木右治(4)、SL中村(3)、塩崎(2)、八塚(2)
8/7-16	ユートピア－無名沢林道終点－3の沢－上二股－1839峰－西沢出合－ペテガリ岳－Cカール－銅版黙祷－キムクシュ三股－ヤオロマップ川出合－林道下－坂下	L椿谷(4)、SL竹内(4)、不破(3)、青野(2)
8/9-15	ウナキベツ川口－知床沼－知床岳－知床沼－相泊－羅臼－登山口－羅臼岳－三峰南東峰－サシルイ－硫黄山－カムイワッカ－湯の滝－下山	L船木(2)、SL加藤(2)、樋口(1)、小田切(1)
8/10-16	八千代－8の沢出合－ピリカペタヌ沢より－勝幌－札内岳－札内川10の沢出合－春別岳－8の沢出合－カムイエクウチカウシ－札内川林道	L佐々木(右治4)、SL中村(3)、塩崎(2)、八塚(2)
8/22-27	トムラウシ温泉－トムラウシ－ヒサゴ沼－五色ケ原－JP－ニペソツ－幌加	L三国(2)、SL岩瀬(2)、纐纈(1)、関戸(1)
8/22-27	白峰－市の瀬－釈迦岳－七倉岳－甚之助ヒュッテ－別山－三の峰避難小屋－上在所	L丸谷(4)、SL青野(2)
8/24-25	白水沢	L不破(3)、SL伊藤(3)、藤田(2)、関(2)
8/25-31	十勝三股－ユニ石狩岳－音更山－石狩岳－五色岳－忠別石室－忠別岳－化雲岳－トムラウシ山－オプタテシケ山－美瑛富士避難小屋－美瑛富士－十勝岳－上ホロ－富良野岳－布礼別	L塩崎(2)、SL米山(2)、名村(1)、小林(1)、船木(2)
日付なし	白水沢	L中村(3)、SL橋村(3)、新谷(2)、加藤(2)、竹内(4)
8/27-9/1	日高幌別－ニオベツ川－野塚岳－野塚平－十勝岳－ニオベツ右股－コイボクシュメナシュウンベツ右股－楽古岳－楽古川左股－林道終点	L中村(3)、SL橋村(3)、新谷(2)、加藤(2)、竹内(4)
8/28-9/1	札内川8の沢出合－カムイエク－10の沢出合－エサオマン－JP－札内岳－エサオマントッタベツ川出合－下山	L不破(3)、SL伊藤(3)、藤田(2)、関(2)

66 season　1977(昭和52)年10月～1978(昭和53)年9月

部長：水谷寛

〔前期〕主任：不破秀実(3)／庶務：中村健彦(3)／会計：塩崎征男(2)／リーダー会議長：伊藤浩(3)／リーダー会：椿谷茂(4)・丸谷聖一(4)・佐々木尚三(4)・佐々木右治(4)・不破秀実(3)・中村健彦(3)・橋村正悟郎(3)／記録：岩瀬勇次(2)／体育会：三国駿亮(2)／小屋：米山祐司(2)・樋口孝一(1)／装備：加藤峰夫(2)・纐纈義和(1)／医療：船木上総(2)／保険：塩崎征男(2)／トレーニング：三国俊亮(2)／部室：関戸徹(1)／ロッジ管理：大南和也(4)／むいね編集：竹内隆一(4)・長島義人(3)／バイト：名村淳(1)／プリント：小林伸一(1)・朝日教之(1)・小田切清幸(1)／歌唱指導：丸谷聖一(4)

〔後期〕主任：不破秀実(4)／庶務：三国駿亮(3)／会計：塩崎征男(3)／リーダー会議長：伊藤浩(4)／リーダー会：不破秀(4)・中村健彦(4)・長島義人(4)・岩瀬勇次(3)・船木上総(3)・三国俊亮(3)／記録：岩瀬勇次(3)／体育会：朝日教之(2)／小屋：米山祐司(3)・纐纈義和(2)／装備：八塚晴彦(3)・加藤峰夫(3)・小林伸一(2)／医療：船木上総(3)・関戸徹(2)／保険：塩崎征男(3)／トレーニング：三国俊亮(3)／部室：藤田誠一(3)・小田切清幸(2)／ロッジ管理：橋村正悟郎(4)／むいね編集：長島義人(OB1)・青野敬一(3)／バイト：名村淳(2)／プリント：関英郎(3)・樋口孝一(2)／歌唱指導：樋口孝一(2)

10/3-4	山部－ユーフレ小屋－本谷－芦別岳－登山口－山部	L山本(4)、SL丸谷(4)、八塚(2)
10/7-8	(ポンカウンナイ沢)天人峡－ポンカウンナイ沢出合－二股の滝ト－オーバーハングの滝－夏道－天人峡	L橋村(3)、SL青野(2)、三国(2)
10/8-9	白金温泉－望岳台－ヌッカクシフラノ川源頭－富良野岳－十勝岳－望岳台	L椿谷(4)、SL藤田(2)
10/8-10	(カウンナイ沢)天人峡－トムラウシ山－卓沼－天人峡	L大南(4)、SL岩瀬(2)、船木(2)、名村(1)
10/8-11	幌加－前天－ニペソツ－幌加－糠平－第2登山口－ウペペサンケ－糠平	L佐々木右治(4)、SL米山(2)、朝日(1)纐纈(1)
10/8-13	ペテガリ山荘－ペテガリ岳－ルベツネ－ヤオロマップ岳－コイカク夏道頭－二股－上札内	L不破(3)、SL関(2)、関戸(1)、小林(1)
10/9-10	山部－ユーフレ小屋－北尾根－芦別岳－登山口－山部	L塩崎(2)、SL加藤(2)、小田切(1)、樋口(1)
10/22-23	登山口－空沼小屋－空沼岳－札幌岳－冷水小屋－国道	L米山(2)、SL藤田(2)、名村(1)、朝日(1)、加藤(2)
10/23	シシャモナイ登山口－樽前山－ドーム－登山口	L佐々木右治(4)、SL樋口(1)、関戸(1)、纐纈(1)
10/29-30	真狩登山口－羊蹄山－ドーム－登山口	L長島(3)、SL船木(2)、小田切(1)、名村(1)、加藤(2)
11/20-23	勇駒別－天女ケ原－石室・盤の沢付近にてスキー練習－アイゼン・ピッケル訓練－下山	(一年目班)L椿谷(4)、SL伊藤(3)、関戸(1)、朝日(1)
		(一年目班)L山本(4)、SL皆川(4)、小田切(1)、名村(1)
		(一年目班)L佐々木尚三(4)、SL佐藤(4)、樋口(1)、纐纈(1)、宮崎(3)
11/20-23	勇駒別－天女ケ原－ピークアタック－氷雪技術訓練。スキー練習－下山	(二年目班)L大南(4)、SL不破(3)、塩崎(2)、青野(2)
		(二年目班)L丸谷(4)、SL中村(3)、米山(2)、加藤(2)、八塚(2)
		(二年目班)L竹内(4)、SL長島(3)、藤田(2)、関(2)、岩瀬(2)
		(二年目班)L佐々木右治(4)、SL橋村(3)、船木(2)、三国(2)
12/11-18	新人合宿第一班　望岳台－白銀荘－富良野北尾根－ホコ岩－富良野岳－十勝岳温泉－三段山でスキー練習－ビバーク訓練－望岳台－白金温泉	L佐々木右治(4)、SL長島(3)、青野(2)、塩崎(2)、阿部(OB1)
12/11-18	新人合宿第二班　望岳台－白銀荘－上ホロ往復－富良野岳－三段山－白銀荘往復－ビバーク訓練－望岳台－白金温泉	L佐々木尚三(4)、SL皆川(4)、岩瀬(2)、八塚(2)、橋村(3)
12/11-18	新人合宿第三班　望岳台－白銀荘－三峰－富良野岳－十勝岳－白銀荘－三段山でスキー練習－ビバーク訓練－望岳台－白金温泉	L大南(4)、SL伊藤(3)、船木(2)、米山(2)、関(2)
12/11-18	新人合宿第四班　望岳台－白銀荘－ホコ岩－富良野岳－十勝岳－白銀荘－三段山往復－ビバーク訓練－望岳台－白金温泉	L椿谷(4)、SL中村(3)、加藤(2)、藤田(2)
12/13-20	(無意根新人合宿)天気図作成、歌唱指導、スキー・ラッセル練習、雪洞訓練、小屋－頂上、美比内遠征	CL不破(3)、丸谷(4)、山本(4)、佐藤(4)、竹内(4)、宮崎(3)、纐纈(1)、名村(1)、小田切(1)、関戸(1)、朝日(1)、小林(1)、樋口(1)
12/28-1/4	幌加－幌加川林道－大平－ニペソツ岳－丸山－南丸山－ウペペサンケ山－ウペペ橋－道道	L佐々木右治(4)、SL橋村(3)、藤田(2)、岩瀬(2)、青野(2)
12/28-1/4	白金温泉－美瑛岳－オプタテシケ山－双子沼－あけぼの橋	L皆川(4)、SL長島(3)、朝日(1)、樋口(1)
12/28-1/5	白金温泉－丸山－硫黄沼－黄金ケ原－トムラウシ山－温泉小屋－六ッ沼山コル－沼ノ原大橋－北西尾根－ニペソツ岳－天狗－岩間温泉－十勝三股	L丸谷(4)、SL伊藤(3)、関(2)、船木(2)、八塚(2)

12/29-1/5	日勝峠－ウエンザル－1634m峰－芽室岳－雪盛山－ルベシベ－ピパイロ岳－1791m峰－林道－芽室町	L佐々木(4)、SL不破(3)、塩崎(2)、宮崎(3)
12/29-1/6	新得－トノカリ橋－シイ十勝川林道－美瑛岳－オプタテ標高尾根－ブタ山南の尾根－双子沼－白金温泉	L竹内(4)、SL佐藤(4)、小田切(1)、関戸(1)、纐纈(1)
1/3-9	白金温泉－オプタテピーク手前のコル引き返し－双子沼－オプタテシケ沢1450m引き返し－美瑛岳－トノカリ橋－新得	L椿谷(4)、SL山本(4)三国(2)、小林(1)、名村(1)
1/28-29	山部－18線沢－夫婦沢源頭－北尾根－芦別岳－冬尾根－山部	L不破(3)、SL三国(2)、青野(2)
2/3-5	湯本温泉－湯の里川左股－チセヌプリ手前－ニト－アンヌプリ－北壁－五色温泉－モイワスキー場	L関(2)、SL藤田(2)、小林(1)、船木(2)
2/10-11	登山口－積丹岳－登山口	L岩瀬(2)、SL青野(2)、関戸(1)
2/23-26	銭函－奥手稲山－山の家－ヘルベチアヒュッテ－朝里岳－春香山－スキー場	L関(2)、SL八塚(2)、小田切(1)
2/24-25	空沼二股－万計沼－空沼岳－札幌岳－国道	L米山(2)、SL青野(2)、纐纈(1)
2/24-26	金山－登山口－小夕張－夕張岳－夕張岳ヒュッテ－明石	L山本(4)、SL加藤(2)、小林(1)、名村(1)
2/25-26	元山－美比内山－余市岳－元山	L船木(2)、SL三国(2)、藤田(2)
3/3-5	(ニセコ強化)ニセコモイワスキー場－五色温泉－ニト－チセ－白樺－新見温泉－前目国内－目国内－岩内	L丸谷(4)、小田切(1)、朝日(1)
3/3-5	(ニセコ強化)蘭越－新見温泉－白樺山手前で引き返し、スキー練習－白樺－チセ－ニト－五色温泉	L大南(4)、樋口(1)、纐纈(1)、小林(1)
3/3-5	(ニセコ強化)ニセコ－湯本温泉－チセ－ニト－五色温泉－イワオ－アンヌプリ－アンヌプリスキー場	L佐々木尚三(4)、名村(1)、関戸(1)
3/3-5	(群別岳)群別－1050m引き返し－群別部落	L橋村(3)、SL青野(2)、八塚(2)、藤田(2)
3/3-6	寿都－賀老通り－フモンナイ岳－東狩場山－フモンナイ標高尾根－賀老通り	L長島(3)、SL船木(2)、関(2)
3/8-9	登山口－積丹岳－登山口	L山本(4)、SL中村(3)、八塚(2)、三国(2)
3/8-9	清川－ニセイカウシュペ山－清川	L佐々木尚三(4)、SL橋村(3)、塩崎(2)、名村(1)
3/9-10	清川－ニセイカウシュペ山－清川	L椿谷(4)、SL不破(3)、青野(2)、藤田(2)
3/9-27	羅臼－ケンネベツ－オショロコ川－観音岩－ウナキベツ川－知床岳－知床岬－ウナキベツ川－観音岩－クズレハマ川－ケンネベツ－羅臼ユースホステル－硫黄山－三峰－羅臼岳－岩尾別温泉－ウトロ	L竹内(4)、SL伊藤(3)、関戸(1)、朝日(1)
3/10-11	福井堰堤－ジルベルザッテル－百松沢山－常次沢－福井堰堤	L佐々木右治(4)、SL長島(3)、小林(1)、加藤(2)
3/10-15	酸ケ湯温泉－仙人袋ヒュッテ－小岳の南東斜面、北斜面でスキー－高田大岳－硫黄岳－井戸岳－赤倉東斜面－硫黄岳南東斜面－酸ケ湯温泉	L大南(4)、SL関(2)、樋口(1)、小田切(1)
3/10-15	酸ケ湯温泉－仙人袋ヒュッテ－硫黄岳南東斜面、東斜面、小岳の北東斜面でスキー－高田大岳西斜面南東斜面でスキー－硫黄岳－傘松峠引き返し、大岳南東斜面でスキー－酸ケ湯温泉	L丸谷(4)、SL岩瀬(2)、纐纈(1)、米山(2)、船木(2)
3/13-18	山部－半面山－雲峰－芦別岳－ポントナシベツ岳－鉢盛山－タ張岳－タ張岳ヒュッテ－明石	L山本(4)、SL中村(3)、八塚(2)、三国(2)
3/13-20	新冠ダム－奥新冠ダム－イドンナップ岳－1410m峰－ナメワッカ－エサオマン－カムイ岳－エサオマントッタベツ川出合－八千代	L佐々木尚三(4)、SL橋村(3)、塩崎(2)、名村(1)
3/14-23	トムラウシ温泉－トムラウシ山－温泉小屋－化雲岳－温泉小屋－沼の原－五色ケ原－クチャンベツ林道－国道	L佐々木右治(4)、SL長島(3)、加藤(2)、小林(1)
3/15-20	札内ヒュッテ－8の沢出合－カムイエク－ピラミッド手前引き返し－春別岳－ナメワッカ分岐－JP－エサオマン－JP－札内岳－トッタベツヒュッテ－八千代	L椿谷(4)、SL不破(3)、青野(2)、藤田(2)
3/18-26	金沢－白峰－林道－市の瀬－釈迦新道取付－釈迦岳－七倉－大汝峰－七倉－釈迦岳－市の瀬－千振尾根避難小屋－別山－市の瀬－大長山－鉢伏山－取立小屋－護摩堂山－国道	L丸谷(4)、SL岩瀬(2)、纐纈(1)、米山(2)、船木(2)
3/21-27	トムラウシ温泉－温泉小屋－沼の原－クチャンベツ林道－上川	L皆川(4)、SL関(2)、小田切(1)、樋口(1)
4/29-5/3	寿都－賀老通り－フモンナイ－東狩場山－狩場山－前山－須築	L船木(3)、SL青野(3)、名村(2)、樋口(2)
4/29-5/3	ウトロ－岩尾別温泉－羅臼平－羅臼岳往復－三ツ峰－岩尾別温泉－	L加藤(3)、SL藤田(3)、朝日(2)
4/29-5/5	(GW無意根合宿)薄別－小屋、カベ、テラス、シャンツェ、ピーク、中岳、沼でスキー練習　小屋－ピーク－小屋－薄別	CL不破(4)、長島(4)、中村(4)、伊藤(4)、関(3)、八塚(3)、宮崎(4)、山本(1)、柴田(1)、菊池(1)、村(1)、田村(1)、堀(1)、松本(1)、西岡(1)、三宅(1)、谷(1)、川島(1)
5/2-7	チロロ川林道－2の沢－ヌカビラ岳下－トッタ別岳－幌尻岳－七つ沼－1940m峰－2の沢出合－日高町	L橋村(4)、SL三国(3)、小林(2)、小田切(2)、塩崎(3)
5/3-7	山の神－暑寒荘－暑寒別岳－群別岳－暑寒別岳－山の神	L岩瀬(3)、SL米山(3)、纐纈(2)、関戸(2)
5/19-22	増毛－暑寒荘－暑寒別岳－恵岱別川・新信砂川・箸別川の各源頭でスキー－暑寒荘－増毛	L関(3)、SL青野(3)、藤田(3)、村(1)
5/20-21	登山口－積丹岳－余別岳への稜線途中積丹北斜面でスキー－登山口	L関戸(2)、SL名村(2)、長島(4)
5/28-6/3	(サマースキー第一班)勇駒別－天女ケ原－石室－金庫岩－旭岳－熊ケ岳・後旭・北大スロープでスキー－石室－勇駒別	L八塚(3)、SL纐纈(2)、村(1)、柴田(1)、加藤(3)
5/28-6/3	(サマースキー第二班)勇駒別－天女ケ原－石室－金庫岩－北大スロープでスキー－温泉沢－北鎮－リクマン－比布－温泉沢－石室－勇駒別	L青野(3)、SL樋口(2)、冨田(1)、谷(1)、岩瀬(1)
5/28-6/3	(サマースキー第三班)勇駒別－天女ケ原－石室－金庫岩－チベトン－旭岳－後旭－メダカ沢、北大スロープでスキー－石室－勇駒別	L米山(3)、SL名村(2)、船木(3)、山本(1)
5/28-6/3	(サマースキー第四班)勇駒別－天女ケ原－石室－金庫岩－温泉沢－北鎮－白鳥－ハタコロ－温泉沢－石室－勇駒別	L藤田(3)、SL小林(2)、三宅(1)、菊池(1)、塩崎(3)
5/28-6/3	(サマースキー第五班)勇駒別－天女ケ原－石室－金庫岩－旭岳－北大スロープでスキー－石室－勇駒別	L関(3)、SL朝日(2)、川島(1)、松本(1)
5/28-6/3	(サマースキー第六班)勇駒別－天女ケ原－石室－金庫岩－温泉沢－熊－ゴリラ－北大スロープでスキー－石室－勇駒別	L三国(3)、SL関戸(2)、堀(1)、西岡(1)
6/1-2	(サマースキー 4年目班)勇駒別－石室－旭岳－チベトン－石室－勇駒別	L伊藤(4)、SL長島(4)、橋村(4)、中村(4)
6/24-25	薄別－白水沢－無意根山－小屋－薄別	L塩崎(3)、SL名村(2)、菊池(1)、松本(1)
		L藤田(3)、纐纈(2)、堀(2)、川島(1)
		L関(3)、SL関戸(2)、山本(1)、柴田(1)
6/25	札幌－木挽沢往復	L三国(3)、SL青野(3)、岩瀬(3)
6/25	発寒川平和の滝から600m二股往復	L八塚(3)、SL樋口(2)、橋村(4)

7/1-2	薄別－白水沢－無意根山－小屋－薄別	L米山(3)、SL樋口(2)、村(1)、三宅(1)
		L加藤(3)、SL小林(2)、朝日(2)、西岡(1)
		L中村(4)、SL小田切(2)、谷(1)、田村(1)
		L伊藤(4)、SL船木(3)、安部(1)、冨田(1)
7/1-2	札幌－天狗沢出合－天狗沢右股より定天往復	L不破(4)、SL長島(4)、柴田(1)、関(3)
7/8-9	元山－白井川本流－余市岳－元山	L長島(4)、SL岩瀬(3)、菊池(1)
7/8-9	美国－伊佐内川－伊佐内川往復	L佐々木尚三(OB1)、SL船木(3)、三宅(1)、谷(1)、松本(1)
7/9-14	(旭岳周辺)勇駒別－北鎮－リクマン－旭岳東斜面でスキー－安足間－北大スロープ、後旭でスキー－石室－勇駒別	L関(3)、SL加藤(3)、田村(1)、冨田(1)
7/10-11	幌内府－幌内府川往復	L椿谷(OB1)、SL不破(4)、安部(1)、西岡(1)
7/14	平和の滝より発寒川往復	L塩崎(3)、SL藤田(3)、川島(1)、村(1)
7/15-20	上札内－8の沢出合－カムイエク－キネンベツ三股－札内岳－エサオマントッタベツ川－JP－エサオマン－新冠二股－奥新冠ダム	L椿谷(OB1)、SL不破(4)、安部(1)、西岡(1)
7/16	平和の滝より発寒川往復	L関(3)、Sl米山(3)、山本(1)、冨田(1)
7/17-21	八千代－札内岳－10の沢出合－春別岳－JP－エサオマン－カムイ直登沢出合－新冠二股－七つ沼－トッタベツ岳－中の沢－エサオマントッタベツ川出合－八千代	L塩崎(3)、SL藤田(3)、村(1)、川島(1)
7/17-22	振内－幌尻山荘－幌尻岳－七つ沼－新冠二股－カムイ直登沢出合－エサオマン－春別岳－10の沢出合－キネンベツ三股－札内岳－エサオマントッタベツ川二股－林道－八千代	L佐々木尚三(OB1)、SL船木(3)、三宅(1)、谷(1)、松本(1)
7/18-24	天人峡－カウンナイ沢－源頭－ヒサゴ沼－ワセダ沢出合－温泉小屋－トムラウシ山－五色岳－沼の原－ヌプン温泉－二股	L関(3)、SL米山(3)、山本(1)、冨田(1)
7/24-25	(ペテガリ岳ケルン補修用セメント荷揚げ)ユートピア牧場－ペテガリ山荘－ペテガリ岳－ペテガリ山荘	L伊藤(4)、SL中村(4)、丸谷(OB1)
7/27-8/1	勇駒別－北大スロープでスキー－忠別小屋－ヒサゴ沼－トムラウシ山－トムラウシ温泉	L八塚(3)、SL関戸(2)、菊池(1)、西岡(1)
7/28-30	(余別川)余別－49点沢出合－51点沢往復－エコー沢往復－余別	L不破(4)、SL青野(3)、小林(2)
7/29-8/1	(余別川)余別川林道－49点沢出合－51点沢往復－本流往復－余別	L伊藤(4)、SL三国(3)、船木(3)、名村(2)
7/31	(恵庭・滝沢)丸駒温泉　滝沢往復	L阿部(OB2)、SL小林(2)、関戸(2)
8/4-12	布礼別－原始ケ原－富良野岳－上ホロ－十勝岳－美瑛岳－美瑛富士－オプタテシケ山－双子沼－黄金ケ原－トムラウシ山－ヒサゴ沼－五色ケ原－沼の原最低鞍部－JP－前天－ニペソツ岳－幌加温泉	L纐纈(2)、SL朝日(2)、谷(1)、村(1)、冨田(1)
8/5-10	ユートピア牧場－春別川林道終点－ポンイドンナップ出合－カムイエク沢出合－春別岳－カムイエクー－コイボク三股－1823m峰－コイカク夏道－二股－札内ヒュッテ－上札内	L不破(4)、SL青野(3)、小林(2)
8/5-13	ユートピア牧場－ペテガリ山荘－ペテガリ岳－上二股－ケルン補修－奥二股－神威岳－左股－三股－中の川林道－飯場－尾田村	L伊藤(4)、SL三国(3)、船木(3)、名村(2)
8/7-14	十勝三股－御殿－石狩岳－JP－前天－ニペソツ岳－丸山－南丸山－ウペペサンケ山－林道－糠平	L藤田(3)、SL樋口(2)、川島(1)、三宅(1)
8/17-19	(余別川)余別－49点沢出合－51点沢往復－本流往復－余別	L橋村(4)、SL米山(3)、関戸(2)、菊池(1)、小田切(2)
8/18	札幌－漁川860m二股引き返し－登山口	L中村(4)、SL岩瀬(3)、堀(1)、田村(1)、朝日(2)
8/21-28	羅臼－知西別川－羅臼－ウトロ－テッパンベツ河口－知床岳往復－知床沼－モイレウシ川河口－念仏岩－赤岩－岬－赤岩－船でウトロ	L青野(3)、SL三国(3)、纐纈(2)
8/23-28	静内－コイボクシュシピチャリ川－カムイエク－キネンベツ三股－札内岳－エサオマントッタベツ川－林道－八千代	L橋村(4)、SL米山(3)、関戸(2)、菊池(1)、小田切(2)
8/23-30	八千代－エサオマントッタベツ川－札内岳－10の沢カール－エサオマン－北カール－新冠二股－七つ沼－トッタベツ岳－ヌカピラ岳－二岐沢出合－千栄	L中村(4)、SL岩瀬(3)、田村(1)、堀(1)
8/25-30	室堂－大汝山－ザラ峠－五色ケ原－越中沢岳－スゴ小屋－間山－薬師岳－薬師峠－北ノ俣岳－黒部五郎岳－三俣法華岳－双六小屋－千丈乗越－槍ケ岳－槍沢－横尾	L名村(2)、SL小林(2)、松本(1)、安部(1)

67 season　1978(昭和53)年10月～1979(昭和54)年9月

部長：中島巌

〔前期〕主任：三国俊亮(3)／庶務：塩崎征男(3)／会計保険：米山祐司(3)／リーダー会議長：船木上総(3)／リーダー会：伊藤浩(4)・長島義人(4)・橋村正悟郎(4)・青野敬一(3)・塩崎征男(3)・三国俊亮(3)・米山祐司(3)／記録：名村淳(2)／装備：小林伸一(2)・樋口孝一(2)・菊池真人(1)・西岡修二(1)・村政幸(1)／小屋：新谷一郎(3)・田村英士(1)／医療：関戸徹(2)・冨田正人(1)／部室管理：谷弘人(1)／体育会：小田切清幸(2)／歌唱指導：関戸徹(2)／プリント：安部敬太(1)・川島大幸(1)・松本隆文(1)・山本恵司(1)／むいね編集：長島義人(4)・青野敬一(3)・朝日教之(2)／ロッジ管理：不破秀美(4)／バイト：名村淳(2)／図書：堀和徳(1)

〔後期〕主任：三国俊亮(4)／庶務：小林伸一(3)／会計保険：樋口孝一(3)／リーダー会議長：船木上総(4)／リーダー会：塩崎征男(4)・新谷一郎(4)・三国俊亮(4)・朝日教之(4)・小林伸一(3)・関戸徹(3)・名村淳(3)／記録：名村淳(3)／装備：小林伸一(3)・川島大幸(2)・菊池真人(2)・村政幸(2)／小屋：田村英士(2)・山本恵司(2)／医療：冨田正人(2)／部室管理：安部敬太(2)／体育会：松本隆文(2)／歌唱指導：関戸徹(3)／プリント：小田切清幸(3)・三宅信一郎(2)／むいね編集：青野敬一(4)・朝日教之(3)／ロッジ管理：新谷一郎(4)／図書：谷弘人(2)

11/2-4	白金温泉－避難小屋－美瑛富士－美瑛岳－白金温泉	L橋村(4)、SL不破(4)
11/23-26	(旭岳初滑り)勇駒別－天女ケ原－石室上雪氷技術訓練・スキー練習－盤の沢付近スキー練習－下山	(一年目班)L橋村(4)、SL加藤(3)、安部(1)、松本(1)、田村(1)
		(一年目班)L伊藤(4)、SL岩瀬(3)、川島(1)、冨田(1)、三宅(1)
		(一年目班)L米山(3)、SL八塚(3)、菊池(1)、村(1)、西岡(1)
		(一年目班)L関(3)、SL塩崎(3)、谷(1)、山本(1)
11/23-26	(旭岳初滑り)勇駒別－天女ケ原BC－石室上雪氷技術訓練・スキー練習－ピークアタック－下山	(二年目班)L中村(4)、SL藤田(3)、名村(2)、小田切(2)、新谷(3)
		(二年目班)L長島(4)、SL三国(3)、樋口(2)、小林(2)、青野(3)
		(二年目班)L不破(4)、SL船木(3)、朝日(2)、関戸(2)
12/15-22	白金荘－十勝岳温泉－富良野岳－D尾根－十勝岳温泉－白銀荘－グランドコース－十勝岳－白銀荘－三段山下－望岳台－白金温泉	(第1班)L長島(4)、SL八塚(3)、小林(2)、小田切(2)
12/15-22	望岳台－三段山－十勝岳－北尾根－富良野岳－D尾根－白金温泉	(第2班)L橋村(4)、SL三国(3)、関戸(2)、名村(2)
12/15-21	望岳台－D尾根八ツ手岩－富良野岳－北尾根－グランドコース－白金温泉	(第3班)L不破(4)、SL米山(3)、藤田(3)、新谷(3)
12/15-21	(無意根新人合宿)薄別－小屋－スキー練習－雪崩救助訓練－下山	CL伊藤(4)、佐々木(OB1)、岩瀬(3)、加藤(3)、青野(3)、関(3)、船木(3)、谷(1)、冨田(1)、掘(1)、西岡(1)、川島(1)、田村(1)、村(1)、三宅(1)、菊池(1)、松本(1)、安部(1)、山本(1)

12/15-22	望岳台－北尾根ホコ岩－富良野岳－D尾根－十勝岳－D尾根－白金温泉	(第4班)L中村(4)、SL塩崎(3)、樋口(2)、朝日(2)、纐纈(2)
12/29-1/8	十勝岳温泉－避難小屋－オプタテシケ山－東尾根－標高尾根－ニペソツ－新得	L伊藤(4)、SL船木(3)、小田切(2)、樋口(2)、朝日(2)
12/30-1/4	裏OB宅－下ホロ1550m付近で引き返す－富良野岳－トウヤウスベ－布礼別	L中村(4)、SL青野(3)、川島(1)、松本(1)
12/31-1/5	白金温泉－美瑛富士－ブタ山－オプタテシケ山－スキー練習－ニペソツ	L米山(3)、SL塩崎(3)、村(1)、三宅(1)、山本(1)
12/31-1/7	布礼別－トウヤウスベ－原始が原－富良野岳－ポン十勝－オプタテシケ山－ニペソツ	L丸谷(4)、SL藤田(3)、堀(1)、菊池(1)、田村(1)
12/31-1/13	幌加温泉－前天の肩－ニペソツ－JP－沼の原－温泉小屋－トムラウシ－ブタ山－オプタテシケ山－美瑛富士避難小屋－白金温泉	L不破(4)、SL岩瀬(3)、名村(2)、関戸(2)
1/1-7	層雲峡－黒岳－石室(－桂月)－北鎮－愛別－リクマン－ハタコロ－スキー練習－旭岳－勇駒別	L八塚(3)、SL関(3)、新谷(3)
1/6-10	幌加－6の沢手前－ニペソツ山－前天－岩間御殿－国道	L橋村(4)、SL三国(3)、小林(2)
1/7-15	布礼別－トウヤウスベ－富良野岳断念－ポン十勝川出合－ペンケペソツ－ニペソツ	L長島(4)、SL加藤(3)、冨田(1)、西岡(1)、安部(1)
2/10-11	(後方羊蹄山)南登山口－1600m引き返し－南登山口	L船木(3)、SL藤田(3)、田村(1)
2/10-11	水谷ロッヂ－徳舜瞥山－水谷ロッヂ	L長島(4)、SL不破(4)、小林(2)、谷(1)
2/11-12	銀嶺荘－付近でスキー－春香山－張碓橋	L名村(2)、SL関戸(2)、安部(2)
2/21-22	(後方羊蹄山)南登山口－1760m引き返し－南登山口	L加藤(3)、SL朝日(2)、三宅(1)、掘(1)
2/24-26	ワイススキー場上－ワイス－ニトヌプリ－イワオ－五色温泉－アンヌプリ－ワイススキー場	L関戸(2)、SL樋口(2)、谷(1)、冨田(1)
2/25	(定山渓天狗岳)登山口－ろうそく岩の上の引き返し－登山口	L不破(4)、SL八塚(3)、新谷(3)
3/2-3	山部－18線沢－夫婦沢源頭－芦別岳－冬尾根－山部	L米山(3)、船木(3)、関戸(2)
3/2-3	層雲峡－ニセイノシキオマップ川－小槍－大槍－ニセイカウシュッペ山－1697峰－清川	L青野(3)、SL八塚(3)、小林(2)
3/2-4	(ニセコ強化)湯本温泉－チセ－ワイス－五色温泉－イワオ－アンヌプリ－アンヌプリスキー場	L橋村(4)、冨田(1)、掘(1)
3/2-4	(ニセコ強化)五色温泉－ニト－チセ－シャクナゲ－白樺－新見温泉－目国内－岩内岳－岩内町	L塩崎(3)、谷(1)、西岡(1)、松本(1)
3/2-5	(ニセコ強化)五色温泉－アンヌプリ－ワイススキー場－ワイス－ニト－チセ－シャクナゲ－白樺－新見温泉－目国内－岩内岳－岩内町	L岩瀬(4)、田村(1)、村(1)
3/3-5	(ニセコ強化)新見温泉－白樺－シャクナゲ－チセ－ニト－五色温泉－アンヌプリ－アンヌプリスキー場	L長島(4)、三宅(1)、安部(1)
3/4-6	(ニセコ強化)新見温泉－白樺－シャクナゲ－チセ－ニト－イワオ－五色温泉－アンヌプリ－ワイス－ワイススキー場	L中村(4)、川島(1)、山本(1)
3/12-21	相泊－観音岩－化石浜－ウナキベツ北側尾根－双耳峰500m－モイレウシ川－念仏岩－カブト岩－赤岩－ウイ－ヌプリ－ポロモイ岳－知床岳はやめる－トッカリムイ－昆布浜	L中村(4)、SL米山(3)、掘(1)、松本(1)、田村(1)
3/13-14	山部－新道コース－半面－芦別岳－慎柏コル－18線登山口	L不破(4)、SL八塚(3)、小田切(2)、小林(2)
3/14-22	増毛－天狗岳標高尾根－雄冬標高尾根－雄冬山－浜益御殿－浜益岳－暑寒別荘	L伊藤(4)、SL藤田(3)、西岡(1)、安部(1)、青野(3)
3/14-22	西広尾川林道－ビロロ岳－楽古岳－十勝岳－オムシャヌプリ－野塚岳－尾根降り口－豊似川林道	L橋村(4)、SL塩崎(3)、川島(1)、谷(1)
3/15-21	酸ヶ湯温泉－傘松峠(－乗鞍岳)(－上岳)(－小岳)(－赤倉岳－井戸岳－硫黄岳)(－小岳－高田大岳)－硫黄岳でスキー－酸ヶ湯温泉	L岩瀬(3)、SL三国(3)、関戸(2)、冨田(1)
3/17-22	酸ヶ湯温泉－傘松峠－駒ヶ嶺直下(－猿倉岳)(－乗鞍岳－上岳)－仙人袋ヒュッテBC(－高田大岳)(－井戸岳－小岳)－酸ヶ湯温泉	L船木(3)、SL加藤(3)、樋口(2)、村(1)、三宅(1)
3/19-20	(駒ヶ岳)銚子口－林道途中C1－589の下引き返し－銚子口	L長島(4)、SL新谷(3)、山本(1)、朝日(2)、名村(2)
3/20-28	上札内－札内ヒュッテ－コイカク夏尾根－ヤオロマップ－1839峰－コイカクシュサツナイ岳－1823峰－札内ヒュッテ－上札内	L不破(4)、SL八塚(3)、小田切(2)、小林(2)
3/23-4/1	富山－七姫平－雪見平－前大日岳－大日岳－大日小屋の下－七福園東端のポコ－奥大日岳－ロッヂ立山連峰横BC(－一つ越－雄山－別山－雷鳥沢源頭)－天狗平－美女平－(ケーブル)－立山駅	L長島(4)、SL新谷(3)、山本(1)、朝日(2)、名村(2)
3/26-4/1	富山－七姫平－入津谷源頭－大日岳－大日小屋の下－奥大日岳－立山連峰ホテル横BC(－別山乗越－剣沢小屋)－美女平－(ケーブル)－立山駅	L加藤(3)、SL船木(3)、三宅(1)、村(1)、樋口(2)
4/28-5/3	鴛泊－長官山－小屋－利尻岳－オロロン沢、白鳥沢、吹上沢などでスキー－鴛泊	L船木(4)、SL関戸(3)、村(2)、西岡(2)、安部(2)
4/29-5/4	酸ヶ湯温泉－仙人袋ヒュッテBC－大岳南東斜面を滑る－硫黄山東斜面でスキー(－高田大岳)(大岳－赤倉)－小岳でスキー－酸ヶ湯温泉	L樋口(3)、SL名村(3)、冨田(2)、松本(2)
4/29-5/5	天人峡－小化雲－化雲－ヒサゴ沼－トムラウシ山－ワセダ沢を滑る－沼の原－石狩岳－シビナイ橋－層雲峡	L藤田(4)、SL小田切(3)、三宅(2)、田村(2)、山本(2)
4/30-5/5	奥新冠ダム－幌尻岳－七つ沼カール－北カールでスキー－戸蔦別岳－北戸蔦別岳－二の沢出合－林道二股	L塩崎(4)、SL小林(3)、掘(2)、川島(2)、谷(2)
4/30-5/6	(GW無意根合宿)薄別－小屋－小屋付近、カベ、テラス、シャンツェ、ピーク、中岳、沼でスキー練習－小屋－ピーク－小屋－薄別	CL米山(4)、青野(4)、岩瀬(4)、加藤(4)、新谷(4)、三国(4)、朝日(3)、小塚(1)、古川(1)、渡辺(1)、上条(1)、一迫(1)、日野(1)、油田(1)、佐々木(1)、安田(1)、宝多(1)、内林(1)
5/14-18	(暑寒別岳)暑寒荘－ピークアタック後スキー－暑寒荘	L田村(2)、SL谷(2)、川島(2)
5/24-26	(暑寒別岳)暑寒荘－1000mBC、スキー一日－暑寒荘	L村(2)、SL冨田(2)、松本(2)
6/3-9	(サマースキー第1班)勇駒別－天女ヶ原－石室－金庫岩－旭岳周辺でスキー－旭岳－北鎮－ハタコロ－後旭岳－メダカ－追悼－勇駒別	L樋口(3)、SL村(2)、宝多(1)、一迫(1)、掘(1)
6/3-9	(サマースキー第2班)勇駒別－天女ヶ原－金庫岩－北大スロープでスキー－北鎮－白鳥－リクマン－ハタコロ－旭岳－熊－追悼－勇駒別	L名村(3)、SL谷(2)、日野(1)、安部(2)
6/3-9	(サマースキー第3班)勇駒別－天女ヶ原－金庫岩－旭岳周辺でスキー北鎮－白鳥－ハタコロ－アパッチ－旭岳周辺でスキー－愛別北斜面でスキー－追悼－勇駒別	L小田切(3)、SL西岡(2)、油田(1)、松本(2)

6/3-9	(サマースキー第4班)勇駒別－天女ヶ原－金庫岩－旭岳周辺でスキー－愛別－ハタコロ－北鎮－白鳥－リクマン－ハタコロ－－追悼－勇駒別	L小林(3)、SL田村(2)、古川(1)、川島(2)
6/3-9	(サマースキー第5班)勇駒別－天女ヶ原－金庫岩－旭岳周辺でスキー－北鎮－リクマン－比布－天皇－追悼－勇駒別	L朝日(3)、SL富田(2)、佐々木(1)、小塚(1)
6/7-9	(サマースキー 4年目班)勇駒別－姿見駅－金庫岩－旭岳周辺でスキー－追悼－勇駒別	L加藤(4)、SL藤田(4)
6/7-10	奥新冠ダム－北カールでスキー－幌尻岳－ブイラルベツ	L阿部(OB3)、SL船木(4)、新谷(4)
6/23-24	札幌－白水沢－無意根山－小屋－薄別	L新谷(4)、SL松本(2)、佐々木(1)
		L塩崎(4)、SL山本(2)、古川(1)
		L関戸(3)、SL川島(2)、宝多(1)、油田(1)
		L名村(3)、SL堀(2)、一迫(1)、高山(1)
		L藤田(4)、SL朝日(3)、小塚(1)
6/30-7/1	札幌－白水沢－無意根山－小屋－薄別	L小林(3)、SL冨田(2)、日野(1)
		L樋口(3)、SL安部(2)
7/7-8	余別川49点沢出合－51点沢－三段の滝下引き返し－余別町	L伊藤(OB1)、SL中村(OB1)、朝日(3)
7/13-21	十勝岳温泉－十勝岳－美瑛岳－避難小屋－極道スロープ－オプタテシケ山－双子沼－ツリガネ山－トムラウシ山－ヒサゴ沼－忠別岳－白雲石室－旭岳－勇駒別	L小林(3)、SL松本(2)、小塚(1)
7/14-20	幌尻山荘－幌尻岳－七つ沼－エサオマントッタベツ岳－札内岳－ピリカエタン8の沢出合－戸蔦別ヒュッテ－八千代	L阿部(OB3)、SL関戸(3)、高山(1)、宝多(1)、日野(1)
7/15	平和の滝より発寒川往復	L加藤(4)、SL朝日(3)、掘(2)、安部(2)
7/15-26	剣沢野営場(－真砂沢－長次郎谷二股)－コル－富士折立－雄山－－の越－雷鳥沢野営場－－一の越－鬼岳－ザラ峠－平小屋－渡し船－平の渡－南沢出合－ユヌ－峠－大沢小屋－扇沢駅－尾根取っつき－種池小屋－爺ヶ岳－冷池－布引－鹿島槍南峰－フリ尾根－キレット－キレット小屋－赤抜－五竜－五竜山荘－唐松山荘－立峰南峰－キレット－天狗小屋－鐘ケ丘－コル－頂上ホテル－丸山－大雪渓上部－下部－猿倉荘下山	L樋口(3)、SL船木(4)、三宅(2)
7/18-21	勇駒別－旭岳と熊のコル－北大スロープを9本－ロックンロールを9本－北大スロープでスキー－勇駒別	L加藤(4)、SL関(4)
7/21-23	余別川49点沢出合－51点沢右股三段の滝上引き返し－本流ドザエモンの滝引き返し－余別町	L青野(4)、SL小田切(3)、安部(2)
7/25	(恵庭岳・滝沢)丸駒温泉－滝沢F9の上引き返し－丸駒温泉	L青野(4)、SL三国(4)、田村(2)
7/25-27	札幌－空沼小屋－真澄沼－空沼岳－漁岳－小漁岳－オコタンペ湖－支笏湖	L小林(2)、SL朝日(2)、安部(2)、田村(2)
7/26-8/2	布礼別－原始ヶ原－富良野岳－上ホロ－十勝岳－美瑛岳－美瑛富士－避難小屋－オプタテシケ山－トムラウシ山－化雲－五色－忠別岳－忠別沼－白雲岳－北鎮－黒岳－層雲峡	L川島(2)、SL冨田(2)、菊池(2)、油田(1)
7/27-28	(白井川本流・余市岳)元山－800m二股－余市岳－元山	L竹内(OB2)、SL朝日(3)、山本(2)、佐々木(1)
7/30-31	余別川49点沢出合(－51点大滝)(－エコー沢370m二股)－余別町	L三国(4)、SL新谷(4)、松本(2)、田村(2)
7/31-8/5	ブイラル出合－幌尻岳－七つ沼カール－新冠川カムイ直登沢出合－幌尻沢左股営林署小屋(山行途中で断念)	L竹内(OB2)、SL朝日(3)、山本(2)、佐々木(1)
8/3-4	余別川(－52点二股)－余別町	L岩瀬(4)、SL塩崎(4)、西岡(2)、村(2)、掘(2)
8/5-6	ペテガリ山荘－Lの怪我の為、第一の滝で引き返す	L三国(4)、SL新谷(4)、松本(2)、田村(2)
8/7-10	ソガベツ川林道終点－トヨニ川左股－豊似(落石事故の為下山)	L岩瀬(4)、SL塩崎(4)、西岡(2)、村(2)、掘(2)
8/10-15	ヌピナイ川左股トヨニ直発沢出合－トヨニ岳－ピリカヌプリ南コル－peak－ソエマツ岳－神威岳－尾田村	L青野(4)、SL小林(3)、安部(2)
8/11-12	札幌－白水沢C1－白水沢往復	L藤田(4)、SL加藤(4)、油田(1)、小塚(1)、三宅(2)
8/16-23	イダシュベツ川－硫黄山下－東岳－ルシャ川110m二股－テッパンベツ二股－知床沼－ポロモイ岳－ベキン川－赤岩－岬－赤岩－(観光船)－ウトロ	L藤田(4)、SL加藤(4)、油田(1)、小塚(1)、三宅(2)
8/18-30	甲府－夜叉神荘－夜叉神峠－薬師岳－観音岳－鳳凰小屋－地蔵岳－浅夜峰－北沢小屋－駒津岳－北沢峠－沢小屋－仙丈岳－横川岳－左俣大滝－北岳－間ノ岳－農鳥小屋前－農鳥岳－熊ノ平－塩見岳－三伏小屋－小河内岳－前岳－荒川小屋上－赤石岳－百間洞露営地－兎岳－聖岳－聖平－林道	L田村(2)、SL堀(2)、関(4)
8/21-25	余別川49点沢出合(－51点右股500m)(－エコー沢二股)(－本流－上廊下終)－余別町	L米山(4)、SL小田切(3)、富田(2)
8/21-29	カモイウンペ河口－ウナキベツ大崩－知床沼－ウナキベツ河口－赤岩－岬－ウトロ－岩尾別温泉－羅臼岳－サシルイ－二つ池－硫黄山－カムイワッカ－ウトロ	L山本(2)、SL松本(2)、古川(1)、佐々木(1)
8/22	平和の滝より発寒川往復	L名村(3)、SL朝日(3)、菊池(2)、川島(2)
8/23-30	相泊－ウナキベツ－知床沼－知床岳－モイレウシ－岬－赤岩－(観光船)－ウトロ－岩尾別温泉－羅臼平－羅臼岳－二つ池－硫黄山－カムイワッカ－ウトロ	L西岡(2)、SL安部(2)、一迫(1)、高山(1)
8/25-30	層雲峡－黒岳－石室－北鎮－比布－永山－旭岳石室－旭岳－忠別岳－五色岳－沼の原－石狩岳－音更－ブヨ沢－ユニ石狩－十勝三股	L谷(2)、SL村(2)、宝多(1)、日野(1)
8/25-9/1	羅臼－ルサ河口－ルシャ河口－テッパンベツ川－知床岳南沼－知床岳－知床沼－モイレウシ河口－岬－赤岩－ウトロ	L名村(3)、SL朝日(3)、菊池(2)、川島(2)

68 season　1979（昭和54）年10月～1980（昭和55）年9月

部長：中島巌

〔前期〕主任：三国俊亮（4）／リーダー会議長：関戸徹（3）／リーダー会：藤田誠一（4）・加藤峰夫（4）・米山祐司（4）・岩瀬勇次（4）・小林伸一（3）・樋口孝一（3）・小田切清幸（3）／庶務：朝日教之（3）／記録：村政幸（2）／会計：冨田正人（2）／装備：菊池真人（2）・日野輝明（1）・佐々木泰弘（1）／医療：西岡修二（2）・古川紳二（1）／小屋：堀和徳（2）・高山浩史（1）／体育会：谷弘人（2）／プリント：小塚毅（1）・一迫公利（1）・高橋尚登（1）／むいね：青野敬一（4）・朝日教之（3）・川島大幸（2）／バイト：安部敬太（2）／ロッジ：三宅信一郎（2）／トレーニング：山本恵司（2）／部室：宝多卓男（1）／図書：油田厚生（1）／歌唱：松本隆文（2）

〔後期〕主任：小林伸一（4）／リーダー会議長：関戸徹（4）／リーダー会：小林伸一（4）・朝日教之（4）・小田切清幸（4）・菊池真人（3）・三宅信一郎（3）・松本隆文（3）・堀和徳（3）・川島大幸（3）／庶務：三宅信一郎（3）／記録：日野輝明（2）／会計：村政幸（3）／装備：川島大幸（3）・高山浩史（2）・小塚毅（2）／医療：山本恵司（3）・古川紳二（2）／小屋：高橋尚登（2）／体育会：冨田正人（3）・一迫公利（2）／プリント：宝多卓男（2）／むいね：朝日教之（4）・川島大幸（3）／バイト：佐々木泰弘（2）／ロッジ：小林伸一（4）／トレーニング：高山浩史（2）／部室：小塚毅（2）／図書：小塚毅（2）／歌唱：小塚毅（2）

10/5-7	山田温泉－ニセコアンヌプリ－五色温泉－大沼－長沼－チセヌプリ－白樺山－岩内・蘭越の車道－目国内岳－岩内岳－岩内下山	L日野（1）、SL宝多（1）、古川（1）、高山（1）
10/5-10	上札内－7の沢手前－8の沢出会い－c900二股－8の沢カール－カムエクピーク－9の沢カール上－9の沢出会い－10の沢カール－春別－8の沢出会－林道終点	L小林（3）、SL加藤（4）、冨田（2）、堀（2）
10/6-7	（羊蹄山）ヒラフ－駐車場－ピーク－駐車場	L川島（2）、SL村（2）、佐々木（1）、一迫（1）、高橋（1）
10/6-9	勇駒別－旭岳－ハタコロ－リクマン－中岳－白雲－黒岳－層雲峡下山	L船木4）、SL田村（2）
10/20-21	望岳台－白金温泉－十勝岳避難小屋－望岳台下山	L新谷（4）、SL三宅（2）
11/2-4	層雲峡－ロープウエイ終点－層雲峡下山	L新谷（4）、SL堀（2）、谷（2）
11/2-5	十勝三股－杉沢出会－天狗のコル－前天の手前c1800－杉沢出会－十勝三股下山	L小田切（3）、SL関戸（3）、山本（2）
11/8-10	日高町－二股沢取水口－二股－尾根取付－ヌカビラ岳－北戸蔦別－戸蔦別－幌尻岳－ヌカビラ岳－二股－ダム	L阿部（OB4）、SL梅沢（OB12）、谷（2）、田村（2）
11/22-26	（旭岳　初滑り　一年目班）勇駒別－天女が原BC－石室上にてピッケル・アイゼン・スキー練習－追悼－下山	L塩崎（4）、SL朝日（3）、小塚（1）、佐々木（1）、高山（1） L新谷（4）、SL関戸（3）、日野（1）、古川（1）、宝多（1） L三国（4）、SL名村（3）、一迫（1）、高橋（1）
11/23-26	（旭岳　初滑り　二年目班）勇駒別－天人が原BC－ピークアタック・石室上にてピッケル・アイゼン・スキー練習－追悼－下山	L藤田（4）、SL岩瀬（4）、冨田（2）、村（2） L米山（4）、SL樋口（3）、堀（2）、川島（2） L加藤（4）、SL小田切（3）、谷（2）、松本（2）、菊池（2） L船木（4）、SL小林（3）、三宅（2）、山本（2）
12/12-16	赤平菅野OB宅－上ホロ荘－十勝岳温泉－D尾根c1280－八つ手岩－富良野岳－十勝岳温泉－上ホロ荘－三段下BC（スキー練習）－十勝岳温泉下山	L阿部（OB3）、SL新谷（4）、田村（2）
12/15-22	（新人合宿　第一班）白金温泉－望岳台－吹上温泉－D尾根八つ手岩－十勝岳－美瑛岳－富良野岳－ホコ岩－ハゲ尾根－十勝岳温泉－上富良野下山	L米山（4）、SL小林（3）、松本（2）、堀（2）
12/15-22	（新人合宿　第二班）白金温泉－望岳台－三段山－D尾根八つ手岩－富良野岳－龍の背－ハゲ尾根－十勝岳温泉下山	L三国（4）、SL小田切（3）、村（2）、山本（2）
12/15-22	（新人合宿　第三班）白金温泉－望岳台－D尾根八つ手岩－富良野岳－ホコ岩－ハゲ尾根－十勝岳温泉－下山	L塩崎（4）、SL関戸（3）、纐纈（3）、冨田（2）、川島（2）
12/15-22	（新人合宿　第四班）白金温泉－望岳台－北尾根－ホコ岩－富良野岳－D尾根八つ手岩－十勝岳－十勝岳避難小屋－十勝岳温泉－下山	L船木（4）、SL朝日（3）、三宅（2）、菊池（2）
12/16-22	（無意根新人合宿）薄別－小屋（スキー練習・アイゼンワーク・天気図つくり）－下山	CL加藤（4）、藤田（4）、樋口（3）、名村（3）、小塚（1）、佐々木（1）、高山（1）、宝多（1）、日野（1）、高橋（1）、一迫（1）、古川（1）
12/29-1/5	裏OB宅－トムラウシ温泉－地獄谷手間1029－地獄谷－トムラウシ－長沼－クッチャンベツ林道－沼の原手前橋－忠別標高尾根下－林道国道	L丸谷（OB2）、SL朝日（3）、谷（2）、宝多（1）、小塚（1）
12/29-1/5	白金温泉－美瑛富士北西尾根c1100－美瑛富士－オプタテ－オプタテ北東c1250－林道－殿狩橋	L岩瀬（4）、樋口（3）、古川（1）、一迫（1）、佐々木（1）
12/29-1/7	広野－伏見小屋－c1100荷上げ－小屋－伏見岳－コル－ピパイロピーク直下－北戸蔦－二岐沢二股－ヒッチ	L阿部（OB4）、SL新谷（4）、田村（2）
12/30-1/8	白金温泉－美瑛川林道－水無沢川C950－東尾根基部－オプタテC1420－オプタテ肩－オプタテ東面標高尾根下－オプタテ南側の稜線－オプタテシケ沢C1200－美瑛－二股－新得下山	L藤田（4）SL纐纈（3）高山（1）日野（1）高橋（1）
12/30-1/10	層雲峡－ロープウエイ・リフト－黒岳－黒岳石室－北海岳－白雲石室－忠別－忠別石室－五色ヶ原－温泉沢対岸－（悪天でトムラ断念）－ムラウシ温泉下山	L加藤（4）、SL名村（3）、山本（2）、堀（2）
12/31-1/9	望岳台－十勝岳避難小屋－十勝岳・三段山－凾沢川二股C970－美瑛岳－美瑛富士避難小屋－ベベツ北西尾根C1200－望岳橋－白金温泉－望岳橋－オプタテ東尾根C1160－オプタテ－殿狩橋－ニペソツ下山	L船木（4）、SL関戸（3）、三宅（2）、松本（2）冨田（2）
1/1-11	岩尾別温泉－弥三吉水－C1100引返し－銀冷水－羅臼平－羅臼岳－C1300引き返し－温泉－ウトロ	L米山（4）、SL小林（3）、川島（2）
1/3-9	糠平－ウペペ4峰－丸山－ニペ南陵下南コル－ニペソツ山－天狗・JP間樹林内－音更川－道道下山	L三国（4）、SL小田切（3）、村（2）、菊池（2）
2/9-10	倶知安－南登山口－羊蹄山－南登山口	L小田切（3）、SL堀（2）、川島（2）
2/18-22	富良野スキー場－北の峰－富良野西岳－御茶々岳－夫婦岩－芦別岳－18線沢－山部	L阿部（OB4）、SL纐纈（3）、梅沢（OB12）、谷（2）
2/26-27	銀嶺荘－春香山－スキー場下山	L三宅（2）、SL山本（2）、宝多（1）、一迫（1）、日野（1）
3/4-5	幌内川河口－余別岳－積丹岳－登山口	L関戸（3）、SL朝日（3）、船木（4）
3/4-7	群別－1220m－群別下山（M風邪のため引き返す）	L小田切（3）、SL樋口（3）、堀（2）、松本（2）
3/5-7	（ニセコ強化）モイワスキー場－五色温泉－ニト－チセ－シャクナゲ－白樺山－新見温泉－目国内－岩内岳－岩内下山	L米山（4）、日野（1）、高橋（1）、佐々木（1）
日付なし	（ニセコ強化）報告書紛失	L加藤（4）、一迫（1）、小塚（1）、古川（1）
日付なし	（ニセコ強化）L会未報告	L塩崎（4）、高山（1）、宝多（1）
3/6-7	国際スキー場c1120－余市アタック－下山	L冨田（2）、SL川島（2）、菊池（2）
3/12-16	冷水沢林道－札幌岳－狭薄－空沼－万計沼－湯の沢下山	L堀（2）、SL菊池（2）、高橋（1）、佐々木（1）
3/13-14	清川－標高尾根c1100－ニセイ－清川下山	L岩瀬（4）、SL関戸（3）、山本（2）、一迫（1）
3/13-14	倶知安－南登山口－神社－羊蹄山ピーク－神社	L加藤（4）、SL松本（2）、小塚（1）、村（2）

3/17-20	群別－群別岳－群別下山	L米山(4)、SL小林宇(3)、堀(2)、高橋(1)、谷(1)
3/17-24	八千代農協前－カムイ北東尾根基部－カムイ岳－エサオマン－エサオマントッタベツ川出会－広野	L岩瀬(4)、SL関戸(3)、山本(2)、一迫(1)、名村(3)
3/20-28	糸魚川－平岩－蓮華温泉－瀬戸川－朝日岳－朝日・赤男のコル－白高地沢－平馬の平－白池－木地屋－平岩駅	L加藤(4)、SL松本(2)、村(2)、小塚(1)
3/22-26	鴛泊－長官山－長官小屋－利尻岳－鴛泊下山	L三国(4)、SL樋口(3)、川島(2)、宝多(1)
3/23-29	暑寒別小屋－暑寒別岳－南暑寒別岳－沼－恵袋別岳－林道	L新谷(4､)SL三宅(2)、富田(2)、古川(1)
3/24-4/5	糠平－杉沢二股－天狗のコル－前天狗－天狗－前天狗－c1578手前のコル下－JP－石狩岳南峰－JP－沼の原コル－地獄谷－トムラウシ－c1675岩峰コル－丸山コル－丸山の下－林道－大雪青年の家バス停	L米山(4)、SL小林(3)、谷(2)、堀(2)、高橋(1)
3/26-31	沼田－山ノ鼻－至仏山－長蔵小屋－燧ヶ岳－御池－桧枝岐の上ノ原バス停	L藤田(4)、SL朝日(3)、日野(1)、高山(1)
3/30-4/4	神岡－打保－登山口－c1842ポコ－黒部五郎岳－打保	L船木(4)、SL小田切(3)、佐々木(1)、菊池(2)
4/26-5/6	八千代発電所－第2ダム上－6の沢出会付近－8の沢出会い－北東尾根c1630－札内岳－JP手前引き返し－エサオマンピーク－JP－札内岳－10の沢出会い－6の沢出会い－トッタベツヒュッテ－八千代発電所	L小林(4)、SL堀(3)、高橋(2)、佐々木(2)、宝多(2)
4/27-5/4	酸ヶ湯温泉－傘松峠－C1380ポコ－乗鞍山－赤倉岳－上岳－石倉岳－硫黄岳－仙人袋ヒュッテ－小岳－仙人袋ヒュッテ－小岳－高田大岳－大岳－井戸岳－赤倉岳－山ろく駅下山	L富田(3)、SL川島(3)、高山(2)、日野(2)、一迫(2)
4/27-5/3	白金温泉－美瑛富士避難小屋－オプタテ－東尾根－二子沼－コスマヌプリ－ツリガネ山－三河台下－トムラウシ－(早稲田の沢でスキー)－トムラウシ温泉	L朝日(4)、SL菊池(3)、古川(2)、小塚(2)
4/29-5/5	無意根ゴールデンウィーク合宿　薄別－小屋－壁－テラス－シャンツエ－ピーク－中岳－沼－小屋－ピーク－小屋－薄別	CL関戸(4)、樋口(4)、名村(4)、小田切(4)、山本(3)、松本(3)、三宅(3)、村(3)、川端(1)、永尾(1)、安藤(1)、河合(1)、吉田(1)、青黄(1)、根元(1)、中村(1)
5/24-27	増毛－暑寒別荘－暑寒別岳－暑寒荘－留萌下山	L宝多(2)、SL佐々木(2)、一迫(2)、高橋(2)
6/1-7	(サマースキー第一班)勇駒別－天人が原－石室－金庫岩－BC(旭岳周辺・白鳥・リクマン・天皇でスキー)－追悼－勇駒別下山	L三宅(3)、SL佐々木(2)、高橋(2)、吉田(1)、中村(1)
6/1-7	(サマースキー第二班)勇駒別－天人が原－石室－金庫岩－BC(－温泉沢・白鳥・リクマン・天皇でスキー)－北大スロープセ]スキー－追悼－勇駒別下山	L山本(3)、SL小塚(2)、川島(3)、河合(1)、川端(1)
6/1-7	(サマースキー第三班)勇駒別－天人が原－石室－金庫岩－BC(－アパッチ・ロックンロール－リクマン・天皇・旭岳周辺でスキー)－追悼－勇駒別下山	L松本(3)、SL日野(2)、古川(2)、山崎(1)、青黄(1)
6/1-7	(サマースキー第四班)勇駒別－天人が原－石室－金庫岩－BC(－旭岳周辺・白鳥・虫の沢・ハタコロ・天皇)－追悼－勇駒別下山	L堀(3)、SL宝多(2)、一迫(2)、冨田(3)、安藤(1)
6/1-7	(サマースキー第五班)勇駒別－天人が原－石室－金庫岩－BC(旭岳周辺・白鳥・リクマン・天皇・ハタコロでスキー)－追悼－勇駒別下山	L村(3)、SL高山(2)、菊池(3)、梶本(1)、山崎(1)
6/4-7	(サマースキー四年目班)勇駒別－BC(永山岳・インフェルノスロープ・旭岳周辺でスキー)－追悼－勇駒別下山	L関戸(4)、SL小林(4)、名村(4)関(OB1)
6/5-7	(サマースキー四年目班)勇駒別－天人が原－石室－旭岳周辺でスキー－追悼－勇駒別下山	L樋口(4)、SL朝日(4)、船木(OB1)
6/17	平和の滝より発寒川往復	L菊池(3)、SL松本(3)
6/18	札幌－白水沢大滝－引き返し	L菊池(3)、SL日野(2)
6/22	平和の滝より発寒川往復	L小林(4)、SL樋口(4)
6/21-22	札幌－白水沢－無意根山－小屋－薄別	L三宅(3)、SL宝多(2)安藤(1)
6/21-22	札幌－白水沢－無意根山－小屋－薄別	L堀(3)、SL小塚(2)、山崎(1)
6/21-22	札幌－白水沢－無意根山－小屋－薄別	L松本(3)、SL高山(2)、佐々木(2)、高橋(2)
6/21-22	札幌－白水沢－無意根山－小屋－薄別	L菊池(3)、SL山本(3)、青黄(1)
6/28-29	札幌－白水沢－無意根山－小屋－薄別	L冨田(3)、SL古川(2)、吉田(1)、根本(1)
6/28-29	札幌－白水沢－無意根山－小屋－薄別	L川島(3)、SL日野(2)、中村(1)、川端(1)
6/28-29	札幌－白水沢－無意根山－小屋－薄別	L村(3)、SL一迫(2)、山崎(1)、河合(1)
6/28-29	札幌－空沼入沢出会－漁岳－オコタンペ－オコタン	L菊池(3)、SL佐々木(2)、宝多(2)
6/28-29	札幌－オコタン分岐手前－漁川c520－c1000二股－下山	L小林(4)、SL関戸(4)、樋口(4)、上谷(部外者)
6/29	平和の滝より発寒川往復	L朝日(4)、SL小田切(4)
日付なし	(発寒川)報告書紛失	L松本(3)、SL三宅(3)、日野(2)、安藤(1)
7/4-5	(札的沢)林道終点－本流－3の沢－下山	L小林(4)、SL菊池(3)、一迫(2)、佐々木(2)
7/6	平和の滝より発寒川往復	L冨田(3)、SL関戸(4)
7/6	平和の滝より発寒川往復	L村(3)、SL宝多(2)、川端(1)、吉田(1)
7/9-13	勇駒別－旭岳－旭岳・熊が岳コル(東斜面でスキー)－北大スロープ・ロックンロールでスキー－追悼－勇駒別下山	L川島(3)、SL冨田(3)、加藤(OB1)
7/13	(滝沢)丸駒温泉－F9－下山	L小林(4)、SL菊池(3)、一迫(2)、佐々木(2)、関戸(4)
7/13-15	元山－白井川c840二股－c1220二股右－余市岳－c1300コル－元山	L朝日(4)、SL村(3)、小塚(2)、川端(1)
7/13-15	勇駒別－天人峡－ポンカウン入沢－源頭－天人峡下山	L冨田(3)、SL川島(3)
7/15-20	新得－トムラウシ温泉－トムラウシ－ヒサゴ沼－化雲－五色岳－沼の原最低鞍部－JP－石狩－前天狗－天狗コル－ニペソツ－幌加温泉下山	L一迫(2)、SL高山(2)、宝多(2)、根本(1)、山崎(1)
7/16-17	札幌－伊佐内川－c540二股引き返し	L小田切(4)、SL堀(3)、吉田(1)、中村(1)
7/17-23	勇駒別－旭岳－熊のコル－白雲－石室－忠別－石室－五色岳－化雲岳－ヒサゴ沼・早稲田の沢でスキー－トムラウシ－トムラウシ温泉下山	L小塚(2)、SL古川(2)、山崎(1)、安藤(1)
7/19-27	白金温泉－美瑛富士避難小屋－オプタテ－二子沼－ツリガネ山－三河台(カールにてスキー2日)－トムラウシ南沼－トムラウシ－(セダ沢・化雲・ヒサゴ沼でスキー)－トムラウシ温泉	L山本(3)、SL日野(2)、川端(1)
7/20	平和の滝より発寒川往復	L船木(OB1)、SL松本(3)、高橋(2)、河合(1)、青黄(1)
7/20-25	上札内－8の沢出会－カムエク－記念別三股－札内岳－林道出会	L小田切(4)、SL堀(3)、吉田(1)、中村(1)

7/24-31	振内－幌尻山荘－幌尻岳－七つ沼－新冠二股－神威直登沢出会－JP－春別－10の沢出会－記念別沢出会－記念別沢三股－札内岳－エサオマントッタベツ川－林道	L船木(OB1)、SL松本(3)、河合(1)、青黄(1)、高橋(2)
7/27-28	元山－白井川c830二股－上二股引返し－元山	L加藤(OB1)、SL三宅(3)、高山(2)、梶本(1)、安藤(1)
7/30-8/4	上札内－林道終点－8の沢出会い－8の沢カール－カムエク－春別－10の沢カール－札内本流出会－札内岳－エサオマンc1000二股－林道－八千代下山	L加藤(OB1)、SL三宅(3)、梶本(1)、安藤(1)、高山(2)
7/31-8/1	(札的沢)林道終点－6の沢－1の沢－下山	L小林(4)、SL菊池(3)、一迫(2)、佐々木(2)
8/4-10	富良野－秋雲橋－原始が原－富良野岳－十勝岳－美瑛岳－避難小屋－オプタテ－ツリガネ山－三河台－トムラウシ－北沼－ヒサゴ沼－化雲－五色岳－白雲石室－白雲－黒岳－層雲峡	L樋口(4)、SL高橋(2)、青黄(1)
8/5-7	札幌－林道終点－49点沢出会い－負担田左股へ－40m大滝引き返し－ドザエモンの滝－余別町下山	L小林(4)、SL菊池(3)、一迫(2)、山本(3)
8/7-9	札幌－望岳橋－漁岳－奥漁橋下山	L朝日(4)、SL村(3)、川端(1)、古川(1)
8/11-13	余別川 札幌－林道終点－41点沢－51点沢二股－ドザエモンの滝－下山	L関戸(4)、SL富田(3)、小塚(2)、日野(2)、宝多(2)
8/11-15	振内－幌尻山荘－幌尻岳－北東尾根－新冠川－c1250二股－上二股－エサオマン入ノ沢－エサオマン北カール－エサオマントッタベツ岳－JP－c1000二股－トッタベツヒュッテ－八千代下山	L朝日(4)、SL村(3)、川端(1)、古川(2)
8/11-18	ペテガリ山荘－中の岳直登沢出会－中の岳－ペテガリ－東尾根分岐－下降尾根－上二股－ケルン下(追悼)－三股－林道	L小林(4)、SL菊池(3)、一迫(2)、佐々木(2)
8/15-23	中札内－7の沢出会い－記念別三股－上の三股－50m大滝－札内岳－エサオマントタベツ川－エサオマントッタベツ岳－カムイ直登沢出会－新冠川二股－七つ沼－戸蔦別岳－トッタベツ川出会－エサオマントッタベツ川出会－林道	L関戸(4)、SL富田(3)、小塚(2)、日野(2)、宝多(2)
8/18	札幌－白水沢大滝－引き返し	L岩瀬(OB1)、SL堀(3)、樋口(4)、山崎雅司(1)、山崎淳(1)
8/20-25	上札内－林道終点－八の沢出会－二股－8の沢カール－カムエク－9の沢カール－札内本流－10ノ沢出会－札内岳－エサオマンc1000二股－エサオマントタベツ出会い－八千代下山	L岩瀬(OB1)、SL堀(3)、山崎(1)、樋口(4)
8/27-9/4	(穂高)詳細は「槍ヶ岳における高山病事故報告書」北大山スキー部参照	L山本(3)、SL加藤(OB1)、古川(2)
8/28-9/4	ユートピア牧場－ペテガリ山荘－ペテガリ岳－Cカール－ルベツネ山－ヤオロ－1839－ヤオロ－コイカク－コイカク沢－林道	L宝多(2)、SL佐々木(2)、河合(1)、吉田(1)

69 season　1980(昭和55)年10月～1981(昭和56)年9月

部長：中島巌

〔前期〕主任：三宅信一郎(3)／リーダー会議長：富田正人(3)／リーダー会：村政幸(3)・三宅信一郎(3)・菊池真人(3)・川島大幸(3)・樋口孝一(4)・朝日教之(4)・関戸徹(4)・小林伸一(4)／庶務：松本隆文(3)／記録：小塚毅(2)／会計：村政幸(3)・日野輝明(2)／装備：川島大幸(3)・一迫公利(2)・川端康弘(1)・安藤透(1)／医療：青黄靖(1)／体育会・トレーニング：梶本淳(1)／プリント：古川紳二(2)・山崎雅司(1)・山崎淳(1)／むいね：朝日教之(4)・川島大幸(3)・宝多卓男(2)／バイト：佐々木泰弘(2)／ロッジ：堀和徳(3)／部室：関戸徹(4)／図書・小屋・歌唱：河合博司(1)

〔後期〕主任：三宅信一郎(4)／リーダー会議長：富田正人(4)／リーダー会：堀和徳(4)・松本隆文(4)・三宅信一郎(4)・村政幸(4)・小塚毅(3)・宝多卓男(3)・古川伸二(3)／庶務：小塚毅(3)／記録：宝多卓男(3)／会計：高山浩史(3)／装備：古川伸二(3)・青黄靖(2)・河合博司(2)／医療：日野輝明(2)／体育会・トレーニング：河合博司(2)／プリント：吉田美樹(2)／むいね：川島大幸(4)・宝多卓男(3)・吉田美樹(2)／バイト：梶本淳(2)／小屋：川端康弘(2)／施設：一迫公利(2)／図書・部室・歌唱：安藤透(1)

10/6-8	山部－小屋－芦別岳－登山口	L吉田(1)、SL青黄(1)、安藤(1)、梶本(1)、山崎(1)
10/日付なし	芦別岳　L会未報告	L佐々木(2)、SL日野(2)、高山(2)
10/9-13	斜里－岩尾別温泉－銀冷水－羅臼岳－銀冷水－硫黄－カムイワッカの滝林道上－斜里下山	L高橋(2)、SL宝多(2)、一迫(2)
10/9-13	振内－幌尻橋－ダム－幌尻山荘－幌尻北カール－幌尻岳－七つ沼－戸蔦別岳－北戸蔦別岳－2の沢出会－千栄下山	L菊池(3)、SL堀(3)、小塚(2)
10/11-12	(羊蹄山)比羅夫－駐車場－ピーク－下山	L根本(1)、SL吉田(1)、河合(1)、川端(1)、observer小林(4)
10/14-15	山田温泉－アンヌプリ－五色温泉－大沼－チセヌプリ－湯本温泉－下山	L安藤(1)、SL河合(1)、青黄(1)
10/15-16	札幌－万計沼－札幌岳－冷水小屋－下山	L川端(1)、梶本(1)、吉田(1)、山崎(1)
11/15-17	中央高地　黒岳	L三宅(3)、SL宝多(2)、関戸(4)、松本(3)、古川(2)
11/21-25	(初滑り一年目班)勇駒別－天女ヶ原－石室上部－勇駒別下山	L朝日(4)、SL川島(3)、山崎(1)、河合(1) L関戸(4)、SL堀(3)、青黄(1)、梶本(1)、安藤(1) L菊池(3)、SL村(3)、吉田(1)、川端(1)
11/21-25	(初滑り二年目班)勇駒別－天女ヶ原－追悼－ピークアタック－1850mにて氷雪技術訓練－勇駒別下山	L小田切(4)、SL松本(3)、一迫(2)
	(初滑り二年目班)勇駒別－天女ヶ原－追悼－ピークアタック－1851mにて氷雪技術訓練－勇駒別下山	L樋口(4)、SL三宅(2)、古川(2)、高山(2)
	(初滑り二年目班)勇駒別－天女ヶ原－追悼－ピークアタック－1852mにて氷雪技術訓練－勇駒別下山	L小林(4)、SL富田(3)、日野(2)、名村(2)
12/8-15	(新人合宿第一班)望岳台－三段山下BC－北尾根－ホコ岩－富良野－東尾根コル引き返し－ホコ岩－富良野－D尾根－十勝岳温泉－BC(ビバーク訓練)－望岳台下山	L朝日(4)、SL堀(3)、日野(2)、小塚(2)
12/9-17	(新人合宿第二班)望岳台－BC(－三段山)－(－北尾根－ホロ岩－1000mダム上流荒天乗越断念)－スキー・ビバーク訓練－白金温泉下山	L樋口(4)、SL菊池(3)、宝多(2)、古川(2)
12/10-17	(無意根新人合宿)薄別－小屋－スキー練習・雪崩救助訓練－下山	CL小林(4)、冨田(3)、村(3)、松本(3)、川島(3)、加藤(OB1)、青黄(1)、安藤(1)、河合(1)、梶本(1)、川端(1)、吉田(1)、山崎(1)
12/10-18	(新人合宿第三班)望岳台－BC－北尾根1300m－ホコ岩上－ハゲ尾根下る－三段山－BC(ビバーク訓練)－白金温泉	L関戸(4)、SL三宅(3)、一迫(2)、高山(2)、高橋(2)
12/27-28	羊蹄山南登山口－900mシーデポ－ピーク－下山	L小田切(4)、SL川島(3)、古川(2)、日野(2)、掘(3)
12/27-1/2	トムラウシ温泉－林道終点－地獄谷BC(－トムラウシ)－化雲－c2345－トムラウシ温泉下山	L船木(OB1)、SL松本(3)、梶本(1)吉田(1)
12/27-1/5	十勝三股－杉沢林道－天狗のコル－ニペソツ－JP－沼の原最低コル－五色岳－ヒサゴ沼－トムラウシ－前トムラ－カムイ橋－トムラウシ温泉下山	L朝日(4)、村(3)、高山(2)、高橋(3)

12/30-1/6	白金温泉－1040m壁手前－美瑛－オプタテ西尾根基部－オプタテ－プタ山南1440m－オプタテ－殿狩橋－ニペソツ下山	L樋口(4)、SL菊池(3)、安藤(1)、河合(1)、名村(1)
12/30-1/7	新得－二股－ニペ北西稜末端－1390mコル－ニペソツ－丸山－南丸山－ウペペ東端－ヤンベツ林道－然別湖畔下山	L小林(4)、SL冨田(3)、小塚(2)、一迫(2)、宝多(2)
1/1-3	帯広－十勝三股－登山口－1050m－(雪崩)－三股着	L小田切(4)、SL川島(3)、古川(2)、日野(2)、掘(2)
1/5-11	美瑛－国立大雪青年の家－美瑛富士北1150－美瑛富士－西尾根基部－ベベツ北尾根・西尾根スキーオプタテ－オプタテ北1350m－二子沼－橋下山	L関戸(4)、SL川島(3)、川端(1)、山崎(1)、青黄(1)
2/27-3/1	(ニセコ強化)新見温泉－白樺－シャクナゲ－チセ－ニト－五色温泉－イワオ－アンヌプリ－下山	L村(3)、吉田(1)、河合(1)、山崎(1)
2/27-3/2	上川－リクマン－尾根上1240m－1460m引き返し－リクマン下山	L小林(4)、SL冨田(3)、小塚(2)、古川(2)
2/28-3/2	(ニセコ強化)五色温泉－ニト－チセ－シャクナゲ－白樺－新見温泉－前目国内－目国内－岩内－下山	L樋口(4)、安藤(1)、青黄(1)
2/28-3/2	(ニセコ強化)山田温泉－アンヌプリ－五色温泉－イワオ－ニト－チセ－シャクナゲ－白樺－新見温泉－目国内－岩内下山	L菊池(3)、梶本(1)、川端(1)
3/7-9	美国－積丹岳北西標高尾根550m－積丹岳－960m－積丹岳－余別岳－積丹岳－260m地図読みを間違えてクエドスベツ川を下る－道路	L川島(3)、SL松本(3)、河合(1)
3/7-9	山部－登山口－夫婦沢源頭－芦別岳－山部下山	L菊池(3)、SL掘(3)、三宅(3)
3/7-10	札幌－林道－阿女鱒岳－余市岳－元山下山	L小塚(2)、SL高山(2)、川端(1)、梶本(1)
3/9-11	定山渓－白井小屋－余市北コル－朝里岳－国際スキー場下山	L日野(2)、SL一迫(2)、安藤(1)
3/14-21	勇駒別温泉－石室－旭・後旭コル(－北大スロープ)－白雲－忠別石室－五色－トムラ東尾根基部－トムラウシ－TS－トムラウシ温泉－二股下山	L関戸(4)、SL三宅(3)、山崎(1)、落合(1)、宝多(1)
3/15-18	清川－双雲別林道－南尾根末端－尾根上1340m－ニセイ－夏道尾根1220m－西尾根1500mよりスキー－清川下山	L小林(4)、SL掘(3)、松本(3)、小塚(2)、一迫(2)
3/17-19	群別－943.6－群別岳－群別下山	L朝日(4)、SL村(3)、吉田(1)、梶本(1)、古川(2)
3/17-28	糸魚川－上路－白鳥－犬が岳栂池小屋－犬が岳－長栂山－朝日岳－雪倉山－小蓮華山－下山	L名村(4)、SL菊池(3)、川端(1)、安藤(1)
3/20-22	群別－群別岳往復	L樋口(4)、SL川島(3)、高山(2)、日野(2)、青黄(1)
3/23-31	八千代－トッタベツ小屋－ビレイ橋－エサオマン出会－カムイ北東尾根1490M西側コル－カムイ岳分岐引き返－カムイ岳＾1803M西側コル－戸蔦別岳－幌尻岳－カムイ補靴尾根分岐－林道－タッタベツ小屋－千栄下山	L朝日(4)、SL村(3)、吉田(1)、梶本(1)、古川(1)
3/24-4/4	十勝三股－ユニ石登山口－尾根上1040m－1470m引き返し－石狩・音更コル－石狩－北西尾根－林道－忠別への尾根上1170M－忠別－白雲石室－北鎮－愛別－林道－白川下山	L小林(4)、SL掘(3)、松本(3)、小塚(2)、一迫(2)
3/25-30	富良野スキー場－リフト終点920m－北の峰－御茶々－1280m－芦別岳－ポントナシベツ－1262峰－1303峰－1300m－タ張岳－小屋－明石町下山	L樋口(4)、SL川島(3)、高山(2)、日野(2)、青黄(2)
4/26-5/5	ユートピア牧場－奥新冠発電所－林道途中－980m二股－幌尻岳－七つ沼カール－幌尻東カール－戸蔦別岳にてスキー－1803m前コル－カムイ北東尾根1650m－エサオマントッタベツ岳－JP－札内とのコル1690m－札内岳－ピリカペタヌ6の沢出会い－トッタベツ小屋－八千代下山	L松本(4)、SL宝多(3)、安藤(2)、川端(2)、梶本(2)
4/27-5/5	八千代－カムイ北東尾根基部－北東尾根上1560m－JP－10.5の沢コル－春別岳－カムエクーナメワッカ分岐カール、JP尾根でスキー－JP－札内岳－10の沢1630m－トッタベツ小屋－八千代	L菊池(4)、SL古川(3)、吉田(2)、青黄(2)
4/29-5/5	無意根ゴールデンウィーク合宿　薄別－小屋－Peak－薄別下山	CL三宅(4)、冨田(4)、高山(3)、村(4)、日野(3)、一迫(3)、滝(1)、辻(1)、秋山(1)、伴(1)、松本(1)、寺内(1)、久能(1)、松村(1)、長谷川(1)、小川(1)
4/29-5/7	奥新冠－林道途中－営林署小屋－幌尻岳－東カール下－七つ沼－戸蔦別岳－北戸蔦別岳－北戸蔦西コル－ピパイロ－伏見岳－伏見小屋－上美生下山	L掘(4)、SL小塚(3)、河合(2)、山崎(2)
5/22-24	登山口－1100m－積丹岳－登山口下山	L青黄(2)、SL川端(2)、梶本(2)
5/31-6/6	(サマースキー第一班)勇駒別－天人が原－石室－金庫岩－温泉沢－白鳥・虫の沢・天皇・ハタコロ－旭岳－追悼－勇駒別下山	L高山(3)、SL梶本(2)、松村(1)、滝(1)
5/31-6/6	(サマースキー第二班)勇駒別－天人が原－石室－金庫岩－金庫岩下－北東・ハタコロ－愛別北引き返－北斜面、白鳥、リクマン、ハタコロ、虫の沢にてスキー－追悼－勇駒別下山	L宝多(3)、SL河合(2)、久能(1)、松本(1)
5/31-6/6	(サマースキー第三班)勇駒別－天人が原－石室－金庫岩－温泉沢－白鳥、リクマン、ハタコロ－旭岳－追悼－勇駒別下山	L小塚(3)、SL川端(2)、吉田(2)、秋山(1)
5/31-6/6	(サマースキー第四班)勇駒別－ロープウエイ－石室－金庫岩－東斜面、チベトン、北斜面、カワノメにてスキー－白鳥、虫の沢、ハタコロ－追悼－勇駒別下山	L古川(3)、SL安藤(2)、(4日まで加藤OB1がSL)、辻(1)、寺内(1)
5/31-6/6	(サマースキー第五班)勇駒別－天人が原－石室－金庫岩－コル、温泉沢、白鳥、虫の沢、ハタコロ、カワノメにてスキー－追悼－勇駒別下山	L日野(3)、SL青黄(2)、小河(1)、伴(1)、一迫(3)
6/4-6	(サマースキー第六班)勇駒別－旭岳－北東斜面、カワノメにてスキー－追悼－勇駒別下山	L松本(4)、SL三宅(4)、川島(4)、他部外者1名
6/13	札幌－入水－750m増水のため引き返し－下山	L小塚(3)、SL宝多(3)
6/20-21	札幌－白水沢－無意根山－小屋－薄別	L宝多(3)、SL川端(2)、小川(1)、滝(1)
6/20-21	札幌－白水沢－無意根山－小屋－薄別	L小塚(3)、SL梶本(2)、秋山(1)、辻(1)
6/20-21	札幌－白水沢－無意根山－小屋－薄別	L川島(4)、SL菊池i(4)
6/28	発寒川平和の滝より往復	L宝多(3)、SL川端(2)、辻(1)、小川(1)
7/4	発寒川平和の滝より往復	L三宅(4)、SL吉田(2)、秋山(1)、滝(1)、寺内(1)
7/4	発寒川平和の滝より往復	L冨田(4)、SL高山(3)、松村(1)、久能(1)
7/4-5	札幌－白水沢－無意根山－小屋－薄別	L一迫(3)、SL青黄(2)、松村(1)、伴(1)
7/4-5	札幌－白水沢－無意根山－小屋－薄別	L高山(3)、SL安藤(2)、松本(1)
7/4-5	札幌－白水沢660m－無意根山－小屋－薄別	L宝多(3)、SL小塚(3)、他部外者3名
7/12	札幌－入水－カムイ岳－下山	L川島(4)、SL小塚(3)、秋山(1)、滝(1)
日付不明	札幌－入水－カムイ岳－下山	L田村(4)、SL加藤(OB1)、小川(1)、辻(1)、寺内(1)
7/15-17	余別川－入水－49点沢出会－51点沢出会－F6引き返し－下山	L冨田(4)、SL高山(3)、河合(2)、松村(1)、久能(1)

7/15-20	上富良野－十勝岳温泉－上ホロ下(スキー練習)－美瑛－二子沼－オプタテ下－三川台－M体調不良トムラウシ温泉下山	L松本(4)、SL吉田(2)、寺内(1)、秋山(1)、滝(1)
7/19	(発寒川)平和の滝より往復	L村(4)、SL宝多(3)、安藤(2)、川端(2)
7/25-27	丸山会館－林道120m－伊佐内川300m二股－積丹岳－ウエンド川600m二股－ウエンド川650m滝を高巻いた－林道450mの滝を高巻く	L堀(4)、SL古川(3)、青黄(2)、松本(1)、伴(1)
7/27-8/1	札内ヒュッテ－7の沢出会－8の沢出会－900m三股－カムエクー春別岳－10の沢カール－10の沢出会－記念別出会－7の沢出会－745m二股－7の沢カール－1823峰－コイカクー札内ヒュッテ下山	L冨田(4)、SL高山(4)、河合(2)、松村(1)、久能(1)
7/28	(ガマ沢、御簾舞沢)望岳台－ヒョウタン沼－林道	L川島(4)、SL小塚(3)秋山(1)、滝(1)
7/29-8/4	振内－幌尻小屋－6の沢出会－1200m二股－幌尻岳－七つ沼－上二股－カムイ直登沢出会－エサオマン北カール－札内岳南西稜線上1660m－札内往復－10.5の沢出会－10の沢出会－8の沢出会－カムエクー下降尾根下－林道－中札内下山	L堀(4)、SL古川(3)、青黄(2)、松本(1)、伴(1)
7/31-8/7	新得－トムラウシ温泉－トムラウシ南沼－トムラウシ－ヒサゴ沼－忠別小屋－白雲石室－抗弁温泉－層雲峡	L川端(2)、SL安藤(2)、小川(1)
7/31-8/7	振内－額平ダム－幌尻小屋－額平川本流1600m引き返し－北カール－幌尻岳－七つ沼－1150m二股－カムイ直登沢－エサオマン北カール－JP－10の沢カール－10の沢出会－9の沢出会－8の沢出会－カムエクー8の沢出会－7の沢出会－上札内下山	L川島(4)、SL小塚(3)、秋山(1)、滝(1)
8/2-3	薄別－電光－宝来沢源頭－夏道(馬の背手間)－小屋－薄別	L村(4)、SL宝多(3)
8/8-17	カモイウンペ川河口－ウナキベツ河口－知床沼－知床岳－ウナキベツ河口－モイレウシ河口－念仏岩－岬－文吉湾－19番番屋－ルシャ川サケマスふ化場－硫黄岳－二つ池－羅臼岳－羅臼下山	L河合(2)、SL梶本(2)、久能(1)、松村(1)
8/10-12	余別川－49点沢出会－大滝－ねじれの滝上引き返し－下山	L村(4)、SL宝多(3)、安藤(2)、川端(2)
8/12-22	根室標津－モセカルベツ入口－680m二股－硫黄山－新噴火口－林道－テッパンベツコタキ－知床岳の下の沼－知床沼－モイレウシ川－ペキン川河口－三浦さんの番屋－知床岬－ペキン川河口－相泊下山	L田村(4)、加藤(OB2)、小川(1)、辻(1)、寺内(1)
8/13-17	塩川－三伏小屋－本谷山－塩見岳－熊の平－農鳥岳－北岳小屋跡－北岳－間の岳－両俣小屋－横川岳－仙丈岳－北沢峠下山	L古川(3)、SL青黄(2)、伴(1)、松本(1)
8/14-17	余別川－49点沢出会－122点沢出会－珊内岳－49点沢出会－林道下山	L小林(OB1)、SL一迫(3)、吉田(2)
8/14-19	コイボク林道終点－820m三股－カムエクカールーカムエク－8の沢上二股－8の沢出会－記念別沢980m三股－上三股－中股を行く－1400m滝の上－札内岳－エサオマン1000m二股－林道－八千代	L村(4)、SL宝多(3)、安藤(2)、川端(2)
8/29-30	漁川本流－1000m二股引き返し－下山	L一迫(3)、SL日野(3)、吉田(2)、梶本(2)
8/30-9/1	下二股川林道終点－600m引き返し－古平－余別－51点沢出会－珊内岳－498m二股－珊内村下山	L菊池(4)、SL小塚(3)、川端(2)
9/1-2	札幌－林道終点－6の沢出会い－稜線－下山　一の沢を下る	L一迫(3)、SL宝田(3)、吉田(2)、梶本(2)
9/4-9	ユートピア牧場－林道終点－880m滝－1120m二股－イドンナップ岳－ポンイドンナップ1250m二股手前－800m－下二股－カシュツオマナイ出会－林道－飯場－下山	L一迫(3)、SL宝多(3)、吉田(2)、梶本(2)
9/28	部員総会(ロッジ)	

70 season　1981(昭和56)年10月～1982(昭和57)年9月

部長：吉岡義彦

〔前期〕主任：小塚毅(3)／リーダー会議長：宝多卓男(3)／リーダー会：松本隆文(4)・富田正人(4)・菊池真人(4)・三宅信一郎(4)・日野輝明(3)・一迫公利(3)・小塚毅(3)／庶務：日野輝明(3)／記録：吉田美樹(2)／会計：高山浩史(3)／装備：滝龍一郎(2)・松村俊和(1)／医療：寺内聡(1)・伴和弘(1)／小屋：小川洋(1)／部室・図書・歌唱：青黄靖(2)／体育会・トレーニング：河合博司2)／プリント：秋山幸久(1)・久能弘道(1)・辻雅久(1)／むいね：川島大幸(4)・宝多卓男(3)・吉田美樹(2)／ロッジ：青黄靖(2)／バイト：梶本淳(2)

〔後期〕主任：小塚毅(4)／リーダー会議長：宝多卓男(4)／リーダー会：小塚毅(4)・高山浩史(4)・一迫公利(4)・吉田美樹(3)・青黄靖(3)・川端康弘(3)・梶本淳(3)／庶務：吉田美樹(3)／記録：青黄靖(3)／会計：梶本淳(3)／装備：川端康弘(3)・滝龍一郎(3)・秋山幸久(2)／医療：寺内聡(2)／小屋：小川洋(2)／部室・図書・歌唱：松本貴之(2)／体育会・トレーニング：河合博司(3)・伴和弘(2)／プリント：久能弘道(2)・辻雅久(2)／むいね：宝多卓男(4)・吉田美樹(3)・梶本淳松(3)・松本貴之(2)／ロッジ：高山浩史(4)／バイト：松村俊和(2)

10/3-4	空沼小屋－空沼岳－札幌岳－冷水小屋	L伴(1)、SL小川(1)、長谷川(1)、寺内(1)
10/3-5	山部－ユーフレ小屋－本谷－芦別岳－ユーフレ小屋－山部	L川島(4)、SL宝多(3)、松本(1)、辻(1)
10/3-6	新冠ユートピア牧場－林道終点－ソエマツ岳－夏尾根－林道	L小塚(3)、SL冨田(4)、河合(2)、青黄(2)
10/9-13	斜里－岩尾別温泉－ラウス平－羅臼岳－ニフ池－硫黄岳－下山	L堀(4)、SL冨田(4)、滝(1)、長谷川(1)
10/11-12	無意根小屋祭	記録なし
10/22-24	沓形－小屋－沓形	L梶本(2)、SL青黄(2)、川端(2)、一迫(3)、松本(4)
11/4-5	(黒岳)報告書不明	L高山(3)
11/19-23	旭岳初滑り(1年目班)湧駒別温泉－天女が原BC(－石室付近でアイゼン・ピッケル・スキー訓練)－追悼後下山	L村(4)、SL高山(3)、長谷川(1)、伴(1) L松本(4)、SL一迫(3)、松村(1)、寺内(1)、松本(1) L菊池(4)、SL小塚(3)、滝(1)、小川(1) L冨田(4)、SL小田切(OB1)、辻(1)、秋山(1)、久能(1)
11/20-23	旭岳初滑り(2年目班)　湧駒別温泉－天女が原BC(－旭岳登頂・スキー練習・アイゼン・ザイル訓練)－追悼後下山	L川島(4)、SL関(OB2)、梶本(2)、吉田(2) L三宅(4)、SL宝多(3)、河合(2)、川端(2)、青黄(2)
12/5-12	十勝新人合宿(3班)白金温泉－望岳台－BC(－十勝岳温泉－ホコ岩－富良野岳－S尾根－D尾根－十勝岳－避難小屋)(－三段山)(ビバーク訓練)－望岳台－白金温泉	L村(4)、SL高山(3)、梶本(2)、川端(2)
12/6-12	無意根新人合宿(テラス・シャンツェでスキー練習。頂上往復・美比内遠征。雪洞訓練など)	CL三宅(4)、菊池(4)、川島(4)、橋村(OB3)、宝多(3)、伴(1)、寺内(1)、秋山(1)、松村(1)、、小川(1)、松本(1)、滝(1)、辻(1)
12/7-14	十勝新人合宿(2班)白金温泉－望岳台－吹上温泉－BC(－D尾根－cont1500)(－R)－吹上温泉－白金温泉	L冨田(4)、SL一迫(3)、青黄(2)、安藤(2)
12/7-15	十勝新人合宿(1班)白金温泉－望岳台－BC(－三段山－P－R)(－D尾根－三峰－富良野岳)(スキー練習)－白金温泉	L松本(4)、SL小塚(3)、河内(2)、吉田(2)
12/26-1/4	清川－ニセカウ西尾根－ニセカウシュッペ山－比麻良山－屏風岳－武華岳－大函	L冨田(4)、SL宝多(3)、河合(2)、梶本(2)

12/26-1/4	布礼別－トウヤウスベ山－三峰－富良野岳－シーソラプチ川二股－殿狩橋	L関(OB2)、SL米山(OB2)、秋山(1)、辻(1)、橋村(OB3)
12/28-1/4	上越－チトカニ－浮島－天塩岳－岩内川	L菊池(4)、SL古川(3)、松村(2)、滝(2)
12/29-1/5	富良野－トウヤベツ－シーソラプチ二股－下ホトカメトック－殿狩橋	L松本(4)、SL高山(3)、伴(2)、小川(1)、久能(1)
12/30-1/6	白金温泉－望岳台－十勝避難小屋－美瑛岳－白金温泉	L村(4)、SL樋口(0B1)、松本(1)、寺内(1)
12/30-1/9	十勝三股－十国峠－ユニ石狩岳－音更山－石狩岳－川上岳－天狗岳－岩間温泉	L川島(4)、SL小塚(3)、川端(2)、青黄(2)
12/31-1/11	十勝岳温泉－十勝岳－美瑛岳－美瑛富士－石垣山－オプタテシケ山－殿狩橋	L三宅(4)、SL一迫(3)、安藤(2)、吉田(2)
2/15	ロッジ祭　スキー大会	
2/27-3/1	桂岡－銀嶺荘－奥手稲山－山の家－百松沢山－源八沢－福井	L青黄(2)、梶本(2)、久能(1)、滝(1)、松村(1)
3/2	八剣山	L川島(4)、菊池(4)、安藤(2)
3/4-6	ニセコ強化合宿　岩内－新見温泉－チセヌプリ－五色温泉－ニセコアンヌプリ－モイワスキー場	L宝多(3)、松村(1)、寺内(1)、辻(1)
3/5-7	ニセコ強化山行　五色温泉－ニトヌプリ－チセヌプリ－ワイスホルン－ニセコアンヌプリ－比羅夫	L菊池(4)、小川(1)、松本(1)、伴(1)
3/日付なし	ニセコ強化山行	L松本(4)、秋山(1)、久能(1)、滝(1)
3/日付なし	第6回むいねスキーツアー	CL高山(3)、40名弱参加
3/6-7	天狗沢－定山渓天狗岳東尾根－ローソク岩	L小塚(3)、一迫(3)、川端(2)
3/10-11	山部－御茶々－夫婦岩北コル－芦別岳－半面山－山部	L川島(4)、SL小塚(3)、川端(2)、梶本(2)
3/10-11	羊蹄山　青年の森－700mにC－1830m往復	L松本(4)、SL高山(3)、寺内(1)、松村(1)、松本(1)
3/13-20	日勝トンネル－日勝峠－ペケレベツ－芽室西峰－雪盛山－ルベシベ山－芽室岳－夏道尾根－橋	L松本(4)、SL高山(3)、寺内(1)、松本(1)、松村(1)
3/14-22	清川－ニセカウ西尾根－ニセカウシュッペ山－比麻良山－屏風岳－武華岳－大函	L菊池(4)、SL関(OB2)、秋山(1)、辻(1)、伴(1)
3/15-26	豊似－豊似岳－ピリカヌプリ－ソエマツ岳－ピリカペタ－豊似岳－豊似	L川島(4)、SL小塚(3)、川端(2)、梶本(2)、安藤(2)
3/24-25	積丹岳	L安藤(2)、SL川端(2)、宝多(3)、寺内(1)
3/29-4/7	相泊－観音岩－化石浜－タケノコ岩－知床台地－知床岳－カモイウンペ河口－相泊	L冨田(4)、SL一迫(3)、河合(2)、吉田(2)、滝(1)
4/15-16	むいね追悼登山	メンバー記録なし
4/23-27	千走－東狩場山－狩場山－千走	L青黄(3)、SL松本(OB1)、松本(2)、辻(2)、小川(2)
4/23-28	群別－群別岳－浜益岳－暑寒別岳－小屋－増毛町	L一迫(4)、SL吉田(3)、久能(2)、伴(2)、松村(2)
4/29-5/5	1年目GW無意根合宿(シャンツェ・テラス・壁でスキー練習・無意根頂上・中岳・沼遠征)【5月3日50周年祭】	CL宝多(4)、小塚(4)、川端(3)、梶本(3)、安藤(3)、加藤(OB3)、桜井(1)、田川(1)、永井(1)、中島(1)、内林(1)、佐田(1)
5/5-9	鴛泊－利尻岳－鴛泊	L高山(4)、SL河合(3)、秋山(2)、滝(2)、寺内(2)
5/22-23	定山渓天狗岳	L小塚(4)、SL加藤(OB3)、秋山(2)
5/22-23	ユーフレ小屋－芦別岳－本谷スキー－ユーフレ小屋	L宝多(4)、SL吉田(3)　、川端(3)、寺内(2)
5/30-6/5	サマースキー第1班(湧駒別－石室－北大スロープ・旭岳周辺－石室)	L青黄(3)、SL松村(2)、伴(2)、田川(1)
	サマースキー第2班(湧駒別－石室－北大スロープ・旭岳周辺－石室)	L吉田(3)、SL秋山(2)、小川(2)、中島(1)
	サマースキー第3班(湧駒別－石室－北大スロープ・旭岳周辺－石室)	L梶本(3)、SL滝(2)、中村(1)、柳田(1)
	サマースキー第4班(湧駒別－石室－北大スロープ・旭岳周辺－石室)	L川端(3)、SL寺内(2)、内林(2)、桜井(1)、辻(2)
	サマースキー第5班(湧駒別－石室－北大スロープ・旭岳周辺－石室)	L河合(3)、SL松本(2)、久能(2)、三谷(1)、佐田(1)
6/2-5	サマースキー 4年目班(湧駒別－石室－北大スロープ・旭岳周辺－石室)	L宝多(4)、SL安藤(3)メンバー記録なし
6/3-5	サマースキー 4年目班(湧駒別－石室－北大スロープ・旭岳周辺－石室)	L小塚(4)、SL高山(4)、一迫(4)
6/19-20	薄別－白水沢－無意根山－無意根小屋－薄別	L青黄(3)、SL秋山(3)、佐田(1)、中村(1) L川端(3)、SL滝(3)、久能(2)、三谷(1) L吉田(3)、SL辻(3)、、松村(2) L梶本(3)、SL松本(2)、中島(1)、田川(1)、寺内(1) L河内(3)、SL伴(2)、小川(1)、柳田(1)、桜井(1)
6/26	木挽沢	L青黄(3)、SL小川(2)、寺内(2)、滝(2)
6/26-27	薄別－白水沢－無意根山－無意根小屋－薄別	L小塚(4)、SL一迫(4)、宝多(4)、内林(1) L川端(3)、SL青黄(3)、古沢智穂子(FCAC2)、鈴木雅子(FCAC2)、三船環(FCAC1)
6/27	発寒川	L高山(4)、SL吉田(3)、久能(3)、伴(2)
7/2	発寒川	L梶本(3)、SL寺内(2)、滝(2)、小川(2)
7/3-4	札的沢(本流大滝・3の沢・6の沢・2の沢それぞれ往復)	L一迫(4)、SL川端(3)、松村(2)、辻(2)
7/4	恵庭岳滝沢(F7まで往復)	L高山(4)、SL吉田(3)、伴(2)、久能(2)
7/4	恵庭岳滝沢(F8まで往復)	L小塚(4)、SL青黄(3)、秋山(2)、松本(2)、松本(OB1)
7/9-10	札的沢(－大滝にて事故－下山)	L青黄(3)、SL秋山(2)、寺内(2)
7/9-12	余別川(　)本流ドザエモンの滝・三段の滝それぞれ往復	L高山(4)、SL吉田(3)、伴(2)、久能(2)
7/10	恵庭岳滝沢(F9まで往復)	L一迫(4)、SL川端(3)、松村(2)、辻(2)
7/11	発寒川	L梶本(3)、SL宝多(4)、中村(1)、中島(2)、佐田(1)、内林(1)、桜井(1)
7/16-23	大雪山スキー縦走　清川－ニセイカウシュッペ山－層雲峡－黒岳－北鎮岳－旭岳－北大スロープ－白雲石室－忠別岳－ヒサゴ沼－トムラウシ山－トムラウシ温泉	L小川(2)、SL梶本(3)、中村(1)、桜井(1)、三谷(1)
7/16-25	十勝・大雪スキー縦走　十勝岳温泉－上ホロ小屋－十勝岳－美瑛岳－オプタテシケ山－コスマヌプリ－化雲－トムラウシ山－トムラウシ温泉	L吉田(3)、SL秋山(2)、中島(1)、佐田(1)
7/16-27	相泊－モイレウシ河口－念仏岩－知床岬－ルシャ孵化場－硫黄岳－羅臼岳－岩尾別温泉	L滝(2)、SL松村(2)、田川(1)、内林(1)
7/19-21	余別川－三段の滝・ドザエモンの滝それぞれ往復	L一迫(4)、SL川端(3)、松本(OB1)、辻(2)

7/29-8/2	下二股川、余別川	L小塚(4)、SL青黄(3)、秋山(2)、松本(2)
7/30-8/5	コイボク三股－コイボクカール－カムイエクウチカウシ山－10の沢－札内川－7の沢カール－コイカクシュ札内岳－札内川	L高山(4)、SL吉田(3)、伴(2)、久能(2)
7/31	簾舞川　800mの滝まで往復	L宝多(4)、SL加藤(OB3)、中村(1)、内林(1)、桜井(1)
8/1	恵庭岳滝沢F6まで往復	L一迫(4)、SL川端(3)、松村(2)、辻(2)
8/3-5	ヒヤミズ沢－大平山往復	L一迫(4)、SL川端(3)、松村(2)、辻(2)
8/5-13	幌尻山荘－幌尻岳－七つ沼－エサオマン北カール－札内川－春別岳－カムイエクウチカウシ山－札内川－記念別沢－札内岳－戸蔦別川	L小塚(4)、SL青黄(3)、秋山(2)、松本(2)
8/8-17	静内－無名沢－1839峰－サッシビチャリ沢－ペテガリ山荘－ペテガリ沢－ペテガリ岳－中の川－ケルン－尾田村	L宝多(4)、SL加藤(OB3)、桜井(1)、中村(1)、内林(1)
8/9-17	ヌピナイ川－－ソエマツ岳－奥二股－神威岳－二股－林道	L一迫(4)、SL川端(3)、松村(2)、辻(2)
8/9-17	天人峡－カウンナイ沢－トムラウシ山－地獄谷－ヒサゴ沼－化雲岳－忠別小屋－石狩沢二股－石狩岳－十勝二股	L松本(OB1)、SL梶本(3)、佐田(1)、中島(1)
8/17	発寒川－平和の滝より580m二股往復	L村(OB1)、SL冨田(OB1)、柳田(1)、三谷(1)
8/17-18	定山渓天狗岳　イワナ沢出会い－右股－Ⅱ峰基部まで往復	L川島(OB1)、SL安藤(3)、滝(2)、小川(2)、寺内(2)
8/19-24	天人峡－ポンカウンナイ－トムラウシ山－ヒサゴ沼－早稲田の沢－地獄谷－五色沼－林道－国道	L村(OB1)、SL冨田(OB1)、柳田(1)、三谷(1)
9/1-5	伊那大島－塩川小屋－烏帽子－中岳－荒川小屋－赤石岳－兎岳－光岳－畑薙大吊橋	L一迫(4)、SL川端(3)、松村(2)、辻(2)
9/26	部員総会(ロッジ)	

71 season　1982(昭和57)年10月～1983(昭和58)年9月

部長：吉岡義彦
主任：吉田美樹(3)
〔前期〕リーダー会議長：青黄靖(3)／リーダー会：宝多卓男(4)・小塚毅(4)・高山浩史(4)・一迫公利(4)・川端康弘(3)・梶本淳(3)・河合博司(3)／庶務：川端康弘(3)／会計：青黄靖(3)／記録：辻雅久(2)・内林克行(1)／装備：梶本淳(3)・秋山幸久(2)・瀧龍一郎(2)・中島隆(1)・桜井一英(1)／医療：伴和弘(2)・柳田圭太(1)・中村幸一(1)／小屋：小川洋(2)／部室・図書・歌唱：松本貴之(2)・三谷修司(1)／体育会・トレーニング：河合博司(3)・寺内聡(2)・伴和弘(2)／プリント：久能弘道(2)・永井貴志(1)・佐田朋存(1)／むいね：宝多卓男(4)・梶本淳(3)・吉田美樹(3)・松本貴之(2)／ロッジ：梶本淳(3)／バイト：松村俊和(2)
〔後期〕リーダー会議長：青黄靖(4)／リーダー会：河合博司(4・川端康弘(4)・吉田美樹(4)・秋山幸久(3)・久能弘道(3)・滝瀧一郎(3)・松村俊和(3)／庶務：松本貴之(3)／会計：滝龍一郎(3)／記録：辻雅久(3)・松村俊和(3)／装備：梶本淳(4)・佐田朋存(2)・中島隆(2)・柳田圭太(2)／医療：伴和弘(3)・中村幸一(2)／小屋：河合博司(4)／部室・図書・歌唱：三谷修司(2)／体育会・トレーニング：寺内聡(3)・久能弘道(3)／むいね：梶本淳(4)・吉田美樹(4)・松本貴之(3)・松村俊和(3)／ロッジ：梶本淳(4)

10/1-2	天人峡－ポンカウンナイ沢－化雲岳－天人峡	L青黄(3)、SL小川(2)、川端(2)、河合(3)、吉田(3)
10/2-3	山部駅－ユーフレ小屋－芦別岳－山部駅	L三谷(1)、SL中村(1)、中島(1)、柳田(1)
10/10-11	空沼登山口－空沼小屋－空沼岳－札幌岳－冷水小屋－定山渓	L柳田(1)、SL佐田(1)、中島(1)、三谷(1)
10/11	登山口－ローソク岩取付－定山渓天狗岳－登山口	L川端(3)、SL秋山(2)、河合(3)、青黄(3)
11/19-23	旭岳初滑り(1年目班)	L小塚(4)、SL日野(4)、桜井(1)、柳田(1)、永井(1) L川端(3)SL安藤(3)、島(1)内林(1)、中村(1) L加藤(OB3)、SL青黄(3)、田川(1)、佐田(1)、三谷(1)
11/20-23	旭岳初滑り(2年目班)	L宝多(4)、SL河合(3)、辻(2)、伴(2)、久能(2) L一迫(4)、SL梶本(3)、秋山(2)、寺内(2)、松本(2) L高山(4)、SL吉田(3)、松村(2)、滝(2)、小川(2)
12/3-12	十勝新人合宿1班：吹上温泉－ホコ岩－D尾根－ナマコ尾根－三段山－白金温泉	L小塚(4)、SL梶本(3)、秋山(2)、伴和(2)、辻(2)
12/4-13	十勝新人合宿2班：吹上温泉－ガケ尾根－十勝岳温泉－D尾根－富良野岳－十勝岳温泉－白金温泉	L一迫(4)、SL青黄(3)、小川(2)、松村(2)、寺内(2)
12/8-14	十勝新人合宿3班：吹上温泉－ホコ岩－富良野岳－OP尾根－白金温泉	L宝多(4)、SL川端(3)、松本(2)、久能(2)、滝(2)
12/12-19	無意根新人合宿	CL高山(4)、日野(4)、吉田(3)、河合(3)、加藤(OB3)、三宅(OB1)、安藤(3)、内林(1)、桜井(1)、中村(1)、中島(1)、柳田(1)、佐田(1)、三谷(1)
12/26-29	層雲峡－ニセイノシキオマップ川－ニセイカウシュッペ山－清川	L一迫(4)、SL青黄(3)、伴(2)、小川(2)
12/26-1/5	十勝三股－杉沢－ニペソツ山－石狩岳－沼の原－五色ヶ原－下山	LL加藤(OB3)、SL安藤(3)、、松本(2)、辻(2)、滝(2)
12/27-1/2	富良野－布礼別－トウヤスベ－三峰－富良野岳－下ホロカメットク山－	L三宅(OB1)、SL梶本(3)、中島(1)、柳田(1)、三谷(1)
12/28-31	層雲峡－リクマン別－凌雲岳北尾根－黒岳－層雲峡	L小塚(4)、SL川端(3)、秋山(2)、松村(2)
12/28-1/6	新得－トムラウシ温泉－西沢－トムラウシ山－西沢－曙橋	L日野(4)、SL川島(OB1)、内林(1)、中村(1)
12/30-1/3	日高町－ペンケヌシ－日高町	L宝多(4)、SL吉田(3)、久能(2)、寺内(2)
1/1-13	日高小屋－十勝幌尻岳－札内岳－ナメワッカ岳－札内岳－トッタベツヒュッテ	L一迫(4)、SL青黄(3)、伴(2)、小川(2)
1/4-12	ペテガリ山荘－ベツピリガイ－J.P.－神威岳－中の岳－ペテガリ山荘	L小塚(4)、SL川端(3)、松村(2)、秋山(2)
1/4-12	美瑛青年の家－美瑛岳－美瑛富士－オプタテシケ山－二子沼－二股事務所	L高山(4)、SL河合(3)、桜井(1)、佐田(1)
2/25	登山口－八剣山－登山口	L一迫(4)、SL川端(3)
2/25-28	白井小屋－950mポコ手前－白井小屋	L松村(2)、SL寺内(2)、三谷(1)、中村(1)、辻(2)
2/26-3/1	西河－幌内府川余別岳－積丹岳－登山口	L吉田(3)、SL滝(2)、久能(2)、桜井(1)
2/27-28	林道入口－銀嶺荘－春香山－銀嶺荘－スキー場	L秋山(2)、SL松本(2)、伴(2)、中島(1)、小川(2)
3/3-5	ニセコ強化：新見温泉－前目国内岳－シャクナゲ岳－チセヌプリ－五色温泉－ニセコアンヌプリ－ワイスホルン－スキー場	Ob青黄(3)、中村(1)、柳田(1)
3/3-5	ニセコ強化：岩内－岩内岳－目国内岳－新見温泉－白樺岳－チセヌプリ－五色温泉－ニセコアンヌプリ－山田温泉	Ob川端(3)、佐田(1)、内林(1)
3/4-6	第7回むいねツアー(一般対象)	CL梶本(3)ほかスタッフ17名、一般参加者20名
3/10-11	山部－18線沢－夫婦岩コル－大キレット－18線沢－山部	L高山(4)、SL梶本(3)、久能(2)、秋山(2)、河合(3)
3/10-17	美瑛青年の家－オプタテシケ山－白金温泉	L小塚(4)、SL吉田(3)、柳田(1)、三谷(1)、佐田(1)
3/14-22	御影－芽室岳－雪盛山－ルベシベ－ピパイロ岳－伏見岳－伏見合小屋	L日野(4)、SL川端(3)、中島(1)
3/19-20	望岳台－ナマコ尾根－三段山－望岳台	L一迫(4)、SL小塚(4)、辻(2)、滝(2)、吉田(3)

3/19-29	湯折沢－広河原小屋－赤石岳－避難小屋－百間平－大沢岳－兎岳－避難小屋－大沢渡分岐－林道－しらびそ峠－程野お池	L古川(4)、SL安藤(3)、寺内(2)
3/24-4/5	神岡－寺地山東コル－太郎平小屋－薬師岳－太郎平小屋－五郎岳－五郎小屋－双六小屋－槍岳山荘－槍ケ岳－一の俣小屋－上高地	L宝多(4)、SL青黄(3)、伴(2)、松本(2)、松村(2)
3/26-4/4	札内ヒュッテ－二股－コイカクシュサツナイ岳－ピラミッド－カムイエクウチカウシ山－春別岳－J.P.－札内岳－トッタベツヒュッテ	L一迫(4)、SL小塚(4)、川端(3)、辻(2)、滝(2)
4/29-5/4	林道－300m小屋－第2九助川源頭－東狩場山－狩場山－前山－九助川源頭－フモンナイ－第2九助川－東狩場山－狩場山－須築	L河合(4)、SL久能(3)、佐田(2)、柳田(2)
4/29-5/5	無意根GW合宿	CL青黄(4)、梶本(4)、秋山(3)、滝(3)、松本(3)、辻(3)、嶺田(1)、笛木(1)、伊藤(1)、石川(1)、永井(1)、谷口(1)、出口(1)、竹本(1)、川合(1)、上野(1)
4/29-5/6	新冠ユートピア牧場－幌尻岳－七つ沼－戸蔦別岳－北戸蔦別岳－ピパイロ岳－伏美岳－伏見台小屋	L吉田(4)、SL松村(3)、中島(2)、中村(2)
4/29-5/8	戸蔦別川－エサオマン出合－エサオマントッタベツ岳－J.P.－春別岳－カムイエクウチカウシ山－J.P.－札内岳－トッタベツヒュッテ	L川端(4)、SL伴(3)、寺内(3)、三谷(2)
5/29-6/4	(サマースキー第1班)勇駒別－天女ヶ原－石室－金庫岩－BC(－旭岳－カワノメ－チベトン)(－北大スロープ)(－北鎮－虫の沢－リクマン－天皇－ハタコロ)(－旭岳－熊－RR)－石室－下山	L松本(3)、SL三谷(2)、伊藤(1)、石川(1)
5/29-6/4	(サマースキー第2班)勇駒別－天女ヶ原－石室－金庫岩－BC(－旭岳－チベトン－RR)(－北大スロープ)(－北鎮－虫の沢－リクマン－天皇－ハタコロ)(－RR－メダカ)－石室－下山	L秋山(3)、SL柳田(2)、松村(3)、伴弘和(3)、竹本(1)
5/29-6/4	(サマースキー第3班)勇駒別－天女ヶ原－石室－金庫岩－BC(－旭岳－チベトン－RR)－北大スロープ－AC(－愛別北－ハタコロ)－旭岳－メダカBC－石室－下山	L小川(3)、SL中村(2)、滝(3)、永井(1)、川合(1)
5/29-6/4	(サマースキー第4班)勇駒別－天女ヶ原－石室－金庫岩－BC(－大塚－熊－チベトン)(－北鎮－北布－ハタコロ)(－旭岳RR－ゴリラ－)－石室－下山	L久能(3)、SL佐田(2)、笛木(1)、上野(1)、寺内(2)
5/29-6/4	(サマースキー第5班)勇駒別－天女ヶ原－石室－金庫岩－BC(－旭岳－チベトン－ゴリラ)(－北大スロープ)(北鎮－比布－旭岳)(－旭岳－お鉢－RR)－石室－下山	L辻(3)、SL中島(2)、出口(1)、嶺田(1)
6/1-4	(サマースキー四年目P)勇駒別－石室－金庫岩－温泉沢AC(－比布－愛別)－旭岳－RR－石室－下山	L梶本(4)、SL吉田(4)、河合(4)、吉岡部長、山崎
6/2-6/4	(サマースキー四年目P)勇駒別－石室－金庫岩－BC(－旭岳)－石室－下山	L青黄(4)、、SL川端(4)、安藤(4)、一迫(OB1)
6/25-26	薄別－白水沢－無意根山－無意根小屋－薄別	L梶本(4)、SL青黄(4)、川端(4)、内林(2) L松村(3)、SL中村(2)、嶺田(1) L寺内(3)、SL中島(2)、永井(1) L小川(3)、SL久能(3)、笛木(1)
7/1-2	薄別－白水沢－無意根山－無意根小屋－薄別	L吉田(4)、河合(4)、佐田(2)
7/2	平和の滝－520m(流木の滝上)引き返し	L松村(3)、SL滝(3)、永井(1)、伊藤(1)
7/2	平和の滝－600m二股－引き返し	L伴(3)、SL小川(3)、松本(3)、石川(1)、笛木(1)
7/2-3	丸駒温泉－恵庭岳滝沢－丸駒温泉	L青黄(4)、SL辻(3)、中村(2)
7/2-3	蘭越－上里－ペリポート－パンケメクンナイ川－550m二股－目国内岳－親見温泉	L川端(4)、SL秋山(3)、中島(2)、佐田(2)、柳田(2)
7/3	札幌－発寒川600m二股－下山	L寺内(3)、SL三谷(2)、嶺田(1)、出口(1)、上野(1)、竹本(1)
7/9-10	林道終点－古平川下二股川	L青黄(4)、SL辻(3)、秋山(3)、中村(2)
7/16	定山渓－木挽沢－神威岳－定山渓	L吉田(4)、SL久能(3)、三谷(2)、佐田(2)
7/16-17	林道終点－札的沢－大滝下－林道終点－大滝－六の沢出合－林道終点	L松村(3)、SL滝(3)、伊藤(1)、永井(1)
7/17	丸駒温泉－恵庭岳滝沢－丸駒温泉	L辻(3)、SL松本(3)、小川(3)、中島(2)
7/19-20	天人峡－ポンカウンナイ沢－天人峡	L辻(3)、SL伴(3)
7/20-23	大平山ヒヤミズ沢－日陰の淵－大平山直登沢－湯の沢川乗越コル－湯の沢川への出合－大平川との出合－林道	L青黄(4)、SL川端(4)、中島(2)、中村(2)
7/22-23	賀老駐車場－千走川－大滝－狩場山－賀老	L松本(3)、SL小川(3)、嶺田(1)、出口(1)
7/25-27	余別－余別川－三段の滝－51点沢出会－駐車場	L川端(4)、SL秋山(3)、柳田(2)、中島(2)
7/26	丸駒温泉－恵庭岳滝沢－丸駒温泉	L吉田(4)、SL久能(3)、三谷(2)、佐田(2)、伴(3)
7/26-29	ペテガリ山荘－中ノ岳直登沢出合－ペテガリ岳－C沢－ペテガリ山荘	L青黄(4)、SL辻(3)、中村(2)
7/26-30	余別林道－余別川－三段の滝－珊内岳－二股－珊内村	L吉田(4)、SL久能(3)、三谷(2)、佐田(2)
7/31-8/7	幌尻山荘－幌尻岳－七つ沼－エサオマントッタベツ岳－10の沢－記念別沢－札内岳－戸蔦川	L松村(3)、SL滝(3)、伊藤(1)、永井(1)
8/1-2	望岳橋－漁入の沢－漁岳－漁入の沢	L梶本(4)、SL寺内(3)、竹本(1)、川合(1)
8/1-7	札内川八の沢－カムイエクウチカウシ山－エサオマントッタベツ岳－七つ沼カール－トツタベツ岳－戸蔦別川	L河合(4)、SL伴(3)、上野(1)、石川(1)、笛木(1)
8/2-6	新冠川－ポンベツナメワシカ北東面直登沢－ナメワツカ岳－カムイエクウチカウシ沢出合－カムイエクウチカウシ山－八の沢－札内川	L青黄(4)、SL辻(3)、中村(2)
8/2-13	ペテガリ山荘－BC沢出合－ペテガリ岳－ペテガリ山荘－ペテガリ西沢出合－1839峰－サツシビチヤリ沢出合－ペテガリ岳－追悼現場－中の川三股－中の川	L川端(4)、SL秋山(3)、柳田(2)、中島(2)
8/3-8	広尾－ピロロ岳－二股－楽古岳－十勝岳－ニオベツ川左股－野塚岳－大庭牧場	L吉田(4)、SL久能(3)、三谷(2)、佐田(2)
8/4-8	幌尻山荘－北カール－幌尻岳－上二股－エサオマントッタベツ岳－戸蔦別川	L梶本(4)、SL寺内(3)、竹本(1)、川合(1)
8/9-14	戸蔦別川－エサオマントッタベツ川－札内岳－十の沢－札内川－カムイエクウチカウシ山－札内川	L松本(3)、SL小川(3)、嶺田(1)、出口(1)
8/28-9/5	岩尾別温泉－羅臼平－二ツ池－硫黄下山口－ルシヤ川河口－ポンルシャ川出合－ルサふ化場－ウナキベツ川－モイレウシ河口－念仏岩－知床岬－文吉湾－ウトロ(11：50)	L河合(4)、SL佐田(2)、伊藤(1)、川合(1)、石川(1)
9/28-10/3	ペテガリ山荘－ペテガリ－Cカール－ルベツネ－1839峰－ヤオロマップ－コイカクシュサツナイ夏尾根－札内川	L一迫(4)、SL日野(4)、滝(2)、松村(2)
	部員総会	

72 season　1983（昭和58）年10月～1984（昭和59）年9月

部長：吉岡義彦
主任：松本貴之（3）
〔前期〕リーダー会議長：松村俊和（3）／リーダー会：青黄靖（4）・梶本淳（4）・川端康弘（4）・滝瀧一郎（3）・辻雅久（3）・伴和弘（3）・松本貴之（3）／庶務：滝瀧一郎（3）／会計：伴和弘（3）／記録：松村俊和（3）・永井貴志（1）・笛木正一（1）／装備：辻雅久（3）／医療：田川丹（1）・嶺田浩（1）／小屋：久能弘道（3）／部室・図書・歌唱：石川正敬（1）／体育会（トレーニング）：中島隆（2）・伊藤剛（1）／プリント：中村幸一（2）・出口雅文（1）／むいね：梶本淳（4）・吉田美樹（4）・松本貴之（3）・松村俊和（3）・三谷修司（2）／バイト：三谷修司（2）
〔後期〕リーダー会議長：松村俊和（4）／庶務：田川丹（2）／会計：伴和弘（4）／記録：中島隆（3）・松村俊和（4）・川合剛（3）・永井貴志（1）・出口雅文（2）／装備：中村幸一（3）・滝龍一郎（4）・石川正敬（2）・出口雅文（2）・竹本泰朗（1）／医療：嶺田浩（2）・竹本泰朗（1）／小屋：久能弘道（4）・辻雅久（4）／部室・図書・歌唱：伊藤剛（2）／体育会（トレーニング）：伊藤剛（2）・上野勝利（1）／むいね：松村俊和（4）・松本貴之（4）

10/7-9	札幌五色温泉－イワオヌプリ－神仙沼－長沼－チセヌプリ－ニトヌプリ－五色温泉	L嶺田（1）、SL石川（1）、上野勝（1）、竹本（1）
10/21	登山口－樽前山外輪山－登山口	LJ川合（1）、1SL伊藤（1）、出口（1）
10/23	登山口－空沼小屋－空沼岳－登山口（11：50）－下山（14：30）	L上野（1）、SL永井（1）、出口（1）、川合（1）
11/20-23	旭岳初滑り（1年目班）：旭岳温泉－天人ケ原BC－石室周辺	L吉田（4）、SL松本（3）、石川（1）、嶺田（1）、伊藤（1） L青黄（4）、SL秋山（3）、川合（1）、竹本（1） L松村（3）、SL滝（3）、上野（1）、出口（1） LJ川端（4）、SL久能（3）、田川（1）、永井（1）
11/20-23	旭岳初滑り（2年目班）：旭岳温泉－天人ケ原BC－石室周辺	L梶本（4）、SL辻（3）、中島（2）、中村（2）
11/24-27	旭岳初滑り（2年目班）：旭岳温泉－天人ケ原BC－石室周辺	L河合（4）、SL伴（3）（二年目記載なし）
12/3-9	望岳台－OP尾根－上ホロ－十勝岳－美瑛岳－涸沢川橋－ベベツ北西尾根－白金温泉	L青黄（4）、SL松村（3）、中島（2）
12/4-11	無意根新人合宿	CL河合（4）、梶本（4）、伴（3）、辻（3）、久能（3）、秋山（3）、加藤（OB4）、石川（1）、伊藤（1）、上野（1）、川合（1）、竹本（1）、出口（1）、永井（1）、嶺田（1）、田川（2）
12/5-11	十勝岳温泉－北尾根－富良野岳－D尾根－十勝岳温泉－三段山－白金温泉	L吉田（4）、SL滝（3）、柳田（2）、中村（2）
12/9-11	十勝岳温泉－八ツ手岩尾根－温泉BC－八ツ手岩取り付き－Z－十勝岳温泉－ナマコ尾根取り付きOP尾根－三段山－十勝岳温泉	LJ川端（4）、SL松本（3）、小塚（5）
12/25-1/2	富良野－布礼別－トウヤウスベ山－三峰山標高尾根－富良野岳－三峰山－下ホロカメットク山－林道－曙橋	L河合（4）、SL松村（3）、永井（1）、伊藤（1）
12/26-1/2	北見滝ノ上－天塩富士北東尾根－天塩富士－ミタラシヨコツ川上二股－天塩岳東尾根－天塩岳－前天塩岳－国道－浮島峠－チトカニウシ山手前	L梶本（4）、SL伴（3）、竹本（1）、石川（1）
12/28-1/5	上川－リクマン別－凌雲化尾根－雲・北鎮コル－北鎮岳－旭・後旭のコル－忠別石室－トムラウシ山－前トムラウシ－林道－トムラウシ温泉	L青黄（4）、SL秋山（3）、滝（3）、中島（2）
12/29-1/6	日高町－パンケヌーシ川－ペンケヌーシ標高尾根－ペンケヌーシ岳－パンケヌーシ川二股－芽室岳－北電取水場－チロロ岳－パンケヌーシ林道－日高町下山	吉田（4）、辻（3）、川合（1）
12/30-1/5	美瑛－大雪青年の家－美瑛岳北西尾根－美瑛岳－美瑛富士－オプタテシケ山－西尾根－（SL骨折）－望岳橋－青年の家	LJ川島（OB2）、SL富田（OB2）、嶺田（1）、田川（2）、山本（OB2）
12/31-1/6	糖平－糖平川林道－ウペペサンケ山－丸山－幌加下山	LJ川端（4）、SL久能（3）、松本（3）、中村（2）
3/2-4	第8回むいねツアー（一般対象）	CL辻（3）ほかスタッフ7名、一般参加者20名
3/2-5	ニセコ強化：岩内スキー場－岩内岳－目国内岳－前目国内岳－新見温泉－チセヌプリ－ニトヌプリ－五色温泉－ニセコアンヌプリ－ンヌプリスキー場下山	L松村（3）、川合（1）、永井（1）、伊藤（1）
3/3-5	ニセコ強化：岩内スキー場－岩内岳－目国内岳－前目国内岳－新見温泉－チセヌプリ－ニトヌプリ－五色温泉－ヒラフスキー場下山	L滝（3）、上野（1）、石川（1）、嶺田（1）
3/12-13	羊蹄山自然の家－1400mで00引き返し－下山	L吉田（4）、SL松村（3）、田川（2）、出口（1）、上野（1）
3/16-18	羊蹄自然の家－1300mで引き返し－外輪引き返し－下山	L吉田（4）、SL伴（3）、竹本（1）、川合（1）、石川（1）
3/19-22	山部－18線沢入口－芦別岳北尾根－キレツト（9：00）－山部駅	L青黄（4）、SL滝（3）、上野（1）、出口（1）、伊藤（1）
3/22-4/1	白馬村－八方池山荘－唐松山荘－五竜山荘（16：00）－五竜岳－キレツト小屋－鹿島槍北峰・南峰のコル－冷池山荘－爺ケ岳北峰－大町温泉郷下山	L梶本（4）、SL松本（3）、中島（2）、中村（2）
3/24-30	静内－ペテガリ山荘－西尾根－ペテガリ岳－Cカールでスキー－ルベツネ山－ペテガリ岳－ペテガリ山荘－静内下山	LJ川端（4）、SL小塚（5）、田川（2）、永井（1）、嶺田（1）
3/26-4/3	ロッヂ－日勝峠－ペケレベツ－芽室岳－雪盛山－ルベシベ分岐－ピパイロ分岐－ピパイロ岳－ピパイロ分岐－8の沢出合－富良牛橋	L青黄（4）、SL滝（3）、上野（1）、出口（1）、伊藤（1）
3/31-4/10	岐阜－美濃白鳥－上在所－神鳩の宮避難小屋－一の峰－三の峰－別山－千振尾根避難小屋－千振尾根－千振小屋－室堂－御前峰－室堂－七倉山－新岩間温泉－三ツ又発電所－里野スキー場下山	L吉田（4）、SL伴（3）、竹本（1）、川合（1）
4/3-10	青森－酸ケ湯温泉－傘松峠－乗鞍岳－傘松峠－酸ケ湯温泉－傘松峠－仙人岱ヒュッテ－峠－1380m峰－峠－仙人岱ヒュッテ－酸ケ湯温泉下山	L河合（4）、SL松村（3）、石川（1）、田川（2）
4/29-5/2	登山口－暑寒別荘－暑寒別岳－下山	L松本（4）、SL辻（4）、石川（2）、堀（OB3）、内林（2）
4/29-5/3	札内ヒュッテ－コイカク夏尾根－コイカクシュ札内岳－ヤオロマップ山－コイカクシュ札内岳－夏尾根－札内ヒュッテ	L滝（4）、SL田川（3）、上野（2）、永井（2）、出口（2）
4/29-5/5	鴛泊－長官山－利尻岳－鴛泊	L松村（4）、SL中島（3）、嶺田（2）、竹本（2）
5/12-13	山部－ユーフレ小屋－芦別岳－ユーフレ小屋－登山口	L辻（4）、SL中島（3）、田川（3）、竹本（2）、内林（田川と同期、途中退部）
5/26-27	美国登山口－積丹岳－美国下山	L田川（3）、SL石川（2）、竹本（2）、内林（　）
6/3-9	（サマースキー第1班）旭岳温泉－天人ケ原－石室－金庫岩－BC－金庫岩－旭岳P－東－チベトン－カワノメ－AC（－愛別北－リクマン－天皇－ハタコロ）－コル－BC（－メダカ－ポンポコ）－旭岳P－東－RR－メダカ－）－石室－盤の沢－旭岳温泉	L田川（3）、SL石川（2）、黒岡（1）、秋本（1）、安居（1）
6/3-9	（サマースキー第2班）旭岳温泉－手前の坂の前－石室－金庫岩－BC－デポ地－旭岳P－東－チベトン－カワノメ－AC（－北鎮－白鳥－虫の沢－リクマン－天皇－比布－ハタコロ）－旭岳後旭岳コル－BC（－メダカ）－石室－盤の沢－下山	L中村（3）、SL上野（2）、伊藤（2）、仙石（1）、脇田（1）

6/3-9	(サマースキー第3班)旭岳温泉－石室－金庫岩－BC(－旭岳P－北東－RR下－メダカ下－北大スロープ－)(－コル－温泉沢－北鎮－白鳥下－虫の沢－下二股－)(コル－温泉沢－ハタコロ上－渡渉点－カワノメ下－)(－メダカ－北大スロープ－)－石室－盤の沢－旭岳温泉下山	L中島(3)、SL嶺田(2)、百瀬(1)、高山(1)、西沢(1)
6/3-9	(サマースキー第4班)旭岳温泉－天人ケ原－石室－金庫岩－BC(－旭岳P－北東斜面下－)(コル－カワノメ下－温泉沢－北鎮P－白鳥下－渡渉点－カワノメ下－後旭岳コル－)(－カワノメ下－ハタコロ上－渡渉点－旭岳P－)(－旭岳P－RR下－メダカ－)－石室－盤の沢－旭岳温泉下山	L辻(4)、SL竹本(2)、渡野辺(1)、南家(1)、出口(2)
6/7-9	(サマースキー第5班)旭岳温泉－姿見－金庫岩－BC(－旭岳P－東－ゴリラ－メダカ－北大スロープ－)－石室－盤の沢－旭岳温泉下山	L松村(4)、SL松本(4)、伴(4)、永井(2)、吉田(OB1)
6/23-24	薄別－白水沢－無意根岳－小屋－薄別下山	L松本(4)、SL永井(2)、南家(1)、百瀬(1)、梶本(OB1) L辻(4)、SL上野(2)、仙石(1)、西沢(1)
6/30-7/1	薄別－白水沢－無意根岳－小屋－薄別下山	L松村(4)、SL嶺田(2)、田川(3)、高山(1) L中島(3)、SL伊藤(2)、脇田(1)、渡野辺(1)
7/4	丸駒温泉－恵庭岳滝沢－丸駒温泉	L松本(4)、SL梶本(5)、竹本(2)、嶺田(2)、一迫(OB2)
7/5	薄別－白水沢－函引き返し－薄別	L伴(4)、SL出口(2)、黒岡(1)、秋本(1)
7/8	丸駒温泉－恵庭岳滝沢－丸駒温泉	L松村(4)、SL中島(3)、伊藤(2)、出口(2)
7/14-16	大平川ヒヤミズ沢川－日陰の淵－湯の沢出合－工事現場下山	L松村(4)、SL中島(3)、伊藤(2)、出口(2)、一迫(OB2)
7/21	発寒川	L中村(3)、SL高山(1)、脇田(1)、仙石(1)、百瀬(1)、内林(OB2)
7/22	丸駒温泉－恵庭岳滝沢－丸駒温泉	L伴(4)、SL辻(4)、上野(2)、永井(2)、石川(2)
7/24-25	奥漁橋－漁川－720m二股で引き返し	L吉田(5)、SL松本(4)、渡野辺(1)、 安居(1)、田川(3)
7/28-30	大平川ヒヤミズ沢川－日陰の淵－乗っ越しの沢出合－湯の沢川出合－飯場	L伴(4)、SL辻(4)、上野(2)、永井(2)、石川(2)
7/31-8/4	幌尻山荘－幌尻北カール－幌尻岳－七つ沼カール－新冠川二股－カムイ直登沢出合－エサオマントッタベツ岳－二股－戸蔦別川－林道－八千代下山	L中村(3)、SL高山(6)、脇田(1)、百瀬(1)、仙石(1)
8/6-7	札幌－上里－ヘリポート－パンケメクンナイ川－大滝－ヘリポート	L中村(3)、SL三谷(3)、南家(1)、黒岡(1)、西沢(1)
8/6-12	札幌－林道－大平川ヒヤミズ沢川－日影の淵－コル－林道－江の島海岸－須築川河口－ヤカンの底－下山	L松本(4)、SL梶本(OB1、嶺田(2)、竹本(2)
8/8-12	新冠ユートピア牧場－幌尻山荘－幌尻北カール－幌尻岳－新冠川二股－カムイ直登沢出合－エサオマントッタベツ岳－エサオマントッタベツ川－林道－八千代下山	L吉田(5)、SL中島(3)、渡野辺(1)、安居(1)、田川(3)
8/9-15	林道終点－ヌピナイツ川左股豊似直登沢出合－豊似岳N峰－S峰－南カール－林道終点－日高幌別下山	L伴(4)、SL一迫(6)、石川(2)、上野(2)、永井(2)
8/10-14	帯広－札内川8の沢－カムイエクウチカウシ山－十の沢カール－記念沢－札内岳－十の沢－札内川	L中村(3)、SL松村(4)、南家(1)、黒岡(1)、西沢(1)
8/23-31	岩尾別－羅臼平－羅臼岳－羅臼平－二ツ池－硫黄岳－カムイワッカ－ルシャ河口－ルサ河口－相泊－カモイウンペ河口－観音岩－モイレウシ河口－船泊－かぶと岩－知床岬－ペキンの鼻－カモイウンペ－相泊	L石川(2)、SL永井(2)、安井(2)、仙石(1)
8/24-30	夜叉神峠－南御室小屋－薬師岳－観音岳－鳳凰小屋－早川小屋－仙水峠－北沢小屋－駒津岳－駒ケ岳－北沢小屋－北沢峠－仙丈小屋－仙丈岳－伊那荒倉－両俣－北岳－北岳稜線小屋－間ノ岳－農鳥岳－熊の平小屋－北荒川岳－塩見岳－塩見合－塩川小屋－鹿塩下山	L上野(2)、SL出口(2)、高山(1)、黒岡(1)
9/28	丸駒温泉－恵庭岳滝沢－丸駒温泉	L伊藤(2)、SL田川(3)
	部員総会	

73 season　1984(昭和59)年10月～1985(昭和60)年9月

部長：吉岡義彦

主任：田川丹(3)

〔前期〕リーダー会議長：中村幸一(3)／庶務：中村幸一(3)／会計：中島隆(3)／記録：中島隆(3)・竹本泰朗(2)・永井貴志(2)・秋本恒志(1)・百瀬今朝尋(1)・仙石克洋(1)／装備：田川丹(3)・石川正敬(2)・渡野邊雅道(1)・黒岡秀樹(1)／医療：伊藤剛(2)・高山治(1)／小屋：上野勝利(2)／部室・図書・歌唱：安居徹(1)／むいね：松村俊和(4)／体育会：出口雅文(2)・南家弘毅(1)

〔後期〕リーダー会議長：中村幸一(4)／庶務：上野勝利(3)／会計：伊藤剛(3)／記録：出口雅文(3)・永井貴志(3)・西沢孝史(2)・黒岡秀樹(2)／装備：竹本泰朗(3)・石川正敬(3)・百瀬今朝尋(2)・脇田政嘉(1)／医療：高山治(2)・渡野邊雅道(2)／小屋：上野勝利(3)・秋本恒志(2)／部室・図書・歌唱：安居徹(2)／むいね：松村俊和(OB1)・松本貴之(2)／体育会：南家弘毅(2)・川崎卓也(2)

11/21-25	旭岳初滑り(1年目班)	L中島(3)、SL一迫(OB2)、渡野邊(1)、仙石(1) L中村(3)、SL梶本(OB1)、高山(1)、黒岡(1) L松本(4)、SL川端(OB1)、百瀬(1)、松本(1)、安居(1) L滝(4)、SL小塚(OB2)、川崎(1)、南家(1)、西沢(1)
11/21-25	旭岳初滑り(2年目班)	L松村(4)、SL田川(3)、永井(2)、上野(2)、竹本(2)
11/22-25	旭岳初滑り(2年目班)	L辻(4)、SL秋山(4)、石川(2)、伊藤(2)、出口(2)
11/29-12/6	十勝連峰新人合宿：十勝岳温泉下－富良野岳－OP尾根－白金温泉	L松村(4)、SL中村(3)、上野(2)、石川(2)、伊藤(2)
12/2-9	無意根新人合宿	CL滝(4)、辻(4)、伴(4)、中島(3)、秋本(1)、黒岡(1)、仙石(1)、高山(1)、南家(1)、西沢(1)、百瀬(1)、安居徹(1)、渡野辺(1)
12/4-10	十勝新人合宿：白金温泉－BC－三段山－上ホロ小屋－宮様スロープ上－第1Gap－白金温泉	メンバー名なし
12/26-1/2	美瑛－青年の家－美瑛富士－オプタテシケ東尾根－白金温泉	L秋山(4)、SL松本(4)、渡野邊(1)、西沢(1)、仙石(1)
12/27-1/3	曙橋－トムラウシ温泉－東尾根基部－五色尾根－トムラウシ岳－五色尾根－トムラウシ温泉－曙橋	L辻(4)、SL川端(OB1)、安居(1)、南家(1)、川崎(1)
12/27-1/4	パンケヌーシ林道－パンケヌーシ川6の沢出合－ペンケヌーシ岳－9の沢林道終点－南東尾根引き返し－パンケヌーシ川二股－芽室岳－パンケヌーシ林道－千栄	L伴(4)、SL田川(3)、高山(1)、黒岡(1)、秋本(1)、内林(OB2)
12/31	八剣山	L松村(4)、SL中村(3)、石川(2)、伊藤(2)、上野(2)
1/2-10	荻伏－元浦川ショロカンベツ出合－460m二股－中間尾根－神威岳－中の岳－ペテガリ岳－ペテガリ山荘－静内	L松村(4)、SL中村(3)、伊藤(2)、上野(2)、石川(2)
1/7-15	新得－ヌプントムラウシ林道－ニペソツ西稜取付－北西稜－ニペソツ山－丸山－ウペペサンケ山－糠平分岐－糠平	L滝(4)、SL中島(3)、竹本(2)、永井(2)、出口(2)

2/26-27	銭函浄水場－銭函峠－銀嶺荘－春香山－春香山スキー場	L石川(2)、SL永井(2)、黒岡(1)、秋本(1)、高山(1)、渡野辺(1)
3/1-3	ニセコ強化合宿(蘭越－新見温泉－前目国内岳－目国内岳－新見温泉－白樺岳－ニトヌプリ－五色温泉－ニセコアンヌプリ－五色温泉－モイワスキー場)	L中村(3)、西沢(1)、安居(1)、黒岡(1)
3/2-4	ニセコ強化合宿(蘭越－新見温泉－前目国内岳－白樺岳－湯本温泉－大沼－湯本温泉)	L滝(4)、秋本(1)、南家(1)、仙石(1)
3/3-5	ニセコ強化合宿(岩内スキー場－岩内岳－目国内岳－前目国内岳－新見温泉－白樺岳－チセヌプリ－ニトヌプリ－五色温泉－ニセコアンヌプリ－山田温泉)	L田川(3)、高山(1)、百瀬(1) L松村(4)、渡野辺(1)、川崎(1)
3/3-5	第9回むいねツアー(一般対象)	メンバー名なし
3/15-21	中札内－札内ヒュッテ－コイカク夏道尾根－コイカクシュ札内岳－ヤオロマップ岳－ルベツネ山－ペテガリ岳－ペテガリ山荘－静内	L松本(4)、SL中島(3)、出口(2)、伊藤(2)
3/16-21	大庭牧場－豊似川左股中二股－北東尾根－トヨニ岳南峰－ピリカヌプリ－トヨニ岳南峰東尾根コル－大庭牧場	L伴(4)、SL中村(3)、上野(2)
3/20	(八剣山)養豚場－ピーク－養豚場	L松村(4)、SL田川(3)、石川(2)、永井(2)
3/22-29	中札内－札内ヒュッテ－夏尾根－コイカクシュ札内岳－ヤオロマップ岳－1839峰－－ニセヤオロマップ南面でスキー－コイカクシュ札内岳－夏尾根－札内ヒユツテ	L松村(4)、SL田川(3)、石川(2)、永井(2)
3/27-4/3	十勝岳温泉－L尾根－富良野岳－Hポイント－十勝岳温泉－ガケ尾根下－三段山十勝岳温泉	L辻(4)、SL川端(OB1)、西沢(1)、安居(1)、秋本(1)
4/2-6	旭岳温泉－天人ケ原－2段石庇－姿見石室－旭岳温泉	L滝(4)、松村(4)、SL田川(3)、中島(3)、南家(1)、百瀬(1)、高山(1)、仙石(1)、川崎(1)、渡野邊(1)、黒岡(1)
4/27-5/2	鴛泊－長官小屋－利尻岳－鴛泊	L田川(4)、SL出口(3)、秋本(2)、西沢(2)、高山(2)
4/27-5/3	青森－酸ケ湯－仙人袋ヒュッテ－小岳－高田大岳－仙人袋ヒュッテ－大岳－赤倉－大岳－仙人袋ヒュッテ－乗鞍－硫黄岳－仙人袋ヒュッテ－小岳－大岳－赤倉－仙人袋ヒュッテ－酸ケ湯	L中村(4)、SL永井(3)、仙石(2)、南家(2)、渡野辺(2)、川崎(2)
4/27-5/4	戸蔦別川－トツタベツヒュッテ－カムイ北東尾根－エサオマントッタベツ岳－J.P.－カムイエクウチカウシ山－J.P.－札内岳－八の沢出合－トッタベツヒュッテ	L中島(4)、SL上野(3)、百瀬(2)、安居(2)、黒岡(2)
4/28-5/4	1年目無意根小屋GW合宿	CL石川(3)、竹本(3)、伊藤(3)、青山(1)、阪谷(1)、菅野(1)、杉山(1)、北川(1)、宮川(1)、脇田(1)
5/11-12	京極登山口－羊蹄山－京極登山口	L中村(4)、SL秋本(2)、黒岡(2)、田川(4)
5/24-26	暑寒荘－夏道－暑寒別岳－暑寒荘	L伊藤(3)、SL出口(3)、川崎(2)、百瀬(2)、秋本(2)、中島(4)
5/25-26	山部キャンプ場－ユーフレ小屋－雲峰山手前で引き返し－キャンプ場	L田川(4)、SL上野(3)、仙石(2)、南家(2)
6/2-8	サマースキー(旭岳周辺)	L石川(3)、SL百瀬(2)、阪谷(1)、杉山(1) L伊藤(3)、SL渡野邊(2)、菅野(1)、川崎(2) L出口(3)、SL高山(2)、北川(1)、宮川(1) L竹本(3)、SL南家(2)、秋本(2)、青山(1) L上野(3)、SL黒岡(2)、安居(2)、脇田(1)
6/5-8	サマースキー(旭岳周辺)	L永井(3)、SL仙石(2)、田川(4)、中島(4)
6/22-23	薄別－白水沢－無意根山－無意根小屋－薄別	L出口(3)、SL西沢(2)、南家(2)、菅野(1) L上野(3)、SL仙石(2)、阪谷(1) L永井(3)、SL黒岡(2)、脇田(1)、北川(1) L竹本(3)、SL百瀬(2)、川崎卓(2)、杉山(1)
6/23	薄別－白水沢－薄別	L田川(4)、SL中島(4)、中村(4)
6/29-30	薄別－白水沢－無意根山－無意根小屋－薄別	L伊藤(3)、SL秋本(2)、宮川(1)、安居(2) L石川(3)、SL高山(2)、渡野辺(2)、青山(1)
7/5-6	丸駒温泉－恵庭岳滝沢－丸駒温泉	L中島(4)、SL上野(3)、黒岡(2)
7/6	平和の滝－発寒川－平和の滝	L出口(3)、SL田川(4)、杉山(1)、北川(1)、青山(1)
7/6-7	丸駒温泉－恵庭岳滝沢－丸駒温泉	L辻(OB1)、SL仙石(2)、安居(2)、南家(2)
7/7	丸駒温泉－恵庭岳滝沢－丸駒温泉	L伊藤(3)、SL出口(3)、高山(2)、渡野辺(2)
7/12-14	余別－余別川一の沢出合－9点沢出合－大滝下で引き返し－49点沢出合－林道	L出口(3)、SL田川(4)、杉山(1)、北川(1)、青山(1)
7/12-14	余別川林道－49点沢出合－大滝－三段の滝で下引返し－二の沢出合－林道	L辻(OB1)、SL竹本(3)、仙石(2)、安居(2)、南家(2)
7/13-14	丸駒温泉－恵庭岳滝沢－丸駒温泉	L中島(4)、SL上野(3)、加藤(OB5)、高山(2)、渡野辺(2)、黒岡(2) L中村(4)、SL石川(3)、秋本(2)、百瀬(2)、西沢(2)
7/18-19	豊羽－白井川－余市岳－豊羽	L永井(3)、SL上野(3)、川崎(2)、宮川(1)、阪谷(1)
7/19-21	浦河－楽古岳－ニクボシユメシユウベツノ沢－浦河	L中村(4)、SL石川(3)、秋本(2)、百瀬(2)、西沢(2)
7/21	丸駒温泉－恵庭岳滝沢－丸駒温泉	L伊藤(3)、SL川端(OB2)、脇田(1)、菅野(1)
7/25-8/1	層雲峡－黒岳－北鎮・白鳥スキー－旭・間宮のコル－周辺スキー－北海岳－忠別岳－忠別小屋－五色岳－化雲岳・北カールスキー－ワセダ沢スキー－トムラウシ岳－トムラウシ温泉	L百瀬(2)、SL川崎(2)、秋本(2)、宮川(1)
7/26	丸駒温泉－恵庭岳滝沢－丸駒温泉	L竹本(3)、SL南家(2)
7/28	平和の滝－発寒川－平和の滝	L伊藤(3)、SL仙石(2)、脇田(1)、菅野(1)
7/28-30	余別川一の沢出合－49点沢出－大滝－三段の滝で引き返し－余別町	L中島(4)、SL上野(3)、黒岡(2)、渡野辺(2)、高山(2)
7/31-8/5	額平川－幌尻山荘－幌尻岳－二股－エサオマン入りの沢－ペツピリガイ沢出合－奥新冠ダム(他パーティの負傷者救助のため、L・SLがダムまでおりた)－神威直登沢出合－神威岳－戸蔦別8の沢出合－戸蔦別岳－戸蔦別川	L伊藤(3)、SL川端(OB2)、脇田(1)、菅野(1)
8/1-3	ペテガリ山荘－ペテガリB沢－ペテガリ岳－ペテガリ山荘	L辻(OB1)、SL竹本(3)、仙石(2)、安居(2)、南家(2)
8/4	木挽沢入口－神威岳－木挽沢入口	L永井(3)、SL柳田(4)、阪谷(1)、宮川(1)、川崎(2)
8/5	丸駒温泉－恵庭岳滝沢－丸駒温泉	L中村(4)、SL石川(3)、秋本(2)、百瀬(2)、西沢(2)
8/6-9	ペテガリ山荘－ペテガリ沢－中ノ岳直登沢－中の岳－B沢－ペテガリ岳－山荘	L中島(4)、SL上野(3)、高山(2)、黒岡(2)
8/6-9	ペテガリ山荘－ペテガリB沢－ペテガリ岳－ペテガリ山荘	L中村(4)、SL石川(3)、秋本(2)、百瀬(2)、西沢(2)
8/9-12	春別直登沢－二股－ピリカヌプリ－ヌピナイ川上二股－ソエマツ岳－二股－林道	L辻(OB1)、SL竹本(3)、仙石(2)、安居(2)、南家(2)

8/10-16	札内川－記念沢－札内岳－エサオマントッタベツ沢－エサオマントッタベツ岳－十の沢－八の沢－カムイエクウチカウシ山－九の沢－札内川	L出口(3)、SL田川(4)、杉山(1)、北川(1)、青山(1)
8/12-15	ヌピナイ川林道終点－ヌピナイ川右股－ソエマツ岳－中の川林道	L中村(4)、SL石川(3)、秋本(2)、百瀬(2)、西沢(2)
8/13-18	ヌピナイ川林道－ヌピナイ川左股－トヨニ直登沢出合－トヨニ岳北峰－南峰－北東カール－南峰－北峰－ピリカ南東B沢－ピリカヌプリ－ヌピナイ川－尾田村	L中島(4)、SL上野(3)、高山(2)、黒岡(2)
8/16-24	上富良野－十勝岳－上ホロメカトク山－十勝岳－美瑛岳－美瑛富士－ヒサゴ沼合－五色岳－沼ノ原山分岐－石狩岳－天狗コル－ニペソツ岳－幌加温泉	L仙石(2)、SL南家(2)、脇田(1)
8/20-30	羅臼国設キャンプ場－羅臼岳－二ツ池－南岳－硫黄岳－ルシャふ化場－テツパンベツ川－知床岳－知床沼－モイレウ河口－念仏岩－岬－念仏岩－モイレウシ	L秋本(2)、SL西沢(2)、菅野(1)、杉山(1)、出口(3)
8/23-28	黒部ダム－ダンポ平－一ノ越－獅子岳－五色が原－薬師岳－黒部五郎岳－三俣蓮華岳－槍ケ岳－大キレット－洞沢岳－奥穂高岳－前穂高岳－上高地	L黒岡(2)、SL安居(2)、阪谷(1)、青山(1)
8/24-27	伊那－北沢峠－仙大岳－伊那荒倉岳－北岳－広河原	L高山(2)、SL渡野辺(2)、北川(1)
9/20-21	林道－ニセイノシキオマップ川－ニセカウP－砂防ダム－林道	L出口(3)、SL加藤(OB5)、秋本(2)、百瀬(2)
9/26-28	ヌピナイ川－ピリカヌプリ－ヌピナイ川林道	L竹本(3)、SL中島(4)、梅沢(OB17)
	部員総会	

74 season　1985(昭和60)年10月～1986(昭和61)年9月

部長：吉岡義彦
主任：上野勝利(3)
〔前期〕リーダー会議長：竹本泰朗(3)／庶務：石川正敬(3)／会計：伊藤剛(3)／記録：出口雅文(3)・南家広毅(2)・伊藤剛(3)・百瀬今朝尋(2)・脇田政嘉(1)／装備：永井貴志(3)・伊藤剛(3)・仙石克洋(1)・高山治(2)・青山知二(1)・菅野昌寛(1)／医療：渡野邊雅道(2)・北川正利(1)／小屋：秋本恒志(2)・阪谷聡(1)／部室：杉山裕之(1)／体育会：川崎卓哉(2)・安居徹(2)
〔後期〕リーダー会議長：竹本泰朗(4)／庶務：秋本恒志(3)／会計：安居徹(3)／記録：出口雅文(4)・川崎卓哉(3)・岡裕史(2)・寺山元(2)・脇田政嘉(2)／装備：伊藤剛(4)・高山治(3)・脇田昌嘉(2)・杉山裕之(2)・阪谷聡(2)／医療：高山治(3)・南家弘毅(3)・北川正利(2)／小屋：秋本恒志(3)・阪谷聡(2)／部室：北川正利(2)／体育会：寺山元(2)

10/5-6	比羅夫登山口－羊蹄山避難小屋－羊蹄山－半月湖－登山口	L川崎(2)、SL北川(1)、脇田(1)
10/6-7	五色温泉－ニセコアンヌプリ－五色温泉－イワオヌプリ－大沼－神仙沼－長沼－チセヌプリ－ニトヌプリ－五色温泉	L秋本(1)、SL高山(1)、黒岡(1)、南家(1)
10/6-7	雨竜町－南暑寒荘－雨竜沼－南暑寒岳－南暑寒荘	L百瀬(1)、SL仙石(1)、川崎(1)
10/18-20	五色温泉－イワオヌプリ－大沼－神仙沼－長沼－チセヌプリ－湯本温泉－五色温泉	L脇田(1)、SL阪谷(1)、菅野(1)、寺山(1)
10/19-20	南暑寒荘－小屋－雨竜沼湿原－南暑寒岳－小屋－雨竜市街	L杉山(1)、SL青山(1)、北川(1)
10/21-22	山部－新道分岐－半面山－雲峰山で引き返し－山部	L南家(1)、SL仙石(1)、西沢(1)、渡野辺(1)
10/26-27	銚子口駅－登山口－馬ノ背－駒ヶ岳－馬ノ背－登山口－銚子口駅	L菅野(1)、SL川崎(2)、寺山(1)、黒岡(2)、西沢(2)
10/27	恵庭登山口－見晴台－恵庭岳－見晴台－登山口(2：10)	L阪谷(1)、SL北川(1)、杉山(1)、青山(1)
11/20-24	旭岳初滑り(1年目班)	L出口(3)、SL青黄(OB2)、辻(OB1)、阪谷(1)、寺山(1) L永井(3)、SL松本(OB1)、岡裕(1)、菅野(1)、北川(1) L梶本(OB2)、SL秋山(OB1)、杉山(1)、青山(1)、脇田(1)
11/20-24	旭岳初滑り(2年目班)	L田川(4)、SL竹本(3)、南家(2)、仙石(2)、黒岡(2) L中村(4)、SL上野(3)、渡野辺(2)、高山(2) L滝(OB1)、SL石川(3)、百瀬(2)、安居(2) L中島(4)、SL伊藤(3)、川崎(2)、秋本(2)、西沢(2)
12/7-14	十勝合宿(十勝岳温泉－ナマコ屋根－第1ギャップ－上ホロ小屋－三峰山引き返し－上ホロ小屋－S尾根－富良野岳－ベベルイ川－三段山－十勝岳温泉	L中島(4)、SL竹本(3)、秋本(2)、百瀬(2)
12/8-15	無意根新人合宿	CL田川(4)、出口(3)、石川(3)、伊藤(3)、中村(4)、上野(3)、永井(3)、青山(1)、北川(1)、阪谷(1)、杉山(1)、菅野(1)、脇田(1)、寺山(1)、岡(1)
12/21	八剣山	L中島(4)、SL竹本(3)、秋本(2)、百瀬(2)
12/21-28	十勝連峰新人合宿(白金温泉－十勝岳避難小屋－鋸岳－十勝岳－上ホロ小屋－バケモノ岩手前コル－砂防ダム－第1ギャップ－三段山周辺－十勝岳スキー場)	L中村(4)、SL上野(3)、南家(2)、高山(2)、黒岡(2)
12/21-28	十勝連峰新人合宿(白金温泉－望岳台－北尾根－富良野岳－ベベルイ川－三段山－白金温泉)	L滝(OB1)、SL秋山(OB1)、安居(2)、仙石(2)、西沢(2)
12/21-29	十勝合宿：十勝岳温泉－三段山－上ホロ小屋－十勝岳－富良野岳－ホコ岩－ハゲ尾根－白金温泉	L田川(4)、SL出口(3)、渡野邊(2)、川崎(2)、佐田(4)
12/23-26	林道入口－前天狗・小天狗コル－ニペソツ山－ニペソツ・丸山コル－林道－国道	L中島(4)、SL竹本(3)、百瀬(2)、秋本(2)
12/23-30	山部－二十一線入山口－半面山－芦別岳－鉢盛山－ガマ岩－前岳北コル－夕張ヒュッテ－明石町(12：45)	L松本(OB1)、SL伊藤(3)、阪谷(1)、青山(1)、岡(1)
12/28-1/2	白金温泉－美瑛富士北西尾根引き返－水無川－ベベツ山尾根－オプタテシケ西尾根－オプタテシケ山－望岳橋－白金温泉	L辻(OB1)、SL永井(3)、北川(1)、杉山(1)、寺山(1)
12/28-1/4	布礼別－3の沢－三ツ峰標高尾根－稜線－3の沢－富良野岳・前富良野岳コル－前富良野岳－下山	L加藤(OB6)、SL石川(3)、菅野(1)、脇田(1)
12/31-1/10	静内－コイボク林道－コイボク峠(12：00)－鹿上内橋－1470コル－南西稜－1790mで引き返し－シカナイ飯場－イボク林道－静内	L中島(4)、SL竹本(3)、秋本(2)、百瀬(2)
1/3-12	糠平－三ノ沢－ニペソツ・丸山コル－ニペソツ山－小天狗手前コル－岩間温泉－音更手前コル－音更山－石狩岳－石狩沢林道－下山	L中村(4)、SL上野(3)、高山(2)、黒岡(2)、南家(2)
1/5-11	糠平－石狩登山口－十石峠－音更手前コル－音更岳－石狩岳－J.P.－天狗のコル－前天トラバース途中引返し－杉沢コース－小屋－糠平下山	L滝(OB1)、SL秋山(OB1)、安居(2)、仙石(2)、西沢(2)
1/5-13	戸蔦別川－630m二股－薬大尾根－北西ピーク－1940峰－北戸蔦別岳－1940峰－東尾根コル－ルベシベ分岐－南東尾根コル－八の沢出合－戸蔦別川	L田川(4)、SL出口(3)、川崎(2)、渡野邊(2)
2/8-9	札幌国際スキー場山頂駅－朝里岳－余市岳－朝里岳－札幌国際スキー場	L百瀬(2)、SL渡野邊(2)、脇田(1)、菅野(1)

2/25-26	銭函－春香山登山口－銀嶺荘－奥手稲山－奥手稲山の家－平和の滝	L秋本(2)、SL高山(2)、川崎(2)、寺山(1)、杉山(1) L渡野邊(2)、SL南家(2)、北川(1)、岡(1)、阪谷(1)
2/27-3/1	ニセコ強化合宿：蘭越－新見温泉－前目国内－シヤクナケ－チセヌプリ－五色温泉－ニセコアンヌプリ－モイワスキー場下山	L竹本(3)、杉山(1)、寺山(1)
2/28-3/2	ニセコ強化合宿：蘭越－新見温泉－目国内岳－新見温泉－チセヌプリ－ニトヌプリ－五色温泉－ニセコアンヌプリ－五色温泉－モイワスキー場下山	L中村(4)、菅野(1)、岡(1)、北川(1)
3/5-6	登山口－冷水小屋－札幌岳－小屋－登山口	L川崎(2)、SL永井(3)、杉山(1)、菅野(1)
3/6	八剣山	L田川(4)、SL出口(3)、渡野邊(2)、南家(2)、高山(2)
3/7	八剣山	L中島隆(4)、SL伊藤(3)、上野(3)、川崎(2)
3/？	第10回むいねツアー(一般対象)	メンバー名なし
3/9-12	吹雪のため入山できず上富良野にて停滞－十勝岳温泉－ナマコ尾根－1ギャップ－リツヂ－三段山－十勝岳温泉	L中島(4)、SL伊藤(3)、川崎(2)
3/10-13	山部－貯水池－芦別岳ピーク手前の夏道の屈曲点引返し－林道－山部	L一迫(0B3)、SL永井(3)、菅野(1)、北川(1)
3/13-21	上川－高山－孫・子槍コル－大槍下－西尾根－ニセイカムウシュッペ山－丸山東－屏風分岐－屏風山－林道－大函	L田川(4)、SL出口(3)、高山(2)、渡野邊(2)
3/16-24	戸蔦別川－トッタベツヒュッテ－エサオマントッタベツ川出合－北東尾根－1803西コル－トッタベツ岳－ポロシリ岳－カムイ北東尾根－エサオマントッタベツ岳－J.P.－札内岳－10の沢出合－トッタベツヒュッテ	L一迫(0B3)、SL永井(3)、菅野(1)、北川(1)
3/21-29	静内－コイボク林道－標高尾根取付－シカシナイ山－1817峰－カムイエクウチカウシ山－札内川九の沢カール－1917峰－春別岳－J.P.－札内岳－ピリカペタン沢－トッタベツヒュッテ	L中島(4)、SL伊藤(3)、川崎(2)
3/23-31	立山駅－文登研小屋－大日岳－奥大日岳－室堂－－雄山－美女ケ原－立山駅	L中村(4)、SL上野(3)、百瀬(2)、秋本(2)、安居(2)
3/26-4/3	白馬－栂池スキー場－白馬大池－白馬岳－滝見尾根－白高地沢－朝日岳－五輪尾根－蓮華温泉－平岩駅	L青黄(OB2)、SL石川(3)、杉山(1)、寺山(1)
4/25-5/1	酸ケ湯温泉－仙人岱ヒュッテ－小岳－高田大岳－小岳－赤倉岳－仙人岱ヒュッテ－カサ松峠－猿倉岳－酸ケ湯温泉	L竹本(4)、SL高山(3)、阪谷(2)、北川(2)
4/26-5/2	札内川－コイカク出合－夏尾根－コイカクシュ札内岳－1823峰－ピラミッド－カムイエクウチカウシ山－八の沢－札内川	L伊藤(4)、SL川崎(3)、脇田(2)、岡(2)
4/26-5/4	新冠ユートピア牧場－林道終点－下二股－七つ沼カール(スキー)－トッタベツ岳－北戸蔦別岳(スキー)－幌尻岳－上二股－幌尻小屋	L上野(4)、SL百瀬(3)、寺山(2)、杉山(2)
4/29-5/5	1年目無意根GW合宿	CL南家(3)、石川(4)、出口(4)、秋本(3)、渡野邊(3)、安居(3)、吉川(1)、高橋(1)、伊藤(1)、横山(1)、加藤(1)、武田(1)、鍛治(1)、栗崎(1)、高村(1)、成瀬(1)
5/10-11	林道終点－積丹岳－余別岳－積丹岳－美国	L上野(4)、SL石川(4)、出口(4)、伊藤(4)
5/11	羊蹄山(登山道入口－1500mで引き返し－登山道入口)	L竹本(4)、SL秋本(3)、辻(OB2)、阪谷(2)、岡(2)
5/25	定山渓天狗岳	L百瀬(3)、SL田川(OB1)、阪谷(2)、北川(2)、寺山(2)
6/1-7	サマースキー(旭岳周辺)	L秋本(3)、SL脇田(2)、鍛治(1)、栗崎(1) L百瀬(3)、SL寺山(2)、吉川(1)、高村(1)、高山(3) L川崎(3)、SL杉山(2)、高橋(1)、岡(2) L南家(3)、SL北川(2)、伊藤(1)、成瀬(1) L安居(3)、SL阪谷(2)、加藤(1)、横山(1)
6/5-7	サマースキー(旭岳周辺)	L竹本(4)、SL石川(4)、上野(4)、伊藤(4)、吉岡義彦(部長)
6/12-14	振内－額平川－幌尻山荘－幌尻岳－東カール、北カールでスキー－－額平川	L田川(OB1)、SL出口(4)
6/21-22	薄別－白水沢－函－無意根山－無意根小屋－薄別	L百瀬(4)、SL脇田(2)、岡(2)、伊藤(1) L安居(3)、SL北川(2)、寺山(2)、高橋(1)
6/22	薄別－白水沢－函－無意根山－無意根小屋－薄別	L伊藤(4)、SL上野(4)、竹本(4)
6/28	薄別－白水沢－函－無意根山－無意根小屋－薄別	L出口(4)、SL石川(4)
6/28-29	薄別－白水沢－函－無意根山－無意根小屋－薄別	L秋本(3)、SL川崎(3)、栗崎(1)、高村(1)、成瀬(1) L南家(3)、SL杉山(2)、鍛治(1)、吉川(1)
7/5	丸駒温泉－恵庭岳滝沢－丸駒温泉	L出口(4)、SL南家(3)、川崎(3) L石川(4)、SL秋本(3)、北川(2)、杉山(2)、脇田(2)
7/5-6	白水沢－函－無意根山－無意根小屋－薄別	L高山(3)、SL阪谷(2)、加藤(1)、横山(1)
7/6	丸駒温泉－恵庭岳滝沢－丸駒温泉	L石川(4)、SL秋本(3)、北川(2)、杉山(2)、脇田(2)
7/12-13	ニセカウシュッペ茅刈別右股－ニセカウシュッペ－夏道下山	L石川(4)、SL秋本(3)、脇田(2)、北川(2)、杉山(2)
7/13	発寒川	L伊藤(4)、SL安居(3)、SL高山(3)、岡(2)、鍛治(1)、加藤(1)、成瀬(1) L竹本(4)、SL百瀬(3)、寺山(2)、栗崎(1)、高橋(1)
7/13	丸駒温泉－恵庭岳滝沢－丸駒温泉	L出口(4)、SL阪谷(2) L南家(3)、SL川崎(3)
7/17	発寒川	L伊藤(4)、SL脇田(2)、高村(1)
7/19	丸駒温泉－恵庭岳滝沢－丸駒温泉	L出口(4)、SL阪谷(2) L南家(3)、SL川崎(3)
7/20	牧場－伊佐内川－大滝－積丹岳－下山	L伊藤(4)、SL辻(OB2)、加藤(1)、鍛治(1)、高村(1)
7/20	奥漁橋－漁岳－奥漁橋	L高山(3)、SL安居(3)、岡(2)、成海(1)
7/20	発寒川	L上野(4)、SL田川(OB1)、伊藤(1)、吉川(1)、横山(1)
7/21-28	夏尾根・スキー縦走：白金温泉－美瑛富士小屋－石垣山－ベベツ－オプタテシケ山－三川台天場－トムラウシ山－ヒサゴ沼－化雲岳－天人峡	L阪谷(2)、SL寺山(2)、高橋(1)、横山(1)、成瀬(1)
7/22-27	札内ヒュッテ－札内川－記念沢－札内岳－二股－エサオマントツタベツ川カール－J.P.－10の沢出合－札内川	L伊藤(4)、SL辻(OB2)、鍛治(1)、加藤(1)、高村(1)
7/22-30	夏尾根・スキー縦走：層雲峡－黒岳－北鎮岳－白鳥－旭岳－北大スロープ－北海岳－白雲石室－忠別岳－五色岳－化雲・北カール－ヒサゴ沼－トムラウシ岳－ワセダ沢－天人峡温泉下山	L杉山(2)、SL岡(2)、栗崎(1)、伊藤(1)、吉川(1)
7/23-25	旭岳温泉－姿見の池－北大スロープスキー－石室－旭岳温泉	L百瀬(3)、SL北川(2)
7/28	発寒川	L高山(3)、SL中島(OB1)
7/29	白水沢－函－大滝で引き返し－林道終点	L高山(3)、SL中島隆(OB1)
7/31-8/1	大平山ヒヤミズ沢－日陰の淵－－湯の沢川(13：25)－日陰の淵	L出口(4)、SL南家(3)、川崎(3)、阪谷(2)

8/1-2	増毛－暑寒別川沢－暑寒別岳－暑寒荘	L竹本(4)、SL百瀬(3)、寺山(2)、栗崎(1)、高橋(1)
8/2-9	林道終点－900二股－中の岳－二股－新冠ユートピア牧場－ヌピナイ林道－ピリカヌプリ－ヌピナイ川上二股－ソエマツ岳－中の川奥二股－神威岳－中の岳直登沢出合－林道	L石川(4)、SL秋本(3)、北川(2)、脇田(2)、杉山(2)
8/4-5	ペテガリ山荘－ペテガリ沢－大滝－560m滝Fで事故発生。南家・川崎下山し、遭対の川端OBに連絡。事故の詳細は報告書参照。	L出口(4)、SL南家(3)、川崎(3)、阪谷(2)
8/4-10	糠平林道－幌尻山荘－200二股－北カール－幌尻岳－上二股－エサオマントッタベツ岳－10の沢－8の沢－カムイエクウチカウシ山－札内川	L石川(4)、SL秋本(3)、北川(2)、脇田(2)、杉山(2)
8/4-13	セカル別川河口－下二股－上二股－サイアンの滝－ポンルシャ川河口－コタキ－知床池－知床岳－知床沼－ペキン河口－カブト岩－知床岬－ペキンの鼻－相泊	L竹本(4)、SL百瀬(3)、寺山(2)、栗崎(1)、高橋(1)
	部員総会	

75 season　1986(昭和61)年10月～1987(昭和62)年9月

部長：吉岡義彦
主任：秋本恒志(3)
〔前期〕リーダー会議長：百瀬今朝尋(3)／庶務：南家弘毅(3)／会計：安居徹(3)／記録：川崎卓哉(3)・岡裕史(2)・寺山元(2)・脇田政嘉(2)／装備：高山治(3)・杉山裕之(2)・高村賢一(1)・成瀬健(1)・横山昌宏(1)／医療：北川正利(2)・伊藤健次(4)・鍛治邦博(1)／小屋：阪谷聡(2)／部室：高橋郁雄(1)
〔後期〕リーダー会議長：百瀬今朝尋(4)／庶務：杉山裕之(3)／会計：阪谷聡(3)／記録：川崎卓哉(4)・栗崎健(2)・加藤哲朗(2)・横山昌宏(2)／装備：高山治(4)・杉山裕之(3)・脇田政嘉(3)・高村賢一(2)・成瀬健(2)／医療：北川正利(3)・伊藤健次(OB1)・鍛治邦博(2)／小屋：横山昌宏(2)・吉川友二(2)／部室：高橋郁雄(2)

11/20-23	旭岳初滑り(2年目班)旭岳温泉－石室周辺－旭岳温泉	L上野(4)、SL高山(3)、脇田(2)、寺山(2)、北川(2)
11/21-24		L石川(4)、SL百瀬(3)、杉山(2)、岡裕(2)、阪谷(2)
11/20-24	旭岳初滑り(1年目班)旭岳温泉－石室周辺－旭岳温泉	L伊藤(4)、SL黒岡(3)、吉川(1)、横山(1)、伊藤(1) L竹本(4)、SL渡野辺(3)、鍛治(1)、加藤(1) L川端(OB3)、SL川崎(3)、栗崎(1)、成瀬(1) L秋本(3)、SL南家(3)、西沢(3)、高村(1)、高橋(1)
12/7-14	1年目新人合宿(無意根)	CL伊藤(4)、竹本(4)、出口(4)、秋本(3)、川崎(3)、高山(3)、南家(3)、杉山(2)、寺山(2)、栗崎(1)、伊藤(1)、鍛治(1)、加藤(1)、高橋(1)、高村(1)、成瀬(1)、吉川(1)
12/27-1/2	富良野－フレベツ－2の沢尾根－三峰標高尾根－富良野岳－三峰標高尾根－境山H尾根－林道－曙橋－新得	L竹本(4)、SL南家(3)、栗崎(1)、高村(1)、成瀬(1)
12/28-1/2	林道－下ホロ南東尾根－下ホロカメットク－境山尾根－シーソラプチ川二股－三峰標高尾根末端－3の沢－布礼別	L中村(OB1)、SL川崎(3)、鍛治(1)、横山(1)
1/1-8	2年目新人合宿　上ホロ荘－ホコ岩－富良野岳－三段山－上ホロ荘	L上野(4)、SL百瀬(3)、岡(2)、杉山(2)、脇田(2)
1/2-8	2年目新人合宿　スキー場－リフト終点－十勝岳避難小屋－十勝岳－上ホロメカットク－富良野岳－ハケ尾根－三ツ峰－吹上温泉－望岳台	L石川(4)、SL秋本(3)、阪谷(2)、寺山(2)
1/6-11	富良野－秋雲橋－トウヤウスベ山－三峰標高尾根－2の沢－小屋－秋雲橋	L伊藤(4)、SL高山(3)、吉川(1)、高橋(1)
2/7-8	札幌国際スキー場－余市岳－下山	L伊藤(4)、SL出口(4)、吉川(1)、栗崎(1)、横山(1)、高橋(1)
2/8-9	ヘルベチアヒュッテ－奥手稲山－銭函峠－春香山－桂岡	L伊藤(4)、SL出口(4)、百瀬(3)
2/21-22	水谷ロッジ－徳舜瞥山－鉱山跡	L杉山(2)、SL寺山(2)、阪谷(2)、北川(2)
2/27-3/1	ニセコ強化合宿　岩内スキー場－岩内岳－目国内岳－前目国内岳－新見温泉－白樺岳－チセヌプリ－ニトヌプリ－五色温泉－ニセコアンヌプリ－ひらふスキー場	L百瀬(3)、高橋(1)、鍛治(1)、栗崎(1)
2/28-3/2	ニセコ強化合宿　蘭越－－新見温泉－前目国内岳－白樺岳－シャクナゲ－チセヌプリ－ワイスホルン－スキー場下山	L竹本(4)、吉川(1)、加藤(1)
2/28-3/3	ニセコ強化合宿　岩内スキー場－岩内岳－目国内岳－前目国内岳－新見温泉－白樺岳－チセヌプリ－湯本温泉－ニトヌプリ－五色温泉－ニセコアンヌプリ－ひらふスキー場	L秋本(3)、横山(1)、成瀬(1)
3/4-6	桂岡浄水場－銀嶺荘－奥手稲山－奥手稲山の家－迷沢山－平和の滝	L寺山(2)、SL杉山(2)、加藤(1)、北川(2) L岡(2)、SL阪谷(2)、栗崎(1)、吉川(1)
3/10-11	倶知安－羊蹄山－倶知安	L秋本(4)、SL杉山(3)、加藤(2)、高村(2)、成瀬(2)
3/10-12	十勝岳温泉－ナマコ－三段山－十勝岳温泉	L石川(4)、SL川崎(3)、杉山(2)、寺山(2)
3/10-12	清川－ニセイカウシュッペ山－清川	L伊藤(4)、SL南家(3)、吉川(1)、栗崎(1)、高橋(1)
3/11-12	空沼二股－空沼小屋－空沼岳－札幌岳(10：10)－冷水小屋－国道	L上野(4)、SL高山(3)、横山(1)
3/？	第11回むいねツアー(一般対象)	メンバー名なし
3/15-16	羊締山南面	L竹本(4)、SL百瀬(3)、脇田(2)、北川(2)
3/17-23	山部－半面山－芦別岳－南喜－鉢盛山－タ張岳北コル－タ張岳－タ張岳ヒュッテ－バス停	L出口(4)、SL秋本(3)、鍛治(1)、成瀬(1)
3/17-24	札内ヒュッテ－札内川－コイカクシュ札内岳夏尾根－コイカクシュ札内岳－－コイカク－ヤオロマップの－二股－札内ヒュッテ	L石川(4)、SL川崎(3)、杉山(2)、寺山(2)
3/19-26	御影の林道－パンケヌーシ岳と芽室岳の間のポコ－芽室岳－パンケヌーシ岳－ペンケヌーシ岳－国道	L上野(4)、SL高山(3)、加藤(1)、横山(1)、高橋(1)
3/19-29	中広尾川林道－二股－1140mポコから南の尾根－ピロロ岳－楽古岳－十勝岳－オムシヤヌプリ西峰－野塚岳－下降尾根－中二股－大庭牧場	L伊藤(4)、SL南家(3)、吉川(1)、栗崎(1)
3/23-31	ペンケヌーシ林道－チロロ北尾根－チロロ岳－ルベシベ岳－ピパイロ林道－最終人家	L竹本(4)、SL百瀬(3)、脇田(2)、北川(2)
4/28-5/2	鴛泊－長官山小屋－利尻岳－鴛泊	L南家(4)、SL北川(3)、加藤(2)、高村(2)、横山(2)
5/22-24	暑寒荘－暑寒別岳－暑寒荘	L杉山(3)、SL栗崎(2)、高村(2)
5/31-6/6	サマースキー(旭岳周辺)	L北川(3)、SL成瀬(2)、亀田(1)、宮内(1)、福島(1) L杉山(3)、SL高村(2)、若島(1)、石塚(1)、茂木(1) L加藤(2)、SL高橋(2)、烏羽山(1)、吉村(1)、百瀬(4) L横山(2)、SL栗崎(2)、小池(1)、長尾(1)、川崎(4)
6/2-6	サマースキー(旭岳周辺)	L吉川(2)、SL鍛治(2)、南家弘(4)
6/4-6	サマースキー(旭岳周辺)	L脇田(3)、SL安居(4)、高山(4)、秋本(4)

6/12	平和の滝－発寒川－520mで引き返し－金鉱の沢－平和の滝	L脇田(3)、SL高山(4)、横山(2)、烏羽山(1)、福島(1)、茂木(1)、長尾(1)、若島(1)
6/27-28	薄別－白水沢－無意根山－無意根小屋－薄別	L川崎(4)、SL成瀬(2)、石塚(1)、茂木(1)、横山(2) L杉山(3)、SL加藤(2)、長尾(1)、若島(1)、吉川(2)
6/28	薄別－白水沢－大滝で引き返し－薄別	L脇田(3)、SL百瀬(4)、安居(4)
7/4-5	薄別－白水沢－無意根山－無意根小屋－薄別	L北川(3)、SL高村(2)、烏羽山(1)、亀田(1) L高山(4)、SL栗崎(2)、福島(1)、小池(1) L秋本(4)、SL高橋(2)、宮内(1)、吉村(1)
7/11-12	天人峡温泉林道－ポンクワウンナイ川－F12段の滝－F440mの大滝－標高1040m付近で引き返－天人峡温泉	L百瀬(4)、SL北川(3)、栗崎(2)、高橋(2)
7/12	シルバーロッジ－平和の滝－発寒川－引き返し－金鉱の沢－平和の滝	L上野(OB1)、SL安居(4)、吉村(1)、小池(1)、吉川(2)
7/19	定山渓－豊平川蝦蟇沢－札幌岳－定山渓	L脇田(3)、SL川崎(4)、横山(2)、烏羽山(1)、若島(1)
7/19	丸駒温泉－恵庭岳滝沢－F7下引き返し－丸駒温泉	L百瀬(4)、SL北川(3)、栗崎(2)、高橋(2) L秋本(4)、SL杉山(3)、高村(2)、成瀬(2)、加藤(2)
7/23-30	スキー縦走(白金温泉－美瑛富士避難小屋－極道スロープ－南東スロープ－烏馬スロープ－美瑛富士－南東スロープ－オプタテシケ山－－双子池－コスマ－三川台－南沼－北沼－ヒサゴ沼－化雲岳－天人峡	L栗崎(2)、SL吉川(2)、鳥羽山(1)、小池(1)、若島(1)
7/24-30	スキー縦走：旭岳温泉－旭岳・後旭岳コル－北大スロープ－中岳引き返し－白雲岳石室－忠別沼－忠別岳－忠別石室－五色岳－ヒサゴ沼－化雲岳－天人峡	L成瀬(2)、SL加藤(2)、吉村(1)、茂木(1)
7/30	平和の滝－発寒川－520mで引き返し－金鉱の沢－平和の滝	L脇田(3)、SL寺山(3)、石塚(1)、亀田(1)、宮内(1)
8/3-5	余別川－49点沢出合－F5大滝－三段の滝－ドザエモンの滝－下山	L秋本(4)、SL杉山(3)、成瀬(2)、加藤(2)
8/4-10	天人峡温泉－クワウンナイ川－滝の瀬十三丁－北沼－ワセダ沢－地獄谷－スケ沼沢－化雲岳－天人峡	L高山(4)、SL寺山(3)、茂木(1)、長尾(1)、福島(1)
8/4-10	新冠ユートピア牧場－イワナ沢出会－カール手前二股－カムイエクウチカウシ岳－八の沢－七の沢出合－七の沢カール－コイカクシュ札内岳－札内川－ピヨウタンの滝	L百瀬(4)、SL北川(3)、栗崎(2)、高橋(2)
8/6-11	新冠ユートピア牧場－幌尻山荘－北カール－幌尻岳－二股－上二股－神威直登沢出合－エサオマントツタベツ岳－10の沢－8の沢－札内川	L脇田(3)、SL川崎(4)、横山(2)、烏羽山(1)
8/8-14	新冠ユートピア牧場－ペテガリ山荘－大滝－中ノ岳直登沢出合－ペテガリ岳－下降尾根－遭難ケルン－十字峡－中の川－尾田村	L秋本(4)、SL杉山(3)、高村(2)、成瀬(2)、加藤(2)
8/9	奥漁橋入水－漁川－漁岳－林道入口	L上野(OB1)、SL安居(4)、吉村(1)、小池(1)、吉川(2)
8/12-16	新冠ユートピア牧場－幌尻山荘－北カール－幌尻岳－二股－神威直登沢－エサオマントッタベツ岳－ガケの沢出合林道－戸蔦別川	L上野(OB1)、SL安居(4)、小池(1)、吉村(1)、吉川(2)、石川(OB1)
8/14-24	馬場島－伝蔵小屋－剣岳－剣沢－雄山－五色ケ原－薬師岳－薬師峠－北の俣岳－黒部五郎小屋－双六小屋－槍の肩－槍岳－槍沢－上高地	L高橋(2)、SL横山(2)、長尾(1)、福島(1)
8/20-27	羅臼登山口－ラウス平－羅臼岳－オツカバケ－硫黄岳－ルシヤ河口－コタキテツパンベツ河口－三股－知床池－知床沼－モイレウシ源頭－モイレウシ河口－知床岬－白旗宅－船で相泊	L寺山(3)、SL高村(2)、石塚(1)、宮内(1)、亀田(1)
9/21	塩谷駅－遠藤山－大曲展望所－天狗山ロープウエイ－下山	L長尾(1)、SL烏羽山(1)、高橋(2)、宮内(1)、成瀬(2)、亀田(1)
9/25-28	天人峡－クワウンナイ川－滝の瀬十三丁－源頭部－化雲岳－天人峡	L川崎(4)、SL高橋(2)、石塚(1)、宮内(1)、亀田(1)
9/27-28	清川－ニセイノシキオマツプ沢－Peak1320－清川	L北川(3)、SL杉山(3)、吉川(2)、高村(2)、成瀬(2)
9/28-29	層雲峡－黒岳14：45－北鎮分岐7－中岳温泉－沼の平－愛山渓	L加藤(2)、SL栗崎(2)、横山(2)、古川(1)
	部員総会	

76 season　1987(昭和62)年10月～1988(昭和63)年9月

部長：徳田昌生
主任：杉山裕之(3)
〔前期〕リーダー会議長：北川正利(3)
〔後期〕リーダー会議長：北川正利(4)

10/3-4	羊蹄山(比羅夫ルート)	L宮内(1)、SL茂木(1)、長尾(1)
10/3-4	ニセコ連峰(アンヌプリ、イワオ、チセ、ニト及び沼めぐり)	L吉村(1)、SL亀田(1)、福島(1)、烏羽山(1)、小池(1)
10/3-5	秋スキー(旭岳温泉－－金庫岩－ハタコロ西側でスキー－リクマンでスキー－ロックンロール－姿見の池－旭岳温泉)	L阪谷(3)、SL寺山(3)、杉山(3)、北川(3)
10/10-11	芦別岳(覚太郎コース－新道)	L南家(4)、SL川崎(4)、古川(1)
10/15-16	秋の無意根小屋祭り	
11/19-23	旭岳・初滑り(旭岳温泉－石室周辺－旭岳温泉)	L杉山(3)、SL安居(4)、岡野(1)、亀田(1)、福島(1) L高山(4(、SL黒岡(4)、石塚(1)、吉村(1)、小池(1) L南家(4)、SL渡野辺(4)、宮内(1)、鳥羽山(1) L秋本(4)、SL阪谷(3)、横山(2)、栗崎(2)、高村(2)、高橋(2) L川崎(4)、SL寺山(3)、吉川(2)、鍛治(2)、加藤(2)、成瀬(2)
12/6-13	無意根新人合宿	CL秋本4他スタッフ4年3名、3年5名、2年3名及び、1年全員12名(含む女子)
12/23-28	白金温泉－鋸岳－十勝岳－上ホロカメトック－D尾根－三段山－白金温泉	L高山(4)、SL杉山(3)、高橋(2)、横山(2)、高村(2)
12/23-30	白金温泉－D尾根－Hポイント－富良野岳－ハゲ尾根－十勝岳温泉－三段山－白金温泉	L秋本(4)、SL北川(3)、吉川(2)、加藤(2)
12/23-30	白金温泉－鋸岳－美瑛岳－十勝岳－上ホロカメトック－D尾根－三段山－白金温泉	L南家(4)、SL寺山(3)、鍛治(2)、栗崎(2)、成瀬(2)
12/26-31	美瑛－美瑛富士－オプタテシケ山－美瑛富士北西尾根－オプタテシケ山西尾根－ベベツ山－美瑛	L石川(OB1)、SL脇田(3)、亀田(1)、吉村(1)、若島(1)
12/27-1/1	パンケヌーシ林道－チロロ岳－北尾根東面、東尾根南面でスキー、1572北、北東面でスキー	L中村(OB2)、SL安居(4)、茂木(1)、小池(1)
12/29-1/4	トムラウシ温泉－トムラ東尾根基部にキャンプ。3度のアタックならず温泉下山。	L上野(OB1)、SL阪谷(3)、長尾(1)、岡野(1)、鳥羽山(1)
1/4-11	殿狩橋－オプタテシケ沢右岸尾根－美瑛富士南東夏道より美瑛岳－オプタテシケ東側標高尾根からオプタテシケ山アタックならず。ベベツ山南東、オプタテシケ標高尾根等でスキー。	L川崎(4)、SL杉山(3)、福島(1)、石塚(1)、宮内(1)

1/7-9	銭函－銀嶺荘－奥手稲山の家－発寒平和の滝	L北川(3)、SL吉川(2)、横山(2)、高村(2)、古川(1)
1/22-23	雪崩救助訓練(無意根山)	
2/13-14	湯の沢－空沼小屋－湯の沢(無意根小屋ストーブ入れ替えのための調査)	L粟崎(2)、SL高村(2)
2/20-21	福井堰堤－ジルベルザッテル－百松沢山－迷沢山への稜線－平和の滝	L横山(2)、SL高橋(2)、宮内(1)、古川(1)、石塚(1)
2/21-22	豊羽鉱山－長門橋－余市岳－白井岳－札幌国際スキー場	L吉川(2)、SL鍛治(2)、小池(1)、吉村(1)、鳥羽山(1)
2/26-28	第12回無意根スキーツアー	CL阪谷(3)、他スタッフ9名、参加者：北大生3名、先生2名、一般9名
2/26-29	ニセコ1年目リーダー訓練	L秋本(4)、古川(1)、石塚(1) L北川(3)、長尾(1)、吉村(1)、鳥羽山(1) LJ川崎(4)、若島(1)、宮内(1)、茂木(1) L杉山(3)、小池(1)、亀田(1)
2/27-29	チセヌプリ－ニトヌプリ－五色温泉－ニセコアンヌプリーワイスホルン－五色温泉－モイワ山	L高村(2)、SL横山(2)、成瀬(2)、石川(OB1)
3/3-5	夏道登山口－826ポコキャンプ－積丹岳、周辺でスキー	L鍛治(2)、SL吉川(2)、吉村(1)、鳥羽山(1)、寺山(3)
3/8-16	ルサ川ふ化場－相泊－カモイウンペ尾根取付－)知床台地南コル－知床岳－ポロモイ岳－ウイヌプリ－岬－ペキン－化石浜－羅臼ふる里の家	L南家(4)、SL川崎(4)、鍛治(2)、加藤(2)、吉川(2)
3/10-16	旭岳温泉－旭岳－ポン忠別岳－旭岳温泉	L北川(3)、SL上野(OB1)、岡野(1)、古川(1)、宮内(1)
3/10-18	上越－チトカニウシ西尾根－チトカニウシ－国道273号－浮島－)ウキウキランド－天塩岳東尾根－天塩岳手前で引き返し－ウキウキランド	秋本(4)、SL寺山(3)、亀田(1)、吉村(1)
3/11-20	糠平－ウペペサンケ山東峰－西峰－丸山南コル－丸山－ニペソツ岳－天狗岳－音更川渡渉－JP南東尾根－JP－岩間温泉－十勝三股	L高山(4)、SL杉山(3)、高村(2)、成瀬(2)、横山(2)
3/25-30	酸ヶ湯－仙人岱ヒュッテ－酸ヶ湯(ヒュッテをBCに北八甲田山塊で終日スキー)	L安居(4)、SL阪谷(3)、茂木(1)、若島(1)、福島(1)
3/26-4/2	日勝峠－ペケレベツ岳南面スキー－ウエンザル岳－ペンケヌーシ岳－六の沢渡渉－芽室岳南東尾根－芽室岳－夏道尾根－最終人家	L寺山(3)、SL脇田(3)、長尾(1)、石塚(1)、鳥羽山(1)
3/28	八剣山	LJ川崎(4)、SL杉山(3)、吉川(2)、粟崎(2)、高橋(2)
3/30-4/7	戸蔦別川－トツタベツヒュッテ－神威岳南東尾根－神威岳－エサオマントツタベツ岳－春別岳－カムイエクウチカウシ山－八の沢出会い－札内川	LJ川崎(4)、SL杉山(3)、吉川(2)、粟崎(2)、高橋(2)
日付なし	飛騨高山スキー場－千町ケ原－乗鞍岳－金山岳－平湯温泉スキー場下山	L石川(OB1)、SL北川(3)、成瀬(2)、横山2
4/23-24	新入生歓迎無意根登山	
日付なし	無意根GW合宿	CL寺山(4)、西沢(OB1)、横山(3)、粟崎(3)、加藤(3)、吉川(3)、鍛治(3)、宮内(2)、鳥羽山(2)、竹川(1)、斉藤(1)、吉田(1)、根岸(1)、海老(1)、白岡(1)、堀川(1)、秦(1)、伊奈(1)、八木(1)、渡部(1)、毛利(1)、長島(OB10)、舟木(OB9)、川端(OB5)、青黄(OB5)、秋山(OB4)、辻(OB4)、久能(OB4)
4/28-5/3	天人峡－ヒサゴ沼避難小屋をB、Cに化雲岳、トムラウシ山を登り、化雲岳北カール、ワセダ沢、トムラウシのお鉢、トムラウシ南東斜面でスキー	L阪谷(4)、SL高橋(3)、石塚(2)、若島(2)
4/29-5/4	十勝三股－音更川林道－音更岳東尾根1640コルをBCに周辺でスキー。石狩岳は1820mで引き返し。	L北川(4)、SL鍛治(3)、亀田(2)、茂木(2)、福島(2)
4/29-5/5	鴛泊－長官小屋をB、Cに利尻岳、周辺でスキー	L杉山(4)、SL高村(3)、鳥羽山(2)、吉村(2)、小池2
4/30-5/5	酸ケ湯温泉－仙人岱ヒュッテをBCに北八甲田で終日スキー。高田大岳の北面初滑降。	L脇田(4)、SL高村(3)、宮内(2)、岡野(2)
5/13-15	暑寒荘－暑寒別岳－暑寒荘	L吉川(3)、L高村(3)、SL吉村(2)、SL鍛治(3)、宮内(2)、鳥羽山(2)、吉田(1)
5/18-19	赤井川村常磐－右股の沢川－余市岳－赤井川村	L寺山(4)、SL横山(3)、宮内(2)
5/21-22	芦別岳	L北川(4)、SL横山(3)、若島(2)、鳥羽山(2)
5/21-22	羊蹄山(夏道比羅夫コース)	L鍛治(3)、SL吉川(3)、成瀬(3)
5/21-22	無意根山追悼登山	現役の他、水谷先生、在田、高木、阿部、山本、吉田の各OB、住友房夫氏が参加
5/29-6/4	サマースキー(北大スロープをBCに、北は比布岳まで周辺の山々を滑る)	L粟崎(3)、SL石塚(2)、八木(1)、根岸(1)、小池(2) L横山(3)、吉村(2)、茂木(2) L高橋(3)、SL若島(2)、白岡(1)、堀川(1) L鍛治(3)、鳥羽山(2)、海老(1)、秦(1)、岡野(2) L高村(3)、SL長尾(2)、吉田(1)、竹川(1) L吉川(3)、宮内(2)、伊奈(1)、斉藤(1)
5/30-6/4		L成瀬(3)、SL福島(2)、北川(4)、寺山(4)
6/1-4		L阪谷(4)、SL杉山(4)、伊藤(3)、古川(2)、榊山(1)
6/19	赤岩講習会(1年生の岩登り入門、上級生の知識・技術の確認)	全員参加
6/24	恵庭岳(夏道往復)	L伊藤(3)、SL吉川(3)
6/25-26	薄別－白水沢－無意根山－無意根小屋－薄別	L高橋(3)、SL福島(2)、根岸(1)、茂木(2) L吉川(3)、SL横山(3)、竹川(1)、白岡(1) L加藤(3)、SL長尾(2)、齋藤(1)、堀川(1) L粟崎(3)、SL吉村(2)、榊山(1)、吉田(1)
6/27	薄別－白水沢－大滝引き返し－薄別	L寺山(4)、SL杉山(4)、脇田(4)
7/2-3	薄別－白水沢－無意根山－無意根小屋－薄別	L高村(3)、SL亀田(2)、伊奈(1) L北川(4)、SL鳥羽山(2)、若島(2)、小池(2) L加藤(3)、SL石塚(2)、玉井(1)、海老(1) L成瀬(3)、SL鍛治(3)、伊藤(3)、秦(1)
7/9	発寒川－平和の滝－520mで引き返し	L成瀬(3)、SL高橋(3)、伊奈(1)、秦(1)、竹川(1)
7/9-10	札幌－余別川51点沢－大滝－三段の滝下引き返し	L北川(4)、SL加藤(3)、小池(2)、長尾(2)、亀田(2)
7/9-10	恵庭岳－滝沢F7引き返し	L杉山(4)、SL高村(3)、吉川(3)、石塚(2)、吉村(2)
7/10	発寒川－平和の滝－600m二股で引き返し	L寺山(4)、SL横山(3)、白岡(1)、根岸(1)、海老(1)
7/16-17	天人峡－ポンカウン沢－天人峡	L北川(4)、SL加藤(3)、小池(2)、長尾(2)、亀田(2) L杉山(4)、SL高村(3)、吉川(3)、石塚(2)、吉村(2)
7/22-29	夏山スキー(層雲峡－黒岳石室－白雲石室－ヒサゴ沼をテント場にスキー縦走－天人峡)	L鳥羽山(2)、SL若島(2)、福島(2)、吉田(1)
7/23-24	大平川冷水沢－日陰の淵－740mで湯の沢へ乗っ越し林道へ	L杉山(4)、SL高村(3)、吉川(3)、石塚(2)、吉村(2)

7/23-24	薄別－白水沢－無意根山－無意根小屋－薄別	L加藤(3)、SL鍛治(3)、成瀬(3)、榊山(1)、阪谷(4)
7/23-30	夏山スキー：旭岳温泉－旭岳－ヒサゴ沼－トムラウシ岳－化雲岳－天人峡	L長尾(2)、SL小池(2)、竹川(1)
7/23-30	夏山スキー：白金温泉－美瑛富士避難小屋－オプタテシケ山－三川台－ヒサゴ沼－化雲岳－天人峡	L石塚(2)、SL亀田(2)、秦(1)、齋藤(1)
7/26-31	クチャンベツ川－沼ノ原－ヒサゴ沼－トムラウシ山－富良野岳	L岡野(2)、古川(2)、玉井(1)、堀川(1)
7/27-29	夏山スキー：旭岳温泉－旭・熊のコル－北大スロープ－比布岳北面－リクマン沢－層雲峡	L鍛治(3)、SL吉川(3)、高橋(3)
7/31	発寒川－600m二股で引き返し	L脇田(4)、SL栗崎(3)、鍛治(3)、福島(2)
8/3-4	新冠ユートピア牧場－浦河－メナシュンベツ川－楽古岳－夏道－浦河	L北川(4)、SL加藤(3)、小池(2)、長尾(2)、亀田(2)
8/3-5	ペテガリ山荘－ペテガリB沢－ペテガリ岳－西尾根－ペテガリ山荘	L杉山(4)、SL高村(3)、吉川(3)、石塚(2)、吉村(2)
8/3-10	相泊－ウナキベツ川河口－知床沼－オキチウシ川－オキチウシ川河口－知床横断道路	L成瀬(3)、SL高橋(3)、伊奈(1)、秦(1)、竹川(1)
8/4-5	暑寒別岳	L古川(2)、SL岡野(2)、榊山(1)、玉井(1)
8/5-7	札幌－余別川51点沢－大滝－三段の滝下引き返し	L脇田(4)、SL栗崎(3)、鍛治(3)、福島(2)
8/5-10	札内川－八の沢－カムイエクウチカウシ－九の沢カール－九の沢出合－札内岳－ピリカペタン沢－戸蔦別川	L寺山(4)、SL横山(3)、白岡(1)、根岸(1)、海老(1)
8/7-10	日高幌別－春別川－ピリカヌプリ南面直登沢－ピリカヌプリ－ヌピナイ右股－ソエマツ岳－ヌピナイ川－尾田村	L杉山(4)、SL高村(3)、吉川(3)、石塚(2)、吉村(2)
8/8-11	ペテガリ山荘－ペテガリA沢－ペテガリ岳－下降尾根－ケルンの大掃除－十字峡－中の川	L北川(4)、SL加藤(3)、長尾(2)、亀田(2)
8/11-17	楽古山荘－ニオベツ川－野塚岳－豊似川左股－豊似川下二股－豊似岳南峰－ソガベツ川－西舎	L脇田(4)、SL栗崎(3)、鍛治(3)、福島(2)
8/15-22	中房温泉－燕山荘－燕山－槍ケ岳－槍ケ岳山荘－穂高岳山荘－奥穂高岳－上高地	L吉村(2)、SL伊藤(3)、古川(2)、伊奈(1)、海老(1)
8/15-22	相泊－ウナキベツ川－知床岳－モイレウシ川－知床岬－カブト岩－羅臼	L小池(2)、SL寺山(4)、白岡(1)、根岸(1)
8/16-18	鴛泊－長官小屋－利尻岳－鴛泊	L亀田(2)、SL石塚(2)、竹川(1)、秦(1)
8/17	発寒川－平和の滝－600m二股で引き返し	L加藤(3)、SL吉川(3)、玉井(1)、榊山(1)、齋藤(1)
8/19-22	天人峡－カウンナイ沢－)ヒサゴ沼小屋－天人峡	L加藤(3)、SL吉川(3)、玉井(1)、榊山(1)、齋藤(1)
8/20	奥漁橋－漁川－)漁岳一奥漁橋	L北川(4)、SL鍛治(3)、若島(2)、吉田(1)、堀川(1)
8/21-26	天人峡－カウンナイ沢－トムラウシ岳－ワセダ沢－ヒサゴ沢－ヒサゴ小屋－天人峡	L北川(4)、SL鍛治(3)、若島(2)、吉田(1)、堀川(1)
9/18-20	エサオマントッタベツ川－札内岳－J.P.－エサオマントッタベツ岳－戸蔦川	L加藤(3)、SL長尾(2)、玉井(1)、伊藤(3)
9/26-29	ウペペサンケ・ニペソツ縦走	L鍛治(3)、SL伊藤(3)、吉村(2)
9/29-10/3	表大雪秋スキー　雪と寒さに阻まれ、4日間ねばって結局一本しか滑れず	L若島(2)、SL長尾(2)、横山(3)
	部員総会	

77 season　1988(昭和63)年10月～1989(平成1)年9月

部長：徳田昌生

主任：吉村昌浩(3)／リーダー会議長：高村賢一(3)

10/1-2	大雪山観楓	L脇田(4)、SL伊藤(3)、海老(1)、榊山(1)
10/1-2	真狩－羊蹄山－比羅夫コース	L伊奈(1)、SL堀川(1)、白岡(1)
10/5	定山渓天狗岳東尾根－熊の沢	L伊藤(3)、SL吉川(3)、小池(2)
10/12-16	幌尻岳、トッタベツ岳	L伊藤(3)、SL高村(3)、石塚(2)
10/17-18	空沼岳	L阪谷(4)、SL吉田(1)
11/20-23	旭岳初滑り(1年目班)(旭岳温泉－石室周辺－旭岳温泉)	L高村(3)、SL南家(0B1)、海老(1)、斎藤(1)、白岡(1) L高橋(3)、SL川崎(0B1)、古川(2)、榊山(1)、秦(1) L成瀬(3)、SL中島(0B3)、堀川(1)、吉田(1) L栗崎(3)、SL百瀬(0B1)、竹川(1)、脇田(4)
11/20-23	旭岳初滑り(2年目班)(旭岳温泉－石室周辺－旭岳－旭岳温泉)	L北川(4)、SL加藤(3)、若島(2)、烏羽山(2) L寺山(4)、SL吉川(3)、亀田(2)、岡野(2)、吉村(2) L阪谷(4)、SL横山(3)、石塚(2)、福島(2) L杉山(4)、SL鍛治(3)、小池(2)、長尾(2)、伊藤(3)
12/4-11	無意根新人合宿	CL杉山(4)ほか、4年目3名、3年目7名、2年目12名、1年目9名
12/23-30	千栄－パンケヌーシ川林道－チロロ北尾根－チロロ岳－チロロ北東沢スキー－ルベシベ岳－ルベシベ北尾根－止別山－ペンケヌーシ岳－最終人家	L阪谷(4)、SL高村(3)、茂木(2)、岡野(2)、若島(2)
12/24-30	旭岳温泉－石室－旭岳北ガケ尾根2170m引き返し－旭岳温泉下山－旭川－十勝三股－16の沢出合－天狗岳－ニペソツ山－十勝三股	L北川(4)、SL鍛治(3)、福島(2)、宮内(2)
12/27-1/3	千栄－パンケヌーシ林道－チロロ北尾根－チロロ岳－六の沢－芽室岳南西尾根－芽室岳－芽室夏道尾根－下山	L中島(0B3)、SL成瀬(3)、白岡(1)、根岸(1)、堀川(1)
12/29-1/3	千栄－パンケヌーシ川林道－ペンケヌーシ標高尾根－ペンケヌーシ岳－6、7の沢出合－芽室南西尾根－芽室岳－芽室夏道尾根－下山	L脇田(4)、SL吉川(3)、秦(1)、斉藤(1)
12/30-1/5	千栄－パンケヌーシ川林道－チロロ北尾根－チロロ岳－ルベシベ岳－ルベシベ分岐コル－ピパイロ岳途中引き返し－1967峰－北トッタベツ岳－ヌカビラ標高尾根－最終人家	L杉山(4)、SL横山(3)、伊藤(3)、吉村(2)、小池(2)
12/31-1/7	十勝三股－天狗岳－ニペソツ山－周辺スキー－C1578ポコ－岩間温泉	L寺山(4)、SL栗崎(3)、長尾(2)、石塚(2)、烏羽山(2)
1/1-6	蘭越－新見温泉－前目国内岳－目国内岳－白樺岳－チセヌプリ－湯本温泉－大沼－ワイスホルン－ニトヌプリ－チセヌプリ－五色温泉－蘭越(十勝岳噴火により美瑛、オプタテの計画から変更してたてられた計画)	L高橋(3)、SL川崎(OB1)、伊奈(1)、榊山(1)
1/7-12	札的内川－鳥越山－クマネシリ山－待根山－ピンネシリ山－幌加徳富川	L北川(4)、SL鍛治(3)、古川(2)、吉田(1)、竹川(1)
2/1	定山渓天狗岳中央ルンゼ滑降	L阪谷(4)、SL伊藤(3)、高橋(3)、石塚(2)、若島(2)、　竹川(1)
2/4-7	ポンネアンチシ・余別・積丹岳	L高村(3)、SL伊藤(3)、竹川(1)、根岸(1)

2/10-11	北尾根－芦別岳－冬尾根	L粟崎(3)、SL伊藤(3)、吉村(2)、石塚(2)、宮内(2)
2/10-12	春香山	L岡野(2)、SL高橋(3)、亀田(2)
2/14-15	徳舜別・ホロホロ山	L鳥羽山(2)、SL岡野(2)、吉田(1)
2/17-19	春香山・奥手稲山・迷沢山	L石塚(2)、SL鳥羽山(2)、吉田(1)、竹川(1)
2/19	定山渓天狗岳ニセワラジルンゼ滑降	L阪谷(4)、SL寺山(4)、若島(2)、加藤(OB9)
2/24-26	第13回無意根スキーツアー	CL鍛治(3)、他スタッフ13名、一般参加者18名
2/24-28	ニセコ1年目リーダー訓練	L阪谷(4)、斉藤(1)、根岸(1)、竹川(1) L横山(3)、吉田(1)、白岡(1)、伊藤(3) L高村(3)、海老(1)、秦(1)、榊山(1)
3/3-4	ニセコ連峰スキーツアー(湯本温泉をベースにチセヌプリ周辺を滑る)	L福島(2)、SL若島(2)、茂木(2)
3/4-9	大学山学部リーダー冬山研修会に参加	烏羽山(2)
3/4-12	相泊－ウナキベツ川ポロモイ台地－知床岳－ポロモイ－ウイーヌプリ－知床岬－ウイーヌプリ－ペキン川－ポロモイ東尾根－タケノコ岩－相泊	L寺山(4)、SL成瀬(3)、斉藤(1)、竹川(1)、根岸(1)
3/5-6	群別岳	L北川(4)、SL伊藤(3)、石塚(2)、吉村(2)
3/5-9	上羽帯最終人家－小屋－芽室岳－パンケヌーシ川渡渉－雪盛山－林道－下山	L阪谷(4)、SL鍛治(3)、古川(2)、吉田(1)、海老(1)
3/11-22	中楽古－楽古岳東尾根－楽古岳－十勝岳－オムシャヌプリ東峰－野塚岳－野塚岳北斜面で快適なスキー－トヨニ岳－ピリカヌプリ－トヨニ岳－東尾根－大庭牧場	L北川(4)、SL伊藤(3)、石塚(2)、吉村(2)
3/18-20	北尾根－芦別岳－冬尾根	L杉山(4)、SL鍛治(3)、若島(2)、鳥羽山(2)、小池(2)
3/21-22	羊蹄山	L脇田(4)、SL高村(3)、福島(2)、亀田(2)、宮内(2)
3/21-22	北アルプス乗鞍岳	L横山(3)、SL吉川(3)、榊山(1)、秦(1)、白岡(1)
3/24-4/5	美生川－伏見小屋－伏見岳－妙敷山－ピパイロ岳－1967峰－北戸蔦別岳－幌尻岳－神威岳北東尾根－エサオマントッタベツ岳北尾根途中引き返し－神威岳北東尾根－戸蔦別川	L杉山(4)、SL鍛治(3)、若島(2)、鳥羽山(2)、小池(2)
3/25-31	美女平－弥陀ヶ原ホテル－室堂ターミナルをBCに周辺でスキー－一ノ越－浄土山－御山谷－みくりが池温泉－剣御前小屋－剣沢－一ノ越山荘－雄山－美女平	L横山(3)、SL吉川(3)、榊山(1)、秦(1)、白岡(1)
3/31-4/8	戸蔦別川－神威岳北東尾根－神威岳－北東尾根－エサオマントッタベツ岳－札内岳－ピリカペタヌ沢－戸蔦別川	L寺山(4)、SL成瀬(3)、伊藤(3)
4/2-7	斜里岳・羅臼岳・羅臼岳南西ルンゼをスキー	L北川(4)、SL石塚(2)、古川(2)、根岸(1)
4/22-23	新入生歓迎登山無意根山	
4/29-5/4	戸蔦別川－神威岳北東尾根－戸蔦別岳－幌尻岳－北戸蔦別岳－1807峰－千呂露川	L高村(4)、SL吉村(3)、斉藤(2)、秦(2)、榊山(2)
4/29-5/5	無意根ゴールデンウィーク合宿	CL成瀬(3)、高橋(4)、伊藤(4)、粟崎(4)、石塚(3)、小池(3)、三浦(1)、森島(1)、諏訪(1)、吉田(1)、渡部(1)、渡辺(1)、野崎(1)、阿部(OB13)、加藤(OB9)、川端(OB6)、秋山(OB5)、吉田(OB6)、百瀬(OB2)、北川(OB1)
4/29-5/5	鴛泊－長官小屋－利尻岳－鴛泊	L横山(4)、SL宮内(3)、亀田(3)、福島(2)、古川(2)、海老(2)
4/30-5/5	ウペペサンケ・ニペソツスキー地開拓。ニペは南稜からアタック。	L鍛治(4)、SL鳥羽山(3)、白岡(2)、根岸(2)、竹川(2)
5/11-15	札内川－コイカクシュ札内岳夏尾根C1300mの天場まで行ったところで悪天候に阻まれ下山	L伊藤(4)、SL小池(3)、竹川(2)、根岸(2)
5/13-14	浜益岳	L吉村(3)、SL鳥羽山(3)、秦(2)、海老(2)
5/13-14	余市岳	L高橋(4)、SL亀田(3)、斉藤(2) L若島(3)、SL福島(3)、宮内(3)
5/20-21	倶知安－羊蹄山	L石塚(3)、SL鳥羽山(3)、根岸(2)、竹川(2)、白岡(2)
5/28-6/3	サマースキー(北大スロープをBCに山々を滑る。前半まるで冬山。後半は快晴でトロピカルスキー)	L石塚(3)、SL秦(2)、榊山(2)、渡辺聡(1) L鳥羽山(3)、SL竹川(2)、三浦(1)、森島(1) L吉村(3)、SL白岡(2)、吉田(1)、野崎(1) L小池(3)、SL根岸(2)、斉藤(2)、渡部(1)
5/30-6/3	サマースキー(北大スロープをBCに山々を滑る)	L福島(3)、SL海老(2)、若島(3)
5/31-6/3	サマースキー(北大スロープをBCに山々を滑る)	L亀田(3)、SL古川(3)、宮内(3)
6/1-3	サマースキー(北大スロープをBCに山々を滑る)	L横山(4)、SL高橋(4)、成瀬(4)、粟崎(4)、伊藤(4)
6/11	赤岩講習会　ほぼ全員が参加。岩登りの基礎訓練	ほぼ全員が参加
6/17-7/2	無意根小屋大改修	『むいね』28号参照
6/24-25	白水沢	L石塚(3)、SL若島(3)、榊山(2)、森島(1) L福島(3)、SL白岡(2)、渡辺(1) L亀田(3)、SL秦(2)、渡部(1)
7/1-2	白水沢	L小池(3)、SL海老(2)、吉田(1) L鳥羽山(3)、SL竹川(2)、野崎(1) L高橋(4)、SL横山(4)
7/6	白水沢	L粟崎(4)、SL伊藤(4)
7/8-9	白水沢	L高村(4)、SL斉藤(2)、三浦(1)
7/9	滝沢	L石塚(3)、SL鳥羽山(3)、伊藤(4)
7/9	発寒川	L鳥羽山(3)、SL白岡(2)、宮内(3) L粟崎(4)、SL小池(3)、森島(1)、渡部(1)、渡辺(1) L横山(4)、SL亀田(3)、榊山(2)、吉田(1)、野崎(1)
7/12	白水沢	L吉村(3)、SL根岸(2)、鍛治(4)
7/15-16	白井川	L横山(4)、SL亀田(3)、榊山(2)、吉田(1)
7/15-16	漁川	L粟崎(4)、SL小池(3)、森島(1)、渡辺(1)、渡部(1)
7/15-16	パンケメクインイ川	L高村(4)、SL石塚(3)、秦(2)、根岸(2)、伊藤(4)
7/16	発寒川	L鳥羽山(3)、SL海老(2)、成瀬(4)
7/20-24	表大雪スキー　雪は多かったが、天気に恵まれず	L斉藤(2)、SL根岸(2)、吉村(3)、竹川(2)
7/23-24	ポソクゥウンナイ川	L高橋(4)、SL鳥羽山(3)、海老(2)、白岡(2)、宮内(3)
7/24-29	エサオマントッタベツ川－山スキー沢－札内岳－JP－エサオマントッタベツ岳－10.5の沢－8の沢－カムイエクウチカウシ山－8の沢－札内川	L粟崎(4)、SL小池(3)、森島(1)、渡部(1)、渡辺(1)
7/28-30	余別川51点沢左股・122点沢	L高村(4)、SL石塚(3)、秦(2)、根岸(2)、伊藤(4)
7/28-30	余別川51点沢	L鍛治(4)、SL福島(3)、竹川(2)、斉藤(2)

8/4-13	ユートピアロッジーナナシの沢－1839峰北面直登沢－1839峰－ヤオロマップ岳－1599峰－ルベツネ山－ケーペテガリ岳－三股－ヤオロマツプ川－尾田村	L高村(4)、SL石塚(3)、根岸(2)、秦(2)、伊藤(4)
8/5-13	札内川－8の沢－カムイエクウチカウシ山－JP－エサオマントッタベツ岳－山スキー沢－札内岳－ピリカペタヌ沢－戸蔦別川	L横山(4)、SL亀田(3)、榊山(2)、吉田(1)、野崎(1)
8/8-11	静内－ペテガリ沢A沢－ペテガリ岳－中の川(A沢の大滝で、滝から落ちてビバークしている法政大パーティにあい救助活動に参加)	L鍛治(4)、SL福島(3)、竹川(2)、斉藤(2)、吉村(3)
8/14-15	ポンクゥウンナイ川	鍛治(4)、SL福島(3)、竹川(2)、斉藤(2)、吉村(3)
8/17-24	西海岸－知床岬－東海岸(海岸のみの山行)	L竹川(2)、SL秦(2)、野崎(1)、渡部(1)
8/17-24	北沢峠－駒ヶ岳－北沢峠－仙丈ヶ岳－横川岳－北岳－広河原	L白岡(2)、SL海老(2)、堀川(2)、渡辺(1)
8/22-26	表大雪スキー(残雪は少なかったが、天候に恵まれスキーを充分に堪能)	L鳥羽山(3)、SL吉村(3)
9/5	八剣山南登山口－西登山口	L伊藤(4)、SL横山(4)、長尾(3)
9/23-24	芦別旧道－芦別岳－新道	L吉田(1)、SL白岡(1)、竹川(1)、根岸(1)、斉藤(1)
9/25-27	ニペソツ岳	L堀川(2)、SL斉藤(2)、榊山(2)、森島(1)
9/26-27	羊蹄山比羅夫コース	L海老(1)、SL根岸(1)、吉田(1)、榊山(2)
9/26-28	斜里岳	L福島(2)、SL宮内(2)、伊奈(1)
9/27-29	ニセコ連峰(五色温泉をベースに沼めぐりとニセコアンヌプリ)	L根岸(1)、SL海老(1)、榊山(2)、吉田(1)
9/27-29	クゥウンナイ沢	L杉山(OB1)、SL秦(2)、三浦(1)
9/28-29	樽前山・風不死岳	L白岡(1)、SL竹川(1)、秦(1)、堀川(1)
9/28-10/2	コイカクシュ札内岳、ヤオロマップ岳、1839峰	L小池(2)、SL石塚(2)、鳥羽山(2)
	部員総会	

78 season　1989(平成1)年10月～1990(平成2)年9月

部長：徳田昌生
主任：吉村昌浩(3)／リーダー会議長：石塚吉浩(3)

10/1	神威岳	L長尾(3)、SL榊山(2)、高村(4)
10/4-7	カムエクウチカウシ山、コイカクシュ札内岳	L小池(3)、SL斉藤(2)、森島(1)
10/7-8	神威岳	L伊藤(4)、SL吉村(3)、長尾(3)、石塚(3)
10/7-8	ニセコ	L宮内(3)、SL高村(4)、高橋(4)
10/8	恵庭岳	L渡部(1)、SL吉田(1)、渡辺(1)、野崎(1)、三浦(1)
10/10-11	伏美岳	L高村(4)、SL横山(4)、長尾(3)、古川(3)
10/11-12	夕張岳	L白岡(2)、SL森島(1)、秦(2)、海老(2)
10/12	赤岩・東大壁	L伊藤(4)、SL石塚(3)、Assistant石角氏(ICI)
10/15	八剣山	L榊山(2)、SL根岸(2)、海老(2)、鳥羽山(3)、石塚(3)、古川(3)、吉村(3)
10/17-18	空沼～札幌岳	L神保(WV2)、SL裴(WV3)、中野(WV2)、高橋(WVOG2)、古川(3)、榊山(2)、武田(室工大WV2)
12/1-4	初滑り1年目　旭岳(雪不足の為、予定より1週間遅らせて入山)	L粟崎(4)、SL福島(3)、野崎(1)、森島(1)、三浦(1) L高橋(4)、SL宮内(3)、渡部(1) L高村(4)、SL加藤(4)、三崎(1)、吉田(1) L横山(4)、SL石塚(3)、斉藤(2)、根岸(1)、竹川(1) L伊藤(4)、SL吉村(3)、長尾(3)、秦(2) L成瀬(4)、SL鳥羽山(3)、海老(2)、白岡(2) L鍛治(4)、SL小池(3)、古川(3)、榊山(2)、堀川(2)
12/10-17	無意根新人合宿	CL伊藤(4)、以下19名
12/12-15	白金温泉－東尾根－オプタテシケ山－白金温泉	L高村(4)、SL宮内(3)、亀田(3)、榊山(2)
12/16-21	音更川林道－ブヨ沢－音更山山頂手前で引き返し－十石峠－十勝三股	L横山(4)、SL吉村(3)、堀川(2)、海老(2)、白岡(2)
12/25-31	十勝岳温泉－北尾根－ホコ岩－富良野岳－十勝岳温泉	L鍛治(4)、SL石塚(3)、斉藤(2)、秦(2)
12/25-1/3	白金温泉－オプタテシケ南東尾根－l740m引き返し－オプタテシケ沢－ポン十勝二股－下ホロカメトック山－H尾根下－－富良野岳－白金温泉	L吉川(4)、SL鳥羽山(3)、野崎(1)、渡辺(1)、渡部(1)
12/26-1/3	十勝岳温泉－D尾根－三峰山－シーソラプチ川－境山－富良野岳－三峰山標高尾根末端－富良野西尾根－ベベルイ川－下山	L北川(OB1)、SL杉山(OB1)、中島(OB4)、古川(3)
12/27-1/2	トノカリ橋－西尾根－オプタテシケ山－水無川－美瑛富士－下山	L伊藤(4)、SL小池(3)、三浦(1)、森島(1)
12/29-1/4	日高町－パンケヌーシ川－止別岳－ルベシベ山－雪盛山－－止別岳－パンケヌーシ川	L高村(4)、SL宮内(3)、亀田(3)、榊山(2)
12/30-1/6	旭岳温泉－ピウケナイ沢－ポン旭岳南－忠別岳－沼の原橋－石狩岳北西尾根－石狩岳S峰－林道－国道39号	L成瀬(4)、SL高橋(4)、竹川(2)、根岸(2)
12/30-1/6	日高小屋－8の沢－北東尾根－トツタベツ岳－カムイ岳北東尾根－トッタベツ小屋	L横山(4)、SL吉村(3)、白岡(2)
1/4-9	林道除雪終点－愛山渓温泉－C1590－Co2000－安足間分岐－C1590－国道	L鍛治(4)、SL石塚(3)、斉藤(2)、秦(2)
1/7-13	トムラウシ温泉－C1115ポコのコル－五色尾根下－林道終点－トムラウシ温泉	L粟崎(4)、SL福島(3)、吉田(1)、三崎(1)
1/10-13	大雪牧場－愛別岳－牧場	L吉川(4)、SL鳥羽山(3)、伊藤(4)
1/17-22	稚内－北稜－長官山－利尻岳－鴛泊	L鍛治(4)、SL石塚(3)、斎藤(2)、秦(2)
1/31	八剣山	L伊藤(4)、SL小池(3)、吉村(3)
2/10-11	積丹岳	L亀田(3)、SL秦(2)、渡部(1)、森島(1)
2/10-11	漁岳	L宮内(3)、SL福島(3)、長尾(3)、古川(3)
2/10-13	オプタテ中央稜(悪天の為、中央稜に取りつくこともできなかった)	L伊藤(4)、SL小池(3)、鳥羽山(3)
2/18	八剣山	L杉山(OB1)、SL北川(OB1)、古川(3)、海老(2)
2/22-26	ニセコ強化合宿(新見、湯本、五色の温泉を使った1年目のリーダー訓練)	L石塚(3)、森島(1)、三崎(1) L小池(3)、吉田(1)、渡辺(1) L吉村(3)、渡部(1)、野崎(1)
2/28-3/3	幌加音更林道－ニペソツ南東尾根－ニペソツ山－シャクナゲ尾根－下山	L杉山(OB1)、SL北川(OB1)、古川(3)、海老(2)
3/1-2	余市岳	L根岸(2)、SL榊山(2)、森島(1)

3/9-10	芦別岳北尾根ルート	L伊藤(4)、SL石塚(3)、根岸(2)、斉藤(2)
3/10-17	立山－美女平－室堂ターミナルBC－C2510引き返し－剣御前－見女平－立山	L高橋(4)、SL福島(3)、三崎(1)、野崎(1)、渡辺(1)
3/11-16	ペテガリ山荘－ペテガリ岳－ペテガリ山荘	L粟崎(4)、SL吉村(3)、白岡(2)、竹川(2)
3/15-23	斜里－峰浜－海別岳－ラサヌプリ－睦支別川－ラサヌプリ－－遠音別岳－遠音別橋	L成瀬(4)、SL亀田(3)、吉田(1)、森島(1)
3/16-23	元浦川－ソエマツ沢－カムイ岳－ソエマツ岳－ピリカヌプリ－トヨニ岳－南東尾根－豊似川	L伊藤(4)、SL石塚(3)、斉藤(2)、根岸(2)
3/19-27	羅臼－サクホク橋－東岳－南岳－知円別ー硫黄山－ルシヤ－羅臼	L鍛治(4)、SL扇羽山(3)、海老(2)
3/25-31	中楽古－楽古岳東尾根－楽古岳－十勝岳－オムシャヌプリ－野塚岳－東尾根－野塚川下山	L小池(3)、SL吉村(3)、堀川(2)、榊山(2)、秦(2)
3/27-4/7	打保－寺地山－北ノ俣岳－太郎平小屋－薬師岳－北ノ俣岳手前－寺地山－打保	L横山(4)、SL宮内(3)、古川(3)、白岡(2)、渡部(1)
4/2-5	富士吉田－浅門寺社－吉田口峰－富士吉田下山(Mt.ローガン遠征の準備山行)	L吉川(4)、SL扇羽山(3)、成瀬(4)、伊藤(4)、竹川(2)、根岸(2)
4/6-7	羊蹄山(北千島遠征にむけての準備山行)	L石塚(4)、SL加藤(OB1)、斉藤(3)、(阿部OB)
4/27-5/4	白金温泉－美瑛富士避難小屋－オプタテシケ山－トムラウシ山－ヒサゴ沼避難小屋－化雲岳－カウン沢－下山	L小池(4)、SL堀川(3)、吉田(2)
4/28-5/4	トッタベツヒュッテ－エサオマントッタベツ出合－エサオマントッタベツ岳－JP－10.5沢カール－ナメワツカ分岐手前引返し－札内岳－トツタベツヒュッテ	L吉村(4)、SL秦(3)、海老(3)、渡部(2)
4/28-5/4	羅臼－知床横断道路わき－羅臼岳－三ツ峰－南西ルンゼ手前－キャンプ場下山	L扇羽山(4)、SL白岡(3)、三崎(2)
4/29-5/5	無意根GW合宿	CL福島(4)、宮内(4)、亀田(4)、竹川(3)、根岸(3)、榊山(3)、田村(1)、坂口(1)、上田(1)、伊藤(1)、高見(1)、北川(1)、赤木(1)、星野(1)、成瀬(OB1)
5/26-28	積丹岳	L秦(3)、SL森島(2)、三崎(2)、渡辺(2)、渡部(2)
6/3-9	サマースキー(表大雪にて終日スキー)	L秦(3)、SL渡辺(2)、北川(1)、伊藤(1) L白岡(3)、SL渡部(2)、赤木(1)、田村(1) L堀川(3)、SL吉田(2)、神田(1)、坂口(1) L小池(4)、SL森島(2)、上田(1)、高見(1) L宮内(4)、SL三崎(2)、星野(1)
6/6-9	サマースキー(表大雪にて終日スキー)	L海老(3)、SL榊山(3)、福島(4)
6/23-24	羊蹄山	L森島(2)、SL吉田(2)
6/29-30	沢入門(白水沢)	L吉村(4)、SL榊山(3)、三崎(2)
6/29-7/1	沢入門(白水沢)	L福島(4)、SL宮内(4)、坂口(1) L白岡(3)、SL森島(2)、上田(1)、高見(1)、伊藤(1) L海老(3)、SL吉田(2)、渡部(2)、神田(1)、田村(1) L秦(3)、SL渡部(2)、赤木(1)、北川(1)、星野(1) L吉村(4)、SL榊山(3)、三崎(2)
7/1		L小池(4)、SL堀川(3)
7/6-7	積丹西海岸(知床の海岸歩きのための準備山行)	L森島(2)、SL吉田(2)、渡部(2)、秦(3)
7/7-8	沢入門(白水沢)	L吉村(4)、SL榊山(3)、上田(1)、星野(1)
7/13-15	夏山スキー(旭岳)	L白岡(3)、SL堀川(3)、古子(1)
7/13-15	札的沢	L福島(4)、SL海老(3)、森島(2)
7/15	発寒川	L吉村(4)、SL榊山(3)、上田(1)、星野(1) L石塚(4)、SL宮内(4)、渡辺(2)、伊藤(1)、神田(1)
7/21	沢入門(白水沢)	L高村(OB1)、SL斉藤(3)、赤木(1)、田村(1)、高見(1)
7/21-25	余別川	L福島(4)、SL海老(3)、森島(2)
7/22-29	上高地－徳沢－一の俣－ババ平－天狗原分岐－南岳－南岳山荘－中岳－槍ケ岳－横尾－涸沢(スキー)－北穂N峰－S峰－徳沢－上高地	L白岡(3)、SL三崎(2)、坂口(1)、北川(1)、古子(1)
7/23-25	白井川	L石塚(4)、SL宮内(4)、渡辺(2)、伊藤(1)、神田(1)
7/27-8/2	振内－幌尻山荘－幌尻北カール－幌尻岳－新冠川上二股－エサオマン北カール－エサオマントッタベツ岳－J.P.－10.5の沢カール－札内川十ノ沢－ハノ沢－カムイエクウチカウシ山－ハノ沢－札内川ピヨウタンの滝	L吉村(4)、SL榊山(3)、上田(1)、星野(1)
7/27-8/6	振内－幌尻山荘－幌尻北カール－幌尻岳－新冠川上二股－エサオマントッタベツ岳－札内川10.5の沢出合－ハの沢－カムエイエクウチカウシ山－1823峰－コイカクシュ札内岳－ヤオロマップ岳－ルベツネ山－ペテガリ岳－下降尾根－ケルン－ヤオロマップ川－大樹	L小池(4)、SL秦(3)、吉田(2)、渡部(2)
7/28	発寒川	L高村(OB1)、SL斉藤(3)、赤木(1)、田村(1)、高見(1)
7/30-8/7	ウトロ－イダシュベツ川－硫黄山－カムイワツカ口－テツパンベツ川河口－コタキ川－知床池－知床岳－知床沼－オキッチウシ川河口－知床岬－相泊	L石塚(4)、SL宮内(4)、渡辺(2)、伊藤(1)、神田(1)
8/1-5	ヌピナイ川－ソエマツ岳－奥二股－神威岳－ニシュオマナイ沢－荻伏	L福島(4)、SL海老(3)、森島(2)
8/1-6	天人峡－カウンナイ沢－北沼－トムラウシ山－ワセダ沢－地獄谷－沼ノ原－石狩岳－二十一の沢－十勝三股	L高村(OB1)、SL斉藤(3)、田村(1)、高見(1)
8/8	発寒川	L吉村(4)、SL白岡(3)、三崎(2)、坂口(1)
8/13-21	斜里－岩尾別温泉－羅臼岳－岩尾別－カムイワッカの滝－ルシヤ河口－タキノ川－タコ岩－カパルウタラ－オキツチウシ河口－アウンモイ番屋－知床岬－赤岩－相泊	L吉田(2)、SL森島(1)、田村(1)、星野(1)
8/15	滝沢	L石塚(4)、SL秦(3)、吉村(4)、海老(3)、斉藤(3)
8/15-22	伊予三島－床鍋－権現越－東赤石岳－西赤石岳－銅山越－笹ケ峰－伊予富士－瓶ケ森－東之川－西条	L渡辺(2)、SL渡部(2)、神田(1)、北川(1)
8/17-20	大函－沼ノ原－五色岳－忠別小屋－忠別岳－白雲小屋－北海岳－層雲峡	L榊山(3)、SL古川(OB1)、伊藤(1)
9/5	八剣山	L伊藤(4)、SL横山(4)、長尾(3)
9/14-16	ニセイノシキマップ川	L石塚(4)、SL秦(3)、海老(3)、森島(2)
9/15-17	暑寒別岳	L森島(1)、SL渡部(2)、吉田(2)、三浦(1)
9/16-17	空沼岳・札幌岳	L長尾(3)、SL吉村(3)、宮内(3)、伊藤(4)
9/21	白水沢	L杉山(OB1)、SL秦(3)、三浦(1)

9/22-25	トムラウシ山	L秦(3)、SL石塚(4)、三崎(2)、北川(1)、坂口(1)
9/29-30	狩場山	L高橋(4)、SL成瀬(4)

79 season　1990(平成2)年10月～1991(平成3)年9月

部長：徳田昌生

主任：斎藤正美(3)／リーダー会議長前期：竹川徹(3)、後期：石塚吉浩(4)

10/3-6	大千軒岳・駒ヶ岳	L榊山(3)、SL古川(OG1)
10/6-7	芦別岳	L伊藤(1)、SL高見(1)、坂口(1)、星野(1)
10/12-13	十勝岳	L小池(4)、SL神田(1)、北川(1)、高見(1)
10/12-14	雨竜沼湿原・暑寒別岳	L田村(1)、SL伊藤(1)、星野(1)、赤木(1)
10/20-21	ホロホロ山・徳舜瞥山	L神保(WV3)、SL辻江(WV3)、矢島(WV1)、鈴木(フラテ4)、榊山(3)、根岸(真)(1)(他団体と合同の女性のみの山行)
11/2-4	十勝岳	L石塚(4)、SL根岸(3)、宮内(4)、秦(3)、竹川(3)
11/3-4	雌阿寒岳・阿寒富士	L亀田(4)、SL海老(3)、榊山(3)、渡部(2)、北川(1)、星野(1)、神田(1)
11/23-25	初滑り(旭岳が雪不足のため、無意根山で行った)	L石塚(4)、SL榊山(3)、高見(1)、赤木(1)、伊藤(1) L福島(4)、SL秦(3)、坂口(1)、星野(1) L宮内(4)、SL根岸(3)、上田(1)、神田(1) L小池(4)、SL海老(3)、北川(1)、田村(1) L亀田(4)、SL竹川(3)、根岸(1)
12/12-16	1年目新人合宿(旭岳)	CL鳥羽山(4)、SL榊山(3)、北川(1)、赤木(1)、高見(1) L宮内(4)、SL白岡(3)、星野(1)、坂口(1)、上田(1) L斉藤(3)、SL根岸(3)、福島(4)、根岸(1) L吉村(4)、SL堀川(3)、伊藤(1)、田村(1)、神田(1)
12/15-18	2年目初滑り(雪不足の為、再三にわたり延期)	L石塚(4)、SL秦(3)、森島(2)、三崎(2) L小池(4)、SL竹川(3)、渡部(2)
12/24-30	白金温泉－林道－オプタテシケ西尾根－オプタテシケ山－石垣山北西尾根－美瑛岳1460m引き返し－白金温泉	L鳥羽山(4)、SL根岸(3)、星野(1)
12/25-1/2	白金温泉－美瑛岳－オプタテシケ山西尾根－オプタテシケ山－白金温泉	L宮内(4)、SL白岡(3)、高見(1)、伊藤(1)
12/26-27	春香山	L亀田(4)、SL榊山(3)、海老(3)、根岸(1)
12/27-1/4	2年目新人合宿：十勝岳温泉－三峰山－S尾根－富良野岳－ハケ尾根－北尾根－三段山C1600引き返し－白金温泉	L石塚(4)、SL秦(3)、三崎(2)、森島(2)
12/27-1/7	布礼別－三峰山標高尾根－下ホロカメットクッ山－オプタテシケ山－トムラウシ温泉－地獄谷温泉－石狩岳－大雪湖下山	L小池(4)、SL竹川(3)、渡部(2)、田村(1)
12/29-1/3	滝奥一天塩富士北東尾根－天塩富士－天塩岳－浮木浮樹ランド下山	L福島(4)、SL堀川(3)、北川(1)、上田(1)
12/31-1/3	西布礼別－秋雲橋－富良野岳－三ノ沢－前富良野岳－秋雲橋下山	L亀田(4)、SL海老(3)、榊山(3)
1/5-12	新得－シイ十勝川－下ホロカメットク山－H尾根下－三峰山標高尾根－富良野岳－布礼別下山	L吉村(4)、SL斉藤(3)、坂口(1)
1/11-15	(ニセイカウシュッペ)Peakアタック、スキー	L鳥羽山(4)、SL堀川(3)、北川(1)、高見(1)
2/8-10	芦別北尾根	L鳥羽山(4)、SL竹川(3)、斉藤(3)、渡部(2)
2/9-10	積丹岳	L亀田(4)、SL森島(2)、田村(1)、北川(1)、坂口(1)
2/15-17	ニセコ連峰	L森島(2)、SL堀川(3)、根岸(1)
2/23-25	ニセコ強化合宿(新見、湯本、五角の温泉を中継点とした1年目リーダー訓練)	L白岡(4)、北川(1)、坂口(1)
2/23-26	ニセコ強化合宿	L秦(3)、田村(1)、伊藤(1)、赤木(1)
2/24-27	ニセコ強化合宿	L海老(3)、高見(1)、上田(1)、星野(1)
3/4-11	清里－斜里岳－サマツケ－標津岳－養老牛岳－裏摩周展望台－第一展望台	L亀田(4)、SL白岡(3)、森島(2)
3/5-6	羊蹄山	L宮内(4)、SL海老(3)、高見(1)
3/7-17	ピパロイ川林道－尾根上－1712mポコ－1967峰－芽室岳－小屋－下山	L吉村(4)、SL堀川(3)、榊山(3)、田村(1)
3/11-12	駒ヶ岳	L石塚(4)、SL根岸(3)、根岸(1)
3/17-23	仙人岱ヒュッテ－高田大岳－大岳－赤倉－酸ケ湯温泉	L石塚(4)、SL根岸(3)、根岸(1)
3/19-20	樽前山	L小池(4)、SL堀川(3)、赤木(1)、伊藤(1)、坂口(1)
3/20-30	聞沢－根子－日暮沢小屋－清太岩山－竜門小屋－寒江山－狐穴小屋－寒江山－西朝日岳－大朝日岳－日暮沢小屋一根子	L福島(4)、SL秦(3)、星野(1)
3/21-30	白馬－栂池－乗鞍岳－白馬岳－兵馬ノ平－白高地沢－蓮華温泉－ヤッホー平－栂平－木地屋下山	L宮内(4)、SL海老(3)、北川(1)、高見(1)
3/28-4/5	鴛泊－北稜500m引き返し－沓形稜下・周辺スキー－オチウシナイ川－利尻山－営林署下山	L小池(4)、SL白岡(3)、堀川(3)、坂口(1)、伊藤(1)
4/27-5/2	無意根GW合宿	CL竹川(4)、榊山(4)、海老(4)、堀川(4)、渡辺(3)、三崎(3)、根岸(2)、中村(1)、佐野(1)、中島(1)、真田(1)、芳賀(1)、松岡(1)、渡辺(一)(1)、千葉(1)、北沢(1)
4/27-5/3	中札内－北東尾根－1803m－戸蔦別岳－額平岳－千栄	L根岸(4)、SL渡部(3)、坂口(2)、北川(2)
4/27-5/4	層雲峡－黒岳石室－北海岳－白雲石室－忠別岳－忠別石室－五色岳－ヒサゴ避難小屋－天人峡下山	L白岡(4)、SL森島(3)、上田(1)、田村(1)
4/28-5/2	狩場山	L斉藤(4)、SL秦(4)、赤木(2)、神田(2)、高見(2)、伊藤(2)
5/3-4	無意根小屋60周年祭	
5/10-12	余市岳	L森島(3)、SL高見(2)、根岸(2)
5/11-17	文部省登山研修所および剣岳周辺での登山研修会	北川(2)
5/17-19	暑寒別岳	L田村(2)、SL伊藤(2)、神田(2)、坂口(2)
5/17-19	芦別岳	L斉藤(4)、SL渡部(3)、根岸(4)、竹川(4)
6/2-8	サマースキー(表大雪にてスキー)	CL渡辺(3)、SL神田(2)、福田(1)、芳賀(1) L秦(4)、SL星野(2)、赤木(2)、藤田(1)、中島(1) L斉藤(4)、SL伊藤(2)、根岸(2)、松岡(1)、北村(1) L堀川(4)、SL上田(2)、北沢(1) L渡部(3)、SL北川(2)、渡辺(1)、千葉(1) L田村(2)、SL坂口(2)、中村(1)、佐野(1)、根岸(4)
6/4-8	サマースキー(表大雪にてスキー)	L竹川(4)、SL成瀬(OB1)、高見(2)、真田(1)

6/21-23	白水沢	L竹川(4)、SL田村(2)、根岸(2)、福田(1) L堀川(4)、SL星野(2)、渡辺(3)
6/22-23	白水沢	L秦(4)、SL上田(2)、千葉(1)、北沢(1) L海老(4)、SL高見(2)、赤木(2)、中村(1)、藤田(1) L斉藤(4)、SL伊藤(2)、渡辺(1)
6/29-30	白水沢	L斉藤(4)、SL渡部(3)、坂口(2)、真田(1)、北村(1) L竹川(4)、SL神田(2)、北川(2)、佐野(1)、松岡(1) L白岡(4)、SL堀川(4)、芳賀(1)
7/7	漁川	L宮内(OB1)、SL石塚(OB1)、中島(1)、芳賀(1)
7/12-13	札的沢	L秦(4)、SL斉藤(4)、神田(2)、伊藤(2)、坂口(2) L海老(4)、SL福島(OB1)、星野(2)
7/12-13	漁川	L竹川(4)、SL田村(2)、根岸(2)、真田(1)
7/13	発寒川	L堀川(4)、SL渡部(3)、北沢(1)、福田(1)
7/14	発寒川	L鳥羽山(OB1)、SL白岡(4)、赤木(2)、千葉(1)、藤田(1)
7/14	白水川	L宮内(OB1)、SL成瀬(OB1)、中島(1)、北村(1)、芳賀(1)
7/18	アポイ岳	L海老(3)、SL秦(3)
7/24-30	知床大橋－知床川－オキツチウシ川－ポロモイ－知床岬－相泊	L坂口(2)、SL赤木(2)、佐野(1)、藤田(1)
7/24-30	知床大橋－コタキ川－カムイワツカ湯ノ滝－斜里	L秦(4)、SL堀川(4)、福田(1)、北沢(1)
7/24-8/4	夏スキー(十勝岳温泉－上ホロカメットク避難小屋－十勝岳－美瑛富士避難小屋－白金温泉)	L高見(2)、SL伊藤(2)、真田(1)、千葉(1)
7/25-28	札内ヒユツテ－コイカクシュ札内沢出合－札内ヒユツテ下山	L神田(2)、SL星野(2)、根岸(2)、松岡(1)
7/30-8/5	千呂露川林道－チロロ岳－北戸蔦別岳－戸蔦別岳－幌尻山荘	L宮内(OB1)、SL石塚(OB1)、中島(1)、北村(1)、芳賀(1)
8/4-7	天人峡－カウンナイ沢－トムラウシ山－ヒサゴ沼避難小屋－化雲岳－天人峡	L鳥羽山(OB1)、SL白岡(4)、赤木(2)、千葉(1)、藤田(1)
8/5	発寒川	L堀川(4)、SL渡部(3)、中村(1)、松岡(1)、佐野(1)
8/6-8	白井川	L竹川(4)、SL田村(2)、根岸(2)、真田(1)
8/7-8	冊内川	L海老(4)、SL福島(OB1)、星野(2)
8/7-10	余別川	L斉藤(4)、神田(2)、伊藤(2)、坂口(2)
8/10-15	中房温泉－燕岳－大天荘－水俣乗越－横尾－掴沢引き返し－徳沢－上高地下山	L上田(2)、SL北川(2)、芳賀(1)
8/11-13	白井川	L堀川(4)、SL渡部(3)、松岡(1)、佐野(1)、中村(1)
8/12-17	振内－額平川－幌尻岳－新冠川二股－エサマオントッタベツ岳－カムイエクウチカウシ山－札内川－ピョウタンの滝	L竹川(4)、SL田村(2)、根岸(2)、真田(1)
8/14-19	ニオベツ川－十勝岳－メナシュンベツ川－楽古岳－札楽古川左股沢－広尾	L海老(4)、SL福島(OB1)、星野(2)
8/17-23	静内ーペテガリ山荘－ペテガリ川B沢－ペテガリ岳－東尾根－ポンヤオロマップ岳－ヤオロマップ川－大樹町	L秦(4)、SL斉藤(4)、神田(2)、伊藤(2)、坂口2
8/18-19	白水沢	L根岸(4)、SL榊山(4)、石塚(OB1)、中島(1)
8/18-22	天人峡－カウンナイ沢－トムラウシ山－南沼－オプタテシケ山－美瑛富士避難小屋－美瑛岳－白金温泉	L堀川(4)、SL渡部(3)、松岡(1)、佐野(1)、中村(1)
8/18-22	札内川－札内岳－札内川	L鳥羽山(OB1)、SL白岡(4)、赤木(2)、藤田(1)、千葉(1)
8/24-30	文部省登山研修所および剣岳周辺での登山研修会	田村(2)
9/15-16	札幌岳－空沼岳	L真田(1)、SL佐野(1)、北沢(1)、北村(1)
9/15-17	石狩岳	L松岡(1)、SL中島(1)、芳賀(1)
9/22-23	羊蹄山	L吉村(4)、SL鳥羽山(4)、他3名
9/29	恵庭岳	L坂口(1)、SL高見(1)、伊藤(1)、神田(1)、星野(1)、北川(1)
9/29-30	ニセコ連峰	L森島(3)、SL吉田(3)、渡辺(3)、渡部(3)
	部員総会	

80 season　1991(平成3)年10月～1992(平成4)年9月

部長：徳田昌生

主任：渡部哲哉(3)／リーダー会議長：田村整(3)

10/5-6	恵庭岳	L芳賀(1)、SL千葉(1)、北村(1)、中村(1)、松岡(1)
10/6	定山渓天狗岳	L根岸(4)、SL斎藤(4)、渡部(3)、北川(2)
11/2-3	ニセコ	L根岸(2)、SL藤田(1)、北村(1)、矢島(HUWV2)
11/2-3	十勝岳(2年目新人合宿の下見山行)	L堀川(4)、SL秦(4)、海老(4)、伊藤(2)、田村(2) L白岡(4)、SL渡部(3)、赤木(2)、神田(2)
11/21-24	初滑り(旭岳)スタッフ不足のため、1年生と2年生の期間を分けて実施	L堀川(4)、SL斎藤(4)、竹川(4)、北川(2)、坂口(2)、星野(2) L根岸(4)、SL白岡(4)、伊藤(2)、神田(2)、田村(2) L秦(4)、SL渡部(3)、赤木(2)、上田(2)、高見(2) L堀川(4)、SL海老(4)、榊山(4)、根岸(2)、藤田(1) L根岸(4)、SL成瀬(OB2)、真田(1)、佐野(1)、松岡(1)、渡辺(1) L斎藤(4)、SL三崎(3)、北沢(1)、中島(1)、中村(1)、福田(1) L石塚(OB1)、SL渡部(3)、北村(1)、千葉(1)、芳賀(1)、吉田(1)
12/15-22	無意根新人合宿	CL根岸(4)以下25名
12/27-1/2	2年目新人合宿(旭岳)	L堀川(4)、SL竹川(4)、三崎(3)、赤木(2)、伊藤(2) L根岸(4)、SL海老(4)、上田(2)、坂口(2)、高見(2)
12/27-1/3	布礼別－砂防ダム－三の沢源頭－S尾根C.1280－標高尾根(スキー)－F尾根－富良野岳－シー　ソラプチ川二股－境山－トウヤウスベ山北コル－三の沢源頭－布礼別下	L石塚(OB1)、SL榊山(4)、芳賀(1)、松岡(1)、渡辺(1)
12/27-1/4	布礼別－砂防ダム－三の沢源頭－S尾根－標高尾根(スキー)－F尾根－富良野岳－シーソラプチ川二股(C6)－境山－H尾根－三峰標高尾根－カーデボ地	L宮内(OB1)、SL福島(OB1)、千葉(1)、藤田(1)
12/28-1/3	2年目新人合宿(旭岳)	L秦(4)、SL白岡(4)、北川(2)、星野(2) L斎藤(4)、SL渡部(3)、神田(2)、田村(2)
1/7-11	清川－夏道尾根－C1250付近BC－1742引返し－西尾根でスキー－西尾根経由でニセカウシュッペ－BC－清川	L根岸(4)、SL渡部(3)、中島(1)、中村(1)、吉田(1)
1/8-10	積丹岳	L竹川(4)、SL堀川(4)、北沢(1)、北村(1)、真田(1)

1/10-15	清川－夏道尾根－1500引返し－西尾根1697斜面下でBC－ニセカウシュッペ－BC－清川	L斎藤(4)、SL榊原(4)、佐野(1)、福田(1)
1/11-15	積丹岳	L田村(2)、SL坂口(2)、伊藤(2)
1/26	八剣山	L根岸(4)、SL斎藤(4)、赤木(2)、伊藤(2)、坂口(2)
1/31-2/2	春香山	L田村(3)、SL坂口(3)、北沢(2)、真田(2)、芳賀(2)
2/1	八剣山	L堀川(4)、SL秦(4)、石塚(OB1)
2/1-2	百松沢山	L北川(2)、SL赤木(2)、佐野(1)、千葉(1)、渡辺(1)
2/6-10	ニペソツ山	L斎藤(4)、SL根岸(4)、伊藤(2)、坂口(2)
2/6-10	ニペソツ山	L白岡(4)、SL渡部(3)、神田(2)、高見(2)、星野(2)
2/7-9	ニセコ連峰	L渡部(3)、SL神田(2)、北村(1)、佐野(1)、芳賀(1)
2/25	赤岩	L堀川(4)、SL秦(4)、上田(2)、北川(2)、田村(2)
2/25-29	空沼岳－漁岳	L田村(2)、SL星野(2)、北村(1)、佐野(1)、藤田(1)
2/26-27	余市岳－白井岳	L鳥羽山(OB1)、SL三崎(3)、真田(1)、千葉(1)、吉田(2)
2/27-3/6	文部省登山研修会参加	松岡(1)
3/2-3	樽前山	L白岡(4)、SL渡部(3)、神田(2)、芳賀(1)
3/3-5	東大雪デポ山行	L堀川(4)、SL田村(2)、北川(2)
3/3-10	旭岳温泉－姿見の池－ピウケナイ沢－周辺スキー－旭岳－周辺スキー－旭岳温泉	L鳥羽山(OB1)、SL三崎(3)、北沢(1)、真田(1)、千葉(1)、吉田(1)
3/3-11	戸蔦別川－十勝幌尻岳北尾根－十勝幌尻岳－札内岳－札内J.P.－10.5沢カール－ナメワッカJ.P.－カムイエクウチカウシ山－八の沢左岸尾根－札内川－ピヨウタンの滝	メンバー名なし
3/12-18	暑寒別岳	L海老(4)、SL福島(OB1)、藤田(1)、松岡(1)
3/13-23	十勝三股－音更大橋－ブヨ沢－音更手前コル－石狩岳－JP－1488北コル－天狗のコル－ニペソツ山－丸山－ウペペサンケ山－糠平	L堀川(4)、SL秦(4)、上田(2)、北川(2)、田村(2)
3/17-27	薬師岳～双六岳	L白岡(4)、SL渡部(3)、神田(2)、高見(2)、星野(2)、芳賀(1)
3/18-24	日勝峠－沙流岳手前コル－ペンケヌーシ北尾根－ペンケヌーシ岳－芽室岳南西尾根－芽室岳－夏道尾根－御影	L根岸(4)、SL坂口(2)、根岸(2)
3/20-25	パンケヌーシ川林道－六の沢－ペンケヌーシ標高尾根コル－パンケヌーシ岳－六の沢出合い－止別岳－雪盛山－芽室岳－夏道尾根－羽帯	L竹川(4)、SL伊藤(2)、北村(1)、佐野(1)、福田(1)
3/28-4/2	酸ケ湯温泉－仙人岱ヒュッテB.C.周辺スキー－地獄沼－酸ケ湯温泉	L秦(4)、SL赤木(2)、北沢(1)、千葉(1)、中村(琢)(1)
3/28-4/6	日勝峠－ペケレベツ－ペケレウェンザル－ウェンザル岳－パンケヌーシ岳－芽室岳－奥の沢川のS尾根－ビバイロ林道	L堀川(4)、SL田村(2)、真田(1)、中島(1)
3/29-4/2	暑寒別岳	L斎藤(4)、SL北川(2)、吉田(1)
4/18-19	新人歓迎合宿	CL北沢(2)
4/27-5/3	白金温泉林道－美瑛富士避難小屋－悪天のため停滞－白金温泉下山	田村(2)、SL伊藤(2)、根岸(真)(2)、中村(1)、芳賀(1)
4/29-5/4	石狩岳・音更山	L三崎(3)、SL神田(2)、北村(2)、真田(2)、佐野(2)
4/29-5/5	無意根GW合宿	CL上田(3)、渡部(4)、坂口(3)、星野(3)、吉田(2)、飯田(1)、小川(1)、北森(1)、国司(1)、竹内(1)、本山(1)、宮川(1)、渡辺(1)、加藤(OB1)(4/29-5/3)、堀川(OB1)、藤田(2)、松岡(2)、渡辺(2)(5/2-5)
4/29-5/5	喜茂別岳－無意根山	L北川(3)、SL北沢(2)、千葉(2)、福田(2)
5/9-10	余市岳	L真田(2)、SL千葉(2)、北沢(2)、中村(琢)(2) L芳賀(2)、SL吉田(2)、北村(2)、福田(2)、藤田(2)
5/15-18	暑寒別岳	L真田(2)、SL北沢(2)、芳賀(2)
5/16-17	余市岳	L神田(3)、SL伊藤(3)、坂口(3)、高見(3)
5/16-20	文部省登山研修会参加	佐野(2)
5/31-6/6	サマースキー　表大雪にて終日スキー	L赤木(3)、SL真田(2)、神田(3)、北森(1)、竹内(1) L伊藤(3)、SL芳賀(2)、飯田(1)、渡辺(1) L北川(3)、SL吉田(2)、小川(1)、中村(1) L坂口(3)、SL中村(琢)(2)、本山(1) L田村(3)、SL渡辺(2)、北村(2)、国司(1)、宮川(1) L千葉(2)、SL福田(2)、北沢(2)
6/4-6	サマースキー　表大雪にて終日スキー	L上田(3)、SL藤田(2)、三崎(4)、渡部(3)、星野(3)、松岡(2)
6/19-21	沢入門/白水沢	L星野(3)、SL芳賀(2)、中村(平)(1)、本山(1) L伊藤(3)、SL真田(2)、北沢(2)、小川(1)
6/20-21	沢入門/白水沢	L坂口(3)、SL千葉(2)、福田(2)、宮川(1)
6/20-21	アポイ岳	L藤田(2)、SL北村(2)、渡辺(2)
6/26-28	沢入門/白水沢	L田村(3)、SL松岡(2)、渡辺(2)、竹内(1)、渡辺(1)
6/27-28	沢入門/白水沢	L渡部(4)、SL中村(琢)(2)、吉田(2)、北森(1)、国司(1) L赤木(3)、SL藤田(2)、北川(3)、北村(2)、飯田(1)
7/4	白水沢	L田村(3)、SL北川(3)、中島(2)、中村(琢)(2)、福田(2)
7/5	発寒川	L星野(3)、SL赤木(3)、北村(2)、芳賀(2)、吉田(2)
8/10	発寒川	L渡部(4)、SL栗崎(OB3)、松岡(2)、渡辺(2)、飯田(1) L田村(3)、SL北川(3)、中島(2)、中村(琢)(2)、福田(2)
8/11	発寒川	L星野(3)、SL赤木(3)、北村(2)、中村(平)(1)
8/11	白水沢	L坂口(3)、SL伊藤(3)、真田(2)、千葉(2)
8/12-14	白水沢	L田村(3)、SL北川(3)、中島(2)、中村(2)、福田(2)
8/12-19	新穂高温泉－槍平小屋－鎗が岳－南岳－南岳小屋－大キレット－北穂高－白出乗越－岳沢－上高地下山	L上田(3)、SL芳賀(2)、国司(1)、本山(1)、渡辺(1)
8/14-18	天人峡－カウンナイ川－ポンカウン出合－ヒサゴ沼避難小屋－化雲岳－天人峡	L星野(3)、SL赤木(3)、北村(2)、中村(1)
8/15-18	札的沢	L坂口(3)、SL伊藤(3)、真田(2)、千葉(2)
8/16-17	白水沢	L渡部(4)、SL栗崎(OB3)、松岡(2)、渡辺(2)、飯田(1)
8/18-20	暑寒別川本流	L田村(3)、SL北川(3)、中島(2)、中村(2)、福田(2)
8/21-22	天人峡－入水C.610－二股C1－C.1480二股－夏道－天人峡下山	L坂口(3)、SL伊藤(3)、真田(2)、千葉(2)
8/22-28	文部省登山研修会参加	星野(3)
9/12-17	ペテガリ山荘－ペテガリ岳－Cカール－ルベツネ山－1600峰－オロマツプ岳－コイカクシュ札内岳－上二股－林道終点－ピョウタンの滝下山	L中島(2)、SL千葉(2)、北村(2)、中村(1)、宮川(1)

9/17	琴似発寒川	L伊藤(3)、SL坂口(3)、小川(1)、竹内(1)、渡辺(1)
9/22-24	白井川	L伊藤(3)、SL坂口(3)、小川(1)、竹内(1)、渡辺(1)
9/23	白井川	L北川(3)、SL中村(琢)(2)、飯田(1)、中村(平)(1)、宮川(1)
	部員総会	

81 season　1992(平成4)年10月～1993(平成5)年9月

部長：在田一則

主任：赤木憲二(3)／リーダー会議長：田村整(3)

10/24-25	恵庭岳	L小川(1)、SL飯田(1)、本山(1)、宮川(1)
11/1	定山渓天狗山	L吉田(2)、SL北沢(2)、藤田(2)、国司(1)
11/21-23	初滑り　旭岳	L渡部(4)、SL田村(3)、根岸(3)、中村(1)、北森(1)、飯田(1) L秦(OB2)、SL北川(3)、本山(1)、竹内(1)、宮川(1) L福島(OB2)、SL上田(3)、小川(2)、国司(2)、田中(2) L斉藤(OB2)、SL赤木(3)、伊藤(3)、藤田(2)、一弘(2)、真田(2)
11/27-29	初滑り　旭岳	L渡部(4)、SL坂口(3)、松岡(2)、吉田(2)、北森(2) L斉藤(OB2)、SL田村(3)、芳賀(2)、福田(2)、佐野(2)
12/19-26	無意根新人合宿	CL北川(3)、森島(4)、三崎(4)、渡部(4)、阪口(3)、星野(3)、赤木(3)、北沢(2)、真田(2)、芳賀(2)、竹内(1)、本山(1)、小川(1)、国司(1)、中村(1)、田中(1)、北森(1)、飯田(1)、宮川(1)
12/22-25	芦別岳	L竹川(OB2)、SL田村(3)、吉田(2)、中村(2)、藤田(2)
12/26-1/1	トムラウシ温泉－トムラウシ南東・1115C－トムラウシ東尾根壁下－トムラウシ山－忠別岳東尾根下－五色が原地獄谷－トムラウシ温泉	L三崎(4)、SL星野、千葉(2)、福田(2)、一弘(2)
12/31-1/8	千栄－千呂露川林道－北トツタベツ岳北西l500台地－黒沢カール－トツタベツ岳－林道－千栄	L竹川(OB2)、SL田村(3)、吉田(2)、中村(2)
1/1-7	十勝岳温泉－D尾根－上ホロ避難小屋－十勝岳－D尾根－十勝岳温泉	L渡部(4)、SL北川(3)、真田(2)、芳賀(2)、松岡(2)
1/3-8	白金温泉－ボン水無川出合－西尾根－オプタテシケ山－白金温泉	L宮内(OB3)、SL坂口(3)、北沢(2)、佐野(2)
1/13-16	清川－西尾根－ニセイカウシュッペ山－清川	L上田(3)、SL坂口(3)、根岸(3)、神田(3)、本山(1)
1/14-16	中山峠－無意根山－薄別	L竹川(OB2)、SL田村(3)、堀川(OB2)、秦(OB2)、北川(3)、松岡(2)
1/14-16	積丹岳	L星野(3)、SL赤木(3)、佐野(2)、宮川(1)、竹内(1)、小川(1)
1/14-17	ヘルヴェチアヒュッテ－奥手稲山の家－銀嶺荘－銭函	L北沢(2)、SL真田(2)、吉田(2)
1/29-31	徳舜別山－夏道コース途中引返し	L吉田(2)、SL中村(2)、小川(1)、国司(1)、田中(1)
1/30-31	手稲ハイランド－奥手稲山の家－ヘルヴェチアヒュッテ	L赤木(3)、SL北川(3)、宮川(1)、中村(1)、飯田(1)
2/12-14	百松橋－神威岳－烏帽子山－百松沢山－平和の滝	L田村(3)、SL北川(3)、M宮川(1)、中村(1)、飯田(1)
2/25-26	羊蹄山/真狩コースc1550にて引返し	L石塚(OB3)、SL上田(3)、本山(1)、小川(1)、北森(1)
2/25-3/2	函岳	L堀川(OB2)、SL坂口(3)、北沢(2)、一弘(2)、藤田(2)
2/26-28	無意根スキーツアー	CL赤木(3)
3/3-9	札楽古－林道－楽古岳東c11OO－楽古岳－十勝岳－双子山－上杵臼	石塚(OB3)、SL上田(3)、本山(1)、小川(1)、北森(1)
3/9-17	トムラウシ温泉－トムラウシ南東－トムラウシ山－五色尾根下－忠別岳東尾根にてスキー－忠別岳－ポン忠別岳－融雪沢二股－旭岳－旭岳温泉	L福島(OB3)、SL赤木(3)、真田(2)、中村(2)、藤田2
3/13-16	羊蹄山/北尾根より	L渡部(4)、SL坂口(3)、吉田(2)、千葉(2)、福田(2)
3/16-20	旭岳温泉－姿見石室－ピウケナイ沢－北鎮岳－比布岳－姿見－旭岳温泉	L斉藤(OB2)、SL星野(3)、神田(3)、竹内(1)、田中(1)、国司(1)
3/22-29	豊似－大庭牧場－トヨニ岳－ピリカヌプリ－エマツ東c880－高田牧場	L渡部(4)、SL坂口(3)、吉田(2)、福田(2)、千葉(2)
3/30-4/5	立山駅－美女平－関学ヒュッテ－室堂ターミナル－一ノ越－御山－真砂岳－別山乗越－美女平－立山駅	L三崎(4)、SL上田(3)、芳賀(2)
4/10-11	定山渓天狗岳	L千葉(3)、SL北沢(3)、吉田(3)
4/10-11	羊蹄山	L真田(3)、SL藤田(3)、中村(3)、北森(2)、国司(2)
4/17-18	新人歓迎無意根合宿	CL飯田(2)
4/28-5/4	トツタベツヒュッテ－戸蔦別川八の沢－主稜線－幌尻岳－戸蔦別岳－北戸蔦別岳－ピパイロ岳－伏美岳－妙敷岳－トッタベツ林道	L坂口(4)、SL吉田(3)、竹内(2)、中村(2)、宮川(2)
4/29-5/4	稚内－鴛泊－長官山－－鴛泊	L上田(4)、SL千葉(3)、飯田(2)、北森(2)、国司(2)
4/29-5/4	白金温泉－ボン水無川－オプタテシケ山－前トムラウシ山－下山	L星野(4)、SL福田(3)、小川(2)、田中(2)、本山(2)
4/29-5/5	無意根GW合宿	CL赤木(4)、神田(4)、北沢(3)、中村(3)、青山(1)、安藤(1)、片倉(1)、河野(1)、佐藤(1)、富岡(1)、西村(1)、松井(1)、三代(1)、吉永(1)、斎藤(OB3)(4/29-30)、渡辺(3)(4/29-5/2)、真田(3)、藤田(3)(5/1-5)
5/14-17	狩場山	L星野(4)、SL吉田(3)、千葉(3)、真田(3)
5/15-16	浜益岳	L福田(3)、SL神田(4)、飯田(2)、田中(2)
5/15-16	余市岳	L国司(2)、SL宮川(2)、小川(2)
5/15-16	芦別本谷	L星野(4)、SL吉田(3)、千葉(3)、真田(3)
5/30-6/5	サマースキー /表大雪にて終日スキー	L福田(3)、SL宮川(2)、青山(1)、西村(1) L千葉(3)、SL本山(2)、佐藤(1)、入村(1) L吉田(3)、SL飯田(2)、河野(1)、松井(1) L神田(4)、SL中村(2)、小川(2)、片倉(1)、富永(1) L中村(3)、SL田中(2)、国司(2)、三代(1)、吉永(1) L真田(3)、SL竹内(2)、安藤(1)、富岡(1)
6/3-5	サマースキー /表大雪	L藤田(3)、SL上田(4)
6/25-26	沢入門/白水川	L田村(4)、SL吉田(3)、田中(2)、宮川(2)
6/26-27	沢入門/白水川	L赤木(4)、SL中村(3)、松岡(3)、中村(2)、吉永(1) L神田(4)、SL千葉(3)、佐藤(1)、入村(1) L坂口(4)、SL福田(3)、藤田(3)、小川(2)、竹内(2) L真田(3)、SL中島(3)、飯田(2)、国司(2)
7/2-4	白水川	L福田(3)、SL松岡(3)、富永(1)、三代(1) 千葉(3)、SL上田(4)、河野(1)、富岡(1)
7/3-4	白水川	L星野(4)、SL中村(3)、青山(1)

7/10-11	漁川	L神田(4)、SL千葉(3)、芳賀(3)、河野(1)、入村(1)
7/11	発寒川	L赤木(4)、SL松岡(3)、片倉(1)、西村(1)、富岡(1)
7/16-17	札的沢	坂口(4)、SL真田(3)、吉田(3)、宮川(2)、飯田(2)
7/17-18	白水川	L赤木(4)、SL松岡(3)、片倉(1)、西村(1)、富岡(1)
7/18	発寒川	L星野(4)、SL中村(3)、青山(1)、吉永(1)、富永(1)
7/23-24	旭岳温泉－旭岳東コル－北鎮岳－比布岳－中岳温泉－旭岳東コル－旭岳温泉	L竹内(2)、SL田村(4)、渡部(OB1)
7/24-25	余別川－47点出合－F8	L坂口(4)、SL真田(3)、吉田(3)、宮川(2)、飯田(2)
7/24-27	沙流川－幌尻山荘－幌尻北カール－幌尻岳－収穫小屋－奥新冠ダム	L赤木(4)、SL松岡(3)、片倉(1)、西村(1)、富岡(1)
7/26-30	十勝岳温泉－上ホロ小屋－十勝岳－美瑛岳－美瑛富士避難小屋－白金温泉	L小川(2)、SL国司(2)、安藤(1)
7/28-29	白井川	L神田(4)、SL千葉(3)、芳賀(3)、河野(1)、入村(1)
7/28-30	林道－暑寒別川－ホンジヤマ平－暑寒別岳－暑寒荘	L星野(4)、SL中村(3)、青山(1)、吉永(1)、富永(1)
8/2-7	静内川－ペテガリ山荘－B、C沢出合－A沢－ペテガリ岳－下降尾根→中の川追悼現場－中の川－林道	L坂口(4)、SL真田(3)、吉田(3)、宮川(2)、飯田(2)
8/3-9	沙流川－幌尻山荘－幌尻岳－トッタベツ岳－七の沢－神威直登沢出合－エサオマントツタベツ岳－山スキー沢出合－札内岳トツタベツヒュッテ	L神田(4)、SL千葉(3)、河野(1)、入村(1)
8/20-21	冷水沢/札幌－冷水沢－コル－湯ノ沢－豊浜	L真田(3)、SL坂口(4)、吉田(3)
9/19	宝来沢－長尾コル－無意根小屋－薄別下山	L吉田(3)、SL真田(3)、千葉(3)、芳賀(3)、中村(2)
	部員総会	

82 season　1993(平成5)年10月～1994(平成6)年9月

部長：在田一則

主任：吉田寛(3)／リーダー会議長：真田和彦(3)

10/1-3	南暑寒別荘－雨竜沼湿原－南暑寒別岳－南暑寒別荘下山(合同登山)	L小川(HUWV4)、SL根岸(4)、富永(1)、佐野(HUWV)、大田(HUWV)、伊倉(HUWV)、越(サイクリング)
10/2-3	小川本流	L吉田(3)、SL千葉(3)、飯田(2)、三代(1)、富岡(1)
10/9-10	休憩所－テントの沢－ピリカ台－積丹岳－婦美町	L富岡(1)、河野(1)、西村(1)、青山(1)
10/16-17	無意根小屋祭り	メンバー名なし
11/20-21	2年目初滑り(旭岳温泉－石室BC－北ガケC2000－BC－夏道C1800－BC－旭岳温泉下山。天候悪化のため、2日で下山)	L赤木(4)、SL福田(3)、飯田(2)、中村(2)、伊藤(4) L北川(4)、SL神田(4)、宮川(2)、田中(2)、北森(2) L田村(4)、SL吉田(3)、竹内(2)、小川(2)、北村(2)
12/2-6	山部－500m二股－御茶々・槙柏コル－ローソク岩－太陽の里	L星野(4)、SL真田(3)、竹内(2)、中村(2)、宮川(2)
12/4-6	1年目初滑り(旭岳温泉－BC・周辺スキー(EP訓練)－旭岳温泉)	L真田(3)、SL中村(3)、片倉(1)、河野(1) L千葉(3)、SL芳賀(3)、青山(1)、三代(1) L上田(4)、SL渡辺(3)、入村(1)、富永(1) L吉田(3)、SL藤田(3)、吉永(1)、富岡(1)
日付なし	1年目無意根新人合宿	メンバー名なし
12/16-20	十勝岳温泉－貝ガラマークBC－Rアタック－十勝岳温泉	L北川(4)、SL千葉(3)、M田中(2)
12/23-26	上川－奥白滝－ニセイカウシュッペ－北大雪スキー場	L北川(4)、SL千葉(3)、M田中(2)
12/27-31	糠平－ニペソツ南稜コル1940付近引き返し－国道	L星野(4)、SL真田(3)、竹内(2)、中村(2)、宮川(2)
12/27-1/2	千栄－千呂露川林道－9の沢－芽室岳－6、7の沢－千栄	L吉田(3)、SL中村(3)、片倉(1)、富永(1)
12/28-1/2	美瑛－十勝岳避難小屋－十勝岳－上ホロ小屋－上ホロカメットク山－十勝岳温泉	L赤木(4)、SL福田(3)、北森(2)、北沢(3)
12/28-1/3	御影－芽室岳－ペンケヌーシ川二股－周辺でスキー－スーパーシャンツェ－ペンケヌーシ山－3の沢出合－下山	L渡部(OB1)、SL藤田(3)、渡辺(3)、富岡(1)
12/28-1/3	西フレベツ－Sオネ基部－富良野岳－1083コル－トウヤウスベ－大麗山－麓郷	L田村(4)、SL伊藤(4)、入村(1)、青山(1)
1/7-15	千栄－千呂露川林道－糠平岳－黒沢カール－1967峰－ルベシベ分岐－1500コル－雪盛山－芽室岳－芽室小屋－御影	L斉藤(OB2)、SL神田(4)、小川(2)、飯田(2)
1/12-16	清川－夏道尾根－ニセイカウシュッペ－清川	L中村(3)、SL芳賀(3)、入村(1) L福田(3)、SL千葉(3)、青山(1)、富永(1)
1/13-15	水谷ロッジ－徳舜別山－水谷ロッジ下山	L藤田(3)、SL吉田(3)、三代(1)、河野(1)
1/13-18	上富良野－白金温泉－1200コル－1500コル引き返し－B壁引き返し－白金温泉	L田村(4)、SL真田(3)、北沢(3)
2/11	春香山(パチンコ尾根引き返し)	L北沢(3)、SL北森(2)、三代(1)、入村(1)、片倉(1)
2/11-12	積丹岳	L福田(3)、SL田中(2)、中村(3)、富岡(1)
2/11-13	春香山	L真田(3)、SL千葉(3)、富永(1)
2/12-13	チトカニウシ	L中村(2)、SL竹内(2)、小川(2)
3/7-8	積丹岳	L真田(3)、SL千葉(3)、富永(1)
3/8-14	十勝三股－杉沢尾根－1300コル付近－十勝三股	L神田(4)、SL福田(3)、松岡(3)、飯田(2)
3/9-16	千栄－3ノ沢－6、7ノ沢出合い－スーパーシャンツェ－ペンケヌーシ山－ポロナイ－パンケヌーシ山－芽室岳－芽室山荘－御影	L星野(4)、SL芳賀(3)、三代(1)、吉永(1)
3/10-12	札幌－二股川－群別岳－下山	L赤木(4)、SL中村(3)、田中(2)、竹内(2)、小川(2)
3/10-13	羊蹄山	L田村(4)、SL北沢(3)、青山(1)、入村(1)
3/10-13	十勝岳温泉－十勝岳Rアタック(停滞)－十勝岳温泉	L上田(4)、SL吉田(3)、宮川(2)、北森(2)、中村(2)
日付なし	無意根スキーツアー	一般参加者16名
3/11-20	音威子府－歌内－主稜線－パンケ山－すり鉢山－知駒岳－イソサンヌプリ南峰－イソサンヌプリ－ポンイソサン－猿払村	北川(4)、SL藤田(3)、河野(1)、富岡(1)
日付なし	函岳	L渡辺一弘(3)、SL ？？？
3/14-19	布礼別－秋雲橋－S尾根－富良野岳(引き返し)－標高尾根－布礼別	L真田(3)、SL千葉(3)、富永(1)
3/16-23	鴛泊－ボン下山－甘露泉－利尻岳－鴛泊	L田村(4)、SL北沢(3)、青山(1)、入村(1)
3/19-4/2	白馬村吉田宅別邸－八方尾根スキー場－出口OB宅－五竜遠見スキー場－八方尾根スキー場－栂池スキー場－神の田圃－下山(高度障害の為)－栂池スキー場－神の田圃－白馬大池－白馬岳－蓮華温泉－角小屋峠－木地屋部落－平岩駅	L上田(4)、SL吉田(3)、宮川(2)、中村(2)
3/21-4/1	羅臼－相泊－知床台地－ルサ山－主稜550コル－ルシヤ山－ルサ川－岬町	L赤木(4)、SL中村(3)、田中(2)、竹内(2)、小川(2)

3/22-27	十勝三股－杉沢尾根－前天狗岳－ニペソツ岳－天狗岳－十勝三股	L神田(4)、SL福田(3)、飯田(2)
4/28-5/7	札内ヒュッテ－八の沢出合－下降尾根－カムイエクウチカウシ山－ピラミッド－七・八の沢出合－札内ヒュッテ－ピヨウタンの滝	L吉田(4)、SL中村(3)、青山(2)、北沢(3)
4/29-5/4	十勝岳温泉－上ホロ小屋－十勝岳－美瑛岳－美瑛富士避難小屋－オプタテシケ山－白金温泉	L真田(4)、SL竹内(3)、河野(3)、片倉(2)
4/29-5/4	白金温泉－標高尾根－美瑛岳－オプタテシケ山－三股橋－トムラウシ温泉	L中村(4)、SL藤田(4)、入村(2)
4/29-5/4	十勝三股－音更大橋－十石峠－石狩岳－音更北西斜面－ユニ石狩岳－十石峠－十勝三股	L福田(4)、SL小川(3)、富岡(2)、三代(2)
4/29-5/5	無意根GW合宿	CL芳賀(4)、千葉(4)、松岡(4)、飯田(3)、北森(3)、田中(3)、宮川(3)、吉永(2)、富永(2)、渡部(OB2)、星野(OB1) (4/30～5/4)、上田(OB1) (5/1～5)
5/7-8	羊蹄山自然公園－羊蹄山－自然公園	L千葉(4)、SL芳賀(4)、松岡(4)
5/13	五色温泉－イワオヌプリ南東ルンゼスキー－北東ルンゼスキー－五色温泉	L真田(4)、SL北森(3)、千葉(4)
5/13-15	林道二股手前広場－待根山－ピンネシリ山－待根山－滝川	L小川(3)、SL田中(3)、河野(2)、吉永(2)、藤田(4)
5/29-6/4	サマースキー　旭岳周辺	L竹内(3)、SL吉永(2)、森本(1)、加藤(1) L飯田(3)、SL入村(2)、大島(1)、小河(1) L宮川(3)、SL河野(2)、松井(応)(1)、末安(1) L小川(3)、SL三代(2)、高岸(1)、千葉(4) L北森(3)、SL富岡(2)、松井(良)(1)、深田(1) L中村(3)、SL青山(2)、富永(2)、西山(1) L田中(3)、SL片倉(2)、真下(1)、永井(1)
6/1-4	サマースキー　旭岳周辺	L藤田(4)、SL芳賀(4)、渡部(OB2)、上田(OB1)
7/2	発寒川	L吉田(4)、SL宮川(3)、吉永(2)、河野(2)
7/2-3	林道終点－札的沢F10引き返し	L真田(4)、SL北沢(4)、青山(2)、三代(2)、北森(3)
7/3	発寒川	L福田(4)、SL中村(3)、深田(1)、大島(1)
7/9	発寒川	L赤木(OB1)、SL渡部(OB2)、永井(1)、松井(良)(1)、森本(1)
7/9	発寒川－WVの滝引き返し	L松岡(4)、SL芳賀(4)、加藤(1)、末安(1)
7/9	発寒川－WVの滝引き返し	L中村(4)、SL竹内(3)、富永(2)、高岸(1)、西山(1)
7/9-10	千代志別－千代志別川670二股－千代志別	福田(4)、SL中村(3)、深田(1)、大島(1)
7/15-16	林道終点－伊佐内川－積丹岳－夏道下山	福田(4)、SL中村(3)、深田(1)、大島(1)
7/15-17	豊羽鉱山－白井川1050の滝引き返し－豊羽鉱山	L赤木(OB1)、SL渡部(OB2)、永井(1)、松井(良)(1)、森本(1)
7/16-17	発寒川	神田(OB1)、SL小川(3)、小河(1)、真下(1)、松井(応)(1)
7/16-17	余別川51点沢－三段の滝引き返し	L真田(4)、SL北沢(4)、青山(2)、三代(2)、北森(3)
7/16-17	望岳台－夏道－札幌岳－ヒョウタン池－簾舞	L吉田(4)、SL田中(3)、吉永(2)、河野(2)
7/16-17	奥漁橋－漁岳－奥漁橋	L松岡(4)、SL芳賀(4)、加藤(1)、末安(1)
7/16-17	宝来沢	L千葉(4)、SL入村(2)、片倉(2)、富岡(2)
7/17	漁川－1010二股引き返し	L中村(4)、SL竹内(3)、富永(2)、高岸(1)、西山(1)
7/22-23	林道終点－札的沢F10引き返し	L千葉(4)、SL飯田(3)、富岡(2)、入村(2)、片倉(2)
7/22-24	林道終点－伊佐内川－積丹岳－大滝川	L吉田(4)、SL田中(3)、吉永(2)、河野(2)
7/22-31	大雪スキー縦走(層雲峡－黒岳－北海岳－旭岳－北鎮岳－リクマン北カール－北海岳－白雲岳－忠別岳－忠別小屋－五色岳－化雲岳－ひさご沼－トムラウシ山－三川台－コスマヌプリ－双子池－オプタテ山－美瑛富士避難小屋－白金温泉)	L中村(3)、SL小川(3)、深田(1)、大島(1)
7/24-29	天人峡－カウン沢－二股－トムラウシ山－ヒサゴ沼－化雲岳－天人峡下山	L中村(4)、SL竹内(3)、富永(2)、高岸(1)、西山(1)
7/26	古平川下二股川－F3引き返し	L真田(4)、SL北沢(4)、青山(2)、三代(2)、北森(3)
7/27	林道終点－札的沢F10引き返し	L千葉(4)、SL飯田(3)、富岡(2)、入村(2)、片倉(2)
7/27-31	南暑寒荘－展望台－南暑寒岳－徳富川－ホンジャマ沢－1000引き返し－南暑寒岳－南暑寒荘	L赤木(OB1)、SL渡部(OB2)、永井(1)、松井(良)(1)、森本(1)
7/29-30	小樽へーリポートーパンケ目国内川－目国内岳－新見温泉	L吉田(4)、SL宮川(3)、吉永(2)、河野(2)、田中(3)
7/29-31	雲石橋－見市川－遊楽部岳－乗越コル－平田内川－平田内温泉下山	L真田(4)、SL北沢(4)、青山(2)、三代(2)、北森(3)
7/30-31	余別川51点沢－F8引き返し	L千葉(4)、SL飯田(3)、富岡(2)、入村(2)、片倉(2)
7/31	展望台－ガマ沢－札幌岳－豊平峡	L松岡(4)、SL芳賀(4)、加藤(1)、末安(1)
8/4-5	西舎－登山口－コイボクシュメナシュンベツ川－楽古岳－登山口	L千葉(4)、SL飯田(3)、富岡(2)、入村(2)、片倉(2)
8/5-9	天人峡－カウン沢－ヒサゴ沼避難小屋－沼の原－クチャンベツ林道－国道	L松岡(4)、SL芳賀(4)、加藤(1)、末安(1)
8/5-10	斜里－カムイワッカ－ポンプタ川河口－ポトピラペツ川河口－ポロモイ番屋－知床岬－ペキン川河口－相泊	L吉永(2)、SL河野(2)、吉田(4)、田中(3)、宮川(3)
8/6-8	群別－群別川－群別岳－群別	神田(OB1)、SL小川(3)、小河(1)、真下(1)、松井(応)(1)
8/6-10	コイボク林道－三股－1823直登沢－1823峰－コイカクシュ札内岳－ヤオロマップ川－拓進	L真田(4)、SL北沢(4)、青山(2)、北森(3)
8/7-18	宮之浦－栗生－林道終点－桃太郎岩－二股－小楊子左俣－宮之浦岳－宮之浦	L千葉(4)、SL飯田(3)、富岡(2)、入村(2)、片倉(2)
8/13-19	中札内－札内川－北東カール－札内岳JP－10.5の沢カール－八の沢出合－八の沢カール－カムイエクウチカウシ山－八の沢－ピヨウタンの滝	神田(OB1)、SL小川(3)、小河(1)、真下(1)、松井(応)(1)
9/10	恵庭滝沢－F7引き返し	L吉田(4)、SL北沢(4)、富岡(2)、宮川(3)
9/11	恵庭滝沢	L真田(4)、SL千葉(4)、石塚(OB4)
9/13-17	須築川	L真田(4)、SL北沢(4)、吉田(4)、宮川(3)
9/15-17	札内ヒュッテ－コイカクシュ札内岳夏尾根－コイカクシュサツナイ岳－札内ヒュッテ－ピョウタンの滝	L富岡(2)、SL三代(2)、青山(2)、加藤(1)、深田(1)
9/22-24	暑寒荘－ボン暑寒沢－暑寒別岳－夏道－暑寒荘	L吉田(4)、SL田中(3)、青山(2)、富岡(2)
9/30-10/1	芦別岳	L小河(1)、SL森本(1)、加藤(1)、深田(1)、真下(1)
	部員総会	

83 season　1994(平成6)年10月～1995(平成7)年9月

部長：在田一則
主任：中村平(3)／リーダー会議長：北森康之(3)／庶務：入村貴行(2)

10/7-9	無意根滝沢	L吉田(4)、SL中村(平)(3)、藤田(4)、小河(1)、松井(応)(1)
10/9-10	芦別岳Ⅰ稜	L真田(4)、SL千葉(4)、小川(3)、田中(3)、富岡(4)
11/4-6	十勝岳グランドコース	L松岡(4)、SL中村(平)(3)、国司(3)、三代(2)
11/5-6	ニペソツ山	L中村(琢)(4)、SL北森(3)、千葉(4)、田中(3)
11/23-26	2年目旭岳合宿	L北沢(4)、SL中村(平)(3)、国司(2) L真田(4)、SL田中(4)、河野(2)、入村(2) L中村(琢)(4)、SL飯田(3)、青山(2)、三代(2) L福田(4)、SL芳賀(4)、片倉(2) L吉田(4)、SL小川(3)、富岡(2)
12/9-11	1年目初滑り旭岳	L千葉(4)、SL中村(平)(3)、加藤(1)、末安(1)、真下(1) L藤田(4)、SL北森(3)、大島(1)、松井(応)(1)、森本(1)
12/10-12	1年目初滑り旭岳	L芳賀(4)、SL飯田(3)、高岸(1)、西山(1) L小川(3)、SL田中(3)、小河(1)、深田(1)、松井(良)(1)
12/23-29	無意根新人合宿	CL千葉(4)、北沢(4)、芳賀(4)、藤田(4)、吉田(4)、飯田(3)、小川(3)、北森(3)、田中(3)、中村(平)(3)、青山(2)、片倉(2)、河野(2)、富岡(2)、入村(2)、大島(4)、小河(1)、加藤(1)、末安(1)、高岸(1)、西山(1)、深田(1)、真下(1)、松井(応)(1)、松井(良)(1)、森本(1)
12/29-1/7	糠平ー十石尾根ーブヨ沢ー音更山ー石狩岳ー石狩沢ー沼ノ原台地ー層雲峡	L中村(琢)(4)、SL中村(平)(3)、青山(2)、入村(2)
1/2-7	十勝岳温泉ー貝殻下ー三段山ーRー北尾根ーバーデンホテル	L北沢(4)、SL小川(3)、片倉(2)、河野(2)、国司(2)
1/2-7	十勝岳温泉ー三段山ーRー上ホロ小屋ーH下C	L松岡(4)、SL北森(3)、加藤(1)、高岸(1)
1/2-9	高原大橋ー石狩沢二股ー石狩岳ー五色岳ー標高尾根ートムラウシ温泉	L吉田(4)、SL藤田(4)、末安(1)、真下(1)、松井(応)(1)
1/3-15	布札別ー原始ケ原ー富良野岳ー三峰標高尾根ーHスロープー下ホロカメットク山ーブルマニ股ーオプタテシケ山西尾根1620引き返しー白金温泉	L千葉(4)、SL飯田(3)、大島(1)、小河(1)、深田(1)
1/4-11	白金温泉ー林道ーオプタテ西尾根ーオプタテシケ山ーベベツ方面スキーー東尾根スキーー美瑛富士北西尾根ー白金温泉	L芳賀(4)、SL真田(4)、西山(1)、松井(良)(1)、森本(1)
1/13-15	北見峠ーチトカニウシ山ー周辺スキーー下山	L青山(2)、SL国司(2)、加藤(1)、高岸(1)
1/14-16	銭函ー春香山ー銀嶺荘ー奥手稲山ー奥手稲山の家ー迷沢山ー平和の滝	L入村(4)、SL片倉(2)、三代(2)、末安(1)、松井(応)(1)
1/26-28	糠平林道入口ー1300引き返しー下山	L福田(4)、SL中村(平)(3)、富岡(2)、三代(2)
2/3-6	山部ー芦別岳ローソク岩ー1650ー山部	L吉田(4)、SL中村(平)(3)、青山(2)、富岡(2)
2/23-26	白金温泉ー林道ーオプタテシケ山東尾根ー白金温泉	L真田(4)、SL小川(3)、片倉(2)、河野(2)、国司(2)
2/26-28	一般募集無意根スキーツアー　今年は学生参加者も募集。楽しんでもらえた。	CL飯田(3)、他スタッフ14名　一般参加者18名
3/1-5	十勝岳温泉ー三段山ー上ホロカメットク山小屋ーH下ー三峰山ーS尾根下ー富良野岳ー北尾根ーバーデンホテルー三段尾根ーOP尾根ー三段山ー十勝岳温泉	L吉田(4)、SL中村(平)(3)、青山(2)、富岡(2)
3/1-7	文部省登山研修	小河(1)
3/2-19	バーデンホテルーホコ岩ー富良野岳ー三峰ー上ホロ小屋ー上ホロカメットク山ー十勝岳ー美瑛岳ー美瑛富士避難小屋ー石垣山ーベベツ山ーオプタテシケ山ーコスマ山ー三川台ートムラウシ山ヒーサゴ沼小屋ー五色岳ー忠別小屋忠別岳ー白雲小屋ー北海岳ー間宮岳ー北鎮岳ーリクマンー国道39号	L真田(4)、SL小川(3)、片倉(2)、河野(2)、国司(2)
3/5-7	芦別太陽の里ー槙柏コルーキレツトー芦別岳ー半面山ー21線下山	L芳賀(4)、SL飯田(3)、入村(2)、三代(2)
3/5-16	1年目パーティー斜里岳～摩周湖5札幌ー斜里駅ー登山口ー南斜里直下引き返しー南斜里岳ー斜里岳ーサマッケヌプリ山ー標津岳ー養老牛岳ー道道34号ー裏摩周展望台ー摩周岳ー第一展望台	L北沢(4)、SL北森(3)、加藤(1)、真下(1)、森本(1)
3/5-17	斜里駅ー海別岳コルー海別岳北峰引き返しー国境稜線東ー音遠別岳西尾根下ー音遠別岳ー知西別ー愛山荘ー極楽平ー羅臼岳ー下山尾根ー岩尾別ユースホステル	L千葉(4)、SL田中(3)、松井(応)(1)、松井(良)(1)
3/12-24	戸蔦ヒュッテー札内北東尾根ー札内JPー10.5の沢スキー 1917峰ー9の沢スキーーカムイエクウチカウシ山ーピラミッドー右岸尾根頭ー札内ヒュッテ	L吉田(4)、SL中村(平)(3)、青山(2)、富岡(2)
3/13-14	羊蹄山	L藤田(4)、SL福田(4)、小河(1)、深田(1)
3/20-27	稚内ー鴛泊ーボン山周辺スキーー長官山ー鴛泊	L藤田(4)、SL福田(4)、小河(1)、深田(1)
3/24-30	新穂高温泉ー鏡平ー弓折ー双六小屋ー硫黄(雪崩発生)ー弓折ー鏡平ーワサビ平小屋ー新穂高温泉下山	L芳賀(4)、SL飯田(3)、入村(2)、三代(2)
4/1-6	上紋峠ー渚滑岳ー天塩富士ー前天塩ー天塩岳ー浮島トンネル	L松岡(4)、SL中村(4)、大島(1)、末安(1)、高岸(1)、西山(1)
4/29-5/5	白金温泉ー西尾根ーオプタテシケ山ーベベツ山ー石垣山ー美瑛富士ー白金温泉	L飯田(4)、SL富岡(3)、松井(応)(2)、深田(2)、松井(良)(2) L田中(4)、SL河野(3)、大島(2)、加藤(2)、森本(2) L北森(4)、SL三代(3)、西山(2)、末安(2) L千葉(OB1)、SL入村(3)、真下(2)、小河(2)、高岸(2)
4/29-5/5	無意根ゴールデンウィーク合宿	中村(4)、小川(啓)(4)、片倉(3)、竹内(3)、青山(3)、国司(3)、松岡(1)、宮下(1)、西浦(1)、内藤(1)、奥井(1)、末安(1)、大沢(1)、星野(OB2)、藤田(OB1)
5/12-14	暑寒荘ー暑寒別岳ー暑寒荘	L深田(2)、SL松井(良)(2)、加藤(2)、高岸(2)
5/12-15	登山口ー東狩場山ー下山	L入村(3)、SL松井(応)(2)、河野(2)、真田(OB1)
5/13-14	自然公園ー羊蹄山途中までー自然公園	L片倉(3)、SL三代(3)、大島(2)、森本(2)
5/13-14	キロロスキー場ー余市岳ーキロロスキー場	L真下(2)、SL末安(2)、西山(2)、小河(2)
5/28-6/3	サマースキー　旭岳周辺	L青山(3)、SL西山(2)、松井(良)(2)、門脇(1)、奥井(1) L片倉(4)、SL森本(2)、松井(応)(2)、大沢(1)、松岡(1) L河野(3)、SL末安(2)、内藤(1)、西浦(1) L入村(3)、SL深田(2)、市川(1)、宮下(1) L小河(2)、SL大島(2)、真下(2)、加藤(2)、富岡(3) L国司(3)、SL竹内(3)

6/16-18	白水沢川	L中村(平)(4)、SL三代(3)、門脇(2)、内藤(1) L田中(健)(4)、SL富岡(3)、大島(2)、奥井(1)、松岡(1) L飯田(4)、SL青山(2)、西浦(1)、宮下(1) L北森(4)、SL国司(3)、加藤(2)、松井(良)(2)、市川(1)
6/23-25	白水沢川	L富岡(3)、SL竹内(3)、高岸(2)、森本(2) L三代(3)、SL入村(3)、末安(2)、西山(2) L小川(4)、SL深田(2)、小河(2)、大沢(1) L河野(3)、SL青山(3)、松井(応)(2)、真下(2)
7/1-2	白水沢川	L小川(啓)(4)、SL青山(3)、市川(1)、伴(1)
7/2	発寒川	L北森(4)、SL入村(3)、奥井(1)、内藤(1)、西浦(1)
7/7-8	札的沢	L真田(OB1)、SL富岡(3)、松井(応)(2)、松井(良)(2)、加藤(2)
7/7-9	豊羽鉱山－白井川735引き返し	L北森(4)、SL入村(3)、奥井(1)、内藤(1)、西浦(1)
7/7-10	〈スキー縦走〉姿見の池石室－旭岳－北鎮岳－下山	L中村(平)(4)、SL高岸(2)、伴(1)
7/14-15	古平川下二股沢	L真田(OB1)、SL富岡(3)、松井(応)(2)、松井(良)(2)、加藤(2)
7/15	発寒川－WVの滝引き返し	L小川(啓)(4)、SL青山(3)、市川(1)、伴(1)、大沢(1)
7/15-16	札的沢	L田中(健)(4)、SL三代(3)、森本(2)、深田(2)
7/22-24	林道終点－伊佐内川－積丹岳－大滝川－共和	L田中(健)(4)、SL三代(3)、森本(2)、深田(2)
7/22-30	層雲峡－黒岳－旭岳－鎮周辺スキー－白雲岳－白雲小屋－忠別小屋－化雲岳－天人峡	L青山(3)、SL末安(2)、片倉(3)、奥井(1)
7/25-8/9	沖縄－石垣－西表島－白浜－展望台－浦内内－ギンコガーラ－分水領－仲良川－白浜－舟浮－東海大研究所－パイミ崎－幸滝－落水崎－鹿川湾－クイラ渡り－大原	L飯田(4)、SL河野(3)、真下(2)、小河(2)
7/26	発寒川	L中村(平)(4)、SL竹内(3)、門脇(1)、松岡(1)、宮下(1)
7/27-31	見市川－遊楽部岳－見市川－下山	L真田(OB1)、SL富岡(3)、松井(応)(2)、松井(良)(2)、加藤(2)
7/28-29	天人峡－ポンカウンナイ沢－F8－夏道－天人峡	L田中(健)(4)、SL三代(3)、森本(2)、深田(2)
8/4-12	斜里－モセカルベツ－知円別岳－オッカパケ沢－相泊－サシルイ－熊の湯温泉	L田中(健)(4)、SL三代(3)、森本(2)、深田(2)
8/4-13	斜里－イダシュベツ沢－ニツ池－羅臼岳－ニツ池－硫黄岳－登山口－カムイワッカ温泉－斜里－宇登呂温泉－相泊	L小川(啓)(4)、SL青山(3)、市川(1)、伴(1)、大沢(1)
8/6-11	斜里－羅臼熊の湯－ラウス平－羅臼岳－硫黄山－登山口	L中村(平)(4)、SL高岸(2)、宮下(1)、松岡(1)
8/6-12	静内－ナナシ林道－ナナシ沢－ナナシ沢500引き返し－林道－静内	L真田(OB1)、SL富岡(3)、松井(応)(2)、松井(良)(2)、加藤(2)
8/9-17	日高町－額平川－幌尻岳七ツ沼カール－新冠川－エサオマントッタベツ岳直登沢－エサオマントッタベツ岳－山スキー沢出会－下山	L北森(4)、SL入村(3)、奥井(1)、内藤(1)、西浦(1)
8/29-31	林道終点－ペテガリ東尾根－ペテガリ岳－ペテガリCカール－東尾根－林道－下山	L田中(健)(4)、SL三代(3)、入村(2)、富岡(2)
8/30	札的沢	L飯田(4)、SL小川(啓)(4)、M真下(2)、小河(2)
9/2-6	余別川49点沢－F5下引き返し－下山	L飯田(4)、SL小川(啓)(4)、M真下(2)、小河(2)
9/12-16	ヌピナイ右股－ソエマツ岳－神威岳－神威山荘	L飯田(4)、SL小川(啓)(4)、M真下(2)、小河(2)
9/14-17	天人峡温泉－ポンカウン出合－カウン沢出合－滝の瀬－トムラウシ山－ヒサゴ沼－化雲岳－天人峡温泉	L富岡(3)、SL青山(3)、加藤(2)、松井(良)(2)
9/21-22	十勝三股－杉沢出合－天狗のコル－ニペソツ山－杉沢出合－十勝三股	L奥村(1)、SL大沢(1)、宮下(1)
	部員総会	

84 season　1995(平成7)年10月～1996(平成8)年9月

部長：在田一則
主任：入村貴行(3)／リーダー会議長：青山尚広(3)

10/7-8	五色温泉－ニトヌプリ－ニセコアンヌプリ－五色温泉	L中村(平)(4)、SL青山(3)、大島(2)、深田(2)、末安(2)
10/10-11	望岳台－グランドコース－1850引き返し－望岳台	L小川(4)、SL入村(3)、小河(2)、松井(応)(2)、松井(良)(2)
10/10-11	望岳台－十勝岳避難小屋－1750引き返し－望岳台	L田中(4)、SL片倉(3)、吉永(2)、末安(2)、深田(2)
10/21	恵庭岳	L松岡(1)、SL奥井(1)、市川(1)、大沢(1)、門脇(1)、内藤(1)
11/10-11	望岳台－グランドコースC1850引き返し－望岳台	L小川(4)、SL入村(3)、小河(2)、松井(応)(2)、松井(良)(2)
11/10-11	望岳台－十勝岳避難小屋－C1750引き返し－望岳台	L田中(4)、SL片倉(3)、吉永(2)、末安(2)、深田(2)
11/23-27	2年目冬山訓練合宿　旭岳温泉－天女ガ原をBCにし、姿見の池石室、夏尾根、北ガケ、旭岳周辺－旭岳温泉	L石塚(OB5)、SL富岡(3)、加藤(2)、西山(2) L小川(4)、SL入村(3)、三代(3)、大島(2)、末安(2) L中村(平)(4)、SL片倉(3)、松井(良)(2)、深田(2) L田中(4)、SL青山(3)、松井(応)(2)、高岸(2) L中村(琢)(OB1)、SL国司(3)、小河(2)、森本(2) L北森(4)、SL河野(3)、吉永(2)、真下(2)
12/8-10	1年目初滑り　旭岳温泉－天女ガ原をBCにし、姿見の池石室周辺－旭岳温泉	L飯田(4)、SL青山(3)、松岡(1)、門脇(1) L北森(4)、SL片倉(3)、大沢(1)、西浦(1)、伴(1) L田中(4)、SL河野(3)、村瀬(1)、市川(1) L芳賀(OB1)、SL富岡(3)、奥井(1)、内藤(1)、宮下(1)
12/8-13	十勝岳温泉－パーデンホテル－富良野岳北尾根－ホコ岩ーパーデンホテルー貝殻下－三段山－十勝岳温泉	L小川(4)、SL入村(3)、小河(2)、松井(良)(2)、松井(応)(2)
12/15-17	十勝岳温泉－貝殻下－三段山1500引き返し－パーデンホテル	L真田(OB1)、SL三代(3)、深田(2)、末安(2)、真下(2)
12/22-25	十勝岳温泉－C1400引き返し－化物岩－八つ手コルー上ホロカメットク山－十勝岳温泉	L田中(4)、SL青山(3)、大島(2)、西山(2)、吉永(2)
12/23-29	無意根新人合宿	CL飯田(4)、北森(4)、片倉(3)、河野(3)、国司(3)、市川(1)、大沢(1)、奥井(1)、門脇(1)、内藤(1)、西浦(1)、伴(1)、松岡(1)、宮下(1)、村瀬(1)、千葉(OB1)、芳賀(OB1)、藤田(OB1)
12/23-1/3	バーデンホテル－北尾根－富良野岳－S尾根下－三峰標高尾根－F尾根西の沢－西尾根－二股－ペペルイ出合－凌雲閣－貝殻下－三段山－十勝岳－凌雲閣	L小川(4)、SL入村(3)、小河(2)、松井(良)(2)、松井(応)(2)
12/23-1/3	パーデンホテル－D尾根－十勝岳－原始が原－三峰標高尾根－シーソラプチニ股－富良野下尾根基部－1237ポコ－布札別	L真田(OB1)、SL三代(3)、深田(2)、末安(2)、真下(2)
12/26-1/3	バーデンホテル－富良野北尾根－ホコ岩－富良野岳－三峰－D尾根－十勝岳温泉－凌雲閣－三段山－十勝岳－十勝岳温泉	L石塚(OB5)、SL富岡(3)、森本(2)、加藤(2)、高岸(2)
1/1-7	布札別－F尾根下－富良野岳－S尾根－三峰標高尾根－二股－Hスロープ－下山	L中村(琢)(OB1)、SL国司(3)、市川(1)、奥井(1)、村瀬(1)

1/1-8	トムラウシ温泉ー林道ー尾根取り付きーC1115コルートムラウシ沢渡渉ーワセダ沢渡渉ー渡渉引き返しートムラウシ温泉	L飯田(4)、SL片倉(3)、宮下(1)、松岡(1)、西浦(1)
1/2-4	仁宇布ー西尾峠ーシアッシリ山ー三十一線・476手前ー林道ー初野駅下山	L北森(4)、SL河野(3)、門脇(2)、大沢(1)、伴(1)、内藤(1)
1/11-14	清川ー夏道尾根ーニセイカウシュッペ山ー清川	L中村(平)(4)、SL三代(3)、加藤(2)、小河(2)
1/12-15	春香山	L深田(2)、SL松井(良)(2)、西山(2)、村瀬(1)
1/12-16	清川ー夏道尾根ーニセイカウシュッペ山1697m引き返しー清川	L片倉(3)、SL入村(3)、真下(2)、奥井(1)、松岡(1)
1/27-28	春香山	L森本(2)、SL小河(2)、内藤(2)、末安(2)、伴(1)
2/2-4	水谷ロッジー夏道尾根ー徳舜別山ー水谷ロッジ	L大島(2)、SL末安(2)、松井(応)(2)、市川(1)
2/2-4	漁岳	L飯田(4)、SL深田(2)、末安(2)
2/9-12	函岳	L北森(4)、SL小河(2)、内藤(1)
2/10-12	北見峠ーチトカニウシ山ー下山	L加藤(2)、SL松井(応)(2)、真下(2)、西浦(1)、松岡(1)
2/10-12	ニセコ五色温泉周辺	L青山(3)、SL松井(良)(2)、奥井(1)
2/24	樽前山	L北森(4)、SL国司(3)、西浦(1)、宮下(1)、村瀬(1)
2/28-3/6	清川ー軍艦山ーニセイカウシユッペ山ー清川	L田中(4)、SL入村(3)、松井(応)(2)、真下(2)、加藤(2)
3/1-7	薄別ー長尾山ー美比内岳ー余市岳ー国際スキー場ー銀嶺荘ー春香山ーオーンズスキー場	L飯田(4)、SL深田(2)、末安(2)、内藤(2)
3/3-8	相泊ー観音岩ーペキンの鼻ー知床岬ーウィーヌプリー知床岳ー下山	L北森(4)、SL国司(3)、村瀬(1)、宮下(1)、西浦(1)
3/6-8	芦別岳尾根乗っ越し	L小川(4)、SL青山(3)、大島(2)、小河(2)、松井(良)(2)
3/12-20	芽室小屋ーパンケヌーシ尾根ー芽室岳ーパンケヌーシ尾根末端ー6の7の沢分岐ーパンケヌーシ岳ー福本牧場	L飯田(4)、SL深田(2)、末安(2)、内藤(1)
3/12-22	羅臼ーモセカル右岸尾根ー硫黄山ー相泊ーカモイウンペー知床台地ーポロモイ台地ー羅臼	L田中(4)、SL入村(3)、真下(2)、松井(応)(2)、加藤(2)
3/16-18	羊蹄山	L北沢(OB1)、SL片倉(3)、門脇(1)、大沢(1)、伴(1)
3/16-28	大庭牧場ー中二股ーC1253ーE峰ートヨニ岳N峰ー瑞雲橋ー大庭牧場	L小川(4)、SL青山(3)、大島(2)、小河(2)、松井(良)(2)
3/21-28	鴛泊ーボン山ーC1050ーC630ー鴛泊	L北沢(OB1)、SL片倉(3)、門脇(1)、大沢(1)、伴(1)
3/24	樽前山	L松岡(OB1)、SL北森(4)、奥井(1)、市川(1)
3/27-4/2	帯広ーC650ーピロロ直下ーC1140ー下山	L松岡(OB1)、SL北森(4)、奥井(1)、市川(1)
4/19-21	狩場山：千早川温泉ー林道終点ー千早川温泉下山：	L松井(応)(3)、SL深田(3)、村瀬(2)、内藤(2)、宮下(2)
4/20-21	定山渓天狗岳	L青山(4)、SL小河(3)、大島(3)、加藤(3)、真下(3)
4/27-5/44	登山口ーオプタテシケ山ー標高尾根ーオプタテシケ山ーブルマニ股ー1654コルー下山	L片倉(4)、SL真下(3)、伴(2)、宮下(2)、内藤(2)
4/28-29	羊蹄山	L国司(4)、SL松井(良)(3)、市川(2)
4/28-5/4	無意根GW合宿	CL入村(4)、小河(3)、加藤(3)、末安(3)、高岸(3)、西山(3)、松井(応)(3)、森本(2)、奥井(2)、石山(1)、後藤(1)、佐田(1)、松江(1)、高野(1)、藤当(1)、前田(1)
4/28-5/4	鴛泊ー長官小屋ー利尻山ー鴛泊	L青山(4)、SL大島(3)、村瀬(2)、門脇(2)
5/1-6	狩場山	L国司(4)、SL松井(良)(3)、市川(2)
5/2-4	無意根GW合宿	三代(4)、大沢(1)
5/11-12	ニセコ	L片倉(4)、SL加藤(3)、宮下(2)、村瀬(2)
5/17-19	羊蹄山自然公園ー外輪山スキーー自然公園	L高岸(3)、SL森本(3)、宮下(2)、門脇(2)
5/17-19	暑寒荘ー暑寒別岳ー暑寒荘	L松井(応)(3)、SL末安(3)、大沢(2)、入村(4)
5/18-19	浜益岳	L真下(3)、SL伴(2)、深田(3)
5/18-19	太陽の里ーユーフレ小屋ー覚太郎コースー半面山ー雲峰周辺スキー引き返しー下山	L青山(4)、SL大島(3)、小河(3)
6/3-9	サマースキー：大雪山(旭岳近郊)	L松井(応)(3)、SL市川(2)、佐田(1)、高野(1) L松井(良)(3)、SL奥井(2)、藤当(1) L末安(3)、SL宮下(2)、前田(1)、入村(4)
6/5-9	サマースキー：大雪山(旭岳近郊)	L小河(3)、SL村瀬(2)、松江(1)、大森(1) L大島(3)、SL伴(2)、石山(1)、後藤(1) L西山(3)、SL深田(3)、高岸(3)
6/6-9	サマースキー：大雪山(旭岳近郊)	L真下(3)、SL門脇(2)、加藤(3)、森本(3)
6/7-9	サマースキー：大雪山(旭岳近郊)	L三代(4)、SL大沢(2)、西浦(2)、内藤(2)
6/28-29	沢入門：白水川	L青山(4)、SL松井(応)(3)、大沢(2)、西浦(2)、村瀬(2) L片倉(4)、SL真下(3)、門脇(2)、藤当(1) L入村(4)、SL森本(3)、伴(2)、佐田(1)、後藤(1) L三代(4)、SL松井(良)(3)、末安(3)、松岡(2)、高野(1)
8/5	発寒川	L三代(4)、SL真下(3)、宮下(2)、後藤(1)、杉江(1)
8/5-6	白水川	L片倉(4)、SL森本(3)、高野(1)、前田(1)、石山(1)
8/10	発寒川	L片倉(4)、SL森本(3)、高野(1)、前田(1)、石山(1)
8/10-11	白水川	L三代(4)、SL真下(3)、宮下(2)、後藤(1)、杉江(1)
8/10-13	幌尻山荘ー幌尻北カールー幌尻岳ー戸蔦別岳ー七ツ沼カールー幌尻岳ー収穫小屋ーイドンナップ山荘	L田中(OB1)、SL小河(2)、佐田(1)、藤当(1)
8/16-17	札的6の沢	L青山(4)、SL加藤(3)、松井(応)(3)、伴(2)
8/30-31	札的6の沢	L入村(4)、SL松井(良)(3)、大沢(2)、奥井(4)
9/5-9	余別川：51点出合ーーC400二股左股ー柵内岳ー古宇川	L入村(4)、SL松井(良)(3)、大沢(2)、奥井(4)
9/12-16	林道ーヌピナイ川右股ーソエマツ岳ーカムイ岳ーカムイ山荘	L飯田(4)、SL小川(4)、真下(2)、小河(2)
9/13	丸駒温泉ー恵庭滝沢F7引き返しー丸駒温泉	L富岡(3)、SL加藤(2)、深田(2)
9/27-28	層雲峡ーニセイノシキオマップ沢ー引き返しー下山	L青山(4)、SL加藤(3)、松井(応)(3)、伴(2)
	部員総会	

85 season　1996(平成8)年10月～1997(平成9)年9月

部長：在田一則

主任：小河健伸(3)／リーダー会議長：真下昌久(3)／庶務　前期：松井良典(3)、後期：宮下隆志(2)

10/10-11	清里ー清岳荘ー斜里岳下二股ー清岳荘ー清里	L藤当(1)、SL杉江(1)、大島(3)、松井(応)(3)
10/18-21	上杵臼ー双子岳東峰ー十勝岳ー楽古岳ー上杵臼	L小河(3)、SL真下(3)、伴(2)、村瀬(2)、宮下(2)
11/2-3	杉沢出合ー天狗コルーニペソツ山ー杉沢出合	L小河(3)、SL松井(良)(3)、深田(3)、高岸(3)

11/8-10	白金温泉－望岳台－十勝岳避難小屋－穴ボコ－避難小屋－望岳台－白金温泉	L青山(4)、SL加藤(3)、宮下(2)、末安(3)
11/8-10	十勝岳温泉－Z－c1700－十勝岳温泉	L三代(4)、SL入村(4)、西浦(2)、門脇(2)、市川(2)
11/21-25	2年目合宿(旭岳)	L青山(4)、SL真下(3)、伴(2)、奥井(2) L小河(3)、SL加藤(3)、西浦(2)、村瀬(2) L入村(4)、SL大島(3)、門脇(2)、内藤(2) L三代(4)、SL松井(応)(3)、市川(2)、末安(3) L松井(良)(3)、SL高岸(3)、宮下(2) L深田(3)、SL西山(3)、大沢(2)
12/6-8	1年目初滑り合宿(旭岳)	L深田(3)、SL高岸(3)、松岡(2)、佐田(1) L片倉(4)、SL西山(3)、杉江(1)、後藤(1)、来栖(1) L三代(4)、SL真下(3)、三木(1)、藤当(1)
12/6-8	白金温泉－望岳台－十勝岳－十勝岳避難小屋－望岳台－白金温泉	L小河(3)、SL松井(良)(3)、宮下(2)、西浦(2)
12/14-15	林道入口－空沼小屋－真簾沼－真駒内スキー場	L深田(3)、SL松井(応)(3)、松岡(2)
12/20-22	バーデンホテル－富良野岳北尾根－－富良野岳－バーデンホテル	L青山(4)、SL大島(3)、市川(2)
12/20-26	無意根新人合宿	CL片倉(4)、三代(4)、高岸(3)、西山(3)、深田(3)、真下(3)、門脇(2)、大沢(2)、松岡(2)、後藤(1)、佐田(1)、杉江紀(1)、藤当(1)、三木(1)、渡部(OB4)
12/21-27	菅野温泉－糠平林道－ウペペサンケ山東峰－糠平	L入村(4)、SL加藤(3)、伴(2)、内藤(2)、奥井(2)
12/22-1/1	福本牧場－曲り沢－止別岳－雪盛山－芽室岳－パンケヌーシ山－ポロナイ－チロロ岳－福本牧場	L小河(3)、SL松井(良)(3)、宮下(2)、西浦(2)
12/26-1/7	層雲橋－高原大橋－クチャンベツ林道－石狩岳北西尾根－石狩岳－JP－沼ノ原－五色岳－トムラウシ山－白金温泉	L青山(4)、SL大島(3)、市川(2)
12/30-1/5	大滝村昭園－オロフレ山－1071台地－ホロホロ山－徳舜別山－国道	L深田(3)、SL高岸(3)、松岡(2)、佐藤(1)
12/31-1/7	新得－ダム－林道－下ホロカメットク山コル－下ホロカメットク山－三峰山－富良野岳－秋雲橋－布礼別	L片倉(4)、SL真下(3)、藤当(1)、杉江(1)、三木(1)
1/1-4	十勝岳温泉－貝ガラ下－三段やま－R手前リッジ－三段山－十勝岳温泉	L北沢(OB2)、SL松井(応)(3)、大沢(2)、門脇(2)
1/1-8	日高町－チロロ林道－取水ダム－糠平山－幌尻岳－戸蔦別岳肩－糠平山－春別林道出合－日高町	L入村(4)、SL加藤(3)、伴(2)、内藤(2)、奥井(2)
1/7-13	北見峠－チトカニウシ山－浮島－天塩岳－岩内川	L三代(4)、SL西山(3)、佐田(1)
1/15-18	桂岡浄水場－春香山銀嶺荘－奥手稲山－パラダイスヒュッテ－奥手稲山の家－迷沢山－平和の滝	L市川(2)、SL伴(2)、後藤(1)、杉江(1)
1/15-18	豊清水駅－函岳リゾート－C700C－イソギンチャク－函岳リゾート－牧場	L高岸(3)、SL松井(応)(3)、内藤(2)、三木(1)
1/15-18	除雪センター－ペケレ夏道尾根－日勝峠－日勝スキー場	L真下(3)、SL松井(良)(3)、奥井(2)、藤当(1)
1/16-18	十勝岳温泉－貝がら下－なまこ尾根－三段山－十勝岳温泉	L入村(4)、SL加藤(3)、深田(3)、西浦(2)
2/22-24	バーデンかみふらの－ホコ岩－富良野岳－北尾根－バーデンかみふらの	L入村(4)、SL小河(3)、西浦(2)、門脇(2)、大沢(2)
3/2-5	余別岳、積丹岳(西河町－林道終点－C620C停滞－C970引返し－西河町)	L真下(3)、SL松井(応)(3)、市川(2)、内藤(2)
3/2-5	元山－長尾山－無意根小屋－薄別	L片倉(4)、SL大島(3)、松岡(2)、高野(1)
3/2-5	中山峠－喜茂別岳－中岳－喜茂別岳－中山峠	L加藤(3)、SL西山(3)、藤当(1)、三木(1)
3/2-7	幌加温泉－16の沢林道－前天狗・天狗コル－ニペソツ山－南稜－3の沢林道出合－幌加温泉	L入村(4)、SL小河(3)、西浦(2)、門脇(2)、大沢(2)
3/6-12	清川－夏尾根－ニセイカウシユッペ山－軍艦山－林道下山	L青山(4)、SL松井(良)(3)、宮下(2)、伴(2)
3/7-11	積丹岳(牧場－C820C29停滞－C843先コル引返し－C1070引返し－牧場下山)	L三代(4)、SL高岸(3)、末安(3)、佐田(1)、杉江(1)
3/10-15	五色温泉－ニセコアンヌプリ－－イワオヌプリ－ニトヌプリ－チセヌプリ－シャクナゲ沼－白樺山－新見峠－前目国内岳－目国内岳－岩内岳－岩内スキー場	L片倉(4)、SL大島(3)、松岡(2)、高野(1)
3/12-16	斜里－根北峠－南斜里岳－斜里岳－南斜里岳－江南バス停－田村OB邸	L真下(3)、SL松井(応)(3)、市川(2)、内藤(2)
3/12-20	トッタベツヒュッテ－北東尾根－カムイ岳－エサオマントッタベツ岳－JP－ナメワツカJ.P－1917峰－九の沢カール－カムイエクウチカウシ山－八の沢出合－札内ヒュッテ－ピヨウタンの滝	L入村(4)、SL小河(3)、西浦(2)、門脇(2)、大沢(2)
3/18-24	一ノ橋－氷のトンネル沢入口－ウェンシリ岳－札滑岳－天北峠	L三代(4)、SL高岸(3)、末安(3)、杉江(1)、佐田(1)
3/18-24	暑寒荘－暑寒別岳ニセピーク－暑寒別岳－暑寒荘	L加藤(3)、SL西山(3)、藤当(1)、三木(1)
3/18-29	高見ダム－ペテガリ山荘－東尾根－ペテガリ岳－中の岳－J.P.停滞－神威岳－神威橋	L青山(4)、SL松井(良)(3)、宮下(2)、伴(2)
4/11-13	自然公園－羊蹄山1400－登山道入口	L宮下(3)、SL西浦(3)、末安(4)、三木(2)、杉江(2)
4/13	神威橋－天狗沢出合－定山渓天狗岳中央ルンゼスキー－ニセワラジルンゼスキー－天狗沢出合	L小河(4)、SL入村(5)、佐田(2)、高野(2)
4/25-5/1	鴛泊－長官小屋－利尻山－鴛泊	L深田(4)、SL市川(3)、村瀬(3)、杉江(2)
4/26-5/4	昭和の沢－エサオマン出合－八の沢－エサオマントッタベツ岳－1803西コル－東カール－北カール上－北戸蔦岳－アヤチヤンカール－西コル手前－伊沢養魚場	L小河(4)、SL宮下(3)、藤当(2)、佐田(2)
4/28-5/4	鴛泊－利尻岳－鴛泊	高岸(4)、SL西浦(3)、三木(2)、高野(2)
4/29-5/5	無意根ゴールデンウィーク合宿	CL真下(4)、大島(4)、加藤(4)、末安(4)、西山(4)、松井(応)(4)、松井(良)(4)、内藤(3)、伴(3)、臼井(1)、金森(1)、清水(1)、奈良(1)、松倉(1)、藪内(1)、渡邉(1)、牧野(1)、森谷(1)
5/10-11	五色温泉－イワオヌプリ－五色温泉－ニセコアンヌプリ－五色温泉	L大島(4)、SL加藤(4)、西浦(3) L内藤(3)、SL宮下(3)、藤当(2)
5/17-18	余市岳	L三木(2)、SL杉江(2)、M高岸(4)、末安(4)
6/1-7	サマースキー	L伴(3)、SL高野(2)、藪内(1)、臼井(1) L内藤(3)、SL杉江(2)、牧野(1)、奈良(1) L西浦(3)、SL藤当(2)、渡邉(1)、森谷(1) L市川(3)、SL三木(2)、清水(1)、金森(1) L宮下(3)、SL村瀬(3)、松倉(1)
6/5-7	サマースキー	L真下(4)、SL深田(4)、松井(応)(4)
6/5-8	御殿場－須走登山口－おはち上－5合目登山口	L大島(4)、SL加藤(4)、小河(4)

6/28-29	白水沢	L小河(4)、SL伴(3)、宮下(3)、藤当(2)、小宮(1) L真下(4)、SL深田(4)、村瀬(3)、金森(1)、村瀬(3) L松井(応)(4)、SL加藤(4)、杉江(2)、臼井(1)、藪内(1)
7/4-5	札的沢－樺戸山－道路下山	L加藤(4)、SL伴(3)、杉江(2)、藤当(2)
7/5-6	白水沢	L小河(4)、SL村瀬(3)、市川(3)、渡邉(1)、末安(4) L松井(応)(4)、SL宮下(3)、三木(2)、清水(1)、森谷(1) L三代(4)、SL深田(4)、高野(2)、奈良(1)、松倉(1)
7/5-7	旭岳温泉－姿見－石室－旭岳－旭岳温泉	L内藤(3)、SL西山(4)、小宮(1)、大島(4)
7/12-13	上里－パンケメクンナイ川－パンケメクンナイ岳－新見温泉	L加藤(4)、SL伴(3)、杉江(2)、藤当(2)
7/12-13	発寒川(平和の滝pWVの滝)	L松井(応)(4)、SL宮下(3)、小宮(1)、奈良(1)、松倉(1)
7/18-24	白金温泉－美瑛富士避難小屋－オプタテシケ山－双子池－トムラウシ山－化雲岳－ヒサゴ沼－化雲岳－天人峡温泉	L西浦(3)、SL内藤(3)、奈良(1)、松倉(1)
7/19	奥漁橋－漁岳往復	L小河(4)、SL三代(OB1)、三木(2)、金森(1)、藪内(1)
7/19-20	札幌＝望岳台－漁岳一奥漁橋	L真下(4)、SL深田(4)、臼井(1)、清水(1)、渡邉(1)
7/24-26	豊似川一林道途中－豊似岳ペンギンカール－豊似岳－豊似下山	L加藤(4)、SL伴(3)、杉江(2)、藤当(2)
7/26-29	白金温泉－美瑛富士避難小屋－美瑛岳－十勝岳－上ホロ小屋－十勝岳温泉	L市川(3)、SL高野(2)、金森(1)、藪内(1)
7/26-30	南暑寒荘－南暑寒岳－徳富川出合－ホンジャマ沢出合－群別岳－林道－群別町	L真下(4)、SL深田(4)、臼井(1)、清水(1)、渡邉(1)
7/31-8/1	奥漁橋－漁岳－望岳台	L松井(応)(4)、SL宮下(3)、小宮(1)、奈良(1)、松倉(1)
7/31-8/7	林道終点－ソエマツ岳－神威岳－神威山荘	L加藤(4)、SL伴(3)、杉江(2)、藤当(2)
8/5-11	知床大橋－一番屋－C630右岸－一番屋停滞－知床大橋	L松井(応)(4)、SL宮下(3)、小宮(1)、奈良(1)、松倉(1)
8/6	千歳川一青葉公園ゴール	L高岸(4)、SL西浦(3)、渡邉(1)、高野(2)、西山(4)、田才(WVOB6)
8/8-11	美深温泉－ポンピラ温泉－雄信内大橋－海の手前下山	L高岸(4)、SL西浦(3)、渡邉(1)、高野(2)、西山(4)
8/11-20	西表島－白浜－舟浮－網取湾－C215－舟浮	L深田(4)、SL村瀬(3)、森谷(1)、末安(4)
8/13-15	豊羽鉱山－余市岳－豊羽下山	L小河(4)、SL三代(OB1)、三木(2)、金森(1)、藪内(1)
8/18-21	札内川－八の沢－カムイエクウチカウシ山－札内川	L小河(4)、SL三代(OB1)、三木(2)、金森(1)、藪内(1)
9/6	発寒川(平和の滝－WVの滝引き返し)	L深田(4)、SL村瀬(3)、森谷(1)
9/12-14	大平川林道－冷水沢－湯の沢－林道	L加藤(4)、SL伴(3)、杉江(2)、深田(4)
9/23	尻別橋－京留橋－中野橋－富士見橋	L西浦(3)、SL高岸(4)、三木(2)、市川(3)、村瀬(3)
9/23-24	トムラウシ温泉－地獄谷－化雲岳－天人峡温泉	L伴(3)、SL宮下(3)、杉江(2)、金森(1)
9/25-26	斜里清里－旧道コース－斜里岳－新道コース－清里	L藤当(2)、SL三木(2)、松井(良)(4)
	部員総会	

86 season　1997(平成9)年10月～1998(平成10)年9月

部長：在田一則

主任：伴現太(3)／リーダー会議長：宮下隆志(3)／庶務　前期：内藤宏志(3)、後期：佐田悠輔(2)

10/10	芦別岳	L藪内(1)、SL末安(小4)、宮(1)
10/10-12	旭岳温泉－石室－停滞－旭岳温泉	L大島(4)、SL深田(4)、市川(3)、西浦(3)
10/25-26	天塩ヒュッテ－避難小屋手前引き返し	L小河(4)、SL佐田(2)、石原(1)、金森(1)
11/1-2	砕石場－空沼小屋－空沼岳－登山口	L末安(4)、SL宮下(3)、奈良(1)、藪内(1)
11/7-9	望岳台－避難小屋－グランドコース－望岳台	L松井(応)(4)、SL西浦(3)、佐田(2)、藤当(2)
11/21-24	2年目旭岳合宿	L深田(4)、SL伴(3)、三木(2) L松井(応)(4)、SL西浦(3)、杉江(2)、真下(2) L小河(4)、SL市川(3)、佐田(2)、末安(4) L西山(4)、SL内藤(3)、藤当(2)、加藤(4) L大島(4)、SL宮下(3)、高野(2)、高岸(4)
12/6-8	1年目初滑り旭岳	L高岸(4)、SL末安(4)、石原(1)、奈良(1) L真下(4)、SL内藤(3)、藪内(1)、臼井(1) L加藤(4)、SL宮下(3)、金森(1)、渡辺(1) L西山(4)、SL市川(3)、小宮(1)、清水(1)、松倉(1)
12/20-24	バーデンホテル－北尾根－ホコ岩－富良野岳－三峰－D尾根－凌雲閣	L松井(応)(4)、SL西浦(3)、佐田(2)、藤当(2)
12/20-24	バーデンホテル－北尾根－ホコ岩－富良野岳－三峰－三段山スロープ－凌雲閣	L小河(4)、SL宮下(3)、三木(2)、高野(2)
12/20-26	無意根新人合宿	CL高岸(4)、末安(4)、西山(4)、深田(4)、大島(4)、真下(4)、市川(3)、内藤(3)、杉江(2)、石原(1)、小宮(1)、清水(1)、藪内(1)、奈良(1)、松倉(1)、臼井(1)、金森(1)、渡辺(1)、片倉(OB1)、芳賀(OB3)
12/28-1/6	チロロ林道－糠平南尾根－黒沢カール－Cl500台地－引き返し－林道－伊沢養漁場	L小河(4)、SL宮下(3)、三木(2)、高野(2)
12/30-1/4	西布礼別－林道－二の沢－三峰標高尾根停滞－Cl600台地－湿原－林道一西布礼別	L加藤(4)、SL末安(3)、藪内(1)、清水(1)
12/30-1/5	朱鞠内ふれあいの家－林道－送雲線－C720停滞－熊岳－林道－ふれあいの家	L高岸(4)、SL内藤(3)、臼井(1)、渡辺(1)
12/30-1/7	福本牧場－一の沢－六の沢出合－停滞－マジックスロープ－パンケヌシ岳尾根停滞－引き返し－下山	L大島(4)、SL青山(OB1)、金森(1)、小宮(1)
12/31-1/7	登山口－林道－天塩岳－二股－天塩富士の尾根－天塩富士－林道－滝奥	L西山(4)、SL真下(4)、奈良(1)、松倉(1)
12/31-1/10	林道－音更大橋－十石峠－ブヨ沢－音更山－石狩岳－北西尾根－林道	L松井(応)(4)、SL西浦(3)、佐田(2)、藤当(2)
1/1-4	大函－林道－武利岳－武華岳－－層雲峡	L深田(4)、SL伴(3)、杉江(2)
1/14-18	清川－夏道尾根－西尾根－ニセイカウシュッペ山－清川	L伴(3)、SL内藤(3)、小宮(1)、清水(1)、深田(4)
1/15-17	豊清水－C730周辺スキー－対岸の尾根C900周辺スキー－林道－豊清水	L西浦(3)、SL宮下(3)、藪内(1)、臼井(1)、金森(1)
1/16-18	十勝岳温泉－貝ガラ下－OP尾根－三股山－十勝岳温泉	L松井(応)(4)、SL小河(4)、三木(2)、藤当(2)
2/19-24	十勝岳温泉－三段山引き返し－貝ガラ下－三段山－凌雲閣	L大島(4)、SL宮下(3)、藤当(2)、三木(2)
2/21-23	無意根スキーツアー	CL伴(3)、小河(4)、加藤(4)、末安(4)、松井(応)(4)、内藤(3)、西浦(3)、杉江(2)、石原(1)、臼井(1)、金森(1)、小宮(1)、清水(1)、奈良(1)、松倉(1)、藪内(1)、渡邉(1)、一般参加者19名

3/2-3	自然公園－羊蹄山外輪－自然公園	L高岸(4)、SL市川(3)、石原(1)、松倉(1)、藪内(1)
3/2-4	登山口－樽前ヒュッテ－樽前山東峰ロドーム－外輪一周－西峰－登山口	L松井(4)、SL伴(3)、末安(4)、小宮(1)、清水(1)
3/2-12	トムラウシ温泉－林道－トムラウシ南東尾根－トムラウシ山－地獄谷－忠別岳－融雪沢－旭岳－盤の沢追悼－旭岳温泉	L真下(4)、SL小河(4)、金森(1)
3/3	自然公園－羊蹄山外輪	L西山(4)、SL内藤(3)、臼井(1)、奈良(1)、渡邉(1)
3/4-6	太陽の星－芦別岳－太陽の星	L加藤(4)、SL西浦(3)、佐田(2)、杉江(2)、高野(2)
3/6-22	博清橋－野塚岳東峰－トヨニ岳－オムシヤヌプリ西峰－オムシヤヌプリ東峰－十勝岳－楽古岳－豊似岳－林道－襟裳岬	L大島(4)、SL宮下(3)、藤当(2)、三木(2)
3/8-12	鴛泊－甘露泉－ポン山周辺スキー－長官山－鴛泊	L西山(4)、SL内藤(3)、臼井(1)、奈良(1)、渡邉(1)
3/10-20	立山駅－美女平駅－関学ヒュッテ－室堂ターミナル－雷鳥沢－剣御前小屋－関学ヒユツテ－美女平駅	L高岸(4)、SL市川(3)、石原(1)、松倉(1)、藪内(1)
3/11-23	戸蔦別林道－戸蔦別ヒュッテ－1823尾根－戸蔦別岳－1967峰－ピパイロ分岐－ピパイロ途中引き返し－1712東尾根－八の沢林道－－上美生	L加藤(4)、SL西浦(3)、佐田(2)、杉江(2)、高野(2)
3/15-26	相泊－ウナキベツ川－モイレウシ川河口－ペキン川左岸尾根－ウイヌプリ－知床岬－ウイヌプリ南コル－ポロモイ－ポロモイ台地下－相泊	L松井(4)、SL伴(3)、末安(4)、小宮(1)、清水(1)、末安(4)
4/10-12	千走川温泉－東狩場山－千走川温泉	L佐田(3)、SL杉江(3)、金森(2)、清水(2)、藪内(2)
4/11-12	五色温泉－ニセコアンヌプリ・イワオヌプリ－五色温泉	L内藤(4)、SL宮下(4)、市川(4)、奈良(2)、市川(4)
4/25-26	五色温泉－ニセコアンヌプリ－周辺スキー－五色温泉	L小河(OB1)、SL藤当(3)、臼井(2)、松倉(2)、藪内(2)
4/29-5/4	札幌－浜益御殿－浜益岳－札幌、札幌－暑寒荘－暑寒別岳－暑寒荘	L伴(4)、SL佐田(3)、金森(2)、清水(2)、渡邉(2)
4/29-5/5	無意根ゴールデンウィーク合宿	CL西浦(4)、宮下(4)、村瀬(4)、杉江(3)、三木(3)、石原(2)、岩佐(1)、大杉(1)、黒崎(1)、今(1)、齋藤(1)、宍倉(1)、杉田(1)、多田(1)、森田(1)、大島(OB1)、加藤(OB1)、末安(OB1)、真下(OB1)、三代(OB2)、石塚(OB8)、根岸(OB8)、倉持(OB34)
4/29-5/5	オプタテシテ山登山口－オプタテシケ山西尾根－オプタテシケ山－美瑛富士北西尾根－白金温泉	L内藤(4)、SL高野(3)、小宮(2)、奈良(2)
5/2-5	清川－ニセイカウシュッペ山－清川	L小河(OB1)、SL藤当(3)、臼井(2)、松倉(2)、藪内(2)
6/1-7	サマースキー(旭岳)	L三木(3)、SL奈良(2)、宍倉(1)、今(1) L杉江(3)、SL渡邉(2)、森田(1)、斎藤(1) L伴(4)、SL藪内(2)、金森(2)、大杉(1) L藤当(3)、SL臼井(2)、小宮(2)、黒崎(1) L佐田(3)、SL松倉(2)、岩佐(1)
6/4-7	サマースキー(旭岳)	L宮下(4)、SL西浦(4)、村瀬(4)、杉田(1)
6/27	白水沢	L加藤(4)、SL杉江(3)、奈良(2)、清水(2)、佐田(3)
6/27-28	白水沢	L伴(4)、SL三木(3)、金森(2)、宍倉(1) L宮下(4)、SL藤当(3)、渡邉(2)、今(1)、大杉(1)
7/4-5	白水沢	L松井(OB1)、SL三木(3)、藪内(2)、斎藤(1) L藤当(3)、SL小河(OB5)、小宮(2)、森田(1) L宮下(4)、SL佐田(3)、黒崎(1)、杉田(1)、松倉(1)
7/4-5	札的沢－6の沢4段の滝	L伴(4)、SL杉江(3)、清水(2)、奈良(2)、金森(2)
7/12	札的沢－6の沢4段の滝	L伴(4)、SL杉江(3)、清水(2)、奈良(2)、金森(2)
7/17-19	余別町－余別51点沢F5－3段の滝－余別町下山	L伴(4)、SL杉江(3)、清水(2)、奈良(2)、金森(2)
7/18	発寒川－WVの滝引き返し	L宮下(4)、SL藤当(3)、渡邉(2)、今(1)、森田(1)
7/18-20	漁入沢－漁岳－オコタンペ湖	L松井(OB1)、SL三木(3)、藪内(2)、斎藤(1)
7/23-29	十勝三股－杉沢－ニペソツ山－JP－石狩岳－忠別避難小屋－白雲岳－黒岳－層雲峡	L西浦(4)、SL内藤(4)、大杉(1)、黒崎(1)、宍倉(1)
7/24-26	無意根山荘－白井川－三股－余市岳－左股－元山	L宮下(4)、SL藤当(3)、渡邉(2)、今(1)、森田(1)
7/24-28	相泊－ウナキベツ川－女滝－カブト岩－赤岩－知床岬－赤岩船屋－相泊	L佐田(3)、SL小宮(2)、臼井(2)、杉田(1)
7/25-28	雲石橋－見市川－中二股－三股手前引き返－見市川左股－平田内川－平温泉－平田内温泉	L伴(4)、SL杉江(3)、清水(2)、奈良(2)、金森(2)
7/29-31	天人峡－トムラウシ山－北沼－ワセダ沢－トムラウシ川－下山	L松井(OB1)、SL三木(3)、斎藤(1)
8/2-8	エサオマントッタベツ川－北東カール－札内岳－ピリカペタン沢－上札内	L宮下(4)、SL藤当(3)、渡邉(2)、今(1)、森田(1)
8/8-15	ペテガリ山荘－B・C沢出合－ペテガリ岳－Bカール－ペテガリ岳－ポンヤオロマップ岳－登山口－坂下	L伴(4)、SL杉江(3)、清水(2)、奈良(2)
8/12	発寒川(平和の滝－金鉱沢－WVの沢)	L宮下(4)、SL佐田(3)、松倉(2)、黒崎(1)、杉田(1)
8/13-18	層雲峡－黒岳－黒岳石室－間宮岳－忠別岳－忠別避難小屋－五色岳－ヒサゴ沼避難小屋－トムラウシ山－ヒサゴ沼避難小屋－天人峡温泉	L高野(3)、SL臼井(2)、今(1)、斎藤(1)、村瀬(4)
8/17-19	暑寒別川本流－暑寒別岳－下山	L宮下(4)、SL佐田(3)、松倉(2)、黒崎(1)、杉田(1)
9/3	札的沢－6の沢4段の滝引き返し	L伴(4)、SL杉江(3)、佐田(3)、渡邉(2)
9/4-5	ゲート－日陰の淵－冷水沢－湯ノ沢乗越し－下山	L伴(4)、SL杉江(3)、佐田(3)、渡邉(2)
9/12	奥漁橋－漁川－漁岳－奥漁橋	L宮下(4)、SL伴(4)、金森(2)、大杉(1)、宍倉(1)
9/18-20	天人峡－カウンナイ川－カウン岳－天人峡	L宮下(4)、SL金森(2)、大杉(1)、宍倉(1)
	部員総会	

87 season　1998(平成10)年10月～1999(平成11)年9月

部長：藤永徹

主任：佐田悠輔(3)／リーダー会議長　前期：杉江紀彦(3)、後期：宮下隆志(4)／庶務　前期：三木善知(3)、後期：奈良靖(2)

10/9-10	札幌－樽前山7合目ヒユツテ－東山－神社－西山－苔の洞門	L黒崎(1)、SL多田(1)、森田(1)、今(1)
10/10-11	札幌－樽前山7合目ヒユツテ－東山－神社－西山－苔の洞門	L大杉(1)、SL杉田(1)、斎藤(1)、宍倉(1)
11/13-15	十勝岳望岳台－避難小屋－穴ポコ－望岳台	L伴(4)、SL杉江(3)、村瀬(4)、渡邉(2)
11/19-23	2年目旭岳合宿	L伴(4)、SL高野(3)、清水(2) L内藤(4)、SL三木(3)、金森(2) L西浦(4)、SL佐田(3)、村瀬(4)、渡邊(2) L宮下(4)、SL杉江(3)、奈良(2)

12/4-6	1年目旭岳初滑り	L西浦(4)、SL高野(3)、多田(1)、奈良(2) L宮下(4)、SL内藤(4)、村瀬(4)、金森(2) L伴(4)、SL三木(3)、今(1)、黒崎(1)、鈴木(1) L杉江(3)、SL佐田(3)、大杉(1)、宍倉(1)、斎藤(1)
12/25-29	バーデンホテル－富良野岳北尾根－バーデンホテル	L伴(4)、SL青山(OB2)、金森(2)、奈良(2)
12/28-1/3	布礼別－原始ヶ原一三峰コンタオネ－H方面スキー三峰山－布礼別	L内藤(4)、SL佐田(3)、宍倉(1)、多田(1)
12/28-1/4	清川－夏道尾根－ニセイカウシュッペ山－軍艦山－天狗山－北大雪スキー場	L西浦(4)、SL三木(3)、清水(2)、渡邊(2)
12/30-1/2	札幌－林道－チロロ岳－福本牧場	L宮下(4)、SL村瀬(4)、黒崎(1)、今(1)、杉田(1)
1/1-7	糠平－ウペペ南尾根－ウペペサンケ山－丸山－ニペソツ山－岩間温泉－三股	L伴(4)、SL青山(OB2)、金森(2)、奈良(2)
1/2-9	東大雪荘－トムラウシ山c1743引き返し－五色尾根中腹－林道終点－東大雪荘	L大島(OB1)、SL杉江(3)、小宮(2)、大杉(1)、斎藤(1)
1/13-16	パラダイスヒユツテ－奥手稲山の家－奥手稲山－銀嶺荘－春香山－オーンズスキー場	L金森(2)、SL奈良(2)、黒崎(1)、今(1)
1/14-17	高原牧場－函岳－高原牧場	L佐田(3)、SL渡邉(2)、大杉(1)、宍倉(1)
1/15-16	ロックサイドホテル－凌雲岳P2上引き返し－ロックサイドホテル	L伴(4)、SL三木(3)、杉江(3)
2/13-14	新見温泉－前目国内岳－白樺山－新見温泉	L三木(3)、SL伴(4)、藪内(2)、今(1)、杉田(1)
2/20-23	登山口－樽前小屋－樽前山－下山	L宮下(4)、SL杉江(3)、藪内(2)、今(1)、宍倉(1)
3/1-2	自然公園－羊蹄山c1321下引き返し－自然公園	L内藤(4)、SL村瀬(4)、黒崎(1)、斎藤(1)
3/1-3	札幌－除雪センター－ペケルベツ岳－国道	L西浦(4)、SL高野(3)、小宮(2)、大杉(1)、杉田(1)
3/3-12	白金温泉－オプタテ西尾根－オプタテシケ山－オプタテ東尾根－ブルヌニ股－下山	L宮下(4)、SL杉江(3)、藪内(2)、今(1)、宍倉(1)
3/6-8	凌雲閣－三峰山－富良野岳－凌雲閣－貝殻下－OP尾根－三段山－凌雲閣	L伴(4)、SL佐田(3)、金森(2)、清水(2)
3/6-13	酸ヵ湯温泉－仙人ヒュッテ－小岳－大岳－赤倉山－酸ヵ湯温泉	L内藤(4)、SL村瀬(4)、黒崎(1)、斎藤(1)
3/15-21	トッタベツヒュッテ－ピリカペタン沢－札内岳－エサオマントッタベツ岳JP－東西稜線－トッタベツヒュッテ	L伴(4)、SL佐田(3)、金森(2)、清水(2)
3/17-27	札幌－キャカル取り付き－c1120引き返し－知円別岳－ルシャ岳－ルサ山－知床岳－相泊	L宮下(4)、SL杉江(3)、藪内(2)、今(1)、宍倉(1)
3/21-4/2	凌雲閣－D尾根－上ホロカメットク小屋－富良野岳－境山－上ホロカメットク小屋－十勝岳－凌雲閣	L小河(OB1)、SL三木(3)、奈良(2)、渡邉(2)
4/24-25	キロロスキー場－余市岳－キロロスキー場	L宍倉(2)、SL高野(4)、杉田(2)、多田(2)
4/24-25	豊平峡大橋－狭薄岳－林道	L渡辺(3)、SL金森(3)、今(2)、大杉(2)
4/29-5/3	白金温泉－オプタテシケ山西尾根－オプタテシケ山－東尾根－水無川－白金温泉	L三木(4)、SL金森(3)、多田(2)、今(2)
4/29-5/3	駶泊－長官小屋－利尻山－駶泊	L杉江(4)、SL奈良(3)、大杉(2)、黒崎(2)、杉田(2)
4/29-5/5	無意根ゴールデンウィーク合宿	CL高野(4)、佐田(4)、渡邉(3)、藪内(3)、斎藤(2)、宍倉(2)、池内(1)、高橋(1)、西(1)、樋渡(1)、松田(1)、森岡(1)、山口(1)、宮下(OB1)、深田(OB2)
5/14-15	暑寒荘－暑寒別岳－暑寒荘	L藪内(3)、SL杉江(4)、今(2)、斎藤(2)
6/1-6	サマースキー旭岳	L金森(3)、SL斎藤(2)、西(1) L奈良(3)、SL藪内(3)、松田(1)、森岡(1) L渡邉(3)、SL杉田(2)、山口(1) L高野(4)、SL黒崎(2)、池内(1)、鍵和田(1) L今(2)、SL宍倉(2)、大杉(2)、多田(2)
7/4	発寒川(平和の滝－WVの滝引き返し)	L三木(4)、SL渡邉(3)、杉田(2)、大杉(2)、黒崎(2) L杉江(4)、SL奈良(3)、斎藤(2)、多田(2)、山口(1)
7/10	発寒川(平和の滝－WVの滝引き返し)	L宮下(OB1)、SL金森(3)、宍倉(2)、池内(1)、近藤(1)
7/10	発寒川(平和の滝－WVの滝引き返し)	L三木(4)、SL渡邊(3)、今(2)、松田(1)、森岡(1)
7/10-11	林道－伊佐内川－積丹岳－大滝川－下山	L伴(OB1)、SL奈良(3)、杉田(2)、多田(2)、斎藤(1)
7/17-18	白水大橋－白水沢－林道－意根山－薄別	L三木(4)、SL渡邊(3)、今(2)、松田(1)、森岡(1)
7/18	札的沢7月18日18札幌＝入山口－F10引き返し	L杉江(4)、SL金森(3)、大杉(2)、宍倉(2)
7/18-20	余別町－122点沢出合－122点大滝－51点出合－51点F8－余別川本流－余別町	L伴(OB1)、SL奈良(3)、杉田(2)、多田(2)、斎藤(1)
7/26	楽古山荘－コイボクシュメナシュウベツ川－楽古岳－夏道－楽古山	L杉江(4)、SL金森(3)、大杉(2)、宍倉(2)
7/27-8/1	林道終点－右股出合－左股－遊楽部岳－見市川上二股－国民宿舎	L伴(OB1)、SL奈良(3)、杉田(2)、多田(2)
7/30-8/3	スキー縦走：層雲峡－黒岳石室	L藪内(3)、SL宮下(OB1)、近藤(1)、松田(1)
8/8-9	札幌－大橋－ホンジャマ平一暑寒荘	L三木(4)、SL渡邊(3)、今(2)、松田(1)、森岡(1)
8/8-10	珊内川－珊内岳－余別川51点沢F5－余別川	L杉江(4)、SL金森(3)、大杉(2)、宍倉(2)、黒崎(2)
8/14-18	大樹－くまの沢－ヌピナイ右股－ヌピナイ－奥二股－十字峡－S字峡－大樹	L杉江(4)、SL金森(3)、大杉(2)、宍倉(2)、黒崎(2)
9/25-27	豊平川－オコタンペ湖－第2オコタンペ橋	L金森(3)、SL奈良(3)、池内(1)、山口(1)、近藤(1)
	部員総会	

88 season　1999(平成11)年10月～2000(平成12)年9月

部長：藤永徹

主任：奈良靖(3)／リーダー会議長：金森晶作(3)／庶務　前期：渡邉祐輔(3)、後期：今春如(2)

11/13-15	望岳台－穴ポコ－避難小屋－穴ポコ－望岳台下山	L宮下(OB1)、SL渡邊(3)、藪内(3)、杉田(2) L杉江(4)、SL金森(3)、小宮(3)
11/20-24	2年目旭岳合宿	L宮下(OB1)、SL渡邉(3)、藪内(3)、小宮(3) L杉江(4)、SL金森(3)、黒崎(2)、多田(2)、今(2) L三木(4)、SL奈良(3)、大杉(2)、宍倉(2)、杉田(2)
12/3-5	1年目旭岳初滑り	L三木(4)、SL藪内(3)、今(2)、森岡(1)、池内(1) L渡邊(3)、SL奈良(3)、近藤(1)、松田(1)、山口(1) L金森(3)、SL小宮(3)、杉田(2)、宍倉(2)
12/18-21	バーデンホテル－北尾根－富良野岳－三峰－原始ケ原－三峰－H－凌雲閣	L杉江(4)、SL金森(3)、宍倉(2)、今(2)、大杉(2)
12/23-29	無意根新人合宿	CL三木(4)、小宮(3)、藪内(3)、奈良(3)、池内(1)、近藤(1)、松田(1)、森岡(1)、山口(1)、大島(OB2)、小河(OB2)、市川(OB1)

12/23-29	バーデンホテル－ホコ岩－富良野岳－三峰－F尾根－北尾根－バーデンホテル	L宮下(OB1)、SL渡邉(3)、多田(2)、黒崎(2)、杉田(2)
12/26-1/3	奥新冠発電所－トッタベツ小屋－C204ポコ下コル－幌尻岳－1803西コル－北戸蔦別川－Aカールスキー－チロロ林道	L杉江(4)、SL金森(3)、宍倉(2)、今(2)、大杉(2)
1/3-5	五色温泉－ニセコアンヌプリ北沢－ニトヌプリ－国道	L三木(4)、SL薮内(3)、池内(1)、松田(1)、近藤(1)
1/4-9	幌加－林道－大平山南東東尾根－ニペソツ山－十勝三股	L宮下(OB1)、SL渡邉(3)、多田(2)、黒崎(2)、杉田(2)
1/13-16	水谷ロッジ－徳舜瞥山－ホロホロ山－水谷ロッジ	L金森(3)、SL宍倉(2)、森岡(1)、山口(1)
1/13-17	高原牧場－函岳周辺スキー－高原牧場	L小宮(3)、SL杉田(2)、池内(1)、近藤(1)、杉江(4)
2/11-13	桂岡浄水場－銀嶺荘－奥手稲山－奥手稲山の家－国際スキー場下山	L大杉(2)、SL宍倉(2)、松田(1)、森岡(1)、山口(1)
2/27-3/2	白金温泉－オプタテ西尾根－オプタテシケ山－白金温泉	L杉江(4)、SL渡辺(3)、今(2)、山口(1)
3/6-13	福本牧場－林道－六・七沢の出合い－芽室岳－芽室小屋－円山牧場	L三木(4)、SL小宮(3)、近藤(1)、松田(1)、森岡(1)
3/8-13	太陽の里－林道－北尾根－芦別岳－冬尾根－林道－太陽の里	L青山(OB3)、SL金森(3)、清水(3)、大杉(2)、宍倉(2)
3/11-21	相泊－知床岳－ポロモイ台地下－ウナキベツ川－観音岩－相泊	L杉江(4)、SL渡辺(3)、今(2)、山口(1)
3/12-16	太陽の里－芦別岳－雲峰山－太陽の里	L伴(OB1)、SL奈良(3)、黒崎(2)、杉田(2)、多田(2)
3/21-29	層雲峡－クチャンベツ林道－五色岳－ヒサゴ沼避難小屋－クチャンベツ林道－層雲峡	L青山(OB3)、SL金森(3)、清水(3)、大杉(2)、宍倉(2)
3/24-4/2	パラダイスヒュッテ－奥手稲山－奥手稲山の家－ヘルベチアヒュッテ－札幌国際スキー場－白井岳－余市岳－美比内山－長尾山－無意根山－無意根小屋－薄別	L奈良(3)、SL薮内(3)、池内(1)、森岡(1)、宮下(OB1)
4/26	神威橋－天狗沢出合－定山渓天狗岳デルタフェース－下山	L多田(3)、SL今(3)、松田(2)、山口(2)
4/29-5/5	幌－浜益御殿－浜益岳－群別岳－ホンジャマ平－暑寒別岳－暑寒荘	L渡邉(4)、SL今(3)、池内(2)、近藤(2)、森岡(2)
4/29-5/6	日高小屋－トッタベツ林道－北東尾根－1803西コル－戸蔦別岳－幌尻岳－北カール・東カールスキー－トッタベツ林道－日高小屋	L奈良(4)、SL宍倉(3)、松田(2)、山口(2)
5/1-7	無意根ゴールデンウィーク合宿	CL薮内(4)、金森(4)、大杉(3)、黒崎(3)、多田(3)、手塚(1)、三浦(1)、佐田(OB1)、高野(OB1)、滝(OB15)
5/13-14	余市岳	L森岡(2)、SL松田(2)、近藤(2)、杉田(3)
5/31-6/6	サマースキー	L杉田(3)、SL森岡(2)、三浦(1) L黒崎(3)、SL池内(2)、山口(2) L多田(3)、SL今(3)、近藤(2)、松田(2)
7/1-2	薄別－白水沢－無意根山－無意根小屋－薄別	L奈良(4)、SL杉田(3)、多田(3)、近藤(2)、森岡(2)
7/8	白水沢－大滝引き返し	L渡邉(4)、SL今(3)、山口(2)、三浦(1)
7/8-9	札的沢F10上引き返し	L奈良(4)、SL杉田(3)、多田(3)、近藤(2)、森岡(2)
7/14-16	古平町－古平川下二股川－二股手前引き返し	L奈良(4)、SL杉田(3)、多田(3)、近藤(2)、森岡(2)
9/9-10	薄別－白水沢－無意根山－無意根小屋－薄別	L金森(4)、SL杉田(3)、松田(2)、三浦(1)
	部員総会	

89 season　2000(平成12)年10月～2001(平成13)年9月

部長：藤永徹

主任：今春如(3)／リーダー会議長：宍倉優二(3)／庶務　前期：大杉友(3)、後期：山口達(2)

10/19	丸駒温泉－恵庭岳滝沢F6上引き返し	L深田(OB3)、SL杉田(3)、金森(4)、森岡(2)
11/2-4	望岳台－十勝岳避難小屋－十勝岳－望岳台下山	L奈良(4)、SL黒崎(3)、松田(2)、山口(2)
11/23-26	2年目旭岳合宿	L多田(3)、SL黒崎(3)、今(3)
11/23-27	2年目旭岳合宿	L金森(4)、SL大杉(3)、近藤(2) L奈良(4)、SL杉田(3)、森岡(2)、山口(2) L渡辺(4)、SL宍倉(3)、薮内(4)、松田(2)
12/8-10	1年目旭岳初滑り	L薮内(4)、SL今(3)、三浦(1)、杉田(3)
12/8-10	旭岳温泉－β尾根－北ガケ尾根－旭岳温泉	L金森(4)、SL宍倉(3)、森岡(2)、山口(2)
12/22-27	バーデンホテル－富良野岳北尾根－バーデンホテル	L金森(4)、SL宍倉(3)、森岡(2)、山口(2)
12/22-29	清川－夏道尾根－ニセイカウシュッペ山大槍下－清川	L奈良(4)、SL大杉(3)、松田(2)、黒崎(3)
12/23-27	無意根新人合宿	L渡辺(4)、SL今(3)、三浦(1)
12/24-26	吹上温泉－十勝岳避難小屋－穴ポコ－吹上温泉	L小河(OB3)、SL杉田(3)、薮内(4)、近藤(2)
12/30-1/5	高原大橋－音更大橋－音更山北西尾根－ペテトク沢二股－石狩岳－高原大橋	L小河(OB3)、SL杉田(3)、薮内(4)、近藤(2)
1/1-6	布礼別－三峰標高尾根－三峰山－S尾根－富良野岳－布礼別	L渡辺(4)、SL今(3)、三浦(1)
1/1-7	高原大橋－石狩岳北西尾根－石狩岳－沼ノ原－五色ヶ原－地獄谷－トムラウシ岳－東大雪荘	L奈良(4)、SL大杉(3)、黒崎(3)、松田(2)
1/6-9	バーデンホテル－富良野岳北尾根－富良野岳－バーデンホテル－上ホロカメットク山－三段山－凌雲閣	L金森(4)、SL宍倉(3)、森岡(2)
1/19-21	北見峠－チトカニウシ山周辺スキー－北見峠	L山口(2)、SL近藤(2)、大杉(3)、三浦(1)
2/9-11	凌雲閣－貝ガラ下－三段山－凌雲閣	L金森(4)、SL今(3)、山口(2)
3/2-4	清川－夏道尾根－ニセイカウシシュペ山－軍艦山－比麻良山－奥白滝	L金森(4)、SL宍倉(3)、山口(2)
3/11-20	コイボク林道－シカシナイ山－1821JP－カムイエクウチカウシ山南西稜核心部手前－エスケープ尾根－林道－静内ダム	L金森(4)、SL宍倉(3)、山口(2)
3/20-22	山部－18線川林道－北尾根－芦別岳－冬尾根－－21線下山	L渡辺(4)、SL黒崎(3)、今(3)、近藤(2)、松田(2)
3/20-26	酸ヶ湯温泉－仙人岱ヒュッテ－傘松峠－ニセ駒ケ岳－乗鞍岳－仙人岱ヒュッテ－高田大岳－酸ケ湯温泉	L奈良(4)、SL大杉(3)、杉田(3)、薮内(4)、三浦(1)
4/13-14	自然公園－羊蹄山外輪－お鉢スキー－自然公園	L宍倉(4)、SL三浦(2)、杉田(4)、森岡(3)
4/28	旭岳温泉－姿見駅－旭岳－旭岳温泉	L多田(4)、SL近藤(3)、黒崎(4)、今(4)、宍倉(4)、森岡(3)
4/28-5/4	白金温泉－オプタテ西尾根－オプタテシケ山－美瑛岳－美瑛富士－白金温泉	L杉田(4)、SL山口(3)、大杉(4)、三浦(2)
5/3-5	無意根ゴールデンウイーク合宿(無意根小屋70周年祭)	CL今(4)、宍倉(4)、黒崎(4)、多田(4)、近藤(3)、森岡(3)、遠藤(1)
6/5-10	サマースキー旭岳	CL近藤(3)、SL三浦(2)、遠藤(1) L山口(3)、SL森岡(3)、馬場(1)、副田(1)
6/7-10	サマースキー旭岳	L大杉(4)、SL宍倉(4)、黒崎(4)、今(4)
7/14	発寒川－平和の滝－WVの滝引き返し	L今(4)、SL山口(3)、遠藤(1)、副田(1)
7/14-15	白水沢－林道－無意根山－薄別	L宍倉(4)、SL近藤(3)、長谷(1)、馬場(1)
7/20-21	白水沢－林道－無意根山－薄別	L今(4)、SL山口(3)、遠藤(1)、副田(1)

7/20-21	積丹海岸西の河原トンネル－シシャモナイの滝－通行不可能の岬引き返し	L多田(4)、SL森岡(3)、大杉(4)、長谷(1)
8/5	奥漁橋－漁川－漁岳－漁入沢林道	L宍倉(4)、SL近藤(3)、長谷(1)、馬場(1)
8/8-9	奥漁橋－漁川－漁岳－漁入沢－望岳橋	L今(4)、SL山口(3)、遠藤(1)、副田(1)
8/13	発寒川(平和の滝－WVの滝引き返し)	L大杉(4)、SL森岡(3)、杉田(4)、多田(4)
8/16-17	豊羽鉱山－白井川c960三股－c1050の滝－豊羽鉱山	L宍倉(4)、SL近藤(3)、長谷(1)、馬場(1)
8/16-20	知床自然センター－知床大橋－タキノ川河口番屋－タコ岩引き返し－知床大橋－知床国設野営場－ビョウブ岩引き返し－野営場	L今(4)、SL山口(3)、遠藤(1)、副田(1)
8/24-29	宮之浦港－－栗生－青少年村－花山歩道－焼峰－大石展望台－鹿之沢小屋－永田岳－宮之浦岳－淀川小屋－淀川登山口－尾之間温泉	L大杉(4)、SL三浦(2)、馬場(1)、薮内(OB1)
8/26-28	トッタベツ林道－エサオマントッタベツ川c1000二股－林道	L宍倉(4)、SL近藤(3)、長谷(1)
9/6	林道終点－札的沢－6の沢4段の滝引き返し	L宍倉(4)、SL多田(4)、今(4)、山口(3)
9/8-9	層雲峡－荒井川－層雲峡	L宍倉(4)、SL多田(4)、今(4)、山口(3)
9/8-9	発寒川(平和の滝－WVの滝引き返し)	L今(4)、SL宍倉(4)、馬場(1)、副田(1)
9/23-24	バーデンホテル－十勝三峰沢－バーデンホテル	L今(4)、SL宍倉(4)、馬場(1)、副田(1)
	部員総会	

90 season　2001(平成13)年10月～2002(平成14)年9月

部長：藤永徹

主任：山口達(3)／リーダー会議長：森岡陽太郎(3)／庶務　前期：近藤武史(2)、後期：三浦康(2)

10/6-8	薄別－無意根小屋－無意根山－薄別	L遠藤(1)、SL馬場(1)、副田(1)
11/2-4	望岳台－十勝岳避難小屋－小屋周辺－望岳台	L大杉(4)、SL森岡(3)、三浦(2)
11/22-25	2年目旭岳合宿	L宍倉(4)、SL山口(3)、今(4) L大杉(4)、SL森岡(3)、三浦(2) L多田(4)、SL近藤(3)、黒崎(4)
12/7-9	1年目旭岳初滑り	L宍倉(4)、SL森岡(3)、馬場(1)、副田(1) L山口(3)、SL大杉(4)、遠藤(1)、谷沢(1) L今(4)、SL近藤(3)、伊藤(1)、須賀原(1)
日付なし	無意根新人合宿　遠征では、馬の背を乗っ越し、ピークアタックをすることができた。	メンバー名なし
12/22-26	凌雲閣－D尾根－化け物岩－三段山－貝ガラ－凌雲閣－北尾根－ホコ岩－バーデン	L大杉(4)、SL山口(3)、今(4)、三浦(2)
12/31-1/7	幌加ダム－ニペソツ山－丸山－ウペペサンケ山－菅野温泉	L大杉(4)、SL山口(3)、今(4)、三浦(2)
1/2-5	浮島－天塩岳－浮島	L奈良(OB1)、SL森岡(3)、須賀原(1)
1/4-7	白金温泉－オプタテシケ山－美瑛富士－白金温泉	L宍倉(4)、SL近藤(3)、遠藤(1)、馬場(1)、副田(1)
1/18-20	日勝峠－日勝ピーク－ペケレベツ岳－日勝ピーク南面スキー－日勝峠	L森岡(3)、SL山口(3)、伊藤(1)、馬場(1)
1/19-20	銭函一銀嶺荘－春香山－銭函	L今(4)、SL近藤(3)、谷沢(1)、副田(1)
2/21-24	太陽の里－林道終点芦別岳手前ポコ引き返し－太陽の里	L宍倉(4)、SL森岡(3)、大杉(4)、黒崎(4)
3/11-20	広尾町緑雲橋－トヨニ岳S峰－トヨニ岳N峰－・1512－緑雲橋	L宍倉(4)、SL森岡(3)、大杉(4)、黒崎(4)
3/17-25	ヘルベチアヒュッテ－神居岳－百松沢－奥手稲山の家－奥手稲山－国際スキー場上－白井岳－余市岳－美比内岳－長尾山－無意根小屋－無意根山－薄別	L今(4)、SL三浦(2)、山口(3)、遠藤(1)、谷沢(1)、馬場(1)
3/20-26	日勝トンネル－ペケレベツ岳－ウエンザル岳－JP－パンケヌーシ岳－芽室岳－芽室小屋－御影	L大杉(4)、SL近藤(3)、伊藤(1)、須賀原(1)、副田(1)
4/13-14	キロロスキー場－余市岳キロロスキー場下山	L三浦(3)、SL伊藤(2)、山口(4)、松田(3)、遠藤(2)、副田(2)
4/27-5/4	稚内－キャンプ場－利尻小屋－利尻山－キャンプ場	L近藤(4)、SL三浦(3)、伊藤(2)、遠藤(2)、馬場(2)
4/29-5/5	無意根ゴールデンウイーク合宿	CL山口(4)、松田(3)、谷沢(2)、須賀原(2)、斎藤(1)、田村(1)、牧野(1)、吉友(1)
5/2-5	無意根ゴールデンウイーク合宿	森岡(4)、副田(2)、高見(1)
5/10-12	自然の家－羊蹄山外輪－自然の家	L渡辺(OB2)、SL須賀原(2)、谷沢(2)、馬場(2)
5/18-19	暑寒荘－暑寒別岳－暑寒荘	L伊藤(2)、SL谷沢(2)、山口(4)、須賀原(2)、馬場(2)、副田(2)
6/2-7	サマースキー旭岳	L松田(3)、SL遠藤(2)、牧野(1)、吉友(1) L須賀原(2)、SL馬場(2)、三浦(3)、谷沢(2)、吉開(1)
6/30	発寒川－平和の滝－WVの滝引き返し	L山口(4)、SL三浦(3)、馬場(2)、副田(2)、吉友(1) L近藤(4)、SL松田(3)、遠藤(2)、谷沢(2)、牧野(1)
7/14	発寒川－平和の滝－流木の滝引き返し	L森岡(4)、SL三浦(3)、須賀原(2)、高見(1)、吉開(1) L奈良(OB2)、SL松田(3)、伊藤(2)、瀧下(1)
7/20	薄別－白水沢－無意根山－無意根小屋－薄別	L穴倉(OB1)、SL山口(4)、遠藤(2)、谷沢(2)、馬場(2)
7/27-28	札的沢－4段上引き返し	L穴倉(OB1)、SL山口(4)、遠藤(2)、谷沢(2)、馬場(2)
8/3-4	伊佐内川－F5上引き返し	L穴倉(OB1)、SL山口(4)、遠藤(2)、谷沢(2)、馬場(2)
8/3-5	スキー縦走：層雲峡温泉－黒岳石室周辺スキー－北鎮岳周辺スキー－間宮岳－北海岳－旭岳－旭岳温泉	L松田(4)、SL伊藤(2)、高見(1)、吉開(1)
8/13-15	幌豊平川本流－オコタンペ湖－第二オコタン橋	L近藤(4)、SL伊藤(2)、高見(1)、吉開(1)
8/15	札的沢－F10上引き返し	L穴倉(OB1)、SL山口(4)、遠藤(2)、谷沢(2)、馬場(2)
8/18-19	伊佐内川－積丹岳－大滝川－共和	L穴倉(OB1)、SL山口(4)、遠藤(2)、谷沢(2)、馬場(2)
8/18-23	凌雲閣－上ホロカメットク小屋－十勝岳－凌雲閣	L須賀原(2)、SL副田(2)、吉友(1)
9/1-6	札内川－八の沢－カムイエクウチカウシ山－コイカクシュサツナイ岳－コイカクシュ札内川－札内川	L山口(4)、SL谷沢(2)、馬場(2)、副田(2)
9/12-14	トムラウシ川－地獄谷	L森岡(4)、SL松田(4)、瀧下(1)、牧野(1)、吉開(1)
9/22-27	雌阿寒岳登山口－雌阿寒岳－田村邸－雌阿寒岳登山口－雄阿寒岳－清岳荘－斜里岳－清岳荘	L伊藤(2)、SL須賀原(2)、遠藤(2)
9/27-28	新冠湖登山口－新冠富士－イドンナップ岳－新冠町	L山口(4)、SL副田(2)、松田(3)、谷沢(2)、吉友(1)
	部員総会	

91 season　2002(平成14)年10月～2003(平成15)年9月

部長：藤永徹

主任：松田博行(3)／リーダー会議長：三浦康(3)／庶務　前期：三浦康(3)、後期：遠藤康之(2)

10/13-14	空沼登山口－万計沼－空沼岳－札幌岳－札幌岳登山口	L吉友(1)、SL牧野(1)、吉開(1)
11/1-3	望岳台－十勝岳避難小屋－望岳台	L山口(4)、SL松田(3)、伊藤(2)、須賀原(2)、谷沢(2)
11/2-3	望岳台－十勝岳避難小屋－望岳台	L森岡(4)、SL三浦(3)、遠藤(2)、馬場(2)、副田(2)
11/21-24	2年目旭岳合宿	L山口(4)、SL三浦(3)、伊藤(2)、遠藤(2) L森岡(4)、SL松田(3)、須賀原(2)、谷沢(2) L近藤(4)、SL奈良(OB2)、馬場(2)、副田(2)
12/6-8	1年目旭岳初滑り	L松田(3)、SL山口(4)、須賀原(2)、野村(1)、牧野(1) L近藤(4)、SL三浦(3)、吉開(1)、吉友(1) L渡邊(OB2)、SL宍倉(OB1)、伊藤(2)、馬場(2)、副田(2)
12/22-28	無意根新人合宿	メンバー名なし
12/31-1/4	清川－夏道尾根－ニセイカウシュッペ山－西尾根－清川	L森岡(4)、SL宍倉(OB1)、M馬場(2)、副田(2)
12/31-1/4	天幕－林道－天塩岳－天幕	L渡邊(OB2)、SL松田(3)、牧野(1)、吉友(1)
12/31-1/11	林道－1967峰－八の沢林道出合い－伏美	L山口(4)、SL金森(OB2)、M伊藤(2)、谷沢(2)
1/2-9	林道－チロロ岳－ルベシベ山－ルベシベ南東尾根－林道－トムラウシ橋－上美生	L奈良(OB2)、SL三浦(3)、遠藤(2)、須賀原(2)
1/10-13	凌雲閣－三段下貝－三段山－はげ尾根－バーデン	L近藤(4)、SL松田(3)、吉開(1)、野村(1)
1/17-19	北見峠－チトカニウシ山－北見峠	L伊藤(2)、SL須賀原(2)、馬場(2)、野村(1)
1/18-19	日勝峠－熊見山－三国の沢シェルター手前下山	L松田(3)、SL遠藤(2)、吉開(1)
2/1-2	深雪橋－喜茂別岳－深雪橋	L伊藤(2)、SL馬場(2)、吉友(1)、野村(1)
2/15-16	五色温泉－イワオヌプリ－ニセコアンヌプリ－五色温泉	L近藤(4)、SL伊藤(2)、山口(4)、須賀原(2)、松田(3)
2/21-23	無意根スキーツアー	メンバー名なし
3/5-14	トムラウシ温泉－林道－トムラウシ岳－地獄谷－沼の原コル－ヌプカンベツ川二股－忠別岳－高原温泉－緑岳－高原大橋	L近藤(4)、SL金森(OB2)、副田(2)、吉友(1)
3/14-17	凌雲閣－貝ガラ－三段山先肩引き返し－凌雲閣	L森岡(4)、SL青山(OB6)、馬場(2)
3/15-16	登山口－積丹岳－登山口	L三浦(3)、SL副田(2)、牧野(1)、吉友(1)
3/22-31	ソエマツ林道－・1529西尾根－ピリカヌプリ－ソエマツ岳－東尾根－高田牧場	L森岡(4)、SL青山(OB6)、遠藤(2)、馬場(2)
3/22-4/2	札内ヒュッテ－八の沢－カムイエクウチカウシ山－八の沢－札内ヒュッテ－日高小屋－トッタベツヒュッテ－札内岳北東尾根－札内岳－トッタベツヒュッテ	L山口(4)、SL松田(3)、伊藤(2)、須賀原(2)
3/23-26	知床自然センター－岩尾別温泉－羅臼岳ユースホステル	L大杉(OB1)、SL三浦(3)、野村(1)、牧野(1)、吉開(1)
4/12-13	羊蹄自然公園－羊蹄山スキー－羊蹄自然公園	L伊藤(3)、SL野村(2)、牧野(2)、松田(4)
4/27-5/4	室堂ターミナル－剱沢－真砂沢スキー－雷鳥沢－雷鳥平－立山三山－雄山－一ノ越－御山谷スキー－黒部ダム－室堂ターミナル－内蔵助スキー－室堂ターミナル	L松田(4)、SL須賀原(3)、野村(2)、吉友(2)
4/29-5/5	無意根GW合宿	メンバー名なし
5/10-11	キロロリゾート－余市岳－キロロリゾート	L須賀原(3)、SL吉友(2)、三浦(4)、馬場(3)
5/17-18	新見温泉－目国内岳－新見峠	L野村(2)、SL吉友(2)、吉開(2)、滝下(2)
5/31-6/6	サマースキー	L須賀原(3)、SL野村(2)、吉開(2)、水島(1)、佐藤(1) L遠藤(3)、SL吉友(2)、滝下(2)、伊藤(1) L馬場(3)、SL伊藤(3)、牧野(2)、八木(1)
7/12	薄別－白水沢－無意根山－無意根小屋－薄別	L三浦(4)、SL遠藤(3)、伊藤(1)、水島(1)
7/18-21	スキー縦走：白金温泉－美瑛富士避難小屋－美瑛富士－美瑛岳－望岳台	L松田(4)、SL野村(2)、伊藤(3)、馬場(3)、佐藤(1)、八木(1)
7/19	豊羽鉱山－白井川三股－余市岳－夏道－白井二股	L三浦(4)、SL遠藤(3)、伊藤(1)、水島(1)
7/26-27	薄別－白水沢－無意根山－無意根小屋－薄別	L松田(4)、SL馬場(3)、野村(2)、佐藤(1)、八木(1)
7/28	発寒川(平和の滝－WVの滝引き返し)	L松田(4)、SL遠藤(3)、野村(2)、八木(1)、水島(1) L三浦(4)、SL馬場(3)、吉友(2)、伊藤(1)、佐藤(1)
8/1-9	布礼別－富良野岳－上ホロカメットク避難小屋－美瑛岳－三川台－トムラウシ山－ヒサゴ沼避難小屋－白雲岳避難小屋－銀泉台	L伊藤(3)、SL吉友(2)、牧野(2)、吉開(2)
8/10-14	相泊－ウナキベツ河口－モイレウシ河口－知床沼－知床岳－ウナキベツ河口－相泊	L三浦(4)、SL遠藤(3)、伊藤(1)、水島(1)
8/14-19	相泊－ウナキベツ河口－知床沼－知床岳－ウナキベツ河口－知床岬－赤岩－相泊	L松田(4)、SL馬場(3)、野村(2)、佐藤(1)、八木(1)
8/25-27	五色温泉－イワオヌプリ－シャクナゲ分岐－湯元温泉－ニトヌプリ－チセヌプリ－シャクナゲ岳－白樺山－新見峠－目国内岳－岩内岳－岩内	L須賀原(3)、SL滝下(2)、伊藤(1)、水島(1)、古屋(1)
9/20-22	糠平温泉－ウペペサンケ山－幌加温泉－シャクナゲ尾根1662引き返し－幌加温泉	L伊藤(3)、SL野村(2)、佐藤(1)、八木(1)
	部員総会	

92 season　2003(平成15)年10月～2004(平成16)年9月

部長：藤永徹

主任：伊藤紀貴(3)／リーダー会議長：遠藤康之(3)／庶務　前期：馬場明日希(3)、後期：吉友郁哉(2)

10/11-12	芦別岳登山口－ユーフレ小屋－鷲谷－芦別岳－新道下山	L八木(1)、SL伊藤(1)、佐藤(1)、古屋(1)、水島(1)
10/11-12	登山ゲート－タ張岳ヒュッテ－(冷や水コース)－望岳台－(馬の背コース)－下山	L野村(2)、SL吉開(2)、瀧下(2)、牧野(2)、吉友(2)
11/1-2	望岳台－十勝岳避難小屋－十勝岳－望岳台	L松田(4)、SL遠藤(3)、野村(2)、牧野(2)、伊藤(2) L三浦(4)、SL馬場(3)、吉友(2)、吉開(2)
11/20-24	旭岳初滑り(2年目)	L松田(4)、SL遠藤(3)、野村(2)、吉友(2) L三浦(4)、SL伊藤(3)、吉開(2) L山口((OB1)、SL馬場(3)、牧野(2)
12/12-14	旭岳初滑り(1年目)	L三浦(4)、SL伊藤(3)、伊藤(1)、佐藤(1) L松田(4)、SL馬場(3)、吉友(2)、水島(1)、古屋(1)、八木(1)
12/13-14	豊羽鉱山－千尺高地－無意根山－無意根小屋－薄別	L山口(OB1)、SL遠藤(3)、吉開(2)、牧野(2)

12/23-29	無意根新人合宿	CL三浦(4)、メンバー名無し
日付なし	糠平温泉－ウペペサンケ山－丸山－ニペソツ山－前小天狗コル－岩間温泉	L松田(4)、SL伊藤(3)、野村(2)、吉友(2)
1/2-9	札的－樺戸山－隈根尻山－待根山北東－ピンネシリ山－ピンネ北西斜面－南幌加	L三浦(4)、SL宍倉(OB2)、佐藤(1)、古屋(1)、八木(1)
日付なし	3の沢源頭－S尾根スキー－F尾根スキー富良野岳南尾根－富良野岳－登山口	L森岡(4)、SL馬場(3)、瀧下(2)、伊藤(1)、水島(1)
1/16-18	登山口－夏道－前富良野岳－登山口	L伊藤(3)、SL吉開(2)、佐藤(1)、古屋(1)
1/16-18	豊清水－函岳周辺スキー－豊清水	L馬場(3)、SL野村(2)、伊藤(1)、八木(1)
1/17-18	駐車場－日勝峠－駐車場	L吉友(2)、SL牧野(2)、瀧下(1)、水島(1)
2/7-8	五色温泉－ニセコアンヌプリ－五色温泉－β沢下－五色温泉	L伊藤(3)、SL吉友(2)、馬場(3)、佐藤(1)
2/28-3/4	清川－夏道尾根－ニセイカウシュッペ山c1800引き返し－清川	L三浦(4)、SL馬場(3)、野村(2)、吉開(2)
3/2-11	旭岳温泉－姿見駅－石室－ピウケナイ沢－北鎮岳－比布岳－旭岳－融雪沢－忠別岳－音更橋	L松田(4)、SL伊藤(3)、伊藤(1)、佐藤(1)、古屋(1)
3/10-16	群別川林道－cl222－ギャップ手前－下山	L三浦(4)、SL馬場(3)、野村(2)、吉開(2)
日付なし	白金温泉－ポン水無川－オプタテシケ山東尾根－ポン水無川－白金温泉	L宍倉(OB2)、SL遠藤(3)、牧野(2)、吉友(2)
3/17-24	トッタベツヒュッテ－1803北東尾根－トッタベツ岳－幌尻岳－神威岳－北東尾根－林道－トッタベツヒュッテ	L宍倉(OB2)、SL遠藤(3)、牧野(2)、吉友(2)
日付なし	登山口－樽前山ヒュッテ－樽前山－モーラップ下山	L松田(4)、SL伊藤(3)、伊藤(1)、佐藤(1)、古屋(1)
3/18-22	五色温泉－ニセコアンヌプリ－五色温泉－イワオヌプリ－ニトヌプリ－チセヌプリ－シャクナゲ山－白樺山－前目国内岳－目国内岳－岩内岳－岩内スキー場	L大杉(OB2)、SL伊藤(3)、水島(1)、八木(1)
4/29-5/3	除雪終点－七ノ沢手前－1803西コル－幌尻岳－トッタベツ岳－北トッタベツ岳－ニ枝沢出合－三島	L伊藤(紀)(4)、SL野村(3)、八木(2)、伊藤(毅)(2)
5/1-5	GW無意根合宿	CL遠藤(4)、馬場(4)、牧野(3)、吉開(3)、吉友(3)、水島(2)、古谷(2)、佐々木(一)(1)、佐々木(広)(1)、関(1)
5/14-16	支十勝橋－林道－下ホロカメットク山－支十勝橋	L牧野(3)、SL吉開(3)、八木(2)
5/15-16	暑寒荘－暑寒別岳－暑寒荘	L吉友(3)、SL古谷(2)、伊藤(紀)(4)
5/15-16	キロロスキー場－余市岳－キロロスキー場	L水島(2)、SL伊藤(毅)(2)、野村(3)
5/29-6/1	サマースキー	L伊藤(紀)(4)、SL馬場(4)、宍倉(OB3)
6/1-6		L牧野(3)、SL水島(2)、古谷(2)、佐々木(一)(1)
6/1-6		L吉開(3)、SL伊藤(毅)(2)、野村(3)、佐々木(広)(1)
6/2-6		L吉友(3)、SL八木(2)、関(1)、角田(1)
6/18	羊蹄自然公園－羊蹄山－羊蹄自然公園	L遠藤(4)、SL吉友(3)
6/26	発寒川(平和の滝－WVの滝引き返し)	L遠藤(4)、SL吉開(3)、佐々木(一)(1)、M佐々木(広)(1) L馬場(4)、SL牧野(3)、関(1)、角田(1)
6/27	発寒川(平和の滝－WVの滝引き返し)	L遠藤(4)、SL野村(3)、八木(2)、水島(2) L伊藤(紀)(4)、SL吉友(3)、伊藤(毅)(2)、古谷(2)
7/3-4	薄別－白水沢－無意根山－無意根小屋－薄別	L馬場(4)、SL野村(3)、吉開(3)、伊藤(毅)(2)、八木(2) L遠藤(4)、SL伊藤(紀)(4)、古谷(2)、水島(2)
7/11	薄別－白水沢－大滝－林道－薄別	L遠藤(4)、SL吉友(3)、古谷(2)、関(1)、佐々木(広)(1) L馬場(4)、SL牧野(3)、佐々木(一)(1)、角田(1)
7/18-19	石狩林道終点－石狩沢－石狩岳－下山	L遠藤(4)、SL馬場(4)、水島(2)、八木(2)
8/1-3	美瑛登山口－美瑛避難小屋－美瑛富士周辺スキー－美瑛岳－登山口	L野村(3)、SL牧野(3)、吉開(3)、佐々木(広)(1)
8/7-13	層雲峡－黒岳石室－北鎮分岐－黒岳石室－北海岳－旭岳東コル－白雲岳避難小屋－白雲岳－緑岳－忠別避難小屋－ヒサゴ沼避難小屋－トムラウシ山－天人峡温泉	L吉友(3)、SL伊藤(毅)(2)、関(1)
8/10-12	天人峡温泉－クワウンナイ沢－トムラウシ山－ヒサゴ沼－化雲岳－天人峡温泉	L遠藤(4)、SL馬場(4)、水島(2)、八木(2)
8/13-14	登山口－ユーフレ小屋－北尾根旧道－芦別岳－新道下山	L伊藤(紀)(4)、SL古谷(2)、佐々木(一)(1)、角田(1)
8/14-18	永田－鹿之沢小屋－永田岳－新高塚小屋－宮之浦岳－淀川小屋－ヤクスギランド	L野村(3)、SL牧野(3)、佐々木(広)(1)
8/19-25	ポンヤオロマップ岳登山口－ポンヤオロマップ岳－ペテガリ岳－Cカール－ルベツネ岳－ヤオロマップ岳－コイカクシュサツナイ岳－コイカクシュ札内川－ピョウタンの滝	L伊藤(紀)(4)、SL古谷(2)、佐々木(一)(1)、角田(1)
8/31-9/1	暑寒別川林道－暑寒別川－直登沢－暑寒別岳－夏道下山	L遠藤(4)、SL馬場(4)、水島(2)、八木(2)
	部員総会	

93 season　2004(平成16)年10月～2005(平成17)年9月

部長：片倉賢

主任：吉開友羽子(3)／リーダー会議長：吉友郁哉(3)／庶務　前期：牧野友香(3)、後期：八木寛陽(2)

10/8-9	樽前ヒュッテ－風不死岳－樽前山－ヒュッテ	L佐々木(一)(1)、SL関(1)、角田(1)、佐々木(広)(1)
10/9	狩場山小屋－狩場山－狩場山小屋	L伊藤(毅)(3)、SL水島(2)、八木(2)
10/30-31	神威山荘－神威岳－荻伏	L伊藤(紀)(4)、SL馬場(3)、遠藤(4)
11/5-11	十勝岳グランドコース	CL遠藤(4)、SL野村(3)、牧野(3)、八木(2) L伊藤(紀)(4)、SL吉開(3)、伊藤(毅)(2) L馬場(4)、SL吉友(3)、水島(2)
11/19-23	新人合宿　旭岳	CL伊藤(紀)(4)、SL牧野(3)、八木(2) L遠藤(4)、SL吉開(3)、水島(2) L馬場(4)、SL野村(3)、吉友(3)、伊藤(毅)(2)
11/27-28	シール訓練　無意根山	L吉友(3)、遠藤(4)、伊藤(毅)(2)、水島(2)、角田(1)、佐々木(一)(1)、佐々木(広)(1)、関(1)、田中(1)、チャン(1)、松舟(1)
12/3-12	1年目初滑り　旭岳	CL馬場(4)、SL牧野(3)、佐々木(広)(1)、田中(1)、松舟(1) L伊藤(紀)(4)、SL吉開(3)、佐々木(一)(1)、チャン(1) L野村(3)、SL宍倉(OB3)、伊藤(毅)(2)、角田(1)、関(1)
12/23-26	凌雲閣－D尾根－化け物岩－三峰山－上ホロカメットク山－三峰山－D尾根－凌雲閣	L馬場(4)、SL牧野(3)、伊藤(毅)(2)、八木(2)

12/25-29	無意根新人合宿	L伊藤(紀)(4)、SL野村(3)、吉開(3)、大杉(OB3)、山口(OB2)、松田(OB1)、角田(1)、佐々木(一)(1)、佐々木(広)(1)、関(1)、田中(1)、チャン(1)、松舟(1)
12/30-1/3	野塚トンネル出口パーキング－トヨニ岳－野塚岳－野塚トンネル出口パーキング	L遠藤(4)、SL吉友(3)、水島(2)
12/31-1/1	バーデン－北尾根－ホコ岩－富良野岳－ホコ岩－バーデン	L伊藤(紀)(4)、SL野村(3)、佐々木(広)(1)、田中(1)
1/1-7	登山口－c663二股－天塩岳－前天塩岳－登山口	L伊藤(紀)(4)、SL野村(3)、佐々木(広)(1)、田中(1)
1/3-6	高原大橋－石狩沢林道終点－石狩北西尾根－石狩岳－石狩岳南陵－JP－岩間温泉－十勝三股	L馬場(4)、SL牧野(3)、伊藤(毅)(2)、八木(2)
1/4-10	福本牧場－林道終点－ヌーシ尾根－芽室岳－キミタカ－芽室小屋－丸山牧場	L松田(OB1)、SL吉開(3)、関(1)、松舟(1)
1/13-16	清川－取り付き尾根－二股－ニセイカウシュッペ山－清川	L吉友(3)、SL八木(2)、馬場(4)、角田(1)、佐々木(広)(1)
1/14-16	婦美町登山口－積丹岳－婦美町下山	L野村(3)、SL水島(2)、チャン(1)、松舟(1)
2/11-13	銭函浄水場－銀嶺荘－春香山－奥手意根－山の家－手稲山－ハイランドスキー場	L牧野(3)、SL伊藤(毅)(2)、佐々木(広)(1)、田中(1)
2/23-26	十勝三股－前天狗・天狗コル－ニペソツ山－大平－国道	L遠藤(4)、SL牧野(3)、角田(1)、チャン(1)、松舟(1)
3/4-9	十勝三股－小天狗・前天狗コル－シャクナゲ岳－天狗岳コル十勝三股	L馬場(4)、SL野村(3)、伊藤(毅)(2)
3/6-12	林道入口－伏美岳避難小屋－伏美岳北東尾根c1392－伏美岳－伏美岳北東尾根－妙敷山－ピパイロ岳－林道入口－上美生	L遠藤(4)、SL牧野(3)、角田(1)、チャン(1)、松舟(1)
3/10-13	清川－夏道尾根－大ヤリ偽Pコル－ニセイカウシュッペ山－林道－国道333下山	L遠藤(4)、SL牧野(3)、角田(1)、チャン(1)、松舟(1)
3/15-17	林道入口－c1457－頂稜夏道上－芦別岳－c1377－下山	L伊藤(紀)(4)、SL吉開(3)、水島(2)、八木(2)
3/25-4/1	トッタベツ林道除雪終点－トッタベツヒュッテ－札内岳直下－札内JP－c1760東尾根知多－札内川八の沢出会－札内ヒュッテ－上札内	L馬場(4)、SL野村(3)、伊藤(毅)(2)
3/27-28	登山口－冷水小屋－札幌岳－登山口	L三浦(0B1)、SL伊藤(紀)(4)、佐々木(一)(1)、佐々木(広)(1)
6/1-5	サマースキー	L(チーフ)水島(3)、SL関(2)、森島
6/1-5		L伊藤(毅)(3)、SL佐々木(広)(2)、角田(2)、関矢(1)
6/1-5		L八木(3)、SL佐々木(一)(2)、松舟(2)、田村(1)
6/3-6		L野村(4)、吉開(4)、伊藤(紀)(OB1)
7/2	発寒川(平和の滝－wvの滝－平和の滝)	L野村(4)、SL水島(3)、角田(2)、関(2)、佐々木(一)(1)
7/2-3	発寒川	L吉開(4)、SL伊藤(毅)(3)、佐々木(広)(2)、松舟(2)、関矢(1)
7/3	発寒川(平和の滝－wvの滝－平和の滝)	L野村(4)、SL八木(3)、田村(1)、森島(1)
7/16-17	薄別－白水沢－無意根山－無意根小屋－薄別	L吉開(4)、SL伊藤(毅)(3)、角田(2)、森島(1) L野村(4)、SL八木(3)、佐々木(一)(2)、佐々木(広)(2)、関矢(1)
7/23-24	薄別－白水沢－無意根山－無意根小屋－薄別	L吉開(4)、SL水島(3)、野村(4)、松舟(2)、田村(1)
8/5-10	相泊－ウナキベツ河口－知床沼－ポロモイ岳－c580西コル－知床岬－念仏岩－ウナキベツ河口－相泊	L野村(4)、SL八木(3)、松舟(2)、佐々木(広)(2)、関矢(1)
8/17-18	漁入沢－漁岳－漁本流－奥漁橋	L吉開(4)、SL水島(3)、佐々木(一)(2)、佐々木(広)(2)、田村(1)
9/28-29	千走川直登沢出会い－狩場山ピーク手前－千走川直登沢出会い	L野村(4)、SL八木(3)、松舟(2)、佐々木(広)(2)

94 season　2005(平成17)年10月～2006(平成18)年9月

部長：片倉賢

主任：八木寛陽(3)／リーダー会議長：水島佑介(3)／庶務　前期：伊藤毅(3)、後期：佐々木広器(2)

10/8-9	冷水岳登山道林道－屏風岳－冷水登山口	L関矢(1)、SL森嶋(1)、田村(1)
10/8-9	オンネトーコース登山口－雌阿寒岳6合目－雌阿寒温泉登山口－雌阿寒岳－雌阿寒温泉	L佐々木(2)、SL松舟(2)、関(2)、角田(2)
11/4-5	望岳台－十勝岳－望岳台	L野村(4)、SL伊藤(3)、角田(2) L吉友(4)、SL八木(3)、佐々木(2) L吉開(4)、SL水島(3)、関(2)、松舟(2)
11/17-21	二年目新人合宿　旭岳北崖c2000引き返し－最終日夏道	L吉開(4)、SL八木(3)、角田(2) L吉友(4)、SL伊藤(3)、関(2)、佐々木(2)
12/9-11	初滑り　旭岳	L吉開(4)、SL水島(3)、森嶋(1)、関矢(1) L野村(4)、SL伊藤(3)、JOM(1)、田村(1)
日付なし	無意根新人合宿	メンバー名なし
12/14-27	バーデンホテル－北尾根－富良野岳－バーデンホテル	L吉友(4)、SL宍倉(OB4)、松舟(2)、角田(2)
12/27-1/2	パンケヌーシ林道入口－チロロ岳－パンケヌーシ林道入口	L吉友(4)、SL宍倉(OB4)、松舟(2)、角田(2)
1/1-5	愛山渓温泉－愛別岳北尾根－愛別岳－永山岳－愛山渓ドライブイン	L野村(4)、SL水島(3)、佐々木(2)、関(2)
1/2-7	東大雪荘－カムイ橋手前－c1500－尾根上c1450－林道下山	L三浦(OB2)、SL伊藤(3)、森嶋(1)
1/3-7	清流橋登山口－天塩岳－旧ウキウキランド下山	L吉開(4)、SL八木(3)、田村(1)、JOM(1)
1/21-22	札幌－チセヌプリ－ニトヌプリ－下山	L水島(3)、SL関(2)、角田(2)、森嶋(1)、八木(3)
2/28-3/1	凌雲閣－貝殻上C1510－三段山－N－R－H－凌雲閣下山	L野村(4)、SL伊藤(3)、関(2)、佐々木(2)
3/8-10	ロープウエイ駅－石室－旭岳－北大スロープ－ロープウエイ	L野村(4)、SL伊藤(3)、関(2)、佐々木(2)
3/9-11	羊蹄自然公園－羊蹄山外輪－羊蹄自然公園	L吉開(4)、SL水島(3)、関矢(1)、森嶋(1)
3/17-23	相泊－モレウシ川－ペキン－ポロモイ－相泊	L吉開(4)、SL水島(3)、関矢(1)、森嶋(1)
3/18-22	十勝ダム－林道分岐－ニペソツ山c1460引き返し－下山	L伊藤(OB1)、SL八木(3)、宍倉(OB4)、松舟(2)
3/21-29	布礼別－登山口－境山－上ホロ避難小屋－十勝岳－オプタテシケ西尾根－下山	L野村(4)、SL伊藤(3)、関(2)、佐々木(2)
3/26-4/2	林道入口－大平－ニペソツ山－小天狗・前天狗コル－国道273	L伊藤(OB1)、SL八木(3)、宍倉(OB4)、松舟(2)
4/29-5/4	戸蔦別林道－エサオマン出会い－8の沢出会い－－幌尻岳－戸蔦別岳－8の沢出会い－戸蔦別林道	L水島(4)、SL関(3)、森嶋(2)、関矢(2)
5/3-7	無意根ゴールデンウイーク合宿	チーフ伊藤(4)、八木(4)、佐々木(3)、JOM(2)、伊出(1)、勝瀬(1)、河野(1)、洞(1)
5/13-14	愛山渓温泉－愛別北尾根c1460－愛山渓温泉下山	L佐々木(3)、SL関(3)、森嶋(2)、JOM(2)
5/31-6/4	サマースキー	L佐々木(3)、SL森嶋(2)、早川(1)、洞(1) L関(3)、SLJOM(2)、井出(1)、勝瀬(1)、河野(1)
6/25	発寒川(平和の滝－WVの滝－平和の滝)	L伊藤(4)、SL松舟(3)、関矢(2)、森嶋(2) L八木(4)、SL佐々木(3)、勝瀬(1)、早川(1) L水島(4)、SL関(3)、井出(1)、河野(1)、洞(1)

7/1-2	林道入口－白水沢－無意根山－無意根小屋－薄別	L水島(4)、SL佐々木(3)、関矢(2)、JOM(2)、井出(1)
7/15-16	林道入口－林道途中橋の上－豊平川本流－オコタンペ湖	L八木(4)、SL松舟(3)、河野(1)、洞(1)
7/22-23	林道入口－白水沢－無意根山－無意根小屋－薄別	L伊藤(4)、SL関(3)、森嶋(2)、勝瀬(1)、早川(1)
7/29-30	林道入口－白水沢－無意根山－無意根小屋－薄別	L八木(4)、SL松舟(3)、河野(1)、洞(1)
8/12-13	林道入口－漁沢本流－漁岳－漁入沢－林道	L八木(4)、SL松舟(3)、河野(1)、洞(1)
8/14-15	臼別温泉－臼別川－熊の沢－下山	L水島(4)、SL佐々木(3)、関矢(2)、JOM(2)、井出(1)
8/14-15	豊羽鉱山－白井岳－夏道	L伊藤(4)、SL関(3)、森嶋(2)、勝瀬(1)、早川(1)
8/20-23	相泊－知床沼－番屋－岬－赤岩川河口－ウナキベツ河口－相泊	L伊藤(4)、SL関(3)、森嶋(2)、勝瀬(1)、早川(1)
9/9	札的沢　林道－F10上	L多田(OB5)、SL奈良(OB6)、水島(4)、伊藤(4)、関(3)、佐々木(3)、森嶋(2)
9/16-17	雲石橋－見市川－中二股－左股－乗越し－平田内川－下山	L奈良(OB6)、SL宍倉(OB5)、水島(4)、八木(4)、佐々木(3)、関(3)、森嶋(2)
9/23	荒井川　札幌－橋－c680	L伊藤(4)、SL佐々木(3)、水島(4)、関(3)、森嶋(2)
9/30	白水林道入口－林道出会い－薄別	L伊藤(4)、SL佐々木(3)、森嶋(2)、田村(2)、井出(1)

95 season　2006(平成18)年10月～2007(平成19)年9月

部長：片倉賢
主任：関将一(3)／リーダー会議長：佐々木広器(3)／庶務：田村涼(2)

10/28-29	夕張岳登山口ゲート－林道終点－冷水コース－石原平－馬の背コース－下山	L JOM(2)、SL森嶋(2)、田村(2)
11/3-4	望岳台－十勝岳－望岳台	L水島(4)、SL佐々木(3)、田村(2) L八木(4)、SL関(3)、JOM(2)、森嶋(2)
11/17-21	2年目新人合宿　旭岳北崖乗り越し	L伊藤(4)、SL関(3)、JOM(2)、水島(4)
	3年目新人合宿　旭岳北崖乗り越し	L八木(4)、SL佐々木(3)、田村(2)、森嶋(2)
12/9	八剣山　L八木が足を骨折し遭対が動く	L八木(4)、SL佐々木(3)、JOM(2)、田村(2)、森嶋(2)
日付なし	無意根新人合宿　ピークアタック、馬の背乗り越し、スキー等を行った。雪洞泊やビバーク訓練も行った。	メンバー記載なし
1/18-21	北見峠－チトカニウシ山c1030－下山	L関(3)、SL森嶋(2)、井出(1)
1/19-20	青年の家－徳舜別山－下山	L佐々木(3)、SL田村(2)、勝瀬(1)、河野(1)、早川(1)
2/10-12	北見峠－チトカニウシ山－下山	L水島(4)、SL関(3)、森嶋(2)、勝瀬(1)、河野(1)
2/10-13	清川－夏道尾根－ニセイカウシュッペ山－c1170－清川	L野村(4)、SL佐々木(3)、井出(1)、田村(1)
2/24-25	札幌岳登山口－冷水小屋－下山	L伊藤(4)、SLJOM(2)、河野(1)、早川(1)
2/24-25	モラップ樽前登山口－樽前ヒュッテ－E峰－外輪北周り－E峰－W峰－国道下山	L伊藤(4)、SL関(3)、JOM(2)、田村(2)、森嶋(2)
3/2-8	田村邸－斜里岳－田村邸	L吉友(4)、SL佐々木(3)、水島(5)
3/8-11	バーデン－北尾根－富良野岳－北尾根－バーデン下山	L伊藤(4)、SL関(3)、JOM(2)、田村(2)、森嶋(2)
3/13-17	日勝峠－沙流岳－林道－ペンケヌーシ北尾根－ペンケヌーシ岳－ポコ東尾根c1500－曲沢出会－福本牧場	L水島(4)、SL野村(OB1)、井出(1)、勝瀬(1)
3/17-24	美生ダム－8の沢出会い－1712－PJP－GAP－PJP－1967－PJP－PJP－c1630－ルベシベ山－1590－ルベシベ肩－川端牧場	L伊藤(4)、SL関(3)、JOM(2)、田村(2)、森嶋(2)
4/14-15	自然公園－羊蹄山c1321－下山	L佐々木(4)、SLJOM(3)、勝瀬(2)、河野(2)、早川(2)
4/29-5/1	幌－浜益御－浜益岳－群別北コル－暑寒別岳－暑寒荘	L佐々木(4)、SLJOM(3)、勝瀬(2)、河野(2)、早川(2)
4/30-5/6	無意根GW合宿	チーフ関(4)、田村(3)、森嶋(3)、井出(2)、岩波(1)、小倉(1)
5/19-20	キロロスキー場－余市岳－c1070－下山	L森嶋(3)、SL田村(3)、井出(2)、河野(2)
5/31-6/4	サマースキー	L JOM(3)、SL早川(2)、河野(2)、田村(3) L森嶋(3)、SL勝瀬(2)、井出(2)、小倉(1)
6/24	発寒川(平和の滝－発寒川－WVの滝)	L佐々木(4)、SLJOM(3)、勝瀬(2)、河野(2) L関(4)、SL森嶋(3)、田村(3)、岩波(1)、小倉(1)
6/30	白水沢－無意根	L佐々木(4)、SL森嶋(3)、河野(2)
7/1	白水沢－林道	L八木(OB1)、SL田村(3)、早川(2)、小倉(1)
7/7-8	札幌－白水沢－無意根小屋－薄別	L関(4)、SLJOM(3)、岩波(1)、勝瀬(2)
8/13-14	奥漁橋－漁岳－下二股－橋－国道下山	L関(4)、SLJOM(3)、井出(2)、勝瀬(2)、岩波(1)
8/17-21	トッタベツ林道－エサオマントッタベツ川－エサオマントッタベツ岳－カムイエクウチカウシ山－八の沢－札内川－中札内	L関(4)、SLJOM(3)、井出(2)、勝瀬(2)、岩波(1)
日付なし	中南部日高	L野村(OB1)、SL田村(3)、早川(2)、小倉(1)
8/18-19	天人峡－カウンナイ沢－夏道合流点－トムラウシ山－化雲岳－天人峡	L佐々木(4)、SL森嶋(3)、河野(2)

96 season　2007(平成19)年10月～2008(平成20年)9月

部長：片倉賢
主任：森嶋大地(3)／リーダー会議長：森嶋大地(3)／庶務：井出康太(2)

11/17-18	十勝岳グランドコース	L佐々木(4)、SL森嶋(3)、勝瀬(2)、河野(2) L関(4)、SL八木(OB1)、井出(2)、早川(2)
11/22-25	二年目新人合宿　旭岳	L佐々木(4)、SL野村(OB1)、勝瀬(2)、早川(2) L関(4)、SL森嶋(3)、井出(2)、河野(2)
12月　日付なし	無意根シール訓練	CL関(4)他
12/15-16	キロロスキー場－余市岳	L森嶋(3)、SL河野(2)、岩波(1)、小倉(1)、速水(1)、佐々木(4)
12/22-28	無意根新人合宿	CL関(4)、佐々木(4)、森嶋(3)、井出(2)、勝瀬(2)、河野(2)、早川(2)、岩波(1)、小倉(1)、速水(1)、吉友(OB1)
12/31-1/4	トムラウシ温泉－トムラウシ山	L佐々木(4)、SL八木(OB1)、井出(2)、早川(2)
1/1-5	函岳	L関(4)、SL森嶋(3)、勝瀬(2)、河野(2)、小倉(1)
1/18-20	銀嶺荘－春香山－奥手稲山－手稲オリンピア	L森嶋(3)、SL井出(2)、勝瀬(2)、小倉(1)
2/23-25	北見峠－チトカニウシ山	L河野(2)、SL早川(2)、井出(2)、小倉(1)
3/11-15	五色温泉－ニトヌプリ－チセヌプリ－白樺山－新見温泉	L佐々木(4)、SL早川(2)、井出(2)、小倉(1)、速水(1)
3/12-14	凌雲閣－上富良野岳－富良野岳－F尾根－布礼別	L関(4)、SL森嶋(3)、勝瀬(2)、河野(2)

5月	ゴールデンウィーク無意根合宿	新入部員がいなかったため中止
5/17-18	羊蹄山自然公園－羊蹄山	L早川(3)、SL井出(3)、河野(3)、小倉(2)
5/23-25	暑寒荘－暑寒別岳	L勝瀬(3)、SL河野(3)、森嶋(4)、井出(3)
6/7-10	サマースキー　旭岳	L勝瀬(3)、SL小倉(2)、井出(3)、河野(3)、早川(3)
7/19-21	鴛泊－長官山－利尻岳	L河野(3)、SL井出(3)、小倉(2)、市川(1)、西(1)
8/8-9	望岳台－十勝岳－美瑛岳－美瑛富士避難小屋－美瑛富士－白銀温泉	L森嶋(4)、SL河野(3)、勝瀬(3)、西(1)
8/15-19	幌尻山荘－幌尻岳－七つ沼－北トッタベツ岳－チロロ二の沢	L森嶋(4)、SL河野(3)、勝瀬(3)、西(1)
8/23-25	層雲峡－クチャンベツ沼の原－五色岳－化雲岳－ヒサゴ沼－トムラウシ山－東大雪荘	L早川(3)、SL小倉(2)、ワスサン(ジョム)(部外者)
9/15-20	屋久島	L早川(3)、SL小倉(2)、ワスサン(ジョム)(部外者)

97 season　2008(平成20)年10月～2009(平成21)年9月

部長：片倉賢

主任：早川航(3)／リーダー会議長：河野遼平(3)／庶務：井出康太(3)

11/7-9	望岳台－十勝岳－望岳台	L森嶋(4)、SL早川(3)、井出(3)、河野(3)、勝瀬(3)、小倉(2)
11/21-24	二年目新人合宿　ロープウエイ－石室－夏道－ロープエイ－下山	L森嶋(4)、SL河野(3)、井出(3)、早川(3)、勝瀬(3)、小倉(2)
11/29-30	シール訓練　無意根山	チーフ井出(3)、早川(3)、河野(3)、勝瀬(4)、小倉(2)、西(1)、ラオリ(1)
12/20-23	初滑り　旭岳温泉－旭岳－追悼－旭岳温泉	L森嶋(4)、SL勝瀬(3)、井出(3)、西(1) L河野(3)、SL早川(3)、小倉(2)、ラオリ(1)
12/26-29	冬合宿　無意根山	チーフ森嶋(4)、早川(3)、井出(3)、河野(3)、勝瀬(3)、小倉(2)、西(1)
1/1-5	清流橋－林道途中－c1216－岩峰下－下山	L河野(3)、SL早川(3)、小倉(2)
1/1-7	布礼別－富良野岳－三峰コンタ尾根c1360－三峰－F尾根下－前富良野岳－布礼別	L森嶋(4)、SL勝瀬(3)、井出(3)
1/9-11	日勝峠駐車場－c1120－1343－1268－除雪センター下山	L井出(3)、SL河野(3)、小倉(2)、西(1)
2/7-8	中山峠－黒川コース－中央尾根－喜茂別岳－下山	L河野(3)、SL井出(3)、早川(3)、森嶋(4)
2/11	白銀荘－三段山－白銀荘	L早川(3)、SL河野(3)、森嶋(3)、西(1)
2/14-15	青少年の家－ホロホロ山－青少年の家	L勝瀬(3)、SL河野(3)、西(1)
2/14-15	新見温泉－新見峠－前目国内岳－目国内岳－白樺山－新見温泉	L井出(3)、SL小倉(2)、早川(3)
3/6-7	ウエンド川林道除雪終点－余別岳北尾根－余別岳－積丹岳－夏道林道－婦美	L宍倉(OB7)、SL早川(3)、河野(3)、勝瀬(3)
3/8-14	高原温泉－音更橋前－忠別岳－1856－c1725尾根－c1550－フワコロski－1431西コル－高原温泉	L森嶋(3)、SL井出(3)、小倉(2)、西(1)
3/13-19	円山牧場－芽室小屋－夏道尾根－芽室岳－1726－ルベシベJP1712－ピパイロJP－1967峰－ピパイロ林道－上美生	L宍倉(OB7)、SL早川(3)、河野(3)、勝瀬(3)
4/4-5	マウンテンホテル－飛行場－余市岳－マウンテンホテル	L河野(4)、SL小倉(3)、井出(4)、西(2)
4/18-19	共同墓地－羊蹄山c850往復	L井出(4)、SL河野(4)、勝瀬(4)、西(2)
5/2-6	無意根ゴールデンウイーク合宿	チーフ森嶋(4)、早川(3)、井出(3)、河野(3)、勝瀬(3)、小倉(2)、西(2)
5/15-17	ふれあいの家－ユフレ小屋－ゴルジュ－芦別岳－芦別東－ユフレ小屋－ふれ愛の家	メンバー名なし
6/4-7	サマースキー　旭岳ロープウエイ－β下－石室－旭岳Peakp－ニセ金－北大Ski－石室－旭岳温泉	L河野(4)、SL勝瀬(4)、奥山(1)、三輪(1)
6/4-7	旭岳ロープウエイ－β下－石室－旭岳夏道途中敗退－かめSki－旭岳温泉	L小倉(3)、SL井出(4)、小泉(1)
6/20	発寒川　平和の滝－WVの滝	L河野(4)、SL勝瀬(4)、早川(4)、井出(4)
6/21	白水林道－函－大滝－林道－宝来小屋－薄別	L井出(4)、SL河野(4)、早川(4)、勝瀬(4)
6/27	発寒川　平和の滝－WVの滝	L早川(4)、SL井出(4)、西(2)、三輪(1)、谷口(1)
6/28	発寒川　平和の滝－WVの滝	L勝瀬(4)、SL河野(4)、小倉(3)、奥山(1)、小泉(1)
7/11-12	白水沢－大滝－林道出会－源頭－無意根山－無意根小屋－薄別下	L勝瀬(4)、SL河野(4)、小倉(3)、奥山(1)、小泉(1) L井出(4)、早川(4)、西(2)、三輪(1)、谷口(1)
7/24-25	斜里岳登山口－新道－斜里岳Peak－下山	L河野(4)、SL西(2)、八木(1)
8/7-9	豊羽鉱山－960三股－余市岳Peak－(飛行場)－ロープウエイ下山	L勝瀬(4)、SL河野(4)、奥山(1)、小泉(1)
8/8-10	トムラウシ温泉－林道終点－トムラウシ川－地獄谷－ワセダ沢－北沼－トムラウシPeak－ヒサゴ沼遭難小屋－ヒサゴ沢－トムラウシ川－下山	L井出(4)、SL早川(4)、三輪(1)、谷口(1)
8/14-19	十勝岳温泉－富良野岳－三峰上－上ホトカメットク山－十勝岳避難小屋－十勝岳－美瑛岳－美瑛富士－美瑛富士避難小屋－石垣山－ベベツ岳－オプタテシケ山－双子沼－コスマヌプリ－ツリガネ山－三川台南沼－トムラウシ山－ヒサゴ沼－化雲岳－五色岳－忠別岳－平々岳－白雲岳－白雲避難小屋－北海岳－間宮岳－旭岳－姿見駅－ロープウエイ下山	L井出(4)、SL西(2)、小泉(1)
8/26-31	ウトロ－ルサ川河口－ルサ川－ルサ乗越－ルシャ川－ルシャ川河口－知床林道－カムイワッカの滝下山	L勝瀬(4)、SL河野(4)、奥山(1)、小泉(1)
8/26-9/4	額平川林道ゲート－幌尻山荘－幌尻北カール－幌尻岳－七つ沼カール－新冠川上二股－サオマン北カール－エサオマントッタベツ岳－10.5ノ沢カール－春別岳－カムイエクウチカウシ山－八の沢－札内川－中札内	L井出(4)、SL早川(4)、三輪(1)、谷口(1)

98 season　2009(平成21)年10月～2010(平成22)年9月

部長：片倉賢

主任：小倉守彦(3)(2009/10～2009/12)・早川航(4)(2010/1～2010/3)・西達也(2)(2010/4～2010/9)／リーダー会議長：小倉守彦(3)(2009/10～2009/12)・河野遼平(4)(2010/1～2010/3)・西達也(2)(2010/4～2010/9)／庶務：西達也(2)

11/1-4	望岳台－十勝岳－望岳台	L井出(4)、SL早川(4)、西(2) L勝瀬(4)、SL小倉(3)、河野(4)
11/17	登山口－大沢分岐－風不死岳Peak－下山	L小泉(1)、SL(奥山(1)、谷口(1)、三輪(1)
11/21-23	二年目新人合宿　ロープウエイ－石室－夏道－ロープウエイ	L河野(4)、SL井出(4)、西(2)、早川(4)、勝瀬(4)
11/28-29	シール訓練　無意根山	早川(4)、三輪(1)、小泉(1)、矢木(1)
12/5-6	シール訓練　無意根山	勝瀬(4)、小倉(3)、奥山(1)、小泉(1)、宮崎(1)

12/11-13	二年目新人合宿　ロープウエイ－石室－夏道－ロープウエイ	L早川(4)、SL小倉(3)、西(2)
12/11-13	初滑り　旭岳温泉－β下－旭岳－追悼－旭岳温泉	L井出(4)、SL八木(OB4)、奥山(1)、矢木(1)
12/12-14	初滑り　旭岳温泉－β下－旭岳－追悼－旭岳温泉	L河野(4)、SL勝瀬(4)、三輪(1)、小泉(1)、宮崎(1)
12/26-29	冬合宿　無意根山	L勝瀬(4)、SL早川(4)、井出(4)、西(2)、三輪(1)、小泉(1)、宮崎(1)
1/30-31	国際スキー場－白井岳－池－ヘルベチアヒュッテ－奥手稲岳－東壁スキー－下山	L早川(4)、SL西(2)、奥山(1)、宮崎(1)
2/11-14	吹上温泉－三段山－観測小屋－九条武子歌碑－十勝岳避難小屋手前－三段山－九条武子歌碑－十勝岳避難小屋－十勝岳－吹上温泉	L井出(4)、SL森嶋(OB2)、宮崎(1)
3/4-9	キロロスキー場－余市岳－美比内山－千尺高地－無意根小屋－無意根山－喜茂別岳－深雪橋(国道230)	L早川(4)、SL宍倉(OB7)、奥山(1)、宮崎(1)
3/12-17	新見温泉－新見峠－白樺山－シャクナゲ－チセヌプリ－ニトヌプリ－五色温泉－ニセコアンヌプリ－アンヌプリスキー場	L勝瀬(4)、SL森嶋(OB2)、井出(4)、西(2)、三輪(1)、矢木(1)
3/15-30	旭岳温泉－第一天女ヶ原－ユウセツ沢－姿見の池石室－旭岳(敗退)－凡忠別岳－忠別岳－五色岳－トムラウシ山－林道－トムラウシ温泉	L早川(4)、宍倉(OB7)、奥山(1)
5/1-5	無意根ゴールデンウイーク合宿	チーフ西(3)、奥山(2)、三輪(2)、宮崎(2)、早川(OB1)、河野(OB1)、勝瀬(OB1)、八木(OB5)、小泉(2)、谷口(2)、石川(1)、上田(1)、葛西(1)、川口(1)、北村(1)、谷村(1)、中村(1)、永田(1)、前岡(1)、三宅(1)
5/20-24	トノカリ林道取水ダム(除雪終点)－オプタテ－1204横KL－トノカリ林道	早川(OB1)、西(3)、八木(OB5)、宮崎(2)、三輪(2)
5/29-30	キロロマウンテンホテル－余市岳－1239コル－南東スキー－マウンテンホテル	L西(3)、SL奥山(2)、小泉(2)、宮崎(2)、三輪(2)
6/2-5	サマースキー　旭岳温泉－北大スロープ－旭岳－旭岳温泉	L西(3)、SL三輪(2)、石川(1)、中村(1)、前岡(1)
6/3-6	サマースキー　旭岳温泉－北大スロープ－旭岳－中岳温泉－旭岳温泉	L井出(OB1)、SL小泉(2)、川口(1)、三宅(1) L奥山(2)、宮崎(2)、上田(1)、北村(1)
6/26	平和の滝－発寒川－WVの滝－平和の滝	L河野(OB1)、SL早川(OB1)、宮崎(2)、北村(1)、永田(1) L井出(OB1)、八木(OB5)、西(3)、小泉(2)、石川(1)、三宅(1)
7/2-3	白水川－無意根山－無意根小屋－薄別	L河野(OB1)、SL八木(OB5)、西(3)、川口(1)、永田(1)、三宅(1)
7/9-10	白水林道終点－白水川－林道	L早川(OB1)、井出(OB1)、宮崎(2)、石川(1)、北村(1)
8/6	ペンケモユーパロ川－タ張岳－タ張ヒュッテ－	L河野(OB1)、SL八木(OB5)、西(3)、川口(1)、永田(1)
8/12-17	林道途中－エサオマントッタベツ川－山スキー沢出会い－北東カール－エサオマントッタベツ岳－山スキー沢出会い－札内岳－ピリカペタン沢－トッタベツヒュッテ	L河野(OB1)、SL八木(OB5)、西(3)、川口(1)、永田(2)
8/14-15	御料地牧場－林道終点－c190入水－c500二股－c800二股－下山	L早川(OB1)、SL井出(OB1)、石川(1)、北村(1)
8/20-25	斜里－寺山邸－モセカルベツ川－知円別岳東－二つ池－羅臼平－羅臼岳－岩尾別温泉－イワウベツ川－盤の川－弥三吉水－(夏道)－岩尾別温泉	L早川(OB1)、SL井出(OB1)、石川(1)、北村(1)
8/28-29	入水点－白水川－林道－無意根小屋－薄別	L勝瀬(OB1)、SL西(3)、小泉(2)、谷村(1) L井出(OB1)、SL勝瀬(OB1)、谷口(1)、葛西(1)、中村(1)
9/7-8	空沼登山口－真簾沼－空沼岳－札幌岳－札幌岳登山口	L三輪(2)、SL小泉(2)、上田(1)、前岡(1)
9/11-12	臼別温泉－c270－臼別温泉	L勝瀬(OB1)、SL西(3)、小泉(2)、谷村(1)
9/13-16	御殿大橋－石狩岳－川上岳付近－御殿大橋	L三輪(2)、SL小泉(2)、上田(1)、前岡(1)
9/18-20	トムラウシ温泉－南沼－トムラウシ山－化雲岳－五色岳－忠別石室－白雲避難小屋－旭岳－旭岳ロープウエイ	L井出(OB1)、SL谷口(1)、葛西(1)、中村(1)

99 season　2010(平成22)年10月～2011(平成23)年9月

部長：片倉賢

主任：西達也(3)／リーダー会議長：西達也(3)／庶務：小泉匡平(2)

10/16	(恵庭岳)登山口－見晴台－8合目	L上田(1)、SL葛西(1)、川口(1)
10/16	(定山渓天狗)天狗小屋－登山口－Peak－登山口下山	L谷村(1)、SL北村(1)、三宅(1)、中村(1)
10/16	(札幌岳)登山口(冷水沢コース)－Peak	L石川(1)、SL前岡(1)、永田(1)
10/29-31	(雄鉾岳)登山口－カナケ沢出会い	L小泉(2)、SL谷村(1)、前岡(1)、北村(1)、中村(1)
10/30-31	箸別小屋－夏道－暑寒別岳－箸別小屋下山	L西(3)、SL永田(1)、石川(1)、上田(1)
11/13-14	(二年目新人合宿)旭岳温泉－天女ヶ原－姿見駅－旭岳温泉下山	L西(3)、SL奥山(2)、宮崎(2)、小泉(2)
11/20-21	(二年目新人合宿)吹上温泉－2段目下－三段山－観測小屋－前十勝岳－浮揚温泉下山	L西(3)、SL奥山(2)、宮崎(2)、小泉(2)
12/11-12	シール訓練　無意根山	チーフ奥山(2)、西(3)、宮崎(2)、小泉(2)、石川(1)、上田(1)、北村(1)、川口(1)、三宅(1)、永田(1)、中村(1)、谷村(1)、早川(OB1)、河野(OB1)、八木(OB4)
12/23-27	冬合宿　無意根山	チーフ西(3)、奥山(2)、宮崎(2)、小泉(2)、石川(1)、上田(1)、北村(1)、川口(1)、三宅(1)、永田(1)、中村(1)、谷村(1)
12/31-1/4	最終人家・169－コ尾根・807－函岳－OPPU尾根－最終人家・168下山	L西(3)(チーフ)、SL小泉(2)、三宅(1)、谷村(1) L奥山(2)、SL八木(OB5)、川口(1)、永田(1)
1/8-10	最終人家－・519－秋雲橋－三の沢源頭－コル手前尾根c1349－日本庭園－下山	L宮崎(2)(チーフ)、SL西(3)、上田(1)、中村(1) L奥山(3)、SL小泉(2)、石川(1)、北村(1)
1/14-15	湯本温泉－・832－ニトヌプリ下－チセヌプリ－ニトヌプリ下－分岐点下山	L小泉(2)、SL西(3)、石川(1)、上田(1)、川口(1)、中村(1)
1/14-15	林道入口－二股手前の微沢－奥手稲山の家－ユートピア－山の家－ユートピア－下山	L宮崎(2)、SL奥山(2)、北村(1)、三宅(1)
1/22-23	札幌国際スキー場－池－Peak周辺スキー－札幌国際スキー場下山	L西(3)、SL奥山(2)、北村(1)、上田(1)、川口(1)
1/29-30	チトカニウシ岳　北見峠－・1258－周辺スキー－下山	L小泉(2)、SL奥山(2)、北村(1)、中村(1)
2/5	羊蹄山　自然公園－c1260－デルタスキー－下山	L小泉(2)、SL西(3)、宮崎(2)、石川(1)、谷村(1)
2/13-17	日勝峠－日勝スキー－石山トンネル尾根頭－ペケレベツ岳周辺スキー－スキー場あと尾根頭－熊見山周辺スキー－スキー場跡下山	L西(3)、SL宮崎(2)、石川(1)、上田(1)、谷村(1)
2/21-23	二年目新人合宿　旭岳温泉－姿見駅－石室－北崖－c1820－旭岳Peak－北大スキー－北崖c2000－旭岳温泉下山	L西(3)、奥山(2)、宮崎(2)、小泉(2)
3/3-5	五色分岐－青看パウダースキー－チセヌプリ－雪秩父温泉下山－ひらふスキー場ニセコアンヌプリ南峰－大沢スキー－ゲレンデスキー	L小泉(2)、SL西(3)、石川(1)、三宅(1)、北村(1)

3/4-11	春香山登山口－銀嶺荘－春香山－奥手稲山－山の家－奥手稲山－ヘルベティアヒュッテ－漁岳－空沼岳－札幌岳－冷水小屋－札幌岳登山口下山	L宮崎(2)、SL奥山(2)、川口(1)、中村(1)
3/9-12	バーデン富良野－BC1200－c1450引き返し－G尾根－北尾根c1160－TGRスキー－c1250タンネ－ベベルイスキー－バーデン－c1260－二段目・3本神庭－2段目スキー－吹上温泉下山	L小泉(2)、SL西(3)、石川(1)、三宅(1)、北村(1)
3/16-21	白金温泉－除雪終了地点－美瑛富士北尾根－美瑛富士(敗退)－オプタテシケ下1158付近－オプタテシケ山(敗退)－白金温泉	L早川(OB1)、SL西(3)、宮崎(2)
3/27-4/1	さけますふ化場－c860－暑寒別岳－・1225周辺(H)スキー・西斜面－・1225周辺(I)スキー－下山	L西(3)、奥山(2)、上田(1)、北村(1)
4/30-5/4	無意根ゴールデンウイーク合宿	チーフ西(4)、奥山(3)、小泉(3)、宮崎(3)、石川(2)、上田(2)、川口(2)、北村(2)、中村(2)、三宅(2) 大庭(1)、勝山(1)、河村(1)、西田(1)、本宮(1)、山本(1)、横溝(1)
5/13-15	帯広－登山口－前富良野岳c1300	L西(4)、SL小泉(3)、北村(2)、永田(2)、三宅(2)、上田(2)、中村(2)
5/28-29	五色温泉休憩所－・1065－ニセコアンヌプリ－北沢スキー－ニセコアンヌプリ－東スキー－ニセコアンヌプリ－五色温泉－イワオヌプリ－五色温泉	L石川(2)、SL中村(2)、川口(2)、三宅(2)、永田(2)
6/2-5	サマースキー　旭岳ロープウエイ－β上－池－ステゴ・1723－N下の岩－β下－旭岳ロープウエイ	L西(4)、SL石川(2)、河村(1)、西田(1) L宮崎(3)、SL中村(2)、永田(2)、大庭(1)、小林(1) L小泉(3)、SL川口(2)、三宅(2)、本宮(1) L上田(2)、SL北村(2)、谷村(2)、勝山(1)、横溝(1)
7/2-3	山小屋芽室岳－芽室本峰・西峰－山小屋芽室岳－剣山小屋－剣山	L西(4)、SL中村(2)、宮崎(3)、大庭(1)、河村(1)、西田(1)
7/16-18	愛山渓温泉－北鎮岳－黒岳石室－黒岳－北鎮岳－中岳温泉－愛山渓温泉	L西(4)、SL上田(2)、大庭(1)、西田(1)、横溝(1)
7/30-31	札幌－・1737－平山－・1811－ニセカウ－比麻良山－・1755－・1356－有明山－天狗岳－北大雪スキー場	l奥山(3)、SL宮崎(3)、大庭(1)、西田(1)
8/13-18	アンヌプリ鏡沼入口－アンヌプリ－五色温泉－イワオヌプリ－ニトヌプリ－大谷地－長沼分岐－チセヌプリ－シャクナゲ－シャクナゲ沼－白樺山－新見峠－前目国内－パンケメクンナイ湿原－岩内－雷電山－朝日温泉	L奥山(3)、SL宮崎(3)、大庭(1)、西田(1)
8/14-23	福島－長者原登山口－梶川オネ－門内小屋－北股岳－梅花皮小屋－烏帽子岳－御西小屋－大日岳－飯豊本山－三国小屋－地蔵山ショートカット－長坂－川入	L小泉(3)、SL石川(2)、中村(1)、本宮(1)
8/22-27	札内川ヒュッテ－上二股－コイカクシュサツナイ岳－ヤオロマップ岳－コイカク夏道尾根・1305－上二股－札内川ヒュッテ	L西(4)、SL永田(2)、上田(2)、勝山(1)、横溝(1)
9/4-10	西別小屋－西別・摩周岳－斜里岳－雌阿寒岳	L石川(2)、SL北村(2)、三宅(2)、河村(1)、西田(1)
9/8-13	トムラウシ温泉－南沼キャンプ指定地－トムラウシ－双子池－美瑛富士避難小屋－白金温泉	L上田(2)、SL永田(2)、川口(1)、本宮(1)、山本(1)、横溝(1)

100 season　2011(平成23)年10月～2012(平成24)年9月

部長：片倉賢

主任：奥山和花(3)／リーダー会議長：宮崎歩(3)／庶務　前期：小泉匡平(3)、後期：中村須弥子(2)

日付なし	登山口－徳舜別山－ホロホロ山	L勝山(1)、SL西田(1)、小林(1)、横溝(1)
日付なし	駒ヶ岳　キャンプ場－馬の背	L本宮(1)、SL大庭(1)、河村(1)、山本(1)
12/3-4	二年目新人合宿　札幌－旭岳温泉	L小泉(3)、SL宮崎(3)、谷村(2)、北村(2)
12/10-11	二年目新人合宿　旭岳温泉－天女ヶ原－石室避難小屋－北崖c2050－第1天女－旭岳温泉下山	L奥山(3)(チーフ)、SL北村(2)、上田(2)、中村(1) L宮崎(3)、SL西(4)、石川(2)、谷村(2)
12/31-1/3	旭岳温泉－石室横－旭岳Peak－第2天女ヶ原－旭岳温泉	L西(4)、SL石川(2)、山本(1)
12/31-1/4	・145人家－北西尾根－・843－(北尾根)－c650－・1121－積丹岳Peak－P1－・629－登山口	L奥山(3)、SL中村(2)、谷村(2)、勝山(1)
12/31-1/4	冬本番　函岳	メンバー名なし
1/7-9	札幌国際スキー場－C1130沼－白井岳周辺スキー－札幌国際スキー場	L小泉(3)、SL石川(2)、大庭(1)、山本(1)
1/8-9	百松橋－神威岳－烏帽子岳－百松沢山－シルバーザッテル－盤渓橋	L奥山(3)、SL宮崎(3)、中村(1)、横溝(1)
1/13-15	暑寒別岳　さけ・ますふ化場－C860－さけ・ますふ化場	L西(4)、SL北村(2)、西田(1)
1/13-15	新見温泉－・862－新見温泉	L宮崎(3)、SL奥山(3)、大庭(1)
1/13-15	深雪橋－中央尾根－・1257西斜面－南西スキー－深雪橋	L上田(2)、SL石川(2)、谷村(1)、小林(1)
1/21	湯本温泉－チセ・832－チセ南東－チセヌプリ(チセ東スキー)－ニト西斜面－湯本温泉	L西(4)、SL石川(2)、勝山(1)、横溝(1)
1/21	尻別岳	L小泉(3)、SL宮崎(3)西田(1)、本宮(1)
2/4-5	旭岳ロープウエイ－姿見駅－石室避難小屋－北崖乗越－Peak At－第2天女－旭岳温泉	L早川(OB2)、SL西(4)、奥山(3)、宮崎(3)
2/11-12	除雪終点－c603－社満射岳・たけのこ山周辺スキー除雪終点	L石川(2)、SL中村(2)、大庭(1)、河村(1)、西田(1)
2/19-21	旭岳温泉－天女ヶ原－石室避難小屋－北崖c2020At－・1458遠征－旭岳夏道c1860引き返し－第2天女－アイシホップ川引き返し－旭岳温泉	L奥山(3)(チーフ)、SL宮崎(3)、谷村(2) L西(4)、SL上田(2)、石川(2)、中村(2)
日付なし	ニセコ	L小泉(3)、SL谷村(2)、河村(1)、山本(1)
2/25-29	帯広－伏美岳登山口－夏尾根－1150引き返し－登山口－帯広－伏美岳登山口－夏尾根・2392－伏美岳登山口	L西(4)、SL石川(2)、勝山(1)、横溝(1)
3/5-10	白銀温泉－水無川左股c1270－美瑛富士－石垣北尾根下－オプタテシケ山－白銀温泉	L西(4)、SL宮崎(3)、上田(2)
3/26-30	秋雲橋－・1108－前富良野岳－湿原末端－富良野岳(途中引き返し)－秋雲橋	L西(4)、SL石川(2)、大庭(1)、河村(1)
3/27-4/1	十勝岳温泉－三段山－c1660－(H経由)－上ホロカメットク山－c1700－十勝岳温泉	L奥山(3)、SL中村(2)、上田(2)
5/2-6	無意根ゴールデンウイーク合宿	宮崎(4)、奥山(4)、上田(3)、谷村(3)、中村(3)、大庭(2)、河村(2)、西田(2)、山本(2)、横溝(2)、小林(2)、本宮(2)、三輪(2)、市村(1)、今原(1)、大沼(1)、岡田(1)、近藤(1)、菅原(1)、田中(1)、中田(1)、橋本(1)、平井(1)、平松(1)、本吉(1)、米山(1)
5/19-20	愛山渓温泉－1300－夏道分岐－当麻乗越－愛山渓温泉	L上田(3)、SL中村(2)、大庭(2)、西田(2)、横溝(2) L石川(3)、SL谷村(2)、河村(2)、小林(2)、山本(2)

5/26-27	サマースキープレ　積丹岳	L谷村(3)、SL石川(3)、山本(2)、小林(2)、河村(2)
6/2	サマースキー直前下見	L上田(3)、SL石川(3)、横溝(2)
6/10	サマースキー　愛山渓温泉－1420分岐往復	L上田(3)、SL大庭(2)、横溝(2)、菅原(1)、本吉(1) L中村(3)、SL西田(2)、小林(2)、米山(1)
日付なし	芦別岳	L上田(3)、SL横溝(2)、田中(1)、今原(1)、中田(1)
7/14	平和の滝－発寒川	L奥山(4)、SL宮崎(4)、石川(3)、中村(2)
7/15	薄別－白水川－なし岩－函－林道出会い－薄別	L奥山(4)、SL宮崎(4)、石川(3)、中村(2)
7/28	平和の滝－WVF	L奥山(4)、SL石川(3)、西田(2)、平井(1)
8/4-5	短縮登山口－南沼－トムラウシ山－短縮登山	L中村(2)、SL小林(2)、近藤(1)、菅原(1)
8/6	薄別－白水川－なし岩－函－林道出会－薄別	L奥山(4)、SL石川(3)、横溝(2)、今原(1)
8/10-11	薄別－白水川－函－林道出会－源頭－無意根山－無意根小屋－薄別	L奥山(4)、SL石川(3)、西田(2)、平井(1)
8/11	ロッジ－平和の滝－ワンゲルの滝引き返し－平和の滝－ロッジ	L宮崎(4)、SL中村(2)、上田(1)、大沼(1)
日付なし	樽前山～風不死岳	L大庭(2)、SL横溝(2)、本吉(1)、今原(1)
日付なし	夏本番　表大雪縦走	L大庭(2)、SL横溝(2)、本吉(1)、今原(1)
8/21-26	相泊－田村邸－相泊－モイレウシ川－赤岩－知床岬－滝川－ペキン川－相泊	L宮崎(4)、SL山本(2)、奥山(4)、大沼(1)、橋本(1)、中田(1)
8/22-27	新潟港－中房温泉－燕山荘－燕岳－大天井荘－大天井岳－西岳－槍ヶ岳山荘－槍ヶ岳－双六山荘－弓折岳－鏡平－新穂高温泉	L中村(2)、SL小林(2)、近藤(1)
9/4-9/9	楽古山荘－コイボクナメシュンベツ川－楽古岳－十勝岳－上二股の沢－翠明橋	L奥山(4)、SL石川(3)、西田(2)、平井(1)
9/11-9/18	オンネト－木下小屋－羅臼岳－田村邸－斜里岳登山口－斜里岳－西別小屋－オンネト－野営場－雌阿寒岳－中野温泉－雄阿寒岳登山口－雄阿寒岳	L河村(2)、SL山本(2)、岡田(1)、菅原(1)、平松(1)
9/12-9/14	夏本番　東大雪プレ　中岳	L上田(3)、SL大庭(2)、今原(1)、田中(1)、米山(1)
9/18-9/23	ピョウタン滝－札内川ヒュッテ－八の沢－カール－カムイエクウチカウシ山－ピラミッド峰－1823峰－コイカクシュサツナイ岳－夏尾根－札内川ヒュッテ－札内ダム	L奥山(4)、SL石川(3)、西田(2)、平井(1)
9/18-9/25	夏本番　東大雪	L上田(3)、SL大庭(2)、今原(1)、田中(1)、米山(1)
9/29	薄別－宝来－白水林道途中－白水川－函－林道出会－薄別	L奥山(4)、SL石川(3)、小林(2)、米山(1)
10/7	薄別－宝来－白水林道途中－白水川－函－林道出会－薄別	L奥山(4)、SL石川(3)、河村(2)、田中(1)
10/8	薄別－宝来－白水林道途中－白水川－函－林道出会－薄別	L奥山(4)、SL石川(3)、大庭(2)、近藤(1)



和田晴 OB 画

2　1961 年 4 月にスキー部山班員に配布された文書

スキー部山班員（特に新入部員）に対して

1. スキー部（山班）の性格及び目的

目的　「スキーを通じて山を知り、そして楽しむことである。」
スキーに関するオールラウンダーになり、いかなる場所に於いても、事スキーに関しては、決して人前に出て恥ずかしくない様なスキー術をマスターすること。
又、スキーの発展面として山スキーをマスターし、山スキー、山の知識、山男としての心得を得ること。
但し、その前提として一般スキー術を完全にマスターし、又、Hütten leben を身につけねばならない。

2. スキー部員の最低限の使命（義務）

「スキーに関するオールラウンダーになること」
・入部して 1 年間に、全日本スキー連盟 2 級を合格することを目標とする。
　入部した時、既にその技術を有する者は更にその上を目標として進む。
・部で行う合宿は、必ず参加すること
・小屋番が完全に出来ること。
・初歩の山スキーをマスターし、札幌近郊の山のコースに熟知すること。

3. 一般的注意

1）木曜日の部会（毎週木曜日、体育館控室）には必ず出席すること。
2）小屋番について……木曜日までに学生掛に行き手続きを完了し、帰札後は、火曜日までに学生掛の事務を終え、又、部の小屋係に報告すること。又、小屋へ行った者は小屋の掃除に特に留意すること。
3）山行について……山行届の提出と装備の返還に留意すること。山行届は行く 1 週間前にリーダー会へ提出し、許可のないものは全て中止すること。山行後の山行報告は必ず記録係に提出すること。単独行はいかなる場合も認めない。
4）合宿について……合宿というものの精神を良く知ること。合宿期間は、いかなる場合でも途中参加や、途中で帰ることは厳につつしむこと。特にムイネ、テイネの合宿に於いて、ばらばらな出発は注意されたい。決められた時間に行けない場合には、リーダー会にそのむね届け、承認を得ること。参加しない場合も必ず届け出ること。
　合宿届はリーダーが記入し、責任者名、印は部長とする。
5）スキー練習及び講習会について……特にシーズンになったら、各自進んでゲレンデ練習を行い、講習会に参加されたい。部としては合宿その他でリーダー級が教える。
6）その他
　入部金　400 円、部費　1000 円（年間、分割払いも可）
　部の合宿及び年間計画
　　5 月　ゴールデンウィーク合宿、新入部員歓迎登山
　　6 月　大雪山サマースキー（6 月上旬 5 日位、旭岳にて）
　7、8 月　（個人的夏山）
　　9 月　ムイネ、パラダイス小屋祭り、陸上トレーニング（12 月まで）
　　11 月　ムイネ初滑り
　　12 月　ムイネ新人合宿（上旬 5 日位）、ニセコ合宿（22～28 日）
　　1 月　ムイネ正月合宿
　2、3 月　ムイネー余市縦走、十勝送別合宿、ニセコ強化合宿

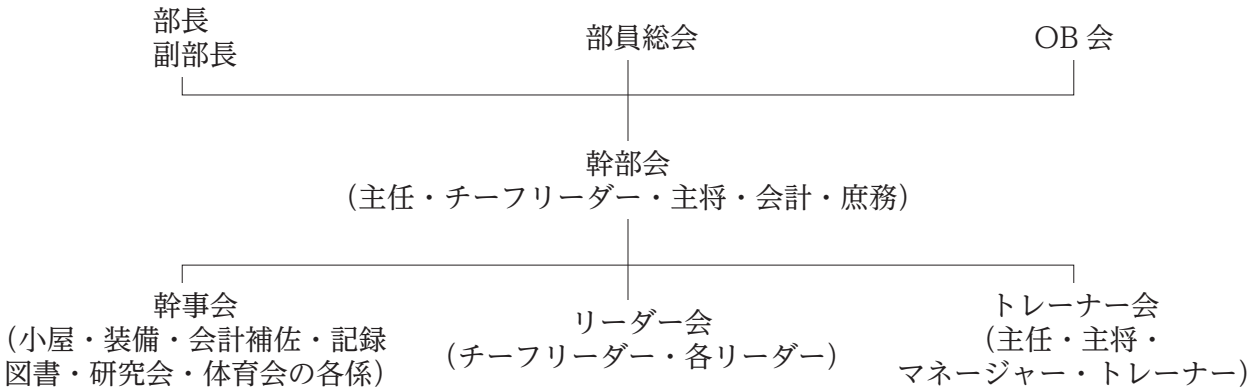
以上　　班長　塘　忠夫

3　1961年10月にスキー部員に配布された文書

北海道大学スキー部部員へ

1. 過去2~3シーズンにわたって分立してきたスキー部の競技班と山班との問題も、今年3月以降に活発な両者の話し合いが行われ、ここに次のような目標のもとに一つとなって進むことになりました。
2. 北大スキー部の根本的な目的は、スキーを通して人間形成をはかることでスキー部員としての我々の目標はスキーのall-rounderになることです。その為に先ず基礎スキーをマスターすること、これが部員に課せられる最初のノルマです。その基礎スキーの上に立って、競技スキーや山岳スキーへと前進していきたいと思っています。
3. 名称は北海道大学体育会スキー部一本とし、競技班、山班の区別をなくしました。つまり、このことにより再び将来二つにわれるうれいをなくしたわけです。
4. 基礎スキーをマスターしたものが更に前進を許されるわけですが、その規準として現段階に於いては全日本スキー連盟2級合格をもってこれに当てることになっています。(将来はスキー部独自の検定をもつことにして行きたいと思っています。)
5. この外部員は、スキー部管理の山小屋(ムイネ・パラダイス)の小屋番がスキー部員として恥ずかしくなく行える必要があります。
6. 部員は全て年額1000円の部費を必ず納入しなければならない。一年間滞納したものは除名される。
7. これらの目的達成のため、次の様な部の新たなる機構を作り、50シーズンよりこれに基づいて運営していきます。

北海道大学体育会スキー部



ロッジ管理委員会
むいね編集委員会
部報編集委員会
技術研究委員会
} 幹部会の下に独立に存在

（幹部会は主任・主将・チーフリーダー・会計・庶務の五役で構成し、部の運営についての議案作成、執行の最高機関。議決についての最高機関として部員総会をもち、幹事会は細部にわたっての執行機関。トレーニングや競技選手の調整、出場選手の人選等をトレーナー会で扱い、リーダー会は山行計画を組み、そのコース・メンバー等を扱う。共にその決定を幹部会に提出し、ここで認められたもののみ実行に移される。

各委員会は幹部会の下に独立に存在させ、その新設解散は幹部会で決定される。各会は定期的に会合をもち、2/3 を定足数とするが、4 年目は定足数に関係しないものとする。）

以上のことをよく認識された上、幹部会、総会の決定に従って行動してもらいたいと思います。

尚、雑誌『むいね』、琴似シルバーロッジ等について説明しておきたいと思います。

・ロ　ッ　ジ：北大山とスキーの会所有の小屋なるも、管理一切の責任を負うもとに使用し、部員の基礎スキー術向上に供する。

・む　い　ね：部員間の親睦及び年報的なものとし、OB 会報・山とスキーの会機関誌とは別のものであるが、両会会員にも頒布し実費徴収と共に現役部員と両会会員のつながりを密にする。（独立採算制を原則とする。）

・山とスキーの会：北大スキー部とは組織の上からは何ら関係のない団体であるが、基礎スキーに大いなる関心を寄せる点で共通点をもち、ロッジを通してお互いの利益を高め合う。この団体には個人意思で任意に加入出来るわけだが、スキー部員にあっては本来部員としての本文があるので、加入の場合は幹部会の承認を得なければならない。原則として 3 年目以上とする。

第 50 シーズン役員メンバー

幹部会	主任	谷口尚弘（議長）	無任	阿部孝夫
	主将	元谷靖弘	〃	嵯峨井一弘
	チーフリーダー	桜間雄蔵	〃	古川善雄
	庶務	大和田榮治	〃	塘　忠夫
	会計	牧野志雄	〃	兼松秀吉

（幹事会、トレーナー会、リーダー会、ロッジ管理委員会、むいね編集委員会、部報編集委員会、技術研究委員会は省略）

1961 年 10 月

4　北海道大学体育会山スキー部規約(1963 年 10 月)

趣　旨

スキーが我国に根をおろして五十有余年、北海道大学スキー部はその支柱としてその進歩に多大の働きをなしてきた。半世紀にわたる北海道大学スキー部の進歩経験は、我々に、スキーの進歩すべき二つの方向を教え、輝かしい過去を有する北大スキー部を二分し、それぞれに異なった未来を持たせる事とした。その一方は同部山班の目標とする山スキーであり、他方は同部競技班の目的とする競技スキーである。

山班は、スキーがその初期目指し、又その全てであった真のスキー、即ちスキーによる山野の跋渉、スキー登山等に依る処女雪との同化、自然への憧れを切望する者の集まりであった。

多年に亘る先輩達の幾多の努力、貴い犠牲の礎の上に我々は在る。我々は更に一層山スキーの技術向上、普及発展に寄与すべく努めるべきであり、自然に親しみ、自然に対する謙虚な態度を養い、自然と人との美しい協調が生み出す恵沢を享受すべくはげもう。

部　則

第一条　当組織を北海道大学体育会山スキー部と称する。
第二条　当部はその主旨、目的に賛同する北海道大学学生を以て組織する。
第三条　当部の部員は、当部の趣旨、目的の為に、責任と義務を有す。
第四条　当部の部員たる要件、責任、義務、及び部の運営に関する一切は細則でこれを定める。
第五条　部則の改正は全部員、及び部長の賛意を要する。
第六条　この部則は第五十二シーズン十月一日より実施する。

細　則

第一章　総　則

当部は山スキー部部則の精神にのっとり以下の細則を規定する。

第二章　機　構

第一条　当部には部員総会と幹事会、リーダー会を置く。

第二条　部会

1　部員総会は正部員の過半数をもって成立し、議長は主任幹事がこれを行う。
2　部員総会の議決は出席正部員の過半数の同意を必要とす。
3　部員総会は部の最高決定機関であり、幹事会の決定事項の発表、及び承認を行う。
4　定例部員総会は毎月一回開かれる。又主任幹事、幹事会及び全部員の 1/3 以上の要求がある時は臨時部員総会を設けなければならぬ。
5　部例会は毎週一回開催する。

第三条　幹事会

1　主任幹事(一名)、庶務幹事(一名)、会計幹事(一名)、無任幹事(若干名)をもって幹事会を構成し、幹事会は主任幹事を含む過半数の出席をもって成立す。
議決は出席者の過半数をもってこれを決す。緊急の場合はこの限りではない。

2　前項の決議に対し、主任は再討議を要求できる。

3　主任は幹事会を主宰し、部を統括し、部行事を行い、その責に任ずる。

4　幹事会の任務

・予算審議
・役員人事
・部員に対する警告、除名。
・合宿の企画(リーダー会の同意の下に)の決定。
・規約改正の発議及び審議。

5　部員は幹事会に出席し、参考意見を述べる事ができる。

6　新年度の主任、庶務、会計、その他の幹事は旧幹事会で選出し、総会に同意を求める。他の係は新幹事会がこれを選出する。

7　リーダー会の決議に対して部の運営にさしさわりのある時は拒否権をもつ。

第四条　リーダー会幹事会

1　リーダー会は主任幹事を含む若干名をもって構成される。

2　リーダー会は旧リーダー会員により選出され、幹事会はこの人選に関して発言権はない。

3　リーダー会に於いて主任幹事は議長とはなりえず、常に主任としての立場を考えて行動発言する事を要す。

4　リーダー会は部の全ての山行、合宿を計画審議し、幹事会にこれを提出する。

5　個人山行はすべてリーダー会が審議助言し、承認なきものは山行とは認められない。

6　リーダー会は山行のリーダーを選出し、リーダーはその山行に関する全権限を有し、かつ全責任を負う。

7　リーダー会は毎週一回行われ、次週の山行を審議する。

8　リーダー会の許可なく行われた山行は部の山行とは認められず、この山行により犯された行為は部の責任の範囲外であり、これに参加した部員は除名勧告を幹事会よりうける。

第三章　役　員

第五条　当部には次の役員を置く。各役員は担当の任務に関し全責任を負う。

1　部長
2　副部長(若干名)
3　顧問(若干名)
4　主任幹事(一名)　庶務幹事(一名)　会計幹事(一名)　無任幹事(若干名)
5　リーダー会議長(一名)　リーダー会員(若干名)
6　その他部運営に必要と認められる係員(若干名)

第四章　部　員

第六条　当部は北海道大学体育会員をもって部員とする。
但し、入部一年間は準部員として扱われ、幹事会の承認により正部員となる。

第七条　部員は部規約を遵守し、活動中はリーダーの命令に従わねばならぬ。

第八条　部規約に違反し、又は部の名誉を毀損した部員は幹事会の決定により警告又は除名処分を受ける。

第九条　前条以外の理由で休部退部する時は、主任にその旨を届け出ねばならない。
又、部費を納入せぬ者、又は理由なくして長期にわたり部会及び合宿に参加しない者は自然退部した者とみなし除名する。

第十条　部員の義務

1　部員は正当な理由なしに合宿、部の主宰する行事、及び部会に欠席することは出来ない。

2　部員は部活動に積極的に参加しなければならない。

3　部員は基礎スキー術の上達に努力せねばならぬ。

第五章　施　設

第十一条　当部は次の施設を管理運営する。

1　北大学生部無意根尻小屋

2　北大山とスキーの会シルバーロッジ

第十二条　管理運営方法は別の規則による。

第六章　会　計

第十三条　当部の会計は次の収入による。納入金は事情の如何に拘らず返還しない。
1．部費　　2．入部金　　3．寄附金　　4．その他

第十四条　会計年度は毎年 10 月に始まり、翌年 9 月に終る。

第十五条　会計報告は総会において行う。
但し、幹事会の要求ある時はいつでも行わねばならぬ。

第七章　改　正

第十六条　この細則の改正は部員又は幹事会の発議により総会において 2/3 以上の賛成を要する。

第八章　補　足

第十七条　この細則は第 52 シーズン（昭和 38 年 10 月 1 日）から施行する。

5　北大スキー部山班および山スキー部部誌『むいね』第 1 号(1958)～第 51 号(2013)総目次

第 1 号　(1958)　1959 年 1 月 15 日発行

はじめに　小松　弘
秩父宮殿下の御言葉　1
追悼
　高倉稔君の死を悼んで―遭難経過報告―　佐々木利夫　4
　雪溶けの頃　中島　巖　6
　高倉稔君へ　小松　弘　8
　故高倉君を想う　若林　隆三　9
　高倉君を想う　塘　忠夫　10
　無意根合宿と高倉君の死　中村　晃忠　10
　詩 「ケルンに祈る」　向井　成司　12
　部生活の断片記　木皿　昌夫　15
　スキーへの誘い　松橋　茂　16
　ニペソツ登山記　小松　弘　18
　ペテガリ登行記　南部　敏明・中島　巖　20
　私の植物図鑑から　加藤　幸子　26
　アイヌ語考　28
記録
　中央高地　29
　日高　34
　その他の山行　38
　合宿記録　41
無意根小屋日誌　50
編輯後記　61

第 2 号　(1959)　1960 年 3 月 1 日発行

東大雪山系縦走報告
　裏大雪山系縦走成功を顧みて　佐々木利夫　1
　縦走隊の記録より　阿部　孝夫　3
　第一サポート隊記録　南部　敏明　7
　第二サポート隊記録　田辺　顕人　8
　第三サポート隊記録　高橋　準　10
　第四サポート隊記録　小島　順治　11
　“装備”について　中島　巖　13
　“食糧”について　斎藤　貞　15
　“氣象”について　斎藤　貞　17
詩 「秋」　若林　隆三　18
山々は楽しい　水谷　寛　19
ムイネ追悼登山記　田辺　顕人　20
思い出の花　塘　忠夫　21
脳震盪の記　中村　晃忠　23
帰り道　南部　敏明　24
思い出ずるままに(一)―我が青春の山と人―　向井　成司　27
記録―第 47 シーズン―　31
ある山男のノートより　42
無意根小屋日記　43

第 3 号　(1960)　1961 年 1 月 20 日発行

ペテガリ岳遭難報告
　遭難報告　塘　忠夫　1
　収容隊報告　中島　巖　3
　反省　山班リーダー会　6
登山する態度(反省として)　阿部　孝夫　7
追悼文に代りに　水谷　寛　9
故　山下広君にあてて　太田　一　14
山室紘二君の思い出　谷口　尚弘　15
思い出　谷沢　和隆　16
友　中沢　修　17
今は亡き山下君に捧げる　塘　忠夫　19
或る友への便り　横山　洋　21
故 山下広君　登山略歴　故 山室紘二君　登山略歴　23
遺稿「歌・酒・煙草・またタテヤマ」　故 山下　広　24
　「七月三日の出来事」　故 山下　広　25
思い出ずるままに(二)―我が青春の山と人―　向井　成司　27
スキー登山雑感　櫻間　雄蔵　30
詩 「夢」　黒田　暁　32
ヴァンデルングとは何か　中村　晃忠　33
スキーの物理学　水谷　寛　34
思い出す事　裏　悦次　40
無題　丹保　憲仁　40
南アルプス白根三山縦走記　松橋　茂　42
記録―第 48 シーズン―　45
無意根小屋日記　59
「北大山とスキーの会」発会に寄す　向井　成司　64
北大山とスキーの会会員名簿　66
第 49 シーズン現役名簿　67
編集後記　69

第 4 号　(1961)　1962 年 1 月 20 日発行

巻頭言　第十五シーズンのスキー部新入生として　村井　延雄　1
新しいスキー部の出発
　一、対立の原因　向井　成司　2
　二、競技、山の対立時代　大塚正次郎　4
　三、スキー部一本化の努力　塘　忠夫　6
　四、スキー部の新方針と新機構　幹　部　会　9
詩 「ポプラ」　三上　仁志　12
ロッヂ建設
　その事の起りと経過(1)　阿部　孝夫・中村　晃忠　13
　(2)　中村　晃忠　16
　設計　山本　幹夫　18
雲への憧れ　竹内　政夫　22
スキー技術のとらえ方　山崎　久雄　24
スキーの物理学Ⅱ―無減速回転Ⅱ―　水谷　寛　27
思い出ずるままに―我が青春の山と人―　3　向井　成司　31
部員としてのノルマ　松坂　理夫　33
初めて日高に入って　大田　正豁　34
漁岳紀行　高橋　俊二　35
詩 「初雪」　中村　晃忠　37
なだれ　若林　隆三　38
我部生活回顧漫談　嵯峨井一弘　42
ペテガリ追悼登山報告　塘　忠夫　45
何んでも読んでやろう！　図　書　係　49
第 49 シーズン山行記録　53
第 49 シーズンの競技活動　元谷　靖宏　70
無意根小屋日誌　72
第 50 シーズン役員・部員名簿　77
編集後記　79

第 5 号　(1962)　1963 年 1 月 20 日発行

日高幌尻岳集中登山
　計画発生まで　桜間　雄蔵　1

計画　1
行動記録　3
天気について　6
反省　谷口　尚弘　6
北大スキー部はいかにあるべきか　水谷　寛　8
スキー部への一考察　永野　正幸　10
山　随想　江幡　文彦　11
夏山の出来事　田中夕美子　13
思い出すことごと　南部　敏明　14
詩　「白樺を見に行った」　高橋　俊二　17
スキーの物理学Ⅲ ―スキーのテスト(1)―　水谷　寛　18
食糧の軽装化　佐藤　亮一・小野堅太郎　21
チロロ岳　川原田義彦　25
紙上遭難報告　在田　一則　26
悩みをのりこえんとして　豊田　八宏　28
インドアー・クライマーのアルピニズム論　阿部　孝夫　30
詩　「その時ぼくは」　小林　暁正　32
記録
第 50 シーズン合宿及び山行記録　33
第 51 シーズン役員名簿及び部員名簿　44
シルバーロッジ使用に関して　ロッジ委員会　45
無意根小屋日誌　46
編集後記　58

第 6 号　(1964)　1964 年 10 月 1 日発行

山スキー部の誕生
新生山スキー部に期待して　水谷　寛　1
北海道大学スキー部分裂に関する経過報告　永野　正幸　2
山スキー部の発足に対して　塘　忠夫　4
愛山渓正月合宿報告　6
第一班　桜間　雄蔵　7
第二班　谷口　尚弘　13
穂高の二日間　水谷　寛　16
山上の想い　江幡　文彦　19
オプタテシケ周辺のスキーコース　竹内　政夫　21
詩　「雪の輝きの中で」　小林　暁正　23
山日記より　田中夕美子　24
ペテガリ追悼登山　裏　悦次　27
無意根小屋日誌　31
第 51 シーズン合宿・山行記録　39
山とスキーの会だより　水谷　寛　50
第 52 シーズン部員名簿　51
第 52 シーズン役員名簿　52
北海道大学体育会山スキー部部則　53
編集後記　55

第 7 号　(1966)　1966 年 1 月発行

御挨拶　水谷　寛　1
富良野―ウペペサンケ縦走報告
縦走を省みて　裏　悦次　2
計画立案までの経過　倉持　寿夫　6
縦走準備期間　小林　暁正　7
行動記録
縦走隊　在田　一則　10
サポートⅠ　大田　正豁　14
サポートⅡ　川上　正宏　16
サポートⅢ　小池　宏二　18
サポートⅣ　小林　暁正　22
サポートⅤ　増田　裕一　24
各係報告
食糧　鈴木　誠　26
装備　佐藤　岱生　30
医療　岡田　信　32
サブテーマ
唾液の Ph による疲労度の測定　水谷　寛　34
気象について―第一報―　岡本　博之　38
その他
縦走をふりかえって　小池　宏二　41
リンデンバウム　佐藤　岱生　43
十勝合宿に参加して　飯豊　利秋　45
外部から見て感じた事　松坂　理夫　47
縦走収支決算報告　49
援助をいただいた方々　50
詩　「白き稜線」　山崎　輔久　51
日高の尾根を歩いて　太田　正豁　52
山への別れ　田中夕美子　54
山とシャレとそして　川原田義彦　56
トムラウシ紀行―学生生活最後の山行―　松坂　理夫　58
春別川溯行記　在田　一則　60
無意根小屋日誌　64
記録―第 52 シーズン―　71
第 53 シーズン部員・役員名簿　83
編集後記　84

第 8 号　(1967)　1967 年 3 月発行

御挨拶　水谷　寛　1
歴史をふり返って　飯豊　利秋　2
冬山訓練合宿　岡本　博之　4
部活動についての提案　水谷　寛　9
詩　「おまえ」　三上　仁志　12
第五十三シーズン反省　小池　宏二　14
第五十四シーズン総括と考察　宮崎　敏　16
ペテガリ追悼　岡本　博之　19
夏のトムラと石狩岳雑文　大田　巽三　21
日高におけるスキーの可能性　在田　一則　23
八甲田山のスキー　山崎　輔久　26
思い出ずるままに―我青春の山と人(4)―　向井　成司　28
イドンナップ山行　川口　正中　31
ハイマツとダケカンバの山　ニセイチャロマップ　鳴海　俊之　32
詩　「雨竜沼」　小林　暁正　36
スキーの物理学―悪雪に強いスキー術―　水谷　寛　38
ゴールデンウィーク時の狩場山周辺　北村　育夫　40
日高でのサマースキー　山崎　雅昭　42
秋の日高幌尻へ　上野　将司　44
ふるさとの山「むいね」に妻と登って　塘　忠夫　47
むいね小屋日誌　49
第 53 シーズン記録　59
第 54 シーズン部員名簿　80
第 55 シーズン新入部員名簿　80
第 54 シーズン役員名簿　81
第 55 シーズン役員名簿　81
編集後記　82

第 9 号　(1968)　1968 年 3 月発行

御挨拶　水谷　寛　1
主任となって　梅沢　俊　2
第五十五シーズン報告　飯豊　利秋　3
正月合宿の報告　宮崎　敏　7
白雲からトムラ超え　田上　省一　8
オプタテからトムラへ　山崎　輔久　10
カウンナイ沢をつめてトムラウシ山へ　飯豊　利秋　12
ヒマラヤへの道　在田　一則　19
春の薬師岳　神田　宏　22
しれとこ雑記　清水　徹　25
雄大なる山脈　危しき函沢
あこがれの南日高に　抱かれし日々の断想　藤瀬　浩　27

白き幌尻の峰にて思った事　椛島　和夫　32
スキー芸術論　クラモチ　トシオ　35
大雪の散歩道　下岡　健蔵　37
追悼登山
　ペテガリ追悼登山　山下　六郎　41
　追悼登山日誌より　水谷　寛　46
　中の川パーティー　田上　省一　54
　追悼ということ　塘　忠夫　56
　サッシビチャリ川にて　岡本　博之　67
　ボッカ隊員日記　小山　滋　68
追悼登山　飯豊　利秋　70
むいね小屋日誌より　73
記録　五十五シーズン　79
第五十五シーズンニセコ合宿　98
第五十六シーズン部員名簿・役員名簿　98
編集後記　99

第 10 号　(1969)　1969 年 3 月発行

巻頭の言葉　水谷　寛
山スキー部の現状と課題　下岡　健蔵　1
第 56 シーズン報告　梅沢　俊　2
正月合宿報告　飯豊　利秋　5
十勝正月合宿　横山　雄司　7
八方尾根　熊川　嗣雄　11
冬の積丹の山々へ　上野　将司　13
積雪期の日高へ―ペテガリ山行より―　神田　宏　15
ピリカペタヌの春　大田　巽三　16
日高山脈の地質とそのおいたち　上野　将司　19
スキーの物理学Ⅴ
　姿勢の力学―膝を何度に曲げたらよいか―　水谷　寛　23
ある雪男からのレポート　若林　隆三　27
暑寒別連山に於ける春山スキー　先名　征司　29
新冠ユートピア牧場の開場式　水谷　寛　32
無意根小屋日誌から　33
第 56 シーズン合宿・山行記録　37
第 57 シーズン部員名簿　49
第 57 シーズン役員名簿　50
編集後記　50

第 11 号　(1970)　1970 年 3 月発行

御挨拶　水谷　寛
第 58 シーズン以降の展望　飯田　修　1
第 57 シーズンを顧みて　下岡　健蔵　2
冬山報告　神田　宏　5
正月合宿・十勝連峰縦走　梅沢　俊　7
正月合宿・表大雪山　大田　巽三　9
今や学生のサークルも問われつつある　水谷　寛　11
雪・雪・雪―その回想　原　修三　12
追悼　椛島　和夫　14
積丹の山々でのスキー　香取　民生　17
山で会った鳥達　片岡　裕　19
むいね小屋日誌から　22
第 57 シーズン合宿・山行記録　25
第 58 シーズン前期役員名簿・部員名簿　45
山とスキーの会会員名簿　46
編集後記　53

第 12 号　(1971)　1971 年 8 月発行

御挨拶　水谷　寛
山スキー部の活動とスキー　中井　強　1
第 58 シーズン報告　飯田　修　2
スキーの物理学Ⅵ　水谷　寛　4
春望二題　後藤　次郎　9
春の白馬岳周辺　油田　厚生　10
ある山スキー部考　藤瀬　浩　15
山・岩・沢・俺　黒澤　努　19
秋山随想　青木　康明　24
新入生に与うる詞　後藤　次郎　25
ボクラの故郷　ムイネ小屋日誌より　26
第 59 シーズン山行記録　30
第 59 シーズン役員名簿・部員名簿　43
編集後記　44

第 13 号　(1972)　1972 年 1 月発行

御挨拶　水谷　寛
山スキー部の課題とその方向性　後藤　次郎　1
第 59 シーズン報告　中井　強　3
正月合宿報告　津田　誠　7
正月の南アルプススキー行　小林　博和　10
ある二年目の悩み　和田　寛　13
西沢からペテガリ岳へ　青木　康明　14
北海道からのおたより　水谷　寛　16
ローソクの下で　保坂　豊　21
山の祈り　岩井　利夫　22
ボクラの故郷　ムイネ小屋日誌より　26
第 59 シーズン山行記録　30
59 シーズンのトレース　44
第 60 シーズン役員名簿・部員名簿　45
編集後記　46

第 14 号　(1974)　1974 年 4 月発行

御挨拶　水谷　寛
雪原をさまようために　岩瀬　隆則　1
第 61 シーズン報告　菅野　健身　4
心に残る山　樋口　俊夫　6
虹ををわたつて　岩瀬　隆則　9
北海道からのおたより　水谷　寛　12
　サツポロオリンピツクを終えて　12
　ユートピア牧場の 1972 年　13
　ユートピア牧場の 1973 年　14
　山とスキーの会　林間学校　16
　旭岳ナダレ遭難　20
　遭難事故処理　23
　山スキー部再建の道　30
　1973 年の 2 つの事故　32
保険に関する部則　35
雪崩救助学事始　若林　隆三　36
追悼　40
　故 後藤次郎君
　故 星野信男君
　故 及川俊一君
　故 瓜生　純君
　故 川上　真君
追悼登山　51
雑感　森田　明　53
初めてのリーダー　大口　真樹　55
ボクラの故郷　ムイネ小屋日誌より　57
第 60 シーズン記録　62
第 61 シーズン記録　69
トレース NO.60　75
トレース NO.61　76
第 61 シーズン役員名簿・部員名簿　77
第 62 シーズン役員名簿・部員名簿　78
へんしゅうこうき　79

第 15 号　(1975)　1975 年 12 月発行

御挨拶　水谷　寛
雪に舞うシユプールへの憧れ　第 64 シーズン展望　片倉　賢　1
第 62 シーズン報告　岩瀬　隆則　3
第 63 シーズン報告　森田　明　8
北海道からのおたより　水谷　寛　11
部の機構とリーダー会　武藤　清秀　15
遭難を知らない子供達　大口　真樹　19
大晦日そして元旦―正月山行より―　福安　憲司　21
1839・ペテガリへ―南日高の紀行―　小瀬川　修　26
沢登りとスキー　吉田　守男　29
山の食事　中村　健彦　31
天気図　大南　和也　33
装備係から　阿部　幹雄　35
山スキー部にて―ぼくと山―　不破　秀実　36
随想　椿谷　茂　37
インドを離れて思うこと　中村　宏　40
ネパール旅情　中町　昌三　44
作つてみました　ジルブレッタ用オーバーシューズ　阿部　幹雄　46
シルバーロッヂそしてシルバーシャンツェ　佐々木右治　48
私・俺・僕　部員より一言　49
ぼくらの故郷　無意根小屋日誌より　52
第 62 シーズン山行記録　55
第 63 シーズン山行記録　69
トレース No.62　81
　No.63　82
第 63 シーズン役員名簿・部員名簿　83
第 64 シーズン役員名簿・部員名簿　84
へんしゆうこうき　85

第 16 号　(1976)　1976 年 12 月 20 日発行

御挨拶　水谷　寛
回復期から発展期へ　第 65 シーズン展望　椿谷　茂　1
第 64 シーズン活動報告　片倉　賢　4
夏山リーダー会報告
　―64 シーズン夏山を反省そして自分―　大口　真樹　15
北海道からのおたより　水谷　寛　18
Lodge 改修報告　椿谷　茂　22
Mt. Sanford 登頂　松井　望・小林　博和・津田　誠　25
特集「サマースキー」
　まえがき　27
　ゲレンデ紹介　皆川　幸治・佐々木尚三　29
　天国と地獄　岩瀬　勇次　32
夏の山スキーヤーとは　丸谷　聖一　34
「雑炊」創刊　椿谷　茂　35
恐怖の一夜のこと　長島　義人　37
スズノスケ動物記　ムイネの黒ネズミの巻　米山　祐司　39
中の川のケルンを訪れて　阿部　幹雄　42
雪原の放浪 part Ⅰ　大口　真樹　43
無意根雪崩遭難救助訓練　阿部　幹雄　45
ぼくらの故郷　無意根小屋部員日誌より　53
第 64 シーズン山行記録　57
トレース No.64　78
第 64 シーズン(前期)役員名簿・部員名簿　79
第 65 シーズン(前期)役員名簿・部員名簿　80
編集後記　81

第 17 号　(1977)　1977 年 12 月 25 日発行

御挨拶　中島　巖
山スキー部の発展　第 66 シーズン展望　不破　秀実　1
第 65 シーズンの活動報告　椿谷　茂　4
山行審議ということに関して　丸谷　聖一　8
水谷ロツヂの竣工に当り　水谷　寛　11
北海道からのおたより　水谷　寛　13
水谷先生退官記念山行より　ニセコツアーより　佐々木右治　28
春の北日高での歩み　片倉　賢　31
雪原の放浪 Part Ⅱ―独断と偏見に満ちた心の記録―　佐々木右治　38
初めてのリーダー　塩崎　征男　43
一年目の独白　関戸　徹　45
楽しみとは　小田切清幸　46
たわごと　大南　和也　47
部内における選別の論理を廃す　山本　義男　50
White joke　正月ニペソツ～トムラウシより　竹内　隆一　53
ある日、ある街で―アメリカ・カナダの旅―　長島　義人　56
ぼくらの故郷　無意根小屋部員日誌より　61
第 65 シーズン山行記録　64
トレース No.65　91
第 65 シーズン(前期)部員役員名簿・部員名簿　92
第 66 シーズン(後期)部員役員名簿・部員名簿　93
へんしゆうこうき　94

第 18 号　(1979)　1979 年 1 月発行

御挨拶―山スキー部員に望むこと―　中島　巖
精神からの飛躍　第 67 シーズン展望　三国　俊亮　1
第 66 シーズン活動報告　不破　秀実　4
北海道からのおたより　水谷　寛　10
旭岳に祈る　中村　宏　24
ある山行　橋村正悟郎　27
山とスキーと人間と　丸谷　聖一　28
嗚呼　思い出の知床　関戸　徹　35
狩場山行　舟木　上総　37
テントが翔んだ日　山本　恵司　39
知床山行チンタラ記録　纐纈　義和　42
少年ケニヤは今日も行く！　大口　真樹　45
シャモニーでのスキー　新谷　一郎　48
ムイネツアー報告　中村　健彦　51
スキーの物理学Ⅶ―加速ターン―　水谷　寛　53
独断と偏見の山スキー論　丸谷　聖一　60
トムラウシの四季―四年間の回想―　皆川　幸治　64
ぼくらの故郷　無意根小屋部員日誌より　67
第 66 シーズン山行記録　70
トレース No.66　94
第 66 シーズン(前期)役員・部員名簿　96
第 66 シーズン(後期)役員・部員名簿　97
編集後記　98

第 19 号　(1979)

御挨拶　中島　巖
もくじ
山スキー部の真の充実・発展　第 68 シーズン展望　小林　伸一　1
第 67 シーズン活動報告　三国　俊亮　3
北海道からのおたより　水谷　寛　9
Looking for……―ゴールデンウィーク断想―　藤田　誠一　34
3 年目リーダー心のうちは　米山　祐司　36
無意根スキーツアー報告　新谷　一郎　38
スキー靴による山スキー　船木　上総　40
日本三大雪渓大滑降　三宅信一郎　42
余別での“一瞬”から　安部　敬太　45
クソッタレと自己嫌悪の一週間　高山　浩史　47
ぼくらの故郷　無意根小屋部員日誌より　49
第 67 シーズン山行記録　53
トレース No67　74
第 67 シーズン前期役員名簿・部員名簿　75
第 67 シーズン後期役員名簿・部員名簿　76
編集後記　78

第 20 号　(1981)

第 70 season の課題	小塚　毅	1
第 69 シーズン活動報告	三宅信一郎	2
北海道からのおたより	水谷　寛	6
地獄サマースキー	久能　弘道	9
第 5 回無意根スキーツアー報告	松本　隆文	10
病床日記より	山本　恵司	11
山スキー部、その性質と課題	三宅信一郎	15
68 シーズン報告	小林　伸一	18
山本の事故に際して感じたこと	関戸　徹	22
ぼくらの故郷		25
山行記録　第 68 シーズン		27
山行記録　第 69 シーズン		46
第 68 シーズン前期名簿役員・部員名簿		64
第 68 シーズン後期名簿役員・部員名簿		65
第 69 シーズン前期名簿役員・部員名簿		66
第 69 シーズン後期名簿役員・部員名簿		67
編集後記		68

第 21 号　(1982)　1983 年 3 月 3 日発行

御挨拶	吉岡　義彦	
今、熱き想いを	吉田　美樹	1
第 70 シーズン活動報告	小塚　毅	4
北海道からのおたより	水谷　寛	7
芦別本谷滑降ガイド	宝多　卓男	11
定山渓天狗岳スキーガイド	小塚　毅	14
暑中 SKIING 申し上げます	吉田　美樹	15
冬思考	梶本　淳	20
トウキビバイトくびの記	松村　俊和	22
学業と山スキーの狭間で	松本　貴之	23
冬山の脇役達	日野　輝明	24
山スキー部の小屋祭を考える	久能　弘道	27
雑感	青黄　靖	28
プラスチック兼用靴と世界の山スキー部特製シール	宝多　卓男	30
第 6 回無意根スキーツアー報告	高山　浩史	32
山の天気	佐田　朋存	33
南日高スキー山行	川島　大幸	35
“82” SKI 縦走―上ホロカメットク山での 3 時間―	中島　隆	38
一年目部員活動報告	田川　丹	40
放浪記―知床編―	滝　龍一郎	41
中部日高ウフフッ	秋山　幸久	44
僕らの故郷　無意根小屋部員日誌より		45
第 70 シーズン山行記録		47
第 70 シーズン(前期)役員名簿・部員名簿		64
第 70 シーズン(後期)役員名簿・部員名簿		65
編集後記		66

第 22 号　(1983)

御挨拶	吉岡　義彦	
山々の誘い　第 72 シーズン展望	松本　貴之	1
第 71 シーズン活動報告	吉田　美樹	2
北海道からのおたより	水谷　寛	7
ニセコ連峰スキー登山ガイド	梶本　淳	10
第 7 回無意根スキーツアー報告	梶本　淳	13
登山感想文	三谷　修司	14
山スキー部シンドローム(症候群)	中島　隆	15
無題	出口　雅文	17
山行に、無線機を！	伊藤　剛	19
最近思う事	河合　博	20
シルバーロッヂ	松村　俊和	21
山スキー部の記憶	川端　康弘	22
恐怖の新人合宿	上野　勝利	24
私は山が嫌いだ	中村　幸一	26
事実	田川　丹	29
へたな考えてぶくろにたり	伴　和弘	30
ぼくらの故郷　無意根小屋部員日誌より		31
第 71 シーズン山行記録		33
第 71 シーズン(前期)役員名簿・部員名簿		50
第 71 シーズン(後期)役員名簿・部員名簿		51
編集後記		52

第 23 号　(1984)

御挨拶	吉岡　義彦	
第 73 シーズン展望	田川　丹	1
第 72 シーズン活動報告	松本　貴之	2
北海道からのおたより	水谷　寛	5
第 8 回無意根スキーツアー報告	辻　雅久	12
事のはじまり	西沢　孝史	13
サマースキー考	高山　浩	14
山で思う事～スキー縦走編	南家　弘毅	15
無題	中島　隆	17
トレーニングの必要性について	出口　雅文	19
山が嫌いでも時にはいいこともある	川崎　卓哉	20
四年間	松村　俊和	21
海外遠征に現役部員として参加して	滝　龍一郎	22
無意根小屋の改修	上野　勝利	24
僕らの故郷　無意根小屋部員日誌より		26
第 72 シーズン山行記録		28
第 72 シーズン(前期)役員名簿・部員名簿		44
第 72 シーズン(後期)役員名簿・部員名簿		45
編集後記		46

第 24 号　(1985)　1986 年 6 月発行

御挨拶	吉岡　義彦	
第 74 シーズン展望	上野　勝利	1
第 73 シーズン活動報告	田川　丹	2
北海道からのおたより	水谷　寛	5
さらば北カベ	宝多　卓男	9
More gougious ！		
―G.W. 期の利尻島スキーガイド―	田川　丹	13
ニセイノシキオマップ沢	出口　雅文	16
我々は“スキー部山班”である	渡野邊雅道	19
…のようなもの	安居　徹	20
小屋係から	秋本　恒志	22
僕らの故郷　無意根小屋部員日誌より		24
第 73 シーズン山行記録		26
第 73 シーズン(前期)役員名簿・部員名簿		44
第 73 シーズン(後期)役員名簿・部員名簿		45
編集後記		46

第 25 号　(1987)　1987 年 7 月発行

御挨拶	吉岡　義彦	1
75 シーズン展望　“平和”な時代に…	秋本　恒志	3
74 シーズン活動報告	上野　勝利	5
北海道からのおたより	水谷　寛	10
むいねにはいらんど	南家　弘毅	15
2 年目とは呼ばれるが…	岡　裕史	17
山スキー部時代	出口　雅文	20
クラブ活動と山への意識	百瀬今朝尋	22
富良野岳アタック !!	栗崎　健	23
86’ 夏　黒岳―トムラウシスキー縦走の旅	伊藤　健次	25
僕らの故郷　部員用日誌より		28
第 74 シーズン山行記録		30
第 74 シーズン(前期)役員名簿・部員名簿		50
第 74 シーズン(後期)役員名簿・部員名簿		51

編集後記　52

第 26 号　(1987)　1988 年 9 月発行

ご挨拶　徳田　昌生　1
76 シーズン展望―山とスキーを楽しむために―　杉山　裕之　3
75 シーズン活動報告　秋元　恒志　4
北海道からのおたより　水谷　寛　8
特集―山スキー部を考える　「むいね」編集部　12
　Part Ⅰ　和田好正氏インタビュー　12
　Part Ⅱ　山系 3 クラブ座談会　19
2001 年日高の旅　川崎　卓哉　29
思うこと　阪谷　聡　31
HOW TO MAKE A FRIENDSHIP
　IN OPERATION-RALEIGH　寺山　元　33
最近、ちょっと機嫌が悪い君へ　脇田　政嘉　34
山スキー部はスキーがじょうず　横山　昌宏　35
この夏を振り返って　茂木　俊彦　37
公鷹　長尾　一史　37
ぼくらの故郷　部員用小屋日誌より　40
第 75 シーズン山行記録　42
第 75 シーズン(前期)役員名簿・部員名簿　64
第 75 シーズン(後期)役員名簿・部員名簿　65
編集後記　66

第 27 号　(1988)

ご挨拶　徳田　昌生　1
77 シーズンに向けて　栗崎　健　2
76 シーズン活動報告　杉山　裕之　3
現代装備事情　編　集　部　8
山スキーはメジャースポーツになり得るか　編　集　部　14
日高山脈スキー案内　石塚　吉浩　18
冬期文登研に参加して　高橋　郁雄　26
夏の文登研　伊藤　健次　27
1988 夏の知床　成瀬　健　30
少々キザではありますが…　齋藤　正美　32
この 1 年を振り返って思うこと　古川　可恵　33
究極のスキーの奥深さ　新たなスキーの幅広さ　阪谷　聡　34
ぼくらの故郷　無意根小屋部員用日誌より　40
第 76 シーズン山行記録　42
第 76 シーズン部員名簿　55
編集後記　56

第 28 号　(1989)　1990 年 2 月発行

御挨拶　吉村　昌浩　1
78 シーズンに向けて　栗崎　健　3
77 シーズン活動報告　水谷　寛　7
北海道からのおたより　ムイネ小屋修復におもう
〈無意根小屋改修特集〉　無意根小屋改修工事経過報告　10
　無意根小屋改修工事を終えて　吉村　昌浩　18
　設計者の弁明　丸谷　聖一　20
　無意根小屋改修への過程・改修からの道程　阿部　幹雄　23
　改修工事現場から―お世話になった方々の横顔　根岸　邦典　29
　小屋改修のこと　榊山　祥子　29
　無意根小屋の歴史　高橋　郁雄　30
山スキー部を想う　高村　賢一　32
南日高行　楽古岳～ピリカヌプリ　石塚　吉浩　34
ジレンマ　野崎　知成　39
僕ら「ニペ・ウペペ・スキー探検隊」　根岸　邦典　41
Let's star watching　森島　博宣　45
ぼくらの故郷　部員用小屋日誌より　46
トレース No.77　49
札幌近況　50
第 77 シーズン山行記録　51
第 77 シーズン部員名簿　64
編集後記　65

第 29 号　(1990)　1991 年 3 月発行

御挨拶　徳田　昌生
79 シーズンに向けて　斉藤　正美　1
78 シーズン活動報告　吉村　昌浩　3
78 シーズンリーダー会報告　石塚　吉浩　9
北海道からのおたより　北大山スキー部建部の精神　水谷　寛　13
特集　〈山スキー部を考える〉
　第 1 部　山スキー部活動を振り返る　15
　第 2 部　座談会「山スキー部を考えよう」　20
北大山スキー部山行報告書
　南日Ω堀り SKI 縦走の旅　伊藤　健次　25
　まだ知らぬ未知の領域へ向け　亀田　光司　32
　2 つの想い　高見　雄二　37
　少年の夏・中央日高山行記　海老　雅仁　40
78 シーズン新入生の自己紹介　44
僕らの故郷　51
第 78 シーズン山行記録　53
第 78 シーズン部員名簿　65
編集後記　66

第 30 号　(1991)　1992 年 3 月発行

御挨拶　徳田　昌生　2
80 シーズンに向けて　渡部　哲哉　4
79 シーズン活動報告　斉藤　正美　5
北海道からのおたより　水谷　寛　8
特集　〈二つの全山縦走〉
　知床の旅　渡部　哲哉　11
　日高縦走記　伊藤　健次　16
〈紀行文・随想〉
　夏の沢旅　秦　正樹　31
　怒りのスキー　田村　整　35
　停滞日記　堀川信一郎　36
　初めての体験　藤田　志歩　38
　無意根小屋 60 周年祭　根岸真紀子　39
　現在想う事　三崎　裕　40
　ストーブ修理報告　堀川信一郎　42
79 シーズン新人紹介　44
ぼくらの故郷　無意根小屋部員日誌より　49
第 79 シーズン山行記録　52
第 79 シーズン部員名簿　61
編集後記　62

第 31 号　(1992)　1993 年 6 月発行

御挨拶　徳田　昌生　1
81 シーズンにむけて　赤木　憲二　3
80 シーズン　活動報告　渡部　哲哉　4
北海道からのお便り　水谷　寛　7
〈特集〉 2 年目十勝合宿　9
〈紀行文・随想〉
　成せば成る　成さねばならぬ……　芳賀　一　14
　北アルプス　青空旅行　上田　貴夫　19
　つれづれなるままに　―中部日高の巻―　北村　史子　22
　夏の沢　渡部　哲哉　23
　エスケープ　田村　整　24
　山スキー部釣り班より皆様へ　福田　雄基　26
　今思うこと　藤田　志歩　27
　ヒマラヤにいくことになった　田村　整　28
　沢登り　坂口　健司　29

5月について　佐野　映司　30
私の悩み　真田　和彦　31
4年間を振り返って　三崎　裕　32
3年目の春に　根岸真紀子　33
二度目の復帰山行　神田　直洋　34
夜更けの山に目が光る　千葉　由純　36
山でのスキーとゲレンデでのスキー　吉田　寛　37
Short Essays　38
北沢　大輔　38
中村　琢郎　38
松岡　健一　39
渡辺　一弘　39
Summer Skiの思い出　41
飯田　道男　41
小川　啓　41
無意根小屋新人合宿　43
田中健太郎　43
宮川　直久　43
山スキー部の新風～80シーズン新人紹介～　45
僕らの故郷　無意根小屋部員日誌より　51
第80シーズン山行記録　53
第80シーズン部員名簿　59
編集後記　60

第32号　(1993)　1996年6月発行

御挨拶　在田　一則　2
「心の山行」を　…82シーズン展望…　吉田　寛　4
81シーズン活動報告　赤木　憲二　5
シルバーロッジ基金について　赤木　憲二　8
山行報告書より　中村　平ほか　9
メンツで行く芦別本谷　千葉　由純　12
沢のこと　真田　和彦　13
詩　「夏のある一週間の紀行」　田中健太郎　14
ストーヴ研究　北川　徹　15
モーグラー増殖計画　上田　貴夫　18
フリークライミングしませんか？　北沢　大輔　20
部員のひとりごと　22
冬の海　神田　直洋　22
『音楽と私』―世の音痴と呼ばれる人たちへ―　北川　徹　22
ベチアの思い出　中村　平　23
国司　和浩　24
渡辺　一弘　24
韓国の山　大屯山(テドンサン)　福田　雄基　25
このごろ思うこと　宮川　直久　26
北森　康之　26
千葉　由純　26
雑文　芳賀　一　27
赤木　憲二　27
吉永　公　28
河野　純　28
片倉　淳平　28
富岡　祐一　29
富永　正子　29
入村　貴行　29
三代　隆博　30
僕らの故郷　無意根小屋部員日誌より　31
第81シーズン　山行記録　32
第81シーズン　部員名簿　39
編集後記　40

第33号　(1994)　1998年4月発行

水谷先生の死とパラダイスヒュッテの再建
―ご挨拶にかえて　在田　一則　2
83シーズンへむけて　中村　平　5
82シーズン活動報告　吉田　寛　7
〈スーパースキー特集〉
札内川上流　北沢　大輔　13
定山渓天狗山中央ルンゼ　青山　尚広　15
特集　〈水谷先生を偲んで〉
水谷先生の散骨式　片倉　淳平　17
水谷先生を悼む　向井　成司　18
〈紀行文〉
Northern Alps Ski Expedition '94　上田　貴夫　20
夏の旅人　真田　和彦　28
屋久島回想　飯田　道男　30
ある朝の5分間　田中健太郎　32
原始々原はどんなとこ？　青山　尚広・入村　貴行　34
むいね小屋への道　36
新入部員紹介　38
これが私のサマースキー　42
僕らの故郷　無意根小屋部員日誌より　45
第82シーズン山行記録　47
第82シーズン部員名簿　57

第34号　(1995)　1998年4月発行

84シーズンへむけて　入村　貴行　64
83シーズン活動報告　中村　平　65
〈紀行文〉
春山芳賀P槍ヶ岳　入村　貴行　70
知床の思い出　松井　応式　71
'95　2年目GW合宿を終えて　高岸　徹　73
'95　夏・知床日記　森本　晶　75
1年目自己紹介　79
僕らの故郷　無意根小屋部員日誌より　83
第83シーズン山行記録　84
第83シーズン部員名簿　92

第35号　(1996)　1998年4月発行

85シーズン展望　小河　健伸　98
84シーズン活動報告　入村　貴行　99
〈特集〉
今、安全を考える　入村　貴行　103
安全に山に行くとは　青山　尚広　107
〈紀行文・随想〉
晴れぬならひたすら待とう十勝岳
2年目正月執念の軌跡　小河　健伸　109
ぼくのセンター山行　深田　直之　112
スキーの島　利尻　村瀬　猛　114
新たなるスキーを追い求めて　大島　次郎　115
ピークはどこだ！？　奥井　武道　117
スキー　西浦　伸重　121
「むいね」を考える　松井　応式　122
成りゆき人生～山スキー部員へ愛をこめて　片倉　淳平　124
「自由」について　三代　隆博　126
サマースキー　松江　紀彦・藤当　雄治　127
ある1年目の感想　藤当　雄治　129
84シーズン新人紹介　130
僕らの故郷　無意根小屋部員日誌より　133
第84シーズン山行記録　134
第84シーズン部員名簿　144
編集後記　145

第36号　(1997)　1998年6月発行

吉岡さんの思い出―ご挨拶にかえて　在田　一則　2
86シーズン展望　伴　現太　4

85 シーズン活動報告　小河　健伸　6
吉岡義彦先生とあの頃の山スキー部の思い出　吉田　美樹　10
追悼　～故吉岡義彦先生を偲んで～　小河　健伸　12
〈特集〉 85 シーズンは日高の季節
　冬の幌尻へ　加藤　貴之　13
　ペテガリ～カムイ回想記　松井　良典　15
　雪の日高にいきましょう
　神威～カムエク、九の沢カールスキー　小河　健伸　20
　残雪期の日高　藤当　雄治　25
〈紀行文〉
　原始ヶ原　三木　善知　27
　マイナーな山と言わないで…　杉江　紀彦　29
〈それぞれの想い〉
　山スキーの可能性について　大島　次郎　31
　山スキー部　私的観念論　高岸　徹　32
　ああ、素晴らしき知床　松井　応式　34
　L 会を総括して　真下　昌久　35
　いちばんの山行　西山　俊裕　36
　ロッジに想うこと　末安　紀子　38
サマースキーについて　39
一年生に贈る歌　～I have a dream～　43
一年生自己紹介　44
僕らの故郷　無意根小屋部員日誌より　49
第 85 シーズン山行記録　50
第 85 シーズン部員名簿　61
編集後記　63

第 37 号　(1999)　1999 年 5 月発行

ご挨拶　遭難体験の継承　在田　一則　2
87 シーズン主任挨拶　佐田　悠輔　4
86 シーズン活動報告　伴　現太　6
〈紀行文〉
冬　ブヨ沢テン場での攻防　佐田　悠輔　10
春　知床 5 人の旅～往路は岬へ、復路は田村邸へ～　伴　現太　12
　トムラウシ山から旭岳　金森　晶作　16
　トヨニから襟裳岬への 17 日間の旅　三木　善知　19
残雪期　サマースキーの想いで　宍倉　優二・黒崎　康介　24
夏　夏沢三部作　宮下　隆志　26
　夏沢物語　奈良　靖　28
〈雑文〉
　一年半の山スキー部を振り返って　臼井　大輔　38
　ずっと好きーでした　市川　暁雄　38
　丸坊主に関するかってな考察　薮内かおり　39
　本当のスノーボードを知っていますか？　内藤　宏志　40
新人部員自己紹介　43
僕らの故郷　無意根小屋部員日誌より　47
第 86 シーズン山行記録　48
第 86 シーズン部員名簿　57
編集後記　58

第 38 号　(2000)　2000 年 5 月発行

ごあいさつ　藤永　徹　2
第 88 シーズン主任あいさつ　奈良　靖　4
第 87 シーズン活動報告　三木　善知　6
〈紀行文〉
　駆け抜けろ東大雪
　―ウペペサンケ山～ニペソツ山 1999 正月―　金森　晶作　10
〈雑文〉
　山スキー部という範囲内で…　杉江　紀彦　13
　山スキー部のくれたもの　三木　善知　14
〈新人部員自己紹介〉
　好きです♡北海道―白い恋人―　池内　晃　15
　はや 2 ヶ月　近藤　武史　16
　山スキー仁義(文学編)　松田　博行　16
　山スキー部に入るまで　森岡陽太郎　17
　あの感触　山口　達　18
僕らの故郷　無意根小屋部員日誌より　19
第 87 シーズン山行記録　20
第 87 シーズン部員名簿　27
編集後記　28

第 39 号　(2001)　2001 年 4 月発行

ごあいさつ　藤永　徹　1
第 89 シーズン展望　今　春如　4
第 88 シーズン活動報告　奈良　靖　6
2000 年夏　活動停止について　奈良　靖　9
雪崩遭難救助訓練　渡邉　祐輔　15
〈紀行文〉
　日高　今　春如　18
　実況　北々日高　松田　博行　21
　今、明かされる春山奈良 P の舞台裏
　　―ある日のメンバー座談会において―　池内　晃　24
〈雑文・随想〉
　峨　金森　晶作　28
　なんとなく思ってる事　薮内かおり　29
　BOUKEN　近藤　武史　30
　振り返ってみた　森岡陽太郎　31
　十代最後の無謀な挑戦　山口　達　33
　アラスカの忘れ物　大杉　友　36
　山スキー部についての随想　黒崎　康介　37
　国際人になろう　宍倉　優二　38
　義経岩、フリークライミングの世界に
　　カルチャーショック　杉田　想土　40
　無題　多田　学央　42
新入部員自己紹介文
　無駄に長い文　三浦　康　43
〈特別企画〉 僕らのポエム　44
僕らの故郷　無意根小屋部員日誌より　45
第 88 シーズン山行記録　46
第 88 シーズン部員名簿　51
編集後記　52

第 40 号　(2002)　2002 年 7 月発行

ごあいさつ　藤永　徹　2
第 90 シーズン主任あいさつ　山口　達　4
第 89 シーズン活動報告　今　春如　5
紀行文
　発酵駄山　三浦　康　8
　秋の函沢へ　宍倉　優二　12
雑文
　山に登るということ　黒崎　康介　14
　reason for being　今　春如　14
　フリークライミングのススメ　杉田　想土　15
　就職日記　森岡陽太郎　23
新入部員自己紹介　26
僕らの故郷　無意根小屋部員日誌より　28
おまけ　露天風呂 in ムイネ　29
第 89 シーズン山行記録　30
第 89 シーズン部員名簿　35
編集後記　36

第 41 号　(2003)　2003 年 6 月発行

ごあいさつ　藤永　徹　2
第 91 シーズン主任あいさつ　松田　博行　4
第 90 シーズン活動報告　山口　達　5

紀行文
$S^2=\infty$ 吉友 郁哉 8
初めての卒部山行 伊藤 紀貴 11
イドンナップ狂想曲 松田 博行 13
ニペウペ 三浦 康 15
二年目沢、撃沈 !! 山口 達 17
雑文
駄文 近藤 武史 24
無意根雪塊落下事件 ～そして伝説へ～ 森岡陽太郎 25
秀オリの未来 伊藤 紀貴 26
ひとりごと 遠藤 康之 27
たかが風邪で… 須賀原大太 28
一年目春山を振り返りて思ふこと 谷沢 茂紀 29
無題 馬場明日希 30
山スキー部への不満 副田麻衣子 31
新入部員自己紹介 32
僕らの故郷 無意根小屋部員日誌より 34
第 90 シーズン山行記録 36
第 90 シーズン部員名簿 40
編集後記 41

第 42 号 (2004) 2004 年 6 月発行

ごあいさつ 藤永 徹 2
第 92 シーズン主任あいさつ 伊藤 紀貴 4
第 91 シーズン活動報告 松田 博行 5
鷲田さんを偲ぶ 中村 晃忠 8
紀行文
ターニングポイント 伊藤 紀貴 10
チロロ極道日記 三浦 康 14
カムイエクウチカウシ 左岸鬼 松田 博行 16
春山 南日高 ピリカ・ソエマツ 遠藤 康之 19
た い せ つ 吉友 郁哉 22
G.W. in 立山 野村 拓也 25
旭岳サマースキー 八木 寛陽 27
十勝・大雪 縦走 裏(？)報告書 牧野 友香・吉開友羽子 29
雑文
91 シーズンのわたし 馬場明日希 32
熊 伊藤 毅 33
思ひ出スキー縦走 佐藤 一平 34
強烈な印象 水島 佑介 35
新入部員自己紹介 37
僕らの故郷 無意根小屋部員日誌より 39
第 91 シーズン山行記録 41
第 91 シーズン部員名簿 45
編集後記 46

第 43 号 (2005) 2005 年 4 月発行

ごあいさつ 藤永 徹 2
第 93 シーズン主任あいさつ 吉開友羽子 4
第 92 シーズン活動報告 伊藤 紀貴 5
紀行文
ウペ・ニペ縦走 吉友 郁哉 8
樺戸山塊 八木 寛陽 10
まぼろしの群別 吉開友羽子 12
北の大地にて '04 奮闘 ～日高までの道のり～ 牧野 友香 14
春山 ピウケナイ～忠別 伊藤 毅 16
カール滑りに酔いしれて 伊藤 紀貴 18
92 Season 前期 山スキー部員は見た !!
～日本一美麗な沢を遡る～ 水島 佑介 19
夏の日高縦走 佐々木一光 22
屋久島～縄文杉をもとめて～ 佐々木広器 24
雑文
日記 遠藤 康之 27
Cordillera Blanca 馬場明日香 28
それぞれのビバーク訓練 野村 拓也 31
HUSV I 角田 桃子 32
新入部員自己紹介 34
部員他己紹介 36
僕らの故郷 無意根小屋部員日誌より 41
第 92 シーズン山行記録 43
第 92 シーズン部員名簿 49
編集後記 50

第 44 号 (2006) 2006 年 11 月発行

ご挨拶 片倉 賢 2
主任挨拶 八木 寛陽 4
体育会山スキー部 93 SEASON 総括 吉開友羽子 5
紀行文
痛い×3 の山行 森嶋 大地 10
'05 一年目冬本番 “天塩、前天塩岳” 佐々木広器 11
冬のある一日 吉友 郁哉 13
93 Season 冬：悪天男 3 人で行く野塚・トヨニ
～やっぱり天気は極かった～ 水島 佑介 15
芽室岳 関 将一 17
北日高 ピパイロ岳 松舟 由祐 18
ありがとう 吉開友羽子 19
春山 カムエク 伊藤 毅 21
S.S.～エス・エス～ 関矢 陽 23
夏のカムエク 田村 涼 24
知床岬 夏 野村 拓也 26
雑文
心の声 角田 桃子 28
新入部員紹介 29
僕らの故郷 無意根小屋部員日誌より 31
第 93 シーズン山行記録(前期) 33
第 93 シーズン部員名簿 38
編集後記 39

第 45 号 (2007) 2008 年 2 月発行

ご挨拶 片倉 賢 2
北大体育会山スキー部 94 シーズン総括 八木 寛陽 4
95 シーズンのはじめに 関 将一 8
八剣山滑落事故報告書 八木 寛陽 9
紀行文
天塩岳 田村 涼 20
2005 年冬 野村 P 愛別・永山 佐々木広器 21
遠かったオプタテ 関 将一 22
知床・春 自分、がんばりました !!! 森嶋 大地 23
G.W. 北日高 そして幌尻へ… 水島 佑介 25
2006 知床 勝瀬 一樹 26
夏本番臼別川 ～神秘的景観を求めて～ 井出 康太 28
秋沢 伊藤 毅 29
平田内 山行記録 八木 寛陽 31
雑文
留学生の私から見た山スキー部 アンストーン ワスサン 33
食い極文化 早川 航 34
勝手にベスト 10!! 河野 遼平 35
新入部員紹介 36
僕らの故郷 38
第 94 シーズン山行記録 40
第 94 シーズン部員名簿 44
編集後記 45

第 46 号 (2010) 2011 年 1 月発行

ご挨拶 片倉 賢 2

95 シーズン活動総括　関　将一　5
96 シーズン主任挨拶　森嶋　大地　9
紀行文
斜里岳　佐々木広器　10
北日高　ピパイロ 1967 ルベシベ　関　将一　11
北日高　沙流岳～ペンケヌーシ岳　勝瀬　一樹　13
07 GW 本番ふさふさ増毛山塊縦走　早川　航　14
夏だ！　レジャーだ !!　クワウンナイだ !!!　河野　遼平　16
夏本番　ペテガリ　小倉　守彦　17
エサオマ～カムエク　岩波　連　18
雑文
お気に入りの山行　森嶋　大地　20
そこはかとなく…書いてみるか　井出　康太　21
駄文　小倉　守彦　22
雑文　岩波　連　22
タイでの登山　アンストーン　ワスサン　23
部活の王国　田村　涼　24
新入部員紹介　26
僕らの故郷　28
第 95 シーズン山行記録　30
第 95 シーズン部員名簿　33
編集後記　34

第 47 号　(2010)　2011 年 1 月発行

ご挨拶　片倉　賢　40
96 シーズン活動総括　森嶋　大地　42
97 シーズン活動方針　早川　航　47
紀行文
正月山行　トムラウシ　井出　康太　51
寒いはずだったのに　函岳　森嶋　大地　52
冬のスキー山行　勝瀬　一樹　53
ニセコがりがり　早川　航　54
洋上のアルプス・千年の島　屋久島　小倉　守彦　55
夏本番　日高　西　達也　58
雑文
仲間　河野　遼平　59
雑文　井出　康太　59
駄文　小倉　守彦　60
雑文　西　達也　60
新入部員紹介　61
第 96 シーズン部員名簿　62
編集後記　63

第 48 号　(2010)　2011 年 1 月発行

97 シーズン活動総括　早川　航　70
98 シーズン活動方針　小倉　守彦　73
紀行文
ん？　Ⅲ年目山行！？　原始が原　井出　康太　77
すき～さいこ～♪すき～さんこ～♪　大雪　西　達也　78
Summer Ski 2009.06.04-07　奥山　和花　79
熊パラダイス in 知床
2009 年知床の旅　熊との遭遇　河野　遼平　80
十勝・大雪縦走　小泉　匡平　81
カールおじさんたちと日高の夏　谷口　綾香　81
雑文
山行の楽しさとこだわり　早川　航　85
山の手の家　勝瀬　一樹　86
山スキー部・ワンゲルの用語や装備の
共通点・違いについて　宮崎　歩　86
入部してよかったこと　三輪　一爾　88
新入部員紹介　90
僕らの故郷　92
第 97 シーズン山行記録　94
第 97 シーズン部員名簿　99
編集後記　100

第 49 号　(2011)　2011 年 6 月発行

ご挨拶　片倉　賢　2
白水川事故報告　4
98 シーズン活動総括　西　達也　11
99 シーズン主任挨拶　西　達也　15
紀行文
冬本番(?!)　天塩岳　宮崎　歩　16
スキーこそものの上手なれ ～春本番ニセコ縦走～　西　達也　17
大雪踏破　おわりよければすべてよし
～少年 2 人と温室育ちのお嬢さん～　奥山　和花　18
GW 合宿　2011　上田祐太郎　21
GW 合宿　永田　淳　22
Summer ski　先発 !!　西 P　石川　宏　23
サマースキー　三宅　翔太　24
夏本番　知床　北村　啓　25
夏本番　北日高沢登り　川口　准史　27
東大雪縦走(2010 年 9 月中旬)　小泉　匡平　29
秋山縦走　中村須弥子　31
臼別川　谷村　元気　32
雑文
大雲海スキー　～地獄へ一直線～　三輪　一爾　34
雪に悩まされた 99Season の幕開け～!!　小泉　匡平　35
思ったこと　上田祐太郎　36
591　～極い～　北村　啓　36
スキー大スキー　谷村　元気　37
新入部員紹介　40
僕らの故郷　43
第 98 シーズン山行記録　45
第 98 シーズン部員名簿　50
編集後記　51

第 50 号　(2012)　2012 年 5 月発行

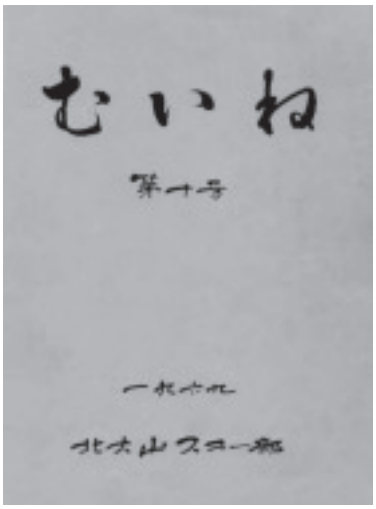
ご挨拶　片倉　賢　2
99 season 活動総括　西　達也　5
100 season 主任挨拶　奥山　和花　10
紀行文
は～るばるきたぜ！は～こだっけぇぇ！　谷村　元気　11
99season 冬本番　前富良野岳　上田祐太郎　13
春本番　スーパーパウダーセッション !! @ふらの　石川　宏　14
暑寒ぱうだぁ　北村　啓　15
辛く、楽しく、悲しく、幸せ
～小屋を巡って巡って札幌岳 !!～　奥山　和花　17
美瑛岳～オプタテシケ山　宮崎　歩　19
GW 合宿　食い極からの　勝山　祐太　20
サマースキー　河村　和洋　21
夏本番　日高主稜線　横溝　岳志　23
道東巡り山行　西田　竜一　24
夏本番　十勝縦走　～トムラウシ編～　山本　浩之　27
表大雪　～ナキウサギに会いたかった～　小林　真弓　28
夏本番　東北飯豊連峰縦走　本宮　聡子　30
夏本番と目標　大庭　健　32
雑文
理不尽万歳　西　達也　33
パウダースノーボード　小泉　匡平　33
函館から　三輪　一爾　35
100 season を彩る人々　石川　宏　35
僕の家、いえいえ、みんなの家　河村　和洋　37
山スキー部以前　本宮　聡子　38
新入部員紹介　40
僕らの故郷　43

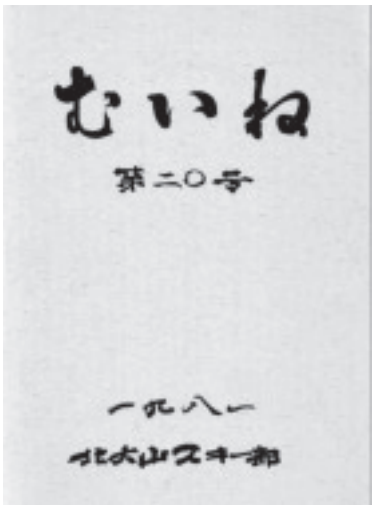
99 シーズン山行記録 46
99 シーズン部員名簿 51
編集後記 52

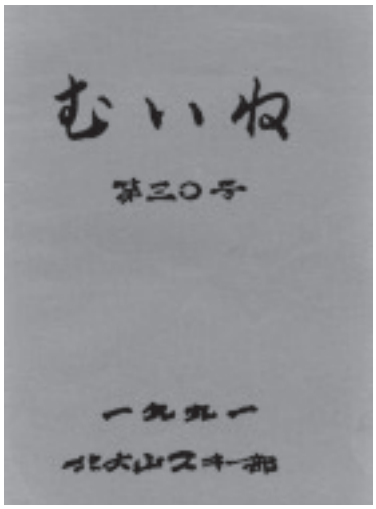
第 51 号 (2013) 2013 年 7 月発行

ご挨拶 片倉 賢 3
101 season 主任挨拶 石川 宏 7
100 season 総括 奥山 和花 8
山行報告
美瑛・オプタテ伝説 果たせリベンジ！
目指せ伝説スキー！ 西 達也 12
日高への道 プレ !!
楽古岳―十勝岳―オムシャヌプリ 奥山 和花 16
日高 ついに本番 !!
カムイエクウチカウシ山 八の沢
1823 峰 コイカクシュサツナイ岳 奥山 和花 21
沢へ行こう !! 100 season 白水川 奥山 和花 32
山行記
2012 朝里岳オープンバーン 小泉 匡平 37
ホロホロ～徳舜のっこし 宮崎 歩 38
100 season 前期 冬本番 函岳 上田祐太郎 40
原始ヶ原大爆発 石川 宏 42
夏の表大雪縦走 ゆるり紀行文 大庭 健 44
冬本番 積丹岳 勝山 祐太 48
NISEKO POWDER SESSION
～春のパウダーツアー～ 河村 和洋 49
北アルプス 槍ヶ岳を目指して 小林 真弓 51
正月山行 旭岳！！ 山本 浩之 53
伏見岳 山行記録 横溝 岳志 55
そうだ、道東へいこう。 平松 正太 56
夏本番 ニペソツ縦走 米山 奈帆 58
雑文
I'm FreeeeeSkieeeeer!! 谷村 元気 60
雑文 本吉 啓之 61
沢の活動 西田 竜一 61
新入部員紹介 63
僕らの故郷 65
100 シーズン 山行記録 67
100 シーズン 部員名簿 72
編集後記 73

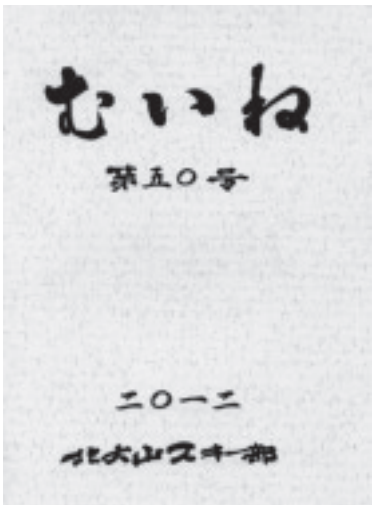












編集を終えて

全国の大学にスキー部と名のつく学生クラブは数多あるが、「山スキー部」というのは北大だけであろう。北大には、「スキー」を目的とする公認クラブとして、山スキー部の他に、競技スキー部、基礎スキー部、エレガントスキー部がある。一方、「山」に関連するクラブでは、山岳部、ワンダーフォーゲル部がある。そして、山スキー部は「山」と「スキー」の両方を冠している。これは、山スキー部が 1912 年創立の北大スキー部(山班)を継承しているからであり、北国北海道に独自な学生クラブであることの証である。そうではあるが、1926 年にスキー部から山岳部が創立して以来、スキー部山班そして山スキー部は「山」と「スキー」の間で悩んできた。しかし、それは、北海道という自然の中で「山」、「スキー」そして「人」という三位一体の境地を具現化するものなのであろう。

本記念誌は、その北大スキー部 100 年と山スキー部 50 年の流れを顧みた。それは、なぜ北大に山スキー部が存在するのか、山スキー部とは何か、を問うものでもある。また、北国の特徴あるスポーツである山スキーの面白さ、そしてそれを享受している山スキー部の活動ぶりを伝えるものでもある。「北大スキー部 100 年・山スキー部 50 年」を祝う一連の記念行事の記録も含めた。それはその中に山スキー部とは何かの答えが含まれていると思うからである。

スキーの多様化のなかで、山スキー部はこれからも自分たちのシュプールを求めていくのであろう。

本記念誌の記述にあたっては、北大スキー部の先人の足跡、『北大スキー部創立拾五年記念』、『北大スキー部部報 1、2、3』、『北大スキー班班報 1』、および『北大スキー部 OB クラブ会報』、『北大山とスキーの会会報』、そして山スキー部部誌『むいね』などが基礎になっている。具体的には本誌中にそれぞれ文献として示した。

カットなどには上記の他にスキー部 OB たちによる我が国最初の山岳雑誌である『山とスキー』からも使用させていただいた。

引用した写真などについては、北海道大学附属図書館、北海道大学文書館、北海道大学山岳館、札幌ウィンタースポーツミュージアムにご協力を得た。また永野拓也 OB、和田　晴 OB にも素晴らしい写真やスケッチを提供していただいた。お礼を申しあげる。

本誌の刊行は「北大スキー部 100 年・山スキー部 50 年」の記念事業の一環として企画され、作業はスキー部創立 100 年の前年 2011 年に始まったが、諸般の事情から予定が大幅に遅れてしまった。これはひとえに編集委員長の責任であり、深くお詫び申しあげる。

各章の編集担当者は以下のとおりである。
第 1 章：在田一則、第 2 章：黒澤　努、第 3 章：森　康、第 4 章：倉持寿夫、第 5 章：藤永　徹
第 6 章：片倉　賢、第 7 章：佐々木尚三、第 8 章：在田一則・倉持寿夫・黒澤　努

記念誌編集委員会(数字は卒業年度)

委　員　長：在田一則(1964)
事 務 局 長：藤永　徹(1968)
委　　員：倉持寿夫(1964)・藤永　徹(1968)・田上省一(1968)・柳生　修(1968)・黒澤　努(1972)・
中井　強(1972)・柿木　真(1974)・岩瀬隆則(1976)・片倉　賢(1977)・森　康(1977)・
佐々木尚三(1979)・秦　正樹(1992)・三代隆博(1996)・大庭　健(現役時、2015)・
山本恭大(現役時、2017)・谷口　誠(現役時、2019)

関東編集委員：中村　宏(1975)・関　英郎(1982)
関西編集委員：下岡健蔵(1970)・宝多卓男(1985)
編 集 顧 問：刈谷純一(1961)・塘　忠夫(1962)・中村晃忠(1962)・谷口尚弘(1963)
参　　与：長沼昭夫(1972)

北海道大学
スキー部 100 年・山スキー部 50 年記念誌

発　行　2019 年 3 月 20 日
発行人　北大山とスキーの会(代表　長沼昭夫)
編集者　北海道大学
スキー部 100 年・山スキー部 50 年記念誌編集委員会
印　刷　株式会社アイワード



北海道大学スキー部100年・山スキー部50年

1912〜2012 記念誌